

---

# 最果てに天深く

高原景

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最果てに天深く

### 【Nコード】

N2019N

### 【作者名】

高原景

### 【あらすじ】

白沙那帝国の東方、国境に程近い地を支配する多加羅惣領家に一人の少年が迎え入れられた。惣領家の血を引きながらも生い立ち故に蔑まれる少年は、帝国では生きることさえ許されぬ異端 怪魅師だった。複雑に絡み合う思惑に翻弄されながら、それでも少年は前を見据える。

いつか、最果てへ至れ

迷いも怒りも、哀しみさえも、ただ一つの祈りにかえて……

喪失と癒えぬ痛みを抱えながらも、強くあろうと足掻く人々の物語

## 第一部 序章（前書き）

はじめまして、高原景と申します。

目指しているのは硬質な青春ファンタジーです。文章量が多く、読みづらい点多々あるかと思いますが、楽しんでいただけると幸いです。

よろしくお願いいたします。

## 第一部 序章

ところどころ深藍に凝る雲間から、陽光が不意に地上へと降り注いだ。上空ではいまだ激しく風が吹き荒れているのだろう。押し流される雲の其処此处で光の帯はまるで奔流のように空から零れ落ちる。

男は目深にかぶっていた外套を払い、冷たく濡れた体の不快感も忘れしばしその光景に見とれた。彼の動きを察したのか歩みを止めた馬は、乗り手を振り落とさない程度に軽く身震いをする。鬣からきらきらとした雫が散り、男の顔を濡らした。雲の切れ目からは、鋭く澄んだ浅葱の空がのぞく。先ほどの驟雨に濁りを流されたかのようなその青を、男は見つめた。

光はなおも降り注ぎ、春から夏へと向かう山々を複雑な陰影に彩る。白沙那帝国（おびくは）の東に広がる森林地帯　その深奥である。かつては神々が宿るとされた森もまた初夏の突然の嵐に打たれ、濃密な命の気配が今は不思議なほどに淡く、大気を染め上げる緑もひっそりとした静寂に沈んでいるようだ。否、と男は考える。無数の命を抱える森は静寂そのものが能弁である。むせるほどの色彩は、蠢き潜むものを隠すと同時に、異邦者である彼らをも獰猛な自然から守っているのかもしれない。

「秋連様？」

とりとめのない思考はためらいがちな声に遮られた。男、秋連は戸惑ったように振り返る道連れに曖昧に笑いかけ、再びゆっくりと馬を進めた。しかるに、彼が埒もない思いに誘われた神秘的な風景も、この連れには何らの感慨も与えなかったらしい。名残惜しく再び見やった遙かな空は、すでに夏の気配を秘めた気まぐれな乱流にのみこまれていた。

「あと僅かですが、先ほどの嵐で道が悪い。気をつけてください」  
低い声で話しかける男は名を弦（げん）という。彼は秋連の乗馬の技術を

よく理解しているらしい。ぬかるんだ山道は確かに乗馬に不慣れな秋連には少々厄介だった。決して幅は狭くないが、山肌を伝う道は足をとられでもしたらただでは済まないことになるだろう。それに加え容赦なく嵐にうたれた体は濡れそぼり、旅の疲れにますます拍車をかけていた。

「君は峰瀬様みなせから今回のことをどう聞いています？」

秋連の問いかけに弦はわずかに逡巡するような様子を見せた。秋連はその姿を興味深く見詰めた。彼が弦と数日を過ごした中で、感情を表すような所作を見たのはこれがはじめてだった。

「惣領そうりょうは私には何も仰せになりませんでした。ただ秋連様をお連れし、その後はお言葉に従うようにとのみ」

秋連はなるほど、と内心うなずく。この弦という男は自身の役割と価値をよく理解している。彼に必要とされているのは主の意図をはかりその裏に潜む思惑を探ることではなく、ただ忠実にその言葉を実行することなのだ。そしてそれこそが絶対的な彼の信条でもあるのだろう。

秋連は憂鬱に目の前の背中を見つめた。無意識にこぼれる溜息を苦い表情でのみくだす。体ははやく目的地にたどり着き休息を得ることを望んでいるが、その先に待つ、託された役割に気持ちは沈むばかりだった。

最早景色に目を向けることなく、男は残り少ない道程をゆっくりと進んでいった。

目指す村は、森と山に抱かれるようにしてあった。村の西は深い森に接し、東はゆるやかな勾配の山の裾野に広がっている。秋連達が辿った南からの尾根伝いの道が、その村への唯一の道であり、西に広がる神秘の森を抜けてその村に、あるいは村から外界にたどり着いた者は誰もいないという。そして東のゆるやかな山々はその背後をさらにぐるりと峻嶮な山脈に囲まれている。山脈の稜線は遙かな天空に霞み、一年を通して消えない雪が雲をすかして垣間見える。

この山脈もまた人の侵入を拒み、白沙那帝国の内と外を隔てる東限だった。

秋連は次第に近づいてくる眼下の村をつぶさに観察した。村は森のただ中で、異質でありながらひっそりと同化しているように見えた。それは長く緩やかな時の流れの中で人と自然の営みが作り上げた調和だった。

村には秋連の目には珍しい木組みの家々が建ち、村人の生活を支えるのだらう、青々と茂る畑がある。山から流れる小川を利用した水路がまるで葉脈のように村を縫い、きらきらと光をはじいている。家の前に張られた紐につられているのは洗濯した衣だらうか。紅がくつきりと鮮やかに映えていた。村と森を隔てる柵は森に潜む獣から村を守る目的があるのか、大人の男の背丈ほどの高さがある。山肌に沿う道はわずかに森の中を通り、今は開かれている門へと続いていた。

秋連はゆっくりと馬を進め、素朴なつくりの門を通り抜けた。間近で見れば、家々はどれも古くはあったが清潔だった。石造りの建物を見慣れた目には木組みの家は異国を思わせる。どこかで家畜の鳴く声が聞こえ、ほがらかな子供の笑い声が響いていた。

唐突にその笑い声が大きくなったかと思うと、秋連と弦の前に数人の子どもが走り出してきた。彼らは思わず馬をとめる。子供たちも目の前の余所者にぎくりとし、甲高かった笑い声が嘘のように一様に黙り込んだ。その表情は脅えというよりは、単純な驚きをあらわしていた。子供たちの目がちらちらと己の顔をうかがっているのに気づき、秋連は思わず苦笑した。なるべく穏やかに聞こえるように問いかける。

「すまないが、柳角翁りゅうかくおんが住んでおられた庵はどこか教えてくれないか？」

子ども達は互いに顔を見つめあい小さく首をかしげた。最も幼い子供は五つほどだらうか、指を口にくわえたまま秋連の顔をじっと見つめている。山深い村里の子供とはいえ異端の風貌はわかるらし

い。秋連は内心に小さく溜息をつき、再度言葉をかけた。

「誰か、お父さんかお母さんを連れてきてくれないかな？」

数人が頷き踵を返して駆けて行く。

「おじちゃん目は紅葉の色なのね」

若い少女が舌足らずに言う。秋連はあどけない言いように思わず微笑んだ。その言葉には、これまで少なからず浴びせられたものは違い、純粋な好奇心しか感じられない。

「ああ、そうだね。今では黄色い紅葉だが、幼いころは深紅の紅葉だった」

秋連の言葉に子供たちは驚きの声をあげ、まじまじと彼の琥珀の瞳を見つめた。秋連は不思議と不快を感じさせない子供の無邪気さに、心が解けるのを感じた。異端に厳しい都市では、子供が彼に向ける視線は無邪気な好奇心よりも、脅えや嫌悪といったものが強かった。それはひいては子供の親が彼に向ける視線そのものであり、何年生きようと慣れるものではなかった。

しばらくして子ども達が連れてきた年配の女性は、突然の訪問者に驚きの表情こそ隠さなかったが、彼らを忌避するでもなく淡々と問いに答えた。

「柳角翁といますと、聖堂に住んでらつした<sup>てんねん</sup>点然さんのことかね」  
秋連は女性の言葉に思わず傍らの弦を振り返ったが、旅の連れは口を開く気配はない。

「点然さんなら一昨年病で亡くなられたんですがね。小さな堂に、私らは聖堂と呼んできますが、今は点然さんの育ててなさつた子らだけで住んでなさる」

秋連は訝しげな表情が出ないように気をつけながら言葉を重ねた。  
「その、柳角翁……点然と呼ばれていた方が育てておられた、年のころが十四ほどの少年がいるかと思うのですが、私はその者に会いに来たのです」

「ああ、灰<sup>かい</sup>かね。あの子なら最近はよう森に入ってるが、今日は嵐だったもんであるんでないかね」



女はきさくに答えながらも、俄かに秋連と弦を不審げな目で見つめた。

「……あんたらはそうそう悪い人には見えんが、あの子らになんのも用かね？」

「ああ、申し遅れて失礼しました。私はその……灰という少年の親戚にあたる方から頼まれて彼に会いに来た秋連という者です。こちらには弦といます」

弦は表情を変えないまま軽く会釈する。

「そうだったんですか。あの子に親戚がいるなんて私らまったく知らなかった」

女性は納得の表情を浮かべた。秋連は女性の言葉にやはり、という思いを強くする。どうやらこの村の人々は少年の出自についてはまったく知らないらしい。そしてそれは柳角　　ここでは点然と名乗っていた人物についても同様なのだろう。

秋連は女性に丁寧に礼を言い、教えられたとおりに道を進んでいった。子供たちがすでに知らせたのだろう、そこで村人たちが物珍しそうに彼らを見ていた。

聖堂は村の最奥、山の斜面を少し登ったところにあつた。古びた小さな木造の建物はひっそりと息をひそめるような佇まいである。秋連と弦は馬からおり、あたりの様子をうかがう。堂の扉は開け放たれていたが、中に人がいる様子はない。覗けば小さな文机があり、その上には読みかけなのか、書物が無造作に置かれている。ひっそりとした室内はほの暗いが、清潔に保たれているのがわかつた。

「先ほどの女性の言葉だが」

秋連は中の様子をなおもうかがっている弦に声をかけた。

「柳角翁が育てておられたのは、灰という少年だけではなかつたの  
だろうか」

「存じません」

素気ないほどに簡潔な弦の答えに、秋連はそれ以上問うのを諦め

た。

秋連は堂を取り囲む木々の濃密な緑を見つめながら、生前の柳角の面影を思い出す。面影とは言っても彼が柳角に会ったのは十五年ほども前、峰瀬が惣領になった祝いの席でのことだった。それも出席を固辞しようとする彼を、峰瀬自身が説き伏せて招いたということとを、当の峰瀬の口から聞いて知っていた。博識で知られた柳角が、隠棲していた庵から出て街まで来たことはそれ以降一度もない。

不意に軽い足音が響き、堂の裏手から幼い少女が走り出してきた。肩口で切りそろえられた黒髪が軽やかに揺れる。少女は目の前の大人に気付き首を傾げた。愛らしい仕草だった。

「ここに灰という少年はおられるかな？」

秋連は少女の顔を覗き込みながらたずねた。少女はにっこりとはほ笑むと、堂の裏手に声をかけた。

「兄様、兄様、お客様よ」

その声にこたえるように、すぐに足音が近づいてきた。秋連は思わず体をかたくしてそちらを見やる。堂の裏手は山の木々に覆われ、むせるような緑が深い影を作り出していた。

そこにあらわれた人物を見たとき秋連は地を揺るがす瀑布の音を聞いたように思った。すつと背筋が冷えるような感覚とともに、彼は鮮烈な記憶を一瞬にして辿り、そして不思議なほど静かに佇む目の前の少年に重なって、確かに見た、と思った。苛烈な瞳で睨み据える乙女の姿を。

滝の飛沫に、長い銀系の髪が艶やかに濡れていた。真冬の氷を思わせる紫の瞳は、裏腹に炎の激しさを秘めていた。ただ目を奪われて立ち尽くす二人の青年に一言も発することなく背を向けたその娘は、もうすでにこの世にはいない。

「灰様であらせられるか？」

「はい」

短く答え、少年が緑陰から歩み出した。一瞬の眩暈にも似た記憶の奔流は、森の静寂に飲み込まれるように唐突に消えた。

確かに眼の前の少年は、かの人の面影と色彩を色濃く宿している  
とはいえ、何かが決定的に違う。それは、森に溶け込むかのような  
静かな佇まいのせいかもしれないし、その瞳が炎のようにきらめく  
紫ではなく、澄んだ藍だったせいかもしれない。黒髪に黒眼が一般  
的である帝国にあつて、彼のような容貌は秋連の瞳同様に異端に属  
するものではあるが、遠く東の草原に住むといわれる風の民は、銀  
の髪に鮮やかな瞳という、まさしく目の前の少年のような姿をして  
いるという。村人達が秋連の瞳にさほどの嫌悪を示さなかったのも、  
灰という存在がいるからなのかもしれない、と彼は考えた。

秋連は手綱を弦に預け、その場で深く叩頭した。

「私は秋連と申します。灰様の伯父上、多加羅たから惣領であらせられる  
峰瀬様からのお言葉をお伝えに参りました」

弦もまた無言で叩頭する。

一瞬の静寂の後、少年が小さく息をついた。そのままゆっくりと  
秋連の目の前まで歩んでくると、目線を合わすように膝をつく。

「よしてください。俺は多加羅の者ではありません。ただの灰です」  
思わず顔をあげた秋連に灰は困ったように言葉を継ぐ。

「どうか、まずは堂で休んでください。嵐に遭われたのでしょうか？

装束が濡れています。馬も休ませたほうがいい」

灰は弦の手から手綱を受け取ると、二人を促して堂へと誘う。

「稟りん、お茶をお出しして」

灰の言葉に、少女がはいと答えてばたばたと堂に駆け込んでい  
った。灰は古木の枝に慣れた手つきで手綱を結びつけると、汲み置  
きの水を桶に満たし、馬へと与えた。思わず少年の姿を眼で追って  
いた秋連は、背後から聞こえた明るい声に振り向いた。

「どうぞお上がり下さい」

見れば稟が堂の床にちょこんと座って頭を下げている。秋連と弦  
はじつとりと濡れた履物を脱ぎ、建物の中へと入った。稟が敷いた  
藁織の敷物の上に座り、秋連は薄暗い室内を見回した。強い芳香に  
視線を転じれば部屋の隅にいくつもの籠が置かれ、乾燥した様々な

植物が入れられていた。これが香りの元なのだろう。さらに見やれば、壁にも幾種類もの植物が吊り下げられていた。

「兄様のお薬はとってもよく効くのよ」

香ばしい茶の入った器を置きながらの少女の言葉に、秋連は思わず聞き返した。

「薬？」

稟は、ことん、と音がしそうな仕草で首を傾げた。

「お客様は兄様のお薬をもらいに来たのではないの？」

「稟、裏の畑に小枝がいつぱい落ちているから、それを拾っておいでたくないか？」

答えあぐねていた秋連は、灰の声にほっと息をついた。はい、と元気な返事を残して駆けて行く稟を見送り、秋連は目の前に落ちていた様子で座る少年を見やる。

「すみません。稟は薬を買いにきたお客様だと思っただけで」

改めて見れば、少年は年相応にあどけなくありながら、妙に老成しているように秋連には思えた。

「薬…と言つと……」

「点然師匠が……」

灰は僅かに言葉を切り小さく苦笑する。

「いえ、柳角師匠が薬師くすりしをされていたのはご存じですか？」

初めて聞く事柄に秋連は否と答え、横でうなずく気配に思わず弦を見た。弦は秋連の様子には頓着せず淡々と答えた。

「惣領からうかがっています」

「俺はここに引き取られてから、薬師の知識や技術を教えられてきました。師匠は薬を煎じてそれを生活の糧にしていましたので。村の人だけでなく、村の外からも師匠の薬を求めて来る人がいました」  
「では、今は灰様が？」

秋連の問いに少年は薬草の束に視線を流す。

「はい。師匠が亡くなってからは俺があとを引き継いでいます。この村には師匠の薬にずっと頼っている人もいますので」

堂に静寂が落ちる。秋連は言葉を継ぎかねて、香ばしい茶に手を伸ばした。仄かな揺らぎにも似た静けさは突然の訪問者を拒絶するものではなかったが、どこか水面から透かし見る水底に似て、手の届かない隔たりを感じさせる。氣づまりはそればかりではない。何よりも、と秋連は内心に思う。何よりもこの少年はあまりにも秋連の予想とは違っていた。

少年が八つで峰瀬の叔父、柳角に引き取られた経緯について秋連はさほど知っているわけではない。人伝の話は、信ずるにはあまりに虚飾に満ち、そのほとんどが悪意に彩られていた。峰瀬もまた少年について多くを語らなかつた。秋連が知らされているのは、柳角が一昨年に亡くなり、六年前から柳角に育てられていた少年が一人残されたということだけだった。秋連が漠然と描いていた少年の像は、生い立ちゆえの複雑さはあるかもしれないが、ただ年相応の子供だろうというものでしかなかつたのだ。

弦は柳角が薬師をしていたことを、峰瀬から聞いて知っていた。それ以外にも、秋連には知らされていないことがあるのだろう。あるいは何も知らせない、それこそが峰瀬の意図だったのか。秋連は膝の上の拳を強く握りしめる。

（先入観なしに見極めよとでも言うつもりか。あの方はつくづく厄介なことを押し付けてくれる）

「惣領のお言葉とは何ですか？」

先に静寂を破つたのは少年だった。秋連は居住まいを正した。

「これは失礼いたしました。まずは惣領のお言葉をそのままお伝えします」

灰がすつと背筋を伸ばした。

「柳角翁がお亡くなりになられたこと、大変悲しく思う。多忙の身の上とはいえ、葬儀にも行けず申し訳ないと」

言葉は床に物がほとりと落ちるようなそっけなさで響いた。

「今後のことについては、まだ年若い灰様を一人にするわけにはいかない。同じ一族の者として多加羅に来てほしい、そのように仰せ

です」

気まぐれな風に吹かれ、壁の薬草がちりちりと音をたてた。それに誘われるように少年の視線がまたもふわりと男達から逃げた。秋連は不意にもどかしさを感じた。それは聞き分けのない子どもを前にした困惑のようでもあり、老練な智者にはぐらかされた苛立ちのようでもあった。

「ただ、惣領は決して無理強いなさるおつもりはありません。この地で六年を過ごされたこと、それは無視できぬ年月の重みであると……。それから、多加羅が居心地の良い場所でないだろうことはわかっていて、とも」

「わかつておられてなぜそのようなことを仰られるのか」

ぼつりと少年は呟いた。惑うような言葉の揺らめきとは裏腹に、少年の瞳に強い光が宿る。俯きがちな表情は移ろう陰影に沈んだ。

「わかりました。少し考えさせてください。それに……行くにしてもすぐに行くことはできません」

「それはなぜでしょうか？」

「この村には今の季節に採れる薬草がどうしても必要な病人がいま。その人の治療を一区切りつけてからになります。それに……」

「あの少女のことですね？」

秋連は思わず言った。

「はい。稟はこの村には身寄りがありません。稟を一人で残すことはできません」

「それは、私から惣領にお伝えしましょう。何とかしてくださるはずです」

迷うことなく言う秋連に、灰ははじめて真つ向から視線を向けた。「あの少女がどのような経緯で柳角翁のものに來たのかお聞きしてもよろしいか？」

灰は小さくうなづく。

「稟はこの村の者ではないんです。森に一人で見るところを村人が見つけました。今から七年前のことです」

「では、灰様よりも先にこちらに？」

「はい。おそらく捨て子だったのではないかと皆は言っています。ここに来た時、稟はまだ二歳にもなっていないませんでした」

「しかしなぜ柳翁様がお預かりになったのですか？ そのように小さな子どもであれば女性が引き取ったほうがよかったですか？」

「誰も引き取りたがらなかったのです。稟がいたのは村人でもめつたに足を踏み入れない森の奥でした」

「森の奥……」

「村人は皆森を恐れ、今も何かが潜むと信じています。ですから、そのような場所にいた稟も忌み子だと考えているんです。外の人間が入り込めるような場所でもなかったのが尚更なのでしょう。……魔の忘れ子だと言う人もいます」

さらりと語られた言葉に秋連は思わず眉をしかめた。村人が秋連に向けた視線に都市で感じるほどの拒絶はなかった。しかし、ここでもやはり人々の意識に染み付き深く根ざしたものがあるのだ。長い時間の中で醸成されたそれは、知らぬうちに人を歪め、時として思わぬ形で他者を追い詰めるのだと、秋連は経験を通して知っていた。

そしてはたと考える。村の人々が彼らに向けた視線にはさほどの嫌悪も悪意もなく、ただ突然の訪問者への困惑だけがあったのだと。そう秋連は思ったのだが、それは果たして正しかったのだろうか。村人が見せた不審げな表情は、突然の訪問者へのそれではなく、むしろ村の忌み子のもとへと人が訪れた、その事実に対してではなかったか。異端のもとへと訪れた存在が果たして村に善きものであるのか、それに対しての不安ではなかったのか。

改めて秋連は銀の髪と藍の瞳という灰の容貌を見つめた。明らかに周りとは違う風貌の少年と、畏敬の対象である森に置き去りにされた少女が、閉鎖的な村でどのような存在なのか

黙り込んだ秋連に何を思ったか、少年はにこりと微笑んだ。

「とにかく今日はここにお泊まりください。お疲れになったでしょ

う

秋連は言葉を見つけれないまま、曖昧な笑顔でうなずいた。



## 第一部 序章（後書き）

読んでいただきありがとうございます！

序章はあと一話続き、その後に第一章に入ります。

今後ともよろしくお願いいたします！

灰はゆつくりと山の斜面を登っていた。月の夜だったが、冴えわたるその光も鬱蒼としげる木々に阻まれて彼のところまでは届かない。幾重にも重ねられた薄紗のように、闇は少年の全身にまとわりつく。それをかき分けるようにして一心に上を目指していた。

村人が足を踏み入れないそこは、灰にとっては目を瞑っても歩けるほどに通いなれた場所である。しかし存在そのものが巨大な生き物のような自然の中で、過信は命の危険にすら繋がると灰は知っていた。意識を凝らし、灰は注意深く足を運んだ。息が白むほどに気温は下がっていたが、次第に体が温まる。

やがて木々の間に光が見えた。まばらに生える下草をかきわけて光のもとへと向かえば、天空にせり出した崖へと続いている。そこは、まるで天から斧で垂直に切り落としたかのように鋭く屹立していた。

闇に慣れた瞳には、月が眩しい。灰は眼を眇めるようにして崖の突端へと歩み出した。危うげなく立って眼下を見渡せば、村を抱く森が一望できる。左手にある聖堂はすでに山の陰となり見ることはかなわない。村にはぼつりとともった明かりがひとつ、まるで惑うように滲んでいた。

灰は膝を抱えて座り込むと、うねるように蠢く巨大な森を見つめた。そして瞳を閉じ、その動きに自身の呼吸を合わせる。圧倒的な静寂に潜む膨大な命の気配の中へと灰の意識は一気に飛び込んでいった。

太古から時を刻む大樹が吸い上げる水の音、風にそよぐ生まれたばかりの若木のしなり、闇に潜む老練な梟の視線、小さな虫をほおばりながらあたりをうかがう臆病な鼠、眠りながらも決して警戒を解かない巣立ったばかりの小鳥、狡猾に獲物を狙う成熟した狼の息遣い、それらの気配と同化し、分離し、やがて森の木々をうねらす

巨大な風の一部となる。

遙かな高みから森を見下ろし、そこで灰は唐突に意識を体へと戻した。途端に岩肌と大気の冷たさを感じた。どれほどの時間そうしていたのか、すでに体のどこにも歩いてきたときの火照りは残っていない。岩と同化したかのように、芯から凍えていた。

灰は小さく苦笑する。自分の体を放り出していいことなどないと、何度も点然てんねんに叱られたことを思い出したのだ。それでもたった一人で山に登り、自然と同化し大気を駆けることを許してくれたのは、そうでもしなければ何もかもを投げ出してふさぎこんでしまいそうな少年の鬱屈をわかつていたからかもしれないし、そうすることが少年の厄介な力を安定させるためには必要だと考えたせいかもしれない。

(点然ではなく柳角しゅうかくだったっけ)

ぼんやりと思いながら灰は憂鬱に小さく息をついた。師匠と仰ぐ老人が死んでから一年、突然の訪問者の姿を灰は思い出す。琥珀の瞳の穏やかな表情の男が告げた言葉は、灰にとってさほど意外なものではなかった。老人は死ぬ前に、少年にいつか多加羅たからから迎えが来るであろうことを告げていた。その時どのような選択をするか、それは自分で決めればよいのだ、と。しかし、覚悟ができていないらといって、動揺を感じないわけではない。

灰はふと視線を巡らせた。彼の鋭敏な感覚は、闇に紛れて近づいてくる存在をとらえていた。灰は立ち上がり、木立の間に目を凝らした。気配はやがて形を結び、一人の男の姿となった。弦げんである。自身が姿を現すよりも先に向けられた視線に、男は驚いた様子もなく影から歩み出す。昼間には決して見せなかった険しい表情で、灰は突然の侵入者に向き合った。

灰が感じた動揺、それは秋連あきつらが告げた峰瀬みねせの言葉のせいばかりではない。むしろ、その大半はこの男のせいだった。一目見たときから灰は弦の持つ気配に覚えがあることに、まるで神経に針をつきたてられるような不快感とともに気づいていた。

弦は灰の様子に頓着することなく無機質な瞳を向けた。皓々と下界を照らし出す月の光にあらわになった顔は、のっぺりとした仮面のように表情がない。

「よくここがわかりましたね」

棘を含む灰の言葉に弦は答えた。

「何度もここには来ましたので。あなたがここで何を見ているのか、それが知りたかった」

灰は思わず顔を顰める。この場所は村人も恐れて近づかず、そうであるからこそ彼にとってはたった一人になれる大事な空間だったのだ。

「惣領はあなたが私の存在に気付いていると仰せでしたが、その様子では本当のようだ」

少年を岩壁の突端に追い詰めるように歩み出しながら弦は囁くように言った。

「あなたは怪魅師であられる」

灰は動揺を抑え込む。灰の思考を読んだように、弦は言葉を続けた。

「惣領は灰様が怪魅師であることを、柳角翁にお預けになる前から御存じでした」

言いながら、弦はゆったりと腕を組んだ。寛ぐようなその姿とは裏腹に、影が濃度を増すように、男の気配が膨れ上がる。名前を知っていたわけではない、姿すら見たことがない男でありながら、灰には男の持つ気配と視線にいやというほど覚えがあった。

「灰様の怪魅の力をもってすれば、私の存在などたやすく見つけれはるはずです。たとえどんなにうまく森に潜んだところで無意味でしょう。それもすべておわかりのうえで、惣領は私にあなたを見守るようお命じになったのです」

灰はやはり、と心中に呟いた。灰が六年前に柳角に引き取られてから、折にふれ感じていた気配　まるで監視するかのようなそれが自分なのだと、臆面もなく男は告げる。

「私の役目はあなたの様子を逐一惣領にお知らせすること。私がこの森に潜んではあなたの様子を探っていたのもそのためです。六年前から惣領はあなたのことを考えておられたのです」

「白々しいことを」

押し殺した声に隠しようもなく怒りがこもっていた。

「密かに人に見張られていることが心地良いとでも？ 俺のことを考えてなどよく言えたものだ」

「惣領は六年前のあの事件の折にあなたをお見捨てになることでもきたのです。それを周囲の反対を押し切られて柳角翁にお預けになった。それも怪魅の力にいつか身を滅ぼすのではないかと懸念されたが故のこと。柳角翁ならば、お救いできるとお考えになったのです」

弦は何らの感情もうかがわせない声音で、淡々と語る。灰は強く拳を握りしめ、その痛みに縋るようにして後ずさりしそうになるのを耐えた。告げられる言葉の一つ一つが、刃に似ていた。

「六年前、惣領は灰様が怪魅師として強い力を有していることにお気づきになり、それが灰様にとって諸刃の剣であるとお考えになりました。怪魅の力を抑え、自らのものとするためにも柳角翁に灰様をお預けになったのです」

事実、と弦は言葉を継ぐ。

「あなたは怪魅師として生きるだけの技量を身につけられた」

灰は言葉もなく弦を睨みつけた。

と、不意に弦が動いた。灰は目を見開く。風のように、身構える暇すら与えず迫りくる男が、それとはわからぬほどの一動作で短剣を取り出す。鮮やかな銀 鋭い軌跡を描いて己へと振り下ろされるそれを、灰はただ凍りついたように見つめていた。

次の瞬間、弦の体が宙を舞った。非常な勢いで吹き飛ばされ背中から地面に叩きつけられる。衝撃に弦が呻いた。ようよの体で肩肘をつけて上体を起こした弦は、少年の首に剣を突き立てる寸前に自らを吹き飛ばしたのを見やった。

そこにはほつそりとした少年を守るようにして立ちはだかる獣がいた。夜の闇よりもなお深い毛色、牛ほどの大きさもある狼に似たしなやかな姿に、牙蒙がもうと呼ばれる所以である長く鋭い牙、炯々と輝く瞳が容赦なく弦を見据える。

弦がその時感じたのは圧倒的な存在を前にしたときの根源的な恐怖だった。常に何者に対しても冷静に反応すべく鍛えられた体が、まるで見えない鎖に縛られたように凍りつく。

「又また駆」

灰は獣の名を呼んだ。諭すようなその呼びかけに、獣はゆつくりと弦から離れた。月光を弾く巨大な体躯は、流線形を描き優美ですらあった。

灰は身をすりよせるようにして傍らに來た又駆に苦笑を向けた。もとより感情を表さない存在ではあるが、獣の姿であればますますその意思などはかりようもない。それでも又駆の瞳が不満そうな色を宿したことに灰は気づいていた。灰は低く唸る又駆の背をなで、瞳を覗き込むようにして小さく頷いた。又駆はなおも弦を睥睨するように見つめていたが、やがてゆらりと長い尾を振り、空気に溶けるようにして消えた。

息を呑んでその光景を見つめていた弦はようやくやく緊張を解いた。体を起こした弦は刃を地面に置いて頭を垂れた。

「無礼をお許してください」

まるでそれまでの態度が嘘であったかのような弦の言葉に、灰は眉を顰めた。そして悟る。弦は本気で短剣を振るつたわけではないのだろう。もしも灰を殺すつもりであれば、又駆も容赦しなかったに違いない。

「これも惣領がお命じになったのですか？ 俺に力を使わせるためにこのようことを？」

「灰様がどれほどの力をお持ちなのか、確かめさせていただく必要があったのです」

弦が知る怪魅の力はせいぜい風凧と呼ばれる、空気を揺らがせる

程度のものでしかない。しかし今目の前で起こったことは、それを  
はるかに凌駕していた。いまだに弦の体に残る戦慄が、灰の力の凄  
まじさを証明している。

「惣領は秋連様とは別に私にも言付けを託されました」

弦はさらに深く頭をさげる。

「惣領は灰様の怪魅師としての力を必要とされています。今の多加  
羅のためには是非とも来ていただきたいと仰せです」

冴え冴えとした月の光は、冷たく澄んだ夜の大気にしみいるよう  
に降り注ぐ。長い静寂に弦はただ岩肌を見つめていた。ようやく答  
えた灰の言葉は、心もとなく揺れていた。

「都では怪魅師は問答無用で捕えられると聞いています。異端審問  
で処刑されることもあると。それに、六年前のことをご存知ならば  
わかるはずです。この力は忌まわしい……禁忌の力です。なぜこん  
な力を……」

「それは灰様が多加羅に来られる決心をなされれば、惣領御自らがお  
話をされるとのこと。私ごときにはわかりかねます。しかし、今は  
多加羅にとって非常の時であるとお考えください。そしてあなた様  
のお力がどうしても必要なのだと」

それに、と弦は顔を上げる。

「惣領はあの少女もともに多加羅に来るように仰せです。一人残す  
ことはできぬであろうとお考えになられ、お伝えするようにとのこ  
とです」

灰は小さく息をついた。目の前の男が幾度も感じた視線の主であ  
れば、当然稟りんのことも峰瀬に伝わっている、ということだ。

「そこまでわかっておられて、なぜあの方に使者の役割を？ 秋連  
様は俺の力のこともご存じないのでしょ」

「私は決して表の舞台には出ぬ者、いわば影です。私の言葉は影の  
言葉、それをお忘れなきように」

「つまり、俺が多加羅に行く表向きと裏の理由があるのです  
か？ 怪魅師として赴くのが真実であり、多加羅一族の者として行

くのはそれを隠すための口実ですか？」

弦は少年の洞察力に驚きながらも、静かに言う。

「それも惣領に直接お聞きください。私はただ惣領のお言葉をお伝えすることしかできません。くれぐれも怪魅師であることは人に知られぬよう、たとえどのように高貴な身分であれ、知られれば容赦なく捕えられましょう」

灰にとっては噂でしか知らない話ではあるが、白沙那帝国はくしかが異端と目した存在に対して異常なまでに厳しいのは事実なのだ。それがわかっていながら異端とされている怪魅の力を必要としている峰瀬の意図はどこにあるのか、灰には見当もつかない。

伝えるべきことを伝えたのだらう、弦は再び頭を下げると素早く立ち上がり踵を返した。しかし、ふと考えるように立ち止まる。不意に和らいだ弦の気配に灰は視線を向けた。

「まだ何かありますか？」

問いかける灰に対する弦の声には苦笑が含まれていた。

「はい。最後に一つ、そのお言葉遣いをおやめください。私は多加羅につかえる影です。影には影に相応しい身分というものがありません。灰様は多加羅の惣領家のお血筋、私の主なのですから」

そう告げて去っていく背が闇にまぎれて消えるのを見届けてから、灰はため息をついた。緊張が解けた体が不意に重く感じられた。あるいは、それは伝えられた言葉の重さだらうか。

（覚悟していたはずだ）

だが、このような形で、ではなかった。灰は己の手を見つめる。

不意に、鋭い銀の軌跡が脳裏に浮かんだ。灰は強く頭を振って残像を振り払う。弦が短剣を振り下ろしたあの時、又駆があらわれなければ己はどうしていただらう。

すぐるようにして見上げた月は、透徹と澄み渡った天空に遠く輝くばかりだった。いつまでも立ち尽くす少年に、月は何も応えはしなかった。



秋連は涼やかな鳥の声で目覚めた。

見上げれば複雑な曲線を描く木目が目にやさしい。見慣れぬそれに、どこにいるのかを思い出した秋連はゆっくりと体を起こした。

引き戸の隙間から差し込む光は淡く、まだ早朝であることがわかる。隣を見ればすでに弦の姿はなかった。旅の間を通して、弦が秋連よりも先に寝たことも、後に目覚めたこともなかった。一体いつ寝ているのか、と思わずにはいらなかったが、それも数日共に過ごすうちに慣れてしまうものらしい。

秋連はがたごとと音を鳴らしながら聖堂の表に面した引き戸を開けた。さつと差し込む朝日はひんやりとした大気とあいまって急速に意識を覚醒させる。大きく伸びをすれば、よほど熟睡したのだから、旅の疲れが消えていた。

夜露に濡れないようにと室内に置いていた靴を掴み、秋連は外へと向かった。聖堂の前の広場から村を見渡す。

森が、山が、そして村が目覚める様に秋連は見とれた。静けさの中に沈む夜の気配に眩い光が縦糸のようにからみ、刻々と色を変えながら、長い時の中で作り上げられた一つの調和が姿をあらわす。見事な織物が仕上がるかのようなそれは、秋連の心に深く穏やかな感動をもたらした。

「起きていらしたんですか」

背後からかけられた声に振り返ると、堂の裏手から歩いてくる灰の姿があった。

「ああ、ぐっすり眠れたせいかな疲れがよくとれたよ」

思わずぎっくばらんに答えた秋連は、丁寧に言いなおそうかと考え、やめた。この景色の前では人の身分も立場も、何もかもが遠くばかげたことに思われる。そもそもこの少年が、表面的な言葉や取り繕った恭しい態度に愚かしい喜びを見出すとも思えなかった。

灰もまた秋連の横に立ち、幾層にも重なる空の色彩を見つめた。

すっきりと立つ少年は物思わしげでありながら、どこか遙か彼方に意識を投げ飛ばしたような空虚さがあった。秋連はまじまじとそ

の横顔を見ながら、ふと、彼が一睡もしていないのではないかと考える。直観的なそれに、しかし秋連は確信を抱いた。思えば、灰に直面する前にはどのように話を切り出そうか、そればかりを考えていたのだが、いざ本人を前にすると呆れるほど直截な物言いになつてしまったものだ。今も胸に残るもどかしさは、とらえどころのない相手への戸惑いではなく、言葉を飾ることのできない自分への苛立ちだったのかもしれない、と秋連は思う。

「俺は、いつかこの村を出て行こうと思つていました」

ぼつりと呟くように少年が言った。銀の髪が風に揺れて不思議に青を思わせる色に染まつていた。

「巡回薬師じゅんかいしになつて色々な場所に行つてみたいんです」

「巡回薬師？」

思わず秋連は問い返す。はい、と答えた少年は大きく笑んだ。まるで空気そのものが変わるような華やかさに秋連は息をのむ。年相応の笑顔でありながら人を魅了するそれは、遠くかすむ記憶の底から、一人の乙女の姿をいやがうえにも呼び起こす。

「遠く見知らぬ土地まで旅をし、世界中の動物や植物、薬草を調べらる」

「そして敵も味方もなくすべての命を癒す……か」

秋連は驚いた表情の灰に笑んでみせた。

「私はそういつたことにはいささか詳しくてね。巡回薬師は今では滅多に見られないが、僅かに残つていてというのも聞いたことがある」

「はい。師匠もよく言つておられました」

しかし、と言おうとして秋連は言葉を飲み込んだ。

巡回薬師はどの国にも属さず、どの勢力にも阿らず、季節を追うようにして諸国を巡り、知識や技術の探求と命を癒すことにのみすべてを捧げる存在である。しかし、時として彼らは迫害の対象ともなりうる。諸国を放浪する彼らを間諜と疑い、優れた知識を邪法と罵る人々によって、数多くの巡回薬師が虐殺された歴史がこの国に

もあつた。

だが、それを言つて何になるというのか。そのようなことはおそらく少年も知つてゐるのだ。巡回薬師になりたいという言葉にこめられてゐるのは、理想に憧れる子供の夢ではなく、遠く得ることのできない夢への諦観のように秋連には感じられた。それは十四歳の少年が持つにはあまりにも悲しい。

村の家の前で小さな人影がのびをしているのが見える。気づけば夜の気配は消えつつあつた。

「母が、俺に言ったことがあります」

秋連は思わず灰の顔を見る。そこに笑顔はもうなかつた。

「運命に従容と従うも、昂然と立ち向かうも己次第だと」

「運命」

頷き、灰は正面から秋連を見つめた。少年が初めて見せた強い瞳だつた。

「俺は多加羅に行きます」

言葉は決然と響く。

「それは、君にとっては運命に立ち向かう、ということなのかい？」  
その問いはほとんど無意識に出たものだつた。零れ落ちた言葉を睨みつけるように、灰は地面を見つめる。秋連は、その姿に初めて等身大の少年を見たように思う。そう、まだ少年だ。たった十四年生きただけの存在なのだ。

「わかりません」

己には知らされていないことが、少年にこのような表情をさせる何事かが、恐らくあるのだろうと秋連は思う。そしてそれは、彼に知らされるべきことでもないのだろう。これまでもそうであつたように、彼はただ傍観者であればいいのだ。秋連は自身に納得させるようにそう考える。

「ただ、俺は逃げるわけにはいかないんです」

何から、とは問わずに秋連は新たな一日へと動き出した村を見やつた。仄かに霞む朝の光の粒子は、鮮やかな緑と人々の出す堅実で

陽気な物音の中に、ひっそりと消えていた。

## 2 (後書き)

序章が終わりました。これだけでも結構な分量がありますね。

この物語は別のサイトでも投稿しているのですが、今回改めて見返すと直す箇所が多くて大変です。誤字・脱字だけでなく、文章が変だったり拙かったり。大分前に書いたとはいえ、こんなに下手だったのか！ という感じで……。いえ、今でも大して進歩はしていません。少ないですが、少しはましになったと思います。ものです。

ではでは、今後ともよろしく願っています！

## 第一章 多加羅

多加羅たからとは象徴的な名だ、と峰瀨みなせは思う。

かつては神の中でも偉大とされたものの御名であり、やがては聖地として畏敬の対象となった。ある時は覇権を求める者達の一軍として名を馳せ、唯一神を奉じ絶大な勢力を有する白沙那に屈して後は、異端の神を祀っていた地として蔑視された。

今は 今となつてはこの名にいかほどの意味があるというのか。あるのは落ちぶれた一族がしがみつく僅かな所領ばかりか。いや、それほどまでに卑下する必要もあるまい。多加羅とは、広大な白沙那帝国内に十七存在する惣領家の一つ、東の国境を守る要害であるとともに、帝国にとって厄介な要だ。積み重なる時の澱に撓み、封じられ語られることのない歴史の影に半ば没してはいても、少なくともまだ存在はしている。

夏の日差しは硝子窓を通して容赦なく照りつける。無防備にそれを浴びていた峰瀨は不意に頭痛を覚えて影へと身をひいた。

惣領家の屋敷は古い時代の威容を今に残す壮麗なものであり、峰瀨がいる惣領の執務室はその中でも最も立派なものの一つだ。現在そこには部屋の主である峰瀨と、年老いた男が一人いるだけだ。

峰瀨はすでに日常の一部となつている全身のけだるさを押し隠して、辛抱強く言葉を待っている男へと視線を向けた。実直なその男は峰瀨が自分の進言に対して真剣に考えていると信じているのだから。よもや多加羅の象徴性についてとりとめもなく思考を巡らせていたなどとは思うまい。

「白玄はくげん、もうその話は何度もしたと思うが」

峰瀨より三十は年上であろう男は、白いものが大半を占める眉をぐい、と吊り上げる。

「ええ、いたしましたとも。ただし、このことを私が知ったのは惣領がすべてをお決めになり、手筈を整えられた後でしたな」

背筋をこれ以上ないほどぴんと張ったその小柄な姿は記憶にある限り変わらない。彼は峰瀬が物心ついたころから惣領家に仕えている。時とともに官位が変わり、家臣の筆頭としての地位を名に冠するようになって、貫く信念は揺るがない。すなわち、惣領家の威信に害あるものは、例え主の決定であろうとも看過しない、ということだ。

「せめて一言なりとご相談いただければ、このようなことには決してならなかったのです。仮にも玄士げんしである私に何も仰せにならずに、この微妙な時期にそのようなことをなさるとは……」

嘆かわしげに溜息をつく様子は、峰瀬がすでに三十も半ばを超えた男ではなく、いまだに十代の若造だとも思っているようだ。玄士は惣領の側近くに仕え補佐するのが役目だが、白玄の物言いには聞き分けのない子供に対するような響きがある。

峰瀬は苛立たしさを笑顔の下に押し隠し、つとめて穏やかに言う。「しかしな白玄、幼子を一人、いや、二人放り出すのは人として恥ずべきことではないか？」

「多加羅惣領家は孤児の引き受け所ではございません！」

「そうは言っても柳角翁りゅうかくおとうが亡くなられたのだから、誰かが引き取らねばならんだろうが」

「引き取る、それは大いに結構でございます。ただし、この惣領家の所領に入れず、どことなりと孤児を世話する施設にお入れになればよろしい。今は裕福な子弟が入るにふさわしい孤児院とてあるのですからな」

笑顔も無限ではない　峰瀬はそろそろひきつりだした口元をさりげなく手のひらで隠す。昼前だというのに全身の倦怠は立っているのが辛いほどだ。衣の上から首にかけて宝珠ほうじゆに触れば、それが弱々しく鳴動する。その地位に相応しくふんだんに布を使った長い袖が、いつになく重く思えた。

「過ちを犯したのは私の父だ。灰かいには何の罪もないだろう」

「その少年には確かに罪はございません。しかし先代がご存命のこ

るをいまだ覚えている者も多いのです。少年が多加羅へ来れば、それだけでいらぬ憶測と混乱が起こりましょう。それに聞けば、少年は父親が誰かもわからないと言うではありませんか！」

なおも言い募ろうとした白玄は扉を叩く音に口を噤む。扉を開けて恭しく頭を下げた男を見て白玄の渋面がさらに苦々しく歪められた。

「惣領、お呼びとのことでは参上いたしました」

「秋連、足労だったな」

峰瀬はほつとした心地が声に出ないよう気をつけながら白玄に笑顔を向ける。なけなしの気力を総動員しての笑顔だった。

「とにかくこの話は終わりだ。さがれ」

不満げな表情で退室する白玄を見送り、秋連は疲れた表情で椅子に座る相手、己の主であり、幼いころからの友でもある男に向き合った。

「どうやら私は白玄老に嫌われてしまったようです」

峰瀬はにやりと笑う。

「何の相談もなくお前を使者として送ったのが相当に気に食わんらしい。頭の固い爺だ。もつとも他の二人の玄士に比べればましだがな」

秋連は相変わらずの物言いに苦笑を浮かべた。豪華な部屋の中は、夏の暑さから切り離されたようにひんやりとしている。若衆が剣の訓練をしているのだろうか、屋敷の近くにある鍛錬所たんれんじょからのいさましい掛け声も、ここでは遠く、どこか現実離れして聞こえる。

秋連は峰瀬の青白い顔に気付かないふりをしながらも、以前よりもさらにやつれたその様子に苦いものがこみ上げるのをこらえることができなかった。もつとも的確な判断力と知性、そして何事にも動じない泰然とした態度で人望を得る多加羅惣領の変貌に、どれほどの人が気づいているだろうか。

「少しお前に頼みたいことがあってな」

秋連は大仰に顔を顰めてみせた。



「また厄介なことを押し付けようというのですか？ この前みたい  
に問答無用で旅に出すようなことはやめていただきたい」

「たまにはいい経験になっただろう。日がな一日暗い書庫にこもっ  
ているよりは、よほどいい」

「私は暗い書庫が何よりも落ち着くのです。高尚な知識に触れるこ  
とは人生を豊かにいたしますので」

「低俗な駆け引きは惣領家と阿呆の古参どもに任せておく……か」  
峰瀬は呟く。

「相変わらずの皮肉屋でいらっしやる」

「ああ、皮肉を言う相手もお前しかおらんのだから、我慢しろ」

どこか疲れた表情で峰瀬は腕を組んだ。それが言い出しづらいこ  
とを言おうとしている時の彼の癖であることを秋連は知っていた。  
惣領という責任ある立場については、そのようなしぐさも影を  
潜めていたが、友の前でふと気が緩んだのか、それともそれすら構  
えないほどに精神が疲弊しているのか、秋連にも定かにはわからな  
かった。

「お前は灰のことをどう思った」

唐突な質問に秋連は驚く。一月ほど前、当の峰瀬の使者として対  
面した少年の面影が鮮やかに脳裏に浮かぶ。

「戻った時にも申し上げましたが、少しの間会ったくらいでは大し  
たことはわかりません」

峰瀬は小さく息をついた。

「私は灰がどのような人物が見極めるように言っただけだが？」

「そうは言いますが、それほどに簡単にわかるほど人は単純なも  
のではありません」

峰瀬はそれもそうだと苦笑しながら、なおも問う。

「どんなことでもよい。お前はどう感じた？」

秋連は灰との対面を思い出す。どこか張りつめたような表情、そ  
れでいて早熟を思わせる落ち着き、そしてあの笑顔だ。

「……敢えて言うならば彼には人を惹きつける何かがある、という

「ことでしょうか」

「何か？」

そう、何かだ。それが何であるかをあらわす言葉が見つからず秋連はしばし視線を彷徨わせる。外に目を転じれば、硝子を通して見える木々は深い緑に染まり、天空に挑むかのような勢いである。それは命が燃え立つ様だ。再生し、磨滅し、繰り返して生きては死ぬ万物の営みの欠片だった。

「雄大な自然を前にしたときに感じるような、そんな感覚とさえいいでしょうか」

しばし迷ってから秋連は言葉を続けた。

「彼はとても紫<sup>しや</sup>弥様に似ています」

峰瀬の手が僅かに震える。目に見えた変化はそれだけだったが、秋連には峰瀬の動揺が感じられた。

「言うなれば、紫<sup>しや</sup>弥様は清流で、あの少年は風のような雰囲気を持っていました」

掴みどころのない言葉に、峰瀬は何を思っのか黙り込んだ。あるいは追憶に耽っているのかもしれない。彼もまた飛沫を浴び光を纏って立つ乙女の姿を忘れてはいないだろう。秋連は自身も記憶の流れに身を任せながらそう考えた。

「噂ではあと数日もすれば灰様が多加羅に来られるとのことですが……あの少年を多加羅に呼んでどうするおつもりですか？ まさか家族になるうというわけではありませんまい」

問いを発してから秋連は後悔した。彼はあくまでも傍観者でしかない。秋連は多加羅惣領家に仕えた下男の子にすぎず、峰瀬が彼に求めるのは惣領という重圧から一時離れるための友という役割だ。そして峰瀬が秋連にただ友としての役割を望んだように、秋連もまた惣領家の中に踏み込むこと、その歴史に、柵に、内包するだろう間に触れることのない立場を望んだのだ。

峰瀬がどこか人の悪い笑みを浮かべる。秋連は思わず身構えた。この表情には覚えがある。何かを企んでいるときのそれだ。

「むろん、私が父親になれるわけもない。これ以上子を増やす気にもなれん」

一男一女をもつけた峰瀬の妻はすでに亡くなっている。

「では下男としてお雇いになるか」

たわむれに問う。

「ふむ、その手があつたか」

「ご冗談を」

「むろん冗談だ」

あつさりと言つた峰瀬は不意に表情を改め、秋連に座るようにながした。秋連が手近な椅子におさまつてもなお、惣領家を束ねる男は半ば目を閉じるようにして考えにふけている。しびれを切らしかけた秋連が声をかけようとしたその時、唐突に峰瀬が口を開いた。

「お前に灰を預けたい」

言おうとした言葉は霧散し、かわりに開きかけた口が鋭く息を吸う。相手の言葉を理解するのにさらに数秒を要した。

「それこそご冗談でしょうね」

「冗談で言えるか」

「どういふおつもりですか」

「言つたとおりの意味だ」

問えば明解に答える相手は、しかし不可解極まりないことを言っている自覚はあるのだろうか。平然としている峰瀬の前に秋連は大きく息をついた。むろん、自らを落ち着かせるためだ。

「わかりやすく、言っていたきたい」

峰瀬は頷いた。

「私自身が灰を引き取るのではない、そういうことだ」

「まだわかりません」

「灰は多加羅惣領家の屋敷には住まわせず、ふさわしい導き手のもとに預ける。そこで書を学ばせ、他の少年たちとともに若衆で剣術を身につけさせる」

ゆっくりとその言葉を反芻する。

「そしてその……ふさわしい導き手、というのが私なのですか？」

峰瀬はおもむろに頷いたが、まじめな表情の下で秋連の反応を楽しんでいるようだった。

「呑み込みが早いな」

「いいえ、待つて下さい。落ち着いてください、そのような……」

「私は落ち着いている」

「それは……ええ、むろん、そのとおりです！ ……私が落ち着かねば……」

秋連はため息をつく。

「これはちよつと頼みたい、で済むことはありません」

「無理強いするつもりはないが、お前以外に適任者を思いつかん」

「わけを聞かせてください。なぜ、あの少年を多加羅惣領家の一員としてこちらにお迎えにならないのですか。そして、なぜ私に預けるなどということを考えてくれたのです」

峰瀬は椅子の背に体を預ける。それは抱えあぐねた重荷をおろすかのような仕草に秋連には見えた。この場合重荷とは彼が背負う責務だろうか。それとも体の内部に巣食い、その命を削り取る何かだろうか。

「それを話すにはまず灰の立場を知ってもらわねばならんな。そもそもお前は灰のことをどれほど知っている」

秋連は注意深く答える。

「人が知る程度のごとは概ね」

「それはどのようなことだ」

当たり前障りのない言葉を探し黙り込む秋連にかわって、峰瀬が言った。

「先代惣領の妾となった娼婦の孫であり、父親が誰かもわからぬ私生児だということか」

「ええ……まあ、そのようなことです」

「では、お前は灰について正しいことをほとんど知らないということ

とだ」

峰瀬は胸の前で手を組む。しばし考えるように瞳をふせてから静かに語り出した。

「はじめりはリーシエンという一人の女性だった。灰の祖母にあたる……つまりは私の父の妾となった女性だ。彼女がどういう経緯で多加羅に來たか知っているか？」

「來螺（カイト）の街の娼館にいたのを先代惣領が見染めたと聞いています」「そうだろうな。しかしそこからして間違いだ。リーシエンは生粹の風の民だった。彼女は自分からこの地に來たわけではない。ましてや娼婦でもない。東方遠征の時に密かに捕われて來たのだ。それも私の父によつて無理矢理にな」

はじめて聞く話だった。

三十年以上も前に白沙那帝国が東の国々へ大規模な侵攻を行ったという東方遠征は、秋連と峰瀬がまだ生まれただばかりのころの話だ。帝国の大勢力をもつてしてもやがては撤退を余儀なくされた悲惨な戦いの記憶は、いまだ生々しい。直接に戦いを知らない者にとつても、軽々しく話題にできるものではなかった。

「父は東方遠征に参加しながら一方では是が非でも手に入れたものがあった。それをたまたまりーシエンが持っていたのが彼女にとつては不幸なことだった。もつとも父にとつてはその若さと美しさも魅力だったのかもしれないが、むごい話に変わりはない。父は多加羅の惣領としては優秀だったかもしれないが、人としてはその資質に欠けていたようだな」

ふと峰瀬は自嘲するような笑みを浮かべる。

「父は多加羅惣領家に怪魅師（けみし）を誕生させるために、怪魅（けみ）の力を持つ女性を欲していた」

秋連は目を見開く。

怪魅とは帝国では異端に位置づけられている力である。その力は持つ者によつて多様に異なるといふ。風を、火を、そして水を自在に操るとまで言われる怪魅師は、自然に潜む膨大な力をその術の源

として利用するのだと考えられていた。もつともその実態は白沙那ではさほど明らかにはなっていない。ただ脅威的な力を有する存在への畏怖のみが、人々には浸透しているのだ。

帝国において神秘の力が全て忌避され、弾劾されているわけではない。法に則り言霊ことだまによつて神の力を借りるといふ条斎士じょうさいしは、栄誉ある存在として遇されていた。誰あるう目の前の峰瀬その人が条斎士であり、代々の多加羅惣領家の人間の中にはその力を有する者が少なからず存在する。長い時の中で考案され築かれた条斎士の法術は決して弱いものではないが、言霊によらなければ行使できない限定されたものだった。一方、自然そのものの力を自在に操るといふ怪魅師の術は、人が神の領域に不遜にも介入する行為であるとして、邪法とされているのだ。

怪魅師が帝国において厳しく弾圧されるようになったそもその原因も、かの東方遠征であるというのが秋連の見解である。優れた条斎士数十人をもつてしてもたった一人の怪魅師にかなわず、軍が遁走したという逸話が多い。最終的に帝国が撤退を余儀なくされた大きな要因の一つが、絶大な力を有する怪魅師の存在だと言われている。

話はなおも続く。

「知つてのとおり東方と違いこの帝国の地では怪魅師はめつたに生まれない。父は怪魅師として名を馳せていたリーシエンを捕え、多加羅に連れ帰った。そして優れた怪魅の力を持つ子供を彼女に産ませようとした。そうして生まれたのが紫弥だ。だが、紫弥は怪魅の力を持つてはいなかった。無論父は諦めなかったが、リーシエンは父を憎悪し、絶望していた。無理もなかったらう……彼女はその時まだたった十八かそこらだった」

痛いほどの静寂があたりを浸す。

「ある時彼女は怪魅の力を己自身に使つた。恐らくは死のうとしたのだらうが、それはうまくいかず、だが彼女は二度と子供が産めない体となった。あるいはそれこそが彼女の狙いだったのかもしれん。

父にとつてはもう何の役にも立たない存在、そうなるはずだった。だが、父はその時にはリーシエンに心を奪われていた。どれほどに憎まれようと、父はリーシエンを手放すことなどできなかつたのだ。死ぬまでな」

「死ぬまで……」

「ああ、死ぬまでだ。父の寿命が短かつたのだけが彼女にとつて幸いだったかもしれない。いや、その死によつて彼女に降りかかった更なる不幸を思えばそうとも言えないか……。どちらにせよ、リーシエンが多加羅に連れて来られて六年後に父は死んだ。私が七歳のころだつたな。紫弥は五歳だつたか……。もつとも私はリーシエンという女性の存在すら知らされてはいなかつたが」

ではそれでやっと風の民の娘は自由になれたのか　　事實はそうではなかつた。峰瀬は淡々と告げる。

「表向きはリーシエンは父の死後多加羅を出たことになつていますが、実際は私の母に毒を盛られたうえ、幼い紫弥とともに追放されたのだ」

峰瀬はいまだに耳にこびりつく母の甲高い声を思い出す。母の侍女が漏らした話、恐ろしい事実を問い質したときのことだ。縋りつくようにして自分から夫を奪つた女への進むような憎悪を叫ぶその姿に、峰瀬が感じたのは嫌悪と空虚な悲哀だつた。

「<sup>あたま</sup>耶頭の毒というものを知っているか？　人の知性を侵し、自我を破壊する猛毒だ。母はリーシエンにその毒を飲ませたうえで、彼女と紫弥を多加羅から追い出した。人であることすら忘れた母親とまだ幼い娘をな」

ざわり、と夏の大きに木々が身を揺する気配がする。外はうだるような暑さに違いない。

過去の妄執と憎しみが不意に蘇り、まるで傷ついた獣のように壮麗な部屋の壁際に蹲っているような錯覚に秋連は陥る。見えない闇の凝りはどれほどまでに深いだろうか。

「……灰様はそのことを知っておられるのですか？」

「それはわからぬ。紫弥が伝えていたかどうか」

秋連は少年の言葉を思い出す。運命に従容と従うも昂然と立ち向かうも己次第なのだと、彼にそう伝えたといい母親　紫弥はその言葉に一体何をこめたのだろうか。痛々しいまでの決然とした瞳で逃げるわけにはいかない、と言った少年の意図はどこにあるのか。

ぼんやりと考えていた秋連は峰瀬が自分を凝視しているのに気づいた。

「なんです？」

「お前はこの先を聞きたいか？　灰を引き取る気がないならば聞かぬ方がよいことだ」

警告だった。



## 第一章 多加羅（後書き）

第一章にさくつと入りました……と言いたいところですが、やはり文章の修正に手間取っています。今読み返すと、「あーこの人こんなこと言う性格じゃないのに」なんてことも結構あって、当初と比べて登場人物の捉え方が書き手自身の中でも大きく変わっていることがわかります。今の方が人物像が固まっているので、かきはじめはまだ手探りだったということかもしれません。ざくざく科白を変えています、そのせいで時間がかかってしまします。

何はともあれ、読んでいただければ幸いです。ではでは、今後ともよろしく願います！

秋連は峰瀬の顔を正面から見返す。

「私は、多加羅の惣領が単に肉親の情だけで灰様を引き取るうとしているのではないだろうとは思っていました。その一方でこうも考えていたのです。私が幼いころから知り、信じる友は、あの少年には決して非道なことはするまい、むしろ望み得る限り最良の道を少年のために選ぶであろうと」

なぜでしょうね、と呟いたのは独り言だったが、峰瀬はそれに道化たように眉をあげる。

「今話を聞けば、彼を惣領家に入れるのはあまりに酷い。それはわかりました」

先ほど扉の向こうから漏れ聞こえた白玄の言葉を思い出す。多くの者が灰を中傷し、罵倒するだろう。悲惨な真実を知らず、あるいは知っていながらそれには目を瞑り、異民族でありながら不相応にも惣領に愛された女、自堕落な娼婦でありながら不遜にも正妻から夫を奪った女の孫であると蔑むに違いない。

「ですが、なぜ私なのです。もつとふさわしい者がいるはずです。公平な視点からより良く彼を導ける者が」

「玄士どもお気に入りのお士のことを言っているなら見当外れだぞ、秋連。お前もよく知っているとおおり、彼らの取り柄は己の狭い知識への自惚れと頭の固さだけだからな」

「学士ではなくとも……そう、神殿の司祭がいます。神職におつきになればいらぬ中傷を浴びることもありません」

少なくともあからさまに浴びることはないだろう。あの少年が聖衣を纏い信仰と権威の砦の内に籠る姿など想像もつかないが、それは言わないでおく。

「それはますますできん。お前の話を聞いて確信したが、灰は間違いない風の人そのものだ。母親が紫弥で柳角翁が師匠とあれば、決

して帝国の一神教には染まっていけないだろう」

秋連は内心ではそれに同意する。峰瀬はさりげなさを装って、注意深く相手の反応を探りながら言った。

「それに灰は怪魅師けみしでもある。神殿になぞ入れたら異端探しに躍起の連中の前に餌を投げるようなものだ。それも特大のな」

秋連が息をのむ。その顔に現れたのは驚愕と、もしかすると納得だったかもしれない。

「少なくとも多加羅惣領家の血を引く怪魅師を誕生させようとした点において父の目論見は成功したわけだ」

そしてそれを利用してしている点では己も父と似たようなものだ、と峰瀬は自嘲する。若ければ義憤と潔癖さゆえに唾棄したであろうことを、自分もしようとしているのだ。だが、それを言ってしまうとどうなるというのか。峰瀬は沈黙する相手を観察する。同じ年に生まれ、幼い頃から知ってはいるが、自分と相手とでは何もかもが違う。秋連の目には己はどのように映るだろうか。

「それは……、そうであれば神殿は確かに彼にとって危険な場所です」

ようやく絞り出すようにして秋連は言う。なおも躊躇し戸惑う中にも、峰瀬は自身が望む答えがすでに引き出されつつあることを確信していた。彼は確かに肉親の情だけで灰を呼び寄せるのではない。むしろそれは最も小さな理由でしかない。しかしいみじくも目の前の男が言ったように、『望み得る限り最良の道』を選ぶ努力を惜しむつもりはなかった。それは灰にとっても惣領家にとってもだ。

「灰様を引き取る……お預かりするとして私は具体的にどうすれば良いのです。書をお教えすると言っても私は学士の資格も持たない単なる星見役ほしみやくでしかありません」

秋連は渋面で問う。

「星見役にしかできないことだ。連綿と続く歴史、数多くの戦の戦略、権力者が繰り返してきた愚行の数々、人生を豊かにする先人の英知。そして禁じられ秘められてきた真実の知識、そういった

ことを教えればよい。単なる学士では無理なことだ」

峰瀬はにやりと笑った。

「お前が飽きもせずただ書の管理と目録作成だけに人生を費やすなどと誰が信じる。星見役は今や有名無実だが、お前ほど喜々としてこの仕事に従事している者を私は他に知らんぞ。日がな一日書庫に籠って詰め込んだ知識を授ける相手が必要だろう。優秀な後継ぎがほしいとも言っていたな。灰を次代の星見役にするという手もあるぞ」

秋連は苦々しく息をついた。星見役とはかつて多加羅が独自の神を奉じ、自然に潜むすべての神秘を信仰していた時代に、主に天空を司る官として置かれたものだった。文字通り星の動きや色を観察し、それらが何をあらわすか研究する星見役は、神の儀式を司る者に次いで尊敬の対象とされていた。

しかし、一神を奉ずる帝国に下つて後、古来よりの信仰は弾圧され、やがて長い時の中で人々はかつての神を忘れていった。異端とされる知識を記した書物は密かに伝えられているが、それも僅かの者が存在しているということを知るのみだ。栄誉の役であった星見役も、今や膨大な書物を管理するための閑職になっている。秋連が何代目の星見役であるかはそれこそ書を紐解かねばわからぬことではあるが、下男の子がその役に就くことがかなうほどに星見役の本来の役割が忘れられて久しいのは確かだ。

秋連は惑う。燻るような迷いの根底にあるのは、淡々と紡ぎ、守ってきた穏やかな日常への執着である。彼が峰瀬の申し出を拒否すれば、灰はおそらくいずれかの家臣に預けられるだろう。そして秋連には、それを見て見ぬ振りをするなどできないだろうということもわかっていた。先代惣領にまでさかのぼる件の話を聞いた後では尚更だった。彼は観念する。

「承知いたしました。灰様は私がお預かりします。星見役の知識をお授けいたしましょう。ですが……後継者としてではございません」  
言いながらも秋連は苦いものがこみあげてくるのを抑えることが

できない。なぜ自分は静かで穏やかな生活にわざわざ穴をあけようとしているのか。しかもその穴から吹き込むのはそよ風どころか、何もかもをなぎ倒す嵐かもしれないのだ。だが、同時に彼はかの少年に自らの知識を授けるのを、心の隅ですでに楽しみに感じはじめていた。少年は教えがいのある生徒となるに違いない、と秋連は思う。

「それで十分だ」

峰瀬は、秋連の勘違いでなければ、僅かに安堵の表情を浮かべたようだった。だが、その表情は再び影を帯びる。

「では、この話をしておこう。灰の導き手として知るべきことだ」

とん、と峰瀬が机を軽く叩く。その音がやけに空虚に響いた。秋連はその虚ろさに不吉な予感を覚え、知らず身構える。

「お前も聞いたことがあるのではないか？ 紫弥が六年前に殺されたというのを」

「……根も葉もない噂です」

言外に信じてはいないのであるということを告げれば、相手はふと視線を逸らす。語られる言葉は静かだった。

「私が灰に初めて会った時のことだ。あれは六年前の淡雪が降る日だった。來螺（くわい）の警吏（けいじ）の知らせを受けて私が街へ着いた時には深夜になっていた。……遺体はひどい有様だった。ただ殺すためだけに、あそこまで人の体を傷つけるものなのか……」

るで独白のような峰瀬の言葉に、秋連はひやりと体の芯が冷えるような心地を覚える。紫弥が暴漢に殺されたという噂は、官職を有する一部の者の間で囁かれていた。秋連も耳にしたことはあるが、それが真実だとは今この時まで考えたこともなかったのである。あるいは真実だと思いたくなかったのかもしれない。しばしの沈黙の後、峰瀬は言った。

「灰は母親が殺されたその場に居合わせたという。警吏の宿所に預けられていたが、何も見ず、何も話さず、まるで生きながら死んでいるように私には見えた。恐らく、私はその場にいたことも覚えて

はおらんだろう」

微動だにせず聞く秋連の顔が僅かに青褪めている。

峰瀬は暗い瞳で過去へと思いを馳せた。

警吏の宿所は古びた建物だった。夜の底に沈む空気は薄氷を思わせるほどに冷たく張りつめ、薄暗い部屋の片隅に蹲る少年を取り巻いていた。そして、峰瀬は少年を包む圧倒的な力の奔流を見たのだ。怪魅けみ それは彼の父親が死ぬその時まで求め続けた神秘の力だった。

傷つき、怯え それとも怒りだろうか 自らを守るように渦巻くそれを目にした時の戦慄は、稀有な力に対してだったのか、それとも沸き起こった思いもよらぬ感情に対してだったのか。怪魅を求めた父の妄執が人を貶め、狂わせ、その命すら闇に追い詰めたのを知りながら、しかし、抑えようもなくうねりのたうつ己の感情に峰瀬は愕然として立ち尽くしていた。峰瀬の記憶の中で、天から闇に舞い落ちる白い欠片はひどく美しく、立ちつくす己はひどく矮小で醜かった。

何を思うのか黙り込んだ峰瀬を秋連は見つめる。内心を悟らせない峰瀬の表情に、秋連はふと危うさを感じた。何とは知れず掴みがないその感覚は、刃の鋭さを孕んで秋連の胸中に沈んだ。

「その後はお前も知つてのとおり、私は灰を柳角翁にお預けした。あの時の様子ではとても多加羅に連れて来ることはかなわなかったのもあるが、柳角翁は人を癒すのに長けておられたからな」

秋連は峰瀬の顔を注意深く見詰める。ゆっくりと言った。

「まだ、私はなぜ先代惣領が怪魅師を必要としたのか聞いておりません。灰様がその力を持っているのだとして、あなたもそれが必要とされておられるのですか？ それも今回灰様をお呼びになった理由なのですか？」

峰瀬は相手の鋭さに驚きはしなかった。昔からどれほど本人が卑下しようとも秋連は深い思考力と物事の真実を見抜く洞察力を持っているのだ。秘めることがある時には厄介な相手である。

「それは答えることができません。少なくとも今はな。知ればお前は引き返しようもなくこの多加羅惣領家が秘める闇に入り込むことになる」

峰瀬は組んだ手の下、衣の布ごしに宝珠ほうしゆが淡く脈打つを感じる。条斎じょうさい士の証であるそれは青く柔らかな光を纏っている。だが、それだけだ。父を非道と罵りながらも、人の道を外れてでも怪魅師の力を求めたその思いを、峰瀬は理解することができる。己を恨み命すら断とうとした娘を手放さなかったのは、ただ恋情にのみよるものだったのか。父にとってリーシエンは怪魅という力の象徴であり、得られぬ神秘そのものだったのかもしれない。

峰瀬は不意に吐き気を覚えた。己もまた灰に同じものを求めているのか。父と同様に妄執の果てに罪の無い者を取り返しのつかない悲劇へと追い込むのかもしれない。そこまで考え、峰瀬は嘲るように内心に呟いた。六年前に対峙した真実をいまだに受け入れられぬとは、大概愚かしいとは思わぬか。すでにあの時に峰瀬が選ぶ道は決まっていたのだ。

唐突に耐えようのない疲れを感じて峰瀬は目を閉じた。どれほど隠そうとしても目の前の友人は彼の体の不調に気づいているだろう。しかし多加羅の惣領としての矜持が弱音を吐くことを許さなかった。最後に聞きしたい

「何だ」

秋連は一瞬迷うような素振りを見せてから、しかしまっすぐに峰瀬に視線を向けた。

「紫弥様を殺したというその暴漢は現場から逃げたということですが、それは本当ですか？」

「そう聞いている」

「……人の噂では、その後」

秋連は掠れた声を途切らせて軽く咳をする。

「その暴漢が何者かに惨殺されたとか。まるで人ではないものに引き裂かれたような姿で息絶えていたというのは……殺された女の霊

がなしたことはないかとまことしやかに囁かれるほどに凄惨な死にざまであったという、それは事実なのですか？」

「事実だ」

言葉少なにそれだけを答えた峰瀬に、秋連は何を思うのか、ただ、そうですか、と呟いた。

夏の空は暗い淵のごとく鮮やかに深い。太陽はすでに中天を過ぎたのか、窓の棧が床に映す影はとろりとした緩慢さを感じさせる。それを見てもなく見ながら、秋連は渦巻く思考を無理矢理に閉ざした。

「ねえ、もう少しはやくならない？」

ゆっくりと大通りを進む馬車の中から聞こえた苛立ちを隠そうともしない声に、須樹すぎはちらりと横をうかがった。どこか誇らしげな顔をした若衆頭わかしゅうがしらの加倉かくらは、取り澄ました様子で馬を操りながら恭しく答える。

「この通りを抜けてから、もう少し速度をあげましょう」

その答えが気に入らなかつたのだらう、馬車の窓にかかった日よけをはねのけて少女が顔を出す。きつちりと両の耳の横で結った長い黒髪がその動きに合わせて揺れる。気の強さをうかがわせる瞳は、今は不機嫌のために険しかった。奥の席ではおとなしげな侍女がおるおると主を見つめている。

「どうしてこんなに人通りの多い道に行くの。もっと人が少なくして通りやすいところがあるでしょう」

「お言葉ですが悠緋様ゆうひ、この道が一番の近道なのです。下手に脇にそれるとかえって時間がかかります」

「あら、私はてつきりあなたがその御自慢の衣装を周りに見せたいだけなのかと思っただわ」

年下の少女の言葉に加倉の顔が朱に染まり、何事かを言おうとしたが結局は黙って前を向いた。そのかわりに少々乱暴に手綱をひか



れた馬が抗議するように低く嘶く。須樹は噴き出すのをこらえ、何食わぬ顔を取り繕った。どれほどそれが的を射た言葉でも、自分の上に立つ者を笑ってよいはずがない。それは馬車の周りを固める他の四人にしても同じである。不自然に鞍の上でござと体を動かす気配から、皆一様に笑いを堪えているのだらう、と須樹は考える。確かに悠緋が皮肉を言いたくなるのがわかるほどに、若衆頭の衣装を纏った加倉は得意気だった。たとえ多加羅惣領家の姫君を屋敷まで警護するだけの任務であつても、それが彼にとっては若衆頭としてのはじめての任務なのである。誇らしげな様子は無理からぬことであつたが、それも過ぎれば滑稽に見えてしまうものだ。しかも、もしかするとその姿を最も見せたかつたのかもしれない相手に皮肉られては加倉も立つ瀬がないだらう。

侍女が横合いから日よけを再び下ろそうとするが、悠緋は視線の一つでそれを抑え、興味深げに周囲の様子を眺めた。その街は、活発な市場が立つことで知られていた。今も道の両端には露店が軒を連ね、様々な商品が所狭しと並べられている。国境に近いせいか異国の品も多く集まり、目にも鮮やかな色彩に溢れている。珍しいものを求めて市場を訪れる人も多く、その人々を泊めるための宿屋が多いのもこの街の特徴だった。豊かな街である。

「多加羅若衆がここで何をしている！」

不意に辺りに響いた声に須樹は顔を顰めた。声がした方を見やれば、行手を阻むようにして声の主がにやにやと笑っている。さらに悪いことにはその周りを固めるようにして六人ほどの青年が同様の表情を浮かべて立っていた。一様に鶯色の衣を身につけているが、だらしなく着崩れている。対照的に多加羅若衆の衣をきっちりと身につけている須樹達に馬鹿にしたような目線を送りながら、青年は挑発するように近づいてくる。

「どけ！」

加倉は腰に帯びた剣に手を伸ばしながら叫んだ。まずい、と須樹は内心舌打ちをする。顔を合わせれば難癖をつけてくる厄介な相手

には、加倉の態度は逆効果でしかない。

「なあ、聞いたかよ。ここは多加羅の領地でもないのに、偉そうなもんだよなあ。礼儀つてもんを知らないらしい」

青年の声に取り巻きが笑い声を上げる。

「でもあなた達沙羅久しゃらくの領地でもないわ。礼儀をわきまえていないのはあなた達じゃない！」

「何だと！」

青年の取り巻きの一人が叫ぶ。青年は手を振ってその声を抑え、口元を歪めた。その視線が馬車に刻まれた紋章に向けられている。須樹は齒噛みする。青年の表情から、悠緋が何者なのか察しただろうことは明らかだった。

「これはこれは、もしか多加羅惣領家の姫君か」

身を乗り出すようにして青年を睨みつける悠緋の頭を馬車の中に押し込めたい衝動をこらえながら、須樹は加倉を見守った。これ以上相手を刺激せず、黙ってただ通り抜ければ何事も起こらないはずだ。相手がいくら沙羅久若衆わかしゅうでも手を焼いているならず者であっても、このような場所で多加羅惣領家の人間に手を出すほど愚かではないだろう。

「はやくそこをどけ！ 若衆として恥ずべきことをしているのがわからないのか！ お前達がしていることは沙羅久にとっても泥を塗る行為だぞ！」

須樹は頭を抱えなくなる。多加羅の若衆頭の立派な言葉は、ここでは火に油を注ぐようなものだ。青年の顔が険悪を通り越して、不気味な笑いを浮かべる。

「身の程を知らないのはどっちか教えてやろうか」

じわりと近づいてくる相手に、加倉が僅かにたじろいだ気配を見せる。敏感にそれを察したのだろう、青年がにやりと笑った。加倉が身につける濃青色の若衆頭の衣をちらりと見やり、さらに口角を吊り上げた。

「見るよ。怯えてやがる。これが多加羅の若衆頭だっただけだからな

あ！多加羅もたかが知れている！透軌とじきつてのも大方女みたいな腰抜けだろうよ！」

「兄上は腰抜けじゃないわ！無礼者！！」  
いきり立つ若衆よりも先に悠緋が叫んだ。

「あなた達のような下劣な者が兄上のお名前を口にするなんて、汚らわしい！！」

「なんだと！！」

今度は青年を取り巻く連中が色めきたった。

周囲では何事かと人垣ができて始めていたが、中にはうんざりした顔でそそくさと去っていく者も多かった。多加羅と沙羅久の間に位置し、二惣領家の緩衝地かんしょうちに含まれるこの街では、両所領の血気盛んな若者の衝突が日常的に起きているのだ。

だがこれはまずい、と須樹は唇をかむ。彼らは正式な多加羅の任務の途中なのだ。もしここで衝突を起こせば、単なる若者同士の喧嘩ではすまなくなるだろう。それも多加羅惣領家の姫君を警護している途中で若衆頭が争いを起こしたとあらば、惣領家にも及ぶ問題となるだろう。例えそれが沙羅久の若者の挑発が原因であっても、先にこちらが手を出してしまえば、多加羅は責を問われることになる。それを相手の青年もよく理解しているのだ。彼は決して自分から手を出しはしない。あくまでも手を出させようとしているのだ。

「頭かしら、相手にしてはいけません。我々は任務の途中なのですから」  
須樹は囁いた。加倉が険しい視線を向ける。

「お前の指図は受けない。私が若衆頭なのだからな！」

苛立を抑え、須樹は辛抱強く言葉を重ねた。

「ここで争いを起こせば、ことは若衆だけではすみません。惣領家の責任が問われます。それでもいいんですか？」

横で会話を聞いていた悠緋がはっと息を呑む気配がする。己の態度の軽率を悟ったのか、怒りが消えて狼狽がその顔に浮かんでいる。加倉は青褪め、須樹から目を逸らした。

「そんなことは言われずともわかっている！」

加倉は頭をもたげると、まっすぐに馬を進めた。御者も恐る恐るといった体で再び馬車を動かす。沙羅久の青年達は動き出した一行に口汚く罵り声をあげるが、相手にされないと見るやししぶし道を開けた。

安堵の息をついて馬を進めた須樹は、不意に腕を振り上げた青年にはっとする。どこから取り出したのか太い棍棒のようなものがその手に握られ、まさに横を通り過ぎようとした加倉の馬の後ろ脛へと振り下ろされた。肉を打つ鈍い音が響き、突然の痛みと驚きに馬が大きく跳ねた。加倉が妙に甲高い声を上げて鞍の上から投げ出される。尚も興奮に暴れようとする馬の手綱を一人の若衆が咄嗟に掴んだ。

加倉が茫然とした顔で身を起こした。

「おやおや、多加羅の若衆頭は馬にもまともに乗れんらしい」

青年のあからさまな侮蔑に加倉の顔が赤黒く染まった。その手が腰の剣にのびるのを見た須樹は考えるより先に鞍から飛び降り、加倉の手首を掴む。否、掴もうとした。次の瞬間、須樹は手に走った鋭い痛みに思わずうめき声をあげた。見れば須樹の手は、手首ではなく剣の刃の根元を掴んでいる。鋭い刃が食い込むのも構わず、須樹はそれ以上剣が抜かれないよう更に力をこめた。

「お前達何をしている！」

突然響いた声に多加羅と沙羅久の面々がともにぎくりとした。人垣をかきわけて近づいてきた人物は、須樹とさほど年齢が違わないように見えた。見憶えのない顔に茫然とした表情を向ける須樹達とは対照的に、青年達は俄かに落ち着きをなくした。

「別に何もしてやしません。話をしていただけです」

媚びるような笑顔すら浮かべて弁明するのを睨みつけて、その人物は悠緋へと頭を下げた。

「どうかこの者達の無礼をお許し下さい」

「あなたは？」

もっともな疑問を悠緋は口にする。

「俺は沙羅久惣領家の二男、聡達そつたうです」

「まあ、あなたがあの……」

思わず呟いた悠緋は、賢明にもその先の言葉を飲み込んだ。聡達がちらりと楽しげな笑顔を覗かせる。悠緋はきまり悪げに視線を逸らすと、小さく咳払いをした。

「この者達には俺から厳しく言い聞かせますので、この場はどうか……」

「わかりました。私どもも大人げない態度を取ってしまいました。お許しください」

言外にこのことはここだけで納めようという二人の会話を聞きながら、須樹はそつと手を剣から離れた。四本の指の第二関節と、親指の付け根から手のひらに走る赤い二本の線からは、血が溢れ出ている。

「なに、家名だけで人から頭を下げてもらう立場。偉そうな態度をとるのは俺の楽しみなので、お気になさらず」

ちらりと加倉を見やって言う聡達の言葉に、須樹は場違いにも緩みそうになる口元を引き締めた。あいにくと込められた皮肉に加倉が気づいた気配はない。

「頭殿、そちらに感謝なさるのだな」

加倉はぼんやりと聡達の言葉に顔をあげる。さらに聡達の視線の先を追い、須樹の手の傷に情けなく悲鳴をあげた。

「もしあなたがその剣をすべて抜いていたら、ことはただではすまなかつたぞ」

聡達は踵を返すと、ふてくされたようにうなだれている青年達を促し歩み去った。須樹はその背を見送りながら、聡達は一体いつからこの騒動を見ていたのだろうか、と考える。

もちろん聡達はあの場面に偶然出くわし、急いで仲裁に入るため姿をあらわしたのだ。当然それまでの争いの経緯は知らないはずだ。聡達もつとはやくにこの場にいたならばこのような騒動にはならなかつたのだから。だが、聡達はまるですべてを見ていたかのよう

な物言いをしてはいなかったか？

「怪我の治療をしないと……」

言いながら悠緋は制止する侍女を振り切って馬車から降り、須樹のもとへと来る。慌てて他の若衆が集まって来るが、誰もがいまだに止まらない血におろおろとするばかりだ。無理もない。若衆として基礎的な治療法を知ってはいても、剣による傷を見たのも初めてなのだ。

それでもなんとかしようと伸ばされた手が、不意に響いた声に止まった。

「触らない方がいい」

一人の少年が何時の間にか傍らに立ち、須樹の手の傷をじっと見つめていた。少年の眼差しが、須樹の顔へと向けられる。その瞳は、まるで宵の空のように深い藍だった。

#### 4 (後書き)

登場人物が一気に増えました。主人公も最後にちらり、と。

お読みいただいている方はすでにおわかりのことと思いますが、かなり展開が遅いです。こんな感じで今後も続いていきますが、どうかお付き合ってください。

では、今後ともよろしくお願いいたします！

須樹は言葉もなく少年を見詰めた。年は十四か十五くらいだろうか。質素な衣は見慣れた平民のものだったが、瞳の色同様に顔立ちもどこか東方の者を思わせた。頑丈なつくりの履物と背囊から、旅の途中であるかと思われた。無造作に頭を包み、顔の片側にゆったりと流された青い布が、異国の相貌と相まって清しい。

少年は背囊を地面におろすと、自然な動作で須樹の手を掴む。顔を近づけて傷をじつと観察する少年の隣で、ようやく悠緋が我に返った。

「なんなの、あなた」

悠緋の声に答えたのは少年ではなかった。

「兄様は薬師なの。どんな傷でも治しちゃうんだから」

可愛らしい顔をした少女が少年の背後からひよっこりと顔を出し、悠緋ににっこりと笑いかけた。悠緋は毒気を抜かれて思わず黙った。少年は背囊から竹筒で作られた携帯用の水入れを取り出すと、栓を抜きそつと傷の上に中身をかけた。痛みに顔を顰める須樹に、少年が落ち着いた声で言った。

「大丈夫です。傷自体は浅い」

血が洗い流されると、思いのほか細かい傷口があらわになった。指と手のひらに並行に走る二本の線は、奇妙に整然とした模様を思わせる。少年が言う通り、傷自体はさほど深くはないようだった。少年は背囊から清潔そうな布を取り出すと、その布を傷の上に当てて圧迫した。一般的な止血の方法である。

真剣な少年の面持ちを、須樹はまじまじと見つめた。周囲の若衆の中にはあからさまに胡散臭げな表情を浮かべている者もいる。だが、傷の治療にのみ集中しているらしい相手は、周囲の視線など気にもしていない様子だった。

血が止まったのを確かめると、少年はさらに背囊から小さな壺を



取り出した。

「これならばおそらく傷跡も残らないと思います」

言いながら少年は精巧なつくりの壺の蓋を開ける。掌ほどの大きさの布片に、壺の中身を垂らす。とろりとした透明の液体だった。何かの薬なのだろう。香油のような匂いがした。十分に湿らせた布を、少年は傷の上にかぶせた。ひんやりとした感触が、須樹の心をも落ち着かせるようだった。不思議と痛みまでもが減ったように須樹は思う。はじめは訝しげだった悠緋や若衆達も、いつしか少年の作業を注視していた。須樹がふと周りを見回すと、少なからぬ街の人々も足をとめて者珍しげに少年の手元を見守っていた。

少年に連れられた少女が布と包帯を差し出す。少年は素早く布で手をふくと、須樹の手のひらと、四本の指をひとまとめにしてきっちり包帯を巻きつけた。手慣れた動きである。

「しばらくは手をあまり動かさないようにしてください」

「ありがとうございます」

須樹の言葉に少年がにこりと笑んだ。悠緋は思わず少年の笑顔に目を奪われた。少年の瞳がふと悠緋に注がれた。途端に悠緋はざわりとしたものを胸の奥に感じる。まるで得体のしれない蠶が蠢くようなそれ。

「それにしても、沙羅久ハルモシの放蕩息子があんなにまともだなんて知らなかったわ」

慌てて視線を逸らし、わけもなく鮮やかな裳裾を整えながら悠緋は言い、せつかく整えたそれを台無しにする勢いで立ち上がった。

「私が聞いた噂ではもっと……こう、いやらしい方かと思っていたわ」

須樹は肯定も否定もしかねて、黙り込む。まともと言うより一癖も二癖もありそんな人物に思えたが、確かに賭博や悪所通いばかりをしているという噂の沙羅久惣領家の二男は、凜々しく鋭い容貌ではあった。多分に皮肉気でもあったが。

「悠緋様、この手では馬の手綱を操るのは無理です。先にお行きく

「ださい」

須樹は包帯がまかれた手を上げてみせながら言う。

「この馬も今は人を乗せないほうがいい。俺が引いて行きますので、頭は俺が乗っていた馬をお使いください」

後ろ脛を殴られた馬はまだどこか落ち着かない様子で足を引きずっているが、おそらくゆつくりと休ませれば大丈夫だろう。加倉かくらはああ、ともうつ、ともつかなくもった声を上げて、羞恥と苛立たしさの混じった表情のまま須樹が乗っていた馬の手綱を乱暴にひいた。その様子を眉を顰めて見つめる悠緋が何か言い出す前に、侍女が彼女を馬車の中に引き入れる。須樹はほつとする。これ以上面倒なことは起こってほしくないものだ。

「あなた、旅をしているのね？ どこに向かっているの？」

悠緋の問いかけに薬師の少年は僅かに逡巡してから答えた。

「多加羅たからへ」

「まあ、そうなの。私たちも多加羅の者なのよ。多加羅には何をしにいらっしやるの？」

須樹はたたみかけるように問いかける悠緋と少年の間に割り込むようにして笑顔を向けた。目の端で加倉が仏頂面で二人のやり取りを睨みつけている。

「悠緋様、とにかくはやく多加羅にお向かいください。お父上がお待ちです。悠緋様もはやくお会いになりたいでしょう」

「あら、私は今父上に腹を立てているのよ。本当は帰って来るのも嫌だったのよ。それをわざわざ迎えまで寄こしたからしょうがなく帰ることにしたの」

悠緋はつんとした声で言うと、少年にちらりと名残惜しげな視線を残して日よけの布をおろした。ようやく進み出した馬車を見送り、須樹は思わず大きく息をついた。

「ねえ、畑に植えてあるのは何？」

「ああ、あれは金笹きんざさだよ。今は緑だが秋には金色になる。この地方の特産で様々な工芸品に使われるんだ」

「畑で食べ物以外を作るの？」

「食べ物育てている農家もあるけど、ここらは金笹農家が多いんだ。金笹は他では滅多に育たないからね。金笹と食べ物を交換したりするんだよ。それに金笹の花はおいしいお茶になるし、実は干せば上質の芳香剤になる」

須樹は幾度目かの少女の問いかけに答える。少女は初めて乗る馬の上で、のどかに広がる田園風景を物珍しげに眺めていた。須樹の横では灰と名乗った薬師の少年がそんな少女の様子を心配そうに見ている。体重の軽い少女ならば大丈夫だろうと馬に乗せたのは須樹だったが、はじめての高い景色にも恐れられないその様子には感心するしかない。

須樹は多加羅に向かうという二人とともに、畑に挟まれた街道をゆっくりと歩いていた。口数が少ない少年とは対照的に、少女、稟りんは見るものすべてに無邪気な驚きを示した。はじめは異国からの旅人かと思っていた須樹も、話の端々から、この二人が帝国の東限にある森林地帯から来たらしいことを察していた。噂に聞くその地帯は都市と呼べるもののない辺境である。おそらくははじめて見るものばかりなのだろうことはわかったが、さすがに稟が神殿を指さし、あれは何かと尋ねた時には驚きを隠せなかった。

帝国が奉ずる一柱の神は絶対である。どれほど小さな集落であっても必ず神殿があり、司祭がいるものなのだ。月に三度の礼拝日には、司祭が神の教えを説き、祈りをあげるのが習わしになっていた。「さっきの出来事だが、いつからあの場所にいた？」

少女が飽きず広大な畑に見惚れているのを横目に、須樹は灰に訪ねた。

「ちょうど須樹さんが馬から飛び降りたあたりです。馬の嘶く声があったので……」

須樹が思わず手を振って話をさえぎると、灰がきよんとした顔

をする。

「その、須樹さんつてのと敬語はやめてくれよ。二歳しか違わないのに、えらく老けた気がする」

「でも須樹さん……須樹は老けて見えるからしょうがない」

笑みを含んだ少年の声に須樹は慚然とする。それを面白そうに見やる少年に、須樹はおとなしげだという印象を撤回した。どうやら無口で内気な少年というわけではなさそうだ。

「あの仲裁に入った人がいただろう。あの人がいつからあの場にいたか知らないかと思って」

灰はふと考える素振りを見せた。

「多分俺よりは先にあの場にいたと思う」

わからないという答えを半ば確信していた須樹は、その言葉にまじまじと少年を見つめる。

「俺があの場所に行ったときにかなりきつい香の匂いがたまっている、それがあの人の体からだったから……」

不可解そうな須樹の顔に、灰は言葉を補う。

「匂いってというのは風が吹けば簡単に散らされてしまうけど、空気の流れが澱むと、時が立つほどその場に沈んでたまるものなんだ。俺があの場で感じたのはそういう、沈んだ匂いだった」

「つまり、あの場に来たばかりで飛び出してきたというわけではないと？」

「おそらくしばらく人に紛れて見ていたんじゃないかな」

思わず考え込む須樹に、灰はどこか遠慮がちな声をかけた。

「あの人、沙羅久惣領家の二男だって言ってたけど……」

「ん？ ああ、そうだな。沙羅久つてのは多加羅と所領が隣り合っているんだが、昔から多加羅とは反りが合わないんだよ。まあ、あの聡達そつたつつてのは沙羅久惣領家でも鼻つまみ者らしいけどな」

「でもあの人に助けられたみたいだな」

「ああ。……まったく、うちの頭にももう少し冷静になってもらわないと困る」

灰はふと首を傾げた。

「あの剣を抜こうとした人が頭なのか？ 多加羅の兵士の頭にしては……少し難があるように見えただけだ」

須樹は思わず笑った。

「加倉かくらが多加羅南軍なんぐんの頭だったならえらいことだ。加倉は若衆わかじゆうの頭だよ。若衆ってのは正規の軍隊に入る前の若者達の集まりだよ。いわば正規の軍に入るまでの見習いの集まりなのである。そうは言っても若衆の主だった役職に就く者は、南軍に入った後も特別に取り立てられることが多い。

「若者の集まりだがそう馬鹿にしたもんじゃない。普段は剣術の鍛練や街の見回りをしているが、戦の時は南軍の指揮下で動くからな腕が上がり、街の治安に寄与していることを認められるようになれば、立場に応じて少しだが給金も出る。それに祭礼の剣舞の見事さは帝国の中でも知られている」

灰はふと考えるような顔をして訊ねた。

「あの街はどちらかの所領ではないのか？」

「あそこらは二惣領家の緩衝地帯かんしょうちたいだからなあ。所領の線引きがしづらいから、どちらのものでもないってことになっている。それでも争いは絶えない」

「思い切ってはつきり線引きしたほうが、面倒がないと思うけど」  
須樹は少年にやりと笑う。

「そう思うだろ？ だがそうもいかないんだ。あの街は見てわかるとおり羽振りがいい。あそこを手に入れるかどうかは惣領家にとつては大問題なんだよ。だからそうそう気軽に、はいここで線を引きましょう、というわけにはいかない。二家の力関係に影響するからな」

灰はなるほど、と呟く。

「多加羅と沙羅久はなんでそんなに仲が悪いんだ？」

「はじめから悪かったわけじゃないさ。この二惣領家ってのはもとは兄弟みたいなものだったらしい。かつては一つの小国家を、多加

羅は祭祀さいしの司しかたとして、沙羅久は政の司として支えていた。術者……  
今で言う条齋士じょうさいしの束ねである多加羅の軍と、兵士の束ねである沙羅  
久の軍は周辺諸国には脅威だったらしいからな」

「じゃあ、もしかして沙羅久の軍は北軍ほくぐんというのか？」

「そのとおり。ちなみにさっきの連中は沙羅久の若衆だ。若衆制度  
があるのも帝国では多加羅と沙羅久だけかもしれないな」

柄にもなく講釈をたれながら須樹は灰との会話を楽しみはじめて  
いた。この話相手は聡い。反応に無駄がなかった。

「帝国の支配下に入るとそれぞれ独立した惣領家として所領を持つ  
ようになり、東の国境を守る双壁となった…… と言いたいところな  
んだが、そこから次第に競い合うようになり、今では顔を見れば喧  
嘩になるような間柄だ。もつとも、今では大分多加羅に分が悪い」

「沙羅久のほうが力が強くなっているのか」

「まあ、もともと異端の神の祭祀を司っていた多加羅は立場が弱か  
ったからな。先々代の惣領あたりから目に見えて多加羅の力が弱く  
なってきたているが、今は総領の峰瀬みなせ様の手腕と人望でもってるよう  
なものだ」

灰の表情がわずかに強張ったのに須樹は気づかなかった。折しも  
風に金笹が一斉に靡き、心がさらわれそうな音色を奏でる。稟がそ  
れにはしゃいだ笑い声をあげた。

「その峰瀬様というのはどのような方だ？」

ぼつりと灰が問うた。須樹は風に紛れそうなそれに振り向いた。  
「そうだな。穏やかでありながら厳しい、才智に長けた方だと言わ  
れている。……俺なんか偉そうに言うのもおこがましいけど、本  
当に立派な方だよ。灰も秋の祭礼にはお顔を拝見できる。それに、  
悠緋様とも直接言葉を交わすことができたのだから、灰は幸運だな」

「悠緋様？」

「ああ、名前は名乗らなかったか。さっきの姫君が惣領家の御息女  
であられる悠緋様だ」

少年は驚いたようだった。

「あの人……」

「ああ、意外だろ？ 気が強い姫君だからなあ。今は条斎士の修行のために緩衝地帯にある聖漣院しょうれんいんに行っておられるが、今回は惣領から急に帰るよう言われたらしい」

灰はそれ以上問わず、無言で足を進めた。

丈高い緑のうねりが突然途切れ、前方遠くに古色蒼然とした街並が広がった。歴史ある多加羅の街である。白を基調とした石壁に黒の薨の家々が、多加羅の街の背後を守るように鎮座する山の緑に映えて美しかった。街の周りを囲む城壁は、一体いつの時代に築かれたのか、時の中で次第に朽ちながらもなお街と外界を厳然と隔てている。多加羅へと続く街道の周りにも家々が建ち、何を売っているのか小さな露店までもが見えた。

歩みを止め、街を見渡していた灰が不意に訊ねた。

「なぜ悠緋様が多加羅にお戻りになるか、須樹は聞いているか？」

須樹はその声にふと違和感を覚えて灰を振り返った。灰の瞳はなおも凍りついたように街を見つめる。そこに浮かぶ感情を須樹は掴みかね、躊躇いながらも答えた。

「なんでも悠緋様の従兄弟にあたる方が多加羅に来られるらしい」

「従兄弟……」

まるで耳障りな言葉を聞いたかのように灰の眉が顰められた。

「ああ。惣領の異母妹であられる方の息子だそうだ」

須樹は控えめに言う。先代惣領の妾腹の血筋であるその人物が来ることは、公にはされていなかったが、今や公然の秘密となっていた。惣領の決定であるそれに声高に反対をする者はあまりいなかったが、それでも口さがない連中はまだ見ぬ人物への批判に余念がない。

須樹はあからさまな誹謗中傷を快くは思わなかったが、問題の人物に対してはさほどの感慨はなかった。彼にとってそのような惣領家のことはあまりに遠い、己とは関わりのない世界のことだったのである。

「悠緋様はその従兄弟をあまり歓迎されてはいないようだ」

少年が言いながら浮かべた笑みは、鋭い陰りを含んでいた。まずまず強まる違和感に、須樹は少年を見やった。安易に人を寄せ付けない鋭さが少年の藍の瞳にこもる。まるで睨みつけるように街を見ながら何を思うのか、灰は苛立たしげにため息をもらした。

「そろそろ出てきたらどうです？」

発された声ははつきりと硬かった。須樹はそれが自分に向けられたものではないことに咄嗟に気づく。間をおかずして横手の金笹畑の中から一人の男があらわれた。須樹はぎよっとする。これ程近くに人がいたというのに、気配すら感じなかった。しかも、男は金笹の中を音すらたてずに歩いて来る。金笹は葉を大きく広げて育つため、ある程度の間隔をあけて植えられているが、その中を物音一つ立てずに歩くことは至難の業である。まるで野生の獣のような男の身ごなしである。常人ではない。

男は須樹の様子には頓着せず、灰の前で深く叩頭した。

「お気を悪くされたでしょうが、お許しを。灰様の身に何事かあつては大事、惣領からもしつかりとお守りするよう仰せつかっております」

「俺は密かに付け回されるのが何より嫌なんです」

灰は苦々しく言った。

馬の背からぶらさがるようにして降りた稟が、しゃがみこんで男の顔を覗き込む。

「あ、やっぱり弦様だわ」

「稟様もお変わりなく、何よりでございます」

律儀に答えるその姿を見ながら、一体弦の中で稟はどのように位置づけられているのか、と灰は思う。柳角りゅうかくの養い子として主に連なる者にとらえているのだろうか。少なくとも彼にとっては稟も頭を下げる対象らしい。

「なあ灰、これってどういう……」

置き去りにされた体の須樹が面くらったような声を上げる。弦は



無表情な瞳を須樹に向け、戸惑って立ちつくすその姿に、僅かではあるが顔を顰めたようだった。

「惣領家の御方のお名前を呼び捨てとは、不敬にもほどがあるぞ」

「惣領家……？」

「灰様のお母上は惣領の御妹君の紫<sup>むら</sup>弥様であらせられる」

須樹が茫然と灰へと顔を向ける。その視線に灰の顔が僅かに歪んだ。

「……本当なのか？」

「ああ……」

灰は気まずそうに頷いた。須樹は思わず稟を見やる。聞いた話では妾腹の血筋だというその人物に妹はいなかったはずだ。

「とにかく、惣領がお待ちです。この先は私がご案内いたしましよ  
う」

弦の言葉に灰は無表情に頷き、なおも驚きに目を見張っている須樹を振り返った。何事かを言いかけ、しかし視線を迷わせて口を閉ざす。その眼差しが須樹の包帯に包まれた手へと向けられた。

「明日、包帯を変えることを忘れないで」

「あ、ああ……」

「稟を馬に乗せてくれてありがとう」

それだけを言うと灰は街へと歩き出した。その後を弾む足取りで稟が追う。咄嗟に須樹はその背に声をかけようとしたが、出たのはかすれたうめき声だった。一体何を言えるというのだ。今までの無礼への詫びか、自分の立場を明かさなかつた相手への責めの言葉か、それとも 励ましか？

須樹の逡巡を跳ね返すように、少年は躊躇いもせずにつまづくに街へと向かって行った。

多加羅惣領家の屋敷は街の中心より奥まった位置にある。街を見下ろすように幾分高台にあるそれを取り囲むようにして、惣領家に仕える家臣の邸宅が連なり、さらに外に広がって人々の生活が営ま

れていた。まるで身分の序列をあらわすように、高い壁が街をいくつかに仕切っている。街を俯瞰すればまるで年輪のように見えるかもしれないそれは、戦において外側の城壁が破られた時のための防壁だった。ところどころに設けられた大きな門は、そのような緊急時でなければ閉じられることはない。

灰はいくつかの防壁の門をくぐり抜け、緩やかな登り道を辿って惣領家の屋敷へとたどり着いた。惣領家の門を守る兵士は灰と稟の質素な平民服に鋭い視線を走らせたが、弦の一瞥で何も言わずに三人を通した。

屋敷は近くで見れば、戦いの砦にもなりうる堅牢なものだったが、濡れたように光る黒い薨と白壁に精緻にほどこされた彫刻がいかにも壮麗だった。屋敷の内はどこかひんやりと薄暗く、埃ひとつなく磨き抜かれた大理石の床に足音が反響する。

時たますれ違う侍女や下男には目もくれずに、弦は物慣れた様子で複雑に分岐する廊下を歩き、一つの扉の前に灰と稟を誘った。大きな扉だった。弦はそれを開くと無言で灰を中に通す。

「こちらでしばらくお待ちください」

部屋は賓客を迎えるものなのだろうか、華麗であり、重厚だった。奥にはさらに小さな扉までもがある。

「後ほど惣領は接見の間にて灰様とお会いになられます。準備をお世話申し上げる下男が参りますので、何かございましたらその者にお言いつけください」

「このような格好では惣領にお会いするのにふさわしくありませんか？」

どこか皮肉気に言う少年に、弦はいいえ、と首を振る。

「惣領だけならばそのようなことはお気になさりません。されど、接見の間では多加羅に仕える面々も揃うとのこと。惣領は灰様をその場で皆に御紹介なさるおつもりです」

それ以上のことは言わない弦に灰は俯いた。弦の言葉が一体何を意味するのか、床を睨みつけながら灰は考える。肉親としての白々

しく仰々しい出迎えを期待していたわけではない。しかし、まさか居並ぶ家臣の前で対面することになるとは考えていなかった。

弦は口を開けて部屋を見回している稟に声をかけた。

「稟様は私とともに来てください」

「え？」

少女は戸惑ったように振り返る。その瞳が不安そうに揺れ、灰へと向けられた。

「どこへ？」

「稟様は別の場所でお待ちいただきます」

鋭く問う灰に弦は言った。灰は部屋へと視線を巡らす。どれほどの客を迎えたかもわからない華麗な部屋は、錆びついたようにざらりとした冷たい感覚を呼び起こすばかりだった。

「稟、この人と一緒に行つて。俺は大事な用事があるから、その間待っていてほしいんだ。できるね？」

稟はきゅつと唇を引き結ぶと大きく頷いた。

「大丈夫だから」

灰は笑んでみせた。やはり不安なのか、しがみついてくる稟の頭をなでながら、灰はもう一度心の中で呟く。　大丈夫だ。

## 5 (後書き)

ようやく多加羅に主人公が到着しました。

物語自体はのろのろと亀の歩みですが、コンスタントに投稿していきたいと思います。

ではでは、今後ともよろしくお願いいたします！

悠緋は顰めつらしく眉を寄せながら、苛々と足を踏みならした。右隣で兄の透軌トウキがそんな彼女を咎めるようにちらりと見やる。惣領家の嫡男である透軌は、悠緋よりも一つ年上の十六になる。その身分に相応しく深緑の衣の袖は長く、帯にも華麗な刺繍が施されている。髪をきつちりと一つにまとめたおとなしげな容貌は、傍目には動揺しているようには見えない。

(どうして父上も兄上も、涼しい顔をしていられるのかしら)

悠緋は思う。透軌の向こう、ひときわ立派な椅子に座る父親は、接見の間にさざめく声にも無関心な表情で、ゆったりとくつろいでいるようにすら見えた。何につけ表情を繕うということのできない彼女は、父親にも険しい視線を送るが、父親がそれに気づいた気配はない。いや、気づいていながらも、相手にしていないだけだろうか。

多加羅たからからの迎えにより否応もなく連れ戻された彼女は、何よりも先に父親に不満をぶつけようと意気込んでいた。しかし帰るなり侍女の群れにつかまり、問答無用で湯浴みをさせられ飾り立てられて、接見の間に連れてこられたのである。

長年仕える女官が惣領家に相応しい衣装を、と悠緋にあつらえたのは祭礼の時に着るような華やかなものである。高く結いあげた髪を飾る繊細な簪が、頭を揺らすたびに澄んだ音をたてた。女官が妾腹の血筋を引く者に侮られてはならじ、という確固たる意志で飾り立てたその姿は、悠緋のくつきりとした容貌を引きたてて美しくかつたが、不機嫌な表情がその効果をいささか減じていた。

さすがに家臣の目がある中で惣領である父親に食つてかかることは彼女にもできず、恨めしげな視線を送ることしかできない。もっとも身分に応じた立ち位置に居並ぶ家臣達も、彼女と同様、言いたいことを無理矢理に飲み込まされたような不満顔が多かった。彼ら

も突然に呼び出されたのか、接見の間のそここで押し殺した囁き声を交わしている。

惣領家の三人の玄士げんしも惣領の右手に並んで座り、三者三様に沈黙していた。最も高齢である白玄はくげんは、惣領の隣で苦々しげに接見の間の扉を見つめている。加倉の父親である絡玄らくげんは冷静な表情の下にどのような思惑を隠しているのか、ただ視線は硬く冷たい。最も年若い　そうは言ってもすでに四十は過ぎている藤玄とうげんは、人の良い丸顔に戸惑いを滲ませいていた。

（いいわ、どんな人が来たって私は毅然とした態度で臨んでみせるわ。情けない姿を晒して相手を喜ばしてなんかやるもんですか）

悠緋は背筋を伸ばして扉を睨みつけた。簪が鈴のような音をたてた。その時、まるでそれを合図にしたかのように、扉が開いた。接見の間が痛いほどの静寂に包まれる。扉を開いた衛兵が、姿勢を正して具足を打ち鳴らす音だけが鋭く響いた。

皆が視線を注ぐ中、ほっそりとした人影が臆する様子も見せずに進み出た。あらわれた人物の意外なほどの若さに驚いたのか、それともその者が持つ色彩に驚いたのか、息を呑む気配がする。

悠緋もまた驚きに目を見開いた。彼女はその人物を知っていた。銀の髪こそはじめて見るものだったが、つい先ほど緩衝地帯かんしょうちたいの街で出会った少年だった。確かに相手は多加羅たからへ向かっているのだと言っていた。だが、誰がこのようなことを予想するだろうか。

「リーシェン様によく似ておられるな」

ぼつりと白玄が言う。

「まさに異端よ」

苦々しく呟いたのは絡玄だった。その声音に悠緋は何故とは知らず反感を覚えた。

少年は官吏かんりが着るような飾り気のない衣を着ていたが、その群青と白い帯が銀の髪とあいまってひどく鮮やかに見えた。すんなりとした体格は勢いよく伸びる力を秘めたしなやかな若木を思わせる。様々な色彩の衣に身を包む人々の中にあって素気ないほどの姿であ

りながら、少年はただその存在だけで人の視線を惹きつける、磁力があるようだ。

少年は悠緋の存在に気づいているのかいないのか、彼女のほうを見ようとほしない。少年から浴びせられる悪意に満ちた視線も一顧だにせず、まっすぐに惣領のもとへと向かって来る。その瞳はただ前のみを見つめていた。

不意に悠緋は薄絹を重ねた華麗な衣を疎ましく思った。床につくほどに長い紅の袖には、白い大輪の花が咲いている。まるで己の美しさを誇示する孔雀のようだ、と悠緋はそれを忌々しく睨みつけた。事実、彼女はその立場を従兄弟に誇示するために飾り立てられたのだ。髪を飾る簪を投げ捨てたい衝動に駆られながら、しかし悠緋はそのように感じる己にも腹を立てていた。

（何故私がこんな思いをしなければならぬ!?　まるで……こちらが間違っているみたいに。そもそも街で名乗らないなんて卑怯だわ。何も知らないと思っできつと笑ってたんだわ。まるで怖いものなんか何も無いみたいに……）

では少年に少しでも気遅れや恐れの色があつたら満足なのか悠緋は強く唇をかんだ。違う、と思おうとして、しかし悠緋は気づいていた。彼女は期待していたのだ。先代の妾腹の血筋であるというその人物が、惣領家に対して卑屈に頭を下げる姿を。まるで己の存在を恥じるように恭しく膝をつくべきだと考えていたのである。

従兄弟の存在を悠緋が知ったのは数年前、女官が口を滑らせたのがきっかけだった。女官の言葉は、無論真実を語ってはいなかった。だが悠緋にそれをはかる術などなく、何時しか従兄弟の存在は、先代惣領が犯した忌むべき過ちの象徴として、彼女の中に刻まれていたのである。

父親が身よりのない甥を引き取るつもりだと手紙で知らせたとき、彼女が感じたのは何に対するのかも知れない怒りであり、不快感だった。汚れた身の女でありながら祖父に愛され、祖母を苦しめた存在への漠然とした嫌悪であり、少女らしい潔癖でまだ見ぬ相手に抱

いたのもまた同様のものだった。それが蔑みの心と表裏一体であることなど、その時の悠緋にはわかりようもなかったのである。

思ってもみなかった自身の心を突き付けられ、悠緋は戸惑いとともに、目の前の相手に言いようのない苛立ちを感じる。厳しく内省するには少女はまだあまりに幼く、その苛立ちの源には己への怒りがあるのだということに気づかない。そして気づかないまま膨れ上がる感情はやがて少女の内に頑なに凝っていった。

少年が惣領の前に立った。

「よく来た。私が多加羅惣領の峰瀬だ」

峰瀬の深い声が響く。灰は目の前の男を見つめた。男は飄然とした中にも怜悯さを感じさせる端正な面立ちを変えるでもなく、少年の視線を受け止めた。

「灰と申します」

灰がすつと頭をさげた。

「こちらが私の息子の透軌と娘の悠緋だ」

灰の視線が透軌を、そして悠緋をかすめるようにして流れた。それだけだった。悠緋は我知らず手を握りしめる。

「皆ももうわかっておろうが、灰は私の異母妹、紫弥の息子だ。紫弥が亡くなった後は私の叔父、柳角翁りゅうかくおとうの元にいた。一昨年柳角翁が亡くなった故、このほど多加羅に呼び寄せることとした」

白玄が僅かに呻くような声を出す。誰もが暗黙の了解で知っていたことではあるが、こうなっては主の発言は公のものであり、誰もその言葉を覆すことなどできない。彼は苦々しく灰と名乗る少年を見やった。彼は多加羅惣領家の闇にのまれ非業の死を遂げた乙女の面影をあまりにも色濃く受け継いでいた。白玄には少年が惣領家の闇を負う存在に思えてならない。暴いてはならない、決して触れてはならない闇だ。

「秋連あきつね、こちらへ」

峰瀬の声に、居並ぶ人々の中から一人の男が進み出た。身分に応じ扉に近い位置に立っていたその男は、怪訝に見詰める人々の間を



急ぐでもなく主の前に進み出て、灰の横で叩頭した。秋連に峰瀬が言い渡した。

「お前に灰を預ける」

灰が僅かに目を見開く。

「灰、お前はこの秋連のもとで暮らし、若衆わかしやうに入りなさい」

抑えようのない驚きの声があたりを覆った。

「……何故、そのような……」

藤玄が思わずと言った様子で呟き、慌てて手で口を押さえた。それ以上は言おうとしない藤玄を、横合いから白玄が睨む。

「惣領、しかし多加羅惣領家のお血筋の方に、そのような……家臣に対するような扱いはあまりにも……ふさわしくはございません」

白玄が不承不祥と言った体で言った。

「何故だ？ 私の曾祖父の時代には惣領家の血を引く者であっても若衆にすすんで入り、長じて後は惣領の側近くにあつて支えたという」

「それは昔の話です。しかも秋連は星見役ほしみやくではありませんか。多加羅惣領家のお血筋をお預かりするなどということは過分な役目でございます」

言い募る白玄に、峰瀬は静かに告げた。

「星見役はかつて惣領家を支える最も重要な役職だった。その役割が忘れられて久しいが、星見役の知識は多加羅の英知であり、その存在は多加羅の真髄に通ずる。秋連ならば灰を多加羅を支えるにふさわしい人物に育ててくれるだろう」

峰瀬は接見の間集う人々をゆっくりと見渡した。

「私は灰には将来の惣領家を支える存在となり、ともに力を合わせてこの難しい時を乗り越えていってもらいたいのだ」

再びざわめきが広がる。それは先ほどのそれとは趣を異にしていた。

白玄がなおも何かを言いかけ、しかし主の一瞥でその口を閉ざした。峰瀬が立ち上がる。堂々としたその姿に人々の視線が集まった。

「皆も知つていよう。多加羅は今や力弱くいつ倒れるかもわからぬ状態だ。そのような時には誰もが力を合わせねばならぬ。沙羅久しゃらくはこの多加羅の所領をも欲しているが、断じて渡すわけにはゆかぬ」  
俄かに張りつめた空気が満ちる。誰もが真剣な面持ちで惣領の言葉に聞き入っていた。

灰はふと目を細めた。峰瀬の胸元に意識が吸い寄せられるような感覚とともに、不意に淡い光がそこから漏れだしているのに気づく。まるで首飾りのように峰瀬の胸元を飾るそれは不可視の光だ。灰以外には誰も気づいた気配がなかった。美しく波打ちながら光はやがて弱まり、消えた。目を瞬かせた灰は峰瀬が自分を注視しているのに気づき、慌てて目を伏せた。そのため峰瀬が浮かべた笑みには気づかなかった。

「秋連、お前に灰を預ける。灰を多加羅を支えるに足る人物に育てよ」

「はい」  
もはや誰からも異論は出なかった。

「灰、秋連とともに行きなさい」  
思わぬ展開に半ば茫然としたまま、灰は一礼すると秋連について接見の間を後にした。

背後で静かに扉が閉まり、数多の無遠慮な視線から隔てられてはじめて、灰を小さく息をついた。秋連が苦笑するような気配がし、しかし見上げる灰に恭しく頭を下げた。

「それでは灰様、私の住居へご案内申し上げます」

「それにしても見事に煙に巻いてしまったね」

ゆつくりと歩きながら秋連が楽しげに言った。彼が住むという星見の塔への道すがらであった。

「煙に？」

灰もまた次第に緑深くなっていく道を歩きながら聞き返した。道は惣領家の屋敷の裏手へと続き、側近くまで山が迫ってきていた。

夏の草いきれが薫る。遠くから眺めた時にはわからないことではあるが、街の周りをぐるりと囲むように見えた壁も、山によって分断されているらしい。壁はその端を緑に呑みこまれるようにして途切れていた。自然の力により崩れ、朽ちたその様子から、かつてはこの壁が街と山を隔てていたのだろうことがわかる。山が壁を押し破り街へとなだれ込む様子を灰は思い浮かべた。圧倒的な命の波。

「私は峰瀬様を長年見てきたが、いつの間にか周りの人を自分の流れに引き込んでしまうことにかけては昔から天才的だった」

「そう、でしょうか」

「そうだよ。星見役をえらく仰々しいものに仕立て上げていたが、私としては少々こそばゆいくらいだ。今では有名無実の閑職なのだからね」

ゆったりとした口調は、灰が惣領家の血筋であることをいささかも気にしていないようだった。周りの目がなくなつた途端にがらりとくだけた口調になつたそれに、灰はむしろ居心地の良さを感じていた。

道の両端はいつしか鬱蒼とした緑に覆われている。空へと枝を広げる巨木が立ち並び、そこから漏れる陽光はしつとりと優しい。日中の熱の名残が仄かにたゆたう。すでに夕暮れが迫りつつあるのだ。灰は目を細めて気まぐれに揺れる木漏れ日を見つめた。途端にすんと足から抜け落ちるように、全身の力が抜けた。あまりに短い伯父との対面の中で張りつめていた緊張の糸が、切れた。

「どうした？」

立ちつくす灰に秋連が問いかける。

「……気が抜けました……」

灰がぼんやりと言って笑った。泣き笑いのような表情だった。そこには接見の間での雰囲気は微塵も感じられない。秋連は初めて見る少年の無防備な表情に、小さく苦笑する。

「君は学んだほうがいいようだな」

秋連の呟きは、木々を揺らす風と少女の声に紛れて灰には届かな

かった。

「兄様！！」

見れば坂の上、緑に霞むそこに稟りんの姿があつた。走り寄るその勢いのまま、灰に飛びつく。見知らぬ人の中で心細かつたのか、ぎゅつとしがみつくと手に力が込められている。灰は柔らかく笑んで稟の頭をなでた。

秋連は複雑な思いでその光景を見つめた。少年が接見の間で見せた周囲を圧するほどの超然とした態度と、今ここで見せる無防備なそれ、もし意図して使い分けているのだとしたら、この少年は想像以上に早熟で狡猾と言える。しかし、無意識なのであれば、それは武器にもなれば弱味にもなり得る性質だ。

（やはり私には荷が重いようですよ、惣領。私にこの少年をどのように育てさせようとお考えなのですか）

心の中で問いかける相手は、今何を思うだろうか。周囲の反対を押し切つてまで灰を多加羅に迎え入れた峰瀬は、肉親というにはあまりにも素気ない言葉しか灰にかけなかった。自らが引き取るつもりはないと事前に聞いていた秋連ですら、ひやりとするほどの冷たい対応だった。だが、正式に灰を皆に紹介したことで、少年の存在が無視できないものとして認められたのも事実だ。彼はただ身寄りがないために多加羅に来た厄介者ではなく、多加羅惣領家の一員としての位置を占めたことになる。

（表向きには、ということだがな）

秋連は皮肉に付け加える。たとえ峰瀬が灰の存在を認めたとしても、少年に向けられる好奇や悪意がなくなることはないだろう。

その一方で星見役とはいえ貴族でもなく、何らの政治的な柵もない秋連の元へ身を寄せることで、灰は複雑に絡み合う家臣達の力の構図に組み込まれることもないだろう。峰瀬はそこまで意図して少年を秋連に預けたに違いない。

「ああ、急に走り出していくから何事かと思いましたよ。お帰りだつたんですね」

秋連の物思いは穏やかな女性の声に遮られ、涼やかな風に溶けて消える。星見の塔で賄いに従事する娃娃えなだった。初老に差し掛かった面差しはその人柄をあらわして優しく、常に笑みを絶やさない瞳が温かく二人の姿を見守っていた。

「まあ、あなたが灰様ですね。さあさ、お食事の準備ができていますよ。まだ何も召し上がっていないのでしょう？」

娃娃に促されて残り少ない道を行くと、星見の塔があらわれた。木々の中に埋もれるようにしてあるそれは、実際は古びた小さな屋敷である。その名をあらわすのは屋根の中央部に屹立する、かつて天空を見るために使われたという細い展望台のみだった。

屋敷の大部分は膨大な量の書物やいつの時代のものとも知れない骨董品に塞がれ、秋連が住むのはかつて星見役に仕えていた者が住んでいたのだろう、片隅の小さな部屋だった。娃娃がもつと良い部屋があると幾度言って聞かせても、秋連はその部屋を移ろうとはしなかった。もつとも何年も賄い婦はいらないと言いつづけた秋連に対して、一日も休まずに通い続け、今では星見の塔に住みこみで働く娃娃の頑固さも相当なものである。

「私がいなければ秋連様はやせ細ってひからびてしまいますよ。書を前にすると幾日でも食べずに過ごしてしまうのですから」

そう言って笑う娃娃に、いつも秋連はどこかほろ苦い思いとともに、深い感謝の念を覚える。娃娃であれば、歪んだ偏見ではなく、その広さと優しさで二人の子供を包みこんでくれるに違いない。

「稟様はよつぽどお兄様が待ち遠しかったのですね。ぴったりくっついて離れようとなさいませんもの」

秋連に語りかけながら娃娃は目を細めた。眼尻に優しい皺がよる。「さて、これから忙しくなりますわ。育ち盛りの子が来たのですから。秋連様も少しは規則正しく生活なさいませんと示しがつきませんよ」

「そつだなあ」

思わぬ指摘に秋連は笑う。

彼らの姿を最後の木漏れ日が染め、それをさらに散らすようにして気まぐれな風が通り過ぎていく。風は不意に上昇し、空へと差しのべられた木々の枝を揺らし、何処かへ消えた。それを追って灰の目がさまよう。

いつの間にか宵闇が忍び寄り、傾斜するように天が深みを増していく。昼の熱を宿す紅が空の裾野で鮮やかに移ろい、中空には潤む星がぼつんと置き去りにされたように一つあった。長い一日がようやく終わろうとしていた。

## 6 (後書き)

今回はまだ修正が少なかったように思います。以前も書きました  
が、他のところでも投稿している物語なので、随時、そちらの方も  
修正しています。細かい修正とはいえ、大分ニュアンスが変わる箇  
所もあり、一つ一つの言葉が持つイメージというか、放つ色彩とい  
うか、そういう力を感じます。

ではでは、今後ともよろしく願います！

灰が若衆の集う鍛錬所に姿をあらわしたのは、多加羅に迎え入れられてから三日後のことだった。その頃にはすでに灰の存在は街に知れ渡り、若衆の間でももっぱらその噂でもちきりだった。

若衆に集う若者の多くは南軍への入隊を目指す平民の子弟だが、貴族の家柄の者も少なからずいる。家督を継ぐことを望めぬ者が、武術を修めるために若衆に入るのはよくあることだった。結果として若衆は、様々な身分と様々な立場の若者が集まる場となっていた。そのような集団に惣領家の者が入るのは彼らにとって前代未聞と言つてよかった。惣領が言つたようにかつては惣領家の者も若衆の一員になっていた時代もあったが、それは戦が日常であった頃のことである。

まだ朝の匂いが残る九つの刻に鍛錬所を訪れた須樹は、興奮した若衆の一人に灰の訪れを聞いた。急ぎ鍛錬所の中へと向かう須樹の後を、報告をしたまだ幼い顔立ちの少年が小走りについて行く。彼も年の頃は灰とさほど変わらないはずだ。

「とにかく驚きましたよ。お供の一人もなく単身でやって来て若衆に入りたいつてんだから、はじめは誰も灰様だとは思わなかったんです」

「でも灰は……あ、いや灰様は見たらすぐわかるだろ」

「ああ、変わった見た目なんでしょ？ 何でも銀の髪だとか。でも髪は布に包んでるしわからなかったんです」

鍛錬所は四角い箱の半分をきれいにくり抜いたような形をしている。くり抜かれた部分、単に広場と呼ばれるそこが剣術の訓練や模擬試合、そして祭礼の剣舞の稽古の場として使われる。入口と面した部分が建物となっており、あとの三方は壁となっていた。建物の内部には道場と主だった役職に就く者の部屋、そして更衣室や休憩室が連なっている。



須樹が広場を通り抜け若衆頭の部屋がある正面の建物へと入ろうとした時、まさに灰その人が加倉と細い廊下の向こうから歩いて来るのが見えた。その後ろを興奮した顔つきの若衆が群がるようにしてついて来る。誰もが好奇心をあらわに新たに加わるといふ少年を見つめていた。灰の目が須樹を捉える。灰は飾り気のない衣を纏い、はじめて出会った時と同じように青い布を頭に巻いていた。

加倉が広場に踏み出し皆に聞こえるように言った。

「惣領家の灰様が若衆にお入りになりたいとのことだ」

無言で灰が頭を下げた。広場にぎこちない沈黙が落ちる。誰もがどのような態度をとればよいのかわからず、戸惑いの表情を浮かべていた。多加羅惣領家というだけで気遅れするのに加え、少年は何かと噂が付きまとう人物である。

須樹は加倉の側近くに固まる一団が、灰を見て薄ら笑いを浮かべているのに気づいた。いずれも名のある貴族の子弟である彼らは、玄土絡玄を父とする加倉の取り巻きだった。それぞれに仕立てのよい色とりどりの稽古着を身に着け、何を思つか灰に好意的とは言えない視線を送っている。

「惣領家の御方とはいえ、若衆に入るには我々と同じようにしていただくかねばなりませんね」

中の一人が突然言った。加倉が笑みを浮かべる。須樹はそれをどこかひやりとしながら見た。嫌な笑い方だった。

「それもそうだな。若衆では身分による特別扱いは認められぬ。灰様には他の者と同じように参志の儀を受けていただく」

加倉の白々しい言葉を待ち構えていたように、取り巻きの一人が二本の木剣を持って歩み出た。

「では、俺がお相手をしましょう」

「いいだろう」

加倉がにんまりとして答えた。誰の目にも、加倉がはじめからこうなるよう意図していたのは明らかだった。

「待ってください!」

思わず須樹は声をあげた。相手を申し出たのは若衆の中でも有数の剣の使い手、冶都である。加倉が疎ましそうな顔を向けるのに構わず、須樹は灰の前に進み出る。

「灰様は剣術の稽古をお受けになったことはありますか？ 剣を持つたことは？」

「いえ、一度もありません」

灰が淡々と答えた。取り巻きの青年達が失笑する。もはやそれを隠そうともしていない。

「頭、剣を持ったことのない者に、冶都が相手ではあまりにも厳しすぎます。別の者にしてください」

「須樹、頭が決めたことに逆らうのか」

横合いからの声を無視して須樹はなおも加倉に詰め寄った。

「惣領家の者でも他の皆と同じようにするといふのなら、灰様にだけ明らかに力差のある者をあてがうのはおかしいでしょう」

「黙れ！ 冶都が相手をするとな私が決めたのだ！ お前が口を出すことではない！」

加倉が叫んだ。冶都が気まずそうに須樹から視線を逸らす。加倉に無言で示され、冶都は広場の中央に進み出ると、木剣の一本を地面に置き、もう一本を構えた。須樹は苦々しくその姿を見詰めた。

「俺は何をすればいいんですか？」

灰の声は不思議なほど静かだった。

「若衆に入るにふさわしい者かどうか、木剣で打ち合うのです。適性がないと見做された者はその時点で入ることはできませんが、そのような者は滅多におりません。力試しでもお思いください」

加倉の言葉には嘲弄する響きがあった。

「わかりました」

灰は答える。別段怯えるでもなく広場の中央へと進み出ると、地面に置かれた木剣を拾い上げた。その様子に、加倉が意外そうな中にも腹立たしげな表情を浮かべた。須樹はそれを見て、加倉は少年が脅えをあらわすものと信じて疑わなかったのだらうと考える。

「灰様、無理をなさらないでください」

須樹は思わず声をかける。灰は須樹のほうを見やり、そしてちらりと笑った。

「手の傷、大分良くなったみたいですね。良かった」

虚をつかれて黙る須樹をそのままに、灰は観察するように木剣を見やってから無造作に右手に持った。

突然の成り行きに誰もが戸惑いを隠せず、しかし抑えきれない興奮の波があたりを覆う。高まる緊張の影に見え隠れするのは、困惑と、どうなるのかという興味であり、惣領家とはいえ明らかに異端の立場である灰への少なからぬ悪意である。須樹はもどかしさと苛立たしさに強く拳を握った。青年達の中でも並はずれて大柄な冶都の前で、灰はあまりに力なく小さく見えた。

「はじめ！」

加倉の音が響いた。

誰もが固唾を飲んで見守る中で、冶都がじわりと灰との間合いをつめる。対照的に灰は木剣を構えようとせすに立ちつくしている。剣を持ったことがないとはいえ、それはあまりにも無防備な姿だった。

「怖さのあまり動けないんじゃないかな……」

須樹の後ろで少年が呟く。誰もが少年と同じように思った。

冶都も同様に考えたのだろう、躊躇いの表情が一瞬浮かぶ。しかし大きく息をつくとき、気合とともに一気に灰に迫り、木剣を上段から振り下ろした。風を切る鋭い音に、見守っていた少年達の多くが首を竦める。須樹は痛いほどに目を見開いて、その重い一撃を見つめていた。そして、息を呑んだ。

灰が打ちすえられて倒れると誰もが思ったその瞬間、灰が動いた。体を僅かに翻して冶都の木剣を避ける。それがあまりに小さな動作だったため、まるで冶都がわざと外して木剣を振りおろしたようにさえ見えた。

冶都は驚愕の表情を浮かべたが、さすがの手練である。振り下ろ

した木剣をそのまま灰めがけて斜めに薙ぎ払った。しかしそれもまた鋭い音をたてて空を切り裂いただけだった。灰は僅かに上体を屈めることでその軌道を避け、さらに右足を軸足にして大きく回転し治都の背後に立つ。流れるような動きだった。

どよめきが広場を覆う。

治都は驚愕の表情で灰を振り返った。俄かにその視線が鋭くなる。灰に向き直ると、相手に余裕を与えぬ勢いで打ちかかった。灰は後ろへ飛んでそれを避ける。治都はその後を追う。少年の首元に突き出された木剣は、しかしまたも虚しく空を切っただけだ。幾度も繰り出される軌跡を、灰はまるで花びらが風に舞うように避ける。

広場はいつの間にか割れんばかりの歓声に包まれていた。それは顔を赤くして木剣を振る治都ではなく、灰へと送られていた。絶妙の間合いで木剣を避ける灰の動きは小気味良く、まるで剣舞のように軽やかだ。

「剣術をしたことがないなんて嘘だったんだ」

「いや、剣術をしたことがないのは本当だろう」

須樹は興奮した様子の少年の言葉に半ば呆然として答えながら、なおも木剣を構えようとしないう灰を見つめた。灰は冷静に治都の動きを見切っているが、本人が言ったように剣術の心得があるようには見えなかった。鋭い攻撃をかわすそれは、並外れた観察眼と反射神経によるものなのだろうと須樹は気付く。

次第に息を荒げる治都とは対照的に、灰はほとんど呼吸を乱していない。それもそのはずだった。灰の動きは必要最低限のものでしかない。治都の形相はいまや必死なものへと変わっていた。焦燥と苛立ちのためか、表情が険しい。

だが、徐々にではあるが灰は壁際に追い詰められつつあった。灰が治都の執拗な攻撃を避けてさらに後方に下がると、周囲の若衆が慌てて場所をあける。大きくあいたそこには思いのほか近い位置に堅牢な壁が聳えていた。

背後の壁をちらりと見た灰は幾分腰を沈めて治都へと向かい合う。

すでに迫りつつある治都を睨みつけると、ぶつかるとともに自身も前へと走り出した。突然向かってきた相手にぎよつとした治都が咄嗟に木剣を水平に振るうのと、灰が大きく地面を蹴るのは同時だった。木剣の一線を軽々と飛び越えた灰は、着地すると同時に身を翻した。勢いあまつたたらを踏む治都の背後へ迫ると、右手に持っていた木剣をはじめ構えた。首筋にぴたりとすえられたそれに、大柄な青年の体の動きが止まる。

一瞬の沈黙の後、喝采がわき起こった。

加倉が忌々しげに顔を顰める。取り巻きの青年達の顔からも、馬鹿にしたような笑いは消えていた。あまりにも意外な、そして明らかな勝負の結果を加倉も認めないわけにはいかなかった。

「そこまで！」

広場に響いた加倉の声に、治都は気づかなかった。恥辱と怒りに体を震わせ、俄かに首筋にあてられた木剣を掴むと振り回すようにしてひつぱる。体格差のある二人である。力任せのそれに堪らずに灰の体が引きずられた。投げ出された体が、強かに壁にぶつかる。半ばもぎとるようにして奪った木剣を投げ捨てると、治都は沸き起こる驚きと抗議の声にも構わず無防備な少年に向かって叫び声をあげながら迫った。

灰は痛みに呻きながらも治都から逃れようと動こうとして、ぎくと立ち竦んだ。一切の音が突然に消えたような感覚とともに、周りの空気が金属的な軋みをあげる。無論他の者は気づかないだろう。それは、しかし迫りつつある青年へと明確な敵意を向け、今や獣の形を成して飛びかかろうとしていた。

(叉駆ヤク、だめだ！)

咄嗟に灰は意識の触手を自身の周囲に巡らす。それに絡めとられ、猛る存在がもたえ抗うのを感じるが、さらに力をこめて抑え込んだ。微かに恨めしげな気配を残してそれが消える。すべて一瞬の出来事だった。しかしその一瞬は治都の攻撃を避けるには致命的な遅れとなっていた。眼前に迫る木剣に灰は衝撃と痛みを覚悟して思わず顔

を背けた。

しかし痛みは訪れず、かわりに木と木がぶつかり合う乾いた音が響いた。恐る恐る顔をあげると頭一つ高い人影が灰を守るように立ちただかっていた。須樹だった。

「やめる！ お前の負けだ！」

冶都の重い一撃を木剣で受け止めた須樹が叫ぶ。冶都はしばらく凝固したように大きく肩で息をするばかりだったが、不意に脱力するように腕をさげた。木剣の先が力なく地面に触れる。今更ながらに自分が何をしたのか悟ったのか、顔が困惑と羞恥に染まっていた。「皆見ただろう！ これで灰様は晴れて我々の一員だ！」

須樹の言葉に、広場を埋める若衆が歓声を上げた。それを聞きながら須樹は失望と怒りとを同時に浮かべる加倉を真正面から睨みつけた。須樹の視線から逃げるように、加倉が何も言わずに建物の中へと姿を消す。慌てたように取り巻きの青年達がその後を追った。彼らの中で冶都を振り返る者は誰もいなかった。

「すごい！ どこであんな技を身につけたんですか？」

興奮した少年達が灰の周りに集まってくる。そこには身分が違うという躊躇いが消えていた。口々に話しかける彼らに、灰の方が気圧されたような表情を浮かべた。

「別に技なんてものじゃ……単に避けていただけで……」

面くらったように答える灰に、思わず須樹は苦笑した。

「おいおい、皆稽古を始めないとだめだろ。灰様とは後でもゆつくり話せる」

須樹はなおも灰に話しかけようとする少年達を追いやった。少年達は名残惜しそうにしながらも、須樹の言葉に従って三々五々散って行く。灰はどこかほっとした表情でそれを見送って、須樹に向き直った。

「ありがとうございます」

「これは傷の手当のお返しですよ。お礼なんて言わないでください」  
須樹は灰の言葉にひらひらと手を振ってみせた。右手は念のため

に包帯を巻いているが、傷はほとんど塞がっている。灰の視線が須樹からその背後へと逸れる。それにつられて須樹が振り返ると、気まずそうな表情の治都がこちらを見つめていた。

「すみません……俺、なんか頭に血がのぼっちまって」

一人取り残されたように立ちつくしていた治都が絞り出すように言った。肩を落としたその姿のどこにも、覇気は残っていない。

「いえ、俺も治都さんを挑発しましたから」

思わぬ答えに須樹と治都は思わず少年の顔をまじまじと見つめた。それに灰は困ったように笑う。

「俺は剣の振り方も知りません。治都さんに敵うわけがないので、とにかく逃げようと思ったんです。それに……相手を怒らせたほうが動きを読みやすいだろうと思ったので、わざとぎりぎりのところで避けるようにしたんです」

それがどれほど並はずれたことか認識しているのかいないのか、少年の態度に気負ったところはかけらもない。

「本当に剣術をしたことがないんですか？ あの動きは咄嗟にできるようには思えません」

灰が小さく首を傾げる。

「剣術はありませんけど、さっきみたいな動きなら何回かしたことはあります」

「やはり！ どういったものなのです、あれは」

治都の問いに、いたずらめいた光が灰の瞳に宿った。

「前住んでいたところでは森深く入るとよく獣に出会っんです。大概は大丈夫なんですけど、なかには危険なものもあります。例えば、子連れの母猪に出くわすと襲われることもある」

「……つまり？」

「つまり、猪を避けるのと同じ要領なんだろうな、と思ったんです」

治都の口がぽっかりと開いた。須樹が爆笑する。突然のそれに、稽古をはじめていた少年達がぎょつとして振り向いた。涙すら浮かべて笑いながら須樹は治都の背中をばんばんと叩く。

「確かに……確かに！ こいつは猪みたいなもんです！」  
むっとしながらも冶都の口元に笑みが浮かび、しまいには須樹とともに笑い出す。

陽気な笑い声が弾けるその上で、中天にじりじりと向かう太陽が次第にその熱と輝きを増していた。暑い日になりそうだった。



## 7 (後書き)

今日はさくさく投稿します。どこまでいけるかな。

とりあえず、若衆です。「若衆」って単純なネーミングですが、これ以外の名前をいまだ思いつきません。この先も若衆を中心に物語は展開します。残念なのは、若衆中心だと女性がどうしても少なくなること。もっと色々な女性を書きたいものです。

ではでは、今後ともよろしくお願いいたします！

「それにしても驚いたな」

須樹はぼつりと呟いた。朝の稽古が終わり、広場の隅にある木陰で涼んでいるときのことである。横に座る治都が彼の言葉にぼんやりと頷く。二人の視線の先では灰が指南役から剣の振り方の指導を受けていた。

「お前よりも俺のほうが驚いたよ。いくら狙いすましてもひらひら逃げていくんだからな。化かされてるのかと思っただぜ」

須樹はにやりと笑った。

「そろそろ加倉の取り巻きどものところに戻らないのか？」

これには治都が嫌そうに顔を顰めた。

「今更戻ってどうなるんだよ。俺のことなんかもう相手にしないさ」  
須樹は破顔した。

「それで安心したよ。やっとお前らしくなったな」

「どういうことだ」

「お前には、玄土様のご子息に取り入ろうと媚を売るのは似合わないってことだ」

「好きなように言え」

治都は空を見上げ、大きく溜息をついた。

「これでまた親父の期待を裏切っちゃまったなあ。加倉様のお気に入りになれば見直してやるってのが親父の口癖なんだよ」

「そうなのか」

「まあ、どっちにしろ……。どんだけ俺が媚び諂ったところで、たかが商人の息子が貴族様の仲間に入れてもらえるわけがないんだよ。今回のことはむしろあいつらから抜けるいい機会だったのかもな」

さばさばと言いながら治都は須樹ににやりと笑んでみせた。須樹は昔から知る彼らしいその笑顔に安堵する。裕福な商人の三男である治都が、ただ己の欲だけで加倉の取り巻きの一員になっていたわ

けではないことを、須樹は薄々察してはいたのだ。元来明るくまっすぐな気性の治都のことである。ただ父親の期待に応えようとしていただけなのだろう。

「それにしても頭は何を考えていたんだ。さっきのあれでは灰様を若衆わかしゅうに入れないようにしていたとしか思えんぞ」

「実際そうだからな」

ぼつりと治都が答えた。

「どういうことだ？」

「頭が俺に言ったんだよ。いくら惣領のお言葉でも灰様のような異端を若衆に入れるわけにはいかないつてな。若衆を汚すわけにはいかないから、何とか入れるのを阻止したいと……」

治都は言いながら須樹の形相に気づいて慌てて弁解した。

「俺じゃないぞ！ 頭が言ったんだ」

「つまりお前と対戦させることで灰様がいかに若衆にふさわしくないかを示して、入れないつもりだったんだな」

「ああ」

「なんでお前はそんなことを引き受けたんだよ」

治都が気まずそうに目を伏せてから、しぶしぶ言った。

「俺が言つとおりにしたら、親父が有利になるように市の権利を變更するよう絡玄らくげん様に伝えてもいって言われたんだよ」

須樹は顔を顰めた。加倉の遣り口に強い怒りが沸き起こる。たとえ狙い通りに灰が若衆に入るのを阻止したとしても、加倉が治都との約束を守るとは思えなかった。

そもそも灰が若衆に入るということは惣領の決定なのである。それを覆すようなことをすれば、ただでは済まないはずだ。もしかすると、と須樹は考える。貴族の子弟ばかりが固める取り巻きの中でただ一人平民の出である治都に灰の相手をさせたのは、後に受けるだろう非難を治都一人に負わせるためだったのではないだろうか。治都が加倉の命令でやったことだと言ったところで、家臣達の筆頭である玄土を父親に持つ加倉が相手では結果は目に見えている。治

都は捨て駒だったのだ、と須樹は確信する。

「なんで頭はそこまでやるんだ？」

独り言のつもりの呟きに治都が答えた。

「頭は不安なんだよ」

「不安？」

「ああ。半分はお前のせいだな」

須樹は思わず目を見開いた。

「気付いてなかったのか？ 若衆の大半は加倉様よりお前のほうが頭に相応しいと思ってるんだよ」

須樹は言葉に詰まる。彼とて周囲が自身に向ける期待に気づいていないわけではなかった。

「それに加えて惣領家の者まで入ってみる。今までは家柄だけで皆を黙らせていたが、それよりももっと身分が上の者が来るんだから、心中穏やかじゃないだろうな」

「灰様はわかるが、俺は単なる工芸家の息子だぞ」

治都が苦笑した。

「それがどうした。若衆はもともと平民のほうが多いんだ。それを一部の貴族の道楽者ばかりが幅をきかせているんだからな」

貴族の子弟が平民に見せるあからさまな蔑みと威丈高な態度は、若衆内部の軋轢の一因となっていた。若者ばかりの集まりとはいえず、そこにあるのは身分と因習に縛られた社会の縮図なのだ。貴族と平民の衝突は何も今にはじまったことではない。

「もともと若衆頭は力ある者が就くべきものだから、父親の威光だけでその座についている加倉様は自分を脅かすものを異常なほど恐れてるんだよ」

広場には熱気がこもり、少年達の足元をゆらりと揺らしている。それを見るときもなしに見ながら治都は言った。

「お前が頭に名乗りをあげれば間違いない加倉様はその座を追われるだろうな。頭に真実相応しい者があらわれたら、取り巻き以外は誰も加倉様には従わないさ」

治都は何気ない様子で言葉を続けた。

「どうだ？この際いつそのこと名乗りをあげたら」

ふざけているのかと須樹が振り返ると、思いのほか真剣な治都の顔があつた。

「俺もお前が名乗りをあげるなら賛成するぞ」

「俺は人の上に立つのにふさわしくない」

「身分のことを言っているのなら」

「身分のことじゃないさ。ただ……」

治都の言葉を遮った須樹は、迷うように視線を彷徨わせる。それに治都はため息をついた。

「まだ迷ってるのか？ 家を継ぐかどうか。お前みたいな不器用な奴に工芸家がつとまるとは思えんがなあ」

須樹はあけすけな言葉にさすがに眉を顰めた。

「言ってくれるな。俺だつて自分が工芸家に向いているとは思わないさ。でも親父が継いでほしいみたいなんだよ」

須樹は一筋額から流れる汗を拳で拭った。地面に跳ね返された光のせいか大気が白い。高い壁の向こうには端然とした惣領家の屋敷が見える。黒い薨が、妙に冷たく見えた。実際には陽光に焼かれ、熱いに違いない。

「親父は多加羅の出じゃないから俺が若衆に入るのもいい顔はしなかった。お袋の手前黙ってはいるが内心では若衆をやめて工芸家の修行をしてほしいと思っっているはずだ。俺も正直迷う」

「羨ましい話だ。俺なんか兄貴が家を継ぐから居場所がない。若衆に入るしか道がなかったからな。あとは南軍に入っていけるところまでいくさ。もっとも、今の若衆はどうも居心地が悪い。加倉様の取り巻き連中といてよくわかったよ。あいつらが上にいたんじゃ若衆は良くはならない。お前みたいな奴が頭になって変えてほしいんだがな」

なおも言うつ治都に須樹は呆れたように笑ってみせた。

「こんな中途半端な覚悟の頭など誰もついてこないさ」

「当分は加倉様の天下か。このままだと皆ばらばらになってしまうぞ」

加倉が頭を継いでから、確かに若衆内部の結束は目に見えて弱まっていた。しかし治都が言うように、須樹が頭に名乗りをあげれば事態は好転するのだろうか。須樹には到底そうは思えなかった。天秤の傾きが変わるように、力関係が一方から一方に移るだけではないのか。

ふと、須樹は広場に視線を向けた。照りつける太陽と体を動かしたことで暑くなったのか、灰が青い布をほどいていた。硬質な輝きの銀の髪が柔らかく光を弾く。

「いや、もしかするとそう悪いことばかりではないかもしれんぞ」  
その声音に治都は須樹の視線の先を追いかける。

「貴族であるうと平民であるうと、身分に関わらず誰からも慕われる人が出てくるかもしれないからな」

「それがあの若様か？」

須樹は僅かな沈黙の後に答えた。

「さあな」

無意識に右手の包帯に触れて笑む。

「だが、そうであればいいと思う」

「なんでそこまで灰様に肩入れするんだ。まだよくわからん相手だぞ。しかも……」

「しかも、なんだ」

「こういうことを言うのは俺だって嫌だが、灰様には噂が多すぎる。灰様の祖母は來螺らいすいの者だというじゃないか」

「來螺の者だから卑しいというなら、俺達平民を見下す貴族どもと結局は同じだ」

治都が黙る。須樹もまた樹の幹に背を預け、獣が身を起こすように陽炎がむくりと立ちあがり、厳然と聳え立つ石壁を溶かすのを眺めた。

須樹が住むのは、多加羅の街の外周に位置する区域である。惣領家の屋敷や若衆の鍛錬所がある界限とは違い、ひしめき合うようにして家々が建ち並ぶそこは、人々の生活の雑多な匂いに満ちていた。街の構成はそのまま人の身分と豊かさをあらわす。外延部は街の中でも貧しい人々が暮らす地域だった。

須樹が帰途についたのは夕暮れの紅が家々の白壁を染める頃合いだった。せわしなく道を行く街衆も家路についているのか、どこか穏やかな表情を浮かべていた。子供達が歓声をあげながら駆け抜けると、その後をささやかな風が追いかける。家々からもれる音と匂いは分かち難く混ざり合い、響き合うように不思議と均一で穏やかな活気を醸し出していた。人々の首みは小さな家々から路地にもあふれ、まるで金笹の葉のように重なり合っているのだ。

小さな看板を掲げた家が近づくにつれ須樹は無意識にため息をついた。彼が住むその家もまた古びて小さかった。幾人かの顔なじみと笑顔で挨拶を交わしながらも、足取りは気分を引きずられるように重くなる。須樹は家の横の細い路地から裏に回り込み、父親が工房として使用している薄暗い部屋から中へと入った。途端に乾燥した金笹きんささの匂いに包まれた。戸口から差し込む夕暮れの光の中で、金笹の繊維と細かな埃がゆらゆらと舞っていた。

家の正面はささやかながらも父親の作品を並べる店舗となっている。正面から入ることになんの問題もないのだが、須樹はそこにいるだろう父親と顔を合わせるのが億劫だった。しかし工房を足早に通り過ぎようとした須樹は、暗がりから掛けられた声にぎくりと足を止めた。

「遅かったな」

父親だった。

「ああ、今日は新人が入ったから色々だね……」

曖昧に濁した言葉を追及する気配はなく、暗がりから歩み出した父親は作業用の椅子に腰をおろすと大儀そうにのびをした。そば近

く的古びた机の上には作りかけの籠が並べられている。

「金笹の質がいまいちで、どうも良い作品ができん」

父親は言々と不満そうにその一つを取り上げた。

金笹はその美しい色合いと芳しさから様々なものに使われるが、容易に扱えるものではない。乾燥させた後にほぐされると、繊維状のそれはまるで絹糸のように繊細である。細かな繊維を繕り合わせるのは特に難しく、腕の立つ職人が仕上げれば強靱で美しい光沢を持つそれも、未熟な者が扱えばたちどころに艶を失い脆くなる。籠や家具といった実用品から、水を弾く特性を活かした外套、そして複雑な造形を持つ芸術品まで、工芸家の手によって金笹は様々なものに姿を変える。

須樹の父親の作品は素朴な日用品が多い。今手に持つそれも、細部にさりげない装飾を施しながらも全体にがちりとしたものだった。貴族が高値をつけるような華麗なものもあるが、父親がただ飾りのためだけに作るのをひどく嫌っているのを須樹は知っていた。「今年の金笹は良さそうだよ。これだけ乾いていると秋には綺麗な色に染まる」

「ああ、去年は夏に雨が多かったからな」

さりげない会話を交わしながらも、須樹は父親が自分の帰りを待っていたらしいことに気づく。素通りすることもできず、しばし二人の間に不器用な沈黙が落ちた。

「須樹、わかっているとは思いますが私はお前に後を継いでもらいたくない風貌に、いつになく厳しい表情を浮かべていた。」

「それはわかっているけど、今は若衆のほうが何かと忙しいんだ」

「お前はずっと若衆にいるつもりか？」

その追及に思わず須樹は答えに詰まる。それは彼とて迷っていることなのだ。

「多加羅といい沙羅久（さらいちよ）といい若衆のような集団は決して若者にとつてよい場所とは思えん。母さんは多加羅の出だからそうは思わない



だろうが、私は外の者だからな。かえってよくわかるものだ」

「父さんがそう考えているのはわかってる」

思わず苛立ちを感じ、須樹の声が尖る。父親はそんな息子の表情を見つめ、静かに言った。

「お前が惣領家のために若衆として役立ちたいなら、私は無理に継げとは言わない。本当にそうしたいなら、そうすればいい。だが、迷っているのだろう？ そろそろはつきり決めなさい。もう十六になるのだからな。工芸家として修業するにも遅過ぎるくらいだ」

「……わかった」

父親の言葉はもつともなのだ。須樹は少しでも疎ましさを感じた自分を恥じる。

「近いうちにちゃんと決めるよ」

父親は微笑んだ。それにどこか後ろめたさを感じながら、須樹は奥へと向かった。

明るく大胆な性格の母親と違い、おとなしく優しいばかりの父親である。どれほど父親が一人息子に期待をかけているか、須樹は理解していた。だが、父親が望む道を進むにはあまりにも迷いが大きかった。治都に言ったのは本心だった。工芸家という職業に自分が向いていないのは、父親とて知っているだろう。飽きやすい性質ではない。ただ創作のためにすべてを注ぎ、孤独にその道を極めることに魅力を感じないのだ。だからといって若衆にこの先も居続ける決心がつかなかった。特権的な少数による横暴に怒りを感じながらも、それを覆すことなどできまいという諦めを持ち、いつしか唯唯諾諾と状況に染まる己に嫌気がさしていた。

(こんな根性無しに頭がつとまるわけがない……)

須樹は憂鬱に思う。若衆でさえこうなのである。この先南軍に入つたとしても、結局は晴らすことのできない不満と鬱屈を抱え、やがては諦めのうちにそれらも忘れてしまふのだろうか。

「やっと帰ったね」

須樹の物思いは澁刺とした声に破られた。見れば腕一杯に色とり

どりの布を抱えた母親が立っていた。布を須樹に押し付けた母親は、忙しげに小さな厨房に入る。

「それをたたんどいとくれ。私は夕飯の準備があるからね」

作品を引きたてるために店先に飾るそれらの布には、かすかに太陽の匂いと温もりがあった。須樹は食卓に布を広げながら、鼻歌交じりに動き回る母親の背に声をかけた。

「父さんがそろそろ決めるってさ」

何を、とは問わずに母親は明るく笑った。

「おや、とうとう言ったかい。あの人は何でも難しく考え過ぎて、時間ばかり無駄にしちまうからね」

「俺もそろそろ決めるよ」

自分に言い聞かせるように須樹は呟く。母親は聞いているのかわからないのか、返事はない。彼女は須樹がどちらを選んでも、きつと笑って見守るだろう。

緩衝地帯かんしょうちたいの街から多加羅に來た父親は、もとは須樹の祖父にあたる工芸家の弟子だった。娘の不器用さと職人にはあまりに不向きな豪快な性格に、祖父は早々に娘を後継ぎにすることを諦めていたのだろう。有望な弟子が娘と結ばれ、後を継ぐのにさほどの時間はかからなかった。

須樹に若衆への入隊をすすめたのは生粋の多加羅育ちである母親である。彼女にとっては多加羅の若者が若衆に入るのはごく自然なことだったのだ。適した道に進むためには何事も経験しなければわからないから、という彼女の言葉に父親も反対はしなかった。しかし緩衝地帯で生まれ育った父親にとって、若衆というのは多加羅と沙羅久の争いの中心と言ってもいい存在なのだ。須樹もそれを否定する言葉をもたないが、かと言ってこの多加羅という街にあって裕福でない者の生き方は限られている。

子供は誰も十二までは小学院に通い教育を受けることができる。これは現在の惣領、峰瀬みなせの方針であり、それ以前は教育すらまともを受けることができない者も多くいたのだ。しかし小学院を出てか

らどのような道を選ぶか、あるいは選べるかは、やはりその身分と豊かさに大きく左右される。須樹にはもとより選択肢はほとんどなかった。より高度な教育を受けられるほどに裕福ではなく、特定の貴族に仕えることができる身分でもない。そして多加羅を出て新しい人生を模索するほどにすべてを切り捨てることもできなかつた。

そういえば、と脈絡なく須樹は思う。父親が生まれ育つた街での灰という少年と出会つたのだ。惣領家の人間であると知らなかつた時にはただ面白い少年だと思つただけだが、再び顔を合わせた相手は人を惹きつける不思議な雰囲気を持つていた。そして惣領家の人間とわかつてなお、須樹は少年のことを気に入っている自分に気付く。

治都に言つた言葉を再び思い返す。灰ならば身分の隔てなく誰からも慕われる頭になるのではないか。戯れに言つた言葉である。須樹とて本気で言つたわけではない。しかし、と須樹は丁寧に布をたたみながら考える。もしもそれが実現したら。

鮮やかな布をよりわけながら須樹は思わず笑む。もしも実現したら？ もちろんこれほどに面白いことはないだろう。

金笹の香りが、迫る宵闇の底にたゆたう。空気の流れが濁ると香りは沈んで溜まるのだと、つい先日聞いた言葉を思い出す。言つた少年はまるで一陣の風のようなようだ。見るたびに姿を変える、溜まることを知らない存在だ。妙な確信とともに須樹はそう思う。

折しも戸口から気まぐれな風が吹き込み、手元の布を揺らした。心地よい香りと、それすらも吹き散らす気ままな風に、須樹はしばし身をまかせ大きく伸びをする。小さな窓から見やれば、明かりが灯りだした家々が淡い夜の気配に柔らかく包まれていた。

## 8 (後書き)

まだまださくつといきます。今回は須樹がメインですね。彼は書いていて安定感というか、安心感のあるキャラです。対照的に、灰はものすごく不安定なキャラで、はじめはなかなか灰の視点を通して書くことができませんでした。それは今もかわりませんが、少しはましになったかな、とは思います。

次で第一章は終わり、第二章に入ります。ではでは、今後ともよろしくお願いいたします！

その夏は乾いた日が続いた。たった一度の嵐が足早に上空を通り抜けた他は、連日眩しいほどの晴天である。山の木々は次第に色を深め、濃密な命の気配が大気を染めた。

星見の塔は惣領家の背後の山に半ば埋もれるようにしてある。星を見るために、街の人々が灯すささやかな明かりも届かない場所に建てられたのである。そのため、夜ともなれば屋敷はすっぽりと闇にくるまれる。かつては静寂の中、聞こえるのは木々のざわめきと虫の音ばかりだった小さな屋敷は、新しい住人を迎えて俄かにその表情を変えていた。

「兄様、見て！」

食堂に入ってくるなり稟は紙を灰に差し出した。灰が覗き込むと幼いながらも大らかな文字で何やら言葉が書き連ねてある。

「隠れ歌か」

灰の言葉に稟は頷く。隠れ歌は複数の意味を持つ言葉や同じ響きの言葉を巧みに組み合わせ、様々な意味を込めた文である。もとは暗号文としても使われたといういわくのある代物だが、子どもの学習の教材としてはうってつけのものでもあった。

「今日習ったの」

文字や書、計算術を習う小学院へ通い出した稟は、毎日その報告に余念がない。

「まあまあ、稟様は賢くていらっしやるのですねえ」

作ったばかりの煮付けを運んできた娃娃が覗き込んで言うと、稟は嬉しそうに笑った。灰はその様子に思わず微笑して、娃娃の手から皿を受け取り、食卓に並べる。娃娃がちらりと批判するような視線を灰に向けた。灰が聞かないことを彼女はすでに理解していたが、それでも諦めきれずに言う。

「灰様、そのように召使がするようなことをなさってはいけません」

「娃娃始、諦めたほうがいいね。この子は君と同じくらい頑固だから」

部屋の戸口にあらわれた秋連が苦笑交じりに言った。娃娃は小柄でふくよかな体をまっすぐに伸ばし、長身の男を見上げた。

「その呼び方はおやめ下さいと何度申し上げたことか。頑固などと秋連様に言われたくはございません」

親しみを込めた敬称を諫める娃娃の小言に、秋連は笑う。

「つまりは頑固者がまた一人増えたということかな」

言いながら秋連は背にかかる髪をゆるくまとめた。貴族や裕福な者は髪を背の中ほどまで伸ばし一つに括り、平民は概ね肩にからぬくらいに短くするのが男の一般的な姿なのだが、秋連のそれはただ単に不精ゆえの姿だった。

四人は同じ食卓を囲む。娃娃ははじめこそ同席するのを渋ったが、結局これも秋連に押し切られる形となった。小さな部屋の壁には四人の影が気ままに踊る。しっかりとした造りの椅子にそれぞれが腰掛けると、娃娃がおもむろに両手を握り合わせた。

「万物の主よ、すべてのものに幸賜わらんことを。あなた様の吐息は風となりて大地を渡り、その涙は命育む雨となり泉となり海となる。その偉大なる一步は山を築き、たわむれる裳裾に木が生まれ、やがて森となりて地を覆う。すべての魂は主の腕より放たれ、いずれの中へ還る。その時までどうか大いなる慈悲で我々をお守りください」

それは歌のように緩やかな旋律に彩られている。毎日繰り返される娃娃の祈りは、白沙那帝国が崇める一つ神への感謝を込めたものだった。稟が娃娃の真似をして手を握り合わせ瞳を閉じるのを見て、灰は複雑な思いになる。ちらりと秋連のほうを見ると、真正面から視線が合った。

「さ、食べましょう」

娃娃の明るい声に、灰はほっとしながら秋連から目を逸らした。

「そういえば、今日街で若衆の皆さんとご一緒の灰様を見かけまし

たわ」

「野菜は大皿から煮付けを取り分けながら言う。ほう、と秋連が声をあげた。

「それは勇ましいな」

「ただ街の見回りをしていただけです」

灰の無愛想な物言いは、どこか照れがあるせいだろうか。秋連は微笑ましく少年を見やった。灰が多加羅に来てすでに半月ほどがたとうとしていた。どうなるかと思っていた若衆への入隊も果たし、今では親しく口を聞く仲間もできたようだ。もつとも灰は若衆での出来事を滅多に言おうとはしない。稟がその日のことを話して聞かせるのをただ笑って聞いているだけだった。

食事が終わる頃には夜のしじまはさらに深まっていた。稟が眠りについてから、灰は日課となっている秋連の講義を受けるため、部屋を出た。等間隔に灯が掛けられた廊下を歩くと、灯と灯の挟間には裂け目のように闇が凝っていた。繰り返す光と闇の帳をくぐり、やがて一つの部屋の前にたどりつく。

灰は静かに扉を開けた。部屋の内は何もかもが雑然としていた。天井まである書棚には、変色した巻物や崩れそうな古書が詰め込まれている。床にもあちこちに書がうず高く積まれ、足の踏み場もない有様だった。

「やあ、来たね」

秋連が書棚の間から何やら大きな紙を抱えて出てきた。その髪に蜘蛛の巣が引つ掛かっている。慣れた足取りで器用に本の山の間を通り抜け、部屋の中央にある机に抱えているものをおろす。机の上に置かれた硝子筒の灯が、気まぐれに揺れた。

「この部屋は先代星見役も匙を投げたらしい。でも探ってみれば面白いものがたくさんある」

秋連は無造作に紙を広げた。それは広大な範囲を描いた地図だった。わずかに黄ばんでいる。

「これほど広い地域をこれほど詳細に描いた地図は珍しい」

楽しげに言いながら秋連はもう一つの硝子筒にも明かりを灯した。俄かに光の範囲が広がり、地図の全体が照らし出される。灰は身を乗り出してその広大な図を眺めた。

「これがどこの地図かわかるかい？」

「……白沙那帝国はくたなの全土ですね。でも東方もかなり描かれている……」

さらに詳細に図を見つめて灰は顔をあげた。

「東方遠征とうほうえんせいの時の記録ですか？」

「その通りだ」

秋連はとん、と指で机を叩いた。

「君が言うとおりこれは白沙那の全土図だ。しかし描かれている東方は帝国の領土ではない。それがここまで細かく地名や地形が入れられているのは、実際にそこに行った者が描いたと考えるのが妥当だな。しかも普通なら地図には入れないような小さな砦の名前まで入っているから、戦闘が行われた場所なのだろう」

転々と散らばる名称の中には変わったものも多い。

「この『夜襲にて落とせし砦』というのなどは正式な名称すらない急いそごしらえの砦とりでだったのだろうな」

図の左を占める部分を秋連は指し示す。

「おそらく既存の地図を左側に描き、遠征の際に白紙の右側に描き足していったんだろう。これは清書したものだろうから、戦から帰還した者が完成させたのだろうが」

灰は地図の右へとまわる。白沙那帝国から見れば東の果てに位置するそこに、小さな字が記されていた。しかし東方を描いた図とその文字の間には空白の部分が大きい。

「この空白の部分は帝国が制圧できなかった部分でしょうか」

「そうだね」

「では、白沙那の最終的な目標はこの国だったのですか？」

秋連は教え子の言葉に満足したように頷いた。

「この国の話は聞いたことがあるかい？」



灰は指で空白に囲まれた国名をなぞる。

「柳角師匠りゅうかくに聞いたことがあります。シエンジエン国……仙寿が住む都だとか」

「そうだ。奇跡の人、仙寿が住む都が東方遠征の目的だったというのはあまり知られていないことだ。東方遠征の目的は領土拡張だとされているが、実際は死に怯えた白沙那の皇帝が仙寿の奇跡を得んがために狂気のうちに遠征を決定した、という話もある。この話は人前では言わないほうがいいだろうね」

さらりと語られた言葉に灰が目を見開いた。秋連は再び地図の左側を指さした。

「帝国の領土の中に黒丸が打たれているのは何だと思っ？」

灰は再び帝国の図を眺めた。確かに全土に等間隔に散るようにして黒い小さな丸が打たれている。帝国の東の端に位置する多加羅の地名の上にもそれはあった。

「神殿……ですか？」

「そうだ。こう見るといかに帝国が信仰の普及に徹底しているかわかる。私には蜘蛛の巣のように見えるよ」

「蜘蛛の巣？」

「ああ、試しにこの黒点を線で繋いでみるといい」

確かに黒点を結べば帝国全土を網羅するだろうことが灰にもわかった。

「帝国がここまで盤石の体制をしけたのも、神殿の役割が大きい。なぜだかわかるかい？」

「……神殿が帝国の直轄だからです。所領の街にも必ず神殿を置くことが義務付けられていますが、司祭の任命権は皇帝のものであり、惣領家や郷氏にも並ぶ権威があります」

「そうだ。神殿は信仰の砦だけでなく帝国の目であり耳でもある。その土地の情勢を一つ洩らさず中央に知らせるのも神殿の役目だ。全土に神殿を建てることで帝国は均一な支配の網を張り巡らせているのだね。一方で帝国は神殿の動きにも目を光らせている」

秋連が言葉の先を促すように灰を見やると、灰は注意深く言葉を選んだ。

「神殿が結束すれば帝国にとっても脅威だからです」

「そうだ。そのために、帝国は軍と神殿が結びつかぬよう細心の注意をはらっている。帝国軍と神殿の不和は有名な話だが、これも帝国中枢部が裏で謀つてのことだと考えられている。帝国はその内に鷹閃ようせんと牙蒙がもうを飼っている巨大な猛獣使いといったところかな」

いずれも古くからその獰猛さと狡猾さで人に恐れられる生き物である。千里を見通すと言われる猛禽の瞳が神殿による徹底した管理と支配であり、何者をも引き裂く獣の爪と牙が絶大な軍勢力とでもいおうか。

「だが、もちろん支配にも限りがある。ここに、綻びがある」

秋連はおもむろに一点を指さした。多加羅たからである。火影に浮かび上がり、闇と光とに染まる二人の姿はどこか凝然としている。

「多加羅は帝国の東の国境を守る要だ」

多加羅より北東へ向けて広がる広大な地域には、梓魏と呼ばれる所領がある。その所領の半ばは荒涼とした大地と広大な森に覆われ、さらにその外側をぐるりと囲む山脈が外界と帝国とを隔てている。厳しい自然と気候が、外側からだけでなく内側からも人の侵入を拒んでいた。山脈の守護から離れ、直接に東方と接する多加羅が、実質白沙那帝国の東限だった。

多加羅より東は、漠然と国境地帯と呼ばれる。この地の人々は、独自の文化と生活を築き、神殿もない。それはつまり帝国の支配の糸が及ばないことを意味する。張り巡らされた蜘蛛の糸が途切れたその先、無数の小さな街を挟んで広漠と広がる東の地と対峙する多加羅は、帝国の東の要であると同時にその支配の空白域へと続く綻びでもあるのだ。

灰はふと疑問を覚えた。

「何故白沙那は多加羅を残しているのでしょうか」

「何故、とは？」

「多加羅の軍はかつて周囲の脅威だったと聞きましたが、今では条齋士もほとんどいないし軍士の数だけで言ってもさほど頼りになるとは思えません。しかも異端の神を奉じていた存在を、支配して後も所領を与え残したのは何故でしょうか」

理路整然とした少年の言葉だった。それは秋連も不思議に思っていたことである。絶対的な信仰を持ち、東方の地への並はずれた警戒と執着を持つ白沙那が、要の地に多加羅惣領家を残す理由である。灰が言うとおり、かつては恐れられた南軍も、沙羅久の北軍と併せてこそその脅威だったのだ。今では南軍も武術を生業とする軍士ばかりで構成されており、純粹に戦力で言えば、はるかに沙羅久に劣る。そして白沙那帝国と多加羅には看過できない問題がある。それは信頼関係の欠如だった。信仰を巡る弾圧はもちろんのこと、長い時の中で幾度となく繰り返された戦は、白沙那と多加羅の間に深い軋轢を残しはしたものの、決して友好関係を築きはしなかったのだ。

「それは私にもわからないな」

答えながらも秋連は思う。おそらく何か理由があるのだ。多加羅がこの地に在る理由。多加羅が秘める何か。

多加羅惣領家に異端である怪魅師を誕生させようとした先代惣領。そして今、怪魅師である灰を多加羅へ呼び寄せた峰瀬の思惑。それを知ればお前は引き返しようもなく多加羅惣領家が秘める闇に入り込むことになる。峰瀬のその言葉は一体何を意味しているのだろうか。

（それを知ってどうする。単なる星見役が、知ってどうするということのだ）

心の中で呟き、秋連は思考を塞いだ。地図を見詰めている灰を物憂く見やった。

「君は娃娃始の祈りの言葉に反感を感じているだろう」

地図に集中していた灰は表情を繕うことができなかったらしい。狼狽を露わにした。不意打ちでもしなければこの少年は容易に感情を見せない。ともに暮らすうち、秋連はそれに気付いていた。

「反感というわけではないです」

灰は俄かに不安そうな顔をした。

「俺はそんなにわかりやすい顔をしていますか？」

「いや、そういうわけではないよ。君はむしろその年にしては感心するほどに感情を隠すことに長けている」

灰はわずかに俯いた。娃娃の唱える祈祷が不快なわけではなかった。むしろ信心深い彼女の穏やかな声は心地よくさえある。それでも灰がその旋律を聞かされたたびに覚えるのは、ゆったりとした薄膜に知らず包まれ、いずれ身動きがかなわなくなるような閉塞感だった。

「俺は確かに白沙那一神教の信仰は持っています。柳角師匠も神殿の教えには疑問を持っておられました。あの村にいたえのも死んだ後に神殿の墓所に入りたくなかったからだと思います。多加羅では否応なく納骨されるでしょうから」

「確かに多加羅惣領家の者が神殿に納骨されるのを拒めば大問題だね」

飄々とした雰囲気のある老人を思い出し、秋連は微笑んだ。死んで後人々は誰もが神殿の墓所へと骨を納められる。例外のないそれをもし拒めば、ただちに異端の烙印を押されることになるのだ。徹底した白沙那の支配の方法である。もっとも灰が言うように辺境の地ではその規範もだいたい緩いのだろう。それは人々の意識の根底に、自然への畏敬の念がまだまだ色濃く残っているせいだろうか。

「村では俺と稟は余所者で、異質でした。皆が信じる神の恩寵の中に俺達の魂は含まれていなかった。……娃娃さんの祈りが嫌なわけじゃないです。でもあの教えは神の腕に包まれたものとそうでないものを厳然と隔ているように思えます」

そしてその基準は、神を信じるか否か、その一点に尽きる。硝子筒の中で灯が揺れた。灰の瞳はその小さな炎を映して複雑な色に染まる。珍しく心の内を語る少年に、秋連は注意深くさらに一歩踏み込む。

「紫弥様はまるで一身に自然の恩寵を受けておられるような方だっ

た」

はつと灰が秋連の顔を見た。

「昔、まだ私が二十歳ほどのころ紫弥様に一度だけお会いしたことがあるんだよ。峰瀬様も一緒だった」

秋連は僅かに目を細めた。追憶の中の乙女は今も色褪せない。

「乗馬が苦手な私を、峰瀬様が遠乗りに連れだしてね。多加羅よりさらに東、來螺（きんじ）の街のほとりまで行った」

秋連の話に聞き入りながらも灰の瞳が次第に硬い色彩に覆われていく。秋連は落胆を感じる。まだこの少年は秋連に心を開いているわけではないのだ。それ以前に秋連には少年が抱える傷がどれほどのものかわからない。

「來螺の近くに見事な滝があるというので見に行つたんだが、そこで君の母上と出会つた。滝のほとりに立つ姿がまるで天女のようにだと思つた」

秋連は笑んだ。

「君に言うのも変な話だが、紫弥様は本当にお美しかった。二人して見惚れているうちに、何も仰られずに行つてしまわれたが」

「そうですか」

秋連はぼつりと零された言葉に、やはり言うのではなかったと後悔する。開きかけた扉が再び閉じるように、少年の心が内に閉ざされるのを感じる。秋連はそれ以上のことを言うことはできなかつた。その後はどちらもどこか上の空に時間が過ぎた。さほどの深まりを見せないお互いの言葉にとうとう秋連は講義を締めくくつた。

静かに扉から出て行く少年を見送り、秋連は複雑な溜息をつく。星見役としての知識を授けるといふ、その役割をこえた言葉なのはわかつていた。秋連は少年の瞳を覆つた闇を思い出す。灰と周囲の間には、常に見えない障壁がある。少年が何を抱えているのかはわからないが、それを守る壁は痛々しいまでに脆い。どれほど強固に見えようとも、秋連にはそれがいつ壊れてもおかしくないように思えた。自己を守るために張り巡らされた壁が崩れた時、彼はそれに

耐えることができるのだろうか。

敢えて辛い記憶に繋がる紫弥の話をしたのは拙速にすぎたのかも  
しれない、と秋連は硝子筒の滑らかな曲線を見ながら思う。それで  
も灰が人との関わりの中で頑なな壁で己を守る姿は、秋連にとつて  
は懸念を抱かせるものだった。特に惣領家という複雑な力関係の中  
枢にあつて、己の信条を守りながら生きていくには強さが 真の  
強さが必要なのだ。例えば峰瀬のような、と考へ秋連はゆるく頭を  
振った。昔から知っているはずの男の面影がどこか掴み所のない霧  
に沈むような奇妙な感覚に、ふと不安が湧き上がる。しかしその不  
安もまた見極めようとすればするほど、とりとめもなく散逸してし  
まう。

(どうかしている……)

内心の呟きは苦く響いた。何を不安に思うことがあるのか 秋  
連はもう一度、今度は強くかぶりを振ると、灯を消し、闇に包まれ  
た部屋を後にした。

灰は明かりもつけずに窓の棧に座つて外を眺めていた。彼にあて  
がわれた部屋は多加羅の背後を囲む山に面していた。湿った土の匂  
いと木々のざわめきに心が誘われる。かつては毎日のように山や森  
の奥深くまで分け入っていたが、この街に来てからは日々の忙しさ  
に流され、そのような余裕もなくしていた。もっとも、灰が目の前  
の山に入らないのには、他の理由もあつた。

山は多加羅の北東にある森林地帯をすっぽりと包む連山へと続い  
ている。地図で見れば、その連なりはうねる蛇を思わせる。多加羅  
の背後にある山はいわば蛇の尾の先に位置するのだ。それとも蛇の  
あぎとだろうか。灰はこの小さな山がどことなく不気味だった。少  
し前まで住んでいた森ほどの圧倒的な力は感じられないが、この山  
にも自然が持つ特有の流れがある。しかしその力は静かでありなが  
ら奇妙にねじれ、うねり、まるで解放されずに蠢いているように灰  
には思える。半月ほどを過ごしてなお山に踏み入る気になれないの

は、その独特の雰囲気のせいだった。

灰はぼんやりと木々に切り取られた空を眺めながら、先程の秋連との遣り取りを思い出していた。感じたのは奇妙に掴みどころのない焦燥だった。それが、秋連に投げかけられた言葉のせいであることは灰にもわかつている。

腕にすり寄る温もりに気づき、灰は苦笑とともに獣を引きよせる。包み込むように頭をなでると、又駆は目を細めた。

「励ましに出てきてくれたのか？」

答えはないとわかっていても灰は問いかける。

「大丈夫だ。俺はあの人のことは嫌いじゃないんだ。ただ、時たまどうしようもなく不安になるだけだ」

己に言い聞かせるようにして灰は呟く。嫌いではないのだ。むしろ秋連と娃娃の存在は彼にとって思わぬ安らぎになっていた。多加羅に行く決心したときに、どのような扱いを受けようとも耐える覚悟はしていた。決して心を揺さぶられはしまい、と。そうであるからこそなおさらに、思いがけず穏やかな生活に戸惑いを覚えるのだ。ただそれだけのことだ、と灰は考えた。

閉鎖的な村にあつて人よりはむしろ自然に共鳴した灰にとって、もとより一定の距離を置いてしか接しない村人は、己と周囲との間にある障壁を破る存在にはなりえなかった。だが、決して強引ではない穏やかな秋連の言葉が、灰の頑なに閉ざした感情を揺らしている。それは灰にとって不思議な感覚だった。

又駆が不意に鋭くどがった耳をぴくりと動かした。灰の横から窓の外に身を乗り出すようにして夜の大気を嗅ぐ。次いで鋭い牙をむき出しにした。又駆が警戒するものと対峙したときの癖だ。灰はつられて窓から外を見やる。敢えて閉ざしていた意識を広く開くと、途端にまとわりつくように重い山の力が流れ込んでくる。又駆が俄かに毛を逆立てた。灰もまたびくりとする。

山が膨れ上がったように感じた。まるでとぐるを巻く大蛇がのっそりと鎌首を持ちあげるように、地下深くから何かが大気に溢れ出

ている。それは夜の底に凝る暗がりや長い時の中で圧縮し撓めたかのような、膨大な闇の塊だった。呼応するように木々がざわりと揺れる。

灰はさらに見極めようと目を細める。闇は様々なものが無理矢理に縋り合わされたような、奇怪な存在だった。見ようとすればするほど、反転しては浮き上がり、沈み、めまぐるしくのたうつ。雑多であり複雑な歪んだ力だ。自然の大らかで繊細なそれとは明らかに違う。

「又駆、静かに」

灰は獣を抑える。気付かれてはならない。何故かそう思った。まどろむように揺れる存在、その内に籠る感情。感情と言うのが適当であれば。それは憎悪であり憤怒と呼ばれるものに最も近い。否、感情ではありえない。そこにあるのは無慈悲なまでに徹底した衝動だ。すべてを呑み込みまんとする

(このようなものが何故ここに……)

人智を超えた自然の力を見る灰の目には、歪なそれは厭わしく映る。そして恐ろしい。灰は唇を噛みしめると、拳に知らず力を込めた。もしもあの存在がこちらに向かってきたら一体どうしたらいいのか。怪魅師の力を使ったところであまりに膨大なそれに敵うとは思えなかった。

流動する自然の力が結合し、離散して形作るものとは違い、目の前の存在は否応もなくまわりのすべてを呑みこむ貪欲なまでの凶暴さしか感じられない。灰は不意に恐怖に全身を縛られる。浮かんだのは星見の塔に住む人々の顔だった。もしもこれが牙を向いたら彼らは抗いようがないだろう。幼い稟も、まるで母親のようにあたたかい野菜も、偏見なく受け入れてくれる秋連も、すべてが呑みこまれる。それだけはだめだ、と灰は強く思う。敵わなくとも、対抗できるのは自分しかないのだ。又駆が灰の意識の変化に気付いたのか、ざわりと毛を逆立てて、力をためるように低く身構えた。

不意にねじくれる塊がびくりと揺れ、破れた。そこから清浄な青



い光が射す。圧倒的な質量の闇がその光にのたうち暴れるが、光の浸食は止まらない。布が裂けるように、あるいは打ちすえられて砕けるように闇の領域が収縮する。どこからか広がるその光は、波のように揺れ動き、容赦なく闇を呑みこんでいく。

光と闇の攻防は実際には瞬くほどの間の出来事だったが、灰には時の流れが奇妙に間延びして感じられた。柔らかい光に包まれ、闇は急速にその色を弱めると次第に大地へとしみこみ、やがて消えた。唐突に起こった出来事に茫然としながら、灰ははまだ揺れている光を見やる。光はある一点を源にして広がっているようだった。どれほどの距離があるのかはわからないが、夜をも透かして波紋のように広がるそれは、脈打つように一度大きく揺れてから弱まり、あつけなく消えうせた。

なおも光の元を探そうとするがその欠片も感じられず、灰は諦めて目を閉じた。光は窓から左手の方向から発していた。山の中腹のそこには、もはや何の存在も感じられない。混乱しつつも、強張っていた体から力が抜けた。

混乱の次に襲ってきたのは言いようのない不安だった。得体の知れないあの闇は人を越えたものだ。しかし光は違う。人為である。灰は光に見覚えがあった。接見の間で峰瀬の胸元に見えたものとそれは同じだったのだ。灰の怪魅師<sup>けみし</sup>としての力を必要としているという峰瀬には、接見の間での対面以来一度も会ってはいなかった。惣領家を背負って立つ男が何を考えているのか、灰には想像もつかなかったが、素気ないほどのその態度に彼はどこか安堵すら覚えていたのだ。

だが目にした異変に、灰は己の認識の甘さを知る。山一つを覆うほどの膨大な闇、それをあの光は鎮めた。常人が成し得ることではない。光の源は峰瀬その人だったに違いないと、灰は確信する。そして冷たい予感とともに思考はさらに先へと向かう。峰瀬が怪魅師の力を必要としていることと、あの闇の塊とは関係しているのではないだろうか。

灰は新たに湧き上がる恐怖に近い不安に小さく息をつくど、又駆に身を寄せた。猛々しい獣の姿でありながら、大地の、そして大気の力に満ちたその気配は灰にとって心地よく感じられる。自然に潜む力の結集である又駆は、本来感情を解するはずのない存在である。しかしその瞳は気遣うように灰を見つめていた。

灰は鋭敏な意識を閉じた。再び見やった山は、これまでと同様どこか歪な力を内包しながらも、数多の命を抱く存在として静かにあるだけだった。

## 9 (後書き)

これで第一章が終わり、次から第二章「祭礼の時」がはじまります。

ここまで読んでいただいた方、ありがとうございます。この先も、読んでいただければ幸いです。

では、今後ともよろしくお願いいたします！

## 第二章 祭礼の時

男は必死に駆けていた。しかし体は一向に前に進まないように思えた。脅えの奥底で、焦燥ばかりが膨らむ。空気を求めて喘ぐと生臭い匂いが鼻孔に広がり思わず咽た。家路を辿るのに、常とは異なり、街衆も避けるような暗く汚れた路地を選んだ。子どもの誕生日の祝いに間に合うように　その思いが災いした。

振り返るとそれはなおそこにいて、徐々に近づいてくる。男は絶望の悲鳴をあげる。否、あげようとした。声は喉に張り付いて、そのままそこで消えた。もはや振り返らずともそれが男の体に覆いかぶさるうとしているのがわかった。

男の体が傾ぎ、地面に打ち付けられた。男は僅かに残った思考で右足が喰われたことを悟る。それが最期だった。男はその肉体の一片すら残さずに呑みこまれた。

街の一角での出来事である。

夏から秋へと向かう季節の流れに人が気づくのは、空を見上げた時だと秋連あきづれは考える。夏の凶暴なまでに鮮やかな色彩と違い、秋のそれは柔らかくありながら、透徹として高い。

星見ほしみの塔から惣領家の屋敷へと続く道からは、空の下、穏やかな日差しにまどろむような街が一望できる。秋は祭礼の季節である。祭礼に向けて家々の白壁に黄色の布がかけられているのが目に鮮やかだった。秋の実りを神に感謝するその祭りが近づくにつれて、街は次第に活気を増していくのだ。

多加羅惣領家の白壁にも壮麗な刺繍を施した布がかけられ、光を浴びてところどころ金色に輝いていた。秋連は表情一つ変えない衛兵に一礼して扉をくぐり、薄暗い屋敷の中へと入って行った。

螺鈿細工が施された手すりに沿って階段を昇り、二階のさらに奥

の廊下を進むと惣領の執務室がある。白い大理石と紅の絨毯の対比が鮮やかな廊下を歩いてきた秋連は、執務室の手前で前方から歩いてくる人物に気づき道を開けた。惣領家の嫡男の透軌たけいとその教育係である学士がくしだった。

端に寄つて頭を下げる秋連の前で、学士がおもむろに足を止めた。「惣領の元に行かれるのか？」

「はい」

「それは結構なことだ」

何が結構なのか、と秋連は思わず顔をあげる。すでに初老に入る学士は頬のこけた険しい顔立ちの男だった。透軌が学士の後ろで所在なさ気に立ちつくしている。

「時に……例のお方の教育ははかどっておられるか？」

何を言われたのか掴みかねた秋連は、相手が灰かいのことを言っていることによくやく気付く。

「はい、灰様はまじめな方ですので」

学士はその答えが気に入らないかのように鼻を鳴らした。

「むろん、そうであろうな。何せ惣領が過大な信頼を寄せる星見役殿のことだ。どのような下賤な者でも立派に教育なさるでしょうな」言葉に込められた侮辱に思わず秋連は眉を顰める。学士は慇懃に頭を下げると、透軌を促して秋連の前を通り過ぎた。

「透軌様」

咄嗟に秋連は声をかける。険しい表情で振り返る学士とは対照的に、透軌はどこか芒洋とした表情だった。

「ぜひ灰様とお話をなさってください。灰様が多加羅たからに來られて日が浅いとはいえ、従兄弟同士であられるのですから」

「無礼な！」

秋連は学士を睨みつけた。

「無礼はどちらです。灰様は惣領家のお血筋、それを下賤呼ばわりとは、学士殿はよほど惣領家への忠誠が薄いと見える」

学士は顔面を朱に染めてわなわなと唇を震わせた。秋連は透軌に

向かって丁寧に頭を下げた。

「失礼いたします」

透軌の戸惑ったような表情をちらりと見やり、秋連は執務室へと向かった。

「聞こえていたぞ」

扉を開けて真っ先に掛けられた声に、秋連は苦々しくため息をつく。人の悪い笑みを浮かべる主は、椅子に深く腰掛けて面白そうに秋連の表情を観察している。

「惣領が星見役を大袈裟に持ちあげるので、いらぬあてこすりを言われました」

「いいではないか。あの学士は自惚れが過ぎていかん。どうもあの高々とした鼻を見ると、少し折ってみたくなるのだ」

要は馬鹿げたやつかみなのだ。並居る家臣の前で峰瀬みなせが星見役を評価した。そのことが、学士には気に食わなかったのだ。一月も前のことをおそろくはずっと根に持っていたのだらう相手に、秋連は怒りよりも呆れを感じる。

「私に関わりのないところで折っていただきたい」

「そう言うわりには、心にもない言葉でやりこめていたではないか」  
「心にもないとは酷い」

峰瀬は笑い声をあげると、机を挟んで置かれた椅子に座るように指し示した。

「今日は一体どのようなご用です？」

「伯父として甥の様子を聞こうと思ったのだ」

にこやかに言う相手の真意をはかりかねて、秋連は疑い深い表情になるのを止めることができなかった。

「なんだ？ 聞いてはいかんのか？」

「その甥を一月放っておかれた方のお言葉とは思えませんでしたので」

「私も多忙でな」

秋連は目の前の相手が、一月前よりもさらにやつれていることに

気づく。まるで生命力そのものが削り取られているように、かつての生気に溢れた逞しい面影が消えている。

「灰様は休暇以外は毎日若衆の鍛錬所に通い、街の見回りにも参加されているようです」

「そのようだな」

秋連は峰瀬の顔をまじまじと見る。若衆での灰の動向を、峰瀬も知っているのか。では、知りたいというのは星見の塔での生活のことなのだろう。

「夕刻にはお戻りになり、食事の後に学術や書についてお話をさせていたいております」

「灰は優秀か？」

秋連はしばし考える。

「ええ、優秀と言えるでしょうね。聡明であり発想力もある。何よりも洞察力が豊かであられる」

「そうか」

「柳角翁りゅうかくおんを師となさっていたのですから、当然と言えば当然かもしれませんが。そう言えば最近山によく行かれるようになりました。薬草を探しておられるようです」

「山へ？」

峰瀬は興味をひかれたようだった。

「はい。灰様の部屋は何とも知れぬ植物だらけです。何でも惣領家の裏手の山には珍しい薬草が多くあるとかで、暇があればふらりと山に入っておられます」

峰瀬はふと考えるように目を伏せた。

「稟りんという少女も元気か？」

秋連は意外の念を覚える。まさか峰瀬があの子のことを気にかけているとは思っていなかったのだ。

「はい。小学院に毎日楽しそうに通っています。明るい、賢い子です。灰様とは本当の兄妹のように仲が良い」

「確か森に捨てられていたと聞いたが」

「そのようですね。そのために前住んでいた村では辛い目にもあっていたようですが、今は普通の子供として過ごせるのが何よりも良い影響になっているのでしょうか」

言いながら秋連の中である一つの考えが浮かぶ。唐突であり直観的なそれは急速に思考を形作り、明確な輪郭を持つ。しばし躊躇ってから、言った。

「灰様は早熟であられ、強くあられる。だがその強さはあまりにも脆く私には見えていました。周りから自らを閉ざすことで己を守ろうとしているのだと。しかし、それだけではなかったのかもしれない」

無言で峰瀬は先を促す。

「あの少女の存在が灰様にとってはもしかして強さの源だったのかもしれません。私は灰様が経験してきたことを知りませんし、どれほどの傷を負っておられるかもわかりません。しかしその痛みに溺れることなく、昂然と前に進む強さをお持ちなのはわかります。それは、守るべき存在があつたせいかもしれませんがね」

「守るべき存在……」

「はい」

秋連は微笑んだ。

「私が使者としてはじめて灰様とお会いした時、巡回薬師じゅんがいくすしになるのが夢なのだと仰っていました……あれは一時の子供らしい憧れなのではなく、彼の本質をあらわした言葉だったのかもしれない。おそらく、彼は弱い者や傷ついた者を守ることで、自身の脆さもまた真の強さへと変えていくことができるのではないのでしょうか」

そうすることでただ己のみを守る狭い壁を壊し、より広く豊かな人間性を得て生きていくことができるのではないだろうか。

峰瀬は秋連の琥珀の瞳から視線を逸らす。それは彼らしくない動作だった。まるで逃げるような、と秋連は思い、さらに戸惑いを覚えた。既視感である。以前にも同じような思いを、危うさを峰瀬に感じたことがある。あれは、峰瀬が灰の過去について語った時では



なかつただろうか。

「まるで父親のようだな」

ぼつりと峰瀬が言った。皮肉さは感じられない言い方だったが、秋連はその言葉にふとひっかかりを覚えた。

「からかわないでいただきたい」

意図した以上に声は暗く響いた。

「そんなつもりで言ったのではなかったが……すまん」

峰瀬が神妙に言う。秋連は苦笑した。

「いえ、私こそどうかしていますね。だが……私には父親など無理です。何より家族を持つ気にはなれません」

「お前の妻と子供への裏切りになると思っているのか？」

静かな問いかけだった。秋連はその言葉を意外なほど冷静に受け止める自分に気づいた。

「……どうでしょうか。私の子はこの世に生まれることもできませんでした。ですが、それも今となってはどこか遠い夢のようです。忘却とはこのようなものなのでしょうか。あるいは……喪失にも人は慣れるということなのかもしれません」

ひそりと秋連は言う。峰瀬は緩やかに首を振った。

「いや、お前は忘れてなどいないのだろう。それほどまでに想われるのはきつと幸せなことには違いないだろうな」

「それはあなたも同じなのではありませんか？」

「お前は私と妻の関係がどのようなものだったのか、知りはいまい生々しい痛みが籠る口調だった。峰瀬はちらりと己の言葉を悔やむような素振りを見せたが、おどけたように笑ってみせる。それは過去への憐憫に墮す己を自嘲する姿にも見えた。

「よくある勢力結婚だったからな。互いに愛情を求めていなかったのだろう」

秋連は反射的に出かけた言葉を呑みこんだ。それは違うのだと

峰瀬の妻となった女性がどれほどに彼を愛し、狂おしいまでにその愛情に飢えていたか。峰瀬とて気付かなかったわけがない。無口

なおとなしい女性だった。だがその内に秘めた進むような想いに気づかぬ夫がいるだろうか。

しかし秋連は軽い口調でまったく違うことを言う。

「悠緋様はあなたにも奥様にも似ておられないようですね。気が強く真直ぐであらせられる」

「ああ、あの気の強さは妻にはなかった。むしろ妻に似ているのは透軌だろうな」

「そういえば今年の祭礼は悠緋様が巫女役をつとめるのでしょうか？ 街衆が楽しみにしています」

峰瀬は秋連らしい気遣いに苦笑しながらも話を合わせる。

「あのじゃじゃ馬につとめられるか、今から女官どもが気を揉んでいる」

会話は浮遊感を伴っていた。まるで何かを誤魔化すように一体何を誤魔化すというのか。秋連はぼんやりと思う。他愛もない会話に気まずさは消えていた。そしてそれらの言葉の欠片に埋もれるようにして隠されたものが単なる感傷だったのか、秋連にもわからなかった。

秋連が峰瀬のもとを辞したのは屋敷に入ってから一刻もたたぬ頃であったが、彼がそれに気づいたのは外に出て中天に輝く太陽を見た時だった。さほど位置を変じていないそれに、確かな存在として在る己の肉体と意識が乖離したかのような齟齬を覚える。

秋連は星見の塔への道ではなく街へと向かって歩き出した。真直ぐに帰る気にはなれなかった。石畳の道は掃き清められ、一步ごとに小気味良い音を響かせる。それがどこか虚ろに聞こえた。

次第に下る坂の両端に並ぶのは、立派な門構えに奥行のある屋敷である。いずれも上位の貴族のものだ。門の前を守る衛兵はそれぞれの貴族が雇った者なのか、華麗な装束に身を包み、質素な短袖の衣を着た秋連に胡乱な視線を送る。閑散とした道を通り抜け防壁をくぐると、街は途端に様相を変えた。

防壁の向こうは、さほどの名家でもない中位や下位の貴族と裕福な商人の屋敷があり、その間を埋めるように庶民の家々が連なっている。道行く人々も様々に装い、それぞれが活気に満ちた表情で秋連の傍らを通り過ぎて行く。祭礼が近いため、鮮やかな色彩を身につけている者が多かった。中でも目につく黄色は、全ての実りを象徴している。

街の中央をまっすぐに伸びる道は多加羅の街の入り口である大門から惣領家を一直線に結ぶ。街の中心部から放射状に延びる通りの中でも最も大きく、人波が絶えない。秋連はその通りから横に逸れ、細い路地へと入った。迫る家壁に遮られて陽光は届かない。地面が露出した道はじめじめと湿り、しめやかな足音だけが響いた。

幼い頃から慣れ親しんだ道である。秋連は意識の大半を渦巻く思考に奪われながら、それでも懐かしさを感じずにはいられなかった。下男として惣領家の屋敷にあがる父親を見送つてから、小学院へ行く前にこの道を通り必ず向かった場所がある。子どもの頃には長く感じた道も、今ではあっけないほどに短い。何とは知れない木箱が積み上げられた横をすり抜け、再び大きな道へと出ると目の前に高く聳え立つ神殿があった。

多加羅の神殿は、正五角形の建物の三方に塔を配した正規の様式で建築されている。正面には神の父性と母性をあらわす二つの塔があり、聖性をあらわす塔は最も奥まった五角形の頂点にある。正五角形の内部は、前方の二つの塔と奥の塔を結ぶように二等辺三角形の広間となっており、その最奥、三角形の頂点で司祭が祈りと託宣を告げる。壁で仕切られた両端の三角形は、司祭やその見習い達が修行し生活する領域だった。

厳めしい神殿の塔にも、今は祭礼に向けて布がふんだんに飾られ、その色彩が目には鮮やかだった。秋連は足早に神殿の門を通り抜け、目を伏せて建物の横手から裏へと歩いて行った。やがて開けた場所へと出た。広い一面は手入れの行き届いた芝生に覆われ、中央部に白壁の小さな建物がある。大人の背丈ほどの四角い建物には鋼鉄製

の扉が一つあるきりだ。そしてその前には溢れるほどの花が供えられている。決して途絶えることのない死者への花だ。

固く閉ざされた扉の向こうを、地下へと続くその先を秋連は見たことがない。かつて彼の父母の、そして顔も見ぬ赤子とともにこの世を去った妻の骨を納めたそこは、多加羅で亡くなった人々が眠る墓所だった。

秋連は膝をつき、大地に触れる。しっとりとした土の感触が、幼い頃の思慕を呼び起こす。異国の生まれだったという母は、秋連がまだ五つにもならないうちにこの世を去った。かすかに記憶に残る面影は、琥珀の瞳を優しく潤ませる笑顔だ。母が死んだ後、男手一つで彼を育てた父は、滅多に彼女のことを語ろうとはしなかった。ただ黙々と働き、決して楽ではない生活の中で秋連を小学院と、より高度な学問を教える博露院はくろいんへと通わせた。父親の心に深く穿たれた喪失の穴は病でこの世を去るその最期まで癒えることはなく、秋連が十五の冬に逝った。

そして緑の上、零れるように咲き乱れる白い小花が、忘れ得ない儂い人を思わせる。

「君がいてくれたらと毎日思っている、なんて言ったら、また笑われるのかな……」

呼びかけは大地に落ちる。神の腕に迎え入れられた妻の魂に呼びかけを行うなど、司祭が見れば眉を顰めるだろう。神殿の教えでは神の元へと還った魂は現生とは切り離され、清らかにある。汚れを負う残された人が、死者に呼びかけを行うことは罪とされた。生きる者は、死んだ者を偲び、祝福することしかできないのだ。

「私達の子供は君の魂に抱かれているのだろうな」

密やかな語りかけに答える者はない。

「君の叔母さんはまだ私のところにいるよ。君のことが忘れられないんだ」

娃娃えなの穏やかな笑顔にひそむ影は、かつて父親に見たものと似ている。はやくに両親を亡くした姪を実の娘のように育てた娃娃は、

今もこの墓所を訪れようとはしない。秋連に対する彼女の献身は、かつて手塩にかけて育てた姪への無言の追慕だった。

なお蹲るようにして秋連は澄んだ甘い空気の中に惑う。神に祈ることは、とうの昔にやめていた。神殿の威容に背を向けたのが何時の頃からなのか、秋連自身にもわからなかったが、それでもこの場所に足を運ぶのをやめることは出来なかった。

空はあえかに高く、花は鈴やかに優しい。

秋連は瞳をとじた。視界を覆った闇に残像のように花卉が揺れたように思った。喪失は秋連の人生に穿たれた深い洞だった。埋めることのかなわぬ洞は、虚無に似ていた。峰瀬もまた、埋めようのない洞を内に秘めているのだろうか。そして、灰は 灰もまた喪失を知る者だ。灰が他者を守ることが強くなるのであれば、自身はどうなのだろう、と秋連は思う。虚無は安寧に似ている。そこに在れば、静かに生きていけるだろう。今までと同じように。

秋連は妻を連想した白い花を見やる。秋日に照らされた花々はやがて散るだろう。人の思いを受けながら、置き去りにされ忘れ去られてやがてはその香りも絶え失せる。その儚さと強さを心に刻むようにしばし瞑目し、秋連は静かに歩み去った。

「だめだ！」

須樹すぎの一喝に、鍛錬所の小さな部屋に集う少年達は首を竦めた。まだ若衆に入って間もない者達である。普段は穏やかな須樹が見せた厳しい表情に、一様に委縮したように立ち尽くしていた。

「でも……加倉様かくらは俺達と同じ年の奴を一緒に見回りに連れて行っています！」

負けん気の強い一人が言う。

「俺のほうがまだ剣の腕も立つのに」

「晶うよし、それは思い上がりだ」

須樹の言葉に十三になったばかりの晶は頬を膨らませる。はらはらとやり取りを見つめる少年達も、納得のいかない表情を浮かべる者が多い。それを見やって、須樹は渋面のまま言葉を探した。

「なんだ、どうした？」

突然割って入った声に須樹は振り返った。入口で冶都やとが部屋に満ちる奇妙な沈黙に戸惑いの表情を浮かべている。その背後には灰かいが立っていた。

「冶都さんも聞いてください！ 俺達、街の見回りに参加したいって言っただとこなんです！」

晶が勢いづいて訴える。

「加倉様は俺達と同じくらいの奴でも見回りに連れていってるのに、なんで俺達の範はんはだめなんですか！」

冶都はふうん、と唸るように言うとのっそりと部屋の中へと入ってきた。休憩所と更衣室を兼ねる小さな部屋が、大柄なその体に途端に狭くなったようだ。灰は傍観するように戸口に立つ。

参志の儀の一件以来、冶都は機会があれば灰に剣術の指南を買って出ていた。今もまた稽古が終わったところなのだろう。単純明快で率直な性格の冶都が、無口で物静かな灰のことを気に入っている

らしいのは、須樹には意外であり、何かしら嬉しいことでもあった。灰が剣術において目覚ましい成長を見せているのは、彼自身の才能だけでなく治都の力に負うところも多い。

「だがなあ、見回りつてのはお上品なところに行くだけじゃないんだぞ？ お前達みたいなひよつこが厄介事に巻き込まれてみる、俺達が迷惑だ」

治都の言葉に晶は顔を真赤にする。愚かな少年ではない。年長者が言わんとすることは理解できても、感情を抑えるにはあまりにも幼い。

「でも、灰様はこの前治都さん達と一緒に見回りに行ったじゃないですか！」

俄かに室内に緊張が走った。委縮し、あるいは不満そうに沈黙していた少年達が、突然出た名前に敏感に反応する。思わず須樹は灰の方を見やったが、灰の表情に変化はなかった。

「やっぱり身分が高いとそれだけで特別扱いなんだ！」  
「いい加減にしろ！」

治都が怒鳴った。空気が震えるほどのそれに、晶が依怙地に口を曲げた。

「晶、灰様は治都に勝ったんだ。お前も見ただろう。この部屋にいる者で灰様に勝てる自信のある者はいるか？」

須樹の落ち着いた声に答える者はいなかった。

「それだけの腕があるから見回りにも参加することができたんだ。

お前ではまだまだ未熟なのがわからないか？」

晶は俯いて唇をかんだ。貧しい家に生まれながらも、同じ年頃の少年よりもはるかに機敏で敏い晶が、明らかに理不尽に我慢ができないのは須樹とて理解できる。しかし街の見回りという若衆わかしゅうの役割が、想像以上に危険が付きまとうものであることもまた無視できない事実なのだ。

そもそも若衆は全ての人々に快く受け入れられているわけではない。貴族以外の者が剣を所持するには警吏けいりの許可がいる。そのよう

な厳しい取り締まりの中で、まだ少年とも言っていない若者達が、見回りのためとはいえ剣を身に帯びて街を歩くことに、根強い反対の意見もあるのだ。また、一見穏やかに見える多加羅の街にも、迂闊に踏みこめば危険に巻き込まれるような区域があるのだ。

「加倉様が貴族の子弟を連れて歩いているのはあくまでも安全な地域だけだ。危険な場所には決して連れて行くことはしない」

もっとも自身も行くこととしないのだが、というのは心の中でだけ付け加え、須樹は悔しさに顔を歪める晶を見つめた。

「安全な場所なら晶達を連れて行ってもいいんじゃないですか」

その時無造作に言葉が投げかけられた。言葉を発した本人は相変わらず皆から距離を取るように立ち、向けられる視線にも頓着していないようだった。

「灰様、それは……」

須樹の洪面をちらりと見やった灰は、しばし考えるように腕を組む。

「その、灰様というのも何とかならないかな」

須樹は言葉に詰まった。一瞬何を言われたのか理解できなかったのだ。須樹の様子にはお構いなしに灰は晶へと近づいて行った。

「俺の名前に様をつけるのをやめてほしい。俺は一番の新入りなんだし、第一義理だけで言われても気持ちが悪いだだけだ」

穏やかな声音で、辛辣なことを言う。大方の少年はぼかんと灰を見つめるばかりだ。

「でも、灰様は惣領家の人だ……」

どこか警戒するような表情の晶に、灰は苦笑したようだった。

「若衆は皆平等の筈なのに、身分で特別扱いされている。だから腹が立つんだろう？ ならば特別扱いをやめればいい。俺だって自分のことを惣領家の人間だとは思っていないんだから。俺はただの灰で、晶はただの晶だ」

治都が素早く須樹へと視線を送る。須樹もまたその視線に込められた意味を正確に捉えていた。幸い部屋にいる少年達が灰の発言に



込められた意味に気づいた様子はない。

「本当に様をつけなくていいのか？」

「ああ、灰でいい」

灰はくるりと須樹に向き直る。須樹は咄嗟に身構え、そして相手の視線が一月前よりも近くなっていることに気づいた。

「俺からもお願いします、須樹さん。晶達も見回りに参加させてあげてください。安全な地域ならきつと訓練としても役立つはずですよ」

「灰様、それでは街衆にも示しが……」

「灰、です」

にこりと笑って言った灰の目は、真剣な光を浮かべていた。須樹は逃げ場所を探すように視線を彷徨わせ、冶都が素知らぬ顔をしているのを恨めしげに睨みつけた。須樹が次に発する言葉が、少年達の灰への態度を決定づけるだろうことを、冶都も理解しているのだ。少年達に慕われ、尊敬されている須樹が灰にどのように接するか、それによって少年達もまた灰への接し方を変えるだろう。そして、それは身分と家柄に縛られた規範を崩し、目に見えずとも厳然として在る絶対的な秩序の鎖を断ち切る契機となるに違いない。

どうやら成長したのは身長ばかりではないらしい。それとも灰はもともとこういう人間だったのか。須樹は相手への認識をまたもや改める。灰が時折見せる表情から、須樹は彼が特別の存在として敬われることを快く思っていないらしいことに気付いていた。この少年は無口でおとなしく見せかけながら、その実聡明で狡猾で強情なのだ。望まない状況に甘んじるのではなく、虎視眈々と自らが望む状況へと変える機会を待っていたのかもしれない。

須樹は観念して灰へと向き合う。ならば望み通りにしてやるうではないか。不意に笑い出しそうになりながら言った。

「わかった、灰。お前の意見は考えておく」

周囲の少年達を見まわし続けた。

「だが、これですぐに思い通りになったとは思わないことだ。見回りに行きたければ、その分剣術の鍛練に励むように」

「やったあ！」

晶が飛び上がるようにして拳を突き上げた。

「それから、見回りでは街の人々の目に触れるのだということも認識してほしい。馬鹿騒ぎをして若衆の名を落とすような真似をすれば若衆としての資格はないと思っておけ」

「わかつてるって！ 任せてよ！ 俺達へまなんかしないから」

途端に笑顔になった晶につられて、周りの少年達も一様にはしゃいだ声をあげた。

「剣術の稽古がまだだろう。はやく広場に行きなさい」

須樹の言葉に少年達は賑やかに部屋を飛び出して行った。小さな部屋には三人が取り残される。須樹は灰をじろりと見やった。

「灰様、あまりあいつらを焚きつけないでください。まだ未熟な者ばかりなんですから」

「まあ、いいじゃないか！ 灰様、おつと……灰の言うことにも一理あるからな」

治都は無頓着な様子で言う。須樹は思わず呆れた視線を送った。

「お前、切り替えがはやすぎるんじゃないか？」

「ん？」

「もういい。お前はちよつと黙つててくれ」

須樹はがしがしと頭をかくと、目の前の少年と改めて向き合った。逡巡し、躊躇い、しかし結局はため息を一つついて両手をあげる。

「わかった、わかりましたよ。あなたはただの灰だ」

「ありがとうございます」

律儀に礼を言いながらも、灰の瞳には例のいたずらめいた光が宿っている。この少年はまるで年長者に従順に頭を下げているようでありながら、実際には須樹のほうに少年の思うままに言葉を発しているのだ。治都などはそれに気づいた様子もない。

(策士め)

心中で呟く悪態は、笑みを含んでいた。須樹も灰に接する時、居心地の悪い思いが確かにあったのだ。初めて出会った時の相手の印

象があるせいかもしれない。そして何よりも、若衆内部にある身分に縛られた秩序をその片隅とはいえ崩すことは、須樹にとって爽快なことだった。

若衆は頭を頂点に、四人の副頭、十二人の錬徒、さらにその下に従う若者達で構成されている。若衆に入つた者はいずれかの錬徒の下につく決まりであり、須樹は錬徒として十五人程の若者を指導する立場にある。錬徒がまとめる集団が、それぞれ範と呼ばれる。この仕組みは単純でありながら、如実に若衆内部の力関係をあらわしている。副頭はそれぞれ三人ずつの錬徒を、ひいてはその下に従う若者達を指導する立場であるが、現在副頭をつとめるのは全て加倉の取り巻き連中である。須樹の範は目下のところどの副頭にも顧みられていない。若衆の中でも爪弾きなのである。貴族連中が取り仕切る今の若衆には、息詰まるような閉塞感ばかりがあつた。

それに加え、本来ならば頭として全体を指導すべき立場の加倉が、それぞれの範とは別に、特に気に入りの者を集めるようになっていく。頭本人が街の見回りに繰り出すことに問題は無論ないのだが、気に入りの若者達を侍らせてそれを行うのには、眉を顰める者も多い。晶が不満に思うのも無理はないのだ。

もつとも現在の若衆であるから、灰が須樹の範に加わることができたのだ。本来ならば新人がどの範に属するかはそう簡単に決められることではない。しかし何かと複雑な立場であり、加倉から敵視されている灰は、参志の儀以来その成り行き上いつの間にか須樹の範の一員として認められていた。

そして治都もまた本来属していた範を離れ、須樹の範に入り浸っている。異例のことではあるが、これには規律の緩んだ混乱に須樹もありがたく乗じることにした。治都は確かな剣術の腕を持ち、指南役としても優れているのだ。やんちゃ盛りの少年達をおさえるために彼の存在は大きく、須樹にとつても幸運だった。もつとも本人を前にしては決して口にしなないことではあるが。

「治都、次の見回りはいつだった？」

「明日が休息日だし……確か明後日からじゃないか？ 今は洲界と  
仁識の範が担当のはずだ。ああ、違うな。祭礼の前だから見回りは  
やらなくていいはずだ」

「そういえばそうだったな」

祭礼の前後は多加羅の正規の軍隊である南軍が街の守りに当たる  
ようになっていたことを須樹も思い出す。多種多様な人々が集まる  
祭礼に向けて、常になく厳重な警備がしかれるのだ。

三人は狭苦しい部屋を出て広場へと向かった。窓から差し込む陽  
光は、夏の名残か、熱気を感じさせた。薄暗い廊下から日差しの中  
へと踏み出せば、広場ではその半分ほどを使って少年達が木剣を振  
るい、もう半分では年長者達が剣舞の基本的な動作を丁寧になぞっ  
ていた。多加羅の剣舞は鋭く華麗である。しかし稽古でのゆったり  
としたそれは、まるで水の中をたゆたうように優雅だった。

「今年の剣舞はどうなるかな」

ぼそりと呟く治都に須樹はさあな、と答えただけだったが、灰は  
そこに僅かに懸念する響きがあることに気付いた。

「無事済めばいいんだが……」

「何か問題があるんですか？」

思わず問いかけた灰に、須樹は緩く首を振っただけだった。

「くだらないことだ。灰は気にする必要はない」

治都は一瞬何事かを言いたそうな表情を見せたが、結局は肩を竦  
めて須樹の沈黙に倣った。

祭礼は三日の間行われる。一日目と二日目は多加羅所領内にある  
街や集落から神殿への供物が奉げられ、三日目の夜には多加羅惣領  
家が供物を納める。その場で若衆の剣舞も神への供物の一つ、奉納  
舞として披露されるのだ。奉納舞を神に献上する役目は惣領家嫡男  
の透軌が行うであろうというのが大方の予想である。そして最後に  
神殿の司祭長によりその後一年の変わらぬ豊穰と繁栄への祈祷が行  
われ、巫女役である乙女に神の託宣を告げることで締めくくりとな  
る。

剣舞は一年を通しての若衆の最大の見せ場でもあり、若者達のもれにかける思いも並々ならぬものがあつた。広場の若者達の顔はどれも真剣そのものであり、研ぎ澄まされた集中の中にも期待と不安が入り混じっている。

街を取り囲む金笹の畑は収穫の季節を迎え、風が吹けば艶やかな輝きが大海の波のように揺れる。そして街もまた、いまや祭礼一色に染まりつつあつた。

面白いものがある、という治都やちの言葉に誘われて須樹すぎと灰かいが街へとおりていったのは、黄昏には遠く、しかし午後の束の間の熱気も薄れた頃合いだった。

表通りは通らずに屋敷や家々の裏手の道を通れば、そこにはもう一つの多加羅の街並みが広がっている。長い歴史の中で幾度も戦にさらされ、あるいは自然の力に砕かれた街は、人々の不断の努力によつて何度も築き直された。崩れ埋もれた古い街並みは、しかし消えたわけではない。まるで地層に眠る太古の骨のように、其処此処でその面影を晒していた。

下ったかと思えば分岐してどこへとも知れず伸びあがる隘路がいりょの先には細く切り取られた空が眩しい。外から見れば小高い丘にも似た端正な外観の街も、その奥深くには起伏に富んだ複雑な路地が縦横に走り、一度入りこめばまるで迷路のようになっていく。

灰は二人について歩きながら、かつて幼い頃に住んでいた街を思い出す。その街もまた家々の間を細い路地が走り、奥に行くほどに複雑に絡み合っていた。街の人々が裏側と呼んでいたそこは、安易に踏み込めば命も危うい場所であり、実際に年に数十人もの人々の行方がわからなくなる。もっとも大方は外部の者であり、裏側の危険をよく知る街衆は余程のことがなければ踏みこもうとはしない。

街の最奥に巢食すくい、暗く蟠る闇に煤けたその場所と比べれば、多加羅は空が近かった。

「この先だ」

治都は言つと急峻な坂を一気に駆け上がつて行つた。両側の迫るような家の壁が途切れ、踏み出したそこは人々で賑わう広場だった。神殿の対極である街の西に位置する広場は人々の憩いの場として中央には小さな池と花壇が設えてある。今はそれすら見えないほどに人々で埋め尽くされ、露店が所狭しと並んでいた。

「祭礼を前に街の商家が売れ残りの品を一斉に売り出してるんだよ。商人の間では棚崩しと呼んでいる」

振り返りながら治都は言う。ちらりと何処かに目をやり気安く手を振る様子から、馴染みがいたのだろう。有数の商家の出である彼にとってこの行事はごく身近なものなのである。一方須樹は例年行われることは知っていても自身が訪れることは滅多にない。予想以上の品数の多さと活気だった。

「大したものだな」

「意外な掘り出し物もあるぜ。去年なんか大貴族の盗まれた家宝が見つかったりもした。裏で取引されて流れに流れた結果がこの場所だったというわけだ」

「おいおい、その商家は責めを負わなかったのか？ 盗まれた品を持っていないとは穏やかじゃないな」

「負いようがないほど大昔に盗まれた物だったんだよ」

治都がにやりと笑む。

「どういう人と場所を巡ってきたかは神のみぞ知る、ということだ」人波をかき分けるようにして進んでいた三人は、一つの店舗の前で足を止めた。異国の品ばかりを集めた店のようである。珍しい形の食器や装飾品、小さな武器までもが無造作に並べられている。

「見事だな」

言いながら治都が見つめているのは繊細な装飾が華麗な小刀である。実用的なものから明らかに飾りとして用いるものまで、数多く並べられている中で確かにそれは一際目を引く品だった。

「お、さすがに治都さんだ。目利きだね」

店の壮年の男が目敏く言う。知り合いなのだろう。

「掘り出し物だよ。多加羅で東方の片刃ははやらないが、これは持つて損はしない」

「俺に売り込まんでください。それよりもっといい客がわんさかいるでしょう」

軽妙なやりとりを苦笑して聞きながら、須樹と灰もまた商品を眺

める。その時ふと灰の目が一つの素朴な小刀に吸い寄せられた。先ほどのものに比べればそれが実用目的の物であることがわかる。飾り気のない黒い鞘には柔らかな木肌が何かの動物を模って嵌め込まれていた。

「手に取って見てもかまいませんぜ」

敏感に気配を察した店主が言う。灰は暫し躊躇ってからそれを手に持った。見た目よりもずしりとした冷たい感触である。間近で見ると、動物はしなやかに身を躍らせて走る様をあらわしているらしい。引き締まった流線型の体躯とくねるような長い尾の造形が見事だった。

「それも地味だがなかなかの品だ。まあ、子どもが持つにはちとそぐわないが、今から大事にして何年後かに身につければいいさ」

愛想良く言いながらも店主は本気で勧めているわけではなさそうだった。灰の質素な装いと年若さから、到底代金を支払うことなどかなわぬ平民の子弟と思っただろう。灰はその言葉を聞き流しながらも、なぜか惹きつけられてやまない図柄を見つめた。

「この図、どこかで見たことがある……」

ぼつりと灰が呟いた。どこかで　不意に血の気が引くような感覚に襲われて、灰は目をきつく閉じた。次に目を開けた時その感覚は消えていたが、それでも灰は一瞬のそれに動揺する。単なる図柄である。何処かで目にもすることもあろう。そう思ってみても、わき起こるのは言いようのない不安だった。

「そうなのか？　珍しい図だがなあ。この動物は何だ？　豹に似ているが……」

須樹もまた灰の手元を覗き込むと、店主に問いかけた。

「これは何という動物なんですか？」

「いやあ、それは何ともわかりかねますなあ。東方の品であることは確かだが、どこで作られたかもさっぱりなんですさ」

「これも東方の品か。ここらでは見かけない筈だ。一体どこで見たんだ？」



治都の問い掛けには答えず、灰はそつと小刀を元の場所に戻した。僅かに顔が強張っているのが自分であった。それを悟られぬように意識して表情を繕い、自然に聞こえるように言う。

「気のせいだったみたいです。もしかして前住んでいた場所で似たようなものがあつたのかもしれない」

「ふうん」

幸い灰の動揺に二人が気付いた様子はなかった。

露天を冷やかしながら歩くうちに奇妙な感覚も徐々に薄れ、灰はひそかに安堵する。やがて他愛のない会話と雑多な気配に、しこりのように凝っていた不安も消えていった。しかしそれでもどこかで気が漫ろだったのか、灰は声を掛けられるまでその存在に気付かなかった。

「兄様！」

人混みの中から一人の少女が手を振っている。

「お、稟りんじゃないか」

屈託なく答えたのは須樹である。彼は街で何度か稟と顔を合わせたことがある、いつしか親しく言葉を交わすようになっていた。

「須樹兄様もこんにちは」

につこりと笑う稟は小学校の友達らしい少女達と一緒にいる。髪飾りを置いた店を覗き込んでいた少女達もまた一様にこちらを見つめ、ひそひそと囁き合っては何かおかしいのか鈴やかな笑い声をあげた。

「違うわ。あんなに怖そうなおじさんじゃないったら。きつとあつちよ」

漏れ聞こえる内容は何を言っているのか皆目見当がつかないが、ちらちらと三人の姿を盗み見るらしい様子に、須樹達は思わず顔を見合わせた。

「何か注目を浴びとらんか？」

ぼそりと治都が呟く。

「そつみたいですね……」

灰の声はどこか苦々しい響きだった。須樹はちらりとそんな彼を見やるが、何を言うでもなかった。

「皆でそろそろ帰ろうって言ってたとこなの。兄様が見終わるまで待っていてもいい？」

凜は無邪気に問う。灰は迷うような素振りを見せながらも、恐らくそれは凜の言葉に対してではないだろう、と須樹は思った。言

「すみません。俺ももう帰ります」

「そうだな。待たせるのはかわいそうだ。俺達も適当に帰るよ。なあ、治都」

「お、おう」

咄嗟に頷いた治都ではあるが、その顔にはありありと戸惑いが浮かんでいた。目で問いかける治都に須樹は小さく首を振った。話は後だ、という意図を治都も察したらしい。灰はそんな二人に小さく頭を下げると、少女へと穏やかな声をかけた。

「凜」

灰の呼びかけに凜が途端に嬉しそうな笑顔になる。灰に駆け寄りながら少女達を振り返って手を振った。

「私兄様と一緒に帰るね。また明日」

「うん。また明日ね」

口々に挨拶をする少女達はどうかやら並々ならぬ興味で灰を見つめているようだ。灰と凜が雑踏に紛れて見えなくなると、興奮したような顔で口々に言う。

「やっぱりあっちだったね。言った通りだったでしょ」

「でもあんまり似てなかったね」

「馬鹿ね、凜は本当のお兄さんではないって言ってたじゃない」

やりとりを聞いていた治都はぎよつとして、少女達に問いかける。「おい、それは本当か？」

少女達はびくりとすると、俄かに黙り込んで後ずさった。その様子にため息をついた須樹は少女達の前にしゃがみ込むと、安心させ

るように笑んだ。

「ごめんごめん。驚かせたね。でもこのお兄さんは見た目と違って怖くはないよ」

思わず慚然とした治都ではあるが、半ば感心しながら須樹を見守った。少女達は人好きのする須樹の容貌と穏やかな声音に警戒を解いたようだった。治都ではこうはいかない。

「さっきの話だけど、稟は灰……彼女の兄さんのことを皆に言っていたのかい？」

おずおずと一人の少女が答えた。

「そうよ。私達どんな人がすごく気になってたの。だって稟ったら誰よりも一番好きなのがお兄さんだって言うんだもん」

ねえ、というように少女は周りを見回すと、他の面々も大きく頷いた。

「みんなで好きな男の子の話をしてる時にね、お兄さん以上に好きな人はいないって。そんなのおかしいって言ったら、本当に素敵で優しいんだからって言うの」

「あんまり稟が言うものだから、私達どんな人がすごく気になってたの」

いかにも少女らしい物言いと内容である。囀るような会話を再び交わし始める少女に礼を言うと、須樹は治都を引き連れてその場を後にする。十分に彼女達から離れてから須樹は漸く治都に向き直った。

「どういうことだ。灰には妹がいたのか？ いや、しかし本当の兄妹ではないとかが言っていたな」

「そうだよ。もっとも俺も詳しく事情を知っているわけじゃない。どうやら捨て子だったのを柳角翁りゅうかくおとうが引き取り灰と一緒に育てたらしい」

「全く知らなかったぞ」

二人はどちらからともなく雑踏を離れて家々の間の路地へと向かった。

「そりゃあそうさ。灰は決してそのことを言わないからな。この先も決して言おうとはせんさ。」

「なぜだ？」

須樹は壁に靠れると腕を組んだ。

「それは灰に聞かんとかわらんが、推測ならできる。おそらく、血が繋がらぬとはいえ、自分の妹であることがわかると、周りから冷たい仕打ちを受けるかもしれないと思っっているんだらう。」

須樹は街に見回りに出た際、稟を見かけたことがある。その時一緒にいた灰は物影に潜むようにして決して稟に近付こうとはしなかった。彼女が気付かぬままに通り過ぎるまで、ただひっそりと佇んでいただけだったのである。なぜ、と問うた須樹に灰はただ笑みをみせただけだった。穏やかでありながら、どこか厳しい気配を含む笑みだった。

須樹はなおも納得しかねるような治都の表情を見やる。

「若衆内部での灰への扱いを見てみるよ。俺達の範では受け入れられているが、いまだに嫌な態度を取る連中もいるだらう。灰にしても別に俺達を信頼していないわけじゃないと思うぞ。ただ、灰なりに妹を守りたいんだらう。」

もつとも、稟はまた違うらしい。血の繋がらない兄が惣領家に新たに迎えられた何かと噂に事欠かない人物であることこそ言っていないようだが、殊更に隠そうともしていない。先ほどの少女達の話からするとむしろ自らすすんで話してさえいるようだ。

稟が灰の素生を言わぬのは、少女にとってそのような事情などさして重要ではないせいなのだらう、と須樹は思った。たとえそれが明らかになることによって周りが離れたところで彼女の態度が変わることはないだろう。少女にとっては灰という存在そのものの方が大事であり、誇ることはあっても卑屈に黙ることはあるまい。何度か話したただけではあっても、須樹は少女が灰へと寄せる無二の信頼と愛情に気付いていた。

「確かに、そうかもしれない。」

治都も渋々頷いたが、まだ気にかかることがあるようだった。

「何だ？ まだ気になることでもあるのか？」

「……あると言うか、ないと言うか」

「なんだはつきりしろ」

治都は思い切ったように顔をあげた。

「若衆のことで思い出したんだが、お前は少し灰を特別扱いしすぎじゃないか？ 剣舞けんまいのことだって別に秘密にするようなことじゃないだろう。どうせいざこざが起これば灰も知ることになる」

「そのことか……」

どうやら治都は鍛錬所での会話のことを言っているらしい。

「くだらない話を聞かせる必要はないだろう」

「くだらないとは言っても若衆内部の力関係は無視できないぞ。お前がいい証拠だ。人望があるせいで頭や貴族連中に目の敵にされている」

「俺は別に気にしていない。それにただでさえ灰は複雑な立場だぞ。これ以上余計なことを聞かせて煩わせる必要はないだろう。そもそも俺達の範には関係のないことだ」

「だが、若衆でやっていくには知る必要があるんじゃないか？ どれだけでも限らんとぞ」

須樹は考え込むように黙り、肩を竦めて言った。

「確かにな。俺はそういう類のことが苦手だから知ろうとも思わなかったし、実際それほど知っているわけではない。だが、灰には必要かもしれない」

治都は安堵の表情を見せる。どうやら過分な信頼を寄せるらしい相手に須樹は苦笑した。

「そんな顔をするなよ。お前が灰にとつていいと思えば話せばいいんだ。お前らしくもないな。いつもの遠慮の無さはどうした」

「お、言ってくれるな。一応お前が錬徒れんとだからな。気を使ってやっただろうが」

治都はおどけて言い、次いでため息をついた。

「それにしても俺は傷ついたぞ」

「何がだ」

「さっきの子達だよ。俺のことを何だと思ってるんだ。怖いというのは百歩譲ってまだ許せる。だがおじさんだと!? 確かに灰と比べたら老けて見えるが、まだ十六だぞ! ひどいとは思わんか!」

真実傷ついたような表情の治都である。須樹は視線を迷わせ口元を手で覆ったが、答えた声は隠しきれない笑いで震えていた。

「……気にするな……子どもの言うことだ」

「おい、お前まさか笑ってるんじゃないだろうな。人が傷ついたつてのに」

「気のせいだ」

「笑ってるだろうが」

須樹はとうとう堪え切れずに笑い声をあげると、励ますように治都の肩を叩いた。

「なに、お前がいい奴だってことは俺が知っている。多少老けて見えようが気にする必要はないぞ」

「全く慰められん」

ぼやきながらも、治都の声もまた苦笑に紛れた。

「さて、そろそろ俺達も帰ろうか」

言いながら時を測るために上空を見上げれば、徒雲が一つ物問いたげにあった。

「ねえ兄様、あの雲ほとんど空の中に溶けていくわ」

稟は細い指を上空の雲へと向けた。灰は稟が指し示す先へと眼差しを投げた。雲は風に溶かされるようにその輪郭をぼかし、羽毛のように柔らかく崩れかけていた。

灰と稟は星見の塔へとゆっくり向かっていた。いつもならばひっそりなしにその日のことを話して聞かせる稟が、この時はおとなしく口数が少なかった。灰はその様子を見ながら、少女達とともにいた稟の姿を思い出していた。街で何度か稟を見かけたことはあっても、友達と一緒にいるところはそういえば見たことがなかった、と気付く。

雑踏に紛れてこちらを見つめていたその姿が、ふと心にかかった。今更ながらに覚えた違和感である。かつて柳角のもとにいた時、村人から避けられていた彼女が一人ではつんと立ち尽くしていた姿が思い出され、ようやく違和感の正体がわかる。雑踏で見た彼女は人に囲まれてなお、記憶の中の姿よりも独りきりに見えたのだ。まるで浮き上がるように、とも言える。それは不思議な感覚だった。

改めて稟を見れば、その表情はどこか張りつめたものだ。先ほど、少女達に囲まれていた時にはなかったそれに、灰は問いかけた。

「稟、小学院で何かあったのか？」

稟は肯定も否定もせず、髪先をいじる。言葉にできない鬱屈がある時、稟はよくそうするのだ。無意識なのだろう。

「ねえ、あの雲はいつの間にか消えていくけど誰も気にもとめないよね」

不意に稟が言った。誘われるように再び雲に目をやった灰は、稟が何を言おうとしているのか掴みかねる。

「私、前いた村ではあの雲みたいだったと思うの」「ぼつりと稟が呟いた。

「誰にも気に留められずにゆらゆら漂ってるような感じ。あの雲みたいに寂しい感じはしないけど。誰にも気にされなくて、いつの間にか消えてなくなっちゃうの。でも今はなんだか自分が石ころみたいになつた感じがする。自由に動くこともできなくて、誰かに蹴飛ばされて転がって、ぶつかればこつって音がする石ころ。私、あの雲みたいになりたいなあ」

最後はか細く、微かな葉擦れにも紛れそうな具合だった。一体何があつたのかその言葉からは窺い知れないが、灰には秘めた意味がわかるような気がした。

「雲はいずれ地上にかえる」

「え？」

唐突な言葉に稟は灰の顔を振り仰いだ。灰はそれに笑んだ。

「師匠がよく言っていた。雲は水が空で結ばれた姿だと。水と雲は本質は同じでありながら、その姿も周りに与えるものも違う。だが雲はいずれ水となつて地上に降り注ぎ、遍く命の糧となつて、再び天へとかえる。目に見えずとも消えたわけじゃない。姿を変えて天と地を結び、巡り巡って世界をつくる」

「お師匠様が？」

灰は頷いた。記憶を辿るように目を細める。穏やかなしわがれた声まで聞こえるようだった。かつて彼に多くを授けた老人が何をその言葉に込めていたのか、灰は今になつてそれを考えずにはいられない。彼は深い目をして少年を見つめ、最後にこう言ったのだ。

大いなる意思というものは、水と雲のみならずすべての事象、すべての命はそれに従っているに違いないが、ただ人という存在だけはそうではない。哀れで厄介なものだ。無明に生まれ、それすら気付かずに時を過ごし、傷つけ合い奪い合う生き物だ。水ほどこに無垢でなく雲ほどに自由でなく、人同士姿形はそれぞれに似ていても途方もなく孤独でもある。だが、そうであるからこそ考える力を授けられたのかもしれない。己を自覚した時、初めて己が力の使いようもわかる。どのように生き、どのように世界と関わってい



くかもその時初めてわかるのだ。

「稟、多加羅たからに來たことが辛いかな？」

灰の問いに稟は首を振る。迷いはなかった。

「辛い。兄様がいるから私は辛い。」

その言葉を聞いて灰は思わず言葉に詰まった。稟は知らない。灰が無条件に信頼と愛情を寄せる少女にどれほど救われているかを。

「ね、兄様、明日は若衆わかしゅっはお休みなんですよ？」

「うん」

「だったら朝山に行くのよね？ 私も一緒に行つていい？」

思いつめたような表情のまま、稟は言った。その背後、彼方の雲は僅かの名残を残して消えつつあった。

次の日は、その季節には珍しい陰鬱な日だった。所々不穏な暗緑色に染まる分厚い雲が、空の一面を覆っている。今にも雨が降り出しそうな様子でありながら、大気はどこか煤けたような乾いた匂いに満ちていた。

灰と稟が星見の塔を出たのは払暁のことである。夜の名残を秘めた靄に覆われながらも、山はすでに活動をはじめた生き物の気配に満ちていた。若衆の休日には決まって山に入る灰に、稟がついてくるのははじめてのことである。

「兄様、見て」

稟がしゃがみこんで指さす先を見てみれば、下草に半ば埋もれるようにして滲むような紅の花が咲いていた。秋に咲く野草である。

「きれい……」

稟は呟くと指先で花びらに触れる。花はその細い茎をかそけく揺らした。少女は軽やかな足取りで歩きまわり、木々の梢に目を細め、藪を覗き込んで名も知れぬ小さな花や実りを見出す。

「おいで、稟」

灰は手招くと、すぐ後ろに聞こえる少女の足音に気を配りながら、すでに見知った木々の間をゆっくりと登って行った。かつて星見の

塔の窓辺で見た何とは知れない闇の塊は、あれ以来あらわれてはいなかった。それでも灰は山に踏みこむ時には常になく慎重にならざるを得ない。稟を連れて山に入ることに抵抗がなかったわけではないが、昨日突然一緒に行きたいと言った少女を拒絶することはできなかった。

やがて歩く先の木々が途絶え、開けた場所へと出る。山の中腹にあるそこは、さほど高い位置にあるわけではなかったが、街とその向こうに広がる金笹きんざさの畑を見渡すことができた。稟は灰と並んでその景色を眺めると、僅かに紅潮した顔を綻ばせた。

遙かな地平には太陽が顔を出しているのだろう。厚い雲を透かして光の円が波状に広がり、畑がくすんだ金色に輝いている。渦巻くような天空の様相と比して街は巖として静寂に沈み、巨大な一つの岩のようにも見えた

灰が木の幹を背に座り込むと稟もまたそれに倣い、灰に寄り添うようにして膝を抱え込んだ。それもまた稟が落ち込んだ時に見せる癖である。

「多加羅の街は大きいのね」

返事を求めている言葉ではないのだろう。灰はただ複雑な影を刻む街並みを見つめた。

「小学校にね、朗ろうという子がいるの」

暫くの沈黙の後ぼつりと稟が言った。

「その子のお父さんがね、突然いなくなってしまうたんだって」

言いながら稟は足元の草を撫でる。稟はたとえ名も知れぬ他愛のない草でも抜こうとはしない。戯れにも決してそのようなことはない少女なのだ。

「朗の家はとても貧しいから、お父さんがいなくなると生活が苦しくて、朗も小学校をやめて働かなきゃだめだって言うの。朗はお父さんがいなくなっても辛そうだった」

遠く小さな家の煙突から細く煙がたなびく。淡くくゆりながらそれはやがて上空の鈍色の中に溶けていった。

「一人の子がね、朗のお父さんはきつと貧しいのが嫌になって家族を捨てて來螺（らいす）にでも行っちゃったんだろ、って言ったの。來螺（らいす）ってみんな怖くてひどいところなんだって考えてるのね。でも男の人にとつてはとても楽しい場所なんだって」

灰は敢えて言葉を挟むことはしなかった。來螺という街がどのような場所か、稟に言っただうなるものでもない。そして少女が知るに相応しいことでもないだろう。

「私、來螺（らいす）ってよく知らないけど、その子が朗を傷つけるために言っただって思ったの。わざと嫌な思いをさせるために言っただって……。だからついひどいと言わないで、辛い思いをしてる人にどうしてそんなこと言うのってその子に言っちゃったの。その子黙って、そのうち泣き出したわ」

灰はちらりと稟の表情を窺う。稟はなおも指先で優しく草の葉を撫でていた。どうやら稟が落ち込んでいる原因は他にあるようだ。

「そうしたら朗が私に向かって言ったの。お前みたいに裕福な奴に僕の気持ちができるもんかって。変に味方面するなって。朗は怒って、でもなんだか悔しそうに私のこと睨（にら）んでた。私そんなつもりで言っただんじゃなかったの。朗を傷つけるつもりで言っただんじゃなかったのに」

稟の声は次第に小さくなり、その膝元にこぼれるようにして消えた。

灰は蹲る稟の姿に、ふと胸が詰まるような思いに駆られた。あの小さな村で受けた村人からの冷たい仕打ちにも稟は決して涙は見せなかった。あからさまな偏見や、無言に込められた嫌悪にも彼女は卑屈にならず、例えどれほどに辛くともそれを出すことはなかった。だが、稟が今心に抱える痛みは、傷つけられることへのそれではない。期せずして人を傷つけてしまったことへの後悔であり、恐れだった。

「私、友達ができて本当に嬉しかったの。でもこの頃ほとんど怖くなる。前は一人でいても平気だったのに、今は周りを大切に思えば

思うほど壊れたらどうしようって思う。でもどれだけ仲良くなっても、その人が心の中で何を思うかなんて全然わからないの」

それは誰しも同じなのだとさえよければいい。人に拒まれ、疎まれ続けてきた少女なのである。

「私、朗のことをわかってるつもりになってたんだ。それで朗に言われた時に腹を立てたの。あなたのために言ったのにつて……」

「まだそう思ってる？」

「わからないの。だってまだ心の片隅では、私が言ったことは間違っていないって思ってるの。そんな自分が嫌なの。すごく汚い気がする。そう思ったら、どれだけ友達と一緒にいて、おしゃべりして笑ってても、どんどん一人ぼっちな気持ちになっていくの。こんなに私は汚いのに、知らないふりして表面だけで笑ってて、みんなもそれには気づかないの」

「朗が傷ついたことはわかったんだよね？」

凜は俯き、そして小さく頷いた。

では、人と関わるということとはこういうことなのだ。複雑な心を抱えて混じり合うこともなく、同じ空間にいながら隔絶してそれぞれに孤独であり、確固としてありながら曖昧な境界で接する存在

不意に灰の内部に沸き起こったのは、慄きであり、薄膜に覆われた視界が突然に晴れたような新鮮な驚きだった。それは未知の感覚である。だが、それを言葉にすることは灰にはできなかつた。たとえできたとしてもこの場に相応しいものではなかつただろう。

「凜、ならば受け止めるしかないよ」

「受け止める？」

灰は頷いた。なだらかに傾斜して広がる街並み、そこに一体どれほどの人がいるのだろうか。眠りに抱かれ、あるいは目覚め、そして当たり前のように一日を始める、その不思議。

「凜が傷つけるつもりがなくても、朗が凜の言葉に辛い思いをしたのだとしたら、凜はその事をまず受け止めて、認めるんだ。それは多分、とても辛いことだけど、必要なことなんだと俺は思うよ。そ

こからじゃないと、朗の気持ちも考えることはできないんじゃないかな」

稟はしばし灰の言葉を噛みしめるようにして俯いていたが、こっくりと頷いた。次に顔を上げた時にはそこに惑いはなかった。

「私、ちゃんと受け止める」

灰は答えなかった。答えられなかった。眩しい思いで稟を見つめる。稟は前を向いて歩いて行けるだろう。やがてその朗という子と向き合うこともできるに違いない。

「ありがとう、兄様。兄様に聞いてもらって良かった」

にこりと笑んだ稟はその澄んだ眼差しで灰を見つめる。灰はそれに加えて頷くことしかできなかった。立ちあがった稟は大きく伸びをした。その動きが途中で止まる。

「あれ、何かな」

眩くような声に灰も立ちあがる。稟が指さす方を見れば、街の一角に薄墨色の煙が立ち上っていた。煙突からのささやかなものではない。

「火事だ」

煙が立ちのぼるすぐ脇の家の窓が開き、人影がのぞく。遠く表情もわからないその人物は、慌てふためいたように顔を引つ込めた。その一角が騒然とするまでさほどの時間はかからず、程無くしてその原因たる炎も消し止められたのだろう。燻るような細い煙もやがて消えた。

「良かった。消し止められたんだね」

稟がほっとしたように言った。見詰める先で、突然の災厄に見舞われたその一角も次第に落ち着きを取り戻しているようだった。

岩山を刻んだような街の陰影はいつしか平坦で柔らかな輪郭の中に沈み、明瞭に街の姿が浮かびあがる。灰と稟はどちらからともなく顔を見合わせると、ゆっくりと山を下って行った。おそらく<sup>えな</sup>野菜が起き出して、四人分の朝食を作り出している頃だろう。

### 13 (後書き)

余談ですが……今回は灰というキャラが書き手にとってとんでもなく難物だとわかった部分です。なんでそういうことを言うんだ！

……と、書いている本人がじたばたした覚えが。今思えば、灰がこの時点で他者に向けていた視線は、木や風が人間に向ける意識があるかと仮定して、ですが）に近かったんだろうな、と。

ではでは、今後ともよろしくお願いいたします！

早朝に起きた火事はさほど大きなものではなかった。家の間の細い路地で起こったそれは、傍らの店が商品の運搬に使用していた木の箱が燃えたものだったという。灰はそのことを鍛錬所へ赴いて知った。休息日に当たっていた須樹の範に突然の召集がかかったのは、まだ昼にもなっていない頃だった。

鍛錬所の広場には全ての範が揃っているのか、見慣れない顔も多い。大柄な冶都が手を振っているのに気づき、灰がそちらへ向かうと、須樹をはじめ範の顔ぶれがすでに集まっていた。冶都は挨拶もそこそこに興奮気味に言った。

「おい、知ってるか。放火だつてよ」

放火 それは初耳である。確認するように須樹を見れば、彼もまた頷いた。突然の召集はやはりあの火事のせいらしい、と灰は思う。予測はしていても確信がなかったのである。

「火の気のないところが燃えたらしい。犯人はわからないとさ」

「怪我人が出なくて幸いだったな」

須樹の言葉である。多加羅の街は石造りの家が多い。例外は外延部であり、貧しい人々が肩を寄せ合うようにして暮らすそこには木造の家もあったが、街の中心部にはまず見られないものだ。今朝のように街の中心部で火事が起こったとしても容易く燃え広がることはないが、それでも炎は脅威だった。

「なぜ若衆に召集がかかったんですか？」

灰の問いはもっともなものだと言えた。火事が起こりそれが放火であったという、しかしそれは警吏の管轄のことである。若衆がそれにどう関わるのか灰にはわからなかった。灰の問いに答えようとした須樹は、しかし不意に口を閉ざし、前方を示した。ざわめく若者達の前に加倉が進み出て来たのである。

加倉は次第に静まる広場を見渡し、おもむろに声を発した。

「今朝方、街で火事があった。ごく小さなものではあるが、放火と  
考えられている」

すでに皆知っていることではあるが、加倉の言葉に俄かに広場の  
緊張が高まった。

「犯人はいまだにわかっていない。祭礼を十日後に控えた時期にこ  
のようなことが起こるとは非常に由々しきことだ」

不意に加倉は言葉を切ると、視線を一点に向けた。

「仁識にしき、現在の見回りの担当はお前の範だったな。何か気付いたこ  
とはなかったのか。見落としていたことがあるならば、若衆にとっ  
ても不名誉なことだぞ」

須樹は思わず顔を顰める。灰にも、加倉の言葉はこの場に相応し  
いものとは思えなかった。早朝に起こった火事である。若衆の見回  
りがそれを察知することなどできようはずもない。それに加えて見  
回りの担当は一つの範だけではなかったはずだ。なぜ一範だけを責  
めるのだろうか。仮に何かしらの責があるにしても、若衆が一同に  
会する場で問い質すのはあまりに配慮に欠ける。

答えた声は淡々としていた。

「特に何も無い。あれば報告している」

灰は声の主を見た。赤味がかつた髪にどこか女性的にも見える繊  
細な面差しの少年が、臆することもなく加倉の視線を受け止めてい  
る。柔和な外見とは裏腹に、その声音には突き放すような透徹とし  
た響きがあった。静けさにも通ずる端然とした立ち姿には無駄がな  
い。

加倉はそれ以上を仁識に問おうとはしなかったが、腹立たしげな  
表情が過ったことに灰は気付く。

「皆も知っているとおり、この季節には望ましからぬ者達も多加羅たから  
に集うこととなる。祭礼を無事行うためにも、今日のような事件が  
二度と起こってはならない。通常ならば祭礼の前に若衆は見回りを  
行わぬが、このようなことが起こってはそういうわけにもいかぬ。  
本日から全ての範が分担して、昼夜二回の見回りを行うこととする。



その分担をこの後錬徒れんとに伝えるので私の部屋に集まってくれ」

加倉はそこまでを一気に言つと、踵を返して建物の中へと姿を消した。その後を各範の錬徒が追う。須樹に次いで仁識が建物へ入るのを見ながら、灰は加倉の言葉の意味を考えていた。

参志の儀から、否、それよりも前に出会っていた加倉に対して彼が持っていた印象は、あらゆる人に対して持つのと同様の輪郭のぼやけた曖昧な影のようなものでしかなかった。加倉が灰に向ける嫌悪や忌避感でさえ、多加羅の者であれば少なからず持つものであると思うだけだったのだ。だが、それは真実そうだったのだろうか。先ほどの加倉の言葉はあからさまな意図を含んでいた。それは稚拙ではあったが、非常に効果的なものでもあったのだ。

「治都さん、頭は仁識という人のことを敵視してるんですか？」

小声で傍らの治都に問えば、一瞬驚いた顔をしたものの彼はにやりと笑う。

「あまり大きな声では言えんことだが……その通りだ。雲の上の貴族様同士の争いだから、俺達平民には関わりのないことだが、どっちもどっちと言ったところだ」

ここまで言つて治都は目の前の少年がその貴族を束ねる惣領家の者であることを思い出したようだった。

「あー、お前は別だが。お前は俺達の仲間だ」

慌てて言い繕う治都に灰は思わず苦笑した。それを見て治都もつられたように笑顔になる。

「須樹が戻つて来るまでしばらくかかりそうだな。来いよ」

言つと治都は人気のない壁際に行き、胡坐をかいて座り込んだ。灰もそれに倣う。

「須樹はあの通りお節介焼きなわりに妙に真面目で潔癖だからな、あまり若衆内部のいざこざをお前に言わんだらう。だが、ある程度は知つておいた方がいい」

大らかで単純明快な治都ではあるが、その実多加羅の政情にも関わりがある父親の影響で、貴族同士の争いや複雑な駆け引きにはか

なり詳しい。

「もう気付いているとは思うが、若衆の中の力関係は単に貴族とそれ以外ってわけじゃない。貴族連中の内でも敵対関係ってのはあるんだ」

それに灰は頷いた。貴族の中にも由緒ある大家である上位の者と、歴史が浅い、あるいは分流の中位、下位の者がおり、複雑な序列を成している。おしなべて上位の貴族である加倉やその取り巻き連中とは一定の距離を保つ中道の者達もいるのだ。それがごく一部の上位貴族と、中位や下位の貴族なのである。前者と後者は必ずしもうまくいっていないようだった。だが、中道の者達もまとまりはなく、加倉の一派にあからさまに対抗する者はいない。

灰には複雑怪奇な家系図に端を発する優劣意識などそれこそ奇妙なものにしか思えなかったが、彼らにとっては重大事なのだろう。若者達の関係はそのまま上下関係に縛られた親の勢力図を模したものだといえる。そしてその中でも加倉に唯一対抗し得る者がいるとすれば仁識なのだという。もっともそう思っているのは周りばかりで、本人にそのつもりは皆無のようだった。

「仁識の祖父つてのが前の玄士げんしだったうえに、歴史的にも古い上位貴族の出なんだ。仁識の父親が玄士の座につく話もあったが、二代続いて同家の者が玄士を務めることに異論が出たために、結局絡玄らくげん様になっただけらしい。仁識自身も真名まなを継ぐ嫡子だから、家の厄介者である二男やら三男の貴族どもとも一線を画している」

真名とは貴族が代々受け継ぐ字であり、後継者のみがそれを名乗ることができるという、貴族の証そのものなのである。

「頭かしら自身が絡玄様の息子とはいえ三男だからな。仁識は本来なら博露院くろいんにでも行って中枢官位を目指してるはずなんだが、あまりにも不真面目なせいで父親が性根を鍛えるために若衆に放り込んだという噂だ。頭脳でだめなら得意な剣術をいかすほうがいいと考えたのかもねん」

治都の言葉は父親の受け売りなのか詳細だった。

「実際仁識は剣術の腕と劍舞けんぶの舞い手としてはおそらく若衆でも随一だ。とてもそうは見えないがな。頭も仁識を妙に警戒しているんだが、仁識のほうには欠片も対抗しようって気がない。錬徒は引き受けたが、はじめはそれすらも相当に渋しぶったらしい。その言い分が面倒だから、というんだから」

「頭は仁識を仲間に取り引き入れようとはしなかったんですか？ それだけ存在感のある相手なら敵対するより味方にしたほうがいいですよな」

灰の問いに治都は頷いた。

「はじめは頭も仁識を取り巻き連中に引き入れようとしたんだよ。だが仁識が相手にしなかつたって噂だ。副頭ふくがしらにしてやると持ちかけたのを一蹴したとか」

何かと便宜をはかり仲間に取り引き入れようとする加倉に対して、仁識が返したのはたった一言　鬱陶しい　それだけだったらしい、というのは噂である。しかし仁識ならばさもありません、というのが皆の一致した思いだった。それが真実にしろそうでないにしろ、加倉が仁識を毛嫌いしているのは周知の事実である。

「まあ、俺も仁識の態度を見ていると腹が立つことはあるがな。協調性に欠けるうえ言うことがいちいち辛辣だ。どれだけ剣の腕が良かろうと、あの態度では自ら敵を作っているようなものだ」

苦々しく言う治都もまた仁識には良い印象がないのだろう。もしかすると剣術において上回る相手への対抗心があるのかもしれないな。仁識は治都や須樹と年は同じでありながら、その剣術の技巧は成人した兵士のそれを上回るという。そして何につけ直情径行の治都には、恵まれた立場にいなからそれを放り出すような仁識の態度は不可解であり、腹立たしいものなのだろう。

「確か剣舞の中央の舞い手は最もうまい者が務めるんですよ。仁識が随一の舞い手だとしたら、頭は中央の座を譲るんですか？」

「問題はそれなんだよ」

途端に治都は苦々しい表情になった。先日須樹が言い渋ったのも

このことに違いない。

剣舞は五つの複雑な型があり、そのうち四つの型をそれぞれ一人の副頭と三範の年長者が一集団として舞う。そしてあと一つの型は中央に立つ一人の舞い手に任されるが、常であれば頭が務め、それよりもうまく舞う者がいれば譲られることもある。

「剣舞は若衆の誇りだからな、明らかに優れた舞い手がいるのにそれを無視することは頭とてできんだろう。そうは言っても仁識と頭があそこまで反目してはどうかかわからん」

そもそも加倉が順わない者を己の前に据えることなど想像すらできないことである。

「つまり、一混乱あるかもしれない、と」

低く呟くような声に治都は思わず灰を見詰めた。灰は僅かに目を細め、続けた。

「要は仁識が中央を務めるに相応しくないとということを示せば、頭にとつては都合がいいわけですよ。俺が若衆には相応しくないことを参志の儀で証明しようとしたように」

治都が鋭く息を呑んだ。

「……気付いていたのか」

灰ははつとする。最後の言葉は半ば無意識のうちに零れたものだった。己の思考に沈んでいたために鋭さを増していた表情が俄かに気まづげなものに変わった。

「そうだったんだらうなとさっきの頭の言葉を聞いて思っただけです。頭は意図して仁識への印象を悪くしようとしている感じでしたから」

「まあ……そういうことだ。参志の儀のやり方一つ見ても頭は手段を選ばんところがあるからな……俺が言えた立場じゃないが、お前も気をつけた方がいい。仁識に対しても、お前に対しても頭は何をするかわからんぞ」

そこまで言って治都は建物から出てくる須樹の姿に気付いた。須樹はどこか浮かない表情で範の面々に近づいて行く。治都と灰が足

早にその場へ行くと、淡々とした須樹の声が聞こえた。

「俺達の見回りの担当区域は街の外延部だ。仁識の範とともに今日から見回ることとなる。見回りに行くのは範毎に六人、頭から指名があつた」

治都と灰は思わず顔を見合わせた。

「勘弁してくれ……」

治都は呟く。げんなりとした響きだった。次いで告げられた加倉が指名したという見回りの面々の中に、灰の名があつたことはもはや意外でも何でもなかつた。

多加羅の祭礼には近隣の街は勿論のこと、国境地帯からも多くの人が訪れる。儀式そのものは三日の間のことであるが、実際にはその数日前から街は常ならぬ活気に満ち溢れるのだ。そして多加羅の街衆にとつても秋の祭礼は一年で最も大きな娯楽なのである。街の家々は黄色の布や造花で飾られ、道端には気の早い露店がちらほらと開いていた。

「納得がいかなぞ」

治都はぼそりと呟いた。目の前を歩く背中に聞かせないための小声である。傍らを歩く須樹と灰はちらりと視線を交わし、無言で前を行く仁識を見やった。担当として割り当てられた街の外延部へと向かう途中である。

「なぜ仁識の範と一緒になんだ。しかも街の最も外延部とは何らかの意図を感じるぞ、俺は。納得がいかな」

須樹の範の面々はすでに灰にとつても馴染みの連中である。いずれも気の良い少年ばかりだが、対して仁識の範の顔ぶれは灰には名を聞くのも初めての者ばかりだった。自然と範ごとにかたまつて歩く彼らだったが、不意に仁識が振り返つた。

「むろん意図はあるだろう」

ぎよつとしたのは治都ばかりではなかつた。須樹と灰も思わず立ち止る。対して涼しげな顔の仁識は淡々と言葉を続けた。

「この辺りでは祭礼の時期に騒動が起こらない方が珍しい。多加羅でも最も規範が緩いうえに、国境地帯の者達も多く出入りするからな」

「つまり何事か起こってほしい者にとつては恰好の場所だということか。如何様にも責を問えるからな」

須樹が言うのと仁識は笑んだ。到底友好的とは言えぬ皮肉な笑みに、須樹は眼差しを硬くした。仁識はちらりと灰へも視線を流した。

「そういうことだ。だが、厄介なことに関わりたくはなかったら極力その口を閉ざしていることだな」

「口を閉ざすだけでは頭の思うつぼだろう」

両範の面々は口を出すこともなく、須樹と仁識の抑えた口調のやり取りを聞いていた。鍛錬所を出てからとりたてて言葉を交わしていない彼らだったが、互いの距離をはかるような視線を交わし合う。「だからどうした。くだらん思惑に乗る方がつまらん。言いたいことは言わせておけばいい。どうせそれぐらいしか奴にはできんのだからな。そうやって己の力を誇示しているつもりが、結局は愚かさを露呈しているだけだ」

仁識は言う。加倉の稚拙な言動に対する痛烈な皮肉だった。

「それだけとは俺には思えんぞ。剣舞のこともある。頭は何としてもお前を自分の前には立たせたくないんだらうよ」

治都が口を挟む。それに対して仁識が返したのは、憐れむような馬鹿にしたような表情だった。

「剣舞がどうした。中央で舞いたければ舞えばいい。私はそんなこととはどうでもいい。くだらん上下意識に振り回されるのもうんざりだ」

「だが、現実にごうやって振り回されてるだらうが。本当に厄介事に巻き込まれてもそう言ってられるのかよ」

「忘れてもらっては困るが、頭の標的は私だけではない。そちらにもいるだらうが。もっともたかだか若衆頭の浅知恵程度でどうなるわけでもないだらうが、巻き込まれて迷惑しているのは私達の方だ」

顔を顰めた須樹が何事かを言おうとして、しかしそれは突然の怒声に遮られた。顔を振り向けたその先は、同じく振り返り立ち止まる人々により見えない。徐々に高まる声は誰かが言い争っているらしい。不穏な気配に人垣ができていた。

「さっそく厄介事かよ」

治都は苦々しく呟くと、人混みを？き分けて歩き出す。若者達もその後を追った。威圧的な男の声と怒りを含んだ若い女性の声が響いていた。

「いい気になりやがって！ 來螺らいの売春婦風情がお高くとまってるんじゃないよ！」

「いい加減にしてよ！ 先に失礼なことを言ったのはあなたじゃない！ 少なくとも來螺らいに来る客でももつとましだわ！ ちよつと、その手を離してよ！」

次いで聞こえた声に、灰の顔が強張った。

「おやめ、叶かの。すいませんね旦那。私らは今は商売のために来てるんじゃないんですよ。滞在と商売の許可をお役人に届け出る途中ですってね。旦那もこんな野暮はなさらないで、ちゃんと店に来て下さいな。街の外で今年も開きますからね」

とりなすような年配の女性の声である。

「うるせえ！ 俺はこの女に礼儀つてもんを教えてやってるんだよ！」

漸く人波が途絶えた先で、男が若い娘の腕を掴んでいた。痛みにもそれとも嫌悪のためだろうか 顔を歪めた娘を男はさらに引き寄せようとした。治都は背後から男に近付くと、その腕を掴んだ。振り返った男は頭一つ以上高い治都の図体にぎよつとし、しかしまだ若いその相貌に気付くと途端に傲岸な表情を浮かべた。

「なんだお前は！ 腕をはなせ」

「そうはいきません」

落ち着いた声は須樹のものである。男は須樹の腰にある飾り気のない剣と、その物腰にようやく誰が相手かを悟ったのだろう。あか

らさまな薄ら笑いを浮かべると脂の浮いた歯を剥き出した。

「ふん。若衆わかしゅうか。お前らのような若造が口を出すことじゃないんだよ」

須樹ちらりと治都に視線を送ると、にこりと笑んで言う。

「どうかその方の腕をはなしてください。何もこんな往来の真中で騒動を起こさなくてもいいじゃないですか」

男の顔が引き攣る。須樹の目配せを正確に理解したらしい治都が、握る手に力を込めたのである。若衆の中でも力では突出している治都である。次第に男の顔が赤らむ。僅かに汗ばむ額が、それが怒りのせいではなく痛みのせいであることを知らしめていた。

「わ、わかった。はなしてやるよ」

男は言う。と娘の腕をはなし、同時に解放された自らの腕を抱え込んだ。ぎよろりと須樹と治都を睨みつけ、未練たらしく娘を横目で見る。

「これからはもう少し客への態度を考えるんだな！」

男は捨て台詞を残し、肩をいからせて歩き去った。溜め息をついて須樹は二人の女性を振り返った。中年の女とまだ十代だろう、若い娘である。治都が半ば口を開けて娘を見つめている。須樹もまた思わずその姿に目を奪われた。

顔をあげた娘は艶やかな美貌だった。栗色の波打つ髪が背の中ほどまで流れ、柔らかに蜂蜜色の光を帯びている。額の真中で分けた髪に縁取られた顔は驚くほどに色が白く、小作りな造作の中で髪と同様に淡い色彩の瞳が印象的に大きい。その顔立ちはただ愛らしいだけではなく、凜とした美しさがあった。薄布を重ね合わせた異国風の衣がゆったりと体を包み、清楚な藤色が白い肌に映えている。

「ありがとうございます。助かりましたよ、お若い方」

女性は丸顔を綻ばせて須樹に言う。須樹はそれに曖昧に頷きながらそつと娘を窺った。娘は僅かに眉を顰めて須樹の背後を見つめていた。

「さ、叶、行くよ」



女性に促されて娘が歩き出す。しかし何が気になるのかいまだに娘の視線は一点に向けられたままだ。須樹は娘の視線の先を追った。そこに、灰がいた。どこか青褪めた灰もまた、まっすぐにその視線を娘へと向けていた。再び娘を見やった須樹は、女性に腕を引かれて行きながら、娘の口が小さく動いたのに気づいた。無音のそれは、しかし確かに一つの名を刻んでいた。灰、と。

女性と娘が去り、人垣が崩れてなお立ち尽くしていた灰は小さく息をつく、と、僅かに俯いた。

「灰」

呼ばれて灰は顔をあげる。出会ってから須樹が見せる表情はこちらを氣遣うものばかりだ、と灰はほんやりと思ひ、知らず強張っていた体から力を抜いた。須樹は困惑と懸念をその顔に浮かべながら、何を言うべきか迷っているようだった。

「その……大丈夫か？」

「すみません。ちょっとぼんやりしてしまいました」

言えば、須樹はそれ以上問おうとはしない。娘が呟いた彼の名におそらく須樹は気づいたのだろう、と灰は考える。須樹の不器用な氣遣いに灰は何も返すことができなかった。

「美しいなあ……」

治都がまだ陶然とした表情で娘が去った方向を見つめて言った。

他の若衆もまた一様に頷く。双方の範に漂っていた気まずさも突然の騒動に霧散していた。

「來螺くわいらの芸能家げいのうかだな。祭礼の興行に來たんだらう」

淡々と言った仁識が、觀察するように灰と須樹の様子を見つめているのに気づいた者はいなかった。

## 14 (後書き)

一気にここまで更新しましたが、誤字・脱字・誤用があれば申し訳ないです。注意して見ても見落としが多いもので。

何はともあれ、少しでも楽しんでいただけると幸せです。  
今後ともよろしくお願いいたします！

その同じ時のことである。惣領家の執務室に三人の男が集っていた。

突然に部屋を訪れた二人の男は、家臣の束ねである玄士げんしを務める白玄はくげんと絡玄らくげんだった。二人は煩雑な書類の裁可に追われる主の前で一礼した。

「惣領、お話し申し上げたきことがございます」

初老に差し掛かってなお精力に溢れる絡玄は、断固とした口調で言った。峰瀬みなせは目を通していた陳述書から顔をあげる。愚にもつかぬ繰り言を書き連ねたそれに、彼はいささか辟易としていたのだが、絡玄の言葉にさらに憂鬱に駆られたのは無理もないことだった。男の声音から、この先聞くのが明るい話題でないことは容易に知れる。

峰瀬は手元の陳述書を脇に押しやると、目の前に立つ男に向き合った。陳述書は愉快なものとは言えないが、目の前の男と比べればまだおとぎ話程度の諧謔の余地がある。絡玄を評するならば堅実であり堅牢とでも言おうか。その表情にあるのは、己の信念を貫くことを生き様とする者の自信と矜持である。白玄は懸念するように惣領と向かい合う男を見つめているが、言葉を挟む気配はなかった。「話とはなんだ、絡玄」

「祭礼に関する問題についてです」

「問題？ そのようなことがあるのか。恙無く準備は進んでいると思っていたが。私には何か問題があるとは思えんぞ」

絡玄は頷いたが、それは恭順ではないだろう。

「無論、私もそう考えておりますが問題とはこの先に起こるであろうことです」

峰瀬は賢明にも首を傾げるにとどめた。皮肉が通じる相手ではないのだ。己に仕える者とはいえ二十も歳が上の相手を戯言で弄するは、主の取るべき態度として相応しくもないだろう。

「惣領もご承知とは思いますが、近年の祭礼では多々問題が発生しています」

「そうだったかな」

これはまずかつたらしい。絡玄の表情に苛立ちが浮かぶ。

「それも全て祭礼には相応しからぬ輩が起こしたものばかりです。

特に壁の外とはいえ興行と称して大規模に宿営所を設ける來螺らいばの連中のやりようは目に余るものがあります。彼らに滞在の許可を出すのはやめた方がよろしいかと」

峰瀬は、はじめてそのような意見を聞いたといわんばかりの表情を浮かべる。

「彼らが特に問題を起こしたということとは聞かんぞ。むしろ彼らにちよっかいを出した多加羅たからの街衆の騒動がほとんどではないのか」

「そのような騒動の原因となるのが、あの連中なのです。彼らがいなければそもそも問題は起こりません」

「確たることは言えんだろう。祭りとはそも無礼講になり得るものだ。街衆にとつても一年に一度の羽目を外せる機会なのだからな。

さしたる根拠もなく來螺の人々を追い出せば、それこそ国境地帯の街への挑発となるぞ」

冷静な峰瀬の言葉に、絡玄は視線を険しくする。

「ならば率直に申し上げましょう」

(是非そうしてくれ)

峰瀬は内心に呟いた言葉を口に出すかわりに頷いた。

「祭礼とは一年の実りを神へと感謝する催しです。国境地帯の者達、その中でも特に來螺の街衆などは信仰とは程遠い連中です。敬虔な者が集う場所に、商売を目的にやって来るなど……それもその商売たるやいかがわしい、神の祭礼を冒瀆するような代物なのです。彼らを受け入れることはすなわち多加羅が神を冒瀆しているということに等しい。神もまた快くは思召さないでしょう」

峰瀬は小さくため息をついた。返す言葉は穏やかだった。

「絡玄、あなたはいつから神の代弁者になったのだ」

絡玄の表情がなくなる。空白、若しくは欠落とでも言うべきそれは、予期せぬ言葉に虚を突かれたせいだろう。しかし次の瞬間に絡玄は険しい表情で己の主を睨みつけた。

「私は忠実な神の僕として、真実多加羅を思い申し上げているのです。最近とて人が行方不明になる事件が立て続けに起き、今朝などはあの放火騒ぎです。これ以上の災厄の芽ははやく摘むにこしたことはございません」

「絡玄」

その声音に絡玄が口を噤んだ。

「あなたの言葉を軽んじるわけではないが、多加羅の街を訪れる人々を無碍に追い出すことはできない。特に国境地帯は自治意識の強い独立した街ばかりだ。彼らを刺激して反感を買うことは帝国の中核にとつても望ましからぬことだからな。我々が長い歴史の中で築いてきた関係を、そう容易く崩すことはできぬ」

なおも不満をあらわす絡玄に、峰瀬は続ける。

「神が彼らを拒否なさるならば、何らかの啓示があるだろう。それもなしに神の名を借りて追い出すことは、それこそ神への冒瀆に当たるのではないか。神の恩寵とは全ての命に遍く及ぶものなのだろう」

これには絡玄も黙る。間違ってはいまい 実際神殿の教えでは、神は全ての命の源なのだから。絡玄は苦虫を噛み潰したような表情で、絞り出すように言った。

「惣領のお考えはわかりました。しかし、私はあの連中を受け入れることには反対です。今年も許可をお与えになるのですしたら、嚴重に監視することをおすすめします」

「むろん、そうしよう」

絡玄は一礼すると無言で執務室から出て行った。それを見送り、漸く白玄が口を開いた。

「正直に申し上げれば、私も來螺の連中に滞在許可を出すのは反対です」

峰瀬はそれには答えず、隣の控えの間にいるであろう男の名を呼んだ。さほど大きくもないその声に、静かにあらわれた弦げんは主の前へ進み出る。白玄はそれに驚いた様子もなく言葉を続けた。

「だが、絡玄の考え方は少々強引に過ぎますな」

「彼は彼なりの信念に従って多加羅を憂い、守ろうとしているのだらう。だが、信仰で多加羅を救うことはできません」

「惣領、絡玄には真実を話されないのですか？ この多加羅が今どのような状況なのか」

「できると思うか？ あの一族は神殿との繋がりが深い。さして大家でもなかったあの一族がここまでできたのも神殿の力に負うところが大きいからな。何よりあの男の信仰は惣領家への忠誠をはるかに上回っているぞ。下手をすると我々が異端として告発を受けかねん」

峰瀬の言葉に白玄は暗い表情で黙り込んだ。

「惣領、灰様かいのことで少々懸念すべきことがあります」

弦が口を開いた。彼が自ら言葉を発するのは珍しいことだった。

「絡玄様の御息息である加倉様かくらですが、若衆わかしゅでの灰様へのなさりよう、少々目に余るものがございます」

「そうなのか。そういえば絡玄は灰様に対してはいまだに多加羅から追い出すべき……受け入れるべきでない」と強硬な意見を持っているが……まさか絡玄の指示ではあるまいな」

「惣領、絡玄様の近辺を監視いたしましょうか」

「絡玄はそこまでのことはすまいよ。そのようなことをするほどに灰のことを気にかけてはいまい。むしろ気にするにも値せぬ存在とも思っているだらう。その加倉とやら、父親の薰陶を受けているようだが、いずれも己の判断によるものだらう。弦からの報告を聞いたが、さして知恵者とも思えん。放っておいて構わんだらう」

なおも疑わしげな白玄に峰瀬は苦笑を向けた。

「私が何のために灰を秋連あきつらに預けたと思っっているのだ。秋連は確かに優秀な男だが、それを知る者は貴族連中にはおらん。私の星見役ほしみやく云々の言を真に受けるほど皆単純でもなかるう」

ようやく白玄は峰瀬の言わんとすることを察したのだろう。得心したとばかりに頷いた。

「なるほど、私もようやく惣領の決定のわけがわかりましたぞ。巧妙であられるな」

そこに少々の皮肉と自嘲の響きがあるのは致し方ないことだろう。白玄は灰の受け入れに強固に反対していた一人だったのだ。もっとも、峰瀬が灰を呼び寄せた真の目的を告げてからは、そのような態度も一変していた。

峰瀬が灰を惣領家の一員として厚く遇していれば、人々にとって灰という存在は無視できない、もしかすると受け入れがたい不快な存在にすらなっていたかもしれない。しかし峰瀬は灰を家臣に正式に紹介しながらも惣領家の屋敷には入れず、星見役とはいえ貴族でもない人物に預けるといふ一見して少年を軽んじるような態度を示した。それによって灰が多加羅に来ることに強硬に反対した者でさえ、今ではその口を噤み、さらには灰の存在を取るに足らないものだと思いは始めている。その悔りが結果として少年を守ることにつながるとは誰も思いもしないだろう。

「ですが、この先灰様のお育ちのことが周囲に知らればそれとてどうなるかわかりませんぞ」

白玄は深い懸念を込めて言った。

「灰様が八歳までを來螺でお育ちであることが皆に知られば、絡玄以外にも排斥を唱える者は出てくるでしょう」

「それもなるようにしかならん。いずれ皆にも知られるだろうが、どうなるかはその時にならなければわからんな」

峰瀬の答えともつかぬ言葉である。また、それ以外に言いようのないことではあった。灰がかつて紫弥むらやとともに來螺で暮らしていたことは、ごく僅かな者のみを知る事である。それが明らかとなったとき人々が灰を取る態度がどのようなものであるか、それは白玄が言うように少年を容易ならざる立場に追い込むことになるかもしれない。

しばしの沈黙を破り、白玄は意を決したように言った。誰かに聞かれはしないかと恐れるかのように、声を潜めての言である。

「惣領、絡玄の先ほどの話ですが、行方不明者が増えているのは事実なのでしょうか」

「ああ。すでに二人、忽然と姿を消したらしい」

「では、まさか……」

峰瀬は頷いた。

「私も確信はなかったが、これではつきりとした。もはや一刻の猶予もない。弦」

「はい」

「今宵、灰をあつ場所へ。真実を伝えるべき時だ」

弦は頷いた。

昼間の嵩張り雲は夜になってもなお空を覆い、雲上と地表を隔離していた。息詰まるような空の圧迫は大気に満ち、とろりとした密度のある闇が物音すらも呑みこむようにして横たわっている。

弦は身じろぎもせず木陰に立ちながら、星見の塔の窓から漏れる灯が一つ、また一つと消えて行くのを見守っていた。もとより数少ないその灯が全て消えたのは、まだ夜もさほど深まらない時分である。それを見届け、ゆっくりと星見の塔の裏手へとおりた弦は、まっすぐに自分へと向かって来る気配に膝をついて叩頭した。

弦の前にあらわれた灰は、己へと頭を下げる男を見やった。

灰が弦と顔を合わせることは滅多にない。だが、弦が折にふれ灰の様子を見守っているらしいことに、灰は気づいていた。見守るといふのは適当ではないかもしれない、と灰は考え直す。弦は灰を監視する役目を、変わらず峰瀬から命じられているのだろう。

弦が灰のもとを訪れたのはその日の夕刻のことである。街の見回りを終えて星見の塔へと戻る彼の前に姿をあらわした弦は、星見の塔の住民が寝静まってから裏手の山へ来るよう言ったのだ。 遂



にその時が来たのだ　灰は妙に鈍磨した感覚の中でそう思っただけだった。峰瀬がいかなる意図を持って自分を多加羅に呼び寄せたのか、知らされる時が来たのだ。

今、弦を再び目の前にしてなお、灰はどこか麻痺したような思いしか抱けなかった。

「遅い時間に申し訳ございませんが、お連れしたき場所がございません」

弦はそれだけを言うと、音もなく立ち上がると山に向かって歩き出した。滑るようなその動きは、静かで無駄がない。常人には決してその気配を掴むことはできないだろう。灰は無言でその後を追った。

灰は注意深く足を進めながら、漆黒に紛れる弦の背中を見失わないように意識を集中した。弦は時ならぬ刻の呼び出しを詫びたが、灰にとってはむしろそれが有り難くすらあった。おそらくは眠ることなどできないことを灰自身が気付いていたのだ。

昼間に垣間見た娘の姿が脳裏に浮かび、ともすれば記憶の波に攪われそうになる。來螺の街衆が祭礼の時多加羅を訪れるのは古くからの習慣であった。灰とてそれを知っていたが、まさか己を知る人物と出会うことなど考えもしなかったのだ。あるいは考えようとしなかっただけかもしれない、と灰は思う。

幻のように過ぎる木々の影の中をどれほど歩いただろうか。弦はやがて立ち止まると、振り向いたようだった。木々の間から射す光のせいでその姿はなお深い闇に沈み、表情は見ることにすらかなわない。灰は弦の横をすり抜けると、揺らめく光の輪の中へと踏み出した。弦はそれを見届けると闇に姿を消す。

そこは整然とした円形の広場だった。さほど広くはないそこをぐるりと木々が取り囲み、枝が広がり重なり合って上空を覆っている。広場の三方に灯された篝火に映し出された様を見れば、まるで大きな鳥籠の中に込められたような奇妙な感覚を覚える。広場の中央には、峰瀬が闇にも炎の熱にも染まらず佇んでいた。白い衣に、その

顔はさらにやつれて見える。

「足労だったな」

淡々と言う声音に灰は咄嗟に答えることができず、足を止める。峰瀬はその様子に目を細めた。少年が立つのは篝火が描く光の淵、闇と混じり合う境界だった。

「会うのは一月ぶりか……いや、もつとになるか？ 背が伸びたようだな」

「はい」

峰瀬はなおも近付こうとはしない少年の様子を興味深く眺めた。彼がこの広場に踏みこまないのは警戒しているからなのか、それとも気遅れのせいなのか、その表情からはわからない。

（いや、そのどれでもなさそうだな）

峰瀬は冷静に思う。どうやら少年はただ観察しているらしい。そこにあるのは恐怖でも興味でもない。ただ目の前のものを見極めようとする集中だけだった。知らず峰瀬は笑む。

「変わった獣を飼っているそうだな」

「飼っているわけではありません」

灰の素気ない答えにも峰瀬が気分を害した様子はなかった。

「見せてくれぬか？」

灰は暫し迷う。目の前に立つ男は真意が知れぬ。たとえ怪魅けみの力を知られているにしても、それを見せることには抵抗があった。だが、と彼は苦く思う。怪魅けみし師として多加羅に招じられ、それに応じた時点で灰はとうに覚悟を決めていたのだ。今更躊躇ちゅうじゆつてどうなるというのか。

「又また駆く」

低く呼べば音もなく少年を取り巻く空気が揺らめき、その体を包みこむようにして巨大な獣が姿をあらわした。又また駆くは静かに峰瀬を見つめる。条じょう齋しやう土つちである峰瀬には、その獣が常ならぬ存在であることがわかった。視覚に映るわけではないが、尋常ならざる力の波をそこから感じるのだ。

「見事なものだな。どのようにしてそのような獣を作り出したのだ？」

「俺が作ったわけではありません。柳角翁りゅうかくおうちの元に預けられた後、周囲の森の奥深くに行くようになった時に出会ったんです。どのようにして、いつ頃生まれただのかは俺も知りませんが」

「このような獣の姿をしていたのか？」

灰は僅かに笑った。

「いえ、その時は渦巻くような力の塊でした。あの森にはあらゆるところに自然の力がたまる場所がありましたが、又駆はその中でもすでに数千年を経た存在だったのだと思います。俺が又駆を見つけたというよりは、むしろ又駆が俺を見つけたんです。いつの間にか傍近くに来るようになって、この姿になったのはしばらくたってからです。それまでも様々な姿を模してはいましたけど牙蒙がもうの姿が気に入ったのか、それ以来ずっとこのままです」

峰瀬はもしやと思い問う。

「その又駆という名を与えたのは獣の姿になった時か？」

「はい。もしかしたらかつては牙蒙の魂だったものを内に含んでいるのかもしれませんが」

淡々と語る灰の手は、自然に獣の首筋に添えられている。

自然の遍く命から零れ落ちた不可視の力は、長い時をかけて醸成され、それ自体が一つの稀有な存在となることがある。だが、それは形をもって実体化するわけでも、己が意思を持つわけでもない。ただ大気にたゆたい、やがて時の中で解けて霧消するのだと考えられている。だが、どうやらこの獣はそれすらも越えた存在らしい、と峰瀬は思う。それとも、人の知識が自然に潜む未知に対して遠く及ばなかったということか。

怪魅師は自然に潜むそれらの力を利用すると考えられているが、それとて力そのものを変質させるのではない。だが少年の語る内容に、峰瀬は確信を抱く。獣を獣たらしめた一つの要因は灰が名づけたというその名にあるのだろう。条斎士が言霊ことだまによって法術を行使

するように、言葉は力ある者が発すればそれだけで強い効果を発する。無意識であったにせよ、少年は名を与えることで獣に一つの存在としての強固な輪郭を与え、そしてより強い絆で結ばれることとなったのだ。

又駆は灰に寄り添いながらうつすらと光を帯びた瞳で峰瀬を見つめている。そこにはおよそ感情と呼べるものを見ることはかなわなかったが、峰瀬には、目の前に立つ男が灰に害なす存在か否かを見極めようとしているように感じられた。おそらくそれは間違っていないだろう。獣は自ら望んで灰とともにあるのだ。

「かつて人が神として崇めていたのはその獣のような存在だったのかも知れないな」

峰瀬は呟くように言うと、地面に胡坐をかいて座り込んだ。

「話さねばならないことがある。ここに来て座ってくれ」

灰は広場の中央へ進み出ると、峰瀬と向かい合って地面に座った。又駆もまた灰の背後に蹲る。

「これから話すことは一つの神の伝説であり、多加羅惣領家が代々秘め続けた真実の物語だ」

峰瀬は静かに語り出した。

15 (後書き)

冒頭、「その同じ時」とありますが、灰達が街で騒動に出くわした時のことを書いています。わかりづらくてすみません。

最近看板に偽りあり、という気持ちになってきています。改めて読み返すほどに「これほんまに『青春』ファンタジーか?」と。青春……ううむ。今ゼロから書くと全く別物になりそうです。

何はともあれ、今後ともよろしくお願いいたします！

「かつてこの地には偉大な神が宿っていると考えられていた。人々はそれを高占たかづの神と呼んだ。多加羅たからという名はその古代の神の名が変化したものだ。おそらくはその獣と同じように自然の中の力が凝集した稀有な存在だったのだろう。人の言葉すら解し、時には恵みをもたらしたという」

峰瀬みねせは小さく笑い又ま駆を見詰めた。

「そのような逸話はあくまでも伝説だと思っていたが、その獣のような存在を見ると、もしかして真実あったことなのかもしれない……しかし時が流れ、国という枠ができ人が支配者とそうでない者に分かれると、人は神の恵みを願うだけでは飽き足らず、神の威信を己のものとして利用するようになった。その神秘の力を支配の道具とし、単なる崇拜の対象としてだけではなく人智を超えた絶対的な存在として、近隣諸国への脅威となした。実際、人々は神が坐すと信じて、この地を恐れ服従した」

炎の爆ぜる鋭い音が響き、火の粉が散る。ゆらりと惑いながら、それはやがて虚空に溶けた。

「だが、どれほどに強大な力であろうと、自然の中にある以上いつかは消えていくものだ。全てのもものが流転し、消滅し、再生するのが自然であるならば、この地の神とて例外ではなかった。しかし、支配者にとって、神が消えることはあつてはならないことだったのだ。その支配の要として、神の存在はなくてはならないものとなっていたからだ」

愚行　しかし人とは常にしがみつくものなのだ。力と富に、欲望に。そして後に訪れる災厄を目にしてみればじめて己の罪深さを悟る。「時の支配者はまさに必死で消えゆく神の力を留めんとした。そのための一つの手段が神への生贄だった。彼は神の怒りを鎮めるためには命の犠牲が必要であると説いた。折しも天災が続いた時でもあ

り、人々は恐れ慄き大事な家族を自ら進んで差し出しさえしたのだ。どれほどの人が神に、この地に宿る力に捧げられたか、今となってはわからない。しかし僅かに残る文献によれば、生贄はかつてこの場所です」

言いながら峰瀬は大地に手を置く。

「残虐極まりない方法で、殺されたという」

灰は思わず顔を顰めた。陰惨な歴史の残滓は、木々に囲まれた小さな広場のどこにもない。空虚な静けさに、語る男の声とくゆる火の音が聞こえるばかりだ。

「その後長きに渡って生贄の習慣は続いた。支配者が神を留めるに必要なのが闇であると考えたのかどうかはわからぬ。しかし苦しみ悶えて死んだ数多の人々の思念や魂の欠片は、この地に宿る力に確かに吸収されたのだらう。やがて残ったのはもはや神とは呼べぬほどに歪み、汚れた力の塊だったが、その力は恐ろしいほどに強まっていた。消えることを懸念する必要がないほどにな」

「では、まさか……半月程前にこの山にあらわれた闇は……」

思わず呟いた灰の言葉に、峰瀬は頷いた。

「やはり気付いておったか。あれこそがこの地に宿り神と呼ばれたもののなれの果てだ」

あれが、神　かつて自然の中に清らで雄大な存在として在ったものが、人の思惑によって捻じ曲げられ汚された末がああのだというのか。灰が闇に感じたのは、醜悪で歪な力ばかりだった。複雑に絡み合い、雑多に混ざり合ったそれは、かつて犠牲として差し出されたあまりにも多くの命の欠片であり、絶望と嘆きのうちに無理矢理命を奪われた者が残した負の力の集合体なのだ。

「あの闇が今あるような姿になったのは二百年程前のことだと考えられているが、人の命を与えられ膨れ上がった力は、やがてそれ自体が命を食らう存在としてこの地に巢食うようになり、崇拜や畏敬の対象ではなく、むしろ秘され隠された忌むべき存在となっていた。人は神の力を残すためではなく、その力を一時的にも抑えんが

ために生贄を捧げるようにすらなっていた。生贄の命の犠牲によつて確かに一時的ではあれ闇の力はおさまったが、また時が過ぎれば闇は命を求めて溢れ出て来た」

あれほどの力の塊が無害なものであるはずがなく、見境もなく命あるものを求めて膨れ上がるその存在に、おそらく人はなす術もなかったのだらう。闇は破壊し呑みこみ、そしてさらに膨れ上がる。無数の命を食らい増殖することがその存在の在り方そのものであり、それはただ次代に命を継ぐためだけに生まれてくるように見える微小な生き物の在り方にも似ている。人が作った巨大で虚ろな闇の生き物なのだ。

「人には、この地に宿った歪み荒れ狂う力をもはや抑えることはかなわなかった。だが一人の条齋士じょうさいしだけはいかにしてか彼の力を鎮め抑えることができた。我らの祖先である男だ。彼はこの地を治める支配者に仕え二役を担った。表向きは条齋士の束ねとして南軍なんぐんを率いるとともに神に仕える祭祀として信仰の柱となり、密かに危険な存在でしかなくなったかつての神を鎮める役目を担ったのだ。彼がいなければ、おそらくこの地に宿る力は溢れ出し、多くの国がそれに呑みこまれただらう。その頃は諸国が相争う時代となっており、西方の白沙那はくさなが台頭した頃でもあった。一神を奉ずる白沙那にとつて、自然そのものに宿る力を崇拜するこの地の人々は異端であり、最も忌むべき存在だったが、多加羅に宿る強大な力は彼らにとつても無視できぬ脅威と映っていた」

なぜ白沙那帝国が多加羅惣領家をこの地に残しているのか、灰はその理由をようやく悟る。その思考をなぞるように峰瀬の声が届いた。

「闇を抑える秘術は、条齋士の子孫へと受け継がれていった。一族がかつて仕えていた国は滅んだが、白沙那帝国には我々の祖先を滅ぼし、あるいは追放することができなかった。それをすれば、抑えられている厄介な力が溢れ出すことを知っていたからだ。結果、一族はこの地を含む所領を治める存在、多加羅惣領家として残された。



白沙那としては厄介このうえない存在であり、できれば滅ぼしたかったらうな。だが彼らにはどのようなにしてあの存在を抑えるのかわからず、我々の祖先もまた決して明かしはしなかった。それこそが己を守る唯一の要であるを知っていたからだ」

そしておそらく沙羅久しらくが残されたのは、多加羅が残された真の目的を隠すためだったのだろう。沙羅久が滅ぼされていたならば、人は多加羅のみが残されたことを疑問に思う。やがて多加羅に宿る闇の力が明らかになれば、信仰のもと異端を厳しく排する白沙那帝国が、その内部に御すことのかなわぬ忌まわしき　そして人智を超えた大いなる力を宿していることを人は知るだろう。それは帝国の支配とその思想や信仰そのものの土台を揺るがしかねないことなのだ。

「では、今でも惣領家はあの力を抑えているんですね？」

灰の言葉に峰瀬は苦く息をついた。

「確かに最初の男は才長けた者だったのだろう。条斎士であった彼は闇の力を言霊ことだまの法術で縛り、言霊そのものを己の魂に刻むことで闇を支配下に置いた。その言霊は今でも厳しく隠され、秘術によって惣領から惣領へと魂に刻むことで代々受け継がれている。惣領以外はそれを知ることにはかなわぬし、ただ一人のみが魂に引き継ぐことができる。すなわち惣領となりその刻印を継ぐ者が、闇を抑え己が支配下に置くべく定められた者となるのだ」

峰瀬の言葉は淡々と響くが、灰は言いようのない不安を覚えた。

抑えたその響きの向こうにあるのはどのような思いなのか、声はぞろりと地を這うように落ちる。

「だが、惣領家の者が皆闇に耐え得るわけではない。そもそも条斎士として法術が使える者でなければその言霊を操ることすらままならぬ。意志の力で行う者がいなかったわけではないが、それは容易なことではない。そのうえ闇の力は徐々に言霊の縛りを押しつつあるのだ。事実、闇は時にその支配から抜けだして溢れ出ることすらある。君が見たというこの前のそれがまさにそうだ。私の祖父は優

秀な条斎士だったと聞くが、闇を抑えるために己が力を高めんと邪法に手を出し、結果気が狂って自殺した。私の父は……唯人で何の力もなく、闇を抑えるために十数人の無辜の人間を闇に食らわせた結果、闇は一時的に鎮まったが、それとて一時しのぎでしかない。それどころかさらに闇の力が強まったただけだった」

そして、と峰瀬は低く続けた。

「私にはもはや闇を抑えるだけの力は残っていない」

又駆が灰の肩先にその鼻面を押し当てて。灰の動揺を敏感に察したのか、甘えるような仕草で寄り添いながらも、その瞳は油断なく峰瀬を凝視していた。

「でも……」

灰は言い淀む。躊躇ったのではなく、ただ目の前の男をどう呼ぶか迷ったせいだった。

「……惣領はこの前あの闇を青い光で抑えていました」

峰瀬は笑ったようだったが、それは苦いものだった。

「君には抑えたように見えたのか。事實は逆だ。私は己の力をあれに食わせたのだ」

言いながら胸元を探り、玉を連ねた首飾りを衣の下から引き出した。微かな光を纏うそれを、峰瀬は見つめる。

「これは条斎士の証である宝珠だ。条斎士は日々の修行の中でこの宝珠に己の力を注ぎ込み、蓄える。条斎士が法術を使う際には宝珠にこめられた力を利用するのだ。宝珠の力を借りずして法術を行うは、条斎士にとっても非常に難しい。だが、これにこめた私の力もはや尽きつつある」

灰は目を細めてその青い連なりを見つめた。そして気付く。かつて接見の間で見た時よりもその光の力が弱まっているのだ。鮮やかだった色彩がくすみ、翳りを帯びて錆びた浅葱に揺らめいている。

「すでに祖父の時代から闇が目覚める周期は短くなりつつあったが、父の代を経て言霊の効果はあまりに脆くなった。私は周期的に溢れだす闇を抑えるために、条斎士としての力を奴に食わせ、その力と

ともに注ぐ言霊の呪によって辛うじて抑えているに過ぎないのだ。だが、おそらくこの私の行為すら闇を肥大化させる一助にしかなくてはおらんだろう」

峰瀬はその下に潜むものを透かし見ようとでもするように大地に視線を落とす。目に見えてやつれたその頬に鋭く影がさした。峰瀬が闇を抑えるには、もはや宝珠だけでは無理なのだ。彼が言うように、玉には僅かな力の残滓しか感じられない。

「まさか……」

言いかけて灰は後悔した。言葉にするにはあまりに不吉であり、それが真実であると悟るが故にあまりに残酷なものだったのだ。峰瀬の病み衰えた様子は、命そのものが闇に食われているせいではないのか。おそらく峰瀬は己の命そのものを削って法术を行使しているのだ。そうしなければならぬほどに峰瀬の力は弱まっており、その力と命を呑みこんで巨大化した闇は、やがて力尽きた彼をもその内に取り込むに違いない。その瞬間に代々受け継がれた言霊もまた彼の魂とともに消滅する。

そのまま黙り込んだ少年を前に、峰瀬は告げた。

「君を多加羅へ呼んだのは、もはや私の力で闇を抑えられなくなるのも時間の問題だと思ったからだ。怪魅師けみしならばあの力を抑えることが……もしかしたら消滅させることさえできるかもしれぬ」

彼の父もそう考えたのだということが今の峰瀬にはわかる。多くの人を闇に食わせた男は己の無力さに歯噛みし、あるいはどこかで安堵しながら、己に代わって闇を御する存在を欲したのだ。

「無理です。怪魅の力を持っていてもあのような存在を抑えることは人には無理だ」

咄嗟に灰は言った。不意に巨大な闇と対した時の恐怖が蘇る。峰瀬の言に肯うことなど到底できなかった。

「灰、もはや一刻の猶予もないのだ。半月前のあの時、とうとう私の力では完全に封じることができず、闇の一部が言霊の呪縛から零れ落ちた。すでに二人の人間がそれに食われている」

灰は鋭く息をのんだ。

「放っておけば犠牲者はさらに増えるだろう。だが、私にはどうすることもできないのだ。一度言霊の呪縛が切れてしまえば再び封じることがはかなわぬ。私にはそれほどのも力もない」

峰瀬の瞳に硬質な色が宿る。

「灰、怪魅の力でその零れ落ちた闇の欠片を消してほしい。君以外には誰にもできぬことだ。おそらく今奴は街のどこかに蹲っているはずだ。二人の人間を呑みこんだことでしばらくは命を欲することもあるまい。次の犠牲者が出る前に何としても探し出して滅するのだ」

声音に懇願の響きはない。要請という形の命令であることが灰にはわかった。峰瀬の言葉に灰はまるで追い詰められたような心地に陥る。否、と言うのは容易い。だがそれを言うてどうする。どこかで再び闇が蠢き、なすすべもなく人が呑みこまれるのを見て見ぬふりをするのか。

「その力で命を救うのだ」

大地の上で、灰は己があまりに脆弱で、あまりに卑小に感じられた。足下に眠る闇は今はその存在すらわからないが、再びまみえるその時、果たして立ち向かうことができるだろうか。

「わかりました」

ようやく灰は答えた。迷い、恐れ、しかしそれでも峰瀬を正面から見返した。

「俺の力でどれほどのことができるかはわかりませんが、やってみます」

「頼む」

峰瀬は小さく頭を下げた。そのため、一瞬浮かんだ表情　愉悦にも似た暗い自嘲の影に少年は気付かなかった。　闇を滅し、命

を救う　その言葉が灰にとつてどのように響くのか峰瀬にはわかっていなかった。弦げんから、そして秋連しゅうれんから聞く少年の姿が真実であれば、そして峰瀬自身が思う少年の姿に誤りがなければ、彼が決して拒む

ことはないだろうことを知っていたのだ。峰瀬が怪魅師である灰を必要としていると、そのためだけに多加羅に招じられたのだと知らされてなお、否と言わなかったように

そして峰瀬の思惑に気付かぬまま、彼はこの場にいる。むろん、少年は知らぬままでよいのだ。峰瀬にとつて残された方法がもはやこれ以外にはなかったのも事実であり、彼が真に思うことを告げていたら、灰は決して多加羅の地を踏もうとはしなかっただろう。灰の持つ怪魅の力がいかほどのものであるか、六年前に見た少年を取り巻く力の奔流以外に峰瀬は知らない。しかし又駆の存在が灰の潜在能力の高さをあらわしていた。

頭をあげた峰瀬は、内心を悟らせぬ灰の顔を正面から見る。嘗て來螺いらいのほとりで見た娘の面影が、忘れ得ぬ表情がそこにあつた。そして悟る。向かい合つて座り言葉を交わしてなお、この少年との間には深い断絶がある。灰は己を惣領家の人間であるとは考えていない。この先も決して多加羅惣領家とそれに連なる存在に膝を屈することはないだろう。

嘗て己の父親が汚した風の娘は、しかしその精神において決して屈伏することはなかったと聞く。そして紫弥むらがそうであつたように、目の前の少年もまた手が届く程の距離にいなから、相容れない隔絶した地平にいるのだ。風の民が本来そのような人々であるのか、それとも滅びゆく病んだ一族に染まらぬほどに彼らの魂が強いのか、峰瀬にはわからなかった。

いずれにせよわかる必要もないことだ、と峰瀬は思う。  
からりと音が響いて、篝火の薪が小さく崩れた。

再び姿をあらわした弦の導きで灰が星見ほしみの塔に戻つたのはまだ深夜にもならぬ時分だった。

峰瀬は灰が応諾して後は多くを語らず、弦もまた無言で少年のもとを去つた。灰がどのように感じるか、それは彼らにとつてさほどの問題ではないのだ。灰は淡々と思う。多加羅が抱えてきた歴史と、

今街で起こっていることの深刻さに比べれば、それは瑣末な事柄であり一顧だにする価値すらないことだ。

そして少年自身は、己の葛藤や思いを峰瀬に見せるつもりなど毛頭なかった。もとより惣領家の血を引くことは灰にとって災厄以外の何者でもない。今更血族としての親和を求められることの方が彼にとってには苦痛だった。峰瀬が怪魅師である灰の力を利用するためには多加羅に呼び寄せることを知ってなおそれを拒絶しなかったのは、峰瀬の思惑など灰にはさして重要ではなかったからである。己の怪魅の力に向き合うこと、それは灰にとって逃げることでできない選択だった。だからこそ、彼は多加羅へ来ることに頷いたのだ。

灰が幼かった頃、怪魅の力は息をするほどに当たり前な己の一部だった。しかし六年前を境に彼は厳しく己の内の力を封じた。自然と一体化し、その雄大な力を感じ取ること以外に、決して自らその力で働きかけようとすることはなかったのだ。その枷を、灰は解くこととなる。覚悟を決め自ら選んだことではあったが、それでも灰は僅かに燻る躊躇いと恐れを自覚していた。

灰は眠れぬまま寝台に横たわり夜のざらついた時の流れに身を任せた。木々の囁きや、その梢の下で蠢くもの達の鼓動を感じ取る鋭敏な感覚を頑なに封じ、常に身近に感じていた仄かな叉駆の気配すら拒絶して、深く己を閉ざした。今だけは、と灰は思う。思わぬ面影との再会で否応なく沸き起こる過去への追憶と、漠とした不安に彩られた未来への恐れ、その挟間にあつて、何も考えず、何にも惑わずにいたかった。

だが、後に灰はこの時の己を悔やむこととなる。

その夜再び街に火の手があがった。深夜であつたため気付くのが遅れ、その場所が街の外延部という木造の建物も多く建つ地区であつたことも災いして、二人が死んだ。

祭礼の十日前の夜だった。

二度目に起きた火災が街の人々に与えた影響は大きかった。人が死んだためそれは無理もないことだったが、普段から火の扱いに気をつけている区域での火災が、一度目の火災と同様、明らかに人為的なものであると考えられたせいもあつた。祭礼を控えた時期に間を置かずして起こった相次ぐ災厄は、自然と同一の人物によつて起こされたものであると考えられ、まだ捕まらぬ犯人に不安は高まるばかりである。

若衆の見回りは祭礼の準備や剣舞の稽古の合間に嚴重に行われた。須樹と仁識の範もまた休む間もなく見回りを続けていたが、火災から二日経つても狼藉者の手がかりを得ることはできなかった。二回目の火災はまさに彼らが担当する地区内で起きたため、街の人々の常でない緊張と不安が彼らにも痛いほどにわかる。彼ら自身が焦りと苛立ちを感じ、手掛かりすらない相手への怒りを募らせていた。それは街の警吏として同じである。本来ならば火災を起こした犯人を捜すのは彼らの管轄であり、若衆の若者達がその領分を侵すことに反発が出てもおかしくはなかったが、今回ばかりは彼らもそれに目を瞑っていた。

しかし一点の不吉な影を内包しつつも、祭礼への準備は着々と進む。すでに各地から訪れた人々　祭礼に詣でる者、祭礼に乗じて儲けようとする者、そしてそれを迎える者で街は活気付いていた。街の外延部もそれは同様である。名高い多加羅の祭礼を一目見ようと集まる人々の中でも、貧しい者は中心部の宿屋に泊まることはできない。彼らは僅かな貯えで街を囲む隔壁に近い安宿に身を寄せ、一年の疲れを癒すかのように、すでに街に籠る祭礼の熱気に酔っていた。

「仁識、ちよつといいか？」

須樹が仁識に声をかけたのは、街の見回りを一旦終えて鍛錬所へ

と戻る途中、神殿の側近くに差し掛かった時のことだった。仁識は胡乱な表情で須樹を振り返り、肩を竦めて立ち止まった。その様子を傍らで見ていた灰は、他の若者達と共に先に行こうとして須樹に呼び止められた。

「灰もいてくれ」

三人は前を行く若者達と距離をとるようにゆっくりと歩きながら、緩やかな坂道を歩く。次第に近づいてくる神殿の周囲だけは祭礼の興奮もさほど見られず、いつもと変わらず静かだった。

「なんだ、あらたまつて」

仁識がなかなか話を切り出さない須樹に声をかける。須樹はしばし迷うようであったが、ようやく話を切り出した。

「二人には今後の見回りからは外れてほしい」

灰にとって、そして仁識にとっても予想していなかった言葉である。思わずまじまじと須樹の顔を見れば、そこには真剣な表情があった。

「なぜ？」

「今のこの騒ぎは普通じゃない。二人がこの先外延部をうるつくことはやめたほうがいいと思う。他にも清志と波良も抜けた方がいいな」

いずれも仁識の範はんに属する貴族の少年である。意味するところを素早く悟った仁識の眉がきつく寄せられた。

「どういふつもりだ。私たちが邪魔だとも言うつもりか？ 貴族は足手纏いだとも？」

須樹は無言でいる灰をちらりと見やり、僅かに逡巡しながらも言った。

「はつきり言えばそうだ。あの地区は俺達には馴染みがあるが、よく知らない者がうるついていい場所ではない。特に貴族に対して反感を持つ輩も多いからな。人が死ぬ事件まで起こってこれだけ不安定になっている時には、なるべく刺激しない方がいい。それにその方が俺達にとっても動きやすいんだ」



深夜の火災から一夜明けた昨日は、見回りはまったくの徒労に終わった。おそらく犯人を見つけ出すことは困難を極めるだろうことを、すでに彼らは気付いている。そもそも日中に街を見回ったところで見つかるわけもないのだ。火災が起こったのは早朝と深夜という、いずれも人目のない時間帯である。

そして須樹は街の人々の間に密かに高まっている危険な兆候に気付いていた。自身も似たような地区に住む須樹だからこそ気付いたことだった。

街の中心部に近い場所で起こった一回目の火災は、放火ではあつても人死の出るようなものではなかった。しかし間をおかずして起こった二回目のそれは、家々が密集し、一度火が起これば容易に燃え広がる木造の家で起こった。それが意味することは、一回目と違い犯人は明らかに害意を持って火をつけたということだ。

街の最下層として貧しい生活を強いられ時に蔑視される外延部の人々は、もとより己に害なす者に敏感であり、排他的でもあった。ふとした弾みで溢れ出した怒りが己とは異種存在に向けられることはよくあることなのだ。今回の事件で鬱積した不安や怒りが溢れば、その矛先が例えば彼らには望むべくもない豊かさを享受し、支配の最高位にいる貴族の子弟に向けられることもあり得ないことではない。

「頭かしらには俺から言おうと思う。どちらにせよ祭礼が近いから仁識にぎしは剣舞けんぶに専念した方がいい。頭が何を言うにせよ、一番の舞い手は仁識だからな。中央を務めるに相応しいことは皆が知っている。見回りを抜けると言っても誰も反対はしないさ」

「前にも言ったが私は剣舞などどうでもいい。そのようなものになど興味はない。それに須樹が言っていることを信じるに足る証がどこにある。なおさらに疎ましい事態にならないとも限らんだろう。私はそういう厄介事に巻き込まれるのは御免こうむりたい」

仁識が思わぬ強さで言った。灰はなおも黙ったまま、その様子を見守った。

仁識という少年は、治都やとが言ったように言葉こそ辛辣ではあるが、根底には一貫した公平な視点があるように灰は感じていた。加倉かくらとの争いを取り沙汰されていても、それはどうやら加倉が一方的に敵視しているに過ぎず、仁識はそれを淡々と受け止めているだけである。そして家柄や親同士との力関係、確執といったものがもたらす周りの視線や憶測を、最も疎ましく思っているのは仁識自身なのだろう。

須樹は仁識の言葉にも意見を変える気はないようだった。いつになく厳しい表情で首を振る。

「いや、だめだ。この際頭の戯れにつきあうべきじゃない。たとえばそれで立場が複雑になってもな」

「いい加減本音を言ったらどうだ」

仁識は苛立たしげにため息をついた。

「要は灰様が心配なんだろう。お前は灰様を見回りから外したいだけだ。だが一人外すのは外間が悪い。惣領家の者だけ特別待遇だの、意気地がないだの言われるのは目に見えているからな。それを防ぐために私にも外れると言っているだけだろう」

凝視する灰から須樹は視線を逸らした。苦々しいその様子が、仁識の言が的を射たものであることをあらわしていた。

「待つてください俺は外れる気はないですよ」

思わず灰は言う。

「心配してくれるのは有り難いですけど」

「心配というよりは単に足手纏いなんですよ」

仁識が呆れたように呟くのを灰は無視する。須樹が灰を案じるのはもつともなことに思える。灰はまだ若衆に入って間がないうえ、剣術もはじめたばかりである。身の軽さと反射神経の良さで目覚ましく腕をあげているとしても、年長者に伍していけるわけではない。それは灰自身が自覚していることであり、何か起こった時に須樹が真っ先に灰を庇うであろうことを思うと、確かにお荷物には違いなかった。

だが、それをわかってなお灰は須樹の言葉に頷くことができなかった。自分でも掴み切れない強い感情が、直感的なそれが否、と告げるのだ。そしてもう一つ、灰には肯えない理由がある。街のどこかに潜むという闇を探るために、見回りは恰好の機会なのである。いまだその気配を感じることはできないが、峰瀬が言う通り闇が街のどこかにいるのであれば、灰は地道にそれを探っていくしかないのだ。無論、それを言うことはできないが

気まずさに三者三様の表情で黙り込んだその時、唐突にその沈黙が破られた。

「灰！」

大音声である。ぎよつとして振り向く三人に向かって大股に近づいてきた声の主は、一目で多加羅の者ではないことがわかった。褐色の肌に金の混じった碧の瞳である。鋼色の髪は短く刈り込まれ、長身でありながら無駄なく引き締まった姿は敏捷さを感じさせる。精悍な顔立ちは、その瞳もあいまってどこか野生の鷹を思わせた。

「丈隼たかはや」

驚きとともに、灰の口から自然とその名が零れ落ちた。六年経っても見忘れようはずがない。なぜ、と問う間もなく目の前に迫って来た相手は、呆気に取りられている須樹と仁識に構わず、問い詰める口調で言った。

「生きていたならなぜ知らせなかった！ 叶かのがどれほど心配していたと思っているんだ！」

「悪い」

灰は小さく呟くと、須樹と仁識を振り返る。

「すみません、先に行ってください」

灰は丈隼とともに二人から離れた。

置き去りにされた体の須樹と仁識は思わず顔を見合わせた。何事かを言い合う二人をそのままに歩き出す。灰の様子には、二人がその場に留まることさえ拒む雰囲気があった。須樹は次第に遠ざかる二人を振り返り、奇妙な感覚に襲われる。それは二人の姿がまるで

周りから切り離され遊離しているように見えただめだった。丈隼という青年の外見のせいばかりではないだろう。髪を隠してはいても、灰の相貌と不思議と目が惹きつけられるような独特の雰囲気、さらに周囲から浮き上がって見せているのだ。場所が神殿に程近い所であつたため人通りは多くなかつたが、道行く人々もまた二人の姿を物珍しげに見詰めていた。

須樹と仁識から離れ、灰は改めて丈隼に向き合つた。丈隼は喜びと、困惑と、そして怒りをなげまぜにした表情で灰を凝視していた。「なぜ丈隼がここにいるんだ？」

「叶が街で見かけたと言ひ張るから確かめに来たんだよ。昨日一日、街中捜しまわつたんだぜ。半信半疑だつたが、まさか本当にいるとはな。六年間もなぜ連絡を寄越さなかつた」

「あの後すぐに森林地帯に住む親戚のところへ預けられたんだ。その親戚が一年前に亡くなつて、今は多加羅のある人のところに一カ月程前から身を寄せている」

「心配したんだぞ。あんなことがあつた後に警吏の宿舎から忽然と姿を消して音沙汰がないから、やばいことに巻き込まれたんじゃないかって」

「うん、ごめん」

言葉少なな灰の表情に、ふと丈隼は沈黙した。その瞳に沈痛な色が過る。その影を振り払うように、丈隼は笑みを浮かべた。

「まあ、いいさ。こうして会えたんだから。それにしても多加羅にいたとはな。さっき一緒にいた連中はまさか若衆なのか？」

「そのまさかだよ。多加羅に来てすぐに入ったんだ」

丈隼は唸つた。

「來螺（らいら）で生まれ育つた奴がよりにもよつて多加羅の若衆だと。そんなことは聞いたことがないぞ」

灰は思わず苦笑した。国境地帯に属し、帝国の支配下にはない街はどれも自治意識が強い。多加羅と表面的には友好関係を築いてい

ても、その実並々ならぬ警戒心を抱いているのだ。彼らにとって多加羅はあくまでも白沙那帝国はくはくの一部であり、多加羅の介入はすなわち帝国がその支配を彼らにも及ぼそうとしていることを意味するたぬ無理もないことだった。

「丈隼も祭礼の興行に来たのか」

「ああ、俺は芸能家じゃないから単なる自警団の一員としてだがな。宿営所の警備のためだ。叶は違うぜ。今では楽都らくとの売れっ子奏者しゅうしやだ。今回の興行では間違いなく目玉の一つになるだろうよ」

「叶は母親の後を継いだのか」

「ああ。今年に入ってからだが正式にお披露目があった。歌い手の座はまだ空いたままだがな。紫弥むらさんの印象が強過ぎて次の新しい歌い手が客に受け入れられないんだ。そのせいで専属の歌い手は抱えていない。今でも楽都では紫弥さんの歌声が語り草になってるぞ。小さかった俺でも覚えていくくらいだからなあ。天上の歌声と言われているのも頷ける」

「そうか……」

楽都は來螺でも有数の酒場である。來螺の酒場はほとんどが歌や演奏、舞や演劇といったものを客に供する。大店であれば歌い手や楽器の奏者、舞い手といったいわゆる芸能家を専属で抱え込むことも珍しくはなかった。楽都のお抱えの歌い手であった紫弥が舞台上立つ姿を、灰は毎夜のように舞台袖から見ていたのだ。

そして灰は先日の出来事を思い出す。男に絡まれ、しかし臆することもなくそれを睨みつけていた乙女の面影が、六年前の勝ち気な少女の姿と重なる。叶の母親もまた楽都のお抱えの奏者であり、紫弥とはまるで姉妹のように育った仲である。灰と叶は自然と姉弟のように幼い頃を過ごしたのだ。

「叶は六年前とあまり変わっていなかったな」

これには丈隼が妙な顔で灰を見詰めた。何かを言いかけ、しかし僅かに天を仰いで呆れたようにため息をついた。

「そうだった……。お前はこういう奴だったよ。がきのころからば

けてんだが、鋭いんだか……あの叶を見てそんなことを言うのはお前くらいだぞ」

「叶は昔から気が強かっただろ？」

「……まあ確かにそうだが、そういうことじゃなく……まあ、いいや」

丈隼はごにょごにょと呟き、気を取り直すように言った。

「とにかく、一回叶に会いに来いよ。叶がどれだけお前のことを心配していたか……見てるこっちが辛いくらいだった。今日も一緒に捜すというのを何とかやめさせたんだ。この前みたいに街の連中に絡まれたらたまったもんじゃないからな」

灰の僅かな逡巡に丈隼は気付かなかった。彼もまた昔とさほど変わっていない。叶が灰にとって姉のような存在であれば、丈隼は兄のような存在だった。その豪放磊落な性格は今も変わらないようだ。六年の断絶を物ともせずまるで変わらぬ態度で接してくる丈隼は、灰が戸惑うほどまつすくな視線を向けてくる。

「わかった。会いに行く。祭礼が終わるまではいるんだろう？」

「ああ。祭礼の次の日には來螺に戻る。お前が来れば叶が喜ぶ。自警団の一員の中にはお前を知っている奴もいるからな」

丈隼は大きく笑むと言った。

「俺も、お前が無事でいてくれたのが嬉しいよ」

灰には答えることができなかった。不意に胸が詰まるような感覚に襲われる。それはかつて知っていたどの感情にも似てはいなかった。追憶に伴う寂寥と苦痛でもなく、仄かな感傷や愉悦でもなく、まるで奔流のように溢れ出す。灰はその瞬間、永遠に孵らぬ卵のように己の奥深くに埋もれていたもの。過去の記憶であり、封じ込めた幼い彼自身の幻影が破れ、新たな形を纏って動き出すのを知った。

まだ名残惜しげな丈隼と別れ、鍛錬所へと向かった灰はすでに一つの決心をしていた。古びていながらもどっしりとした鍛錬所が近づくにつれ、大気に混じる山の気配が強くなる。たった一度足を踏

み入れただけの惣領家の屋敷は、そのけぶる霞のような淡い気配に包まれて遠く聳えていた。

鍛錬所では須樹と仁識が灰を待っていた。中断された話の続きをするためであることは一目見て灰も気付いたが、須樹の表情には懸念が、仁識の表情には隠そうともしない好奇心がある。

「昔馴染みですか？」

開口一番の仁識の言葉だった。横合いから須樹が詰るような視線を送るが、頓着せずに仁識はなおも言った。

「国境地帯の者に見えましたが、まさか灰様があのだりの連中と馴染みがあるとは知りませんでしたよ」

「俺は八歳までを來螺で過ごしました。丈隼はその当時の知り合いです」

あつさりと答える灰の言葉に慌てたのは須樹だった。

「灰、無理に言う必要はないぞ」

「いえ、むしろ知っておいてほしいんです」

「じゃあ、この前街で会ったあの娘も知っていたんですか？」

「はい。叶は俺の母親と同じ酒場の舞台に出ていた芸能家の娘です。今は彼女自身が芸能家になっっているようです」

ふうん、と仁識は鼻にかかった声を出した。須樹は途方にくれたような表情で黙り込んでいる。無理もない、と灰は思う。多加羅の人々が來螺に持つ印象がどのようなものか、灰とて知っているのだ。怠惰と快樂の街、虚飾の街、墮落の街　そのどれもが來螺の一面であり、薄皮一枚の仮面である。その裏に秘めた闇の深さを人々は知らない。灰の記憶に沈む來螺とは、欲望のままに飽食してなお享樂を求める人々が集う街であり、人を虜にする快樂も、飽くことのない欲望を満たす歓待も、一つ曲がり角を間違えれば死と隣り合わせの危険に変わる、そのような場所だ。

六年前の幼かった彼は、己の身を守ることすらままならない存在でしかなかったが、それでも來螺で生きることがどういふことかすでに理解していた。あの街で生きる者は誰しも狡猾に、そして撓め

た力を隠す自制を身につける。むしろそれは目の前の二人が知る必要のないことである。

灰は須樹に向き直り言った。

「さっきの話ですけど、俺はやはり見回りを抜ける気はありません。もちろんお荷物なのは百も承知ですが、負担はかけないよう気をつけます」

「灰、俺は何もお前が足手纏いだと思っっているわけじゃない。だが、万が一何かが起こった時、お前の身に何かあったらどうなる。お前は惣領家の人間なんだ」

「わかっています」

灰は皮肉に笑んだ。惣領家の人間　どれだけ否定し拒絶しようとも、それは厳然とした事実なのだ。

「けれど惣領家の血を引くというそれだけで、皆が俺を認め受け入れるほどここは甘い場所でもないでしょう」

須樹は絶句した。

「これは俺の気持ちの問題なんです。皆にとっては俺は惣領家の妾腹の血筋で、惣領のお慈悲で招じられた厄介者でしょう。正直に言えば俺はどう思われてもいい。一人で生きていけるほどの力もなく、実際そのとおりなんですから。でも、その中でも自分で選択していくことだけは奪われたくないんです。惣領家の人間だということに縛られたくはない。例えばそれが他人の思惑に沿ったものでも、納得して進んでいかないと、立ち位置を見失う」

己に言い聞かせているかのような、低い声音だった。灰は須樹に向かつて僅かにすまなそうな表情を見せた。

「すみません。あまり気持ちのいい話ではないですね」

「いや、なかなか面白いですよ」

答えたのは仁識である。にやりと笑んだ顔はどこか楽しげだった。

「須樹、諦めた方がいいな」

須樹は小さくため息をついた。

「よく、わかった」



何が、と問うような二人の視線に須樹は苦笑とともに答えた。

「灰が筋金入りの頑固者だってことがな。頑固だとは思っていたが、ここまでとは思わなかったぞ、俺は」

「そうでしょうか？」

「そうか？ まあ、俺は面白い若様だと思っが」

首を傾げる二人の仕草は奇妙に似ていた。この二人は本質が似ているのかもしれない、と脈絡なく須樹は思う。いずれも掴みがたい厄介な人物だ。

「負けたよ。見回りは今まで通り続けよう」

（どうやら俺は灰相手には一度として勝てそうにはないな）

須樹は思うと、奇妙に清とした気持ちで柔らかく笑んだ。

その後何の収穫もないまま二日が過ぎた。しかし全てが徒労だったわけではない。丹念で辛抱強い若衆わかじゆうの見回りは、次第に街の人々が彼らに向ける視線を変えていったのだらう。外延部の人々が、少しずつではあるが彼らに温かい声を掛けはじめたのである。これは若者達にとっても意外であり、嬉しいことだった。須樹すきにとっては喜ばしい誤算だったとも言える。

そして他愛のない人々との会話の中で、ある一つの噂が囁かれていたことを若者達は知った。それは火災のあった夜に黒い外套に身を包んだ長身の男がうろついていたというものである。その人物が犯人に違いないというまことしやかな人々の話は、真実と信じるには手掛かりが少なすぎたが、虚偽と切り捨てることもまたできなかった。

噂の男は外套を目深に被っていたため顔は定かではないが、闇に紛れるようにして彷徨っていたという。外部の者に敏感な外延部の人々がそれを不審に思わないはずもなく、実際そのような人物がうるついていたことは事実と思われた。しかし一方で、ただ怪しいだけでその男を犯人と断じることできない。

深夜に誰にも気づかれずに火を起こすことは存外に難しい。火打石を使ったとしても少なからず音が出る。特に小さな家々が靠れ合うようにして密集している外延部では、ごく僅かな物音でも人々が気付く可能性があった。そうであるからこそ、犯人は硝子筒などあらかじめ火を灯したものを持ち歩いていたのではないかと考えられているのだ。件の男はどうやらそのようなものを持ってはいなかったようだ。

次第に噂が多加羅たからの街に広がっても、結局噂以上の話に繋がらなかったのはその矛盾にやはり人々が気付いていたせいだった。

「仮にだ、その男が犯人だとして、なぜこの時期に火をつけること

を思いついたんだと思う?」

「確かになあ」

「そもそも祭礼の季節に火は忌まれるだろ。金篋きんせうの畑はたけに火が起こってみろ、一気に燃え広がるからな。それなのに神に実りを感謝する祭礼の前に火をつけるとは……」

「罰当たりな奴だ」

須樹は若衆達の会話を聞くとまなしに聞きながら、注意深く道行く人々を眺める。会話を交わしながらも、誰もが同じように周囲に目を配っていた。すでに見慣れた街並みである。一塊になって歩く彼らにぎこちなさはない。須樹の範はんと仁識にしきの範は、はじめこそ互いに距離を置いていたが、毎日ともに行動するうちに奇妙な連帯感が生じていた。

「こつも考えられる」

それまで須樹同様に黙って会話を聞いていた仁識が言葉を挟んだ。「犯人は火をつけることで神を挑発しているのかもしれない。己の力を神に誇示してその裁きをためしているのかも」

「おいおい物騒なことを言うなよ」

治都やとが思わず言うと、仁識は笑んだ。それにむつとした治都だが、口でこの相手に勝てたためしはない。

「だいたいなんで神を……その、なんだ、挑発する必要があるんだ」

「さあな。だが火つけは示威行為のように思えんか? 卑劣なやり方だな」

「挑発ではなく戒めを求めているのかもしれない」

これは灰かいである。仁識は面白そうに灰を見つめた。

「だが、まさか人が死ぬとは思わなかった……。犯人は自分が起こした火災で人を殺してしまうとは思わなかったんじゃないでしょうか」

「それはまたなぜ」

「あれだけ短期間に続け様に起こったのに、その後は途絶えているからです。本当に人を殺すのを躊躇ちゅうじゆわなければ、この手の犯罪はも

つと頻発するような気がします」

なるほど、と治都は呟いた。いつの間にか若者達も真剣に耳を傾けていた。二回目の放火は明確な悪意をもって行われたと考えられているが、その後ぱったりと火災は起こっていない。警備が強化されたせいもあるだろう。しかし果たしてそれだけなのだろうか。灰はなおも物思いに沈むような表情で言葉を紡いだ。

「それに、もしそうであれば犯人はここのことをよく知らない、それなりに裕福な者かもしれません。この区域が街の中心部に比べて火の回りが早いことを知らずに放火し、予期せずして人が死んでしまった。犯人自身が己の招いた結果に最も驚愕したのかもしれない」

「では、今頃戦々恐々としているかもしれない。単なる放火だけではなく、殺人となると死罪は免れないだろう」

須樹は言う。

「灰の言うとおりだとしたらここのを見回ったところですかます犯人は見つけられんということだなあ」

治都のぼやきに苦笑しかけた灰の傍らを人が通り過ぎた。まるで一陣の風のようにすれ違ったその気配に、灰はふと振り返った。その視線の先、全身を暗い色調の衣に身を包んだ男が立ち止り、灰を振り返った。ゆったりと頭を包む黒い布は流れるように首元に撓められ、目から下を覆う布のせいで顔立ちはわからない。深く暗い双眸がひたりと灰に据えられていた。

一瞬の視線の交錯　　思わず立ち尽くした灰は治都の声音にはつと我にかえる。

「灰、どうしたんだ？」

その声の前に行く若者達も振り返る。まるで影のようないでたちの人物は僅かに目を細め、踵を返した。そのまま遠ざかる姿に仁識が鋭い声をかけた。

「おい、待て」

いかにも不審な人物である。声をかけられた方はそれに足を止め

る。しかし振り向かないままに背を向けたその姿に、若者達の視線が険しくなった。

不意に男は身を翻すと走り出した。

「おい！」

咄嗟に治都がその後を追う。若衆達も無言でその後が続いた。

走りぬける男と若者達の姿に、道行く人々から驚きと怒りの声があがった。逃げる男との距離はなかなか縮まらず、ともすれば見失いそうになる。

「須樹、まわり込め！」

仁識が鋭く叫んだ。須樹は範の面々に目配せをすると素早く家々の間の路地に走り込んだ。灰もまたそれに続き、細い道を駆ける。すでに何日も見回った区域は、複雑な路地の構造も大方が頭に入っている。男が逃げる先はさらに人通りの多い大通りである。そこに逃げ込まれる前に挟みうちしようという仁識の言葉だった。大きく湾曲した道を逃げる男の前に回り込むために、最短の距離を走り抜ける。

入り組んだ道を駆け再び元の道へと踏み出した須樹達は、思惑通りに運んだことを知る。まさに今こちらに向かつて走り来る男の姿があつた。突然行く手にあらわれた須樹達に、男は足を止めた。そして背後に迫りつつある仁識の姿を振り返ると、身を翻し目の前の小路に飛び込んだ。

「まだ逃げるか！」

低く毒づいた治都が真っ先に細い道へと飛び込む。その後を須樹の範が、そして仁識の範が追う。狭い道は圧するよう迫る家壁のせいで仄暗く、微かに水の腐ったような臭いが漂う。駆ける足元で湿った音が響いた。

逃げる男は歩調を緩めることもなく緩やかな勾配をのぼると、路地が十字に交わった空間で不意に立ち止まり振り向いた。

「観念したか！」

治都が男に迫る。男は落ち着いた仕草で手を祈るように組み合わ

せた。囁くように、深い声が流れた。男が歌うように言葉を紡いでいるのだ。言葉は波紋のように空気を揺らし、奇妙な余韻を残して響いた。足元からその音に絡め取られるような心地に陥り、灰ははつとする。

反響して聞こえるのは声のせいではない。発される言葉そのものが仄かな輪郭を纏って大気に滲み、力の波を発していた。言霊だ。それが男の腕に凝集するのが灰には見えた。男が短い気合とともに腕を一閃させたその瞬間、咄嗟に灰は前を行く治都の衣を掴んだ。「おわっ！！」

叫んだ治都が体勢を崩す。その上を、空気が凪いだ。否、空気ではない。それは熱をもった波だ。鋭い軌跡を描いて空間を走り抜け、上空へと舞いあがって消えた。若者達はぎょつとして足を止める。対する男はなお手を組み合わせたままひたと若衆の面々を睨み据えていた。

「なんだ！ 今のは！」

「条斎士……」

灰は呟いた。目を凝らせば、黒い衣を透かして揺れる光が見える。条斎士の証である宝珠が輝いているのだ。それは烈しく深い緑だった。森を思わせる。

「条斎士だと！？」

数人の若衆が怯えたように後ずさった。灰は男を見据える。おそらく先ほどの熱波は命を奪うほどのものではあるまい。しかし人に向けるにはあまりに危険な技だ。明らかに戦闘を目的とするものであり、正面から浴びれば軽傷ではすまないだろう。

「貴様、何者だ！」

仁識の範の血気盛んな一人が叫ぶ。鋭い声に、男の目が細まる。それが笑んだためであることが灰にはわかった。男はゆつたりと優雅にお辞儀をしてみせ、嘲るように言った。

「誉れ高き多加羅の若衆に名乗るほどの者ではございません」

「お前が街に火をかけた狼藉者か！」

「いやはや、人違いもいいところでございます。私はしがない旅人にございますれば」

「ならばなぜ逃げた！ 後ろ暗いことがあるからではないのか！」

「おや、これは異なご事。そちらが血相を変えて追つて来るから逃げたまごのこと」

低い聲音に、灰はふと眉を顰めた。

(この声、どこかで聞いたことがある……)

美声と言えるだろう、張りのある若々しい声だ。

「火つけの犯人ではないとしても、なぜあのような場所をうるついでいた」

仁識の落ち着いた声が問うた。

「旅人と言うが、見ればその衣、絹の光沢だ。どこの御曹司の悪ふざけかは知らんが、火つけの犯人でないと言うならばその顔見せてみる。後ろ暗いご事ごなければ見せられよう」

まるで滑るような氣配で仁識が前に踏み出す。腰の剣に軽く手をかけただけのその姿に、しかし男は僅かに身を引いたようだった。男の視線が鋭くなる。嘲る聲音はそのままに、口調ががらりと変わった。

「なるほど……若衆随一の劍の使い手、仁識とはお前ご事ごか。博露院を放逐されたと聞いたが、どうやら噂通りの阿呆ではなさそうごだ。患者の振りをしてまでなぜ若衆などにいる？」

「私を知つているのか？」

仁識の聲音が凍る。男はそれには答えず、警戒もあらわな若者達へと視線を走らせた。

「そちらは次期若衆頭と目されながら、身分ゆえにかなわなかつた須樹か」

男の目が灰を捉える。先ほどと同じ纏わりつくようなそれに、灰は知らず身構えた。

「そして多加羅惣領家の御方にお目見えできようとは……光榮の至り」

「なぜそれを知っている」

問うたのは須樹だった。その背に灰を庇うように一步踏み出す。彼らは街の見回りの際にも決して灰の素生を街衆に明かしはしなかったのだ。無用の騒動を避けるためであり、何かと複雑な立場の少年を慮つてのことだった。

「惣領家の者までもが街の搜索か。多加羅も物騒なことだ。それもたかだか火つけの犯人一人を見つけられぬとは、腑抜けたものだな」  
あからさまな愚弄だった。

「……気に食わんな。力づくでその正体暴いてやろうか」

底冷えのする声音で言った仁識が男へと踏み出す。

「仁識、やめろ！ 相手は糸斎士だぞ」

須樹の警告の声にも仁識は止まらない。

一気に間合いを詰めると組み打ちの要領で相手の衣を掴もうとして、その手が空を切った。細い路地にも関わらず男が驚く程の素早さで身を翻したのだ。鋭く舌打ちをした仁識が男へと足払いをかける。見事な身のこなしだった。咄嗟にそれをも避けた男だったが、さすがに体勢を保つことができず大きく体が揺らぐ。すかさず男を押さえ込もうとした仁識だったが、大きく後方に飛ぶ。その足元を穿つたのは先ほどと同じ熱の刃だった。

男が再び大きく腕を振るう。治都に向けて放つたのとは比べ物にならないほどの力の塊だった。僅かに歪んで見える陽炎のようなそれを、仁識は身軽に避ける。獲物を逃した力が壁際に積まれた木材にぶつかり、木の裂ける鋭い音が響いた。不敵な笑みを浮かべた仁識だったが、その笑みが途中で強張る。まるで狙い澄ましていたかのように男が交差していた腕を振るったのだ。

鞭のように撓る二筋の波が絡み合うようにして空間を走る。一筋の波を身を屈めて避けた仁識が大きく目を見開いて迫る第二の波を見据える。容赦なく走る熱波の塊に、若者達の間には戦慄が走った。避けられない。

「やめろ！」



叫んだのは誰だったか、灰にはわからなかった。考えるより先に体が動く。仁識の前に飛び出すと、のたうち走る塊を正面から受け止めるようにして左手で掴んだ。掌に走ったのはまるで火の中に手をつっ込んだような灼熱の感覚だった。それに思わず唇を噛みしめると、血の味が口中に広がる。それでも抗いのたうつそれを握る手にさらに力を込めると、やがて罅割れるようにして手の中の熱波の輪郭が薄れた。崩れかけた力が最後の悲鳴のように揺らいだ。それはしなりながら灰の腕に巻きつくと、衣を引き裂いて赤黒い筋を肌に残し、霧散した。

灰は焼け爛れた手のひらをゆっくりと開いた。茫然とそれを見つめていたのは若衆達だけではなかった。条斎士である男もまた、啞然として灰を見つめている。

「灰！」

少年に駆け寄ろうとした須樹は、しかしその表情に思わず足を止める。

「その力、人に向けてよいものではないぞ。沙羅久惣領家の二男殿」  
ひそりと呟くように灰は言った。宵の空にも似て深みを増した瞳が、ひたと目の前の男に据えられる。絶句した須樹は思わず男を見やった。凝然と立ち尽くす男もまた、驚きに大きく目を見開いているようだった。

「沙羅久だと……!?!」

「聡達……」

須樹もまた茫然と呟いた。まじまじと見れば、眼の前の人物は緩衝地の街でまみえた相手と背格好が似ている。そしてその声、張りのある心地よい声でありながら、奥底に揶揄するような皮肉な響きを宿したそれが、確かに記憶に残るものと重なった。

「多加羅の街で一体何をしている」

灰の問いに男は答えなかった。しかし不意に肩を震わせたかと思つと、大声で笑い出した。灰は顔を顰める。響く笑い声に、人の神経を逆撫でする、音程の外れた旋律にも似た歪みがあった。男は不

意に顔を覆う布を取り去る。なおも笑いを滲ませる声で言った。

「面白いな。俺のことを知っているとは」

露わになった顔。それは確かに聡達だった。聡達は己を見つめる若者達を睥睨した。楽しげとも言える表情であり、声音でありながら、その瞳には一片の笑みの気配もない。

須樹は聡達を凝視する。すでに一度目にした相手である。だが、以前対した時とは何かが違う。酷薄。ふと心に浮かんだのは

その言葉だった。今、聡達に対して感じるのは、鋭い刃で肌を撫でられたような寒気のする危うい感覚だ。初めて出会った時には感じなかったものだ。

「聞いたことに答えてもらおう。ここで一体何をしているのだ」

灰の低い声に聡達は笑いをおさめるとおもむろに腕を若者達に向かつて突き出した。袖をまくりあげるとそこには銀に輝く腕輪があった。表面には複雑に絡み合う線が見える。

「俺は聖遣使だ」

灰は目を見開いた。聖遣使。彼もその名は知識として知っている。

「多加羅に不穩の気配あり。ゆえに俺が遣わされた。行く手を阻むは不敬と知れ」

言いながらゆっくりと灰へと近づく。須樹が咄嗟に灰の左手に立つと、仁識もまた素早く前に進み出た。灰の左右を固めるその動きにも聡達は頓着せず、三步の距離を残して立ち止った。油断なく見守る彼らの前で聡達は笑む。囁くように言った。

「俺はお前を知っている」

訝しげに眉を顰める灰に向かって、聡達が懐から何かを取り出す。聡達が掲げて見せたそれは刃渡りが大剣の半分程もある刀だった。思わず若者達は身構えるが、聡達が刃を抜く気配はなかった。

かなり古いものなのだろう。黒い鞘には細かい傷が数多ある。そしてそこには美しい獣の姿が躍動的に嵌めこまれていた。須樹にはその凶柄に見覚えがあった。市場で灰が見たことがあると言ってい

たものだ。思わず傍らの灰を見やると、その顔は血の気が引いて青褪めている。じつと刀を凝視するその表情に、聡達は笑みを深めた。「多加羅惣領家の灰、俺はずっとお前に会いたかったぞ」

「どういうことだ」

灰が低く問うた。張り詰めた表情で聡達を睨みつけた。聡達はそれには答えず刀を再び懐にしまつと、背を向けた。

「今日は邪魔者が多い。答えはいずれ知れよう」

そのまま遠ざかる相手に幾人かの若者が後を追おうとして、仁識の厳しい声に足を止める。

「追うな！ 行かせるんだ」

聡達は緩やかな坂をのぼり、再び振り返る。口角を吊り上げ傲然と若衆を見下ろした。澁む静寂に声が響く。

「やがて多加羅は滅びる。俺達が滅ぼす。せいぜい足掻くことだ。

力ない相手を潰したところで面白くもないからな」

「なんだと！」

「やめろ！ 治都」

須樹は聡達に向かおうとする治都の大柄な体を阻んだ。それを冷笑して見やった聡達は、踵をかえすと細い路地を曲がって姿を消した。足音が遠ざかり、やがて聞こえなくなると灰は傷ついた腕を抱え地面に膝をつく。足元が崩れ落ちるような感覚に立っていることができなかつた。額の奥深くが脈打つように痛む。灰は湧き起る体の震えをおさえようと全身を強張らせ、強く瞳を閉じた。

瞬間、闇に沈んだ視界に鮮烈な像が浮かんだ。それは一条の輝きだった。研ぎ澄まされた銀だ。翻るように走り、切り裂き、深々と抉る。その度に散る紅は硬質なそれとは対照的に柔らかく、奔放に宙を舞う

宙を舞い、そして立ち尽くす幼かつた彼に降り注いだ。飛び散った紅は、母が愛していた白い大輪の花をも汚し、ゆっくりと花弁の先端に結実した紅玉にも似た雫が地に落ちた。かそけく揺れる花の向こうで、母親が切り裂かれ殺されるのを、身動きもできぬま

ま彼は見ていた。母親の胸に呑みこまれる刃の、肉を穿つその音まで彼は聞き取ることができた。ゆっくりと崩れた体が鈍い音をたて、流れる銀の髪が、血潮に呑み込まれていく。母親の胸に突き立てられた刀。その柄に埋め込まれた踊るように疾駆する獣の向こうで、すでに命の輝きが失せた紫苑の虚ろな瞳が彼を見つめていた。

鮮烈な記憶の奔流に、灰は焼け爛れた手を握りしめた。傷の痛みを意識が冴えた。

（なぜ、忘れていた）

あれは母の守り刀だ。もとは祖母のものだったという。祖母とまだ幼かった紫弥しやが多加羅から追放された折唯一身につけていたものだ。そして祖母が死んだ後大切に身に帯びていたその守り刀で、母親は命を奪われた。

（あの刀……なぜあいつが持っている）

刀は母を殺した男が持つて逃げたはずだ。彼女の胸から血を迸らせて引き抜かれた銀の軌跡が生々しく脳裏に浮かぶ。灰はこみ上げる嘔吐感を抑える。汗が額を伝い、地面に落ちた。

「大丈夫か」

ただならぬ灰の様子に須樹がしゃがみ込んで問う。灰はそれに頷くと、大きく息を吸い、目を開いた。記憶の残像は消え、路地の湿った地面が見えた。

「はやく治療しないと……鍛錬所に戻ろう。いや、医術者のところがいいか」

「そうだな。ひどい傷だ」

「これぐらいなら自分で何とかできます」

言っと灰はゆっくりと立ち上がった。利き手とは逆の手で法術を受け止めたのは咄嗟の判断だった。右手があれば治療は自分でできるだろう。眩暈は続いていたが、ここで倒れるわけにはいかない。周りを見ればいつの間にか気遣わしげな表情の仲間達に取り囲まれていた。おそらく酷い顔色をしているのだろう、と灰は苦く思う。痛みのせいだと皆の目には映るだろう。その方が良い。

「すまなかつた。奴を甘く見た」

低く仁識が言った。仁識は苦々しい表情で、灰の腕に残るのたうつ炎にも似た傷を見つめていた。

「いらぬ手出しをするべきではなかつた」

「……仁識でも謝ることがあるんだな」

ぼそりと呟いた治都が仁識に睨まれて視線を逸らした。

「なぜ追わせてくれなかつたんですか」

問うたのは仁識の範の若者だつた。聡達を追おうとして仁識に止められた一人である。

「奴は聖遣使だ。下手に手出しをしたら罪に問われかねん」

「何なのです。その聖遣使つてのは」

「神殿に仕える条斎士で、あらゆる異端を狩る者だ。もつとも力の強い一握りの者しかねんとは聞いているが、怪魅師けみしや邪法に手を染める者を狩り出し、捕える。時に殺すことも辞さない連中だ。そして聖遣使は皇帝の直属としての身分も与えられ、その任務に当たってはあらゆる特権が許されている。あいつが言うように邪魔をしただけで不敬の罪に問われることもある。奴等には関わらない方がいい」

淡々と響く仁識の言葉に、灰は我知らず顔を伏せた。聖遣使の話は柳角りゅうかくに聞いて知っていた。あの銀の腕輪、聖遣使の証であるそれに刻まれているのは、白沙那はくさなが古くから守り伝える神殿の護法の呪だという。異端に対する残虐な逸話に事欠かない聖遣使だが、実際に存在することを知っている者は多くはない。聖なる使いを意味するその名とは裏腹に、帝国の暗部に属する者達なのだ。

その聖遣使がなぜ、多加羅にいるのか。多加羅に不穏な気配あり、と聡達は言っていた。それはどういうことなのか。まさかあの闇と関わりがあるのだろうか。灰はきつく唇をかむ。闇の気配はまだ掴めてすらいない。

須樹もまた相手に感じた危うい雰囲気を感じ出していた。歪な影を孕む危うさだ。そして気付く。聡達には何かが欠落しているのだ。

人が人と対して得る共感、互いの個を認め合う境界　　聡達にはそれが無い。彼に感じたのは躊躇いなく力を振るい、容赦なく相手を追い詰める冷徹さだ。それが任務とあらば命を奪うことも辞さない聖遣使ゆえのものなのか、それとも皮肉気な表情の下に隠した聡達自身の性さがなのか、短い対面ではわからない。いずれにせよ関わり合いになりたい相手ではなかった。灰への含みのある物言いも気になるが、当の灰に問える状況ではない。一刻も早く治療すべきである。「しかし沙羅久惣領家の人間が、聖遣使とはいえ多加羅に潜り込むとは……惣領はこのことを御存じなのか？　そういえば、灰はなぜ奴が聡達とわかったんだ？　向こうも前から知っているような口ぶりだったが」

治都が言う。もっともな疑問ではあったが灰には答えることができなかつた。なぜ、と問いたいのには彼の方だ。聡達が灰に向けた言葉はあまりに不可解だった。そしてあの刀、忌まわしい記憶に繋がるそれをなぜ聡達が持っているのか。「前に一度緩衝地帯かんしょうたいの街で会ったんだよ。灰もその場にいた。とにかく戻ろう」

須樹は言つと、皆を促した。

細い路地から踏み出した彼らはまるで灰の周りを固めるようにして一団となつて歩き出す。周囲を守るようにして歩く彼らに灰が戸惑いの表情を浮かべた。

「俺は大丈夫です。星見ほしみの塔に戻って自分で治療します。みんなは鍛錬所たんれんじょに戻ってください」

「それはだめだ。あの聡達とやらがうるついているんだぞ。奴はどつやらお前に含みがあるようだからな。自分で治療すると言つたら星見の塔まで送る」

治都の言葉である。申し合わせたわけでもない若者達が一様に頷いた。

「そうだな。だが、条斎士の法术を素手で受け止めるとは無茶苦茶だ。そんなことができるとは聞いたこともないぞ」

呆れたように一人が言う。

「うむ。無茶な若様だ」

「俺は心臓が止まるかと思ったぞ。あの光景、到底忘れられそうにない」

「俺条斎士の法術を見たのも初めてだよ……夢に出てきそうだ」

軽口のように言い合うその言葉を聞きながら、須樹と仁識は素早く視線を交わし合った。おそらく同じことを互いに考えているだろうことがわかった。若者達は灰のことを受け入れてはいるが、剣術で劣る彼のことを、いざという時には足手纏いになりかねない存在であると考えていた。いわばお荷物である。だが、先ほどの出来事は若者達が持つ灰への印象を変えたようだ。まるで灰をからかうような会話を交わしながら、しかしそこにあるのは紛れもない少年への驚嘆であり、畏怖に近い、だが尊敬というにはまだ曖昧な感情だ。須樹は灰を見やった。周囲の態度の変化にも一向に頓着していないらしい淡々とした表情でありながら、普段にはない張り詰めた何かがそこにはある。傷の痛みのみせだけとは思えなかった。

「大丈夫か？」

思わず問えば、俯いていた灰はつとしたように須樹を仰ぎ見た。

「大丈夫です」

落ち着いた声音だった。到底信じることのできぬその言葉ではあったが、それ以上問うことを阻む硬質な響きに須樹は続く言葉を呑みこんだ。

灰は気付かれぬように小さく息をつく。若者達の気遣いが、須樹の言葉が、ともすれば荒れ狂う何とも知れぬ情動に引きずられる己を現に引き戻す。胸中に沸き起こる波立つそれは、惑い揺れ、結ばれないまま霧散した。

（呑みこまれるな。しっかしりしろ）

灰は顔をあげると前を見据える。浮きたつ街の様子は鮮やかに、妙に乾いて見えた。

秋連は硝子筒しゅつれんの炎の揺らめきに、ふと顔をあげた。書物を広げた時には端正だった炎が、蝶が羽ばたくように閃いている。どうやら油が切れかかっているのにも気づかぬほどに書物に没頭していたらしい。

硝子筒を手に秋連は書庫を出た。食事の後そこに籠ってから、一体どれほどの時間が経ったのだろうか。時をはかろうにも細い廊下には窓がなく、月の位置を見ることがかなわない。しんと静まり返った様子から、皆すでに眠りに就いているのだろう。

一階の部屋へと向かう階段の途中で、硝子筒の炎が一度大きく燃え上がり、唐突に消えた。己の手も見ることもかなわぬ闇の中で、秋連はゆっくりと足を運ぶ。布靴を通して石の冷やかさが感じられた。薄手の衣では肌寒いくらいである。夜は次第に長く、冷たくなっているのだ。

階段を降り、廊下の突き当たりにある己の部屋へと向かおうとして秋連はふと足を止めた。微かな音が聞こえたのだ。地を這うようなそれに耳を澄ます。虫の音ではない。人の声である。このような深夜に一体誰がしゃべっているのか、離れた場所から聞こえるその内容は掴めない。

( 厨房から……？ )

その声はどうやら秋連の部屋とは反対側にある厨房から聞こえるようだった。足音を殺して厨房に近付き、細く開いた扉から中を覗くと、そこは闇に沈んでいた。用心深く目を凝らすも、声の主はいない。恐る恐る中に入り、厨房を見渡す。

「……は、明日神殿に抗議をなさいます」

突然明瞭に聞こえた言葉に秋連はぎよっと立ち竦んだ。無人の室内を見回し、その目が一点に据えられた。竈のそばに設えられた換気口である。天井に近い位置にあるそこからどうやら声は聞こえる



ようだ。誰かが星見の塔の外で話しているのだ。くぐもって聞こえるそれは押し殺したような男の声だった。そして次に聞こえた声に秋連は息を呑んだ。

「ですが、神殿は惣領の抗議を聞き入れるでしょうか」  
(灰……?)

秋連はその場に立ち尽くしたまま耳を澄ませる。

「むろん聞き入れるでしょう。何ゆえ、聖遣使が多加羅に入り込んだのか、それも事前に何の通達もなく、沙羅久惣領家に連なる者を送り込むとは多加羅への愚弄です。いかに聖遣使が特権を有しているようにも、多加羅惣領家の存在を無視してこの地は治まりませぬ」  
僅かな沈黙が続く。それを破ったのは男の方だった。

「惣領は灰様のことをお気に懸けておいでです。聖遣使が如何なる目的で多加羅へと送りこまれたかわかりませぬゆえ、今後くれぐれも注意なさるように、との仰せです。灰様の力のことが知られているとは思えぬが油断せぬように、とのことですよ」

「わかりました」  
少年が答える。

「惣領に伝えて下さい。まだ、見つけることはできていないと。だが、祭礼に向けて人が増えるほど危険は増しているように思えます。おそらく、遠からず感じ取れることはできるでしょう」

「承知致しました」  
衣ずれの音が響き、次いで微かな足音がする。どうやら遠ざかっていくらしい。静寂にひたされた闇の中で、秋連は強張っていた体から力を抜いた。

(一体どうということだ……)  
会話の内容は断片的で掴みどころがない。しかしはっきりしていることは、会話を交わしていた一人が灰であり、もう一人の男が峰瀬の使いであろうということだ。どうやら秋連の知らぬところで何事かが起こっているらしい。それも穏やかならざることに違いない。秋連は昼間に見た灰の様子を思い出す。左手と腕に酷い傷を負っ

て帰って来た少年は、その怪我について多くを語らなかつた。もつとも書庫で書物の整理をしていた秋連は、その傷を目にしてはいない。ただ左手から肘までを包む包帯が痛々しく、えな 娃娃の話では、傷は明らかに尋常なものではなかつたという。青褪めるりん 娃娃と稟りん に対して、灰はただ平気だから、と言っただけだつた。しかしさすがに体調が優れぬのか、灰は秋連の講義を受けることもなく早々と就寝したのだつた。

今更ながらに秋連は己の迂闊さに気付く。もしや灰が負つた傷も先程の会話の内容と関わりがあるのだろうか。一体何が起こつていのかはわからないが、それが少年にとって危険なことなのは間違いないだろう。そしてそれは灰の怪魅師としての力とも関係があるのだ。聖遣使が実在することは秋連も知つているが、それが多加羅に入り込んでいられるらしいというのは初耳だつた。もつとも彼はそのようなことを知る立場にはいないのだが

(惣領は一体灰に何をさせているのだ)

かたり、と音がする。厨房の隣にある食物貯蔵庫からだつた。灰はどうやらそこから出入りしているらしい。秋連は息をつめて少年の気配を探つた。はからずも聞いてしまった先程の会話である。深夜に人知れず交わされたそれは、恐らく星見の塔の住民に秘すためであろう。知らぬ振りをすべきなのか、それとも一体何事が起こつているのか問い質すべきなのだろうか。秋連は迷う。

彼はただ教育係として灰を預かつているに過ぎない。少年は恐らく惣領である峰瀬の命に従つて動いているのだ。それは秋連が踏み込むべき領分ではない。

己の思考に沈みこんでいた秋連は貯蔵庫の扉が軋む音にはっとした。続いて軽い足音が厨房の前に差し掛かり、そして止まつた。秋連は思わず息を詰める。束の間の静寂 壁を隔てて対する相手の緊張が、夜に滲む。己の心音に縛される。だが、少年は何事もなかつたように再び歩を進めると、静かに階段を昇つて行つた。

(私がいることに気付いたか……?)

なおも秋連は立ち尽くし、闇に沈み藍の輪郭を纏う己の手を見つめる。何かを掴み損ねた焦燥が胸中にあつた。

それを聞けばお前是否応もなく惣領家が秘める闇に入り込むことになる。峰瀬の言葉えを思い出す。あれは、つまり警告だったのだ。惣領家のことに触れるな、と。灰が峰瀬から何を命じられようとも、秋連はそれを知るべき立場にはないのだという、明確な宣告だった。秋連は知らず拳を握りしめる。

(今更気付くとは間抜けなことだ)

だが、あの時は秋連も峰瀬がただ肉親としての情愛だけで、あるいは義務感だけで灰を呼び寄せたのではないことに気付いていたのだ。それでもなお峰瀬に真意を問おうとしなかったのはなぜなのか。そして今なぜ、己は少年を引き止め真実を聞こうとしないのか。なぜ

やがて静かに閉ざされる扉の音が階上で聞こえた。

沙羅久（しゃらく）の街は多加羅の北西に位置する。その街の佇まいは多加羅とは様相を異にしている。小高い丘のような優美な外観の多加羅と比べ、沙羅久の街並みは平坦だった。薄茶の家壁と単調な四角い家々の形が、見る者に堅牢な印象を与える。街は多加羅のように壁に囲まれてはいないが、要所に配された物見の塔が常に外部を監視しており、街を訪れる者に無言の圧迫を感じさせる。そして多加羅が金笹の産地として芸術に秀で、祭礼で名を馳せているのとは対照的に、沙羅久は歴史に名を残す優秀な軍で知られてはいても、これといった名産はない。沙羅久の人々が多加羅へと抱く対抗意識の根底には、帝国の中でも芸術都市として知られる多加羅への密かな羨望があつた。

聡達（そうたつ）は怠惰に寝台に寝そべりながら開け放した窓から見える街を憂鬱に見やった。街の中心部にある惣領家の屋敷もまた飾り気のないう外観である。およそ装飾というもののない建物は一際高く街を睥睨するように聳え立っている。聡達の部屋は建物の中でも最も高い

位置、五階の奥にあり、平らな街並みが一望できた。今、街は押し迫る夕闇に染まり、淡い夜の霞に沈みつつある。

(兄貴の奴、もったいぶりやがって)

心中で呟いて聡達は街並みから目を逸らし、苛立ちを紛らわすように傍らの卓へと手を伸ばした。掴んだ刀を目の前に翳し、そつと鞘から刃を抜き放つ。戯れに空気を裂けば銀が纏う鋭い光沢がゆらりと揺れた。それに目を細めた聡達は、前触れもなく開いた扉に視線を流した。

唐突に部屋へと入って来た男は、刃を弄ぶ聡達の姿に眉を顰めた。後ろ手に扉を閉めると、寝台の横に立つて聡達を見下ろす。

「刃をしまえ」

命令に聡達はにやりと笑う。これ見よがしに刃を振れば、目の前の相手は益々顔を顰めた。

「わかつたよ。んな怖い顔すんなよ兄貴」

言いながら聡達は刃を鞘にしまうと、卓に置く。かたりと乾いた音が響いた。体を起こし、肌蹴た衣はそのままに兄 わかくに 若国と対すれば、相手はなおも苦々しい渋面である。

「私が何を言いたいかわかるか？」

「もったいぶつた言い方はやめてくれ。だいたい話があるってんならさつさとすればいいだろ。それを一日謹慎させられてこつちもいい加減うんざりしてるんだよ」

「謹慎を申しつけられる自覚はあるわけだな」

聡達は四歳年上の相手を見上げると皮肉に笑む。まるで鏡と向かい合っているかのように似通った相貌の二人である。しかし内包するものはあまりにかけ離れている。この兄と話していて共感することなど皆無だ。それは相手も同様に感じていることだろう。

「昨日のことを言ってるならお門違いもいいとこだ。俺は単に任務のために多加羅に行っただけだ」

「だがその結果がこれだ。今朝、多加羅惣領家から神殿に正式な抗議があつたらしい。神殿から沙羅久へ勝手なことをするなどのお達

しがあった」

「へえ……多加羅もまださほどの腑抜けではないらしいな」

「聡達！」

厳しい若国の声に聡達はうんざりしたように頭をかく。

「いいじゃねえか。どうせ多加羅なんて今や名ばかりの存在だろ」

「いかに多加羅が力弱くなるうとも、侮ってはならん。特に峰瀬は油断のならぬ人物と聞く。下手に弱みを見せればつけこまれるのはこちらだ」

「それも今の惣領が死ねば終わりだ。次の代になれば多加羅が潰れるのも時間の問題だ。あの家系は早死にだからな。兄貴もそのつもりなんだろ。親父もそろそろ兄貴に跡目を譲るつもりなんだろ？」

若国はため息をついた。

「私はそのようなことを言っているのではない。お前の軽はずみな態度を改めると言っているのだ。だいたいその任務とやら、お前ではなく別の聖遣使に与えられたものだろう。それをお前が無理矢理に自ら多加羅へと赴いたと聞いたぞ。なぜそのようなことをした！」

「なあ、兄貴」

言つと聡達は再び刀を手にとった。

「滝斗たきとのこと、覚えてるか？」

脈絡のない聡達の言葉に若国は訝しげな表情で黙る。

「腹違いとはいえ兄貴だつてのに、俺あんまり覚えてねえんだよ。」

「どんな奴だつた？」

「なぜそのようなことを聞く？」

若国は身構えた。彼の狼狽に目の前の弟は気付いているのか、揶揄するように笑む。どこか人を見下したような笑みだった。それに対して沸き起こる怒りを若国は抑える。聡達の挑発に乗るのは賢明ではない。若国はこの弟が苦手だった。対すれば油断のならない相手を前にするような緊張を覚えるのだ。そこにあるのは恐れではなく、理解できない相手への警戒である。

若国自身は決して軟弱な性質ではない。むしろ豪胆にして緻密と

いう、上に立つ者としての資質を兼ね備えた青年である。将来、沙羅久惣領家を継ぐ者として幼いころから厳しく育てられた若国にとって、自由奔放な弟の性はあまりにも己とはかけ離れたものだった。それに加え年若くして聖遣使を拜命する聡達は、窺い知れない能力を有する不気味な存在でもある。

「覚えてるはずだよな。それとも兄貴は早く忘れたいのか？ 滝斗が沙羅久を追い出されたのは兄貴のせいだもんな。母上も惨いことをする」

「いい加減にしないか！ それがこの話と何の関係がある」

「俺は真実が知りたいんだ。滝斗は多加羅惣領家に連なる女を殺したんだろ？ そして何者かに殺された。なあ、兄貴は滝斗が誰に殺されたか知りたくはないか？」

ひそりと聡達は言った。若国は一瞬言葉を失い、聡達を睨みつけた。

「お前が何を言いたいのか私にはわからんが、滝斗はとうの昔に沙羅久との縁を切った者だ。そうされても仕方がないほどの墮落した人物だったとお前には言っておこう。いらぬことに首を突っ込む暇があるならば、もう少し惣領家の一員としての自覚を持つよう精進することだな。日頃からくだらん場所に入入りしていることは皆知っているぞ。そろそろ態度を改めることだ」

一息に言つと若国は踵を返す。その背に聡達は放り投げるように言った。

「惣領家の肩書がそんなに大切か？」

若国は答えなかった。しかし部屋を出る前に聡達を振り返ると硬い声音で言った。

「とにかく、二度と多加羅へは行くな。いくら聖遣使といえども、お前は沙羅久惣領家の人間なのだ。勝手な所業は許さん」

弟の返事を待つこともなく若国は音をたてて扉を閉める。取り残された聡達はため息をつくと再び体を横たえた。

「そう言われてもなあ」

ぼそりと呟くと、すでに宵闇に沈みつつある部屋を眺める。見慣れた空間は、閉塞感を伴って視界を埋め尽くした。

「つまんねえ……」

呟くと聡達は目を閉じた。手の中の刀の感触が冷たく、それが昨日対した相手を思い起こさせる。多加羅惣領家の灰　臆することもなく正面から睨みつけてきた相手の相貌を思い浮かべ、聡達は知らず笑んでいた。以前から会ってみたいと思っていたのは事実である。だが、これほどまでに興味をそえられるとは思っていなかった。

灰は聡達がなぶるつもりで放った法術を片手で受け止め、あまつさえ消してみせた。それは条斎士でも容易くできることではない。

法術が阻まれたその瞬間、聡達を感じたのは己の法術が破られたことへの屈辱ではなく、むしろ心中に澱のように凝るもの　おそらく人が倦怠と呼び、退屈と表現するそれが晴れるほどの高揚だった。灰だけではない。多加羅若衆の面々も存外に骨のある連中である。条斎士に恐れ気もなく向かって来る気概を持つ者は、そう多くはない。

（せつかく面白い相手を見つけたのに、大人しくしてるなんてできねえよなあ）

刀を握る手をおろせば、敷布の感触が心地よい。聡達は意識がまどろむままに体から力を抜いた。眠りに落ちる寸前に彼が感じたのは、ゆっくりと手からこころがり落ちる刀の重い感触だった。

鼈甲の櫛を鏡台に置くと、夏純かすみは満足の溜息をついた。磨き抜かれた鏡に映る己の主の姿に称賛の眼差しを送る。

「悠緋様ゆうひ、お美しゅうございます」

「夏純はいつでも私のことをそう言うわ」

どこか無然とした表情で悠緋は言つと、丹念に梳られた己の黒髪をひとふさ撫でる。彼女の居室であるそこには、今は夏純と二人きりである。ふんだんに明かりを灯した部屋は柔らかな光に包まれている。口うるさい年配の女官も今はいない。夜の底に響く虫の音が

優しく聞こえた。

「なんだか近頃特にお美しくなられたように思います」

彼女の言葉に悠緋は軽く首を傾げただけだった。幼いころから悠緋付きの侍女として常に側近くに仕える夏純には、悠緋がその声と表情とは裏腹に不機嫌ではないことがわかる。むしろ、浮き立つ様を必死に押さえつけているようにも見えた。仄かに上気した頬は湯浴みのせいばかりではあるまい。

「明日は私も御一緒しとうございます」

「あら、夏純はだめよ。貴族の娘が若者ばかりの鍛錬所たんれんじょに行くなんて、許されることではないわ。私だって巫女役みこやくだから行くだけだもの」

「わかっております。でも剣舞けんぶを間近で見ることができるだなんて悠緋様が羨ましくて……」

悠緋はからかうような視線を侍女に送った。

「そんなことを言つて、憧れの若衆わかしゅがいるんじゃないかしら？」

「まあ、そんなことはございません。悠緋様こそ、どなたかいらつしやるんじゃないませんか？　なんだか楽しそうでいらつしやいますもの」

夏純は言いながらも仄かに頬を染める。悠緋はそれに笑って答えようとして、不意に脳裏に浮かんだ姿に言葉を呑みこんだ。端然と表情も変えずに彼女を掠めて逸らされた視線

「いいえ。いないわ」

強く言う。夏純が驚いた表情で悠緋を見た。伏せられた悠緋の瞳に硬質な怒りと、それだけではない何かが浮かんでいる。

「……私、お気に触ることを申し上げましたでしょうか？」

恐る恐る問う夏純の声に、悠緋は我に返ったようだった。気まずそうに微笑む。

「いいえ、そういうわけではないの。ちょっと思い出したことがあって、急に腹が立ってしまっただけ。何でもないので。それに、明日のことだって私は義務として行くだけだもの」



夏純の視線を避け、悠緋は鏡台の前の椅子から立ち上がった。挑むように鏡面に映る自身の姿を見つめる。白い薄紗の寝巻きは緩やかに揺れて、襷の影は灯を映して仄かな紅を含む。

「悠緋様、私はてつきり明日のことを楽しみにされているとばかり……」

「ええ、楽しみだわ」

悠緋は呟く。問いかける夏純の表情に気付かぬふりをして、笑んでみせた。

「さ、夏純もそろそろ部屋にお戻りなさい。口うるさい女官頭が来たらまた小言を言われるわよ」

優雅に一礼して部屋を去る夏純を見送り、悠緋は寝台へと倒れ込んだ。目の前に己の黒髪が流れるように広がる。夏純が丁寧に梳いたそれは、光を纏い、濡れたように艶やかだ。夏純の物問いたげな視線を思い出して小さくため息をついた。彼女の言葉に思わず過剰に反応した自身への羞恥が沸き起こる。

夏純に言われずとも悠緋は己が浮き立つ心持でいることに気付いていた。巫女役として鍛錬所に赴くことを誰よりも心待ちにしていたのは悠緋自身である。

「本当に何を舞いあがっているのかしら……」

零れた呟きは行くあてもなく頼りなく響いた。目を閉じればまたあの光景が浮かぶ。逸らされる瞳、まるで彼女のことなど歯牙にもかけぬ様子で、それに被さるようにして、初めて出会った時に相手が見せた笑顔がくつきりと浮かんだ。

「灰……」

声に出してみる。

なぜ、これほどまでにあの少年が気になるのか、悠緋にはわからない。相手に感じるのは怒りと苛立ち、そしてその奥底に燻る何とは知れぬ惑いだ。たった二回顔を合わせただけの相手である。接見の間で対した時には良い印象すら抱けなかった。しかし悠緋は灰との対面の後、聖蓮院しょうれんいんに戻ってから彼の面影を思わぬ日はなかった

のだ。その理由を見極めようとするればするほど、惑いは大きくなるばかりだ。祭礼のために多加羅に帰ったのは数日前のことだったが、気づけば若衆が集う鍛錬所を見つめている。

（明日会えば、きつとはつきりわかるわ。何が気になっているのかも……）

心中に呟けば、自身でも情けなくなるほどに言い訳めいて響いた。それがなおさらに腹立たしく、悠緋は唇をかむ。そうしなければ再び少年の名を口に出していたらう。そうしたくはなかった。ただ、心の中でなぞるようにその名を呟くことを止めることはできなかった。

## 19 (後書き)

今更ですが、名前の読み方について少し。書き手は音読み、訓読みには特に拘っていません。「聡達<sup>そうたつ</sup>」と「若国<sup>わかくに</sup>」なんて名前が並んでいるのもそのせいです。片仮名の名前も混ざっています(灰の祖母、リーシェンとか)それはそれ、東と西で文化が違うんだな、という感じで読んでいただければ、と思います。

因みに、服装のイメージは敢えて言えば和風に近いですが、生活様式は別に和風をイメージしてないので、これまたごたませです。

「異世界」ですので、なにせ。

ではでは、今後ともよろしくお願いいたします！

祭礼まで三日を残すばかりとなった日、十二ある範はんは見回りを免除され鍛錬所たんれんじょに集められた。日々の見回りと厳しさを増す剣舞しるぎまいの稽古に、広場に集まるどの顔にも疲れが色濃く出ていたが、疲労をも圧してその表情にあらわれているのは緊張と高揚である。

その日は祭礼三日目、つまり六日後の本番に向けて、惣領家の人間もまじえての本格的な下稽古が行われるのである。街衆には秘されるため鍛錬所で行われるそれに、惣領家からは若衆わかしゅの剣舞を神殿に捧げる役目である透軌たうきと、巫女役みこやくを務める悠緋ゆうひが訪れる。惣領家直系の子弟が鍛錬所を訪れることはこの時以外にはなく、いずれ己の主となるに違いない透軌を迎えるため、若者達にとっては祭礼の前の第一の晴れ舞台とも考えられていた。

そして中央の舞い手の指名も、例年この日に行われるのが習わしである。古くから多加羅たからに伝わる武道の型を模したその舞いは若衆であれば誰もが修めるものではあるが、祭礼の場において舞うのはたった一人である。通常であれば頭が、それ以上の舞い手があれば頭からの指名によって決定されるものだった。

広場に集った若者達は興奮を抑えきれず、己の主たる人々の訪れを今や遅しと待ちかまえていた。特に若衆に入ったばかりの幼い面々にとつては初めて惣領家の人間と間近に接する機会であり、むろん灰を除いて、ということではあるが、そのはしゃぎようは並々ならぬものがあつた。

「おい、何とかしてくれ、あのがきどもを」

見るに見かねて言う治都やちに須樹すけは苦笑で答える。幼い者達はまだ祭礼で果たすべき役割はないため、この場で求められるのは静かに礼儀正しく惣領家の人々を迎えることなのだ。

「そのうちいやでも静かになるさ。俺達もそうだっただろ」

須樹の言葉に治都も確かに、と頷いた。かつて彼ら自身が同じよ

うにはしやぎながらも、実際に惣領家の人々があらわれた時には、緊張のあまり硬直して立ち尽くしていたのだ。

「透軌様が今回は来られるんだよな。確か俺達よりは一歳上のはずだが……」

治都自身も緊張しているのか、他愛もないことをぶつぶつと言いながら、まだ誰もあらわれてはいない入口を見つめている。

「おい、灰かい、お前透軌様とは話したことがあるんだろ？　どんな方だ？」

治都の問いかけに灰は一瞬困ったような表情を浮かべた。

「俺は一回も話したことがないんです。多加羅に来た時接見の間で見ただけで、それ以来会ったことはありません」

灰の答えは淡々としたものだったが、治都は顔を赤らめた。

「すまん、いらんことを聞いたな」

灰は気にした様子もなくそれに首を振っている。笑みさえ浮かべているその表情を、須樹は複雑な思いで見守った。どうやら灰が惣領家に厚く遇されているわけではないことに、そして灰自身が惣領家に対して穏やかならざる思いを抱いているらしいことに須樹は気付いていた。

「若様、気をつけた方がいいですよ」

横合いから口を挟んだのは隣に整列している範の先頭に立つ仁識だった。斜め後ろに立つ灰を振り返っての言葉である。彼はどうやら彼なりに灰のことが気に入ららしい。茶化すようなその呼び名には悪意ではなく砕けた気安さを感じられた。

「何に気をつけるってんだよ」

治都の声にあからさまに白い目を向けた仁識ではあるが　この二人は呆れるほどに相性が悪いのである　普段のように辛辣に応酬することはなかった。

「このような場で若様がどれほど複雑な立場か、お前達は気付いてないらしいからな」

「どづいことだ？」

「貴族的思考というやつだ。支配の基本のその一は、己の権威を絶対とすることだ。だが、ここに意に沿わぬ出来損ないの同族がいたとしよう。さあ、どうする？」

あまりな比喻に須樹の顔が険しくなるが、灰はあっさりと答えた。「その出来損ないが単に愚かであれば問題はないですね。己の道具として利用するもよし、捨て置いて見捨てるもよし。だが無視出来ぬ程にそれが度外れていたなら、己の名を貶めかねない厄介者ともなる」

「逆も然り、ですよ、若様」

仁識は意味ありげな笑みを浮かべ囁くようにして言葉を続けたが、折しも遠く馬車の響きが聞こえ俄かにどよめいた若者達の中で、須樹はそれを聞き取ることができなかつた。どよめきは波が退くように消え、かわって張りつめた静寂が辺りを覆う。

馬車の音はやがて鍛錬所の手前で止まった。まずあらわれたのは惣領家の屋敷で透軌付きとして仕えている老年の家司けいしだつた。家司は整然と並ぶ若衆に鋭い視線を投げると、重々しい響きの声を発した。人を圧するに慣れた者の声音だつた

「これより透軌様と悠緋様がこちらにお越しになるが、決して失礼のないよう、厳に心掛けよ」

張りつめた静けさの中、家司は傲然と顎をあげて続けた。

「灰様はおられるか」

我知らず体を強張らせた須樹は、無言で己の横をすり抜けて行く少年を見やつた。若衆の前に灰は一人立つ。

「灰様はこちらへ。祭礼では惣領家の一員として列するよう惣領の御命令です。ただし灰様は特に何も役目はございませぬ故、後ろに控えていただくだけで結構です」

「わかりました」

家司の声が敬意に欠けるといふ点でむしろ情感が籠っているのに対して、灰の声は虚ろなほどに何も感じられなかつた。治都の身じろぐのような気配に、須樹はそれに気付いたのがどうやら彼だけでは

なかつたらしいことを知る。

程無くして入口に姿をあらわしたのは、華麗に髪を結い上げ、白の絹衣の上に鮮やかな董色の打掛けを纏った悠緋であり、高位の武官が着る装束に身を包んだ透軌だった。その鉄紺の胸元には鷹閃ようせんを模した勇壮な図柄の刺繍が施されている。さらに続くのは悠緋付きの女官連中だろうか、慚然とした表情は祭礼のためとはいえ若者ばかりの場所に大事な姫が赴くことへの不満のためだろう。

最後に入って来たのは神殿の司祭らしい青年だった。青年は灰を一瞬凝視したが素早く目を伏せるた。それは、彼が誰であるかを知った人々が向ける好奇心もあらわな視線に比べれば極めて控えめなものだったが、灰はなぜか焼けつくような強さを感じた。そしてそのように感じる程にどうやら動揺をしているらしい己に、腹立たしさを覚える。若者達の視線を痛いほどに背に感じながら、灰は背筋を伸ばした。そうしなければ、足元がぐらつくようなおぼつかない感覚に捕らわれそうになる。

大気を打つような音が広場に響き、若者達はその場に一斉に叩頭して主である者達を迎えた。初めてのことにまごつく幼い少年達も慌ててその動作にならってぎくしゃくと頭を下げた。灰はその一種異様な光景を見つめる。跪く彼らの姿に、むしろ地中に落ち込むような心地を感じたのは灰の方だた。

いかにもそれを自然に受け止めている二人に視線をやれば、自分を見つめていたらしい悠緋と目が合った。悠緋は気分を害したように彼を睨みつけた。少なくとも灰にはそう思えた。仮にそれ以外の何かがそこにあつたと気付いていたとしても、それが何なのかはわからなかつただろう。

灰が透軌と悠緋に会うのは接見の間以来のことである。小さく一礼する彼に、透軌は無表情と紙一重な穏やかさで、悠緋は取り澄ましたような冷やかさで応えた。

「ではこれより一連の流れに従い、祭礼本番と同じく儀式の手順を確認致します」

家司が透軌に向かつて恭しく言うと、透軌が頷くのも待たずに加倉へと視線を送った。

「中央の舞い手はまだ決まっておらぬのか」

「はい。私は今日の舞を御覧いただき、透軌様に中央の舞い手を決めていただきたいと存じます」

加倉の答えに須樹のみならず多くの若衆が目を見開いた。彼らの誰もが、おそらくは頭自身が名乗りをあげるに違いないと考えていたのである。

「ふむ。それもそうだな」

家司は頷くと、己の主を振り返った。

「透軌様、よろしいか？」

問いではなからう 灰は落ち着いた表情で頷いた透軌を見やりながら、ふと思った。それは真実の意味において問いではない。おそらく透軌にとっては己に仕える者の言に頷くのは自然なことなのだ。その表情にあるのは愚かさではなかったが、どこか漠として掴みどころのない いわば空白だった。

「舞の隊形を整えよ」

加倉の一声に若衆の整然とした列が崩れ、舞い手ではない者達が壁際へと退いた。残った舞い手達は各々の配置へと素早く移動して立つ。その彼らの前に進み出たのは司祭の青年だった。彼は若者達の正面ではなく斜めに立つと、己の額と左右の肩に触れ、最後にその手を握りしめて胸の真中に押し当てた。神への崇拜をあらわす動作である。

次に透軌が進み出ると若衆の前に立ち、誰もいない正面に向かつて恭しく頭を下げた。ここに至って漸く灰は司祭の青年が司祭長の代理として来たらしいことに気付く。神殿でもっとも権威ある人物がまさかこのような場を訪れるはずもなく、かわりに青年が送られたのだらう。もっとも真に代理を務めるわけではなからう。司祭長その人の位置に立つは不敬であり、実際少し離れた位置に立つて若者たちを注意深く見詰める姿から、祭礼に向けて不手際がないかを



厳しく見極めるために遣わされたと考える方が相応しいのだろう。

透軌は跪くと腰に帯びた剣を手に持つ。細身の剣の鞘には、銀と翡翠で象嵌された鶯が、滴る血のような紅玉に絡みついている。見事な意匠だった。

「神の慈悲の我らに賜わらんことを」

供物を捧げる常套句を落ち着いた声音で言う透軌は剣を高く捧げ持った。司祭の青年が進み出てそれを受け取ると、静かにもとの位置へと戻る。実際には司祭長が供物を捧げた者に対して聖句を言うのだがここではそれはない。

次いで行われた若衆の剣舞は見事なものであった。第一組の舞は空駆ける風をあらわしており、飛燕の動きに着想を得たものである。素早く身軽な者に適した舞だった。

悠緋は舞を見ながらも、少し離れて立つ灰に密かに視線を投げた。接見の間以来となる少年は夏の間日に焼け、背が伸びたようだ。背筋の伸びた立ち姿である。左手から腕にかけて巻かれた包帯に思わず眉を顰める。その白さが痛々しかった。先ほどはどのように接してよいのかわからず、思わずよそよそしい態度を取ってしまったことが気になっていた。すぐにでも声をかけて振り向かせたい衝動と、感情を窺わせない相手への苛立ちが緋い交ぜになり、胸中がざわめく。

勇ましい掛け声にはっと舞に目を戻すと第二組目の若衆が勢いよく進み出たところである。第二組は大地の象徴として力強く勇壮な舞である。若者達が踏みしめるたびに重い音が響いた。

（だいたい私は灰に腹を立てていたはずなのにどうしてこんなに気になるのかしら。そういうえば私、なぜ腹を立てたりしたのかしら）

悠緋は思う。そもそも灰の態度がまるで人を見下しているようだったから（本当にそうだったかしら？ 今思えば、並居る家臣にも怖気づかずに堂々としていたのはむしろ立派だったのかもしれないわ）何よりも一度出会っているのに素知らぬ振りをしたから（でもあの場ではそうするよりなかったんじゃないかしら…

…） 悶々と考えるうちに、やはり悠緋の視線は灰へと流れる。銀系の髪を隠しているのが惜しい気がした。絡玄は吐き捨てるように異端と言ったが、悠緋には鮮烈に感じられた姿なのだ。

水を象る第三組の舞と炎を象る第四組の舞が終わり、各組の主だった者が進み出て多加羅に古くから伝わる伝統的な型を舞うが、それはあくまでも補助的な動きに過ぎず、最も複雑かつ精妙な動きは中央の舞い手に任されるのだ。

舞が終わりに近づくにつれ、悠緋は物思いから脱して集中力を高めようとした。この後彼女の出番がある。本番では今この場に集う者達よりはるかに多くの人々の前で行う儀式だが、もちろん練習でも失敗は許されない。何よりも、灰が見ている。

（不様な姿だけは見せたくない）

そう思い、なぜこれほどまでに灰が気になるのか、悠緋は漸く合点がいく。どうやら年の近い従兄弟に対抗心があるらしい。昔から負けず嫌いだということは周囲の皆から言われていた。それだけのことだ、と言い聞かせれば妙に心が凪いだ。

舞が終わわり若衆達が退くと、最後に悠緋が滑るように進み出た。優雅に正面へと叩頭する。組んだ腕に額を押し付けるようにして身を屈め、次に懐から取り出した巻き書を右手の一振りで開く。長い白紙が優美に広がり、それが地面に落ちないように左手で掲げ持つ。祭礼のために何度も練習した動作である。この動作が美しく行われるかどうかで、次の年の吉凶がわかるとまで言われているため、模擬とはいえ滞りなく果たせたことに悠緋は小さく息をついた。本番に使う祈禱を綴った巻き書は祭礼の時以外には持ち出せないため、今この場で使われるのはあくまでもかわりの巻き書である。

「常しえなる神の御恵みに、我ら真の信を捧げるなり」

落ち着いた悠緋の声が響き、司祭の青年が小さく頷くとおもむろに悠緋の手から白紙の巻き書を受け取った。司祭長の祈禱と託宣を受けるのは本番のみである。悠緋は再び深く叩頭すると静かに立ち上がり、元の場所へと戻った。それが儀式の終わりではあるが、祭

礼ではその後も夜を通して祝いが続けられ、惣領家の面々もその時ばかりは街へと繰り出すのが通例である。実際に祭礼が終わるのは夜も更ける頃になるだろう。朝が来ると共に、長い祭りの熱から人々は覚めるのだ。

漸く全ての行程が終了し、広場に張りつめていた息が詰まるような雰囲気も和らいでいた。しかし次の家司の言葉に再び緊張が走った。

「では透軌様、中央の舞い手をお選びください」

透軌が頷き正面に歩み出ると、若者達は再び叩頭した。その様子を見渡した透軌は跪く彼らを縫うように歩き出した。灰は離れた位置から、迷いもせず一人の若衆のもとへと向かう透軌を見つめる。急ぐでもなく歩く透軌が傍らを通り過ぎると、期待と不安に彩られた少年達の顔に、落胆とも安堵ともつかない表情がよぎる。やがて透軌は一人の少年の傍らに立つと静かな声で言った。

「名を何という」

問われた方は些かも驚いた様子はなかった。

「仁識にございます」

「見事な舞であった。中央はそなたが務めよ」

仁識はさらに深く頭を下げたが、答えた声はあっさりとしたものだった。

「承知いたしました」

透軌の選択は若衆にとっては異論の出ようがない、最も相応しいものだった。加倉は何を思うのか、普段からは想像もつかぬ落ち着いた表情でその決定を見つめている。

「皆、御苦労だった。祭礼の時に向けてこの先も弛まず励んでくれ」透軌は言くと、妹と家司が待つ方へと踵を返した。事実上その言葉がこの場の締めくくりだったのだろう。家司達を引連れて鍛錬所から出て行く透軌を見送る若衆の間で、漸く緊張が解ける。

悠緋は促され鍛錬所の外へと向かいながらも、不意に灰を振り返ると唐突に声をかけた。

「あなたは剣舞はしないの？」

問われた灰以上にぎょつとしたのはおそらく彼女の背後に控える女官達だっただろう。

「俺はまだその資格はありません。一番の新参ですの」

「ああ、そうだったわね。若衆はそういうことには厳しいのね」

「悠緋様、もう行きませんと」

おろおろとした年嵩の女官が、まるでこの責任が目の前の少年にあるとも言わんばかりに灰を睨みつけた。

「お黙りなさい。私は従兄弟と話がしたいだけよ」

これにはその女官も思わず黙る。少女の声は涼やかに響き、なおも叩頭する若衆達の手前、灰にはこの上なく居心地が悪い。それに加えて少女の不可解な態度に少年は混乱するばかりだ。この少女は彼に怒りを抱いているのではなかったのか？

「そうでしたら何もこのような場所でもよろしゅうございましょう。また別の機会にでも……」

「悠緋様、とにかく今はお戻りください」

口々に女官に言われ、悠緋は不承不承頷いたが、なおも灰をちらりと見やる。

灰には少女の行動も言動も戸惑うものばかりだったが、初めて出会った時彼女が去り際に見せた名残惜しげな表情が目の前の顔にかぶった。考えてみれば、彼とてあの時点では彼女を惣領家の姫だとは知らなかったのだ。知らず接した彼女の明快な態度はむしろ好ましく感じられるものでさえあった。そして接見の間で対面した時に素知らぬ顔をしてしまったことを今更ながらに思い出した。

「悠緋様、もうお戻りください。今は互いの名を知っていて同じ街にいるのですから」

悠緋ははつとしたような表情になり、次いで頷くと鍛錬所の外へと向かう。灰の言葉の意味がわかったのは、おそらく悠緋しかいなかっただろう。しかし女官達は漸く歩き出した悠緋に安堵したのか、とりたてて灰の言葉の意味を考える者はいないようだった。

悠緋はすでに兄が乗っている馬車へと向かいながらも、目が眩むような思いに惑っていた。湧き起る感情はまるで奔流のように胸に溢れる。我知らず握りしめた両手で胸を押さえ、悠緋は再び振り返った。彼女は灰が自分を見つめていると　たとえそれが融通のきかない姫を見送るためであろうと　確信していた。しかし悠緋が見たのは、彼女から逸れて行く灰の視線と、その先にいる眩しいほどに美しい娘の姿だった。

娘は数人の若者とともに鍛錬所へと向かってくる。幾枚もの薄布をゆったりと重ね合わせた衣は国境地帯によく見られるものだ。早春の若葉を思わせる白緑の薄布が軽快な動きに靡く。長い髪は頭の後ろでまとめられているが、そこからほつれた髪が奔放に揺れてむしろ艶やかさを増していた。

誰何する声が若衆の間から起こったが、娘はそれにも構わずにまっすぐに灰のもとへと向かう。

「叶、<sup>かの</sup>どうしたんだ」

女官に押しこまれるようにして馬車に乗り込んだ悠緋が最後に聞いたのは灰のその言葉だった。断ち切られるようにして扉が閉められる。衝動的に窓を覆う布を押し上げた悠緋が見たのは、灰に縋りつく娘と、尋常ならざる様子でその周りを取り囲む異国の若者達の姿であり、硝子に映るわずかに歪んだ己の顔だった。

20 (後書き)

初恋ってこんなものだったろうか、と思って書いた部分です。悠  
緋については、なかなか書ききれず……今思えば少し残念です。

ではでは、今後ともよろしくお願いいたします！

灰は叶の姿に息をのんだ。その周りを囲む五人の若者達はおそらく來螺らいぶの自警団の一員だろう。來螺の人々は祭礼の興行で多加羅を訪れはしても、街に入ることは滅多にない。ましてや惣領家の屋敷が程近い中心部にまで来ることは皆無と言える。明らかに街衆とは違う彼らの様子に若衆の中から鋭い誰何の声が響いた。それでも叶は断固とした表情でまっすぐに向かつて来る。

「叶、どうしたんだ」

思わず灰は言う。叶は灰のもとへ来ると、その腕を掴んだ。自警団の若者達は油断なく周りを見回しながら、灰へと胡乱気な表情を向ける。

「灰、丈隼たかはやが大変なことになったのよ」

開口一番そう言った叶の顔は険しい。

「何があつたんだ？」

「今朝、突然私達の宿営所たからに多加羅の警吏けいりが来て、丈隼を連行したの」

灰は一瞬言葉を失う。何事かと周りに集まり出した若衆も唯事ではない様子に、黙って見詰めている。

「なぜ……」

「丈隼が多加羅で火災を起こした犯人だつて言うのよ！ そんなはずないのに！」

泣き出しそうな顔で叶が叫んだ。

「丈隼が犯人だつてという告発が警吏にあつたらしいの。何日か前に丈隼が多加羅の街をうろつき回っていたうえに、火事が起こった付近で火を灯した硝子筒を持っていたのを目撃した人がいるって……確かに丈隼は街に行つたけどそんなことをするはずがないわ。だつて夕刻には戻っていたし硝子筒なんか持って行かなかつた。火災が起こつたことだつて私達は知らなかつたのよ！ 警吏にもそのこと

を話したのに耳を貸そうとしないの」

「おい、叶、本当にこいつに丈隼を助けることができるのか？ 若衆じゃないか」

言ったのは叶の背後にいる若者達のうちの一人だった。決して快くは思っていない多加羅の若衆を前にしてその顔は険しい。叶は厳つい容貌のその若者を振り返ると睨みつけた。気圧されたように若者が黙る。

「灰、お願いよ。丈隼を助けて。若衆の言うことなら警吏も聞くかもしれない。それに若衆なら真犯人を見つけることもできるかもしれないでしょう？」

「何の騒ぎだ」

声が響く。若衆をかき分けるようにしてあらわれた加倉かくらは一瞬目を見張って叶を見つめた。しかしそれもすぐに厳しい表情にとつてかわる。加倉の背後には須樹すきと仁識にしきの姿もあつた。加倉は灰へと矛先を向ける。

「一体これはどういうことです。この者達は何なのですか」

「頭、この者の仲間がどうやら火災の犯人として捕まったようです」

口を挟んだのは、加倉の取り巻きの中の一人である。周りを取り囲む若衆の間にざわめきが起こった。

「違う！ それは間違えいよ！」

叶は咄嗟に言うと、周りを取り囲む面々を睨みつけた。急いで街を駆けて来たせいか、僅かに紅潮した顔が生来の華やかさを増して見せる。しかし今そこにあるのは焦燥と怒りだった。

加倉は叶を睨みつけた。加倉にとつては明らかに多加羅の街衆ではない者がこのような場所にいるのは許しがたいことだ。しかも聞けば最近街を騒がせていた一連の事件に関連があるという。自然眼差しは険しく冷たいものとなっていた。

「何を根拠に言っている。多加羅の警吏が誤ったとでも？ そもそもなぜお前達のような者がここにいるのだ。見れば国境地帯の者のようだな。ここはお前達のような者が来てよい場所ではないぞ。し



かも火災の犯人がお前達の仲間だったというなら、多加羅の街に入る資格などない！ 早く立ち去れ！」

「なんだと！」

叶の背後にいる青年が声を荒げると、俄かに双方の間に緊張が走った。

訳もわからず様子を見守っていた若衆の間に次第に高まる気配に、灰は齒？みした。彼とてこの数日は神経を擦り減らすようにして見回りを続けていたのだ。犯人が捕まったとあらば安堵だけではなく、おそらく感じるだろう犯人への怒りも理解することができた。だが、丈隼が犯人であるはずがない。何より、このままでは叶達にまで敵意が向けられかねない。

「待って下さい」

灰の決然とした響きの声に若衆の視線が集まる。須樹の案じるような視線を感じ、しかし灰は言葉を続けた。

「捕まった男は真犯人と間違えられただけです。彼は無実だ」

「どこにそんな証拠があるんですか」

正面から加倉を見つめた灰は、落ち着いた声音で言った。

「まず一つには、一回目の火災の時彼はまだ多加羅に来てはいませんでした。彼が来たのはその日の昼です」

「そうだ。俺達は一回目の火災なんざ知らねえぞ」

同意したのは來螺の若者だった。叶もまた頷く。

「それに彼が街をうるついでいたというのは二回目の火災が起きた次の日からです。隔壁を守る衛兵に確かめればわかることです」

「そのような言いきれますか。衛兵が毎日どれほどの人間を見ていると思っっているんですか。深夜に入り込んだのかもしれない。それになぜ街をうるつく必要があったんです」

「丈隼は国境地帯の者の中でも目立つ外見をしています。深夜に入りしていたらむしろ記憶に残るはずです。それに街に来たのも俺を捜すためです。若衆であることを知らなかったために、街中を捜すしかなかったんでしょう」

若衆は誰もが息を詰めるようにして灰の声に聞き入っている。それは來螺の面々も同じだった。加倉は吐き捨てるように言った。「どれも憶測に過ぎませんな。そもそも、なぜこのような者達が灰様を訪ねて来るのです？ 捕まった者も灰様を捜していたというのならそれはなぜです。この者達は何者です」

聞いていた須樹は言いようのない焦りを覚えた。

「答えるなよ、馬鹿正直に答えるんじゃない」

低い呟きは仁識だった。ごく小さな声だったがいつの間にか後ろに来ていた治都にも聞こえたのか、怪訝な表情を浮かべている。

「俺は八歳までを來螺で育ちました。彼女も、俺を捜していた丈隼も、その時の昔馴染みです」

これには若衆だけではなく自警団の青年達も目を見開く。加倉は一泊置いて言った。絡みつくような声である。

「それは存じ上げなかった。まさか惣領家のお血筋がそのような汚らわしい場所にいたなど」

その言葉にもとりたてて顔色を変えなかった灰だったが、続く加倉の言葉に視線が険しくなる。

「そういえば、噂でああなたの母君が來螺で殺されたというものがあつたが……あれも真実だったのか。もつともそのような場所にいたのなら納得はできませんな。身から出た錆だ」

灰は加倉を真正面から睨みつけた。それに黙り込んだのは加倉ばかりではなかった。一瞬ざわついた若衆の面々も一様に口を噤む。

灰の声は静かなものだったが、須樹はそこに潜む響きにたじろいだ。聞いたこともない、冷たい怒りに満ちている。

「好きなように言えばいい。だが、一度零れた言葉は力を持つ。それに責が持てぬなら、口を噤んでいただきたい」

加倉が何かを言いかけ、しかし顔を歪めて口を閉じた。灰はふと俯く。次に顔を上げた時には普段と変わらぬ淡々とした表情があった。苛烈な怒りはすでにない。しかし消えたわけではあるまい。声は、厳しい自制に硬質な陰りを帯びていた。

「丈隼が犯人だとは思えません。そもそも叶達の言うことを聞けば丈隼はすぐに釈放されて当然なのに、警吏が話すら聞こうとしないのはおかしい。このまま放っておくことはできません。若衆は引き続き真の犯人を捜すべきです」

「私は、いや、若衆はそのようなこと認めはしない！　そもそも來螺の人間の言う事など信じるに値せぬことだ！　その者達が仲間を庇うために嘘をつくことだってあるでしょう。むしろそう考える方が妥当だ！」

加倉は鋭く叫んだ。そこに潜む虚勢に須樹は気付く。少しでも気圧されたことに腹を立てているのか、加倉の言葉には悪意が滲んでいた。

「あなたも若衆の一員であるというなら、來螺の連中の言うことなどに耳を貸さぬことです。多加羅の警吏よりもその連中の言うことを信じるというなら、街を守る若衆の資格などない！」

凍りつくような沈黙があたりを満ちた。黙りこんだ灰に加倉が勝ち誇ったように言葉を重ねた。

「多加羅の者ならば、それも惣領家の御方ならばおわかりのはずだ。一体どちらの言が正しいのか。そこにいる者達は即刻街から出て行かせるべきです。それともあなたは來螺のお仲間の肩を持つのか。それならば若衆をやめてそのお仲間の元へお戻りになるといい！

若衆にそのような者は必要ない！」

漸く答えた灰の声は静かだった。

「それが若衆の総意ならば、俺は到底肯うことはできない」

言いながら灰は周りを見回した。答える者はいなかった。それに怒りは沸き起ころなかった。彼らの顔にある戸惑いと不信を理解することさえできた。だが、それを理解できても灰には躊躇いはなかった。

「くだらない矜持と思いこみに捕われて真の罪人を見逃すのか。無実であることが明らかかな人間を見捨てるのが若衆の在り方か。來螺の者であるというそれだけで、話を聞こうともせぬことが正しいと

？」

灰は正面から加倉を見据えた。

「それが若衆の証ならば、俺はそのようなものはいらぬ」

静かに言つと、灰は呆氣に取られてやりとりを聞いていた叶を促して背を向ける。茫然とそれを見ていた須樹は思わずその背に叫んだ。

「待つてくれ！」

加倉へと詰め寄つた。

「灰が言ったことが真実であれば、捕まつたのは確かに犯人ではありません。若衆は眞の犯人を捜すべきです！」

「犯人が捕まつた以上我々にすることなどもうないのだ」

「そんな！ 矛盾点があるのにそれを見て見ぬふりですか！」

「ならばお前も灰様とともに行け！ だがそうすればお前ももう若衆ではない。好きにしる！」

須樹は啞然として加倉を見つめる。湧き上がる怒りのまま灰のもとへと向かおうとして、立ち尽くした。灰が振り返つて静かな瞳で須樹を見つめていた。そして小さく首を振る。穏やかだが、断固とした拒絶の意思がそこにあった。そのまま無言で灰は踵を返すと、來螺の若者達を促して鍛錬所を後にした。

「皆、鍛錬所に戻れ！ もう見回りは必要ない！」

加倉は声高に言つと鍛錬所に向かつて歩きかけ、しかし振り返ると須樹の背中に向かつて言つた。

「須樹、お前もだ。もつとも、灰様について行くというならば、止めはしないがな」

遠ざかる足音を聞きながら、須樹は内心に吹き荒れる感情を持って余して拳を握つた。戸惑いを浮かべた若者達が次第に散つて行く中、なおも立ち尽くす彼の横に気配があつた。

「あの若様はどうやら治都以上に直情径行のようだな」

仁識だつた。今度は斜め後ろから声が聞こえた。

「なぜ、そこで俺の名が出る」

治都もまた須樹のもとへと近づいてくる。その顔には冷めやらぬ驚きがあった。

「二人ともどうやら灰が來螺の出身であることを知っていたようだな」

治都がぼそりと言うが、そこに責める響きはなかった。

「これで若様は若衆から切り捨てられた。たった一人でできることなどたかが知れている」

仁識の言葉に須樹は思わず言う。

「切り捨てられたのは俺達の方ではないのか？」

怒りに任せて衝動的に出た言葉だったが、それは他の二人のみならず須樹自身にも思わぬ強さで響いた。

「このまま灰を放っておく気か？ 俺は嫌だぞ。なんというか、後味が悪い。本当に若衆を追放などということになってみる。惣領とて黙ってはおらんぞ」

治都の言葉である。それに対する仁識の声音は静かだった。

「それはどうかな。惣領が若様のために何かをするとは思えない」

「なぜだ！」

「私に突つかかるな。若様がこれまで一応は大過なく受け入れられてきたのは惣領がさほど厚遇しなかったからだとは思わんか？ もし惣領家に相応しい扱いを受けていたなら、惣領の血筋に二人の男子がいるという構図が鮮明になる。そうなれば貴族にとって若様はもつと興味を引く、厄介な存在になっていたはずだ。いかにその出自が蔑まれようと、利用しようとする者や、排除しようとする者が必ずあらわれるはずだ」

意外な観点だった。実際には惣領家を継ぐのは男子に限らない。

白沙那帝国においては女帝も珍しくはなく、長子以外に優れた者がいれば、その者が後を継ぐというのは歴史の中でも多くあることだった。すなわち、悠緋が家を継ぐこととてあり得るのだ。しかし沙羅久との微妙な力関係に対するには女性では心もとない、という意見が根強い。疑いなく次の惣領が透軌であると考えていた彼らにと

つて、灰もそれに列せられる存在なのだとあらためて言われても実感できるものではなかった。灰自身の人となりを知った後であればなおさらである。

「惣領が若様を冷遇したのは、そういう事態を招かないためだろうな。だとすれば、こうなつてもとりたてて手を差し伸べるとは思えん」

「気分の悪い話だ」

「もう一つ、気分の悪い話をしようか」

仁識は皮肉な笑みを須樹に向けた。

「先ほどの中央の舞い手の指名、あれはおそらく透軌様の存在を若衆に印象づけるための茶番だ。考えたのは頭ではないだろう。おそらく絡玄様あたりか。しかしその案を進言したのは頭かもしれない。透軌にとつても面子を潰さずに私に舞い手の役を譲ることができ、透軌様とその取り巻きへのおぼえもめでたくなる、まさに一石二鳥のやり方というわけだ」

須樹と治都はまじまじと仁識を見やる。一体どういう思考をしているのか、目から鱗どころの話ではなかった。だが、言われてみればいちいち合点がいくのである。

誰もが透軌の適格な判断と選択に意外の念とともに感心すらしていた。一度見ただけで舞い手の技量を見定めることは武芸に秀でた者でなければ容易ではなく、惣領家の後継ぎが武人としても優れているという印象を若者達は持ったはずだ。実際透軌自身が見定めた可能性は皆無ではないが、彼がそれほどの能力を有しているとはついで聞いたことがない。あらかじめ決められていた茶番であるという方が納得できた。

「お前、一体どういう頭をしてるんだよ」

「さつきも言つたろう。貴族的思考というやつだ」

仁識は無愛想に言うと同を返した。その後について須樹と治都も鍛錬所へと入る。そこにはそれぞれの範の面々が懸念するような表情で集まっていた。いずれもともに街の見回りをしてきた者ばかり

である。その者達の顔を見て、須樹は波立つ気持ちか静まるのを感じた。加倉の言動に怒りを感じ、抵抗を覚えた者は他にもいたのだ。「若様は來螺の出身であることが知られば排斥されることを知っていた。だが、言わずにはおれなかった。愚かな選択だとは思わんか？」

仁識が言う。

「だが、そうしなければ嘗ての仲間を見捨てることになる」

須樹の言葉に仁識は頷いた。

「では私達はどうする？ 仲間を見捨てるか？ それとも若様同様愚か者の真似でもしてみるか？」

仁識が言った。人を食ったような笑みを浮かべ、しかし真剣な眼差しを須樹に向ける。

「決まっている」

須樹は低く答えると、強い瞳で若者達を見つめた。

灰は鍛錬所が見えなくなつてから歩調を緩めた。叶の眼差しを感じる。

「灰、さっきの話、本当なの？ あなたが多加羅惣領家の一員だつて……」

呟くように叶が問うた。灰は歩みを止める。俯いて足元を見つめ、小さく息をついた。

「ねえ、こつちを見て」

あやすような声音に思わず苦笑する。顔をあげれば叶の背後では來螺の若者達が、なおも胡乱な視線を彼に向けていた。周囲はまだ名のある貴族の邸宅が立ち並ぶ界隈である。屋敷を守る衛兵が険しい視線をこちらに送っているのを、灰は横目にとらえた。

「とにかく、ここを離れよう」

灰が言葉少なく言う。叶もまた無言で頷いた。

防壁をくぐり抜け賑わう道に出る頃には、灰は次第に冷静になりつつあった。己が下した決断を 若衆に背を向けたことを悔いてはいなかったが、それでも胸中に食い込むような痛みを感じる。最後に見た須樹の、そして仁識の表情が脳裏に焼き付いていた。それを振り払うように意識から締め出し、己の思考に集中する。

漸く足を止めたのは街の外延部に近い小さな広場の片隅だった。もとは人々の憩いの場として設けられたそこは、今ではその用途を忘れられ、名残と言えはそこに残る灌木と数本の木だけである。それとて手入れもされず奔放に枝を伸ばし、どこか雑然とした様相を呈している。しかし鬱蒼と茂るそこは、人の目を気にせず話すにはうつつつけの場所でもあった。

灰は叶と向かい合う。あらためて対すれば、叶の後ろにいる五人の青年達は皆まだ十代らしい。あからさまに不信を込めた彼らの視線を受け流し、問いかける叶の顔を正面から見つめた。



「灰、答えてちょうだい。さっきの話は本当なの？」

静かな問いだった。

「ああ、俺は多加羅惣領家の血を引いている。祖母が先代惣領の妾だったんだ」

叶は驚きに息をのんだ。

「でも、紫弥しやさんはそんなこと一言も言っていなかったわ。どうして……」

灰は淡く笑んだ。それに叶は黙る。穏やかなその笑顔に、触れてはならない生々しい痛みを見た気がした。六年前の内気で無邪気な少年の面影は、そこにはない。

「なぜかな。俺にもわからない。でも多分、母さんは多加羅のことを憎んでいたんだ。自分がその血を引くことさえ厭わしかったのかもしれない」

思わず黙る叶の背後で、一人の若者が素つ頓狂な声を上げた。

「思い出した！ お前、あの灰か！？ 楽都らくとにいた歌い手の息子だろ！」

「知ってるのか？」

傍らからの問いかけにその青年は大きく頷いた。その拍子に肩までの金褐色の髪が勢いよく揺れる。

「ああ、どつかで見た顔だと思ったんだよ。確かたかはや丈隼がよく連れまわってた奴だ。あいつ確か風の民の血を引いてるだろ。だから同じ血族だとか言ってこいつのことをやたらと気に入ってたんだよ。なあ、俺のこと覚えてねえか？」

灰はまじまじと相手を見つめ、首を傾げる。騒がしいほどの喋り声と、屈託のない笑顔が一人の面影と重なった。もっともさほど親しくもなかった相手である。時々楽都の舞台にあがっていた舞い手の息子だ。

「イーリヤか？」

「あつたりー！」

大袈裟に叫ぶ青年を、叶はため息をついて睨みつけた。

「それにしても、お前生きてたのか。てつきり殺されたか売り飛ばされたと思ってたよ。しかも多加羅惣領家の一員とはなあ。あの事件の後、お前が住んでた家には誰も入ってないぜ。呪われてるって噂があつてさ……」

「イーリヤ！ いい加減にして！」

叶の鋭い声に青年は首を竦めて黙ったが、悪びれずに灰におどけた顔をしてみせた。

「叶、丈隼はどこに連れていかれたんだ？」

灰の問いに、若者達の顔が俄かに引き締まる。

「それがわからないの。警吏けいりの詰所にも行っただけで相手にされなくて」

叶は悔しそうに唇をかんだ。灰は彼女の様子を見ながら一つのことを確信する。警吏は罪を犯した者を捕えたとしても、まずは取り調べるために詰所にとどめ置くのが通常である。しかし丈隼は恐らくそこにはいないだろう。灰は苦い思いで告げた。

「叶、二回目の火災では人が二人死んでいるんだ」

「え……？」

「丈隼は多分重罪を犯した者が送られる獄舎に連れて行かれたんだと思う」

叶の顔から血の気が引く。

「どういうこと？」

囁くような問いだった。多加羅の街の北東にある獄舎に送られるのは凶悪な罪を犯した者である。審議の後罪が確定した場合には重い刑が科せられる。極刑となる場合も少なくはない。そして今回の火災では人が死んでいる。

「このまま容疑が晴れずに火災を起こした犯人だとされてしまえば、いかに国境地帯の者といえども死罪は免れないということだ」

「なんだよ！ それ！」

「無茶苦茶じゃねえか！ 丈隼が火災を起こすはずねえのに！」

若者達が口々に叫ぶ。叶は青褪めた顔で灰を凝視し、低い声で言

った。

「灰、あなたなら惣領に文隼の無実を訴えることができるのよね？  
あなたは惣領家の人間だもの。お願い……文隼を助けて」

灰は小さくかぶりを振った。答える声は苦く、しかし強く響く。

「だめだ、叶。それはできない。それに俺が惣領に言ったところで  
聞き入れられはしない」

叶は大きく目を見開いて黙る。灰を見つめるその瞳にあるのは失望に似ていた。だが、失望よりも重く、深く灰の心に響く。まるで初めて対する人間に向けるようなそれに、灰は言葉を呑みこむ。刹那の躊躇い、それを破ったのは自警団の若者があげた怒声だった。

「おい！ そりゃねえだろ！ 文隼が捕まったのだからお前を捜し  
に街に入ったせいなんだろう！ よくもそんなことが言えるな！」

叫んだ勢いのままに若者は灰の胸倉を掴む。鈍い音をたてて灰の背が木の幹に押し付けられた。

「結局お前だつて文隼のことを見捨てるつもりなんだろ！ 偉そう  
なこと言いやがって、結局は多加羅の奴らと同じじゃねえか！」

灰は相手を睨みつけた。

「文隼を助けるにはそんなやり方ではだめだ」

訝しげに黙る相手に、灰は続けた。

「わからないのか？ 多加羅の警吏は來螺の一員だというだけで軽  
々しく捕えたりはしない。信じるに足る何かがあると断じられたか  
ら文隼を連行したんだ。俺一人の言葉で文隼が釈放されるわけがな  
いだろう」

「だが、お前は惣領家の人間なんだろうが。それぐらいの力はある  
だろう？ それとももう文隼のことなんかどうでもいいのか!？」

「俺が頭を下げることで文隼が助かるならいくらでもそうする。で  
も俺にはそんな力はない」

睨みあう二人の姿を見つめていた叶がぼつりと言った。

「灰、じゃあどうすればいいと言うの？ 教えてちょうだい……文  
隼を助けるにはどうしたらいいの?」

その声音に、険悪な表情で灰を睨みつけていた若者達が一樣に彼女を見る。灰と対していた一人も胸倉を掴んでいた手を振り払うようにして放し、身を引いた。張り詰めた空気が漂う。灰は暫し沈黙し言った。

「真の犯人を見つuckerんだ」

「できると思うの？ 私達は來螺の人間だわ。多加羅の人達は私達を蔑みはしても助けるために手を差し伸べたりはしない。ここが余所者に対してどれほど冷たい場所か、あなただってわかっているんじゃないの？」

さわりと梢が揺れた。それを追いかけるように、光が気まぐれにたゆたう。叶の衣がふわりと大きく風に惑う。灰はじつと己の影を見つめた。凝固したようなその姿は、答える言葉を失って立ち尽くしているように見えた。

「あほらしい。こんな奴を頼ったことがだいたい間違いだっただよ。もう行くうぜ」

吐き捨てるように一人が言うと踵を返した。灰を睨みつけていた他の三人も頷くとそれに続いた。

「え、おい。でも文筆が……」

イーリヤがおろおろとその背に声をかける。灰を見つめる叶と、立ち去ろうとする若者達を交互に見やり、困惑した表情を浮かべた。「おい、イーリヤ、お前も行くぞ。叶ももう帰ろう。こいつに頼んだところでどうにもなりやしねえよ」

叶は逡巡する。不意に灰が口を開いた。

「叶、宿営所の代表者は多加羅に抗議をしたのか？」

「いいえ、はつきりしたことがわかるまでは静観するそうよ」

答える声には怒りが籠っていた。

「興行を続けるためにも、多加羅といざこざを起こすのは避けたいらしいわ。信じられない。自分達の仲間が大変な目に遭っているのを見て見ぬふりだなんて。それも金儲けのために！」

「多分、それも見越してたんだろうな」

ぼつりと灰が言う。叶が訝しげに灰を見つめた。若者達が足を止める。

「どういうこと？」

「おかしいと思わないか？ なぜ丈隼が告発を受けたのか。なぜ、來螺の人間が名指して犯人だと断定されたのか。それも硝子筒を持って火災現場の近くをうるついでいたというのは、丈隼を犯人に仕立て上げるための明らかなでっちあげだ」

「それは、もちろんおかしいと思うわ……多分、街を歩き回っていた様子が不審だったから……」

叶の声は小さくなつて消える。あらためて問われれば、理不尽に対する怒りの下から次第に疑問が湧き起こつて来た。今は祭礼の季節である。壁の外に宿営する來螺の者達以外にも、多加羅には様々な人々が集っているのだ。その中でなぜ、丈隼なのか。それも灰が言うように硝子筒を持つていたという話は、丈隼を犯人に仕立て上げるために捏造された話なのである。

「丈隼を告発した目的はなんだ？ 誰が最も得をする？」

灰の言葉は呟くように響いた。実際それは自身に問っている声音である。半ば伏せた瞳が鋭さを増した。

「多加羅の街衆は捕まったのが來螺の人間であれば、無実であろうともその主張を聞くとはしない。警吏にしても祭礼が迫っている時期に、何としても犯人を捕えておきたいはずだ。しかも犯人の要件を満たしていればあらためて真の犯人を捜そうとはしないだろう。そして來螺は丈隼よりも興行を優先する。丈隼がいくら無実を訴えたところで誰もそれには耳を貸さないだろう。結果として、丈隼は助かる手立てを失うことになる」

「何が言いたいんだよ」

焦れたイーリヤの声に、ふと灰は視線をあげた。己を見つめる若者達を眺め、言った。

「つまり、丈隼は意図的に嵌められたということだ。犯人は丈隼でなければならなかった。來螺の街衆であるうえに、街をうるついで

いたのを多くに目撃されている。おそらくは外見も人の記憶に残りやすいため、好都合だったろうな。街をいつうろついていたかは問題じゃない。重要なのは、文隼が確かに街をうろついていたということを入々が覚えてることなんだ」

「文隼が嵌められた……？」

叶の呟きに灰は頷いた。それに叶は愕然とする。叶達は文隼が捕まったのはあくまでも不運な偶然と來螺への偏見が重なったがゆえのことだと考えていた。しかし、もし灰が言うように文隼を犯人に仕立て上げる明確な意図のもとに告発が行われたのであれば、それはまったく様相が異なる問題となるのだ。

次第に形を明確にする思考をなぞるように、灰は言葉を紡いだ。

「だが、なぜ文隼が來螺の人間であることがわかったのか……叶、文隼は興行の店舗にはよく姿をあらわしていたのか？」

叶は首を振った。

「いいえ、自警団は店に入ることは滅多にないわ。宿営所の守りのために来ているのであって、必要以上に客の前には姿を出さない決まりになっているの。店にも幾人か控えているけど、もっと年配の幹部ばかりよ」

「では、告発した人物はどこで文隼を見かけたんだらう」

「だから、あいつが街をうろついていた時だらう」

立ち止まって話を聞いていた若者達の一人が言う。灰はそれにも首を振った。

「それがおかしいと思わないか？ 文隼は確かに俺を捜して街の中を歩き回っていたが、外見から国境地帯の者であることがわかって、來螺の街衆であることまではわからないはずだ。だが、警吏は文隼が來螺の者であることを知っていた。つまり告発した人物がそれを知っていたということだ」

「確かに……でもさ、それってそんなにおかしいことかな」

イーリヤがどこか間延びした声で言った。灰は答える。

「街で見かけただけで多加羅を訪れる全ての国境地帯の人々の中か

ら丈隼の所在を突き止めるのは至難のわざだ。告発した人物はどこで丈隼が來螺の者であることを知ったのか……」

いつしか立ち去りかけていた若者達が再び周りを取り囲んでいた。その表情からは灰への不信と怒りが消えたわけではなかったが、彼らの誰もが心底から丈隼の身を案じているのだらう、真剣な表情で灰の言葉を聞いている。

「だったら客の中にその告発者がいたってことか。宿営所で丈隼を見かけて……でも待てよ、店じゃなく宿営所までのこのこ来る奴なんていないよなあ。店も俺達若い衆は近寄らないし」

一人の若者が言えば、皆顔を見合せて首を捻った。

不意に灰は一つの可能性に気付いた。丈隼が來螺の者であることを知り、なおかつ街中を歩き回っていたことも知ることがかなう場合が一つだけある。だが、それを口に出すことはできなかった。目の前の若者達に言うにはあまりに確証がない。

「灰、なぜ丈隼が犯人として告発されることになったのかしら。さつきあなたは誰かに嵌められたって言ったけど、どうしてそんなことになるの？」

叶の問いに灰は答える。

「丈隼が犯人として捕まっ得をする人物、是が非でも丈隼に罪をなすりつけたい人物は限られている」

「まさか……」

灰は頷いた。

「真の犯人だよ」

若者達が息をのむ。

「叶、警吏は誰が丈隼を告発したか言っていたか？」

「いいえ。聞いても教えてくれなかった。でも、その告発した人を捜せばいいのね。そうしたら真犯人がわかる。丈隼の無実も証明できるわ！」

興奮のせい、叶の瞳が煌く。俄かに開けた展望に自然と声が弾んでいた。

「でも警吏は俺達にそんなこと教えちゃくれねえよ」

「そうだよなあ」

「それは、俺が何とかする。おそらく告発した人物を特定できれば、犯人へとたどり着けるはずだ」

灰の言葉に叶が怪訝そうな表情になった。

「そんなことができるの？ あなたさつきは自分には何の力もないって言つてたじゃない？」

「ああ、俺が根拠もなく文隼の無実を訴えたところで誰も聞き入れはしないだろう」

ふと笑んだ顔は、どこか強かだった。

「だが、惣領家の人間であることを利用すれば、もしかして告発した者が誰かわかるかもしれない」

灰の笑顔に叶は眉を顰めた。何かを言いかけ、しかし口を閉ざす。

「とにかく叶達は街中にはあまり来ない方がいい。文隼が捕まったことが公になれば、來螺への風当たりもきつくなるはずだ。調べた結果は必ず知らせるから、今は宿官所に戻ってほしい」

僅かな逡巡の後、叶は頷いた。

「わかったわ」

叶は不満をありありと浮かべる若者達を振り返り、強い口調で言う。

「あなた達もわかったわね。ここは灰に任せましょう」

不承不承頷く若者達だったが、やはり我慢ができないのか灰を睨みつけて一人が言った。

「いいか、俺達はお前を信じたわけじゃない。いい加減なことをしてみろ。ただじゃすまさねえ」

「おいおい、そんな険悪になるなよ」

へらりと笑うイーリヤの言葉を黙殺し、若者達は一団となって踵を返した。慌ててその後をイーリヤが追う。灰は、なおも彼を見つめている叶を振り返った。視線で問えば、叶は小さく微笑んだ。微かな悲しみの籠った笑顔だった。



「灰、こんな風に会うことになるなんて思わなかったわね」

「ああ」

答える灰の声もどこか沈んでいた。叶は風に揺れる解れ毛を軽く手で押さえながら、眩しげに灰の顔を見上げた。六年前には彼女よりも小柄だった少年は、今では頭半分程も背が高い。年の割にも長身の部類に入るその姿は、落ち着いた面差しも相まって、まるで見知らぬ他人のように見えた。それが六年という歳月のせいなのか、それとも別にそう思わせる何かがあるのか、彼女にはわからない。しかし、小さく深い喪失感が胸に巢食っていた。一体何を失ったというのか。叶は敢えて思考を閉ざした。

「おい、叶、早く来いよ！」

呼び声に頷き、叶は再び灰を正面から見つめた。

「信じて待っているわ」

言つと一瞬灰の腕に触れ、足早に若者達の後を追った。

一人残された灰は束の間立ち尽くしていた。最後に羽のように腕を掠めていった感触がやけにくつきりと感じられた。冴えた視界に滲むような色彩は、常緑樹の滴る緑だ。夏を過ぎ、なおさらに深い命を感じさせるそれを灰は見つめる。涼を含む風に暫し惑えば、背後に気配があった。灰にはそれが誰かわかっていた。

「灰様、どうなさるおつもりですか？」

灰は声の主、弦を振り返らずに小さく息をついた。弦の声に詰る響きはなく。無論彼が主と目す存在にそのような態度をとるはずもないのだが。しかしそこには懸念が込められている。普段感情を削ぎ落としたような表情で灰に対する男のそれが、妙に生々しく響いた。

答えない灰に、弦がさらに続けた。

「私が告発した人物を調べて参りましょうか」

「惣領はそのような勝手を許しはしないはずです。それに俺もあなたに命じるつもりはありません。あなたは惣領の影であって俺の影ではないのですから」

「ですが……」

灰は漸く弦を振り返った。

「俺が直接、惣領と話します」

惣領家の屋敷の手前で灰は立ち止まった。鋭い日差しに浮かび上がる屋敷は、重々しく少年を睥睨している。無論そう感じるのは己自身の気持ちのせいだ、と灰は思う。

背後に控える弦は、屋敷にたどり着くまで何も言おうとはしなかったが、断固として少年の側を離れるつもりはないらしい。このまま屋敷の中まで着いて来るつもりなのか　自身を影と称する男の心中などはかりようもなく、灰もとりたてて弦の行動をどうこう言うつもりはなかった。

灰は外に出る時には必ず頭に巻いている布を手早く解くと、軽がかぶりを振った。乾いた音をたてて髪が揺れた。弦はその様子を黙って見ていたが、再び灰が歩を進めるとその後が続く。

惣領家の屋敷を守る衛兵は少年と男の姿を認めると、俄かに表情を険しくした。

「止まれ！　ここは多加羅惣領家の屋敷であるぞ！　何用か！」

誰何する声には威圧する響きがあった。銀の髪に訝しげな視線を向ける様子から、灰のことを国境地帯から来た者だと思ったのだろう。灰はそれに落ち着いた声音で返した。

「俺はその惣領家の者です。通していただく」

衛兵は目を大きく見開いた。まじまじと灰の姿を見つめ、漸く悟ったらしい。一気に青褪めると頭を下げた。

「申し訳ございません！　とんだ御無礼を！」

灰はその場で叩頭しかねない様子の衛兵の前を通り抜け、ひんやりと仄暗い屋敷の中へと入る。

「惣領の執務室は二階の奥でございます」

すかさず弦が言うのに灰は頷くと、正面の階段を昇る。途中すれ違った人々もまた、衛兵と同様の反応　すなわち余所者への胡乱な眼差しと、少年が誰かを悟った驚きの表情を示したが、灰はそれ

を尽く無視した。もつとも屋敷に仕えるらしい人々が灰を呼びとめなかったのは背後にいる弦の存在のせいでもあるらしい。屋敷の者は誰もが、弦が惣領の側近であることを知っている。少年が誰であるかに気付かぬ者も、弦の一瞥で彼らに道をあけた。

執務室の前に立った灰は軽く扉を叩く。応える声を聞き、静かに扉を開けると、二人の男が中にはいた。一人は無論部屋の主であるもう一人は接見の間で峰瀬の隣に控えていた老人であることが灰にはわかった。察するに玄士の一人、それも最高齢の白玄はくけんだろう。

峰瀬みなせと白玄は突然あらわれた灰に、一様に驚きの表情を浮かべた。「灰ではないか。どうした」

手に持つ書類を傍らに置いて峰瀬は問うた。驚きの表情をすぐさま消した白玄が一礼して灰のために場所をあげると、そのまま扉へと向かう。それに目礼して灰は前へと進み出た。

「惣領にお願ひしたいことがございます」

「なんだ？」

「白玄様もいていただけませんか？」

これは静かに退出しようとしていた老人に向けた言葉だった。白玄は足を止め、訝しげに振り返った。

「なぜでございましょう」

「白玄様は警吏けいりを管轄しゆけんしていると秋連師匠しゅうれんに聞きました。これから話は警吏に関わりのあることです」

不審な表情を浮かべる白玄をそのままに、灰はあらためて峰瀬に対する。男はそんな少年の様子を眺めていた。観察するような視線である。

「さて、その願いとやらを聞こうか」

「今朝、來螺らいらの者が火つけの犯人として警吏に捕まりました。丈隼たかはやという者です」

「ほう」

峰瀬は白玄へと視線を流す。

「まことか？」

「はい」

白玄は不承不承といった様子で頷いた。

「なぜ私に知らせなかった」

「まだ、容疑の段階でございませう。いちいち惣領にお知らせすべきことではないと判断致しました。むろん容疑が固まればすぐにお知らせ致します」

「ふむ……まあよい。先を続けよ」

灰は頷くと言葉を続けた。

「捕まった丈隼は火つけの犯人ではありません。何者かが彼に罪をなすりつけようとしたのです」

「その來螺の者をお前は知っているのか？」

「はい。丈隼は俺が來螺にいた時に親しくしていた者です。つい先日、言葉も交わしました」

「して、お前の願いとは丈隼を釈放せよ、ということか？」

峰瀬は淡々と問うた。少年の背後で白玄が苦虫をかみ潰したような表情になる。しかし、少年はゆるりと首を振った。

「俺の願いは、丈隼を告発した者を教えていただきたい、ということですよ」

峰瀬は暫し考えるように灰を見つめ、問うた。

「丈隼とやらが無実であるというならば、なぜ釈放を求めぬ？」

「それを求めて聞き入れていただけるとは思えませんので」

明快な答えだった。

「わからぬぞ。お前は惣領家の人間だ。特別に取り計らうかもしれない」

これに灰はうつすらと笑んだ。ひどく大人びた笑みである。

「そうでしょうか？ 多加羅惣領がそのように偏った判断をすれば、惣領家への信頼が揺らぎます。いかに己の主といえども、一度生じた不信は後々厄介な火種となるかもしれませぬ。それもさしたる根拠もない俺の言葉だけで來螺の者を釈放すれば、人々は黙ってはいないでしょう」

そのような危険を冒してまで來螺の者を救うはずがない、と灰は言う。表情も変えずにその言葉を聞いていた峰瀬の視線が、僅かに鋭さを増したようだった。

「だが、告発者を教えよというその願いは、惣領家の者としての特別の取り計らいを求めたものに聞こえるがな。単なる街衆ならば、そのようなことを願ってもかなえられまい」

「俺は特別に取り計らっていただきたい、と申し上げているのです。伯父上」

事も無げに灰は言った。少年の背後で白玄が啞然とした表情になる。俯きがちな弦の表情にはさして変化はないが、二人の会話に全神経を集中していることが峰瀬にはわかった。峰瀬自身もまた内心に驚きを感じていたが、それを出すことはない。

「それはまた勝手な話だ。その願いを私がかねえらと思っっているのか？」

「それは俺にはわかりません」

素気ないほどの答えである。これが人にものを頼む態度なのか、峰瀬は思わず笑う。

「確かに。決めるのは私だ。だが、一つ問おう。なぜ、告発者を知りたいのだ？ 答え如何によつては、教えるわけにはいかぬ」

「俺は告発者がなぜ文筆を犯人に仕立て上げたのか、そして真の犯人が誰かを知りたいのです」

「なるほど。お前は文筆とやらを告発した者が犯人自身であると……少なくとも犯人と関わりのある者だと考えているわけだ」

「はい」

沈黙が落ちる。峰瀬は考える風を装って目の前の少年を見つめた。その後ろでは青くなったり赤くなったりと忙しい白玄が、そして何を思ふのか静かな表情の弦が、峰瀬の言葉を　その決断を待っている。峰瀬は表情を引き締めた。そうしないと口元が綻びそうになったのだ。目の前に三人がいなければ、笑い声をあげているところだ。それも清々しい心からのものに違いない。気持ちのままに笑う

など一体いつ以来だろうか。

答えた声は内心を悟らせず、平坦なものだった。

「よかるう。特別に告発者を教えよう。白玄」

「は、はい」

「告発者が誰か調べよ。灰には弦を通じて知らせる」

「ありがとうございます」

灰は一礼すると、茫然とした様子の白玄の前を通り過ぎ、静かに部屋から出て行った。その姿を見送り、漸く白玄は我に返ったのだろ。ずかずかと主へと迫った。

「何ということをして！ そのような、そのようなことを約されるとは！」

「不満でもあるのか？」

しれつとした顔で言う峰瀬に、白玄は頭をかき毟らんばかりの体である。

「おおいにございます！ 灰様もなんと厚顔無恥な！ これこそ惣領家の者への特別扱いではございませんか！ 皆が知ればそれこそ批判を浴びるのは灰様のみならず、惣領御自身なのですぞ！」

「皆がこのことを知ることはない」

「ええ！ そうでございますよう！ だいたい………なんですと？」

「皆がこのことを知ることはないと言っている。なぜ伯父と甥の会話を公にせねばならん。身内のやり取りまで取りざたされてはたまったものではないぞ」

絶句した白玄とは対照的に、弦は僅かに笑んだらしい。これは珍しいことだ、と峰瀬はそれを見て思う。

「よいか、私は甥の切実な願いに絆されて、今回の告発者を教えるのだ。別段容疑者を釈放するわけでも、真犯人の搜索をあらためて警吏に命じるわけでもない。世間話の範疇のことで、この場限りの出来事だ」

公には何事も変わらぬのだと、灰が告発者を知ってどのよう動こうと己は知らぬ存せぬで通すのだと、億面もなく告げた。白玄の

顔に驚愕と、納得と、そして僅かな不満が浮かぶ。

「ですが、それでは灰様を一人突き放すようなものではございませんか」

「ふむ、白玄もどうやら灰に絆されたか」

「そのようなことはございません！　しかしあまりにも……」

白玄は続く言葉を呑みこんだ。己の言葉の矛盾に気付いたのだから。峰瀬と灰の行動を批判しながらも、灰の立場を懸念するとは

白玄は漸く絞り出すように言った。

「灰様は若衆であられる。一人というわけではございませんでしたな。いやはや、いらぬ心配でございました。ただ、惣領から告発者を知らされたことを吹聴せねばよいが……」

「それをご案じなさる必要はございません」

弦である。

「灰様は若衆を抜けられました」

あつさりと言う。峰瀬が無言で先を促すと、弦は訥々と言った。

「來螺の青年が捕まったよし、灰様に知らせたのは同じく來螺の者でございます。仲間を助けるために若衆わかじゅうの一員である灰様の助力がほしいとのことでしたが、その場は若衆の鍛錬所であり、折悪しくも祭礼の稽古のために全ての若衆が集っております。若衆頭は眞犯人は別にいると主張される灰様の言を聞き入れず、來螺の者の言うことを信じるならば若衆の資格はないと……」

「そして灰は若衆に背を向けたか」

「はい」

「なんと……では來螺の出身であることも皆には明らかとなったのだな」

白玄の問いに弦は頷いた。

「灰様はおそらく若衆の力は借りずに眞の犯人を捜し出すおつもりかと」

「來螺の者と言ったが、彼らは灰に手を貸すのか」

「どうでございますか。さして友好的でもございませんでしたが、



仲間のこととあらば灰様とともに動くやもしれません」

これには白玄が苦々しい表情になった。つまり、來螺の者が多加羅の街中を嗅ぎまわるといふことだ。

「灰様も思いのほか……向こう見ずであられる。惣領に直接に告発者を教えよとは、普通ならば聞き届けられるものではございません。しかも來螺の連中とともに動くなど」

峰瀬は首を傾げた。白玄は灰の行動を少年らしい後先考えない浅薄なものと捉えたらしいが、峰瀬は少年が確信していたのではないかと、と思う。無論、峰瀬が告発者を教えるということ、である。

「まあ、良いではないか。むしろ灰が真の犯人を見つけ出すことができれば、我々にもありがたいことだ。捕まった者が無実であろうとなかろうと、來螺との関係悪化は避けられぬ。死罪にでもなってみる。来年から來螺の連中は興行にも來ぬかもしれぬぞ。そうなければ味気ないことだろうな」

多加羅の祭礼が多くの人を惹きつけるのは、祭礼自体の魅力だけによるものではない。來螺の興行も大きな役割を担っているのだ。多加羅の人々がそれを認めることはないが、もはや祭礼と興行は切っても切れぬ関係になっていた。峰瀬が言うとおり、來螺の興行がなくなればこれほどの人々が集まるかどうかも疑わしい。

白玄は主の言葉に怪訝な表情を浮かべていたが、はっとする。彼は峰瀬が言外に秘めた意味を正確に悟る。つまり灰の行動は峰瀬にとっても都合が良いのだ。告発者を教えるのは単なる気まぐれではなく、明確な思惑あつてのことであり、峰瀬にとつての選択肢はもとより一つしかなかったのだ。そして、と白玄はさらに考える。あの少年ももしかすると

「灰様はそのことまで見越して……？」

峰瀬は笑んだ。心底楽しげなそれである。

「さあて、それこそ腹を割って話さねばわからぬ」

そして峰瀬は俄かに表情を引き締めると言った。

「白玄、告発者が何者か調べて知らせよ。だがくれぐれも内密に、

誰にも悟られてはならぬ」

暫し躊躇した白玄だったが、納得したのか、あるいは諦めたのか、もはや反論することはなかった。

「承知致しました」

そのまま部屋を出て行く老人を見送り、峰瀬は静かに言った。

「弦、灰から目を離さぬようにせよ」

「はい。……惣領、お願いがございます」

峰瀬は目を見開いた。今日の弦は何とも珍しいことばかりするものだ。

「灰様の命に従うお許しをいただきたく存じます」

静かな物言いの底に、固い決意が感じられる。影として仕える男には不似合いなほどのそれに峰瀬は小さく笑み、そして言った。

「よかるう。これより先、お前は灰の影となれ」

弦は瞠目した。予想をはるかに超える主の言葉である。正式に灰の配下になれと峰瀬は言っているのだ。答える弦の声は淡々と、深い。

「御意」

静かに部屋を出る弦を見送った峰瀬は、ゆつたりと椅子の背に体を預けた。

(なるほど、秋連あきつれん、お前の言う通りだ)

嘗て、あの少年には人を惹きつける何かがあると秋連は言っていた。一度の対面で見抜いた友の眼力に今更ながらに感嘆を覚える。

(さて、どうなることか。お手並み拝見といこうか)

ひっそりと峰瀬は笑んだ。その笑みを見た者は、無論誰もいない。

### 23 (後書き)

登場人物の言葉で、ある程度その人物像や物語の中での立ち位置というものがわかると思っています。今回の弦の言葉、「それをご案じなさる必要はございません」で、弦という人物のスタンスが固まったように思います。弦の言葉に「いやいや、そういう問題じゃないだろう」と思ったのは書き手だけでしょうか？ 弦にとっては主が絶対、主の決定が全て、というわけで、灰が若衆を抜けたということは問題にはなり得ないんですね。意識して考えたわけではなく、自然に書いた言葉だったのですが、弦という人物像が確立した瞬間だったかなあ、と。

ではでは、今後ともよろしくお願いいたします！

翌日の早朝、灰は星見の塔を出るとまっすぐに來螺の宿営所を指した。弦が告発者の情報を彼に伝えたのは払暁である。そしてその内容は、灰にとってあまりに意想外なものだった。何事かと心配する蛙菜を振り切り朝食も取らずに飛び出したのは、新たな情報を得て覚えた焦燥のせいだった。

道すがらいつものように頭に布を巻く彼の背後で、弦は耳を疑うようなことを淡々と告げた。峰瀬は彼を灰の配下にした、という。どういうことか、と問えば、弦は一言　影にはわかりかねますとのみ答えた。

灰は一人、足早に街を抜ける。祭礼まで二日となり街は祭り一色である。もっとも早朝であるため日中の喧騒はないが、あと二刻もすれば大通りは露店に埋め尽くされ、多くの人で賑わうだろう。めまぐるしい思考に意識の大半を奪われ、気づけば気持ちが急ぐままに足が速まっていた。いつの間にか弦は姿を消している。それにも気付かぬほどに気が漫ろだったのか、と灰は思う。弦が彼をどこかで見ているとしても、文字通り影から仕えるつもりなのだろう。灰にとつては突然に配下になったと言われても納得のできるものではなかったが、峰瀬の命であれば　それがどのような意図であろうとも　弦を拒んだところで意味がないことはわかっていた。

隔壁を潜り抜けると、やがて來螺の店と宿営所が見えてきた。來螺の宿営所は多加羅の街を囲む壁の外、金笹が一面に広がるその手前にある。もっとも祭礼が迫るこの時期は金笹の収穫期であり、刈り取られたあとの赤味を帯びた大地の面積が次第に広くなっていた。そして金色の鮮やかさのかわりに目につくのが、いくつも立ち並ぶ來螺の幕舎である。

興行が行われる店は一様に白い幕舎だが、それがどのような娯楽を提供するかは白の中に刷毛で引いたように伸びる一条の色彩でわ

かる。ずんぐりとした円柱の上に円錐を乗せたような幕舎の、その頂上から地面に接するまでを結ぶ幅広の色彩は、紅であれば舞を、翡翠であれば演劇を、そして群青であれば歌曲や楽器の演奏を供することを意味する。その他にも占いや一風変わった手技、めくらまじや騙し技といったものを供する店もあり、客足は絶えることがない。

多加羅の街衆も多く訪れるこの興行は、來螺でも名のある大店が主体となっている。大店のお抱えの芸能家以外にも自発的に興行に参加する芸能家が多い。彼らにとっては客に娯楽を供するだけでなく、來螺の大店に認められる好機との意識が強い。自然と芸は研ぎ澄まされ、高度なものとなっていた。そして、それらが來螺の供する娯楽の中でも上澄みであることは暗黙の了解であった。真に來螺を來螺たらしめるもつとも淫靡な娯楽は、興行においては厳密に排されているのだ。

灰が訪れたのはまだ朝早い時分であり、店も閉じていた。時折すれ違う來螺の街衆らしき人々は束の間灰を見つめ、さして興味もなさそうに視線を逸らす。しかし灰は逸らされた視線のままに人々の気持ちまでも己から逸れたとは思わなかった。なお密やかに向けられるのは外部の者への警戒であり、それに少年が気付いたのは自身も幼い時を來螺で過ごしたからに他ならない。

閑散とした幕舎の間を歩けば、奇妙に乾いた空気が白々と漂っていた。目指す群青の帯の幕舎はすぐに見つかった。近づけば微かな音色が漏れ聞こえた。優しくたおやかなそれは、麗楊弓れいようきゅうという八弦の楽器だ。店を開く前に、修練も兼ねて奏者達が楽器を奏でているのだろう。

灰はそつと幕舎の入口の布を押し開いた。中を見れば奥の一段高い舞台を取り囲むように卓と椅子が並べられ、舞台の上では性別も年齢も様々な数人の奏者が楽器を抱えている。柔らかな仄暗さの中、音色はまどろむように響いていた。そして思った通り、叶かのの姿があった。中央で半ば顔を俯けるようにして弦を爪弾いている。そのた

め静かに幕舎の内側に滑り込んだ灰に気付いたのは、彼女ではなく別の奏者だった。

「あら、かわいらしいお客様」

おっとりとした甘やかに言ったのは、三十も半ばに見える婀娜な雰囲気、その声につられて顔をあげた葉は驚きに目を見開くと、楽器を置いて駆け寄ってきた。まとめずに背に流した髪が軽やかに揺れる。

「灰、どうして……」

言いかけて葉はふと口を嚙む。灰の表情から読み取ったのだろう。灰は周りに聞こえぬよう密やかに言った。

「叶、告発者がわかった」

鋭く息をのむ葉に、灰はさらに声を潜めた。

「俺はこれからそいつに会いに行こうと思う」

「一体誰なの？」

「多加羅の街衆だ」

簡潔に過ぎる言葉に、思わず葉は顔を顰める。顔を寄せ合うようにして小声で話す二人に、舞台の上にいる奏者が胡乱な視線を向けていた。

「叶、このことは自警団の連中には伝えないでほしい」

「どういうこと？」

ふと灰は迷うような素振りを見せた。そして微かに感じられるのは焦燥にも似た張り詰めた気配だ。葉はそれに不安を感じる。

「とにかく一回確かめてみないと……」

言い淀んだ灰は一回かぶりを振ると正面から葉を見つめた。薄暗がりに、冴えた瞳が強く彼女をとらえる。それにふと引き込まれる心地になった葉は、次の言葉に目を見開いた。

「叶には言うべきだよな。告発者は子どもだった。それもまだ小学院に通っているような年齢だ」

「子ども……」

葉は呟く。犯人か、少なくとも犯人に関わりのある者が告発した

に違いないと思っていた二人にとって、子どもが告発者だということとはあまりにも予想外のことである。そして叶は灰の張りつめた表情の訳を悟った。

果たして告発者を追うことたかはやで丈隼の無実を証明することが可能なのか　とんでもない思い違いの末、間違った方向に進んでしまうのではないか。時間が過ぎるほどに、丈隼の無実を明らかにする手立ては減る。ここで道筋を間違え無駄に時間をかければ、それが後に取り返しのつかないことになる可能性とであるのだ。

告発者さえわかれば、と考えていた彼らにとっては、新たに得た情報はむしろこの先の不安を覚えずにはいられないものだった。

「とりあえず会って探ってみる。イーリヤ達には無茶をしないでおとなしくしておいてほしい」

先の読めない状況で自警団の若者達が出てきては、かえって收拾のつかない事態になりかねない、ということだ。昨日の彼らの様子を見れば、そう思ったところで致し方のないことではある。叶にもそれはわかったが、懸念を口に出さずにはいられなかった。

「灰、何でも一人で背負いこもうとしてはだめよ。何より、一人でできることには限りがある。このことには丈隼の命がかかっているんだから」

厳しい言葉だった。そこにあるのは灰への気遣いばかりではない。諫言でもあるそれに灰は頷く。彼とてわかっていた。もしも真の犯人を捜し出すことができなければ、丈隼は十中八九死罪となるだろう。己一人だけで何もかもできるとは考えてはいない。だが、昨日、自警団の若者達が見せた激昂した様子を思えば、軽々しく力を借りる気にもなれなかった。ことは迅速に、しかしあくまでも慎重に行わねばならないのだ。

「またわかったことがあれば知らせる」

「わかったわ。くれぐれも気をつけて」

叶の言葉に灰は小さく頷くと幕舎を後にした。それを見送った叶は視線を感じて振り向く。奏者達が一様に彼女を見つめていた。

「一体どういうお客様？」

言ったのは、先程灰をかわいらしいと評した奏者だ。さて、困った、と叶は思案する。灰が、かつて來螺一と評された歌い手である紫弥しやの息子なのを言っつてよいものか。だが、彼は多加羅惣領家の一員でもある。そして六年前の悲惨な事件を思えば、真実を言うのは躊躇ちゆうちゆうわれた。迷った末に、結局叶は無難な言葉を選んだ。

「昔來螺にいて、多加羅に移住した子です。知り合いなんです」  
にっこりと笑って言えば、女はふうん、とため息とも吐息ともつかない声をあげた。

「まあ、そうなの。來螺にいたならきつと良い売り物になったでしょうに……」

叶の顔が引き攣る。普段から苦手な相手の、あまりにあげすけな言葉だった。快樂を売り物とする來螺の商品は、人である。女の言葉に沸き起こる怒りを抑え、叶は微笑んだ。

「さあ、それはどうでしょう。あの子、無愛想だから客受けしないと思います」

言いながら、さらに何か言おうとする女から視線をそらし、舞台上の上に戻る。楽器をとりあげてこれ見よがしに調弦をはじめた叶に、女は口を噤むと肩を竦めた。

（腹が立つったら）

叶は心中に呟き、幕舎の入口に視線を投げた。祈るように、願うように瞳を閉じる。

（頼むわよ、灰）

内心の焦りと迷いを抑え、そつと麗楊弓を爪弾けば甘い音が響いた。

歩調を緩めることなく灰は再び多加羅の街へと戻った。叶と話したせいもあり、気持ちは幾分落ち着いていた。もしかや己はとんでもない見誤りをしたのではないかという不安と、それでも唯一の手掛かりを冷静に追わねばならないという思いとで胸中が揺れていた。



灰は不意に足を止めると、大きく息を吸った。のびをするようにして上を見上げれば、一日晴天であることを思わせる天涯である。

（落ち着け。何もせぬうちに焦ってどうする）

己に言い聞かせ、再び歩き始めた時には感情を削ぎ落としたような集中のみがその表情にはあつた。

弦が灰に伝えた情報とはこうである。警吏に告発があつたのは昨日の早朝だつた。つまり、警吏は告発の後、殆ど間を置かずに文筆を連行したということだ。そして、告発を行ったのは外延部に住む十歳になる少年だという。少年は病身の母親と妹とで暮らしている。父親はいない。少年曰く、火災のあつた夜、病気の母親のために冷たい水を汲むため共用の井戸に向かつたところ、一人の青年が硝子筒を持って歩いていたという。その青年は年の頃十七、八、傍目にも国境地帯の者であることがわかつた。不審に思つて問えば、興行のために多加羅へと来て街の外に宿営している來螺の者だという。何のためにうろついているのか気になりはしたが、そのまま青年は去つて行つた。そして深夜、一区画離れた地区で火の手があがつた。警吏はその告発をもとに來螺の宿営所へと向かい、少年が言つた外見と合致する文筆を連行した、ということだ。

何とも杜撰な話だ、というのが灰の思いだつた。なぜ火つけのためにうろついていて、問われるままに來螺の者であることを明かすのか、なぜ少年はすぐに警吏に知らせず、かなりの日数を経てから知らせたのか。それもその間、捕まらぬ犯人に対して並々ならぬ警戒を人々が感じていたのを少年も気付かぬはずがない。

告発者が子どもであることにどうやら己は必要以上に動揺していたらしい、と灰は自嘲する。犯人にたどり着けるかもしれないということとともより見込みでしかないのだ。そして告発者の話が明らかに虚偽であることは疑いようがない。無論、その子どもが犯人自身といわずとも犯人と共謀することもあろう。文筆を告発する遣り口の狡猾さを思えば、むしろ子ども背後に何者かがいるという構図が鮮明になるといふものだ。問題は告発内容の稚拙さではない。

一度文隼が犯人と目されれば、無実を証明することが難しいというその点である。それこそが文隼を罪に陥れようとする者の意図だ。

さらに不運なのは、來螺の者達も文隼が深夜に確実に宿営所にいたことを証言できなかったことだ。その夜、見回りの当番に当たっていたいなかった文隼は早々と就寝し、その後彼が抜け出さなかったかどうかまで自警団の面々にはわからなかった。そして文隼が街をうるついでいないと言い張っても、結局は文隼の言か、告発者である少年の言か、そのどちらを信じるか、ということになる。警吏は少年の言を信じたのだ。あるいは警吏としては、疑わしきを野放しにできなかったのかもしれないが、いずれにせよ一度容疑者として捕えられてしまえば、先行して文隼が犯人であるという既成事実ができあがってしまう危険性が高い。

考えるままに歩けば目的の地域が近づいてくる。

伝えられた少年が住むという界限は、外延部の中でも特に貧しい人々が住む区域だった。ひしめき合う家々は互いに寄り掛かるように、あるいは押しつぶすように靠れ合い、中には崩れかけているものもある。迷うことなく道を進めば、古びた井戸があった。しかるにこれが話に出てきたものだろう。

辺りを見回せば目的の家はすぐにわかった。扉の前に褪せた紅の布が下げられている。凶を被う目的のそれは、弦が言っていたとおりのものだ。もしかして、と灰は思う。弦は昨夜のうちにこの家の所在を突き止めていたのかもしれない。警吏の記録だけでこのような細かい目印までわかるものではない。

灰は家の前で立ち止まる。どうしたものか、と暫し目を眇めて家を見やった。と、突然目の前の扉が開くと、一人の子どもが勢いよく飛び出して来た。すんでのところまで身をかわした灰はそれが幼い少女であることに気付いた。少女も驚いた顔で立ち竦む。見る限り稟よりも年が下だ。六つか七つといったところだろう。

「おい、ちゃんと顔を洗えよ」

次いで家の中から響いたのは少年の声だ。灰の視線が鋭くそちら

に振り向けられた。

「それから母さんのために布を濡らしてきてくれ」

言いながら家の中から出てきたのは、まさに十歳程の少年だった。くつきりと吊り上がった眉とすっとした鼻筋が目を引く、幼い中にも鋭い陰影のある顔立ちだ。灰が相手に持った第一印象は奇妙なことに、少年がひどく痩せている、ということだった。

「……あんた誰だ？」

少年は自分を見つめる灰に気付くと胡乱気に言った。

「泉か？」

「ああ、そうだよ。あんたは誰だよ」

再度の少年の問いかけに灰は答える。

「俺は灰だ。聞きたいことがあって来た」

「何だよ」

無愛想な物言いの影に、警戒が漂っている。それを見ながら灰は迷う。単刀直入に問うても少年が答えるとは思えない。そもそも罪人を告発した者は嚴重に秘されるのが通常なのだ。この少年がもしも犯人と繋がっているならば、下手なことを言えばかえって事は困難になってしまう可能性もある。

しかし、もしこの少年が犯人と繋がっていれば、と灰は考える。

そうであれば灰が火つけの件を追っていることは犯人に伝わる。丈隼に罪をなすりつけたと考えているであろう犯人にとってそれがどのような意味を持つか

(うまくすれば焙りだせるか?)

灰は心を決める。

「火つけの件について聞きたい」

少年が目を見開いた。一瞬少年の顔に浮かんだ表情に灰は目を細める。

「火つけ……？」

声は頼りなく揺れた。

「君は火つけの犯人を見たというが、それは本当か？」

少年の顔に驚愕と、隠しようのない怯えが浮かんだ。

「何……何言ってるんだよ。俺、そんなこと知らねえよ」

「そんなはずはない。昨日の朝、來螺の者を火つけの犯人として告発しただろう」

「知らねえよ！　いきなり来て訳わかんねえこと言ってるじゃねえよ！」

「その告発のせいで、昨日來螺の者が捕えられた」

「ずっと灰の瞳が熱を失った。それに少年は息をのむ」

「名も知らないだろう。捕えられたのは丈隼という者だ」

「丈隼……？」

「ああ、そつだ」

少年は血の気の引いた顔で、厳しく己を見つめる灰を睨み返す。追い詰められた獣が毛を逆立てるように、そこにあるのは敵愾心ばかりだ。

「何を言ってるか俺には全然わかんねえよ。丈隼だかなんだか知らないけど……」

少年の声は家の中から突然響いた呻き声にかき消された。苦しげな女性の声だ。さつと少年が踵を返すと、半ば駆けるようにして家の中へと入った。灰も咄嗟に後を追った。尋常ではない声だ。

家の中には澱んだ空気が凝っていた。煤けた壁と床はどこどころ亀裂が入り、僅かな家具もどれもが傾き壊れかけている。一間だけの小さな空間の奥には蹲るように寝台が置かれ、その上に人影があった。呻き声はそこからである。

「泉……泉……薬をおくれ。体中が……痛くてしょうがない……」

「待って、今あげるから」

少年は言つと、傾いた小さな卓の上に置いてある紙包みを取り上げた。少年がそれを開くと薄茶色の粉が中にはあった。灰は仄かな甘い香りに眉根を寄せた。

（これは……）

見つめる前で少年は粉を少量湯呑に入れると、水瓶から柄杓で水

を注いだ。それを母親へと差し出すのを、咄嗟に灰は少年の腕を掴んで止めていた。

「何するんだよ」

「さっきの粉、見せてみる」

「何だよ、お前。勝手に入って来て、早く出てけよ！」

「いいから見せるんだ」

灰の険しい表情に少年は気圧されたように黙ると、紙包みを灰に渡した。灰は紙の上の粉を注意深く見詰める。やはり甘い、脳髄に滲みるような匂いだ。指先にほんの僅かだけつけて舐めれば、瞬間視界に火花が散った。強烈な眩暈にも似たそれを、しかし灰は予測していたため強く瞳を閉じることで耐えた。実際に火花が散ったわけではない。視覚が異常に冴えて、物の輪郭がまるで燃え上がるようにくつきりと見えたただけだ。

「何やってんだよ！ 貴重な薬なんだよ！ 返せ！」

灰の手から少年が紙包みをひったくる。灰は視界が正常に戻ったのを確かめると、少年を見やった。問う声音は低い。

「それが何か知っているのか？」

「知ってるよ！ 痛みを抑える薬だ！」

「違う。それは麻薬だ。それも強烈な依存作用がある。確かに痛みは感じなくなるだろうが、心臓には大きな負担がかかる。いずれはそれによって死に至るものだ」

淡々と語る灰の言葉に少年は目を見開いた。

「……嘘だ。だって、これはなかなか手に入らない貴重な薬だつて

……」

「それを誰に聞いた」

「これにくれた人が……」

灰は目を細める。

仙境香せんきやうという。それは可憐な花を咲かせる山野草の根から僅かに取れる麻薬だ。そのまま口にすれば視界が鮮明になる程度の効果だが、水に溶かして摂取すれば幻覚と感覚の麻痺を招き、強い依存作

用がある。そして常用すれば心臓に大きな負担がかかり、やがてはそのせいで死ぬ者も多いと聞く。もとより数の少ない珍しい植物から採取されるため、非常に稀少なものでもあった。貧しい者が手に入れられるものではない。そして麻薬を厳しく禁じる多加羅においては、持っているだけでも罪に問われるだろう。

灰は少年の腕を掴んで家の外に引きずり出すと、目線を合わせるようにして膝をついた。少年の顔を正面から覗き込む。

「母親が何の病を患っているかは知らないが、あの麻薬を服用していれば、いずれそのせいで命を落とすことになる。病で体が弱っているところに、さらに心臓に負担をかけることになるからな」

「何……言つて……お前何なんだよ」

少年の表情が泣き出しそうに歪む。

「俺は……」

灰はふと言葉を呑みこみ、静かに告げる。

「俺は薬師だ」

「薬師……」

「ああ、そうだ。あの麻薬を誰にもらった」

「誰つて……そんなことお前には関係ない……」

少年の声が震える。まるで怯えるようなそれに、灰は眉を顰めた。火つけについて聞きたいことがあると言った時にも見せた表情だ。

思考が形作られるよりも先に収斂する直感にまかせて言った。

「あの麻薬を得る代償に、何をした」

ひそりと響く。少年は大きく目を見開いた。

「あれは容易く手に入るものではない。ましてや多加羅ではなおさらだ」

強張った少年の表情を、灰は睨みつける。その時、おずおずと近寄る気配があった。振り返れば先程の少女が怯えた表情でこちらを見つめている。その少女もまた、ひどく痩せていた。乱れた髪にも艶はなく、一目で栄養状態の悪さが見て取れる。

「お兄ちゃん……この人、誰……?」

「お前は向こうに行ってるよ」

「でも……」

「いいから行ってる！」

鋭い兄の叫び声に少女は一瞬立ち竦み、怯えた小動物さながらに駆け去って行った。それを見送り、少年はきつい瞳で灰を見返した。

「泉、あの麻薬の代償として警吏に來螺の者を売ったのか？」

あまりに断片的な、そして単刀直入な言葉だった。しかし少年にはそれで十分だった。

「ああ、そうだよ！ 悪いかよ！ だってどうせ火つけの犯人には違いがないんだろ！？ どこで俺が警吏に言ったのを知ったか知らないけど、俺は間違ったことはしてない！」

怯えと怒りをなймаぜにした少年の顔を見つめ、灰は淡々と言葉を返した。

「それは違う。告発された來螺の者は無実だ。泉は関係のない者に罪を被せる片棒をかつがされたんだ」

泉が驚きに目を見開いた。束の間の沈黙の後、喘ぐように言った。

「でも……あの人は確かに犯人だって……」

「その証拠を知っているのか？」

「あの人は言ったんだ。その……来螺の奴が硝子筒を持ってうろついていたと……火つけの現場でも確かに逃げる姿を見たって……」

「そう聞いたただけだろう。丈隼はその夜は街に入っていない。それになぜ別の者に告発をさせる必要がある。自分で見たならば自分で告発すればいいんだ。見てもいないものを告発するのは、それも罪に問われることだ」

静かだが鋭い灰の声音に、少年は戸惑ったように瞳を泳がす。

「答える、誰なんだ。泉に告発をさせたのは」

「知らない……」

「知らないはずがないだろう」

「本当に知らないんだ！ 俺、そいつの顔も見えてない！」

「どういうことだ？」

「そいつ、黒くて長い外套を着てて、顔も布で隠してたからどんな奴かもわからなかったんだよ」

「そいつが来たのはいつだ」

「おとついの夜中……いつもみたいに母さんのために冷たい水を汲みに井戸に行った時、声をかけられた」

ぼつりと少年は答える。二日前の夜 灰はふと眉根を寄せた。

「そいつは何と言った？」

少年はもはや抗わず、呟くように答える。

「自分は火つけの犯人を知ってるけど、多加羅の街の者ではないし警吏も自分の言葉を信じるとは思えない。でも見て見ぬふりもできないから、かわりに警吏に告発してほしいって」

「それで、頷いたのか」



「はじめは嫌だつて言った。なんで見るからにがきの俺に声をかけるのかわからなかったし、だいたいそいつ何か変な感じがしたから自分で言えばいいとも思った」

「でも、引き受けたんだな」

少年は頷く。

「あの薬のためか」

問いではなく確認だったが、少年はさらに小さく頷いた。

「あの薬はどんな痛みでも抑えるすごく高価なものだけど、告発してくれたらあげるって言われた。試しにちよつとだけお母さんに飲ませてごらんつて」

泉は足元を見つめたまま言う。まるで滴が落ちるように、ぼつりぼつりと語られる言葉を、灰は息を詰めるようにして聞き入る。そうせねば聞き取れぬほどに少年の声はか細かった。

「ちよつとだけ薬を飲ませたら、本当に母さんはすごく楽そうになった。俺、それでも少し迷った。でも、母さんが笑ったんだ……」  
くしゃりと泉の顔が歪む。

「毎日毎日、痛いから早く死にたいつて……いつそのこと殺してくれつて……そう言つてた母さんが、その薬飲んだら笑ったんだ。俺、それ見たらもうたまらなくなつて……そいつの言う通りにするつて約束した」

不意に泉は顔をあげた。その瞳に涙はなく、しかし宿る光に灰は息をのむ。

「俺どうすればよかつたんだよ！ 誰も俺達みたいに貧しい奴らを助けてくれない。慈恵院じけいいんにどんだけ頼んだつて薬の一つもくれなかつたんだ。俺、間違つたことしたかもしんないけど、でも誰も母さんのこと助けてくれないじゃないか！ どうしたらよかつたんだよ！」

悲痛な声だった。灰は返す言葉が見つからないまま、少年を見つめた。少年がどれほどに追い詰められていたか、灰は悟る。慈恵院は神殿が貧しい者のために開設している医療所だが、すべての人が

救われるわけではない。得体の知れない病を患う女性の様子から、慈恵院でも癒すことは不可能だと判断されたのだろう。慈恵院は救える見込みが無いと見做した者までも受け入れることはない。

漸く出た言葉は硬質に響いた。

「だが、告発すべきではなかった」

泉の体が痙攣するように震え、灰を睨みつける瞳が揺らぐ。そこに浮かんだのは紛れもない怒りであり、憎しみにも似ていた。泉とて不審な男の言うままに告発をした、そのことを正しいこととは思っていないのだろう。しかし、貧しさの中、病による壮絶な痛みと絶望に惑う母親の姿を見続けた少年に、男の申し出を断ることはできなかつた。母親の笑顔　それだけのために。

「俺は文隼のことを知っている。彼が無実であることも知っている。何としても文隼は助け出す」

淡々と響く声音に、少年は体を強張らせた。

「じゃあ俺を警吏に突き出すのかよ。偽の告発をしたって。あの薬のことも警吏に言うつもりだろ」

ふと灰は笑んだ。突き放すような言葉を投げた者には不似合いなほどの柔らかなそれに、泉は虚をつかれたようだった。

「いいや、そんなことはしない。俺が追っているのは泉に告発をさせた奴だ。そいつが誰かわかれば文隼の容疑を晴らすことができる」  
「でも……」

「それに、俺は薬師だ。病人を癒す立場の者が、病を悪化させるような真似はできない」

「……どういうことだよ」

「泉が警吏に捕まったら、母親はどうなる。精神的な打撃だけで、病は取り返しがつかないほどに悪化することもある。俺はそのようなことはしたくない」

少年は戸惑ったように灰を見つめ、身じろぐ。灰は諭すようになおも言った。

「いいか泉、母親を助けたければあの薬は二度と使うな。今ならま

ださほど依存症状は出ていないはずだ。あの麻薬は人に知られないように捨てた方がいい。もしも持っていることを知られたら警吏に捕われるからな」

「……そんなの、あの薬やめたってどうせ母さんは助からないだろ」「それは俺にもわからないが、できるだけのことをしてみる」

泉は訝しげに灰を見た。

「薬を処方してみる。前にいた村でも似たような患者がいたから、もしかして同じ病かもしれない」

「俺、金持ってねえよ」

灰は首を傾げた。

「金なんていらぬ。俺がやりたいからやるんだ」

泉ははつきりと顔を顰め、苦々しく言った。

「哀れみかよ」

腹立たしげでありながら、どこか傷ついたような響きがあった。

だが、それにも灰は穏やかな視線を返したただけだった。

「違うな。俺は人に哀れみを抱ける程、清い人間じゃない。治療するのは自分のためだ」

黙りこんだ泉をそのままに、灰は家の中へと入る。ゆっくりと寝台に近寄れば、女は意識が朦朧としているのか虚ろな視線を彼に投げた。まだ幼い子供たちの母親である。おそらく四十にもなっていないだろう女の顔は、まるで老婆のようだった。痩せこけた顔は深く皺が刻まれている。苦痛にやつれたその様子が、かつて柳角が看っていた患者の姿と重なった。

寝台の傍らに灰は膝をつく。そつと病人の手首を持って脈をはかりながら、灰は目を細めた。閉ざしていた意識の扉を開く。女性の体を縁取る命の光が見えた。淡く揺らめく光の全体に、刺草のような翳りが纏わりついている。病の影だ。

(やはりあの患者と同じだ)

森林地帯にいた時、柳角が看っていた患者の中にも、同じ影を纏う者がいた。その患者が患っていたのは命をおとすほどの病ではない。

しかしその痛みによって生きる意志を奪い、自ら死を願う程に人を追い詰める病だ。

背後に近づいてくる泉に、灰は問うた。

「いつから症状が出た」

「去年、父さんが死んで暫くしてからだ。関節が痛いつて言っても貧しいから必死に働いてたんだ。それがある日急に立てないほどの激痛になった。全身が痛いみたいなんだ。まるで切り裂かれてるみたいだつて。それからずっと寝た切りだ」

「そうか……」

「何の病かわかるのか？ 治せるのか？」

「わからない。ただ、俺が思っているとおりの病だとしたら、命を奪うようなものではないはずだ」

なおも虚ろな女の顔を覗き込み、灰はゆっくりと立ち上がった。

振り返り、己を見つめる少年を見やった。

「なるべく早くに薬を持つてくる。俺の師匠が同じような症状の患者に処方していたものだから、もしかして効くかもしれない」

泉はなおも疑わしげに灰を見ていたが、ぽつりと言った。

「俺に告発しろつて言った男、多分まだ若かった」

今度は灰が目を見開く。

「声音を低くしてたけど、何となくわかるだろ、そういうのつて。そいつ多分まだ三十歳にはなつてない。それにちよつと訛りがあった。なんとなくだけど、濁音が間延びして聞こえるんだ。背はかなり高くて、太つてはいない」

見つめる灰から泉は視線を逸らす。不機嫌な声音で言った。

「俺が気付いたのはこれだけだ。あとは何も知らない」

灰は笑んだ。

「ありがとつ」

泉はさらに顔を歪めた。灰は少年の脇をすり抜けて家の外へ出る。眩しさに目を細めて歩けば、追いかけてくる足音がした。

「おい！」

振り返ると泉が睨みつけるようにして灰を見ている。

「お前の名前、何だ！ もっかい言えよ！」

まるで怒っているかのような声音に、灰は苦笑した。

「灰だ」

言いながら再び少年に背を向ける。歩き出した灰の顔に笑みはなかった。厳しい表情で前を見据えると、なおも自分を見つめている泉の視線を感じながら、足早にその場を去った。

灰が足を止めたのは街を貫く大通りに戻ってからである。すでに露店の準備をはじめている人々を見やり、さりげなく路地へと入る。家壁に背を預けて暫し地面を見つめる灰の横に人の気配が近づいてきた。意図を察して姿をあらわした弦は、相変わらずの無表情で己の主となつた少年を見つめた。

「話は聞こえていましたか？」

「いえ、聞こえるほどの位置にはいませんでしたので」

それを聞いて灰は小さく頷く。

「泉は二日前の夜に、一人の男に告発を頼まれたようです。男の正体はわかりませんでした。ただ、その男は泉に見返りとして仙境香を渡しています」

弦は僅かに目を見開いた。

「泉はそれを痛みを抑える薬だと思っていたようです。病身の母親のために、告発を引き受けたと言っていました」

「あの少年が偽りの告発をしたことを警吏に言わないのですか？」

「それはできません。言ったところで文筆の容疑が晴れる明確な根拠にはならないでしょう。それにいかなる理由であれ虚偽の告発をし、そのうえ仙境香を持っていたら泉自身が罪に問われかねません」

警吏にとつて、漸く捕えた火つけの犯人である。容易く釈放することはないだろう。少年が偽りの告発をしたことが明らかになつたとしても、正体がわからぬとはいえ少年に犯人を見たと伝えている人物がいるのだ。新たに泉が罪に問われるだけで、告発そのものは

依然として無効になるわけではないだろう。灰は苦々しく思う。警吏はおそらく、都合の良い面しか見ない。

「多加羅では麻薬は厳しく禁じられていると俺は聞いています」  
言ったとき灰は黙りこんだ。惑いと、窺い知れない思考に沈むその表情を弦は見つめる。

「多加羅において裏でそのようなものを扱う組織がないわけではありませんが、仙境香までも扱っているとは思えません。あれは容易く手に入るものではないかもしれません」

低く弦が言えば、灰は顔をあげる。正面から弦を見つめ言った。  
「仙境香を確実に入手できる場所は、国境地帯でも限られています。そもそも東方にしか生えない植物から採れる麻薬なので……。そして入手できる場所は……」

灰の視線が再び地面に落ちた。迷うように、沈黙が落ちる。ぽつりと言った。

「來螺」

弦は肯定も否定もせず灰の言葉を聞く。

「來螺であれば手に入れることはできます。耶來やらいという組織を知っていますか？」

「名前だけは」

「自警団が表の顔であれば、耶來は來螺の裏の顔です。あらゆるものを集め、売り、人身売買から殺人まで、どのような汚い仕事でも引き受ける。仙境香も耶來ならば扱っているはずですよ」

弦は灰が言わんとすることを察する。ひそりと問うた。

「つまり、灰様は來螺の者が裏にいますとお考えなのですか？」

「わかりません……」

答えた灰はなおも地面を睨みつけた。もしや、と思う。文筆を告発させたという人物が來螺の者である可能性は皆無と言えるだろうか。來螺の者であれば、それも興行に來ている者であれば文筆の行動は把握できるはずだ。そうであれば、彼を窮地に追い込む状況を作り出すこともさほど難しくはないだろう。

(だが、それは違う。……違うはずだ)

灰は強く思う。仮に犯人が來螺の者であれば丈隼に罪を被せる目的は何だ。丈隼への恨み？ 丈隼の精悍な顔が浮かぶ。あけっぴろげな笑顔と、こちらを見つめるまっすぐな瞳がそれに被さった。

「確かに興行に來ている者の中に真の犯人がいたら、丈隼に罪を被せるのは簡単です。仙境香を手に入れられる可能性も高い。でも、興行に來るのは自警団に連なる者ばかりです。自警団と耶來は微妙な力関係を築いていて、普段から互いに接触することを極力避けています。もしも自警団の中に耶來と接触して仙境香を手に入れる者がいたとしたら、それは自警団にとって大きな裏切りとなる。そのような者がいるとは思えません。それに一回目の火災は來螺の人達が來る前に起こっています」

「だが、可能性は皆無ではございません。先に多加羅に潜り込むことがないと言いつつ切れないでしょう」

弦が指摘する。

「告発した者は丈隼の行動を把握していました。そして泉に告発をさせるために多加羅では到底入手が困難な仙境香を渡したのです。

これだけでも十分に來螺の者の中に犯人がいると考えられます」

冷静な言葉である。灰にも弦の言わんとすることはわかる。自身とて、考えずにはいられなかったことなのだ。

「だが、なぜこの時期に告発をしたのか……犯人が來螺の者であるなど、誰も考えていませんでした。犯人は身を潜めていれば捕まることはなかったはずです。それを二日前に突然動き、丈隼に罪をなすりつけている」

少年が何を言おうとしているのか、弦ははかりかねる。

「何かが、真の犯人にそうさせる何かがあったのだと俺は思います」  
そして、それこそが鍵なのだ、と灰は言う。言いながらもなお色濃くその表情にあるのは迷いだった。弦にもその迷いがわかる。泉から得た情報は極僅かなものである。少年に告発をさせた男の手掛かりは、絶望的なまでに少ない。そしてその僅かな手掛かりは新た

な疑惑を生んだ。すなわち、真の犯人が來螺の者である可能性である。

「たとえば、告発をさせた人物が耶來の者である可能性はないでしょうか？ 文筆を罪に陥れたことも來螺内部の抗争によるものだとしたら、あり得ることです」

「耶來が多加羅で事を起こすとは思えません。それに自警団と耶來は互いに相容れないとはいえ、表だって対立することはまずありません」

灰が知る耶來とは、來螺の街の裏側に巢食う闇である。祭礼のために興行にきている一団が來螺の上辺の華やかさの一部だとすれば、耶來こそ、來螺を來螺たらしめる底辺の暗がりであり、尽きぬ快楽を満たす源だ。だが、彼らは決して表に姿をあらわそうとはしない。自警団との関係も敵対というよりは、歪ではあるが協調と言ってもよいものだ。互いに表と裏から來螺を支える存在である。どちらが欠けても來螺は成り立たない。

「灰様、こうなつては來螺の者の手を借りることはおやめになった方がよろしいでしょう。來螺の者の中に犯人がいる可能性が皆無でない限り、彼らを信じることはできません。あの若者達から真の犯人にこちらの動きが伝わる危険もあります」

灰は唇をかみしめた。弦の言葉に頷くべきなのはわかっていたが、それでも逡巡せずにはいられない。もとより來螺の若者達の力は極力借りないつもりではいた。しかし彼一人で何ができるといのか。仮に來螺の中に真の犯人がいるのだとすれば、若者達の手を借りねば到底見つけ出すことは叶わない。

もっとも、灰にはどうしても來螺の者が犯人だとは思えない。口に出すにはあまりに確証がないとはいえ、昨日から考え続けて辿り着いたのは全く違う犯人像なのである。迷うほどに、時は過ぎる。焦りに思考が惑った。

「灰様、相手は仙境香までも所持している輩です。灰様の動きを知れば何を仕掛けてくるかわかりません。御自身の身の安全もお考え



ください。犯人を焙りだしたいというお考えはわかりませんが、ここは何よりも慎重に動かねば結果として文筆を助けることもできないでしょう」

灰の思惑を正確に読んでいるらしい弦の言葉である。おそらくは、己の存在を犯人に知らしめようとするような灰の行為そのものへの懸念を込めているのだろう。

「私をお使いください。そのために私はいるのです」

断固とした響きに、灰は思わず弦を見やった。

「來螺の者は私が調べて参ります」

灰はかぶりを振った。その瞳が不意に強さを帯びる。そこに最早逡巡はない。

「いえ、それはだめです」

「なぜですか。この件は一刻を争うことでございます。おそらく祭礼が終わればただちに審議が行われ文筆の有罪は確定するでしょう」

弦は彼にしては珍しく、強い声音で言った。

「灰様、お命じください」

灰は嘆息した。弦が彼の配下になった、それを認め難い己の心情を抑える。何より、彼一人でできることなどが知れているのだ。諦めに似た表情を浮かべると言った。

「ならば命じます。ただし調べていただきたいのは來螺の者についてではありません」

次に語られた灰の言葉に弦は瞠目する。それは彼にとってでは予想だにしない内容だった。だが、彼は灰の命令に言葉少なく肯うと、素早く雑踏に紛れて姿を消す。それを見送り灰自身もまた大通りへと踏み出した。

來螺の者を調べるといふ弦に敢えて違うことを命じたのは、殆どが己の直感による決定だった。直感を過信する危険性は承知していたが、それでも灰は敢えてそちらを選んだのだ。

(もしも間違っていたら……)

考え、頭を振る。間違っていたら、文筆を助けるのはさらに困難

になる。だが、泉が語った言葉の中にも手掛かりはあったのだ。ただ明確に形を成さず、しかし目を凝らせば一つの道筋が灰には見える。それでも沸き起こるのは焦燥ばかりだった。とんでもない思い違いをしているのではないか。体の芯が冷えるようなその不安を抑え、灰は迷いを振り払うように歩を進めた。時が、ないのだ。

灰は俄かに人の流れが増した道を歩きながら、己の思考に沈みこんでいた。そのため視線を感じて顔を上げた時に、はじめて彼を見つめる少年達に気付いた。若衆である。

丁度鍛錬所に向かう道すがらであるらしい彼らは、灰を凝視している。その面々が加倉とは一線を画す平民の身分の者であることに灰は気付いた。貴族の子弟が示すような悪意を向けてくるわけではないが、須樹達のように親しく言葉を交わすわけでもなく、常に距離を置いていた連中である。若者達が一樣に浮かべる表情に、灰は息をのんだ。これまではよそよそしい態度でしか接してこない相手だったが、今そこにあるのは、嫌悪と蔑みの色だった。

灰は歩調を緩めることなく、彼らの傍らを通り過ぎた。その瞬間、無造作に声が投げられた。

「來螺の二郎が」

思わず足を止めていた。振り返らない彼にさらに別の一人が言う。「二度と若衆へは来るな」

それ以上は言わず、若者達は立ち尽くす灰をそのままに遠ざかる。その気配を追いながら、灰は拳を握っていた。まだ癒えていない左手が鈍く痛む。それとは別に、きりりと痛むのはどこなのか。灰は握っていた拳を解いた。見れば白い包帯にぼつりと紅が滲んでいる。

どこも、痛むはずがない。痛むならばそれは己が弱いだけだ。灰は苦笑む。何を期待していたのか。多加羅惣領家の者として向けられる空虚な敬意と、來螺の者として向けられる蔑みと、どちらも灰にとっては同じものだ。

灰は顔をあげる。振り返ることもなく、その場を後にした。

その夜、星見の塔を訪れた者達<sup>ほしみ</sup>がいた。

滅多に使われることのない呼び鈴が鳴ったのは、宵の刻も過ぎ、あたりが夜闇に覆われた頃合いだった。訪問者を迎えたのは秋連<sup>しゅうれん</sup>である。

扉を開けると、廊下の灯火が作りだす光に浮かび上がるのは、三人の若者だった。青年というにはまだ年若い、しかし少年というには大人びた雰囲気<sup>ふんいき</sup>の者達である。思わずまじまじと見つめる秋連に対して、三人のうちの一人が言った。

「遅くに申し訳ありませんが、灰様はおられますか？」

繊細な面差しはどこか女性めいた柔らかさを感じさせるが、視線は裏腹に鋭い。

「灰ならいるが、君達は？」

「申し遅れました。私達は若衆<sup>わかしゅ</sup>の者です」

秋連は怪訝<sup>けつげん</sup>に思う。その彼の思考を読んだように、また別の一人が言った。

「突然に申し訳ありませんが、灰様にお会いしたいのです」

清<sup>すが</sup>しい落ち着いた声音である。その後ろでは大柄な体軀を縮めるようにしてもう一人が秋連を見つめている。

「ああ、それは構わないが……とにかく入ってくれ」

言いながら秋連は若者達を星見の塔へと招じ入れた。人が訪れるにふさわしい時刻でも場所でもない。灰に一体どのような用件があるのか、どこか張りつめた若者達の様子を見るともなく見ながら秋連は問うた。

「今朝など灰は朝食も食べずに出て行ったが、若衆は今祭礼の準備で大変なのだろうな」

別段変わったことを言っただつもりはなかったが、若者達はふと息を詰めるような雰囲気<sup>ふんいき</sup>で視線を交わし合った。

「はい、祭礼は二日後ですから」

答えたのは最初に灰の所在を尋ねた一人だったが、秋連の思い違いでなければ、どこか取り繕うような響きの声だった。

「灰は夕刻から書庫に籠っていてね。何やら調べたいことがあるらしい」

案内しながら言えば、静けさの中に言葉は沈むかのようである。後ろに続く若者たちは物珍しそうに辺りを窺いながらも、一様に沈黙を守っていた。

秋連は一つの書庫の前で足を止めると、扉を開いた。書庫は大方が闇に沈んでいたが、連なる棚の間に光の円が広がっていた。その光のもと、棚に背を預けて書物を読む灰の姿が浮かびあがっている。半ば伏せた顔は複雑な影に染まる髪に隠されて窺い知れない。静寂に少年自身も沈み、染まっているかのようにだった。

灰がふと顔をあげる。すい、と向けられた視線が秋連を、そしてその背後にいる者達を捉えた。その瞳が一瞬大きく見開かれる。秋連は灰の表情に目を細め、しかし何も問わずに穏やかに告げた。

「君にお客様だよ」

そして三人を振り返る。

「あいにくここには客を通す程の部屋もなくてね、せせこましくてすまないが話はここでしてくれるかい？」

若者達が頷く。秋連は三人を招き入れ、そのまま書庫を後にした。たん、と扉の閉じる音が響く。

灰は突然の訪問者を前に暫し立ち尽くす。言葉が出て来なかった。それは三人 須樹すきと仁識にしき、そして冶都やとも同じなのか、気づまりな沈黙が落ちた。

「すごい書物の量だな」

どこか呆れたように言ったのは冶都だった。沈黙に耐えられなくなったのか、それとも天井まである棚を埋め尽くす書物の量に単純に感心したのかもしれない。

「まだ、この部屋は少ないですよ」

灰は言うつと書物を手にしたまま硝子筒を捧げ持つて三人へと近づいた。扉の横に申し訳程度に置かれている机に硝子筒を置くと、改めて三人に対する。

「こんな刻限にどうしたんですか？」

淡々とした響きの問いだった。須樹は言うつ。

「わかつているんじゃないのか？」

抑えた声音だったが、灰はそこに潜む厳しさに気付いたのか、ふと息をつめたようだった。

「昨日のことだ。來螺くわいぶの者が火つけの犯人として捕まったという」

「そのことは……」

「若衆の俺達には関係ない、か？」

言い淀んだ灰の後を須樹が無造作に続けた。

「単刀直入に言うつ。灰、俺達も頭の言うつことには賛同できないんだ。眞の犯人が別にいる可能性があるなら、そいつを捜すべきだと思つ」

なおも無言の灰に須樹は明瞭に言つた。

「俺達も眞の犯人を捜す手伝いをしたい」

灰の瞳が揺れる。迷つように須樹を見つめ、漸く言つた。

「そんなことをすれば、須樹さん達も若衆にいられなくなります」

「お前は躊躇ちゅうちゆいもなく若衆を抜けたな。俺達にもそれができないとなぜ思つんだ？」

なぜ、と問われて灰は答えに窮する。須樹の真剣な表情を見れば、誤魔化しやその場凌ぎの言葉を言うつことはできなかつた。

「俺は自分のことは多加羅の者だとは思つていません。あの時も若衆のことは本当にどうでもよかつたんです。それに、丈隼を助けたと思つるのは、俺自身の勝手な気持ちです」

沈黙が落ちる。その静けさを破つたのは仁識だった。

「素直ですね」

呆れたように言うつ。続く声音には鋭さがあつた。

「つまり、若様は私達多加羅の者には御自身の気持ちなどわからない、と仰りたいわけだ」

「確かに灰にとっては昔馴染みを救うことは何をおいても優先されることだろうな」

言いながら、須樹は灰が鍛錬所を去る時に見せた拒絶を思い出す。それを見て彼が灰に対して抱いたのは懸念や案じる思いだけではなかった。僅かでも少年に怒りを抱かなかつたと言えば嘘になるだろう。それまでの信頼関係などなかったかのように拒んだその裏に、須樹達への配慮があるだろうことはわかっていた。それでも須樹には割り切れなさが残っていたのだ。所詮違う者なのだ、どれほどともに過ごそうと結局相容れぬ、越えられぬ一線があるのだと灰は無言で示してみせたのだ。

來螺の者として灰を蔑み、拒絶したのが加倉や彼に倣う若衆であるならば、多加羅という枠から出ることができない者達を拒み、そしてその枠に組み込まれることを厭うたのは灰だった。

もつともそうであるとしても、そのことに灰自身は気付いていないのかもしれない、と須樹は考える。そしてそれを指摘するほど須樹は愚かではなかった。人と人はこれほどに遠い。他人の心の内をはかることはできても、本当に知ることなどできはしない。相手を己の狭い枠に囚われて断じる、それ自体がひどく傲慢なことなのだ。と須樹は思う。

「灰は俺達を巻きこむつもりはないんだろう。だからあの時たった一人で若衆を抜けたんじゃないのか？」

須樹は低く言った。

「だが、俺達にも俺達なりの矜持があるんだ。頭とは違う」

硬い須樹の声音がふと柔らかくなる。厳しい言葉とは裏腹に、そこにあるのは穏やかに包みこむような響きだった。灰がそれに目を瞬いた。

「灰、俺達を見くびるなよ。多加羅の者が皆、來螺に対して偏見ばかりを持っているわけじゃない。何よりも無実の者を見捨てることなどしたくはない。俺達は、自分のためにお前を助けたいと、真の犯人を捜し出したいと思っている」

灰は答えることができないまま、須樹の眼差しを受け止めた。鍛錬所を後にしたあの時、須樹が、そして仁識が彼に向けていた視線は、惑いと懸念と怒りに染まっていた。今須樹の表情に迷いはない。唐突に仁識が口を挟む。まるで放り出すような声音は、どこか面倒くさげにすら聞こえた。

「言わせていただくと、若様がやったことはおそろしく愚かで、向こう見ずで、独りよがりなことです。御自身では冷静に判断したと思っておられるようだが、傍から見たら短気もいいところだ」

「そこまで言わなくても」

ぼそりと治都が言うが、仁識は歯牙にもかけずに言葉を継ぐ。

「たとえ義憤や信条があったとしても、もっとやりようがあったでしょう」

「おい、いい加減に……」

「と、いうようなことは、まあどうでもいいとして」

あっさり仁識は言った。さすがに洪面で言葉を挟もうとした治都の顎が、かくんと落ちる。

「どうでもいいのかよ!？」

仁識は治都をつるさげに見やり、言葉を継いだ。

「あれだけの大見栄をきつたからには、犯人を捕えるだけの見込みがあるんでしょうね」

仁識はおもむろに腕を組む。真剣な声音になっていた。

「それすらなく一人で何とかすると考えておられるようなら本当の馬鹿者ですよ。愚か者よりも悪い」

灰は僅かに苦笑した。つけつけと言いつつ仁識の言葉はいつそ清々しいほどだ。

「ついでに言っておきますが、私達は若衆を抜けるつもりはないですよ。そこらは御心配なく」

どういふことか、と視線で問う灰に、須樹はにんまりと笑った。

「見回りはあくまでも若衆としての活動だったが、これからは剣を帯びず街衆として犯人を捜す。個人の自由な動きまで頭にとやかく

言えんだろ。……詭弁だがな」

これには灰も呆れた顔になった。ぬけぬけと自身の行動を詭弁と  
言い放った須樹は、どこか面白がるように灰の反応を見ている。

「ついでに真犯人の手掛かりを少し掴んだぜ」

治都が身を乗り出すようにして言うと、目を見開く灰に得意気に  
笑んだ。

「稽古の後に一緒に見回った連中で手分けして、二度目の火災があ  
った現場付近でもう一回街衆に話を聞いたんだ。今までは見回るば  
かりであまり詳しくも聞いていなかったからな。警吏けいりにも言いづら  
いことでも俺達には結構言ってくれたぜ」

「どんな……」

思わず言いかけて灰は口を噤む。須樹を見やり、そして仁識を見  
れば、どちらも人の悪い笑みを浮かべていた。

「いやあ、良かった。灰が俺達の協力などいらんと言ったらどうし  
ようかと思ったが。そうか、知りたいか。俺達も役に立てるとい  
うことだなあ」

「まったく、若様のために頑張った甲斐があったというものだ」

「まあ、一人でどうかするというなら、俺達だけで別に犯人を捜す  
ために動いてもいいと思っていたが。確かに力を合わせた方が効率  
もいい」

「しかしともに動くとなると、若様のお考えも聞きたいものです。  
まさか今日一日何もしていないということはないでしょうね」

わざとらしい会話を交わす須樹と仁識に、治都ばかりが呆気にと  
られた表情で首を傾げていたが、漸く察したらしく苦笑しながら灰  
に肩を竦めた。

ふと、沈黙が落ちた。須樹の柔らかな笑顔と、仁識の不敵な眼差  
し、そして治都の人の良い困惑顔を見やり、灰は俯いた。

拒絶したのは灰の方だった。背を向けたあの時、確かに須樹達ま  
で巻き込めないという思惑があった。しかしその裏に、所詮彼らも  
多加羅の者でしかないと、來螺の者に手を差し伸べるはずがないと



いう思いがなかったか　それまで接した彼らの人となりを考えれば、來螺の出身であるというそれだけで、灰を拒むことなどないとわかつていたはずなのに　多加羅に、そして來螺に必要以上に囚われていたのは灰自身だった。それを今頃になって気付かされた。

「ありがとうございます」

夜の底に沁みるように灰の声が響いた。ただ、それしか言えず、そして灰は微笑んだ。

「それでだな、どうやら犯人は幽霊らしいぞ」

書庫から灰の部屋に場所を移し、犯人の手掛かりを語りだした治都の、それが第一声である。きよとんとした顔の灰の傍らで、仁識が大きくため息をついた。

「阿呆が、もつと話しようがあるだろうが」

「阿呆とは何だ」

むつとした治都には構わず、仁識はすました顔で前に置かれた茶に手を出す。優雅とも言える仕草で茶を飲むと、僅かに感心したように眼を見開いた。

「この茶は何です？　金笹きんささの花茶かと思ったが風味が違つ」

「金笹の花茶に香葉を合わせました」

床に胡坐を組んで座る彼らの前におかれた茶を淹れたのは灰である。

「やはりその香葉とやらも薬草なのか？」

「いえ、香葉は薬草ではないですよ。秋に咲く山野草から作るお茶です」

思わず須樹が問うたのも無理はない。所狭しと書物が置いてある書庫では座る場所もろくになかったため移動したのだが、灰の部屋も奇妙な場所である。さほど広くもない四角い部屋は植物に溢れていた。壁には干しているのか、何とも知れぬ植物が吊るされている。床には幾つもの籠が置かれ、その中にも様々な草花が入れられているらしい。部屋に一つきりの棚には小さな壺が整然と並べられてい

るが、どうやらそれが薬草から作られる様々な薬なのだろう。

他愛のない会話に流れた場を再びもとに戻したのは、仁識だった。「さつきも言ったとおり、私達は外延部の人達、特に火災が発生した近辺で話を聞いてきました。まあ、それほど目新しい話があったわけじゃないが、少し面白いものがあつたんですよ」

「それが、幽霊ですか？」

怪訝に問う灰に、須樹がにやりと笑んだ。

「そうだ。俺達が見回りをしていた時から街に妙な噂があつただろ。黒い外套を着た不審な人物がうろついていたという」

黒い外套　ふと灰の視線が鋭くなる。

「噂自体は火つけの犯人というには決め手に欠けて立ち消えになっていたが、あの噂には続きがあつたんだよ」

「それが驚くなかれ、噂の人物はどうやら姿を消すことができるらしい」

治都が声を潜めて言う。またも灰の表情が怪訝なものになる。

「姿を消す？」

「ああ。二度目の火つけがあつた夜、火災現場で何人かの街衆が黒外套を見かけているんだ」

治都はどうやら件の人物を黒外套と命名したらしい。珍妙な呼び名に思わず顔を見合わせる三人には構わず言葉を続けた。

「どうやらそいつは野次馬の後ろから火が燃えているのを暫く見つめていたらしい。人が増えてくるとさりげなく立ち去つたようだが、さすがに不審に思った一人の街衆がそいつの後をつけたんだよ。で、細い路地に入つて行くのを追いかけて行ったら、黒外套は忽然と消えていた、と」

「見失つたんじゃないんですか？　ばれないように後をつけるには、そこそこ距離を開けないとダメですよね？」

問えば治都はおもむろに頷いた。

「そう思うだろ。だから俺達も話をしてくれた人にそう言つたんだ。だが、聞いてみると黒外套が消えたその路地は行き止まりだったら

しい。脇道もなく、人には到底越えられない壁に塞がれていた」  
しん、と場が静まる。

「で、幽霊……と？」

灰の静かな言葉に須樹は頷くと言った。

「そうだ。さすがに幽霊などという話は突飛なため、噂としても広がらなかったんだろう。不審な人物をつけた街衆がひどく怯えてあまり吹聴しなかったせいもあるだろうが……。このことは警吏も知らないはずだ」

街衆が警吏に伝えなかったのも無理はないだろう。そのような話を警吏が取り合わないことは目に見えている。だが、もしもその話が真実だとすると 黙り込んだ灰の思考を呼んだように仁識が言った。

「むろん、私達も幽霊が相手ではどうしようもないですが、この話が本当であれば面白いことになると思いませんか？」

灰は頷く。

今度は須樹と冶都が怪訝に黙り込んだ。犯人の手掛かりとはいっても、このような話は何の足しにもならないと、実は彼らは思っていたのだ。せいぜいが灰と会って話すための方便としか考えていなかった。しかし仁識だけが灰に伝えるべきだと強く主張したのである。

「なんだ、面白いことって。何かわかるか？」

須樹は横合いからぼそりと問う冶都に緩く首を振った。

「いいや、わからん」

二人のやり取が聞こえているのかいないのか、なおも仁識は考え込む風の灰を見つめている。

漸く言葉を発した灰の声音はひそりとしていた。

「もしもその話が真実であれば、犯人は姿を消す術を知っていたということですね」

「そういうことです」

何やらわかっているらしいやり取りに、冶都が口を挟んだ。

「おいおい、わかる言葉で言ってくれ。姿を消す術ってのはそりゃ何だ」

灰は伏せていた顔をあげると、冶都を、そして須樹を見つめ静かに言った。

「地下道です」

「地下道!?!」

須樹と治都の声が見事に重なった。

「そんなものがあるのか?」

「まあ、空を飛んだんでなければ、地下に潜るしか姿を消す方法はないでしょう。幽霊どころか土竜ですね」

大真面目に答えた灰に思わず須樹は脱力する。

「あ、いや、そうではなくてだな……」

「というのはまあ、冗談ですけど」

「冗談なのかよ!?!」

これもまた大真面目な灰の言葉に今度は治都が脱力する。ふと笑んだ灰だったが、鋭い眼差しになる。

「俺も詳しく知っているわけではないですが、多加羅の街には縦横無尽に走る地下道があると言われています。もとは採掘をしていた小さな山の上に街を築いたせいで坑道が地下に残されているとも、嘗ての支配者が戦時の備えとして築いたとも言われています。いくらなんでも坑道の上に街を築くということはないと思いますけど、本当に地下道あるとしたらかなりの規模のものだと思います」

「そんな話は聞いたこともないぞ」

「それはそうだろう。ほとんどの街衆は知らないはずだ。私が知っているのも昔玄士だった祖父の秘密文書を覗き見したせいだ。治水に関する文書か何かだったと思うが、地下道を水の道として有効活用できないかどうか、確かそんなことを吟味した内容だった。結局実現はしなかったようだな」

「お前、覗き見って……そんなことをしてたのか……」

呆れたように治都が呟く。

「ああ、記憶もかなり曖昧だったから確信はなかったがな。だが若様なら知っているかもしれないとは思っていた」

「まさか灰もそんな方法で地下道のことを知ったんじゃないだろうな」

「俺が知っているのは秋連師匠……俺を預かってくれている星見役の人に教えてもらったからです。おそらく地下道のごく一部の者が知っているだけで、その全容を把握している人も少ないのでしよう。ただ、街のいたるところにその地下道への入口があつて、地下を通つてかなりの範囲を行き来することができるのだとか。おそらく噂の人物が姿を消した場所には地下道への入口があつたんでしよう」

仁識が須樹と治都に向き直り言った。

「いいか、ここが肝心なんだ。噂の黒い外套の人物が火つけの犯人だとすると、そいつは普通の街衆ならば知らないはずの地下道の存在を知っていた。ここから導き出されることが何かわかるか？」

「まず、犯人は來螺らいぶの者ではあり得ない」

須樹がぼつりと言う。多加羅の街衆である彼らですら知らないことを、年に一度興行で街の外に訪れるだけの來螺の街衆が知っているはずがない。

「そして、犯人が多加羅の者であるとしても、地下道の存在を知っている者は限られている」

呟くように言ったのは灰だった。

「じゃあ、地下道を知ってる奴を探し出したらいいなだな！」

勢いづいて言った治都だったが、それには仁識が無造作に答えた。「それは無理だな。どれほどの人が知っているか、そもそも誰が知っているかもはっきりわからない」

「だが時間はあまりないだろう。丈隼たかはやを助けるためにはどんなに小さな手掛かりでも追わないと手遅れになるぞ」

「だが闇雲に追つても、かえつて時間ばかりが無駄になるだけだ」

須樹の言葉にもにべもなく返した仁識は、黙りこんでいる灰へ視線を投げた。暫し考える素振りで見つめ、おもむろに問うた。

「若様、何か考えでもあるんですか？」

それまで何事かを考え込むように俯いていた灰が顔をあげる。自分を見つめる三人の顔を見回し、笑んだ。穏やかでありながら強かに 獰猛に。息を呑むようにして三人は黙りこむ。一瞬にして空気が変わった、と須樹は思う。まるで吸い寄せられるように灰の顔から目が離せない。

「祭礼が終われば審議が開かれ、おそらく丈隼の罪が確定するでしょう。祭礼が終わるまでに、俺は何としても犯人を捜し出したいと思っっています」

「だがこれだけの情報でどうやって……」

言いかけた須樹は灰の視線に黙る。

「焙りだします」

「どうやるんです。さっきも言った通り、地下道の存在を知っている者が誰かも定かではない。わかったとしても、一人一人に問うわけにもいかないでしょう。そもそも噂の黒い外套の人物が犯人かどうかもわからないんですよ」

「そうですね。だが、犯人である可能性は高い。だから、博打を打ちます。一か八かの賭けですが、うまくいけば犯人が誰かがわかるでしょう」

しん、と場が静まった。息をつめるような静寂に灰の淡々とした声音ばかりが響く。

「俺は明日來螺の宿営所に行ってきます。犯人を焙りだすには彼らの力が必要です」

「どういうことだ？」

「若様、さっきから聞いていると犯人の目星がついているように聞こえますが、心当たりでもあるんですか？」

あっさりと灰が答えた。

「はい。今まで推測でしかなかったけど、今の話で大分確信が持てました」

「つまり、若様の方でも何か掴んでいるんですね」

「灰、お前が何を考えているのか俺達にも話してくれないか」

須樹の言葉は真摯に響いた。その真剣な面差しを暫し見詰めた灰は、小さく頷く。

「俺の話をする前に皆にはわかっただけでいてほしいと思います。おそらく、真の犯人は容易く捕えることのできる人物ではありません。下手に関わると危険なのはこちらの方です」

灰は怪訝な表情の若者達をゆるりと見回し、問うた。

「それでも犯人を追う気がありますか？」

「愚問ですね」

「俺達の気持ちはもう先程伝えたはずだ」

「そつだぞ。俺達を信じろよ」

迷いのない答えに、灰は目を伏せる。確かに愚問だったのだろう。それでも問わずにはいられなかった。

「先程の地下道の話ですが、秋連師匠から聞いた時、なぜこれほどまでに人々がその存在を知らないのか、疑問に思いました。まるで秘されているかのようだ」と

低く灰は言う。

「おそらく地下道自体は今の多加羅惣領家がこの地を支配する前からあったでしょう。戦時の備えとして築かれたとしたら、その当時には秘する意味もあつたと思います。でも今では街衆に秘する意味はあまりありません。隠すべきものではないと思います。だが、不自然なほど存在が知られていない。でも考えればそれも当然のことだったのかもしれない」

街の下を縦横に走る地下道　まるで街の血管のようなそれを、

人々が知らないわけ　灰は確信を込めて言う。

「地下は神殿の領域です」

暫しの沈黙の後、仁識が鋭く呟いた。

「墓所か」

灰は頷く。

「神殿の墓所は神聖な場所であるがゆえに、聖職者以外の立ち入りが禁止されています。広大な墓所を地下に築き、それを支配する神



殿は、言ってみれば大地の司です。何人たりともその権威を冒瀆してはならない。仁識さんが覗き見たという治水の計画も、おそらく実現されることは到底不可能なものだったのでしよう」

こんなところにも帝国の支配の衝がある。神殿は人々の精神のみならず、人々が生きる大地をも縛る。人の命が土に還るは理、しかしそれにより人を支配するは、やはり人の所業である。神ではあり得ない。作為　神とは所詮、作為なのだ、と灰は思う。

「おそらく多加羅の地下道は神殿に連なる不可侵の領域に属するものとなっているのでしよう。たとえ墓所を侵すものではなくとも、みだりに人が踏み込むことは許されない状況になっているのだと思います。存在自体が秘されているのも無理はない。もしかすると地下道自体が神殿の管轄として管理されているのかもしれない」

束の間、張り詰めた沈黙が辺りを覆った。

「つまり、若様は真の犯人は神殿に属する者だと考えておられるのですか？」

灰は頷かず、ただ正面から仁識を見つめる。その眼差しがすでに答えになっていた。忽然と姿を消したという件の人物が、もしも地下道を利用していただけとしたら、ただその存在を知っているだけではない。自由に街を行き来することができるほどにその構造を熟知しているということだ。神殿の不可侵の領域である地下道をそこまで知っている人物が何者であるのか、答えはおのずと知れる。

「おそらくそうだとは思っていましたが、ただ、俺が知っていることだけではどうしても決め手に欠けていた。地下道の話聞いて漸く確信が持てました」

「なぜ灰は神殿の者が犯人だと思っていたんだ？」  
当然の疑問である。

「若様が知っていることを、私達にも教えてもらえるんでしょうね」  
仁識の問いかけに灰は頷くと、静かに語り出した。  
密やかに夜は深まっていった。

「客は帰つたのかい？」

問う声に、灰は振り返つた。厨房の入口に、壁に靠れるようにして立つ秋連の姿があつた。茶器を戻しに来た彼を待つていた、というわけでもないのだらう。秋連の手には今しがた書庫から持つて来たらしい書物がある。通りすがりに厨房からもれる光に気付いた、というところか。秋連は何を思ふのか、穏やかな眼差しで少年を見つめるばかりだ。

おそらく秋連は何かを気付いているのだらう。今回の件ばかりではない。峰瀬みなせに託されたことについても　いつだったか、惣領の言葉を伝えに来た弦げんとの会話を秋連には聞かれているのだ。心配をかけているという自覚が灰にはある。それでも、この同じ場所で闇の中、壁を隔てて対峙した時と同様に、秋連に今起こっていることを言う気にはなれなかつた。

秋連は峰瀬の命により灰を預かつているに過ぎない。それが意味することがわからぬほどに灰は幼くはなかつた。灰が陥っている状況、それを知れば秋連は灰に手を差し伸べるかもしれない。それはすなわち、秋連に与えられた役割を逸脱する行為だ。灰と稟を温かく迎え入れてくれた秋連に、これ以上の負担をかけることはできない。

不意に灰は帰り際に仁識が残した言葉を思い出す。灰は若衆を抜けたことを秋連達、星見の塔の住人には言っていない。そのことに須樹達は気付いていたらしい。この先どうするのか、と問うたのは須樹だったが、いつか話さねばならないと答えた彼に、仁識は言った。とりあえず今は無用の心配をかける必要もあるまい、若衆を抜けたことは言ふな、と。

灰は信頼と尊敬すら抱く己の師に向き合つた。

「三人は先程帰りました」

「そうか。君も早く寝た方がいい」

「はい」

答えて秋連の横をすり抜ける。しんと冷えた廊下を歩くと、その

背に静かな声が投げかけられた。

「なぜ、と問えば、君は答えるのだろうか」

呟くような声音だった。一体誰への問いかけなのか、無論この場にいるのは灰しかないのだが、それでも少年はそう思う。一体誰への

「問おうともせぬ者に答える者などいようはずもないな」

秋連は静かに言うと、立ち止ったままの灰を追い越し、廊下の端にある彼の部屋へと向かって行った。

「お休み」

たった一度振り返り言うと、秋連は静かに扉を閉ざした。

灰は暫し立ち尽くす。足元から這い上がる冷気が、ゆっくりと熱を奪っていった。

祭礼を一日後に控えたその日は、朝から珍しくも小雨が煙るように降っていた。濡れるのが気になるほどでもない、肌を撫でるような優しい雨である。

灰が再び來螺の宿営所を訪れたのはまだ昼にならぬ時分である。道すがらに彼の前に姿をあらわした弦は、調べた結果を淡々と告げた。容易に調べられることではなかったろう。どのような手段で調べたのか、それは灰にもしかとはわからなかったが、聞いて弦が答えるとも思えなかった。

灰が來螺の宿営所に行くことを言葉少なに告げても弦はとりたてて何も言おうとはしなかったが、ただ一人で行くことについては僅かに懸念を見せた。せめて自分もともに、という弦の言葉を灰は認めるわけにはいかなかった。

昨日と同様に幕舎で麗楊弓の稽古に出ている叶は、姿を見せた灰が開口一番に言った言葉に目を見開いた。灰は、宿営所の責任者との面会を求めたのである。

そして店舗よりさらに奥まった場所にある小さな幕舎の一つに、

今灰はいた。生成りの幕舎はいかにも実用を重視したものらしく、内部はまるで小さな執務室のような様相を呈している。たった一人卓前の椅子に座り、待つこと半刻ほど、やがて近づいてくる足音を灰は聞いた。かなりの人数である。

幕舎に入って来たのはいずれも壮年の男性が数人と叶、そして鍛錬所まで来ていた自警団の若者達である。中心にいるのは五十半ばに見える、がっちりとした体格に厳めしい風貌の男だった。自警団の中でも高い地位にいるのだろう、落ち着いた眼差しの奥には人を射抜くような鋭さがある。立ち上がった灰の前にその男が進み出た。

「私が宿営所の代表者、采<sup>さい</sup>だ」

「俺は……」

男は手を振って灰の言葉を遮る。

「君のことは知っている。君の母上もな。大きくなったものだ」  
灰を凝視するその眼差しが、ふと細められる。まるで少年を透かして、その背後に何かを見ようとでもするかのようなそれは、しかし一瞬だった。

「そして今では多加羅惣領家の若君と聞く。そのような方が一体私にどのような用があるのか」

「文隼のことです」

叶や自警団の若者達の表情から察するに、すでにこの采という男は大方の事情を聞いているのだろう。それでも灰が躊躇いもなく出した名に、男の表情が鋭くなる。

「こちらの若者達が先日とんでもない御迷惑をおかけしたようだ。だが、文隼の件はあくまでも來螺の問題、多加羅惣領家の方に口出しをしていただきたくはない」

硬質な声音だった。灰にとっては采の反応はむしろ想像していたとおりのものではあったが、無意識に一瞬すつと息を吸う。ここで失敗は許されない。

「俺がここに来たのは多加羅惣領家の者としてではありません。多

加羅惣領家はこのことには関知していません」

「ほう」

「俺が今日ここへ来たのは、あくまでも個人としてです。文隼を助けるためにどうしても皆さんのお力をお貸しいただきたい」

あくまでも無表情な采はにべもなく言った。

「聞けば君は文隼を救うために真の犯人を見つけ出せばいいと言つたらしいが、まさか我々に犯人捜しを手伝えとでも言うつもりなのか。我々とて文隼の身を案じぬではない。だが子どもの戯言に付き合つほど暇でもないのだ。この興行には我々の生活がかかっている」

采は灰が若衆に背を向けたことも聞いて知っているのだらう。言葉には多分に皮肉が込められていた。後先考えずに若衆を飛び出し、拳句の果てには來螺を頼るか、と言葉は告げている。采の背後でもどかしげな葉の表情がちらりと見えた。灰はまっすぐに采と向き合つと言つた。

「真の犯人の目星はついています」

采が僅かに目を見開いた。

「ただ犯人を焙りだすためにはどうしても來螺の力が必要なのです。葉が驚きの表情を浮かべる。それは自警団の若者達と、采の背後に控える男達も同様だった。

采ははかるように灰を凝視していたが、小さく嘆息すると苦い声音で言った。

「話を聞こつ」

采と向かいあつて座り、灰はこれまでの経緯を告げた。丈隼が多加羅の街で灰を捜していたこと、そしておそらくはそのために真の犯人に罪を被せられたこと、丈隼を告発した少年の存在、不可解な黒い外套の人物、そして多加羅の街の下を走る地下道、その秘される理由

一見して繋がりのない点であるそれらを語り終え、灰は采を見た。傍らでは息を詰めるようにして叶達が話を聞いている。

「ここから先はあくまでも俺の推測です」

前置きすると、采は無言で頷いた。腕を組んで話を聞いていた采の表情にはとりたてて変化はなかったが、おそらくめまぐるしく思考を巡らしているだろうことは灰にもわかった。

「俺ははじめ、真の犯人か、あるいは犯人と共謀する者が丈隼を告発したのだと思っていました。結果として、それは間違っていたわけですが、泉に告発をさせた人物が火つけの犯人であるという考えに変わりはありません。どのようにして丈隼が來螺の者であることを知ったのか、確信が持てずにいましたが、地下道が神殿の領域であると考えれば答えが出ます」

「犯人は神殿の者だと?」

灰が言うよりも先に采が言葉を発した。灰自身はそこまで言うてはいなかったのだが、やはり地下道の一件から采も同じ結論に達したのだろう。灰はそれに頷き、言う。

「おそらく犯人は丈隼と俺が会話しているその現場を見ていたんだと思います。丈隼が俺に声をかけたのは神殿がまさに目の前にある道でした」

驚くほどに単純なことだったのだ。丈隼が來螺の者であることを知れる場合がたった一つある。それは、灰と丈隼の会話を聞いている場合だ。

「思えばあの時丈隼は俺を見つけて興奮していました。それは俺自身も同じだったのだと思います。周囲にまで目を配る余裕はなかった。余所者に厳しい多加羅で、それも神殿という聖域に国境地帯の者がいれば嫌でも目についたでしょうね。誰に話を聞かれていてもおかしくはなかった。犯人がどのようなようにして丈隼が来螺の者であることを知ったのか、それを考えた時真つ先に浮かんだのが丈隼との会話を聞かれたのではないか、ということですよ」

「だが、それはあくまでも推測に過ぎん」

「ええ、そうですね。その時点では俺も神殿の者が犯人だとは思っていませんでした。ですが、丈隼への告発がなぜあの時期にされたのか、そのまま身を潜めていれば犯人は捕まらなかったはずですよ。それにも関わらず犯人が丈隼の告発という形で突然に動いているのはなぜなのか。それを考えた時、やはり神殿の内部に犯人がいるのだと思いました。」

「なぜだ？」

「実は丈隼が告発された日の前日に、惣領家から神殿に正式な抗議がされています。聖遣使しょうけんしが、多加羅惣領家には無断で街に潜り込んでいることが明らかになったためです。聖遣使が如何なる目的で多加羅に潜り込んだのかは定かではありませんが、おそらく多加羅の神殿の司祭にとっても、寝耳に水のことだったのではないかと思います」

話の道筋がつかめないまま、しかし采は灰の話に聞き入る。

「通常聖遣使への任務は帝国中枢から直接に下されると聞きます。

そうであれば東方の辺境とも言える多加羅の神殿がそれを知らされていないかっただろうと考える方が自然です。多加羅惣領家の抗議を受けて、おそらく神殿は聖遣使がどのような任務を帯びて街に入り込んだのか調べたことでしょう」

「それが一体どういう関わりがあるのだ」

焦れたように采の背後に控えている年配の男が言った。

「たとえば、聖遣使の任務が多加羅の街で発生している火災につい

て調べよ、ということであればどうでしょう」

灰はすつと視線を下げる。どこか焦点の定まらぬその先に何を見るのか、声ばかりが静かに響いた。

「聖遣使は異端を狩る者、もしも火災を調べるために多加羅に来たのであれば、火つけは異端の能力を有する者が起こしたことであると見做されていたのではないでしょうか。邪法を操る者、あるいは、けみし怪魅師……」

そうであるならば、と灰は内心で考える。そつたつ聡達が外延部をうろついていたのも頷ける。彼はおそらく火災が起こった現場を調べていたのではないだろうか。

「そう考えれば一連の火つけの騒ぎでも納得のいく部分があります。どのようにして犯人が火を起こしたのか、それが最も不可解なことでした。犯人が火を生じさせる何かしらの術を行使できる者であれば、誰にも気付かれずに火災を起こすことは容易かつたでしょう」

だが、それで人が死んだのだ。

「これこそ、推測の域を出ない不確かなことです。ですが、神殿の内部にいる何者かが異端とされる能力を有し、その力で火災を起こしていたとすれば、聖遣使が自らを追っていると知った時の焦りや狼狽はどのようなものだったかと思えます」

聖遣使の異端への残忍さ、それを神殿に属する者であればなおさら知っていただろう。

「そして聖遣使の目を逸らすため、真の犯人は別の者に罪をなすりつけることを考えた。火つけの犯人がいかなる術も行使できないことが明らかとなれば、聖遣使も多加羅の街から去ると考えたのかも知れません。そして、犯人に仕立て上げるにはいらい來螺の者が最も適していた」

「そのようだな」

采が無然と呟く。

「犯人はそこで俺と文隼のことを思い出したはずです。会話を聞いていたのであれば、文隼が俺を捜して街を一日中うろついていたこ



とも、來螺の一員であることもわかっていたでしょう。そして來螺の者が犯人であれば、どれほど無実を訴えても多加羅の街衆が耳を貸さないだろうことも、來螺が一人の青年よりも興行を優先するだろうことも見越していたのだと思います」

「確かに聞けば納得がいく。しかしそれとて推測の域を出ることではない。聖遣使が真実火つけの犯人を調べるために多加羅に来たかどうか、わかりようがない」

「はい。ただ、もう一つ神殿の者が犯人であることを示す事実があります」

間を置かずには灰は答える。

「文隼を告発した泉は、見返りとして仙境香せんきょうを受け取っています。仙境香を手に入れることができる場所は限られています。正直に申し上げると、來螺の者の中に犯人がいる可能性も考えました」

采は呆れたような表情を浮かべたが、瞳に面白そうな色が過った。正直過ぎるのではないかと、と背後に控える一人がぶつぶつ呟く。

「だが、なぜ泉なのか。泉に仙境香を手渡した人物は、泉の母親の病状を知っていたに違いありません。來螺の者では知りようもないそして、おそらく知ることができれば慈恵院じけいいんに関わりのある者ではないかと思っただのです。慈恵院は神殿の直轄ですから。泉は何度も慈恵院に母親の病状を訴えていたようです。そこでいかにしてか、泉の母親の状況を知ったのではないかと考えました」

「またも神殿、というわけか」

「はい。ですからある人に頼んで、神殿で密かに、たとえば修行の場などで仙境香が使われるようなことがないかどうか、調べてもらいました。結果はつい先程わかったのですが、特に年齢の若い修行者に対して使われることもある、ということ。無論修行者にはそれが何かは知らされないようですが」

一同は灰の言葉に目を剥いた。少年は何でもないことのように言っているが、これはとんでもない内容である。神殿のおそらくは暗部、決してあきらかにはされないのであるう一面を灰は晒してみせた

のだ。

「すべてを考えあわせると、犯人は神殿の内部にいて、それほど高位ではないにしても、そこその地位にいる者だと思います。泉の話によればまだ若い者のような雰囲気だったそうですが、聖遣使の一件を知っているとすれば見習いの司祭などということではまずないでしょう。おそらくそのことを知っているのは神殿でもある程度の地位以上の者だと思います」

凍りつくような沈黙が辺りを満たした。それを破ったのは自警団の若者の一人である。

「許せねえ！！何が神の僕だ！汚ねえことやりやがって！！」

それにちらりと目をやり、采は苦々しく言った。

「神殿の内部の者、それもそれなりの身分を有する者が犯人だろうということはわかった。だが、それならばなおさらに犯人として捕えることなど無理ではないか」

「ですから、來螺の皆さんのお力を借りたいのです」

采は厳しく灰を見つめる。それを臆することなく見返す少年に何を思ったか、やがて小さくため息をついた。ふと、視線を虚空に投げると言った。

「丈隼は自警団の中でも有望な青年だ。幼い頃から知ってもいる。私とて何とかして助け出したいという思いはあったのだ。だが、多加羅の警吏に捕われ、無実を明らかにする手立てもなく半ば諦めてもいた」

声音の底に、静かに滾る怒りがある。呟くように続けた。

「神殿か……神に仕える者が無実の者を陥れ、命を奪うか……」

采は再び灰を見据える。

「我々に丈隼を助けることができると言ったな。何をすればよい」「神殿への供物を。來螺の代表として、芸を納めていただきたい」「采が驚きを露わにする。さしもの彼も、あまりに予想外な少年の言葉に表情を繕うことができなかつたらしい。

「供物だと？」

「はい、祭礼の一日目と二日目には多加羅所領内の街や村が神殿に様々な供物を納めます。金品であったり作物であったりもしますが、多くは街の特産であることが多い。來螺の特産といえば名だたる芸能でしょう」

言葉に秘められた真意が読めぬまま、采は睨みつけるようにして灰を見つめた。

「そのようなことは到底できぬ！」

言ったのは采の背後に控える一人だった。來螺は国境地帯の街である。帝国の支配を受けず自治を誇りとする彼らが、多加羅の支配下の街と同様に神殿に供物を捧げるなど、それこそ前代未聞である。何より彼らの矜持がそれを許さない。

だが、厳しい面持ちの采は灰に問うた。

「芸というが、何を納めよというのだ」

灰は迷いなく答える。

「穂ほの原はらを」

采が僅かに目を見張った。その場に居る誰もが、少年の言葉に息を呑んだ。

穂の原とは

かつて国があった。実り豊かな穏やかな国だったという。君主は誠実にして徳高く、愛する許婚もあった。人々は国の繁栄を信じて疑わなかった。しかし一人の男の裏切りにより国は一夜にして滅びることとなる。男は君主が最も信頼を寄せる腹心の家臣であった。男は敵国と通じ、その兵を率いて突然都に攻め入ったのである。都は火の海に沈み、国は滅んだ。そして男は君主を残虐極まりない方法で処刑する。その後男は裏切りの報償として、己が仕え裏切ったその国の新たな君主として君臨することとなる。

非道な方法で君主となった男に人々は従わず、男は圧政で彼らを支配した。やがて時がたち、人々が嘗ての豊かで穏やかな生活を忘れかけた頃、旅芸人の一座が都を訪れる。その見事な芸は人々の噂

となり、男の耳にも入る。男は一座を城に招き芸を求めた。一座は求められるままに芸を披露する。

それは歌曲と舞により、豊かな実りと愛する者との幸せな生活、そして国の繁栄をあらわしたものだ。見事な芸に人々が見惚れる中、その惨劇は起こった。朗々と詩句を歌う声にあわせて舞っていた美しい舞姫が男に近付き、不意に隠し持っていた短剣で彼に切りつけたのである。舞姫は嘗ての君主の許婚であった。復讐だったのである。深い傷を負いながらもすんでのところで一命を取り留めた男は一座を尽く捕え処刑する。

やがて人々は知る。一座が披露した詩句の裏に隠されたもう一つの意味を。表では豊穡と愛情、国の栄えを歌いながら、裏では罪なき者を陥れた男への恨みを、すべてを奪い燃やしつくした紅蓮の炎への怒りを、そして必ずや憎むべき裏切り者を追い詰め復讐を遂げるのだという誓いを込めていたのである。精巧にして緻密な隠れ歌であった。

一座の復讐は遂げられず、しかし男の圧政に苦しむ人々は密かにその隠れ歌を守り継いでいく。いつの日か、必ずや果たされるべき誓いを秘めて

やがてその男がどうなったのか。一説には舞姫から受けた傷に長く苦しみ死んだとも、詩句の呪に心を病み発狂したとも伝えられるが、真実は定かではない。ただ隠れ歌は時を超えて歌い継がれ、いつの頃からか嘗て一座が披露したように歌と舞による一つの芸として確立する。

その芸の名を、穂の原、という。

暫しの沈黙の後、采はにやりと笑った。

「剣呑だな」

「はい」

「神殿を恫喝するか」

「正確には、犯人を」

ふん、と采は鼻を鳴らした。

「だが、神殿が我らに対してどのような対するか目に見えるようだ。その上穂の原を披露したところで犯人が焙りだせるとも思えぬな」

「ですから仕掛けを込めます」

「仕掛けだと。それはどのようなものだ」

それまで打てば響くように答えていた灰がふと口を噤んだ。迷うようにちらりと叶達に視線を投げ、そして言った。

「申し訳ありませんが、人払いをしていただけですか」

「皆には聞かせられぬことか」

「はい」

采は周りに視線を投げる。それだけの動作で人々を幕舎の外へと出した。不満をありありと浮かべる顔もあったが、采にたてつく者はいない。ただ叶一人が、氣遣うように灰へと視線を投げていた。

二人きりとなった幕舎の中、灰と采は向かい合う。口火を切ったのは采だった。

「君が言うように神殿に供物を奉げれば、來螺は相応の危険を背負い込む。神殿との関係が険悪化すれば、来年からの興行も危ぶまれるな」

「それはわかっています。ただ、全ての危険をそちらに負わせるようなことをするつもりはありません」

「君に一体何ができるといふのだ」

苦々しく言う采に、あくまでも淡々と灰は答える。

「ただ穂の原を披露しても、おそらく犯人は明らかにはならないでしょう。確実に犯人を追いつめるには、犯人にしかわからないものを見せる必要があります」

「犯人にしかわからないものだと？」

「はい。確率は半々です。犯人がそれを自分への伝言だと察するかどうか。もしも俺の見込みが違えれば、失敗です」

灰の声音が低く沈んだ。

「一体……」

「犯人がもしも俺の見込みどおり異端の力を有する者だとして、穂の原の中に犯人にしかわからぬ術が込められていたらどうでしょう。たとえば幻の炎、常人には見え、しかし異能を有する者にだけ見える不可視の現象」

采は目を見開いた。張り詰めた空気に、灰の音が落ちる。

「來螺が神殿に芸を納めるだけでも異例のこと、そして明らかに火つけの犯人への怒りを示唆している穂の原に、己にしかわからぬ異端の術が込められていたら、犯人はそれが明確に自身への伝言だと知るでしょう。そしておそらくは追い詰められる。火つけの犯人が異能者だということ、己の異端の力が知られているのだということを知るはずです。一体何者がそのような術を自らに送ったのか、調べずにはいられないでしょう」

「そして焙りだす、か？」

僅かに采の声が掠れていた。その動揺を、灰は静かに見やる。

「だが、異端の術などどのように込めるといふのだ。そもそも神殿への供物にそのようなものを潜ませるなど、正気の沙汰ではないぞ。明らかとなれば無事では済まぬ」

「無論、そうです。だが、犯人はそのような術が込められていることを口に出すことはできないでしょう。出せば己も異能であること晒すことになりますから」

「だが、聖遣使までも出入りしているならば、犯人のみならず異端の術が込められていることを気付かれはしないか。神殿には条斎士じょうさいしもいるだろう。気付かぬという保証はない」

「そうですね。でも來螺は国境地帯の街です。帝国の支配下にはない。帝国内部ならばいかなる異端も許されることはありませんが、国境地帯の者までも異端として狩ることはできません。……少なくとも、即座に動くことはないでしょう」

ふと采は沈黙する。油断のない眼差しで目の前の少年を見つめ、ぼつりと言った。

「大したものだ。力を貸してほしいと言いながら、我々を利用する

か

灰は答えなかったが、采はその静かな面に何を見たのか、淡々と言葉を続けた。

「一つ大きな問題がある。誰が異端の術を込めるかだ。言っておくがこの興行には術使いは来ていない。この地に連れて来るにはあまりに危険だからな。どうする気なのだ」

「先程も言ったように、俺は來螺の方だけに危険を負わせるつもりはありません。異端の術は俺が込めます」

一呼吸の間を置いて、灰は告げた。

「俺は怪魅師けみしです」

采の顔から表情の一切が抜け落ちた。内心にどれほどの驚きを感じていても、それを窺い知ることにはできなかった。來螺は様々な芸が集まる土地であり、白沙那帝国はくさなでは異端とされる術を行使する者もいる。しかし怪魅師は來螺においても稀有な存在なのである。

やがて采は言った。

「目論見がすべて外れたらどうする。犯人を明らかにすることができず、ただ我らへの咎のみが残ったら」

「その時は俺を異端として神殿に突き出せばいいでしょう」

淡々と灰は言った。そこには皮肉も揶揄もない。自然な声音だった。

「己の命を我らへの証に差し出すか」

「死ぬつもりはありません。たとえ異端として突き出されても、むざむざ捕まるつもりはありませんので、御心配には及びません」

素気ない、傲慢なほどの灰の言葉である。采は呆氣に取られたように灰を見つめ、不意に笑んだ。

「面白い。おそろしく無謀だが、やるだけの価値はありそうだ」

凄みを帯びて少年へと向けられていた笑みが消え、采の眼差しがひどく真剣なものとなる。

「明日、我らの最高の芸を多加羅の人々にお見せしよう」

## 28 (後書き)

ん?? 推理もの?? いえいえファンタジーです。

亀の歩みですが、ようやくここまでできました。第二章が長いです。

まだ続きますが、おつきあいください。

では、今後ともよろしくお願いいたします！



泉せんの朝は早い。その日も彼は陽が昇るのと同時に起き、井戸へと水を汲みに行った。何気なく見やった空は夜の気配の濃紫を宿しながら、水のように澄んでいる。祭礼の日は晴れそうだった。

祭礼の時ばかりは小学院も休みである。妹がはしゃぐのだからととりとめのない思いにとらわれ、彼は小さく笑う。彼自身は小学院に行かなくなって久しい。父親が生きている頃から貧しい生活ではあったが、母親が病に倒れてからは毎日の食事にも事欠くほどだ。彼自身も少しでも家計を支えるためにこの季節には金笹きんざさ農家の収穫の手伝いをしている。厳しい労働にも関わらず給金は微々たるものだったが、幼い子どもを雇ってくれるところは他になかった。

その仕事も祭礼の三日間は休みだったが、泉は祭礼を楽しむ心地にはなれなかった。無論、彼とて他の子どもたちと同様に祭礼を心待ちにしていた頃はあったのだ。父親がいた時には家族で街に繰り出し、祭礼三日目の若衆わかしゅうの剣舞しるまひは必ず見に行ったものだった。しかしそのような思い出も、泉には遠く感じられた。

( 去年も剣舞を見なかったな…… )

ぼんやりと思ひながら水の入った重い桶を抱え、ふと振り返った時、その姿が目に入った。近づいてくる人影がある。まじまじと見やると、それは灰かいだった。二日前に突然にあらわれた相手である。思わず立ち尽くす彼の前まで来た灰は、片手に持っていた布嚢を差し出した。

「約束の薬だ」

無言でいる泉には構わず、灰は言葉を続けた。

「三種類ある。痛みを抑えるものと精神を安定させるもの、それから夜に眠れない場合に飲むものだ。最初の二つは一日に四回、もう一つは場合に合わせて服用すればいい。一回に飲む量や服用の仕方は紙に書いておいた。これだけの量があれば当分の間はもつはずだ」

泉は桶を足元に置くと、布囊を受け取り中を覗いた。灰が言ったとおり三つの素焼きの壺と、説明を書いているのだから巻紙が入れている。泉は茫然と灰の顔を見上げた。

「もう来ないと思つてた。薬のことだつて口先だけのことだと……」  
呟くように泉は言う。灰は僅かに首を傾げた。

「麻薬は捨てたのか？」

小さく首を振る泉に、灰は何も言わなかった。

灰が突然に泉の元を訪れたあの後、泉は何度も仙境香せんきやうを捨てようとしたが、一時でも母親に笑顔をもたらしたそれを捨てることはどうしてもできなかった。そして時が経つほどに灰の言葉は空々しく、その存在自体がまやかしのように思えてきたのだ。

「お前の言うことがだんだん信じられなくなつた。もしかして警吏けいりが突然来て、俺のこと捕えるんじゃないかと思つてた」

「そうか」

泉は穏やかな灰の言葉にちらりと視線をあげる。

「怒らないのか？」

「どうして怒る必要があるんだ？」

逆に問い返されて泉は答えに詰まる。それに灰は笑んで、踵を返した。そのまま去つて行く姿に、突然泉は焦燥を覚える。その感情のままに声をかけていた。

「なあ、お前おまへ來螺らいの街衆まちしゆうなのか？」

捕まつた來螺の若者を知つていて彼を助けるのだと言つた灰を、來螺の者だと考えたのは無理もないことだろう。もしそうならば祭礼が終われば灰は來螺へと帰るのだろう、と泉は考える。もう会えないのかもしれない。不意にそう思い、出た言葉だった。なぜそんなことを思つたのか、泉自身にもわからなかったが。問われた方は僅かに沈黙した。束の間考えるように俯き、小さく苦笑する。

「さあ、どうだろうな」

呟くような答えを残して灰は去つて行つた。泉はそれを立ち尽くして見送る。手が白くなるほどにしつかりと布囊を握りしめていた。

泉の家から一区画離れた場所で灰は立ち止まり、ゆるりと視線を横に流した。そこには、家壁に靠れるようにして立つ仁識にしきの姿があった。泉との会話が聞こえるほどの距離ではない。しかし灰が泉に布囊を渡したその場面を見ていただろうことは間違いないかった。

灰が仁識の存在に気付いたのは、泉の家へと向かう途中、大通りを下り外延部に近づいた辺りだった。鍛錬所たんれんじょへ向かう途上で灰の姿を見かけたらしい仁識は、そのまま灰の後をつけてきたのだ。なぜ彼が灰に声をかけなかったのか、しかとはわからずとも想像はついていた。

灰は一昨日星見ほしみの塔を訪れた仁識達に、全てを語っていない。それにおそらく仁識は気付いていたのだ。灰が密かに何を考え動いているのか確かめたいという思いが仁識にはあつたのではないかと、灰は考える。もつともそれがわかつても言えぬことはあまりに多い。「あれが告発した少年ですか」

後をつけていたことを知られたにも関わらず悪びれずにももつとも灰を待ち構えていた様子から、端から姿を隠すつもりはなかったのだらうことは想像がつくが、仁識が言った。問いに頷いた灰を見やり、仁識は鼻を鳴らした。

「須樹すき達は一昨日の話で納得していたようだが、私は違う。若様は告発した少年を警吏に突き出すのは酷いことだとお考えのようだが、たかはや文筆を助けるためにはそれも必要でしょう。少なくとも警吏には、告発が虚偽であったことを知らせるべきだと思いますね。來螺の力を借りて何をなさろうとしているかは知らないが、いらぬ情けで結局何も救えぬということになりかねない」

灰が仁識達に伝えたのは、犯人が神殿の内部にいるだろうという根拠、そして犯人を焙り出すために來螺の力を借りるということだけである。真実を明かさぬことへの不満を、灰は仁識の言葉から感じ取る。

「それに、若様の行為はあの少年の救いにはならない」

「……何が言いたいんですか」

「先程あの子どもに渡していたのは、母親のための薬でしょう」

やはり読まれてはいる。灰は仁識や須樹達には泉の名も、住んでいる場所も伝えてはいない。そして彼が薬を渡すつもりでいることも黙っていたのだ。殊更に言うべきことも思えなかつたせいである。

「若様は薬を渡してどうなさるおつもりですか。多加羅にはあのような少年は数多い。ただ一人救うだけでは根本的には何も変わりません。貧困には理由がある。構造を変えないことには、真実の救いにはならない。一回薬を渡したところで結局、また元の状態に戻るだけです。それともあの少年にだけ薬を渡し続ける気ですか。それなら、結局若様の自己満足、ということですよ」

「俺があの子に薬を渡したのは自分の気持ちのためです。そういう意味では確かに自己満足ですね」

灰はあっさりと仁識の言を認めた。仁識の眉が僅かに寄せられる。しかし何も言わずに肩を竦めると灰から視線を逸らした。仁識の苦々しい表情を、灰は静かに見つめるだけだった。

暫し気まずい沈黙に立ち尽くしたその時、灰の意識を揺るがして空間が歪んだ。それに灰は身を強張らせ、視線を巡らした。耳には捉えられぬ軋みに、大気が震える。まるで意識が鋭利な鋸に刺し貫かれるような不快な感覚に、灰は覚えがあつた。いつだったか、深夜に山から滲み出たのたうっていた闇、嘗て神であつたという、その波動と同じものだ。

なぜ、と思う前に悟っていた。言霊の縛りから零れ落ちた闇の一部が、まだ大方の人々が眠りに落ちている街のどこかにいる。雑多な存在を無理矢理縫り合わせたような醜怪な気配は、嘗て目にした巨大な闇の塊に比べればはるかに小さなものだったが、大気を歪つに震わせその存在を明確に伝えていた。

突然表情を険しくして虚空を睨みつける灰に、仁識が怪訝な表情を浮かべる。灰ははつと視線を一点に振り向ける。闇を捉えた。

「すみません。話は今度……」

灰はぽつりと言葉を残して駆け出した。

みなせ 峰瀬より多加羅に巢食う闇の存在を告げられてから常に探っていたそれが、今まさに掴めたのだ。普段ならば制御する鋭い感覚を可能な限り灰は開く。意識の波が、駆ける彼より速く広がっていった。眼には現実を映しながら、意識はまるで空を飛ぶ鳥のように街を俯瞰する。知覚するわけではないが、まるで第二の視野のようなそれを灰は追う。

小さな家々が寄り集まる一角、細い路地に闇はいた。蹲るようにして暗がりには潜み、今まさに溢れ出さんとしている。そして大気を打つようにして届いたのは、貪欲な波動　呑み込み、破壊し、取り込まんとする獯猛な衝動だった。それが向けられている先に、仄かな命の気配がある。

(まずい！)

灰はさらに足を速める。掴んだ方角を目指して大通りを走り抜け、人が一人通り抜けるのがやっとの路地を過ぎると、前方を低い壁が阻んでいた。それを駆ける勢いそのまま弾みをつけて飛び越える。着地の時に僅かに体勢が崩れ足首に鈍い痛みが走ったが、構ってはいられなかった。

ほぼ真直ぐに目的の場所に辿りつけたのは、僥倖だった。灰は次第に近付いてくる異形の気配を追い、一つの路地へと走り込んだ。そこには幼児が一人、彼に背を向けてぼつんと立ち尽くしている。命の灯が、滲むようにその体を縁取っているのを灰は見る。そしてその向こう、道の奥にまるで粘つく液体のように、闇が在った。闇は今まさに伸びあがり、触手のような腕を獲物に伸ばさんとしていた。

灰は幼子の元へと駆け寄り手を伸ばす。ひっそらうようにその体を抱き上げると、鞭が撓るような勢いで闇が空間を奔ったのは同時だった。獲物をとらえ損ねた触手がそのままの勢いで蹲る闇へと吸い込まれる。

闇が膨れ上る。灰は真正面から闇が放つ凶暴な波動に対していた。

物理的な圧力にすら感じられるそれは、言うならば怨嗟、妄執、そして純粹なまでの切望だった。喰らう、ただそれだけの焼けつくような衝動である。

無明の圧迫に背筋がぞわりと粟立つ。灰は視線に力を込めて闇を睨みつけた。一瞬深く息を吸う。周りで空気が軋んだ。怪魅けみの力だ。どうやればいいのか考える前に、想念のままに空間を撓める。周囲で不可視の網が張り巡らされる。空気が変質し、闇への盾を築いていた。うねるように熱を孕み、闇を押し包まんとする。

と、その時背後に駆け寄ってくる足音が響いた。

「若様！」

響いた声に、灰の体が強張る。一瞬意識が逸れた、その瞬間を闇は逃さなかった。幾筋もの触手が空気を裂いて灰に向かう。無音の攻撃の大方は網に絡めとられ弾かれたが、数本の触手が網を？い潜り灰へと奔った。

灰は身を翻して一本を避け、二本目は背後にさがることで逃れた。しかし抱き上げた子どもの重さに動きが鈍っていた。三本目と四本目が絡み合うようにして眼前に迫る。子どもを己の体で庇うように半身をさげ、灰は闇に左手をあげた。まるでその手一つで闇を留めんとするように

咄嗟に灰は左手を大きく振るっていた。張り巡らされていた空気の網がその動きで一瞬にして束ねられ、さらにはそこに飛び込むようにして強靱な気配が一体化し、空間を奔る。又駆だ。力は颯風となつて闇へと迫り、その触手を正面から裂いた。そして道の奥に蹲る闇の本体をも砕くかに見えたその時、唐突に闇が消えた。はじめから何も存在していなかったかのような虚ろな空間を、不可視の刃はなおも地面を切り裂いて奔り抜けていった。

闇を捕えそこねた刃はそのまま霧散したが、又駆は大気を駆けのぼり、遙かな高みから灰のもとへと一気に降り立った。姿をあらわさぬまま灰を包みこむと、又駆は密やかに気配を消した。

暫し凝然と立ち尽くしていた灰は大きく肩で息をつき、腕の中で

硬直している子どもをそつと地面におろした。改めて見れば、子どもはまだ三歳にもならないほどの幼さである。何が起こったかわかっているはいないだろう。脅えた顔で灰を見つめていた子どもは、さほど離れていない場所から響いてきた声に、ぱつと顔を振り向けると一散に駆けて行った。名を呼ぶ声は母親のものだろう。その姿を目で追い、灰は漸く背後を振り返った。

覚束ない足取りで子どもが駆けて行くその先に、凍りついたように彼を凝視している仁識の姿があった。子どもがすれ違うのにも目をやらず、ただ灰のみを見つめる仁識の顔は青褪めている。灰の背後にはまるで巨大な獣の爪に抉られたような傷が一条、地面に奔っている。灰が片手を振るうだけで刻まれたそれ

「今のは、何です」

ひそりと、問いかけられた。低く張り詰めた囁きだった。闇に対しての問いなのか、灰自身への問いなのか　おそらくは両方に向けられたものなのだろう。

灰は答えず、仁識の横をすり抜ける。すれ違いざまにぱつりと言った。

「知らずともよいことです」

そのまま振り返らずに歩み去る。背後に彼を凝視する視線を感じ、しかし振り返ることなど到底できなかった。仁識は一連の出来事を見ていただろう。仁識がどう思っているのか、今の灰にはそれを考える余裕もない。

すべてを見ていた仁識に一体何を言えるというのか。決して知られてはならないことだった。そして間違っても、巻き込んでほしくないことだ。まさか追って来るとは思わなかったにせよ、これは己の落ち度だ、と灰は苦く思う。仁識に対してただ沈黙することしか灰にはできない。

歩きながら、灰は震えそうになるのを、拳を握りしめて抑えつけた。体の芯に戦慄が凝っている。対峙した闇の暗さが、今更ながらに恐ろしかった。

(なぜ、この時に)

どれほど意識を凝らしても、闇の気配はもはや感じられない。だが、闇は確かにいたのだ。人を喰らわんと姿をあらわしたそれが、また人を襲うであろうことは明らかである。祭礼に酔う無防備な人々が集うこの街のどこかで。どうしたらいい。焦燥のまま灰は唇をかみしめた。

道を行けば、目覚め動き出す人の気配が俄かに迫ってくる。闇を追った時のままに鋭敏過ぎる灰の感覚には、朝まだきの静寂に凝る熱気が、喧騒にも似て感じられた。それは待ちに待った時への興奮と期待に満ちている。

いまだにしまらない鼓動とは裏腹に、全身の熱は冷たい予感に攫われるように引いていた。

祭礼が始まる。



## 29 (後書き)

修正が多くて多くて……疲れました。読み直すたびにどこかおかしいところが見つかるという……まだまだありそうですが、更新します。

さて、怪魅師としての灰の力ですが、本格的に出たのは今回がはじめてですね。第二章はあと二話くらい続きまして、その後第三章に入ります。

今後ともよろしくお願いいたします！

きつかり十の刻に、ごおんと神殿の楼鐘の音が鳴り響いた。それを合図に人々は一斉に手に持つ金笹きんざさの花や、色とりどりの造花を宙へと投げ上げた。わあつと歓声があがり、それが一年に一度の無礼講、厳しい冬の前の、束の間の夢の始まりだった。

多加羅たから所領内の街や村の代表者は数日前から多加羅の街に逗留しているが、神殿への供物を捧げる際には改めて街の壁の外から参上するのが習わしである。盛装に身を包み、華やかに隊列を組んで大通りを進む彼らの姿もまた、祭礼における風物詩だった。供物を捧げる順に決まりがあるわけではなかったが、比較的小さな規模の集落からそれは行われる。

第一の集落の代表者達が街の外から神殿へと進んで行ったのは、祭礼の開始から一刻程後のことだった。小さな集落らしく、人数もさほど多くはない。捧げ持つ供物は豪華な布袋から察するに宝石や金といった類か。道をあげた人々が厳かに進む彼らに沿道から好意的な眼差しを送っている。これが規模の大きい街ともなると、その華やかさは一種の見世物にもなるのだ。

灰かいは神殿へと詣でる人々を大通りに面した細い路地で見ている。身を包むのは質素な衣と、緩やかな外套である。頭から被った外套のせいで、傍からは容貌をしかと見ることはかなわないだろう。灰の姿は影に潜むかのように存在感がない。人目につかぬ路地にいるせいばかりではない。実際、灰は意識して己の存在を秘していた。

昨日采さいと打ち合わせた通りに進むのであれば、おそらく來螺らいらいの街衆が神殿へとやって来るのはあと半刻程後だ。それを待ちながら、灰は不思議なほどに己が落ち着いているのを感じていた。奥底で張り詰めた緊張を味わいながら、それを睥睨するもう一人の自分がいる。研ぎ澄まされた感覚には、周囲の熱気が、渦巻くような細かな粒子に感じられた。そのただ中で、一人静かに佇んでいた。

ふと、早朝の一連の出来事が脳裏に蘇る。仁識にしきの驚愕した表情と、何処かへ消えた闇。今は、考えるな。灰は緩く頭を振った。若衆しゅっしゅは今頃鍛錬所たんれんじょで最後の稽古に精を出しているだろう。須樹達すきにはどのようなにして犯人を焙りだすのか、言っではいけない。到底言えないことだった。ここから先は彼らを巻きこむには危険に過ぎる。

暫くして、緩やかに下る大通りの向こうからどよめきが上がった。何事かと足を止める人々の前に、その一団は姿をあらわした。先頭を歩くのは高々と旗を掲げ持つ采である。三角の旗は蘇芳、鮮やかな色彩の真中には金赤の大輪とそれに被さる白銀の剣、來螺の自警団の印である。

その背後に続く人々は一層艶やかである。純白の薄絹に、碧羅の羽衣を纏う舞い手、それを取り囲むのは薄藤と濃紫の衣にそれぞれ身を包んだ歌い手と奏者である。そして飾り気のない黒い衣を纏う者が数人と、旗と同様の蘇芳の衣の男達がその後が続いていた。騙し技を生業とする芸能家と自警団である。総勢三十人を優に超している。

「御覧じろう！ 祭りの時ぞ、今まさに。我らの芸を御覧じろう！」  
歌い手の一人が朗々と声をあげる。呼応するように奏者の一人がたあん、と太鼓を鳴らした。

わあつと沿道から歓声あがる。黒い衣の者達が一齐に光粉を宙にまいたのだ。微細なそれが、陽光を弾き、風と熱気に流されるままにちらちらと色彩を変えてたゆたう。さして珍しくもない騙し技の一つだが、多加羅の街衆には馴染みのないものだった。

「來螺だ！」

言ったのは雑踏の中の誰なのか、それに人々がざわめいた。

「御覧じろう！ 我らの至誠を捧げんと、碧落の神のその元へ」

口上のようなそれに人々のどよめきはさらに大きくなった。供物を捧げんと参上したのだと、それは告げたのだ。前例のない出来事に辺りは途端に色めき立った。來螺の一団の後からも観衆が押し寄せると同時に、今や人々は華やかな來螺の街衆を取り

囲むようにして群れをなして神殿へと向かっている。灰は目の前を通り抜けるその集団にするりと入り込んだ。

やがて神殿が眼前に迫る。供物を捧げる儀式は街衆にも公開されるため、建物の中ではなく神殿の前の広場で行われる。そこには供物を捧げる祭壇があり、司祭達が整然と並んでいた。司祭長を筆頭に数多の司祭が立ち並ぶ様は、背後に聳える神殿の威容とともに壮観である。供物を捧げるのは街や集落の代表者だが、それ以外の人々も神への祈りをその場で捧げ、聖句を授かる。そのため常に人が絶えることはないが、祭礼の中にあつてこの場の張りつめた静寂は乱れない。それが、不意にどよめきに揺れた。

何事か、と視線を巡らした人々の前に、來螺の一団が姿をあらわした。広場の周りを守る衛兵が呆気にとられたように目の前を通り過ぎる彼らを見つめている。おそらく留めるべきかどうか迷う以前に、何事が起つたのかもわかつてはいないのだろう。さらに続く人波に蔽かな場が俄かに喧騒に包まれた。

「何事ぞ」

柔らかく深い声が響いた。司祭長である。司祭の正装である足元までゆつたりと身を包む衣は、長にのみ許される黒に近い深緑である。豪華な椅子から立ち上がり來螺の一団を見やったその姿に対して、広場の真中まで進み出た采が深々と叩頭した。

「我ら來螺も供物を奉りたく、参上いたしました」

「來螺と申したか」

「はい」

「そなた達がなぜ供物を捧げる。多加羅の者ではなかるうに」

「神の御前に国の違いなど意味のないこと。我らも神の慈悲を賜わりとうございます」

喧騒に包まれていた広場はいつしかしんと静まり返っていた。落ち着いた采の言葉に、司祭長は暫し黙る。無論、彼とてこの申し出を断ることなどできはしない。神の前に、それはあまりに不敬である。それでも黙したのは、來螺という存在への忌避感によるものか、

それとも意想外の出来事への戸惑いのせいなのか。

「ならばそなた達の真を捧げられるがよろしかろう」

蔵かに響いた声に、采はさらに深く頭を下げると、すっと立ち上がった。広場に集まった全ての人々へと告げる。

「我らの最高の芸を神に捧げましょうぞ」

一目來螺の供物を見ようと詰め寄せる人々の間から、灰は抜け出した。神殿と面した位置にある路地までさがり、瞳を閉じて深く息を吸った。穂の原の流れは、一昨日星見の塔ほしみにある書物で何度も確認した。それを元に、采とは芸の流れを取り決めてはいる。しかし、全ては一度きり、どのように術を込めるかは灰次第である。

灰は目を開くと、一気に感覚を開いた。意識が風のように広がり、群がる人々の鼓動をすり抜けて広場の中央へと向かった。自警団の鮮やかな衣を掠め、奏者の一人、叶かのの傍らを奔り抜けて、ゆっくりと進み出る舞い手の、その密やかな足音を聞いた。そして立ち並ぶ司祭達の張り詰めた呼吸をも、一瞬にして灰は感じ取る。

たあん、と太鼓の音が響く。

穂の原 怒りと告発の時の、それが始まりであった。

はやちとせ

歌い手の唱和が波紋のように広がり、それを追うようにして奏者が音色を奏でる。緩やかな笛と、震えるように柔らかく響く麗楊弓れいようまやうである。

はやちとせ、せをよるかのちあけあけと

僅かに顔を伏せた舞い手の左腕がゆるり、と空気を撫でる。羽衣が水のように揺れた。白蓮のように、寿ぎの舞の立ち姿である。

詩句は歌う はや千歳、瀬を寄る彼の地、明々と 遙かな古の時より幾星霜、水豊かに潤う彼の地は常に光明に輝いていた

それは豊穰の大地への賛歌であった。

詩句は波となり、舞はそれにたゆたう一輪の花のよう、かすめるような笛と弦が、戯れに吹き過ぎる風にも似て、ただ夢幻のままに

時が過ぎる。それに、人々はうつとりと酔いしれた。

たあん、と不意に太鼓の音が響き、ふと音が途絶えた。束の間の静寂の後、澄んだ乙女の歌声　くのせいかみにひとたちで、まこと、しらすな、はねやちと、さらさらなるさらしなに

ふと、司祭長が眉根を寄せた。

(九の制、上に人立ちて、誠、白沙、羽や地と、更さ更なる更し名に……)

響く詩句を、彼は心中に繰り返す。

九つの法を布き、賢き君主が上に立ち、人の誠も、豊かなる水も、空に地に生きる全てのものも、繰り返し生まれいずる時の中でますますその名を響かせる　このうえもなき国の栄華を誇らかに歌うそれに、しかし彼ははっとする。その歌を彼は知っていた。同様に気付いたらしい気配が隣でする。

「司祭長、これはまさか……」

ひそりと問いかけられ、彼は振り返らぬまま、厳しい表情で頷いた。なおも国の繁栄を歌う唱和が続く。その裏に秘められた凄まじいまでの恨み　。司祭長の心中に生じたのは怒りであった。神に供物を捧げると殊勝に言いながら、よもやこのようなものを奉じるとは　これほどの侮辱があるうか。いかに供物といえども、見過ごしにできぬ事態に立ち上がるうとしたその時、不意に鋭く太鼓の音が響いた。

たゆたうようなゆるやかな雰囲気<sup>あふめい</sup>に酔っていた広場の人々の多くがびくりと身を震わせた。突如響いた太鼓の音が、まるでそれまでの空気を引き裂くように、なおも叩きつけられる。

だあん、だあん、だあん！

黒衣の一団が、ふわりと宙に光粉をまく。先程大通りで披露したものは違う、それは葵<sup>あおい</sup>と呼ばれる。舞い手が仄かな群青に包まれる。優美に物憂く、凶の気配　青の帳の向こうで、それまでふわりと舞っていた舞い手が不意に高く足をあげる。華麗に、野生の獣に似て荒々しく。衣が大きく舞いあがり、その瞬間、身に纏う碧羅

が紅に染まった。一瞬のそれに人々がどよめく。

騙し技師が宙に投げた葵、それが羽衣の特殊な染め粉と触れ合うことで、その色彩を紅に変じたのだ。血のように鮮やかに、禍々しいまでに美しい色彩を纏い、舞い手が天に腕をのべた。

われたたずむはほのはらに、きみにちかいしこのおもい、はやちとせ、はやちとせ

「やめよ！」

立ち上がり叫んだ司祭長の言葉は、しかしなおも叩きつけられる太鼓の音と、歌い手の高らかな詠唱にかき消される。

このみやきしおもいをば、ほのうみとわにつつむらん、かのせのいのちつきるまで

「なんと……」

司祭長の呟きは真実苦々しかった。

我佇むは穂の原に、君に誓いしこの想い、はや千歳、はや千歳、この身を焼きし想いをば、穂の海永久に包むらん、彼の世の命尽きるまで 豊かな実りの原、穂の原に佇み、あなたへ誓う愛はどれほどの時がたっても消えはしない、たとえ幾千年でも、あなたへの身を焦がすような想いは穂の海に包まれてとどまるだろう、この世界が尽きるその日まで。

激しいまでの愛、最後にそれを歌い終えて、すつと波が退くように静寂が落ちた。

舞い手が優美に身を屈めお辞儀をすると、背後へ下がる。

異様な沈黙が辺りを覆っていた。立ち上がり、怒りに身を震わせる司祭長の姿のせいばかりではない。広場に集う人々の多くが、最後になってこの芸が何であるのかを悟ったのだ。穂の原、と。穂の原が持つ、もう一つの意味はあまりに有名である。そしてそれほどに広く知られた詩句でありながら、ひそりとおちた静寂に誰もがその名を口に出せずにいた。容易く口にすることも憚られる、その凄まじいまでの恨みの言霊を人々は知っている。体制に背き、圧政者を弾劾する歌であり、裏の名を炎の原ほという、それを

口を開きかけた司祭長の言葉は、しかしそのまま発されることはなかった。つんざくような悲鳴が彼の背後で突然あがった。

男は、茫然とその集団を見ていた。大通りから広場へと踏み出して来たのは明らかに国境地帯の、それも來螺の者である。数にして数十人、物見高い人々を引き連れて姿をあらわした彼らは、神へと供物を捧げることを望んだ。

彼にとって祭礼とは、司祭として務めるべき義務に過ぎない。彼には、神へと捧げられる供物のどれもが俗っぽく、人々が唱える祈りがあまりに耳障りに感じられる。しかし俗世に染まり、神の慈悲を乞うにそのような方法でしか果たせぬ人々のことを憐れにも思う。そう思えばこそ、この無意味な行事にも耐えられた。しかし突然あらわれた來螺の集団に、男の心中は乱れる。

そして、穗の原が始まる。男は戦慄とともにそれを見ていた。彼は瞬時に悟ったのだ。それが己に向けられた怒りであり、告発であると。

はやちとせ、せをよるかのち、あけあけと

疾風屠せ、背を繕る彼の血、朱々と 風よ、大軍となりて裏切り者をなぎ倒せ、いまだに忘れ得ぬあの方の苦しみ、あの方の流した血に赤々と染まるあの地へと風よ奔れ

蒼白な面で目の前に繰り広げられる弾劾を見ながら、それでも男は動揺を一切出しはしなかった。たかが來螺の者どもに一体何ができるというのか。たまさか真実をいかにしてか知ったとしても、誰が彼に手を出せるというのか。

その時、彼は気づく。広場の中央に、何かがいる。圧倒的な力を感じさせるそれに空間が撓んでいた。男は目を細める。陽炎のように広場の真中に揺らめいているもの、それを通して見える舞い手の姿が曖昧に歪む。

( 一体、何が…… )

男は目を見開いた。不確かだった像が、不意に一つの形を結んだ。



巨大な鷹閃が、そこにいた。猛々しく、優美に、男を睥睨している。  
(神よ……)

男は茫然と呟く。鷹閃は巨大な猛禽である。しかし人の前には滅多に姿を見せず、幻とすら言われ、その稀有さゆえに神の使いと考えられているのだ。男は虚脱したまま、なおも己を見つめる存在を凝視していた。もはや周りの者達にはその存在が見えていないということすら気付いていない。恍惚と思う。

(神よ、漸く私の元に……)

くのせいかみにひとたちで、まこと、しらすな、はねやちと、さらさらなるさらしなに

隠れ歌の言霊は、恨みと怒りを秘めて響く。

制圧者である仇は、誠実なるあのお方を貶め、国はまるで砂漠のように荒れ果て、空飛ぶ命でさえ地に落ちた。たとえどれほどに時がたとうとも、何度でもお前の名を裏切り者の名として晒してやる

ぼろり、と男の目の前で崇高なる生き物の輪郭が崩れた。腐り落ちるようにどろどろと地に落ちるそれを見て、男はひつと声にならない悲鳴をあげた。地に落ちた肉塊の紅が、次の瞬間ぐわりと広がった。醜くまき散らされたそれが、扇のように大気を染め上げる。火炎となって、燃え上がっていた。

男の体が凍りつく。炎は今や遙か頭上にまで燃え上がっている。狂おしく、荒々しくのたうつそれに、目が吸い寄せられていた。

我佇むは炎の原に、君に誓いしこの思い、疾風屠せ、はや千歳、この身を焼きし思いをば、炎の海永久に包むらん、彼の背の命尽きるまで

私は今でも炎に包まれた地に立ち尽くしている。胸にあのお方への誓いを秘めて、風よ大軍となって裏切り者を滅ぼしてしまえ、たとえどれほどの時が流れようと、あの裏切り者の命尽きるまで、この身を焼きつくす復讐の思いは炎の海となって燃え続けるだろう

どこか遠くで、男はその言葉を聞く。彼への断罪を　なぜ、と彼は思う。神は、彼のもとへ来たのではなかったのか。なぜ

高く高く燃え上がっていた炎が、揺れた。ぐにやりと歪み、巨大な獣の形となる。牙蒙がもうという、その名を彼は知らなかったが、己を射竦める朱の眼差しに鼓動さえも凍りつくようである。

次の瞬間、炎が男に向かって奔った。獣のあぎとが、その禍々しい紅と、ぬらりと鋭い牙が眼前に迫る。凝固したままそれを見つめていた彼の中で、何かが決壊した。

獣に呑みこまれる寸前、彼は悲鳴をあげていた。

### 30 (後書き)

「穂の原」の「九の制上に人立ちて」の部分は、当初「一番上人を入れる」というメッセーヂが秘められている、という風に書いていたんですが、(つまり九ににんべんをつけて「仇」になる、と)さすがに漢字の形(概念??)そのものを異世界ファンタジーに入れることに抵抗があったため、今回削りました。「穂の原」の意味自体は変えていないですが。もうちょっとうまい仕掛けを入れたかったのですが……考えついたらまた修正します。

次で第二章は最後です。今後ともよろしくお願いいたします！

つんざくような悲鳴をあげ、端然と居並ぶ司祭達の中から一人が  
まろび出た。地面に這いつくばり、頭を抱える尋常ではない様子の  
その男は、司祭長の背後に控えていた司祭のうちの一人である。ま  
だ若い。それにも関わらず司祭長の傍近くでの列席を許されている  
のは将来を囑望されている証である。それがなぜ胎児のように身を  
丸めて泣き叫んでいるのか　奇異な光景に誰もが呆気に取られて  
いた。

來螺<sup>ひづり</sup>の街衆も嘩然とそれを見つめる。彼らが采<sup>さい</sup>に聞いていたのは、  
穂の原を奉じ、おそらくは神殿にいるであろう犯人を追いつめる、  
ということだけだ。ただそれだけの言葉で采が宿営所の人々を動か  
したのは、彼の人望の厚さゆえであるが、それでもまるで雲を掴む  
ような話であることは否めない。だが、目の前のこの展開は何だ。  
「どうしたのだ」

一人の司祭が、蹲る男へと問う。男の声は嗚咽にまみれくぐもつ  
ていたが、その場にいる誰もがその言葉を聞いた。

「神よ……お許しを……どうか、お許しください……私の罪を……」  
周囲と同じく茫然と目の前の光景を見ていた采は、表情を引き締  
めると前へと進み出る。高らかに言った。

「神は我らの祈りをお聞き届けになられた」

「戯けたことを！　この不埒な者どもが！」

響いたのは司祭長の険しい声だった。司祭長はなおもすすり泣く  
司祭を苛立たし気に見やり、しかし戸惑いをも圧して沸き起こる怒  
りのままに、來螺の代表である男を睨みつけた。

「あのような芸をよくも神への供物としたものだ！　即刻この場よ  
り立ち去れ！」

「それはできません。神は我らにお答えになった。我らの祈りに答  
えられたのです」

「一体何を言っているのだ」

「貴殿はこのほど多加羅で起こった火災の犯人が捕まったことをご存じか」

しんと場が静まった。訝しげな司祭長の表情には構わず、采は続けた。

「來螺の青年が犯人として捕えられたのです。だが、彼は無実には違はなく、我らはこの場で神に真偽を問うことと致しました。もしも來螺の者が偽りの罪を被せられたのであれば、真の犯人をお示しくださるよう、罪なき者を貶めた者への我らの怒りを込め穂の原を捧げたのです」

「そのような世迷い事を……」

司祭長の言葉が途切れる。掠めるように素早く、這いつくばる司祭へと視線が流れた。それを采が見逃すはずもない。一体どのような怪異を見せたものやら 内心に思いながらも、傲然と言いつ放った。

「そこな司祭に問わせていただきたい。真の火つけの犯人は誰なのか。誰が我ら來螺の一員に罪を被せたのか。とく、答えていただきたい！」

静寂に響く采の言葉に、蹲りすすり泣く司祭の背がびくりと震えた。青褪めた顔をあげ、己を断罪する男を見上げる。物影から見ていた灰かいははつとする。見憶えのある顔だった。祭礼の三日前に行われた鍛錬所での下稽古に、司祭長の代理として来ていた司祭である。あの時、司祭が彼に一瞬向けた焼けつくような視線 それも無理なからぬことだったのだと灰は気付く。かの司祭がもしも丈隼たかはやと灰の会話を聞いていたのであれば、鍛錬所で灰を見た時の彼の驚きはどれほどのものだっただろう。己が嵌めた來螺の青年と親し気に言葉を交わしていた少年が、よもや惣領家の一員だとは思ひもしなかつたに違いない。

「神殿を愚弄するか！」

なおも言い募ろうとした司祭長は、微かな声に言葉を呑みこむ。

蹲る司祭が不意に顔をあげた。だらりと腕を地面に垂らしたまま呆けたように天を見上げている。

「神は見ておられたのだ。私を……神は見ておられた……」

震えながら呟くその姿に、見る者を不安に誘う何かがあった。

「私の罪を、見過ごしにはなさらなかった……。私を見ておられた……」

ぶつぶつと何度も繰り返す声音に、恍惚とした響きがある。それは狂気と紙一重の狂信である。

「私を、その炎でお裁きになった……私を……」

「何を言うておる！」

司祭長の声はつきりと動揺をあらわしていた。彼は、その司祭を殊の外見込んでいた。まだ二十半ばの若さだったが、神への信心の深さも、たゆまぬ努力を重ねる辛抱強さも、人並外れた聡明さも、やがては神殿の中枢にいてこそ相応しい人物になる器であると考えていたのだ。それが今や目の前で、人が変わったように泣き叫び、虚ろに言葉を繰り返している。

采が静かに言った。

「あなたが多加羅の街に火をつけたのか」

問いかけですらないそれに、司祭が視線を巡らせる。ぼんやりとした表情でゆるりと頷いた。

「私がやったのだ。すべて私が。火をつけ、人を殺した……」

「そして來螺の若者に罪をなすりつけたか」

「私がやったのだ……」

ぼつりと言う。言いながら、微かに笑んだ。まるで、それが誇らしいかのよう。采はぞつとその様を見ていた。この青年は常軌を逸している。それは彼のみの思いではあるまい。広場に集う人々もまた凝然と司祭の姿を見つめている。はつきりと顔を顰めている者もいた。

「お聞きになられたらう。この者は火つけの真の犯人だ。ここに  
いる全ての者が証人であり、神の奇跡の目撃者だ」

采は静かに言うと、恭しく司祭長に向かって一礼した。

「この者を如何様になさるか、それは貴殿の権限であると考える。神殿の榮譽に恥じめ決断をなされませ」

愚弄でも嘲笑でもない、重々しい言葉だった。

司祭長の顔が強張る。衝撃のためか蒼白となりながらも、采と、その背後に集う來螺の一团を睥睨した。彼の絶対の信条、神への信仰とその誇りにかけて、取るべき行動は言われずとも決まっていた。それでも來螺という存在への怒りと嫌悪が抑えようもなく沸き起こる。だが、この場において彼の矜持が許さぬその最たるものは、胸中の葛藤を眼前の者達に晒すことである。

司祭長は厳然と言い放った。

「今、この時よりこの者は破門とする。神の慈悲を求める、いかなる資格もないものと見做す」

彼は広場の警護についている衛兵達へと目をやる。周囲と同様に茫然と広場で繰り広げられている出来事を見つめていた衛兵はその眼差しにはっと居住まいを正した。

「この者を捕えよ。捕えて警吏けいりへと連行せよ」

その言葉に鋭く応えると、数人の衛兵が座り込んでいる男の元へと近づき、その体を引き起こした。抵抗することもなく男は立ち上がる。もはやその瞳は何も映していないようだった。あるいは、誰にも見えぬものを見つめているのかもしれない。なおもぶつぶつと咳きながら、男は引きずられるようにして歩き出す。その姿に人々は言葉もなく道を開けた。

男は一度も神殿を振り返ることなく、その場を去った。

灰は遠ざかる男の姿を見送り、ほっと息をついた。彼にとってもこの展開はあまりに予想外のことであった。犯人を追いつめ焙りだすこととて一か八かの賭けだったのだ。まさかこの場で明らかになるなど考えてもいなかった。

緊張がゆるみ、かわって座り込みそうなほどの脱力感が襲ってくる

る。この数日の間、己がどれほどに張りつめていたかを彼は悟る。それに加えて怪魅けみの力を使ったことによる疲労も、かつてないほどに甚だしかった。

芸の間男が見た幻は、又さく駆の力を借り灰が作り上げたものである。しかしそれは想像以上に困難なものだった。人々の目に見えず、しかし異能を有する者にだけ見える幻　虚と現の挟間、まるで針の先程の空間に精妙な像を象するような所業だったのである。精神をぎりぎりまで張り詰めていたせい、額の奥が鈍く痛んだ。

丈隼は解放される　灰は疲労のまま壁に背を預け、思う。これで、丈隼が助かるのだ。いわれなき罪で命を落とすことはない。思うままに沸き起こる安堵に全身が浸された。それゆえ、彼は気付かなかった。彼の鋭い感覚も、この時ばかりはそれを感じ取ることはできなかった。かの幻を目にしたのが真の犯人ばかりではないことを　その者の存在を。

もしも視野の片隅にでもその姿を捕えていれば気付いただろう。だが、その人物がたまたま死角にいたため、それもなかった。もっともそれは灰にとっては幸運だったかもしれない、相手もまた灰の姿には気づかなかったということだ。

雑踏の中、凝然と広場を見つめる人影があった。聡達そつたつである。沙羅しゃら久惣領家の者が多加羅に堂々と来ること自体が大胆極まりない所業である。それに加えて以前若衆わかしゅうと遭遇した時とは違い顔すら隠していない。もっとも夥しい人の群の中、顔を隠す方がかえって人目につくものであり、たとえ聡達の顔を見知っている者がいたとしても、この混雑の中では気付かれる可能性は高くはないだろう。

聡達は踵を返す。気の向くまま多加羅へと来て、広場での出来事を目にしたのは偶然である。もっとも聡達の目に、すべてが明瞭に映ったわけではない。条斎じょうさい土である彼が操るのは言霊であり、広場で行われたことはその彼の能力をも越えた事象である。しかし凄まじいまでの力の渦が象る形をおぼろげに捉えることはできた。何よりもあれは明らかかな人為であった。



それで十分だ、と彼は思う。火つけの犯人だと告発された男もまた同じものを目にしていたに違いない。だが、それは聡達にとつてさほど重要なことではなかった。目の前で繰り広げられた怪異は明らかに異端の術、それも稀有な力の持ち主が作り出したに相違ない。身内に沸き起こるのは熱狂にも似た高揚である。彼の口元は抑えきれない笑みに歪んでいた。

火つけの犯人が捕まったという話は瞬く間に多加羅の街に広まった。多分に誇張されながら、この上なく衝撃的なそれは祭礼の興奮も相まって街中の噂となり、神の奇跡として人々の熱気を更に煽る結果となった。神殿にとつては不名誉の一言では済まぬ凶事であつたらうそれが、尚更に神の祭礼を華やかに盛り上げることとなつたのは皮肉の一言に尽きる。

だがその年の祭礼で起こつた一連の出来事、後に炎呪の禍と呼ばれるそれはまだ終わつたわけではなかった。

神殿での奇妙きわまりない出来事から半日程たつた夕刻、謁見の間で所領内の街や集落の代表者と対していた峰瀬は、街や集落の代表者は神殿へと供物を捧げた後多加羅惣領の元へと参じ、挨拶をするのが習わしである。戸惑いの表情を浮かべた家司から、その者の来訪を知つた。

「いかがいたしましたでしょうか」

困惑顔で問う家司に、峰瀬は淡々と返した。

「断るわけにもいきまい。聖遣使殿をお通しせよ」

やがて謁見の間に姿をあらわしたのは、二十歳にもならぬ青年だつた。落ち着いた様子で進み出ると、優雅に礼をする。皇帝の直属である彼らが叩頭する相手は、己の主である皇帝に対してのみである。

「突然にまかり越したこと、お詫び申し上げます」

峰瀬はふと目を細めた。

「お父上に似ておられるな、聡達殿。沙羅久惣領は息災か。心臓を

病んでおられると聞いたが」

対して、相手は笑みを浮かべた。

「我が父へのお心遣いいたみいります。しかし、私は沙羅久の者として参ったものではございません」

聡達の言葉は明朗に響く。峰瀬の傍近くに控えていた家臣達がぎよつと目を見開いた。目の前の青年が沙羅久惣領家に連なる者だとは、つゆ考えなかつた彼らである。聖遣使が突然に惣領をおとなつたことだけでも戸惑いを感じていた彼らは、ますます困惑を深めるばかりだった。

「では聖遣使殿はいかなる用件で参られたのだ」

「今日捕えられた火つけの犯人のことでございます」

「それが貴殿に何の関わりがある」

「私は聖遣使として、多加羅の街で起こる火災について調べる任を帯びております。我らの見立てでは火つけの犯人は異端の力を有する者である可能性が高く、その者を捕えるよう命が下されていました」

聡達は言う。その彼が数日前に多加羅の街で若衆わかしやうと遭遇して騒動を起こし、結果として惣領家は神殿に抗議を行っているのだが、それを知ってか知らずか涼しい顔である。

「貴殿の話とは火つけの犯人を引き渡せということか？」

話の展開についていけず目を白黒させる家臣とは対照的に、峰瀬もまた落ち着いたものである。無論、この場にいる誰もが火つけの真の犯人が捕まったことは知っていたが、それが異端の力を有するなどとは初耳のことだった。

「犯人が捕えられれば当然そのようにお願い申し上げるところではございますが……」

聡達はふと言葉を切った。笑みが深まる。

「いささか事情が変わりました。今宵、二十の刻、獄舎の守りを解いていただきたい」

「守りを解くだと？ 何故だ」

「火つけの犯人を逃すためにございます」

峰瀬は僅かに目を見開いた。彼の背後にいる家臣達は誰も驚きのあまり言葉もない。

「人の命を殺めた重罪犯を解き放つというのか。なぜそのようなことをする」

「今日神殿で起こった出来事について惣領もお聞き及びでございます。来螺の者達が神に芸を捧げ、神がそれに応えて真の犯人を明らかにしたという」

聡達の声は迷いなく響く。

「あの出来事はとんだ茶番にございます」

「茶番だと？」

「私はその場において見ておりましたが、来螺は芸の中に異端の術を込めておりました。常人には見えぬ幻の炎を作り上げ、それを穂の原とともに犯人に見せたのでございます。犯人が明らかとなったのは神の御業でも何でもありません、単に来螺の異能者が見せたその幻に、犯人が怯えたからに他なりません。火つけの罪を告発する穂の原と、異端の力を有する者にのみわかる怪異に追い詰められた結果なのです」

今度こそ驚きの声が、峰瀬の背後で起こった。それを聞きながら、峰瀬は漸く事の全貌を悟っていた。弦げんの報告を受けていた峰瀬も、真実何が起こったかまでは知らなかったのだ。灰が何かを目論んだことはわかっていたが、当の少年が弦にはその思惑を告げていなかったのだから、それも仕様がなйдらう。

なるほど、と峰瀬は思う。灰はおそらく火つけの犯人が神殿の中にいることも、その者が異端の力を有することも気付いていたのだろう。そして犯人を明らかにするために来螺をも巻き込んで大掛かりな博打を打ってみせたのだ。聡達の言う異端の術を芸に込めたのは灰に違いないと彼は確信する。

それにしても、聖遣使としての任を帯びているとしても、沙羅久と険悪とも言える関係にある多加羅に堂々と出入りをする聡達の神

経も、いささか呆れたものである。

「たとえ、來螺の者であろうとも、皇帝の威光ある土地での勝手な振る舞いを看過することはできません。ましてや神の祭礼でそのような力を振るうとは、許すまじきこと。だが、祭礼が終わるまでに異端の力を有する者を明らかとせねば、その罪を告発することは不可能でしょう」

祭礼が終われば來螺の街衆は多加羅を去る。それまでに、不埒にも多加羅の街で異端の術を行使した者を捕えねばならぬ、と聡達は言う。落ち着きを感じさせるその声音に、ふと峰瀬は神経を炙られるような不快を感じた。若者の早熟した立ち居振る舞いは品すら感じさせる。それにも関わらずなおも強まるのは凄まじいまでの違和感である。目に映る実像と、醸し出すその空気の乖離　　峰瀬の眼差しがすつと冷めた。

「火つけの犯人を逃がすは、その者を釣りだすための餌だと言うのか」

その言葉に聡達は頷いた。

「おそらく來螺の異能者は火つけの犯人が逃げたとあらば、何とか捕えようとするでしょう。無論、犯人が再び人を害することのなきよう、私が十分に注意を致します。ですが、來螺の異能者は火つけの犯人が到底及ばぬ程の術の使い手、より大きな危険分子を捕えるために必要なことでございます」

「否、と言えはどうかなる」

「どうもなりません。ただ、我ら聖遣使は白沙那帝国はくわくの安寧をあずかる者、我らへの応え一つがどのような意味を持つか、惣領はおわかりのほすです」

「真の犯人が捕まったことをまだ帝国中枢は知らぬはずだ。火つけの犯人を解き放ち、來螺の異端を釣りだすというその計画は貴殿の独断と見えるが？」

「私にはそれだけの権限がございます」

脅しであった。我らに逆らうは皇帝に逆らうこと

傲然と言い

放った聡達は、次の瞬間には柔らかく笑んでいた。真綿でくるむよ  
うな、恫喝の笑みである。

「惣領にはただ獄舎の守りを一時解いていただき、明日、犯人が逃  
亡したことを街衆に知らせていただいただけでいいのです。あとは我  
らにお任せください」

「異端を狩り出すは容易なことではあるまい」

「異端を狩るは我らの領分、お気になさる必要はございません」

「……なるほど」

ひそりと峰瀬は言う。否と言うは帝国への裏切り、ただ言う通り  
にしてあとは手を出すな、という聖遣使の言葉である。峰瀬は僅か  
に笑んだ。鋼の眼差しに、見る者を圧する凍るような笑みである。  
だが、聡達は平然とそれを見返す。

「聖遣使殿の言われた通りにいたそう。二十の刻から一刻の間獄舎  
の守りを解く。あとはお好きなようになされよ」

「ありがとうございます」

息を呑む気配とざわめきを一顧だにせず、そのまま一礼して立ち  
去りかけた聡達は、しかし足を止めると振り返った。いかにも今思  
い出したという風情で笑む。

「ああ、それからもう一つ、惣領にお願いがございます」

言いながら懐から一振りの刀を取り出した。それを峰瀬に無造作  
に差し出す。

「これを灰殿にお渡しください」

「灰に？」

怪訝な表情で峰瀬は差し出された刀を掴んだ。

「その刀、もとは灰殿のお母上……惣領の妹君の持ち物でございま  
す。わけあって私が持っておりますが、本来の持ち主に返すのが  
筋というもの。灰殿にとってはおそらくお母上の形見ともなるもの  
でしょう」

峰瀬は思わず聡達を凝視する。聡達はなおも言葉を続けた。

「あの事件が來螺で起こった時は私も幼かったものですが、妹君を

殺めたのは沙羅久惣領家を勘当されたとはいえその直系の者、それにも関わらず沙羅久に一切の責めをなさらなかった多加羅惣領家の思慮と寛容に、今更ながらに感じ入るばかりでございます」

淀みなく流暢に、まるで演劇の口上のように響く。峰瀬は対する相手の端正な面をひやりとした心地で眺めやりながら、唐突に先程から感じていた違和感の正体を悟っていた。一貫して非の打ちどころのない恭しい態度でありながら、軋むような不快を感じさせるもの、聡達の面差しの下に蠢くそれである。

知性と落ち着いた物腰に巧みに隠されながら、撓む歪みが透けて見える。暗く、峻烈な傲慢さ、薄刃を思わせる酷薄さ。それがこの聡達という青年が隠す本性なのか。そして否、と思う。彼は隠そうとさえしていない。表裏を隔てることすらしていないのだ。知的で明朗であり、そうであればこそ尚更、残酷なまでに冷徹なのが彼という人間なのだろう。

「貴殿は先程、沙羅久惣領家の者としてこの場に赴いたのではないと言っではいなかったか？」

揶揄するような峰瀬の言にも聡達は動じなかった。

「ええ、沙羅久惣領家の者としてこの場に立っているのであれば、口が裂けても言えぬことでございます」

「聖遣使の立場で言っただということか。だが、殊更にここで言うべきこととも思えぬが？」

「深読みなさいますな。私は灰殿の心中を思えばこそ、大切なお母上の形見の品をなるべく早くにお返ししようと思っただけ。私は一度灰殿と対面いたしました。彼は非常に興味深い。まさに多加羅惣領家に相応しいお方にございましょう」

灰との邂逅を隠そうともしない。その時彼が若衆に対して術を放ったという、その狼藉を知る家臣が気色ばむ気配を見せた。それにちらりと流した聡達の眼差しが冷笑を含む。

「灰をそのように思うか」

「はい。是非とも一度直接にお話をさせていただきたいものです」

「さて、灰はそれを望むまいよ」

峰瀬の言葉に聡達は答えず、ただゆるりと微笑む。そして再び一礼し、今度こそ振り返らずに謁見の間を後にした。それを見送り、峰瀬は手に残された刀を眺めた。

聡達がなぜこれを見るのは深読みに過ぎるのだろうか、と峰瀬は考える。意図をそこに見るのは深読みに過ぎるのだろうか、と峰瀬は考える。刀を峰瀬に託すことで、聡達は灰が來螺の出身であることを知っている、と告げたのか。火つけの犯人を捕えるために灰が來螺と行動をとにしたことも隠し通せるものではあるまい。あるいはすでに知っているのかもしれない。多加羅惣領家の者が來螺に与することへの警告なのか。それとも聡達が言うように何も意図は無いのか。そうであれば、尚更になぶるような悪意をそこに感じずにはいられない峰瀬である。

いずれにせよ明らかかなことが一つある。聖遣使の狙いである來螺の異端とは、灰その人である。

その夜、獄舎に繋がれた火つけの犯人が忽然と姿を消した。まるで霧のように、独房から消えていた。何人たりとも逃げることも能わぬ獄舎から犯人が逃亡したという、それは翌日には街の人々へと知れ渡る。前代未聞の出来事であった。

そして人知れぬ闇の中で、狩る者と狩られる者の攻防が始まるうとしていた。

### 31 (後書き)

漸く、第二章が終わりました。

この先も読んでいただけると幸いです。

ではでは、今後ともよろしくお願いいたします！



### 第三章 千那夜の月

「どうだ？」

背後からの問いかけに治都やとは振り向いた。足音をしのばせて近づいてくる須樹すきの姿がある。その背後から無言でついてくる仁識にしきの姿も見えた。

「何も起こらん」

「そうか。向こうの連中もまだ何も見つけられないようだ」

己が歩いてきた方向をちらりと振り返りながら須樹は言い、治都の傍らに立つ。彼らがいるのは街を囲む隔壁の上である。下からは見えぬが、壁の上には人一人が立てる程の窪んだ通路がある。嘗ては歩哨が立ち街の外を監視していたそこから、彼らは街を眺めている。多加羅の東に位置するその場所からは、夜になってもまだ眠ることのない街が一望できた。

祭礼の夜はまさに無礼講である。昼間は祈りのために神殿を訪れる人々も、夜は歌と踊り、食事と酒に時を忘れる。深夜まで灯された明かりは街を幻想的に浮かび上がらせていた。これは壁の上に潜む彼らにとつては都合であった。街が華やかに明るいほど、周囲の闇は深くなる。壁の上の侵入者に、街の人々が気付くことはない。「しかし冷えるな」

言ったのは少し離れた位置で同じようにして街を眺めている若者である。須樹達にとつてはつい先程初めて会った相手、來螺らいらの自警団の一人だった。

「神殿での一件は是非見てみたかったな。すごかったんだろ？」

治都はきさくにその若者に話しかけた。來螺が神殿に供物を捧げ、それに応えた神が火つけの犯人を明らかにしたという。それは、すでに昨日のことである。しかしいまだに街中その噂でもちきりだった。

「ああ、すごかったぜ。いきなり司祭の一人が喚き出してさ、自分

が火をつけたつてことを告白したんだ。本当に神の奇跡つてやつか  
もしれんな」

興奮気味のその声に、ふと仁識が顔を振り向けると問うた。

「穂の原を披露したそうだな」

「ああ、あの灰かいつて奴が言い出したことなんだが、それで犯人を追  
いつめるつてことだった。まさかあそこまでうまくいくとはな。悪  
いことはできないつてことだ」

須樹は何事かを考えているらしい仁識をちらりと見やり、呟いた。

「灰は俺達には何も言わなかつたな」

「言えなかつたんだろう」

ぼそりと仁識が言う。確信を込めた響きに、須樹は首を傾げる。

「今回のことも、若様は私達には何も伝えるつもりはなかつたはず  
だ」

「ああ、そうだろうな」

これには須樹も頷く。祭礼の一日目、火つけの犯人が捕われたと  
いう話を、彼らは鍛錬所たんれんじょで知った。晴天の霹靂ひらいだった。灰から來螺  
の力を借りると聞いていた彼らも、これほどに早く、しかもこれほ  
どに衝撃的な形で事が行われるとは知らなかつたのだ。そして一夜  
明け、火つけの犯人の逃亡という前代未聞の出来事が起こった。

一体何が起こっているのか、話を聞こうにも灰がどこにいるかさ  
えわからない。そんな彼らの前に一人の男があらわれ告げたのだ。  
灰が、來螺の者達とともに逃亡した犯人を捕えようとしていること  
を。そして男は感情を窺わせぬ声音で一言、言った。 あの方を  
助けていただきたい、と。

「なあ、あいつ怒つてなかつたか？」

治都が言うあいつとは灰のことである。夕刻、街の見回りを共に  
した面々を引連れ、犯人を捕えるのに協力したいと申し出た彼らに  
灰は驚いたようだった。そして一瞬、その顔に過つた表情のことを  
治都は言っている。

「怒つてたな、かなり」

須樹が冷静に言えば、治都はがしがしと頭をかく。

「なぜだ？ 俺達のことを邪魔なのか？」

「別にそういうわけじゃないだろう」

仁識の素気ない言葉に、須樹は頷いた。

「多分灰は俺達に対してどうこう思っていないだろう。むしろ巻き込みたくない、と考えてるだろうな」

「短気なうえに変に心配症だ」

仁識がぼつりと言った。

「じゃあ、何を怒ってたんだ？」

その問いに、仁識は答えなかった。答えぬまま、その眼差しが一点を凝視している。

つられるようにしてその先を見やった須樹と治都が息を呑んだ。

視線の先、街の一角が不吉な色彩に染まっている。夜の大気を侵食して、その紅はゆるりと立ち昇っていた。暗夜をなぶる炎の揺らぎ

「動いた！」

彼らは人の背よりも遙かに高い壁から一気に飛び降りると、一散に駆け出した。多加羅の街には不慣れな自警団の若者達の前を、若衆が先導して走る。

街を囲む壁、その四方に散っていた若者達が一斉に炎を目指していた。

その同じ炎を、灰もまた街の南西にあたる壁の上で目にしていた。「出やがったな！」

自警団の一人、イーリヤが叫ぶ。

火の手があがったのは街の外延部、それも最も隔壁に近い界隈であった。祭りの光に溢れる街中とは違い、そこは粘つくように深い闇に包まれていた。もっともそれはその地域が特殊な場所なせいでもある。そこは収穫した金笹きんざさを貯蔵する倉庫が立ち並ぶ区域だった。人が居住する場所ではないため、夜は殊更に闇が深い。

灰達が倉庫の建ち並ぶ一角に走り込んだまさにその時、正面から走り来る須樹達の姿があった。双方ともに外延部に近い場所にいた者ばかりである。彼ら以外はまだ辿りついていない。人数にして十数人、街を見張っていた若者達の三分の一程である。

「どの建物だ！」

苛立ったように一人が叫んだ。遠くからは明瞭に見えた紅蓮の炎も、建ち並ぶ倉庫に阻まれて位置が掴めない。

「こつちだ！」

言いながら走り出したのは仁識だった。どうやら壁の上で炎に氣付いた時点で、どの倉庫からの出火か掴んでいたらしい。

「さすがだな」

後を追いながら思わずといった体で呟いた冷都が、他ならぬ自身の言葉に顔を顰めた。

「別に褒めたわけじゃないぞ！」

誰への言い訳なのか、一人でぶつぶつと呟いている。隣りを走る須樹は思わず苦笑し、表情を引き締めた。迷いなく走る仁識のすぐ後ろを、若衆と自警団の若者達が追う。それに紛れるようにして灰の姿があった。

やつれた、と須樹はその後ろ姿を見て思う。たった一日の間に何があったのか、先程灰と顔を合わせた時に感じたのは、少年がひどく憔悴している、ということだ。もっともそれ以上に気になったのは、当の本人がどうやら自身のその状態に氣付いていないらしい、ということなのだが。

「あれだ！」

響いた声に視線を巡らせれば、前方の倉庫の一角が燃えている。

（奇妙な……）

先頭を走る仁識は眉根を寄せた。炎は石造りの倉庫の壁をまるで蛇のように縦一直線に這い上がり燃えているが、それ以上燃え広がらないのだ。それ以前に、炎が執拗に燃えていること自体がおかしい。金笹の倉庫は特に燃えにくい素材で建てられているのだ。

若者達は倉庫の前で足を止めた。倉庫の扉が開いている。黒々と四角く切り取られた空間が虚ろに彼らの前にあった。

「誰もいないのか？」

ひそりと一人の若者が言う。灰は倉庫の中の暗がりを目を凝らした。ゆらりと闇の一部が揺れたように思った。

「誰かいるのか！」

今度は明らかに人とわかる影が倉庫の中で動いた。奥へと逃げる気配である。

「逃がすか！」

若者達が一団となって中へと走り込む。倉庫の中は空らしく、自身の手も見えぬほどの闇に足音が響いた。

「もう逃げ場はないぞ！」

前方を走る人影が足を止める。居並ぶ若者達を振り返る気配次いで、ひゅつと鋭い呼気のような音を、灰は聞いた。

闇を裂いて、炎が奔った。

弦は茫然と目の前の光景を見つめていた。彼の前には炎に包まれた建物がある。

「灰様……！」

呼びかける相手は炎の向こうである。

灰の後を追いつ、倉庫群の一角へとやって来た。倉庫の中へと若者達が走り込んで行った、その次の瞬間、内部から炎が噴き出したのである。咄嗟に中に飛び込もうとした彼を阻み、異様な早さで建物全体が燃える塊となっていた。

夜空をも暗赤色に染め上げ、建物を呑みこんだ炎は猛るように燃え盛っている。内部で何かが崩れるような鈍い音が続け様に響く。そして倉庫の輪郭がぐにやりと歪んだ、と見えた瞬間、凄まじい轟音をたてて、奇妙にゆっくりと、建物が崩壊した。

熱風が吹きつける。火の粉がしぶくように散り流れて、虚空に消えた。地面に這いつくばるように潰れた建物の残骸の上で、なおも

なぶるように炎が揺れていた。

がくりと弦の足から力が抜け、地面に膝をつく。ぎり、と拳を握りしめ、眼前の光景を睨みつけていた。

どうか、と彼は灰に言ったのだ。逃げた犯人を追うと言う少年に、どうかこれ以上この件に関わるのはおやめください、と。思惑通りに丈隼たかはやの無実を証明した、もうそれで十分ではないか。聖遣使しゅうけんしの狙いは來螺の術の使い手である。今はまだ灰にその目は向いていなくとも、このまま関わり続けられれば、いつ怪魅けみの力が相手に知れるかわからない。

だが、少年は迷うこともなく彼に答えた。

ここで逃げるわけにはいかない、と。

弦は、ただ呆然と、己の主を呑みこんだ炎を見つめていた。火災に気付いたらしい街衆がやって来るまで、彼は凍りついたように動かなかった。

そしてまた一人、物影から惨劇の場を見つめる人影があった。聡達たつである。黒曜石の瞳は冷たく炎を映す。不可思議な笑みに口角を吊り上げて、何を思うのか。やがて振り返ることもなくその場を後にした彼の姿を、見た者は誰もいない。

まろい光の粒子が降り注ぐ。煤けた大気を透かして滲むは月地上の喧騒を知らぬ気に、ただ静かに在った。

時は遡る。

神殿で神の奇跡が行われた日から一夜明けた朝のことである。火つけの犯人が獄舎から忽然と姿を消したという信じられぬ出来事が、街衆へと知らされた。

だが常にない興奮の坩堝と化した多加羅の街である。火つけの犯人の逃亡という祭礼に水を差す出来事も、享樂を減じるものではなかった。裏で何が起こっているか人々が知るはずもなく、祭礼の二日目もまた華やかに街は浮き立つばかりである。

さらなる災厄の火種は、來螺の宿営所へともたらされた。來螺の

代表者の幕舎へ一通の文が投げ入れられたのである。逃亡した火つけの犯人からの文であった。その文には、己の罪を暴いた來螺への恨みが連ねられ、そして最後に再び多加羅の街に災厄をもたらす旨の言葉が綴られていたのである。

炎ほの海とくと御覽あれ

それが、まるで來螺が披露した芸、穂の原に対する己の答えであるかのように

宿営所を預かる自警団の面々はこの剣呑な文の内容に色をなし、その後に関かれた緊急の会議は紛糾した。來螺が成したことへの報復であればこのまま捨て置きぬとする者と、火災が起こるにしても多加羅の街のことにこれ以上関わる必要はないとする者が対立し、答えが出ぬままに時間ばかりが過ぎた。

灰が來螺の宿営所を訪れたのは折しもそのような時である。弦から、聖遣使が峰瀬みよせをおとったという、その事の顛末を聞かされて知っていた灰だったが、聖遣使 聡達がどのように動くのかは想像もつかず、宿営所を訪れてはじめて文のことを知ったのだ。

内容は明らかに火つけの犯人からのもの、だが、神殿の広場での犯人の様子から、彼が再び凶事を起こすかといえれば首を傾げざるを得ない。間違いなくこの出来事の裏には聡達がいる。

すでに顔馴染みになっている自警団の若者達は我先にと、灰に文の内容を告げた。最も騒々しいのはやはりリーリヤである。

「とにかくさ、その文つてのが気味が悪いんだよ。幕舎に投げ込まれてたのも、誰にも気付かれずにするなんて芸当そうそうできるもんじゃない」

「獄舎から逃げ出すなんて、相当に危険な奴だな。あの時はそんな風に見えなかったが」

実際には警備の厳しい獄舎から逃げ出すなど不可能なのである。意図的にはかられた逃亡であることを知っている灰は複雑な思いに駆られる。これは、彼を捕えるための罠だ。迂闊だった、と灰は思う。あの幻を聖遣使が目にする可能性は十分にあった。それは灰に

もわかっていたことである。しかしたとえ目にしたとしても即座に來螺の異能者を捕えるために動くことはないと思っていた、彼の誤算である。

物思いに沈む灰へと、その時声が掛けられた。

「灰」

灰ははつと振り返る。その視線の先に、丈隼がいた。口々に喋っていた若者達がしんと静まる。灰は思わず丈隼に向かって足を踏み出していた。相手に近づくとまるで確かめるようにじっと見つめ、漸く言った。

「いつ釈放されたんだ？」

「昨日の夕方だ」

丈隼は晴れ晴れと笑んだが、やつれた様は隠しようもない。灰は眉を顰め、ひそりと問うた。

「……酷いことをされたのか？」

「いいや、ただ尋問をされただけだ」

暴力の類は受けなかったと言う。しかしたった四日の間に刻まれた頬の影が、その尋問がいかに厳しいものであったかを示している。肉体に対する暴力は行われずとも、おそらくは精神に対する拷問とも言えるものだったに違いない。

丈隼は真剣な眼差しを灰へと向けた。

「俺が助かったのはお前のお陰だ。ありがとう」

その声音に、灰は一瞬言葉に詰まる。

「俺は何もしていない。來螺の力だ」

それは本心からの言葉だった。來螺の人々が動かなければ真の犯人を明らかにすることなど到底できなかつただろう。そして灰の突然の申し出に、穂の原という高度な技術を要する芸を見事に披露してみせたのは彼らである。容易くできることではあるまい。

「いいや、お前が來螺を動かしたんだ。全て叶<sup>かの</sup>から聞いた。そのせいで多加羅の若衆を追放されたとも……」

「そのことはいい」



なおも言い募ろうとする丈隼を遮り、灰は言う。

「それよりも、逃げた犯人のことだ。來螺へと文が届いたと聞いたが」

「ああ、今幹部連中が話し合っているが……」

言いながら丈隼は幕舎を見やる。漏れ聞こえる声はどれも険しく、会議が始まって一刻程も経とうかというのに、いまだに結論が出る気配はない。

灰の表情が僅かに曇った。彼は思う。聖遣使が犯人を逃亡させてまで焙りだそうとしているのは芸に術を込めた異能者、つまりは灰である。聖遣使は危険に過ぎる。下手に関わればどのような災厄に巻き込まれるか

「おい、何を考えている」

丈隼の声に灰の思考は途切れた。振り上げば相手は探るように灰を見つめている。

「別に何も……」

「どうせろくでもないことを考えているんだろうが。俺にはわかるんだよ。そういうところは六年前と全然変わってないな。お前のことだ、一人で逃亡した犯人を見つけ出そうと考えてるんじゃないのか？」

丈隼は黙りこむ灰を見やり、穏やかに言った。

「お前な、酷い面だぞ。どうせろくに食べてもいないんだろうが。もう少し自分を労れ」

灰は虚をつかれる。思わず己の顔に手をやっていた。丈隼は苦笑し、次いで周りを取り囲む自警団の若者達をぐるりと見回して高らかに言った。

「俺達で犯人を見つけ出してやろうぜ！」

間を置かずして応、と周りが答えた。

「ああ！ 丈隼に罪を被せた奴だ。何としても見つけ出してやる！」  
「これ以上虚仮にされて黙ってられねえよ」

「多加羅だとか來螺だとかこの際どうでもいい。俺達で捕えてやる

「!

迷うこともなく口々に若者達が言う。茫然と周りを見回す灰に、  
丈隼はにやりと笑んだ。

「そうそうお前にはかりいい格好はさせられないからなあ」

ふと真剣な眼差しになると、強く、静かに言ったのだった。

「お前一人には背負わせない」

### 第三章 千那夜の月（後書き）

第二章がはじまりました。「千那夜」は「ちなや」と読みます。

第三章は第二章ほど長くはないと思います。どうかお付き合いください。

ではでは、今後ともよろしくお願いいたします！

火つけの犯人を自分達で捕えるという若者達の申し出に、自警団の幹部達ははじめこそ迷う様だったが、最後は代表者である采が決定を下した。すなわち、來螺は犯人の非道を見過ごしにはせぬ、たとえ多加羅の街のことであろうとも必ず災厄を防いでみせる、と。その決め手となったのが、灰が一人で犯人を捕えようとしている、という文筆の言葉であった、ということは当の灰自身は知らぬことである。

犯人を捕えるとは言っても、逃亡した後はどこに行方をくらませたのか、手がかりとてない。自警団の若者から二十数人、それに灰を含め、結局は地道に街を見回ることとなった。だが埒があかず、彼らは夕刻からは街の外を囲む壁の上から街を見張ることとしたのである。無論、人が立ち入ってよい場所ではないが、これよりほかに街の全体を見渡せる場所がなかったのだ。災厄を未然に防ぐことはまず無理であろう。そうであるならば、街全体を見張って災厄の被害を最小限に食い止めようとの考えである。

鍛錬所での稽古を終えた須樹と仁識、そしてそれぞれの範の若衆が彼らに合流したのもその頃である。突然灰のもとを訪れた彼らに、なぜ、と問えば答えは明瞭であった。いわく、一人の男が稽古を終えた彼らの前に姿をあらわし、灰の思惑を告げたのだという。

あの方を助けていたください　男はそう言つと、灰の居場所を教え、姿を消した。

「お前が多加羅の街に来た時、姿をあらわしたあの男だ」  
須樹の言葉である。確かに彼は弦を見知っている。

（弦が……？）

訝しく眉を顰める灰に、須樹は言った。

「とにかく、事情は聞いた。犯人から來螺に文が届いたんだろう。多加羅の街に再び火災を起こすなど、俺達も見過ごしにはできない」

弦が彼らに灰を助けるように伝えたというそれは、彼自身の思惑ではあり得ない。惣領である峰瀬みなせがそう望んだということだ。

なぜ、と灰は思う。この一件はあまりに危険である。裏に聖遣使しょうけんしが絡んでいることだけではない。その思惑に操られていると思しい犯人は、異端とされる術を弄する者である。それをわかつていながら、峰瀬はなぜ彼らを巻き込むようなことをするのか。心中に生じた疑念、靄のようなその根底に、それとはわからぬほどの小さな凝りがあった。

それが、灰がはじめて惣領家に対して抱いた明確な感情　怒りであることに、その時少年自身は気付いていなかった。

そして冴えた月凍る夜である。

「もう逃げ場はないぞ！」

倉庫の中、丈隼たかはやの言葉に前方を走る人影が足を止める。居並ぶ若者達を振り返る気配　次いで、ひゅつと鋭い呼気のような音を、灰は聞いた。

闇を裂いて、炎が奔った。

紅蓮　闇がはらわれる。立ち竦んだ若者達を取り囲むようにして炎の筋が地面を奔り、辺りが猛る紅に包まれた。さざ波のように炎はさらに広がる。一瞬にして周囲は火の海となっていた。

怪異であった。燃えるものとてない土が晒されたそこを、猛々しく揺れる炎の様は、まるで生きているかのようなようだ。炎は壁を這い上がり、建物を支える柱をもなめ尽くす。

若者達が立つ周囲だけが、丸く切り取られたかのように炎の侵入を阻んでいたが、押し包まんとする炎の熱が容赦なく彼らに降り注ぐ。

「なぜ、燃えないんだ？」

奇妙なほど明瞭に声が聞こえた。何が起こったのかわからないまま茫然と周囲を見回していた若者達はぎよつと声が出た方を見た。

猛る炎をすかして、思いのほか近くに一人の男が見えた。倉庫の奥、壁を背に若者達を見つめているのは、確かに神殿で罪を暴かれた男であった。だらりと弛緩したように立つその周りには黒々とした地面がある。そしてその外側、まるで地中から噴き出すかのように炎が広がっている。

「おかしい、なぜ燃えてしまわない……」

ぶつぶつと呟く顔には、病的なほどに表情がない。

灰は知らず拳を握っていた。男が放った炎は、一瞬にして若者達を呑みこんだはずだった。それを阻んだのは又さく駆である。自身が壁となって、彼らを包み守っている。その煌く粒子が灰には見える。だが、灼熱の気配はじりじりと増すばかりだ。

灰自身も意識を凝らし、炎を阻むように冷気の網を張り巡らせる。その外側でのたうつ炎の揺らぎが、まるで肌に触れるようにして感じられた。自然の炎ではない。男の思念に操られた異形である。殺気もあらわなそのおぞましさに精神が削られるような感覚を覚える。

「化け物……」

來螺の若者がぼつりと呟く。きり、と灰の意識が引き攣れた。

化け物　炎を自在に操り人を殺めた男はなおも不思議そうに呆けている。その瞳が、不意に灰へと振り向けられた。

「ああ、お前か。まさかお前が惣領家の者だとは。鍛錬所でお前を見た時は心底驚いたよ。私も下手をうったものだ。もっと別の者を告発すればよかったものを」

「貴様……」

丈隼が歯ぎしりするように声を絞り出す。

「ああ、だがもうそのようなことをする必要はない。これは、私の罪だ。神がお認めになった、私の罪だ。誰にも渡さぬ」

「ごう、とさらに炎が勢いを増した。辛うじて見えていた男の姿が炎の向こうに消える。」

「あいつ、俺達ともども死ぬつもりか！」

この炎では男自身とて無事には済まないだろう。倉庫の奥にいる

男の周りは火の海、到底倉庫から出ることはかなわぬ。

「助けてくれえ！」

灰の背後で悲痛な声があがった。仁識の範の一人だ。恐怖が臨界点を超えた瞬間だった。叫び声は連鎖し、数人が炎から己が身を守るようにその場に蹲る。辛うじて自制心を保っている何人かが忙しく辺りを見回すが、逃げ道はどこにもない。

「どうしたらいい、どうしたら……」

「何とか倉庫の出口まで走り抜けられないか？」

「馬鹿野郎！ 火の海だぞ！ 死んじまう！」

「だがここにも死ぬだろうが！」

みしり、と音が響いた。続いて、どおん、と凄まじい音が響く。

屋根を支える柱の一本が崩れ落ちていた。さらにその上にがらりと降り落ちるのは屋根の一部だ。生きた炎が堅牢な建物を食い破ろうとしているかのよう。その熱に、建物全体が撓んでいた。不穩に軋む音が圧するように響く。ぐわん、と空間が歪んだ。

「崩れるぞ！」

熱に顔を顰めながら須樹が叫ぶ。

「一か八か、出口まで走るしか生き残る手はないな」

荒れ狂う炎の壁を睨みつけながら仁識がぼつりと言った。

「おい、立てよお前ら。このままここで死ぬ気か！」

丈隼が言いながら蹲る若者を引きずるようにして立ち上がらせる。冶都もまたへたり込んで一人を半ば担ぎあげるようにして引っ張り上げた。

「一か八かでも、ここで何もせずに死ぬよりましだ！」

「いいか、一気に行くぞ。何も考えずに走り抜ける」

「だめだ！」

仁識の言葉を不意に鋭い声が遮った。それまで倉庫の奥を凝視していた灰が振り返っていた。

「入口までは距離がありすぎる。倉庫の奥に行かないと」

「それこそ逃げ場がないだろう！」

「逃げ道はある」

言いながら灰は炎の帳を睨みつけた。炎の向こう　そこにいるはずの男の気配が忽然と消えていた。

「あの男は必ず逃げ道を用意している。この位置では出口までは到底辿りつけない。だが、向こうならまだ何とかなるかもしれない」  
「何言ってるんだよ！　あいつは俺達も巻き込んで自殺する気なんだよ！」

叫んだのはイーリヤだった。顔を絶望に歪めながらも、灰を睨みつける。

「地下道か……」

それまで灰を凝視していた仁識がぼつりと言った。それに無言で灰は頷く。

どおん、と再び轟音が響き、振り返る彼らの前で入口に近い屋根の一角がごっそりと崩れ落ちた。入口が瓦礫の向こうに消える。

「迷っている暇はないな」

言いざま灰は周囲に煌くものへと念じた。走れ、と。それに応えて又駆が炎の壁へと突っ込む。同時に自身で紡いでいた冷気の網を、炎を穿つようにぶつける。渦巻くように力が弾けた。清涼な気配に打たれた炎がその勢いを弱め、目の前に道が開ける。その向こうに倉庫の壁が見えた。

「走れ！」

灰の一声に、弾かれたように若者達が走り出す。なぜ、炎の中に突然道が穿たれたのか、疑問に思う間もない。ただ生き延びながら脱兎の如く駆ける彼らの後を、最後に灰が追う。彼らの周囲、又駆という守りを失った空間に、なだれるように炎が迫った。

「振り返るな！」

よろめき倒れそうになる一人の腕を掴み、力づくで引きずりながら灰は叫んでいた。束の間勢いを弱めた炎が再び彼らの周りに迫る。ごく短い距離でありながら、灼熱、永劫にも思える一瞬が過ぎ、彼らの背後で、崩れおちる炎に道が閉ざされた。



大きく肩で喘ぎながら、若者達は茫然と周囲を見回していた。彼らはぼつかりと開けた空間に立っていた。燃え盛る炎はまるで壁のように周囲を取り囲みながらも、彼らが立つ空間には何かに阻まれているかのように入って来ない。むしろその場を中心にして四方に炎が噴き出しているかのような光景である。男が立っていた場所である。だが、男の姿はどこにもなかった。

「皆、無事か？」

問いに幾人かが無言で頷く。あらためて見れば、若者は全てで十二人いるらしい。

へたり、とくずおれる若者の腕を離し、灰は壁際へと近づいた。暫し辺りを見回し、しゃがみ込むと、地面の土を払う。ざらりとした感触に手を止めると、錆びた鉄の蓋がそこにはあった。周りよりも若干窪んでいる。おそらく普段は土を被せて隠されているのだろう。背後へと近づいてくる若者達を振り返ることなく、灰はぼつりと言った。

「地下道の入口だ」

鉄の蓋を開ければそこはひんやりと暗い。苔むしたような色合いの石の通路が、炎の明かりに辛うじて見えた。灰を先頭に地下道に降り立ち、鉄の蓋を閉じれば、そこは真実闇の底であった。

「誰か火打石を持ってないか？」

「あ、俺持つてる」

丈隼の問いかけにイーリヤが答えこそごと探る気配がするが、燃やすものとしてない。

「しょうがないな。このまま手探りで進むしかないだろ」

「なあ、これってどこに繋がってるのかな」

震える声で言ったのは自警団の若者だったが、誰も答えられようはずもない。と、その時、ずずん、と空間が震動し、細かな土塊がばらばらと降り注いだ。

「崩れたな」

仁識の呟きに、皆しんと静まった。つい先ほどまで彼らがいた倉庫が、とうとう炎に耐えられずに崩れ落ちたのだ、と悟る。

「あの男がここに逃げ込んだなら、どこかに出口があるはずだ」

須樹が気を取り直すように言うと、呼応して治都が皆を励ますように声を張った。

「命拾いしたんだ！ 進もうぜ！」

「で、どっちに行けばいいんだ？」

「あの男がどっちに行つたかだな」

仁識が冷静に言う。だが、男の気配は最早どこにもない。足音とて聞こえなかった。

「どうする。あいつまんまと逃げおおせちまつたぞ」

「まだそうとはわからん。追いつけるかもしれん」

灰は若者達のやり取りを聞きながら、男の気配を追おうと意識を広げようとして、息を呑んだ。くらり、と体の芯が揺れた、と思つた。闇の中でなお、己の視界が暗く閉ざされるのを感じる。咄嗟に石壁に手をつき、体を支えていた。愕然とする。感覚が広がらない。まるでちりちりと焙られるように神経が引き攣れ、急速に体温が下がっていた。虚脱 意識が、朦朧とする。

「立ち止まっても埒があかん。とりあえずこつちに行つてみよう」

言つと丈隼が一方に向かって歩き出す気配がした。ぞろぞろとそれに足音が続く。灰はぎり、と歯がみすると強く頭を振った。鋭く深く息を吸い、崩れそうな足を前へと踏み出す。

力を使い過ぎたのか 灰自身は己の怪魅けみの力がどれほどのものか知らない。そしてその力がどれほどに精神に負うものであるかも知らなかった。ここ数日、気付かぬうちに疲弊していた彼の精神が、今この時になつて怪魅の力はおるか、己の体を支えることもできぬほどに摩耗していたことに、当の本人が気付いていなかった。

歩かねば、その思いだけで灰は前に進む。地中の闇よりなお深く

閉ざされた視界を凝らせば、前を行く若者達の影が仄かに揺らめいている。その先に蹲る暗がりには広漠として深い。

気力だけで足を進めながら、灰はふと思う。なぜ、あの男は街に火をつけるなどということをしたのだろうか、と。それと同時に異端の術を操るあの男の波動、炎の感触が生々しく思い出されていた。自然に発生したものは明らかに違う、明瞭なそれ。そしてさらに考える。二度目の火災が起こった夜、峰瀬から灰が多加羅へと招じられた真の理由を知らされたその夜に、彼は頑なに感覚を閉ざしていた。もしもそうしていなかったら、あの男が放った術の波動を感じ取れたのではないか。闇に灯る蠟燭さながらに明確なその気配を僅かでも感じ取ることができていたのではないか。そうすれば、二人の人が死ぬこともなかったかもしれない。後悔の念が渦巻く。(過ぎてしまったことだ……)

実際には、気付いたところで人が死ぬのを防げたかどうかなどわからない。むしろ救えなかった可能性の方が高い。考えても詮無いことだ。わかつてはいても思わずにはいられなかった。もしも異常に気付いて、火を消し止められていれば、人は死なず、あの男もあれほどまでに追いつめられることもなかったのではないかと。

化け物　その叫びが、こびりつくように、繰り返し脳裏に木霊していた。

どれ程歩いたのか、塗り込められたような暗闇は時の感覚を狂わせる。地下道を歩く若者達は一様に黙りがちだった。通路は分岐し、上り下りを繰り返す。触れる壁や足裏の感覚から、通路として整備されている場所もあれば、自然のままに土肌が晒されている場所もあるらしい。ごつごつと突き出した角張った岩に幾人かが足を取られた。一度ならず行き止まりに突き当たり、ひき返せば方向感覚はますます覚束ない。最早どのような経路を辿って来たのかも定かではなくなっていた。

次第に疲労が募り歩調が鈍る。しかし、引きずるようなその歩み

を遅らせるのが、疲労ばかりではないことに誰しも気付いていた。彼らの間に漂う息苦しいまでの空気　時が経つほどに募る不安、焦燥　それがやがては絶望というものに変わるだろうことは明らかだった。口を嚙むのは、ただ一言でも言葉を口にすれば、決壊するように怯えを吐露せずにはいられないことを若者達が気付いていたせいである。

炎から逃れた先は無明だった。物理的な圧迫となつて押し迫る暗がりに、次第に彼らは追い詰められていた。

やがて彼らは周囲に響く足音が変化したことに気付いた。

「なんだ、こり」

一人が言つと、声は仄かな反響を残した。かなり広い空間に出たらしく、息詰まるような圧迫が減じていた。もっともかわつて感じられるのは掴みどころのない空虚な広がりへの不安ばかりである。どこかで滴の落ちる音が硬質に響いている。

「少し、休もう」

須樹の声に、地面に蹲る気配が続いた。日中から街の見回りを続けていた自警団の若者だけでなく、若衆もまた連日の厳しい稽古に疲労がたまっている。そこに追い打ちをかけるような手探りの歩みだった。すでに深夜は過ぎていようだろう。

「今、何時なんときだろうな」

ぼつりと言つた若衆に、答える者はいなかった。静寂よりも重い沈黙が澱む。

「少し寝た方がいいかもしれんな。このままでは体力を消耗するだけだ」

丈隼は言つと、ふと若者達の背後へと視線をやつた。無論、見えはしないのだが、それでも闇に慣れた感覚が仄かな気配を捉えていた。

「灰、大丈夫か？」

答えがない。訝しく眉を顰め見当をつけて近付けば、漸く言葉がかえつた。

「大丈夫だ」

普段と変わらない、少年の声である。それでも文隼は歩みを止めなかった。近づけば、灰は壁に靠着て座り込んでいるらしい。

「本当か？ さっきから大分皆より遅れてるだろうが」

問い詰める。一瞬黙り込んだ灰は、渋々といった様子で答えた。

「昨日の朝、ちよつと足首を捻った。今になって痛みが出てきたんだ」

「なんでそれを早く言わない。酷いのか」

「いや、それほどでもない」

明瞭な答えはそれ以上の問いを拒んでいた。会話を断ち切るように灰が周囲へと声をかけた。

「文隼が言う通り、少し眠った方がいいと思います。交代で眠りましょう」

微かに寢息が響く。灰は座り込み、規則正しいそれを聞いていた。万が一にも逃げた男の気配を掴めるかもしれない、それを逃さぬように見張りを交代しての束の間の休息である。最初の見張りにつくのは文隼たかはやと灰の他数人の若者だった。

文隼に足の調子が悪いと言ったのは嘘ではなかった。実際、昨日の朝捻った足首は熱をもつて疼くように痛む。だがそれ以上に、苦痛を感じる程の疲労が体に凝っていた。閉ざされた怪魅けみの感覚は戻る気配もなく、少しでも気を抜けば意識が闇に引きずり込まれそうになる。見張りを買って出たのは、一度安逸な眠りに逃げてしまえば、二度と立ち上がることができないのではないか、という漠然とした不安からだった。

「一体いつの時代に築かれたんだろうな」  
傍らからの声に、灰は首を巡らした。彼と同じく壁に背を預けて座り込んでいる文隼の呟きである。

「さあ……長い時をかけて築かれたんだろう」  
ぼんやりと灰は答える。

「なあ、覚えてるか？ まだがきだった頃、遊ぶのに夢中で、裏側うらがわに迷い込んだことがあったろ」

「ああ」  
答えながらくすり、と灰は笑った。

「後で散々叱られたな」  
裏側は來螺らいらいの暗がり、街を裏から支配する組織、耶來やらいの領域である。幼い子供が踏み込めばそれこそ無事にはすまぬ。売り飛ばされるか、下手をすれば殺される。

「俺はな、灰、あの時平気な顔をしていたが内心怖くてたまらなかつた。もう二度と家に帰れないんじゃないかと思った」

真剣な声音だった。一体どのような表情をしているのか、見えな

いからこそ声音に籠る感情は深く響く。

「その時に普段はおとなしくて俺の後ばかりをついてきていたお前が言っただよ。怖いと思えば、それに呑みこまれてしまうんだって。見えることをどう感じるかで、世界が変わるってな」

追憶に浸る声は低く静かだった。

「お前が何を言っているのか俺にはわからなかった。ただ、ぶん殴られたような、そんな感じがした。……今ならわかる。あの時、俺は虚勢を張る自分を見透かされたと思ったんだよ。そしてこいつには敵わないと思った」

僅かの沈黙の後、丈隼は苦笑したようだ。次の言葉はおどけるような響きだった。

「正直に言えばお前が憎たらしかったぞ。叶かののこともあったしな」

「叶がどうしたんだ？」

「なんだお前、気付いてなかったのか」

心底呆れた様子の丈隼である。

「叶はお前が好きだったんだよ」

「……何言ってる。そんなわけないだろ」

「相変わらず鈍いよなあ。俺が横でどんな気持ちで二人を見てたかも知らんだろうが」

わざとらしく丈隼がぼやく。

「丈隼……お前ふざけてるだろう」

「いいや、この上もなく真剣だ」

言いながらもなおも丈隼の声はどこか稚気を含んでいた。

「俺も怖かったよ」

丈隼が振り返る気配、それには目をやらず灰は言葉を続けた。

「裏側に迷い込んだ時、俺も怖くてたまらなかった。でもそれを口に出せばその思いに囚われて逃げ出せないような気がした。だから必死に逆のことを言った。そうすれば恐怖から逃げられると思った」

「なんだ、お前も虚勢を張ってたってことか」

「そうだな」

小さく笑い、呟いた。

「あの頃は、虚勢でも何でも信じていた。世界は自分の力で如何様にも変えられる。でも、それは間違っていた」

己の存在に疑問を抱くことがないほどに無垢だった。それほどまでに守られていたのか、と思う。

「お前は、俺達には見えない何かに目を凝らしているような、そんな子どもだった。俺も叶も、そういうお前を見ると、いつも取り残されたような気分になった。でも、この前六年ぶりに会った時に、何て言うか……逆の心持になった」

「……」

「俺達がお前を置いて随分遠くまで来てしまったような、そんな感じだ」

灰は不思議に思う。彼もまた叶と文隼を六年前と変わらないと感じたのだ。

「俺達は枠がないと生きていけない。常識だとか、思想だとか、信仰だとか……どれほど虚構に満ちていようと、拠所がないと人は生きていけないものなんだと思う。あまりに自分がちっぽけ過ぎて、そういうものに守られていないと、生きていけないんだ。その枠に入るために俺達はきつと多くのものを切り捨て、忘れて、見ない振りをする。でも、お前はそうやって俺達が捨ててしまったものを、今でも見続けているんじゃないのか？」

あらゆるもの、取り巻く全てのものの、自分も一部であることを知って人は慄く。雑多にして精妙、猥雑にして気高く、複雑にして明快、どの言葉もこの現をあらわすことができない。その中で、一瞬の命、朝露のように、一時移ろいゆく世界を歪に映して地に落ちる。己がそのような存在であることを知ったその瞬間から、人は足掻くのだ。足掻き、迷い、立ち止り、闇雲に生きる中で卑怯にもなれば強靱にもなる。そしてあるがままに世界を映す、その瞳を失う。だが、灰は違うのだろう。文隼はそう、思う。灰は、自分を守ろうともせず、生身で広漠とした世界に立ち尽くしている。人はそ



れを強いと言うだろう。愚かだとも言うだろう。だが、それしか生きる術を知らないのだとしたらどうだろうか。例えば、風雨に晒され、なお命を紡ぐ草木のように。

灰は小さく笑った。

「俺はそんなに強くはない。それに多分、何にも囚われずに生きるなんてことはやっぱり無理だ」

不意に、灰は思い出していった。母親が生きていたあの頃、けだるい昼と華やかな夜という二つの顔を持つ街、紅に沈む家々が刻む影、響く歌声、舞い手の裳裾の戯れ、文筆と駆け抜けた路地裏、昼間の空にたなびく洗い清められた艶やかな衣、叶が爪弾く拙く幼い音色  
幻影のように、しかしくつきりと彼の中に刻まれた記憶が、掌から零れ落ちるように掴みどころもなく浮かんでは消えた。

きり、と胸の奥が痛んだのは懐かしさのせいなのか、決して戻ることのできない時への僅かな感傷のせいなのか、灰にはわからない。わからぬままに、まるで断層のように重ねられ撓められたものを、人は誰しも奥底に抱いているのだと知る。それは記憶に沈む夕暮れの匂いのように、気付かぬうちに己を形作る欠片の集まりなのだ。

不思議だ、と灰は思う。相手の姿もしかと掴めぬ暗闇の中で、感情ばかりが生々しく晒される。隠そうとすればするほど零れ落ちるように、赤裸々に

須樹<sup>す</sup>はふと目を開いた。一瞬自分がどこにいるのかを掴みかね、周囲に凝る闇に漸くそこが地下道であることを思い出す。やはり疲れていたのか、到底眠れそうにもない状況でありながら、いつの間にか眠りに落ちていたらしい。唐突に意識が覚醒する。そして、密やかな話し声に気付いた。

「せめて時間がわかればいいのになあ」

「もしかしてもう明け方もしれない」

「助かると思うか？」

「……難しいかも。運が良ければ助かるかもしれない」

「お前なあ、嘘でもいいから、もつとまじなことを言えよな」

丈隼と灰の声だとわかる。少し離れた位置で会話を交わしているらしい。とりとめののない会話がふと途切れ、丈隼が低く問うた。ともすれば聞き取れない程の声である。

「なあ、お前、紫弥<sup>やし</sup>さんが惣領家の血を引いていることを知っていたのか？」

丈隼の問いに須樹は闇の中で目を見開いた。同時に気付く。傍らで息を詰めるような気配がし、いつから目覚めているのか仁識<sup>にしき</sup>もまた二人の会話を聞いている。視界がきかないことで感覚が冴えているのか、滲むようなその緊張まで感じ取ることができた。

沈黙、そして静かな声が聞こえた。

「知っていた。俺が七歳の頃だったかな、大事な話があると言われてそのことを聞いた」

「……そうか」

聞いてもいいか、と丈隼が呟いた。

「叶のお袋<sup>さい</sup>さんや采の親父から聞いたことがある。紫弥さんが來螺へと来た時、ひどい状態だったと。狂った母親と二人、ぼろぼろで乞食同然だったとか……。二人は多加羅惣領家から追い出されたのか？」

「ああ。祖母は先代の多加羅惣領に東方から無理矢理捕われて来たらしい。惣領が死んだ後には毒をもられ人格すら破壊されて、母さんと一緒に多加羅を追放された」

淡々と答える声音には、如何なる感情も窺えなかった。単に事実を告げているだけといった響きである。

「追放された時母さんは五歳くらいだったから、詳しいことは覚えていなかった。だからこの話は祖母の治療にあたった医師から聞いたことだと言っていた。祖母はほんの僅か正氣に戻ることがあって、その時に言っていたらしい」

息を呑むような気配は丈隼のものだろう。掠れた声で言った。

「……紫弥さんは、多加羅を憎んでいたのか？」

「多分……。はつきりとそう言ったわけじゃないけど……」

束の間の痛いほどの静寂　水を打つ雫の響きばかりが耳についた。地下水がしみだしているのか、音が途切れることはない。

「運命に従容と従うも、昂然と抗うも己次第……」

ひそりと響いた。

「祖母の話をした時に母さんが言った言葉だ。俺には母さんが何を言いたいのかわからなかった。今も正直言つとわからない」

「……紫弥さんはあれほどの歌い手だったのに多加羅の興行には一度も行かなかった。多加羅のことを秘して生きていた。つまり、そういうことじゃないのか？　多加羅を拒絶し、その地を踏まないことが、紫弥さんには運命に抗うつてことだったんじゃないのか？」

答える声はなお静かだった。

「俺も少し前まではそう思っていた。母さんは母さんなりに、理不尽な境遇に抗っていたんだと。でも最近わからなくなる。もしかして、何もかもを諦めていたんじゃないかと思うことがある」

ふと息をつく気配　蟠る闇に、惑う沈黙が揺れる。

「なあ、灰、もしも俺達が無事この穴蔵から出られて助かったとしてだな」

からりとした口調で丈隼が言った。

「お前來螺に戻って来ないか？」

すつと鋭く息を呑む気配は誰のものなのか　須樹は我知らず拳を握りしめる。

「自警団の連中も今回の件でお前のことを認めている。もともとお前は來螺の街衆なんだし、誰も反対はしない。何より、俺がお前には戻って来てほしいんだよ。……この街は綺麗で豊かだが、外の者には冷たい。若衆もお前の言葉には耳を貸さずに追放した。仲間の手を差し伸べようともしなかった」

全員が全員そうじゃなかったようだがな、と呟き、続く言葉は低い。

「お前、多加羅にいて幸せか？」

何の銜いもなく、真摯な問いだった。沈黙、それ自体が一つの答えだった。

「來螺に戻って来いよ」

ひそりと響く丈隼の言葉に、灰は答えなかった。遠く清冽な水の音だけが響いていた。

あたり、と櫛が鏡台の上に落ちた。手から零れ落ちたそれにも気付かぬまま、叶はぼつりと呟く。

「嘘……」

蠟燭の仄かな灯りに浮かび上がる叶の顔は青褪めていたが、それでも瞳は目の前に立つ男、采をまっすぐに見つめていた。

采は淡々と告げる。

「現場に駆け付けた時にはすでに倉庫は焼け落ちていたそうだ。火勢が強くて、もしも中に人がいたら助かることはまずないだろうということだった」

「でも、丈隼達の中にいたかどうかなんてわからないわ」

「無論そうだが、彼らの行方が知れぬのも事実だ」

幕舎の中に重い沈黙がたゆたう。叶の後ろにある鏡台の、その小さな鏡に映る己の顔を采は眺めた。ふと、幕舎の中が仄暗くてよかつた、と考える。表情の険しさは隠せなくとも、その顔色の悪さは暗がりにも紛れてわからぬだろう。動揺は更なる動揺を、絶望は更なる絶望を呼び起こすだけだということを知っていた。何より、彼は容易く感情を悟られることは許されぬ立場にある。

采がいるのは女性の奏者達にあてがわれた幕舎の中である。夜も深まり、その日の興行を終えた数人が思い思いに寛いでいた。そこへ、突然采が訪れ告げたのである。火つけの犯人を追っていた若者達、丈隼とイーリヤを含む自警団の若者が五人、そして灰と六人の若衆が火災に巻き込まれて命を落とした可能性がある、と。

「灰の話では火つけの犯人は異能であるかもしれない、ということ

でしたね」

ぼつりと叶が言った。睨みつけるように地面を見つめるその顔を、解いたばかりの栗色の髪が渦を巻くようにして包む。

「そうだ」

「では、その火災も、犯人が異端の術で起こしたものでしょうか」

「それはわからん。だが、石造りの空の倉庫が燃え落ちるほどの火災というのも奇妙な話だ。火の回りも異常にはやかかったと聞く。異端の術である可能性は高い」

叶はなおも俯いたまま、口を閉ざす。その姿を暫し見やり、采は静かに言った。

「とにかく、明日になれば崩れた建物の状態を調べることかなおう」

そうすれば、少なくとも人が死んだか否かは明らかとなるだろう。だが、それを口に出して言うことは采にもできなかつた。彼自身もまた、この突然の出来事に殴られたかのような衝撃を受けていた。

それでも常と変わらぬように振る舞っているのは、宿営所を預かり自警団の一角を担う者としての自覚と、それまでの経験のなせる技である。

「明日も興行がある。もう寝た方がよい」

それだけを言うと、采は幕舎を後にした。

叶はがっちりとした男の背が夜の中に消えてもなお、その場に立ち尽くしていた。一声でも発すれば、情けなく名を呼んでしまいそうだった。少しでも身動きをすれば、たまらずに蹲って泣き叫んでしまいそうだった。叶は強く瞳を閉じた。

采と叶の遣り取りを聞いていた奏者達が、無言で立ち尽くすその姿に気まずげに身じろぐ気配がする。中の一人、叶とさほど年の違わぬ娘が見かねたように声をかけた。

「叶、きつと大丈夫よ。文隼達だって、たまたま街で迷ってるだけかもしれないでしょう？」

おずおずと言うその娘を叶は振り返らなかつた。言つた娘自身か己の言葉が気休めにもならぬことに気付いたのか、それきり黙り込む。

「ごめんなさい。ちよつと風に当たつてきます」

ぼつりと言うと叶は静かに幕舎の外へと出て行つた。それを思わず追いかけた娘は、背後からびしりとかけられた声に足を止める。

「おやめ、一人にしておやり」

優しげな風貌の年配の奏者だつた。

「でも……」

「お前も早く寝た方がいい。明日寝不足の顔を客に見せる気かい？」

娘は渋々といった様子で頷くと、小さな寝台に座り込む。

「明日、叶は興行を休ませてあげたらどうでしょう。……こんなことがあつたのに客の前で演奏させるなんて可哀そうだわ」

娘はさほど自警団の若者達を知っているわけではない。だが、行方がわからない丈隼という青年が、叶とは幼馴染のような間柄であることを知っていた。年配の奏者はまだあどけなさを残す娘の顔を暫しじつと見つめ、穏やかな声音で言つた。

「あたしらはね、どんな時でも笑つて舞台に立たないと駄目なんだ。決して客に涙を見せてはいけない。辛い時でも笑つて見せるのが來螺の芸能家なのさ。それができないようだったら芸能家として、あの街では生きていけないんだよ。あの子もそれをわかっている」

そうして偽りの笑顔で客を欺くのだ。欺くのは果たして客だけなのか。享樂の幻影の下、いくつ殺される心があるのか。だが、そうやってその奏者自身も來螺で生き抜いてきたのだ。どれほどに酷い傷も笑顔一つに隠し、ただ生き抜かんがために生きてきたのだ。年経た奏者の深い眼差しに娘は漸く頷くと、ちらりと幕舎の入口を見やり、寝台に入った。

叶は一人、黒を塗り込めたような夜の中に佇む。吐く息は白い。きんと張りつめた冷気に、冬の気配が混ざっている。秋は、終わる

うとしている。

薄手の衣一枚、容赦なく体温を奪われながらも、叶は微動だにしない。不意に己の体を腕でかき抱く。そうして体の奥底から込み上げてくる震えを抑えた。心中にあるのは、滾るような強い思いである。

（まだよ。まだ決まったわけじゃない。死ぬわけがない。死んだなんて信じない）

心の中で、呪文のように何度も呟いていた。遠く、灯火に浮かび上がる多加羅の街は幻想的に美しい。宿営所の篝火さえ、その街を飾るかのようである。

見上げれば天空には銀の月があった。玲瓏と光り輝く月は美しかった。こんなにも美しいものであつたらうか、と叶は思う。そして嘗てもこんな月を見たことがあつた、と不意に思い出した。あれはいつだったか、月を見つめる彼女の髪を母親の手がやさしく梳いていた。そして、まだ幼い少女であつた彼女に、母親は静かに、強く言い聞かせたのだ。

叶、よくお聞き。私達はね、必死で堕ちまいとしがみつかなくてはいけないの。少しでも己の弱さに負けてしまつたら、墮ちるのはあまりに容易い。私達が生きるのは、そういう世界なのよ。決して涙に溺れてはいけない。それは自分を弱くするだけ。辛い時ほど、下を見ずに、誇り高く顔をあげていなさい

なぜ、今この時に母親の言葉を思い出すのか、叶にはわからなかった。しかし、彼女の芯に刻み込まれたその言葉が、ともすればくずおれてしまいそうな自分を支えていた。

（ええ、わかつてるわ。お母さん。よく、わかつてる。私は決して泣いたりしない）

叶はかみしめるように思う。多加羅の街をじつと見つめながら叶は胸の前で手を組んだ。何かを願うように、そして何かが心の内から零れ出すのを防ぐように。

一流の奏者だつた母親には両親がいなかった。娼婦であつた祖母

は過酷な生活の末に体を壊し、貧しさの中若くして死んだ。祖父は顔も名前も知らぬ。祖母の客の一人だったと聞く。そして叶の母親が祖母と同じ道を歩まなかったのはひとえにその見事な器楽の才故であった。楽都らくとの主人にその才能を見出されていなければ、やがて辿る運命は決まっていただろう。

母親は叶に厳しく奏術を叩きこんだ。一芸に秀でること、それが來螺の底辺に生きる女にとって、暗がりから這い出す唯一の方法であることを知っていたのである。その母親も、灰の母親、紫弥が無残に殺された数年後、病でこの世を去った。まるで姉妹のように育った無二の存在の死、その悲しみが、もとより病弱だった母親の命を削ったの明らかだった。

強く美しく、そして儂い母の面影を叶は思う。

采がもたらした報に泣くのは容易い。だが、まだ彼らが死んだと決まったわけではないのだ。涙を流すのは己を憐れむだけの行為でしかない、と叶は思う。

（私は決して泣かない。諦めたりなんかしない。彼らは絶対に生きている）

どうか、無事で 声にならない言葉を叶は繰り返す。

篝火が歌うように揺れていた。



文隼は暗闇の中身じろぎする。そろそろ見張りを交代するために寝ている連中を起こす頃合いかと考える。座るうちに石の冷たさと夜の冷気に体温を奪われ、それに疲労が重なって体が重い。

隣りに座る灰かいの気配を文隼は探った。眠ってはいないだろう。来螺に戻って来いという文隼の言葉に、とうとう灰は答えず、その後何時しか会話は途切れていた。気まずさを感じるわけではないが、どこか互いに憚るような沈黙である。

文隼が声をかけようとしたまさにその時、灰がぼつりと呟いた。

「水だ……」

凍りついたように座り込んでいた灰が僅かに身を起こす気配がする。

「なんだって？」

問い返す文隼に、灰が答える。

「だから、あの水が落ちる音だよ。さつきから途絶えることがないだろ。地下水脈があつて水がしみだしているのだとしたらかなりの量が溜まっているのかもしれない」

不審気な文隼の気配に気付いたのか、少年はもどかしそうに言葉を継いだ。

「さつきから聞こえる水音が、変にばらけてるから不思議だったんだ。遠くに聞こえる時もあれば、近くに聞こえる時もある。所々に水溜りがあるのかと思っただけ、もしかして一箇所に大きな地下水の溜まり場があるのかもしれない」

「……」

「それに地下道には雨水も流れ込んでいるはずだ。今までどれほどの大雨が降つても地下道から水が溢れたことがないということは、水が流れ出す仕組みがあるのかもしれない。その水の道を辿れば、この地下道から抜けられるんじゃないか？」

丈隼の頭が漸く言葉の意味を捉える。

「つまり、どこかに水の溜まり場だかなんだかがあって、その水が流れ出る先に、外へと出られる場所があるってことか？」

「あるかもしれない、ということだ」

灰が用心深く言うも、丈隼はすでに声を弾ませている。

「いや、あるんだろう。確かにこの地下道は水はけがよすぎる。雨の少ない時期だとは言っても、山が近いし地中からしみだして来る地下水だってあるだろうしな」

暫し後、短い眠りから目覚めた若者達は、水の溜まり場を探し、水の流れ出る道を探し出せば外に出られるかもしれない、という灰の言葉に俄かに活気を取り戻した。たとえ外に出られるかどうか定かではないとしても、明確な目的に向かって歩くのと、あてもなくただ暗闇を彷徨い歩くのとは雲泥の差である。

休息を取るのももどかしく、そのまま若者達は水音がする方へと向かった。がらんと開けた空間を、音だけを頼りに進むと、一つの通路の入口に突き当たった。一人が通れるくらいの細い通路である。そこを注意深く進めば、空気の中に、柔らかく纏わりつくような冷気が混じる。

「水の匂いだ！」

進むうちに、微かに清しみかな響きが聞こえてきた。水が流れる音である。

「やっぱり、どこかに流れる道があるんだ」

興奮しながら囁き合う。道なりに進みながら通路の角を曲がったその時、不意に明瞭な水音が耳に飛び込んできた。道が唐突に途切れ、先程よりもさらに大きく開けた場所に出たことが足音でわかる。そして周りを押し包むような圧倒的な質量感で、眼前にたゆたう存在に誰もが気付いていた。

「これは水溜りどころじゃないな」

ひそりと須す樹こが言った。闇の中で感覚の鋭くなった彼らには、それがかなりの大きさであることを感じ取ることができた。

水の淵へと辿り着いた彼らは、注意深く辺りの様子を探った。どうやら、もともとから水を貯めることを目的に設計されているらしく、水の周りには一人が歩けるほどの通路が設えられていた。通路の横の石壁を手で探れば、僅かに傾斜していて、空間全体が円状になっていることを窺わせた。その天井から雫が落ちては水面を叩いている。かなりの高所から落ちているのだろう、鋭く響き渡るその音は灰達が耳にしていたものである。

水を口に含めば、疲れた体に沁み渡るようだった。

再び歩き出した彼らには僅かながら活気が戻っていたが、水の周りを囲む通路を歩くのは想像以上に困難だった。水に浸食され劣化しているのか、細い通路はどこどころ崩れ落ち、苔藻が蔓延っているらしく気を抜けば足を取られそうな恐怖を覚える。何も見えぬ中掴むところとてない壁に縋るようにして彼らは進んで行った。

「足を踏み外すなよ」

「この水、どれくらい深さがあるんだろうな」

「くそ、明かりがあればな」

注意深く足を進め、漸くせせらぎの音のもとへと辿り着いた時には、誰もが全身にびっしょりと汗をかいていた。

「ここか……」

手で探れば壁の一部がぼっかりと口を開け、新たな地下道があった。そして地下道の中央部、横幅のある溝を、涼しげな音をたてて水が流れている。貯められた水が一定以上になれば流れるよう絶妙な深さで溝は穿たれている。

「本当にあつたんだ……」

知らず幾人かが息をついた。外に出ることができるかもしれぬ、その思いゆえの安堵の溜息である。息詰まるような空気が弛緩しかけたその時、仁識にしきの静かな声が響いた。

「この地下道もどこまで続いているかはわからん。途中で進めなくなることも覚悟しておいた方がいいな」

冶都やとが苦々しく言う。

「だが、外に水が流れ出ているところに繋がってる可能性が高いんだろ」

「だから尚更だ。水を流すことだけが目的であれば、人が通れる必要はないだろう。どこまで進めるかわからん。途中で行き止まりになっている可能性もある」

しん、と場が静まる。苛立たしげに舌打ちをしたのは自警団の若者だった。

「こんな時にそんなこと言うなよ。やっとどうにかなるかもしれんというのに」

「こんな時だからこそ安易に気を抜くなと言っている」

反駁しようとした若者の言葉を、須樹の落ち着いた声が遮った。

「ここで争ってどうする。進んでみなければわからないだろう。ただ、仁識の言うことも一理ある。俺達は全く未知の領域に入り込んでいるんだ。それを忘れるなということだ」

地下道の先に何があるのかまだわからぬ。見通せぬその暗がりである。険悪になりかけていた雰囲気は解け、かわって新たな緊張が張りつめた。

「進もう」

丈隼が先頭に立ち、新たな地下道へと踏み込んだ。

その屋敷は惣領家の屋敷とも程近い街の中心部にあった。いずれも歴史と権威を感じさせる壮麗なつくりの建物が建ち並ぶ界限にあつて、比較的新しいものだと言えるが、極力装飾を排した外観は厳めしく堅牢である。そして現在の屋敷の主もまた、その言葉にふさわしい人物であった。三人の玄士の一角を占める絡玄らくげん 真の名を絡注らくちゅうというの屋敷である。

絡玄は窓辺に佇み、祭礼に酔う街の中、静寂を湛える神殿を見つめていた。家々が灯す明かりに仄かに浮かび上がる神殿は、しかしその一際美しい三塔が空の闇に押し包まれている。

確たる存在としてそこに在るのは単なる建造物でしかないが、人が神に祈り、その慈悲に縋るには媒体が必要なのだ、と彼は考えていた。もつともそのように考える彼にしても、神殿を前にすれば神の前にひれ伏す敬虔な思いに駆られずにはいられない。

煩雑な玄土としての日々を送りながらもかつてと変わらず続けていることの一つに、この窓辺での祈りがある。幾分高台にある屋敷からは神殿がよく見える。絡玄はすべての命の根源であり絶対的な真理を抱く神へと、瞳を閉じ無言で祈りを捧げた。

その時、扉が叩かれた。

「入りなさい」

静かに入って来たのは彼の第三子、加倉である。扉を閉めるとどこか強張った表情で姿勢を正した。それでもなお、絡玄は窓の外を見つめていた。彼が声をかけるまで、この息子が言葉を発することはない。

「お前に聞きたいことがある」

言つと、漸く絡玄は振り返った。

「なんでしよう、父上」

答える加倉はこれ以上ないというほどに背筋を伸ばして、父親を見つめた。深夜の突然の呼び出しに、隠しきれぬ戸惑いが顔に浮かんでいる。

「今夜、倉庫街で火災が起こり、若衆わかじゆうがそれに巻き込まれたそうだが、表情も変えずに言った父親とは対照的に、加倉は啞然とした表情になる。

「……知らなかったようだ。逃げた火つけの犯人を追っていた若衆数人と來螺らいらの連中が、火災により崩れた倉庫の下敷きになったらしい。同じく犯人を追っていた別の若衆がそのことを警吏けいりに申し出た。直接に見たわけではないが、行方がわからず、巻き込まれた可能性が高いとな」

絡玄は言葉を切ると、暫し加倉を見つめた。加倉の背を冷たい汗が伝う。聞かされた内容もさることながら、まるで内心を見透かそ

うとするかのような父親のその眼差しが、彼には恐ろしかった。幼い頃から常にそうであったように、彼は視線を受け止めることができず、僅かに俯く。

「私がお前に何を言いたいかわかるか？」

ひゅつと加倉の喉がなる。何か言葉を出そうとしながらも、思考は空回るばかりだ。

「わからぬか」

叱責ではなかったが、加倉はびくりとする。

「なぜ、多加羅の若衆が來螺の者と行動をともししているのだ。若衆頭のお前がなぜ、それを見過ごしにしている。來螺の連中がどれほどに害悪をもたらす存在か、わかっているだろう」

続く絡玄の声は一層冷やかに低い。加倉にとっては父親の静かな声は罵声よりも恐ろしいものである。

「それとも、お前は己が従えるべき者の行動も把握していないのか。若衆頭が全体を掌握できていないということが。そうであるならば、若衆頭としての務めを果たしているとは言えぬ」

加倉が青褪めた。それを絡玄は見つめる。息子である加倉が絡玄からすればあまりに聡明さを欠くにしても、彼の心中に生じたのは落胆でも怒りでもない。だが、加倉の顔に浮かぶのが愚鈍ではなく怯懦であるのが絡玄には不快だった。

「違います……」

漸く加倉が言葉を押し出した。

「それは違います、父上。私は、そのような……若衆頭として、己の役目を全うしております」

「では、今回の一件はどういうことだ」

「それは……」

加倉はごくりと唾を飲み込んだ。唐突に顔をあげると、早口に言った。

「彼らに火つけの犯人を追うように命じたのは私です。祭礼三日目を前に、街に災いなす輩を野放しにはできませんゆえ、私が命じま

した。來螺の連中とともに動くなどあり得ません。來螺の者がその場に居合わせたのはたまたまでしょう」

「私に偽りを申すか」

「断じて……断じて偽りではございません！」

なおも青褪めたまま、加倉は震える声で言う。絡玄は目を細めてその様を見つめ、やがて飽いたように視線を逸らせた。

「若衆が火災に巻き込まれたかどうかはまだはっきりとはわからぬが、明日になればそれも明らかになるう。だが、火つけの犯人を捕えることは警吏の管轄、いらぬ手出しをしたうえ、人死にを出したとあらばお前への責めは免れぬ。そのようなことも考えなかったのか」

加倉の視線が忙しく泳ぎ、目の前の父親を窺う。

「無論……無論、考えは致しました。ですが、危険な重罪犯を見過ごしにすることなど到底できません。私は、街のためを思つて……」

絡玄は手を振って加倉を黙らせる。偽りを重ねる言葉をそれ以上聞きたくはなかった。何より、姑息さは彼の最も嫌うところである。だが、それを咎めることもなく絡玄は考え込む。

絡玄が目指す道にこの息子はどのような役割を果たすだろうか。否、どのように使うかを考えるべきかもしれない。体を縮めるようにして立つ青年は、しかしその身に若衆頭の名を負い、行く行くは南軍の中でも要職に就くこととなるだろう。愚かしい言動の背後にあるのが絡玄への恐れと浅薄な保身であるならば、奸智に長けていないだけいつそ扱いやすいというものだ。そして、絡玄の意のままに動けば、才智に恵まれぬこの息子にも栄達の道は開かれている。

絡玄は感情を窺わせぬ声音で言った。

「そこまで言うのなら、必ず犯人を若衆で捕えてみせよ。逃亡犯を來螺が捕えるようなことがあってはならぬ。そのようなことあらば、我ら多加羅の者にとってこの上なき恥辱となるう」

「は、はい」

「もつ下がってよい」

安堵のせいか、それとも新たに沸き起こった不安のせいか、奇妙に顔を歪めた加倉は、静かに一礼すると部屋を出て行く。その姿を最後まで見届けることなく、絡玄は再び窓の外を見やった。

惣領家からの使いの者が、若衆と來螺の自警団の若者、そして灰が火災に巻き込まれた可能性があると絡玄に告げたのはつい先程のことである。使者は暫し静観せよとの峰瀬みなせの言葉をも伝えていた。裏に聖遣使しょうけんしが絡んでいては容易に動くこともかなわぬ、ということか。しかし、それだけなのか、と絡玄はふと思う。常に的確な判断を下す峰瀬であつても、今回のそれは冷静に過ぎはしまいか。まるで確信しているような

(誰も死んだ者はいないと……?)

いずれにせよ、彼にとつて最も気になるのは來螺の動向である。玄土である彼は、聖遣使が峰瀬のもとを訪れたことも、來螺の異端を狩り出すために犯人の逃亡がはかられたことも知っている。あの聖遣使がどのような手段を使ったかはわからぬが、どうやら來螺は犯人を追っているようだ。聖遣使の目論見通り來螺の異端が狩り出されればよし、だがまかり間違つて來螺が犯人を捕えるようなことがあつてはならない。多加羅の獄舎から犯人が逃亡したというだけでも醜聞であるうえに、その犯人を、この地にあつて來螺の者が捕えるなど、多加羅にとつてはこれ以上の不名誉はない。

加倉が語った言葉が偽りであることは明らか、だが、彼が望むように事が運ぶならば、それも利用するまでだ。万が一聖遣使が事を仕損じた時、犯人は必ず、多加羅の者が捕えねばならない。

また一つ、絡玄には気にかかることがあつた。火災に巻き込まれたという若衆は、加倉のあずかり知らぬところで独自に動いたのだ。おそらくは來螺と行動をともしていた。そして、と絡玄は目を細めた。來螺と若衆を繋いだのは間違ひなく惣領家に新たに迎え入れられたあの少年、灰だ。

彼自身忘れていた、その存在である。

來螺の出身であり、今回の火つけの騒ぎでは誤つて捕えられた來



螺の青年を救うために、若衆を抜けたという。そして、先日あの騒ぎである。來螺の芸能家の集団が、あるうことか、神への供物と謀って異端の術を弄した。絡玄には許し難いことだ。

あの少年が一連の出来事に関わっていたのかはわからぬ。しかし、と絡玄は考える。來螺が動いた背景にはあの少年がいたのではないか。そう思わずにはいられぬほどに、來螺の行動は予想外のことであった。今までの來螺ならば、多加羅との関係を壊す危険を冒してまで仲間を救おうとはしなかっただろう。常ならぬ、何かがあったのだ。例えば、あの少年が多加羅惣領家の権威を利用したとは考えられぬだろうか。もし、そうであるならば

(どうやら、とんだ食わせ者のようだな)

なぜ、今まで迂闊にも灰の存在を見過ごしにしていたのか、と絡玄は苦々しく思った。彼だけではない。同様に、少年を受け入れることに強硬に反対をしていた者達も皆、何時の間にか口を噤んでいる。あるいはこれが峰瀬の思惑だったのか。少年を厚遇せず、敢えて人の目に晒さぬことで、いつしか少年がいかに異質な存在であるかを人は忘れていた。やがて多加羅の者にとって少年の存在は自然なものとなっていくだろう。それが全て、峰瀬が意図した結果であるとするならば、このうえもなく巧妙である。

謁見の間で一度見ただけの相手、まだ少年でありながらもますます前に前を向くその姿が脳裏に浮かぶ。その時に覚えた感覚が明瞭に蘇っていた。相容れぬ、決して服おうとはせぬ存在だと、その時絡玄は確かに感じていたのだ。

異端、と。

神殿の側近くの家が明かりを消したのか、清浄な白壁の一角が夜の中に沈んでいた。その大半を闇に吞まれた神殿は、彼の目にはまるで無明に取り巻かれているように見えた。

新たな地下道は、道幅が狭かった。自然と若者達は縦に広がって歩くこととなる。横を水が流れているためか、夜の底に沈む冷気はなおさらに纏わりつくようであった。歩き続けて汗ばんでいた体が、何時の間にか体温を奪われている。

「らしくないよな」

須樹すぎの後ろで冶都やとが呟いた。

「何がだ」

「さっきの仁識にしきだ。普段から口の減らない奴だが、あの場であんなこと言わんでもいいだろ。あれでは皆の不安に拍車をかけるだけだ」

「まあ、な」

曖昧に答えながら、須樹は前を歩く仁識の気配を探った。確かに仁識らしくなかった、と思う。彼は言葉こそ辛辣ではあるが、冷静に場を読み、人を気遣うことを知っている。それは須樹自身が見回りをともにするうちに気付いたことである。そして仁識の範の若者は誰もが彼を慕っている。それもまた彼の人となりをあらわす一つの証左であった。

仁識は動揺しているのだ、と須樹は思う。掴みどころのない感情を持って余し、苛立ちを感じている。原因はわかっている。先程はか  
らずも聞いてしまった灰かいと丈隼たかはやの会話のせいである。灰が語ったその内容は、彼らにとってあまりに衝撃的なものだった。須樹自身も、靄もやのように蟠る感情を抱き続けている。

先代惣領の寵愛を一身に受けていた、という灰の祖母にあたる女性のことを彼も知っている。來螺らいらの娼婦であったと、身の程知らずにも惣領の愛を独占し、妻から夫を奪った性根の卑しい者であったと口さがなく言う者も多い。多分に悪意が込められ誇張された話であるにせよ、灰が惣領家で冷淡に扱われている背景には、先代惣領にまで遡る確執のせいもあるのだらうと彼は考えていたのだ。

だが、彼らが聞いていた話は歪曲されたものであり、真実ははるかに残酷なものだった。

多加羅惣領家は一人の女性の人生を歪め、貶め、果ては人としての全てを奪った。灰の母親としてそうだ。幼くして追放され、流れ着いた來螺でどのように生きたのか。壮絶な人生であったに違いない。(お前は多加羅を憎んではないのか?)

灰にとって多加羅惣領家とは、祖母と母親を苦しめたいわば仇のようなものではないのか。だが、灰にそれを問うことなど到底できない。丈隼もまた問うことができなかったのだとわかる。淡々と語る灰の声音があまりに静かであったがゆえに、表には出さぬその秘めた思い、葛藤を須樹は感じ取っていた。容易く人が踏み込んでいいことではない。決して触れられない領域を、誰しも持っているのだ。

「劍舞けんまいに間に合うといいな……」

治都の言葉に須樹は我に返った。

「せっかく稽古をしてきたんだから、披露したいよなあ。親父やお袋も楽しみにしてるんだ」

「そうか」

家族思いの治都のこと、親に心配をかけているだろうことを気にしているのだ。

「そういえばお前、親父さんの後を継ぐかどうか決めたのか?」

唐突な治都の問いに、須樹は戸惑う。

「何だよ、突然」

「前に言っただろう。そろそろ将来のことを決めろって」

「ああ。そのつもりだが……親父には今回の祭礼が終わってから、先のことを決めると言っただけ」

「今回が最後の劍舞かもしれないってことか……お前がいなくなったらつまらんな」

気落ちしたように治都が呟いた。

「若衆を抜けるつもりなのか?」

不意に前方から聞こえた仁識の声に、須樹は一瞬言葉に詰まる。

「お前つて地獄耳だよな」

呆れたように治都が言う。

「お前の声がかいんだよ」

「悪かったな。どうせ凶体も声もでかいよ」

ぶつぶつ言う治都には構わず、仁識は再度問いかけた。

「須樹、若衆を抜けて家業を継ぐのか？」

「まだ、決めていないが、迷っている。最近はある余裕もなかったから、祭礼が終わってから決めようと思っていたんだ」

「そうか……」

「そういうお前はどうかだよ」

治都が仁識に問う。真剣な声音だった。

「行く行くは真名まなを継ぐんだろ。だいたいなんでお前若衆にいらんだ？ 家を継ぐ貴族つてのは博露院はくろういんで学問を修めるのが普通だろ」

「私はあのような場所は好かぬ」

放り出すような仁識の言葉である。

「少しでも権力たかに集ろうと媚び諂う者ばかりだ。くだらん」

「そうなのか？」

須樹は仁識が笑んだらしいことを気配で知る。見ずとも皮肉な笑みであることがわかった。

「私のように貴族の中でも大家となると、周りが煩くてかなわん。

あげく親の官位が高いというそれだけで、偉そうなのだけが取り柄の輩に頭を下げねばならん。博露院で真実学問を修めようという者はごく僅かだ。あそこは貴族の子弟にとって、将来多加羅の権力中枢で力を得んがための駆け引きの場所なんだ」

「おい、冗談だろ。俺達の年齢でか？」

「冗談なものか。そうやって骨の髄まで権力欲と家名の矜持を叩きこまれた奴らの溜まり場なんだよ」

吐き捨てる声音に、自嘲があった。躊躇いながらも治都は問う。

「お前も、そのために博露院に入ったのか？」

ふと沈黙し、仁識は淡々と言った。

「私の本意ではないが、無論期待はされていた。祖父は玄士だったが、父は玄士になることがかなわなかった。貴族の中でも、父の勢力は弱まっている。かわって力をつけてきているのが絡玄様の一派だ。父は玄士の座を絡玄様に奪われたと考えている。私に、博露院から盤石な力関係を築き、後々は嘗ての勢力を取り戻せとしつこいぐらいに繰り返していた。だが……私には全てが愚かしいと思えなかった」

「だからわざと博露院を放逐されるような態度をとったのか……？」  
これに仁識は答えなかったが、沈黙そのものが答えになっていた。  
「それで若衆に入ったのか」

「日がな一日家には気が腐る。何もしないよりはましだからなあっさりと仁識は言った。だが、おそらく容易には語れぬ思いが仁識にはあるのだろう。貴族の中でも大家の後継ぎである彼が、父親の期待を一身に背負っていたらうことは、話を聞くまでもなく想像がつくことである。博露院をやめるということが、どれほどにその期待を裏切る行為であったか 須樹も治都も、それ以上に問うことはできなかった。

三者三様に黙り込んだその時、前方から声が響いた。

「明かりだ！」

はっと前に視線を投げる。行く手に光が揺らめいていた。漆黒の闇が途切れ、まるで浮かび上がるようにして地下道が照らし出されている。流れる水が、光を反射して艶めかしく煌めいていた。だが、道が湾曲しているため、光のものは見えない。と、光にあらわになった石壁に、黒々とした影が映った。次いで足音が響き、影もまた不穩に踊る。光が、まるで逃げるように遠ざかる。いや、真実逃げているのだ。

「あいつだ！」

叫び、真先に丈隼が走り出した。

「逃がすか！」

口々に叫びながらその後を若者達は追う。彼らの他に地下道にいる者、それは火つけの犯人に違いない。抜け出すことがかなうのかもわからぬ地下道で、犯人と遭遇するなどこれ程の幸運があるうとは。若者達の誰もが、疲れも忘れて先を争うように駆けていた。

(おかしい)

灰もまた走りながら訝しく眉根を寄せた。犯人は地下道を熟知しているはずである。彼らが迷う間に費やした時間を思えば、犯人に追いつくことなど到底できないはずだ。ましてや偶然遭遇するなどという僥倖があり得るのか。

(まるで待ち構えていたように……)

犯人は彼らの動向を窺い、そして行く手に待ち構えていたのではないか。なぜ犯人が逃亡したのか、それは異端を狩り出すためである。このまま無防備に犯人を追えばどうなるのか。

「止まれ！ 相手は術者だぞ！」

灰の鋭い声に、倉庫を焼き尽くした業火を思い出したのか、若者達が立ち竦んだ。しかし声が聞こえているのかいないのか、丈隼は止まる気配がない。それを追うイーリヤの姿もある。彼らのさらにその先、手に松明らしきものを持った男の姿が、闇に滲むようにして見えた。

「須樹さん、この場を動かないよう、皆を頼みます！」

灰は背後の須樹に言々と、立ち止った若者達の傍らを走り抜けて丈隼達の後を追った。焦燥が疲労を押し、不安が体を突き動かしていた。

足音が鈍く響いた。通路はうねるように蛇行し、見通しがきかない。光を捉えたと思った次の瞬間には、湾曲した石壁の向こうに消え、行く手は闇に包まれる。前を走る丈隼とイーリヤの姿もまた、明滅するような闇と光に浮かび上がっては消えた。眩暈にも似た感覚を覚えながら、灰は叫んだ。

「丈隼！」

声が掠れる。鼓動が耳元でこだまし、体が重い。足首の痛みのせいで思うように速度が出ず、もどかしさを覚える。それでもさらに足を速めようとして、灰は背後から近づいて来る足音に気付いた。誰かが彼らを追って来ているのだろう。反響する足音から察するに一人だけか。他の者はどうやらあの場に留まってくれたらしい、と意識の片隅で思う。

その時、何かがぶつかるような激しい物音と怒声が響いた。灰ははっと息を呑む。行く手は闇に吞まれ視界がきかない。一体何が起こっているのか物音からはわからない。

灰は左に大きく湾曲した通路を走り、そして蹈鞴を踏むようにして立ち止まった。眼前に気配がある。前方、数歩の距離に誰かがいる。続いて響いた声に、それが文隼であることがわかった。

「おい、イーリヤ！ どこだ！」

「文隼、どうしたんだ」

鋭く問う。

「わからん。いきなり何かにぶつかりそうになって、咄嗟に避けたんだが、イーリヤが……」

文隼が言い終わらぬうちに、男の声が響いた。

「彼はここだよ」

二人ははっと振り向いた。奇妙なことに、声は斜め後方から聞こえる。なぜ、と思う間もなく、不意にあたりが照らし出された。一瞬、壁から光が射したのかと思い、次いで壁面にぽっかりと口を開けている通路の存在に彼らは気付いた。光はそこから漏れている。

用心深く近づき通路の入口に立てば、奥に人影があった。くすんだ灰色の衣を着た長身の男と、イーリヤである。男は左手に松明を掲げ持ち、右腕をイーリヤの首元にまわして背後からその体を捕えている。イーリヤの額からは血が流れているが、意識はしっかりしているらしく、強張った表情で二人を見やった。

「イーリヤ！」

文隼の形相が変わる。男をねめつけると、じわりと歩を進めた。

「イーリヤを放せ」

武器の一つも持たない男は、ゆるりと笑んだ。

「それ以上、近付かない方がいい。私はこの子を一瞬で焼き尽くすことができる」

丈隼がぎくりと足を止める。男の腕の中でイーリヤが蒼白になった。男は暗く落ち窪んだ目で二人を見やり、まるでおどけるような仕草で松明を振ってみせた。

「私はね、炎を自在に操ることができるのだよ。君達もさつき見ただろう？」

灰は唇をかみしめ、男を睨みつけた。そうしながらも、意識の片隅で状況を冷静に把握していた。男は彼自身が言うとおり、火を操ることができる。おそらくは松明の火を消して通路に潜み、追って来た丈隼とイーリヤを襲ったのだらう。逃げきれぬと思ったのか、それとももとよりそのつもりであったのか。おそらくは後者と、灰は考える。

灰は丈隼の背後から踏み出す。途端に男が身構えた。

「おい、灰……」

丈隼が小声で呼びかけるのには振り返らず、灰は男へと問うた。

「逃げられとも思っているのですか？」

「……………」

「多加羅の街衆はあなたが火つけの犯人であることを知っている。このようなことをして逃げることはできるとでも？」

「私は、逃げはしない」

「では、今あなたがやっていることは何なのですか？ 獄舎から逃亡し、俺達を誘い出し、一体何をしようとしているのですか？」

「私は神に与えられた役目を果たそうとしているのだ。來螺の異端を狩り出し、殺す」

淡々と男は言う。己を見返す男の眼差しに、灰は目を細めた。数日前に鍛練所でまみえた時とは違う、まるで何かにとりつかれたかのようなそれである。ちらつくように垣間見えるのは妄執だらうか。



一体何に対する妄執なのか、灰は直観が導くままに言う。

「あなたの力が何であるか知っていますか？」

男の肩がびくりと震えた。灰は容赦なく言葉を続ける。

「それは怪魅けみの力です」

灰は確信していた。

多加羅において異端とされる術の中でも、怪魅は最も忌まれる力である。怪魅師によって力が多様に異なるため明確な定義づけはないが、怪魅の力とその他の術の大きな違いは、偏に媒介を必要とするか否かに尽きる。条じょうさい斎士であれば言霊と宝珠により術を行使するように、法術や妖術と呼ばれるものは物体や確立された条理を媒介として行われる。だが、怪魅だけは違うのだ。怪魅師は己の精神のみで事象を操る。いわばその存在自体が奇跡を起こす媒体と言えなくもないが、そうであるからこそ尚更に得体の知れぬ不気味なものだと人は考えるのだ。

「あなたは怪魅師だ」

「黙れ！！」

男の叫び声が響いた。ぎらぎらとした眼が灰を睨みつける。

「私はそのように汚れた存在ではない！！ この力は神から授けられた力だ！！」

「何言つてやがる！ 火災で人を殺しておきながらよくそんなことが言えるな！」

丈隼の言葉だった。それに男は不意に笑い出す。虚ろに反響するそれに、丈隼が呆気にとられたように黙った。

「だが神は私にお咎めをくだされた！ 私を見ておられたのだ！ 神に見放された怪魅師などであるものか！」

灰がぼつりと言った。

「あなたは、街に火をつけることで神を試したんですね。真実神が坐すならば、己の罪を許すはずがないと」

「ああ、そして神はやはりおられるのだ。私の罪を暴き、断罪された！」

男はなおも笑いながら言う。灰は漸く、男の真意を悟った。なぜ街に火をつけたのか　悟ってしまった。苦い思いが胸中に込み上げる。

「だが、あなたが今やっていることは神に与えられた役目でも何でもない。聖遣使しよつげんしに利用されているだけだ」

男の笑い声が止まった。

「おい、灰、何の話だ」

丈隼の問いには答えず、灰はさらに一步男に近付いた。

「あなたを逃亡させた男は聖遣使だ。聖遣使が何を言っただかは知らないが、あなたは來螺の異能者を狩り出すための餌でしかない。利用されているだけだ」

男の顔が強張り、俄かにその表情が知的なものとなる。どこか虚ろだった瞳に、一瞬理知の光が宿った。

「なぜ、聖遣使が私を逃亡させたことを知っている？」

「聖遣使が多加羅惣領に何の断りもなく、それも警備が嚴重な獄舎からあなたを逃亡させることができるなどとお考えですか？　あなたが逃亡したことも、その目的も惣領は全て知っています」

「なるほど。惣領家の一員だから、知っていて当然ということか」  
言いながら、男の表情はまたも熱に浮かされたように歪んだ。まるで現と虚の間を揺れ動くように、正気と狂気が男の瞳に去来する。

「聖遣使とは神の聖なる使いだ。奇跡の力を恵与された者だ。彼は私に言ったのだ。來螺の異端を狩り出せば、私の力も神殿に認められるだろう、聖遣使の一員になることもかなう、と。無論、人を殺したことは罪かもしれぬ。だが、この力は神から与えられた力だ。そうであるならば人が死んだこともまた神の条理、私に与えられた試練だ。神威あまなく輝く土地に來螺の異端が紛れ込んでいるならば、必ずや私が狩り出してみせる。倉庫に君達を誘き出すという案はね、私が出したんだ。罪なき街衆を巻き込むわけにはいかないからね。異端は君達の中にあるのだろうか？　さつき燃えなかったのはそのせいなんだろう。この子の命が惜しければ、おとなしく異端が

誰かを教えることだ」

歯止めを失ったように、男は矢継ぎ早に言葉を押し出す。朗らかなほどの声音だった。

「ちよつと待てよ。異端だとかなんだとかよくわからんが、先の火災で全員殺すつもりだったのかよ」

丈隼の声にじわりと怒気が滲む。

「ああ、必要な犠牲だからしょうがない。だが、異端が君達の中にいたとは幸いだった。こんなにも早く遭遇できるとは思ってもいなかったよ」

「……狂つてやがる……」

丈隼の呟きにも、男はただ微笑むだけだった。

灰は男を見つめ静かに言った。その言葉がどれほど男にとって残酷なものであるか知りながら

「來螺が穂の原を奉じたあの時、あなたが見たのは神の奇跡ではありません」

「何を……言っている……」

「鷹閃ようせんと炎の獣、それが見えたのではありませんか？」

男の目が驚愕に見開かれた。喘ぐように呟く。

「……なぜ、それを……」

「あれは怪魅師が作り出した幻です。あなたは神の断罪と考えたようだが、異能者にしか見えぬ単なるまやかしです。それが証拠に、あなたを逃がした聖遣使も幻を見ています」

冷やかな静寂に声は落ちる。

「火つけの犯人が神殿の者であることも、おそらくは異能を有する者だろうこともわかっていました。だから穂の原に、犯人にしかわからぬものを込めた……それがあの幻です。聖遣使があなたを逃亡させたのは、穂の原に術を込めた來螺の異能者を狩り出すためであつて、あなたの力を認めただけでも罪を許したわけでもない。そうして、敢えて來螺を挑発し、犯人を追わせるように仕向けたのです」

異端には異端を　そして聖遣使、聡達そうたつ自身はそれをどこかで見

ていればいい。結果として來螺の異能者をあぶりだすことがかなわずとも、彼はすでにして一人の異端の命をその手の内に握っている。まるで盤上の駒を見るような、聡達の冷徹な意図である。

息詰まるような沈黙が続き、男がゆるゆると首を振った。

「嘘だ……。聖遣使殿は、私の力が祝福されたものだと……。その証拠に神は……。神は私の元に来られたのだ。あれが幻だなどと……」

イーリヤを捕えていた男の腕が僅かにさがった。それに気付いた丈隼が身構える気配を見せた。男は丸腰、不意をつけばイーリヤを助け出すことができるかもしれぬ。だが、男は瞬時に丈隼をねめつけると叫んだ。

「動くな！！少しでも近付けばこいつを殺してやる！！」

次いで灰を睨みつける。

「お前もだ！ そのような戯言誰が信じるものか！」

空気に殺気が滲む。灰はひやりとしながらそれを見守った。感覚を研ぎ澄ませずともわかる。男の周囲で不穩に熱気が凝っている。イーリヤの顔が引き攣り、くぐもった悲鳴をあげた。

「おい、まずいぞ……」

丈隼の囁き声もまた切羽詰まった響きだった。彼も尋常ならざる気配を感じているのだ。灰は小さく頷く。このままでは追い詰められた男が何をするかわからぬ。目まぐるしく思考を巡らせる。

次に灰が発した声は、僅かにも内心を悟らせない落ち着いたものだった。

「俺の話を信じるか否かはあなたの勝手だが、あなたは重罪犯として追われているんです。今多加羅の街では厳戒態勢がしかれていいます。若衆だけではない。警吏けいりと南軍なんぐんもあなたの行方を追っています。無事逃げ切れれると思っっているのですか？ 下手をすれば、見つかったその場で殺される」

藍の瞳が細められ、硬質な色合いに染まる。

「どうせ人質にするならもつと効果のある人物にすべきだ」

男は灰を凝視する。言わんとすることを察したのか、顔を笑いの

形に歪めた。

「……なるほど、自分が人質になるということか。腐っても惣領家の一員ならば、お前の方がよさそうだな」

「おい、灰……」

「俺は大丈夫だから、今は手出しをしないで」

灰は振り返らずに文隼に言うと、男を見据えた。

「かわりにイーリヤを解放してください」

「お前がここまで来い。そうすればこいつをはなしてやる」

低い声に頷き、灰は足を踏み出す。そのまま男の元まで行こうとした彼を、突然背後の暗闇から走り出してきた人物が、腕を掴んで引き戻した。

「自分が人質になってどうする！」

驚いて振り向いたそこに、険しい表情の仁識が立っていた。言葉には、鋭い怒りが籠っている。今更ながらに、背後からもう一人追って来ていたことを灰は思い出した。水路のある地下道の暗がりには、今までの遣り取りを聞いていたのだろう。

突然飛び出してきた人物に、男が警戒もあらわに後ずさった。首元をきつく締められたのか、イーリヤが苦しげな声をあげる。

「軽はずみなことはやめてください」

「イーリヤを助けるためには必要なことです」

「何を馬鹿なことを。余計に手が出せなくなるだけだ！ そんなこともわからないんですか！」

「おい！ いい加減にしろ！ 今すぐこいつを殺すこともできるんだぞ！」

男の苛立った声に場が凍りつく。

「俺なら大丈夫です」

灰がぼつりと言った。仁識はさらに言い募ろうとし、しかし振り向けられた灰の眼差しに言葉を呑み込んだ。

「知っているはずですよ。この中で、あの男の術に対抗できるのは俺だけだ」

ひそりと、仁識にしか聞こえないほどの声で灰は囁いた。仁識の顔が強張る。疾風のように奔り抜けた刃　灰が腕を振るうだけで道に穿たれた鋭い軌跡。あれを見ただろう、と言外に告げる灰の言葉である。宵藍を思わせる瞳が、射竦めるような強さで向けられていた。それに抗うことができず、仁識は掴んでいた腕を放す。

灰は己を見つめる二人に小さく頷くと、男に向かって歩き出した。「お前が賢いのか単なる馬鹿なのか迷うところだな」

嘲弄するように男が言った。男まで十五歩程の距離だろうか。ゆつくりと歩きながら灰は瞳を眇めた。男が発する危険な熱気に加え、その体を縁取りゆらりと立ち上がるものがあつた。

（見えるようになったのか……）

ふと、思った。地下道に入ってから今まで、灰の怪魅の感覚は閉ざされたままである。疲労のせいか一向に回復しなかったのだが、まるで絡まり合うような波動を目が捉えていた。男の体の周り、その背後に茫漠と続く漆黒よりもなお暗く揺らめきながら、湿った紙に水が沁みるように、次第に周囲に広がっていく。

男まで残すは僅かな距離、そこで灰はびたりと立ち止まった。何かがおかしい、と直感が告げていた。

「どうした、怖気づいたか」

男は突然立ち尽くした少年に声高に叫んだ。それにもかまわず灰はさらに目を凝らす。男の体を縁取ると見えた揺らぎは、炎を操る怪魅の力の波動ではない。冷たく、暗く、空間を侵食するそれが、男の体からではなく、男の背後に蟠る闇そのものから発していることに漸く気付いた。

灰の全身が凍りつく。ひたひたと音もなく彼らに近づいてくる存在　それを、忘れようなずもなかった。

何もかも呑み込み、喰らい尽さんとする、純粹なまでの欲望あるいは希求

次の瞬間灰は男に向かって走っていた。目を見開いた男の背後で、蹲っていた闇が、爆発したように膨張する。人の腕の三倍はあろう

かという太さの触手が無数に伸びて空間を奔った。炎を放とうとしたのか、松明を持つ左手を僅かにあげた男が無音のそれに振り返ったのと、灰が力任せに男の体を引きずり倒したのは同時だった。触手が掠めるようにしてその上を薙いだ。男の手から弾け飛んだ松明が床を滑る。

倒れこんだ三人目がけて、なおも無数の触手が絡まり合いながら迫った。

「逃げる!!」

叫びながら灰はもがくようにして立ち上がった。男は硬直したように動かない。その下敷きになっているイーリヤの腕を掴み、そして灰は頭上に迫る影を振り仰いだ。津波のように、圧倒的な質量が、そこにあつた。

三人の上に雪崩れるようにして闇が覆い被さった。

峰瀬<sup>みなせ</sup>は書状を閉じると卓の上に置いた。

背もたれに体を預け、ふんだんに明かりが灯された執務室を見る  
 とまなしに見つめた。煌々と照らし出された壮麗な部屋は、しかし  
 どこか寒々として感じられる。深夜をすでに過ぎていく。あと数刻  
 もすれば曙光が地平線に射すだろう。

磨き抜かれた卓の上、のっぺりと白い書状には、華麗な刻印が一  
 つある。紋章であった。紋章を有するのは帝国中枢で皇帝の側近  
 に仕える八大楼宗家<sup>はちだいろつそうけ</sup>のみ、皇帝を八方から守護するという宗家のう  
 ち、西南を司る志岐之宰<sup>しきのつかね</sup>のものであると知れる。無論、西南を司る  
 とは言っても古くからの因習による位置づけでしかなく、ただ役職  
 の特性上、そのように言われているだけのことだ。名が示すとおり  
 八つの大家からなる八大楼宗家は、それぞれが強大な力を有し、白  
 沙那帝国<sup>くわな</sup>の歴代の皇帝を支え続けている。

齢六十八になるといふ皇帝の姿を見たのはすでに十年も前のこと  
 か、と峰瀬はふと考えた。東方遠征を断行し暴虐と苛烈さで知られ  
 た先代皇帝と比べると、その穏やかな風貌は理知というよりは思慮  
 というのが相応しい表情であったと思う。最高権力者としてはいさ  
 さか覇気に欠け、しかし帝国中枢という陰謀術策渦巻く世界にあっ  
 て生き延びるだけの狡知も有しているのだろう。

もつとも帝位継承の都度、血生臭い歴史を刻む彼の一族が、個人  
 の力量と才覚のみでその位を保ち続けるのは不可能だろうことは想  
 像にかたたくない。特に今の皇帝の代になってからは、実質権力を掌  
 握しているのは八大楼宗家であるとしたり顔に言う者もいるが、皇  
 帝を不可侵の絶対権力とすることで白沙那帝国の盤石な支配体制が  
 可能となっているのだと峰瀬は考えている。そうであれば、おそら  
 く八大楼宗家と皇帝の関係は、共生というのが最も相応しいのだら  
 う。



とりとめのない考えに囚われながら、峰瀬は帝国中枢よりもたらされた一通の書状に再び視線を落とす。書状は目下の者に対するには非常に恭しい文面ではあった。だが、その内容たるや多加羅たからが白沙那帝国に屈した時代から変わらぬ。彼らが繰り返す求めるのは服従と、その証である。

その時扉が軽く叩かれた。一声かければ、密やかに弦げんが入ってきた。

「御苦勞だったな」

労いの言葉に、弦は頭を下げた。火つけの犯人を追って行方がわからなくなつた若衆わかしゅうの家族へと使者を送る差配を整えたのは彼である。

「異を唱える者はいたか」

「使者は特にそのようなことを申してはおりませんでしたので、概ね皆納得したかと」

今暫し静観して次の報を待て、というのが峰瀬から家族への言葉である。若衆達の家族がどのように反応したのか、弦の答えは簡潔だった。

「秋連にはお前自身が赴いたのだろうか。何か言っていたか」

「問えば男は無表情に答えた。」

「特には何も仰られませんでした」

「そうか」

どこかぼんやりと峰瀬は呟く。そして、ふと弦を見やると、僅かに苦笑した。

「案ずるな。灰かいは無事である」

言いながら物憂げな表情で立ち上がると、窓辺へと歩み寄る。漸く眠りに落ちた街を眺め、そして硝子に薄青く映る己の顔に目をやった。背後に立つ弦もまた藍に沈み、その表情はしかとはわからない。

「灰様は、なぜあのように來螺らいごの者を助けようとなさるのでしょうか。すでに文筆たかはやという青年の無実を証明されたのですから、これ以

上彼らに関わるのはあまりに危険です」

ぼつりと弦が言った。

「今回のことには少なからず責任を感じているのだろうが……人を助けようとするのはあれの性だ。何も來螺の者に限らぬ。そうせずにはおれぬ、ただそれだけのことだ」

「性、でございますか」

繰り返す響きに情感は籠っていなかったが、峰瀬には弦が常になく動揺しているらしいことがわかった。それが影として生きる男にとってどれほどに許されぬことであるか、果たして弦自身は気付いているのだろうか。彼らは疑問を持つことなど許されぬ。己の意思や感情を抑え殺すのが影の本分であり、惣領家の思惑を実現することこそがただ一つの存在意義なのだ。

「今我々にできることは待つことだけだ」

もしもこれで灰が命を落とすようであれば、多加羅に巢食う闇に対することなど到底かなわぬだろう。彼の怪魅師としての力がその程度でしかなかったということだ。そう考え、峰瀬は僅かに口元を歪めた。それが笑みであることに、窓に映る己の顔を見て峰瀬は気付く。弛緩したように如何なる感情もわき起こらないまま、ひどく冷淡な瞳で彼は自身を見つめていた。

ひたひたと押し寄せるように濃度を増す夜の底、見上げれば冴えた月があった。透き通る光の粒子はまるで闇を裂くようでありながら、儂い。

「千那夜の月だな」

呟きは誰にも届かず、静寂の中に消えた。

全身を押し包んだ闇に、体が絡み取られた。

抗おうとする動きをまるで察しているかのように、闇が圧力を増した。地面に打ち倒されたことを、灰は全身にはしる痛みで知る。粘る液体のように、渦を巻き流動するものが捕えた獲物に奔った。

視界を奪われながら、しかし牙を剥いて襲いかかり迫りくるもの

に、灰は抉じ開けるようにして怪魅の力を放っていた。意識の膜を突き破るように、脳裏が一瞬白く塗りつぶされる。過負荷に、精神が引き攣れた。

去れ！！

念じるままに、手をついた地面から、地中に凝る熱量を己の周りに張り巡らせた。逆巻くそれを力任せに闇に投げつける。

空間が軋んだ。

拮抗、しかし次の瞬間、闇が灰の放った力の渦を呑み込んだ。まるで咀嚼するように闇が揺れ、力は跡形もなく吸収されていた。愕然と目を見開いた灰をも喰らわんと、黒一色に塗りつぶされた周囲が、濃度を増す。

まるで厚い壁に阻まれたように奇妙に遠く、くぐもった男の悲鳴が聞こえた。凍りついたように硬直していた男が我に返ったのか、恐慌を来したその叫びに次いで、炎の紅が垣間見える。紅蓮は、しかし束の間揺れてあえなく消えた。それもまた呑み込まれたのだ。彼らの抵抗を嘲笑うかのように、ぞろりと闇が揺れ、殺到した。肉体という殻を、容赦なく侵食する。

全身を切り裂かれるような痛み　おそらくは嫌悪に慄く精神そのものの激痛に、灰はのけぞる。抗おうと咄嗟にあげかけた腕が、揉る触手によつて地面に縫いとめられた。その痛みを最後に、暗転、大地の感触が消失し、そしてすべての感覚が消えた。

灰は闇に呑みこまれていた。覚束なく、上とも下ともわからず、だが抗いようもなく引きずられる様は、落下に似ていた。

体という枠から零れ落ち、中空に投げ出されたかのように、己と存在が解ける。己と外界を隔てていたものが消失し、無防備に晒された意識はとめどなく散逸する。その空間と一体化したかのようになり、何も見えず、聞こえず、ただ寄る辺なく流動する広がりの中に漂っていた。肉体という物質から意識が引きずり出されたのか、それとも闇そのものが侵入し意識を取り込んだのか、そんなことも灰には考えることができない。

そして黒一色としか見えなかったそこに、まるで混ざりこむようにしてたゆたうものがあつた。灰には己もまたそのようにして在るということとはわからない。ただ、それが灯のように柔らかく揺れるのを、遠く、認識していた。その認識すらも、はらりと拡散する。己というものの核が、細かな粒子となつて押し包む闇に曖昧に滲んだ。それはどこか空疎に柔らかく、まどろみのものであつた。僅かに警鐘を鳴らす意識の欠片が、安寧にも似たそれに溶ける。

さらさらと解ける思考が、その時遠く微かにこだました咆哮を捉えた。狂おしく、叫んでいる。誰かを　彼を、呼んでいるのだとわかつた。それに答えようとして叶わず、灰はもどかしさに惑う。

なぜ、声が出ない？

悲痛な声はなおも聞こえる。すぐに行つてやらねば、と思い、焦燥がわき起こつた。なぜ、あの声のもとに行けぬ。取り巻く無明を掻き分ける己の腕が、立ち上がる足が、呼び声に答える口が、なぜないのだ。なぜ、このようなところに、囚われているのか。ぐにやりと己を取り巻く闇が歪んだ。まとわりつくそれに、不意に言いようのない怒りを覚えていた。

このようなことは許さない！

明確に刻まれた思考に、周囲の闇が弾けた。押し包む空間に亀裂が入る。無音の軋みが響き渡つた。己を取り込まんとするそれに抗い、そして灰は叫んでいた。

「又ま駆か！！」

叩きつけられるようにして、瞬時に乖離していた体と意識が繋がる。感覚が蘇り、痛みが弾ける。のしかかる闇に絡み取られた体の激痛に、白熱したように思考が霞んだ。次の瞬間、灰の体は強い力に弾き飛ばされていた。

弾き飛ばされ闇の障壁を突き破つた体が、強かに地面に打ち付けられた。あまりの衝撃に息が止まる。遠のく意識を引き戻したのはたかはや文筆の声だつた。

「おい！ 灰！」

うつすらと目を開くと、覗き込む丈隼の顔が見えた。なぜ、明かりが、とぼんやりと考え、丈隼の手に握られた松明に気付いた。不安と、おそらくは恐れに彩られたその顔を見つめ、灰は大きく息を吸った。身を起こそうとして、体の上にある重みに気付く。イーリヤが灰の上に重なるようにして倒れていた。どうやら腕を離してはいなかったようだ。

意識がないらしいイーリヤの体を押しつけ、漸く体を起こすと、通路の奥になおも蟠り蠢く闇が見えた。そして灰達を背後に庇うように仁識にしきが闇と対峙している。

「おい……あれは、何だ。いきなりお前達を呑み込んで……」

丈隼が掠れた声で言った。そそけだつような闇の気配を丈隼も感じているのか、その顔は蒼白である。灰はふらつきながらも立ち上がる。

「丈隼、イーリヤを安全な場所に」

「どういうことだよ」

「イーリヤを早くこの場から連れ出してくれ」

言いながら、灰は仁識のもとへと歩み寄った。

「仁識さんもこの場を離れてください」

仁識が血の気の引いた顔を振り向ける。ひそりと言った。

「若様……どうするつもりなんです」

「おい！ あれは何なんだ！ 何をするつもりなんだよ！」

「あの闇は命を喰らう。消さない……」

闇が不穏に揺れた。まるでのたうつようなそれに灰は目を細める。あの中に、まだ男が、そして叉駆がいるのだ。闇に取り巻かれ、呑み込まれかけていた彼を救ったのは叉駆だ。自らが闇の中に飛び込み、彼らをそこから解放した。闇の中で叉駆が、捕われまいともがき、足掻いているのが微かに感じられる。

このままでは取り込まれてしまう。

「下がってください」

ひそりと響いた灰の声音に、仁識と丈隼がふと黙り込む。何を感じ取ったのか、仁識がゆっくりと背後に下がった。

張りつめた神経が、鋭敏に冴えていた。丈隼が意識のないイーリヤの体を担ぎあげて後ろへと下がるのが見ずともわかる。仁識の視線が痛いほどに向けられていた。

灰は躊躇いもなく闇の中へと意識の波を広げた。その侵入に、闇がのたうつのが感じられる。まるで汚泥に手を突っ込む様にも似て、そのおぞましさに灰は眉を顰めた。絡め取り、取り込もうとするのを跳ね返し、その中にいるはずの存在を追う。

ちらりと、清浄な気配が意識を掠めた。

「又駆！！」

灰の呼びかけに、それが答えるように咆哮した。闇の障壁の向こう、音すらも隔てられながら、しかしびりびりと通路の空気が震撼する。そして唐突に闇が弾け、一匹の獣が中から飛び出して来た。

「牙蒙がもだ！」

叫んだのは仁識なのか丈隼なのか。

逃した獲物を追って闇が切り裂くように触手を伸ばす。それが又駆の後足を捕えた。絡め取られ、又駆の体がどう、と地面に叩きつけられる。毛を逆立ててもがく巨大な獣の体が、ずりり、と闇に引きずられ、地面に突き立てられた爪が、深々と傷を残した。

又駆の上に、闇がのしかかった。銀灰に沈む又駆の瞳が、灰を映す。それを見た時に灰が抱いたのは、滅さねばならない、ただその思いだけだった。怪魅の力で闇に対すると決心しても越えられぬ一線があつた、己の桎梏となっていた躊躇いが、その瞬間に灰の中から消えていた。思いは想念となり、想念は精神の波となる。

灰の体を中心にして、風のように怪魅の力が立ち上がる。陽炎のように揺らめき、闇に向かってふわりと広がると、通路に粘るそれを包み込み、捕えた。灰の第二の視覚が、闇を構成し、狂おしくのたうつつ存在を映す。

その背後で、仁識は息を呑んで眼前の光景を見つめていた。灰を

中心に煌めく粒子が立ち上がり、瞬時に、生き物のように蠢く巨大な闇を押し包んだのである。それはどこか幻想的な光景ですらあった。

外からいくら攻撃を加えても呑み込まれるのであれば、闇そのものを作りかえ、破壊するしかないのだと、その時灰は明確に考えていたわけではない。ただ衝動のままに力をふるっていた。怒りだったのかもしれない。事象を自在に操る怪魅師の力に絡め取られ、闇が慄くように揺れた。捕えられ、逃れようともがくそれを、煌めく波が容赦なく押し包んだ。

怪魅の力が闇に食い込み、砕いた。黒く凝る表面が、まるで砂のようにさらさらと崩れる。崩れながら、揺らめき煌めく中へとふわりと溶けた。押し包む力を食い破ろうとするかのように伸びた触手もまた、粉碎され宙に散る。

怯えたように闇が収縮する。破碎しようとする怪魅の力を阻もうと凝集するそれへ、灰は限界まで精神の力を放出する。砕けよ、と念じるままに闇が崩れ、解け、弾ける。次第に縮まる闇の下から床にうつぶせに倒れた男の姿があらわれた。

白熱したように灰と闇を包む細かな光が輝きを強めた。それは一方的な破壊だった。音もなく闇が砕け散る様は、見る者に儚ささえ感じさせた。

やがて闇は渦巻くような塊となって煌めく粒子の只中に浮かんでいた。それが、闇を闇たらしめる核であると、灰にはわかった。もとは自然の中にたゆたう力でありながら、その片鱗とてない。すべてを呑み込まんとする無機質な衝動ばかりが感じられるそれを、灰は握り潰すようにして砕いた。

最後に残った闇の欠片が弾ける泡のように霧散したその瞬間、轟くように無音の波動が奔り抜ける。波濤の如く空間を席卷したそれに続いて、灰は微かに悲痛な叫びを聞いたように思った。

ア……キ……ル……ノ……

灰の精神に直接響くそれは、あまりにかそけく、しかし切り裂く

ように鋭く、痛みの残像を残して、消えた。  
そして、ぼつかりと口を開ける夜の黒さばかりが残っていた。

闇が消えた地下道は空虚に静かだった。

「灰……」

躊躇うようにかけられた声に、灰は振り返らなかつた。丈隼が手に持つ松明の明かりが、仄かに石壁を照らし出し、それがいかにも寒々として見えた。

「又駆」

呼びかけ、灰は又駆のもとへと向かう。力尽きたように蹲っていた獣は、その気配に顔をあげるとのそりと身を起こした。手を差し伸べる灰へと甘えるように頭をすりよせると、僅かに目を細め、少年の体を包み込むようにして消えた。

仄かに温かな又駆の気配に暫し立ち尽くし、そして灰は倒れ伏した男のもとへと歩み寄った。その顔を覗き込み、灰は眉根を寄せる意識を失っているとはかり思っていた男は、目を見開いていた。凍りついたように一点を凝視している。だが、その瞳は虚ろだった。灰の存在に気付いた気配もない。

なぜ、と思い、しかし灰は問うまでもなく理由がわかつていた。灰の足から力が抜ける。そのまま、男の傍らに膝をついていた。男の体に伸ばした手が、微かに震えていた。粗い布地の衣を通して、男の体温が伝わる。だが、その手からは男を象る精神の波は殆ど感じ取れなかつた。ただ奥底に原初の炎のように揺れる、無垢な魂だけがあつた。

男が不意に動いた。まるで怯えた小動物さながらに地面を這い、壁際に蹲る。嗚咽に似た声が男の口から漏れた。伸ばしていた手を、灰は力なく落とす。

「若様、どうしたんですか」

いつの間に近づいてきたのか、すぐ背後から仁識が声をかけた。油断なく男を見やりながら、しかしその変貌に訝しげな表情を浮か



べている。

「……この男は……」

漸く、灰は言葉を押し出す。

「精神の大方を、闇に喰われました……」

低く 僅かな震えも悟られないように、低く呟くように言った。

「闇に取り込まれ、闇とともに消えてしまった。……俺が、消したんです」

仁識が息を呑む。凍りついたような沈黙が落ちた。

ゆっくりと近づくもう一つの足音に、灰は顔をあげることができなかった。その灰の腕を、力強い手が掴んだ。引きずり起こすように立ち上がらされて、そこではじめて灰は丈隼を見た。正面から覗き込む真剣な表情があった。

「灰、答えてくれ。あれは、何だったんだ」

思わず顔を伏せた灰に、なおも丈隼は静かに言う。問い詰めるでもなく、穏やかな声だった。

「お前はあの闇が命を喰らうと言っていた。あれが何なのかはじめてから知っていたんだろ？ なぜあんなもののかを知っているんだ……お前は、多加羅で何をしているんだ？」

「何も……」

呟くような答えに、丈隼が小さく溜息をついた。

「いいか、灰。俺はな、お前が奇妙な力を持っているのを知っていた」

はつと灰が顔を上げる。それに丈隼は苦笑した。

「小さい頃あれだけ一緒にいて気付かないとでも思っていたのか？」

叶も気付いていた」

一瞬の沈黙、そして丈隼は言った。

「お前は、怪魅師なんだろう？ さっきの牙蒙もお前の力の一部なんじゃないのか？」

肯うことなく、灰は視線を落とす。

「怪魅師は白沙那帝国では異端とされている。だから俺も叶も、お前が多加羅にいるのが尚更に心配だった。惣領家に怪魅師であることがばれた時にどんな目に合うか。でも、それは違ったのか。灰、多加羅惣領家はもしかしてお前の力のことを知っているのか？ さっきの化け物のことをお前に伝えたのは惣領家の奴らだろう。その力でさっきの化け物を祓わせようとしたんじゃないのか？」

「丈隼、もうこの話はやめよう」

灰は呟く。静かな丈隼の声に鋭さが籠った。

「やめるものか。紫弥<sup>しや</sup>さんを追放して、一度も手を差し伸べなかった惣領家が、なぜお前のことだけは呼び寄せる。異端の力を有する者が惣領家にいることが知られればただじゃすまないだろう。それにも関わらずお前を呼び寄せたのはなぜだ？ お前の力を利用するためだとしか考えられないだろう。それに、人を喰らう化け物のことを惣領家が掴んでいないはずはない。怪魅師が異端であることを逆手にとつて、お前のことを脅しているんじゃないのか。無理矢理に危険なことをさせているんじゃないのか!？」

「丈隼」

灰の声音に、丈隼はふと黙り込んだ。

「確かに、俺はあの闇を抜うために多加羅に呼ばれた。だけど、それは俺が自分自身で選んだことだ。惣領は、俺を呼び寄せる時に怪魅師としての俺を必要としていると伝えてきた。俺はそれがわかっていて、ここに来たんだ」

「なんで……!」

言いかけた丈隼の言葉は、背後から聞こえた呻き声に遮られた。はつと三人が振り返ると、視線の先で地面に横たえられたイーリヤがもそもそと身じろいだ。

「イーリヤ! 気付いたのか?」

三人は駆け寄りその顔を覗き込む。イーリヤもまたあの闇に一時とはいえ呑み込まれていたのだ。一体どのような影響が出るのか見つめる三人の前で、イーリヤは目を開けると顔を顰めた。のろのろと手を頭に当てる。

「いつ……てえ」

「お、おい、大丈夫か!? 自分が誰だかわかるか!？」

丈隼の言葉にイーリヤは顔を歪め、次いで灰は見やるとますます渋面になった。

「お前なあ……いきなり飛びかかるなあ。思いつきり頭をぶつ

けただろうが……」

三人は思わず黙り込む。

「あの野郎、人のこと焼き殺すとか言いやがって……あの男はどうなつたんだ？」

「……脳震盪、だな」

イーリヤの問いには答えず、ぽつりと仁識が言った。どうやらイーリヤは男の下敷きとなつて倒れこんだあの時に、頭をぶつけて気を失っていたらしい。それが幸いしたのか、それとも闇がもとより怪魅の力を有する二人を標的にしていたのか、イーリヤには何の影響も及ぼさなかつたのだらう。何とはなしにほつと安堵の溜息をついた三人の顔を、イーリヤは訝しげに眺め、不機嫌そうに言った。「なんか……お前ら、喜んでないか？俺が酷い目に合つたつてのに」

災難ではあるにせよ太平楽に気を失っていたイーリヤの言葉に何とも言えない沈黙が落ち、取り繕うようにして丈隼が言った。

「そんなことはない。あの男のことは……もう大丈夫だ」

丈隼に助け起こされたイーリヤは、壁際に蹲る男を見やり、目を見開いた。何かを言いかけるその先を、仁識の言葉が遮った。

「あの男は大分精神的におかしくなつてたみたいだな。若様に抑え込まれた途端、あの有様だ。もう何もできはしない。自分のこともわからないみたいだからな」

淡々と言うと、イーリヤの不審そうな表情には構わず、丈隼に視線を振り向けた。

「皆と合流して、とにかくこの地下道の出口を探そう」

「ああ、そうだな。じゃあ俺は皆をここまで呼んで来るから、待つていてくれ。大丈夫だとは思つが、男のことは頼んだぞ。松明は持つて行くが、いいな？」

「ああ」

「あ、じゃあ俺も一緒に行く」

ふらつきながらもイーリヤが丈隼の後を追う。それを見やり、灰

は言った。

「丈隼」

振り返る彼に、淡々と告げた。

「この先に、外へと繋がる場所がある。かなりの距離があるけど、皆にはもう大丈夫だと伝えてくれ」

丈隼が灰を凝視し、そして言った。

「わかるんだな？」

「ああ」

そうか、と言うと、丈隼はひらりと手を振って通路の先の闇へと歩いて行った。たちまち暗がり浸された中で、灰は壁にもたれかかる。傍らで、仁識もまた無言だった。

何も見えぬ中で、しかし灰には手に取るように辺りの様子がわかった。冷たい石壁を伝い意識の波を広げれば、その先に外気を、木々のさやぎを感じ取ることができた。うつすらと仄かな光の気配は、月のそれだろうか。

限界まで酷使された精神は、眩暈を覚えるほど鋭敏に冴えていた。無理矢理にこじ開けたためか、意識を閉ざすことができない。とめどなく零れ落ちるように力の流出が止まらなかった。ちりちりと、蹲る男の気配を感じる。あまりに微かなそれに、きり、と胸の奥が痛んだ。

俺が、消した。仕方がなかった。そうしなければ、闇の暴走は止められなかった。

おそらく、男の精神は引き返しようもなくあの闇の内部に取り込まれていたのだと、灰にはわかる。あのまま何もしなければ、闇は仁識や丈隼へも襲いかかっただろう。だが、と彼は唇をかみしめた。あの時己は衝動のままに力をふるったのだ。何も顧みず、ただ滅することのみを考えていた。そして男の精神をも殺したのだ。それは、積み重なり築き上げられてきた人格を、一人の人間を殺すということに等しい。

もっと、違うやり方があったのではないか。

息苦しさを感ずるほどに、凝る痛みがあつた。胸の奥に巢食つそれを、引きずり出し、引き裂きたい思いに駆られる。痛みを感じる資格などないのだ、と灰は強く瞳を閉じた。

「若様」

沈黙と静寂が分かち難くなるほどの時が過ぎた後、ひそりと声が響いた。仁識は何かを言いかけ、しかしふと黙る。続く声音は淡々としていた。

「私達がこの件に関わつたことをまだ怒ってますか？」

灰は虚を突かれる。

「怒つて……？」

僅かに苦笑する気配

「気付いていないんですか。私達が協力を申し出た時、心底怒つていらつしやるように見受けましたが」

「……」

「若様のことだ。大方私達に若様を助けるよう伝えた人物に対して怒りを感じたんでしょうが……私達はどちらにせよ、若様のことを捜すつもりでいたんですよ。若様が逃亡した犯人をそのままにしておくことはないだろうと思つていましたし、それこそ街中を見回つても捜し出して、一体何をしているのか洗いざらい話していただくつもりだつたんです」

「なぜ……」

「私に関して言えば、若様がどのような方法で犯人を焙りだしたのか興味があつたせいです。それに祭礼の一日目の朝に見たことも気になっていましたので。あの闇と若様が放つた力が何だったのか……」

蹲る男が身じろいだのか、微かに衣擦れの音が響いた。僅かに身を強張らせた灰の気配に気づいているのかいないのか、仁識は殊更に淡々と言葉を続ける。

「だが、須樹<sup>すき</sup>達はただ純粹に仲間を放つておけなかつただけです。

あの連中は馬鹿がつくほどお人好しですからね」

「俺は、できれば皆のことは巻き込みたくなかったんです。それに、聖遣使しよつげんしが動くことまで読めなかったのは俺の落ち度です」

「先程犯人にしていた來螺きらいが奉じた穂の原の話……やはり、術を込めたのは若様なんですね」

どこか呆れたような響きがあった。

「若様はもう少し周りを頼った方がいい。何でも自分一人で背負いこむと、かえって事が悪くなるのが往々にしてある。それにあなたお人好しどもにはそんな氣遣いなど無意味です。彼らは仲間が一人で苦しむのを見るくらいなら、自分達もともに苦しい思いをする方がいいと考える奇特な者ばかりなんですから」

「……なぜそこまでするんですか。そこまでしてもらうほどのものを俺は皆に返していない」

心底不思議そうな呟きに、仁識は淡く笑んだ。もっとも暗闇の中、灰にはその表情は見えない。

「それは直接聞くんですね。だが、あるがままに人を信じる、それが彼らなんでしょう」

仁識の言葉に、足音と話し声が重なった。若者達が漸く到着したのである。近付いて来る松明の明かりに地下道が仄かに浮かび上がった。イーリヤの興奮した声が、犯人を取り押さえた武勇伝を語っている。本人は氣を失っていたのだが、まるで見ていたかのような口振りである。

「それでさ、灰が犯人に素早く飛びかかったんだよ。あまりの速さに犯人もあの奇妙な技が使えなくてさ、で、驚いた犯人が隙を見せたもんだから、丈隼と、あの……誰だっけ？ とにかくあの若衆も飛びついて、それで取り押さえたんだ」

そういうことになっているらしい。

「お前は氣を失っていたがな」

にべもない丈隼の言葉が後に続き、氣を失っていても音は聞こえていたんだ、などとイーリヤが無茶なことを言う。

「丈隼が回し蹴りをして、あの若衆が投げ飛ばしたんだろ？」

灰の隣りで仁識が慥然と呟いた。

「私は投げ技は好かぬ」

丈隼が適当な話をでっち上げたのだろう。イーリヤが多分に誇張しているようだが、どれほど誇張しようとも、真実起こった出来事には遠く及ばないだろう。

「二人は無事なんだな？」

須樹の言葉だった。その後（せい）に治都の声が続いた。

「あの二人は何かと無謀なんだよ。やはり俺達も追うべきだったな。放つとくと何をしでかすかわからん」

「……お前にだけは言われたくないぞ」

さらに慥然と仁識が呟いた。だが、ふと小さく笑むと、灰を振り返る。

「さて、武勇伝の主役がいつまでも隠れていては様になりませんね。通路へと踏み出した二人の姿に、いち早く気付いた治都が、おい、と手を振った。須樹もまた安堵したような表情でこちらを見ている。晴れ晴れとした若者達の視線が、まっすぐに向けられていた。

「怪我はないですか？」

「無茶ばかりしないでくださいよ。気が気じゃなかったんですから」

「心配しましたよ」

「仁識さんも大丈夫ですか？」  
口々にかけられる声は、真実二人を気遣う温かなものばかりだった。

立ち尽くす灰の傍らを仁識が通り過ぎる。ひそりと、笑みを含んだ声が残された。

「若衆も、捨てたものじゃないでしょう」

半身を冷やかな闇に浸したまま、灰は近付く明かりを見つめていた。温もりが辺りに広がる。裏腹に、片隅に凝る影は尚更に深く、くつきりと浮かび上がっていた。

光が見えたのは、それからかなりの距離を歩いた後だった。



火つけの犯人を連れての歩みである。両脇から治都と丈隼が男の腕を掴んでいるが、男は引かれるままに足を運ぶだけで、抵抗する素振りも見せなかった。はじめこそ男を警戒していた若者達も、やがて男が無害であるとわかったらしい。無意識であるにせよ、男を男たらしめていたものが消えたことに気付いていたのかもしれない。地下道はいつしか土肌が露出し、大地の匂いが籠っている。水の流れに沿い、湿った足音を響かせて歩く若者達の中で、最初にその光に気付いたのは先頭を行く自警団の一人だった。

「見ろよ！ 出口だ！」

指差し叫ぶ。地下道が途切れ、柔らかな光の帯が幾筋も暗がりになり差し込んでいた。払暁の、淡い光である。その中へ、吸い込まれるようにして水は流れている。

「やったああ！」

叫んだイーリヤが真先に走り出し、若者達がその後を追った。白い光が彼らを包み込む。

地下道の出口は苔生した大きな岩に半ば塞がれるようにしてあった。一人一人が通り抜けられる隙間があり、一步踏み出せばそこは緑が生い茂る急峻な斜面となっていた。岩の下にある空間を奔り抜けた水が、音をたてて流れ落ちている。木々が、透徹とした空気の中、伸びあがるようにして空にその枝をのべていた。涼風に揺れる葉は、冬に向けてどこかくすんだ色合いである。透かして見える空は高い。夜と朝の狭間できらきらと光がしぶき、ひんやりと冷たい大気の中に彼らはいた。

「どこだ、ここは」

勢いよく飛び出し、そのまま斜面を滑り落ちそうになったイーリヤが、体勢を崩しながらも辺りを見回した。

「ここ、多加羅の裏手の山じゃないか？ 見ろよあの川」

若衆の一人が指さす先、斜面の下には、清流があった。地下道からの水はそこへ流れ落ちている。絶え間ない水の音が響いていた。

「多分あれは金笹きんささ農家が農業用水に使ってる川だ。ほら、街の外を

流れる川があるだろ？」

「ああ、確かに山から流れ出ている川が一本あったな」

言いながら、足場の悪い斜面からぞろぞろと下の方へと向かった。清流のほとりに立つと、地下道の入口は下草と、ごつごつとした大きな岩に阻まれてほとんど見えない。よほど注意深く目を凝らさなければ、そこに街の下を縦横に走る地下道への入口を見つけることはできないだろう。これまで発見されなかったはずである。もっとも多加羅の裏手の山に人が踏み込むことは滅多にない。踏み込むべきではないという思いが多加羅の街衆にはある。かつて神が坐す聖地とされていた時代の名残であるかもしれない。

「大したものだ。これだと誰も気づかないだろうな」

半ば感心したように須樹は呟くと、さて、と周囲を見回した。

「一旦山を下りて、門から街に入るしかなさそうだな」

「まだ歩くのか……」

げんなりと呟きながらも、若者達の顔はどれも明るい。地下道から出ることがかなわぬのではないか、誰もがそう思わずにはいられなかった暗闇での一夜である。その恐怖が朝の陽光に溶けるようにして消えていった。川伝いに進む足取りも、心なしか軽い。

灰は若者達の最後尾を、男を引き連れた丈隼と治都とともに歩いていた。できればこのまま倒れ込みたいほどに疲れていた。

「犯人も捕えることができたし、これで剣舞ケンマシも何とか無事できそうだな」

治都が目を細めながら言った。

「ええ、間に合いそうですね」

「まあ、それもあるんだが、仁識の奴が中央の舞い手をこれで務めてくれそうだからな」

灰は僅かに首を傾げる。話の道筋がわからなかった。その表情に気付いた治都がにやりと笑うと、声を潜めて言った。

「あいつはな、お前一人を放っておいて、犯人を見過みかごしにしてまで舞い手を務める気はないと言い張ったんだよ」

「本当ですか？」

灰の音がはからずも非常に疑わしげなものになったのは無理もなかった。仁識の話では、彼はさほど灰の身を案じていなかったはずだ。

「あ、お前信じてないだろう。無論、俺達はお前に協力するつもりだった。だが仁識は剣舞の花形だ。何かあつては事だからな、自重するように言ったんだが、聞こうともしない。拳句、お前達が反対しようとも私は私のやりたいようにやる、なんてぬかしやがる。まるで駄々をこねるがきみたいな有様だったぞ」

灰は思わず前方を歩く仁識の背を見た。疲労を感じさせぬ身軽な歩みで、歩きづらい岩場を下っている。

「治都、声がでかいぞ」

少し前を歩いていた須樹が、振り返ると呆れたように言った。奇妙に顔が歪んでいるのは笑いを堪えているせいなのか、その瞳はどこか楽しげだ。

「げ……聞こえたかな」

無論、先に行く仁識に、である。森閑として澄んだ山の大気に、治都の声はよく通る。

「聞こえただろうな。駄々をこねるがきとは……後で覚悟しておいた方がいい。仁識は怒らせると怖いぞ」

「いや、聞こえていないだろう。聞こえていたなら、いつものようにすぐさま厭味の一つでも言うはずだ」

往生際悪く治都は言い募る。

「……俺が言われた立場なら、この場合恥ずかしくて振り返ることもできんと思うぞ」

丈隼が冷静に呟けば、おもむろに須樹が頷いた。

「俺はさすがに仁識に同情するぞ」

「おい、二人して何なんだよ」

情けない治都の声音に、須樹と丈隼が笑い声をあげる。それに驚いたのか、茂みから山吹色の鳥が飛び立った。灰は柔らかに響く笑

い声を聞きながら、ふと仁識の言葉を思い出していた。

若衆も、捨てたものじゃないでしょう

すっとんと、胸の奥にその言葉が落ちる。なぜ、自分のためにそこまでするのかと問うた灰に、仁識は答えなかった。だが、答える言葉がなかったのかもしれない。理由などなく、ただ手を差し伸べずにはいらなかったのだらう。

人と人は重なり合うようでありながら相容れない。隔絶して孤独である。だが、あるがままに相手を信じる、そんな関係もあるのだと仁識は言ったのだ。何を選び、如何に行動するか、どのように人と対し、信じるか。そこに投影されるのは相手から与えられる何かではなく、自身が望み、掴み取る信条であり、生き様である。そしてそれはおそらく己という存在を象るものとなる。

思うままに歩けば、漸く山の麓に辿り着いていた。なだらかな斜面をくだり、木々の間を抜けると、そこは広々とした金笹きんささの畑に面している。大方の刈り入れがすんだ畑は豊かな土壌を晒し、左手には端然とした多加羅の街が聳えている。川は畑に沿うようにして滔々と流れ、小高い丘の向こうに消えていた。その手前には來螺の幕舎が、移ろう光を映して佇んでいる。

「街だ……」

「やったな……」

安堵のあまり虚脱したように若者達が呟いた。

灰もまた、広い景色を見つめる。風が渡っていた。まだ地平線に程近い太陽は奇妙なほど熱を感じさせず、静かに滾っていた。東の空は渦巻くように薄紅と碧が混ざりあい、ところどころ透けるような琥珀に染まっていた。はじまりの色彩でありながら、秘められた夜を思わせる。

果てしない空の移ろいの前に立ち尽くしていた灰は、ふと震えるように揺れる微かな気配に気付いた。感覚は冴えていながら、鈍麻したように体がついていかず、僅かに反響を残すその気配がしかとは掴めなかった。振り返れば、鬱蒼とした木立があるばかりだ。

その奥に何かが、と思う間もなく空を奔ったものがあつた。咄嗟に身をよじる。だが、空間を穿ち切り裂いたそれは、右胸を掠め、肩を抉っていた。

血がしぶいた。それが血であることを、鮮やかな色彩で知る。不思議と痛みはなく、焼け付くような熱さを感じた。咄嗟に手で押さえれば、指の間から紅が零れ落ちる。零れ落ち、赤茶けた大地に沁み込むのをぼんやりと見ていた。出血が多い、と思い、太い血管が傷つけられたのか、と奇妙に冷静に考える。彼の名前だろうか。叫ぶ声が、遠く聞こえた。視界がないで、地面が揺れたように思った。刃と化した空気、それを放った存在が、まだ木立の向こうにいるのがわかった。言霊の余韻が、淡く揺れていた。その姿を求めて顔をあげようとしてかなわず、灰は訝しく思う。誰かの手が支えるようにして腕を掴んでいた。耳元で話しかけられているのに、その声はやはり遠い。

声を出そうとすれば、息の合間に掠れたような音しか出なかった。それでも必死に言葉を紡ぐ。

「気を……つけて……あいつが、いる」

目の前が暗くなる。腕をあげようとしてかなわず、流れ落ちる血に真赤に染まった手が、だらりと力無く地面におちていた。

伝えなければ、という思いばかりがあつた。そしてその名を呟き、自分の体がなすすべもなく倒れ込んだことにも気付かぬまま、灰の意識は闇に閉ざされた。

痛みの合間に見た夢は、どれも輪郭がぼやけたものばかりだったが、意識が浮上するたびに、夢から逃れられた安堵と、その余韻に凝る冷たさに慄いていた。

夢は、常に何かを追いかけているようだった。ある時は、遠く小さな背中が見えた。一散に駆けるその姿を追おうとするが、足はまるで前に進まない。体が重かった。声の限りに叫ぼうとして、出たのは掠れた息ばかり。圧迫するような苦しさは鼓動のせいだけではなく、言い様のない焦燥のせいもあった。止めなければ、と思う。伸ばした手の先で、小さな姿が振り向いた。銀の髪が光を弾き、幼い容貌の中、強い藍の瞳が睨みつけていた。そのまま、踵を返して闇に消えた。

夢はそこで終わる。そして記憶の底に澱のように沈む。

時折声が聞こえるような気がした。知っている声もあったように思う。そっと触れる手は優しく、まるで思うままにならぬ体の一点、そこだけが温かかった。懐かしい、と思い、その理由が掴めないまま、しかとはわからぬ夢にまた落ちる。

浮き沈みを繰り返すように不安定な眠りは、しかし唐突に途切れた。目を開ければ、柔らかく朱華から象牙へと傾斜する色彩が視界に広がった。見覚えのないそれに辺りを見ようとして、引き攣れたような痛みが右肩にはしった。呻き声をあげて重い腕をあげる。左手で肩に触れると、ざらついた布の感触があった。

「灰、気がついた？」

声に顔を巡らせると、栗色の艶やかな髪の一房が視界に入り、次いで覗き込む叶の顔が見えた。

「……叶？」

声はひどく掠れていた。

「良かった。気付いたのね。出血がひどかったから、一時はどうな

ることかと思つたのよ」

「ここは……？」

問いながら見回せば、なめした毛皮のような白い布が、ぐるりと周囲を取り巻いている。木造りの小さな卓と椅子があり、卓の上には水入れといくつかの小鉢があつた。灰にとっては馴染み深い葉草の匂いが籠っている。叶以外に人の姿はない。寝かされている寝台の他にも、いくつかの寝台があつた。小さな医療室といった趣である。

「來螺（オコ）の宿営所よ。気分はどう？」

「……ぼんやりする」

言いながら身を起こそうとすると、掛け布の上から柔らかく胸を押さえられた。

「だめ、寝ていなさい。熱も出てるのよ」

「どれくらい眠つてたのかな……」

「一日よ。丈隼（たかはや）達があなを運びこんでからずっと。今は夕方」

再び上を見る。春の花を思わせる色彩は、捲り上げられた入口から差し込む夕日のせいらしい。その入口に人影があつた。覗き込み、快活な声を上げる。

「お、気がついたか」

言いながら入って来たのは自警団の蘇芳の衣を粹に着こなした丈隼である。颯爽とした歩みに疲れは感じられなかった。

「傷の具合はどうだ？」

「よく、わからない」

覚束ない答えだったが、丈隼は気にした様子もなく傍らの椅子に座つた。不意に灰は気を失う前の出来事を思い出していた。不安がわき起こる。

「あの後、どうなつたんだ？ 皆は？」

灰の問いに丈隼の表情がにわか我真剣なものとなつた。

「その前に聞きたい。お前を傷つけた奴が、話に出ていた聖遣使（しょうけんし）なのか？」

「多分」

「やはりな。名前を聞いた時の若衆わかしゅうの様子から、そうだろうとは思ったが……」

「名前？」

「お前が言っただんだよ。確か……そうたつ、だったかな。覚えてないのか？」

名を言っただろうか、と灰はぼんやりと考える。言ったようにも思う。聡達そつたつと。

「誰も怪我をしなかったか？」

懸念を込めて問えば、丈隼は呆れたような表情になった。まずは自分の心配をしろ、とその顔は言っている。

「いや、あの後は何も起こらなかった。その聖遣使を捜そうとした奴もいたが、結局どこに潜んでいるかわからなかった。何よりお前の怪我の方が大事だったからな。多加羅の医術者のところまでは時間がかかるから、來螺の宿営所までつれて来たんだ」

「そうか……」

「若衆の連中もついて来たが、そのまま多加羅の街に戻ってもらった。あいつらが来ても何もならんうえに、來螺にとっても若衆が来るのは……何と言うか、色々と厄介だ。それに、火つけの犯人を警吏けいりに預けないとだめだし、あいつらは今日が本番だからな」  
言われて今日が祭礼の三日目、若衆の見せ場である劍舞けんぶが行われる日であることを思い出した。夕刻、ということはまだ行われてはいないだろう。劍舞は祭礼の最後、夜に行われる。篝火に浮かび上がる華麗で勇壮な舞と、巫女役の祈りの儀式だけを見に訪れる者も多い。

「無事、間に合っただんだ……」

言いながら、またも眠気に襲われる。安堵のせいかもしれなかった。意識が解けるように拡散した。遠く、丈隼の声が聞こえる。

「眠ったのか……？」

違う、と言おうとして、なぜか口が動かなかった。



「このまま寝かせてあげましょう。何だか、すごく無理をしてたみたいなもの」

「そうだな」

丈隼の声には苦々しさがあつた。

「無理をし過ぎだ」

そんなことはない、と灰は思う。

俺は大丈夫だから…… 言葉は声にならず、灰は再び眠りに落ちていた。

その朝のことである。須樹<sup>すき</sup>達は後ろ髪を引かれるような思いで來螺の若者達と別れ、多加羅の街へと戻つた。まず警吏に捕えた犯人を引き渡したが、その際にも男は自失したまま一切の抵抗を見せなつた。

そのまま急ぎ鍛練<sup>たんれんじょ</sup>所へと赴いたのは、渦中にいた自分達が、最も状況を把握できていなかったせいである。倉庫一つが崩落し、一夜行方をくらましていた彼らである。峰瀬<sup>みなせ</sup>が彼らのことを敢えて伏せていたことを知らず、秘密裏の彼らの行動も明らかとなつていろうと考えたのだ。周りがどのように言っているのか、それを確かめたかつた。

劍舞の本番に向け、早朝から鍛練所に集つていた若衆は、彼らの話<sup>わ</sup>に目を剥いた。ともに行動していた一部の若衆以外は、須樹達が灰とともに火つけの犯人を追つていたということを知らなかつたのである。それも犯人を捕えたとあれば、驚きは尚更である。その中で加倉<sup>かぐら</sup>だけが奇妙に冷静に見えた。

「そうか、捕えたか。よくやつたな」

若衆頭に与えられた部屋の中、加倉は己の意向を無視して勝手な行動に出た彼らに対して言った。叱責すらなかつた。下手をすれば若衆からの追放もあり得る、と覚悟していた須樹達は呆気<sup>だいき</sup>に取られる。一人仁識<sup>にしき</sup>だけが観察するように若衆頭を見つめていた。

「お咎めにはならないのですか？」

須樹の問いにも加倉は鷹揚に笑んだ。

「なぜ咎める必要があるのだ。火つけの犯人は街に害悪をもたらず。何としても捕えねばならなかったのだ。若衆が捕えたとあらば、この上もない名誉となるだろう。惣領にも、早速に私から御報告申し上げよう」

「なるほど……」

仁識の低い呟きを聞いたのは、傍らにいた須樹だけだった。思わずその顔を見れば、皮肉な中にも楽しげな笑みがある。何事かを企むようなそれだった。

さすがに疲労のせいで重い体を引きずり、各々の家に帰ったのはまだ八つの刻だった。剣舞は祭礼の最後、夜である。十四の刻まで僅かでも休息を取るように、というこれもまた普段からは考えられぬ、耳を疑うような加倉の配慮だった。

そして祭礼は最高潮を迎える。

若衆の剣舞は例年に比しても大変な盛況振りだった。詰めかける人波は神殿前の広場から溢れ、果ては家々の屋根にのぼってまで見ようとする者もあらわれる始末だ。

多加羅惣領家の面々も列席し、その前で披露された剣舞は大成功に終わった。惜しめない喝采が若衆に送られ、その後の悠緋ゆうひを巫女役としての儀式をも、冷めやらぬ興奮が包み込んでいた。その熱気の中、一動作で見事に巻書を広げた悠緋の姿に、来年の吉凶を占う人々は大いに沸いた。白く閃くそれは美しく、軽やかに潔く、来る年の明るさを人々に信じさせるに十分だった。

そして重々しい司祭長の祈祷と託宣が祭礼の儀式の終わりであり、最後の夢の始まりである。すべてを終えた司祭長が神殿に下がり、司祭達も姿を消した後、供物を捧げるための祭壇が手早く片づけられる。次いで毛氈が敷かれ豪華な机と椅子が運び込まれた。広場の奥うきに設えられたそこに、惣領家の人々、惣領である峰瀬みなせを中央とに透

軌と悠緋が座る。控えていた下男達が大樽を運び込めば、広場を取り囲む人々から歓声が上がった。

大樽の中身は、惣領家から街衆へと振舞われる、この地方特産の甘水酒かんすいしゅである。本来なら雲の上の存在である惣領家の人々とともに酒を飲む、それがこの祭りの真の締め括りだった。思い思いの器を手にな々と広場を訪れる人々は、酒を注がれ、惣領家の三人にそれを高々と掲げて一気に干す。多加羅の人々にとってはまたとない榮譽であり、一抱えもあるうかという巨大な杯で、一息に酒を飲み干す豪の者もいる。

男女を問わず、どのような身分の者であれ平等に一杯の酒が振る舞われ、そして朝まで続く祭礼に酔い痴れるのだ。

この行事の始まりは、まず惣領家の者が杯を干することから始まる。

悠緋は、父と兄の杯に恭しく注がれる透明な液体を見やって、小さく溜息をついた。彼女にとってこの行事は単に退屈なだけではなく、苦痛でさえあるものだった。惣領家の三人の前には贅を凝らした食事が置かれ、食べることも飲むこともできる。だが、これからの長い時間、にこやかな顔で酒を飲む人々を見続けるのかと思うと出るのは溜息ばかりだ。何より酒をまだ許されていない悠緋にとっては、なぜそれほどに皆が熱狂するのか理解できない。それよりも街中で最後の夜とばかりに繰り広げられる華やかな催し物を見る方がよほどいいと思う。

(だいたい、ここじゃなくても皆浴びる程にお酒を飲んでるでしょうに)

悠緋はちらりと若衆に目をやった。この行事の際には南軍と、若衆の主立った者達が背後に控えることとなっている。護衛という意味合いもあるが、色鮮やかな正装に身を包んだ彼らの姿はそれだけで場を盛り上げる。若衆からは若衆頭と副頭、そして錬徒が控えることとなっていた。

(どうしていないのかしら……)

内心に呟く。灰の姿がなかった。剣舞と巫女役の儀式の際には惣領家の一員として列席するはずだったが、一向に姿をあらわさず、若衆の中にも見当たらない。

(何かあったのかしら)

彼女は火つけの犯人を巡る一連の出来事は知らされていない。つらつらと考えていると、峰瀬が杯を手に立ち上がった。彼女と父親を挟む形で座っている透軌がそれに続く。悠緋も慌てて立ち上がると、申し訳程度に置かれていた水の入った杯を手に取った。

「今宵、皆には思うまま楽しんでもらいたい。我ら多加羅に栄えあらん」

峰瀬は朗々と言うと一気に杯を干した。そして掌程の木札を高く遠くに投げる。その木札を取った者が第一に杯を干する権利を得るのだ。我先にと手を伸ばす群衆が、大きな生き物のように揺れた。大柄な男が木札を掴み取り、両手を天に突き上げる。拍手と歓声が起こった。

男が惣領の前に踏み出そうとしたその時、背後から声が上がった。「暫しお待ちを。惣領にお願いがございます」

若衆の一人が前に進み出ると惣領家の三人に向かって叩頭した。広場を照らし出す篝火のせいなのか、少し癖のある髪が奇妙に赤く見えた。何事かと注目が集まる。

「仁識！ 何をしているのだ！」

慌てふためいた声は若衆頭に加倉である。

「よい。どうしたのだ」

落ち着いた峰瀬の声に、仁識は更に深く頭を下げると明瞭に言った。

「どうかこの場を離れる許可をいただきとうございます」

広場が静寂に包まれた。何という不敬　咄嗟に顔を顰めた人も多い。惣領家に仕える者として傍に控える荣誉を拒む、人々にはそのように聞こえた。許されぬことだ。だが峰瀬は面白そうに笑みを浮かべる。

「理由を聞こう」

「灰様が深い傷を負い、街の外におられます。私は灰様をお迎えにあがりたく存じます」

ざわりと人々がどよめいた。峰瀬は目を細めると、なおも恭しく頭を下げる若衆を見つめた。その表情に変化はなかったが、次の声音にどよめきが俄かに静まる。

「なぜ、そのようなことになったのか申してみよ」

仁識は灰の負傷を加倉に伝えているが、峰瀬までその報がもたらされているかどうかは知らない。峰瀬の言葉からは、それを推し量ることはできなかつた。口を挟む者はいない。誰もが耳を欬てている。

「今朝早く、逃亡していた火つけの犯人が捕えられ、我らは警吏に引き渡しました。しかし実際に犯人を捕えたのは灰様と來螺の者です。そして深手を負われたにも関わらず、灰様は我らを氣遣われたのです。何より犯人を獄舎に戻すことと剣舞を優先すべきことでしたので、断腸の思いで來螺の者に灰様をお預けしました」

背後で呆氣に取られて仁識を見ていた須樹は思わず額に手をやる。開いた口が塞がらぬとはこのことが、と思い、全くの嘘ではないことに気付いた。否、聞きようによつては全て真実だ。氣を失う寸前に灰は確かに彼らを氣遣つていた。そして仁識は誰が犯人の引き渡しと剣舞を優先しろと言つたかは曖昧にぼかしている。傷を負つたのも何によるのか明言していない。

仁識は顔を上げると峰瀬を正面から見た。

「灰様は惣領家の御一員、本来ならこの場におられるべきお方です。それに加え、我らにとってはかけがえのない若衆の仲間でもありません。どうか、灰様の元へ赴くお許しを」

須樹は驚きをも圧してわき起こる思いに笑みを浮かべた。素早く前に進み出ると、仁識の横で叩頭する。高らかに言った。

「どうか私にもお許しを」

背後で息を呑む氣配がする。加倉だろうか。

「なるほど。だが私は許しを出すことはせぬ」

峰瀬が言った。思わず落胆を感じた須樹は、続く峰瀬の言葉に顔を上げる。

「お前達も灰も若衆の一員であるならば、私ではなくそこにいる若衆頭が決めるのが相応しかろう」

突然名指しされ、人々の視線を一身に浴びた加倉が目を見開いた。僅かに青褪めて見える。

「どうだ。この者達に許しを与えるか？ 火つけの犯人を灰が捕えたのであれば、その労を労ってやりたいものだ」

峰瀬の言葉に加倉は何かを言いかけ、口を閉じ、そして大きく息を吸った。

「ですが……火つけの犯人を捕えたのは若衆であり……灰様は、若衆では……」

言葉は弱々しく、消え入るようにして途切れた。その表情に浮かんだのは、恐れであるように須樹には思えた。何に対しての恐怖なのかわからない。だが、加倉が考えていることは手に取るようにはわかった。

加倉は灰を若衆から追放した。だが仁識は灰が若衆の一員であるかのように言っている。傷を負ったその仲間の元へ行きたいと言っているのだ。ここでそれを否定し拒絶すれば、火つけの犯人を捕えたのは若衆ではなく、あくまでも灰個人と來螺の若者達、ということになるだろう。何故かはわからぬが、加倉は若衆が犯人を捕えた、というその点にひどく拘っているようだった。あたかも、加倉自身が若衆の手で犯人を捉えることを意図していたかのような言動をしていたことに気付く。

傍らの仁識の顔を見れば、静かなそこには如何なる思惑も窺えない。だが、おそらく朝加倉と対したあの時すでに、仁識はこうすることを決めていたのだろう。彼が浮かべた笑みの意味を、今更ながらに知る。

（大したものだ）

加倉は若衆が犯人を捕えたというその榮譽を手放せないに違いない。そして來螺の者達が捕えたと認めるのは尚更に許せないだろう。そうであれば導き出される答えはただ一つだ。すなわち、仁識の言葉に頷き、再び灰を若衆の一員と認めること、それしかない。そして須樹はその言葉を聞いた。何かを無理矢理に抑えつけたかのような声音だった。

「若衆頭としてこの者達に許しを与えます」

仁識と須樹は深々と頭を下げた。

「ありがとうございます」

それぞれに淡々と言うと立ち上がる。加倉の奇妙に歪んだ顔を一瞬見つめると踵を返した。峰瀬は普段と変わらぬ落ち着いた表情の中にも、どこか面白そうに事の成り行きを見守っている。その時、広場を後にしようとした二人に澄んだ声が掛けられた。

「お待ちなさい」

振り返ると、悠緋が立ち上がった。

「灰は大丈夫なの？」

花鳥を描いた衣が揺れる。篝火の明かりに浮かび上がる姿は、艶やかだった。

「命に関わる程の傷ではございませんでしたので、大丈夫かと思いません」

仁識の答えに、少女はほっとしたのか表情を緩めると、力が抜けたようにすとんと椅子に座った。一礼すると二人は広場を後にした。人々が彼らのために道を開ける。そして進む二人の後に、人波の中から歩み出し、同じ歩調で続く者達がいた。一連の出来事を見ていたらしいそれぞれの範の一員である。治都ちよの姿があった。街の見回りをともにした者達がいた。剣舞への参加資格を持たぬまだ新参の幼い者もいる。

須樹は小声で傍らの仁識に言った。

「やっとなわかつたぞ」

「何がだ」

「この前、灰に星見<sup>ほしみやく</sup>役殿には若衆を抜けたことを言うなと言っていたらう」

「それがどうした」

「言うな、ではなく、言う必要はない、ということだったんだらう。あの時すでに灰が若衆に戻るにはどうしたらいいか、考えていたんじゃないのか？」

仁識はにやりと笑った。

「さて、どうだらうな」

須樹もまた思わず笑い、そしてふと顔を引き締めた。

彼らを見守る群衆の中に父親の姿があった。じつと須樹を見つめるその顔を、彼もまたまっすぐに見返す。ふと、父親が笑んだようだった。そして小さく、しかしはつきりと頷いた。その前を通り過ぎ、須樹は振り返りたい衝動を抑える。何故か目頭が熱かった。目を瞬いて見上げれば、祭りの喧噪を透かして天はどこまでも深かった。



灰が再び目覚めた時、辺りは夜の静けさに沈んでいた。一つきり灯された硝子筒の小さな炎が、かえって周囲の暗さを感じさせる。叶と丈隼の姿はなかった。

さほど長く眠った感覚はなかったが、夢も見ない深い眠りだったのか、疲労は減っていた。傷を庇いながら体を起こし、胸から肩にかけて巻かれた包帯に軽く触れる。鈍く引き攣れるような痛みはあるが、動くことができないほどではない。

灰は寝台からおりると立ち上がった。くらりと一瞬地面が揺れるが、ふらつくことはなかった。裸の上半身に傍らの椅子にかけてある医術者の作業衣らしきものを羽織り、幕舎の外へと出る。

幕舎は宿営所の奥まったところにあるのか、辺りは静かだった。灰がいるのは來螺の人々が寝泊まりしている場所らしく、人がいないのも頷ける。離れて見える明かりは興行のための篝火だろうか。今頃は最後の興行が華やかに行われているのだろう。

裸足のまま暫く歩くと宿営所の端へと辿り着いた。影となったならかな丘が連なり、満天の星空に寂々とした月がある。さらさらと音がしそうな光だった。

どれほどそうしていたのか、さくりと、背後で足音がした。

「ここにいたのか」

振り返ると丈隼と叶の姿があつた。叶は舞台衣装を身に纏っているのだろう、華やかな薄手の衣が夜風にたなびいた。休憩の合間に灰の具合を見に戻ったらしい。

「寝てないとだめじゃない。幕舎に戻らないと」

言いながら叶は灰の額に触れる。その顔が顰められた。

「やっぱり、まだ熱があるわ」

「もう大丈夫だよ」

灰が笑いながら言うと、やれやれというように叶は首を振った。

文隼はそんな二人を微笑ましげに横で見ている。

「何よ」

「いや、いいもんだなと思っただよ。……昔に戻ったみたいじゃないか」

答えた文隼の言葉には、僅かな躊躇いがあった。ふと叶は黙り込み、灰と並んで夜の景色を見つめた。

「なあ、灰。俺はまだ答えを聞いていないんだがな」

ぼつりと掛けられた声に灰は振り返った。文隼がまっすぐに彼を見ていた。傍らの叶は何も言わない。おそらく文隼は全てを叶に話したのではないだろうか、と灰は思う。姉のように灰を氣遣う彼女に、知らせないでおくことはおそらく文隼にはできない。知らされない苦しみよりも、知らされることによる苦しみの方がいいのだという、それは文隼らしい人を思う気持ちのあらわれでもある。

「來螺に戻るかどうか……」

戻れるのだろうか、と灰は思う。戻りたいかどうか、そう問われれば迷いなく戻りたいと答える自分がいる。しかし、それを口に出すことはどうしてもできなかった。変わらぬ笑顔を向ける叶と文隼がいるあの場所へ。だが、灰の心は既に決まっているのだ。多加羅へ来ると決めたあの時に、引き返しようにもなく進む道を選んできた。

「俺にはお前が多加羅にいて幸せだとはどうしても思えないんだ。

自分で選んだって言ってたけど、何故そうまでする必要がある。お前はまだ一人で立つことも出来ない存在だろう」

「そうだな……」

「だけど、多加羅ではそれは許されないんじゃないのか？ お前を受け入れない連中の中で、異端であることを秘して……その力を利用して、危険に晒す奴らとともに生きるのか？」

「それははじめから覚悟していたことだ」

穏やかな言葉に文隼が黙る。閃くように夜空の片隅を影が渡る。

優美なその動きは梟だろうか。人には見通せぬ闇。それを透かし

見る生き物だ。

「灰、私の思いも言っておくわ」

叶の静かな声が夜気に響いた。

「あなたは絶対に、來螺に戻って来てはだめ」

「叶……」

驚きの籠った丈隼の呼びかけに、叶は振り返らなかった。強い瞳でまっすぐに灰を見つめる。

「もうあの街にあなたの居場所はないのよ。來螺は一度出て行った人間を、再び受け入れはしない」

「……」

叶の澄んだ声に迷いはない。灰はただ黙って聞いていた。心の中は不思議に穏やかだった。

その時背後から落ち着いた声が掛けられた。

「叶、そろそろ舞台の時間だ」

采が暗がりから姿をあらわす。いつからそこにいたのだろうか。

叶は頷くと、一瞬灰の腕に触れ、そして踵を返した。

「丈隼、一緒に行つてあげなさい」

采は言つと叶の後を追うその姿を見送り、灰を振り返った。

「少し、話をしようか」

丈隼は叶の後ろ姿を追いかけながら心中の混乱を持って余す。前を歩く叶の歩みには迷いも躊躇いもない。灰に言った言葉と同じように

眼前にいくつもの篝火の明かりが見えた。叶が演奏を行う幕舎は目の前である。丈隼は思わず叶に呼びかけていた。

「待ってくれ。さっきのはどういふことなんだよ」

「言った通りよ。私は灰が來螺に戻って来るのは反対、ただそれだけ」

丈隼は叶の腕を掴むと自分の方へと振り返らせた。

「俺が言ったことを忘れたのか？ あいつは怪魅師けみしであることを利

用されてるんだよ。それに惣領家にも街衆にも冷淡に扱われてる。あの怪我だっておかしいじゃないか。聖遣使しょうけんしが関わってるんだぞ。異端であることがばれたら殺されるだろう」

叶は答えない。丈隼は苛立ちを感じた。

「叶はそんな中に灰を置き去りにして平気なのか？ あいつがどうなつてもいいのか!？」

「平気なわけじゃない」

呟くような声に、丈隼は息を呑んだ。叶の瞳が潤んでいた。だが涙は零れない。ただ、強く丈隼を睨みつけていた。その視線がふと落ちる。

「痛いわ。離して」

「あ……ごめん」

丈隼は慌てて細い腕を離れた。強く掴んだつもりはなかったが、白い肌がうつすらと赤くなっている。

「丈隼、私も灰に戻って来てほしい、そう思わないわけじゃないの」「それならどうして……」

「來螺は、人を削る」

囁くような声だった。

「そこで生きる人の心を削る。誰にも侵されたくない矜持を削る。命さえ……。私達はあの街では何かを削って、大切なものを奪われて、時には自ら捨てて、そうやって生きているの。そうしないと生きていけないの」

丈隼はその言葉を聞く。ただ聞くことしかできなかつた。

「來螺は、たくさんの人から削り取られ、奪われたものによって築かれた街なのよ。灰は確かに來螺に戻れば、今回のような目には合わない。周りの人から冷たい仕打ちを受けることもない。でもあの子は確実に何かを失うことになる。どれだけ苦しくても、自分で選んで、何かに立ち向かおうとしている、その心を自ら捨てることになるの」

叶は顔を上げた。仄かに微笑んだ。透き通るように美しい笑顔だ

った。

「私は、灰にそんな思いはしてほしくない」  
文隼には、何も言えなかった。

「傷は痛むか？」

「いえ、それほど痛みは感じません」

采の問いに灰は答えた。采はそうか、と言うと懐から香草を取り出す。それを口に入れかけ、ふと手を止めると灰を見た。

「かまわんか？」

「いいですよ」

香草は主に男性が好む嗜好品だ。口に含んで噛めば独特の刺激と香りがある。もっともその香りを好まない者も多く、それを慮っての采の言葉だった。采は香草を口に入れ、そして笑んだ。

「君のお母さんは香草が嫌いだった。面と向かって言われたことはなかったが、きっとやめてほしいと思っていただろうな」

「母を知っているんですね」

「ああ、私の見回りの管轄に楽都らくとが含まれていたからね。それに住んでいる家が近かったせいで、彼女が店の舞台に出る前から知っていた」

采は昔を思い出しているのか、目を細めた。その目が灰へと向けられる。

「君は、彼女によく似ているよ」

「………そうでしょうか」

思わず髪に手を触れていた。今は隠されていない。夜気に晒された髪は乾いて冷たかった。

「ああ、勿論外見のこともあるが、それだけじゃない。心の持ち方とでも言おうか。辛いことから目も逸らさないでいられる強さ、そういったところが似ている」

「そうでもないと思います」

その声音に、采は少年の顔をちらりと見やった。

「先の叶の言葉を責めないでやってほしい」

灰は顔を上げると男を見た。

「彼女は君のことを思って言ったんだ」

「わかっています。それに俺はやはり來螺には戻れません」

「そうか」

裸足の足が冷え、感覚がなくなっていた。それでも灰は立ち尽くす。采もまた黙って視線を遠くに投げていた。香草の香りが漂った。「俺は辛いことから苦しいことから目も目を逸らしたつもりはありませんでした」

不意に灰が言う。声は低く、感情を抑えつけるように静かな強さがあった。

「でもそれは違ったんです。やはり自分をどこかで守ろうとしていた。逃げ道を無意識に作って、自分にとって辛いことを見ないようにしていたんです」

采は答えない。灰は言いながら、月を見つめた。その冷たく澄んだ光が、刃の煌めきを思わせた。その軌跡　母親を切り裂いた刃の鋭さだ。

なぜ、母親が殺されたその記憶が曖昧だったのか。なぜ、聡達<sup>そつたつ</sup>に刀を突き付けられるまで明瞭に思い出すことがなかったのか、今の灰にはその理由がわかる。あの記憶は彼にとって禁忌だった。目の前で母親を殺された酷い<sup>むご</sup>光景を、幼かった彼が受け入れることができなかつたせいもある。だがそれにも増して、思い出してはいけないと、無意識に目を逸らしていたのではないか。なぜなら、それは彼が犯した罪へと繋がる記憶でもあつたのだから

采は問うた。

「君は、母親の命を奪った相手を、その力で殺したのか？」

灰は男を見る。ただまっすぐに　そして言う。

「はい。俺が殺しました」

「そうか」

采の声は淡々としていた。灰の力のことを知って、もしかと考え

ていたのだろう。男の尋常ではない死に様を　　その亡骸を實際に  
目にしていたのかも知れない。

「俺はあの男を殺してからずっと、怪魅<sup>けみ</sup>の力を使うことを恐れてい  
ました。また取り返しのつかないことをしてしまうんじゃないかと  
怖かったんです。でもそうやって逃げていても、この力で人を殺し  
てしまった事實は消えないんです」

まるで刻印のように、決して消えることはない。

「丈隼からだいたい事情は聞いた。君が多加羅に呼ばれた理由も  
灰は思わず采を見やる。それに、采は僅かに笑った。

「あいつを責めてくれるなよ。私が無理矢理に言わせたのだからな。  
他の者は知らぬ。他言はせぬと誓おう。だが、聞かせてくれ。なぜ  
君は辛い道を選ぼうとするのだ。なぜ多加羅に来たのか、聞かせて  
はくれまいか？」

「多加羅に呼ばれた時、怪魅師としての俺が必要だと言われて、そ  
れを拒めばずっとこの力から逃げ続けることになるんじゃないかと  
……それだけはだめだと思っただんです。でも……やはり俺はどこか  
でまだ逃げていて、目を逸らしていました」

羽織る白い衣が頼りなげに揺れた。それが少年の心をあらわして  
いるように采の目には映る。

「君はそうやって、ずっと過去に犯した罪を抱え続けていくつもり  
なのか？」

問いはただ言葉の羅列でしかなく、しかし発すればたちどころに  
消しようもなく心に刻まれる。

「罪を犯す者は多い。だが、その誰もが君のように向き合うわけじ  
ゃない。向き合わずとも誰も責めない場合もある」

例えば戦時のように、人が人を殺すことが必要とされることさえ  
ある。そして、例えば大切な存在を奪われた者が復讐をしたとして、  
それを正しいことだと信じる人々とているだろう。

だが、少年が頷くことはない。采はもどかしさを覚えた。人は己  
を守るうとするものだ。辛いことから自らを遠ざけようとするもの

なのだ。それは弱さかもしれないが、強さでもある。そうして築かれる生こそが人の在り方なのだ。

「君がそうやって罪を抱え続けても誰も救われはしない。君自身もだ。過ぎた過去を……過ちを忘れると私には言えないが、抱え続けることに意味があるのか？ 君が罪悪感からそうせずにはいられないだけならば、やめた方がいい」

「そして自分自身も見失うんですか？」

問いに問いで返され、采は言葉に詰まる。向けられる瞳は静かに張りつめ、湖の水面を透かし見た時のような深さを感じさせた。烈しい炎を思わせた紫弥とは違う、その瞳だった。

「確かに罪悪感なのかもしれない。そうやって結局逃げているだけかもしれない。でも俺があのことを忘れたとしても、それで終わるわけじゃないと思います。ただ俺の一部になるだけです。知らないうちに、人を殺した自分も、その罪を忘れてしまった自分も、自分を許してしまった自分も、消えずに一部になってしまっただけです」

人は変わるものだ。無意識にせよ、意識的にせよ。そして灰は言う。そのように自分自身気付かぬうちに変わってしまうのが嫌なのだ、どれほど辛いことであつても目を凝らし、己で己を見続けたのだと 滾るように激しい少年の性さがに、この時はじめて采は気付く。静けさのうちに秘められたそれに、幼さはなかった。

そして自らの罪を購い続けるのか 問うことはもはやできなかつた。

空を見上げれば、問えない言葉と、やるせない思いばかりが胸中に渦巻いていた。

冬が近い。遙かな高みは日を追うごとに深みを増し、夜は次第に長くなる。人は冬へと向かうその夜空を千那夜ちなやと呼ぶ。波にさらわれるように気付けば季節は巡り、広大なその循環の中で人はあまりに小さい。

「こんな所にいたんですか」

威勢よく響いた声に静寂が破られた。振り返った二人に向かって、



走り寄ってくるイーリヤの姿があった。

「幕舎に行つたけどいないし、どうしたかと思つたよ」  
灰に向かつてにっと笑いかける。

「どうしたのだ」

「若衆の連中が来てるんですよ」

「若衆が？ なぜだ」

「灰を迎えに来たつて言つてました」

黙つて遣り取りを聞いていた灰は思わず目を見開いた。

「お前、何て顔してんだよ」

イーリヤが笑う。肩を叩こうとして白々とした包帯に気づき、  
まずげに手を握つた。

「イーリヤ、若衆を応接用の幕舎に通しておいてくれ」

「はい。じゃあな、灰」

駆け去つていくイーリヤから灰へと、采は視線を移す。

「多加羅へと、帰るんだな？」

「はい」

答えに迷いはなかった。

「ならば衣を用意させよう。その格好ではいかんだろう。幕舎に戻つていてくれ」

頷き歩きだした灰に、采は声をかけずにはいられなかった。

「良い仲間を持ったな」

振り返つた灰は一瞬言葉に詰まり、そして笑んだ。

「はい」

少年が采にはじめて見せた笑顔であり、十四歳という年相応の表情だった。遠ざかる灰の後ろ姿を見送つて、采もまた踵を返した。

## 40 (後書き)

もう一話、と思いましたが、眠さに負けました。明日出来れば…  
…。  
では、今後ともよろしくお願いいたします！

灰が若衆達の通されている幕舎へと赴いたのは半刻程後だった。

居住区域にある幕舎の中でも比較的大きなそこにいたのは、須樹と仁識、そして各範のほぼ全ての顔ぶれである。まさかそれほどの大人数で来ているとは知らなかった灰は思わず入口で立ち止まる。

灰を見た若衆の面々も咄嗟に言葉がなかった。灰が借りた衣は国境地帯のものである。加えて普段は隠している髪を晒しているせいで、一瞬灰その人とはわからなかったせいだった。

「傷の具合はどうだ？」

須樹が気遣う声音で言った。

「出血の割にはそれほど深くなかったみたいです。そんなに痛みもありません」

「やはり大したことはなかったようですね」

仁識は言う。

「そういうお前が一番心配していただろう」

言った治都は仁識の凍りつきそうな眼差しに、あらぬ方向を向いた。思わず灰は苦笑し、その笑みに漸く場のぎこちなさが解ける。

「犯人を捕えたんだろ？　すごいな」

言ったのは晶である。

「どうやって捕えたんだ？　なんで犯人の場所がわかったんだ？

いいよなあ。俺もその場にいたかったなあ。須樹さんも灰と一緒に犯人を追うなら俺達を連れて行ってくれたらよかったのに」

「お前らみたいな未熟者を連れていけるか」

晶と治都の遣り取りを聞いた灰は、きよとんとして須樹を見やっただ。一体どうい話になっているのか、灰には皆目見当がつかない。「そういえば、錬徒は酒宴の儀に参加しないとだめなんじゃないんですか？」

「それは若衆頭のお墨付きだからな。俺達は言ってみれば若衆の任

務として来たんだ」

治都がにやりとして言う。ますます訳のわからない話に灰は仁識を、そして須樹を見た。

「お前は若衆に戻れることになったんだよ」

かいつまんで神殿前広場での顛末を聞いた灰は、呆れた顔で仁識を見やった。仁識は涼しい顔で言う。

「嘘は言っていないですよ」

「それにしてもあの時の加倉かくら様の顔をお前にも見せてやりたかったぞ」

須樹は灰へ近寄ると笑んだ。

「まあ、そういうことだ。若衆に戻る気はあるか？」

その問いにふと沈黙が落ちる。皆が灰を見つめていた。若衆に背を向けたのはほんの数日前。それがまるではるか昔のことのようだ。

「若衆にお前の場所はある。あとは自分で決めればいいんだ」

戻れ、とは言わない。果たしてこの先若衆にすることが灰にとって良いことなのか、それは須樹にもわからなかった。加倉は依然として灰のことを疎ましく思っている。今回の一件で灰への風当たりはさらにきつくなるかも知れぬ。

「若衆に戻ります」

灰の声音は潔くあっさりとしていた。

「ありがとうございます」

仁識は正面から言われ、一瞬言葉に詰まったようだった。ばつの悪そうな表情が掠め、そして無愛想に言う。

「私に礼を言う筋合いはありません。別段あなたのためだけにしたわけじゃない。いい加減若衆頭の戯言に付き合うのもうんざりしていただけます」

「ま、そういうことにしといてやるさ」

治都は言う。さらに冷やかさを増した仁識の視線もどこ吹く風、一同を見回すと威勢良く言った。

「多加羅へ帰ろう」  
応える声は、どれも明るかった。

來螺の宿営所を後にした一行は多加羅へと街道を歩く。灰の傷を慮ってゆっくりと歩む彼らの周りを、冷たさを増した風が吹き抜けていった。

幼い者達にとってはこのような深夜に街の外へと出るのははじめてのことである。遠く影に沈む景色も、見上げれば広大な夜空も、彼らの心を浮き立たせていた。小声ではしゃぐのを聞きながら、灰は宿営所を出る時にかげられた丈隼たかはやの言葉を思い出していた。

多加羅へ、帰るんだな 言った丈隼は、もう來螺へ戻れとは言わなかった。頷いた灰に向かつて複雑な眼差しを向けた彼は、興行のため見送ることのできぬ叶かのの言葉を伝えた。

どこにいても、何をしていても、私はあなたを信じている  
どうか、強く生きて それは、叶の母親が幼かった彼女に言った言葉だった。無論、灰は知らぬことである。だが、祈るように込められた叶の思いを感じていた。丈隼は最後に何を思ったか溜息をつくと、大きく笑ってみせた。そして言った。また会おう、と。

また、会おう。その言葉を灰は噛みしめる。六年前ならば、おそらく決して口には出せなかったその言葉を、灰も躊躇うことなく丈隼に返していた。

多加羅の街に近づくにつれ、熱気とどよめきが壁の外にまで滲み出して来るかのようにだった。大通りが見える門へと歩いてきた彼らは、その手前に立つ人影に気付く。暗がりに潜むようにして立つその人物は、華やかに盛り上がる街と、静かに深まる夜の大気の狭間に佇んでいる。どちらにも染まらず立つ様が、ひっそりとしたその姿をかえって目立たせていた。

近づくにつれ、何人かが息を呑んだ。

「聡達そうたつ……」

呟いた須樹の声は硬い。

黒い衣に身を包んだ聡達だった。洒脱に着崩した衣と鮮やかな翡翠の帯が、どこか頹廢的でありながら人の目を惹き付ける雰囲気を醸し出している。

仁識が無言で前に進み出ると腰の剣に手を置いた。治都がその横に進み出る。瞳には怒りがあつた。事情のわからない幼い者達が年長者のただならぬ様子にしんと静まつた。対する相手は悠然とそんな彼らを眺めると、ふと笑んだ。それが、深く凄味を増して灰へと向けられる。

「そちらの若君と話をさせていたきたい」

声音は傲慢に、淡々と響いた。慇懃な言葉に須樹が険しく答える。「承服しかねる。そこをどいていただこう。いかに沙羅くしろ久惣領家のお方とはいえ、我らは容赦しないぞ」

「穩便にいこうじゃないか」

聡達は、笑みと、多分に嘲りを含んだ声で言う「と灰を見やつた。それを見返し灰は言う。」

「ここにいてください」

「灰、だがあいつがお前に傷を負わせたんだろう」

「この場では聡達は何もできません」

「だが……」

言い募る須樹に灰の言葉はあくまでも静かだった。

「話すだけです。危険なことはない。それに俺もあいつには聞いたいことがあります」

須樹は溜息をつく。

「わかった。だが、危ないと見えたら俺達はすぐにあいつを押さえる」

「はい」

頷いた灰は前に立つ仁識と治都の間を抜けると、まっすぐに歩いて行つた。若衆の視線がその背中を追う。聡達は暗がりから歩み出し街の明かりにあらわになつたその姿に目を細めると、薄く笑つた。呟いた声は低い。

「これは、また……」

三步の距離を余して灰は聡達と向かい合う。観察するような聡達の視線を不快に感じ、それを悟られぬように殊更に無表情を保つと言った。

「話とは？」

「愛想がないな」

思わず顔を顰めた灰に、聡達はにやりと笑む。その視線が僅かにのぞく包帯を捉えている。

「傷は痛むか？」

「……痛む、と答えれば満足か？」

「やはり俺が術を放つたと知っていたか」

灰は黙る。内心の苦々しさが表情を掠めたのに気付いたのか、聡達が心底楽しげに言葉を継いだ。

「惣領から俺が犯人を逃亡させた経緯は聞いているんだろう？」

「……」

「不可解だと思わないか？」

口調は親しげであり、朗らかですらある。偽りのそれに、灰は目を細める。

「今回の一連の騒ぎだ。穂の原には犯人を追いつめるため異端の術が仕掛けられていた。だが、なぜ來螺の連中は火つけの犯人が異端だとわかったのだ？ どうやって知ることがかなう？ あの時点で犯人が異端だと目星をつけていたのは俺達聖遣使しよつけんしだけだ。多加羅の神殿とてそのことは知らされてはいなかった」

聡達は僅かに首を傾げる。まるで今思いついたかのように言い募った。

「ああ、違ったか。確か多加羅惣領家は神殿に抗議をしたんだっとな。なぜ、聖遣使が街に入り込んでいるのか。その時、神殿ははじめて犯人が異端である可能性があることを知っただろうな」

その原因となったのが自分であることなど忘れたかのような言い草である。

「異端を狩る聖遣使が街に入り込んでいることを知った犯人が、來螺の者に罪を被せた。そうであれば犯人は事情を知る神殿内部の者に違いない。それを推測し、犯人を異端の術で追い詰める。そんなことが興行のために多加羅へと来た來螺の連中に可能だと思うか？」

「何が、言いたい」

「一連の事情を知り、そこから犯人が神殿内部にいて、しかも異端であることを導き出せる者、それは多加羅でも限られているが、惣領家の一員であれば可能だ。犯人を割り出すための案は來螺の連中ではなくお前が出したんだろう」

「問いですらない。じりじりと痛む傷に、灰は惑う。だが、足元が揺れるような心地は傷のせいばかりではなかった。」

「俺が知りたいのはこの先だ。誰が、穂の原に犯人を追いつめるための術を仕掛けたのか。それを知るために、犯人を逃亡させ、來螺にいるはずの異能者を挑発した。昨日お前たちが倉庫から生きて逃られたということは、あの面子の中に異能者がいた可能性が高い」

不意に聡達が笑んだ。

「そして今朝、あの場で俺の言霊に振り返ったのはただ一人、お前だけだ。なぜ言霊に気付いた？」

「……」

「質問を変えようか。なぜ、あの術を避けることができた？」

まるで歌うような抑揚で言う。

「避けなければ死んでいた」

「そうだな。首を裂かれて即死だ」

事も無げに聡達は言った。

「俺が術を仕掛けた異能者だと言いたいのか？」

「それがしかとはわからぬ。俺は実際に倉庫の内部の様子を知っていたわけではないからな。法術を避けたのはたまたまかもしれぬ。おまけに頼みの綱の火つけの犯人がなぜか腑抜けた有様だ。……地

下道で一体何があったのやら、役に立たぬものだな」

明朗に言い募る。どこまで本気なのか、まるで冗談を言っている



かのような軽妙な響きだった。

「……あの男をどうするつもりだ」

思わず言っていた。声音に籠った怒りに、聡達がわざとらしく目を見開く。

「気になるか？ 異端の術で人を殺した男によもや同情でもするか？ どう転ぼうと死罪にしかならぬ奴だ」

灰は拳を握り締めていた。断じて同情などではない。だが、神殿の司祭という神に仕える立場でありながら異端の力を有していた、それ故に追い詰められ闇を孕んだ男の苦悩を、聡達は利用したのだ。思うまま操り、偽りの希望を与えた。

そして、僅かに残っていた男の正気を奪い、最後にはその精神をも消したのは灰だった。

「男のことなどより自分の心配をした方がいい。しかとわからぬとは言え、お前が異能者である可能性は高いと俺は思う。いや、むしろそうであれば良いと願っているくらいだ。多加羅惣領家の若君が異端とは、傑作だ」

「俺がそうだとすればどうする。異端として狩るか？」

「まあ、それも悪くはないが……。以前にも言っただろう。俺はお前に興味があるのさ。ずっと会いたいと思っただけだ」

聡達の笑みが変質する。獰猛な暗さがそこにあった。

「あの刀は受け取ったか？」

「刀だと？」

「なんだ、多加羅惣領はまだお前に渡してはいないのか。つまりな」

刀 灰の表情が強張る。嘗て一度多加羅の街で対したあの時、聡達が彼に突きつけた刀であることがわかった。六年前の惨劇の記憶に繋がるそれである。

「なぜ、あれをお前が持っている」

聡達を睨みつける視線は冷やかに苛烈だった。それに聡達の笑みはますます深い。

「やっと本性を出したか」

「聞いたことに答えてもらいたい」

「簡単なことだ」

聡達はおどけた仕草で手を閃かせる。まるで騙し技師が己の手の内に仕掛けがないことを晒すかのよう

に「あの刀でお前の母親を殺しその場から逃げた男が、俺の兄だからだ」

時間が凍りついた。己の吐く息の白さばかりが、目についた。灰は言葉もなく目の前の男を凝視する。なぜ、笑んでいるのか。麻痺した思考の片隅で思う。なぜ、笑むことができるのだ。まるで嘲るように、最高の冗談を言ったかのように、笑みを象る口元がなおも動く。

「目の前で母親を殺されるのはどんな気分だ？ 犯人が憎かったか？ それともただ怯えていただけか？」

「……なぜ……そんなことが知りたい」

問う声は遠く、まるで自分のものではないようだった。

「単に興味があるのさ。八つやそこらのがきが、目の前でなすすべもなく母親を殺されてどのように感じたのか。あの事件が起こった時に、俺は心底それが知りたかった。俺とさほど歳も違わない相手が何を思ったのか」

「知ってどうする」

「どうもならんさ。だが生憎と俺は兄貴がその後、何者かに殺されたと知っても悲しくともなんともなくてね。むしろ俺が興味を持ったのはお前だった。兄貴を殺したいと思ったか？」

聡達がじわりと間合いをつめた。背後で若衆が身じろぐ気配を感じ、灰は聡達を睨みつける。事実に対する驚愕と戦慄をも圧して、この相手に己を晒してはならないという思いがあった。直観である。

警鐘 出た声はひどく素気なかった。

「自分の兄を殺した相手が憎くはないのか？」

「憎い？」

意図しているのかいないのか、聡達が不思議そうな表情になる。なぜそのようなことを聞かれるのかわからぬといった体だ。

「言つたる。俺は兄貴が死んだところで何も感じはしなかった。兄とは言つても殆ど顔も知らん相手だ。おまけに僅かに覚えているのはがきだった俺を死ぬほど殴りつけていたことだけという御仁だからな。あの死に様を見た時には心底兄貴を殺した相手に会いたいと思つた。憎くはないが、興味はある」

軋むように、感情がひび割れるのを灰は感じていた。己がなしたことの、また一つの帰結がここにある。それとも始まりだろうか。足元の大地が崩れるような、体が揺さぶられるような感情が吹き荒れていた。逃げて惑い、掴んだと思つて砂のように掌から零れ落ちる。それでも灰は問うていた。

「兄を殺した相手がわかつたらどうするつもりだ」

「そうだな。殺される時の兄貴がどんな風だったかを聞きたい。怯えていたか、命乞いをしたのか。どれほどに絶望し、苦しみ、どんな不様な最期だったかを余さず話してほしい」

聡達は笑む。灰の顔を覗き込むと囁くように言つた。

「そして兄貴がされたそのままに、俺が相手を殺す」

街のどこかで金筒の音が響いていた。打楽器である。音楽に合わせ拍子を取っているのか、遠く、虚ろに陽気だった。

「勘違いするなよ。仇を討つわけじゃない。兄貴にそこまでしてやる義理はないからな。だが、俺は単に知りたいのさ。兄貴を容赦なく殺した奴が、同じことをされた時、どうなるのか。絶望する瞬間にどんな顔をするのか……全てを失うと悟つた瞬間にどれほどに見苦しい醜態を晒すのか。退屈で空しい人生に、なぜそこまでして見がみつくなのか。俺が求める答えだ」

「それで答えがわかるとでも思っているのか？」

これに聡達は答えず、身を引く。離れて立つ若衆達の不穏な気配、怒りと敵意が聡達へと向かう。聡達はそちらに一瞬目をやり、軽く舌打ちをした。

「つくづく邪魔な連中だな」

呟く声音には僅かな苛立ち、しかしまたも笑んだ。

「お前が異端であるならば、必ず暴く。お前は俺の獲物だ。忘れるなよ。そして、精々俺を楽しませてくれ」

言つと、さらに背後に身を引く。それだけの動作で、聡達の姿は闇に吞まれた。身じろぎもせず遠ざかる気配を追い、漸く灰は握っていた拳を開いた。早鐘のように打つ鼓動とは裏腹に体の芯が冷えていた。

「大丈夫か？」

背後からの須樹の問いに灰は無言で頷く。会話は聞こえていなかった。だが、聡達が去つた闇を鋭く睨みつける須樹の様子から、二人の遣り取りが穏やかならざるものであつたことに気付いているだらうことがわかつた。

「若様、もう少し無理をしていただきますよ」

仁識が言つと灰に近付いた。訝しげに見やる灰の眼差しを受け止め、何を思うのか笑んだ。

「これから惣領の元へ行きます。惣領は、若様が火つけの犯人を捕えたことに対して労いの言葉をかけたいと仰せでした」

「おいおい、怪我をしているんだからまっすぐ星見の塔ほしみへ行つたらいいだらう」

「そうだ。今日はもう無理をしない方がいいです」

「惣領には後でも会うことができますでしょう」

氣遣う声に、しかし灰は頷かなかつた。答える。

「わかりました」

そのまま街へと向かう灰の姿に、若衆が続いた。首を傾げながらも、迷いのない灰の足取りに引つ張られるようにして歩く。

「おい、仁識、これ以上灰を晒し者にするようなことはせんでいいだらう。なぜ惣領の元になど行くんだ」

治都の抗議に、仁識は答えなかつた。須樹が問う。

「仁識、何か考えがあるのか？」

「若様がお前達の後ろに隠れてただ守られているだけでいいなら、私もこのようなことは言わぬ。だが、それにも限界があるだろう。これからも多加羅で生きていくのであれば、若様はもっと強かにならねばだめだ。それに今の状況を変えるには、若様にはどうしても必要なものがある。容易くは得られぬものだ。だが、今は好機だと私は思う」

「何を言っている。さっぱり訳がわからん！」

治都の憤慨した声を聞きながら、須樹ははからずも仁識の言わんとすることを理解していた。多加羅にいる限り、灰には常に偏見と心ない中傷が付き纏う。誰も灰本人の姿など見ようとはしないだろう。それを打破する。今はその数少ない時なのだ、と。

「おい！ 仁識、何を考えているのかももう少しわかりやすく言ってくれ」

治都の言葉に、仁識はふと皮肉に笑むと言った。

「わかりやすく言えば、貴族的思考、というやつだ」

#### 41 (後書き)

聡達……結構書いていて楽しい人物です。灰ほど苦労しない、というか、科白がさらさらと出てきます。

彼が物語に本格的にからんでくるのはかなり先です。第二部を飛び越して、第三部になる予定。まだ書いてもいません。そこまでいけるだろうか……。

ではでは、今後ともよろしくお願いいたします。

喧噪と享樂が入り交じり、凝る闇は紫、時はただ灯された明かりの揺れに宿る。夜は紗に覆われたよう、その遙か上で移ろう月に人は気付かない。やがて光が全ての色彩を奪うまで、豪奢に装う者も檻褸わかしゅうに身を包む者も、ただ夢にたゆたう。

道を歩く若衆わかしゅうに、浮かれ酔う人々は一時目を奪われ、そして道を開けた。揺れ動く波にも似た群衆の間を進めば、やがて見える神殿前の広場は一際明るい。

広場を絶えず取り巻く人波もまた、彼らに目を止めてその歩みに道を譲る。

今しも歓声が沸き起こった広場では、見事な体躯の男が、桶程もあるつかという器で酒を飲み干したところだった。正面の惣領に大仰にお辞儀し踵を返した男は、広場へと踏み出してきた一団に正確にはその先頭に立つ人物に目を奪われた。

峰瀬みなせもまたその人物に目をとめ、鷹揚な笑顔を浮かべていた表情を引き締める。傍らで悠緋ゆうひがひそりと呟いた。

「灰……」

少女の声音に籠る響きに僅かに意識を奪われ、そして改めて灰を見れば、否応もなく記憶の底に封じ込めた人の面影が重なった。少年は負った傷のせいも蒼白にも見える。晒された銀系の髪も相まって、その姿は清冽だった。身に纏うゆったりとした衣は国境地帯のもの、白から水藍に、やがて天宵の深さに移ろう色彩が玉響に揺れ、見る者を惑わすかのようである。

灰が一礼する。傷を感じさせない滑らかな動きだった。その背後で若衆が一様に叩頭した。

「傷を負ったと聞いた。大事はないか」

「はい。儀式に参ることができず、申し訳ございません」

「それは構わぬ。火つけの犯人を捕えたこと、見事であった。恙無

く祭礼最後の日を迎えることができたのはお前のお陰だな」

「俺一人の力ではありません。來螺らいらの人々と、ここにいる若衆の皆がいてこそ、犯人を捕えることができたのです」

交わされる会話は、静寂に包まれた広場に響く。

「闇は、被われましました。もう何も憂う必要はございません」

灰の言葉に、峰瀬は僅かに目を見開いた。込められた意味を正確に悟る。街に巢食う闇を滅したのだと、少年の言葉が告げていた。

「……一点でも闇の曇りがあれば、祭礼の華やぎも褪せる。人々が今宵を喜びのうちに迎えることができたのも、そなた達と來螺の者のお陰だ。心から礼を言おう」

言つと、立ち上がり杯を掲げる。

「私からそなた達に酒を振る舞いたい。杯を受けてくれ」

叩頭していた若衆達が驚きに顔を上げた。峰瀬の命に従い、下男達しもやめが灰と剣舞けんまいに参加した年長の若衆に杯を渡す。広場を囲む人々からも驚きのどよめきが上がった。成人に達さぬ若者が酒を飲むことがないわけではないが、このような公の場で惣領自らの言葉で酒を振る舞われることは異例だった。

「皆、立つがよい」

峰瀬の言葉に、ある者は平然と、ある者はおずおずと立ち上がる。注がれた酒と、雰囲気に誰もが魅され　そして峰瀬が高々と杯を差し上げる。

「そなた達の類まれなる勇氣と洋々たる未来に」

一気に杯を干した惣領と若衆の姿に、人々から歓声がわき起こる。興奮が高揚を呼び、高揚が一瞬の幻惑にも似た陶酔に人々を引き込んでいた。

灰は、飲み下した酒の熱さと、その馥郁たる香りが体の奥底に落ち込むような感覚に感う。引き込まれるように一瞬瞳を閉じ、再び男を見つめれば、相手もまた自分を見据えていた。

「今日は星見ほしみの塔に戻り、休め。暫し安静につとめ、傷を治すようにせよ」



その言葉に灰は一礼し、杯を下男に返すと、街の中心部に向かって広場を後にした。

迷いなくついて来る若衆の足音を背後に聞き、緩やかに上昇する道を歩く。次第に街は静けさに包まれていった。やがて最後の防壁の付近まで来れば、そこに人影はなかった。

漸く足を止め、灰は振り返る。無言で後に続いていた若者達もつられたようにその視線の先を追っていた。見下ろせば祭りは光の海に浮かぶ漁火のように、儂かった。

「終わったな……」

一人が言った。

「ああ。祭りが終わった」

終わったのか　揺らめく幻は朝に終わる。そしてそれとともに彼らは何かを失う。安穩と享受し、あるいは無力感と安逸の中にあつたもの、それが最早戻らぬことを感じ取っていた。

始まったのだ　そして誰もが心中に呟いていた。幼い者でさえ、敏感に察していた。茫洋としたその先は見えぬまま、だが慄くような心地の底にあるのは、確かに希望と呼べるものだった。

言葉もなく街を見つめる彼らの中で、灰もまた立ち尽くしていた。心中は麻痺したように凧いでいた。だが、それがほんの一時のことであるのを知っていた。　忘れるな、と告げた声が、繰り返し響いていた。忘れるな、と呟いていた。忘れてはならない。決して目を背けてはならない　そう思っていた。

そして夜は更けていった。

最後の一夜の泡沫は夜明けまでも続き、地平に白々とした光が差す頃に漸く人々は眠りに就いた。あるいは眠ることなく朝を迎えた者もまた多いが、明るく陽が昇るほどに祭りの後は心寂しく、どこかくすんで雑然としていた。

いつにも増して災禍と狂乱に満ちたその年の祭礼も、終わってしまえば残るのはそこはかとなない感興と、興奮の名残ばかりである。

火つけの犯人が神殿の司祭であつたことも、その劇的な逃亡と捕縛的一幕も、祭りの華やぎが過ぎれば、人々にはどこか遠い出来事である。それは神殿にとつてはむしろ幸いであつたかもしれない。

峰瀬は祭礼が終わつた朝に、神殿からの書状を受け取つた。司祭長自らが筆を取つたらしい流麗な書体には、眞実相手が何を思うかまで読み取ることではできなかったが、一連の災禍が司祭の手によつて起こされたものであること、そしてそれを気付くことなく見過ごしていた己の不明を淡々と詫びていた。司祭長その人が惣領家になつたような態度を示すことこそ異例であり、今回の事の重大さを窺わせるものであつた。

尤も、再び捕われた火つけの犯人は、既に異端として聖遣使に引き渡されている。男を引き取つた聖遣使は聡達ではなかつた。聡達の思惑は外れた。だが、聡達が法術で灰を傷つけたことが、峰瀬は氣になつていた。何を意図してそのような行動に出たのか。灰が怪魅師であることに勘付いたのか。しかし、その後聡達からの接触はない。いずれにせよ、今となつては多加羅がこれ以上火つけの一件を調べることは出来ない。権限を有してはいないのだ。眞実は闇に、そしてやがては忘れ去られるだろう。

街に火をつけ人を殺した男は、貧しい生まれだつた。両親は苦しい生活の中、五人の子どものうち末の一人を神殿に預けた。それが男であつた。せめてそこならば飢えることもあるまいという配慮であつたか、しかし、その後両親が子どもに会うことは二度となくなつた。

子どもには異能の力があつた。おそらく人には秘して、幼い頃から火を操る能力を有していた。それが異端であることを子どもは知つていた。もしかすると両親も知つていたのかもしれない。それ故に恐れ、子どもを神の御手に任せたのかもしれない。

預けられた子どもは聡明であり、勤勉だつた。神殿以外に行き場所のない己の境遇を知つてもいたろう。信心深さも群を抜いており、やがて幼くして将来を囑望されるようになる。何の後ろ盾も持たぬ

貧しい子どもが、そのような立場となるのは極めて珍しく、そしてそれだけに周囲の期待も大きかった。

だが、彼は成長するとともにいつしか心の内に闇を抱える。どれほどに信心しても、どれほどに努力を積み重ねても消すことができぬ刻印、異端の力を有するというそれに追い詰められていった。なぜ神に見放された異能であるのか　おそらく力を使わず無視することです苦しみから逃れようとしただろう。だが、不幸なことに怪魅師の力とは、その優れた感応力で自然そのものの力を感じ取り、一体化するものである。どれほどに無視しようとも、人には感じられぬものを感じ取ってしまう己に、いつしか男の精神は破綻していった。

やがて男は神の存在に疑問を持つ。深い信仰は疑念に、崇拜は憎悪と紙一重の怒りに変わった。これほどに神を信じ、努力を重ねている己になぜ異端の力があるのか。神が真実坐すのであれば、異端である自分をなぜ滅滅することをせぬ。それとも神などおらぬのか。そして男は街に火をつける。その罪で、神の实在を試したのだ。神が真実己を断罪すれば人生をかけて捧げる信仰に間違いはないのだと　神に罰されて命を失うことさえ望んでいたかもしれず、その時すでに男は狂っていた。

決して語られることのない男の物語である。捕われた男がその後どうなったのか、人々が知ることはない。

車輪の軋む音が眠気を誘う。ゆっくりと流れる景色は広く、麗らかな日差しが暖かかった。葡萄色の大地は緩やかに起伏し、その向こうに見える端正な防風林が、物問うように揺れている。

叶は馬車に揺られながら、ぼんやりと遠くを見つめていた。胸に抱えた楽器を無意識に撫でる。彼女が乗る馬車は宿営所の道具を満載している。道具と道具の小さな隙間に芸能家達が思い思いに座り、うつらうつらと眠る者も多い。祭礼最後の夜は明け方まで興行を行

う。皆疲れているのだ。

「叶」

呼び声に目を振り向けると、馬に跨った丈隼たかはやの姿があった。軽快に走り寄って来る。蹄の音が陽気に響いた。

「疲れてるだろう。まだかかると、眠った方がいい」

「大丈夫よ。何だか眠るのがもつたいない気がするの。景色がとても綺麗で……」

「そつだな」

言いながら丈隼も気持ち良さ気に目を細めた。祭礼が終わり早々に宿営所をたんだ彼らは、今來螺への歸路の途上にある。祭りも終わってしまえば、遠く霞の向こうの出来事のようにである。まるで夢のような、と叶は思う。

吹き過ぎる風に丈隼の鋼色の髪が揺れる。視線を前に向けたまま、

丈隼が不意に言った。

「なあ、叶、來螺で生きるのが辛いかな？」

「突然どうしたの？」

思わず叶は笑う。しかし見上げた顔の真剣さにその笑いを呑み込んだ。丈隼はなおも前方を見やったままだ。

「もし辛くて苦しいなら、俺が來螺から叶を連れ出すよ。どこかもつと静かで穏やかな場所……叶が幸せを感じることができる場所に、必ず俺が連れて行く。そしてそこで自由に生きるんだ」

真摯な声音だった。

「馬鹿ね……」

ぼつりと、咳くように叶が言う。それに丈隼は漸く彼女の顔を見た。

「俺は本気だ。心の底からな。どこであろうと叶を守る自信もある」

叶は空を見上げた。どこか遠く、見たこともない土地の上にも等しく広がる空である。彼女の髪を揺らした風もまた、遙か彼方まで走って行くのだろうか。

「丈隼、自由な場所なんて本当にあるのかしら」

「……」

「來螺で生きることがどんなに大変か、幼い頃から母親を見ていればわかった。芸能家が來螺から抜けるのは容易くはないわ。昔一緒に遊んだ女の子は今では裏側で体売っている。私も、楽器を弾く手を失えば墮ちる場所はそこしかない。それでも……」

「叶」

遮ろうとする丈隼の言葉にも構わず叶は言った。

「自由っていうのは、どんな場所でも誇りを持って生きる、そういうことなんだと思うの」

「俺は叶が強いことは知っている。でも辛い思いはしてほしくないんだ」

くすりと叶は笑った。柔らかな瞳で丈隼を見つめる。

「ねえ、丈隼、あなた昔も同じこと言ったのよ。覚えてる？」

「……そうだったか？」

「そう。母が死んだ時。私答えることができなかったの。でも、今は違う。來螺で生きる自分に、少し誇りが持てる気がするの」

叶は徒な風に揺れる髪を片手で押さえた。その手を丈隼は見つめる。折れそうに細い華奢な腕、昨夜掴んだその感触を思い出していた。誰にも傷つけられることがないよう柔らかく抱き締めていたい。そう思わずにはいらなかった。しかし脆く壊れやすく見えるその姿とは裏腹に、あまりに眩しい叶の強さである。

「私はあの街で生き抜いてみせるわ」

叶が微笑んだ。その笑顔に丈隼は目を奪われる。

「丈隼には、そんな私を見てほしいの。今までと変わらずに見つめられ、丈隼は頷いた。そして天を仰ぎ溜息をつく。

「参ったよな」

ぼやくように呟いた。

「俺としては一世一代の愛の告白だったんだがなあ」

「何て言ったの？ 聞こえないわ」

丈隼は叶を見るとにっと笑んだ。

「叶と灰はよく似ているな」

「私と灰が？」

「そうだ。二人とも鈍さでは張るよな」

「どういう意味？」

「いいや、いいんだ。じゃ、俺前の方に行くから」

ひらりと手を振って遠ざかる文筆の姿を見送り、叶は馬車の縁に背を預けた。顔を俯ける。そこにはまるで泣き笑いのような表情が浮かんでいた。

「本当に馬鹿なんだから。灰ほど鈍くないわよ」

呟きは車輪の音に紛れた。吹き過ぎる風は不思議と優しくかった。

彼方に遠ざかる多加羅の街は、もう、どこにも見えない。

男は昼間近に目覚めた。常に夜明けとともに起きる男には滅多にないことである。昨夜普段は飲まぬ酒を一人飲んだせいかもしれない。い。

いささかだるさの残る体に苦笑し、階下から聞こえる物音に耳を澄ませた。どうやら妻はすでに起き出し、しきりに動き回っているらしい。彼よりもよほど遅くに眠っただろうに、活発なものである。無論、それは結婚した当初から変わらぬ。彼の妻はいつも生氣に溢れているのだ。

ゆっくりと階下におりると、卓の上にはあっさりとした食事があった。置き去りになっていた杯を見て、彼が珍しく酒を飲んだことに気付いたのだろう。胃に負担をかけぬものばかりである。

「起きたのね。よく眠れた？」

厨房から顔を出した妻が朗らかに言う。

「ああ、すっかり寝過ごしてしまっただね」

「珍しく飲んだからよ、きつと。一人で飲まないでどうせなら街に繰り出せば良かったのに」

「いやいや、どうにも人いきれが苦手だね」

他愛無い会話を交わしながら男は椅子に座る。毎年祭礼を殊の外楽しみにしている妻は、深夜まで街に出て祭りの一時を満喫したに違いないが、その顔に疲れはなかった。

男は野菜の煮付けを口に運ぶ。まるやかにやさしい味付けだった。「そつえば」

言いながら妻が彼の正面に座った。にこにここと笑いながら言う。

「昨日、今年の夏頃惣領家に来られた若様を見たのよ」

「ああ、何といったかな……」

「灰様ですよ。道すがら垣間見えたんだけど、何て言うか……まるで仙境の人のような雰囲気で、不思議な子だったのよ」

「それは……」

「何？」

「いいや、何でもないよ」

それはまたこの多加羅では生き辛いことであろうな　男は言葉を呑み込むと、妻が差し出した熱い茶に手を伸ばした。

「それでね、その灰様と一緒に須樹すきもいたのよ。何だか隆として立派に見えちゃって」

突然出た息子の名に男は目を瞬いた。

「剣舞も見事だったわね。いつの間にか大きくなったものね」

「ああ、今年の剣舞は良かったな」

男は頷く。息子が舞うようになってからは、剣舞だけは欠かさず見ている。

「そつえば須樹はどうしたのだ」

「あの子なら早朝から鍛練所に行ったわよ。錬徒になると何かと忙しいみたいね」

「そうか」

茶を口に含めば仄かに苦く、そして甘かった。暫し黙り、男はぽつりと言う。

「そろそろ弟子を取ろうかと思うんだ」

あら、と妻は言うつと、驚いた様子もなく楽しげに言葉を続けた。

「じゃあ斜め向かいの末っ子なんてどうかしら。あの子、おとなしいけれど手先も器用だしとても頑張り屋なのよ。あそこの奥さんもこの子は職人向きだ、なんて言っていたから、頼んでみようかしらね」

「あの子ならば工芸家に向いているだろうな」

男も微笑むと、茶器を持つ自分の手を見つめた。長年金笹を触り続けた手肌は荒く硬い。節くれ立ったその手が、男には誇りだった。彼の息子もまた、誇れる何かを見つけたのだろうか。まっすぐに己を見返した瞳を思い出していた。そこに迷いはなかった。とうとう答えを出したのだと思い、微かな寂しさと密やかな誇らしさを彼は感じる。

そして、何も問わず 息子に後を継いでほしいと願っていた男の思いも、それに応えるか否か悩んでいた息子の姿も ただ黙って見つめていた妻に、感謝の念を覚えていた。揺るぎなく寛容なその瞳を見つめ、彼は言う。

「なあ、あの子は……須樹は、いい男になったな」

言えば、妻はにっこりと笑う。

「そりゃあそうですね。あなたと私の子供ですもの」

満ち足りた沈黙に包まれて、流れる時もまたまどろむようであった。



「父上、もう一度仰ってください」

悠緋は呆然と言う。対する峰瀬は窓の側近くに立ったまま腕を組んだ。部屋には父と娘の二人きりである。私的な書齋であるそこは執務室ほど広くはない。

悠緋は目の前の父親を見つめる。その表情からは峰瀬が何を思っているのかわからなかった。祭礼が終わって一日が経ち、突然の呼び出しで父親の元へ赴けば、信じられぬ言葉を告げられたのだ。

「私が、中央に？」

「そうだ。八大楼宗家はちだいろうそうけの一つ、志岐之宰しぎのつかねから書状が送られ、お前を是非中央の聖蓮院しょうれんいんに入れて修行を受けさせたいとのことだ。すでに向こうではお前を受け入れる準備もできている。祭礼が終わり落ち着き次第向かうようにとのことだ」

「父上はそれを了承なさったの？」

悠緋は問う。

峰瀬は束の間黙り、勝ち気なその表情を見つめた。才気溢れる娘だ。だが、声音にまだ幼さがあつた。彼女とて、一惣領家が楼宗家に異を唱えることができぬことを知っている。それでも問わずにはいられなかったのだろう。

「志岐之宰は帝国における条斎士じょうさいしの束ねだ。お前の能力を買ったことだろう。帝国は優秀な条斎士を求めているからな」

「父上！ 私は、父上が私を中央に送ることに賛成かどうかをお聞きしたいの。中央の思惑なんてどうでもいいのよ。父上は、私を中央に送りたいの？」

悠緋はじれっただげに言い募ると、腕を振る。飾り気のない単色の絹衣が、その動きに合わせてさらさらと揺れた。

「無論、私は賛成だ。中央の聖蓮院は今お前が通っているところと比べて雲泥の差だからな。お前にとっても一度は都で生活してみる

のも悪くはなかるう」

「本当にそんな風に思っただらっしゃるの？」

「お前にとっても良いことだと私は思う。聖蓮院の宿舎に入ることになるだろうが、貴族の子弟も多く集まっている場所だ。環境は悪くはなかるう」

悠緋はきり、と唇を噛むと峰瀬を睨みつけた。怒りの籠る声は強く響いた。

「そうやって父上はいつも……いつでも本当のお気持ちを仰られな  
い。私は、中央になんて行きたくないの。父上や兄上のお傍に、この多加羅たからにいたい。父上もおわかりのはずだわ。中央だなんて……！」

峰瀬は溜息をつく。悠緋へと歩み寄る。そつと肩に手を置いて顔を覗き込めば、潤んだ瞳が睨み返してきた。

「悠緋、これは真実お前にとって良い話なのだ。無論、遠く多加羅から離れるのは寂しいことかもしれぬが、お前ならば耐えることができる。私は信じている」

「父上は何もおわかりになってない」

鋭い音が響いた。悠緋が肩に置かれた峰瀬の手を振り払ったのだ。峰瀬は目を見開いて娘を見つめる。

「何もおわかりになってない！ 私は嘘でもいいから言ってほしいの！ 私がいなくなると寂しい、命令ならば逆らうことができないけど、それでも中央に送るのは嫌だって、そういう風に言ってほし  
いだけよ！」

一息に言った悠緋の瞳に涙が盛り上がる。

「嘘でも……なんて、馬鹿みたい。これじゃ母上と一緒にだわ。嘘は嘘でしかないのに」

流れ落ちた雫を、悠緋は腹立たしげに拭くと、言った。

「わかりました。私、中央に行きます」

悠緋は言つと峰瀬の横を通り過ぎる。その足音を、峰瀬はただ聞いていた。静かに、背後で扉が閉ざされ、そして部屋には彼一人が

取り残されていた。

祭礼が終われば人は淡々と日常に戻る。二日も経てばあれほど熱気に浮かされていたのがまるで嘘のように、街は静けさに包まれ、変わることはない堅実な営みが繰り返される。

灰は祭礼の後の数日間を星見の塔に籠って過ごした。峰瀬の傷を治せとの言葉に従ったというよりも、娃娃が断固として彼を外に出さなかったのだ。一度ふらりと山へと入ろうとした時など血相を変えた娃娃に引きとめられ、普段の穏やかな彼女からは想像もつかぬ厳しい小言を言われたほどだ。

「娃娃始の言うとおりにした方がいいね」

秋連が言ったのは祭礼が終わるすでに四日が過ぎた夜である。暫くぶりの講義の場でのことだった。

「君が祭礼の前から何やら大変そうな様子だったからね、彼女はひどく心配していた。おまけにそんな怪我まで負っているものだから、多分に彼女は自分を責めてもいるのだよ」

「娃娃さんは別に何も悪くないのに……」

「それがなかなかそうは思えないものなのだよ。特に彼女はね。これほどに大変なことに巻き込まれているのだったら、身を呈してでも止めなければならなかったのに、なぜ何も気付かなかったのか、娃娃始はそう考えているんだろうな」

灰は複雑な思いで、師である男の言葉を聞く。硝子筒の灯された書庫は薄暗く、向かい合っているながら、相手の表情は掴みづらい。

秋連が言う通り、確かに灰は祭礼の前の数日間は早朝から深夜まで星見の塔をあけていることが多かった。丈筆のことに心を占められていたとはいえ、いらぬ心配をかけてしまったとの思いが強い。「君が気に病むことはない。それに……きつと君にしかできぬことがあったのだろう」

何気ない秋連の言葉に、鼓動が揺れた。咄嗟に秋連の顔を見上げ

ていた。琥珀の瞳が静かに向けられている。そこに、僅かに逡巡するような光が揺れて、秋連は視線を逸らした。

秋連は灰が峰瀬の命を受けて何事かに関わっていることを知っている。だが、決して問おうとはしない。

それは灰も同様だった。灰にとって星見の塔での穏やかな生活と、新たな師である秋連の存在は今やかかけがえのないものとなっていた。だが、大切に思えば思うほどに、灰には己に託された密命も、怪魅師であることも、尚更に口にはできなかつた。言葉に出してしまえば、この穏やかな時間がたちどころに壊れてしまふ、そんな予感があつた。

故に口を閉ざす。そうして、変わらぬ穏やかな日々が続くのだと、灰は半ば信じていた。

その翌日のことである。星見の塔を訪れた者がいた。

星見の塔の呼び鈴が鳴らされたのは夕刻に近い頃合いだった。秋連と娃娃は所用で出掛け、稟はまだ小学院から帰っていない。星見の塔にいたのは灰一人だった。扉を開ければ、そこにいたのは一人の少年である。まだ幼い。滅多に人が訪れることのない星見の塔を子供が訪れるのは、尚更に珍しいことである。

少年は灰をまじまじと見つめると、言った。

「灰……様？」

おそらくは緊張のせいだろう、青褪めてさえいながら、声音はしっかりとしていた。

「君は？」

「朗といいます。あの……稟はいますか？」

灰は僅かに首を傾げた。どうやらこの珍しい客は稟に会いに来たらしい。そう思って見てみれば、年の頃は稟と同じくらいだ。そして、少年が名乗った名前に聞き覚えがあつた。以前 祭礼の十日程前だったか 稟が話していた少年の名前であつたと思ひ出す。突然に父親がいなくなり、周囲から心ない言葉をかけられていたというその子供である。

「稟はまだ帰って来ていない。小学院の友達とどこかに遊びに行っているんじゃないかな」

灰の言葉に、朗は怪訝そうな顔をし、そして困ったように俯いた。これには灰の方がうるたえる。

「もうそろそろ帰って来ると思うが、中に入って待っているか？」

少年は答えず、なおも下を向いていたが、意を決したように顔を上げると言った。

「あの……稟は遊びに行くような友達はいないと思います。最近、みんな稟のことを避けてて、誰も声をかけようとしないから、小学院でもずっと一人なんです。灰様はそのこと、稟から聞いてないんですか？」

朗がぼつりぼつりと語ったところによると、どうやら稟が捨て子であり、灰とともに星見の塔に預けられたことが周囲に知られることとなったらしい。

星見の塔の前に置かれた小さな長椅子に並んで座りながら、朗は灰に言った。

「祭礼の何日か前だったと思うんだけど、みんなが灰様の悪口を言ってたから稟が怒ったんです」

「悪口？」

朗は気まずそうに灰をちらりと見る。

「その……灰様が来螺ウツルで生まれたとか、母親が殺されたとか……」

どうやら、祭礼三日前の鍛練所での出来事。灰が八歳までを来螺で過ごしたということを明かしたそれが、いつの間にか街に広まっていたらしい。

「とにかく来螺のことはみんな悪く思ってた、灰様のことも悪く言ってたんです。そしたら稟が知りもしないで人のこと悪く言うなんてだめだ……灰様はそんな人じゃない。すごくいい人だっ言っただんです」

「そうか」

「稟だっ灰様のことは知らないだろうって一人が言ったら、稟が

灰様のことを自分のお兄さんだって……」

少年は質素な衣の袖を引つ張る。うまく言葉が見つからないのかもどかしげな表情があった。

「その後からみんな稟のことを無視するようになって、仲良かった女の子も悪口を言い出したんです。僕、それを見てたら……なんか稟のことが可哀そうで、みんななんであんなにひどいことするんだろうつて腹が立ちました」

言い募る少年の声は細い。言葉はたどたどしくぎこちなかったが、まっすぐだった。

「僕、お父さんが突然いなくなっちゃって、それで周りからいじめられたことがあるんだけど、その時稟は庇ってくれたんです。みんなに、そんなことを言っちゃだめだって、言ってくれて」

灰はただ頷く。少年はそれに少し勇気づけられたのか、早口に続けた。

「僕その時稟が何でそんなこと言うのかわからなくてひどいことを言っただんです。僕の気持ちもわからないで都合のいいことを言うだけだと思って、お前なんか僕に僕の気持ちがわかるもんかって……」

「……」  
「そうか」

「でも今ならあの時庇ってくれた稟の気持ちがわかる気がするんです。みんなから無視されてる稟を見ると、あんな風に声をかけてくれるのがどんなに勇気がいって、どんなにすごいことかよくわかるんです。だから、稟に謝りたくて……あの時僕のことを思っ言ってくれたのにひどいこと言っでごめんって……」

風にふわりと朗の髪が揺れる。むき出しの腕で膝を抱え込むその姿が、落ち込んだ時の稟の姿を思い起こさせた。次第に日が短くなるこの季節に、擦り切れたように薄い衣が寒々としている。

「ありがとう」

ぼつりと灰は言っていた。その言葉に、朗は目を見開く。己を見つめる少年に、灰は笑んでいた。

「稟のことを考えてくれたんだろう？ きつと稟はとても喜ぶ。皆にどれほど悪く言われても、朗がそう言ってくれたら稟は勇気づけられると思う」

朗はしばしと目を瞬くと、笑った。

「灰様って稟が言うとおりでね。お父さんもね、よく言ってたんだ。人のことを悪く言ったり、傷つけりしたらだめだつて。軽い気持ちで冗談を言っても、それですごく傷つく人もいるんだつて」

「優しいお父さんなんだな」

「うん！」

嬉しそうに答えた朗は、しかしきゅつと背を丸めると地面を見つめる。

「なんでいなくなっちゃったのかなあ。お母さんと僕のが嫌になっちゃったのかなあ。でも僕はお父さんがいつかきつと帰って来るって信じてるんだ。今は寂しいけど、いつか帰って来てくれる…」

灰はただ黙って聞く。

「お母さんも、何も言わないで毎日頑張ってるけど、きつとすごく寂しいんだ」

「朗も働いているのか？」

「ううん。お父さんがいなくなつて、僕も働かないとだめだったんだけど、小学院が特別に授業料を免除してくれたの。お母さんも小学院は最後まで通いなさいって言うから」

決して高くはない授業料を、貧しさ故に払うことができない者もいるのだ。それが、多加羅の厳しい現実だ。

己の思考に沈みかけていた灰は、小さく響いた朗の言葉に現実に取り戻された。

「今、何と？」

問う声は低い。朗は無邪気に答えた。

「秋瑠璃あきるりの天海末てんかいすえに相結びあいます。お父さんがよく歌ってたんだ」

秋瑠璃の ひやりと、背筋を這ったものがあつた。

「お父さんは南の方の漁村で生まれたんだ。だから毎日海を見て育ったって言った。特にお父さんがいた辺りでは秋の海がきれいなんだって。それで秋の海のことを秋瑠璃って言うんだ」

朗は寂しげに笑った。

「お母さんと僕にもあの秋瑠璃を見せたいって、口癖みたいに言っていた。だからお父さんはいつかきつと帰って来てくれる。秋瑠璃を見せに連れて行ってくれるんだ」

何も言うことができぬまま、灰は白くなるほどに拳を握り締めていた。そうしなければ、内側から壊れるように体が震え出すのを止めることができなかつた。だが、血の気の失せた灰の顔に、朗は気付かない。

「あ、稟だ」

朗の声に灰は木立の向こうを見やる。星見の塔へと歩いて来る少女の姿が、垣間見えていた。

「話を聞いてくれてありがとう、灰様」

朗は明るく言うと、稟に向かって駆けて行く。目を見開いた稟が、笑顔で何かを言う。

一人取り残された灰は、会話を交わす二人を見つめ、そして立ち上がっていた。そのまま後ずさると、踵を返す。足早に山へと向かって歩いていった。振り返ることはしなかつた。振り返ることなど、到底できなかつた。

山へと踏み込み斜面を登るうちに足が次第に速まる。何時の間にか駆けていた。まるで何かから逃げるかのように、どこに向かっているのかもわからぬまま、我武者羅に足を運ぶ。

駆けながら、頭の中には朗の言葉ばかりが渦巻いていた。

#### 秋瑠璃の

その言葉を灰は知っていた。

地下道で闇と対したあの時、最後の欠片となったそれを握り潰した瞬間、劈くように響き渡った叫びがあった。

ア…キ…………ル…………ノ……………



かそけく、しかし引き裂くように空間を奔った、悲痛なそれ

峰瀬は何と言っていた？　すでに二人の人間が闇に喰われたと、そう言っていたではないか。その一人が朗の父親だったのだと、灰は確信する。家族を捨てたのではない。抗うこともできぬまま、人知れず闇に呑み込まれたのだ。

そして灰自身が闇に呑まれたあの時、確かに黒一色の空間に浮かぶ光の存在を感じていた、あれが

どれほど駆けたのか、あまりの息苦しさに灰は漸く足を止める。木の幹に縋るようにして額を押しつける。木の温かな生気が体を押し包んだ。息苦しさは無理に駆けた鼓動のせいばかりではなかった。まるで込み上げるようにして、胸の奥からせり上がるものがあつた。それに歯を食いしばって耐える。

生きていた　空転する思考とは裏腹に、唐突に言葉が弾けた。生きていたのだ。まだあの時、朗の父親の魂は闇の中で、確かに存在していたのだ。仄かに瞬く魂の光　それを、容赦なく握り潰した。

秋瑠璃の　それは魂が砕け散る瞬間に放つた、最期の慟哭だった。

妻と息子に、大切な家族にいつか見せたいと思っていた生まれ故郷の海　おそらくは最期まで男が希っていた幸せの象徴であり、愛しい存在への思いの欠片だ。

灰はその場にくずおれる。膝の下で、落ち葉が乾いた音をたてた。山に満ちる命の温もりが、体を包み込んでいた。その中で、灰は自分の手を見つめる。

犯人の精神を砕いてなお、それでも灰は闇を滅したことを悔いてはいなかった。それが、足元から崩れ落ちる。

なぜ

問いかけは、叫びに似ていた。朗の寂しげな笑顔が、浮かんで消えた。いつか父親が帰って来ると信じる少年の、無邪気な言葉が木霊していた。

食いしばった歯の間から細く息が漏れる。灰は俯いたまま瞳を閉じた。そのまま、ゆっくりと手で顔を覆っていた。

秋は駆け去るように過ぎる。人々が、吹く風に冬の気配を感じるまで、さほど間はない。

惣領家から星見の塔に使者が来たのは、祭礼からまだ十日も経たぬ頃であった。すでに朝夕には冬の厳しさを予感させる冷たさがあり、その日も澄んだ大気に密やかな冷気が混じっていた。

扉を開けた秋連あきつねに対し、屋敷のお仕着せを身に纏った使者は恭しく頭を下げた。

「灰かい様に、屋敷までお越しいただきたく、惣領から申しつかって参りました」

「今からかい？」

「はい。惣領はそのようにお望みです」

秋連が背後の気配に振り向くとそこに灰が立っていた。灰の後ろで、稟りんが目丸くして使者の鮮やかな衣を見つめている。

「惣領が君をお呼びだそうだ」

「はい」

灰は静かに応えると、秋連の横を通り過ぎた。

「兄あにさま様」

稟が呼ぶ。それにちらりと振り返った灰は仄かに笑んだのか、だが、俯きがちなその表情を、秋連はしかと掴めなかった。踏み出した灰の背中と、使者が一分の隙もなく無表情に頭を下げる姿が扉の向こうに僅かに見え、そして閉ざされた。

「兄様……大丈夫かなあ」

稟が呟く。

「どうしたんだい？ 何か心配なことでもあるのかい？」

「なんだか最近兄様、元気がない気がするの。何にも言わないけど、何か辛いことがあるのかなあ」

それは秋連自身が気付いていたことでもある。何日か前、灰が夜

遅くまで星見の塔に戻らなかった日がある。その日から、普段と変わらぬようでありながら、時折少年の顔を掠める思いつめた表情に彼は気付いていた。少女もそれに気付いていたのだろう。

秋連は気を取り直すように稟に笑いかけた。

「灰はとても強い。何か辛いことがあっても、大丈夫だよ」

「そうかなあ」

「そうだよ。きつと」

秋連の言葉に漸く稟は安心したように笑うと、大きく頷いた。

再び、扉を見やる。何の変哲もないそれ　だが、ざわめくような予感があった。何かの始まりか、あるいは終わりの　秋連はそれから意識を逸らし、扉に背を向けた。

執務室にいたのは峰瀬みなせただ一人だった。使者は灰を部屋に招じ入れると、恭しく一礼して去る。扉が閉ざされると、峰瀬が言った。

「突然にすまなかったな」

「いえ」

椅子に座したまま、峰瀬は目の前の少年に問う。

「傷の具合はどうだ」

「もう、殆ど痛みもありません」

「若衆わかしゅうにはそろそろ復帰できそうか」

「はい」

淡々と交わされる会話が広い部屋に響く。峰瀬は僅かに苦笑すると首を傾げた。

「愛想が無いな」

「……同じことを少し前にも言われました」

灰は言うつと、峰瀬から視線を逸らせ俯いた。僅かに逡巡するような間があり、風が吹いたのか、窓の向こうで木々が揺れる音が耳についた。

「私かなぜ呼び出したのか、聞かぬのか？」

峰瀬の言葉に灰が顔を上げる。

「……その前に惣領にお聞きしたいことがあります」

「何だ」

「六年前に、母を殺した男は沙羅久惣領家（しやろくそうりやうけ）に連なる者だったのでか？」

峰瀬は僅かに目を見開く。

「正確には沙羅久惣領家を勘当された男だ。名は確か滝斗（たきと）といったか。しかしそれを誰から聞いた。公にはされていないことだ」

「沙羅久惣領家の聡達（そうたつ）から聞きました」

「あの青年か」

声は幾分苦々しかった。峰瀬は卓の引出を開けると、その中から一振りの刀を取り出す。滑らかな鞘が、しつとりと黒い。

「聡達とやらは御丁寧にこの刀をお前に渡せと言ってきた。お前の母親のものだとか」

「母の守り刀です。男はその刀で母を殺し、刀を持ったまま逃げました。なぜ、沙羅久の者が母を殺したという、そのことが俺には知らされなかったのでしょうか」

沈黙が落ちる。小さく溜息をつく、峰瀬は言った。

「あの事件が起きた時、君の母親を殺した男の素性は徹底して伏せられた。いかに勘当された者とはいえ、惣領家に連なる出自の者が人を殺めるなど、沙羅久では到底公に出来ぬことであつたからな。男が死んだ時にも、遺体は密かに沙羅久が引き取り、警吏（けいり）の手にも委ねられることはなかつたと聞く。男の死に様が不審に過ぎるとしても、沙羅久では彼が死んだことをむしろ幸いと考えたやもしれぬな」

薄暗い部屋の中、灰の顔は僅かに青褪めて見えた。

「君には綺麗事は言うまい。沙羅久が事件を伏せたように、多加羅でもあの一件が公になるのは避けたかつた。事件が明らかとなれば、多加羅惣領家の血を引く者が來螺（らい）にいたこともまた人々の知るところとなる。それは惣領家の威信を損なうことだ。故に多加羅は沙羅久への抗議も一切行わなかつた。そして沙羅久との微妙な力関係を

鑑みれば、互いに口を閉ざすのが最良の道だった」

沙羅久にとつて男の存在が汚点であったように、多加羅にとつて紫弥しやという存在は明らかにできぬ恥だったのだ。聡い少年は、峰瀬が言わずともそれに気付いているだろう。

「君に知らせなかったのは、そのような事情からだけではない。あの当時事実を知らせるのはあまりに酷だと思つたからだ。君自身が母親の仇とはいえ、人を殺めたことを受け止めかねていたように私には見えた。そのような時に、自分が殺した相手の素性を知るのは辛いことだろう」

「やはり、知つておられたんですね……。俺があを男を殺したことを」

ぼつりと灰は言う。無論、峰瀬は知つていたのだ。初夏、峰瀬の使者として灰の元を訪れた弦げんの言葉から、峰瀬が六年前の真実を知つていることに灰自身も気付いていた。灰は目を伏せる。

「なぜ、わかつたのですか？」

「男の死に様が尋常ではなかったからな。君のあの時の様子と、怪魅みの力を目の当たりにすればだいたいの推測はついた」

そして、その出来事が灰の優れた怪魅師けみしとしての力を峰瀬に知らしめることとなつたのだ。それは少年にとつてどれほどの皮肉だろうか、と峰瀬は思う。

「これが紫弥殿の物であれば、彼女の形見でもある。確かに君が持つのが筋というものだろうが……受け取るか否かは君が決めればいい」

言つと峰瀬は刀を卓の上に置いた。それを灰は見つめる。

「母親の仇を殺めたことを悔いているか？」

灰は答えず、目を閉じた。生々しく、男を引き裂いた瞬間が蘇る。一時預けられた警吏の宿舎の中、その小さな一室が身も凍る程に寒かつたことを覚えていいる。片隅に蹲り、力を開放した。意識を広げ、街に潜む男の存在を捉えれば、その命を奪うのは呆気ないほどに容易かつた。目も眩むほどの怒りに突き動かされ、容赦なく力をふる

った。

「酷いことを聞いたな」

峰瀬は言くと、立ち上がった。その気配に、灰が目を開く。

「もう一つ、惣領にお聞きしたいことがあります」

「聞こう」

「先の火つけの犯人の一件で、若衆に俺を助けるよう伝えた、その真意は何ですか？」

「……どうやら、不満があるようだな」

峰瀬は灰を見据える。灰の瞳は静かに、だが鋭さを帯びて目の前の男に向けられていた。

「あの一件で、惣領は火つけの犯人が異能者であることも、聖遣使しょうけんしが裏で動いていることも掴んでおられた。それにも関わらず何も知らない彼らを敢えて巻き込むように仕向けました。なぜ、そのような危険なことをなされたのです」

「君のためだ」

「俺のため……ですか？」

「あの時、君は単独で來螺らゐに力を貸し、その怪魅の力を晒した。聖遣使が動いたのはその所業のせいであると君もわかっていると思うが？」

言いながら峰瀬は卓をまわりこみ、少年に近づく。

「君自身、気付かなかったとは言わせぬぞ。わかっていたはずだ。

聖遣使の狙いは來螺の異能……だが、多加羅惣領家に連なる者が力を貸している奇異はいやがうえにも目につく。怪魅師であることが明らかとなる危険もそれだけ増す。それは我ら惣領家にとつても致命的なことだ」

無機質に足音が響く。

「決してその力を知られてはならぬと、私ははじめに君に言ったはずだ。若衆を君の元に行かせたのは、聖遣使の目を君から逸らせるために必要だったからだ。多加羅惣領家の者がただ一人來螺に力を貸しているのではない、若衆として動いているのだ、と。少なくとも

も若衆の存在は君を守る盾となる。一時しのぎの目くらましのようなものだが、何もせぬよりはましだった」

三步の距離　立ち止まった峰瀬を灰は睨みつけた。その瞳に怒りが閃く。

「だが、彼らが命を落とす危険もありました」

「君は惣領家の一員である、その重さがいまだにわかつてはおらぬようだ。もはや君は來螺の者でも、森林地帯の者でもない。れっきとした我らの一族なのだ。若衆は君の仲間とはいえ、いざという時には総領家の者を守る立場にある」

「惣領は都合良く彼らを利用しただけです」

「そうだ。そして君にも責任がある。それはわかっているだろう？」  
灰の行動が全てを引き起こした。それを指摘する。

「良い機会だから言っておこう。私は今後も君を表立っては助けることはしない。だが、君が多加羅にとつて必要な存在である限り、他の者を犠牲にしても君を守るつもりだ。今回の一件は無事終わった。だが、この先君の行動で人の命が奪われることもあり得ることをもつと自覚しておくべきだろうな」

ざわざわと揺れる木々のさやぎが、どこか不穩に響いた。それは秘め事を話す人の囁きにも似て、焦燥と不安を煽る。裏腹に仄暗い室内、研ぎ澄まされた静寂が、僅かな距離で向き合う二人の間で固く凝っていた。

「聞きたいことがそれだけならば、私の用件を言おう。君を呼び出したのは頼みがあるからだ。君にはこれからも闇を被うために力を貸してほしい」

暫しの沈黙の後峰瀬が言う。呼び出された用向きを予測していたのか灰の顔に驚きはなかったが、一瞬何かを耐えるような表情が過る。

「無論、山に籠る闇を全て被うことは到底できぬ。だが、闇の欠片であれば、君の力で消すことがかなうとわかったのだ。これからは敢えて封印を解き、闇の一部を放つ。それを滅することを繰り返せ



ば、膨れ上がり増殖し続ける闇を徐々に減らすことがかなうのではないかと思う。言霊の呪で完全に抑えこめるほどに闇を滅すれば、危険は少なくなる」

言われた少年は、僅かに目を見張った。

「そのようなことをすれば、命を削ることになります」

峰瀬のことである。闇を放つために封印を解き、再度言霊の呪をかけるためには、峰瀬の条斎士の力では足りぬ。おそらく命を賭しての行為となる。それも何度も繰り返せば、いつまで体がもつかもわからぬだろう。

「それは私も覚悟のうえのことだ。どの道、闇を放置すれば、遠からず封印は破れる。当然言霊を魂に刻まれている私が真先に呑み込まれることになるだろう。そして多くの人々が命を失うことになる。それを防ぐためであれば、私の命をかけることなど如何程のものか。そもそも多加羅惣領家とは、闇から人々を守るために存在しているのだ」

例え命を落としても　　迷いなく言い切った峰瀬に対し、灰は俯いた。

「その稀有な力で人を救う、それができるのは君だけだ。何を躊躇うことがある？」

峰瀬がそう言ったのは、灰が肯わなかったせいではなかった。少年の顔に過る苦痛の影に気付いたせいである。

「あの闇は、一体何なのですか？」

「前にも言っただろう。命を喰らい増殖する、いわば邪神だ」

「祭礼の日に俺が闇を滅したあの時、闇に呑み込まれた人の魂は、まだあの中に存在していました」

灰の言葉に峰瀬が口を閉ざす。

闇に捕われた命は、消えず存在していた。貪欲に命を喰らう闇の中、おぞましいばかりのその内は、しかし不思議なほどに清浄な空間だったのだと、そう言った灰は峰瀬を見据えた。

「闇を滅するとはつまり、それらの魂を消すことに他ならない。そ

れが命を奪うということとどう違うのか……。惣領はそれを御存知だったのではないですか？」

闇の本質を、言っている。命を喰らい、その魂を包含する。やがて魂は混じり合い、闇に溶けるのか、それはわからぬ。闇はすでにして異界　この現とは違う条理に支配された空間なのだ。魂に封印の言霊を抱き、闇そのものと最も近い位置にいる峰瀬が、それを全く知らないなどということがあるのか。

果たして、峰瀬は淡々と答えた。

「闇に取り込まれた命が直ちに消えるわけではないことは私も知っていた。だが、それを言つてどうなるものでもなかるう。闇に喰らわれた人は、すでにしてその時点でこの世から消えている。魂はいわばその残滓、影のようなものでしかない。仮に魂が君の言うように存在している、生きているとしても、人として再び蘇らせることは到底不可能だ」

冷やかに声は響く。

「君は何でも憐れむ性質らしいが、すでにこの世には存在しない者を憐れみ、現の命を危難に晒すことは賢明ではない。それどころか愚かしいことだ。過去に失われた者達よりも、未来に生きる者を救うべきだと私は考えている」

灰は俯く。そのまま峰瀬の横をすり抜けた。峰瀬は振り返らぬまま、灰の言葉を聞いた。

「俺は惣領の言葉を信じることはできません。真人人を守るために闇を抑えるなら、闇を滅するだけでなく、闇から人を救う方法を何故探ろうとなさらない。これまでも、歴代の惣領が闇を抑えるために人を喰わせたことがあるのは何故ですか。人を守ると言いながら人を犠牲にして、闇を封じる力を失いかけているという事実を、帝國中枢部に秘するためなのではないのですか？　俺には、どのような名目を掲げても惣領がただ惣領家という存在を守ろうとしているようにしか聞こえない」

その欺瞞　峰瀬はゆるりと笑むと漸く振り返る。

「所詮、俺もそのための駒でしかない」

呟き、灰もまた峰瀬を振り返った。その手に母親の形見である刀を握り締め、言った。

「闇は滅します」

謁見の間で、あるいは告発者を明らかにせよと求めた時に見せた超然とした表情が、そこにあつた。

「ですが、俺は多加羅惣領家の一族などというものに縛られるつもりはありません。俺のせいで誰かを犠牲にするようなことは、絶対にさせない」

何を思うのか、峰瀬はなおも笑んだままである。しかし細められた瞳は洞のように、ただ暗かった。

「なるほど。その言葉、よく覚えておこう。全ては君の行動次第だ」  
灰は一礼すると扉へと向かう。その背に峰瀬は言う。

「君には闇を抜つたことに対する礼をまだ言つてはいなかったな。何か望むことはあるか？ その身を呈しての働きに報いるものを与えたい」

冷たい余韻を残すその問いに灰は足を止め、ゆっくりと峰瀬を振り返った。

目の前の男に求められるままに多加羅へと来た。己が成したことへの悔いと、贖いと 決して忘れてはいけないものを心に刻みながらも、灰は思う。己の成すべきことは、己で決める。今、出来ることを、ただやるだけだ。灰は唐突に泉せんの顔を思い出していた。そして、例え一時手を差し伸べても、構造そのものを変えねば貧困から人を救うことはできないのだと言つていた仁識にしの言葉を

「ならば、一つ、惣領にお願い申し上げたいことがあります」

灰は言った。

秋連しゅうれんは物音に目を覚ました。いつの間にか机に突つ伏して寝ていたらしく、頭を起こせば首から肩にかけて鈍い痛みがあつた。どこ

かでかりかりと、まるで引つ搔くような音がしていた。いまだ眠りに曇った意識を晴らすように大きくのびをすると、秋連は立ち上がった。読みかけた書物を閉じると硝子筒を手に書庫を出る。

どれほど眠ったのか、何やら夢を見ていたらしく、物悲しく悔いばかりがわき起こる、そんな感覚があった。しかしほんやりとした夢の欠片を思い出そうとするのは、そのように目覚めるのが、大抵忘れ得ぬ大切な人が眠りの中にあられた時だからだ。

一抹の懐かしさ　夢そのものは幸福なものだったのかもしれぬ  
それも、まるで吹き散らされる泡ほどの儂さで消えた。

一階において漸く物音の正体を知る。小さな窓、そこにしきりにぶつかる小枝がたてる音であった。風が強いのか、動きは忙しない。そういえば、いつかもこんなことがあった。秋連は思う。あの時は書物に夢中になり夜半過ぎに部屋へ戻ろうとしてその話声に気付いた。祭礼の前であった。

そして、秋連には予感があった。それに導かれるように、部屋へ向かうのとは逆に廊下を進む。厨房の横にある貯蔵庫を通り抜けて普段は施錠してある外への扉に手をかければ、それは容易く開いた。思った通り風が強かった。身に纏う長衣が煽られる。山の木々が大きくどよめく様は、うねる波を思わせた。秋連は硝子筒を掲げると、ゆつくりと歩を進める。裏手から角を曲がると、屋敷の前の小さな広場に出る。昼間であれば、木の間から多加羅の街が垣間見える。そこに、立ち尽くす灰の後姿があった。

気配に聡い相手は、しかし振り返らなかつた。街はすでに眠りにつき、見えるのは渦巻く様相の空ばかり、それも厚い雲に覆われて今宵は星月も出ていない。闇だった。

秋連は灰の隣りに立つと言った。  
「眠れないのかい？」

問われた方は漸く顔を振り向けると、首を振った。

「風問いに相応しい夜だな」  
かぜと

「風問い？」

「古の儀式だ。風に宿る神に真偽を問い未来を尋ねる。無論、今では禁じられた邪法だ」

「風に神が宿るとして、真実答えたのでしょうか」

「さて、どうだろうな。だが、いつの時でも自然に宿る神秘に意味を与えたのは人間だった。風は、ただ吹いていただけかもしれない。神とは人の願望のあらわれでしかなかったのかもしれないな」

硝子筒の炎が、頼りなく揺れた。びょうびょうと叫ぶような風の有様である。虚空を見つめると、まるで体が浮き上がるような不安定な心地を覚える。

「何か悩みがあるのかい？ 私でよければ話を聞こう」

なぜそのようなことを言ったのか、秋連は己でもわからなかった。どこか悄然とした様子の横顔が、あまりに頼りなく見えたせいかもしれない。あるいは、朝方に惣領からの呼び出しを受けた彼が、何を言われたのか、どこか沈んだ様子だったせいかもしれない。さらに数日前から様子がおかしかったせいだったろうか。

灰の表情が揺れた。次いで逡巡、困惑。そして怒り、それらが目まぐるしく少年の顔を彩る。

灰はただ首を横に振った。それが、悩みがないことをあらわしているのか、それとも悩みを秋連に言わぬという意思表示なのか、問わずとも秋連にはわかった。

「言えぬか……」

言うはずもない、と思う。これまで敢えて口を閉ざし、手を差し伸べようとしなかったのは秋連である。もつとも差し伸べたところで灰が彼を頼るとは思えないのだが。いずれにせよ、秋連の言葉はいわば暗黙のうちに築かれた不可視の境界を揺るがすものではあった。それ故の怒りであったか

と、強風に押し流される雲と雲の合間に、空があらわれた。真中に月が浮いていた。底の無い湖のようにぼっかりとのぞく深淵を、しんと輝く月が滲むような群青に染める。

「千那夜ちなやの月だな……」

ぼつりと秋連は呟く。

「千那闇ちいなやみに、青群れ集いて、天深し……」

「それは？」

「母が、歌っていた歌です」

まるで漆黒の絹を折り重ねるように、波が繰り返して寄せるように、深みを増す夜の姿だ。その暗さ故か、時に冬へと向かうその空は絶望と苦しみの象徴でもある。そうであれば千那夜とは人の心の投影、その闇に重ねられるのは、ただ心の襞に秘められた思いであるのかもしれなかった。

秋連が灰に視線を向けたその時、またも流れる雲に空が覆われた。あえかな光が遮られる一瞬、あらわとなった少年の表情を秋連は見ただ。そして、再び辺りは塗り込めたような暗さに沈む。

言葉もない彼に、灰はふと視線を向けた。硝子筒の明かりに浮かび上がるのは、普段と変わらぬ落ち着いた表情だった。

「そろそろ寝ます」

言つと、立ち去る。

取り残され、秋連は立ち尽くす。動揺は思わぬ強さだった。月のいたずらか、束の間垣間見た少年の表情、虚ろに蒼然としたそこにあるのは、清浄とした普段の彼からは想像もつかぬあまりに荒んだ色だった。

怒り それは秋連に向けられたものではなかった。容赦なく、無慈悲なまでに冷徹に、それはあくまでも少年自身に向けられていたのだと、悟る。思わぬ秋連の言葉に揺れた、己への怒りであったろうか。そして、抉られ晒されたまま血を流し続ける傷跡のようなそれはおそらく苦しみではあるまいか。

（私は一体何を見ていたのだ）

悩んでいるらしいことはわかっていた。言えぬことがあることも知っていた。だが敢えて問わず、それで良いのだと 己は知らずとも良いことなのだと、視線を逸らしていた。少年が秘める強さをも言い訳にしていたかもしれぬ。それがどれ程に危うい強さである

のか彼自身気付いていたにも関わらず、見て見ぬ振りをしたのだ。

蛇がとぐるを巻く、その様を思わせる雲が流れる。千那夜は遠い。あまりに遠く、暗澹としていた。

予感はずであつた。それでもなお目を逸らし、何を守ろうとしていたのか。答えは知れていた。とうに気付いていたことである。

不意に秋連は歩き出す。硝子筒一つでは心もとない、蠢く木々に押し包まれ闇に沈む道を進んでいた。

星見の塔が背後に遠ざかる。

突き動かされるように、秋連の歩調が速まる。わき起こる感情とは裏腹に、思考は冴えていた。

目指す惣領家の屋敷には、まだ明かりが点いていた。絶えず灯される門灯籠だけではない。二階の光は執務室からである。躊躇いもなく門をくぐる秋連に不寝番の衛兵が鋭い誰何の声をあげた。

「私は星見役だ。惣領に面会を求めたい」

「ならぬ。今何時と心得るか。明日改めて参られよ」

「許しはいらぬ。通していただく」

まだ年若い衛兵は秋連の眼差しに気圧されたように黙った。おそらくはまだ南軍に入って間もない青年だ。星見役は有名無実とは言え、位で言えば彼よりもはるかに高い。それ故の躊躇いもあつたのだろう。秋連はその前を通り過ぎると屋敷へと踏み込んだ。

静寂に包まれた屋敷の廊下を歩き、執務室の前に辿り着く。扉を叩けば、応える声は淡々としていた。

峰瀬は突然の秋連の訪問にも、僅かに眉を上げただけだった。手に持つ書状を卓に置くと、秋連に手近な椅子をすすめる。それに座る姿を見つめ、言った。

「血相を変えているな」

「話があります」

峰瀬は秋連の声音にも表情を変えないまま、両手を組んで僅かに俯いた。無意識の防御、秋連の目にはそう映った。なぜ、今まで気付かなかつた　苦々しく秋連は思う。

「聞こう」

「灰のことです」

峰瀬は僅かに目を細めた。

「つい先程、灰と少し話をしました」



「灰が何かを言ったのか？」

「いえ、あの子は私には何も言いません」

秋連は苦笑んだ。

「灰は賢い少年です。私が、何よりも今の安穩とした静かな生活を失いたくないと考えていることを、あの子はよくわかっています。今の生活を守るために、あの子が何かままならぬことに苦しんでいるとわかっていながら、私がこれまで見て見ぬ振りをして手を差し伸べなかったことも……」

多加羅<sup>たから</sup>の複雑な権力闘争や喧しい浮世から離れ、閉ざされた中で静かに生きる、その安らぎを、秋連は惜しんだのだ。灰を預かることで、やがてその穏やかな時を失うのではないかという思いはあった。それでも、ただ教育係として少年と接していればいいのだと自らに言い聞かせ、変わらぬ生活が続くのだと信じようとしていた。そして、実際、それは容易いことにも思えたのだ。はじめのうちは

「惣領、あなたはあの子に何をさせているのですか？」

「何、とは？」

「惚けないでいただきたい。私が何をお聞きしたいか、おわかりの  
はずです」

暗い瞳が秋連の琥珀の瞳を見返す。秋連は言った。

「以前、私はあの子の本質は人を救い癒すことにあると申し上げま  
した」

「そうであつたな」

「その考えに今も変わりはありません。そして、あの時私はこうも  
考えていたのです。灰の本質をまっすぐに育てるのは私達大人の役  
割であり……あなたならば、間違いなくあの子をそのように導くだ  
ろう、と。だが私は間違っていたようです」

峰瀬は小さく息をついた。

「何が言いたい？」

「あの子を多加羅にお呼びになった惣領の思惑が何であれ、人間性

を歪め、貶めるような方法で灰を利用なさるのだけはおやめいただきたい、ということですよ」

不遜な言葉であり、真摯な請願でもあった。向き合う二人の男の間に沈黙が落ちる。間合いを測るような一瞬の後、先に視線を逸らしたのは峰瀬だった。

「皆がなぜお前の瞳を嫌うかわかるか？」

脈絡のない言葉だった。

「その琥珀の色が自身の思惑まで透かし見るような錯覚を覚えさせるからだ。己が抱える卑しさを暴かれるような心地にさせる」

「私はそのような……」

「お前を異端だと罵ることで、人はその不安から逃れ自己を正当化する。自分には疾しいところなどない、あの瞳の持ち主こそが邪なのだ、とな」

秋連はまじまじと目の前の男を見る。その口元を歪めるのは自虐だろうか。峰瀬は秋連の視線から逃れるように椅子を立ち、窓の外を眺めた。

「悠緋が中央の聖蓮院しょうれんいんに行くことになった。条斎土じょうさいいしの才能を伸ばすためにも、より高度な教育を受けるべきだと、八大楼宗家はちだいろんそうけの一つ、志岐之宰しぎのつかみからのお達しだ」

「それは……おめでとうございます」

秋連の声の戸惑いに気づいているのかいないのか、峰瀬は皮肉に言った。

「本当にめでたいと思うか？ 悠緋にはさほど条斎土の才は無い。

おそらく安定した法術を身につけることはかなわぬだろう」

背を向ける峰瀬の表情は窺い知れない。門灯籠の明かりだろうか、窓の外の闇は朱を含む。幾分肉の落ちた肩の上を、風に撓む木枝の影が鋭く横切る。それが秋連の目には痛々しく映った。

「では、なぜ？」

「要は人質として娘を差し出せということだ」

素気ない声音で語られた穏やかならざる内容に秋連は目を見張っ

た。

「悠緋様を人質に？ なぜそのようなことをする必要があるのです」  
「それだけ多加羅という地が重要だということだろう。中央は常に我々を監視し、ことあるごとに服従の証を求めてくる。それが今回はこういう形で来ただけだ」

事も無げに言うと言峰瀬は漸く秋連を振り返った。

「もはや多加羅惣領家は弱体化し、あるのは嘗ての名声の名残といじけた矜持だけだ。沙羅久（しらく）の台頭といい、多加羅が潰れるのも時間の問題だとは思わんか？」

言葉もなく秋連はただ眉を顰める。俯きがちな相手の表情がなおも読めない。

「だが、どれほどに目障りであろうと、中央は多加羅を潰すことができない。恐れてさえいながら、我々を駆逐することができないのだ」

「なぜ、とお聞きしてもよろしいですか？」

「多加羅の闇を恐れているとでも言っておこう」

「闇……」

禍々しい響きを持つ言葉だ。

「ああ、我々が御する闇だ。闇を御する限り、多加羅は残る。だが、もしも我々にそれだけの力がなくなり、闇を御することができなければ、多加羅の存在意義はなくなる。中央にとっても残す価値はなくなる」

もはや、という思いが顔に出たのだろう。峰瀬は問われる前に言葉が続けた。

「そして多加羅には闇を御するだけの力がほとんど残っていないのだ」

佇む男の姿は自身の影に沈み、秋連は言いようのないもどかしさを覚えた。

「だが、断じてそれを悟られてはならん。私の代で多加羅を潰すわけにはいかん。もちろんこの先もだ。そのためにも そのためにも灰の存在が必要なのだ」

最後は囁くようでありながら、低く強く響いた。

「怪魅師けみしとしての灰が必要だと？」

峰瀬は答えなかった。だが、秋連は無言の中に肯定を確信する。

「彼に何をさせているのですか？」

再度問いながら、秋連は軋むような悲哀を感じていた。目の前に立つ男が、まるで見知らぬ存在のように映っていた。嘗て知る男の面影はなかった。否、ただ秋連が気付かなかっただけなのだ。あるいは、見ぬようにしていただけか

「多加羅惣領家を守るために、一人の少年に苦しみを負わせるおつもりですか？」

「確かに、灰には辛いことももしれぬ。だが、灰がすることは、結果として多くの命を救うことにも繋がる」

「そのような大義であの子を縛らないでいただきたい」

「何だと……？」

「命を救う……もつともらしく美しい、くだらない戯言です。所詮灰を利用するためだけの御託でしかないではありませんか。実感の伴わぬ言葉は虚ろ、思考を奪う想念は罪だと言っていたあなたが、灰を大義で縛るのですか。……人は真心から相手を思う時、相手に求める時には美しい言葉を並べたてる必要などないのだと、美辞麗句を並べたてるは真実の醜さを覆い隠すためだと、嘗て言っていたではありませんか」

言いながら、その時、秋連が峰瀬に感じたのは、怒りでも失望でもなかった。ましてや憐みでもない。峰瀬が見せた惣領としての透徹とした覚悟と、深い影に沈む孤独に対する純粹な驚きだったのかもしれない。幼いころから築いた友情の思わぬ岐路への哀惜だったのかもしれない。

主従の枠を超えて築かれた友情は常に一定の距離を保つものであり、秋連の前に立つ峰瀬は一人の人でしかなかった。そうでなければならなかったのだ。そして今、目に見えぬ危うい境界を超えたのは秋連であり、彼の目の前にいるのは紛れもなく多加羅惣領家を背

負う男だった。

灰を彼に預けると決めた時に、あるいは峰瀬はこうなることを覚悟していたのかもしれない。峰瀬が灰に成さしめようとしていることが何であれ、少年に苦痛を強いるものであることは明らかであり、それを知れば秋連が決して容認しないだろうことも峰瀬はわかっていたはずだ。おそらくすべてを承知したうえで、峰瀬は彼に少年を託したのだ。今更ながらにそれに気付き、秋連は愕然とした。では、峰瀬をそこまで駆り立てるものは一体何なのであろうか。惣領というその立場すらどこか皮肉気に俯瞰していた男の心中に生じたものは何なのか。いつからそれほどまでに彼の精神は摩耗し、追い詰められていたのか。

（愚かなものだ。所詮、捨てられるはずがない）

その身分も、立場も捨てられようはずがなかったのだ。それを互いにわかっていながら、敢えて目を逸らし築いたもの。それが真の意味での友情であったのか、秋連にはもはやわからなかった。

峰瀬は言う。

「灰にも言われた。どのような綺麗事を並べようと、私がしていることはただ惣領家の存在を守ろうとしているだけで、駒として灰を利用してはいるだけだ、と。聡い者は扱いづらいものだ。灰も、何もわからずにいる方が楽に生きられように」

峰瀬は虚ろに笑んだ。

多加羅惣領家は、白沙那はくさなに降くだったその時に道を違えたのだ。己が身を守らんと闇を盾とし、今やその闇に吞まれんとしている。それでもなお闇を手放せず、死の糸に絡め取られた虫さながらに足掻いている。

例えば、と峰瀬は思う。その妄執を捨て秘術を帝国に明かせば、帝国は闇を御することが叶うだろう。おそらくは今よりも完全に

だが、それをすれば多加羅は滅びる。完膚なきまでに潰される。

何代も、その身を捧げて闇を封じてきた多加羅惣領家が途絶えるのだ。

「私は多加羅を守るために存在しているのだ。手段を選ぶつもりはない。選ぶこともはやできぬ。例えお前が言うところの灰の本質を捻じ曲げることになったとしてもな」

「……いかに申し上げても、灰に酷なことをお命じになるか」

「ああ。私にはこの道しか残されておらぬ」

峰瀬の言葉が、目に見えぬ障壁となつて二人を隔てる。

秋連は僅かに瞳を閉じた。胸の奥に渦巻くように生じたものを意思の力で捺じ伏せた。

「では、私は私にできることをいたしましょう。惣領が何をお命じになられようとも、灰を預かるのは星見役たる私です。灰が闇に呑まれぬよう、その心が曇らず前を見据えることができるように、私なりに灰を守ってみせます」

穏やかに、しかし傲然と言う。峰瀬は、笑んだようだった。

「やはりお前を選んだのは正解だったな」

秋連の潔癖さも聡明さも、峰瀬が真実何を思つかを突き止めることはできない。だが、それでよい。秋連は、その琥珀の瞳になおも複雑な感情を揺らし、ただまっすぐに前を見つめる。見つめ、やがては彼が望むままに灰を導くだろう。

そして、秋連ならば違つただろうか、と峰瀬は考える。秋連が峰瀬の立場ならば。ただ一人闇と対峙し、逃れようもなく死をさだめられた絶望的な戦いの中で、どれほどに峰瀬の精神が疲弊していたかを秋連は知らない。ただ絶るように、多加羅惣領家の存亡にのみ固執することで、辛うじて己を支えていることなどわかるはずもない。そして己の妄執を、峰瀬はただ見つめていた。その歪さを唾棄し憎み、抗ったこともあった。しかしそれはあまりに遠い、過去のことである。

光を喪い、闇の淵に在る 己の精神がもはや緩慢に死につつあるのだと、この時峰瀬は悟っていた。だが、秋連がそれに気付くことはなかった。

夜半を過ぎていた。風の強い夜である。

聡達そつたつは足早に道を歩く。すでに大方の人が眠りに就いたのか、沙羅久の街に灯る明かりは少なかった。目指す建物は荘厳な外観も闇に沈み、ただその輪郭ばかりが重々しい。門を通り抜ければ彼を待つていたらしい人影が扉を開けた。その音が、軋みを帯びて夜の底に陰々と響く。

一歩建物の中に踏み込めばそこは薄暗い。奥に灯された一つきりの硝子筒では、到底広大な空間を照らし出すことはできず、その明かりのもとに佇む男の姿ばかりが仄かに浮かび上がっていた。聖遣しんせき使の証である銀の腕輪は衣に隠れて見えない。

「遅かったな」

聡達を待ちかねていたらしい男が掠れた声で言った。聡達は光の元へと近寄る。

「文句があるならば呼び出す時分を考えてもらいたい」

ぶっきらぼうな聡達の言葉に男の眉根が寄る。厳めしく鋭い顔立ちと、ざらついた声音のせいで年齢が掴みづらい。だが、感情を隠すことができぬのは、意外に若いせいかもしれない。だが、

「神殿にまで呼び出して、話とは何だ」

聡達そつたつの声音は不機嫌さを隠そうともしていない。対する男は苦々しい表情を浮かべたものの、淡々と言った。

「手短に言おう。お前に中央から招請がかかった。すぐに出立し、中央で修行と鍛練を積むようにとのことだ」

「どうということだ」

「言ったとおりだ。拒否は許さぬ」

聡達そつたつの眼差しが険しくなる。男の声音に感情は籠っていないことが、言葉には隠しようもなく優越が滲んでいた。数回しか対したことのない相手である。しかし男が、聖遣使の中でも若輩で新参の聡達そつたつに対して良い感情を持つていないことに、彼は気付いていた。聖遣使同士に序列はない。身分も意味は持たないが、惣領家の二男と

いう聡達の立場が、もとは貧しい出自である男にとっては意識せずにはいられぬことなのかもしれない。また、複数の聖遣使が連携を取ることもないわけではなかったが、通常一人で動くことが多く、聖遣使同士で奇妙な対抗意識を持つ者も少なくはないのだ。特に火つけの一件では聡達が先行して単独で動いたため、男には含むところが多分にあるのだろう。

「お前が聖遣使として未熟であると中央が判断したということだ。加えてこの地は私の管轄でもある。これ以上好き勝手に動かれては差し障りがある」

「聖遣使が縄張り争いとはな」

聡達の揶揄するような言葉に、男の顔に朱がさす。怒りのせいであつたらうか。

「今回お前がしたことがどれほどの失態かわからぬのか。火つけの犯人を独断で逃亡させ、あげく來螺らいらの異端とやらを狩り出すこともできぬままだ。おまけに犯人があの有様だ。あれでは中央に送ったところで異端かどうかも明らかにできぬ」

「どうせあの男は死罪だろうが。異端であろうがなかろうが、死ぬことに変わりはない。なんなら処刑は多加羅に任せたらいいだろう」

「中央は異端を生かして捕えることを望んでいる。捕えて後も、これまでのようにすぐに殺すようなことは極力せぬらしい」

初耳のことだった。異端は捕え審議のうえは処刑、あるいは即刻殺すというのが帝国の方針である。異端とは存在そのものが罪とされているのだ。聡達は男をまじまじと見つめると、面白そうに呟いた。

「生きたまま解剖でもしようってか？」

「中央もただ狩るだけではなく、異端の力がどのようなものであるか把握しようとしているのだ。今まではあまりに知識が足りなかった。我らが対する相手についてもっと知る必要があるとの判断だ」

男の言葉に聡達は笑んだ。

「なるほど……いかにせんじゅも仙寿の奇跡を奪わんと無謀な遠征を断行し



た連中の考えそうなことだな」

「……口を慎め」

その言葉には肩を竦めることで答え、聡達は男への興味を不意に失ったように視線を逸らせた。帝国中枢部の思惑、真の目的は、おそらく異端の力の解明にとどまらず、その力の取り込みにあるのではないか。三十年前の東方遠征の際に、帝国は東方の異能者達の凄まじい力を目の当たりにしている。ただ忌避するだけでなく我が身に取り込めば、強力な戦力となるに違いない。もっとも、そうなたとしても、異能者達に求められるのは絶対的な服従と、死と隣り合わせの隷属ではあるうが。

(むしろ今までそれを考えなかった方が不思議なくらいだ)

聡達はそう思う。

「中央に赴く件、了解した」

「もう一つある。今回多加羅惣領家の姫君も中央の聖蓮院に入ることが決まった。お前には姫君に近付き、なるべく多加羅のことについて聞き出すようにとお達した。女を落とすのは得意だろう?」

男の声音に下卑た響きがあった。聡達はちらりと男を見やり、つまらなそうに鼻を鳴らした。

「中央も必死だな。話はそれで全てか」

「ああ。いや、待て」

背を向けて歩きかけていた聡達は男の声に振り向いた。

「今回の一連の出来事で、お前自身何か多加羅について気付くことはなかったか? どのようなことでもよい。不審に思うようなことがあったか?」

その問いに、聡達は目を細め、笑んだ。

「何もない」

言つと、振り返らずに神殿を後にした。

風に大気が唸る。体を引き倒さんとするかのようなその中に、聡達は踏み出した。

(面白くなりそうだな)

多加羅を敵視し常に監視を怠らぬ中央が、今回その姫君を招じるということの意味、そして同じ時に沙羅久惣領家に連なる聖遣使を招請するというそれが、どういうことであるのか

(容易く狩られるんじゃないぞ)

その口元を象るのは笑み、思うまま視線を投げるのは多加羅の方角か 呼びかけた相手は、まだこの先に待つ動乱を知ることはない。聡達もまだ知らぬ。未来は混沌として、夜の闇よりもお暗かった。

## 第一部 終章

稟の手の動きに、煌めく飛沫が散った。大きな盥の中で、衣がまるで舞うようにたゆたう。水音が弾む。

「そうそう、優しく撫でるように洗うんですよ」

傍らでにこやかに言った娃娃えなは目を細めて少女を見つめた。星見の塔の前にある広場に、二人はいる。

「朝からどうしたんだい？」

欠伸混じりの声に稟は振り返った。秋連あきつねがのびをしながら近付いて来る。

「今日は良い天気だから、沢山お洗濯をして乾かすの」

「……これを全部かい？」

秋連は傍らの籠に積み上げられた衣の山を見やり、呆れたように言った。稟の身長程もあるつかというそれである。おまけに敷布までも積まれている。少女の前に置かれた大きな盥には、色とりどりの衣が水に揺れていた。

「こんな風に外で洗濯ができるのも、今日が最後かもしれませんしね。それに夏の衣も洗っておいて、保管しないとだめですよ」

「とつても楽しいの。秋連様も洗わない？」

稟の無邪気な言葉に、秋連は僅かに首を傾げると微笑んだ。

「さて、私なぞがやったら、乱暴に過ぎると娃娃えな始めに叱ちられそうだが……」

言いながら衣の山から一抱え持ち上げると稟の傍らに座り込んだ。「あらまあ、そんなに一杯……！」

娃娃が止める間もあらばこそ、勢いよく桶の中に入れる。盛大な水飛沫に、稟が目を丸くし、声を上げて笑った。

「秋連様、いっぺんに入れてしまつては汚れが取れませんよ！」

「ほら、早速叱られてしまった」

稟に言つと、秋連はのんびりと洗濯物を腕でかき混ぜる。水にた

ゆたう衣はさながら水藻のようで、稟の小さな手が魚のようにその影を掠める。

ふと秋連はその彩いろどりの中の一枚を手にとった。新緑の色の衣は子ども用である。まじまじと見つめる秋連の様子に、娃娃が穏やかに言った。

「あの子の衣をね、稟様に着ていただこうと思っっているんですよ。古いものだから、一度洗おうと思いましたがね」

思わず娃娃を振り返った秋連は、そこにある笑顔に言葉を呑み込んだ。娃娃は稟の横にしゃがみ込むとゆったりと言った。

「この衣を着ていたのはね、私の娘なんですよ」

「娃娃さんの？」

「そう、私が手作りをして、あの子に着せたんです。あの子はこの色が殊の外好きで、この衣もずっと大切にとっついていてくれて……」

稟は小さく首を傾げた。

「大切な衣なのに私が着てもいいの？」

「ええ。あの子もきつと喜ぶと思います」

もうこの世にはないその面影を思うのか、娃娃の瞳が細められた。優しく、切ない光がそこを過り、そして穏やかな笑顔を稟に向けた。「もつと洗い粉がいりますね。持って来ましょうね」

星見の塔へと歩いて行く娃娃を見送り、秋連は衣をそつと水に沈めた。優しく濯げば、口には出さない娃娃の思いのように、それは揺らめき惑う。

「この衣を着ていた人はもういないのね」

秋連はまじまじと稟の顔を見つめた。

「どうしてそう思うんだい？」

「わからないけど……なんとなくそう思うの」

稟はぽつりと呟く。その様子を暫し見つめ、秋連は静かに言った。「娃娃始は若くして亡くなった妹夫婦の忘れ形見を一人で育てたんだよ。実の親子ではなくとも、あの子の心の絆は誰よりも強かった。だから、彼女が死んだ時の娃娃始の悲しみは誰よりも深かった」

「……どうして娃娃さんの娘さんは亡くなったの？」

「事故だった。馬車同士が接触して、傍らを歩いていた彼女の上にその一つが倒れた。……その時彼女のお腹には赤ん坊がいたが、二人とも助からなかった」

「……」

俯いて黙り込んだ稟に、秋連は言う。

「きつと娃娃始は君を見て、彼女のことを思い出したんだろうね。勿論、忘れるはずもないのだけれど、悲しみだけではなく、ともに過ごした楽しく幸せな記憶もまた、思い出せたんじゃないかな」

木の葉を透かして注ぐ光が、水に反射して閃く。目まぐるしく、風に舞う花びらのようなそれを、二人は見つめていた。とりとめなく結ばれては解ける思いは、言葉にならないまま胸の内に沈んだ。

その時背後に聞こえた音に二人は振り返る。正面の扉を開けて出てきたのは灰だった。動きやすい筒袖の短衣にきつちりと帯を締め、武芸の鍛練着に相応しく括袴の立ち姿である。

「今日から若衆わかしゅうに復帰するのだったね」

盥に向かう二人の姿に目を見開いていた灰は、秋連の問いに頷く。ふと笑むと、稟に歩み寄り、その頭を優しく撫でた。

「稟、良かったな」

「うん！」

大きく稟が頷く。

「あら、灰様もう行ってしまわれるんですか？」

響いた声は娃娃のものだった。手に洗い粉の入った壺を持ち、少年の姿に目を細める。

「行ってきます」

「無理をなさってはいけませんよ。怪我もまだまだ安静が必要なんですからね」

「はい」

灰は娃娃に笑いかけると踵を返した。街へと続く道へと向かう灰の背を見つめていた稟が立ちあがる。

「兄様！<sup>あにさま</sup> 頑張つてね！」

振り返った灰が手を振り、その姿が木立の向こうに消えた。じつとそれを見つめていた稟は再びずっと座り込む。

「何が良かったんだい？」

「なあに？」

「さつき灰が言っていたらどう？ 何か嬉しいことでもあったのかな？」

稟は微笑む。秘密を明かすように秋連に顔を寄せて言った。

「前に住んでいた村では、季節の変わり目に衣とか敷布とかをみんなで洗って干していたの。家族だけじゃなくて、色んな人が力を合わせて、そうやって次の季節の準備をするの。それを見て、一度だけ兄様に言ったの。あんな風にできたらいいのになつて。村の人達は私と兄様のこととは仲間に入れてくれなかつたから……」

稟は言いながら笑った。

「いつでも兄様がいてくれて、何でも二人でやってきたから寂しいつて思ったことはなかつたんだけど、その時は小さな小さな世界に二人で閉じ込められちゃったような気持ちになつたの」

「君達は本当に、実の兄妹以上の絆で繋がっているんだね」

「絆？」

「稟は灰のことが好きだろう？ 灰も稟のことをとても大事に思っている。その心と心の繋がりだよ」

「きつと神様がお二人を出会わせてくださつたんですよ」

「神様が？」

娃娃は振り返った少女に頷きかけると、手に持つ壺から白い洗い粉を盥の中に入れた。

「そうですね」

「そうなのかなあ。でも、私は少し違う気がするの。私、兄様のことを生まれる前から知ってる気がするの」

「生まれる前から？」

「もし神様が兄様と会わせてくれたんだつたら、生まれる前から知

つてるなんて感じないと思う。でも、私が兄様を好きなのは……」  
言葉を探すように稟は宙を見つめる。

「例えば、魚の子どもは生まれてすぐに泳ぐでしょう？ 鹿の子どもも生まれてすぐに駆ける……教えてもらわなくてもみんな知っているの。私も、そんな風に兄様のことを好きなの」

あどけない口調でありながら、揺らぎない稟の言葉だった。秋連はじつと少女を見つめる。

「不思議だね」

男の言葉に稟は顔を上げる。秋連はそれに穏やかな笑みを向けた。  
「仙寿せんじゆうという人々のことを知っているかい？」

稟は首を振る。その拍子に黒髪が羽ばたくように揺れた。

「遠い遠い東の果て、シエンジエンという国に住む人々だよ。仙寿と呼ばれる人は、何度も生まれては死ぬことを繰り返すと言われている。転生、と言うのだけだね、一度死んでも魂は滅びることなく新たに生まれ変わり、そして世界の時の流れを紡ぐ運命を負っている」

「何度も生まれ変わるの？」

「そう言われているね。誰も本当のことは知らないんだよ。でも魂とともに記憶も引き継がれるのならば、大切な人と何度も時を越えて巡り会うこともあるのかもしれない」

「秋連様、それは御伽噺ですよ」

娃娃の言葉には幾分咎める響きがあった。遠い見も知らぬ国の、それは昔から伝わる他愛のない夢物語である。

秋連は白い衣を濯ぎながら、稟に笑いかけた。

「ああ、そうだね。御伽噺かもしれない。だが、そんな風に魂が生まれ変わるわけではなくとも、生まれる前から定められていたかのような、強い強い絆というものもこの世にあるのかもしれない。稟と灰のように、互いに互いを必要として、深く結び付くような出会いもあるんだろうね」

稟は何を思うのか、じつと自分の手を見つめていた。

秋連はさて、と声をあげる。

「どンドン洗ってしまわないと、今日中に終わらないね」

「そうですね。秋連様も口ではなく手を動かしてくださいな」

「おや、やはりまた叱られてしまったよ」

囁きかける秋連の言葉に稟は笑う。細い腕を盥の中に伸ばす。勢いよくかき混ぜると、飛沫が弾けた。

さわさわと囁くような梢の揺らぎの上に、高く、どこかで囀る鳥の歌が響いていた。

泉は扉を開けると、大きく息を吸った。澄んだ空気は甘かった。振り返ると妹に手を引かれた母親がゆっくりとこちらへ向かって来る。

「ちゃんと支えるんだぞ」

「うん」

妹は大きく頷くと、瘦せた母親の手を握り締める。

泉が運び出し家の前に置いた椅子に、妹に支えられた母親がゆっくりと座った。体が冷えないようにと羽織った毛織の布を握り締め、高い碧空を見上げる。

「お母さん、寒くない？」

問うた娘に、母親は微笑んだ。

「寒くないよ。今日は暖かいからね。とても気持ちがいいわ」

「良かったあ」

井戸から水を汲んで来た泉は二人の様子を見つめ、小さく笑んだ。一時は寝台から立ち上がることもできなかった母親は、今では体の痛みもましになり、時には家の外に出ることができるようになった。

「泉、ありがとう」

泉は突然の母親の声に目を見開いた。

「なんでお礼なんて言うの？」

「私が倒れてから、お前に何もかも任せきりにしてしまっ……お



母さんはとても悪かったと思っっているんだよ」

「そんなの……お母さんはゆっくりして病気を治さないと……。俺は平気だよ」

言いながらしばしと目を瞬いた泉は、足早に家に入った。甕に桶の水を移し、そして傍らの棚に目をやる。そこに並べられた小さな壺、それを軽く撫でた。素焼きの素朴な壺は、指先に滑らかで冷たい。母親の病状が改善したのはこの薬のおかげだった。ちらりと振り返ると、妹が母親の膝元に縋るようにして何かを話しかけている。それに母親が答え、二人の笑い声が響いた。

その光景を泉はただ見つめる。頬のこけた母親の横顔に浮かぶ笑顔を、二度と見る事ができないと考えていた。少し前のことである。苦しむ母親の姿に、妹もまた息を詰めるようにして部屋の隅に蹲っていた。妹の笑顔もまた久しぶりのものであることに泉は気付く。

少し前までの様子がまるで嘘のような母親の姿に、しかし泉は恐れにも似た不安を抱えていた。病状は改善したように見える。しかし薬の効果が切れる頃になると、口には出さずとも母親が辛そうな表情をしていることを彼は知っていた。薬がなくなればどうなるのか、またも痛みに苦しみ悶える母親の姿を見ることになるのか。灰は薬を持って来てから一度も姿を見せなかった。彼が一体何者だったのか、泉にはそれすらわからない。來螺ウミズメの者だったなら、もうこの多加羅たからにはいないだろう。

母親が彼を振り返ると手招きする。それに泉は泣きたいような気分になった。それを無理矢理に抑えつけ、笑顔を作る。

「あら、今日は起きられるんだね」

突然響いた声は隣家の女性のものだった。食事にも事欠く彼らを見かねて、何くれとなく気を使ってくれた相手である。人の良い丸顔に刻まれた皺は深く、貧しい生活の苦勞を物語っていたが、彼らに向ける目は優しい。

「どうだい？　少しはましになったかい？」

「最近は痛みも少なくて、調子がいいんですよ」

「そうかい、そりゃあ良かった。子ども達も小さいんだから、あんなに倒れてちゃだめだよ」

「ええ、何としても元気にならないと」

明るく答えた母親が、そつと娘の頭を撫でる。

「そうだよ。その意気だよ。ああ、そつだ泉。お前さん、この前言つてたたる？ 慈恵院のこと」

突然話しかけられて泉はきよんとする。

「ほら、お母さんの薬をくれないからもう二度と行かないって」

「うん」

頷く泉に、女性は笑顔を向ける。

「もしかして今行ったら違うかもしれないよ。惣領家の方が慈恵院に来て力を貸しておられるらしいからね」

「惣領家の人が？」

「ほら、夏の頃に一人新しく来られた方がいたろう？ 何でも、薬く師すしらしいよ。今までは手に入らなかったような薬も渡してもらえらしいから、一度行ってごらんよ。もしかしてお母さんに効く薬がもらえるかもしれないだろう？」

言いながら、女性は一つ大きく頷く。

「いつだったか來螺の御出身だとかいう話を聞いたからどんなお方かと思っていたが、火つけの犯人を捕えたともいうし、なかなかどうして御立派なお方じゃないか。薬師として何か役に立ちたいからと、惣領に願い出て慈恵院の活動に参加されてるか。惣領家と神殿がともに動くことは異例だけでも、惣領が直々に神殿に申し入れて実現したらしいよ」

泉は目を見開いた。

「來螺の出身で、火つけの犯人を捕えたの？」

「そうだよ。おやまあ、お前さん祭礼の騒ぎを知らないのかい？

お名前を何と聞いたか……いやだね、思い出せないよ。年だね、私も」

喘ぐように、泉は呟く。

「……灰？」

「ああ、そうだ。灰様だよ」

それには答えず、泉は立ち尽くしていた。まさか、と思ひ、そんな馬鹿な、と首を振る。混乱をも上回り、揺さぶられるような興奮に浸されていた。

不意に泉は踵を返すと、家の中に駆け込む。棚の引出の奥に隠していた小さな紙包みを掴むと、家から飛び出した。

「どうしたんだい？」

「ちよつと、街の外に行つて来る！ 母さんを頼んだぞ！」

妹に呼びかけ、驚く三人の顔を尻目に泉は一散に駆け出した。

動悸が高まる。衝動のまま体が動いていた。

濡れ衣を着せられた來螺の者を助けるために必ず火つけの犯人を見つげ出すと言っていた。自分のことを薬師だと名乗っていた。あの灰が　まさか、まさか、と早鐘を打つような鼓動にかぶさつて己の声が遠く聞こえる。

來螺の者なのかと問うた泉に、灰は答えなかった。風のようにあらわれ、虚偽の告発をした泉のことを警吏けいりに知らせることもせず母親のための薬を置いて去つた、あの灰が惣領家の若君だったのか。驚きの下から沸々とわき起こるのは、不思議と笑いだしたような気分だった。そして、息苦しいほどの思いが胸の内にあつた。唇を噛みしめて、それを抑える。

駆け抜ける彼を、街衆が怪訝そうに見つめる。隔壁を守る衛兵の鋭い視線も気にならなかつた。

足を緩めることなく隔壁をくぐり抜けた泉は、さらに走り続ける。街道は広く、まるで空に続くように伸びていた。泉は小高い丘の上までのぼり、漸く足を止める。膝に手をつき、大きく肩で息をする彼の頬を、柔らかな風が撫でる。

泉は顔を上げると、握り締めていた紙包みを広げた。偽りの安楽を与え、命を奪う麻薬　仙境香せんきやうかう　それを泉は見つめる。そして

勢いよく腕を振った。薄茶色の粉が宙に広がり、惑うように揺らめいてから、風に吹き散らされて消えた。

母親にとつて毒であると知りながらもどうしても捨てることができなかつた。たとえ偽りであつても、母親に笑顔が戻る。ただその一瞬のために捨てることができなのだと思ひ込んでいた。だが、本当にそうだったのか。必ず母親は治ると信じながら、どこかで絶望してはいなかつたか。家族を支えると心に決めながら、裏腹に何もかも投げ出したいと感じてはいなかつたか。

灰 たつた二度、すれ違ふようにして会つただけの相手である。だが、泉にとつて灰という存在は、明日のこともわからぬ不安と恐れの中、唯一の光だったのだ。強くあろうと足掻きながら、しかし継るようにして泉は願つていた。また、灰が来るのではないか、救いの手を差し伸べてくれるのではないかと。まるで幻のような灰という存在。薬がなくなり、仙境香を捨ててしまえば、灰がいたというその証すらなくなるような気がしていた。

そして、いつしか己には何もできぬのだと諦めていたのだと、泉は気付く。

見渡せば、広々とした大地の上を、雲の影が泳ぐようにゆつたり流れる。

灰は二度と泉に会いには来ないだろう。泉は思う。惣領家の者だという、本来ならば、言葉を交わすことなどかなう相手ではなかつた。それほどまでに遠い存在だったのだ。灰は来ない。結局、今までと何も変わらない。しかしなぜこれほどまでに気持ち揺れるのか。息苦しい程の思ひは何なのか。

ならば、会いに行けばいい。泉は知らず笑んでいた。会いに行けば、灰はあの朝と同じ眼差しを泉に向けるだろう。静かな笑顔で手を差し伸べるだろう。不思議と泉は確信していた。

諦めない。どんなに苦しくても諦めない。心の中で繰り返す。

(だから会いに行つてもいいだろうか?)

泉は立ち尽くす。胸の底が、不思議に熱い。わき起こる思いは鋭い痛みすら伴っていた。それを希望と呼ぶならば、もはや苦しみとの区別が少年にはつかなかった。

泉は天を仰ぐ。

天涯は、遠く光を帯びて、微かに滲んでいた。

## 第一部 終章（後書き）

ここまで読んでくださった皆様、本当にありがとうございます。今回で第一部は終わりです。次は第二部、第一部から三年が経った灰達の物語となります。

長い物語ですが、今後もお付き合いいただけると幸せです。

灰がどのように成長していくのか 書き手自身もどのように成長していくか、ゆっくりとでも書き続けていきたいです。

ではでは、今後ともよろしくお願いいたします！

### 追記

闇を滅した報いとして望みはないかと峰瀬に問われて、灰は薬師として慈恵院の医療活動に参加できるよう、神殿に働きかけてほしい、と峰瀬に頼みます。（実際のその場面は書いていませんが。）その流れが若干わかりづらかったので、修正をしました。修正箇所は第44話です。修正前に読んでいただいた方には、少々掴みづらかったかと思しますので、念のためお伝えしておきます。

## 第二部 序章

深夜になつて嵐は激しさを増した。

轟くような風の唸りは、それ自体が巨大な圧力となつて空間を埋め尽くす。激しい雨が強風に翻弄され、目まぐるしくその矛先を変えた。

人が歩くには適さぬ夜であつた。それにも関わらず、道を急ぐ姿がある。一見して旅人であることがわかる。厚手の外套に長身を包み、背囊は使い古された丈夫なものだ。

ひたすらに吹きすさぶ風と、縦横に叩きつける雨。それから身を守るように旅人、男は外套をしつかりと体に巻き付ける。背を丸め、俯くようにして歩くのは、そうしなければ傍若無人な強風に体が引きずられそうになるからだ。

男が歩くのは街道である。白沙那帝国で公道として認められてはいるが、小さな村ばかりが点在する土地柄、街道とは名ばかりである。小道と大差ない。周囲に広がるのはすでに刈り入れが終わつた耕作地である。身を隠すための建物はおろか、木の一本とてなかつた。たとえあつたとしても、漆黒に塗り潰された闇の中から見分けることは不可能だつたらう。

ただ己の足元ばかりを見つめて歩を進めていた男は、ふと顔をあげた。腕をあげて叩きつける雨粒から顔を庇い、前方を見やる。風雨の帳の向こうに、滲むように小さく明かりが灯つていた。我知らず息をつくくと、男は再び歩き出した。冬へと向かう季節である。旅装は夜の冷たさから十分に身を守ってくれる。しかし季節外れの嵐ともなれば別である。撥水性のある外套とはいえ、濡れそぼり、じくじくと冷気がしみて次第に体温が奪われる。

やがて男の行く手に小さな建物の輪郭が浮かび上がる。建物、と呼ぶのも躊躇われる、それは古びた小屋だった。もとは何の目的で建てられたのか、石造りではあるがそこが崩れ、まるで廃屋の

ようである。木造りの扉も申し訳程度につけられているような有様で、端の欠けた一部から温かな光が漏れていた。

男と同じく、次の街まで辿り着くことのできなかつた者が、嵐から逃れてこの小屋を一夜のよすがとしてしているのだろう。男は、扉の前で立ち止まる。このような嵐の夜に、街道を急ぐ者がどれほどいるだろうか。賢明な者であれば、無理に道を進まず宿に泊まって嵐をやり過ぎし、次の日に出発するだろう。そうせぬ者は余程旅慣れぬ者か、あるいは単なる愚か者である。

(あるいは、進まねばならぬ事情のある者だ)

男は思う。気配を探れば、小屋の中にいるのはどうやら一人らしい。僅かに逡巡し、そして扉を叩いた。

暫く待てば、内側で何やらごとごとと音がし、次いで小さく軋みながら扉が開かれた。扉を開けた相手は男より頭一つほど小柄である。純朴な顔立ちの青年だった。

「すまないが、中に入れてもらえないか？」

「ええ、どうぞ」

屈託なく答えると、青年は大きく扉を開き、男を中へと通した。再び扉を閉めた青年は、もともとから小屋にあつたものか、木造りの棚を扉の前に押し出す。強風に扉が開かぬよう押さえているのだろう。石床に窪みがあり、薪で炎が焚かれている。目を転じれば壁際に薪が整然と積まれていた。どうやら耕作地の所有者が天候の急変に備えたのか、あるいは仮の宿所としてか建てた小屋であるらしい。

「あなたもこの嵐に邪魔されて、次の街まで行けなかつたんでしょ。俺もすっかり参っちまって。で、丁度この小屋があつたんで逃げ込んだんですよ」

棚をひとしきりがたごとといわせながら、青年が朗らかに言葉を続けた。その後ろ姿を見るともなしに見ていた男は、ふと体を強張らせた。一瞬息をつめ、そしてゆっくりと振り返る。

炎が柔らかく揺れている、その向こうに人の姿があつた。暗がりに沈むその気配が、奇妙に希薄だった。事実、男は今この時まで小



屋の中にもう一人いるとは全く気付かなかったのである。

「あ、どうぞ座ってください。狭いですけどおかげで十分に暖を取れます。その外套も干した方がいいですよ」

「ああ」

青年に促されるままに男は外套を脱いだ。その間もつとめて平静を装いながら、奥に座る人物を見つめる。壁に背を預け胡坐をかくその人物は眠っているのか、俯きがちな顔は影に沈んでいた。男は目を細める。

「彼は、君の連れか？」

「いえ、この人は俺が来る前からこの小屋にいたんです。……寝たのかな」

最後は呟くように言うと、青年は火の傍近くに腰をおろした。

「あ、俺は相そうといいます。ここから半日程歩いたところにある村から来たんですよ」

「この嵐の中をか？」

「明日までに街道筋の街にどうしても届けられないといけない証文があつて……。何とか街まで行けると思ってたんですよ。そんなに距離もないし。でもこの風でしょ。どうにも進めなくて弱りました。それにしても大変な嵐ですよ。作物の収穫が終わってからで良かった。収穫前に嵐が来てたらたまったもんじゃありませんよ」

見れば青年は旅には向かぬ軽装だった。言葉を額面通りに受け取るならば、旅などしたことのない、また、する必要もない農村の青年なのだろう。つまり、自分にとって危険はない。そう考え、男は苦笑した。どうやら必要以上に身構える癖だけは、何年経っても抜けないようだ。

「あなたは名を何というのですか？」

屈託のない問いかけだった。旅人は暗がりくらがりに座るもう一人の人物をちらりと見やる。

「俺は……そうだな。通り名は万屋ちんやだ」

「よろず……？」

耳慣れぬ言葉なのか青年が言う。

「ああ。何でも屋といったところだな。各地を渡り歩いて様々な仕事を請け負っている」

「万屋さんですか」

「その呼び方も奇妙だな。万<sup>マン</sup>とでも呼んでくれ」

炎が爆ぜる小気味良い音が響いた。縦横無尽に吹きすさぶ風雨も壁一枚隔てれば、どこか現実味を欠いて遠く感じられる。嵐の只中にありながら、まるでその喧噪から切り離され、異空間に閉じ込められたような奇妙な感覚があった。

男 万は無意識に顎をなでる。何日も手入れをしていない無精髭のざらついた感触があった。体が温められるほどに、身内の疲労が強く感じられる。歩き詰めに歩いて漸くここまで辿り着いたのだ。嵐による予想外の足止めは、否応もなく彼を避け難い思いへと導く。

何故、今頃になって……

無論、目指す街に辿り着けば自ずと答えは知らされるだろう。それがわかってなお、万は自問することを止められなかった。そして、必要以上に旅の行程を急いだのは、答えの出ぬ不毛な思いに沈むのを避けるためであったか、と今更ながらに自覚する。

急ぐ旅である。だが、旅慣れた万の足をもつてすれば、例え行程を一日遅らせたところで、支障はなかったはずである。それにも関わらず、無理を承知で嵐の中進んだことも、足を止めればそれ以上進む気になれぬことをわかつていたからか 躊躇い、戸惑い、そして思う。今ならまだ間に合うのだ。背を向けることもできる。そうしたとて誰が彼を責めるだろう。万は苦笑った。

責めるのだ。他ならぬ彼自身が己を責める。そしてこうまでも迷い、怒りすら抱きながらも、抗うことができず命じられた場所へと向かう己が、彼にはあまりに滑稽だった。

どれほど時が過ぎたのか、いつしか相の話し声も途絶え、静寂の膜を通して柔らかく風雨の音が聞こえていた。相は壁に寄りかかり

半分口を開けて眠っている。幾分小さくなった炎が時折爆ぜる音と、相の寝息ばかりが小屋の中には響いていた。

ふと、万は耳を澄ませた。変わらず吹きすさぶ嵐のどよめきが一瞬霞むような奇妙な感覚があった。

と、唐突に音が弾けた。非常な勢いで壁に打ち付けられる雨音、まるで耳の底を直接穿つかのようなそれである。万は思わず視線を巡らせる。強風に煽られた雨粒が四方八方から小屋に叩きつけられているのだらう。嵐が強まったのか、と思う。それまでのまどろむような音とは明らかに違う騒々しさである。

物音に相が身じろぎぼんやりと目を開いた。

「……ひどい降りようだ。さっきよりひどくなってますね」

半分寝惚けたようなくもった声で相が言う。答えようとして、しかし万はその言葉を呑み込む。

それまで眠っているとはばかり思っていたもう一人の男が、音も無く立ち上がっていた。炎に浮かび上がる顔は、なおも掴みづらい。しかしそれは暗がりには沈んでいるせいばかりではなく、極端に感情の窺えぬ表情のせいであることが万にはわかった。

見ればかなりの上背がある。一挙一動に無駄がなく、鍛え抜かれた者特有の隙の無さがあった。実際、万には男が並外れた武術を有する者であることがわかる。しかしその奇妙なまでの存在感の無さは、武人と評するには相応しからぬ。むしろ万にとっては忘れようのない、武人よりもさらに危険で油断のならぬ存在を思い起こさせた。

男は無機質な瞳で万と相を一瞬見やり、何も言わずに扉へと向かった。一動作で扉の前の棚を押しやると、迷うこともなく扉を開け放った。

「おい、こんな嵐の中出て行ったら……」

言いかけた相の言葉が途中で途切れる。男が開いた扉の向こうに、暗夜に沈む人の姿があった。

凝視する二人の前で、男は身を引くと戸外の人物を招じ入れる。

その僅かな動作に、万は鋭く目を細めた。男は万達に対して半ば背を向けている。何ら不自然さのない動きでありながら、一部の隙もなく己を盾として新たな人物を守っていた。希薄であった気配がまるで嘘のように、男から感じられるのは危ういまでに張りつめた警戒であり、それは過たず万と相に向けられていた。

小屋へと踏み込んできたもう一人の人物は、男と背は同じくらいか、引き締まった長身ではあるが、男と比べればほっそりとして見える。まるで水中を歩いて来たかのように、全身が濡れそぼっていた。この嵐では無理からぬこととはいえ、外套の頭巾すら被らずに濡れるに任せているのが奇妙だった。

そして火影に照らされてあらわになったその相貌に、万は目を見開いた。まだ若い、十代であろう青年である。そして異相と評するにはあまりに清逸な容貌ではあるが、明らかに異邦者であった。とめどなく雫が落ちる髪は銀、研ぎ澄まされた鋼を思わせる硬質な色彩である。そして瞳は、気まぐれな光の揺らぎに、濃紫にも青灰色にも見えた。

国境地帯に程近い東の地ならまだしも、このあたりではまず滅多に見ることのない異国の面立ちであり、色彩だった。万の隣では相がぼかりと口を開けて青年を見つめている。

青年がゆるりと万と相に視線を振り向ける。先客の存在に驚いた様子はなく、しかしその表情が僅かに曇ったように万には思えた。

一瞬のそれを掴む間もなく、青年は二人から視線を逸らすと、小屋の奥へと向かう。

万達とは相対する位置の暗がり、青年は無造作に外套を脱いだ。その時になってはじめて、万はそれがずたずたに裂けていることに気付く。並みの人間より夜目のきく万だからこわかったことである。相は気付いた様子もない。まるで巨大な爪に引き裂かれたかのような有様に、青年に付き従う男が息を呑む気配がした。

「お怪我は」

低い問いかけに、青年は小さく首を振る。だが、その動作はどこ

か鈍かった。怪我を負っていないにしても 万からすれば、あのように切り裂かれたのが剣によるのであるならば、無傷であるはずがないと思われるのだが 憔悴した様子だった。

一体嵐の中、どのような目にあつたのか だが男は余計なことは一切問わず、背囊から布を取り出すと青年に差し出した。

「どうかお休みください」

青年は野宿に使う厚手の毛布らしいそれを羽織ると、壁際に座り込んだ。

「あのお……そんな濡れたままじゃあいけない。乾かさないと風邪をひきますよ。もつと火の近くに来てください。あ、俺場所を開けますから」

相がおずおずと声をかける。無理もなかった。濡れそぼつた姿のまま、髪からおちる雫もそのままである。青年は相を見やると柔らかに笑んだ。

「ありがとうございます。でも、これくらいならば大丈夫です」

答えた声は意外なほどに静かで落ち着いたものである。その穏やかな響きに、突然あらわれた得体の知れぬ相手に身を固くしていたらしい相が、ほつと力を抜いた。

「少し、眠ります」

呟くように言つと青年は瞳を閉じた。言葉はなおも無表情を崩さぬ男に向けられたものだった。言われた男は青年の様子を見つめ、自らも壁に背を預けて座り込んだ。勢いの失せた火に薪を足す。再び明るさを取り戻した炎を見つめる横顔は、他の二人を歯牙にもかけぬ様である。

だが万には、男がなおも向けてくる過度なまでの警戒が感じ取れていた。男が座るのは、青年と、相対する位置にいる二人との中間である。全員を見渡せ、なおかつ狭い小屋の中で十分に自らの動きを確保できる絶好の位置だ。如何なる者からでも青年を守ることがかなうだろう。万は小さく溜息をついた。

(まるで君主に仕える近衛だな)

呆れ半分に思い、それが男を形容するに正鵠を射たものであることに気付いた。男が青年にかけた言葉はごく短いものではあったが、明らかに敬意が籠っていた。そして男自身は粗野を感じさせぬ、教養と儀礼を身につけた者であることが窺える。

だが、青年自身を見ればその姿からどこぞの貴族ということも考えづらい。異国 それもおそらく東方の出自であろうと思わせる容貌だけではなく、男に対する言葉や飾り気のない身なりのせいもあつた。また長髪を一つに括るといふ貴族の一般的な姿からすれば、肩にかかるあたりで無造作に切られた髪もまた相応しからぬものである。

貴族ではなく、あるいは国境地帯の力ある郷氏の血筋であるのかもしれない。いずれにせよこのような場所にいるのはそぐわない。

万はそれ以上考えるのをやめる。彼らは何者でありどのような関係であるかと、万にとっては何ら関わりのない相手である。それに加え、男の様子を見れば、無用の関わりを持つことなど端から考える気にもならなかった。偶然に一夜の宿をともにすることとなった相手が些か尋常でないにしても、嵐が過ぎれば二度と会うこともないだろう存在である。

万はゆつたりと体から力を抜いた。奇妙な二人連れを前に眠る気にはなれなかったが、体を休める方法は眠る以外にもある。呼吸を長く深く繰り返しながら、意識を拡散させた。

ふと、万は思う。突然に勢いを増した嵐の音、それは彼自身が風雨の中を歩いて来た時に耳にしていたのと大差ない。小屋の中とはいえ薄い壁一枚、壊れかけた扉に隔てられて、なぜあれ程までに嵐が遠く感じられたのだろうか。一時嵐が弱まったのか。だが、万にはそうは思えなかった。この手の嵐が弱まるのは上空に凝る乱雲が去る時である。今はまだ真中であろう。唐突に嵐が強まったように思えたが、むしろ騒がしい程のこの音の方が自然なのだ。

嵐が弱まったのではないとしたら、この小屋が嵐から隔絶されていたのか。まるで親鳥の羽に包まれた卵のように、何かに守られ

ていたのか。それが破れ、そしてあの青年があらわれた。

(まさかな……考え過ぎだ)

己の突飛な思考に苦笑し、万は瞳を閉じた。瞼の裏に炎の残像が滲むように揺れた。

## 第二部 序章（後書き）

第二部、はじまりました。

第一部同様、淡々と、次第にこんぐらがつて物語は進みます。青春……?? なのか?? という疑問はさておき、少しでも楽しんでいただければ幸いです。

ではでは、今後ともよろしくお願いいたします！



眩しさに方は<sup>た</sup>瞼を押し開けた。反射的に腕を顔の前に翳す。光の元を追えば扉の上部の隙間から差し込んでいるらしい。陽光である。では、少なくとも夜ではない。そして嵐も通り過ぎたということだろう。

半ば呆然として方は辺りを見回した。四方を囲む白壁は水染みがところどころにあり、全体に灰色がかつて見える。暗がり集う闇の奥行がなくなれば、小屋の狭さと粗末さばかりが目についた。傍らには相<sup>そ</sup>が体を丸めて眠っている。万自身は壁に凭れた姿勢のままである。手足が強張り、体の節々が痛んでいた。

そして小屋の中に青年と男の姿はなかった。一体何時の間に出て行ったのか、棚を動かす物音にすら気付かなかった。二人は万が眠っている間に密やかにこの場を去ったのだ。

「何てこった」

ぼそりと呟くと、方は身を起こす。眠るつもりはなかった。そのうえ、眠ったという自覚すらなかった。状況を見て、己が眠ったのだらうと思っただけである。それは彼にとっては信じ難いことだった。

「まさか……夢か？」

あの青年と男の存在である。

旅から旅に生きる生活をはじめすでに十年は経つ。だが、人の気配を捉える感覚だけは衰えていない自信があった。知らぬうちに眠りこけ、拳句の果てに人が小屋を出て行く気配にすら気付かぬなど、夢を見たのだと考える方がまだしも納得がいく。

だがあの男の気配　万はこの小屋に辿り着いた時も男の存在に暫く気付かなかったのだ。死角にいたわけでもなく、剣の一振りで命を奪える程の位置にいながらにして、である。

「関わらぬが身のため、だな」

小さく頭を振り、顎を撫でながら呟く。そして傍らで寝息をたてる青年の肩を揺すった。

「おい、起きろ。急いで届けないといけない証文があるんだろう？」  
「何やらむにやむにやと呟いてから相はがばりと身を起こした。寝惚け眼をしきりに瞬かせ、慌ただしくくしゃくしゃになった衣を整える。」

「しまった！ 今何時でしょうか。昼までには届けないとだめなんですよ。参ったなあ。遅れたら村長にどやされる」

「まだ朝八つの刻というところだろう。今からなら十一の刻には街に辿り着ける」

「ああ……良かった」

安堵の溜息をついた青年が扉を開く。眩しい光の白さの向こうに高い碧空が見えた。まだ幼い朝の色である。きりりと澄んだ空気が流れ込み、小屋に籠る湿った臭いを吹き散らした。

「嵐もすっかり行つちまいましたね」

「ああ。干し肉程度ならあるが、食つか？」

「ありがとうございます。昨日のうちに着けると思ってた何も持ってないんですよ」

万の傍らに座った青年が、きよろきよろと小屋の中を見回した。

「あれ、あの人はもう出発したんですね。全然気付かなかったです」

「……やはり夢ではなかったようだな」

「え？」

振り返った相に、万は言った。

「変わった風体の二人だったからな、てっきり夢でも見たのかと思っっていたんだ」

「ああ、わかります。特に若い方。俺、あんな姿の人を初めて見ましたよ。異国の人なのかなあ。こんな田舎で何をしているんですよ  
うね」

「さてな。こんな場合に、一つ良い格言があるぞ」

背囊から取り出した干し肉を裂いて相に渡しながら、万はにやりと笑んだ。

「知るは災厄、知らぬが後の息災なり、とね」

万と相が街道筋の街に辿り着いたのは、万の言葉通り、十一の刻になった頃合いだった。農作物の交換や商談の場である街は、田舎にしては規模が大きい。作物の刈り入れも終わった時節であり、人通りが多かった。羽振りの良い街らしく、豪華さはなくとも端正な家々が並んでいる。白壁に赤みを帯びた瓦の色彩が、街の活気を引き立てていた。

成り行きで街までの行程を相とともにした万だったが、彼の目的地はこれよりさらに丸一日は歩かねばならぬ。滅多に來ぬ街の様子に物珍しげな視線を投げる相に、万は別れの言葉を告げた。

しきりに頭を下げる青年に手を振り雑踏へと紛れ込んだ万は、周囲を見やる。昨夜の奇妙な二人連れがどこかにいるのではないかと思っただけだったが、あのように姿を消した相手のほほと街を闊歩しているわけがあるうはずもない。万は、二人が意図して悟られずに姿を消したのだと、半ば確信していた。

がしがしと頭をかいて万は背囊を抱え直した。

(いかなあ。知らぬが後の息災だぞ)

旅の携帯食の補充のため食料品店に寄り、残りの行程を進まねばならぬ。その前に一杯位は酒を飲んでもいいだろう。酒の力を借りるのはいささか情けなくもあるが、悶々とした心持が僅かでも紛れるのではないかと万は思う。さらに街道を進むのがどうにも億劫だった。

真先に目についた小さな食料品店に入れば、なかなかの品揃えである。数種類の干し肉と乾燥させた果物、そして一袋の香草を手に取り勘定場へと向かう。二十になるやならずの頃は毎日のように香草を口に含んでいたが、最近は買うことも滅多になかった。どうい

うわけか、久々に刺激的な風味と香りを楽しみたい気分になった。

「お客さん、旅人だね」

万が差し出した紙幣を受け取った壮年の店主が言う。客も少なくともどうやら退屈していたらしい。旅装の男相手にひとしきり会話を楽しむ腹なのだろう。

「まあな」

「どこの人だい？」

「どこに見える？」

「少なくともここらの農民には見えんわな。もしかして都の生まれかい？」

万は思わず苦笑していた。故郷を飛び出した頃の彼ならば、このような言葉はかけられなかっただろう。彼の外見の変化が、そのまます十年という歳月を物語っていた。

「色々な場所をうろついているから、どこということもないが……生まれは東の方だ」

「へえ、東つてえのは、どんな所領があるんだい？」

「沙羅久（しやうく）に多加羅（たから）、それに梓魏（しき）だな」

「ああ、聞いたことはあるなあ。大きな街があるんだろう？」

「まあ、な。しかしこの街もなかなかのものだ」

「いやさ、田舎さね。まあ、最近では些か物騒なことも起こりよるが、でもまだまだ長閑なもんだ」

「物騒てのは何だ？ 盗賊でも出るのか？」

街道筋では時に盗賊が出没する。だが、多くは山道であることが多く、このような平地で襲われることは滅多にない。思わず問うたのは、昨夜見た青年の、大きく切り裂かれた外套を思い出したせいだった。

「噂だがね、人攫いが出たの出不いのつてえ話があつてね」

「そりゃあ確かに物騒だな」

「まあ、あんたみたいに見るからに強そうな御仁は大丈夫だろうが、

世の中おかしな奴もいるもんだ。気をつけるこつたね」

「ああ」

万は干し肉と果物を背囊に、香草の袋を懐に入れて、まだ話し足りなさそうな店主に手を上げて店の外へと向かった。

「もしかしてお前さん、故郷に帰るのかね？」

万は思わず足を止めていた。店主は朗らかに言葉を続ける。

「たまには帰ってみるのもいいもんだ」

「そうだろうな」

ほろ苦く言つと、万は店を後にした。

再び雑踏へと踏み出すと万は見当をつけて歩き出す。このような街であれば、酒場のある場所はだいたい決まっている。街の入口からさほど離れず、しかし表からは見えぬ細い路地辺りである。先程は出発前の景気づけに、と考えていたが、今はとにもかくにも飲まずにはいられない気分だった。

故郷の名を口に出したのは一体何年振りだろうか。万屋を名乗り、幹旋屋の伝手でそれこそ帝国のあらゆる場所へと赴き、くだらないことから危険なことまで様々なことを請け負ってきた。だが、決して故郷の地だけは踏もうとはしなかつたのである。

その彼の元へ使者が来たのは僅かに五日前のことである。どのようにして彼の居場所を探り当てたのか、とうに捨て去つたと思つていた、いわば過去からの使いであった。

そして過去からもたらされた言葉に逆らつこともできず、命じられるままに彼は進んでいるのだ。それが一度は捨てた故郷へと帰るということでもあるのだと、万は今更ながらに気付いたのだった。

物思いに沈みながら歩いてきた万は、ふと足を止めた。考えるより先に視線が流れる。その先に、覚束ない足取りの相がいた。しきりに辺りを見回しては行きつ戻りつしている。迷つたのか、目指す建物が見つからないのだろう。万は眉根を寄せた。彼の意識を引いたのは相ではないはずである。それはもつと危うい何かだ。

やがて目指す道筋が漸くわかつたのか、相が細い路地へと入る。

その後が続いて一人の男がさりげなく路地へと踏み込んで行くのが見えた。

万は咄嗟に駆け出していた。押しのけられた人々の怒りと驚きの声にも振り返らず、二人が姿を消した路地へと飛び込む。路地は薄暗く人氣が無い。その先、辺りを見回しながら歩く相の横を、後から続いた男が今まさに追い抜こうとしていた。

男が、突然動いた。無防備な相の顔、その下半分を左手で掴み、壁に押し付ける。鈍い音が響いた。悲鳴を封じて振りかざす右手には短剣が握られていた。それが鮮やかな軌跡を残して閃く。

間に合わない。それでも走り寄ろうとした方は、しかし自分でも驚く程の素早さで傍らに積まれた木箱の影に飛び込んでいた。考える間もない。なぜ、と思う前に、体が動いたのだ。そして身を隠す寸前、万は視界の隅に、確かにその姿を捉えていた。

青年の胸元に今まさに短剣を振りおろさんとしていた男は、ぎよつと目を見開いて振り返った。微塵も気配を感じさせず、しかし獣さながらの素早さで迫りくる姿があった。

抗う間もあらばこそ、右腕を擦じり上げられ、うつ伏せに地面に押し倒されていた。短剣が奪われる。

暴漢の手から解放された青年は、頭を壁に打ち付けられた衝撃に意識を失ったのか地面に倒れ込んでいる。

右腕を背に容赦なく擦じり上げられ、がっちりとお上から押さえ込まれた男は、しかし苦痛の叫び一つあげなかった。ただ鋭い呼吸が響く。

言葉を先に発したのは、地面になす術もなく押さえつけられた方であつた。

「はなせ」

「ならぬ。一体何をしている」

「命令だ。この男は生かしてはおけぬ。お前も知っているだろう」

「そのようなことはさせぬ。この男に手出しはせぬと誓え。ならば

はなしてやろう」

抑えた響きの遣り取りは、不気味な程に淡々と、熱もなく交わされる。だが、次に男が発した言葉には怒りの片鱗があった。

「主の命に逆らうのか。場に居合わせた者は殺せとのお言葉を忘れたか」

「この男は何も知らぬ。もう一人も同様だ。何も見てはおらぬのだ。無用の殺生をせよとの命令ではなかったはずだ」

不意にくぐもった笑い声が響いた。抑え込まれ、おそらくは相当な激痛に違いない。それにも関わらず呻き声一つ洩らさず、嘲るように言葉を放った。

「甘いことだな。いつからそのような腑抜けになった、弦<sup>げん</sup>。それとも腑抜けたのはあのような者に仕えているせいだ。まさか本気で仕えているのか？ 卑しい下劣な存在だぞ」

「黙れ。それ以上あの方を愚弄することは許さぬ」

返された声音、弦のそれはごく静かなものだったが、そこに籠る響きに男は息を呑む。彼は相手の恐ろしさを知っていた。弦が怒りのままに力をふるうことはないとわかっていても、背筋が冷える。

「あの方……あの方、あの方。お前は口を開けばそればかりだ。いかにお前が直属としてあの方に仕えていようと我らの主はただ一人だ。よもや真の主を忘れたわけではあるまいな」

弦は男の挑発を受け流し、ひそりと囁いた。

「即刻この場より立ち去れ。逆らうなよ。仲間の命を奪うは、私でもさすがに気分が悪い」

「脅す気が。どうかしているぞ。現場を見られずともあの者の姿を見られたのだらう。いかなる禍根も残してはならぬのだ。お前こそ主の言葉に逆らえば死あるのみであることを忘れたか。お前だけではない。私まで罰せられるのだぞ」

「案ずるな。お前を止めたのはあの方の御命令があったからだ。私もお前も、ただそのお言葉に従えばよいのだ。お前こそあの方が我らの主に連なるお人だということを忘れるなよ。お前もありのまま

を御報告申し上げて判断を仰げばいいのさ。その先を決めるのは我らではない」

弦の言葉に、男は瞠目した。

「馬鹿な……私の役目は知らぬ筈だろう」

「とうに気付いておられた。故に私をこの街に残されたのだ。お前の動きから目を離さず、決して誰も殺してはならぬとの厳命だ」

沈黙が落ちる。男は己をなおも拘束する相手を辛うじて横目で睨みつけた。対する弦は、あくまでも無表情に男を見下ろしているだけだ。無言の攻防の結果は明らかだった。

万は身じろぎもせず、物陰に蹲っていた。彼からは二人の男の姿は見えぬ。ただ張り詰めた遣り取りばかりが聞こえていた。やがて微かな衣擦れが響き、男　弦と呼ばれていたか　が暴漢を解放したことがわかった。

「行け」

弦の声が響く。僅かに逡巡するような間の後、密やかな足音が遠ざかって行った。なおも体を強張らせたまま万は息を殺す。

「出て来い」

かけられた声に、万は思わず漏れそうになった溜息を呑み込んだ。相を殺そうとしたもう一人には気付かれていない自信がある。だが、この相手は別だ。いつから気付かれていたのか　おそらくはじめからだろう。物陰に隠れる姿を見られていたのかもしれない。

「殺しはせぬ」

それが本心であったとしても、万にはいつかな気休めにもならぬ言葉だった。

「くそう……知らぬが後の息災だつてえのに……」

思わず呟く。漏れ聞こえた言葉はあまりに漠然としていたが、穏やかならぬ内容なのは明らかである。

澁々立ちあがり路地に踏み出せば、思った通りの姿がそこにはあった。今では名前まで知ってしまった相手である。嵐の中、暗い小



屋で見た時には年齢すら掴めなかったが、こうして改めて対すれば万よりも僅かに二、三年上　まだ三十前後といったところだ。そして明るい場所で見てもどこか容貌が掴みづらい。無表情故と思っただが、弦自身が意図して己をそう見せているのだと万は悟る。

歩み出した万に、弦は目を細めた。

「お前はただ者ではないな」

弦の言葉に万は肩を竦めた。これは光栄なことかも知れぬ、と万は頭の片隅で思う。何せ尋常ではない男である。そのような相手にただ者ではないと評されるのを純粹に喜んでよいか否か、いささか複雑な心境に万は陥った。

「この青年もお前も殺しはせぬ。だが、この場で見たことを一言でも漏らせばそうもいかぬ」

「誓うよ。俺は何も見てはいないし、聞いてもいない。あんたと俺は通りすがりの旅人同士。たまたま嵐を逃れて逃げ込んだ先で顔をあわせただけの間柄だ」

「賢明だな」

「あんたみたいなのを相手にしたら命が幾つあっても足りない。俺はまだ死にたかないんだよ」

弦は言葉の真偽をはかるように万を凝視すると言った。

「その言葉、信じよう」

言い置いて用は済んだとばかりに背を向ける弦に、思わず万は声をかけていた。

「なあ、どうやって俺を眠らせたんだ？」

弦が振り返る。

「眠らせたんだろう？　あんたらがあそこで何をしていたかは知ってたこつちやないが、見られたらやばいことだったんだろう。俺達があの場所にいたことも誤算だったんじゃないのか？　あのまま仲良く一夜をとみにして、旅は道連れなんてことになってたら都合が悪かった。だから後腐れなく、ひっそりと姿を消したんだろう。まあ、もう一人の見た目を思えば賢明だな。ありゃあ記憶に残る」

弦の視線が俄かに鋭くなる。万はにやりと笑ってみせた。

「あー、いや、違ったかな。昨日あの小屋にいたのは三人きりだ。途中で嵐の仙だか何だかが迷い込んだかもしれないが、そりゃあきつと俺の夢だ。だがな、俺としても前後不覚に眠るなんざ大問題でね。下手したら命に関わる大へまだ。言つたらう。俺はまだ死にたかない。死なぬためには備えるべしつてね」

答えぬ相手に、万は低く言った。

「約束は守る。他言はしない。だが同業のよしみで教えてくれないか？」

「睡覺煙だ。お前が眠らぬから使うしかなかった」

それだけを言うと弦は背を向けた。足早に去る姿を見つめ、万は漸く強張っていた体から力を抜いた。まさか答えが返るとは思わなかったが、はったりも言ってみるものである。

「睡覺煙とは……たまげたね」

名前だけなら聞いたことがある。火で燻すことで効果を発する薬だ。その煙を嗅いだ者はたちどころに眠りに引き込まれる。だが睡覺煙の調合には熟練した技術が必要なはずである。下手な者が作れば、眠らせるどころか命を奪う危険性すらある。その用途のせいもあるが、一般的に知られてもいない。容易く手に入る物ではなかった。

弦は薪をくべる際、一緒に睡覺煙を火に投じたのだらう。いささかも気取らせない所業である。

そして、おそらく弦の言うあの方とは昨夜の青年だらう。やはり主従の関係であつたらしい。相を殺そうとした男の言葉から青年に対する敬意は微塵も感じられず、むしろ蔑む様子ではあつたが、どのような事情があるのかは、万には窺い知れない。言うまでもなく知りたくもないことである。彼らが誰に仕えているにせよ、郷氏や貴族程度が抱える部類の者達ではなかつた。

「知るは災厄、知らぬは後の息災なり……」

何度目かの言葉も、どこか空しい。万は倒れ伏している相の元に

近寄ると肩を揺すった。空を見上げれば太陽は中点を過ぎていく。「おおい、証文を昼までに届けるんだろうが。もう昼を過ぎちまったぞ」

相は呻き声をあげるがまだ目覚める気配がない。万は大きく溜息をつく。相の体を引きずり起こすと肩におぶった。このまま放っておくわけにもいかない。警吏けいりに預ければ何とかしてくれるだろう。だが、一体どう説明したものかとげんなり考える。物盗りに襲われたとでも言うしかないだろう。

「お前も災難だよなあ」

言いながら万は懐から香草を取り出す。袋を破って一掴み口に放り込んだ。噛むほどに香ばしさと僅かな渋みが広がった。

「まったく何て災厄だよ……」

いつそのこと嵐の仙に一夜の夢を見せられたのだと思いたい。夢ならば理不尽に命を奪われる危険もない。もつともあの青年は、風の化身と言われても頷けそうな雰囲気ではあった。

いずれにせよ、もう二度と会うことはあるまい。万はそう思う。

無論この時点では誰も想像し得なかつただろう。これより後厳しい冬を経て、巡る季節の黎明　初春の頃に、万は再び青年とまみえることとなる。

## 第一章 狭間

須樹は窓に近寄ると、白く曇った硝子の表面を軽くなでた。結露が拭い去られたそこから鍛練所の広場を見下ろす。若者達の姿がない広場は、閑散として物寂しく、まるで置き忘れられたかのように枯葉が一枚ひそりとあつた。硝子越しに感じる外気の冷たさに、窓から手を離す。掌を握れば、その感触も曖昧な温もりに溶けた。

冷え込みの厳しい日である。朝には初霜が家々の屋根を真珠色に染めていた。陽光が差せばたちどころに消えるそれだったが、身を切る風の冷たさよりも雄弁に、具象化した冬の端緒である。人々はそれに漸く冬の訪れを認めるのだ。

須樹がいるのは鍛練所の中の一室である。更衣室や休憩室として使われるそこは、主立った役職の者に与えられる部屋とは違い、狭い日にお世辞にも居心地が良いとは言えぬ。だが、このように寒かった。中央に据え付けられた火鉢には、炭が赤々と燃えている。温かいと言っただけではないが、底冷えするような寒さは幾分ましになつていた。

「そろそろ刻限だな」

須樹は壁際に腕を組んで座っているもう一人に声をかけた。部屋には須樹とその青年の二人きりである。名を設啓せつけいというその青年はゆるりと頷くだけで、言葉は返さなかつた。寡黙な青年である。がつしりとした体躯に滅多に動かぬ表情が青年を大人びて見せているが、実際には須樹よりも一二年若い。

その時部屋の扉が静かに開かれ、また一人の青年が入ってきた。仁識にしである。仕立ての良い黒味を帯びた臙脂の外套を羽織り、長い裾から覗く靴も上等の黒革である。普段目にしていない稽古着ではない、正式な貴族の装いを自然に着こなしていた。須樹と設啓の身なりはと言えば、稽古着と大差ない質素な衣である。

仁識は部屋の中を見ると、僅かに首を傾げ、言った。

「珍しいな。遅れるとは」

「ああ」

まだ姿を見せぬ一人のことを言っている。そう言う仁識自身は、いついかなる時も必ず刻限通りに姿をあらわす。はかったようなそれに、一部の若衆 特に治都やとなどは冗談半分やとに、仁識の体の中には時を刻む発条が入っているのだなどと言っているが、当の本人にとってはそれがごく自然なことらしい。

胡坐をかいて床に座り込んだ仁識に倣い、須樹もまた腰をおろす。石床の冷たさが、厚手の衣を通して感じられた。

「須樹、お前の父親は緩衝地帯の商人とも商いをしているんだろう？」

唐突に声をかけられて、須樹は仁識を見やった。

「ああ、二、三の商店と取引はしているが……それがどうかしたのか？」

「最近緩衝地帯わかしゅうで若衆わかしゅうについて妙な噂があるのを知らないか？」

「噂？ いや、特には何も聞いてはいないが、何かあるのか？」

「いや、知らなければいいんだが……」

須樹は訝しく眉を顰めた。対する仁識は何かを考え込む様子である。黙つて二人の遣り取りを聞いていた設啓がぼそりと口を開いた。「俺は聞いたことがある」

何を、とは言わず、そのまま設啓は黙り込む。仁識が出した話題なのだから、仁識が語ればよかるうということらしい。

「どういう噂なんだ？」

「いや、後で話す。若様が来てから……」

言いかけた仁識の言葉に被さつて、人の足音が近付いて来た。思わず須樹と仁識は顔を見合わせた。彼らが待っている人物にしては、相応しからぬ騒々しさである。果たして勢いよく扉を開けて姿をあらわしたのは治都であった。

「なんだなんだ、しけた面して」

何とはなしに無言で見詰める三人に向かって、治都はいたって朗らかに声をかけた。

「何故、お前がここにいる」

抑えた声音で言った仁識に、治都はにんまりとした。

「丁度入口の辺りで灰と会ったから一緒に来たんだ。それにしても冷えるな」

治都は答えにならぬ答えを返すと、寒い寒い、と呟きながら中央にある火鉢に近付き手をかざした。余程の寒がりなのか、傍目にもわかるほど厚着をしている。そのせいで、上背だけでなく横幅もある姿が益々大きく見えた。そして入り口には、治都とは対照的に薄手の外套を纏った灰が立っていた。紺青の外套が殆ど黒に見える。僅かに息が上がっていた。おそらく鍛練所まで駆けて来たのだろう。

「遅れてすみません」

「慈恵院ですか？」

「はい」

仁識の問いに肯い、灰は須樹と仁識の中間に腰をおろす。

灰が慈恵院の活動に薬師として参加していることはこの部屋にいる者は皆知っている。灰が多加羅たからに来た年の秋頃 彼は三年前からのことである。そうでありながら、灰自身が口にせぬせいか、若衆内部ではそのことはさほど知られていなかった。

「で、何故お前がここにいるのだ」

仁識は低く、再度治都に問うた。それに、治都が視線を泳がせる。

「今日は鍛練所は開放せぬと言っただろうが。副頭ふくがしら以外は入ることを許さぬという決まりを、まさか忘れたわけではないだろうな」

「忘れたわけじゃあないんだが……その、何と言うか……」

しどろもどろに言いながら、治都は須樹に眼差して救いを求める。須樹は肩を竦めると、苦笑した。口の立つ仁識相手に治都が敵うわけがなく、気の毒に思わないわけではないが、ここは仁識の言うことの方が正しい。

「何か用があるんですよね？」

横合いから灰が言う。治都はそれに大きく頷くと心なしか緊張した面持ちで仁識を見やった。

「そうなんだ。お前に何としても聞かねばならんことがある」

意を決したような真剣な口調に、仁識が眉を顰めた。

「何だ」

「お前、結婚するというのは本当か!？」

部屋に沈黙が落ちる。須樹と灰は思わず顔を見合わせていた。設啓は普段と変わらぬ無表情のまま、しかしちらりと仁識を見やる。

問われた仁識は呆気にとられたように治都を見つめ、そして言った。

「今更何を言っている。それがわざわざ鍛練所に来てまで聞きたかったことか？」

何を当たり前のことを、と言わんばかりの言葉だった。

「何ってお前……全然知らなかったぞ! じゃあ、結婚するってのは本当なんだな!? くそう、なんで何も言わないんだよ。相手は誰だ! どんな娘なんだ?」

「待て、落ち着け。お前何か誤解しているようだが、私はまだ当分結婚はせぬ。もしかして婚約の披露目のことを言っているのか?」

「そうだよ。昨日の夜親父から聞いてぶったまげたの何の!」

そして矢も楯もたまらず、鍛練所まで来たということらしい。

「何を大袈裟な。単なる婚約の発表だぞ。それも惣領のお許しを得てから、まだ先の話だ」

「なんでそんなに落ち着いているんだ。この中でも一番がきつぽく見えるお前が一番にそんな……」

剣呑な仁識の表情に治都は口を噤んだが、今更である。

「あ、いや、がきつぽいつてのは別に変な意味じゃなくてだな、お前この中でも一番小柄だろ。で、だな、何と云うか顔も童顔じゃないか。悪意があったわけじゃ……」

「治都、黙った方がいいぞ」

ぼそりと横合いからかかった須樹の言葉である。目を白黒させて冷や汗を流しているらしい治都に、仁識は溜息をつく。半ば呆れ、

半ば皮肉な笑みを浮かべて言った。

「馬鹿が、お前の言葉にいちいち怒っていたら消耗するだけだ。婚約の話、別に昨日今日の話じゃない。生まれた頃から親同士が取り決めていたことだ。公にされなかつただけでな。そろそろ頃合いも良いということで披露目をする事になったが、別段特別なことでもないだろう」

「おま……お前なあ……何が特別じゃないだよ。特別だろうが。結婚だぞ。一生の伴侶だぞ！相手の娘にとっても、人生最大の出来事だろうが」

「仁識、相手はどんな人なんだ？」

思わず須樹も口を出す。仁識にそのような相手がいたとは全くの初耳だった。同じ年の青年としては是非聞きたいところである。それに対する仁識の言葉は素っ気ないものだった。

「どのような娘かは知らぬ。年は一つ下だとか聞いたが、一度も会ったことはないからな」

「そうなのか？でもどんな相手だかは知りたいだろう？」

「別段、知りたいと思ったことはないが、それがそんなにおかしいことか？」

揶揄するわけでもない声音に、治都がやれやれと頭を振った。

「仁識、俺は今始めてわかつたぞ」

「何がだ」

「お前、さては初恋の一つもしていないだろう。今まで一体何をしてきたんだ。結婚の意味をわかつているか？単に一緒に住むだけじゃないんだぞ。今からでも遅くはない。結婚する前に少しは女性と付き合ってみたらどうだ？婚約者がいては不実かもしれないが、この際男の修行と考えればいいだろう。勝手がわからなかつたら教えてやる。何でも聞いていいぞ」

げほ、と須樹がむせた。腕を組んで無表情に遣り取りを聞いていた設啓が、僅かに目を見開く。灰もまた、何とはなしに仁識から目を逸らし、あらぬ方向に視線を投げた。次の瞬間、滅多に声を荒げ



ることのない仁識の怒声が部屋に響いていた。  
「喧しい！ 余計なお世話だ！」

仁識が治都を容赦なく部屋から追い出したのは、それから暫く後のことである。まだ何事かを聞いたそうな治都がしぶしぶと部屋を後にし、四人が部屋に残された。ここで更に仁識の機嫌を損ねるようなことを口に出す程、残った面々は迂闊ではない。ぎこちない沈黙の後、気を取り直すように須樹が言った。

「ええと……とりあえず、決めるべきことを決めよう。新入りの範分けだったな」

「ああ」

「全部で八人か」

新たに若衆に入った少年がどの範はんに属するかは、若衆頭わかしゅうがしらと副頭が決定する。一度範が決まればその後変更されることは滅多にないため、少年達にとっても誰がどこに属するかは大きな関心事だった。故に範の決定が行われる日は若者達も俄かに浮足立つ。そのためもあるのか、いつからか、月に三度ある祈念日 神殿が神へ祈りを捧げ、人々に祈禱を行うこの日は安息日となっている にあわせて範の決定を行うこととなっていた。常であれば範ごとに交替で休みを取り、鍛練所に若者の姿が絶えることはないが、この日ばかりは若衆全てが休みを取ることとなる。

今小さな部屋に集う四人は、現在の副頭である。十九になる須樹と仁識を筆頭に、十八の設啓、そして半年程前に新たに副頭として迎えられたのが十七の灰だった。普通であれば錬徒れんととなった者のうちから副頭が選ばれ、そして若衆頭が代替わりする際には副頭の中から次代が選ばれる。須樹や仁識、そして設啓もそのようにして副頭となった。例外は灰である。彼のみは錬徒になることなく 須樹が副頭になった後、錬徒となったのは治都である 副頭に抜擢されていた。例外的なその措置を行ったのが、現若衆頭である。

現在の若衆頭 それは、惣領家嫡男の透軌とつきであった。

前若衆頭である加倉かくらが南軍なんぐんに入隊するために若衆を抜けたのは二年前のことである。それに伴って加倉の取り巻きの多くも若衆を抜けた。四人の副頭もそのうちに含まれ、頭と副頭、そして数人の錬徒が一気にいなくなったのである。その際に起きた混乱は、須樹達には苦い記憶として残っていた。加倉が一部の貴族のみを優遇し、規範自体が緩くなっていた若衆では、純粹に人望と力によつて新たな役職者を決めるだけの秩序がなかった。

連日若者同士の会議が開かれたが、それも紛糾し、果ては貴族と平民、あるいは豊かな者と貧しい者同士の睨み合いにまでなりかけたのだ。そんな彼らに、惣領家の透軌が若衆頭の任を預かる、との報が一方的に知らされたのだ。前例のないことに、若衆のみならず街衆もまた驚いたが、異を唱えられる者がいようはずもなかった。

その後はぎくしゃくしていた若衆内部も若干落着きを取り戻し、そして冷静な幾人かが公正な方法による副頭の選出を皆に呼びかければ、もはやそれに反論する者はいなかった。結果、選ばれたのが須樹と仁識である。その時選ばれた他の二人は、一人が一年前に若衆を抜け、その後として設啓が、そして半年前にもう一人が抜けて灰が新たに副頭となっている。

今の若衆には頭が不在だ

仁識が皮肉気にそう言うたびに、須樹は複雑な思いに駆られる。現在の若衆頭である透軌は鍛練所に顔を出すことはない。辛うじて祭礼の前だけは鍛練所を訪れるが、おそらく副頭の彼らの名前も覚えていないかどうか、あやしいものである。頭とは名ばかりであり、実質は副頭に全てが任されていた。透軌が若衆に対して働きかけたのは、灰を副頭に指名したその時だけである。

「今は治都の範に空きがある。一人はそこに入れたらいいだろう」  
「ああ。やたらと気の強い悪がぎがいたから、あいつはどうかな。治都ならばうまく指導できるかもしれん」

「先谷ですね。治都さんなら大丈夫だと思います」

「……治都にはどれだけ逆らったところで意味がないからな。全て

笑い飛ばして終わりだ。鈍さでは若衆随一だ。あそこまでいけば、才能の一つだな」

仁識がどこか憮然として言った。やはり先程治都に言われたことを多少なりと根に持っているらしい。仁識の容貌は黙っていれば優しく柔らかであり、十五、六にしか見えぬほどである。治都が言うほど小柄というわけではないが、並みよりも上背のある須樹や灰と並べば、やはりいくらか年下に見られやすい。だが、それはあくまでも口を閉じていれば、の話だ。

一度口を開ければ、その弁の立つことと辛辣さから、若衆の中で彼に敵う者はいない。それに加え、仁識は知略はくろいんに優れている、というのが須樹の考えである。彼が博露院はくろいんを嫌いやめた経緯については、須樹も仁識自身の口から聞いている。だが、仁識が本気で多加羅における権力争いに加われば、必ず頭角を現すであろうことは想像に難くなかった。

一度須樹は何気なく聞いたことがある。何故、それほどまでに中樞官吏への道を拒むのか、と。

その時の仁識の答えはごく単純だった。

つまらないからさ。

そう言っただけで口を閉ざした仁識に、須樹もそれ以上問うことはしなかった。

「範の振り分けはこれで全部だな」

須樹は言つと、確認するように周囲の面々を見渡した。すでに話し合いを始めてから一刻ばかりが過ぎようとしている。

「では、頭に知らせておきます」

「ああ、頼む」

灰の言葉に須樹は頷くと、話し合いの結果を記した紙を手渡した。灰はそれを丁寧ていねいに折ると懐に入れる。形ばかりの頭とはいえ、話し合いの内容は透軌へと知らされる。報告の任を請け負うのは半年前から常に灰だった。それまではいずれかの副頭が惣領家の屋敷の者に託していたが、奈何せん楽しい役目ではない。須樹自身は灰に役

目を振るのが乗り気ではなかったが、それが他ならぬ頭自身からの指示だったため、抗いようもなかった。

半年前に灰が透軌から副頭の指名を受けた時、若衆内部に動揺が生じなかつたわけではない。一つには灰が錬徒にもなつておらず、まさしく異例の抜擢であること、もう一つには須樹の範に属していた灰が副頭となることで、同じ範からの副頭が二名となり公正を期するという漸く築かれた秩序が崩れるのではないかという考えからである。須樹も、そして口には出さずともおそらくは仁識も、若者達が灰に対してどのような反応を示すか懸念していた。

だが、それらの懸念を払拭して、副頭としての灰はすんなりと若者達に受け入れられていった。惣領家の者であることを差し引いても、灰という存在が二年半の間に皆に受け入れられていった、それは証でもある。剣術の腕だけを見ても、もとより才があつたのか、すでに若衆の中でも五指に入る使い手であり、穏やかで分け隔てない性格がいつしか信頼されるようになってもいたのだらう。

無論、声高ではなくとも反論を唱える者はいた。三年前に灰が若衆を抜け、再び戻つたその時から、何かにつけ灰を目の仇にする者は今もなお少なからずいる。しかしそれ以上に、灰自身の人となりを知り、受け入れる者の方が多かつたのである。

「そういえば、最初に言つていた噂話というのは何だ？」

思い出して問うた須樹に、仁識はちらりと視線を投げた。

「噂？」

「ああ、何やら緩衝地帯で若衆についての妙な噂があるらしいんだが」

須樹は灰に答え、促すように仁識を見やった。

「少し厄介なものだ」

「厄介、ということとは、悪い噂か？」

「ま、有体に言えばその通りだな。緩衝地帯の街で住民が何者かに襲われる騒ぎがあつたらしいんだが、それがどうやら多加羅若衆を名乗つていたらしい」

「何だつて」

思わず設啓を見れば、彼もまた小さく頷き言った。

「俺が聞いたのも同じ話だ」

「若様は聞いたことはありますか？」

「いえ、俺は何も……」

灰は答える。仁識は言葉を続けた。

「私はその噂を聞いたのは昨日のことです。緩衝地帯の農村部で、若者の集団が狼藉を働き、その際に多加羅若衆であると名乗ったという内容です。その狼藉というのが、村の若者に因縁をつけて暴力を振るったり、村祭り用に作った祭壇を壊したり、ということらしいのですが、他にも被害はあるようです」

「おいおい、それはかなり悪質だな」

「何度もそのようなことが起こっている、ということですか？」

仁識は頷く。

「何度も起きたからこそ、多加羅の街にまで噂が届くようになったでしょう。はじめは多加羅若衆などということも口から出まかせだろうと言う人が多かったようですが、同様の事が度重なるうちに信じる者まで出てきているようです」

「俺が聞いた噂では、冬に向けて蓄えた食物倉庫に火をつけたというものもあったぞ」

設啓が言う。内容を聞くのに、それは悪質を通り越してれっきとした犯罪行為である。まるで盗賊のような所業だった。

「噂が全て真実ではないと私は思っています。おそらく誇張されて作られている部分もあるでしょう。だが……」

「火の無いところにそもそも煙はたたない、というわけですね」

「そういうことです」

ならばその火種となったのはどのような出来事なのか、それは定かではない。だが実際に被害が出ているのは確かなのである。

「確かめる必要があるな」

須樹が言えば、仁識は頷いた。

「実際にどのような事が起こっているのか、誰が若衆の名を騙っているのか……」

「まずは少数で被害のあった地域に行つて探つた方がいいでしょうね」

「問題は誰が行くかだが……」

「俺と須樹がいいだろう」

設啓が言う。反論は出なかった。

「間違つても若衆であることは知られるなよ。下手に知られれば、沙羅久しゃらくから何を言われるかわからん」

仁識の言葉に須樹と設啓は頷いた。

緩衝地帯で多加羅と沙羅久の衝突が絶えないとはいえ、そこは両者にとって不可侵なのである。如何なる事情であろうとも、緩衝地帯に若衆が介入することは許されない行為だった。だが、このまま噂を放置しておけば、多加羅にとつても痛手になりかねない。

仁識は見た目から貴族であることが明らかであり、灰もやはり人目を引く。また、惣領家の者が緩衝地帯で動いていることが万が一にも明らかとなれば、更に厄介なことになるだろう。沙羅久からどのような難癖をつけられるかわかったものではない。多加羅の弱味となるような行動は厳に慎まねばならなかった。

「明日にでも緩衝地帯に行つて来よう。このことはまだ皆には知らせない方がいいな」

「ああ。気をつけるよ」

「わかつている」

須樹と設啓が頷き、それで話し合いの場は解散となった。

## 第一章 狭間（後書き）

第二部第一章「狭間」開始です。説明が多くてじれったいのですが、この先もじれったい感じで続きます。第二部は、第一部よりも読み応えのあるものを、と思いながら書いた記憶があります。内容的には第一部よりもかなりややこしいかな、と。もうひとつ、第二部は書いていくうちに、「書き手も読み手も騙す」ということを一つ、目的に設定していました。うまく書けたか今の段階では何ともわかりませんが、少しでも楽しんでいただければ幸せです。

ではでは、今後ともよろしくお願いいたします！

鍛練所を出て、四人は二手に分かれた。平民である須樹すきと設啓せつけいは街を下り、灰かいと仁識にしきは惣領家の屋敷がある方向へと向かう。仁識は多加羅たからでも歴史が古く名のある貴族の出自である。その屋敷もまた地位に相応しく惣領家の屋敷に程近い街の中心にあつた。

灰と仁識は暫く無言で歩いていった。凜冽と澄んだ空気に、吐く息が白く溶ける。灰は緩やかにのぼる石畳の先、そこにある惣領家の屋敷を見やつた。

「惣領のお加減はどうなのですか？」不意の問いかけに、灰は仁識を振り返つた。

「二十日程前にお倒れになつたと聞きました。一時は意識が戻らぬほどであつたとか。今は大丈夫なのですか？」

「惣領にお会いしていないので、わかりません」「そうですか」

公には伏せられていることである。多加羅惣領である峰瀬みなせが突然倒れたのは、二十日前の夕刻であつた。今の多加羅は峰瀬の人望と手腕で辛うじて威信を保っているが、その峰瀬が倒れたとあらば、何かと対立し多加羅を目の仇にしている沙羅久しやくにとっては付け入る好機となりかねない。それ故に峰瀬の不調は厳しく秘されていた。仁識はおそらく多加羅の政治に深く関わっている父親から聞いたのだらう。

峰瀬が倒れたのは今回が初めてではなかつた。すでに三回目になるうか。医術者が力を尽くしているが、誰の目にも峰瀬の体の不調は明らかかなものとなつていた。医術者がその体に巢食う病魔を特定できずにいるのだ。そして、限られた一部の者だけが、峰瀬の命を削っているのが病ではないことを知つていた。

惣領家の屋敷へと向かう灰との別れ際に、仁識はひたりと視線を灰に据えて言つた。



「惣領がお倒れになったことと、若様が五日程所用で遠出なされたことは関係があるのですか？」

灰は無言で仁識と向かい合った。仁識の表情から、彼が真に問いたかったのが何であったか、灰は気付く。

「若様が突然に西に出立されたのは、惣領がお倒れになったその夜でしたね」

「よく、知っていますね」

灰は苦笑した。対する仁識は真剣な眼差しで言う。

「また、知らずともよいことだと仰られますか？」

「いえ……」

軽くかぶりを振り、灰は静かに言った。

「知ってどうするつもりですか？」

知ることと一体何ができるといふのか　僅かに目を見開き絶句した仁識に背を向けて、灰は惣領家の屋敷へと向かう。知ったところで何もできはしない　灰の怪魅けみの力を知ってなお拒絶することなく彼を気遣う相手への、あまりに冷たい言葉であることはわかっていた。だが灰は、立ち尽くす仁識を振り返ることはしなかった。

惣領家の屋敷を守る衛兵が頭を下げる。その前を通り過ぎ、灰は屋敷へと踏み込んだ。廊下を進めば、すれ違う屋敷勤めの者達が道を譲り恭しく頭を下げる。

すでに屋敷の者は皆灰のことを見知っている。だからと言って好奇の視線がなくなるわけではなかった。伏せた眼差しの下、密やかに向けられるものであれば尚更に、それは不快なものとして感じられる。だが、三年も経てば、それらを意識から締め出す術も身につくものである。

灰は透軌とおいが待つ書庫へと廊下を進んで行った。歩きながら、仁識の問いについて考える。灰が五日程西の地へと遠出したのは、確かに峰瀬が倒れた日の夜だった。表向きには薬師くすりとしての知識と技術を有する彼に、その地にある珍しい薬を手に入れるよう惣領から命

じられたこととなっていた。だが、真実の目的がそうではないことに、おそらく仁識は気付いているのだろう。

三年前、灰は怪魅師としての力と、多加羅に巢食う闇との対峙を仁識に見られている。その後、灰は仁識に己に託された密命も、闇がどのようなものであるかということも明かしてはいなかった。仁識が灰に問うた事は一度ならずあるが、頑として答えぬ彼に、仁識も最近では問おうとはしていなかったのだが　　これまで灰が多加羅の地を遠く離れたことは一度としてなかった。今回のようなことは、灰にとっても初めてのことだったのだ。

思うまま歩き、書庫に辿り着いた灰は、扉の前に佇む人影に足を止めた。屋敷のお仕着せを纏った下男である。彼は灰の姿を認めるど、おどおどと言った。

「灰様、透軌様からの御伝言でございます。透軌様は今、惣領の御寢室におられます。灰様にもそちらにお越しいただくように、このことでございます」

「わかりました」

言って踵を返した灰に、下男が慌てふためいて言った。

「あ……お待ちください。御案内申し上げます」

「でも……」

「ありがとうございます。でも、一人で行けますので、気にしないでください」

「いえ！　そのような、私のような者に……勿体ないお言葉でございます」

しどろもどろになって頭をさげる下男をそのままに、灰は峰瀬の寢室へと向かった。峰瀬の寢室は執務室と同じ二階にある。階段を昇れば、そこには張り詰めた雰囲気か漂っていた。静寂が澱み、誰も息を潜めているかのようなのである。寢室の扉を叩くと、中から聞こえてきたのは紛れもなく峰瀬の声であった。

灰は扉を開ける。部屋には寝台に身を起こした峰瀬と、その傍ら

に立つ透軌の姿のみがあつた。灰の姿に、峰瀬が穏やかな笑みを浮かべた。頬がこけ青白いその顔に、灰はふと言葉に詰まる。

「どうした。そのようなところにおらず、ここに来なさい」

灰は頷くと毛足の長い絨毯を踏みしめて寝台へと近寄つた。随所に彫刻が施されたどっしりとしたつくりの寝台の上で、白い衣を纏う峰瀬の姿は益々やつれて見えた。真朱の豪華な敷布に、榛と常盤で刺繍された鳶の様子が、まるで峰瀬の体と命を絡め取っているかのように灰の目には映る。

「お加減はよろしいのですか？」

「ああ、医術者が煩く言うから寝てはいるが、もう政務につくに支障はない。お前が持ち帰つた薬が効いたようだ」

言外に含ませた意味に、灰は目を伏せる。峰瀬は灰の返事を待たずに窓へと視線を投げた。窓から床に零れる陽光は部屋の仄暗さに混じり合い、透き通つて白々と、微細な埃が音も無く舞つていた。

「透軌様、今日の話し合いの結果です」

灰は無言で遣り取りを聞いていた透軌に向き合つと、話し合いの結果を記した紙を差し出した。透軌は頷くとそれを受け取る。齡十九になる透軌は、些か線が細い。文人然とした落ち着いた容貌の青年だった。

「本日は、一月前の参志の儀で新たに加わつた少年達が入る範を決定しました」

「そうか」

「それからもう一点、そちらの報告には書いていませんが、副頭の須樹と設啓が明日緩衝地帯に赴くこととなりました」

「緩衝地帯へ？」

問い返したのは透軌ではなく峰瀬だった。灰は頷く。これは透軌のみならず峰瀬にも報告すべきことである。

「はい。最近緩衝地帯で多加羅若衆の名を騙つて狼藉を働く者達がいるとの噂があり、真偽の程を密かに探つて参ります」  
「なるほど」

峰瀬はそれだけを言うと、黙り込んだ。透軌は父親の姿を暫し見つめると、灰を振り返った。穏やかに言う。

「その件、結果がわかり次第すぐに私に知らせよ」

「はい」

「御苦労だったな。下がってよい」

透軌の言葉に一礼し、部屋を辞そうとした灰だったが、背にかけられた峰瀬の言葉に足を止めた。

「灰と少し話したい」

振り返ると、峰瀬が灰へと視線を向けていた。その傍らで透軌がすつと眼差しを伏せる。父親の簡潔な言葉にその意を察したのだろう。一礼すると、灰の横を通り過ぎ部屋を出て行った。背後で静かに閉ざされた扉の音を聞き、そして灰は改めて峰瀬を正面から見つめた。

「ここへ」

再び寝台に近寄る灰に何を思ったのか、峰瀬はおかしそうに笑った。

「そのような顔をするな。私はそれほどに具合が悪そうに見えるか」

「正直に申し上げれば、身を起こされるのもおやめになった方が良いと思います」

「薬師としての見解か？」

「はい」

峰瀬はなおも笑みを浮かべたまま、寝台の横にある椅子を指し示した。灰は無言でそれに座る。

「まずは礼を言いたい」

「……少し、手間取りました」

「弦げんから聞いた。難儀したようだな。私もすまないと思っている。あれ程突然に言霊の縛りが破れるとは思っていなかった」

二十日前のことである。惣領家の背後の山、そこに封印された閻が溢れ出したのだ。突然の出来事だった。峰瀬は即座に言霊の呪をかけたが全てを封じきることはできず、そして自身も一時は命が危

ぶまれるほどに消耗したのである。灰は零れ落ちた闇を追ったが、常であれば街のどこかに潜む闇の欠片が、その時はまるで意思あるもののように灰の搜索の網をくぐり抜け、多加羅から遠く離れた地まで逃げたのである。

灰は弦とともに、闇の気配を追い西の地へと向かった。昼夜を問わず馬を駆つての道行きであつた。それでも闇を捕え、多加羅に戻るまで五日を要した。

「逃げた闇は、まるで、意思を持っているようでした。追われていくことがわかつているような……」

灰の言葉に、峰瀬は考え込むようだった。

「だが、滅したのだな」

「はい」

峰瀬は灰を見据えた。その視線の鋭さに、灰はふと息を詰めた。

一瞬の視線の交錯の後、峰瀬は灰から目を逸らした。

「ならば、それでよい。下がってよいぞ。お前が言う通りまだ少し休むこととしよう」

静けさに、沈む心地の声だった。

峰瀬の元を辞した灰は、惣領家の屋敷を後にした。

星見の塔へと歩きながら、灰は冬枯れした木立の、力強く差し伸べられた枝を見上げた。澄んだ空気に木々の香りが満ちていた。惣領家の屋敷を訪れる度に感じる、しこりのように固く、冷たい感覚が漸く解ける。

大きく息を吸い、ゆっくりと道を歩きながら、灰は峰瀬が向けた視線を思い出していた。鋭い、まるで彼の心を見透かそうとするかのようなそれだった。

思い当たることがないわけではない。

何時からか、闇を追う灰を密かに監視する存在に気付いていた。

弦とは違う、だがあまりにも似通った気配だった。その者が何故灰を監視するのか、その目的は容易に知れた。灰が闇と対峙するその

場を目撃した者は例外なく殺せ 峰瀬が影と呼ばれる男達に下したであろう、その命令を灰は阻んだ。

構造を知り抜いた多加羅の街であれば、人の目に触れることなく闇と対峙することはさほど難しくはない。だが、今回は勝手が違った。あの場に人が居合わせたことは灰にとってもどうしようもないことだったのだ。見も知らぬ土地で、それも嵐の中、万が一にも小屋の中の人々に被害が出ぬよう、その周りに防御の網を張り巡らせての闇との対峙は、彼にとっても常ならず困難なものだった。

灰が、嵐の中小屋に居合わせた者の命を守るよう弦に命じたことを、峰瀬は影からの報告で知っている筈である。それを問いただそうともしないのは、灰の行動を是としたということか、それとも改めて言う必要もない程に瑣末なことであるのか いずれであろうとも、言葉にせぬその空白が、埋め難く峰瀬と灰を隔てる深い溝であることは明らかだった。

三年前より今日まで、常に峰瀬と灰の間にあるのは、張り詰めた糸にも似た脆く危うい繋がりがかった。意識して必要以上の関わりを持つまいとしたのは灰だけではない。峰瀬もそれは同様であろう。

そして、今更言葉に出さぬことが如何程のものか、と灰は苦く思う。口に出さぬことならば、他に幾らでもある。所詮、闇を介在としての繋がりでしかないのだ。

その、闇 まるで意思を持つかのような 先程己が言った言葉を、灰は思い出す。闇と対峙した時に感じるそそけだつような感覚が蘇る。嵐の中、襲いかかって来た闇は、まるで生きた野生の獣のようだった。知能さえ感じさせて彼の怪魅の力を掻い潜り、鋭い攻撃を仕掛けてきた。それまで闇と対峙したのは五回程だが、そのいずれとも違う そこまでを考え、灰は頭を振った。いくら考えても答えが出ぬ。何度対峙しても闇の本質は掴めぬままだ。それ程に異質な存在なのだ。

だが、滅したのだな

峰瀬の問いが響く。無意識に胸元に手をやり、灰は星見の塔へと

向かう足を速めた。

翌日、須樹と設啓が馬を駆って多加羅の街を出たのは早朝だった。馬で駆れば、多加羅の所領と接する最も近い緩衝地帯の街までは一刻半程である。はじめは痛みすら感じる風の冷たさが、やがて火照った体に心地よく感じられる頃合いになって、二人は馬を並足にした。汗ばんだ馬の体から湯気が立ち上る。

街道の周囲は耕作地、丘陵地帯、そして森林が流れるように続く。農家がぼつりぼつりと建ち、時には放牧された羊の姿が遠く見えた。やがて幾つかの農村と街の傍らを通り過ぎる。そこその規模の街には中心部に壮麗な屋敷が見えた。その土地を与えられた貴族のものだろう。もっとも須樹にはその貴族が誰かまではわからなかった。おそらく仁識にちや冶都やとならば知っていることだろう。

白沙那帝国はくさなは大きく四つの土地で構成されている。皇帝の直轄地である天聖領、皇族の傍流が治める紫聖領、皇帝直属の家臣に与えられる赤令領、そして各惣領家が治める所領である。現在、帝国内に存在する所領は十七、つまりは十七の惣領家が在るということだ。白沙那帝国の最も東に位置する所領は三つである。国境に接する多加羅と、その北西に位置する沙羅久、そしてその二所領と森林地帯に囲まれる形で位置するのが梓魏しきである。

梓魏と二所領の線引きは明確である。多加羅との間には竜江と呼ばれる川が、そして沙羅久との間の丘陵地帯には古来より石垣があり、それが境界となっていた。この石垣は嘗て北東の地を支配していた北限ほくげんの民と呼ばれる人々が、己が支配領域の証として築いたものであり、それがそのままに所領の線引きとして利用されていた。北限の民は今では梓魏の支配下に入り郷氏こうしとなっている。

所領の扱いは各惣領家の裁量として任されているが、多くが家臣として仕える貴族に分割して貸与している。あるいは古来よりその土地に根付く人々。例えば郷氏などに対して、賦税を条件に自治

領として土地を与える場合もある。梓魏における北限の民がまさにそれであった。

多加羅でも所領の扱いは同様の措置を取っており、貴族の収入の多くは貸与された土地からの租税である。そして租税の二割五分を土地の本来の主である惣領家に納めることとなっていた。与えられる土地の豊かさは、力に直結する。故にどの土地を与えられるかは貴族にとって大きな意味を持つのである。

「そろそろ緩衝地帯だな」

須樹が言ったのはこれと言って特色の無い小さな街に辿り着いた時である。街のさらに先に広がるなだらかな丘陵、そこが長きに渡る二惣領家の不仲の象徴とも言える緩衝地帯の入口だった。

二人は街に入ると、小さな宿屋に掛け合つて馬を預けた。その際幾ばくかの料金を要求され、それを更に格安に値切つたのは須樹ではなく設啓である。普段の寡黙さからは想像もつかぬ丁々発止の駆け引きに、須樹は口を挟むこともできなかった。

「すごいな」宿屋を後にして思わず言った須樹に、設啓はにこりとせずに応えた。

「卸屋おろしやの信条は口八丁手八丁だからな」

「なるほど」

卸屋というのは様々な商品の仲立ちをする者達の総称である。例えば農家から農作物を仕入れ、それを商店に卸すのが彼らだった。直接に生産者と商店が結び付く場合もあるにはあるが、信頼のできる卸屋を通じた方が確実な儲けに繋がるのである。一方で卸屋は常に胡散臭い印象が付き纏う商売でもある。彼らの中には時勢を読み人の心の裏をかいて悪辣な商売をする者もいる。また、非合法的な商品 麻薬や武器、あるいは情報などを専門に流す卸屋もいるのはよく知られていることだった。

須樹は設啓の家が代々続く卸屋であることを思い出した。須樹の父親などは、商品を売るのに卸屋を通してはいない。金笹きんささの生産者にして、自身の工芸品を扱う商店にして、父親が自分の目で確かめ、



人となりが信頼できる者としが取引をしていなかった。そのせいか須樹にとっては卸屋という存在はいまいち身近には感じられぬものである。

「とりあえず、実際に被害があつた農村付近まで行つてみるか？」

「そうだな。あまりあからさまに聞き込むのもまずいかもしれんが

……」

言いながら二人は徒歩で街道を進んだ。一般的な平民の衣に身を包んだ二人は、傍から見れば不自然さはない。

「いつから被害が出ているんだ？」須樹の問いに設啓はふむ、と唸る。

「はつきりとはわからんが、おそらく二月程前だろうな」

「結構前からじゃないか」

「ああ」

「なぜ、今までその話が多加羅に伝わらなかつたんだ？ もっと早くに知っていたら被害がひどくなる前に食い止めることもできたかもしれないのに」

須樹は思わず言った。だが、設啓にその理由がわかるはずもない。設啓は答えるかわりに無言で前方を指し示した。目指す農村が丘陵の上にあつた。農村は三十戸程の家々が建ち並び、ごく小さなものだった。二人は村へと踏み込むと、さりげなく辺りを見回す。すでに収穫期は終わっている筈だが、村はどこか閑散として、人影が少なかった。

どうしたものか、と須樹が考え込んだその時、設啓が突然歩き出した。慌てて追いかければ、進む先には道端で話す三人の女性がいる。かましい話声が聞こえていた。

「すみません」

設啓が女性達に話しかける。それに思わず須樹は目を見開いた。聞いたこともない愛想の良い声である。胡乱な表情で振り返った女性達に対して頭を下げた設啓は、困ったような顔で言った。

「ちょっと道を尋ねたいのですが、素奈の街にはどちらの道を行け

ばいいんでしょうか。道標の一つもなくて困ってるんですよ」

「ああ、あの街には村を出て右手の方角に進めばいいよ。小さな道があるからね。街道に沿って行ったらだめなんだよ。よくわからないで迷う人がいるみたいだね」

「ああ！ そうだったんですか。てつきり左手だとばかり思っていました」

「何だい、急な用事かい？」

問うた女性がじろじろと二人の姿を見つめた。

「ええ、そうなんですよ。あ、こっちにいるのは俺の弟です。家が貧しいもんで二人で奉公に出ていたんですけど、父親が急な病で倒れちまって、すぐに帰って来いって知らせを受けているんですよ」

「ああ、そうなのかい。大変だねえ」

「医術者は命に別条はないって言うんですけど、親父がすっかり気弱になっちまって。家族全員の顔が一堂にそろつてのを見たいなんて泣き出したらしくて……いつも通ってた道は遠回りなんで、こっちに來たんですけど、どうにも道がわからなくて……」

胡散臭げに二人の若者を見つめていた女性達は、途端に同情と興味の入り交じった瞳を彼らに向けた。須樹は啞然として滔々と話す設啓を見やった。驚きのあまり咄嗟に声が出なかったのがむしろ幸いだった。

（ちよつと待て、何だそれは！）

うろたえる須樹の気持ちを知ってか知らずか、設啓が女性達からは見えぬ位置で彼の背中を叩く。その顔を見れば、笑顔の中で瞳だけが笑っていない。僅かに顎で女性達を指し示し、設啓は口を閉じた。意味するところは、あとはお前が何とかしろ、とでもいったところか。

（どうしろってんだ！）

「それにしても大変だねえ。お父さんには長い間会ってないのかい？」

「え……」突然話しかけられた須樹は、顔を引きつらせた。

「……ええ、そうなんです。ずっと帰れなかったもので……今回もこんな突然に……」

しどろもどろに言うと、女性達は益々同情を込めた視線を須樹に向ける。どうやら突然の親の病に動揺している気の毒な青年と映っているらしい。須樹のいかにも爽やかな人好きのする見た目も影響しているのだろう、というのは横で見ていた設啓が思ったことである。

(ああ、もうどうにでもなれ)

須樹は開き直ると、精一杯不安そうな顔を作った。

「最近でも、緩衝地帯で時々変な奴らが暴れてるって聞いてて、家族に何かあったらどうしようかと思ってたんです」

言いながら目を伏せた。

「素奈の辺りでも出たって聞いて……」

「ああ！ あいつらのことね！ そうなんだよ、ひどい奴らでね」

「そうそう！ 素奈だけじゃないよ。この農村にも来たんだよ！」

「えっ……それは本当ですか？」

人間、開き直れば存外に何でもできるものである。須樹の心底驚いたような声に、三人の女性が大きく頷いた。

「一月程前だったかね、もうやりたい放題さ。この村の若者も三人程怪我させられてね、一人は腕を骨折だよ」

「そうそう。多加羅の若衆も地におちたもんだね。今までも沙羅久の連中と何かといやあ騒動を起こしていたけど、まさか住民にまでつつかかるなんてね、ひどいもんだよ」

須樹と設啓は素早く顔を見合わせる。

「多加羅の若衆だったんですか！？ 知らなかったですよ」

「おや、知らないのかい？ ここだけじゃないんだよ。隣りの村もね、今年の祭礼の祭壇を壊されて、村人皆がもうかかんかさ」

女性の一人が声を潜めるように言った。

「私ら沙羅久よりも多加羅に良い印象を持ってたのにねえ。聞けば若衆の頭つてのは、次の惣領になるお方らしいじゃないか。この緩

衝地帯を自分のものだとしても勘違いしてるんじゃないかね」

「呆れた話だよ。まったく」

「これじゃあ、多加羅の先行きも知れてるねえ。次の惣領がそんな方だったらね」

「まだ沙羅久の方がましだよ」

須樹は思わず言う。

「あの……本当に多加羅の若衆なんですか？」

「ああ、そうだよ。どこかの村では自分らでそう名乗ったっていう噂を聞いたからね。頭の身分が高いからってたか括ってんのさ。」

私らが何も言えないと思ってるんだよ、きっと」

「でも私らも黙ってはいないよ。今日もね、村長達で話し合ってるんだよ。このまま泣き寝入りなんてできっこない」

「多加羅に申し入れか何かをするんですか？」

「いや、今年の評議会でね意見を出すつもりなんだよ。その意見をまとめているのさ」

「……その若衆というのはどんな奴らでした？」

思わず尋ねた須樹に、一人の女性がふと怪訝そうな表情になった。「なんだい、あんた、どうしてそんなことを知りたがるのさ？ えらく拘るね。まさかあんた多加羅から来たのかい？」

咄嗟に言葉に詰まった須樹にかわり、設啓が口を挟む。

「俺たち、多加羅所領内の街で奉公しているんですよ。まさか若衆がそんなことするなんて、信じられませんねえ。本当にかっかりですよ」

さりげなく女性の注意を引くと、俄かにすまなそうな表情を作った。

「すみません。もう行かないと。今日の夕刻までには戻らないとだめなんですよ」

「ああ、そうだったね。お父さんが待ってるんだよね」

「気をおつけよ。もしも多加羅の若衆に会ったら逃げるんだよ。無事な姿をお父さんに見せておあげ」

「ええ。そうします。ありがとうございました」

二人は神妙に頷き女性達に頭を下げると、足早に村の出口へと向かった。そのまま、女性達に示された右手の道を進む。村が見えなくなるまで歩き、須樹は漸く大きく息を吐き出した。立ち止まり設啓を睨みつける。

「お前なあ……無茶苦茶だぞ！」

「話を聞き出すなら、まず同情を引くのが一番いい」

先程の愛想の良さなど欠片も感じさせない顔で、設啓はぼそりと言った。須樹は僅かに力の抜けた声で呟く。

「しかも俺が弟か」

「俺の方が年上に見える。うまくいったらろう」

それは須樹も認めざるを得なかった。多加羅若衆の者であることを気付かれずうまく村人から話を聞き出すにはどうしたらよいか、須樹自身が思案していたのである。やり方はともかくとして、成功と言えるだろう。

「ここら一帯の村と、それから素奈の街でも話を聞いてみよう」

設啓は言つとさつさと歩きだす。その背に須樹は溜息まじりに言った。

「次はどんな話を持ち出して同情を引く気だ？ まさか同じ話をするわけじゃないだろうな」

「心配するな。あと十通りは考えがある。お前こそ、さつきみたいにながつついて気付かれるようなことをするなよ」

「……」

もはや何を言つ気も失せて、須樹は設啓の後を追った。

## 50 (後書き)

読み返して本当にじれったい展開だな、と思っている書き手です。第一部と違い、かなり一人一人に焦点を当てているので、展開が遅いです。「魄、落つる」の方でさくさく書いているのもあって、こちらのスローペースぶりにびっくり。(いや、書いている本人が言うことではないですが……)どうか、のんびりお付き合いください。なにはともあれ、今後ともよろしくお願いいたします！

仁識は椅子から立ち上がると、それまで読んでいた書物をゆつくりと閉じた。柔らかな光沢の机には、数冊の書物が整然と積まれている。壁面に大きく設えられた窓からは、うつすらと霞むような光が差し込んでいた。僅かにその光に目を細めると、仁識は踵を返した。

彼の部屋は屋敷の中でも明るい角部屋である。だが、家を継ぐ者に見与えられるその部屋は、彼の記憶にある限り常にくすんだ錆青磁に沈んでいるように思えた。おそらくは彼が生まれるはるか昔から変わらぬ色調なのだろう。

仁識は外套を羽織ると廊下へと出た。石床から立ち上がる冷やかさに、足音が硬質に響く。屋敷はひっそりとした静寂に沈み、人の気配も希薄だった。父親はおそらく不在、母親は気に入りの侍女とともに自室に籠っているのだろう。親と何日も顔をあわせぬことも珍しくはないのだ。

仁識が博露院をやめたのは十四の時である。はじめは顔をあわせれば息子を叱責していた父親もやがて口を閉ざした。だが、それは決して息子を許したからではなかった。親としての情愛に欠けた家を継ぐ者に対する期待が、失望と頑迷なまでの拘泥に変わっただけであり、口を閉ざしたのは諦めたからではなく、己の意に沿わぬ者への冷淡な怒り故だった。父親と息子の不和に悩んだ母親が、家族に対して心を閉ざしたのはいつだったか、すでにその頃には取り返しようもなく家族の絆は、そのようなものがあつたのならば、と仁識は思う。壊れていた。

誰にも顔を合わせぬまま屋敷の外へ出ようとした仁識は、しかし静かな声に引き留められる。

「仁識様、お出掛けでございますか？」

振り返れば、祖父の代から屋敷に仕える老いた家司がひっそりと

立っていた。誰もが息を潜めるような屋敷の中、この家司ばかりが  
出来ない跡取りに対して変わらぬ態度を取り続けている。

「ああ、公歴書館こうれきしょかんへ行つてくる」

「お気をつけくださいませ」

家司は穏やかな声音で言うのと丁寧ていねいに頭を下げた。それに頷くと、  
仁識は足早に屋敷を後にした。

公歴書館は街の西、博露院の近くにある。博露院の付属の施設で  
あるそこには、学問書や歴史書が保管されている。もとは博露院の  
学徒しか立ち入ることができなかったが、一般の人々にも公開され  
るようになったのは峰瀬みなせが惣領となつてからだつた。仁識は若衆が  
休みの日には公歴書館にふらりと立ち寄ることが多い。博露院をや  
め、若衆に入つた当初は、張り詰めた屋敷の雰囲気から逃れるため  
だつたが、今では彼の密かな楽しみとなつていた。

須樹すぎと設啓せつけいが緩衝地帯へと赴いたこの日、仁識は交替で取る休みに  
当たつていた。戻つた二人の報告を聞くために鍛練所へと赴くこ  
とにはなつていたが、それも夕刻である。昼過ぎの一時を古書に囲  
まれて過ごすのも悪くなくろうと思つた。

それだけではあるまい。

己の思考に仁識は頭を振る。考えても栓の無いこと、期待するの  
は愚かしいことだ。だが、何故か確信にも近い予感があつた。必ず  
会うことが叶うのだと。

公歴書館は飾り気の無い四角い建物である。その入口をくぐり、  
見なれた回廊を突つ切ると正面に広い書庫がある。書庫に踏み入れ  
ば、高い天井に程近い窓から射す光は弱く、所々に灯された硝子筒  
が柔らかな光を放つていた。人影はまばらである。仁識は読みかけ  
の歴史書を選び出すと、書棚の間を抜け、奥へと向かつた。ゆつと  
りと歩き慣れた経路を辿る。埃の匂いと等間隔に灯される明かりの  
温もり、そして静寂。そこは、時の流れから切り離されているかの  
ように彼には感じられる。そして書庫の最奥、彼が進む先に人影が  
あつた。



実に一月ぶりに見るその姿に、仁識は知らず口元を綻ばせる。どうやら予感はずなかつたようだ。

壁に直接設えられた石の長椅子に一人の娘が腰かけ、手元の書物を読んでいた。極力足音を立てぬように気をつけたつもりだったが、相手は彼の気配に気付いていたらしい。声をかける前に、彼を振り返るとにこりと笑った。その拍子に柔らかな光をともし、長い髪が揺れた。

「見よ、天河の様を」

笑いを含んだ声で囁くのに、仁識は苦笑して答える。

「名にし負う彼の都とて滅びしが」

有名な一文である。

「素晴らしいのよ。今丁度老將軍が没するところなの」

言いながら、娘は手に持つ古書をなでた。

「あなたはもう読んだのね？」

「ああ、大分前に」

「じゃあ、内容は言つてはだめよ。もう少しで読み終わるの」

朗らかな声に頷き、仁識は距離を置いて娘の隣りに腰を下ろす。

再び古書に目を落とした娘の横で、仁識もまた手に持つ歴史書を開いた。紙を捲る音が微かに響く。

心地よい静寂に身を浸しながら、いつしか仁識は娘の横顔を見つめていた。笑うと笑窪の浮かぶふくらとした頬に、一房黒髪が垂れている。無意識だろうか、優しくその黒髪をかきあげる仕草が大人びて見えた。常に笑みを絶やさぬ瞳が、今はひたむきなまでの一途さで文字を追っている。

仁識が彼女と会つたのは二年程前のことだった。二人がいる場所は書庫の最も奥であるため、滅多に人は来ない。仁識がその場所で書物を読むようになったのは、博露院に通っている面々、特に仁識のことを知っている者達と顔を合わせるのを避けるためであった。彼らが仁識のことをどのように言っているかは容易に想像がつく。何を言われたところで気になるわけではなかつたが、顔を合わせる

のはやはり面倒だと思つたせいである。

いつからか、時折その場所で彼同様に書物を読む娘を見かけるようになった。はじめは言葉を交わすこともなかったが、ある時先にこの場所にいた彼女が、引き返そうとした彼に声をかけたのだ。

あなたもこの場所が好きなのね？

以来、会えば会話を交わすようになった。もつとも申し合わせるわけでもなく、会うのはいつも偶然である。長い時には三月程も姿を見ぬこともあった。公歴書館を訪れる女性は少ないわけではないが、その多くは博露院の学徒か、あるいは学問に携わる職の者が殆どであった。娘はそのいずれでもないことに仁識は気付いていた。その出で立ちから、貴族の屋敷に仕える侍女とも思えた。そう考えれば、娘が何箇月も姿を見せぬのも理解できる。貴族の中には惣領から与えられ己が治める領地と、多加羅の街の屋敷とを数箇月おきに行き来する者が多い。娘が仕えるのはそのような貴族なのかもしれない。いずれにせよ、娘自身は仁識のいかにも貴族然とした姿に気後れするでもなかった。

おそらく十七、八だろうか、となおも彼は娘を見つめながら考える。出会つた頃からさほど容貌は変わっていないように思う。流行りの衣を身に纏い凝つた形に髪を結う年頃の娘達よりも幼く見えるのは、上質な布地ながらも質素な衣と、きつちりと一つに結わえた髪型のせいかもしれない。だが、時折伏せる瞳に、嘗ては気付かなかった艶やかな深みがあった。

心地良い静けさばかりが辺りを満たしていた。それに、仁識は引き込まれるような感覚を覚える。時の流れからも切り離され、それはまるで器にたゆたう水のように。今、この時だけがかった。

「私の顔に何かついていない？」

突然かけられた声に、仁識ははっとする。気付けば、娘が彼の顔を見つめて微笑みを浮かべていた。

「いや、真剣に読んでいるものだと思つていただけだ」

「あなたも、読んでいる時はこれ以上ないほど真剣な顔をしている

わよ。眉間に皺を寄せているの、気付いていないでしょ」

仁識は思わず苦笑する。

「見られていたとは気付かなかった」

「ええ、あなたは一度も気付かなかった」

「ならば、これからは気をつけよう」

「でも、きつとあなたは気付かないと思うわ」

娘は微かに笑んだ。

「そのようなことはない。気付くさ」

言った己の言葉に、仁識は何故かどきりとした。その一瞬の惑いから目を逸らすように、手元の書物に視線を落とす。再び娘が古書に集中するのが気配でわかる。だが、仁識はいかに集中しようとも一行も読み進めることができなかった。流麗な筆記の文字が、まるで意味をなさない象形の羅列のように見える。あるいはばらけて蠢く虫のように

器の水が零れるように、静謐な時が破れる。己の呼吸が、鼓動の一つ一つが、いやに耳についた。

意味をなす言葉などどこにも見つけられぬまま、ざわざわと渦巻くように揺れる、それに不意に苛立ちを感じる。己への苛立ち唐突に仁識は悟っていた。今、この時に、意味をなすのはただ一つだった。ただ一つのものだけだった。

問えば、娘は答えるだろうか。

名を、教えてはくれまいか？

だが、問いはひりつくようなもどかしさだけを残して、言葉にならぬまま消えた。今更、問うてどうするのだろうか……仁識は苦く思う。見詰める先で、黒々とした文字が絡まる。

名乗らずにおきましようよ

言ったのは娘だった。初めて会ってから半年ばかり経った時、春の日であったかと思う。記憶の中で、高い窓から吹き込む風の、その仄かな甘みは咲き誇る花々のものであつたらうか。

名乗らずにいれば、身分もなく、家柄もなく、ただ偶然に出会っ

た者同士、時を過ごすことがかなうのだとでも言うように 娘は仁識の出自を知っていたのかもしれぬ。あるいは、名を知ってしまえば現とも思えぬ泡沫の、静寂が壊れるとも思ったのだらうか。仁識にはわからなかった。だが、頷いた彼に一瞬見せた娘の微笑みが、なぜか忘れることができなかった。

互いに名も、年も知らぬ。

彼自身、それまで不思議と名乗ろうとは考えなかった。偶然に出会っただけの相手である。何時しか言葉を交わすようになり、話せば娘の知性と豊かな感性に驚かされもした。娘の視線は、彼を知る者が向けるそれとは違い、ただ柔らかく穏やかだった。二人、誰も知らぬこの場所で、包まれる静けさが心地良いと感じるようになってのは何時からだったか、その時には、尚更にその静けさを破ることなど考えられなかった。

名乗っておけば良かったのかもしれない

先程まで感じていた満ち足りた静寂が、不意に重く息苦しく、感じられた。その静けさに包まれ、気付けばそれに捕われている。それを破ることもできず、手を伸ばすこともできず 気付くべきではなかった、と仁識は不意に思う。このような気持ちに、気付くべきではない。

名乗っていれば、今これほどに名を知りたいと思うこともなかったらう。また、決して名を知ってはならぬと 知るべきではないのだと、気付かされることもなかったらう。仁識は瞳を閉じた。手の中の書物のざらついた感触ばかりが鮮明に、傍らに座る娘の気配が、柔らかく遠かった。

(馬鹿なことを……このような気持ち、一時のまやかしのようなものだ)

もとより、偶然などという不確かな巡り合わせで出会った相手である。そして互いに、知ろうと思えば相手のことを知ることがかなうのにそれをせぬのは、所詮それだけの存在でしかないということだ。あるいは素性を知ってしまえば、互いの態度が変わるのかもしれない

れず、そうであれば、今この時はまさにまやかしのだ。自身に言い聞かせるように、仁識はそう考えていた。

仁識は頑なに己の心から目を逸らす。その横顔を見つめる娘の視線に、彼は気付かなかつた。娘はそつと目を伏せると俯く。

ゆつくりと、しかし確実に、移ろう陽の影に時は削られていった。

須樹と設啓が緩衝地帯から多加羅へと戻ったのは夕刻だった。鍛練所ではすでにその日の鍛練は終わり、若者達が家路に着く頃合いである。馬を厩に戻し、二人はまっすぐに鍛練所の三階にある副頭に与えられた部屋へと向かった。須樹達は通り過ぎしなに頭を下げる若衆達に応えながら、足早に進んで行った。建物の中へと入れば人影は殆どない。訓練が終われば若者達は速やかに鍛練所を去る。南軍の下部組織である若衆では、厳しく公私が峻別されていた。

階段を昇り、二年前から閉ざされたきりの若衆頭の部屋の手前にあるのが目指す部屋だった。副頭に与えられる部屋は会議室といった様相であり、大きな卓の周りに椅子が数脚あるだけである。若衆頭と違い、副頭が部屋に籠ることは滅多にないため、個々人に一部屋が与えられるわけではなかった。

副頭はそれぞれ三人の錬徒の上に立つ。つまりは三範を与るということだが、剣の鍛練は勿論、錬徒の指導に対する監視、範の面々の上達具合まで把握する必要がある。なおかつ少年同士の争いが起き、錬徒の手に負えなければ副頭が調停を図ることもあるのだ。そのため常に若衆の動きに目を配り、直に彼らと接することが求められる。副頭に必要とされる能力とは、単に武術の腕だけではない。血気盛んな年頃の若者達をまとめる統率力、公平な判断を下す的確な思考力までもが必要とされるのだ。

二人が扉を開けると、すでにそこには灰と仁識の姿があつた。須樹と設啓は、二人と向かい合う位置に腰を下ろすと、早速に切り出した。

「思った以上にひどかった」

疲労と、おそらくそれだけではない、懸念に彩られた須樹の声音である。須樹にしては珍しい感情を滲ませてのそれに、仁識は僅かに眉を上げると静かに問う。

「噂の真偽は確かめられたのか？」

「村をまわって確かめたが、幾つかの噂は本当だ。村人達に因縁をつけて怪我をさせたというものが一番多かったな。あとは祭りのために設えた祭壇を壊したというもの……だが、倉庫に蓄えた食物を火で燃やしたというのは違った。実際は蓄えていたものを荒らして倉庫から放り出した程度らしい」

「あとは素奈の街というところでも話を聞いたが」

設啓が須樹の後を続ける。

「こちらは特に被害はなかった」

「だが、噂はこちらの方がひどいものだったぞ。多加羅若衆が倉庫を燃やしたというのはむしろ街で広まった噂のようだ」

「街ではその他にも噂があったのですか？」

灰の問いかけに須樹は頷いた。

「ああ。幾つかあった。耕作用の馬を盗んだのだ、街道筋にたむろして旅人を脅し金を奪ったのだ、果ては村の娘を勾引かそうとした、などというものもあった」

声に怒りが籠る。そのどれもが多加羅若衆の仕業と思われるのだ。

「その素奈の街、というのはどれ程の規模の街なんですか？」

これには設啓が答えた。

「だいたい三百人程が住む街だ。周囲の農村と取引をしている商店が多い。さして大規模というわけではないが、あの辺りでは羽振りが良い方だろう」

「とにかく、聞く限りひどい噂ばかりだ。緩衝地帯の人達も多加羅若衆への印象がかなり悪くなっている」

須樹はそこで僅かに躊躇い、そして言った。

「おまけに若衆頭である透軌様のことまで引き合いに出して、身分をかさに着ての横暴とまで考えられているようだ。沙羅久と比較までされていたぞ」  
「なるほど……」

仁識がぼつりと呟き、その隣りでは灰が考え込むように目を伏せた。

「それともう一つ、村で聞いた話だが、若衆の横暴に対抗するため評議会に出す意見をまとめているという人もいた」

沈黙が落ちる。評議会 その言葉故だった。

緩衝地帯の実質は自治に近いが、形式上は二惣領家の支配下にある。街や村の運営は、多加羅と沙羅久の双方に一年のうち数度報告され、二惣領家への納税も義務付けられている。そして報告をまとめ、徴収した税を均等に分けて二惣領家に納める任を負うのが評議会である。

「厄介だな」

仁識が言った。

評議会とは緩衝地帯の街や村の代表者が一堂に会する場であり、まさに緩衝地帯の公の顔ともなる存在だった。形式上のこととはいえ、評議会が出す報告や言上、あるいは請願といったものは、緩衝地帯の総意であるが故に大きな意味を持つ。緩衝地帯を間に挟んで睨み合いを続ける多加羅と沙羅久にとつては無視できぬものだった。

「頭の意見を仰いだ方がいいかもしれぬ」

「頭に相談するのかわ？」

仁識の言葉に続いて、ぼそりと言ったのは設啓だった。それに仁識は肩を竦める。

「一応は我らの頭、だからな。それに評議会の名が出る程に話が大きくなっているのであれば、この一件は若衆だけの手には負えぬ。若衆全体で意思統一を図るためにも、頭にご出席いただいで会議の場を設けるべきだ」

「錬徒にも知らせるか？」

これには仁識は僅かに沈黙した。だが、答えは明瞭だった。

「そうだな。知らせた方がいい。どうせなら頭との話し合いの場にも参加させよう」

「とにかく評議会にまで意見が出されては、ことは二惣領家にまで及ぶものとなってしまう。多加羅若衆の潔白を証明せねばならんが……どうすればよいのか。だいたい何故これほどまで深刻になる前に話が伝わらなかったんだ」

「手っ取り早いのは狼藉を働いている奴らを捜し出すことじゃないか？ そうすれば噂が嘘っぱちだということがわかる」

設啓の言葉である。それに須樹が反論する。

「だが、緩衝地帯には手を出せん」

「手を拱いていては、さらに厄介な事態になるだけだ」

「それも含め、ここで話していても埒はあかぬ。頭とも話し合って、惣領にも御報告申し上げるべきだろうな」

あくまでも冷静な仁識の言葉だった。須樹は黙って遣り取りを聞いている。或いは己の思考に沈みこんでいるらしい灰に視線を向けると、問うた。

「灰、何か気になることがあるのか？」

灰が眼差しを上げる。その瞳が鋭さを帯びていた。

「須樹さん、村で狼藉を働いた者達は自分達を若衆だと、村人達に直接名乗ったのですか？」

「ああ……そう聞いているが……」

答えながら、須樹はふと眉を顰めた。記憶を探るように目を眇め、設啓を見やる。

「いや、違ったか？ 村の人は直接聞いたとは言っていないかったな」

「そういえば、そうだな」

若衆だと名乗ったという噂を聞いた

一つ目の村の女性はこう言っていたのではなかったか。その後訪れた村でも、直接に若者達が若衆であると名乗ったと言った者は一人もいなかったことに気付く。



「五つ目の村では若者達の狼藉の場に居合わせた者の話を聞くことができたが、若者の一団に何者かを問い質したが、答えはなかったと言っていた」

「最近でも若者達の狼藉は続いているのですか？」

「いや、ひどかったのは二月から一月程前までで、それ以降、今日まわった村では被害は出ていない。だが、街の噂によれば最近でもどこぞで被害が出たらしい」

「街で若者の集団が狼藉を働いた、ということはなかったのですね？」

「ああ、今日行ったのは素奈というところだけだが、被害が出ているのは農村ばかりのようだ。他の街で実際の被害が出たという話はそういえば聞かなかった。……灰、それが重要なのか？」

須樹が尋ねれば、灰は僅かに迷う素振りを見せた。仁識も無言で灰の言葉を待つ。暫しの沈黙の後、何事かを言いかけた灰だったが、唐突に響いた扉を叩く音に口を閉ざした。

「何だ」

須樹の声に扉を開けたのは、若衆の一人である。

「どうした？」

まだ十五歳程だろうか、副頭四人の注目を集めて俄かに居住いを正すと、その視線が灰へと向けられた。

「灰様にお会いしたいという者が来ています……」

「灰様！ 大変なんだ！」

若衆の言葉を遮って声が響く。若衆を押しつけて部屋に入って来た姿に灰が目を見開いた。声はまだ幾分幼い。彼を案内した若衆よりもおそらく年は下か、だが、それを感じさせぬ程に容貌は大人びて鋭かった。

「すぐ慈恵院じけいいんに来てくれよ！ 静星せいせいが！」

言いながら苦し気に顔を歪めた。駆けて来たのか、肩で大きく息をついている。灰が立ち上がり扉へと向かった。

「泉せん、何があった」

「よくわからない。でも急に胸を押さえて苦しそうにしないで、さつき俺が慈恵院を出た時には意識がなかった」

「わかった、すぐに行く」

答えた灰は素早く部屋の中を振り返る。

「慈恵院に行つてきます。先程の件、頭には話をしておきますので、言つと、答えを待たずに少年、泉の後に続いて部屋を飛び出した。若衆の少年があたふたと礼をして扉を閉める。」

「忙しいことだな」

取り残された体の三人の中で、最初に口を開いたのは設啓だった。

「今の子供……もしかして……」

思わず呟いた須樹に、仁識が目をやる。

「ああ、三年前のあの少年だな」

「そうか……あの時の……」

「とにかく、緩衝地帯の件は一度話し合ってから動いた方が良さそうだな。若様からの連絡を待とう」

「仁識、灰が何を気にしていたかわかるか？」

須樹の問いかけに仁識は僅かに首を傾げた。彼が考える時に見える癖である。妙に邪気が無く見えるから曲者なのだが、灰同様、仁識もまた須樹にははかりようもない思考を巡らす人物である。仁識ならば灰が言いかけたことが何かわかるかと思っただが、彼はあっさりと首を振った。

「いや、わからぬ。もしかして今回の件、見かけとは違う裏があるのかもしれないが、こればかりは若様の口から聞いた方が良さそうだな。どうせならば話し合いの場で言ってもらった方が手間も省ける」

あれだけの情報で、今回の一件の裏が読めるのだろうか。そもそも裏があるのか。だが須樹はただ頷くだけで何も言わなかった。言わぬ程度には、須樹は灰と仁識のことを知っていた。彼らが何かを感じたということは、ことはさほど単純ではないのかもしれない。

「これ以上話し合うこともないな。私は帰らせてもらう」

仁識は素早く外套を羽織ると言った。部屋を出て行くその背を見

送り、須樹もまた席を立った。

「俺達も帰ろう」

その言葉に頷き去りかけた設啓が、ふと立ち止まると須樹を振り返った。

「いつもあなののか？」

「何がだ？」

「灰様さ」

須樹は僅かに苦笑する。思えば設啓と灰が会話を交わしている姿を見たことは殆どない。別の範だったせいもあり、二人はさほど互いのことは知らないのだろう。特に設啓にしてみれば、普段は物静かで穏やかな灰が先程見せた表情は初めて見たものに違いない。思考を巡らせている時の灰は、近寄り難いほどの雰囲気醸し出す。先程もまたそうだったかと思いついていた。

「ああ、設啓はああいう灰を見たことはなかったか。俺達が回り道をして散々迷った挙句に漸く辿り着く結論、下手するとどうやっても辿り着けない結論に、灰は一足飛びに辿り着くことがある。あの思考には毎度驚かされる。仁識でさえも一目置いていくくらいだからな。話し合いの場では面白いことが聞けるかもしれない」

「よくはわからんが、単なる惣領家のお飾りではない、ということか」

設啓の言葉に須樹は眼差しを陰しくした。

「どういうことだ？」

「そついう見方もあるということだ」

「お前がそう思っている、ということか？」

「俺だけではない」

言って設啓は部屋を出て行った。取り残されて須樹は立ち尽くす。胸中に生じたのは、戸惑いだった。他ならぬ設啓の言葉故のそれである。設啓が副頭に選ばれたのは、それだけ彼が人望のある証であり、須樹自身も設啓の手腕や判断力には信頼を置いていた。その彼が、灰に対してあのような思いを抱いていたのか、と思う。

(安易だったか)

苦く考える。灰が副頭になったことは概ね皆に受け入れられてい  
ると思っていた。だが、それは楽観的に過ぎたのか。多くが灰を受  
け入れている。だが、それは灰自身の能力を認めた者ばかりではな  
かったのかもしれない。単なるお飾り、能力が無いにも関わらず惣領  
家の者であるが故の特別待遇と思う者も、思った以上にいるのかも  
しれぬ。それは悪意ではなくとも、常に灰に纏わりつく偏見のあら  
われである。

三年　それだけの歳月を経ても、消えぬものがあるのだ。それ  
に須樹はもどかしさを覚える。

そしてもどかしさの根底には、灰自身に対する思いもあった。皆  
が灰を見ぬだけではない。灰自身も己を皆には見せぬのだ。冶都<sup>やと</sup>な  
どは灰のそのような態度を無欲と評したことがあるが、須樹にはそ  
れだけとは思えなかった。驚く程に優れた能力、それを有しながら  
灰には欠けたものがある。しかしそれが何なのか、須樹にもしかと  
はわからなかった。

須樹は小さく頭を振ると、外套を羽織った。緩衝地帯で何が起こ  
っているのかを突き止め、多加羅若衆の潔白を証明する。今はそれ  
だけを考えるべきだろう。

明かりを灯していない部屋は何時しか薄暗く、窓から差し込む残  
照の角度が深まっていた。

駆け抜ける街路には、すでに夜の気配が忍び寄っていた。灰は、泉も着いて来れる程の速度で足を運ぶ。それでもかなりの速さなのか、泉の吐く息が忙しく白い。

「静星、今日は具合が良さそうだったんだ。珍しく昼もちゃんと食べた。でも暫くしたら、急に苦しみ出して食べた物を吐いたんだ。さっき胸を押さえて苦しそうにしてて……」

言いながら泉の顔には隠しようもなく不安が揺れている。青褪め、それでも気丈に取り乱すまいとしていた。

「老師はどうした？」

「今朝から村の回診に行ってる。帰るのは夜遅くか、もしかして明日になるかもしれないって言ってた」

「そうか」

「俺、老師から静星のことは気をつけるように言われてたんだ。でも、調子が良さそうで大丈夫だろうと思って……」

言いながら泉は唇をかむ。己を責めるかのような声音である。灰は無言で泉の肩を軽く叩くと、足を速めた。

惣領家の屋敷から程近い鍛練所から慈恵院まではかなりの距離がある。慈恵院は神殿が運営する施設ではあるが、神殿が建つ街の中心部ではなく、貧しい人々が密集して暮らす外延部に在る。慈恵院が貧しさ故に医術者にかかることのできぬ者のために開かれた医療所であり、その方が利便性が高いという理由からだった。

そして表向きのそれとは別に、無視できぬ現実がもう一つある。慈恵院が開かれたのは、貧困故の病苦の蔓延を食い止めるためである。だが多くの場合非衛生であり、医術者や薬師の数も少なく、十分な医術を施せぬことが多い。そして慈恵院に集まる患者の中には、他の医術者からも見放された者も数多くいた。街衆にとって慈恵院とは貧しい者、死にゆく者が最後に訪れる場所。貧困と死の象徴な

のだ。故に存在自体が忌まれ、街の中心からは離れた場所に建てられるのが常だった。

灰が三年前、慈恵院の活動に参加するようになった時は、薬師くすしは一人もおらず、人々が尊敬を込めて老師と呼ぶ年老いた医師者ただ一人という有様だったのである。三年を経て状況は幾分改善されていた。それまでは治る見込みの無い者は受け入れられることはなかったが、今では慈恵院で療養することがかなうようになっていた。静星自身がそのうちの一人である。

灰と泉が漸く慈恵院に辿り着いた時には、あたりはすでに夜の暗さである。小さな家々が犇めく中に慈恵院の輪郭が重々しく浮かび上がっていた。灰色がかつた石壁と、それを這う鳶の有様は暗がりに沈んでいる。門をくぐり抜け、開け放たれた扉から回廊へと入る。微かにすえた臭いが漂っていた。

「ああ、灰様」横合いから声をかけられて灰はそちらを見やった。彼のことを待っていたらしい、慈恵院で働く尼僧が暗がりにはいた。

「静星は」

「こちらです。先程よりも大分落ち着いております」

尼僧は彼を小さな部屋へと誘った。静星がいつもいるのは数人の患者と寝起きをとにもする大部屋である。容体の急変に場所を移したのだろう。寝台に横たわる少女は、一見したところ眠っているようだった。顔色は青褪めているが、呼吸は落ち着いている。灰の隣りで泉が安堵のためか、小さく息をついた。

灰は床に膝をついた。静星の顔を覗き込み、脈を取る。その横で、泉が真剣な面持ちでその様を見つめていた。静星の緩く開いた口から零れる呼吸を嗅ぎ、右手を少女の額に乗せた。そして少女の体の上に左手をかざす。

「灰様……」

「待つて」

灰に問いかけた尼僧の言葉を泉が遮る。泉は灰がどのような手順で患者の容体を診るか、よく知っている。なおも灰を見つめたまま、

じつと息を詰めていた。

灰は意識を目の前の少女に集中した。幼い頃から病を患う少女は、十五というその年齢からするとあまりに小さく細い。目を細めると程なくして緩やかに揺れる波が少女の体の周りに見える。ゆっくりとそれを撫でるようにして手を動かすと、全ての感覚が掌に集中するのがわかった。膝をつく床の冷たい感触さえ遠のいて、静星を象る波だけが第二の視界に広がる。

灰はそれをまるで一つの世界のように感じる。複雑に絡み合い、精緻な器となつて命の核を包んでいる。炎のように結ばれるその形を傷つけないように手を動かしていた灰は、一所でその手を止めた。流れるような波が、そこだけまるで纏れた糸のような有様で滞っている。

(ひどくなっている……)

灰はさらに意識を凝らした。あまりに深く他者の命に己の意識を広げることが危険であることは知っていたが、少女の胸に巢食う病の、瘤のような凝りを探る。唐突に、ひやりとした鋭い痛みを感じて、灰は手を引いた。かざしていた左手を右手で抱えるようにして、素早く立ち上がる。

「あの……？」

突然の灰の動きに尼僧が戸惑つたような声を出した。それに灰は振り返る。

「もう落ち着いていますね、熱が出ていますね。解熱の薬を調べておきます。あとはとにかく温かくするように気をつけてあげてください。火鉢はありますか？」

「はい。持って参ります」

尼僧が頷いて静かに部屋を出て行く。

「灰様、静星大丈夫なのか？」

「急に寒くなつたから体がまいつたんだらう。朝は元気だったのか？」

「うん。だから外に出て散歩までしてたんだ。それがだめだったの

かな」

灰は床に座り込むと常に携帯している腰袋を開き、中から数種類の薬草を入れた小さな包みを取り出す。解熱の薬や傷薬を作るための薬草は常に身につけている。意図を察した泉が棚に常備されている小鉢と籠を灰の前に置いた。

「老師は静星が肺の病だと言っていた。そうなのか？」

「おそらくそうだろうな」

小鉢に薬草を入れながら灰は答えた。少女の胸の奥に凝る病の感触が指先に蘇る。危うかった、と思う。病の根を探ろうと、あまりに深く意識を伸ばし過ぎたようだ。

「灰様、もつと慈恵院の方に顔を出せないのか？」

慣れた手つきで薬を調合する灰の傍らで泉がぼつりと言った。思わず少年の顔を見れば、まっすぐに見つめ返してきた。

「老師が言つてたよ。灰様も医術者としての知識を身につければ優れた癒し手になるのに勿体ないって」

「老師が？ それは珍しい」

灰は苦笑する。口数の少ない頑固な老医術者は、灰の薬師としての腕前は認めているらしいが、ついぞそのような言葉をかけられた覚えはない。三何前、慈恵院の活動に参加するようになった当初は、惣領家の者が気紛れに顔を出すなどかえって迷惑だと面と向かって言われたほどである。

今でさえ、若衆の活動の合間に顔を出す灰に対して老師は良い顔をしない。医術に人生を捧げる老人にとって灰の態度は片手間と映るのかもしれない。灰自身もそう思われても仕様がないと考えていた。泉が焦れたように言い募った。

「老師はいつも灰様に厳しいけど、結構灰様のこと認めてるんだ。惣領家の者でなかったら本当は灰様のこと弟子にしたいと思つてたんじゃないかな。今でもきつとそう思つてる筈だよ」

「直接そう聞いたのか？」

「そうじゃないけど……」



「なら、そんなことは言わない方がいい」

「でも……俺なんかより……」

「今、老師の弟子は泉なんだから、余計なことは考えない方がいい。泉のことを老師は認めている。だから弟子にしたんだ」

泉は下を向く。その様子に苦笑して、灰は手元に意識を戻した。

泉が母親の病に効く薬を受け取るために慈恵院に通うようになって三年、最近では母親の状態は良くなってきているようだった。そして動くことのできぬ母親のために泉が小学院にも通わず、ただ一人働きに出ていることを灰は知っている。大人でもきついような労働を、その小さな身で黙々とこなしていた。

泉がたまの休日に慈恵院に来ては、灰の後をついて回るようになったのは何時からだだったか、その彼が老師の弟子となったのは数箇月前からである。

「俺、早くちゃんとした医術者になりたい。このままじゃ、老師に迷惑をかけてばかりだ」

ぽつりと泉が咳く。答えを求めての言葉とも思えず、灰はただ黙って聞いていた。多分に己を責める響きは、静星が苦しむのを見ながら何もできなかったというその思いからかもしれない。なかった。

医術者は患者からの謝礼だけではなく、惣領家からも恩賞を与えられる。それだけ貴重な存在として優遇されていた。通常医術者の知識や技術は一人の弟子に伝えられる。必ずしも血縁である必要はなく、己の知識と技術を引き継ぐ者を一人選び、育て上げる。弟子が一人前となった暁には惣領家から認証を授けられ、恩賞を下されるのだ。

老師は常に無償で患者の治療に当たっている。惣領家からの恩賞だけが収入源なのだ。医術者の多くが慈恵院での治療を嫌うのは、環境の悪さに加え、無報酬であることが大きな原因であり、その中で老師のような医術者は稀だった。まだ医術者の見習いになりたての泉には報酬はおろか恩賞も出るはずがない。その彼に老師が給金として金を渡しているらしいことは灰も知っていた。病の母親と幼い

妹を抱え、それがなくなれば生活ができぬとはいえ、泉にとっては心苦しいことなのだろう。本来給金などもらえる立場ではないのだ。

「俺、このまま老師の弟子でいてもいいのかなあ」

「あの気難しい老師が泉を弟子にしたということは、本気で育てたかと思っっているということだ。あまり気に病むな」

我知らず宥めるような口調になってしまい灰はちらりと泉を見やっただ。少年が下手な同情や慰めを嫌うたちであることを知っていたからである。だが珍しく泉は大人しく頷いた。

「本当は俺、はじめ灰様の弟子になりたかったんだ」

「え？」

「でもなかなか言い出せないし、老師に一度相談したんだ。そうしたらやめておけ、と言われた。灰様のようにお前は決してなれない、誰にも真似のできないことだから無駄だって」

灰は思わず黙り込む。

本気で医術の道を志すならば、儂の弟子にならんか

その後老師はそう言ったという。どのようにして泉が老師に師事することになったのかという、その話は灰にとっては初耳である。

「灰様にしかできない方法だから誰も継ぐことができないって」

「そうか」

「薬師になるのってそんなに難しいのか？ 誰にも真似できないってどうということかな」

その言葉に灰は答えることができなかった。思わぬ動揺を覚える。静星の体にかざした左手が、いまだに熱を持っているかのように感じる。無論それは単なる錯覚だ。静星を象る命の波に、彼自身のそれが引きずられそうになった、その名残だった。

本来、怪魅の力とは命に向けるものではない、と灰は考えている。個としての形を持たず、大気にたゆたうものを操るのが怪魅師なのである。個として在る命は、それ自体が一つの世界でありながら、完全には閉ざされてはいなかった。それ故、怪魅の力で探ることができる。だがあまりに深くそれを行えば緻密で強固なその器に、意

識そのものが取り込まれるような危うさがあった。確固として隔絶して存在している命は、一度触れ合うと自ずから結びつき合う性質があるようだった。もっともそれは自然の中で容易く起こり得ることではなく、意図して怪魅の力で病を探るといふ経験を通して、灰が知ったことである。

まさか気付かれたか 老医術者の厳めしい容貌を思い出し、苦く溜息をついた。そもそも命そのものに怪魅の力を向けるのが禁忌なのかもしれぬ。己は過ったことをしているのかもしれない。怪魅の力で病を探ったところで、何が出来るわけでもないのだ。だが。灰は出口の無い思考を振り払うようにして頭を振った。

老師が言ったのが単に薬師としての灰を指したことなのか否か、彼にはわからなかった。眼力鋭い老人である。何かを気付いているのかもしれない。

灰は調査した薬を紙片に包んで幾つかに分けた。

「食事のたびに飲む分量に分けておく。明日、老師にも一応確認してもらってから飲ませてくれ」

「うん。わかった」

余った薬草を腰袋にしまい灰は立ち上がった。寝台に腰を下ろし、静星の小さな手を両手で包みこむ。少女の白い手は乾いて冷たかった。指先にまで満ちた命の波は、しかし次第に弱まっていた。慈恵院で最期を迎える数多の者がそうであったように、静星を象るそれもまた、静かに尽きつつあった。

無言で少女の手を握り締める灰の姿を、泉は見つめる。尼僧が火鉢を持って来て炭に火を灯した時も灰は振り返らなかった。

その時灰が感じたのは、息詰まるほどの無力感だった。いつか全ての命が終わりを迎える。病の苦しみもまた命に課せられた定めかもしれない。だが、例えそれがどれ程に自明のことであろうとも、灰には目の前の苦しみを和らげる術を持たぬことがあまりにもどかしかった。

このような力があつたところで

そう思う。人の命を見ることがかなうだけで、何も出来ぬ。ただ、大気を操り、壊すだけの力だ。

どれ程そうしていたのか、何時しか静けさが深みを増していた。灰は漸く少女の手を離すと、立ち上がった。それまで床に座り込んでいた泉は灰を振り仰ぐ。

「帰るのか？　もしかして静星も目が覚めるかもしれないし、もう少しいたらいいのに」

「悪いな。今日は用事がある」

「じゃあ明日は来てくれよ。灰様が来たら静星がすごく喜ぶ。今日も来るって言ってたから楽しみにしてたのに」

「そうか。明日も来れたら来るよ。静星が目を覚ましたら謝っておいてくれ」

「いいけどさ。俺が言っただってそんなに効果ないよ」

どこか慥然として呟く泉と寝台に横たわる静星に視線を投げて、灰は部屋を出た。

足早に回廊を歩けば、壁を隔てて、低く呻く声が聞こえた。籠る苦しみが静けさの底に陰々と響いた。長く尾を引いて、途絶える。

半ば顔を俯けて人気の無い回廊を進んでいた灰は、ふと視線を巡らせた。真直ぐに外へと続く回廊と分岐して、横手に細い通路があった。仄かな灯は、なお一層闇を深く見せる。そこに、一人の老婆がひっそりと立っていた。身に纏う衣は元はどのような色彩であったのか、長年風雨に晒された朽木のように褪せていた。皺深い顔を包む髪は霜を思わせる。そこだけ光が宿ったかのような瞳で老婆は灰を見つめ、ぽつりと呟いた。

「お若いの、これは現かい？」

掠れた声だった。まるで草原を吹きわたる風のような響きである。

「驚いた。夢ではないのだね」

訝しく灰は眉を顰めた。

「お若いの、名前を覚えておくれでないかい？」

「灰、といいます」

「そう、そんな名前だったかね」

「……どこかでお会いしましたか？」

思わず問うた灰に、老婆は不可解な表情を浮かべた。笑みとも苛立ちとも取れる。凝視する青年から、老婆はついと視線を逸らした。「いいや、耄碌した年寄りの戯言さね。忘れておくれ。お前さんが以前会った人にとてもよく似ていてね……」

そう言うと同廊の奥に踵を返した。小柄な老婆のその後ろに、長く黒い影が伸びる。それにふと目を奪われて、気付けば老婆の姿は暗がりには消えていた。

静けさの中に取り残され暫し佇んでいた灰は、しかし一つ首を傾げて歩を進めた。慈恵院に身を寄せている者であろうという事はわかったが、今まで見たことはない。おそらく最近来た者なのだろう。一度も会ったことのない相手であることは間違いなかった。耄碌、というにはあまりに鋭い視線であったようにも思うが、すでに八十は超えているであろう相手である。不可解な言葉を言われたようにも思うが、彼の外見が老婆の見知った者に似ているのであれば、それもさほど気になるものではなかった。

慈恵院を出た時には、既に灰は老婆の存在を忘れていた。用事があると言ったのは嘘ではない。惣領家の屋敷に行き、若衆頭である透軌に緩衝地帯で調べた結果を伝えねばならぬ。指先にいまだに残る冷たい病の感触から意識を逸らし、鍛練所で聞いた須樹達の話の思い出す。

錬徒以上の者で集まり話し合うことについても早急に決めねばならないだろう。何が起きているのかまだわからぬが、先程聞いた話の中でどうしても気になることが幾つかあった。無視できぬ違和感、些細なことに隠された見逃し得ぬそれである。おそらく緩衝地帯で起こっている一連の出来事は、思った以上に深刻かつ厄介なことに違いない。先程はそれを伝えることもせぬままあの場を飛び出したが、副頭である須樹達にも早急に己の考えを告げるべきか（まだしかとはわからぬ。とにかく、頭が先だ）

灰は夜の中に踏み出し、街の中心を目指した。  
その姿を、年経た瞳が見つめていた。

老婆は小さな窓に身を寄せようにして青年の姿を見つめていた。その姿が道の向こうに消えて漸く小さく息をつく。それは震えを帯びて弱々しく響いた。老婆は思わず苦笑する。

「やれ、参ったね。十分に生きたとはいえ、死ぬのは恐ろしいよ」  
恐ろしい 己にそのような感情が残っていたか、と思う。何度繰り返そうとも、死には抗いたくなるものなのか。あの青年はまだ十代だろう。老婆に残された時間は僅かである。

（いいや、違うかね。生きるのが恐ろしいのかね）  
思いながら老婆は身に纏う衣を掻き合わせた。寒さが骨身にしみた。流れついた此処が死に場所となるだろうことはわかっていた。寝台を与えられ、そこで死ぬるならば過ぎた贅沢だとも考えていた。だが、今となつては最後に訪れたささやかな安らぎさえ、どこか皮肉である。

青年との出会いに、老婆ははつきりと己の死期を悟っていた。

（所詮裏切り者には安らぎはないのか……）

見上げる星月は答えない。冴え冴えと、ただ遠かった。

「今生でまみえること、叶いましょうや……礎いしやすの子」  
呟きを聞いた者はいなかった。

## 52 (後書き)

久しぶりの更新です。物語の繋がりを書き手自身が忘れていく  
らないので、読んでいただいている方には「????」かも……。こ  
れからはコンスタントに更新していきたいです。  
ではでは、今後ともよろしくお願いいたします！

多加羅たからより北西の地、時は深夜であつた。

夜闇よらみよりさらに深い暗がりに沈む裏道を、男が一人歩いていた。万よろずである。

高い家壁に左右を挟まれた道は、おそらく日中は陽の光も射しこまぬであろう。夜であれば尚更に、冷気に凍る地面は硬く、時折聞こえるのは小さな生き物が這う気配ばかりである。普段から人が踏み込む場所ではなからう、と万は思う。そうであるからこそ、彼を呼び出した人物はこの場所を選んだのだ。

伝えられたとおりに道を進み、やがて目指す場所に辿り着く。半ば崩れかけた廃屋、その壁に小さな扉が一つ、闇に紛れるようにしてあつた。万はその前で僅かに足を止める。だが躊躇いは一瞬だつた。そつと扉を押すと、中へと身を滑り込ませた。

扉の向こうには、仄かな火影に浮かび上がる階段があつた。直接地下へと続くそれを、万はゆっくりとおりる。足音を殺すこともできたが、敢えて響くに任せた。待ち人の性格を思えば良い顔をしないでだろうと考え彼は苦笑する。十年ぶりに会う相手である。嘗てと同じとは限らない。

階段の先にあるのは天井の低い部屋だつた。貯蔵庫として使われていたらしく、雑然と棚が並んでいる。そこにぼつりと明かりが灯つていた。滲むように光の輪を広げている。白々とした光源、硝子筒を手に佇む人影は、彼があらわれても微動だにしなかつたが、僅かに目を細めたようだつた。万もまた、まじまじと相手を見つめる。半ば暗がりに沈む姿は、記憶にあるものとさほど変わらない。気品すら感じさせる端正な面差が、見事なまでに感情を削いで彼に向けられていた。

「久しいな」

「……あなたは変わらないな……兄貴」



ぼつりと、万は言う。相手は僅かに目を見開く。万自身も、己の言葉に驚いていた。とうの昔に兄と思うことをやめていた。やめようとしていた、はずだった。止める間もなく零れ落ちた言葉が、ぎこちない余韻を残す。戸惑い、万は顔を背けた。内心の動揺を悟られたくはなかった。

かけられた声は淡々としていた。

「この場に来たということは、覚悟を決めているのだな。再び我らとともに生きると」

「何度も引き返そうと思ったよ」

「私は何度も逃げる機会をやった。だが、お前は逃げはしなかった」  
相手が言うとおりに、彼には途中で引き返すことはできた。命令に従い幾つもの街を経由した。その度に次に赴く場所を伝えられ、漸く沙羅久領内にあるこの街へと辿り着いたのだ。まるで、彼の決心を試すかのような遣り方である。

「ここへ来たのは、あんたらのためじゃない」

「知っている。椎良様のお名前を出せば、お前は必ず来るとわかっていた。だが、どうであろうと我らには同じことだ」

逃げはしなかった、と。万は思わず相手をねめつけた。目の前の兄、清夜ならば知っている。万が抗えぬ言葉を、彼に拒絶させぬために清夜は最も有効な手段を講じたのだ。

万の視線に動じることもなく、だが清夜は僅かに躊躇う様子を見せた。

「飛雪」

飛雪、と。それは万が十年前に捨て去った名だった。万の体が強張る。その名を呼ばれたせいではなく、そこに籠る響き故だった。

その声音。幼い頃には、ただ己の名を呼ぶその声が聞きたいがために、汚れ一つない雪原を駆けた。兄が己の小さな足跡辿って追って来るだろうことを、知っていた。息苦しささえ覚えて、万は拳を握り締める。一年の大半を雪に閉ざされる故郷は、彼の記憶に白く、深く、ただ遠い。

「その名を、呼ぶな」

ふと、沈黙が落ちた。頼りなく揺れる硝子筒の炎に、立ち尽くす二人の影が滲む。

「では、何と呼べばよい」

「今は万だ」

「ならば万、お前にある仕事を頼みたい」

感情を削いだ事務的な口調に、万は改めて相手を見やった。そしてはじめて、十年という歳月の重みに気付いた。変わらぬと思った相手の、白皙の面に刻まれた険しさである。なお青白く見えるのは、醸し出す翳りによるものかもしれない。万を見据える瞳は硬質に鋭い。

「どのような仕事だ」

「椎良様の護衛だ。あのお方は今命を狙われている」

万は訝しく眉を顰める。

椎良様のお命に関わる大事あり　その言葉故にこの地まで辿り着いた彼である。だが、告げられた内容は彼にとって意外なものだった。

「椎良様の命を奪おうとしていた者の言葉とは思えぬな。いつから方針を変えた？　いや、変えたのは信念か？」

皮肉に問う。

「十年前とは状況が変わった。あの頃椎良様の存在は我らにとって障害だったが、今は生きていていただく方が良い」

「……………」

「どうした？　お前にとっては喜ばしいことではないのか？」

「誰があのお方の命を狙っているかは知らんが、俺がやる必要はなかるう。あちこちうつっているうちに腕も鈍った。もっと優秀な奴がいるだろう」

「我らではだめなのだ。顔を知られている」

「……………どういふことだ？」

ひそりと問う。

「椎良様のお命を奪おうとしているのは、我らの同胞だ。十年前、椎良様の暗殺が失敗してからは、我らの中でも意見が分かれたのだ。姫の暗殺を再度決行すべきという者と、もうその必要はないという者との対立があった」

「ちらりと万を見やる。」

「お前が出て行った後の話だ。もつとも、さほど時も経ず議論は立ち消えになった。椎良様が跡目を継ぐ可能性が低くなったせいだね。だが、最近そうも言えなくなってきた」

「一体何があった」

「全てを話す前に、お前の決意のほどを聞きたい。我らとともに歩むか？」

万は唇をかみしめた。

「ここまで来たんだ。今更どんな言葉が欲しい」

「苦々しい響きに、相手は僅かに苦笑する。」

「そうだな。お前は、変わらぬな」

「柔らかな声音に、万は目を細めた。だが、その余韻も続く言葉に消える。」

「北限の民ももはや一枚岩ではないということだ。椎良様の暗殺を唱える連中は強硬にそれを実行しようとしている。私は何としてもそれを阻みたい。だが信頼出来る手勢は全て相手に顔を知られている。今のお前ならば、彼らを欺くことが出来るだろう。何としても椎良様のお命をお守りしろ」

「その、椎良様の命を狙う奴らつてえのは、誰だ」

「中心となっているのは、博山公だ」

「あいつか……」

「さもありなん、という万の言葉だった。」

「昔から過激な爺だったが、まだ生きてんのか」

「ああ。最近では持論も益々先鋭化している。対して我らの陣営は博山公の威光を恐れて、ろくに反論もできぬ。暗殺を阻もうものなら報復は目に見えているから、誰も手が出せぬ有様だ」

「参考までに、その陣営つてのは誰がいる」

「由洛公ユラクウあたりが中心だな」

「そこそこ力があるんじゃないか？ あの親父なら博山公にも対抗できるだろ」

「いや、父親ではなく息子の方だ。先代は三年前に亡くなられた。我らの力が削がれたのもそれが大きい」

「……あの大馬鹿息子が中心だつてののか」

「ああ。いかに放蕩息子といえどもあの資金力は貴重だからな。無碍にはできぬ」

万は溜息をつく、思わず天井を仰いだ。

「そりゃあ……さぞかしやりにくいだろうな」

清夜は薄く笑ったようだった。

「奴を中心に動いているせいで、厄介事が山積みだ。そして我らの陣営は博山公に対してはあまりに薄弱になっている」

「で、俺に博山公が放つ暗殺者を阻めつてか？ そんなことが知れたら結局は厄介なことになるだろうが」

「ああ。だからお前は北限の民としてではなく、梓魏の領民として椎良様の護衛にあたることになる。我らの協力者の伝手で身辺警護の任に就くことが叶う筈だ」

「そんなにうまくいくかね」

「いくだろうな。今のお前を見て、あの飛雪とわかる者はいないだろう。見事なまでに北限の民の特徴が消えている」

万は顔を顰めると腕を組んだ。自覚していることとはいえ、面と向かって言われると複雑な心境に陥る。

北限の民は雪の一族とも言われる。抜けるように白い肌と、帝国民に比して色素の薄い瞳と髪の色である。確かに今の万の姿を見て、北限の民とわかる者はいないだろう。長年陽に晒された肌は嘗ての白さを失い、薄茶の髪も黒味を帯びた赤銅色になった。榛の瞳ばかりは変わらぬとはいえ、面差そのものも梓魏を去った十八の頃から様変わりしている。おそらく嘗ての彼を知る人物と対面しても

そうとはわからぬだろう。

だが、例外もある。例えば目の前の血を分けた兄がそうである。そしてもう一人 万は苦く溜息をついた。

「一つ、重大なことを忘れていないか？」

「なんだ」

「椎良様だ。あの方の目まで誤魔化せるとは思えん。十年前のことを思えば、命をお守りする前に俺が殺される」

「案ずる必要はない。そうと名乗らぬ限り、椎良様はお前があの飛雪だとは分からぬ筈だ」

「……何故だ？」

ひやりと背筋を這う予感に、万は知らず問うていた。

「椎良様は目がお見えにはならない」

鋭い呼気が響く。凝然と立ち尽くす万に、清夜は静かに告げた。

「十年前の暗殺の際、椎良様のお命は助かった。だが、意識の戻らされた椎良様の瞳は、完全に視力を失っていた。そのせいで椎良様が梓魏惣領家を継ぐ話も見直された。なればこそ暗殺の一件も立ち消えになったのだ」

命を奪えずとも、目的を達したかに見えたのだと 冷徹に響く。

万は言葉もない。失明という、はじめて知った事実、心臓がどくりと波打った。

「今惣領家は軍の補強を行っている。お前はこれから梓魏領内に入り、それに志願してもらう。あとの手筈は我らで整える。お前はそれを待てばよい。くれぐれも北限の民であることを……私の弟であることを悟られるなよ。今は我らの同胞も信用はならぬ」

無言の万に、清夜は歩み寄ると、囁くように言った。

「椎良様をお守り出来るのはお前だけだ。引き受けてくれるか？」

万は目を眇める。内心の衝撃が、いまだ鼓動を揺らしていたが、それを抑え込む。十年間、後悔は嫌という程してきた。そしてその都度、悔いることで何ら己が救われるわけではないことを痛感してきたのだ。

「ああ。そのかわり、今梓魏で何が起こっているのか余さず教えてくれ。北限の民が何をしようとしているのか……あんたが何を考えられているのか、全てだ」

万は低く言った。清夜は僅かに笑むと、頷いた。

「親父、ここに積んである籠でいいのか？」

須樹すきの声に、工房から父親が顔を覗かせた。工房に籠っていた父親の黒い作業衣は、金笹きんざさの繊維がこびりついて斑に見える。

「それだ。それから横にある外套三着も忘れずにな」

「ああ。わかった」

須樹は答えると、積み重ねられた籠と外套を抱えた。しっかりとした作りの籠は五つ程もある。持てばかなりの重さだった。今年刈り取られた金笹の、涼やかな香りがふわりと広がる。

「悪いな。私が持って行けばいいんだが、幾つかの注文が溜まっているんだ」

「いいよ。今日は若衆も休みだし、冶都やとの家人が馬車に乗せてくれるから」

「頼んだぞ」

「時間があったら伯父さんの家にも寄ってみるよ。多分、夕刻くらいには帰れると思う。母さんにも伝えておいて」

「ああ、気をつけてな」

父子の会話は幾分声を潜めたものだった。朝まだきである。窓から見える街路には、まだ暁の紅は射さない。大方の人はいまだ眠りの中にある頃合いである。

須樹は嵩張る荷物を抱え、外へと踏み出した。一日の快晴を窺わせる空は高く、大気は張り詰めて冷たい。須樹が向かった先は、外壁の門へと通じる大通りだった。遠目に、既に彼を待っているらしい人影を見つけ、須樹は足を速める。人影が大きく手を振る。冶都である。

「すまん、遅れたか？」

「いや、まだ約束の刻限にもなっていないさ。こつちこそこんなに朝早くすまん」

言いながら治都は寒そうに身を竦めた。治都の後ろには出発の準備を整えた馬車が暗闇に紛れるようにしてあつた。

「いや、助かったよ。馬車に乗せてもらえるだけでもありがたいのに、お前までわざわざ来なくてもよかつたのに」

「そうはいくか。請け負つたことには責任を持つ、それが家訓だからな。お前が無事多加羅を出発するのを見届けにゃいかんのさ」

須樹は思わず苦笑した。如何にも治都らしい律儀な物言いである。昨日、父親の商品を取引先に持つて行くのだと言つた須樹に、それならば丁度緩衝地帯に行く馬車があるから乗つて行けばいいと申し出たのは治都である。目指す緩衝地帯の街までは歩けばかなりの時間がかかる。重い商品を抱えての道行きは楽ではない。須樹にとつてはありがたい話だつた。

「坊ちゃん、あとは任してくんな。このお人はちゃんと送り届けるよ」

御者台に座る男が朗らかに言う。

須樹は商家の荷物を満載した馬車の片隅に父親の作品を載せると、男の横に腰をおろした。

「ああ、そうだ。言い忘れるところだつた」

「何だ？」

「最近、緩衝地帯も物騒らしい。あまりやばいところには近付くなよ」

須樹は思わず治都の顔を見つめた。答えたのは須樹の隣に座る男だつた。

「安心してください。頼まれたつて近付きやしませんよ」

その言葉を合図のように、馬車が動き出す。治都に手を振り、須樹は前を向いた。曙光の兆しが遠い空に滲む。流れ行く街並みは影絵に似て、静かに蹲っている。

多加羅の門をくぐり抜け、街が背後に遠ざかって漸く、須樹は男に問うた。

「緩衝地帯が物騒と治都が言っていました、何か起こっているんですか？」

「ん？ ああ、さっきの話ですね。いやさ、今日向かう街ってのは商人にとつちや競争の場所だ。少なからず争いがあるってことです。縄張りを守ってりや喧嘩になることもないんですがね、たまには向こう見ずな馬鹿もいるってことですよ」

「もしかして、若衆の噂のことを御存知ですか？」

男は僅かに沈黙し、気まずげに苦笑した。

「なんだ、知ってましたんですか。勿論、俺らは若衆が噂のようなことをしてるとは信じちゃいませんがね」

「治都は知らないんですね？」

「坊ちゃんが噂を聞いたら、それこそ猪みたいに緩衝地帯にすつ飛んで行って狼藉者を捜すくらいのことをしかねませんからね」

「だから物騒だなんて嘘を？」

男は虚を突かれたように瞬きし大笑した。

「いや、参ったね。若衆の副頭ってのはすごいもんだ。仰る通りで坊ちゃんが緩衝地帯に行つて変な噂を耳にしないように、家中皆で口裏合わせをしてるんです。奥方までもが緩衝地帯に行くなと釘をさしてるわけで。今下手に緩衝地帯で若衆だと名乗れば、どんな目に合うかわかりませんぜ」

「治都は大事にされているんですね」

「俺らは坊ちゃんが赤ん坊の頃から知ってるんです。どうしても痛い目には合ってもらいたくないんで、つい、ね。今じゃあ立派な若衆だが、どうしても小さい頃のやんちゃ姿にだぶっちまうんです」

「そうですか」

須樹は思わず笑む。治都の大らかで真直ぐな気質が、皆に好かれているのだらう。だが、治都もまた緩衝地帯で起こっている出来事とは無縁ではられない。そう思い、須樹は小さく溜息をついた。



緩衝地帯で一体何が起きているのか。若衆頭も交えての話し合いは明日と決まっていた。

馬車が目指す緩衝地帯の街に着いたのは十の刻を半ば過ぎた頃合いだった。

「俺は商品を引き渡したら、だいたい十五の刻には街を出ますんで、その頃にこの場所に来なさったら帰りも多加羅までお送りしますよ」男は朗らかに言うと、広場の雑踏に須樹を残して去って行った。

その街は父親の使いで何度か訪れたことがある。須樹が荷物を抱えて目指したのは小さな飲食店が犇めく界隈である。さほど広くもない道には人波が絶えず、活気に満ちている。記憶を辿りながら道を進めば、行く手に目指す店が見えてきた。小さいながらも清潔な酒場である。素朴な料理と店主拘りの酒を出すその店は、街の中でも評判である。

昼にも関わらず、すでに店には客が入っていた。卓の幾つかが埋まっている。店主はすぐに須樹に気付いたようだった。人の良さそうな赤ら顔に満面の笑みを浮かべる。

「こりゃあ、前見た時よりも数段遅しくなったね」

「お久しぶりです」

「何と何と、わざわざ持ってきてくれたのかい？　ありがたいね」

店主は籠と外套を受け取ると相好を崩した。

「やはりこの手触りだよ。これは君の親父さんじゃないと出せないねえ」

「ありがとうございます」

須樹は笑んだ。父親が決して手を抜くことのない職人であることを知っている須樹にとっては、何よりも嬉しい言葉だった。

「はいよ、料金だ。ついでに一杯飲んで行きな」

「いえ……」

「いいからいいから。君ももう子供じゃあないんだ。酒の一杯くらいならいいだろう。私の奢りだよ」

なおも断ろうとした須樹だったが、ふと言葉を呑み込んだ。背後で一際喧しく喋る男の声が耳に飛び込んできたのだ。

「とにかくよお、ひどいのなんのって」

酒に酔っているのか、呂律が回っていない。甲高い声は店中に響いていた。

「まだ小さな子供をだぜ？ 殴りつけたってんだからさあ。拳句の果てに止めに入った村人を短剣で切りつけやがって……」

「そりゃあ、またひどいもんだな」

答えたのは離れた席の男である。思わず須樹は振り向いた。

「だろう？ こんなことが許されていいのかってんだよ！」

声高に叫んだ男は、入口に近い卓に座っていた。薄暗い店の中で、頬のこけた鋭い顔立ちが齧齒類を思わせた。憤懣やるかたないといった風情で酒瓶を抱え込んでいる。

「多加羅の若衆め！」

呼応して毒づく声音は店の奥からである。男は齒をむき出すとさらに声を張り上げた。

「好き放題しても許されると思ってやがるのさ。村人は幸い命は助かったが、一時は危なかったって話だ。他にもあるんだよ。その隣の村で三日前に起こったことなんだがね……」

気付けば店中の者が男の話に耳を傾けていた。酒のせいもあるのか、集う面々の表情は険しい。

「すまんね。悪い時に来てしまったみたいだね。今日はどうも悪い客が入ってしまったようだ」

須樹の強張った顔に気付いたのか、ひそりと店主が囁いた。店主は須樹が若衆であることは知らない。店に漂う険悪な雰囲気のことを言っているのだろう。

「いえ……」

須樹は答えると店主に向き直った。

「やはり一杯頂けますか？ 父からこの店の酒は絶品だと聞いています」

「そうこなくちゃ！ 酒の味は保証するよ」

須樹はさりげなく手近な椅子に腰をおろすと、なおも続く男の粘りつくような声音に耳を澄ませた。

(どうやら、当たりのようだな)

内心に呟く。

狙いは、おそらく多加羅惣領家です

灰の言葉が脳裏に浮かんでいた。

### 53 (後書き)

こちらへんから、物語は様々な人物の視点で描かれていくことになりそうです。灰達、多加羅若衆を中心としています。万の視点も入ってきます。物語の流れも入り組んできます。謎解きのつもりで作った話ではないですが、真相を容易くは見通せないような展開にしようと思図はしていました。

少しでも楽しんでいただければ幸いです。

「この前は中途半端になってしまったが、今回のことをどんな風に考えているんだ？」

須樹<sup>すぎ</sup>が灰<sup>かい</sup>に尋ねたのは、昨日のことだった。緩衝地帯<sup>かんしょうちたい</sup>で起こっている一連の出来事にどう対処するか、それを話し合うための会議の日程を伝えた灰<sup>かい</sup>に対しての問いである。広場で繰り広げられる若者達の鍛練<sup>だんれん</sup>を眺めながらの会話だった。

「仁識<sup>にしき</sup>もこの一件は見た目ほど単純なことではないかもしれないと言っていた」

「それならば、確かにそうかもしれませんね」

「だが、仁識もそれ以上のことはわからないようだったぞ。お前は何か考えているんだろう？」

「考え、というほどのことではないんですが……」

灰は僅かに苦笑する。

「ただ、違和感があるんです」

「違和感？」

「はい。今回の出来事は一見すると正体のわからない若者達が狼藉を働き、それが多加羅<sup>たから</sup>若衆の仕業であると考えられている、ただそれだけのことに思えます」

「実際その通りだと思うが？」

「ですが、狼藉を働いた若者達は誰一人として若衆を名乗っていません。そもそも若衆の仕業であるという噂が広まること自体が不自然だと思いませんか？」

「噂っていうのはそういうものじゃないのか？ 誰かがふとした拍子に言ったことがいつの間にか広まるのはよくあることだ」

「そうかもしれません。ですが、若者達の狼藉と若衆の噂、この二つが全く別のものだったとしたらどうでしょう。俺はこの二つがもととは別個の事象だったのではないかと考えています」

言いながら須樹の方を振り返った灰の顔に西日が射していた。夕暮れの頃合いだった。

「多加羅若衆の狼藉という、それ自体がそもそもまやかしなのです。確かに緩衝地帯では若者達の狼藉が頻発していました。ですが、実際に被害にあったどの村でも、村人達は誰も彼ら自身で若衆と名乗ったとは言っていない。それは噂が広まった後でも同じです。須樹さんの報告の中に、村人が多加羅若衆なのか問いただした時にも若者達は答えなかったというものがありませんが、一貫して若者達は多加羅若衆だとは口にしていません。そうであれば、多加羅若衆の仕業であると噂が広まること自体がおかしい」

淀みのない口調は、灰自身がこの一件を少なからず吟味していたことを窺わせる。迷いのないものだった。

「では、何故多加羅若衆の仕業であると考えられているのか。もしかすると村で実際に起こった狼藉ではなく、街で何時の間にか流布していた噂のせいです。そう思われているのかもしれませんが」

「どうということだ……？」

「そもそも村での狼藉は悪質ではあっても、人の命に関わるほどのものではありません。若者達が名乗らなかったせいもあるでしょうが、収穫期を間近に控えた閉鎖的な村から近隣の街に噂が届くのもさほど素早いものではなかったでしょう。一方街で広まった噂は、内容だけを見れば盗賊まがいの命にも関わる出来事です。ですがこの噂もさほど伝播しなかった。なぜなら、街では実際に若者の狼藉は起こらなかつたからです。どれ程に人の関心をひく噂であれ、明らかに現実味がなければさほど広まらないものです。村での実際の出来事であれ、街での噂であれ、それぞれ一つであれば対処もさほど難しいことはありません。おそらく時が経てば立ち消えになるだろうことだったのでしよう」

ですが、と続ける声音は僅かに低い。

「この別個の二つが結び付けばどうでしょうか。そもそも別であったはずの二つ、狼藉と噂が同一のものだと人が信じるのはあまりに

容易いように思えます。それまでの怒りや鬱憤が溜まっているだけに、急速に若衆の狼藉であると広まったのではないでしょうか」

漸く須樹にも灰の言わんとすることが理解できた。自然と顔が強張っていた。

「では、全く別の二つが偶然に結びついて今回のような状況になったと思っっているのか？」

「いえ、偶然に結びついたと考えるにはあまりにも状況は悪くなり過ぎています」

「つまり、恣意的に作られた状況であると？ 意図的に狼藉と噂が結び付けられた、ということか？」

「はい」

静かな確信を込めて灰は頷く。

「収穫を終えた村人達はおそらく農作物を売るために街を訪れるでしょう。そこではじめて街に蔓延している多加羅若衆の噂を知る。

一方街衆はそれまで何の根拠もなく広まっていた噂に酷似した出来事が、実際に村で起こっていたのだと、その時点で知ることになるでしょう。村人達の怒りは明確に方向性が定まり、街衆にとっても噂は広めるだけの価値がある真実に変わる。言ってみれば、時間をかけてゆつくりと堆積した土砂が、大水によって一気に流れ出すようなものです。気付いて止めようと思っても止められるものではない……」

「なるほど。そして多加羅へと伝わる頃には、最早その二つを分かつことなどできず、そして手を打とうにも遅過ぎる状態になっている、というわけか」

「はい。若衆が対するのは、狼藉を働く正体が分からぬ若者達でも事実無根の噂でもない、多加羅若衆が狼藉を実際に働いたのだという、人々が信じる真実そのものになってしまいます」

何故、多加羅若衆が悪し様に罵られるまで事態が悪化したのか、何故そうなる前に把握することができなかったのか、それも灰の言葉の通りであれば明解である。唐突にも思える若衆の悪評は、し

かし時をかけてゆつくりと、人々に浸透した不信感や怒り、そして恐れが根底にあるのだ。そして一方では、噂がまるで地中を這う根のように張り巡らされ、人々は気付かぬうちにそれに絡め取られていたのだろう。二つが結び付いた時に溢れ出したもの、それはまさに濁流である。真偽の程など関係なく、人の心を一気に呑み込む。今更に若衆の潔白を唱えたところで、人々がそれを信じるとは思えなかった。

全てが謀られていたのであれば、多加羅に一連の出来事が伝わる時期や、容易に動けぬ若衆の立場さえも計算の内だったのか。須樹はそう思い、慄然とする。思わず見やつた灰の顔もまた厳しい。

尋常ではない。

だが、何のために 現実に起こった狼藉と街に広まった偽りの噂、この二つを同時に起こし、時間をかけて人々に浸透させた者達がいるのだと灰は言う。そして今の状況がまさにその何者かによって作り出されたもの、目的であり結果 あるいはさらなる謀への始まりであるならば、その狙いは何なのか。

「多加羅若衆の名を貶めるためとしか思えぬな。うまい手だ」

須樹は苦々しく言った。そして全てが計算のうえに行われたのであれば、悪辣なまでに巧妙であり、驚くほどに大胆な所業である。灰もまた頷く。

「どれほどの噂が立とうとも、今多加羅若衆が実際に狼藉を行っている若者達を捕えれば、潔白を証明することができるかもしれない。ですが、おそらくすでにその段階は過ぎています。狼藉を働く若者を捜したところで、彼らはとくに姿を消しているのだと思います」

「なぜそう思うんだ？」

「狼藉が起こった当初であれば村人達は無防備だったでしょう。ですが今では皆が警戒しています。警吏けいりが目を光らせている中で、今なお狼藉を働く者が捕まらないのはあまりに不自然です。すでに狼藉自体は起こっていないのだと思います。それにも関わらず噂だけ



はいまだに広がっている。それも益々ひどいものとなっています」  
取り返しがつかぬ程に

「杞憂であれば、と思います。ですが、偶然や一過性の出来事と考  
えるには、奇異な点が多すぎます」

偶然とも思える一連の出来事が、あまりにも明確に一つの方向に  
流れているとしか思えぬのだ。

「それが真実だとしても、どうすればいいんだ。一体誰が何のため  
にこんなことを仕組んだ？ 何もかも手遅れなのか？」

「打つ手はあります」

きつぱりと灰が答えた。あまりにも迷いの無い声音に、須樹は思  
わず灰の顔をまじまじと見つめた。

「若者達を追つても見つけ出すことはできないでしょう。ですが、  
街では今でも村で若衆の横暴があったという噂が広がっています。

噂を広めている者がいまだにいる、ということですよ。その者を捕え  
れば、おのずと今回の出来事の背景がわかるはずですよ」

「なるほど……」

須樹は半ば感心し、半ば呆れながら呟いていた。

俺達が回り道をして散々迷った拳句に漸く辿り着く結論、下  
手するとどうやっても辿り着けない結論に、灰は一足飛びに辿り着  
くことがある。

それは須樹自身が設啓せつけいに言った言葉である。そもそも、灰の視点  
は余人とは全く違うのかもしれない。同じものを見ていながら、灰の  
瞳を通じた世界は己のそれとはかけ離れたものなのかもしれない。  
そのように須樹が思うのはこの時が初めてではなかった。

「頭かしらにはその考えは伝えたのか？」

「いえ、ここまでのことは言っていないです。須樹さん達が調べてき  
たその結果を伝えただけです」

「そうか」

半ば顔を伏せていた灰がふと小さく息をついた。

「ですが、急いだ方がいいかもしれない。もしも俺が考えている通

りだとすると……」

呟くような声音に、張り詰めた響きがあった。須樹は思わず灰の横顔を見る。

「多加羅若衆の名を貶めることであれば、若衆頭である透軌とつみ様の名を貶めることに繋がる」

風が吹き過ぎる。まるで焦燥を煽るようにゆらりと灰の髪が揺れた。

「今回の一件、狙いはおそらく多加羅惣領家です」

須樹ははつと我に返った。一瞬物思いに捕われていた。喧噪がどつと耳元に響く。

手もとの杯はほとんど空になっていた。店主が自慢するだけあって円やかでありながら深みのある酒である。口当りはいいが、一杯飲んだだけでも僅かに酔いを感じる。昼日中なら口にするには些か強い酒である。

「亭主！ 勘定だ！」

叫んだのは入口に近い席、散々に多加羅若衆の狼藉について吹聴していた男だった。

「はいよ！」

威勢良く店主が答える。須樹は僅かに残っていた酒を一気に干すと、杯を卓に置いた。

「御馳走様でした。とても美味しかったです」

「そうだろうか？ もう一杯いくかい？」

「いただきますんですが、実はこの後親戚の家に行くんですよ。あまり酒の匂いをさせていては小言をくらってしまいます」

「ああ、そうかい。親父さんにもよろしく伝えておくれよ」

「はい。ありがとうございます」

にこりと笑って須樹は一礼すると、そのままさりげなく店の外へ出た。眩しい日差しに手を翳し、行き交う人の間を縫って酒場の正面の路地へと向かう。家壁に背を預け、酒場を見つめる。暫く待つ

と勘定を済ませたらしい男が店から出てきた。如何にも酔いのまわった足取りで歩く男の後を追って、須樹はゆっくりと道に踏み出した。男の姿を見失わぬよう目を凝らす。

やがて酒場から十分に離れると、途端に男の歩調が速まった。機敏な足取りで、人波を器用に縫って行く。須樹もまた足を速めた。酒場では酒瓶一つ抱え込んで泥酔している様だったが、どうやらそれは見せかけだったらしい。酔いなど微塵も感じさせぬ後ろ姿である。

やがて男が脇道に曲がる。それまでの繁華な道とは違い、細く人影も少ない。須樹は先に行く男から十分な距離を保ち、歩を進めた。下手をすれば追っていることに気付かれる危険はあったが、ここで男を見逃すことはできなかった。灰の言っていたことが正しければ、目の前の男こそが、多加羅若衆を貶め、何事かを画策している者に違いないのだ。

土が露出した地面は湿り気を帯び、足音を吸収する。身ごなし軽く歩く男に続きながら、須樹は注意深く己が進んで来た道筋を頭に入れていた。何度か訪れたことのある街とはいえ、このように奥まで入り込んだことはない。道は分岐し迷路のような様である。迷えば大通りに戻るのにも苦労しそうだった。

いつの間にか周囲には須樹と男以外の人影が消えていた。家々の壁が張り出し道は見通しが悪いが、須樹にはむしろそれがありがたかった。男はまだ須樹に気付いた様子はない。やがて男が立ち止まった。須樹は咄嗟に壁の窪みに身を寄せる。辺りを窺うような間の後、抑えた声が聞こえた。

「俺だ」

程なくして聞こえたのは扉が開く音だった。

扉が閉ざされる音が響いてもなお、須樹は壁に身を潜めていた。辺りの静寂に男の気配がないことを確認してから、注意深く歩み出す。男が入って行ったのは何の変哲もない小さな家だった。扉は裏口として使われているものだろう。窓はなかった。

暫くその場に佇み、辺りの光景を頭に入れてから須樹は踵を返した。彼一人では如何ともし難い。緩衝地帯で起こっていることを解決するためには、ここで下手を打つわけにはいかなかった。男にはどうやら仲間がいる。彼らを捕えるにせよ、十分に態勢を整える必要があつた。

元来た道を辿り、角を曲がろうとした須樹はぎくりと足を止めた。背後に人の気配があつた。咄嗟に振り返ろうとした彼の首筋にひやりとした感触が走る。

「おっと、動くなよ」

くぐもつた声だつた。須樹は思わず唇をかみしめる。気が急いでいたにせよ、ここまで接近されるまで気配に気付かなかつたとは己の迂闊さに腹が立つ。答えぬ彼に、背後の男はなおも言った。

「お前、何者だ。答えなければ喉を掻き切る」

首筋に添えられた刃の銀が、僅かな陽光を弾いて鮮やかに揺れていた。

どこかで刻むように鋭く鳥の鳴く声が聞こえた。須樹は深く息をしながら、首にあてがわれた冷たい感触に意識を集中する。目を睜めて見やるそれはおそらく短剣、それも人を殺傷するためのものというよりも、細かな手作業を用途とする部類の大きさだ。

「お前は何者だ」

再度かけられた声は密やかだつた。まるで少しでも周囲に響くのを恐れるかのようなのである。まだ年若さを感じさせるそれに、後をつけた男とは別人だと須樹は考える。あの男の仲間か　だが、扉が開く音はしなかつた。家の中から出て来たのであれば音でわかつた筈だ。背後の相手が男の仲間であるとしても、家の中にいるであろう者達はまだ気付いていないのではないか。

後をつけた男の身軽で素早い動きを須樹は思い出す。隙がなかった。容易ならざる相手であるうことは察しがついていた。気付かれる前に何としても逃れなければならぬ。

「力づくで聞き出すか？」

動揺を悟られぬよう、腹に力を込めて須樹は言った。言葉は、静寂にまるで嘲弄するような響きさえ残した。

「さつさと答えるよ。これが目に入らないってのか」

「そんな鈍らで首を掻き切れると思うのか？ 手が震えているぞ」

「馬鹿にしてんのかよ。後悔することになるぞ」

やはり若い、と須樹は思う。挑発に相手の声音が上擦っている。

おそらく先程後をつけた男であれば、やすやすと挑発に乗るようなことはしないだろう。

「正面から向き合わないのは怖いからか？ 意気地のないことだな」

「黙れ」

またも鋭い鳥の声が響いた。縄張りを侵された時に発する警戒の囀りに似ている。

「こちらを向け」

須樹はゆっくりと相手に向き直る。相手は須樹よりも身長が低い。思った通り顔立ちも若かった。二十歳にはなっていないだろう。言われた通りに動く須樹に、相手はにやりと笑んだ。

「ふん、意気地がないのはどっちだよ。減らず口をたたかずに命乞いの一つでも……」

須樹は最後まで言わせなかった。左手で、己の首筋に短剣をあてがう相手の手を鋭く弾く。同時に右足を大きく踏み出して、その勢いのままに相手の鳩尾に己の肘を叩きこんだ。ぐう、と奇妙にくぐもった悲鳴をあげて相手が背後に倒れ込む。それを見やり須樹は踵を返した。

角を曲がり大通りに向かって走り出そうとした須樹は、蹈鞴を踏む。前方から走り来る数人の姿があった。何れも迷いのない足取りで一筋の道の向こうから駆けて来る。男が三人だ。

須樹の姿に男達が足を止める。対峙は一瞬だった。

「そいつ！ 捕まえて！」

高い声が周囲に響いた。先程倒した相手かと思い、即座に否、と考える。声は女性のものだ。どこから？

(上からだ！)

男達の形相が変わる。

須樹は迫る男達に背を向けると、駆け出した。再び角を曲がり、いまだに地面に倒れている若者の上を飛び越える。後をつけた男が姿を消した扉は閉ざされたまま、その前を駆け抜けようとした須樹の上に影が差した。咄嗟に上を振り仰ぎ、ぎよつとして須樹は飛び退った。そこに、鳥のように人が舞いおりた。

(な……!?)

考える間もなく　人が鳥のように飛ぶわけもなし、扉と向かい合う家の、幾分高い位置にある窓から飛びおりただけなのだ。須樹が理解したのは後のことである　目の前の相手が繰り出した拳を避ける。なおも殴りかかってくる相手は腕の振りが大きい。隙の多い動きだった。顔を狙った拳を身を屈めて掻い潜り、相手の背後に回ると振り向きざま背中に戻し蹴りを放つ。容赦のないそれにつんのめった相手が、迫りつつあった三人の男にぶつかった。

静寂が破れ、悲鳴と怒号が響いた。

と、その時、纏れ合うようにして倒れ込んだ男達の向こうで扉が開いた。それに須樹は身を強張らせる。扉の向こうにいたのは、須樹が後をつけた瘦せた男だった。男は目の前の惨状に目を見開くと、立ち尽くす須樹の方を見やった。どこか芝居めかして肩を竦め、男が言った。

「おいおい、若いの、喧嘩はよそでやってくれ」

一瞬言葉に詰まり、内心の混乱を押し隠して須樹はぎこちなく笑んだ。

「ああ……」

何とか言葉を絞り出す。思考が麻痺していた。だが、はつきりしていることは三つだ。まず、須樹を襲った者達は、酒場から後をつけた男の仲間ではない。次に、前者であれ後者であれ、どちらも今の須樹にとっては望ましくならぬ相手であることは間違いない。そして目下のところ一番の問題は、大通りに出る道が彼らの向こうにあ

るということだった。

(どうする……)

須樹は拳を握り締める。道に倒れ込んでいた男達が立ち上がった。だが奇妙なことに男達は須樹に向かってこなかった。須樹と扉を開けた男をちらちらと交互に見やっっている。まるでどちらに手を出すべきか迷うように

張りつめた一瞬の後、先に反応したのは須樹ではなく、扉を押さえる男だった。笑みすら浮かべていた顔が一変する。鋭く舌打ちをすると音をたてて扉を閉めた。

「扉を破るんだよ！ 捕まえな！」

鋭い声が周囲に響いた。またも上からだ。だが、先程の声とは違う。

男達が閉められたばかりの扉にかじりつく。扉の向こうで何事か叫ぶ声が聞こえる。鍵をかけたのか、開かぬ扉に大柄な一人が体ごとぶつかった。木の軋む音が響いた。

須樹はじわりと背後に下がった。その目の前にまたも人がおりた。女だ。背が高い。短く刈り上げた髪が、光のせいか紅に見える。続いてさらに数人が道におりた。今まさに破られようとしている扉の、その向かいの家の窓からだった。

さらに一步、後ずさった須樹に、紅の髪の人影が振り返る。くつきりと吊りあがった眦だった。炯として鋭い瞳が須樹を見据えた。朱唇が薄く開く。

「あいつもだ」

女の声が妙に甘やかに響く。次の瞬間、呪縛から解き放たれたように、須樹は身を翻すと一散に駆け出していた。

「逃がすんじゃないよ！」

須樹の背を追うように声が響く。

真直ぐに伸びる道を、須樹は全速力で駆けた。この先がどこに続くのかは分からない。だが元来た道に戻るのには論外だった。何者かは分からぬ。だが、人に短剣を突き付け、問答無用で襲いかかる輩

が尋常でないことは明らかだ。酒場で多加羅若衆の噂を吹聴していたあの男の仲間ではない、あるいは敵対している者達だとしても、そのことが何らの保証にもならないのはわかっていた。

今下手に緩衝地帯で若衆だと名乗れば、どんな目に合うかわからない。朝に聞いた言葉を思い出し、さらに足を速める。

背後から迫る足音が、高く、低く、反響していた。



灰はふと顔を上げた。何か聞こえた気がしたのだ。すぐに気のせいでないことに気付く。雑踏の向こうに、大きく手を振る稟の姿があった。

「兄様！」

笑顔で駆け寄って来た稟は、小学院の荷物を腕に抱えている。

「今から塔に帰るの？」

「いや、慈恵院に行くんだ」

「じゃあ、一緒に行ってもいい？ 静星に会いたい」

灰は逡巡した。幾度か灰について慈恵院を訪れたことのある稟は、静星と親しくなっていた。数日前に熱を出しそのまま寝込んでいる静星の容体は、危険とまではいえなくとも稟に見せるには躊躇いを覚える。しかし灰は頷いた。稟は嬉し気に微笑むと灰に身を寄せるようにして歩き出した。

「小学院ではどんなことを習っているんだ？」

「今は東方遠征について習っているの」

稟は顰めつらしい顔になる。

「とても悲惨でとても苦しい戦争だったって、先生が言ってた」

「そうか」

「まだ傷跡が深いから、みだりに口にしちゃいけませんって。でも多加羅の街で戦いは起こらなかつたのよね？」

「そうだけど、多分傷跡っていうのは心の傷跡のことだ」

「心？」

不思議そうに首を傾げる稟に灰は頷く。

「戦場に赴いた人にも、それを見送った家族にも辛い記憶がまだ残っている。命を落とした人も多いだろう。過ぎ去った昔の出来事ではなく、いまだに痛みを感じる事だから皆口にしない」

実際には多加羅から戦場へと赴いた人々のうち、四分の一が命を

落としたと言われている。凄まじい戦の記憶ははまだ人々に受け継がれているのだ。

「どうしてそんなに酷い戦争が起こったの？」

「小学院で習っただろう？」

「うん。東の国境を荒らした東方の民との戦いが発端だったって……」

「そう言われているけど、実際のところはよくわからないんだ」

言いながら灰は、秋連の言葉を思い出していた。あれは何時だったか、多加羅に来て間もない頃だった。東方遠征の目的は領土拡張だとされているが、実際は死に怯えた白沙那の皇帝が、幾度も転生を繰り返すと言われている仙寿の奇跡を得んがために、狂気のうちに遠征を決定した、という話もある。確かそのような内容だった。西の果てに生きる仙寿と呼ばれる人々が真実転生を繰り返しているのか、それは定かではない。だが、戦の真相がそのとおりなのであれば、東方遠征は一人の狂人の愚行によって引き起こされた悲劇以外の何者でもない。諸説あるにせよ、三十数年前の記憶は次第に摩耗するかに見えながら、時としてはつとにするほど生々しい傷跡を晒すのだ。

灰にとっても、東方遠征は歴史書に記された単なる文字の羅列にはなり得ないものだった。彼の祖母が多加羅惣領に捕われたのがまさにその戦いの折だったという。もともと、祖母が東の地、広大な草原地帯に生きる風の民の出自だったということとは、灰にとってどこか遠い、失われた記憶の残滓に過ぎない。祖母は僅かに正気に戻った時にも、決して故郷のことを語ろうとはしなかったという。

「兄様はどうして髪を伸ばさないの？ 風に揺れると光を弾いて綺麗なのに」

唐突な稟の言葉に、灰ははつと我にかえる。

「邪魔だからね。突然どうしたんだ？」

「小学院の友達が、兄様は髪を何故伸ばさないのか気にしてたの。伸ばさないのは変だって言ってた」

貴族は髪を伸ばすのが一般的とされているため、短髪は奇異に映る。灰にもそれはわかっていたが、さりとて伸ばす気にはなれなかった。邪魔だということに加え、やはり多加羅では彼の髪は目立つ街を歩く時は、今でも髪を隠している。灰にとつて見られることは心地良いことではなかった。風の民の特徴である彼の髪色は、いわば祖母から受け継いだ刻印の一つだった。祖母のことに思いを馳せていた灰は、まるでそれを見透かされたような気持ちになる。見透かされたのかもしれない。この少女は時に驚くほど鋭い。

「稟も変だと思つのか？」

「思わない。でも伸ばしたら綺麗だと思う。女の人が髪を編んでるのも素敵だけど、男の人の長い髪も綺麗なもの。秋連様の髪も夜の滝みたいでしょ？」

稟はにこりと笑いながら言う。灰は思わず苦笑した。秋連が背の中ほどまで髪を伸ばしているのは、何も見栄えを気にしてのことではないことを知っていたからだ。多分にもぐさなせいなのだ。野菜が口煩く言つて漸く切るのだが、それも鏡も見ずに缺で適当に切るため、かえつて惨憺たる有様になることが多い。最近では野菜も諦めたのか、あるいは呆れたのか、秋連の髪については何も言わなくなっていた。

とりとめのない話を交わすうちに慈恵院へと辿り着く。灰と稟は建物の奥、静星のいる部屋へと向かった。

開け放した扉から中を見ると、小柄な老人の背中が見えた。慈恵院での医術を一手に引き受ける老師である。身を屈めて横たわる静星の診察をしているらしい老師は、気配に振り返る。小さく頷くと再び少女に向き直った。うつすらと目を開いた静星が灰と稟の姿を認めて微笑んだ。何かを言おうとし、だが僅かに震える唇が言葉を紡ぐことはなかった。か細い息が漏れる。苦しげに眉を顰める。

「喋つてはいかん。ゆっくりと呼吸をしなさい」

老師は低く言つと、捲り上げていた毛布を少女の上に被せた。立ち上がると、灰に言った。

「話がある」

「はい」

灰は頷くと、静星の傍らで話しかける稟を残して老師の後に続いた。

老師は小さな中庭に面した回廊で足を止めた。風が吹き抜けるその場所に人影はなかった。中庭の木をねぐらにしているのだろう、黒鶉が枝にとまり、柔らかに鳴いていた。

「今年の冬は冷える」

ぼつりと老師は言う、灰に向き直った。鑿で荒々しく削り出されたかのような老人の顔は、何時にも増して厳しく見えた。皺の一つ一つに、影が刻まれる。

「静星だが、おそらくこの冬を越すことはできんだろう」

灰は鋭く息を吸う。

「君もそれはわかっているな」

「……はい」

青年の答えに老人は頷く。患者の前では決して見せぬ憂いが、その瞳にあった。小さく息をつく、老師は中空を見つめた。

「今は安定しているが、残された時間は少ない。容体が変わったら泉せんを使いやる。静星の最期の時は傍にいてやりなさい」

「泉は、知っているのですか？」

「薄々察してはいるだろう」

「老師、俺は……」

言いかけて灰は言葉を呑み込んだ。

何を、言おうとした？ 今、何を 俯いた灰に何を思ったのか、老師は静かに言った。

「君が慈恵院に来て、初めて診たのが静星だったな。君はよくやった。病の痛みをやわらげ、身寄りの一つとてない彼女の心の支えになった。静星にとってはかけがえのない時だったろう。彼女も最期は君に傍にいてほしいと思うはずだ」

「……もっと出来ることがあるかもしれませぬ」

低い声に、老人はかぶりを振った。ゆっくりと、それはまるで聞き分けの悪い子供に言い聞かせるかのような響きだった。

「いいや、何も出来ぬ。僕にも、君にも、もう彼女に対して何もしてやれることはない。ただ静かに最期を見守るだけだ」

これまでもそうであったように　最後は呟くように言つと、老師は灰を残してその場を去った。取り残されて灰は佇む。眼差しを泳がせた先で、今また一羽の鶉が枝に舞いおりた。黒と茶、寄り添う一対はつがいだろうか。

二羽のうち一羽がふるりと身を震わせたのを見やり、灰は踵を返す。

静星の部屋の前まで戻った灰は足を止めた。中から小さな歌声が聞こえる。稟の声だった。童謡のように幾度も同じ節を繰り返す旋律は、どこか蠱惑的に聞こえる。小学院で習ったのか、聞いたことのない歌だった。子守唄の類かもしれない。灰は耳を澄ませた。囁くような歌声の、その歌詞は異国のものようだった。何れの時代の如何なる人々の言葉かはわからなかったが、込められた想いは優しいものに違いない。

灰が部屋へと入ると、振り返った稟が笑顔になる。寝台の静星も薄く目を見開くと、指先を動かした。もう手を上げる力もないのだと、それを見て灰は気付く。寝台に腰をおろして少女の手を握ると、静星は僅かに口角を上げて瞳を閉じた。

稟が歌う。それは遠く、憂うような懐かしさがあった。安らぎを希う祈りがあった。

歌を紡ぐ少女の髪がふわりと揺れた。眼差しを上げた灰は、彼と稟を包み込むように座る獣、又さく驅の姿を捉える。大気に溶け込み心地よさ気に横たわる姿は、まるで歌声を聞くためにこの場に来たと言わんばかり　まどろむように目を細めている。

灰は思う。中庭の、あの鶉は冬を生き抜くだろうか。春になれば巢を作り、卵を産むだろうか。やがて孵った雛達は、いつか力強く羽ばたくのだろうか。そして、その頃には静星はこの世にはいない。

春の暁を見ずに命の炎は尽きるだろう。これまで、灰が慈恵院で見送った多くの者がそうであったように。やがて来る最期の時は、遠くはない。

ふと灰は部屋の入口を振り返った。目の端を何かが掠めたように何かに見られているように思ったのだ。だが、矩形に切り取られた先に伸びる回廊は、規則正しく並ぶ柱の影ばかりが濃く、窓から白々と光の筋が差し込んでいただけだった。時の流れすら凍りつくような静寂である。

灰は無意識に胸元を抑え、深く息を吸った。鼓動を包むように固く冷たい結晶がある。空虚に物寂しく、だが息苦しい程に満ち足りている。まるで時の流れから零れ落ちたような、時の狭間に落ち込んだような一瞬だった。

彼は思う。何時か、必ずこの時を思い出す。この脆く儂い一瞬を必ず思い出す時が来るだろう。懐かしいと思うだろうか。得難いと思うだろうか。おそらくは二度と帰れぬこの時を、祈るように思い出すことだろう。それは予感であり、確信だった。

又駆がゆっくりと瞳を閉じた。

幾つの角を曲がったか最早わからなくなっていた。

須樹は立ち止り壁に手をついた。息が上がっている。左右に伸びる路地は細く、分岐して暗がり延々と続いているように思えた。

逃げ始めてから既に半刻程は経っている。それにも関わらずいまだに大通りに出ることが出来ずにいる。追手を避けることに意識を取られて何時しか方向感覚さえ失っていた。大きく迂回して元の方角に戻るうとしたのがかえって悪かったのか。むしる真直ぐに進んだ方が良かったかもしれぬ、そう思い須樹は頭を振った。それだけではあるまい。追って来る者達はたくみに彼を入り組んだ路地に追いついて入っているのだ。

追手は執拗だった。今は一時引き離すことが出来ても、遠からず

再び見つけれられるのはわかっていた。彼らは驚く程機敏だった。そして連携が取れている。何人いるのかはわからないが、まるで蜘蛛の糸に絡め取られた虫になったような気分だった。

鳥が鳴くような声が響く。思いの外近い。須樹は大きく息を吸うと再び駆け出した。今にして思えばあの合図こそが始まりだった。鳥の囀りとはかり思っていたそれが、実は須樹を追う者達同士で何かしらの情報を伝え合う合図であることに、彼は気付いていた。

幾分坂道になっている路地を走り抜けると、そこは四つ辻になっていた。左手からまたも合図の音が聞こえる。咄嗟に右手に踏み出そうとして、須樹は立ち止った。その右手からも、近く鳥を模した声が聞こえてきたのだ。

「いたぞ！」

声に振り返る。背後に迫りくる数人の姿が見えた。

三方を囲まれた。須樹は唇をかみしめると真直ぐに伸びる前方の路地に駆け込んだ。進むほどに道幅が広まる。家壁の圧迫が減じる。大きな道に続いているのか。だが僅かな期待もすぐに潰えた。

須樹は道の先に開けた空間に走り込むと、つんのめるようにして立ち止まった。広場だった。家々が建て込む一角にささやかな憩いの場として造られたのかもしれない。そこは、三方を高い壁に囲まれていた。到底越えることはかなわぬ。

追い詰められたのだ。

須樹は一瞬天を仰ぐ。その青さが目にしみた。大きく息を吸うと、振り向く。追手が数歩先まで迫っていた。

男が木剣を振りかぶっている。その一撃を見極めて、息を止める。立ち竦んだと見たか、相手の動きは大きかった。ぎりぎりまで動かずに、打ちかかって来る木刀を避けた。勢いのまま流れた男の首筋に肘を叩きこむ。

昏倒した男の手から素早く木刀をもぎ取ると、振り向きざまに次の追手の腕を打ちすえた。骨が折れぬよう力は抜いた。それでも相当な痛手だろう。たまらず地面に蹲った相手を一顧だにせず、須樹

は三人目に向かっていた。三人目はまだ少年のように見えた。怯えた顔で後ずさり、不意に闇雲に殴りかかってきた。須樹は咄嗟に木刀を引いた。相手の拳を避け、懐に飛び込んで胸倉を掴むと、まださほど重量のないその体をすくいあげるようにして背中から地面に倒す。衝撃に少年が鋭く呼吸を吐き出す。その音がやけに大きく響いた。

須樹は少年の胸倉を掴んだまま、肩で大きく息をついた。怯えた目で己を見つめる少年から路地へと視線を流す。逆光なのか、人の形に影が集っているように見えた。ふらりと身を起こすと向き直った。

「大したもんだね」

路地を塞ぐようにして立つ人影が言った。穏やかにさえ感じられる声音である。目を眇めて須樹は斜めに後ずさる。影から光へと、露わになった相手はやはりあの紅の髪の女だった。男のように大胆に髪を刈り上げ、身を包むのは真朱の武闘着である。

「あたしらの縄張りで、これだけ逃げおおせるなんてね」

言いながら女は進み出る。引き締まった長身は、猫科の生き物を思わせるしなやかさだった。唇が笑みを象る。

「そろそろ観念しなよ。もう逃げられないのはわかっているだろう？」

「それはどうだろうな」

「試そうなんて思わない方がいいよ。あたしらは武術なんてものは知らない。でも喧嘩の仕方は知ってるんだ。つまり勝つための方法だよ。お綺麗な法則なんてここには無いんだ。まずはその武器を置いてもらおうか」

女には隙がなかった。その背後からぞろりと男達が続く。刃物を構える者の姿もあった。須樹は大きく息をつく、木剣を地面に投げた。乾いた音が響く。女が背後に目配せをすると、中でも屈強な二人が歩み出て須樹の腕を左右からがっちり掴んだ。背中に捻り上げられる。苦痛の声を抑えて須樹は女を睨みつけた。



「一緒に来てもらおうよ。あんたが何者で、あそこで何をしていたのか洗いざらい話してもらおう」

「たまたま通りがかっただけだ」

「信じられないねえ。それならどうしてあわくって逃げたのさ」

「あんた達が追って来るからだ」

「うまい事言うね。でもあんたがあつた男をつけていたことはわかっているんだ。まあ、あんたが何をしていたにせよ、へまをしたつてことだよ。後で詳しく聞かせてもらうさ。連れて行きな。しつかり縛るんだよ。油断ならないからね」

最後は鋭く周囲に行つて、女は踵を返した。須樹は押さえつけようとする男達に抗いながら、その背に向かつて言った。

「へまをしたのはそつちじゃないのか？」

「何だつて？」

振り向いた女の顔は険しかった。

「俺はあんた達のこと、あの家にいた連中のことも知らない。それでもわかることはある。へまをしたのはそつちだ。俺があつた男をつけていたと言うからには、あの連中をずっと見張っていたんだろう？ あんたらは、あそこで俺に短剣を突き付けるべきじゃなかった。目の前に走り出た鼠に惑わされて、本当に狙っていた獲物に気付かれるなんてのはお粗末過ぎるんじゃないのか？」

「黙れよ、若造」

唸るように背後の男が言う。容赦なく押さえつけられて須樹はたまたま地面に膝をついた。

「あたしは賢くて強い男は嫌いじゃない」

女は音も無く歩み寄ると、須樹の瞳を覗き込むようにして顔を近づけた。まるで慈しむように須樹の頬を撫で、言葉が続ける。

「それが敵ならば尚更だよ。何と言つても屈伏させる楽しみが増すからね。あんたも、今は生き延びることを考えな。嘘はつかない方がいいよ」

女は艶やかに笑むと、さっと身を翻して広場を出て行った。その

背を見送り、須樹は体から力を抜く。

「立て」

命じる男の声に従いながら、須樹は忸怩たる思いを懸命に抑え込む。己の失態に、不甲斐無さに齒噛みしたところで状況が良くなるわけではない。こんな時仁識ならば、灰ならばどうするか。

（考える。考えるんだ）

多加羅若衆であることを悟られてはならない。彼らが何者か、それをまずは探り出す。

きり、と食い込む程の強さで手首を縛められる。

「目を閉じる。若造」

無愛想な声に振り返りかけたところを、目元を乱暴に布で縛られ、視界が覆われる。道筋を知られぬためか、念入りなことだと須樹は溜息をついた。人気の少ない路地とはいえ囚人さながらの姿で歩かせようと言っただから、なるほど、確かにここは彼らの縄張りなのだろう。

「歩け」

背中を押され、須樹は足を踏み出した。瞼の裏に、まるで炎のように紅の残像が揺れていた。

白沙那帝国はくさなの東の果ては、国境地帯に接する多加羅たからであると一般的には思われているが、地図上で見れば梓魏しきが最も東に位置することがわかる。多加羅所領よりもさらに北東部へ広がり、帝国と東方とを隔てる峻嶮な山脈に抱かれる地が梓魏所領である。純粹に面積だけで言えば、周囲の多加羅や沙羅久しゃらくよりも広い。だが、梓魏はその三分の一が森林地帯と山岳地帯であるため、実質人が生活を営む土地は周囲の二所領よりも少ないと言えるだろう。

そして梓魏の大きな特徴の一つに寒冷の地であることが挙げられる。南西部はさほどでもないが、北東に行くほどに冬が長い。森林が大半を占め、あるいは痩せた土壌の平原が広がるその地方は農耕には適さず、秋の終わりから春にかけて深く雪に閉ざされる。人が住むには厳しい気候の土地だった。

北限の民が住むのはその最北東部である。嘗ては今の多加羅と沙羅久に接する土地を広く支配していた彼らではあるが、白沙那帝国の台頭の後は北東部に追いやられ、一郷氏となっている。彼らの中には狩猟を中心に生活を営み、獲物を追って季節毎に土地を移り定住しない者も多い。定住する者も、豊かさとは無縁の者が殆どだった。気候の厳しさはそのまま生活に直結し、人々の人生は自然の摂理に組み込まれていた。

もつとも、そのような実情を知る梓魏領民はさほど多くはない。万は目の前に集う若者達を見ながらそう思う。北東の地の厳しさはそこに住む者にしかわからぬ。人の出入りが少なく、交易も盛んではないためそれも致し方ないのだろうが、何よりも北限の民がその地でどのように生きているかなど、梓魏領民は気にかねぬものだ。彼らにとって北限の民は郷氏として所領の一角に生きることを許された者、自らの歴史の底に沈めた異端でしかない。そして貧しい土地に生きる北限の民は、一部を除き梓魏領民と接触を持つことは殆

どなかった。

柔らかな日差しが心地よかった。このような陽光もまた、今の季節、彼の地では滅多に拝めないだろう。すでに雪に閉ざされているであろう故郷を万はぼんやりと思う。

万がいるのは梓魏惣領家の屋敷に程近い、軍の統括本部である。街の中心部にあるその堅牢な建物は実質梓魏軍の中心だった。下級兵士の宿舎や訓練場は街の外れにあるため、普段は若い兵士が出入りすることはさほどない。だが、今は十代後半から二十代の若者達で統括本部の中広場は埋まっていた。六十人程はいようか。冬日の澄んだ冷たさも熱気に吞まれていた。

所在無げに立ち尽くしている者、仲間同士で訪れたのか声高に喋る者、あるいはただぼんやりと待ち時間を持て余している者、だがそのどれにも共通しているのは微かな不安と、未知の領域への期待そしてこれから自らが選ぶ道への幼くも潔癖な自負だろうか。その中で万は腕を組んでさりげなく周囲を観察していた。

「なあ、あんたはなんで軍に入ろうと思ったんだ」

背後から突然話しかけられ、万は内心の思いが顔に出ないように気をつけながら振り返った。彼に話しかけてきたのは中肉中背、丸顔のこれといって特徴のない男だった。僅かに汗をかいているのは広場の熱気に当てられたというよりも、単に緊張しているせいのように思える。

……特徴はある、と即座に万は己の考えを改める。

（最年長だな）

新たに軍への入隊を希望して集う若者達の中で、おそらく己が最も年長なのではないかと思っていた方である。だが、目の前の男は三十を超えているだろう。

「何か梓魏に役立つことをしたいと思ひまして」

万は答える。二十代後半の男にしては言うことが青臭いか、いや、これくらいならば許容範囲内だろう。加えてこの場では実直で信頼のおける男として振る舞うのが最善である。皮肉や揶揄は、万がこ

れから演じる人柄にはそぐわない。

「みんな俺達よりも年下だよな。俺なんか肉切り包丁以外の刃物を持ったことがない。あの連中は武術をしたことがあるのかな」

おやおや、俺達ときたか 万はにこりと笑む。

「さあ、わかりませんけど、剣を持ったことのある者は少ないんじゃないですか？ 他の所領とは違って梓魏には剣術や体術の道場はあまりありませんし」

「他の所領って……あんた知っているのかい？」

「まあ、十年程あちこちうろついてましたから」

「そうなのか？ 俺なんて梓魏から出たこともないよ。せいぜい隣り街に行くくらいだ」

男の顔が僅かに歪む。そこにあるのは落胆と、もしかすると裏切られたとでも言いたげな押し付けがましい憤りだろうか。

（悪いね、同類じゃなくて）

口には別の言葉を出す。

「昔は旅に憧れて色んな場所に行ったんですけどね、結局故郷が一番だと思っただんですよ。若気の至りだったと思います。外に出ると梓魏の良さがわかりました。両親はもういないけど、この街には幸い叔父貴がいましたから頼って来たんですよ。でも職がなかなかなくて、今回の募集は願ったりかなったりです」

「そうか。やはり梓魏が一番だよな。常々そう思うよ。俺は小さな商店をやってたんだがどうにも立ち行かなくてな、女房はせつつくし、子供はまだ小さいし、おまけに四人もいる。食い扶ちを稼がないとだめだからなあ。兵士の給金は少ないが、無いよりはましだ」

男が言いながら笑顔になる。聊か卑屈なそれに、万も曖昧な笑みを返した。

（職にあぶれた者同士、仲良くしましょう……か）

希望と熱意に燃える若者達の中で、場違いな居心地の悪さを感じているのだろう。万は相手の重そうな体つきを見やる。今から武術を身につけるには苦勞するだろうと僅かに同情を覚えた。支え合い

慰め合う仲間が欲しいのであれば、彼は明らかに人選を誤っている。「注目！」

広場に声が響いた。若者達がぴたりと押し黙る。静寂の中、統括本部の建物から数人の武官が歩み出して来た。中央にいる中年の男は、衣の色彩からさほど高位ではないとわかる。だが軍人特有の威圧的な雰囲気をも十分に醸し出していた。

「ここに集う者達は、自ら志願して梓魏軍への入隊を希望している。我々は君達を歓迎しよう。だが、軍隊は甘い場所ではない。己の全てを捧げる覚悟の無い者は早々に立ち去ってもらいたい」

武官は一旦言葉を区切ると、その効果を確かめるように広場をぐるりと見回した。

「立ち去る者はいないか。では、これから入隊の手続きに入る。順番に並び、質問に答えてもらう。手続きが済めば君達は梓魏軍の新兵だ。荷物を持ち直ちに訓練場へと向かいたまえ。話は以上だ」

武官は言い終えると颯爽と身を翻し、建物の中へ消えた。残された数人の兵士が広場の奥に木の長机を並べ、そこに三人の男が座る。軍隊の中でも事務仕事を行う軍処方ぐんじょかたの者達。軍吏ぐんじという。なのだろう。入隊希望者一人一人について記すのか、紙を傍らに積み、筆を握ると顔を上げた。

「では順番に並びなさい」

若者達は顔を見合わせると恐る恐ると言った体で、三列に整列する。万が真中の列に並ぶと、元商店主の男が慌てて後に続いた。

列の前方から、若者の緊張した声が聞こえる。質問されるのは名前と年齢、出身とそれまでの職業、そして武術を修めた経験の有無くらいのものである。ここに集う殆どが、梓魏惣領家のあるこの街か、あるいは周辺の街や農村部の出身であり、特筆すべき経歴を持つ者もないため、手続きはさほど時間のかかるものではなかった。

万の番となり進み出ると、前の若者の記録を書きつけた紙を脇に押しやった軍吏が顔を上げた。義務的に万の顔を見やり、すぐに白い紙に視線を落とした。

「名前は」

「万です」

「年齢」

「二十八です」

ふむ、と軍吏は唸る。筆がすべらかに紙の上を走る。

「出身」

「この街です」

「前職は何だ」

「職に就いていたと言えるかどうかはわかりませんが、十年程、移動商人や各地を巡回する卸屋おろしやについて帝国全土を巡っていました」

軍吏が顔を上げる。これは義務的ではない。その反応に万は内心でにんまりとした。

「十年とは長いな。何故、梓魏軍に志願した」

「帝国各地を巡って得たものは数多くありますが、その中で最も大きいのは望郷の念と、何か意義あることに人生を捧げたいという思いでした。私にとってそれは故郷である梓魏に戻り、梓魏のために生きる、ということですよ」

「なるほど。武術の経験はあるか？」

「あります。移動商人や卸屋は盗賊から身を守るため護衛を雇っています。私はともに旅する間に彼らから剣術や体術を教わりました」「実際にそれらの技術で戦った経験はあるのか？」

「五回程、襲ってきた盗賊と戦ったことがあります。いずれも撃退することができました」

万は淀みなく答える。盗賊と剣を交えた実際の回数など最早覚えてもいない。無論、盗賊の相手をするのが最も危険な出来事だったわけでもない。

言っていることは虚実相半ばというところだ。出自や叔父云々の話は作り事であり、人柄さえも虚偽ではあるが、全てを嘘で塗り固める必要はないのだ。むしろ己の基盤に繋がる要素がある方が望ましい。梓魏領民の万という存在は、彼自身から派生してこそ、その

信憑性が高まる。

十年間　はじめの三年程はあてもなく各地を旅し、その後には万屋すぢやとして帝国各地を巡った。商人や卸屋とともに行動したことがあるのも嘘ではない。ただし、彼自身が護衛として雇われていた、ということではあるが。

尤も護衛という名称は些か上品に過ぎる。そのようなことを請け負うのは軍人崩れや傭兵崩れなどのごろつきが多い。用心棒という表現の方がしっくりくるが、敢えて護衛という言葉を選んだのである。梓魏の人々は良くも悪くも外の世界を知らない。それは梓魏軍の軍人とて同じことである。

「少し待て」

軍吏は言うと、統括本部の建物の中へと入って行った。それを見やり、万は緊張の面持ちを装う。

「武術を教わったただなんて一言も言わなかったじゃないか」  
背後から恨みがまし気な声が聞こえる。

（ああ。聞かれなかったんでね）

万は内心の思いなど些かも気取らせず、元店主を振り返ると詫びるような笑みを浮かべた。元店主は何事かをもごもごと呟き、不安そうな瞳で辺りを見回す。漸く己の人選の誤りに気付いたのだろう。最早方に話しかけようとはしなかった。もつとも、同類がいなければ己の立ち位置も定まらぬような人間であれば、この職業もそう長く続けることはできないだろう。軍隊は確かに甘くはない。それが例え帝国の辺境、安穩とした梓魏であろうともだ。

漸く戻ってきた軍吏は、手に一枚の紙を持っていた。それを万に差し出す。

「訓練場で提示したまえ。君の経験を鑑みれば、新兵課程からはじめるのは相応しくない。まずはどれほどの武術を身につけているか確かめさせてもらうことになるが、正規の兵士として軍務につきたまえ」

新兵ははじめから正規の兵士となるわけではない。まず半年程か



けて基本的な武術や軍の規範を叩きこまれ、適性の無い者はそこでふるい落とされる。残った者だけが正規の兵士となるのだ。それらの課程を免除するという軍吏の言葉だった。

「では行きたまえ。次の者、前へ」

万は喜びと誇らしさに顔を輝かせて 本当にそのように見えているか否かは鏡がないので確かめようもないが 頭を下げる。進み出る元店主とすれ違いざま、小さく目礼して広場を後にした。継るような相手の視線には気付かぬふりをしておく。

街の外にある訓練場まで向かいながら、万は現時点での状況を見直す。概ね順調と言えるだろう。狙い通り、万の経歴を印象付けることもできた。新兵課程を免除するという異例の扱いがその証拠だ。ただ武術の経験があるだけではこのようにはいかぬ。全て清夜の思惑通りに進んでいる。あとは、ただ待てばいい、という兄の言葉を信じるだけだ。やがて時が来るまでは

万は背後を振り返った。発作的な行動だった。静かに佇む惣領家の屋敷が、伸びる街路の先にあつた。それを束の間見つめ、次の瞬間わき起こつたのは後悔の念だった。万は灰色の敷石に眼差しを落とすと、屋敷に背を向けた。歩調を速める。

「この大馬鹿野郎」

小声で己に毒づく。振り返るべきではなかったのだ。どのような気持ちになるかはわかつていたはずだ。統括本部に赴く道すがらも決して見ようとはしなかったのだ。

廃墟になつているとでも思ったか？ 腹立たしく己に問いかける。何を期待していた？ 何もかもが様変わりしていれば そうであれば安心できたのか？

（いや、違う。何もかもが変わっているのだ。同じである筈がない）十年前の記憶のままに、屋敷は端然と在った。だが、何一つ変わらないように見えながら、それは全く違うものなのだ、と万は思う。十年の隔たりに築かれたものが確かに在るに違いなく、彼の目にはまだその姿が見えない。ただ、それだけだ。

そして思いを馳せたのは一人の面影だった。嘗ては鈴のように軽やかな笑い声をあげる少女だった。風に溶けそうな華奢な姿だった。椎良 十年間、極力思い出さぬようにしていた相手は、今二十六歳になっている筈だ。彼女は、変わっただろうか。最後に椎良がどのような顔を己に向けていたのか、万は覚えていなかった。

やがて時が来れば自ずとわかる。いやでも向き合うことになる。再会の時は必ず来るのだ。

万は皮肉な笑みに口元を歪めた。再会とは、我ながら甘い感傷だと思う。光を失った彼女には、万の姿とて見えはしない。そして飛雪という男は、椎良にとって汚らわしい暗殺者でしかない。

今は見も知らぬ他人同士、己の存在を彼女に告げる必要すらない。ただ彼女の命を守れば良いのだ。

（尻尾を出さぬよう気をつけるよ、万屋。これは危険な仕事だ）

味方はいない。下手をすれば、己の迂闊さが敵となる。そして無意味な感傷は自らを危険に晒す要因になりかねない。

万は再び視線を上げると、迷いのない足取りで街の外を目指した。

須樹は顔を上げた。暗がりには慣れた目には扉の形がおぼろにわかる。その向こうを通り過ぎる足音が聞こえたのだ。だが、それは立ち止ることなく遠ざかって行った。

須樹は小さな部屋に閉じ込められていた。椅子に座らされ、後ろ手に縛られている。手にはすでに感覚がなく、指先からゆっくりと這い上る苦痛は上腕にまで達していた。背もたれに手首が固定されているせいで立ち上がることもできない。底冷えする部屋の空気と、同じ姿勢を強いられることで体が強張っていた。

目隠しは取られていたが、窓一つない部屋である。時をはかろうにもかなわなかった。三刻程も経ったように思うが、暗闇に捕われ身動きもかなわぬ状況で、己の時間の感覚には甚だ信用が置けなかった。あるいはまだ一刻程しか経っていないのかもしれない。それともすでに夜になっているのだろうか。

須樹は何度も自分の身に起こったことを思い返していた。彼を捕えたのは何者なのか。そしてその者達が、多加羅若衆たからわかじゆうの暴拳を吹聴していた男と、何人いるかはわからぬがその仲間をもあの時捕えたのは何故か。最後まで見たわけではないが、あの紅の髪の女が男達をも捕えただろうことを須樹は確信していた。

やはりあの者達が男達を以前から監視していたのだろう、と須樹は考える。そこに男をつけて須樹があらわれた。監視していた者達にとつては予期せぬ第三者、といったところか。だがあの場で短剣を突き付けるのは解せぬ。下手をすれば監視対象に気取られるだろう。そして実際にその通りになり、結果としてそれまで保たれていたであろう均衡は破れた。

須樹はそこまで考えて苛立たしく溜息をついた。そこまでは推測がついた。だが、その先がわからないのだ。男達が多加羅若衆を貶める騒動を起こしていた、と仮定する。須樹にしてみれば、彼らを

捕えることがかなえば若衆の潔白を証明することが出来ると、そう踏んでいたのだ。だが、あの新たな者達、縄張りと言うからにはこの街の者には違いないだろうが、彼らが男達を監視していたのは何故だ。

どうやら己は未知の罠が張り巡らされた領域へと無防備に踏み込んでしまったらしい。迂闊には違いないが、予測できよう筈もない。何か見落としていることはないか、細部まで記憶を探る。思考は同じ軌跡を描いて際限なく空回りを続ける。だが、いい加減うんざりしながらもやめられないのは、何か考えていないと、不安と自らへの憤りに呑み込まれそうになるせいだった。

（まずは彼らが何者か、探る）

これは何度も己に言い聞かせていることだ。彼らは須樹が多加羅若衆であることは知らない。それを強みとするか否かは己次第だろう。もつとも、須樹は若衆であることを明かすのは極力避けたかった。若衆は今回の緩衝地帯の一件でどのように動くかはまだ決定していない。なればこそ、これはあくまでも個人としての行動であり、若衆の名を出すわけにはいかなかった。己の失態を若衆に被せてはならない。

その時、前方の闇が細長く切り取られた。扉の小さな軋みが響き、塗り込めたような濃密な暗闇が呆気なく綻んだ。入ってきた人影は小柄だった。硝子筒を掲げ、するりと部屋の中に滑り込むと扉を閉めた。硝子筒の柔らかな光が、闇に慣れた須樹の目には眩しく映った。

目を細めて改めて入ってきた人物を見ると、どうやら少女のようだった。僅かに首を傾げて須樹を見つめる様はまだあどけなく見える。十五歳くらいだろうか。波打つ髪は結ばずに背に流されている。

「よいしょ」

何とも拍子抜けするような声を出して、少女はぺたんくと床に胡坐をかくと硝子筒を傍らに置いた。須樹ににこりと微笑む。

「あんまり暇だから来ちゃった。お話し相手になつてくれる？ お

兄さん、お名前は？」

無邪気な声音に須樹は半ば呆気に取られながらも、ただ黙って見つめていた。いずれ尋問を受けるだろうとは思いつつも、覚悟もしていた。だが、これは予想外である。少女は須樹の沈黙を気にした様子もなくなおも言った。

「じゃ、私の名前を覚えてあげる。私は紺<sup>こん</sup>。紺色の紺。変わった名前でしょ？ でも私は気に入ってる。お兄さんはどこの人？ この街じゃあないよね。私、この街のいい男はみんな覚えてるの。お兄さんのことは知らない。お兄さんはとても素敵だわ」

少女は渦を描くように指を振り、またも笑む。

「答えてくれないんだ。では質問を変えます。家に帰りたい？ こんなことされてお兄さんが可哀そう。もうすぐ夜になるから、家族は心配するよね。家族も可哀そうだわ」

須樹は少女から眼差しを逸らす。

「もしかして家族がいない？ それなら私と同じ。でも同じじゃないかも。私には家族以上に大切な人がいるから。お兄さんはどう？」

あくまでも答えぬ須樹に、少女は可愛らしく唸ってみせた。

「どうして一言も答えてくれないの？ 私はお話し相手になりたいの。私達のことを怒っているの？ ここのみんなは怖い人じゃないのよ。悪い人でもない。私、色んな怖い人を見てきたからよくわかるの。それに、お兄さんのことも怖い人でも悪い人でもないと思うわ」

須樹はふと既視感を覚えた。歌うような少女の言葉の抑揚、さりげなくありながら何時の間にか誘われるようなそれである。似たような感覚を覚える相手が居はしなかったか？

「みんなのことは大好きよ。でも私はよくみんなに叱られるの。今も本当はお兄さんには構うなって言われてるの。でも退屈なんだもの。夕食の下ごしらえは終わったし、やることがないの」

まだ夜ではないらしい、と須樹は思った。夕刻だろうか。

「お料理は私の得意技の一つ。でもあんまり作らせてもらえないわ。

あと踊りも得意よ。気に入った人にしか見せてあげないけど。お兄さんも、得意技があるよね？」

少女はことりと首を傾げた。煌く瞳が、まるで何らの他意も無いといった様子で須樹を見つめている。

「お兄さん、強いよねえ。あんなに強いと思わなかった。英も可哀そう。お腹のところ、痣になつてた」

英　短剣を突き付けてきた青年か、と須樹は察する。そして少女の声が、あの時上から聞こえた声と同じであることに気付く。

「あんたが焚きつけなきゃそんなことにはならなかったんだよ」

張りのある声が響いた。須樹は顔を上げる。戸口にあの女が立っていた。紺がぷつと頬を膨らませる。

「私、焚きつけてなんかいないわ」

「そうかい。無意識ならなお悪いよ。よく考えな」

厳しい声音に、紺はしゅんとした様子で女を上目使いで見上げた。

「紺、あんたはもういい」

「なあんだ、もういいの？　これからなのに」

「この男は無理だ。英のここに行つて慰めてやりな。落ち込んでたからね」

「はいい」

反省した様子もどこへやら、明るい返事を残して出て行った少女を見やり、女はやれやれといった様子で肩を竦めた。須樹を振り返る。腕を組んで彼を見下ろした。

「さて、どうしたものかね……困ったもんだよ」

口調はさほど困っているようには聞こえなかった。陽の光のもとでは紅に見えた女の髪は、仄かな火影にはくすんで見える。おそろく赤味の強い茶色の髪なのだろうが、須樹にはやはり炎のような紅に感じられた。二十代半ばか、もしかすると三十になっているかもしれない。その姿は女性の滑らかな曲線を描きながらも、無駄なく鍛えられていることが窺えた。

「あの子、可愛いだろう？　さっきの子、紺だよ」

答えを求められているとも思えず、須樹は再び視線を逸らした。

「大抵の男はああいう風に可愛らしく話しかけられたら、一言二言何か言うもんだよ。他愛の無い話をね。あんたは愛想がないね」

ああそうか、と不意に須樹は気付いていた。紺と名乗った少女の掴み所のない言葉、相手に気付かせることなく己の望む方向に誘おうとするそれが、灰かいの物言いと酷似しているのだ。勿論、選ぶ言葉やその使い方は全く違う。灰の言葉はさほど抑揚がなく静かだ。だが普段は無口な灰が、己の主張を通そうとする時、あるいは相手から真意を聞き出そうとする時に発する言葉は、同じように相手を何時しか惹き込む響きがある。狡猾、と言えるかもしれず、だが灰の場合は滅多にそのようなことはしないうえに、本人が意図しているとも思えなかった。無意識なのだ。

それに比べ、紺は意識的に須樹に何かを言わせようとしていたのだ、とわかる。確かに他愛無くも感じられるが、それは頑なな心を崩す小さな綻びとなるだろう。不用意に答えれば、それがこちらの素性を知る手がかりになりかねない。警戒していたとはいえ、答えなかったのは灰という免疫があったせいかもしれない、と須樹は内心に苦笑した。

「あの男達ね、この街の者じゃないよ。緩衝地帯の者ですらない」

須樹は唐突な女の言葉に思わず顔を上げる。そして観察するように己を見つめる女の視線に気付いた。女がにやりと笑む。

「やはり、あの男達に興味があるようだね」

須樹は内心に舌打ちする。辛うじて表情を変えないまま、敢えて女を正面から睨みつけた。

「そんなに警戒されてたんじゃ話にならないね。何も取って食おうってわけじゃないんだ。あんたが何者なのか言ってくれないことは、こちらも対処の仕様がなない。あんた自身に疾しいところがなければ、隠すことなんてないだろう。本当のことを言ってくれたらすぐに解放できるかもしれないのにさ」

「この状況でその言葉を信じろって？ 脅され、追いかけられて、

拳句の果てにどこかもわからない場所に押し込められている」

須樹は漸く答えた。自分でも意外な程、落ち着いた声音だった。「確かにその通りだね。それに縛られてちゃ牙をむきたくもなるだろうさ。でもあんたは強い。下手したらこちらが危ういからねえ。あれは、武術ってやつだろう？ あたしらみたいに喧嘩で身につけた技じゃない。木剣の構え方も綺麗なもんだった。剣を持ち慣れてるんじゃないのかい？」

須樹は答えなかった。あの少女をまず差し向けた遣り口といい、油断がならない。身を守るためにこちらが築いた壁を、少しずつ突き崩そうとしているのだ。

「まあ、いいさ。あんた、名前は何だい？」

沈黙　　女は小気味良く鼻を鳴らす。

「じゃあ、あたしから名乗ろうか。あたしの名前は宇麗だ」

女は指先で、名をあらわす文字を宙に書いてみせた。あまりにもあっさりとなが名乗ったので、須樹は虚を突かれる。何を思うのか女は僅かに目を細めた。

宇麗、と須樹は心に刻みつける。相手の情報がこれで一つ、否、二つだ。一つ目は紺、あの少女だ。だがあの男達が緩衝地帯の者ではないという話を信じることはできない。まだ、今のところは。

宇麗はなおも須樹を見つめていたが、ふと小さく息を吐いた。

「本名を言いたくないなら、偽名でもいいから名乗りな。こちらも呼び名がないとやりにくいからね」

「好きなように呼べばいい」

「ふん、じゃあそうさせてもらおうか。そっぴやあんた、自分のことを鼠とか言ってたね。見た感じ鼠はあっちの男の方が似合う」

須樹の脳裏に浮かんだのは酒場からつけた男の顔だった。僅かな表情の変化を捉えたのか、宇麗が笑んだ。

「むしろあんたは駿馬だ。それとも駁はくかもしれない。知っているかい？ 猛獣を喰らう猛獣だよ。まあ、どちらであろうともいずれわかるさ。あんた自身の口から聞かせてもらおう。何故、あの男の後



をつけていた？」

「……………」

「質問を変えようか。あの男達の何を知っている。お前はあの男達とどんな関係があるんだ？」

「俺は何も知らない。ただ巻き込まれただけだ」

「まだ自分の立場がわかっていないようだね。そんなことが信じられると思うかい？」

「信じる信じないはそちらの勝手だ。本当のことを言えと言っから、答えているだけだ」

「よく聞きな。野生の獣は縄張りを侵されれば、相手の命を奪うことも躊躇わないんだよ。あんたはあたしらの縄張りに踏み込んだ。それもあたしらが狙う獲物を追っつてね。もう少し賢くなりな」

「野生の獣はみだりに殺したりはしない。簡単に殺すのは人だけだ。言っておくが、俺はあんた達の縄張りのことなんか知らない」

「ああ、確かにこの街の者ではなさそうだ。だが、あの男達と無関係ならあんな裏道を何故うろついていたのかね。街衆でも滅多に踏み込まない場所だ。分別があれば途中で引き返す。まさか散歩でもしてたのかい？」

須樹は口角を上げた。

「散歩してたんだよ」

「そいつは面白い冗談だ」

宇麗の手が素早く須樹の後頭部に伸びる。乱暴に髪を掴まれて須樹は仰のいた。首筋に冷たい感触があてがわれる。痛みが奔った。相手の体温を感じる程近く、宇麗の顔があつた。くつきりとした切れ長の瞳が、不穩に細められる。

「死にたいのかい？ あんたがここで死んでも、誰も知ることはない。あたしがあと少し力を込めれば、それであんたの人生は終わるよ。あたしは躊躇わない」

「そこまで必死に聞き出そうとするのは何故だ？」

掠れた声で須樹は言った。意表を突かれたのか、宇麗が眉根を寄

せる。

「俺は本当に何も知らない。あの場所へはただ迷い込んだだけだ。むしろこちらが聞きたいくらいだ。あんた達は何者だ？ 何をそんなに怯えている？」

相手の正体を知らないという、そのことを曝け出す。宇麗の心中に迷いを引き起こすための、これは賭けだった。須樹がどれ程否定しようとも男をつけていたのは紛れもない事実であり、客観的にあの路地での状況を考えれば宇麗が須樹の言葉を信じないのも無理はないのだ。だが、男をつけた理由を言えば、須樹が多加羅若衆であることも言わねばならない。例え、須樹の行動が若衆とは無関係の単独行動であろうとも、である。宇麗達は若衆にとって危険な相手なのか否か、それを見極めねば状況は打破できそうになかった。

須樹は宇麗の表情をつぶさに観察する。だがはつきりとわかる変化はなかった。

「あたしが怯えているだつて？」

「ああ、そうだ。だから過剰に警戒している。あの男達が危険な連中だからか？ 何故あの男達を監視していた？」

「わかつてないね。質問できる立場じゃないんだよ」

「無関係の人間を巻き込んだのはそちらだ。そうやって自分で自分の首を絞めているだけだ」

「その言葉を信じる程あたしはおめでたくはないよ」

「俺は真実を言っている。あんたも真実を言ったらどうだ」

無言で暫し睨み合う。

「その度胸だけは褒めてやるよ」

宇麗は冷たい笑みを浮かべて言うと、須樹の髪を離して一歩引いた。須樹が思わず小さく息をついた瞬間、宇麗が動いた。身構える隙もあらばこそ、宇麗は須樹の鳩尾に拳を叩き込む。無論、防ぐことなど出来よう筈もない。咄嗟に息を止め腹筋に力を込めるも、受けた衝撃に須樹は喘ぎ、咳き込んだ。胃液のせり上がるような嫌な感覚が広がる。

不意に支えを失い、ぐらりと体が傾いで床に倒れ込む。須樹は苦痛に霞む目で女を見上げた。女の手握られた短剣を見て、漸く縛めを解かれたのだと気付いた。感覚の無い手を引き寄せろ。

宇麗は目を見開いて須樹を見下ろしていた。意識を失わなかったことに驚いているのかもしれない。確かに強烈な一撃だったが、鍛練で冶都やとの相手をしていれば自然と打たれ強くもなる。反射的に衝撃を減じることができたのは、灰の技の速さや仁識の意表をつく攻撃に慣れていたせいかもしれない。激痛と吐き気の合間に、須樹は思わず小さく笑みを浮かべていた。どうやらあの連中に想像以上に鍛えられていたようだ。

宇麗はしゃがみ込むと須樹の髪を柔らかく撫でた。顔を覗き込んでくるのを、須樹は見返す。

「あなたの正体がわかるまで、あなたはあたし達にとって敵だ。抵抗するだけ痛い目を見るよ。……あなたは駭なんだよ。自分でわかっているかい？ 本当のことを言うまであたしは容赦しないよ」

猛獣を喰らう猛獣　　どうやら相当に危険な人物と思われるらしい。須樹は朦朧とした意識でそう考えた。実際には武器の一つとして持たずに獣の中で立ち尽くしているのはこちらの方だ。いまだに相手が何者か、自分が一体何に巻き込まれたのが全くわからない。

（いや、もう一つわかったことがあるな。あの男達はこいつらにとって猛獣だったことだ）

宇麗達が須樹を警戒するのはあの男をつけていたから　　そうだとしてもこれは行き過ぎではないかと須樹は思う。だが、あの男達が、もしも須樹が考えていた以上に危険な輩だとしたらどうだろうか。男達を追って新たにあらわれた彼の存在に宇麗達が神経質になるのも頷ける。男達に問い詰めたところで須樹の正体がわかる筈もなく、尚更に不安を感じているに違いない。

猛獣を喰らう猛獣、駭という例えは、男達と須樹を指して言っているように思えた。

多加羅若衆と、それを貶めようとする者達と考えれば、その例えもあながち間違いいではないかもしれない。

(どちらが喰われる側かは……考えたくないな)

宇麗は立ち上がると硝子筒を掴んで扉へと向かった。扉を開け、廊下呼びかける。

「食事を持って来て置いてやりな。一刻程経ったら食べられるくらいに回復するだろう」

どうやら廊下には見張りがいるらしい。男の応じる声が聞こえ、遠ざかって行く足音が響いた。

「また来る。どうすべきかよく考えな、駁。この暗闇から出たけりや、意地は張らないほうがいい」

須樹は薄目を開けて女の背中が扉の向こうに消えるのを見送った。扉に門をかける硬質な音が響き、再び闇の中に取り残される。次第に手に血の気が戻るのがわかったが、まるで自分のものではないかのように感じられた。断続的な痺れと苦痛が指先から広がり、腕へと這い上る。

この状況を若衆の仲間が知ればどうなるだろうかと、ふと考えていた。治都は怒髪天を衝く勢いで怒り狂うだろう。灰は普段の彼からは想像もつかぬ狡知を巡らして、たった一人でも須樹を救おうとしかねない。何せ前例がある。仁識は表情一つ変えずに、しかし心の底から須樹の身を案じるだろう。勿論、痛烈な皮肉の十や二十は願わくばそれくらいで済めばよいのだが、と須樹は希望的観測を込めて思う。言われる覚悟をせねばならないだろうが。

早くあの連中のもとに帰った方が良さそうだ、と須樹はぼんやり思った。何時までも多加羅に戻らなければ、彼らは不審に思うだろう。灰にせよ仁識にせよ、ああ見えて気が短い。向こう見ずなところは猪突猛進の治都と大差がないのだ。何をしでかすかわかったものではない。

須樹は瞳を閉じた。ゆっくりと沈みこむような感覚は疲労故か冷たい床に耳をつける。渦巻くような己の鼓動が、やけに遠く聞

こえた。

宇麗<sup>うれい</sup>は足早に細い廊下を歩き、突き当たりの階段を昇った。木の扉をくぐると薄暮の淡い光が窓から射していた。薄紅に雪白の冷たさを秘めて壁を染める。ふとその色彩に目を奪われた宇麗は、足を止めて壁に凭れた。腕を組む。硝子の向こう、細長く切り取られた空は、見詰めれば心さらわれる深さだった。

移ろう夕暮れを見つめながら、いつの間にか、宇麗は目まぐるしい思考に捕われていた。

夕餉の匂い、食堂には子供達が集まって食事をとっているだろう。まだ幼い彼らの食事の時間は早い。用事があることは伝えてあるのに、彼女を待っていることはないだろう。だがこの建物に連れて来られたばかりの子供の中には、宇麗の姿がないと落ち着かない者もいる。子供達は宇麗を母親のように慕っている。はやく行ってやらねば、と思いつながらも、宇麗は歩き出すことができなかった。

「どうした？」

声をかけられて宇麗は振り向いた。廊下の先、食堂のある方向から大柄な男がゆっくりとこちらに向かつて来ていた。鍛え抜かれた分厚い体格の男である。がっちりとした広い肩の上には厳つい顔がある。その見た目だけで街のごろつきも黙って道を開ける彼だが、性格は穏やかで優しい。名を黄<sup>おう</sup>という。

「……少し考え事をしていた。英の様子はどうだ？」

「お前に盛大に雷を落とされて、地の底まで落ち込んでいる。何もあそこまで言わなくてもよかったんじゃないのか？」

「独りよがりな功名心で連携を乱すのは大馬鹿者だ。おかげで予定が大きく狂った」

「だが、あの男達を捕える時期には来ていた。あのまま監視しても相手の正体がわからないならば、捕えた方がいいとお前自身が言っていただろう。媪<sup>おひな</sup>のお許しも頂いていたから丁度潮時だった」

「たとえそうであっても、英のやったことは失態だ。お前もわかっているだろう。だいたい女にいい格好を見せたくて先走るなんてのは論外だ」

宇麗の容赦のない言葉に、黄はまあなあ、と呟いた。男をつけてあの場にあらわれた青年に英が短剣を突きつけた、そのせいで数日間目を光らせていた相手に監視していることを悟られてしまったのだ。宇麗にとっては腹立たしいことこのうえない。青年を捕えるのは何もあの場でなくともよかったのだ。もっと離れた場所まで青年を泳がせれば、男達に気付かれることはなかった。あの場で男達を監視していたのはほんの数人である。合図を聞いた宇麗達の到着があと少しでも遅ければ、男達には逃げられていたかもしれないのだ。「まあ、半分は紺こんが悪いからね。その分は差し引いて雷を落としておいた」

「紺にはどう言ったんだ」  
「自分で考えろと言つてある。無意識に男を翻弄するのはあの子の悪い癖だ。そろそろ自覚した方がいい」

そうか、と黄は言ったただだった。親のいない子供が多く集まるこの場所でも、紺の生い立ちは特殊だった。紺の扱いは全て宇麗に一任されているため、黄が口を出すことは殆どない。

黄は話の矛先を変える。

「あの青年はどうだった？ 何者かわかったのか？」

「いや、まだ口を割らない。なかなか根性がありそうだ」

「褒めているように聞こえるぞ」

宇麗は鼻を鳴らす。

「肝は座っているな」

「どうやら宇麗の眼鏡にかなったらしいな。気に入ったんだろう」

「冗談はやめろ」

「すまん」

男はあっさりと謝る。宇麗は相手を腹立たしく睨みつけたが、小さく肩を竦めて視線を逸らした。黄はただ宇麗の気持ちを解そうと

しているのだろう。こちらを見つめる瞳でそれがわかる。冗談めいた口調の中に、宇麗を氣遣う気持ちがある。そうさせるほどに深刻な表情をしていたのか、と宇麗は自嘲気味に思った。ここ数日、気が張っていたことも氣付かれていますに違いない。

時折、目の前の男よりも余程自分は器が小さいと実感する。今もそうだった。

宇麗は青年の面差を思い出す。実際、あの青年は肝が座っていると思う。どこか老成して大人びてもいる。まだ十代だろう青年が、容易く身につけられる雰囲気ではない。そうであるからこそ尚更に単なる通りすがりだとは思えないのだ。だが、何も知らないと言った時のあの顔に、嘘があるとも思えない。しかも彼は宇麗の名を聞いても何ら反応を示さなかった。あるいは全てそう見せかけているだけか

いずれにせよ、それはこれから明らかにすればいい。宇麗は思考を切り替える。

「ところで、あいつらはどうだ」

ここ数日、監視していた男達について尋ねると、黄は首を振った。「こちらもだめだ。かなり痛めつけたが一言も喋らない。もしかして事情は何も知らされていない単なる下っ端かもしれない。何にせよ、一度媪に報告した方がいいと思う」

「それならばあたしも一緒に行くよ。経過をまだお知らせしていない」

宇麗はふと黙りこんだ。その様子に男は氣遣う様子を見せた。

「なあ、あの青年……」

「駁<sup>はく</sup>だ」

「名乗ったのか？」

「いや、名乗らないからあたしが勝手につけた」

男は片眉を器用に上げてみせる。賢明にも何も言わなかったのは長年の付き合いで宇麗の性格をよく知っているからだだろう。何せ寝食をともにして育った仲である。互いのことはよくわかっている。



「その、なんだ……駁だがな、お前がやりたくないなら、俺が尋問するが」

「いや、いい。あいつはあたしがやるよ」

宇麗は男の言葉を断ち切る。だが男は構わずに言い募った。

「お前のことだから、そうそう相手を痛めつけることはできないだろう。お前は、なかなかわかりづらいし誤解されやすいが、根は優しいやつだからな」

「……何か言い方に含みを感じるぞ。言っておくが少しは痛めつけたさ」

「だが、それ以上は無理だろう。その点俺は割り切っている」

「何度も言わせるんじゃないよ。あたしがやる。汚れ仕事ばかりをお前に押し付けるわけにはいかない。それに……駁には暴力は効かない気がするんだよ。痛みに耐える精神力がありそうだ」

青年はかなりの武術の使い手に違いない。武術に秀でているからと言って精神的にも強靱であるとは限らないが、あの青年に関して言えば心身ともに鍛えられた者の強さがある。彼が纏う潔いまでに澄んだ気配に、宇麗はそう思う。

男は諦めたのか小さく溜息をついた。僅かに苦笑して宇麗を見やる。

「やはり気に入ったんじゃないのか？」

宇麗は考えるように眼差しを伏せると、言った。

「そうかもしれないね。あいつはあたしらの仲間にもっと痛手を負わすことも出来た。もしかすると殺すこともできたかもしれない。だがそれをしなかった。相当な腕前だったが、重傷を負わせないように手加減をしたんだ。お前も手当を受けた連中を見ただろう？」

「まあな。だからといって善良な人間とは限らないだろう。俺達は人間の汚い面をよく知ってる」

「ああ、あたしらは人間の汚い面をよく知っている。それを商売にすらしている。だからこそ、駁が汚い奴だとは思えない」

一言ずつ、噛みしめるように宇麗は言うと、黄を見た。男の瞳に

は夕暮れの色彩と、宇麗自身の顔が映り込んでいる。宇麗には、己がまるで炎の中に溺れているように見えた。

「とにかく、あいつはあたしが受け持つ」

「お前がそこまで言うなら任せる。なんと言っても、次期家長のお言葉には逆らえんのでね」

冗談めかした言い草に、宇麗は男を睨みつけた。だがその眼差しは柔らかい。年若く女だてらに皆の上に立つ彼女を、男は何くれとなく支えてくれる。彼が無言で背後を守っているからこそ、宇麗は真直ぐに立つことが出来る。思えば、幼い頃から変わらぬ二人の立ち位置だった。

「媪の後を継ぐのはあたしじゃなくてお前でもいいんだよ。わかっているだろう」

「俺はお前の後ろにいるぐらいが丁度いい」

「どうだかな、と宇麗は呟くと口調を改めた。

「あたしは駁に手加減はしないよ。これはこの街だけじゃない、緩衝地帯全体に関わる問題だ。下手をしたら緩衝地帯が喰われちまう。あたしらは何としてもそれを阻止しないといけないんだ」

まるで己に言い聞かせているかのようなその声音に、黄は何も言わなかった。急速に宵の深みを増した光の中で、宇麗の姿は紫紺の影を纏っていた。

そうだ、と宇麗は思う。例えあの青年が悪人でなかつとも、緩衝地帯を守るためならば手段を選んではいけない。何者か、必ず突き止める。それに加えて男達を捕えたことで、事態は大きく動いた。男達が下っ端であるとしても、相手の尻尾を掴んだことには変わりがない。それはすなわち、男達の背後にいる者に、彼らの動きを阻もうとしている、そのことを知らしめることでもあった。悠長にしてはいられないことを、彼女はよくわかっていた。

だが、その尻尾の先、いまだに姿の見えぬ相手がちっばけな蜥蜴なのか、それとも巨大な毒蛇なのか、まだ宇麗にもわかっていなかった。

その日鍛錬所を訪れた灰は、会議室の手前の廊下で冶都に捕まった。慌ただしく近付いて来た冶都は、挨拶もそこそこに灰に尋ねた。「なあ、本当に今日透軌様が鍛錬所に来られるのか？」

「はい」

「そうか。会議が始まるまであと一刻程だよな」

冶都は不安そうな面持ちでどこか落ち着きがない。

「どうしたんですか？」

「お前、須樹と今日会ったか？」

「いえ、まだ今日は来てないみたいで……」

「やっぱり会ってないか」

冶都は灰の言葉を途中で遮ると、落ち着かない様子で廊下を行きつ戻りつする。

「須樹さんがどうかしたんですか？」

「ああ、いや、いいんだ。もしかしてもうすぐ来るかもしれないしな」

「どうやらまだ来ぬ須樹のことを気にしているらしい。」

透軌が、錬徒以上の者達で行われる会議のために鍛錬所を訪れるまで、さほど間はない。若衆頭として彼が鍛錬所を訪れるのは祭礼の時以外では初めてのことであり、異例の出来事にその日の鍛錬は休みとなっていた。鍛錬所にいるのは会議に参加する者だけである。そういえば、と灰もまた辺りを見回す。透軌が鍛錬所を訪れるとあり、皆既に顔を揃えている。その中で須樹の姿だけがまだ見えなかった。普段から何事につけ余裕をもって行動する須樹のこと、まだ鍛錬所を訪れていないのは彼にしては珍しいことに思えた。

「何を騒いでいる」

涼しい声音に振り替えると、仁識が立っていた。

「仁識、お前須樹を見てないか？」

「いや、私は会っていない。まだ来ていないみたいだな。何か用事

でもあるのか？」

「用事つてわけじゃないんだが……」

「何だ、はつきりしろ」

「……何と言えればいいか……」

治都は言い淀み、周囲を気にする素振りを見せた。まだ時間はあ  
るものの、会議が行われる部屋の前には、すでに錬徒が集まってい  
る。三人は彼らから離れて廊下の突き当たりに行った。

「須樹に何かあったのか？」

仁識が静かに問う。

「いや、俺もよくわからないんだ」

「何だ、それは」

途端に呆れた表情になる仁識だったが、なおも不安そうな治都の  
様子に、言い聞かせるように言葉を継いだ。

「何が気になつている。何でもいいから言ってみろ」

「実はな、須樹が緩衝地帯から戻つてないんじゃないかと思うんだ」

「……端折りすぎだ。それでは何のことかわからんぞ」

「つまりだな、昨日須樹が緩衝地帯に用事があると言うから、俺の  
ところで雇われてる運び役の馬車に乗つけてやったんだが、どうや  
ら昨日のうちに多加羅たからに戻らなかつたみたいなんだ」

「確かめたのか？」

「昨日、気になつて宵の刻あたりにあいつの家に行つたんだ。もし  
たらまだ帰つてないと言われた。時間に余裕があれば近くの村の親  
戚の家に寄ると須樹が言つていたとかで、引き留められて明日帰る  
ことにしたんじゃないかと御両親は考えていた。時々あることらし  
い」

「じゃあ、そうなんだろう」

「須樹だぞ？ 今日若衆頭も交えての大切な会議があるのに、昨日  
のうちに帰らないなんてことがあるか？」

「あるかもしれないだろう。昨日の夜に戻つたのかもしれないし、仮  
にそうでなくても朝早くに緩衝地帯を出れば、会議には間に合う」

治都は仁識のにももない返答に、灰の方へと縋るような視線を向けた。灰は何と答えたものかと困惑しながらも、治都に問うた。

「何故、家まで行って確かめようと思ったんですか？」

わざわざ確かめるほどに気になったのは何故か、その問いに治都は答えた。

「あいつを馬車に乗せて行った運び役が言うには、緩衝地帯の街で須樹を下ろす時に、十五の刻にその場所にいれば多加羅までまた乗せると伝えたらしいんだ。須樹はそれに『ありがとうございます』と言っていたらしい」

「だから、それが何だと言うんだ」

「須樹はお節介焼きで人一倍他人を気遣う奴だろう？ もしも帰りに馬車に乗るつもりがなければ、はっきりそう言ったと思うんだ。曖昧なことを言っただけで相手に気を使わせないために、乗らないなら乗らないと言っただけで済まないか？」

灰と仁識は思わず顔を見合わせた。常に自らのことよりも他人を気に掛ける須樹の性格を考えれば、それはもつともにも思えた。

「ありがとうと言っただけで、馬車に乗るつもりだったと……？」

「ああ、俺はそう思った。だから帰ってきた運び役の話聞いて、須樹が帰りに馬車に乗らなかったというのが気になったんだ。で、一応家まで確かめに行った」

「御両親が言うように親戚に引き留められたのかもしれないだろう」「そうだといいが、須樹は今日まだ来ていない。もしかして緩衝地帯から戻っていないのかもしれない。心配なんだよ」

仁識がふと溜息をついた。須樹と治都は幼馴染のような間柄である。須樹が人並み外れて落ち着いているのは、良くも悪くも感情と行動が直結している治都を抑えてきたせいだろう、と仁識などは思っている。阿吽の呼吸とでも言うような、他人には割り込めぬ親密さがあるのだ。だが、これはいくら何でも治都の気にし過ぎに思えた。

「いいか、須樹は子供じゃない。緩衝地帯から昨日戻らなかったか

らと言つて、どうしてお前がそんなに気にするんだ？」

「緩衝地帯によく出入りしている家人が言うには、今の緩衝地帯は何かと物騒らしいんだ。もしかして厄介事にでも巻き込まれたのかもしれない」

治都は、真実心の底から心配しているのだろう。強張った表情で言い募つた。

「お前ならあり得るが、須樹がそういう下手を踏むとは思えない。例え巻き込まれたとしてもあいつは仮にも若衆の副頭だ。うまく切り抜けるだろう」

理路整然と言つた仁識の横で、灰はふと眉根を寄せた。仁識の言うことの方がもっともなのだが、ちりちりと焙られるような嫌な予感を覚えていた。

「須樹さんは緩衝地帯のどの街に行つたんですか？」

灰の問いに、治都は振り返つた。

「笠盛だ」

緩衝地帯の中でも最も商業が盛んな規模の大きい街である。

「とにかく、会議まで間もない。もうすぐ来るだろう」

仁識の言葉に、治都は不承不承といった様子で頷いた。あと半刻程で会議が始まる。会議室には大方の錬徒が入っている。扉をくぐる設啓の姿もあった。会議室では多くの者が既に席についていた。細長い机の周り、若衆頭が座る中央の上座と、その左右に二人ずつ副頭が座り、そして錬徒達が下座に連なる。

若衆頭 将来の惣領家を担う者の訪れに、部屋に集う若者達の顔には緊張が漲っていた。なお硬い表情のまま治都は灰達と別れ、下座に向かつた。仁識は設啓の隣りに、灰はその向かいに座る。

治都がちらちらと入口に目をやっているのを見ながら、灰は得体の知れない感覚に戸惑いを覚えていた。部屋に籠る張り詰めた空気に引きずられているのかとも思う。だが、それとも微妙に違つ。不安は焦燥を伴っていた。何か大事なことを見落としているような、もどかしさがあった。

不安な心地に誘われるように、普段は閉じている感覚が広がる。灰は目を閉じて深く息を吸った。風に翻弄される枯葉一枚、それすらも感じ取る精妙な意識の網がゆっくりと縮まる。再び閉ざされる寸前に、遠く轍の響きを感じた。馬車は鍛練所へと向かっている。透軌だ。残る空席は若衆頭ともう一人だけだ。

四半刻の後、透軌が鍛練所に到着し、緩衝地帯で現在起こっている出来事　多加羅若衆を名乗る者達の狼藉について如何に対処すべきか、それを話し合う異例の会議が行われた。

だが、その場に須樹の姿はなかった。刻限を過ぎて、彼はあらわれなかった。

会議室にあらわれた透軌とつぎは背後に二人の男を従えていた。一人は初老の男で、高位の文官であることがわかる。もう一方はまだ年若い従僕だった。静かに歩み入った彼を、若者達は一斉に起立して迎えた。それに透軌は小さく頷くと中央の上座に座る。二人の男は、二柱のようにその背後に直立して控えた。

若者達が席につくと、透軌の視線がつと空席に向けられた。

「人数が足りないようだが」

声を発したのは透軌の背後に控える初老の男である。若者達へ向ける視線は、睥睨するという表現が相応しい。灰かいの視界の隅で治都やとが身じろぐ。一瞬仁識にしきと灰の視線が交錯した。

「透軌様が来られるこのように大事な場を、よもや欠席した者がいるのではあるまいな」

若者達が副頭の空席をちらちらと見やる。だが誰も一声もない。いかんせん、何故須樹がこの場にあらわれぬのか、誰一人として知らないのだ。せめて鍛練所に彼ら以外の若衆がいれば須樹の家に走らせることも出来たのだが、異例の休日となったためそれもかわない。

「灰、皆にちゃんと会議の日程を伝えたのだろうね」

柔らかな透軌の声だった。灰が顔を上げると、従兄の静かな眼差しが向けられていた。だが彼が答える前に、またも男が口を挟む。

「灰様、もしやきちんとお伝えにならなかったのですか。言いたくはございませんが、あまりに不手際……」

「待つてください！ 灰は……あ、いや、灰様は副頭と俺達錬徒、全ての前で会議の日程についてお伝えくださいました」

治都の声が響いた。男は治都を腹立たしげに見やり、否定とも肯定ともつかぬ唸り声一つを残して口を閉ざす。透軌は穏やかな笑みを浮かべると、気まずい表情を一樣に浮かべる若者達を見渡した。



「そうだな。確かに灰はよくやってくれている」

「透軌様、副頭の須樹が何故この場にあらわれぬのか、後程確認を致します」

仁識の言葉である。

「ああ、そうしてもらいたい。今は話し合うべきことに集中しよう。皆に集まってもらったのは現在緩衝地帯で起こっていることについて若衆としてどのように対処すべきかを話し合うためだ。まずは副頭から緩衝地帯で起こっていることについて皆に話してもらいたい」

透軌は眼差しで仁識を促す。仁識は小さく一礼すると、一連の出来事 緩衝地帯で多加羅若衆を名乗る者達が狼藉を働いており、若衆を誹謗中傷する噂が蔓延している、ということも簡潔に語った。若者達の中には既にこれらのことを知っている者もいたようだったが、大方の者は初耳であるらしく、話が進むに連れて張り詰めた空気が漂う。若衆であることに少なからず自負を抱く若者達である。どの顔にも、彼らの誇りを貶める者達への怒りがあつた。

「以上の状況を鑑み、我ら副頭のみで対処することではないと判断し、若衆としてどのようにすべきか話し合うのが適当かと考えました」

透軌は小さく頷くと、ぐるりと卓の周りに集う若者達を見やった。「緩衝地帯が不可侵であることは若衆ではもとより承知のこと、その不文律を破り狼藉を働くことは我らにはあり得ぬ。だが、ことがここまでになってしまつては、疑いを晴らすことも難しい。如何にすべきか皆の意見も聞きたい」

若者達が姿勢を正す。若衆頭とはいえ、本来は直接に言葉を交わすこともかなわぬ相手である。その透軌が意見を求めると言う。

真先に言葉を発したのは血気盛んな性格の錬徒だった。

「不可侵とはいえ、ことは若衆の名誉にもかかわること、汚名をそのままにするわけにはいかぬかと思えます。我らで狼藉を働く者達を捜し出し、捕えるべきかと」

幾人かが頷き、賛同の声がそこかしこで起こる。だが、すぐに反

論の声があがった。

「だが沙羅久も黙つてはいないのではないのでしょうか」  
はじめの若者の反駁がすぐに続いた。

「では、このまま放っておくというのか？」

「そういうわけではない。透軌様、この一件は穩便に運ぶべきかと思いません。緩衝地帯に我らの無実を訴えてはどうでしょう」

「それを信じるとは思えません。だいたい訴えると言ってもどのようになればよいのか……」

「被害を受けた街や村の代表者に直接我らが会えばいいのではないのでしょうか。実際に狼藉を働いた者が我らの中にいないことがわかれば、彼らも納得するでしょう」

「若衆全てと対面でもさせないと、そのようなことは到底無理です。それに緩衝地帯で若衆が動くことは剣呑に過ぎます。沙羅久が黙っているとは思えません」

「潔白を証明するには形が必要ではないでしょうか？ 言葉だけで信じてもらえるとは思えません」

次々と鍊徒達の間から言葉が出る。仮にも範をまとめ、若者達を率いる彼らである。はじめのぎこちなさがなくなり、矢継ぎ早の遣り取りとなった。

潔白を証明するために、緩衝地帯で狼藉を働く者を見つけ出すのか、それとも穩便にことをおさめるよう運ぶのか 結論の出ぬまま半刻程が過ぎた。皆がふと口を噤んだ時、それまで黙って聞いていた透軌が漸く口を開いた。

「副頭はどう考える。意見を聞かせてくれ」

鍊徒達の視線が透軌を囲んで座る三人に注がれる。治都もまた上座を見つめた。若衆としてどのような結論を出すのか、それは副頭の意見が大きく左右する筈である。

最初は仁識だった。注意深く、言葉を選ぶように言う。

「緩衝地帯の問題は二惣領家にも関わります。故に我らが動くにしても独断では無理でしょう。ですが、今回の一件は若衆の名誉に関

わる問題、坐して横暴を見過ごしにするわけにはまいりません。一体何者が我らを騙っているのか、それを密かに探り、我らの潔白の確かな証を見つけ出すべきかと思えます」

「見つけ出した後は如何にする」

「狼藉を働いた者達を捕えることがかなえば、緩衝地帯の警吏に差し出し、評議会に我らの潔白を申し出ればよいかと思えます」

評議会に申し出る　思い切った仁識の言葉に、皆一様に黙り込む。その沈黙を破ったのは設啓せつけいだった。

「私は仁識の意見には反対です」

透軌がその柔和な顔を設啓に振り向ける。無言で促す仕草に、設啓は一礼すると言葉を継いだ。

「この一件は我らにはなんの咎もないこと、下手に動いて沙羅久と軋轢を生じさせるよりも、噂が落ち着くまで動かぬ方がよいかと思えます。そもそも若衆が狼藉を働いたなどという出鱈目が、いつまでも通用するわけもございません。何者の仕業かはわかりませんが、狼藉を重ねれば警吏に捕えられるのも時間の問題、そうなれば此度の一件も落ち着きます。我らが動くまでもないでしょう」

仁識の意見とは真向から違えるそれである。どちらももつともな意見に思えるだけに、残された副頭、灰へと注目が集まる。

「俺にはこの一件、単純な出来事とは思えません。若衆を騙る者を捜すにしても、あるいは鎮静化を待つにしても、緩衝地帯で一体何が起きているのか正確なところを掴むのが大前提だと思います」

透軌はつと灰に視線を向けた。

「何が起きているかは明白です。一体何を掴む必要があるというのですか」

響いた声は、またも初老の男だった。僅かに苛立ちが籠るその声に、透軌は振り返ることはしなかった。ただ片手を上げてその口を封じると、静かに言った。

「灰、続けよ。お前の考えを聞かせてくれ」

「今回の一件、おそらくは何者かが明確な目的の元に謀ったことな

のではないかと、俺は考えています」

その後灰が簡潔に語ったのは、数日前須樹と話した内容とほぼ同じだった。若者達の狼藉と、それが多加羅若衆の仕業であるという噂、これが時期を同じくして同時に起こり、意図的に結び付けられたのではないか。巧みに人の心を読み、伝聞という不確かな要素をも見越して、頃合いを見計らって噂を一気に広める手口である。それにより、多加羅の迅速な対応を封じ、容易には動けぬ状況を作り出す。

だが灰は須樹に語った、その全てを言ったわけではなかった。多加羅若衆を貶めることが透軌その人への批判に繋がり、ひいては多加羅惣領家そのものを貶めることに繋がるのだという、それは省く。灰が口を閉ざした後には、重い静寂だけが残った。透軌が呟くように言った。

「それが、お前の考えなのだな」

「はい。今の段階では推測でしかありませんが」

「それでは、仮にお前の考えが正しいとしよう。その場合に、若衆としてどのように対処すべきと考えているのだ」

「もし全てが謀られていたのであれば、一連の出来事を知った若衆がどのように動くかも、既に何者かの計算のうちに入っているのではないでしょう。闇雲に身の潔白を証明しようとしても、下手をすればさらに追い詰められることになりかねません」

ですが、と灰は思いに沈むように眼差しを伏せた。

「このまま放っておけば、それもまた相手の思いつぼになりかねません。まず若衆がすべきことは、相手の真意を知ることです。そのためには情報を集めなければなりません。噂が何時から、どのようにして広まったのか、そして広めた者は一体何者なのか、それを密かに探るべきかと思えます」

「まったく、雲を掴むような話ですな！ 緩衝地帯の人々の中から、そのように真偽の程もわからぬ謀の首謀者を捜し出すのですか」

張りつめた空気に、初老の男が嘲弄の言葉を放った。だがそれは

軽々しい余韻を残しただけだった。男自身が、あまりに場にそぐわない己の言葉の軽薄さに気付いたのか、苦々しく顔を歪めた。

「確かに雲を掴むような話です」

灰は微笑した。揶揄でも皮肉でもなく、それはどこか不敵な笑みだった。

「ですが、緩衝地帯で何かを企む者達に先んじるには、彼らの思惑に乗るべきではありません。若衆がどのように動くか、それすらも彼らが考えているとするならば、その裏をかくべきです。あくまでも謀には気付いていぬのだと思わせ、逆に彼らに気取らせずに追い詰める」

あくまでも推測と仮定の話としながらも、今や全ての者が引き込まれたように耳を澄ませていた。

「既に狼藉を働く者が姿を消しているならば、探すべきは噂を広めている者達です。それも何時まで彼らが動くか、おそらく残された時間は少ないでしょう。噂を広めるのに最適な場所は多くの人が集まる場所、それも噂を広めた者が誰であるか、人々の記憶がぼやけるような、そういった場所です」

「市場、かな」

ぼそりと言ったのは治都だった。その隣りの若衆も口を開いた。

「祭りの場なんてのはどうだ？」

「それは違うだろう。一年に数度しかない。最近で言えば秋の祭礼だが、その頃はまだ変な噂はなかったんじゃないか？」

若者達の間でざわめきが広がる。

「別に噂を広めるくらいなら道端でも出来る。そこらの人を捕まえて、吹きこめばいいんだ」

「いきなり知らん奴が話しかけてきたら胡散臭いだろう。それに記憶にも残っちまうぞ」

「酒場だ」

きつぱりと言い切ったのは設啓だった。腕を組み、灰を正面から見据えた。

「噂を広めるなら酒場と相場が決まっています」

灰は小さく頷き、言った。

「あるいは賭場……それから冷都さんが言うように市場も可能性は高いと思います。ある程度しぼるとなると、やはり酒場が最も調べやすいでしょう。透軌様」

端然と黙す透軌の顔は、薄日の仄かな明るさの中で僅かに青褪めて見えた。

「若衆の中から緩衝地帯に詳しい者を選び、比較的大きな街で噂の出所を調べるべきかと思えます」

若者達の視線が透軌に向かう。静寂は暗示的であり、沈黙はさらに能弁だった。若衆としての決定を下す時であると、皆が悟っていた。

「透軌様……」

背後から初老の男が囁きかける。警告にも似た余裕の無い響きだった。少なくとも若者達にはそう聞こえた。透軌は片手を上げてそれ以上の発言を封じる。それはまるで何かを阻もうとする動作にも見えた。何を阻もうとしたのか。男の言葉か、あるいは透軌自身の迷いだろうか。

「緩衝地帯で何が起きているか、より詳細に調べることでしょう。灰の考えが正しいにせよ、誤っているにせよ、まずは情報を集めるのが先だ。その上で、潔白を証明するために動くか、あるいは静観するに留めるかを決定する。異論はあるか？」

否、と声上がる。透軌は確かめるように仁識と設啓を見やった。

「異論はございません」

仁識が言った。透軌は設啓を見つめる。その視線に、設啓は僅かに黙す。だが答えは明解だった。

「私も異論はございません」

透軌はふと俯いた。穏やかに落ち着いた面のまま、だが瞳の奥に掠めるように浮かんだものがあつた。それは顔を上げた時には消えていた。

「では、私から惣領にこの決定をお伝えしよう。まだ実際に今決めた通りに若衆が動くことになるかはわからぬ。だが、お許しが出次第、緩衝地帯の調査を開始する。副頭には適任の者を選んでおいてもらいたい」

透軌は立ち上がった。それに、若者達が一斉に起立し、姿勢を正す。

「皆、わかっているとは思いますが、軽はずみに動かぬよう。緩衝地帯で調べるとしてもそれはあくまでも極秘である。特に緩衝地帯と沙羅久の者達に気付かれてはならない」

若い従僕が会議室の扉を開ける。そこからひんやりと冷たい空気が流れ込んできた。何時の間にか熱気の籠っていた部屋に、それはまるで水のように沁み渡る。

「皆、御苦労だったな」

初老の男が待ちかねたように進み出た。恭しい動作で、まるで透軌を導くかのように扉へと腕を述べた。

「透軌様、参りましょう」

背を向けた透軌に、若衆が深々と頭を下げた。故に、扉を出て行く前に透軌が振り返り一瞬浮かべた表情を見た者は誰もいなかった。静かに扉の閉ざされる音が響いた。

鍛練所を出て冶都は大きくのびをした。ついでにぐるりと首を回して盛大に関節を鳴らす。

「ああ、肩が凝った」

「お前は何もしていないだろう」

「意見を言ったださ」

「私が覚えている限り、お前が言ったのは、『市場』というそれだけだ」

「でも灰は市場もあり得るって言ったよな」

「ええ、まあ……」

「ほら、見る。俺は役立つているんだよ」

処置なし、といった様子で仁識は肩を竦めると、ふと一点を見つめた。彼らが立つのは鍛練所の門の傍らである。視線の先には今しがた門から出て来たばかりの設啓の姿があった。外套の襟を立て、歩き出そうとした設啓がふと仁識を振り返った。僅かに首を傾げて凝視する仁識に、無表情のまま問う。

「何だ？」

「設啓、何故意見を変えた？」

「何だつて？」

「先程の会議のことだ。この前副頭だけで話し合った時は、狼藉者を探し出すべきだと言っていただろう。だが、今日は一転して何もせぬのが良いと言っていた。まるで逆だ」

「考えた結果だ」

素気なく言つと、設啓は足早に遠ざかって行った。それを仁識は無言で見やる。

「何だ何だ、副頭同士仲良くしろよな」

治都である。治都をじろりと一瞥した仁識が足早に歩き出す。彼の

の屋敷とは反対の方向だった。

「お、おい。どこに行くんだ」

「須樹の家だ。行かないのか？」

「いや、行くよ。勿論！」

何やら嬉しそうな笑顔になった治都が仁識の後に続き、灰を手招く。灰もまた後を追うと二人の隣りに並んだ。

「それにしても緩衝地帯でそんなことが起こっているなんてなあ。

最近何かと物騒だと言つし、一体どうなってるんだ」

「その物騒だという話、誰に聞いた？」

「誰つて、みんなだ。お袋や兄貴達も言っているし、うちに雇われている者達も言っている。今は緩衝地帯にはみだりに出入りしない方がいいみたいだ」

「大方、お前が緩衝地帯で変な噂を聞かないように、皆で口裏合わ



せでもしていたんじゃないのか？」

「何でそんなことする必要があるんだよ」

「お前のことだ、真犯人を捜し出すなどと言って、考えなしに緩衝地帯に飛び出しかねないからな」

「仁識、俺はそんな阿呆ではないぞ。家族だって俺のことは信頼している。それに、どちらにしろ、これから俺達で悪巧みをしている奴らを見つけ出すんだからな」

「それはどうだろうな」

治都とは対照的に気の無い口調で言った仁識は、傍らを歩く灰を見やった。

「惣領がお許しを出すとは限らない。そうでしょうか？ 若様」

半ば俯いて歩いていた灰は、はたと顔を上げた。

「惣領はお許し下さるさ。何せ若衆の名誉の問題だからな」

「だから、お前は考えなしだというんだよ。今回の一件、緩衝地帯の評議会が出るほどに話が厄介になっている。惣領が何も考えておられないと思うか？」

治都が灰を見る。

「そうなのか？」

「俺は惣領と直接話したわけではありませんが、おそらく惣領はすでにどのように対処するか決めておられると思います。仮に若衆が会議で真の狼藉者を捕えると決定しても、許しは出さず、むしろ騒動の中心となつている若衆は動かない方がいいと仰られるのではないのでしょうか」

あつさりと灰は言った。仁識も頷く。

「若様が言う通りだろうな。今日の話し合いは形だけだ。どのような結論が出ようと、惣領は若衆には手を出させぬおつもりだろう」

三人は貴族の屋敷が連なる界隈から、街衆の区域へと防壁を潜った。途端に人の姿が増える。

須樹の家に向かうには、大通りを真直ぐに進むよりも裏道を通る方がはやい。細い道に三人は踏み込んだ。寒風は遮られるが、陽光

も射さぬためじめじめと冷たい空気が籠っている。

「つまり、何だ？ 今日の話し合いつてのは全くの無意味なのか？  
じゃあ何のために話し合ったんだよ」

憮然として言ったのは治都である。

「おそらく若衆が無闇に動かぬよう、足並みを揃えるための意思統一の場だろうな。それから透軌様の手腕の見せ所を作る意味もあつたかもしれない。透軌様はおそらくはじめから結論を決めておられたはずだ。まあ、皆が一堂に会しての話し合いなど、茶番だったわけだ」

治都が顔を顰める。

「俺は時々、本当にお前は嫌な奴だと思っぞ」

「ほう、時々か」

「いや、訂正する。常日頃だ。あの会議が茶番だなどと、何か謀られた気がしてくる。だいたいそう考えているのはお前だけかもしれない」

「さて、そうかな？ 若様はおわかりだったでしょう？」

「そうなのか!？」

またも話を振り向けられて、灰は二人の顔を見た。

「ええ……まあ、透軌様の結論は決まっていたと思います」

「やはり、情報を集める、ということか？」

「いえ、おそらく、若衆としては何もせぬ、と。設啓さんの意見のようになつていたんじゃないでしょうか」

治都が唸り、仁識は涼しい顔で頷いた。

「私もそうだと思います」

「だが……結論は違ったじゃないか。情報を集めると……」

「あの結論を導いたのは透軌様ではない」

尚も何事かを言い募ろうとした治都だったが、それは途切れる。

細い路地から再び大通りへと踏み出すと、そこは雑踏である。道を下る程に小さな店が増え、活気が増していく。自然と横ではなく縦一列になつて歩く彼らは、口数が少なくなっていた。

灰は二人の後ろを歩きながら、仁識が言ったことを思い返す。彼が言うとおりに、会議は形ばかりのものだったのだろう。惣領である峰瀬は報告を受けてから迅速に動いたに違いなく、弦のような影の者達を使い、詳細に一連の出来事を調べた筈だ。そしておそらくはどのように対処すべきか、既に決めているだろう。

この一件は最早若衆の手には負えぬ。会議の結論はもとより決まっていたのだ。すなわち、若衆は動かぬ、と。だが、それは覆った。何もせぬという結論を出すことは透軌には出来なかつただろう。それを許さぬ雰囲気があつた。

「何故、わざと違う結論に導いたのですか？」

灰ははつと顔を上げた。何時の間にか仁識が傍らにいた。治都は数歩離れた前方に、人波に紛れて見える。己の思考を読んだかのような仁識の言葉である。

「どういふことですか？」

「若様は透軌様が考えていた結論をわかつたうえで、敢えて異なる方向へと導いたのでしょう」

「仁識さんも、透軌様の考えとは逆のことを言っていました」

「私は如何にもな茶番が気に食わなかつただけです。都合良く頭の見せ場を利用されるなんてつまらない。だから敢えて逆のことを言つただけです。まあ、言つたところで結論が変わるとも思いませんでした」

仁識らしい言い方である。彼は時にこのような意地の通し方をする。

「若様とてわかつているでしょう。若様が提案されたことは、既に惣領がしかるべき者達に指示しておられる筈だ。何故敢えてあのよくな意見を？」

「……少し、気になっているんです」

「何がですか」

「それは……」

灰は僅かに言い淀んだ。迷う素振りだつた。

「また今度、言います」

仁識はその答えに満足したわけではなさそうだったが、小さく肩を竦めると足を速めた。

胸の奥で燻る焦燥がある。だが、まずは確かめるのが先だ、と灰は思う。

「おおい、はやく来いよ」

治都が前方で手を振っている。その向こうに、須樹の父親が営む小さな工芸品店が見えていた。

（須樹さんが緩衝地帯から戻っていれば……）

祈るように思う。だが、灰にもわかっていた。あの須樹が、大事な会議を無断で欠席する筈がないのだ。彼があらわれなかったという事は、何かがあったということに違いなく、それを若衆に知らせることさえしなかったのはつまり、出来なかったということに相違ない。

何故出来なかったのか　その答えは一つしかない。

須樹が緩衝地帯から戻っていないであろうことを、灰は既に確信していた。

透軌とつぎは屋敷に戻り、真直ぐに惣領の執務室へと向かった。鍛練所に付き添った初老の男、彼に仕える家司けいしの姿は既にない。従僕だけが付き従っていた。執務室の前に立ち、透軌は背後を振り返った。

「ここで待て」

「承知致しました」

答えた従僕を見やり、透軌は扉に向き直る。軽く叩けば、すぐに応えがあった。扉を開ける。

執務室には峰瀬みなせと一人の老人の姿があった。玄土の一人、白玄はくげんである。手に巻き書を持った峰瀬と向き合い、何事かを話し合っていたらしい。老人は透軌の姿を見つめ、恭しく一礼した。そのまま辞そうとするのを、峰瀬の声が引き留めた。

「白玄、出る必要はない」

「ですが……」

ちらりと透軌を見やった白玄が戸惑ったような声をあげた。

「かまわぬと言っている。透軌、何用だ？」

峰瀬は卓の上に巻き書を置くと、透軌と向き合う。暗色の衣と対象的に青白い顔だったが、透軌を見つめる瞳には鋭い強さがある。透軌は僅かに俯いた。

「緩衝地帯で起こっていることに、若衆としてどのように対処するか、決しました」

「若衆の話し合いは今日であったな。して、結果はどうなった？」

「若衆の汚名を晴らすため動くにせよ、静観するにせよ、今はあまりに情報が少ないと考え、まずは緩衝地帯に詳しい者を選び、何が起こっているかを調べることに決めました」

「ほう……」

峰瀬が僅かに笑みを浮かべた。

「何を調べようというのだ」

「此度の一件は、何者かが若衆を貶める明確な目的のもとに謀ったことである可能性があるとの意見が若衆で出され、その真偽のほどを確かめるために、何者が若衆の噂を広めているかを調べることにいたしました」

透軌の落ち着いた声音が、部屋に響く。それはあまりに静かに、どこか虚ろだった。

「なるほど、そしてお前自身はどうしたいと思っている」

「私は若衆頭です。若衆として決したことを行わせていただきたく、惣領にお許しいただきたいと思えます」

「ならば、調べるがいい」

透軌は父親の言葉に顔を上げた。そこに浮かんだ表情に、峰瀬は笑んだ。

「どうした。意外そうだな」

「私は若衆が動かぬことを父上がお望みだと考えていました」

「確かに、若衆が動くことは望ましくはない。特にことがここまでいたっては、下手に動いてはかえって取り返しのかねないことになりかねない」

「では……何故……？」

「なに、それも面白いと思うからだ。透軌、私は確かに若衆には何も行動を起こさせるつもりはなかった。それでもこれからの多加羅を担う若者達がどのように考えるか、興味深くもあつたのだ。もしも真実多加羅のためになる意見が出たならば、惣領として認めることも考えていた」

言いながら、峰瀬は椅子から立ち上がると、窓の外を見つめた。その背を透軌は言葉も無く見つめる。

「多加羅若衆を貶める目的を持って……か。案外にそれは射ているかもしれぬな」

呟くような声に、白玄が驚きの表情を浮かべた。

「惣領、それはまことにございますか？ 由々しきことですぞ。一体何者が……」

「それがわからぬから調べるのではないか」

「よろしいのですか……?」

透軌がひそりと問うた。

「ああ。どうせならば言い出した本人に任せればよい」

「……………」

「何者かが謀っているかもしれないという先程の話、大方考えたのは灰かいだろう」

透軌は目を見開く。峰瀬はくつくつと笑い声をあげた。心底おかしげな響きだった。

「相も変わらず何を考えているかわからぬ奴だ。灰と、若衆の中から適任者を選び、緩衝地帯での出来事の背後を調べさせてみればよかるう」

透軌はなおも背を向ける峰瀬を凝視し、そして頭を下げた。峰瀬は硝子越しにそれを見つめた。透軌の姿は僅かに歪みを帯びて、光りを弾く硝子の上につつすらと映る。

「承知致しました。早速に適任者を選び、緩衝地帯の調査に向かわせます」

淡々と言葉を紡ぐと、透軌は踵を返した。

背後に扉を閉じて、透軌は暫し立ち尽くした。執務室の外で待っていた従僕の視線を感じながら、石床を見つめる。体の芯から熱を奪うような空気よりもなお冷たく、凍えるような凝りが胸の内にあつた。

「絡ちやく玄を私のところへ」

命じる声は低かった。短く答える声を聞き、透軌は己の部屋へと向かった。

白玄は青年の背が扉の向こうに消えてから、峰瀬を振り返った。

男はなおも窓の外を見つめている。半ば壁に凭れ、物思いにふける様である。

「惣領、どういっつおつもりですか」

「どう、とは？」

「緩衝地帯の件は既に影達に調べさせているではありませんか。何故わざわざ若衆に調べさせるようなことをなさるのです」

「面白そうだからだ」

「御冗談を……」

「冗談ではないさ」

峰瀬の声音に、笑いの名残は微塵もなかった。

「若衆には動かぬよう命じる、そのようにお考えではなかったのですか？」

「そうするつもりだったが、気が変わった」

「先程も仰られていましたが、緩衝地帯の出来事が若衆を貶めるために謀られたことであるというのは……」

「まだ確証はないが、おそらくはその通りだろうな。影達の報告からそうではないかと思っていた」

白玄は主を凝視した。

「……それならば、尚更に若衆が動くのはまずいのではないのですか。それに若衆が動くことにさほど意味があるとも思えません」

「そうかもしれない。だが、灰が敢えて若衆を動かすよう仕向けた、というからな。何か魂胆があるのかもしれない。自由にさせてみるのもよいだろう」

「……灰様の御意見だから認める、と？」

白玄の声音に、ふと峰瀬が笑んだ。それはどこか暗い笑みだった。「そう、とも言えるかもしれない。へまをすれば責を問わねばならぬがな」

「ですが、それでは……」

ふと白玄は顔を歪めた。

「あなたは、厳しいお方だ……」

「灰には寝たふりをそろそろやめてほしいだけだ。言っておくが、あれは大人しげに真面目な顔をしているが、大抵のことから目を逸



らして己の力の半分も出さずに逃げていただけだ」

「灰様のことではございません」

峰瀬がふと口を噤んだ。

「私が申し上げているのは透軌様のことです。あれでは、透軌様がどのようなお気持ちになるか」

白玄は峰瀬を見つめた。硝子に映る峰瀬の顔はその半分が解けるように外界の光に滲んでいる。表情は動かず、恬淡として見えた。

諦め　？　それだけではない、と白玄は思う。諦めだけであれば、むしろその方がよい。

白玄は続く言葉を呑み込んだ。言っではならぬのだと、どこかで戒める己の声が聞こえていた。三年前に灰が多加羅に来てからの惣領家を、白玄は間近に見てきたのだ。その中で気付くことは多々ある。例えば、峰瀬と透軌、この父子の在り様もその一つだった。

「惣領、透軌様に闇のことをお伝えにはならないのですか」

出た言葉は、白玄自身にも予期せぬものだった。峰瀬を見れば、彼もまた驚いたようだった。

「どうした。突然に」

「お答えいただけませぬか」

「透軌にはまだあれのことを伝えるには早い」

「ですが、次期惣領である透軌様は知るべきではありませんか？」

「白玄」

まるで諭すように、峰瀬が呼びかける。

「案ずることはない。時期が来れば透軌には知らせる。どのみち、知らせねばならぬのだからな。私の命が尽きる前に、言霊を透軌に託さねばならぬ」

白玄はふと息をついた。だが、次の峰瀬の言葉に顔を強張らせる。

「だが、万が一の場合に備える必要はあるかもしれぬな」

「つまり……？」

「人柱が必要かもしれぬ。封印が弱まっている」

ひそりと峰瀬は言った。人柱、その忌まわしい響きに、白玄は慄

然とする。彼はその言葉が意味することを知っていた。それは嘗て峰瀬の父親が闇を押さえるために、行ったことである。

人の命に言霊の欠片を刻み、闇に与える。人は生きながら闇に喰われ、その身に刻まれた言霊で闇を縛るのだ。人柱とはつまり、闇を抑えるための生贄だった。先代惣領の時には、はじめは囚人を、その次は浮浪者を使った。最後は行くあてのない孤児だった。先代惣領が闇に命を与えることに何ら躊躇わなくなった頃には、人柱の数は既に十人を超えていた。次第に歯止めを失っていく主の姿を白玄は傍らで見ていたのだ。その時の無力感を、今また彼は感じる。

「惣領、どうかそれだけは……。灰様のお力で今一度闇を滅すれば、透軌様が継承なさるまで言霊で封じることかありませんか？」

「白玄、もう私の体がもたぬのだ。あと一度封印を解けば、再び闇を封じることがかなわぬだろう。仮に封じることがかなおうとも、私の命が尽きるかもしれぬ。そうなつては透軌に言霊を継承させることすら不可能になってしまうのだ」

白玄は峰瀬の青褪めた顔を見つめた。何を気弱な、と言いかけてその言葉は喉の奥で消える。峰瀬の言葉が真実を告げているのだと悟ったが故だった。

「ですが……。一体誰を人柱にするというのですか……」

峰瀬がゆるりと顔を白玄に振り向けた。そこには如何なる感情も浮かんではいなかった。迷わないその顔に、白玄は言葉を失う。不意に白玄は疲労を感じた。年を取ったのだ、と思う。あまりにも年老いた。そして、あまりにも多くを見過ぎたのだ。白玄は峰瀬から視線を逸らせた。答えを聞くことを心が拒絶する。出た声は己でも情けないほどに弱々しかった。

「申し訳ございませんが、本日は下がらせていただきたく思います」「許す」

白玄は一礼すると、執務室を後にした。

峰瀬は老人の小さな背中を見つめ、顔を背けた。扉の閉じる音が無機質に響いた。

透軌の部屋は三階にある。窓からは屋敷の前に伸びる大通りが見渡せた。今、道を行く人はいない。門を守る衛兵の姿だけがある。それがまるで風景に嵌め込まれた物のように彼には思えた。実際、彼にとつて衛兵は風景の一つに過ぎなかった。たまたま衛兵の交替の場を目にして、そこにいるのが確かに人であるのだとわかったのは、まだ幼い頃だった。それを覚えてるのは、傍らに母親の姿があつたせいかもしれぬ、と彼は思う。その頃は彼の母親もまださほど心を病んではいなかった。稚い息子とともに屋敷の庭を散策することができる時もあったのだ。

彼女が自ら命を絶つたのは、彼が九歳になつた頃だった。

軽く叩かれた扉に、透軌は応える。間を置かずして、男が歩み入つて来た。玄士の一人、絡玄である。恭しく一礼する絡玄に、透軌は言った。

「呼び立ててすまない。若衆の会議の結果を知らせておこうと思つてね。若衆では緩衝地帯で何が起つているか、密かに情報を集めて調べることに決した」

「そうでございますか」

透軌の言葉がどれ程意外なものであつたにせよ、絡玄の表情に変化はなかった。

「父上に申し上げたところ、決した通りに動く許可をいただいた」

「……それはまことで？」

はじめて声音に驚きが滲む。絡玄が透軌を前にして示す態度は常に一定だった。透軌は仮面にも似たその一角が崩れたことに対して僅かな喜びを感じた。だが、その歪な感情の中には打ち消し難い苦さもあつた。

「若衆としては動かぬが得策、透軌様にもそのような結論となさるよう申し上げます。何故、若衆で異なる結果となつたのでしょうか」

透軌の喜悦はすぐに消える。

「灰だよ。緩衝地帯での出来事が、若衆を貶めるために何者かによって謀られたことである可能性がある」と彼が言ったのだ。動く動かぬ以前にそれを調べるべきだと。最終的には副頭も灰の意見に倣った。あの場で若衆として動かぬという決定を出すことは、最早出来なかった」

推測、そう前置きしながら、灰はあっさり透軌の結論を阻んだのだ。それを思い出す。ただ淡々と言葉を紡いでいるようではないながら、何時の間にかあの場にいる全ての者が灰の話に聞き入っていた。透軌ですら何時の間にか、緩衝地帯での出来事が何者かに仕組まれたことなのだと、半ば信じていたのだ。そのことに気付いた時に生じた感情を、透軌は名付けることができない。屈辱だろうか。単純な驚きかもしれぬ。否、それよりもさらに激しく、どこか引き攣れる痛みを伴っていた。

灰は、あのように話す者だったろうか、と透軌は惑う。若衆の副頭に彼を指名したのは絡玄の進言によるものだった。身近に置くのは監視するため、要職に任じたのはその能力を見極めるためだと。絡玄の意を受けた若衆から、灰の動向についての報告も逐一受けている。灰に気をつけるべきだと、そう言った絡玄に、はじめは何をそこまで気にする必要があるのだ、と透軌は思ったものだ。だが今では透軌にとって灰の存在は、不可解な焦燥を煽る小さな棘となっていた。

思い返せば、三年前に灰が多加羅に来てから、従兄弟同士といえどもまともに言葉を交わしたこともない。灰が若衆副頭となつてからは、諸連絡を透軌に伝えるのは彼の役目となっているが、それはあくまでも事務的なものでしかなく、会話と呼べるほどのものではなかった。

透軌はひそりと呟いた。

「絡玄、私にはわからぬのだよ。若衆は眞実私のもとにあるのか？」  
「勿論でございます。報告を聞いても、若衆の中で透軌様は眞の主

として慕われておいでです。若衆頭は透軌様、あなたです。未来の多加羅を担うお方です」

透軌はうつすらと笑んだ。絡玄が心の底から言っているのは知っていた。絡玄にとつて透軌の力が如何程のものかはさして大きな問題ではないのだ。透軌が次代の多加羅惣領である、それが彼にとつては最も重要なことであり、そうであるからこそ透軌を支え力となるのだ。

私はわかっている

透軌は突き放すように乾いた心地で思う。己の限界、己の弱さ、多加羅を継ぐ者として父にはるかに及ばぬ己の全てを彼は自覚していた。なればこそ、目の前の男を恃む。届かぬ先に手を延ばす手段として、歩むことのかなわぬ道を進む伝手として。そのようにして己は生きるのだと、それしか生きる術がないのだと、既に知っていた。

「緩衝地帯では、若衆の中から適任者を選び、灰を中心に動くこととなる」

透軌は言った。絡玄は言外の意味を汲んだのか、頷いた。

「では、何があるうとも余さず伝えるよう、設啓せつけいに命じておきましよう。灰様がどのような思惑を有していようと、我らには明らかとなるでしょう」

「絡玄、彼は灰の意見に倣ったのだ。信用できるのだろうね」

「設啓は卸屋おろしやです。卸屋は裏切りません。それが己に利あることであれば尚更に、忠義を尽くす筈です」

「己が利潤のための忠義か……」

「はい。卸屋とはそういうった者達なのです。利益こそが彼らには意味ある唯一のものなのです。くだらぬ輩とはいえ、そういうった意味では信用することが出来ます」

「設啓から報告があれば、私にも知らせてくれ。どうやら灰は私に全てを明かすわけではないようだ」

透軌の言葉に、絡玄は肯った。

透軌は窓の外を見やる。衛兵が変わらず直立している。そろそろ昼の交替の時間の筈だった。絡玄と話している間に交替したのかもしれない。だが、それが先程と同じ人物なのか透軌にはわからなかった。

昼から夕刻へと向かう一時だった。

灰は足を止め、眺望を見やった。星見の塔へと向かう道から見渡せば、多加羅の遙か高みに揺れる空の有様は広く深い。どう、と風にも似た音を響かせて傍らに又駆が降り立ち実体化した。先程から木立の間を風のように駆けて大気と戯れていたが、それにも飽きたらしい。漆黒の毛並みを灰は撫でた。鼓動のかわりに手に伝わるのは、豊かな自然の息吹だった。

灰が街にいる間、又駆は大方を多加羅の背後の山で過ごす。山に封じられた闇も今は静かに眠っている。寄り添う又駆の体からは、木々の甘い香りが感じられた。

その存在に気付いたのは、灰よりも又駆の方が先だった。ゆるりと銀灰の瞳を差し向ける。つられて顔を向けた灰は近付いて来る弦の姿を認めた。又駆は目を細めると、興味が失せたように顔を背けた。

弦は灰の前で叩頭すると言った。

「惣領が若衆の決定にお許しを出されました」

「そうですか」

相変わらず、と灰は思う。峰瀬の考えは読めぬ。わざわざ弦に伝えさせるところに、何かしらの意図を感じずにはいられぬ。おそらくは、若衆が出した結論、それに結びつく意見を出したのが灰であると峰瀬は察したのだろう。透軌はそこまでのことは言つまい。

是認であると同時に警告　おそらくはそういうところなのだろう。

伝えるべきことを伝えた弦が立ち上がると踵を返した。遠ざかるその背に、灰は声をかけていた。

「お願いしたいことがあります」

弦は僅かに目を見開いて灰を振り返った。弦は灰の直属の家臣と

なっているが、その実灰が弦に何かを命じることが殆ど無いのだ。弦は再び灰の前に跪いた。又駆が僅かに首を傾げ、横眼でそれを見やる。

「何でしょう」

「須樹<sup>すき</sup>さんを捜していただきたい。昨日緩衝地帯に行つたまま戻らぬようなのです」

灰は言った。

治都<sup>やと</sup>と仁識<sup>にしき</sup>、その二人とともに須樹の家を訪れた。彼の父親は突然に訪れた三人の若衆に驚いたようだった。須樹はいまだに戻らぬ、そう言った父親は不審に思っている様でもなかった。大方笠盛<sup>かさもり</sup>の近くに住む親戚宅を訪れ、引き留められてでもいるのだろう、とのことである。

今日、あいつは休みの日に当たっているのだろうか？

逆にそう尋ねてきた父親に、三人は答えることが出来なかった。今日に至るまで須樹が戻らぬのだから、そう考えても不思議ではなく、若衆で大事な会議があったことを言えば、父親も須樹が戻らぬことに不安を感じるに違いない。

治都と仁識の顔から、須樹の身を案じていることがわかった。それでもおそらくは戻るのが遅れているだけなのだと、そう思っているだろう。だが、そうでないとしたら、灰は焦燥とともに思う。須樹の身に何かが起こったのではないか。その不安には根拠がある。「何故多加羅に戻つて来ないのか、緩衝地帯で何があったのか、それを調べてください」

「何があつたか、ですか？」

「須樹さんは父親の商品を笠盛の酒場に持つて行ったそうです。ですが、それ以降の消息がわからず、大事な会議がある今日になつても帰つて来ていません」

「須樹殿の身に何か起こつたとお考えなのですか？」

数日前、灰は須樹に己の推測を話した。緩衝地帯での出来事は何者かが謀つたことかもしれぬ、いまだに動いている者を追えば、解



決に繋がる可能性がある、と。それを弦に伝える。

「もしかすると須樹さんはあやしい者の動きを掴んだのかもかもしれません。笠盛は緩衝地帯の中でも一、二を争う大きな街です。そのような場所ならば、多加羅を貶めようとする者達が動くには都合がよい。そしていまだに戻らぬということは……」

「相手に勘付かれた可能性があるとお考えなのですね」

灰は頷いた。須樹に対して己の考えを容易く口にすべきではなかった、と今更ながらに悔いを感じる。全て推測の域を出ぬ不確かなことであり、軽はずみに口に出すべきことではなかった。灰が話した内容故に、須樹が厄介事に巻き込まれたのであれば、それは灰の責任であり過ちだった。

「あるいは多加羅を貶めようとする者などいないのかもしれないませんが、笠盛程の規模の街ならば、人が踏み込むに相応しくない場所もあるでしょう。何事かを探ろうとして踏み込んだ可能性もあります」

「緩衝地帯を調べるべきとのお考えを若衆で出されたのは、彼の身を案じたためですか？」

弦の問いに灰はただ淡く笑っただけだった。何かを察したのか、弦はそれ以上問おうとはしなかった。灰が答えれば、弦は峰瀬に報告するだろう。それが彼の役割なのだ。峰瀬には知られたくなかった。無論、灰が弦に命じたことを峰瀬が知れば、自ずと灰の考えは見通されるだろう。弦が伝えるか否か、それは灰にはわからぬ。伝えぬよう指図するつもりはなかった。そのような立場に己はないのだと、灰は思う。

須樹の身に何が起こったのか、それはまだわからぬ。何も起こっていないのかもしれない。一つ確かなことは如何なる事情があるうとも、峰瀬が彼を救うために動くことはない、ということだ。例え謀略が実際にあり、それに須樹が巻き込まれたのだとしても、今回の一件は若衆に留まらず多加羅全体に関わることだ。そうであれば尚更に、一人の青年の身など顧みないだろう。

だが灰が個人で動くこともまた出来ない。それが不可能なのだ、

灰は既に理解していた。己が多加羅という枠に嵌め込まれ、縛られていることに彼は気付いていた。だからこそ若衆を動かす。須樹がもしも緩衝地帯で今起こっている一連の出来事に巻き込まれたのなら、須樹を追うことはその解明にも繋がる。

己の行動、その是非を問うて迷う気持ちはないわけではない。だが、思い込み、若衆を振り回すことを躊躇わないわけではない。だが、それにも増して須樹の身が案じられた。若衆として一連の出来事を調べることとなれば、少なくとも緩衝地帯で動く名目は立つ。

「承知致しました。まずは笠盛に向かい、須樹殿の足取りを追いましょう」

「それからもう一つ、お願いがあります」

「何なりと」

「俺は怪魅けみの力で須樹さんが無事でいるかどうか探ってみます。その間、傍で見守っていただきたい」

弦の表情が崩れる。あらわれたのは驚きだった。

謀略を巡らせる者達に勘付かれたならば、須樹の身は危険に晒されたかもしれない。そうでなくとも街には不文律がある。規模が大きいに、街の裏側に集う闇は深まるのだと。表からは見えず、裏を仕切る者が必ずと言っていいほど存在するのだ。何もわからずに踏み込めば危険に巻き込まれる可能性もある。もっとも、踏み込めば命も無いと言われる來螺ウツリの裏側程に危険な場所が、この多加羅にあるいは緩衝地帯にあるとも思えなかったが

仮に須樹がそのような場所に踏み込んだとしても、危険な場所であると彼とて十分にわかっていた筈だ。身を守るための力もあった。その彼が戻らぬのだとすれば、それが意味することは何か。今の緩衝地帯は不穏だ。何事かに巻き込まれ、既に命を落としたのではないか。口に出さぬ灰の恐れを弦も察したようだった。

「怪魅の力でそのようなことが可能なのですか？　もしや場所までも特定できるのですか？」

「細かな場所までは無理だと思いますが、おそらく、気配を追うこ

とはできません。ただ、容易くはないうえに距離が離れているので、全ての意識をそちらに向けなければいけなくなります。そうになると、周囲のことまで気を配ることができなくなる。例えすぐそばで剣を振りかざされても気付けなないと思います」

「その獣がお守りするのではないですか？」

弦の言葉に、又駆が僅かに牙を剥き出した。牙蒙がせうというその名の由来である牙は、禍々しく鋭い。灰はそれに苦笑した。

「又駆では何かあった時に相手を殺しかねない。このような山の中で誰かに見られるとも思えません、何があるかわかりません。人に見られることだけは避けたいのです。お願いできますか？」

「承知致しました。何時、行つのですか？」

「今です」

灰は笑んだ。

灰が向かったのは星見の塔の背後に広がる山腹だった。木々の間を縫って暫く斜面を登ると、前方にばかりと空いた空間が見えた。

中央には大木があった。だが、その木に命の気配はない。おそらくは雷に打たれたのだろう。無残に折れた幹は風雨に晒されて白色化し、嘗ての威容も寂々と崩れつつあった。

その木の根元に灰は腰を下ろすと胡坐をかいた。続いて又駆が傍らに寝そべると、立ち尽くす弦を見上げて低く唸った。灰はなだめるように又駆の首筋を撫でると、弦を見やった。

「頼みます」

弦が頷くと、灰は深く息を吸って目を閉じた。ゆつくりと細く息を吐き出す。

次の瞬間、弦は空気が振動するような奇妙な感覚を覚えた。無音のそれは、しかし数百もの鈴を一齐に鳴らしたかのような不思議な余韻を残した。次いで、疾風にも似た気配が奔り抜ける。髪の一筋として揺らすことなく、それは弦の傍らをすり抜け、一気に上空へと駆け上がって行った。

俯いた灰の瞳はしつかりと閉ざされ、呼吸は深い。瞳の藍を映したように、瞼は微かな青に染まっている。まるで眠っているように見えた。影として灰を見守り続けた年月は短くない。そのいずれの時も、灰は弦の気配を過たず捉えていた。だが、今灰はあまりに無防備に見えた。

ゆつたりと地面に寝そべった又駆の瞳が油断なく弦に向けられている。それに弦は小さく笑んだ。男が余人には決して見せぬ表情だった。

「案ずるな。お前の主は私が命にかえてもお守りする」

ひそりと囁く。それに、獣はふいと視線を逸らせた。仕様がなから認めてやるとでも言いたげな仕草だった。

弦は意識を研ぎ澄ませて辺りの気配を探りながら、灰の前に跪いた。

解き放たれた瞬間に、灰の意識は既に多加羅の上空にあった。遙か下方で弦が跪くのを感じた。又駆が駆ける灰の意識を見つめている。灰は大気を伝い広がる怪魅の力に己の意識をのせた。地面に座る現実の感覚が遠のき、幾層にも重なりうねる自然の波に包まれていた。灰にはそれが、膨大な量の微細な粒子が揺れ動く様にも映る。

怪魅の力で離れた場所を探ったことは今までもある。だが、あくまでも現実の体から見ていたのだとわかる。いわば第二の視野だ。己の体からこれほど遠くまで意識を広げたことは一度もなかった。まるで実際に空を飛んでいるかのような感覚だった。無論、体から意識が切り離されることなどはない。灰がしようとしているのは己の怪魅の力を網のように広げ、そこから外界を感じ取ることである。体から意識が抜けだしているようにも感じるが、己の体を起点に意識の触手を伸ばしている、と言った方がいいだろう。

灰は精神を集中した。今するべきこと、それは須樹の無事を確かめることだ。地上に数多溢れる命の中で、特定の一つを見つけ出すことが出来るのか。灰にはそれが可能であるとわかっていた。だが、

一つ懸念があるとすれば、それは己の怪魅の力がどこまで広げられるか、ということだ。

さらに怪魅の力を開くと、天地の間を埋める数多の存在が意識の内で弾けた。それは物質であり、命であり、水であり、風であり、全てを象る光を帯びた粒子だった。音であり、静寂であり、旋律にも似た大気の揺らぎだった。人の密やかな囁きが羽音のように重なり、幼子の小さな手が気紛れに触れた小石が、溜息のような音をたてた。どこかで稟りんの澄んだ笑い声が聞こえた。

それは奔流に巻き込まれる様に似ていた。己の意識すら呑み込まれそうになる。灰は己の意識を守るように、周囲に網を張り巡らす。それに弾かれて彼を呑み込みまんとしていた荒波のようなうねりが遠ざかった。その間にも多加羅の街は背後に遠ざかる。意識の網はいまや幾つもの村や街の上空を奔り抜け、遠く広がる田園風景をも捉えていた。田園を通り越せば、緩衝地帯である。

流れる地表にぼつりぼつりと光が見えた。街道を行く人の姿だ。光の筋を残して駆けるのは子供のようだった。

さっと視界を横切った鳥が何であったかまではわからなかった。風切羽が空気を打つ音が鋭く響いた。果たして鳥は灰の気配に気づいたように旋回すると、さらに上空へと羽ばたいていった。掻き混ぜられた大気が渦を巻く。

時の流れは瞬く程の一瞬のようにも、粘りつくように緩慢な永劫にも感じられた。

漸く緩衝地帯の上空に至った時、灰は己の怪魅の力が弱まったのを感じた。目的のみを目掛けて広げた力の網は薄く引き伸ばされ、僅かな揺らぎにも吹き散らされそうなほどに希薄になっている。

あと、少し

思うままにさらに先へと伸ばす。と、周囲の光景がぼやけた。ま  
ずい、と思う。限界に達したのか、己の意思とは裏腹に怪魅の力が  
収縮しようとしている。

まだだ

念じる。さらに視界が狭まる。引き戻そうとする本能と、なおも先に進めようとする意思との狭間で、灰はぎりぎりまで精神を開放した。須樹を象る光を探る。ただそれだけを目指す。不意に負荷が消えた。大気を切り裂き、人波を突き抜け、幾重にも連なる障壁家壁だろつか　をすり抜けて灰はたった一つの光の元へと奔っていた。一瞬大地の密やかな温もりを感じ、視界が開けた。光、と見たものは一人の姿を形作った。暗闇の中だろつか、石壁に凭れて座り込んでいるように見えた。須樹だ。

灰の意識が須樹の元へと届いたその時、須樹が顔を上げた。その視線が確かに灰を捕えた　と、思った瞬間、灰の意識が弾けた。全てが白一色に塗り潰される。一点に収束し、叩きつけられるようにして灰の意識は己の体に戻っていた。精神が粉々に砕かれたかのような衝撃だった。苦痛など感じる筈もなく、だが酷使された精神が引き絞られた弓弦のように軋んでいる。

大きく息をはくと、それは僅かに震えを帯びていた。

「……様、灰様！」

耳元で不意に声が響いた。聴覚に次いで、体の感覚が戻る。弦が灰の肩に手を置いて顔を覗き込んでいた。灰は顔を上げる。

「大丈夫です」

自分の声が遠い。体と意識に齟齬がある。奇妙な浮遊感は、呼吸を繰り返すうちに収まった。ふと灰は顔を顰めて唇を触った。指先に赤い。怪魅の力を開放している間に、口の中を切っていたらしい。金っぽい血の味がしていた。痛覚すらも切り離されていたのだ。

「俺は、どうなっていましたか？」

ぼつりと問うた灰に、弦は迷うような素振りを見せた。言葉を選ぶような間の後、弦はごく短く答えた。

「お苦しそうでいらした」

確かに無理をした、と灰は思う。余人に見せたいものでもない。あのように怪魅の力を使えば、己の身を守ることすらままならぬ。それは灰にとって恐怖ですらあった。無防備に過ぎる。

ならば何故、弦に託した

ひそりと囁く内心の声だった。

彼しかおらぬからだ

灰の怪魅の力を知り、なおかつ彼の身を守るに違いない者は弦しかいない。

都合の良いことだな。普段は信じようとせぬものを

灰は小さく頭を振った。埒もない思考を押し込めると、弦を見上げた。男の顔は普段と変わらず、こちらを見つめている。だが、その表情が僅かに強張っているようだった。

「須樹殿は御無事なのですか？」

「彼は生きています。おそらくは笠盛のどこか……地下の一室にいます」

「誰かに捕われているということでしょうか」

「わかりません。俺がわかったのは、小さな一室、暗闇の中にいる、ということだけでした」

笠盛は小さな街ではない。須樹を探し出すのは容易ではあるまい。だが、須樹は生きている。今はそれさえわかれば十分だった。

「須樹さんを捜してください」

「わかりました」

弦は頷いた。だが、なおも立ち上がろうとせぬ。灰を見つめる表情に、案ずる色があった。それを灰は意外に思う。弦は灰に対する時、常に感情の一切を削ぎ落したような態度で接する。内心の思いを悟らせることは滅多になかった。

灰は言った。

「行ってください」

「星見の塔までお送りします」

「俺は少し休めば大丈夫です。又駆もいる。須樹さんのことを頼みます」

弦は逡巡するようだったが、漸く頷くと立ち上がった。

木立の向こうに遠ざかる弦の姿を見送り、灰は傍らに蹲る又駆の

頭を撫でた。温かな波を感じる。又駆を象るそれが、まるで灰を癒すように指先から沁み渡る。それが錯覚でないことを灰は知っていた。体の奥で、渦巻くような力が生じる。又駆の力を与えられたのだ。

「ありがとう」

囁くと、又駆は目を細めた。嘗て神と呼ばれた存在は又駆のようなものだったのかもしれない、と　そう言ったのは峰瀬だった。灰も然りと思う。隔絶した命の、その頑なな殻すらも透かして柔らかに力を分け与えることは、人には到底無理なことだった。

灰は彼方へと視線を投げる。そこに宵の兆しを見つけた。この場に来たのはまだ夕刻になる前だった。怪魅の力を開放したのは束の間のことと思っていた。だが、思いの外時間が経っていたらしい。それもおそらく一刻以上だ。感覚と現実の乖離に今更ながらに気付き、驚きを感じる。

灰が怪魅の力を開放していた間、ずっと弦は灰の傍らで微動だにせず、彼を守っていたのだろう。そう思うと、僅かな居心地の悪さを感じた。彼が灰に従うのは峰瀬の命があつてこそだ。その彼に命令を下すことに灰はいまだ抵抗があつた。だが、若衆も緩衝地帯で動くとはいえ、出来ることは限られている。須樹を見つげ出す。緩衝地帯で暗躍する者達がいるならば、その正体を暴く。そのためには弦の力が必要だった。弦ならば必ず何かを掴んでくるだろう。

信じようとせぬものを

再び呟く声があつた。嘲笑う響きである。

信じるか否かは問題ではない

灰は思う。この多加羅で秘することの多い灰にとって、弦こそが最も彼を知る人物であることは間違いない。影であることを是とし、惣領家を守ることに命をかける弦であればこそ、灰も己の身を預けることが出来たのだ。そこに信頼関係など、そも必要のないものなのだ。

本当にそうか？



ひそりと、響いた声から灰は意識を逸らした。

星見の塔にはやく帰らねば、と思う。それでもまだ動く気になれなかった。

灰は木の幹に背を預け、空を仰いだ。宵の藍は水底に似ている。小波だつ水面を通して見るように掴みたい。見通せぬ底に何かがあるのだろうか。あるいはただ空虚なのだろうか。

見えぬこと、それは恐ろしくもあり、時に何かしら許しにも似ている。見通せぬことも、見ようとせぬことも許容して、ただ深くある。

灰は衣の下から首にかけている玉を引き出した。縊り糸に連ねたそれは六つ、それぞれはさほど大きくもない。光沢があるように見えるが、実際にはただ引き込まれるように黒いだけだ。硬質でありながら、まるで雫のように捉えどころなく柔らかくも見える。六つは握り締めればすっぽりと拳に収まった。

灰は膝を抱え込むとそこに半ば顔を埋めた。多加羅の街並みが静かに暮れようとしていた。

## 61 (後書き)

今回で第一章が終わります。次からは第二章「現しの影」(「うつしのかげ」と読みます。)がはじまります。  
今後ともよろしくお願いいたします！

## 第二章 現しの影

一つ、二つ……指先にしつとりと柔らかな花びらを数える。触れればそこから甘い芳香が立ち上った。花瓶に活けられた花はたった一輪、彼女の好みをよく知っている侍女の計らいだろう。大輪でありながらどこか寂しく、仄かに震えるのが己の心に添うように感じる。八つ、九つ……そこまで数えて、椎良は顔を上げた。慌ただしく近付いて来る足音が聞こえる。

小さく溜息をついて椎良は花弁に触れていた手を膝にそっと置いた。つとめて穏やかな笑みを浮かべた丁度その時、前触れもなく扉が開く音が響いた。

「椎良、今日はどんな具合かしら？」

答える間もあらばこそ、足早に近づいて来た相手に頬を撫でられる。

「まあ、どうしたのかしら。顔色が悪いようだわ。寒いんじゃないかしら？」

「そんなことないわ。十分に暖かいわよ」

「そんなこと言っても、お前は我慢強い子だもの。昔からそうだったわ」

「お母様、本当に大丈夫だから」

「いいえ。お前のことは私が誰よりも知っているんですよ。もう少し炉の火を強くさせましょうね」

侍女を呼ぶ声が響いた。それに椎良は出かけた言葉を呑み込む。顔を俯けて溜息を隠した。こうと思いきんだ母親を止めることなどできないのだと、椎良はよく知っている。それは昔から変わらず、そして父親が一年前に亡くなってからはさらに拍車がかかった。娘を気遣う母親の真心だとは思いつつも、椎良には時に息苦しくも感じられる。

「椎良、今日はお前には是非とも会いたいという方が来られているの

よ

母親の明るい言葉に、椎良は顔を上げた。その仕草に母親が慌てたように言い募った。

「ああ、いいの。お前はそのまま。無理に動いて怪我でもしたらどうするの」

椎良は内心に生じた苛立ちを押し隠し曖昧に微笑む。

視界が闇に閉ざされて既に十年、慣れ親しんだ惣領家の屋敷であれば大方は一人で動くことが出来る。彼女は最早十六の少女ではないのだ。そのことを、この母親だけは何時までも知ろうとしない。椎良が光を失ったことを嘆き悲しみ、その運命を呪い、そして娘の身に起こった不幸に涙する母親。何年経ってもそこから脱しようとしていない。そこまで考え、椎良は己を戒めた。

母親が負った傷は、椎良のそれとはまた違うものなのだ。彼女がまだ深く囚われていることを、どうして責めることが出来るようか。

「さ、こちらへ。この子が椎良ですよ」

「お噂以上にお美しい」

母親の言葉に続いて聞こえた男の声に、椎良は顔を振り向けた。

「椎良、玄土の正章せいしょう殿よ。惣領がお亡くなりになられてからは、何かと助けてくれていたお方ですよ」

ええ、知っているわ。椎良は思う。

「玄土様、御高名は母からいつもお伺いしています」

「一体どのようにお話しをされているのでしょうか。恐れ多いことです」

「父が亡くなってからは、玄土様が梓すし魏けいを支えておられるとか」

「私などまだ若輩でございますよ。お父上の偉大さを日々痛感するばかりです」

目の前に跪く気配がした。椎良は微動だにせぬまま、目の前にいるであろう男の姿を想像する。声は深い。年の頃はおそらく五十前後だろうか。衣擦れの音はさらさらと心地良い。上質の絹に違いない。身繕いには人一倍拘る人物なのだろう。

(それだけでお母様の評価は上がるもの)

声音から感じられる自負に軽薄さはないが、如才ない言葉に気取った響きがある。忠義の裏に隠した野心は如何程だろうか。無欲に主の家系に仕えるばかりの男とも思えなかった。

「このようにお美しい姫君を隠しておられるのはいかがなものでしょう」

声の方向が変わる。母親に話しかけているのだろう。

「でもこの子は御覧の通り……ねえ、おわかりでしょう？ 人目に晒すだなんて可哀そうですね」

「ですが、椎良様もこの部屋に籠っているよりも、もっと素晴らしい世界に踏み出す必要がありますよ」

「私が言っても聞かないのですもの。とても内向的で。私も辛いわ」  
「お母上のお心は御尤もです。ですが、姫君には姫君の素晴らしい人生が御座いますよ。まだお若いものを、何もかもをお諦めになるのは勿体ないことです。私にも、姫君がお幸せになられるお手伝いさせていただきたいものです」

「まあ、お優しいお言葉ですこと」

椎良は自分そっちのけで交わされる会話に辟易として、意識を戸外に遊ぶ風に向けた。旋風の音も、ここでは柔らかく遠い。身を切る程に冷たい風の中を歩きたいと椎良は思った。まるで羽根布団に包まれているかのような、この空間から飛び出したい。

窒息する前に

「ねえ、椎良、とても素敵だと思わない？」

母親の高い声に、椎良ははっと意識を引き戻された。

「ええ……」

曖昧に答える。何の話題なのか見当もつかなかったが、だからと言って何が変わるわけでもあるまい。しかし次に聞こえた正章の言葉に、椎良は内心に溜息をついた。

「私の倅も喜びます。椎良様のお美しさは皆知っていますですが、誰も実際に目にしたことがないと嘆いておりますから。早速に話をいた

「しましよ」

「そうなさってくださいな。この子ももう少し外の世界を知るべきなんですよ。何時までも悲しみに閉じ籠っていてはいけませんもの。同年代の話し相手が出来れば少しは前向きになるかもしれないわ」「きつと椎良様の良いお話し相手になると思います。親馬鹿かもしれませんが、これがなかなか聡明なやつでしてね」

椎良は男の評価を改める。強欲さを隠そうともせぬのは、つまりそれが許されるからだろう。

（ああ、お父様、助けてちょうだい）

空しく呼びかける。まるで体全体で嵐から庇うように娘を守り続けた、その父親はもういない。

惣領であった父亡き後に、母親の力では到底惣領家を支えることなどできず、玄土であるこの男がその多くを取り仕切っていることを椎良とて知っている。次代の惣領が決まるまで梓魏惣領家を支えるのだという、その男の言が真実心からのものであるとは椎良には思えなかった。倅云々と聞けば尚更である。それさえもわからぬ母親が哀れでもあり、愛しくもある。

「本当に花のような姫君ですよ」

男の声に、椎良は不意に嫌悪を覚えた。見えずとも、男が己に向けているであろう視線がわかった。まるで花瓶に活けられた花を見るような、その眼差しだろう。続く母親と男の会話を、椎良は殆ど聞いていなかった。もつとも、二人とて既に椎良の存在など気にもかけていないようだったが。やがて閉ざされる扉の音が響き、椎良は再び静寂の中に取り残された。

一輪ざしに手を伸ばしかけてやめる。ただ咲き誇り匂やかであることを求められる、花は哀れなものであるかもしれぬ。

花は、ただ生きていくだけにございます。

遠い記憶の底から一人の青年の声が響いた。何時だったか、椎良が戯れに問うた時だった。花は可哀そうだと美しくあることを求められ、美しく咲けばそれ故に刈られ、色褪せればすぐに捨てら

れる。人の勝手に、咲いては散る、それが哀れではないか、と。

「それでも花はただ生きているだけにございます。人の思惑など知らぬ気に、命が尽きるその時まで……それはすごいことではありませんか？ あるがままに咲くからこそ、人は花を美しく感じるのかもしれません」

ぼつりと、記憶をなぞるまま青年の言葉を呟いてみる。十年経っても、忘れようもない。二つ年上の相手に、精一杯背伸びをして問うた。それに不器用な言葉を返した相手の表情までもが、見えるような気がした。

椎良は俯いた。

「命が尽きるまで……」

ほとりと、微かな気配がした。ゆっくりと手を伸ばす。指先に、小さな花びらが触れた。ひんやりと冷たい。散ってなお指先に香りを残した。

「お前も、散ってしまうのね……」

冬に咲く大輪は答えぬ。

椎良は立ち上がり、手を差し伸べてゆっくりと窓辺に向かった。

硝子に触れる。掌が冷たさに染まる。今年の初雪は早かったと聞く。梓魏の街は、まだ遠い春を待ちわびて静かに息を潜めているだろう。その静けさに少女の頃は心惹かれたものだった。

冬は嫌いではない。街の散策をしたいと言えばどうなるだろうか、とふと思った。どうせならば正章御自慢の聡明なる御子息に言ってみようか。面倒な娘だと愛想を尽かされるならば、それもよいかもしれぬ。あるいは期待に応えようと懸命になるだろうか。

そこまで考えて、椎良は小さく頭を振った。母親がそのようなことを許す筈がないのだ。椎良が失明してから、屋敷の庭を散策することさえ禁じた母親である。最近でこそ嚴重に護衛をつけての散策を許すようになったが、街に出たいなどと言おうものならどのような騒ぎになるかは目に見えていた。

硝子に額をそっとつける。十年前から閉ざした瞳をうつすらと開

いた。

椎良は立ち尽くす。再び瞼を閉ざし無音に佇むその姿は、祈りの淵に沈むかのようだった。

頬にひやりと冷たく溶ける感触があった。万は上空を仰ぐ。ちらちらと反転しながら舞い落ちる切片が視界を埋めた。淡雪だった。

晴れ間が出れば瞬く間に溶け去るだろうそれに、万は暫し見惚れる。号令の音が響く。新兵の訓練が始まっているのだろう。殺風景な訓練場のそこかしこに、兵士達の姿があった。遠く、上官の前に整列する新兵達の姿が見えていた。中の一人、ずんぐりとした姿は元商店主の男だろう。何とか踏ん張っているらしい、と万は思う。男はぎこちなく、それでも若者達の中で必死に体を動かしていた。それを横目に、万は足早に己の訓練の場へと向かった。

向かった先は訓練場の中に幾つかある道場の一つだった。そこでは今から万が所属する小隊の勝ち抜き試合が行われる。腕試しを目的としたそれは月に一度行われるが、新参である万は初めて参加する。勝ち抜けば上官の覚えも良くなるため、上昇志向の強い兵士にとっては己の力を示す絶好の機会となっていた。

道場に踏み込むと、既に熱気が籠っていた。兵士達も殆どが集っているようだ。

「よお、新入り。びびって逃げたのかと思ったぜ」

背後からかけられた声に万は振り返った。筋骨隆々、という表現がまさにしっくりとくる男が、腕を組んで立っていた。薄ら笑いを浮かべて万を見つめる。

「知ってるか？ お前の一戦はじめの対戦相手は俺だ」

「御手柔らかにお願いします」

笑んで答えた方に、男は馬鹿にしたように鼻を鳴らした。男は万が入隊してから何かと絡んできた相手である。万自身は周囲との関わりを極力避けていたのだが、新兵課程を免除されたという評判がいつの間にか広まっていたらしく、それが男には気に入らなかつた



のだろう。

「殺さない程度に遊んでやるよ。少しは楽しませるよ。すぐに勝ちまったら面白くはないからな」

言い捨てて男は遠ざかって行った。今回の腕試しでは男が一位になるのではないかというのが大方の見込みである。男自身もそう考えているらしいことが、こちらを見下す態度に透けて見えていた。

(殺さぬ程度に……か)

内心に呟き、万は口元を歪めた。万にとってその言葉は冗談では済まぬ。実際、適度に手を抜かねば、一撃で相手の息の根を止めてしまいかねない。だがそれではまずい。

万はこの腕試しで上位に入るつもりだった。一位にまでなる必要はあるまい。しっかりとした武術の基礎と、今後も伸びるであろう素質を示せばよいのだ。新兵課程を免除されたとはいえ、万は最下級の兵卒である。兄、清夜すがやの思惑通り計画を進めるためには、今一度軍の上層部に己の印象を刻む必要があった。

鋭い号令の音が響いた。万は他の兵士達に混ざり列に並ぶ。上官が指示を出す声を聞きながら、万はふと先程の淡雪を思った。天から地へと舞う淡雪は、散りしづく花びらにも似ていた。儂く、脆く、短い命を生き抜く花の、一瞬の輝きを想起させる。

万は街の方角を見つめた。その先にいるであろう人を思う。何時だったか、花は哀れだと、その人が言った。それに己は何と答えただか、万にはどうしても思い出せなかった。ただ相手が浮かべた表情に目を奪われ、我ながら拙い答えだったと、思い悩んだ記憶だけがある。

飛雪ひせつ、と呼びかける澄んだ声を聞いた気がした。

万は思いを振り払うように頭を振ると、目を閉じて俯く。深く息を吸い集中を高める。記憶を封じ込める。意識を空虚に保つ。目の前に浮かび上がるような鮮烈な面影が遠ざかった。再び眼差しを上げた彼の顔には、最早如何なる感情もなかった。

その日、淡雪は積もることなく、幻のように束の間舞い散って、

消えた。

多加羅<sup>たから</sup>は本格的な冬を迎えていた。周囲の所領、沙羅久<sup>しゃらく</sup>や梓魏と比べれば雪の少ない多加羅だが、身を切るように冷たい強風が吹く。その日も、多加羅の街には颶風が吹き荒れていた。まるで遠く獣が鳴くような、耳を聳る風の音に街全体が呑み込まれたようである。仁識<sup>にしき</sup>は広場で練り広げられる若者達の鍛練を見つめていた。鍛練着が音をたててはためく程の風の中、微動だにせず腕を組んで立つその姿に声をかける者はいない。普段から愛想のない仁識ではあるが、今はどこか張り詰めた雰囲気までも醸し出している。声などがけようものなら、どのように厳しい言葉が返ってくるかわかったものではない。

だが生憎と仁識がどれ程に不機嫌な顔をしようとも、微塵も気にせぬ奇特な人物もいるものである。その人物は広場の向こうから今まさに仁識の元に近付いて来たところだった。冶都<sup>やと</sup>である。

「仁識、ちよっと見てくれ」

「今は忙しい」

「何言ってる。ただ突っ立っているだけだろうが。これだよ、これ」  
洪面の仁識にかまわず、冶都は腕に抱えている木剣を突き出した。「見てくれよ。かなり傷んでる。これじゃあ打ち合った時に折れるかもしれない」

仁識は冶都の腕に抱えられた木剣を見やる。全部で八本程か、確かに酷く傷ついていた。

「新しいのとかえればいいだろうが」

「武器庫の鍵はお前が持つてるだろう。それに副頭の許可がないと中に入れん」

仁識の表情がさらに苦々しいものとなる。当然、若衆における武器の取り扱いについては仁識も把握している。物思いに捕われていたとはいえ、当たり前のことをよりにもよって冶都に指摘された、

それに対する腹立たしさだった。

「わかった。鍵を渡せばいいんだろう。かえてこい」

「どうせなら一緒に来てくれ。武器庫の中がどうなっているか、俺はよくわからん」

言つと、治都は仁識の腕を掴み引きずるようにして歩き出した。

「おい……！」

「いいから、来いよ」

問答無用に引っ張られ、仁識は観念したように言った。

「わかった！ わかったから腕を離せ！」

「はじめからそう言えばいいんだよ」

言い返そうとした仁識は、振り返った治都の表情に言葉を呑み込んだ。にっと笑った治都の、その目が真剣なものとなっている。どうやら、木剣をかえるというのは口実らしい。若衆の前では言いづらいことでもあるということか。それが何であるかは容易に想像がつく。仁識は溜息をつくと治都の後に続いた。

武器庫の中は、風が吹き荒れる戸外よりも幾分ましとはいえ、冷たい空気に浸されていた。

「それで、何が言いたい」

治都と向かい合った仁識は単刀直入に問う。治都は抱えていた木剣を壁に立て掛けると言った。

「決まっている。灰達かいのことだ。何か報告があったか？」

「まだだ」

「いくらなんでも遅くないか？」

「まだ緩衝地帯に入って三日だ。遅くもないだろう。そう簡単に調べがつくようなことならば、ここまで悪い事態にはなっていない」

淀みない仁識の言葉に治都は苛立たしげに手を振った。

「そうじゃなくて、須樹すきのことだよ」

仁識は口を噤む。彼とて、治都が真に問いたいことを既に察していたのだ。だが、仁識にも答えようがなかった。まだ何の報告も入っては来ないのだ。緩衝地帯で何が起こっているのか若衆として探

る。そのために緩衝地帯に赴いたのは副頭の灰と設啓せつけい、そして錬徒の中から三名とそれ以外の若者が五名だった。向かった先は笠盛りゅうせいという商業が盛んな街である。そこならば、謀略を謀る者達にとつても格好の場所だろうと言ったのは灰だった。だが、理由がそれだけではないことを、仁識と治都は知っている。他ならぬ灰が、緩衝地帯へと赴く前日に明かしたことだった。

須樹が、笠盛のどこかに捕われているかもしれぬと、灰は二人に告げたのだ。

「今朝も須樹の御両親に会ってきたんだが、ひどく心配しておられた」

「ぼそぼそと治都が言う。須樹が笠盛へと赴いた日から既に七日が経過していた。当初はさほど心配していなかった須樹の両親も、今では不安を隠せずにいる。これほどに日数が経っても戻らぬのは明らかにおかしい。緩衝地帯の親戚の元に須樹が姿を見せなかったことも既に確認が取れていた。彼はまさに忽然と消えてしまったのだ。」「毎日、須樹の御両親に会いに行っているのか」

「ああ。何か申し訳なくてな。俺のところの運び役の馬車で乗せて行つたわけだし」

「別にそれは関係がないだろう」

「わかっているさ。でも考えてしまつんだよ。……俺でさえこんなんだから、灰は辛いだろうな……」

ぼつりと零した治都の言葉に、仁識は答えなかった。

緩衝地帯で起こっていることについて己の推測を話した、そのせいで須樹が何かに巻き込まれた可能性があるのだと　そう語った灰の言葉は淡々としていた。だが、灰が静かな面とは裏腹に、ひどく自責の念を抱いているらしいことに二人は気付いている。普段から表情の乏しい灰だったが、数年来、毎日のように行動をともしなければわかることも多くあるものだ。

「治都、今は待つんだ。若様が必ず何か掴んでこられる」

半ば、己に言い聞かせるための言葉だった。

「ああ……そうだな」

言っと、冶都は一瞬泣き笑いのような表情を浮かべ、大きく息をついた。雲のように白い呼気が広がる。それに、急に寒さに気付いたかのように冶都は腕を摩った。口実とはいえ、武器庫に来た目的を思い出したのか、冶都は辺りを見回す。棚に積まれた木剣に手を伸ばすとその一本を抜き出した。それを掲げ持ちながら、冶都は仁識に笑んで見せる。

「お前も辛気臭い面をしているから、皆が怖気づいていたぞ」

「何を言っている。そのようなことはない」

一緒になつて木剣を物色しながら、仁識は無然と言い返した。

「そういうところがお前は鈍い。俺のことを鈍い鈍いと言うが、お前の方が余程だ」

「ほう……喧嘩を売っているのか。面白い。買ってやる」

「おお！ いいな！ 久しぶりに打ち合うか。この前は負けたが、次はそうはいかんぞ」

途端に嬉し気な顔になつた冶都に、仁識は呆れたように肩を竦めた。だが、その顔には僅かに笑みが浮かんでいる。仁識とて胸中の不安と焦燥を持って余していたのだ。出来れば緩衝地帯に自ら赴きたかった。だが、如何にも貴族然とした仁識の風体では密かに動くことは難しい。それに加えて灰と設啓、そして須樹が不在の鍛練所を仕切る者が必要だった。

冶都は口には出さぬ仁識の思いに気付いていたのだろう。冶都なりに仁識の鬱憤を気遣っているに違いない。

「ああ、そうだ。お前に会わせたい人がいるんだよ」

三本目の木刀を物色していた仁識は、冶都の唐突な言葉に顔を上げた。

「誰だ。若衆に入隊希望者でもいるのか？」

「お前、とことん色気がないよな。紹介したいってのは俺の親戚なんだが、お前の許嫁のことをよく知っているんだよ」

「それで何故紹介したいなどということになる。そもそも何故、お

前が私の許嫁のことを知っているのだ」

仁識の声音は冷たかった。治都は大きく身を震わせる。だが、それはどうやら仁識の声音のせいというわけではなく、単に冷え切った空気のせいであるらしい。

「それにしても寒い。早く出ようぜ。何で知ってるかって、そりゃあ親父に聞いたんだよ。親父はそういうことには詳しいからな。お前、第六公家の娘と結婚するんだろ？ その親戚が第六公家で奉公しているんだよ。で、お前には是非ともどんな相手か話してほしいと頼んだんだ。そしたら、取り計らえばその娘と会うこともできるかもしれないとさ」

多加羅惣領に仕える貴族は古来よりの習慣で数をあてはめて呼ばれることが多い。貴族が代々引き継ぐ真名まなこそがその家をあらわす氏ではあるが、それはみだりに口に出されるものではない。他家の者が言えば、不敬とさえ取られかねないのである。長い歴史の中で数に込められた序列の意味合いは薄れたが、それでも数が小さい程に大家であることを示している。仁識自身は第四公家と呼ばれる貴族の出自である。

再び渋面になった仁識は話を断ち切るように木剣を抱え上げた。

「その古い木剣は混ぜるなよ。隅に置いておけ」

「わかつてるよ。あ、待てよ。もう行くのかよ。話はまだ終わってないぞ」

尚も言い募る治都に、仁識は向き直る。

「許嫁のことなら、お前には関係ない。許嫁に会いたいとも思わぬ」

「なんでだ。相手のことを知れるんだぞ？ 知りたくないのか？」

「別段知りたくはないな」

「結婚するのが嫌なのか？ 嫌ならはつきりそう言えよ。そんな態度じゃあ、相手も可哀そうじゃないか」

「嫌かどうかなど関係はない。前も言ったが、私のことに必要以上に首を突っ込むな。いらぬお節介だ」

言い捨てて背を向けた仁識に、治都は声を投げる。

「やっぱり嫌なんじゃないか？ それ程嫌なら何で唯々諾々と従っているんだよ。博露院はくろいんを飛び出してまで若衆に来たくせに、お前らしくない」

仁識は立ち止る。何か言い返そうと思ひ、だが何も言葉が出なかった。

「……嫌な奴だ」

ぼつりと呟く。声は、治都には届かなかつただろう。仁識は振り返らぬまま、その場を後にした。治都はまだ何か言っているらしい。それを聞きたくはなかつた。痛いところを突かれた気がしていた。

許嫁は幼い頃から親同士が決めていたことだ。それを今更どうこつ言つつもりはない。結婚という過程が必要であるならば、敢えてそれに逆らう必要性を感じない。もとより利潤を優先しての結婚である。許嫁がどのような人物であるのか知つてどうなるというのかと仁識は思う。大仰に騒ぐ治都の言の方が彼には馴染めぬものなのだ。

(別に、嫌だなどとは思っていない)

そう考え、仁識は顔を顰めた。ちり、と引き攣れるように、胸の奥を逆なでする感情があつた。

「私らしくない、か」

ぼつりと呟くと仁識は小さく笑んでいた。皮肉に歪んだ笑みであることは己でわかつていた。胸の奥に巢食うその感情が、初めて感じるものではないと彼は気付いていた。親の定めた結婚、それが何だと言うのだ。それしきのこと抗う程のことでもないのだと、大したことではないのだと、そう言い聞かせながらまるで塗り込めるようにして隠していたものがある。それが今あらわになつていた。

治都の何気ない一言、何も見ていぬようでありながら、時に彼は鋭い。あるいは無意識なのか、仁識が敢えて目を逸らしていたものを無造作に突き付ける。

「お前は時々、本当に嫌な奴だ」

呟きは密やかだつた。治都の言葉は腹立たしく、怒りすら感じる。

何故放っておいてくれないのか、と思う。そしてむしろに可笑しくも感じていた。おそらく治都は仁識を元気づけようと思つて許嫁の話を出したのだらう。やはり鈍い、と思う。これでは逆効果ではないか。

須樹ならばあのように直截には言わない。触れてほしくないのだと察すれば尋ねようともせぬだらう。灰に関して言えば、治都や須樹のようにこの話題に関心を持つかも疑わしい。突き放すわけではない。だがどこか距離を置いて接する灰の態度は、必要以上に己に近付けようとさせぬ、その彼自身の在り様と表裏一体なのだ。

仁識は広場に戻ると、木剣を地面に置いた。そのうち治都も戻つて来るだらう。どうせならば治都が言ったように一手勝負してもいいだらう。少しは気が晴れるかもしれぬ。

須樹がいなくなつて七日、灰が緩衝地帯に赴いて三日、彼らの姿のない鍛練所は何時にも増して閑散と、広く見えた。



## 第二章 現しの影（後書き）

第二章「現<sup>うつ</sup>しの影」、開始です。一気に更新、どこまでいけるでしょうか。

仁識についてはなかなか書ききれず……本筋とは関係ないエピソードをうまく入れることが出来ず、少しやり残した感があります。彼ははじめ想定していたよりまっすぐに正義感の強い人物になりましたが、言うことがいちいちきつくて皮肉っぽくて……書き手的にはとても楽しいです。

では、次もすぐに更新……できるかな？

硝子の割れる激しい音が聞こえた。続いて怒号が細い路地に満ちる。

灰は足を止めた。足下で、じやり、と鈍い音が響く。道に散乱しているのは薄汚れた酒場の窓硝子、そのなれのはてである。派手に割られたそこから店の中を見れば、揉み合う数人の姿が見えた。泥酔した男達が喧嘩を始めたらしい。安酒の匂いが辺りに漂う。

「嫌だねえ。おとなしく飲めんのかねえ、全く」

のんびりと隣りでのたまった男もまた酒臭い息をしている。男は気持ち良さ気にしゃっくりを一つするとぶらぶらと遠ざかって行った。灰は見るともなしにその背を見つめ、自身も騒ぎの収まらぬ店の前を離れた。

灰がいるのは笠盛かすせの街でも場末の一带だった。真つ当な街衆ならば足を踏み入れるのを躊躇う部類の場所だ。道行く男達もどこか荒んだ雰囲気きふきの者が多い。裕福な者であれば身の危険を感じるかもしれない。灰自身はと言えば、特に人目を引くことはなかった。くすんだ色合いの外套を纏い、頭には髪を隠して緩やかに布を巻いている。幼い頃の記憶を頼りに巻いた特徴的なそれは、來螺街衆らいろうかいの巻き方だった。來螺では頭に布を巻くのはごく一般的な姿なのである。目的は二つある。一つには己が來螺の街衆であることを示すため、そしてもう一つが己の顔を見せぬためだ。

前者は來螺を訪れる者が、時に來螺を裏から支配する組織、耶來いらいの標的とされることに対する自衛を兼ねている。來螺街衆であることを示せば、耶來に対する牽制となる。もっともやらないよりはやった方がましだという程度であり、耶來を耶來たらしめるもの、その実態を知っていれば、一番の自衛が耶來そのもの、つまりは裏側に近付かぬことであるのがわかる。

無論、この笠盛の街で、灰の目的は後者である。人目を引く髪色

を隠すのはいつものことだが、目の上まで目深に布を被せ、顔の横にゆるりと端を垂らしているせいで、暗がりであれば顔の造作は殆ど見えぬだろう。笠盛はその地理的条件から国境地帯との商いも盛んに行われる。故に、国境地帯の風体の者も多く出入りする場所なのである。おそらく灰の姿は、商いのために国境地帯から笠盛を訪れた若者、というように人の目には映るだろう。

灰はゆっくりと歩を進めた。道端に蹲る男を避け　眠っているのか、あるいは帰る家がないのかもしれない　足元も危うい酔漢の間を縫うように歩く。酔いに弛緩しながら、体が触れただけで殴り合いになるような男達である。視線を合わせぬよう心がけながら、周囲で交わされる野卑な会話に耳を澄ませた。

どれほど歩いたのか、飲食店が連なる界隈を抜け、人家が建ち並ぶ道に出て灰は壁に凭れた。既に人々は眠りに就いているのか、窓に明かりの灯る家はなかった。

疲れていた。夕刻から酒場や賭場を渡り歩き、既に七刻は経っているだろう。今宵は既に六軒程は酒場に入り、そこに出入りする人々の様子を探っている。形ばかり酒を飲みもするが、元来酒には酔わぬ性質らしく意識は清明だった。だがそれがかえって悪いのか、路地に満ちる臭気　まるで吐瀉物にも似た不快な悪臭を敏感に感じ取ってしまう。澄んだ空気の中でさえ、まるで纏わりつくようなそれを感じられた。あるいはそれ自体が身にしみついてしまったのかもしれぬ。

緩衝地帯に入って既に三日が経つ。だが須樹すきの消息どころか手掛かりの一つとて掴めてはいなかった。先に緩衝地帯に入っていた弦げんが灰の元に姿を現したのは一昨日である。須樹が酒場に商品を持って行き、そこで多加羅若衆の噂を吹聴する男と遭遇していたらしい、とのことだった。

あの若者かい？　確かに来たよ。いい奴だと以前から思っていたから酒の一杯でも、とすすめたのさ。ああ、飲んでいったよ。ちと、嫌な客がいたもんで心苦しかったがね。ああいう客がいると

折角の酒も不味くなつちまう。酒つてのは楽しく、幸せに飲むもんだからね

弦にそう語つた酒場の亭主は、多加羅若衆の噂を声高に話していた男がどのような外見かは既に忘れてしまったとのことだが、男が店を出る少し前に須樹が店を出たことははっきりと覚えていた。

さらに調べて参ります

弦はそう言い残すと雑踏に姿を消した。

須樹は、必ずこの街にいる筈だった。ちりちりと、意識の端に須樹の存在を感じる。だが今の灰にはそれさえも己の焦りと不安が生んだ錯覚なのかと思つてしまふ。簡単に手掛かりを得られるとは思つてはいなかつた。だが、これ程までに手応えがないとも思つていなかったのだ。

(既に三日……)

数日前には確かに多加羅若衆の悪評を吹聴する男がいたのだ。だが今はその影すら捕まえることが出来ない。もしや、と思つ。須樹は酒場から男の後をつけたに違いない。そして男にそれを悟られ捕われたとするならば、警戒したその何者かが姿を消した可能性は高い。そうであれば、須樹を捜し出すことも、謀略を企む者達を追うことも、この上もなく困難となるだろう。そして、その推測が正しければ尚更に須樹の身が案じられた。まだ生きているにしても、捕われたのであればどのような目に遭つているか。そこまで考え灰は拳を握り締めた。急がねばならない。

怪魅けみの力で探れば　そう思う。だが場所が悪い。明確に一人を捜し出すには、先日のように全ての意識をそちらに注がねばならなくなる。その様を他の若衆に見せるわけにもいかない。

(だが、そうとばかりも言つていられないかもしれない)

灰は暫し壁に背を預けていたが、小さく息をつく、再び路地へと踏み込んだ。

路地から路地へと隈なく歩き、漸く灰がねぐらにしている小さな

家へと戻ったのは深夜をとくに過ぎた刻限だった。向かったのは表通りから一筋入ったところにある古びた民家である。設啓せつけいの親戚が所有している建物であり、無人だったそこを今回緩衝地帯で調べを進めるための拠点として借り受けた。

扉を開けて中に身を滑り込ませると、家の中は闇に沈んでいた。他の若衆は既に眠りに就いているのだろう。暗闇の向こうから軽い鼾が聞こえた。

緩衝地帯に赴いた若衆は十名、そのうち灰を含めた五名はこの笠盛の街でそれぞれが担当する地域を決め、一日中その界隈を歩いて情報を集めている。それ以外の五名は笠盛以外の街に赴き、若衆の噂が何時頃から広まったかを調べていた。

灰は足音を忍ばせて階段を昇った。家には部屋数がさほどあるわけではない。二階にある二部屋を副頭である灰と設啓がそれぞれ使い、一階にそれ以外の若衆が寝ている。

部屋の扉を開けようとして、灰はふと顔を廊下の先に振り向けた。斜め向かいの部屋の扉が静かに開いた。部屋の中から漏れた仄かな明かりに、設啓の無表情な顔が浮かび上がる。低く抑えた声で設啓が問うた。

「どうだった？」

「何も掴めませんでした」

そうか、と設啓は答える。灰の帰りを待っていたのか、設啓の声から眠っていた様子は感じられなかった。

「他の皆は？」

「これといって何も。こうなったら場所を移った方がいいかもしれない」

「俺はもう少しこの街で探った方がいいと思います」

設啓は腕を組むと、扉に凭れた。暫し思索する様子を見せる。

「緩衝地帯の街はここだけじゃない。他にも規模の大きな街はある」  
「ですが、噂をまくのにこの街程適した場所はありません」

「そうだとすると、これだけ毎日探って何も掴めないようなら、場

所を変えた方がいいだろう」

今度は灰が黙す。設啓の言うことは尤もなのである。

「次に調べるとしたら素奈の街だろうな。今日確かめたが、あの街も比較的早くから噂が広められていたようだ」

設啓は笠盛の街を探るのではなく、他の街に赴いて噂が出た時期やその発生源を調べている。彼曰く、笠盛には顔見知りも多くあまり派手には動けぬ、というのがその理由だった。

「いえ、やはりもう数日は笠盛に集中しましょう」

「何か笠盛に拘る理由でもあるのか？」

さりげなく、しかし僅かに硬質な響きを帯びた設啓の問いだった。「あの会議のあたりから須樹が行方知れずだよな。それと関係があるのか？」

灰は素早く設啓の顔を見やる。視線の交錯は一瞬だったが、暗がりに暗示的な余韻を残した。須樹が緩衝地帯から戻らぬという噂は、若衆の中で何時の間にか広まっていた。普段から若者達に慕われる須樹である。彼の身を案じる声も多く聞かれる。だが、緩衝地帯で一連の出来事と、須樹の不在を結びつける者はいなかったのだ。

灰は迷った末に心を決める。設啓は知るべきだろう。何より彼の協力が必要だ。

「まだはつきりとはわかりませんが、この街で、若衆を嵌めようとしている者達に須樹さんが捕われている可能性があります」

沈黙が落ちた。

「そういうことか……やはりな」

設啓がぼそりと呟いた。懸念が当たったとでも言うところか、僅かに苦い響きを残す。

「この前の会議での発言の意味がやっとわかった。須樹を助けるためにあんなことを言ったのか」

「……」

「忠告しておくが、今後はあのようなことはしない方がいい。あれはまずかった。俺達がどのような立場か考えれば、動かないという

結論が一番だった」

「そうであつても、何かあつた時に須樹さんを守ることが出来るのは若衆だけです」

「透軌様はどうなんだ。真実を秘すべきとも思えん」

灰が笑んだ。設啓は目を細める。半ば影に沈む相手の、その笑みは捉え所がない。

「悪いとは思っています。あの場での結論を阻んだことも……。ですが透軌様は惣領の意を汲んでおられた。仕様のないことはいえ、それでは須樹さんは切り捨てられるだけです」

なおも腕を組んだまま設啓は灰を凝視した。何を思つのかふと息をつく。

「そこまで言うなら暫くは笠盛を探ろう。俺も明日からは街の探索に加わる」

「少し方法を変えた方がいいかもしれません。噂を広めていた者達は既に身を潜めている可能性があります。ただ街を回るだけでは何も掴めないかもしれない」

「……それでは埒があかな。どうする気だ」

「設啓さんはこの街に詳しいと聞きました」

「ああ、まあな」

「それならば、この街を取り仕切る者が誰か、知りませんか？ その人物ならば今緩衝地帯で起こっていることについて詳しい情報を持つているかもしれない」

「街の代表者は有力商家が持ち回りで担っているが……聞いて何か分かるとも思えんぞ」

「いえ、表の代表者ではありません。裏から情報と人を握る、そのような人物です」

設啓が腕を解く。あくまでも無表情を保つその顔に、僅かではあるが面白そうな色が過った。

「裏から……か。知らんでもない」

「誰なんですか？」

「卸屋おろしやさ。笠盛を牛耳おつなっているのは、媼おつなと呼ばれる卸屋だ」

「卸屋……」

「ああ。まあ、この街だけじゃないがな。緩衝地帯を実質裏から支配しているのは卸屋の連中だ。多加羅や沙羅久の卸屋からも独立して独自の連携を築いている。あいつらの中に入り込むのは簡単じゃない」

「媼に話を聞けば何か手掛かりが得られるかもしれませんが。設啓さんの家は卸屋ですよ。伝手はありませんか？」

「伝手か……。媼はこの街だけじゃなく緩衝地帯の中でも力が強い。数人いる元締めの一人も言われている。そうそう会えはしない。媼の下で動いている奴にまずは話をつけた方がいいかもしれん」

「それは……？」

「媼の後を継ぐと考えられている人物だ。女だと聞いたことがある。確か名前は……宇麗うれいといったかな」

宇麗、と灰は呟く。

「だが若衆が緩衝地帯で動いているのは極秘だ。どうするつもりだ？ まさか馬鹿正直に若衆だと名乗るつもりじゃあるまいな」

「まさか」

灰は可笑しそうに笑う。それに設啓は目を瞬いた。だが次の瞬間には灰の表情から笑みは消える。瞳が細められ、そこに鋭さが籠った。危うい冷たささえ孕んで、強く設啓を見据えた。

「口実は考えておきます。その宇麗という人と接触するにはどうしたらいいですか？」

「接触は、俺がまずしてみよう。卸屋としてならば話が通るかもしれん」

「わかりました」

灰は小さく頷いた。

「じゃあ、明日な」

言って部屋に戻ろうとした設啓は灰に呼び止められる。振り返ると、灰は僅かに躊躇う素振りを見せた。ひそりと言う。



「笠盛の卸屋に接触することは透軌様には伏せていただけませんか？」

設啓は目を見開く。咄嗟に言葉が出なかった。

「その宇麗という人物と接触できれば、その後のことは俺一人で動きたいと思っています」

「……そんな勝手ができるとでも思っているのか？」

「卸屋から情報を得ること自体、俺達の立場では許されぬことです。若衆が緩衝地帯の裏に接触するのはまずい。透軌様に報告すれば、到底許しは出ません」

設啓は益々言葉に詰まる。確かに灰が言う通りだった。何故それに気付かずに卸屋への伝手を易々と引き受けたのか、普段の設啓からすれば考えられぬことだ。

「ですが、今は時間がない。須樹さんが捕えられているのだとすれば、危険に晒されているということですよ。手段を選んでいる場合はありません」

答えぬ設啓に、頼みます、と一言残して灰は部屋の中へと姿を消した。

暫く凝然と立ち尽くし、設啓は漸く部屋へと入る。小さな部屋は長年人が住んでいなかっただけで埃っぽく、寒々としていた。一つ灯した蠟燭の火が頼りなく揺れている。設啓は古びた寝台に腰を下ろした。無意識に腕を組むと灰の言葉の意味を考えていた。

(はじめからそういう狙いだったということか)

考えるにつれ、灰の意図が浮き上がるように見えてきた。若衆は動かぬ、それが最善の結論であると知りながら、会議の場で敢えて違う意見を出した。それも全て須樹の消息を探るための布石だったのだ。若衆として緩衝地帯で動く名目が立てば灰にとっては良かったのだらう。時間がないのだと言った言葉には、真実切迫した響きがあった。

そして先程の灰の言葉　透軌には言うなと求めたそれが、引つ

かかっていた。緩衝地帯で調べた結果は当然若衆頭に知らせる。それを考えれば別段深読みする必要はないのかもしれないが、もしや己に課せられた役割に灰は気付いているのだろうか。彼は先程何と言っていた？ 会議の場で、結論を阻んだ、と明言した。つまりは知っていたのだ。はじめから結論が決まっていたことを。あるいは透軌が望む結論へと導くため、設啓が動かぬべきという意見を出したことを。

(まさか、考え過ぎだ)

そう思うそばから、疑念がわき起こる。灰の行動を監視し逐一報告せよと、それは灰が副頭になった時に玄士の一人である絡玄らくげんから父親を通じて出された指示だった。設啓にはさほど意味のあることとも思えなかったが、忠実にその役目は果たしてきた。これまで灰の行動や言動には人一倍注意を払ってきたつもりだ。だがここ数日の間に、まるで幻惑されるようにそれまでの灰への印象が翻っている。

設啓はああいう灰は見たことがなかったか

そう言ったのは須樹だった。その言葉の意味が今になって漸くわかる。なるほど、と思う。絡玄が警戒するだけの何かがあったということがあるか。

設啓は一つ唸ると、火を吹き消した。暗闇の中、湿気た臭いのする布団に潜り込む。何にせよ、まずは明日どのように動くか考えるのが先決だ。

(何を馬鹿な事を……当然すぐに報告をするべきだ)

小さく囁く己の声があった。だが設啓は冷静に呟く内心の声から意識を逸らす。絡玄に、そして透軌に灰の行動を伝えるか否かは後で決めればよい。むしろ灰の行動を見届けた後に報告した方が望ましいかもしれない。灰がどのような人間であるのか、この一件はそれを測る格好の機会であり、絡玄にとっては良きにつけ悪しきにつけ実りの多いものになるだろう。当然、設啓に対する絡玄の評価も上がる。それはすなわち絡玄の庇護を受ける多加羅の卸屋にとっても

都合がいい。

そう思いながらも設啓は気付いていた。他ならぬ自分自身が、これから灰がどのように動くか、それを知りたいと思っているのだ。その思考自体がそれまでの設啓からすれば考えられぬことではあったが、彼は密かにこの状況を楽しみに感じ始めていた。

人を見極め、その欲を測り、己の才覚一つで世を渡る卸屋としての感覚であつたかもしれぬ。

眠りは遠く、なかなか訪れなかった。静かに夜は更けていった。

彼らの行動には一つの規範がある。それが、暗闇の中で須樹が第一に学んだことだった。

まず中心となっているのは宇麗、あの女だ。須樹と直接に言葉を交わすのは彼女と決まっていた。それ以外の者は食事や水を須樹のもとに運びはするが、決して言葉を交わそうとはしなかった。ために話しかけたこともあつたが、まるで答えはなく、物体でも見るような視線を返されただけだった。

その食事について言えば、どうやら一定の間隔で持つて来ているわけではなさそうだった。頻繁に持つて来る時もあるが、もう食事を与えるのはやめたのかと思う程に長い間持つて来ぬこともある。仮に食事時間が一定であれば時間の流れが掴めたかもしれないが、あまりに不定期なそれに一体何日が経過しているかもわからなくなっていた。おそらく相手は意図してそのように仕向けているのだろう。食事が二度済む度に、用を足すため捕われている部屋の近くにある厠へと連れて行かれるが、同様にそれが時間の経過を掴むのに役立つわけではない。わかつたのは須樹が捕われているのが、どうやら地下らしい、というそれだけである。廊下に窓はなく、ぽつりぽつりと灯された炎が煤けた色合いの石壁を浮かび上がらせていた。部屋を出されるその僅かな時に逃げようかと考えたこともあつたが、細い廊下で前後を屈強な男達に挟まれ剣をつきつけられた状態では、

それも無理だと諦めるしかなかった。

そしてあとはひたすら暗闇である。

このようにして、完全に支配下にあるのだと、全てが相手の手の内にあるのだと知らしめるのが宇麗の狙いのように思えた。まるで鎖に繋がれ飼育される犬さながらに生かされているのだ、と須樹は思う。誇り高い人間ならば屈辱を感じ、いつそのこと痛めつけられた方がましだと考えるかもしれぬ。少なくとも、苦痛に耐え一方的に加えられる暴虐に抗おうとする意志そのものが、己を支えるよすがとなるだろう。

宇麗ははじめこそ拳をふるいはしたものの、それ以降は須樹に苦痛を与えることはなかった。ただ一言問うのだ。お前は何者だ、と。須樹が何を言おうとも、宇麗が口にするのはその言葉だけだった。

食事の不定期さとは裏腹に、宇麗が須樹のもとを訪れるのは等間隔のようだった。そのためか、時間の感覚さえもなく暗闇の中で蹲っていると、何時の間にか宇麗の訪れを刻むように数えている自分に気付く。寄る辺なく己の輪郭さえ不確かな中で、宇麗という存在のみがよすがとなるような、全てが彼女を中心に感じられるようなそれは不思議な感覚だった。それこそが連中の狙いなのだと気付いても、何時しか彼女の次の訪れを待っている。暗闇から逃れられるかもしれないという期待が一つ一つ潰え、やがては己の意地さえも保てぬ程に追い詰められた時、宇麗の存在だけが暗闇から逃れる唯一の希望のようにさえ感じるのかもしれない。

(そろそろか……)

ぼんやりと思う。その思考に応えるように、門の外される音が響いた。壁に凭れて床に座ったまま、須樹は扉を開けて入ってきた姿に視線を向ける。硝子筒の炎が眩しかった。宇麗は須樹を見下ろすと、言った。

「お前は何者だ？」

それに須樹は薄く笑う。苦笑だった。ただその一言だけをどうやら己は待ちわびていたらしい。相手の思惑通りというわけだ。

須樹の笑いが奇異に映ったのか、宇麗の表情が僅かに動く。それをちらりと見やり、須樹は顔を背けた。ここまで意地を張って守ろうとしているのが何なのか、それがわからなくなる。若衆であるともかせば良いのかもしれない。あらぬ噂をたてる男がいた。だから後をつけたのだと、そう言えば宇麗は納得するかもしれない。だが、もし彼女が多加羅若衆にとつて危険な存在ならばどうする？ 思考はいつもそこで途切れる。

「お前は何者だ？」

ゆつくりと、再び宇麗が問うた。そこに常にはない響きを聞いたように思い、須樹は視線を巡らせる。そして不意に悟っていた。

「あなたにも……守りたいものがあるんだな」

直観のままに言った言葉が宇麗に与えたものは大きかった。厳しく須樹を見据える瞳が揺らぐ。奇妙な一瞬だった。それは共感、と呼べるものだったかもしれない。宇麗の顔が僅かに歪んだ。それに須樹はさらに苦笑を深めた。これでは、まるでこちらが相手を追いつめているようではないか。

「昔、一夜暗闇の中に閉じ込められたことがあった」

ぼつりと須樹は言った。実際にはさほど昔ではない。三年前の秋、祭礼の時だった。その記憶は鮮やかに禍々しい炎と、冷たく深い水と、煌めく朝の光とともにあった。

「辺りを照らす炎も持たず、出口もわからず、手探りで進むしかなかった」

何故、今このようなことを言うのか須樹自身わからぬ。わからぬまま、ゆつくりと語っていた。

「もう出ることが出来ないのではないかと何度も思った。不思議だが、叫び出しそうに不安なのに、そのうち、そんな感情もどこか他人事に思えるようになる。体の疲れも麻痺したように感じるんだ。それなのに、昔親に言った一言や、忘れていた記憶の断片を思い出したりする。その時自分がどう感じていたかも……」

須樹は口を噤んだ。あの時間の中で語ったことを、地下道を出て

から誰一人として口に出そうとはしなかった。まるで暗黙の了解のように、口に出さぬのだと、互いにわかっていたのだ。あの闇の中でしか口に出せぬことだった。

「それで、どうなった」

須樹は宇麗の囁きに顔を上げた。あの問い以外の言葉を聞くのは久しぶりだった。

「外に出れたよ」

それだけを言うと須樹は微笑んだ。宇麗はそうか、と呟くように言うと、最早問おうとはせずに静かに扉の向こうに姿を消した。

闇が落ちた。それに包まれ、須樹は気付く。三年前の地下道の暗闇は、どうやら記憶の中だけにあるのではないらしい。胸の奥だろうか、思考の根底だろうか、静かに脈打ち、息づいている。それを温かく感じるのは、彼らの存在のせいだろう。あの時間の中をとみに歩いた仲間との記憶があるからこそ

その彼らが必ず己を捜している筈だと、須樹は確信していた。須樹は闇を見据える。彼を捜しているだろう者達のもとに戻るのだと、須樹はその時強く心に決めていた。

翌朝、設啓は他の若衆よりも一足先にねぐらを出た。日中は露店が犇めく大通りも、清涼な朝の大きに閑散としている頃合いである。足早に大通りを横切り、設啓は民家の間を貫く路地へと歩み入った。慣れた足取りで向かったのは入り組んだ路地の角を数度曲がった先にある比較的大きな建物だった。外から見れば単なる民家に見えるが、一部の人間にとっては馴染みの宿屋である。看板の一つも掲げていないのは、掲げる必要がないからだ。その宿屋に宿泊する者は全て卸屋おろしやであり、それ以外の者が踏み入ることは出来ない。

設啓は木の扉を開けると中に入り込んだ。扉の向こうにはまるで来た者を阻むように卓があり、初老の男が帳簿の上に屈み込んでいた。男は下からじろりと設啓を睨み上げた。設啓は左手の甲を差し出し、その上に右手の人差し指と中指の二本を軽く触れる。男は眼球だけを動かしてそれを見ると、顎を奥にしゃくった。設啓が奥に向かうのを見届けると、男は再び帳簿に屈み込んだ。

細い廊下を抜けると、そこは無造作に卓と椅子が並べられた一室だった。宿屋に泊まる者達が食事を取る部屋である。食堂と呼ぶにはいささか殺風景に過ぎるが、これでなかなかうまい食事を出すのだと設啓は知っていた。扉の向こうにある厨房からは美味そうな匂いがしていた。

設啓はまだ数人しか先客のいないその部屋をぐるりと見回すと手近な椅子に座った。生憎と既にいる卸屋は知った顔ではない。設啓はゆったりと腕を組むと待つ体勢に入る。最近では若衆の活動にかかりきりになっていたせいで多加羅以外の卸屋とはさほど顔を合わせしていない。だが、顔見知りの一人や二人はいるだろうと踏んでいた。今の季節は卸屋にとっては稼ぎ時である。緩衝地帯の商いの中心である笠盛せうせいには多くの卸屋が集まっている筈だ。

暫く待つと、次第に部屋が埋まっていく。年齢も風体もまちまち

な男女が、集団で、あるいは一人で食事をとる姿をなおも設啓は見つめていた。部屋の隅で声を潜めて遣り取りをしている連中は、既に情報の交換でもしているのだろう。この宿屋は卸屋にとっては単なる宿泊施設ではない。同業者と情報を交換し、あるいは商売敵と腹の探り合いをする場でもあるのだ。

微動だにせず部屋を眺めていた設啓は、戸口にあらわれた人影に目を止めた。寝癖なのかぼさぼさの髪をかき混ぜながら、大欠伸をしている男である。まだ年若い。設啓は思わず笑んでいた。これ程最適な人物に出会えるとは、運がいい。男は目を瞬きながら部屋に踏み込み、厨房を覗き込む。厨房から朝食が乗った盆を受け取ると座る場所を探しているのか、卓の間を歩き始めた。その視線が設啓の上で止まる。男の顔が一変した。驚き、そして何やら狼狽したような表情が掠め、そして最後にはにやりと笑む。

「よお！ 設啓」

威勢良く言うと、器用に椅子を避けて設啓の元へと歩み寄る。

「相変わらず朝が遅いな」

「卸屋が早起きだなんて法則誰が作ったんだか知らねえが、これだけには言える。朝早く起きるなんざ悪習だ」

「そんなことを言っているから出遅れるんだ」

「言ってくれるねえ」

男は言うど、設啓の正面に腰を下ろした。早速に食べ始める。

「久しぶりじゃねえか。お利口な街衆になっちまったかと思っただぜ」  
忙しなく口にかきこみながらも、男は言った。

「生憎とそうではない」

「退屈してんだろう、どうせ。あの時俺の誘いを断らなきゃよかったんだよ」

「お前と組んだら先が知れている」

「かー、可愛くねえなあ。年長者は敬えと親父さんに教わっただろうが」

「親父は敬うべき年長者を見極める、と言っただ」



「へいへい。御立派。つまり俺は敬うには値しないわけね」

「まあ、そういうことだな」

「そんな大口叩いていいと思っているのか？俺はお前のやばいねた掴んでんだぜ？」

設啓は眉を上げる。男は効果的ににやりと笑おうとして、盛大にむせた。どうやら飯を口に入れ過ぎたらしい。慌てて茶器に手を伸ばす。ひとしきり胸を叩く姿を、設啓は横眼で見やった。口から先に生まれて来たような、と言われる相手である。言うことの半分は大嘘、あとの半分は女性への尽きることのない礼賛である。だがその中に時折極上の真実が含まれている。どこで仕入れてくるのか他の卸屋達では知りようもない情報を一人探り出し、それを高値で売る。まだ年若いにも関わらず、情報を主に扱う卸屋の中では五指に入る程の男である。

「頼みがある」

「ほおお」

男の相好が崩れた。如何にも嬉しそうなそれを設啓はぎろりと睨みつけた。

「対価は払わん。貸しがあったよな。以前多加羅でへましたのを助けてやったろう」

「俺を助けてくれたのは親父さんだろっ」

「俺が口添えしなれば親父もお前を見捨てていたさ」

男は低く唸ると設啓に恨めし気な視線を送った。

「何だよ」

「宇麗うれいって知ってるか？」

「知らないわけないだろ。笠盛の女豹だ。彼女を知らないんじゃないかもぐりだと思われるぜ」

それはそれは、と設啓は独りごちた。どうやら相当な人物らしい。

「その女豹と話したい。伝手をお前に頼む。お前なら可能だろっ？」

「おっと、それはお断りだ」

「……返事が早いな」

「俺は鼻が効くんぞね。何かやばい臭いがするぜ？」

ひくひくとわざとらしく鼻を動かして、男は設啓の目を覗き込んだ。

「それより教えてくれよ。若衆なんて良い子の集団に入ったお前がなんでこんな場所にいるんだ？」

「俺が若衆だと話したことがあったか？」

「俺を誰だと思ってんだ」

男がひそりと囁く。瞳の奥に過る鋭い光が、男の本質をあらわしていた。

「御立派」

わざとらしく設啓は言う、男に顔を近付けた。声を潜める。

「ただ伝手をつけるだけでいい。あとはこちらの問題だ」

「気に入らねえなあ」

「頼む」

設啓の言葉に男は目を丸くした。珍しくも感情がそのまま顔に出たらしい。

「どうしたんだよ、お前がこの俺にそんな殊勝なことを言うとはな」

「下手したら人の命に関わることなんだよ」

男はまじまじと設啓の顔を見ると、不意に前に置いた盆を横に押しやった。身を乗り出すと、設啓にだけ聞こえる声で言う。

「まじで深刻そうじゃねえか。ここでお前に会ったからまさかとは思ったが、聞いた話はがせじゃなかったのか。やっぱり相当にやばいことになってんだな。悪いことは言わん。深入りする前に身を引きな」

設啓は訝しく眉根を寄せた。男は辺りを憚る様子である。はじめ設啓を見た時に浮かべた狼狽が、その表情にはあった。なおも男は言い募った。

「お前はあいつらの怖さを知らないんだろうが、本当にやばいんだよ。何に巻き込まれてんだか知らねえが、命が惜しけりゃこれ以上はやめとくんぞだ」

「何の話だ」

「何って……耶來だよ！ お前が下手に関わる相手じゃねえ」

耶來 來螺を裏側から支配する組織の名を、設啓は呟いた。

「何のことかさっぱりわからない。何故俺に耶來が関わってくるんだよ」

「お前、灰かいって奴知ってるか？」

設啓は目を見開いた。何故、男が灰の名を口にする？

「知ってるんだな？ やばいのはそいつだ。もし知り合いならそいつとは離れるんだな。関わるとろくなことがねえぞ」

「ちよつと待ってくれ」

設啓は慌てて男の言葉を遮った。

「何故お前が灰のことを知っている。それに耶來がどうしたんだ。さっぱりわからないぞ」

男は設啓を見つめ、苦々しく舌打ちをした。設啓が真実何も知らぬということを知ったのだらう。

「くそつ、余計なこと言っちゃまった。俺だって耶來なんて関わりたくもねえんだ」

「以前関わっていたらう」

「あれは人生最大の過ちってやつだ。あんな場所命が幾つあっても足りねえ」

「とにかく耶來がどうしたのか言ってくれ」

暫しの沈黙の後、男は漸く頷いた。

「ああ。だが女豹に話をつけるのはなしだ。この情報を渡すので前の借りはちらにしまらう」

「鬼逆きさかを知っているか」

男がおもむろに切り出したのは、盆の上の飯をきれいに平らげた後だった。どうやら話すと決めた途端に普段のふてぶてしさを取り戻したらしい。戸惑った様子はどこにもなかった。

設啓は男が口にした名前に表情を引き締めた。無論、彼はその名

をよく知っていた。だが、表面上は淡々とした様子を繕う。卸屋が世を渡るには、まず己の思惑や感情を悟られぬことが肝要であり、それが恐怖や不安であれば尚更にあらわにはいけないのだという、半ば身にしみついた習性によるものだった。

「……聞いたことはある」

「だろうな」

「だが、よくは知らない。耶來で最近頭角をあらわしてきた男だろう。確か耶來の懐刀とか何とか呼ばれているという」

「ああ、そうだ。正確に言えば、ほぼ耶來を手中に収めんとしている男だ。今じゃあ、懐刀どころの話じゃない。抜き身の刃みたいな奴だ。こいつがたまげた奴でな、魔窟の耶來で向うところ敵なしという有様だ。目的のためには手段を選ばず、抜け目のなさでも抜きん出ている。おまけに人望までありやがる。奴の周りには砂糖に群がる蟻みてえに崇拜者が集まっている。耶來つてのは、今まで特定の頭がいたわけじゃない。それを鬼逆がたった一人で牛耳ろうとしているのさ。いわば鬼逆が耶來そのものになりつつあるってことだ」

「大した奴だな。で、その鬼逆というのがどう関わってくるんだ」

「まあ、簡単に言えば、鬼逆が俺に接触してきたってことだ。二日前、笠盛に向かう街道で突然話しかけてきやがった。あいつが來螺を出て来ていること自体驚きだがな。で、伝言を頼むと抜かしやがる」

「ちょっと待て。お前は鬼逆と関わりがあるのか？」

男は渋い表情になった。

「ああ、一時期耶來と取引をしていたんだが、その時に少し……。あの頃は鬼逆もまだ中堅だった。二年程前の話だぜ？ それが気付けばあれよあれよと言う間に大出世だ。相当に無茶をやってる筈だ」

「なるほど。それで？」

「鬼逆は俺に、笠盛の街で灰という奴に伝えてほしいことがある、と言った。はじめは俺も断ったんだが……鬼逆には、その……何かと色々あってな……」

「大方、來螺でもへまをして鬼逆に弱味でも握られているんだろう」  
「……とにかく、俺は灰なんて奴は知らないと突っぱねた。そしてら鬼逆が、お前の名前を出したんだよ」

設啓は思わず目を見開いた。悪名高い耶來でのし上がっている男など、関わったこともない。

設啓という若い卸屋を知っているか？ 奴も笠盛にいる。そいつに伝言を託せば灰に伝わる筈だ

必ず伝える、と最後に残して鬼逆は呆気に取られる男をそのままに何処かへ去ったという。

「俺は鬼逆が出鱈目を言っているんだと思ったよ。多分嫌がらせか何かの類だろうとな」

「そんなことをされる覚えはあるわけか」

「まあな……ってそんなことはどうでもいい！とにかくだな、お前の名前が出たから、お前が何かやばいことにでも関わっているのかと思った。だが、お前は若衆に入っている筈だし、伝言の内容もわけがわからん。もっとも、笠盛にはもともと来る予定だったからそのまま街には入ったが、正直伝言のことは殆ど忘れていたよ」

鬼逆程の人物に必ず伝えろと言われながら、忘れていたとは彼らしい。凄腕の卸屋でありながら、時に信じられぬような初歩的な手抜きをする男なのである。彼が卸屋の仲間内でもいまいち信用されないのはそのせいだろう。

「だが、俺があらわれた」

「ああ、そうだ。たまげたぜ。一体どういうことかと思った。しかも女豹に話をつけるという。笠盛で宇麗に接触するってのは余程のことだ。拳句の果てに人の命がかかっているというから、お前がやはり何かやばいことに首を突っ込んで、耶來と問題でも起こしたのかと思ったんだよ」

「なるほどな。事情はわかった。それで、灰への伝言というのは何だ」

設啓の問いに男はすぐには答えなかった。手の中で空の茶器を弄

びながら、設啓を見やった。設啓は男の表情に僅かに身構える。

「なあ、その灰というのは何者だ？」

「知り合いだ」

「耶來なのか？」

「違う。灰のことはいいからさつさと伝言を言え」

男はおもむろに茶器を卓に置いた。ことり、と響くその音が奇妙に浮いて聞こえた。

「俺は考えたんだ。あの鬼逆が……耶來の主となりつつあるあの鬼逆が、わざわざ伝言を託す相手、それはどんな奴だろうか、とな」

設啓はまじまじと男を見やった。男が何を考えているのか読み取ると苦い表情で溜息をつく。

「鬼逆の弱みでも握ったつもりか？」

「卸屋の勘が騒ぐんだよ。このねたは見過ごしには出来ないってな」

「耶來はもうこりこりなんだろうが」

「ああ。だが何故鬼逆が耶來で昇り詰めたか、その理由は奴には失うものが何もなかったからだ。家族も友人も奴にはいない。ただあるのは敵か味方か、それだけだ。その奴が気にかける相手がいたとはな。まあ、その灰つても単に敵か味方か、という存在なのかもしれんが、違ったらこいつは面白い。もしかすると極上の情報じゃないか？」

「鬼逆に殺されるぞ」

男は僅かに怯んだようだった。当て推量に言ったただけだったが、どうやら男にとっても鬼逆は相当に恐ろしい相手らしい。それならばいらぬ興味など抱かねばよいものを、と設啓は呆れる。

「言うておくが、俺は灰を知ってはいるが、その鬼逆とやらと灰の関係は知らん。知りたければ自分で調べるんだな。まあ、精々殺されないように気を付ける」

「何だよ。役に立たたん奴だな」

往生際悪くぶつぶつ呟く。設啓は鼻を鳴らすと腕を組んだ。

「で、伝言は？」

「ああ、わかったよ。言えればいいんだろ」  
男の表情が引き締まる。さらに設啓の方に顔を寄せると、声を潜めた。囁きは禍々しく響いた。

灰が雑踏で設啓に呼び止められたのは昼下がりのことだった。

笠盛でも最も大きな市場が開かれる路上で、灰は常に無く忙しない足取りで近付いて来る設啓を見やった。何時如何なる時でも取り乱すことのない設啓にしては珍しく、表情が強張っている。

「どうしたんですか？」

設啓は答えず無言で灰の腕を掴むと人波を縫って歩き出した。露店が奔めく通りは混みあい、漫ろ歩く人々の間を足早に進むのは骨が折れる。半ば引きずられるようにして灰は雑踏を抜けた。漸く露店が連なる界隈を抜けて、二人は人気のない路地に入った。そこで設啓は灰に向き直ると、ぼそりと言った。

「正直に答えてほしい」

低いその声音に、灰は眉根を寄せた。その反応をじっと見やり、設啓は腕を組んだ。

「鬼逆……この名を知っているか」

灰は僅かに目を見張った。鮮やかに深い天空を映しだしたようなその瞳は、単純に驚きをあらわしているようだった。灰の答えは聞かずともわかった。設啓は苦々しく溜息をついた。

「知っているんだな。まさか本当に耶來の懐刀と知り合いとはな」

「ああ、そういえば鬼逆さんはそんな風にも呼ばれていましたね」

穏やかに灰が答える。それに設啓は、不覚にも思わず地面に突っ伏しそうになった。何かがずれているのではないか、と目の前の相手をまじまじと見やった。鬼逆 名前を聞いただけで震え上がる、そのような存在なのだ。だが、灰はまるで旧知の友人の名を思いがけず聞いたかのような反応である。のほほんと 設啓には灰の表情はそう見える 灰は問うた。

「どうかしたんですか？」

「鬼逆からお前に伝言だそうだ」

灰がすつと目を細めた。それに設啓の表情もまた引き締まる。

「蛇に気を付けろ、と」

灰と設啓は一旦ねぐらへと戻った。道端で物騒な話をするわけに  
いかなかったからである。改めて灰が使っている部屋で向い合い、  
設啓は卸屋から聞いた話を語った。

「今朝俺は卸屋が溜まり場になっている宿屋へ行った。そこならば宇  
麗に話を通せる奴に会えると踏んだからだ。実際、丁度いい卸屋と  
遭遇した。そいつは情報を扱っう凄腕なんだが、どうも様子がおかし  
かった」

男ははじめから設啓を見て戸惑う様子だった。

「そいつならば宇麗への接触も可能だろうから伝手を頼んだ。人の  
命にも関わることだと言つてな。そうしたら何を思ったのかいきな  
りやばいことから手を引けと言い出した」

卸屋の不審な態度、そして耶來という言葉を口にした件を灰に伝  
える。

設啓はうるたえた男の様子を思い出す。場数を踏み、それなりの  
修羅場も経験してきただろう男が見せたそれには、真実の怯えがあ  
った。設啓とて耶來の恐ろしさは話に聞いて知っているが、実際に  
接すればまた違うということか。

「耶來？」

「ああ、そうだ。あいつはどうやら一時期耶來とも取引をしていた  
らしい。だが、さすがに奴の手に余ったみたいでな、深入りする前  
に手を引いたようだ。とにかく、問い詰めてみたら、どうやら鬼逆  
があいつに接触したらしいんだ。そしてお前への伝言を託した」

灰は訝しく首を傾げたが、設啓の言葉を遮ることはしなかった。

「灰という名前の奴に伝言を伝えるように、とあいつは鬼逆に頼ま  
れたと言うんだ。そして俺の名前も出されたらしい。俺に伝えれば



お前にも伝わる、とな」

「その伝言が、蛇に気を付ける……ですか」

「ああ。もつともあいつは半信半疑だったらしい。笠盛にははじめからから来る予定だったから来たが、まさか本当に俺と会うとは思わなかったと言っていた。大方鬼逆の悪ふざけか嫌がらせだろうと考えていたみたいだが、それはないだろうな」

「鬼逆さんは悪ふざけや嫌がらせで動く人ではありませんからね」

「……よく知っているみたいだな」

「それほど知っているわけではないですよ。会ったのも数える程です」

「來螺にいた頃の知り合い、ということか？」

八歳までを來螺で過ごした灰ならば、どこかで鬼逆と繋がりがあってもおかしくはない。だが灰は首を振った。

「いえ、俺は來螺の表……自警団に属していたので、子供の頃に耶來と接触したことはありません。鬼逆さんとは一年半程前に少しそれ以上を灰は言わなかった。設啓も敢えて問わぬまま、話を進める。」

「まあ、いいさ。とにかく鬼逆はお前が緩衝地帯にいたことを知っていた、ということだな。そしてお前に伝言を届けるよう、奴を使った。奴にしてみればいい迷惑だったろうが。それにしても何故お前の動きを知っているんだ？ しかも俺の名を出したということは、俺が卸屋に関係があることも、奴の知り合いだということも知っていたということだ」

「天楼の鷹」

灰はぼつりと言った。折しも窓の下を走り抜けていく子供達の笑い声に、それは紛れる。

「何だつて？」

「鬼逆さんのもう一つの呼び名です。天から見下ろすように、全てを見通す。彼が耶來で認められているのは、膨大な情報網を持っているせいでもあります」

だが情報は持つているだけでは意味がない。己が利とするために使いこなしてはじめて、それは武器となるのだ。

「だが何故鬼逆は奴を伝言役にしたんだ？ 下手したら伝わらない可能性もある。どうせなら直接お前に言えばいいだろう」

「多分、鬼逆さん自身が緩衝地帯に出て来ていることを人に知られたくない事情があるんでしょね。笠盛の外で声をかけた、ということは街には入れぬ理由があつたのかもしれませんが、表だって動くには障りがあつたのかもしれませんが。そう考えると、その卸屋の人は弱味を握られているのかもしれませんが。鬼逆さんにとっては口外する心配のない相手だということですよ」

「確かにな……」

男のうろたえた様子から、他の者に鬼逆の存在や伝言のことをばらしたら殺す、ぐらいのことは言われていたのかもしれない。

「……蛇に気を付けろ……」

灰はゆつくりと呟いた。

「意味がわかるか？」

「いえ、言葉そのものの意味はわかりません」

言いながら灰は眼差しを伏せた。焦点を結ばぬ瞳が深く染まる。今では設啓にもそれが、灰が考えにふける時の癖であることがわかつていた。辛抱強く待つと、灰は呟くように言葉を紡いだ。

「俺が笠盛に入り密かに動いていることを鬼逆さんが知った……そうだと、今緩衝地帯で起こっていることが、どこかで耶來と関係しているのだとすれば、言葉を伝えようとした意味はわかります。緩衝地帯で起こっている出来事の裏には、耶來の存在があるのかもしれない。そうでないとしても、俺達が追っているのは思った以上に危険な相手だということなんですよ」

「まさか……耶來が來螺なぐを出るなんてことがあるのか？ しかも白沙那帝国内で動くなど、聞いたこともないぞ」

「はい。それを確かめるためにも急がなければなりません」

灰は言った。

その後の灰かいと設啓せつけいの行動は早かった。

設啓は再び卸屋おろしやの溜まり場へ足を運び、宇麗つれいに繋がる伝手を捜す。灰はそれに先行して宇麗がよく立ち寄ると言われている場所へと向かった。

鬼逆きさかの伝言 設啓にも言った通りそれは警告なのではないかと灰は思う。耶來やらいの闇に巢食う男の、それは彼なりの誠意なのだろう。灰と鬼逆が会ったのは一年半程前のことである。もう二度と会うこととはないだろうと思っていた相手であるだけに、鬼逆からの伝言は灰にとつて意外であるとともに、それだけ意味のあるものでもあった。

#### 蛇に気を付ける

物騒な言葉だ。この地で一体何が起こっているのか、鬼逆に会って話すことが出来ればいいのだが、それは無理だろう。第三者を通した、それ自体が鬼逆の意思表示だ。より詳しく知るためには緩衝地帯を裏から御するという卸屋に会うのが最も手っ取り早い。

灰は市場がたつ界限から離れた区画へと足を運んだ。特に変わり映えのない民家が連なるそこに、目指す建物はあった。

建物はまるで小学院のようにも見えるが、それよりも全体的に小さい。四方をぐるりと壁に囲まれ、古びてはいたが人の温もりを感じさせる雰囲気があった。灌木の葉に半ば埋もれるようにしてある門の前を通り過ぎ、灰はさりげなく中を観察した。三階まであるずんぐりと四角い外観は、上から見ればまるで木箱のようにも見えるかもしれない。等間隔に並ぶ窓から内部を窺うことはできなかった。

看板は掲げられていない。だが、そこが笠盛かさむせの卸屋の頂点に立つ媪おんなが開いた孤兒院であることは聞いていた。子供は建物の中にいるのか敷地のどこにも姿はなかったが、建物の前の広場にぼつんと置かれた色鮮やかな手毬が、子供の存在を感じさせた。

灰はどうしたのかと思案する。宇麗はこの孤児院によく顔を出すということだったが、突然訪ねても会ってもらえるとは思えなかった。

「お兄さん、何か御用？」

考えあぐねて暫し立ち尽くしていた灰は、聞こえた声にはっと顔を上げた。見れば壁の上から少女の顔が覗いている。どうやら内側に植えられた木の枝に腰かけているらしい。

「君は？」

問えば相手はころころと笑った。顔が消え、暫くして門を押し開いて少女が出て来た。厚手の布を羽織るようにして身に纏っているが、それにしてもこの寒空の下、木に登るとはなかなか酔狂である。結わずに背に流した髪が、影を含むかのようにしっとり黒い。少女は何の銜いもなく灰に近付く。灰の顔を見上げると、ふと首を傾げた。

「背が高いわ。ちょっと屈んで」

言われて灰は戸惑う。言われるままに身を屈めれば、少女は灰の顔を間近に覗き込んできた。つと手を伸ばし、顔の横に垂れた布をどける。ひやりとした指先で頬に触れられて、灰はまじまじと少女を見やった。少女が眉を顰めた。何かを思い出すようにして灰の顔を見上げ、まるで火傷でもしたかのように手を引っ込める。どこか茫漠として掴みづらかった表情に、鋭く過ったものがあつた。それは灰の目には怯えのようにも見えた。

「お兄さん……來螺……？」

ひそりと囁くように少女が言った。咄嗟に灰は言葉に詰まる。少女が己に向ける眼差しは、追い詰められた獣が見せるそれに似ていた。そして悟る。どうやら來螺の街衆を模した姿に、少女は動揺しているらしい。少女が僅かに後ずさる。尋常ではない恐怖の様に、違つ、と　來螺の者ではないのだと言いかけて、灰は言葉を呑み込んだ。少女の背後からかかった声のせいである。

「紺、何をしている」

大柄な男が門の中から二人を見つめている。灰よりもさらに丈高く、鍛え抜かれがっしりとした体軀は巨漢と言って差し支えないだろう。身に纏うのは武闘着に近い。無駄のない動きやすそうな衣だった。

「その人は？」

男の問いかけに、紺は我に返ったようだった。慄きの上に、さつと笑顔を張り付けた。まさに仮面のように、という表現がしっくりくる。形ばかりの笑みの下に、いまだに恐怖が透けて見えているように灰には思えた。少女は朗らかに答える。

「何でもないの。素敵なお兄さんだと思って声をかけただけ」

「お前は、そういうことはしてはならんと常々言われているだろう。すまん」

最後は灰に向けられた言葉だった。

「紺、来なさい。午後の修学が始まる」

「出たくない。つまらないんだもん。みんなで机に座って、同じ本読んで、何にもためになんかならない」

駄々をこねるような口調である。

「だめだ。宇麗に叱られたくはないだろう」

概して男の口調は穏やかなものだったが、抗い難い響きがあった。なおも不満そうな少女だったが、不承不承といった様子で門の中へ入って行った。最後にちらりと灰へと向けた視線もすぐに逸らされる。その背を見送り、灰は男へと小さく会釈してその場に背を向けた。

足早に道を行きながら、灰は男の言葉を思い返す。男は確かに宇麗、と言っていた。名を気安く出すあたり、かなり宇麗と近い立場にいる者なのかもしれぬ。

聞く話では、宇麗は媪の下で数多の卸屋を束ねる女傑だという。また、公的な警吏けいりとは別に街の治安にも一役買っているらしい。滅多なことでは表に姿をあらわさないが、いざという時には必ず率先して動くと言われていた。

やはり取っ掛かりが必要だ。灰はそう思う。設啓が卸屋の伝手でわたりをつけることがかなえば、今笠盛で何が起こっているかを宇麗に聞く。それも相当にうまく動かねば、何も引き出せぬことになりかねない。どうするか、灰は思考を目まぐるしく巡らせた。

お兄さん……來螺……？

ふと少女の声音を思い出す。何をあれほどに怯えていたのか、不思議に思った。鬼逆からの伝言といい、唐突に來螺の存在が浮かび上がってきたようだ。多加羅で行われる祭礼以外に、來螺が国境を越えて関わってくることは皆無である。少なくとも今まではそう考えられていた。それなのに何故？

疑問は新たな疑問を呼ぶ。市場へと続く雑踏は何時にも増して騒々しく、無為な嬌声が不安を煽った。

いつまでも頬に残る少女の指先の冷たさが、硬く小さな結晶となつて胸中に落ちた。

「ねえ、宇麗姐さんは、私のこと見捨てたりしないよね。ずっとここに置いてくれるよね」

黄は背後から聞いた弱々しい少女の声に足を止めた。振り返ると、紺が途方にくれたように立ち尽くしていた。

「何を言っている。見捨てるわけがないだろう？」

温かな男の声音に、少女は俯いた。纏う布が滑り落ちる。寒々しく薄い少女の肩が僅かに震えていた。

「……どうした？」

打ち捨てられた人形のような、少女の心細気な様子に思わず男は問う。紺はゆっくりとかぶりを振った。

「何でもない」

漏れる声はか細い。

怖いのだと、目の前の男に言えば助けてくれるだろうか。男は優しい。今まで会った男の中でも多分一番、と彼女は思う。だが何が

怖いのかと問われれば彼女には答えることが出来なかった。それは幼い頃から、まさに物心つく前から彼女の中に巣食っている刻印のようなものだった。

「何でもない……」

もう一度繰り返す。男は気遣うように紺を見つめていたが、それ以上問おうとはしなかった。

紺は背後を振り返る。青年の姿は既になかった。彼女の不安がそのまま形を纏ったような青年の輪郭だった。宇麗に会いたかった。泣きついて、わけのわからぬ感情をそのまま彼女に伝えたかった。宇麗ならば、どのように脈絡のない言葉でも受け止めてくれるだろう。

夜になれば宇麗も来る筈だ、と紺は己を励ますように考える。それまでは与えられた役割を果たせばいい。退屈な修学に出て、夕刻には晩御飯の準備を手伝う。もしかすると、今日は煮込みを作らせてもらえるかもしれない。そして夜になれば宇麗のところに行こう。夜になれば　紺は小さく呟いた。

そして呪文のように心の中に繰り返す。來螺は来ない。今更彼女を連れ戻しには来ない。ここにいれば安全

(絶対に来ない)

絶対、という響きが、限りなく不吉に響いた。

物音に須樹は目を開いた。

眠っていたらしい。最早己の輪郭と分かち難くある暗闇の中、彼はそう思う。

長く暗闇にいれば、目を開けていることにさほどの意味がなくなる。それは眠りと現の境をも曖昧にした。故に己が目覚めているのか、それとも眠っているのか、それすらわからぬこともしばしばあった。

その時須樹ははっきりと目覚めているのだとわかった。それまで

の静寂と比すれば聊か非現実的な程に唐突に響いた物音が、夢と思  
うにはあまりにも生々しかったからだ。

聞こえたのは断末魔の悲鳴のようだった。

須樹は咄嗟に素早く身を起こす。手を壁について立ち上がった。い  
た。なおも断続的に悲鳴が続いた。一人だけではない。重なるよう  
に響き、しかしはじめの声はふつりと途絶えていた。一人の後を追  
うようにまた一人、一人、と悲鳴が続き　それはまるで悪い冗談  
のように、音程の外れた唱和にも聞こえた。合間に言葉のようなも  
のも聞こえていた。遠くくぐもつてよく聞き取れぬそれは、まるで  
命乞いをしているかのような切羽詰まった響きである。

長く尾を引く悲鳴を最後に、唐突に静寂が訪れた。それは凄惨な余  
韻を孕んでいた。

須樹は扉の方へと手探りで進んだ。拳で扉を叩く。

「おい！　どうなってる！　あの悲鳴は何だ！」

だが常に扉の前にいる筈の見張りから返答はなかった。なおも扉  
を叩き続けていると、慌ただししい足音が聞こえた。扉の前を走り抜  
ける。間を置かずして怒号が響いた。剣戟の音が聞こえ、揉み合う  
気配があった。

「逃げる！　逃げるんだ！　早く宇麗に知らせ……」

叫んだ男の声途切れる。肉を貫く怖気立つような音が聞こえた。  
べしゃりと、何か湿った物が落ちるような音がそれに続く。

「うわああああー！」

悲鳴が響いた。扉の前に這いずり寄るような気配があった。悲鳴  
混じりの嗚咽が聞こえる。それとは別に近付きつつある足音があっ  
た。複数　だが、そう多くはない。余裕さえ感じさせる歩みだっ  
た。

「嫌だ……殺さないでくれ……頼むから……殺さないで……」

嗚咽に紛れて、切れ切れの声が懇願する。

「おい！　ここを開けてくれ！　頼む！」

須樹は叫ぶと力任せに扉を殴りつけた。すぐ外に聞こえる嗚咽の



主に呼びかける。

「死にたくなければ扉を開けるんだ！！ 俺が助けるから！！」

一瞬をこれ程長く感じたのははじめてかもしれない。やけにゆっくりと、門を外す音が響いた。須樹は扉を引き開ける。仄かな明かりに、足元に蹲る男の震える背中が見えた。

細く続く廊下を見やる。その先、まるで置き忘れられた桶のようにごろりと床にあるのが、人の頭部であることに気付くまで暫くかかった。そうとわかったのは、頭と向き合うようにして座り込む首から上のない体 壁に背を預け、足を広げている に気付いたせいだった。

実際には僅かの間であつたらう。だが須樹には全てが粘つくように引き伸ばされて感じられた。死んだ男の足を無造作に跨いで近付きつつある者達の、影に沈む姿を認める。その手に握られた剣は、仄かな光にゆらゆらと揺れて見えた。足元に蹲る男が投げ出したらしい剣を拾い上げる。短剣と長剣の間程の長さ、この狭い場所では扱いやすい、とどこかで麻痺したように冷静な自分が考えていた。

無言で迫りくる者達のうち一人が動いた。剣を拾ったままの体勢でそれを見やり、鞘を払う その時須樹ははじめてむせるほどに立ちこめる血臭に気付いた。

怒涛のように全てが動いた。

真向から向かって来る相手の剣を打ち払う。鋭い音が響いた。一瞬間を見せた相手の頭部を、左手に持っていた鞘で思い切り殴りつけた。よろめき退くその後ろからさらに一人が須樹に向かって来た。迫る両刃がぬめるような液体に濡れている。

鞘を投げ捨てると、両手で剣を構え、横薙ぎに迫る相手の剣を受け止めた。骨に響くような衝撃だった。

拮抗 ぎりぎりと力を加えられ、須樹は全身で押し返した。

「逃げる！！」

なおも蹲る男に叫んでいた。涙と鼻水にまみれた顔がこちらを見たように思った。まだ若かった。後は確認する余裕もなかった。剣

の向こうで今一人が短剣を抜いたのが見えた。一瞬僅かに力を抜く。つんのめるように押し加かってきた相手を、逆に瞬時に撓めた力を込めて押し返す。予想外だったのだらう。男は不様によるけ、背後の者達にぶつかつた。

逃げようと踵を返しかけ、須樹は咄嗟に剣を斜めに薙いでいた。ぎん、と耳障りな音が響き、弾き飛ばされた短剣が壁にぶつかつて床に落ちる。短剣を投げた男以上に、須樹自身が己の所業に驚いていた。まさに条件反射としか言いようがない。だが、防ぐことが出来たのは僥倖でしかない。

須樹は身を翻すと反対側の廊下へと駆け出した。普段聞いている物音から、そちらが地下の出口であることはわかつていた。背後から追つて来る荒々しい足音が反響する。進む先に、何か蹲っている。通り過ぎしなに、それが首から大量の血を流して倒れている人間であることに気付いた。見た顔のようにも思つた。食事を運んできた一人だらうか。

硝子筒の明かりを頼りに廊下を走り抜け、突き当たりの角を曲がる。その先に階段があつた。

出口だ。

駆け抜けざま須樹は壁に掛けられた硝子筒を掴み取ると、背後に迫る一団に投げつけた。ひたすら無言を貫いていた者達の中から、初めて怒号があがつた。先頭を走る一人の衣に火がつく。不気味なほど整然と迫つて来ていた者達の足並みが乱れ、距離が開いた。

須樹は後も見ずに階段を駆け上つた。長い。

目の前に、まるで切り取られたようにばかりと開けた空間が見えていた。先程の男は無事逃げたのか、扉の向こうは静かだった。そこに飛び出すと、須樹は扉を掴み背後へと叩きつける勢いで閉じた。その一瞬前に、階段を上つて来る者達の蠢く影が見えた。

扉を押さえ、須樹は門がないかと暗がりを目を凝らす。手探りに取っ手のあたりを探り、小さな仕掛けの鍵を見つめる。それを閉じようとした時、須樹の体は背後に吹き飛んでいた。

受け身を取ることも出来ず、背中を強打する。それ以上に、扉を押さえていた腕にびりびりとした衝撃があった。顔を上げると、黒々とした地下への入口に立つ者達の姿があった。力任せに扉を破ったのだらう。扉は壁からちぎれて残骸となっている。

相対する者たちは、何れも頭に巻いた布が深く顔を隠しているせいで面立ちがわからない。全て男ばかり、僅かに三人だった。もつと多く見えたのは、灯に映る影のせいだったのか。須樹は背後に下がりながら、何とか立ち上がった。剣は、倒れた衝撃に手離してしまつたらしい。見当たらなかった。遠くはない場所に落ちているとわかつていたが、少しでも相手から目を逸らせば、格好の隙を与えることになつてしまう。

顔が見えずとも、男達が己に向けるのがどのような眼差しか、須樹は全身で感じていた。一人が抜き身の剣を片手にじわりと近付くと、三人の内、最も後ろに控えていた一人がおもむろに歩み出した。武器の一つも持っていない。剣を手に迫りつつあつた男がそれに気付いたのか、すつと背後に下がった。

全て無言のうちだった。進み出た男が動く。まるで滑るように、一瞬で須樹との間合いを詰めた。須樹は咄嗟に半身を僅かに背後に下げて身を捻った。ひゅつと鋭い音が掠める。顔の真横を男の右の拳が過つていた。その人差し指と中指の間に挟み込むようにして、鋭利に尖った凶器があつた。袖の中にも隠していたのを瞬時に突き出したのか、まるで神業のような素早さである。

短剣、だらうか。錐のように細く鋭く見えた。紙一重で避けた須樹に、男の口角が吊り上がった。

警鐘　須樹は大きく背後に跳んでいた。ぎりぎりの間合いで腹の辺りを男の左手が一閃する。その手にもまた同じ凶器がいつの間にか握られている。

息つく間もなく、するすると男が迫る。

縦横無尽に繰り出される極細の短剣を、須樹は殆ど勘だけで避けていた。身を逸らして右を避ければ、間髪入れずに左が足を狙つて

来る。逆の足を軸に回転して逃げれば、首筋を狙う動きに大きく上体を崩される。腹の真中を狙った容赦のない突きは、再び背後に大きく跳ぶことで辛うじて避けることができた。

だが、そこまでだった。背に固い感触がぶつかると、壁際に追い詰められていた。見る余裕もなかったが、地下への階段があるこの場所は、さほど広くはない空間だったのだ。

追い詰められてなおも須樹は男の動きを見据えていた。首筋を狙うらしい左を、僅かに身をずらして避ける。だが、それは罠だった。はっと気付いた時には、右の短剣が顔の間近に振りおろされていた。過たず、眼球を狙う動きである。それに須樹が出来たのは咄嗟に左腕を掲げることだけだった。

激痛が奔った。

だん、と重い音が響く。痛みに須樹の全身が震えた。短剣に貫かれた腕が、壁に縫いとめられていた。唇を噛みしめて苦痛の悲鳴を呑み込む。己の呼吸が、やけに大きく聞こえた。間近に迫る男を見れば、その口がまるで裂けるようにして笑みを象っていた。

男が左手を振りかざす。それを、須樹はなす術もなく見上げる。

首を狙っているのだとわかった。

空気が、鳴った。

死を覚悟した瞬間、男の体が大きくよろけた。

非常な勢いで飛んで来た何かが、男の体にぶつかったのだ。何かはわからなかった。それは、粉々に砕けて須樹すぎの上に降り注いだ。音は聞こえなかった。がんと鳴り響く己の鼓動だけがあった。

かなりの衝撃だったのか、男が呻いて頭を押さえる。須樹は腕を縫いとめる凶器を掴むと、力任せに引き抜いた。その勢いのままに相手の腹の辺りを薙ぐ。男が大きく背後に跳んでそれを避けた。その隙に、須樹は少しでも男との間合いを広げるために壁伝いに必死に足を動かした。

「くそつたれが!!」

ひどくしゃがれた声で男が叫ぶ。

「行くぞ!!」

一声叫んだ男が突き当たりの窓に体ごとぶつかる。硝子の割れる鋭い音とともに、男の姿は闇に消えた。その後には他の二人が続く。

その段になつて漸く須樹は近付きつつある複数の足音に気付いた。呆然と立ち尽くす須樹の前を、幾人もの男達が走り過ぎ、三人の後を追うのか窓から外へと次々に飛び出して行った。

「逃がすなよ! おい、その二人は地下を見て来い」

足音にかぶり、指示を出すらしい声が響く。須樹は壁に寄りかかると、握っていた短剣を床に落とす。澄んだ音が響いた。

「大丈夫か?」

かけられた言葉に、須樹は顔を上げた。頭一つ高い位置から見下ろす男の顔があった。知らない顔だ。その顔がふと顰められ、須樹の左腕へと注がれた。

「ひどそうだな」

つられて須樹も己の腕を見下ろした。力無くだらりと垂れさがり、流れ落ちる血が手を真赤に染めていた。床に出来た血溜まりに、な

おも指先から雫がひつきりなしに落ちていいる。まるで鋭い爪に鷲掴みにされたような激痛が脈打っていた。

「黄！ 捕えたか？」

響いた声に須樹は顔を上げた。足早に向かつて来る宇麗うれいの姿がある。

「いや、窓から逃げた」

「そうか……」

「上の様子はどうか。火はどうなった。子供達は無事か？」

「全て消し止めた。大した出火ではなかったからな。地下から目を逸らさせるためだけのものだったんだろう。……この破片は何だ」

宇麗は屈み込むと床に散らばった欠片を拾い上げた。

「おい、まさかとは思うが、これは向こうに飾ってあった壺か？」

「まあ、な」

男 黄というらしい の視線が宙を彷徨う。

「昔から大事にしていたものだぞ」

「仕方がないだろう。何か投げつけないとこいつが死んでいたんだからな」

宇麗はなおも何かを言いかけたが、小さく舌打ちをすると無残に壊れた壺の欠片を投げ捨てた。宇麗の眼差しが須樹に向けられる。

「傷を負ったのか。見せてみる」

つかつかと近付いて来た宇麗は無造作に須樹の左腕を掴む。それに須樹は思わず呻いた。

「おいおい、宇麗、もう少し優しく出来んのか」

黄が呆れたように言った。

「うるさい。……見たところ動脈は切れてないようだな。骨にも異常はなさそうだ。運が良かったな。肉を貫いているだけだ。黄、こいつを治療室に連れて行って、治療を受けさせてくれ」

「ああ、わかった。お前は どうする」

「まだ終わっていない。男達の後を追う。それに……地下がどうなっているか確かめないとだめだ」

宇麗の言葉に黄の顔が強張った。ちらりと地下へと続く矩形の闇へと視線を投げる。

「わかった。地下は今様子を見に行かせている。お前……名前を何といったか……」

「駁<sup>はく</sup>だ」

地下への階段を睨み付けていた宇麗が素気なく言った。

「そうだった。駁だったな。ついて来てくれ」

須樹は頷くと、傷口を手で押さえ、男の後に続いた。助かったのだと、今更ながらに実感する。まるで悪夢のような出来事だった。腕の激痛がなければ、まさに夢であると思えそうなそれである。

背後で慌ただしい足音が響く。それに続いて、男の声が響いた。

「だめだ、全員死んでいる！」

須樹は思わず振り返っていた。地下から出て来たばかりらしい若者の顔は蒼々としている。宇麗が拳を握り締めた。問う声は低い。

「何人だ」

「見張りについていた三人と、後から向かった一人で四人……それから……」

報告を述べる若者の喉仏が大きく動いた。喘ぐように続ける。

「捕えた男達も全員が殺されていた」

「何だと!？」

驚愕をあらわにした宇麗が、足早に地下へと入るのを須樹は見つめていた。

「行こう」

一連の遣り取りを聞いていた黄の表情は青褪め、強張っている。厳しい眼差しのまま、須樹を促すと足早に進んで行った。それを追いかけてながら、須樹はちらりと等間隔に並んだ窓を見やった。硝子の向こうは暗い。壁に阻まれ作られた闇とは違う。吸い込まれるように柔らかなそれは夜の色だ。

「一体何が起こったんだ？」

いつの間にか問うていた。先に行く男の答えはない。

「あいつらは何者だ」

「いいから黙って歩け」

素気なく男は言った。言葉とは裏腹に、声は温もりを感じさせた。それを須樹は意外に思う。彼の戸惑いに気付いたように、男は言葉が続けた。

「傷の治療をしたらおそらく宇麗はお前を別の場所に移動させるだろう。仲間の命を救ってくれたとはいえ、お前はまだ虜囚だからな。逃げようなどと考えるんじゃないぞ」

「あの人は無事だったのか」

「ああ」

「良かった……」

ぼつりと須樹は呟いた。それに、男は何も言葉を返さなかった。

その時灰が孤児院の前を通ったのは偶然だった。まだ調べていない界限に足を運ぶつもりで通りがかっただけである。だが、眠りの中にあるであろう建物に目をやったのは、やはり宇麗のことが頭にあつたせいだった。

視線を向けた先、建物の三階に揺れる明かりがあつた。はじめは窓に灯る明かりに見えた。夜半を過ぎている頃合いにまだ起きている者がいるのか、と思い、はつとした。明かりは、灯火にしては不自然だった。ゆらりと影と光が大きく交錯して蠢いている。その窓だけではない。二つ隣りの窓にも同様の不穏な明るさがあつた。さらに離れた窓にもゆらゆらと踊るようなそれがある。

火事なのだと悟り、灰は足を止めた。建物のそこかしこで明かりが灯るのは、出火に気付いた人々が起き出しているのだろう。内部で慌ただしく動く人々の気配が、夜の大気に滲んでいた。やがて不穏な炎は消しとめられたのか、窓は暗がり沈んだ。

我知らずほつと息をついて、再び灰は歩を進めた。冬の乾燥した季節に、火事はままた起こるものだった。だが孤児院であれば子供達



も多くいるだろう。怪我人がいなければいいが、と考える。

灰は特に急ぐでもなく孤児院の前を通り過ぎ、一区画先の横合いに伸びる道へと踏み込んだ。人気のない細い道である。ここを抜ければ、夜遅くまで開く賭場があった。噂をまく者達が動いているとは最早思えなかったが、万が一の可能性を考え、一度は足を運んでおきたかった。

物思いにふけりながら歩いてきた灰は、ふと足を止めた。耳を澄ませる。細く高い悲鳴が聞こえた。それは切れ切れに続く。考える前に灰は走り出していた。

不意に悲鳴が途切れた。さらに足を速めて、灰は角を曲がった。その先に、ちらりと数人の姿が見えた。何かを言い争う男達の声が聞こえていた。足音を忍ばせ、しかし極力素早く灰は男達の後を追った。男達は急いでいるのか、足運びが忙しない。まるで物音をたてるのを恐れるかのような身ごなしだった。遣り取りも小声である。男達が向かう先は、灰の目的地でもある賭場がある界限だった。夜半にも関わらず、まだそこそこの人の姿がある。その道の手前で男達は立ち止まっていた。

灰は静かに近付くと、手前の角から様子を窺う。人数は三人、いや四人だ。三人は男、輪郭しか掴めないが、その中の一人が腕に羽交い締めにするようにして小柄な人影を捕えていた。女性だろう、と思う。悲鳴の主か　方向からしておそらく間違いないだろう。「いい加減にしろ！」

業を煮やしたかのような男の声が聞こえた。声を潜めてのそれは、むしろ静寂に鋭く響いた。風向きのせいもあるうか。灰の視線が陰しくなる。男達の方から流れ来る空気に、微かに金っぽい臭いが混ざり込んでいる。

(血の匂い……?)

「そんな小娘を連れて行けない！」

「こいつは俺の物だ！俺の商品なんだよ！！俺のところから逃げやがったんだ。見つけたから連れ帰る。文句があるか！！！」

「大ありなんだよ。そいつはあの孤児院にいた奴だろう！ 下手に連れ歩いてみる、折角うまく逃げたのに、見つけてくださいと言っているようなものだぞ！」

「見つかりやしねえ。今夜中には笠盛かさもりを出りゃあいいんだ」

「そう甘かねえだろ。既に手を回して街の周りに見張りを置いていてもおかしくはねえ。俺達だけならば顔を見られていないから大丈夫だが、そいつを連れてちやあ街を出ることも出来ねえ」

「いい気になるんじゃないやねえぞ。俺達はお前に従っちゃあいるが、阿呆な頭はいらねえんだよ。さっきだってさっさと逃げりゃあいいものを、あの餓鬼にかかずらっているから連中に追いかけられる羽目になっただろうが！」

「うるせえ！！」

険悪な遣り取りの合間に、嗚咽が聞こえた。まだ幼い響きから少女だとわかった。少女を捕えた男がその耳元で囁いた。

「お譲ちゃん、声を出すんじゃないやねえぞ。どうなるかはわかってるよなあ？ まさかお前が笠盛かさもりの卸屋おひきやの中に隠れているとはな。あんなことをしてまで来螺いらいから逃げ出したってえのに、哀れな奴だよなあ。安心しな、すぐに殺しはしねえよ」

猫なで声のそれに、灰は眉を顰めた。まるで猫が捕えた鼠をなぶるような男の言葉である。残忍な響きがあった。

「くそ……しょうがねえ。とにかく逃げるのが先だ。おい、そいつに叫ばせるんじゃないやねえぞ」

「少しでも叫んだら、その時はお前が何と言おうと、そいつを殺す」  
「ああ」

男は少女から手を離す。だが鋭く細い刃のようなものをその背中に突き付けるのが、灰の位置からは見えた。

男達は大胆にも少女を取り囲むようにして道に踏み出す。賭場ばかりが集まる界限は、明るいとはまでは言えずとも灯火が灯っている。その中を別段急ぐでもなく男達は足を進めている。灰も密やかにその後が続いた。漏れ聞こえた内容だけでも彼の興味を引くには十分

だったが、何よりも男達に囲まれて身を震わせる少女を放っておくことは出来なかった。

道に踏み出してあらわとなった男達の姿を灰は観察する。一様に頭を布で隠しているのは、灰のそれと似通っていた。男の言葉の中にも出ていた通り、彼らは來螺の者のようだった。

辺りは密やかなざわめきに満ちていた。人々は倦んだ空気を纏い、酒の臭気が凝っている。儲けを一夜の快楽につきこむ男を求めてか、道端には幾人もの女達がしどけなく立っていた。三人の男と少女は不審の目を向けられることもなく、夜の雑踏に溶け込んでいる。賭場が連なる界限を抜ければ、その先は夜陰に沈む道が続いている。

灰はどうしたものかと考える。衆目のある中で男達に手を出すことが出来ないのは勿論、暗闇で不意をつかねば三人を相手にするのは無理そうだった。機会を窺いながら歩いてきた灰ははつとする。灯火が途切れ、暗闇へと没する辺りで、不意に少女が動いたのだ。脱兎の如く駆け出す。

「畜生！ 待ちやがれ！」

少女を捕えていた男が叫ぶ。少女の足が男に敵うわけがなかった。あつと言つ間に追いつかれ腕を掴まれた少女が身を振る。衣が裂ける音が響いた。

「やだああ！ はなしてよお！！」

甲高い悲鳴が響く。男が少女の頬を張り飛ばした。倒れ込んだ少女を見下ろし、男が刃を構える。その時、男を見上げる少女の顔が、はじめて灰の位置から見えた。ほつれた黒髪が縁取るその顔は、昼間孤児院で話しかけて来た少女のものだった。

男が腕を振り上げる。殺すつもりか 瞬時に灰は動いていた。

男と少女の様子を見やる二人の横をすり抜け、刃を少女に向ける男の背中に肩から突つ込む。倒れた男を見ることもなく、灰は素早く身を翻すと地面に倒れ込んでいる少女へと向かった。腕を掴むと、抱え上げるようにして立ち上がらせる。

「走れ！！」

言つと、灰は少女を引きずるようにして走り出した。少女の動きは、まるで人形のようにぎこちない。何が起こったのかわからぬのか、恐怖に大きく見開かれた目が焦点を失っていた。

背後で男が何かを叫ぶ。続いて追つて来るらしい足音が聞こえた。それに振り返ることもなく、灰は手近な路地へと飛び込んだ。数日間笠盛の街を歩き回り、地図も大方頭に入れている。今いる位置を考えれば、その路地が入り組んだ区画に繋がるものであるうことがわかつていた。手元を照らす灯火もなく、窓から漏れる明かりもない。星月の光も遮られ、そこは全てが青錆びた黒に染まっていた。灰は少女の腕を掴み、距離感と方向感覚だけで道を走り抜けた。

先程は運が良かった。男と少女の遣り取りに他の者が気を取られていたせいで隙をつくことが出来た。だが走ることもままならない少女を連れてあのような者達を三人も相手にすれば不利は目に見えていた。逃げるには地の利を活かすしかない。もつとも、それは男達がこの街にさほど詳しくない、というのが前提であり、それは賭けでもあった。

怯えきつた少女の足の運びは覚束ない。夜目も効かないのか、何度も躓くのを倒れぬよう支えた。幾つもの角を曲がり、複雑に分岐した道を進むうちに、灰は漸く男達が後を追つて来ていないのを確信した。うまく撒くことが出来たようだ。

足を止める。振り返ると、少女が灰を睨みつけていた。灰が掴んだ腕を突っ張り、威嚇するように全身を竦ませている。

「あなた、誰。私をどうするつもり？」

「何もしはしない」

「嘘!!! 腕をはなして!」

低く、震える声で少女が叫んだ。

「來螺には戻らない! 絶対に戻らないから! 連れ戻そうとしたら舌を噛み切つて死んでやる!」

少女は腕を振り払おうと身を擦る。灰は何とか少女を落ち着かせようと、極力穏やかに言つた。

「俺は來螺の者ではない。さっきの男達の仲間でもない。何もしないから、落ち着いてくれ」

少女の白目に浮かぶ涙に気付きながらも、灰は腕をはなすことが出来なかった。腕をはなせば相手は闇雲に逃げようとするだろう。そのようなことをしてあの男達に遭遇すれば、再び助けることはかなわない。

「嫌だ！ 死んでやるから！ 離せ！ 離せつたらあ……」

振りかぶられたもう片方の腕を、灰は反射的に掴んでいた。細い手首を引き寄せた拍子に、少女の衣が大きく捲かれた。先程男と揉み合った時に裂けた袖から、夜目にも白い上腕が晒される。そこに灰の目が引き付けられた。左肩の少し下に、黒々と刻まれたものがあった。それは禍々しく、まるで幾重にも絡み合う炎のような、奇妙な形をしていた。焼印だ。

自然と眼差しが険しくなる。彼はそれが何を意味するか知っていた。

じっと見つめる灰の視線に気付いたのか、少女の動きが凍りついた。抗い強張っていた体が弛緩する。まるで虚脱したように、全身から力が抜けた。表情から全てが抜け落ちる。暗い瞳が地面を見つめていた。いや、地面すらも見てはいない。そこにあるのはただ虚無だった。

灰は掴んでいた少女の腕をはなした。外套を脱ぐと、立ち尽くす少女の体に触れぬよう気をつけながら、肩を包み込むようにそっと纏わせた。少女の顔を覗き込む。

「大丈夫だ。傷つけるようなことはしない。來螺に連れて行くようなこともしない。あの男達から助けたかっただけだ」

少女は震える手で外套を握り締め、体に引き付ける。

「あの孤児院の者だろう？ ちゃんと送り届けるから安心してくれ」  
弾かれたように少女が顔を上げた。

「だめ！ 孤児院には戻れない」

「何故だ。あそこに住んでいるのではないのか？」

「だめなの……だって、知られた……あの場所にいることを知られた……もう戻れないよ。あいつは必ずまた来る」

「さっきの男か」

「うん。あいつ……絶対私を捕まえに来る。孤児院のみんなにも迷惑をかけられない」

ぼつりと少女は呟くと、益々身を縮めた。灰は迷う。孤児院に連れて戻るのが良いのか、彼自身にもわからない。少女が言うとおりの男が再び姿をあらわさぬ、という確証はないのだ。男が発した言葉、そして腕に刻まれた印のことを考えれば、少女の懸念は当然とも思えた。

「わかった。孤児院には連れて行かない。俺はこの街の者ではないが、寝泊まりしている場所がある。そこに暫く匿うから、あの男達が再び姿をあらわさないか確かめよう」

おずおずと少女は顔を上げた。目を細め、灰を見つめる。漸く暗さに目が慣れてきたのか、灰の面立ちがわかったのだろう。驚きを浮かべた。

「昼間のお兄さん？」

「ああ」

「本当に來螺の人じゃないの？　だって、その格好……」

「俺は來螺の者ではない。髪色が目立つから隠すために布を巻いているだけだ」

「どうして、助けてくれたの？」

「あのような場に行きあつたら放つてはおけない」

「じゃあどうして匿ってくれるなんて言うの？」

「ここで君を放り出して、またあの男達に見つかつたらどうする」少女は黙り込む。灰の言葉をそのまま信じたとは思えなかったが、怯えの下で必死に考えを巡らしているだろうことがわかった。

「お兄さん、さっき私の腕の印を見てたよね。あれ、何か知ってる？」

灰は僅かに言葉に詰まったものの、正直に頷いた。

「ああ、知っている」

「……………」  
「あれは耶來やらいが裏側の一員につけるものだろう？ 縄張りによって様々な模様があると聞いたことがある。」

「……………」  
「一員なんかじゃないわ」  
少女が呟いた。

「あいつはこの印を打つ時、私に言ったの。お前は俺の家畜だ。役に立たなければすぐに処分する単なる商品だつて」

握りしめる拳が細かく震えていた。かける言葉もなく、灰はただ少女を見つめる。少女はくしゃりと顔を歪めた。

「私……………」  
必死に逃げたの……………」  
來螺から。ねえ、知ってる？ 裏側から逃げた人間の末路は必ず死なんだよ。どこまでも耶來が追ってくる。どこまでも……………」

少女は全ての感情を削ぎ落したかのように無表情になる。だが虚ろでありながら、夜気に零れる落ちる程に少女が抱えるもの、それは恐怖だった。内に巢食うそれが、まるで食い荒らすように彼女を侵食していくのを灰は感じ取る。

「あの男達が孤児院に君を捜しに来たのか？」

「……………」  
わからない……………。孤児院で火事が起こって、私、怖くて怖くて……………」  
庭に出たの……………」  
そしたら、突然あいつがあらわれて……………」

それきり少女は口を噤んだ。灰もまた黙す。少女が一人で耐えているのだと、正気すら奪おうとするかのような感情を抑えようとしているのだと、わかった。どれ程そうしていたのか、少女は細く息を吐き出すと真直ぐに灰を見上げた。虚ろだった瞳に、僅かに力が戻っている。

「私、來螺の裏側にいたのよ。耶來に飼われていたの。お兄さん、それを知っても私を助けてくれるの？」

「ああ」

灰は頷いた。言葉少ない灰の応えに少女は何を思うのか、ふと目を瞬かせた。ぎこちなく、握り締めた手から力を抜く。白く強張っ

た指はまだ微かに震えていたが、声に迷いはなかった。

「……私、お兄さんを信じる。私の名前は紺<sup>こん</sup>。紺色の紺。お兄さんは？」

「灰だ」

「お兄さんのところで匿って」

灰は頷いた。

「これから俺が寝泊まりしている場所に連れて行くが、歩けるか？」  
「大丈夫」

きゅつと唇を噛みしめて少女は言った。灰はゆっくりと歩き出す。後に続く少女の様子に気を配りながら複雑な路地を抜けて行った。

「……お兄さん、ありがとう」

少女が呟いたのは、歩き始めて暫く経った後だった。

「蛇に捕まったら、きつと私殺されていた」

灰は息を呑み、振り返る。突然足を止めた灰に、少女が怪訝そうな眼差しを向けた。

「あの男は、蛇というのか？」

「みんながそう呼んでいるだけ。本当の名前は知らないわ。腕に蛇みたいな刺青をしているの。それに本当に蛇みたいな奴。私の焼印、あいつの刺青と同じ形をしているの」

炎のように見えたが、蛇が幾重にもとぐるを巻く様をあらわしたものだっただ。

「そうか……」

それだけを言うと、灰は再び足を進めた。鼓動が大きく跳ねていた。

蛇に気を付ける

あの男が『蛇』ということか。知らず拳を握り締めていた。

まだ見えぬ、だが確かに何か繋がったのだと、灰は感じていた。背後に響く少女の足音程に頼りなく、覚束ない。だが複雑に絡み合う事象の、その綻びを掴んだという微かな手応えがあった。



宇麗うれいが疲れ切った体を引きずるようにして部屋へと向かったのは、既に明け方に近い頃合いだった。

扉を閉め、小さな空間をぼんやりと見回す。二階の一角に寝るためだけに設えた彼女の部屋は、ごく簡素なものである。それが今は常にも増してよそよそしく見えた。絶え間なく指示を出し続けたせいで喉はいがらっぽく、眼の奥に凝る鈍痛があった。少しでも休むべきだとわかつていたが、宇麗は動くことが出来なかった。

目を閉じれば、暗がりに転がる幾つもの屍が見える。血の臭いが体にしみついている気がした。地下は惨憺たる有様だった。見張りのため地下にいた三人はいずれも喉を切り裂かれて死んでいた。異変に気付いて駆け付けた一人は首を切り落とされていた。昼間には笑顔で言葉を交わした者達だった。物言わぬ骸となった彼らの体は、宇麗がその場に赴いた時、まだ温かかった。

捕えた男達はさらにひどい死に様だった。部屋一面に飛び散った血糊は天井にまで達し、大量の血は通路にまで流れ出していた。まるで死の前に苦痛と恐怖を与えるのが目的であるかのように、いずれも腹を裂かれていた。止めを刺されるまで彼らは言語を絶する苦痛に苦しみ悶えただろう。尋問にも決して口を割らなかつた男達が最期の瞬間に何を思ったか宇麗には測りようもないが、その死に顔にあつたのは苦悶であり絶望だった。

殺人者は宇麗達の追跡の手を逃れ、夜の中に姿を消した。はじめから綿密に逃走経路を決めていたのだらう。孤児院の敷地に多く植えられた木々の影を利用し、それこそ影に溶け込んだのかと訝りたくなるほどの鮮やかな逃げ足である。そして、敷地の内部の探索に時間を割き過ぎたせいで取り逃がしたのだと、宇麗は気付いていた。地下に気を取られ、指示が遅れた。普段の密な連携が崩れていった、と苦々しく思う。失態　取り返しをつかないそれに、荒れ狂

うのは己への怒りばかりだ。

のろのろと宇麗は寝台に近付くとその上に座る。半ば無意識に衣の帯に手をかけて、顔を上げた。小さく扉を叩く音が聞こえた。

扉を開けるとそこにはまだ二十そこそこの娘が立っていた。孤児院で育った一人で、今では子供達の世話をしている娘だった。ふっくらとした丸顔は青褪めている。

「どうした」

「あの……お疲れだとは思いますが、どうしてもお聞きしたいことがあって……」

「何だ？」

「紺こんがないんです。あの子がどこにいるか御存知ですか？」

「いや、知らないが……部屋で眠っているんじゃないのか？」

娘は大きく首を振ると、早口で続けた。

「火事の後、子供達を寝かしつけて、それからみんながちゃんといるか確かめたんです。そうしたら紺の姿がなくて……あの子、前から火事をすごく怖がっていたから、怯えてどこかに隠れているのかと思っただんですけど、いくら待っても寝台には戻って来なくて……心配になって建物の中を探したんです。でも、どこを探しても見つからなくて……」

「そうか……」

宇麗は疲労と不安に歪む娘の顔を見つめた。

「どうしたらいいでしょう。こんなことはじめてなんです」

「夜が明けたらあたしも探してみるよ。案外にどこかに隠れてそのまま眠ってしまったのかもしれない」

「そう……そうですね。私、あんなことが起こって、紺まで何か危険な目にあっただんじゃないかと……大丈夫ですよ」

「とにかく、早く寝るんだ。疲れた顔をしている」

「はい」

娘は頷くと一礼し、部屋を出て行った。それを見送り、宇麗は前髪を掻き上げた。

(紺が、いない……?)

紺は騒ぎが起こるまで宇麗の部屋にいた。いつものように宇麗の寝台に寝そべり、しきりに笑い声を上げた。だがそこに、子供達が寝起きする三階の一角で火が出た、という知らせが入ったのだ。現場に駆け付ける前に、紺にどのような言葉をかけたか、宇麗は記憶を探る。紺が火事を異様に怖がっていることは宇麗も知っていた。そのため、部屋から出ぬように言ったはずだ。

出火自体はごく小さなものだった。使われていない幾つかの寝台の掛け布団が燃えたのだ。子供達にも怪我はなくほっと胸をなでおろした時、一人の若者が宇麗の元に連れて来られたのだった。若者もまた孤児院で育ち、最近になって卸屋おろしやとしての仕事を学び始めた者だった。呂律も回らぬ程に怯え、支えがなければ立つことも出来ぬ程に震えながら若者は必死に宇麗に伝えた。地下で仲間が殺されている、と。

若者の報告を受けて宇麗はまず捕えた男達か、あるいは駁はくが見張りを殺して逃げたのかと考えた。だが、聞けば駁は身を呈して若者を守ったという。ならば、男達が逃げたのか 急ぎ地下に駆け付けた彼女達を待っていたのは、その予想をも上回る惨状だった。

何者かが外部から忍び込み、地下にいた仲間と捕えた男達を尽く抹殺したのだ。火事は、おそらく地下に目を向けさせぬための罠だった。男達を捕えていた地下とは違い、子供達が生活する上の階には見張りなど置いていないため、火を付けるのは容易かつただろう。そして宇麗達はうかうかと殺人者の思惑通りに動いた、というわけだ。実際、常ならば地下の見張りの数はもつと多い。だが火事のせいで僅か三人だけを残して、他は消火とそれ以外に出火がないかの確認に回ったのだ。その隙に、地下での惨殺が起こった。

宇麗は再び紺のことを考える。多感で複雑な紺という少女を、宇麗は常から気にかけている。目を離せぬ危うさがあるのだ。何か変わった様子がなかっただろうか、と思う。いつにも増して紺は明るかった。だが、その笑顔に時折掠めるような、不安の影がなかった

か　？　部屋を出る直前に見た紺の顔が、泣き出しそうに歪んではいなかったか　？　思えば、どうも様子がおかしかった。霞がかったように、記憶の中の紺の顔は曖昧に遠い。もどかしさに宇麗は齒噛みした。目を転じれば、白々とした光が窓から差し込んでいる。

何時の間にか夜が明けようとしていた。

仁識にしきは鍛練用の剣を壁に立て掛けると、天を仰いだ。

鍛練所の広場には、既に若者の姿はなかった。いるのは彼だけである。火照った体に、冷たさを増した風が心地よい。だが汗が引けば、たちどころに体温を奪われるだろう。剣舞けんまいの基本的な動作を繰り返したただけだったが、かなりの運動量となる。昼間は若者達の指導に当たるため、自身の鍛練はこの時間でなければ出来なかった。それにしてもどうやら普段よりも熱中していたようだ。既に宵の刻である。

ひたすらに剣を振った。それで何が振り切れるわけでもなかったが、少なくとも渦巻く思考から意識を逸らすことは出来た。この数日間纏わりつく苛立ち、不安　それらが束の間遠ざかっていた。だが体の熱が引く程に、再び思いは一つの方向へ向かう。

灰かい達が緩衝地帯に赴いてから、何の報せもないまま既に五日が経っていた。不安を露わにする治都やとには何度も焦るなと言い含めていた。だが、表面上は繕いながらも、仁識自身が焦燥に捕えられていた。

灰は明確な目的を持って笠盛かさもりに赴いた。すなわち、須樹すくを見つけて出すのだと。一旦こうと決めた灰の行動力は抜きん出ている。間近で灰を見て来た仁識はよく知っていた。普段滅多に見せることはないが、灰が自発的に動く時、余人には到底無理なことでも成し遂げることがあるのだ。その彼から音沙汰がない。

いくらなんでも、報告が遅過ぎはしないか　？

(埒があかぬ)

仁識は思考を振り払うように頭を振ると、広場を後にした。ここで考えても、何もならぬ。ただ待つ立場が腹立たしくもあるが、無闇に不安を増大させるのはそれこそ無意味なことだ。

道具一式を倉庫に戻し、仁識は建物の施錠を確かめると鍛練所の裏手へとまわった。すでに表の門は閉じている。裏の小さな木戸から外へと出た仁識は、そこにも鍵をかけて踵を返した。そしてはたと立ち止まる。簡素な馬車が道の端に止まり、その傍らにはまるで彼を待ち構えていたかのように、人影が一つ立ち尽くしている。

奇妙なことだった。そこは普段人が滅多に通らぬ裏道である。思わずまじまじと見やった仁識に、件の人物が深々と頭を下げた。

「若衆副頭の仁識様でいらっしやいますか？」

仁識は訝しく目を細めた。この人物は真実彼を待っていたということか。

「そうですね」

「我が主が是非ともお会いしたいと仰せです。ともに参っていただけきたい」

「その主とは？」

「透軌様きつじにございます」

淡々と答えるそれに、仁識は一瞬息を呑んだ。

「どのような御用件なのですか？」

「それは透軌様きつじが仰られることでございます。さあ、どうぞこちらへ」

仁識の意向など構わぬ様子で　無論、仁識が拒むことなどできはしないのだが　男は馬車へと腕を述べると、扉を開けた。目の前に開かれたそれを見つめ、仁識は小さく嘆息すると馬車の中へと乗り込んだ。男が扉を閉めた。途端に視界が薄暗く染まる。小さな窓には厚い布が張られ、外を見ることはかなわなかった。つまり、外からも中は見えぬ、ということだ。

気に食わぬ　仁識は惘然と椅子の背もたれに凭れた。

男自身が御者台に座っているのか、やがて馬車は軽快に走り出した。轍の音が響いた。

馬車を降りるとそこは惣領家の屋敷の裏手だった。普段表から見ればかりの壮麗な屋敷は、角度を変えればまた全く違うものに見えた。それは覆い被さるようにして背後に押し迫る森のせいであったかもしれない。木々の影が屋敷の壁を染める様は、まるで建物を呑み込まんとしているかのようにも見えた。寂々と、暗い。

男の後に続き仁識は小さな扉から屋敷の中へと入る。使用人が使う入り口なのだろう、入った先は細く暗い廊下だった。綺麗に掃き清められていたが、物寂しく煤けた雰囲気がある。

「こちらでございます」

男が立ち止まったのは、暫く進んだ先にある木の扉の前だった。

深い色合いのそれを男は軽く叩く。中から聞こえた青年の声に、男は答えた。

「お連れ致しました」

そして扉を開けると、視線を仁識に向けた。どうやら男自身は中へは入らないらしい。

仁識は部屋の中へと踏み込んだ。そこは小さな書庫のようだった。硝子筒の仄かな明かりは柔らかく、部屋の中にある物の輪郭を曖昧にぼかしていた。等間隔に置かれた棚には整然と書物が並べられ、いつか見た星見の塔の書庫とは対照的な様である。

透軌は棚の手前に佇んでいた。中へと入り立ち止まった仁識へと顔を振り向けると、穏やかに笑んだ。

「足労だったな。突然に済まない」

「いえ。どのような御用でしょうか」

透軌は窓辺へと歩む。目でその動きを追う仁識に、こちらへ、と声をかけた。仁識は命じられるままに透軌の傍らに立った。透軌の横顔は何を思うのか、窓の外を見つめている。仁識もまた視線を戸外へ向けた。

「若衆はどのような様子だ？ 灰達が緩衝地帯に赴いてから混乱はあるか？」

「常と変わりはありません」

「そうか。君には苦勞をかける」

「いいえ、錬徒もおりますので、支障はございません」

「そうか。それなら良い。私がこの場に君を呼んだのは頼みたいことがあるからだ」

「何でございましょう」

「君の助けをかりたいのだ」

仁識は思わず透軌を見やった。透軌の顔が正面から仁識を見つめていた。

「これは公には出来ぬことだが、惣領のお体の調子はおもわしくない。私自身、今後はより父を支えたいと考えている。若衆頭として時間を割くことは益々出来ぬだろう。なればこそ、君には私の傍近くで若衆頭の任を補佐してもらいたい」

仁識は僅かに首を傾げた。

「何故、私なのですか？」

「副頭の中でも君が最も中心となっているのだろうか？」

「そういうわけでもございません」

「謙遜はせずともよい。君の手腕を私は見込んでいる。行く行くは、若衆頭の座は君に譲ろうと思っている。それに向けての準備と考えるもらってもよい」

静寂が落ちた。感情を窺わせぬ透軌の瞳を仁識は見返す。まるで互いの思惑を読み取るうとするかのように、視線が交錯する。硝子筒の炎が一瞬大きく膨らみ、揺らめいた。

仁識はふと笑んだ。

「私を後の若衆頭とお考えなのですか？」

「君以外に適任の者はおらぬだろう」

「いえ、私はそうは思いません。若衆頭には灰様がおなりになるべきでしょう」

「灰が……？」

透軌が僅かに目を細める。思案するように　まるで今はじめてその可能性に思い至ったかのように、従兄弟の名を繰り返した。

「灰には若衆頭になるだけの力量があるか？」

「私はそのように考えております。それに、灰様こそ、透軌様を補佐するに相応しいのではないでしょうか」

「なるほど」

ふいと、透軌の視線が逸らされた。その横顔に、複雑な陰影が過る。それが、微かに浮かんだ笑みのせいであることに仁識は気付いた。柔らかく、透軌は笑んでいた。

「さて、困ったものだ。正直に言わねばなるまいね。私と灰の間にはさほど信頼関係がないのだよ」

穏やかに語られた言葉に、仁識は黙す。その沈黙に、透軌がゆるりと再び視線を巡らした。

「意外に思ukai？　だが彼と私は従兄弟とも言えどもまともに会話を交わしたことさえない。灰は惣領家を厭っている。惣領家に関する全てを嫌悪しているのだ。もつとも、彼の立場を考えれば、それも無理からぬことかもしれぬ。私自身、それほどに拒絶されては灰を恃むことも出来ぬ」

透軌が笑みを深めた。それに仁識は眼差しを伏せた。

「何故、私にそのような話をなさるのですか」

「先程も言ったが、君に、私を助けてもらいたいからだ。今多加羅惣領家は微妙な立場にある。父上のお体が危ぶまれるうえに、緩衝地帯での騒ぎ……いつ沙羅久くわいやくから難癖をつけられるかもわからぬ。若衆頭の任を預けるだけではなく、君には若衆を脱した後にも助けとなってほしい。私は今この時、何よりも信頼できる臣下が欲しいのだ」

真実多加羅を思い、力になってくれる者が　続く透軌の言葉は僅かに力が籠っていた。

「君の祖父殿は素晴らしい玄士であったと聞く。父上も惣領家への



忠義は人一倍強い。大家の名に恥じぬ。君にも私の傍近くにあつて惣領家を支えてもらいたい」

「透軌様は私を買い被つておられます。私はとうに父にも見放され、ただの若衆でしかありません。最早大家の称号にもさほどの意味はございません。透軌様をお支えしようという者は他にも多くおりましよう」

ふと、透軌は息をついた。続いた声音は僅かに低い。

「これは灰のためでもあるのだよ」

仁識は顔を上げる。透軌は再び窓外を見詰めていた。

「君も知っているだろうが、灰を認めぬ者はいまだに多い。彼らが黙っているのは父自らが灰を多加羅へと招いたからだ。だが、私の代となつた時にも、灰を守ることがかなうかはわからぬ」

仁識はまじまじと目の前の青年を見やった。

「君は大層灰を認めているようだが、そうではない者の方が多い。

君もそれには気付いているのではないか？」

「……………」

「君が多加羅中枢で力を得ることは、そのように灰を排斥しようとする者達への牽制にもなるだろう」

「透軌様御自らでお守りになるうとはなさらないのですか？」

「それこそ買い被っているのは君の方だ。灰の行く末を案じぬわけではない。だが私には父ほどの力も人望もない。それは私自身が誰よりも自覚していることだ。灰を排斥しようとする者が大勢を占めれば、私にもそれを留める術はないのだ」

まるで卑下するかのような言葉でありながら、それはごく淡々と紡がれた。熱を感じさせぬ白い面に浮かぶものを、仁識は掴みかねる。諦めか、と思ひ即座に否定していた。まるで違う。

灰を守るために、己の力が必要だというのが　そう問おうとして、仁識は言葉を呑み込んでいた。問うてはならぬ、と自制する内心の声があつた。透軌の眼差しは静かに、だが紡がれる沈黙が、語られぬ彼の心情をあらわしているようだった。圧せられ撓められて、

蠢いている。

測ろうとしているのだ、と仁識は思う。それは直観だった。透軌は仁識が真実己の利となる人物であるか否かを見極めようとしている。灰、という名を出し、それに彼がどのように反応するかを見守っているのだ。

仁識はこの瞬間、誰よりも透軌を理解していた。次期惣領を担う透軌を人々がどう評しているか、仁識とて知っている。勤勉と言われはするが聡明とは言われず、物静かで穏やかな物腰は一部の古参の家臣には覇気がないと見做されている。言葉一つ、あるいはその立ち姿だけで人を引き付ける峰瀬みなせのような牽引力はなく、沙羅久と伍していくにも頼りなく薄弱と陰で言われていた。

惣領の器としては、あまりに凡百　そしてそのことに、透軌自身が気付いているのだ、と仁識は悟る。透軌が己をそのように見做すまでにどれほどの年月を要したか、それは窺い知れぬ。だが偉大と評される現惣領に比され、周囲の過大な期待の中で己の力が遠く父親に及ばぬのだと自覚した透軌が、どのようにして生きて来たか　そしてこの先どのようにして生きようとしているのか

仁識はそれまで抱いていた透軌への印象を改める。透軌は愚かではない。むしろ静かな面の下に滾る我執を抱え、己の不足を補うためにあらゆる手段を講じ、あらゆるものを利用する狡猾な人間なのではないか。透軌にとって人とは、己の利となる存在か、あるいはその逆、行く手を阻む存在か、二つのうちのいずれかではないのかもしれぬ。

仁識の沈黙をどのように取ったのか、ゆるりと透軌が微笑んでいた。

「これから多加羅惣領家は益々困難な時を迎える。私の力だけでは最早それを乗り越えることは出来ぬのだ。仁識、私の力となっておくれ」

命令だった。もとより拒むことなど許されぬことだった。細く、決して解けることのない蜘蛛の糸に絡め取られたかのような感覚を

仁識は覚える。

「承知致しました」

一礼すると仁識は答えた。互いに目を合わせることもなく、寒々とした部屋の床に素気なく言葉は落ちた。透軌が笑みを深める。

「頼んだよ」

透軌との対面を終えて部屋を出た仁識は、先程の男が廊下の先で待っているのに気付いた。男は一礼すると彼を再び屋敷の裏手に誘う。来た時と同じままに、馬車が待っていた。どうやら仁識の屋敷まで送るつもりらしい。

男が無言で開けた馬車の扉の中へ仁識は踏み込む。扉が閉ざされる前に、仁識は屋敷に押し掛かる木々の様をちらりと見やった。木々が縦横に枝を伸ばす様は、どこか天に腕を述べる人々の群れを思わせた。

駆ければ足音は幾つにも重なる余韻を響かせた。目指す一室は人気がない広い廊下の先である。稟は弾む足取りで部屋に辿り着くと、ひよこりと中を覗いた。微かな薬草の匂いに、数日来顔を見ていない兄の存在を思い出す。

静星は目を閉じていた。だが、眠ってはいなかったらしい。部屋に歩み入った稟の足音に、うつすらと瞼を開く。稟は寝台に座り静星の顔を覗き込んだ。

「ごめんね。まだ兄様は帰って来ないの」

稟の言葉に、静星の瞳が曇る。それでも微笑みを稟に向けると、小さく首を振った。

「稟が毎日来てくれるもの」

静星は密やかに言った。耳を近付けねば聞き取れぬ程の声だった。たったそれだけの言葉にも、静星は苦しそうな顔をした。

「静星、喋っちゃだめだよ。苦しくなっちゃうんだから。兄様が帰って来た時に元気な顔を見せてあげなきゃ」

「うん……」

静星は力なく頭を枕に落とす。窓から落ちる光が、透ける白布に似て静星の顔を仄かに染める。

「ね、稟、あの歌を歌って」

稟は首を傾げた。

「前、灰様と一緒に来た時、歌ってくれた異国の歌」

「うん」

稟は頷くと、そつと口ずさんだ。繰り返し刻む旋律は柔らかい。稟には不思議と言葉に込められた祈りがわかった。その言葉が空気に溶けて、静星の病を癒せばいいのに、と思う。そうすれば、静星はもつと生きることが出来る。

(兄様もきつと辛い思いをしないですむのに……)

灰は稟を滅多に慈惠院じけいいんに連れて行くとうはしない。それは慈惠院が病と死に満ちた場所であるからなのだと、幼いながらに稟はわかっていた。灰は己のことを殆ど語らぬ。だが、慈惠院から戻った彼が、時に酷く辛そうな表情をしていることに、稟は気付いている。そのような時、灰が一つの命の最期を見届けただろうことを稟は知るのだ。

静星のところになるべく行ってあげてくれないか？

灰が稟にそう言ったのは、彼が若衆の任務で多加羅を離れる前夜のことだった。出来れば冬の間は傍にいてやりたかったが、多加羅に戻るのが何時になるかわからぬ。静星を一人にしないであげてほしい、と。その頼みに稟は頷いた。その時、静星の命もまた尽きつつあるのだと、稟は悟ったのだった。

緩やかな抑揚の旋律を繰り返すうちに、静星が瞳を閉じた。どきりとして稟は静星の手を握る。微かな鼓動の響きが伝わり、稟はほっと息をついた。眠ったのだらう。白くやつれた静星の顔は、ただ穏やかだった。

暫く歌を口ずさみ、やがて稟は立ち上がった。光は既に翳り、夜の匂いがしていた。

静星を起こさぬように静かに部屋を出る。そのまま慈惠院の出口へと向かおうとして、稟はふと足を止めた。回廊の柱の影に佇む人影があった。じっと見つめる稟に、その人影　老婆はゆっくりと近付いて来る。十一の稟と並べば目線の高さは殆ど変わらぬ。一体いくつになるのか、曲がった腰と深く皺の刻まれた顔が、老婆が過ぎた時の長さを物語っていた。

「素敵な歌が聞こえたけれど、歌っていたのはお譲ちゃんかい？」  
頷いた稟に老婆が莞爾とする。

「懐かしい、古い古い歌だ。お譲ちゃんはとても上手だねえ」

「ありがとう。おばあちゃんは慈惠院に入っているの？」

「そうだよ。どこと言って悪くもないんだがね、老いそのものが一つの病だからねえ」

稟は首を傾げた。その反応に老婆は笑む。

「いやいや、詮方ないことを言ったものだ。まだまだお譲ちゃんにはわからないだろうね。わかる必要もないんだよ。お譲ちゃん、ここで少し婆の話し相手になっておくれでないかい？」

言いながら老婆は壁に設えられた石の椅子にちょこんと腰を下ろした。稟は頷くと隣りに座った。老婆の眼差しが、まるで包み込むように温かく感じられた。

「お譲ちゃんは、あの部屋の女の子の友達かい？」

「そうなの。静星っていうの。」

「毎日会いに来てあげているようだねえ。」

「うん。兄様にも頼まれているの。私の兄様が薬師くすりで、静星の病気を診ているから……でも今はどうしても来れないから、私が来ているの。」

「灰、という青年だね。」

「おばあちゃん、知っているの？」

「ああ。以前、見たことがあるんだよ。お譲ちゃんとはあまり似ていなかったね。あの青年は風の民だろう？」

「私と兄様は血が繋がっていないの。私、森の中に捨てられていたんだって。兄様もお母さんが亡くなっていて、それで私と一緒にのところに引き取られたんだって。」

「縁だねえ。」

「縁ってなあに？」

「おや、知らないんだね。過去から未来へ、人と人を繋ぐ絆のことだよ。お譲ちゃんとあの青年はとても強い縁で結ばれているんだよ。」

「そうだといいな。何だか嬉しい。」

少女の言葉はあどけない。老婆は回廊の先に視線を投げた。そこに蟠る奥行は掴みがたく、曖昧に滲んでいた。老婆は、嘗てこの同じ場所ですら対した青年の姿を思い出す。東の地の名高き戦闘の民、しなやかに疾駆する風の民。その形質を余すところなく体現しながら、青年の姿はあくまでも張り詰めて滾る静けさの中に在った。

あの青年はまだ己を知らぬ。だが、萌芽の時は容赦なく訪れるだろう。

「お兄さんは優しいかい？」

「うん！ 私兄様のことが誰よりも好き」

「決して離れたくないと思う程にかい？」

「うん。ずっと一緒にいたらいいな」

「強く、望むことだよ。そうすれば、きっとこの先も一緒にいることがかなうだろう」

さらさらと葉擦れの音が響いた。それはまるで密やかな警告の囁きにも聞こえた。吹き抜けた風は冷たかった。

「おばあちゃん、まるで未来を知っているみたい。未来が見えるの？」

稟の無邪気な声に老婆は笑んだ。

「さてさて、そのように不思議な力はこの婆にはないよ」

まるで懐かしむように目を細めて言葉紡ぐ。

「時は流れるものじゃあないんだよ、お譲ちゃん。ただ広がるものなんだ。人はぽつんと孤独に、その広大な空間に立ち尽くしているんだよ。過去も未来も、ただ人の想起の中にのみ在る。時とはつまり、記憶なんだよ」

稟は首を傾げた。老婆はふと身を震わせると、骨ばった手で羽織った毛織の布を引き寄せた。

「いやに冷えるねえ。お譲ちゃん、そろそろ家にお帰りよ。婆の話し相手になつてくれてありがとうよ」

さ、お帰り、と老婆は優しく促す。稟は椅子を立ちあがると回廊を進みかけ、振り返った。己を見つめる老婆の姿があった。

「おばあちゃん、私の名前、稟っていつの。おばあちゃんは？」

「さあて、名など忘れてしまった。遠い遠い記憶の中にね。ただ婆と呼んでおくれ」

「また来るから、お話ししてね」

言つと、稟はにこりと笑って駆け出した。その背中を老婆は見つ

めていた。少女の姿が消えてなお、はらりはらりと舞い落ちる薄紗のような闇に包まれて、何時までも老婆はそこに座っていた。

男は扉を開けると暫し立ち尽くした。客間の窓辺、うらうらとした日差しの中に佇む人を見つめる。嘗て彼女が若かりし頃より変わらず、ほっそりとたおやかでありながら、手を伸ばすことを躊躇わせる姿だった。緩やかに結いあげられた髪ばかりが歳月の流れを感じさせて、銀の光を帯びていた。それすらも品を帯びて、彼女の魅力をいや増すようである。

男の屋敷の客間はまるで来た者を圧するかのような重厚な装飾が施されている。その中に在って、女は何にも染まらず、ただ静けさを纏っていた。

「貴女は変わらないな。いや、変わらないどころか益々美しい」  
我知らず零れた言葉は本心からのものだった。

「そういう貴方はお変わりになりました」  
答えると、女はゆっくりと男を振り返った。年老いてなお美しい顔に微笑みを乗せて、男を見つめる。柔らかな笑みとは裏腹に、透徹とした視線だった。男は瞬時に己の心を固く鎧う。上辺だけの笑みを張り付けて慇懃に一礼した。

「私が？ 私は今も昔も変わらず貴女の崇拜者ですよ。媼おんな」  
「まあ、御冗談を」

媼と呼ばれた女は、まるで少女のような笑みを浮かべた。  
「お久しぶりですこと。以前こちらにお邪魔しましたのは、五年前も前だったかしら？」

「ええ、そうですよ。再三お招きしたにも関わらず、貴女はなかなかお越しにならない」

「私達が顔を合わせれば、出るのは無粋な話ばかり。それならば、遠くから互いの年経る様を見守る方がよろしいのでは御座いません？ 西のお方」



男は口元を笑みに歪め、ゆつくりと媪に近付いた。

緩衝地帯を動かすのは、人の流れと情報を網羅し握る卸屋おろしや。その中でも東の元締めである媪と、西の元締めである男は、滅多なことでは顔を合わさぬ。顔を合わせる事があれば、大概物騒な出来事が起こっている時ばかりである。

例えば、今この時のように

「貴女には若いうちに私の想いを打ち明けておくべきでした。私の妻になってほしい、とね」

戯れに男は言った。媪が首を傾げた。五十を過ぎてなおあどけなくも見える風貌の中で、瞳が可笑しそうに瞬いている。

「貴女が私の想いに応えてくれたならば、私は最高の伴侶を得ることが出来、しかも西は東から手強い長を奪うこととなっていただろうに」

「まあ、買い被っておられるのね」

男は肩を竦める。大きな窓から屋敷を囲む庭が見渡せた。青々と茂る常緑の木が冬日に揺れている。それに、男は目を細めた。風が強い。

媪が何故彼の元を訪れたか、その理由はわかっている。先程言ったことは殆ど本心から出た言葉だった。風にも折れそうな風情の目の前の女、だがその見た目とは裏腹に東の束ねである彼女は、まさに彼にとっては誰よりも手強い相手なのである。

「さて、本題に入りましょうか。どのような用向きで参られた」

「最近の不可解な出来事について、そして評議会について、西の方のお考えをお聞きしたいと思いましたの」

「ほう……」

「近頃の緩衝地帯は不穏なことばかり。まるで幽霊のような狼藉者が好き放題に暴れて、皆不安になっていますわね」

「幽霊とはまた面白いことを仰せだ。私が聞いたところでは、多加羅若衆の仕業だということだが？」

「あら、そうだったかしら？　まるで正体のわからぬ者達の仕業だ

と思っていたけれど。狼藉も噂ばかりが先走って、実際に起こったのは小さな諍い程度のことですわ」

おっとりと媼は言った。

「それは私が聞いていたこととは違いますね。盗賊まがいのことまで起こっている筈ですよ」

媼は男の言葉が聞こえなかったかのように、なおも言葉を継いだ。「それに、私を知る多加羅若衆はそれほどに愚かな者達ではないわ」「時代が変われば、人も変わりますよ。誉れ高い多加羅若衆といえどもね」

「西のお方、私には今回の出来事はどうにも不審なことが多いように思えますの。ですから、少し、独自に調べましたのよ」

媼は歌うように言った。

「多加羅若衆の狼藉が突然に起こりましたでしょう？ でも厳しい鍛練を日々積んでいる彼らがそんなに頻繁に緩衝地帯に出てくることなどあるかしら？ それなのに、まるで図ったかのように噂が蔓延して、何時の間にか多加羅若衆は盗賊のような言われよう。それに加えて、この機会を狙っていたかのように、最近評議会がおかしな動きをしていますわね」

「おかしな動き、ですか？ それは初耳ですな」

「評議会が最近妙に気忙しいのを御存知ないのかしら？ 多加羅の狼藉を告発すべきだとか……西の街や村の代表者からそのような意見が出されているようですよ。西の元締めである貴方が知らないなどということがあるかしら」

「そういえば、そんな意見が出ていましたね。事無かれ主義の彼らもとうとう腹に据えかねた、というところでしょう。無理もない。あれだけの狼藉を働かれながら、若衆の一人として捕えられず、面子が潰されたも同然ですからな」

「今の代表者達は誰も彼も彼も意気地の無い男ばかり、多加羅を告発するなどという大それたことが出来る者達ではありませんわね」

さらりと媼は言うつと、つと男を見つめた。

「そのようなことが出来るのは本当に胆力のある男だと思いますよ、私。例えば、貴方のようにね……西のお方」

「褒められたと自惚れても良いのでしょうか？」

まあ、と言つて媪は手を口元に添えて軽く笑つた。白い手が朱唇に触れる様は、まるで花弁にとまる蝶を思わせた。だが、男をひたと見据える瞳には笑みの欠片もない。

「私、考えておりますの。評議会の代表者達が大胆になつたのは、誰か後ろ盾がいるのではないかと。いえ、むしろ誰か力ある人が彼らにそのような指示を出したのではないかと」

「それは面白い考えですな。何故、そのようなことをするのです」「緩衝地帯を売り渡すため」

全く銜いなく、容赦のない言葉であり、その響きだった。男は半ば伏せていた眼差しをさつと上げる。静かな媪の瞳を一瞬見つめ、小さく笑つた。

「売り渡す、とは穏やかではない」

「その誰かは、長く多加羅と沙羅久にとって不可侵であつた緩衝地帯の自治を、その誇りもろとも沙羅久に売り渡そうとしているのではないかと、と思いますの」

「奇異なことを」

「そうかしら？ 多加羅若衆の若衆頭は次期惣領……若衆の狼藉はそのまま多加羅惣領家への批判に繋がりますわ。私思いますの。もしかすると、西の代表者達はただ多加羅を告発するだけではなく、沙羅久惣領家へ多加羅の横暴に対抗するための助力を請うのではないかと。そうすればどうなるとお思いになつて？」

男は答えなかった。媪も男の答えを期待した様子でもなく、あるいは答えぬ男の気持ちを見透かしたかのように、淡々と言葉を紡ぐ。

「そうすれば、これまで緩衝地帯で均衡を保つていた二惣領家の関係が崩れ、沙羅久の影響力が格段に上がりますわね」

「仮にそうだとしても、それがどうして売り渡す、などということ

になるのです。古い約定の力は強い。如何に評議会が沙羅久になにがしかの助力を請おうとも、今の状況が変わるとは思えませんね」

「あら、貴方らしくもない。本気でそのようにお思いになるの？多加羅に比して沙羅久の方が明らかに優勢であるにも関わらず、何故緩衝地帯で二惣領家の力が拮抗していたか……それは、緩衝地帯がこれまで二惣領家のどちらにも与しなかつたせいですわ。如何に惣領家といえども、評議会の意向は無視できませんからね」

「……」

「その均衡を、緩衝地帯自らが崩そうとしているのですよ。今の多加羅と沙羅久の力関係を考えれば、一度均衡が崩れれば沙羅久に大勢が傾くは必至、最早多加羅は緩衝地帯での権利を主張することも難しくなりますわ。例え、沙羅久が緩衝地帯を己が所領として権利を主張しても、多加羅にはそれを止めることは不可能かもしれませんわね。貴方程のお方ならば、容易くおわかりになる筈。それとも、敢えて目を背けねばならない理由でもあるのかしら？」

男は黙す。だが、沈黙そのものが答えだった。そもそも西の街や村の代表者が、評議会に出す意見を必ず男に諮ることを媪は知っている。西から出される意見とは、すなわち男の意見に他ならない。

媪はふと眼差しを伏せた。続く声音は苦いものだった。

「やはり、貴方ですね。西の代表者達を動かし、緩衝地帯が沙羅久の支配下となるための道筋をつけている者は。緩衝地帯が長く保ってきた自治を、貴方は棄て去るおつもりなのね」

隠しようもない失望の響きがあつた。

「何故、とお聞きしてもよろしいかしら？」

何故 最早、誤魔化しも言い逃れも許さぬ問いかけだったが、男は表情一つ変えなかつた。媪が彼の屋敷をおとなつた、その時点で彼も覚悟をしていたのだ。

「何故……か。貴女にそこまで見通されていては、今更隠しても意味のないことですわ。確かに私は西の街々の代表者に、今度の評議会で沙羅久に請願を出すという意見を決するよう、働きかけました」

沙羅久に、多加羅の横暴を排除するための助力を請い、後々の庇護を依頼するものなのだ、男は淡々と明かす。

「前々から私はそうすべきだと考えていた。今この時期に多加羅若衆の狼藉が起こったのは非常に都合が良かったのですよ。多加羅若衆の愚かさに感謝したいくらいだ」

低い男の声に、媼は眉を顰めた。

「だが、私の方こそ問いたい。何故貴女は緩衝地帯の自治をそれ程に尊いものとお考えなのです。所領の……惣領家の支配下に入るのは隷属することでもお考えですか？　そうではないでしょう。貴女もわかつておられる筈だ。所領に組み込まれぬ緩衝地帯は、まるで寄る辺なく漂う浮島のような。所詮我らは浮草の集まりでしかない」

例えば貧困、と男は淡々と続ける。

「惣領家の支配下になれば、貧しい者達を救う最低限の恵みが惣領家より与えられる。例えば孤児、彼らとて同じです。貴女は何故孤児院を開いておられる？　公式に彼らが救われる仕組みが緩衝地帯にはないからではないですか。個人の善意がなければ、この地で恵まれぬ者達は救われぬ。所詮、自治とは自助でしかない。我らには力強い支配者が必要なのです。全ての者に等しく富を与える、優れた支配者が。わからないのですか？　惣領家の支配下でない我らは、それらの恩恵からも切り離され、見捨てられています。我らにより豊かに幸福に生きるには、何れかの惣領家の支配下に入るべきなのです」

男の饒舌は淀みなく、まるで畳みかけるかのようだった。

「自治の誇りと貴女は言うが、つまるところそれは帰属すべき場所を持たぬ流民の戯言でしかない。惣領家の支配下に入ってはじめて、我らは確固たる大地に立つことができるのです」

「そしてただ上から与えられる物を待ち望むだけの烏合の衆に成り果てる、というのですか。緩衝地帯は確かに恵まれぬ者達への備えは十分ではないかもしれない。でも、だからこそ私達は互いに助け

合い、生き抜く強さを持っているのです。それこそが我らの誇りなのだ、貴方も考えておられた筈です」

緩衝地帯に二惣領家は介入しない。それは領民には当然の如く与えられる公的な援助や福祉をも遠ざけた。そのことを媪自身もよくわかっていた。二家の争いの中で築かれた自治は、つまり緩衝地帯の人々が自らを守り、生活を営む上で否応なく確立せねばならないものでもあったのだ。

「それこそが、緩衝地帯の歴史なのです。最早、私達は沙羅久の民でも多加羅の民でもない、帝国の中にあつて唯一自らの足で立つ民なのです。自由を縛られて与えられる恵み、それが真実幸福であるとお思いなのですか？」

毅然と、媪は男を正面から見据えた。対して男の言葉は皮肉な響きに満ちていた。

「御立派な意見だが、本心からのものとは思えませんな。我ら卸屋は長く緩衝地帯の豊かさを築くために富を削つて来た。だが、本来それは惣領家が負うべきものです。我らの利益を守るために、民の福利のための営みは本来の主である惣領家に担ってもらうのが最も望ましい。それこそ、利潤の追求という卸屋の生き様にも沿うというものです。貴女も、今まで一度もそれを考えなかつたとは言わせませんよ」

それに、と続けた男の声音には嘲笑の響きが籠っていた。

「もつと率直になられたら如何です。貴女は緩衝地帯の自治の輝かしさのみを言っておられるが、真実は別にあるのでしょうか。沙羅久に組み込まれた暁には、緩衝地帯の一角を占める程の貴女の力は大きく削がれる。これまで一線を画してきた沙羅久の卸屋どもに膝を屈するのが、単に屈辱なのではないですか？」

媪は冷やかに微笑んだ。

「あら、それは貴方も同様ですわ。沙羅久に呑み込まれば、貴方自身も無事では済まないのではなくて？ 膝を屈するのは私ではなくて、貴方かもしれないわ」

「貴女ならばおわかりでしょう。卸屋が動く時、それは利あればこそ」

「つまり、貴方には既に沙羅久内部と伝手がある、ということなのね？ 緩衝地帯の自治を売り渡す見返りが、貴方には既に約束されていると考えてもよろしいのかしら？」

男は太い笑みを浮かべた。それに媪は苦々しい視線を向けた。男の表情には、まるで媪を憐れむような色さえあった。己が相手よりも高みに在るのだと信じる者のそれである。それとも、それさえ本心を悟らせぬための仮面だろうか。

「それならば貴方は既に沙羅久の犬になった、ということね。我らの誇りを申し上げたところで、最早言葉も通じぬ、ということでしょうね」

「貴女は私を裏切り者のように仰るが、むしろ後々のことを考えれば、私は緩衝地帯を救おうとしているのです」

「あら、貴方は救い主を気取るおつもりなのね？」

「何とでもお言いなさい。残念ですよ。貴女にはわかっていただけだと思っていたが、どうやらそうではなかったようです」

「ええ、そのようですわね」

ふつりと言葉が途絶えた。無言で対峙する二人の間は空虚に、ただ埋め難く深く刻まれた溝ばかりがあつた。目に見えずとも、寒々と二人を分かつ。

「これ以上話しても無駄ですわね。失礼致しますわ。見送りは必要御座いません」

歩き去る女の背に、男は言葉を投げた。

「私達の動きを阻もうなどとなさらぬことです。既に時代は変わったのです。それに、どう足掻こうと、最早貴女にとどめる術はない」「それはどうかしら。本気でそうお考えならば、貴方は私をわかつておられませんわ」

振り返った媪の口元を彩る凄艶な笑みに、男の眼差しが暗く陰る。だがそれは一瞬だった。男は全ての表情を消して慇懃に一礼した。

そういえば、と響いた媪の言葉は明るい。

「お庭の木、確かお孫さんが生まれた折にお植えになったのでしたわね。御子息がお亡くなりになって、確かそのお孫さんが貴方の後を継ぐのではなかったかしら？」

唐突な言葉に、一瞬男は答えあぐねたようだった。

「幾つにおなりかしら？ 十三？ 十四？」

「十七ですよ」

「ああ、もうそんなになりますのね。とても有望な跡取りであられる、とか。久しぶりにお会いしたかったわ。さぞかし立派な青年におなりでしょうね」

「……宇麗うれい殿に比べればまだまだ未熟なものですよ」

「貴方の選択が、真実お孫さんの未来のためになればいいけれど」  
立ち尽くす男に媪は囁くように言うと、扉の向こうへと姿を消した。

取り残された男はただ扉を睨みつけていた。青褪めた顔に去来したものが何であったか 握り締めた拳が僅かに震えていた。



## 68 (後書き)

色々な人の視点が入り乱れ、かなりわかりづらいかもしれませんが。しかもいきなり新しい人物が出てくるし……。読み直すと、色々修正したくなるのですが、それをすると物語全体に響きそうなのでぐっと我慢しています。今書いたら全く別物になりそうです。

次もすぐに更新します！

媪が笠盛かさもりに戻ったのは男との面談から三刻程後のことだった。笠盛の街の一角にある彼女の屋敷は決して大きなものではない。街を裏から支配する者の住処にしてはごんまりとして質素だった。だが、屋敷が他と比べ異彩を放つのは、その敷地に植えられた木の多さである。屋敷はまるで森の中にあるかのように、木々に抱かれています。

媪が屋敷に入ると、そこには人影があつた。彼女の帰りを待つていたらしい、宇麗うれいである。媪は宇麗に外套を渡すと、執務室に向かつて先に廊下を歩いた。背後からつき従う宇麗が尋ねる。

「如何でしたか？」

「やはり思つた通りでしたよ。西の代表者達の背後には元締めの方の方がいました」

「では、多加羅たからの狼藉にかこつけて緩衝地帯の実権を沙羅久しゃらくに渡すべきという意見が評議会で出されるのは確実なのですね？」

「そのようね。すぐに実権を渡すなどということにはならないでしょうけれど、大きな変化には違いないわね」

「ですが、多加羅若衆があのような狼藉を働かぬことなど、普通に考えればわかることです。何故、西の頭はおかしいと思わぬのですよ？」

「おそらく、西の方も多加羅若衆が真に狼藉を働いたとは考えていないでしょう。ただ、己の考えを実現するために、この機に乗じたのね。それに、多加羅若衆でないという確かな証もないわ。西の方にとっては好都合だったでしょうね」

「如何なさるのですか」

「さあ、どうしましょう。このままでは評議会でも一致して沙羅久惣領家に上奏することを決してしまえそうね」

おっとり媪は言った。緊迫感を欠片も感じさせぬ響きだったが、

普段から媪の物言いに慣れていている宇麗には、彼女が言葉とは裏腹に鋭く思考を巡らせていることがわかる。

二人は執務室に入ると向い合つて椅子に座つた。その部屋もまた素朴な装飾が施されているが、部屋の主の本質をあらわしているのか、温かな雰囲気の中にも無駄を排した機能性があつた。

「媪、緩衝地帯で起こっている出来事はやはり沙羅久の仕業なのでしようか。緩衝地帯を以前から所領内に取り込もうとしていた沙羅久ならば、多加羅若衆の狼藉をでっち上げることも納得出来ます。それに、仮に沙羅久と西の元締めが繋がっていれば、今起こっていることの全てに説明がつきます」

宇麗の言葉に媪は考え込む様子だつた。

「それはどうかしら。いくら沙羅久の力が強くなつていても、多加羅若衆を名乗つて狼藉を働くようなことはしないでしようね。明らかとなつた時の危険が大きすぎるでしょう。それこそ緩衝地帯から排除されるのは多加羅ではなく沙羅久になってしまうわ。それに多加羅の惣領が代替わりすれば、沙羅久の優位はさらに強まる筈よ。今危険を冒さずとも、沙羅久はただ待つていれば緩衝地帯を手にする事が出来ると考えているのではないかしら？」

「でも、媪は評議会の動きと一連の出来事に繋がりとお考えになつて、あたし達に裏で動いている者を探り出すようお命じになつたのではないですか？」

「確かにそうね。でも、思ったよりもこれは厄介なことかもしれないわね。まるで影を追つているよう。目先の出来事に惑わされていでは、本質は見えない気がするわ。西の方が評議会に働きかけているのも、もしかすると何か別の裏があるのかもしれないわ。彼もまた利用されている一人かもしれないわね」

「では一体誰が……。捕えた男達を殺されたのは失態でした。奴らから何か引き出せたかもしれないわ。彼らが多加羅の噂を撒いていたのは確実でした。狼藉を実行したのも彼らかもしれないわ」

「そうかもしれないわね。でも、おそらくその男達は何も知らされ

ていなかったのではないかしら？ 貴女達の尋問にも、誰が背後にいるかについては何も明かさなかったのでしょうか？」

「はい」

「捕えた者達を殺害した犯人はまだ見つかっていないのね？」

「はい、申し訳ございません」

宇麗は悔し気に唇を噛む。その様子を見るともなしに見ながら、媼はふと首を傾げた。

「宇麗、貴女は何故彼らが殺されたと思う？」

「一連の出来事の背後にいる者が、口封じのために彼らを殺したのではないのでしょうか」

「そう、そうかもしれないわね。でも私はこう思うのよ。もしもあの者達が何も知らないならば、口封じをする必要すらないのよ。それに、あの場所まで入ったのだから、全員を逃がすことも可能だった。それを何故殺したのかしら？」

「それは……」

媼の言葉に、宇麗は眉を顰める。確におかしい。何故、殺す必要があった。しかもその殺し方が尋常ではない。ただ殺すのではなく、耐え難い苦痛を与えてから止めを刺していた。何故？ その思いに応えるように、媼が言った。

「もしかして、彼らを殺すことで何かを示したかったのではないかしら。例えば、己の失態への落とし前をつけるためだったのかもしれないわ」

おつとりと語られる媼の言葉を聞きながら、宇麗の脳裏に壁一面に飛び散った血の有様が浮かぶ。まるで殺すのを楽しむかのようなそれだった。

「殺したのは、もしかすると捕えた者達の仲間だったのかもしれないわね」

「仲間！？ まさか！ 仲間ならば、あのように酷い殺し方をする筈がありません！」

「ええ。貴女ならば、そう考えるでしょうね。でも、そうではない

者達もいるの。己の失態は死を以て償う、それが筋だと考える者達もいるのよ。あるいは失敗した者達への制裁だったのかもしれないわね」

穏やかに言った媼の眼差しはひやりと冷たい。それに宇麗は、媼が何を言わんとしているかを悟る。薄ら寒い思いに、背筋が冷える。「まさか媼は耶來をお考えですか？」

「そうであれば、納得出来ることも多いと思っっているわ」

「ですが、奴らが国境を越えて来るなど、今まで一度もありませんでした！」

「表向きはそうね。でも耶來があらゆる汚い仕事を請け負うのはよく知られていること。実際に、嘗て帝国内で起こった事件のうち幾つかは耶來の仕業と考えられているものもあるのよ」

「それならば……耶來が何者かの依頼を受けて緩衝地帯での一連の騒ぎを起こしていたと……」

宇麗は呟いた。その顔が不意に強張る。

「媼、紺が姿を消したことを先日申し上げましたが、もしも屋敷に侵入したのが耶來の者達ならば、そいつらに連れ去られたのではないでしょうか」

「何故そう思うの？」

「あの子が以前來螺の裏側にいて、そこから逃げて来たのは媼も御存知でしょう。孤兒院で起こった出来事が耶來の仕業だとして、紺は彼らと遭遇したのかもしれない。姿を見られたならば奴らは紺を殺す筈です。でも、彼女は忽然と消えたんです。孤兒院に忍び込んだ者達は紺を知っていたのかもしれませんが！」

「あり得ないことではないわね。もしそうならば、耶來の者達はこの街のどこかにまだ潜んでいるということになるわね」

笠盛の街は、今や人の出入りが嚴重に見張られている。全ての馬車の中を改められ、蟻の子一匹も見逃さぬ程の体制が敷かれていた。そのような中で紺の行方は杳として知れぬ。宇麗の推測通りならば、紺を連れ去った者、それがすなわち孤兒院での惨劇を起こした者なのだ。

だが、さらに悪い事態も考えられる。もしも孤児院以外の場所で緘が既に命を奪われていたら 耶來が、裏側から逃げた者を執拗に追跡し、惨い制裁を下すことは有名な話だった。

青褪めた宇麗の顔を見つめ、媼はがらりと口調を変えた。朗らかささえ感じさせて言った。

「ところで、もう一人捕えた青年がいたわね。彼はどうしたかしら？ 傷を負ったと言っていたわね」

「駁はくですか。今はこの屋敷の地下の一室に捕えています」

「まだ何も言わないの？」

「はい」

「会ってみようかしら」

「そのような……何者かもわからぬ者を、媼のもとにお連れするわけには参りません」

「私が会ってみたいのよ、宇麗。貴女、その子をととも気に入っているのでしょうか？」

「気に入っているなどと、彼は正体もわからぬ……」

宇麗は媼が己に向ける表情に口を噤んだ。まるで小さな少女に向けるような眼差しで見詰められている。

「……黄あうですか？ そのような戯言を媼に吹き込んだのは……」

齒軋りするような宇麗の声音に、媼は可笑しそうに笑った。

「あら、黄は無口な子よ。そんなこと言わないわよ。貴女を見ていれば、すぐにわかりますよ」

苦々しく顔を歪めた宇麗は、なおもにこやかな媼を見つめると溜息をついた。からかう口調に誤魔化されはしない。宇麗は彼女をよく知っていた。媼はただ己の興味だけで駁はくに会いたいと言っているのではない。何か思惑があるのだろう。

「わかりました。駁はくを連れて来ましょう。ただし、あたしも同席しますからね」

「どこに行くんだ？」

須樹は前を歩く宇麗に問いかけた。答えはなかった。

突然、捕われている地下の一室から出された。ただ一言ついて来いと言った宇麗は、どこに行くか言おうとはしない。須樹の背後を固める男達も一様に無言である。須樹は答えを引き出すことを諦めると、辺りの様子をさりげなく窺った。

はじめに捕えられていた場所から馬車で移され、既に二日程は経っているのではないか、と思う。捕われの身であることに変化はないが、どうやら少し待遇は改善されたい、と須樹は思っていた。彼らの仲間を救ったのが良かったのか、それとも怪我の治療を優先しているのか、尋問らしいものも受けていない。今も後ろ手に縛られてはいるが、背後を固める男達にもはじめほどの敵愾心が感じられない。何よりも宇麗の態度が僅かに柔らかくなっている。会話らしきものまで交わすようになっていた。もつとも、今日の前を歩く宇麗はどこか苦々しい様子である。

奇妙なものだ、と須樹は前に行く背中を見て思う。相容れぬ立場でありながら、二人の間にあるのは互いを尊重するかのような空気だった。それは共感と呼ぶのが相応しい。

宇麗は一つの扉の前に辿り着くと、須樹の背後の男達を振り返った。

「ここで待て」

ですが、と言いかけた男達を視線一つで黙らせると宇麗は扉に手をかけた。

「入れ。お前に会いたいと仰せの方が中でお待ちだ」

命じられて、須樹は部屋の中に踏み込む。そこはこぢんまりとして温かみを感じさせる部屋だった。壁に掛けられた織物は柔らかな春の景色が刺繍されている。そして奥の窓辺に立つ人もまた、その部屋の雰囲気や纏うかのような様子だった。初老の女である。淡い衣の色彩が、結び上げた白銀の髪に映えている。

部屋の中へと入った須樹に、女が視線を向ける。須樹の背後に宇麗が立った。扉が閉ざされる。

「連れて参りました」

「御苦労さま」

おっとりとした女が言う。声音までも春の陽射しを思わせる柔らかさである。

「貴方が駁と呼ばれている青年ね？」

女はふと首を傾げた。滑るように須樹に近付くと、彼の顔を見上げる。そして何を思うのか、涼やかな笑い声をあげた。

「宇麗、この子が何者か、貴女は本当にわからないの？」

「え……？」

宇麗の訝しげな声に、女はさらに笑みを深めた。

「貴女もまだまだ、知らなければならぬことがあるようね。何よりも人を知らなければ」

「まさかこいつが何者かわかりに……？」

宇麗の声が上擦る。

「そうねえ。私は貴方が何者かわかる気がするわ。私の考えが正しければ、貴方が何故何も言おうとしないのか、それもわかりますよ。とても賢明なこと」

須樹はまじまじと女を見やった。女の言葉とその眼差しに、築いた筈の警戒心が解けるような心地がする。

呑まれている。己を見つめる女の視線に、絡め取られていた。

「媪！ どういうことですか！？ こいつは一体何者なんですか？」

慌てふためく宇麗に、女はただ微笑んだ。

「それは貴女が自分でつきとめるべきことですよ」

「ですが……」

さらに言い募ろうとした宇麗だったが、女の表情にはつと言葉を呑み込んだ。

「わかりました……」

宇麗の声を背後に聞きながら、須樹もまた驚きを感じていた。

（媪……）

宇麗が口走ったそれを心中に繰り返し、愕然とした。彼とてその



名を聞いたことがある。思わず問うていた。

「貴女が、媼なのですか？」

「ええ、そうよ。私を知っているのかしら？」

「緩衝地帯の卸屋を纏めている元締めの人が、そのように呼ばれていると聞いたことがあります」

媼はくすりと笑うと、須樹の背後を見やった。

「宇麗、どうやら貴女のそそっかしさはまだまだなおっていないよ。うね。貴女はこの子に私達の正体を告げてしまったのよ。正体を探るどころか、この子に一步先じられてしまったわね」

媼、と口走ったのは無意識だったのだろう。宇麗が苦々しく顔を顰めた。

「貴方は何か私達に聞きたいことはないかしら？」

突然問われ、須樹は媼を見つめた。はるかに背の高い男を前に柔らかに笑んだ媼は、目を細めた。

「貴方も、今の状況は不本意なのではなくて？ 宇麗の話では貴方は自分の名前すら明かそうとしていないよね。私達も、貴方を酷い目に遭わせたいわけではないのよ。ただ真実を知りたいだけ」

「それは俺も同じです」

我知らず須樹は答えていた。

「貴女達が俺を捕え、何者が言わせようとしているのは、何か理由があるのでしょうか」

「ええ。そうよ。貴方はどんな風に考えているのかしら？」

「俺には、貴女達が何かを守るうとしてるように思えます」

「そう、貴方はそんな風に思うのね」

須樹は頷いた。何故か、この女性に偽ることが無意味に思えた。

「ですが、それは俺も同じです。俺にも守りたいものはあります。貴女達が何を考えているのか、自分が何に巻き込まれたのかわからなければ、名前の一つとて明かすつもりはありません」

そう、と媼は呟いた。須樹を見つめる女の瞳に、僅かに測るような色が過った。次いで出た媼の声音は低かった。

「やはり愚か者ではないわね。私も、有望な若者の前途を閉ざしたくはないわ。でも覚えていてちょうだい。今緩衝地帯は大きな流れの中にある。流されぬために、私はどのようなこともでもするつもりよ。そのためならば、貴方の人生を奪うことを躊躇いはしないわ」  
冷徹な響きに、媼、と宇麗が囁きかける。媼は宇麗を見つめた。

「宇麗、見極めなさい。この子が我らにとってどのような意味を持つのか、害なす者か否か。それが貴女の役割よ」

「……はい」

「貴方に会えて良かったですよ、駁」  
にこりと笑って媼が言った。

再び地下の一室に戻されて、須樹は闇の中で座り込む。

媼との対面の後、宇麗は彼に一言も口をきかなかった。僅かに軟化したかに見えた彼女の態度が、再び頑ななものとなっているのに彼は気付いていた。

(媼……)

内心に呟く。

緩衝地帯の世情にさほど詳しくはない須樹でもその名は知っている。緩衝地帯を実質的に支配しているのは、卸屋である。中でも特に力を有する者達、その一人が『媼』と呼ばれる存在である。

緩衝地帯で生まれ育った彼の父親は、間近に卸屋の所業を見てきたせい、卸屋という存在そのものに良い印象を持っていない。その影響を須樹もまた受けていた。だが、父親が唯一その人となりを認める発言をしたのが媼。つまりは先程対面した女性だった。貧しい者に自らの富を分け与え、目先の利潤ばかりを追い求める卸屋達とは一線を画しているのだと、何かの折にこぼしたことがあった。だが、例えば媼が如何に高潔な人物であろうとも、須樹にとっては何ら救いになることではなかった。直接に対面した媼という人物は、掴み難く、底知れぬ凄味のある女性だった。何よりも、彼女は緩衝地帯を裏から支配する存在なのだ。

何故、卸屋の存在にまで考えが及ばなかったのか、今となつてはその方が信じられぬ。宇麗の口調から、彼女は媼の傍近くに仕える者なのだろう。その彼女が、媼の縄張りで不審な動きをする者達を見張っていたのは不思議でも何でもない、むしろ当然のことだったのだ。そこに迂闊に踏み込んでしまったのは、やはり己の失態だ、と須樹は苦く思う。

貴方が何故何も言おうとしないのか、それもわかりますよ。とても賢明なこと。

媼の言葉が引つ掛かる。彼女は、彼が若衆であることを見抜いたのだろうか。媼の思惑など彼にわかるう筈もなく、ただ焦燥と不安ばかりがあつた。

若衆であることを明かさなかつたことに、須樹は今更ながらに安堵する。彼がいるのは緩衝地帯で絶大な力を有する者の懐の内なのである。己の置かれた立場の危うさを、須樹はすでに自覚していた。緩衝地帯には絶対的な原則がある。すなわち、二惣領家からの干渉を受けず、中立と自治を貫くということであり、それは緩衝地帯の人々にとって誇りでもあるものだった。

須樹の存在はその絶対原則を揺るがしかねないものなのだ。彼自身がどれほど個人の行動なのだと言つたところで、多加羅若衆の副頭が卸屋の縄張りに踏み込み何事かを探ろうとしていた、その事実だけでも均衡を揺るがす結果になりかねないだろう。

須樹はぎり、と唇を噛みしめていた。

媼の言葉、冷ややかに射竦める視線　彼女の意を受けて、宇麗は何としても須樹から真実を聞き出そうとするだろう。仄かに生じていた共感など、甘いまやかしでしかない。何よりも須樹自身が、このまま捕えられているわけにはいかないのだと痛感していた。隠そうとしても、何時須樹が若衆であることが明らかとなるかわかつたものではない。

何としても逃げないと……

須樹は両手を握り締めると、そこに額をつける。拳は冷たく、己

の鼓動が鈍く響いていた。

見張りの連中は彼が傷を負っていることを知っている。そのせいもあるのか、最近でははじめほどの警戒を見せてはいなかった。あるいは仲間の命を救ったことが、油断に繋がっているのか、以前には見られぬ隙がある。だが、先程の宇麗の様子から、この先さらに嚴重に見張られることになるかもしれない。

逃げるなら今しかない。

（次の食事の時だ）

食事を入れるために扉が開かれる、その時しか逃げる機会はない。見張りの人数はおそらく二人、食事を持って来た者をあわせても三人、不意をつけば他の者達に気付かれることなく倒すことが出来るだろう。媼の元に連れて行かれた際に、多少なりとも建物の構造を見る事が出来たのは幸いだった。どちらの方向に行けばよいか、だいたいの見当もついていた。

須樹は決心を固めると、暗闇の中、目を見開いた。立ち上がると、扉を開けた者から死角となる位置に移動する。扉の向こうに意識を凝らし、その場に座り込んだ。

時の流れが、まるで纏わりつくように緩慢に感じられた。闇の中で神経を研ぎ澄ましていた須樹は顔を上げた。扉の向こうで微かな物音がした。食事を持って来たのか、と思い、ふと不審に感じた。あまりに気配がなかった。常ならば廊下を歩いて来る足音がする筈なのに、それすらなかった。

普段とは様子が違う。不安が生じる。

躊躇っている場合ではない。須樹は思考を振り払うと身構えた。機会は一度きり、失敗すればおそらく次はない。

門の外される音が響いた。扉がゆっくりと開く。滑らかに、軋みの音一つ立てずに開けられたそれに、須樹はするりと近付いた。逆光のせいで顔もわからぬ人影へと一気に間合いを詰める。一撃で仕留め、廊下の者達に声を出させる前に何としても倒す。

急所を正確に狙って拳を突き出した。

だが、手応えはなかった。確実に仕留めるつもり拳が空を切った。外したわけがない。避けられたのだ、と瞬時に悟る。須樹は愕然とした。

音もなく身を翻した相手の影だけが視界を過る。咄嗟にそれに向かって腕を伸ばし、胸倉を掴む。十分な体勢で相手の体を床に倒そうとした須樹は、次の瞬間体の重みがなくなったかのような奇妙な感覚に捕われた。

ふわりと視界が流れた。奇妙に柔らかく、抗いがたいほど緩やかな一瞬だった。次いで衝撃、息が詰まるようなそれに、思わず呻く。痛みは不思議なほどなかった。

床にうつ伏せに押さえつけられていることに須樹は気付く。背にのしかかっている相手の力は強い。まるで頑丈な鎖に戒められているかのように、体を動かすことが出来なかった。相手を床に投げつけるつもりで、逆に自分が投げ倒されたのだと、須樹は気付いた。

まるで相手の動きが読めなかった。凄まじいまでの手練である。まず感じたのは単純な驚きだった。

失敗した

次いでその一言が渦巻く。決して手加減したつもりはなかった。それがまるで赤子のようにあしらわれ、なす術もなく押さえつけられている。屈辱に目の前が赤く染まる。情けなさに、須樹は歯噛みした。最早逃げることは不可能だろう。起こる騒ぎを覚悟して、須樹は失意を押し殺し体を強張らせた。漸くの決心も、己で己の行く末をさらに危ういものにしたただけだったのだ。

須樹は自らを拘束する男を睨みつける。見上げた相手はなおも影に沈んでいた。微動だにせぬ相手の輪郭ばかりが黒々と、やけに大きく見えた。

無言の相手は、息一つ乱してはいない。圧倒的な力で須樹を押さえつけながらも、相手は不気味なまでに気配が希薄だった。聞こえるのは己の鼓動ばかり。ふと須樹は訝しく思った。静か過ぎる。辺りは異様なまでの静けさに浸されていた。何故、騒ぎが起ころぬ部屋の外の見張りはこの騒ぎに何故、一言も発さぬのだ。とうに宇麗が駆けつけていてもおかしくはない。

その時、男がひそりと囁いた。

「手荒なことをして申し訳ありません、須樹殿」

須樹は目を見開いた。男はなおも小声で続ける。

「拘束を解きますが、どうか声をあげぬよう、お願い致します」

負荷が消える。須樹は呆然としながら身を起こし、目の前の人影をまじまじと見やった。廊下から部屋へと差し込む仄かな光に男の顔が浮かび上がる。その顔に覚えがあった。

「あなたは……」

須樹はぼつりと呟いた。彼は男を見知っていた。確か名を弦げんといつた筈だ。どのような立場の者かは知らぬが、多加羅惣領家に仕える男だ。何時の頃からか、影のように灰かいに付き従う姿を見かけるようになった。その男が何故、このような場所にいるのか。

「御無事で良かった」

須樹の混乱など知らぬ気に、弦は言った。

「何故、ここに？」

「灰様の御命令で参りました。灰様は媪おんなのもとに須樹殿が捕われているのではないかとお疑いであられました。そして、私に調べるように、と」

「灰は俺を捜しているのですか？」

「はい。須樹殿が姿を消されたのは、緩衝地帯で多加羅若衆を巡る一連の騒ぎに巻き込まれたせいではないかとお考えであられました」  
「だが、何故俺がここに捕われていると……」

「須樹殿、今は時間がありません。全てを申し上げることは出来かねます。見張りの者達は薬で眠らせていますが、効果はさほど長くはありません。私がここに来たのは灰様のお言葉をお伝えするためです」

「灰の？」

「はい。灰様は須樹殿のことを必ずお救いするおつもりであられます。そして、須樹殿にはこの先何を見、何を聞こうとも、決して多加羅若衆であることを自ら明かさぬように、と仰せでした」

須樹は息を呑む。まさか、と思い、その一方で妙に納得している自分がいた。やはり、灰は須樹を捜していたのだ。いかにして彼が捕われている場所までも割り出し、多加羅若衆であることを秘している彼の立場をも見通しているらしい。

須樹の全身から力が抜ける。内心に生じたもの、それは安堵のようでもあり、痛みすら伴う不甲斐無さのようでもあった。虚脱したように、須樹は言った。

「俺は、ここから逃げるつもりだったんです……」

「そのようですね。灰様もそれを危惧しておられました」

間に合ってよかった、と男は淡々と言葉を紡ぐ。実際に危ういところだった。成功したか否かは別にして、須樹はまさに自力で逃げようとしていたのだ。

「須樹殿、決して独力で逃げようなどとはなさらぬことです。そのようなことをなさっては、かえって須樹殿のお立場は悪くなってしまう」

須樹は狼狽する。見張りは薬で眠らされ、扉は開いている。今こそ、逃げる絶好の機会ではないか。だが、ここまで忍んで来たであろう弦は、須樹に逃げるなど言うのだ。

（いや、違う。灰が逃げぬよう言っているのだ）

だが、何故　須樹の戸惑いに気付いているのかいないのか、あくまでも表情を変えぬまま弦は言った。

「もう暫し御辛抱ください。必ずや、お救い致します」

「……灰は何をしようとしているのですか？」

「私には申し上げることはできません。ですが、どうか灰様を信じてお待ちください」

言い終えると、弦はさつと立ち上がる。そのまま扉へと向かう弦の背中に、須樹は言った。

「待つてください。灰は、何か危険なことをしようとしているのではないですか？　捕まったのは俺の失態です。そのせいで、あいつが危険な目に遭うようなことがあれば……」

振り返った男が浮かべた表情に、須樹の言葉は途切れる。笑みだった。

「御心配めされるな」

ただ一言残し、弦の姿は扉の向こうに消えた。がちりと、門の下ろされる音が響き、そして人の気配が消えた。

呆然と床に膝をつき、須樹は弦が消えた先を見つめる。

必ず助け出す

灰の言葉が聞こえた気がした。

そういえば、と須樹は思う。ここに連れて来られる前に捕われていた場所で、まるで灰が目の前にいるかのようになり、その存在を感じたことがあった。たった一度きり、一瞬ではあったが鮮烈なまでのその感覚を、須樹は思い出していた。そして、必ず灰が己を捜して



いるだろうことを心のどこかで確信していたのだと、須樹は今更ながらに気付いていた。それは、あの束の間の不思議な感覚故であったかもしれない。

（灰、危険なことをするな）

強く思う。灰が他人を助けるために己を顧みぬ程に無理をすることを、須樹は知っている。他ならぬ自身の過失で、灰が危険に晒されるようなことがあれば。須樹はやるせなく俯いた。

（どうか）

呼びかけた相手は、弦だった。

（俺はどうなってもいい。俺に何があったとしても、どうか灰を守ってください）

最後に男が見せた不敵なまでの笑みが脳裏に浮かぶ。揺るぎなく、迷いの欠片とてなく、その笑みは凄味さえ帯びながら、不思議に穏やかだった。

暗闇の中、須樹は跪く。言葉もなく、祈るように頭を垂れた。

視界が真白に染まっていた。

飛雪ひつせつ！！

叫ぶ声は吹雪の唸りに紛れ、少し先までも届きはしない。横殴りに吹きつける風雪に、ともすれば体が引き倒されそうになる。清夜すがやは太腿まで雪に埋もれながら、もがくようにして前へと進んでいた。体中が冷え、すでに手にも足にも感覚はなかった。

飛雪！！

焦燥のまま再度呼びかける。小さな姿はどこにも見えない。早く見つけなければ。このような吹雪の中、幼い子供の体力などすぐに尽きてしまう。清夜自身も今にも倒れそうに疲れ果てていた。寒さと飢えが容赦なく力を奪う。

と、その時、風向きが変わったのか、不意に視界が明瞭に開けた。

遠く、どこまでも広がる雪原の上に、まるでしみのようにぽつりと黒い色彩があつた。清夜は必死で近づく。行く手を阻む雪を忌々しくかき分けながら漸く辿り着いた清夜は、息を呑んだ。飛雪が雪に半ば埋もれて倒れていた。

すっかりと瞳を閉じた飛雪の顔は雪にも負けぬ程に白い。祈るような気持ちで抱き起こすと、その体は冷たかつた。口元に手をかざし、清夜は安堵の溜息をついた。まだ、息がある。己の外套を脱ぐと、小さな弟の体を包み込む。抱き上げると、瘦せた体は悲しい程に軽かつた。生きているとはいえ、このままでは凍死する危険がある。

急ぎ、元来た方向へ戻りながら清夜は呟いていた。

僕がお前を守る。絶対に守る

呪文のように、己の心に刻むように、清夜は繰り返していた。まるでそれに応えるように、腕の中で飛雪が小さく兄者、と呟いた。

なおも視界を覆うのは白、己の力などこの色彩の前に如何程のもでもない。それでも清夜は挑むように前方を睨みつけた。

風の轟きは慟哭に似ていた。

がたり、と馬車が揺れた。清夜ははつと目を見開く。一瞬己がどこにいいのか掴みかね、そして苦笑した。何時の間にか眠り込んでいたらしい。馬車の小さな窓から外を見ると、目的地に着いていた。豪華な屋敷が目の前にある。馬車の揺れはどうやら止まった時のものらしい。清夜は馬車を降りると屋敷へと向かつた。

ごく僅かな時間だったのだろうが、懐かしい夢を見た。遠い昔の記憶、何年も見ていなかった夢だ。それを今頃何故、と思い、さらに苦笑を深める。弟との十年ぶりの再会のせいか。もっとも飛雪とらゆき今は万と名乗る男は、あの時のことなど覚えていぬだろう。

待ち構えていたように開けられた大きな扉を抜ける。玄関部分の広間を抜け、目的の部屋へと向かつた。

部屋も屋敷の外観に違わず華麗だつた。赤を基調とした装飾は重

々しく、深い色合いの木々を惜し気もなく使った家具調度も立派なものである。もつとも、先代の主の頃にはなかったものもある。壁にかけられた大角鹿の頭の剥製は今の代の主になってからのものだ。その主、暖炉の前に佇む男は、戸口に立った清夜を振り返ると笑んだ。年の頃は清夜と同じ三十代半ばでありながら、どこか弛緩した印象を人に与える。

「待つていたぞ」

清夜は一礼だけすると部屋に踏み入った。外の厳しい寒さが嘘のように、部屋は暑いくらいである。そこには他にも数人の姿があった。男が三人、屋敷の主よりは年嵩の者ばかりである。どつしりとした設えの椅子に座り、手に持つ硝子の杯には琥珀の液体が揺れていた。

「由洛公、彼は？」

問うた一人は五十を過ぎているだろう、肥え太った顔の中で小さな目が埋もれるかのようである。

「ああ、彼は清夜といっています。慈善家だった我が父が、飢え死にしかけていた彼を昔救いましたね、以来我が家によく仕えてくれているのですよ。清夜、こちらの方々を知っているか？」

「存じております」

清夜は眼差しを伏せて答えた。無論、彼は知っていた。この部屋に集うのはいずれも公の称号を帯びる者達ばかりである。

郷氏こうじとして貧しい土地に生きる北限ほくげんの民は、公の称号を許された一握りの者達によって率いられている。公の多くは、白沙那帝国はくさなにこの地に追いやられた後、民を優れた指導力で率いた者達の家系だった。厳しい気候の中で北限の民が生き抜くことが出来たのも彼らの功績に依るところが大きい。

だが、それももはや昔のことだ。清夜は冷やかに男達を見やっただ。分厚い衣と贅肉に包まれた目の前の男達の中に、嘗て民を率いた祖先の誇りが如何程残っているだろうか。今や公とは名ばかり、あるのは己の財への執着と嘗ての栄光に縋る古びた矜持ばかりだ。

中でも、由洛公を名乗るこの男が最も始末に負えぬ、と清夜は思う。父親の後を継ぐ前は己の虚栄と欲望のままに放蕩の限りを尽し、由洛公の名を継いだ後もそれは変わらぬ。虚栄の対象が、北限の民の未来を担うという英雄願望に取って代わっただけだ。それも父親が築いた信頼と莫大な財産に寄生しているだけであり、男自身が築いたものなど何一つとしてない。あるのは使い古された題目、自己愛に満ちた懐古主義ばかりだ。

「お前を呼び出したのは他でもない、頼みたいことがあるのだ」「何でしょう」

「実は緩衝地帯での計画が少し厄介なことになってね」「思わず清夜は顔を上げる。由洛公はわざとらしく肩を竦めると、杯をあおった。

「雇い人達が少々難物なのだ。そこで、後始末をお前に頼みたい」「由洛公、私は緩衝地帯での計画には反対だと申し上げました。確かその時、貴方は私には何も頼まぬと仰せではありませんでしたか？」

苦々しい清夜の声だった。

「君、主に向かつて無礼なことを言うんじゃないよ」

「ああ、いいんですよ。彼の物言いには私は慣れてるのでね」「横合いからの声に、由洛公が言った。

「私は己の役割を果たしております。緩衝地帯でのことは別の者にお命じりいただきたい」

「惣領家の姫君の暗殺を阻む手筈は整えた、ということかな」

「はい」

「報告の一つもなかったが……お前の秘密主義には参るね。この通り、彼は私にはなかなか詳細を語らぬのですよ。これではどちらが主かわかりません」

男はおどけたように言い、他の者達が媚びるように虚ろな笑いで呼応した。

「全ては順調でございますれば、無用な報告で煩わせるわけには参

りません」

「そうか。まあ、うまくいっているならばいい。引き続き頼む」  
「はい」

実際には違う。万はまだ姫の身边警護の任にはついていない。だが、万が椎良の近衛となるのも時間の問題だ。そのための手筈は既に整えている。それを目の前の男に言うつもりは毛頭なかった。

公という相手の立場を思えば、清夜の態度は不敬でさえある。だが唯一の、そして絶対的な清夜の強みは、彼が先代由洛公の時代から仕え、年若い時分から絶大な信頼を得ていた、ということだ。清夜の力と影響力を男は無視出来ない。公という呼称に違わず矜持ばかりが高い男にとつては我慢ならぬことだろう。生憎と清夜にとつては男の機嫌などどうでもよいことだった。ただ目的を達するため男の下にいるに過ぎない。男は清夜が築いた幅広い伝手が、そして清夜には男の莫大な財産が必要なだけなのだ。そういう意味では、男の財力に媚び諂いこの部屋に集う無能な公達と己は大差ないと清夜は思う。

「だが、そちらがうまくいっているならば、緩衝地帯で動くにも支障はあるまい」

「ですから、それは……」

「君には北限の民の誇りがないのかね」

清夜は突然割り込んできた声に振り返った。杯を口元に運びながら清夜を睨みつけているのは最も年長と思われる男だった。たるんだ頬の肉が口の動きにつられ揺らめく。

「北限の民が嘗ての栄光を取り戻すためにも、我々の計画に失敗は許されんのだよ」

「そうだ。我らの主が梓魏（シウイ）の支配者となるために尽力することを厭うなど、君はそれでも北限の民か」

「だいたい由洛公のお言葉に逆らうとは何事だ。聞けば、君は先代由洛公に命を救われたというではないか。その恩も忘れたのか」

「ああ、いいですよ、皆さん。この男にはこの男なりの思いがあ

るのでしょう」

由洛公は笑い含みに言った。

「清夜、お前が私の……いや、我ら北限の民の期待を裏切らぬことはよくわかつているよ。尤も弟は違つたようだがね」

己への批判にも表情を変えなかつた清夜が、素早く由洛公をねめつめた。白晳の面にあらわれた怒りの色に、由洛公が歪んだ笑みを向けた。なぶる意図が透けて見える。

「由洛公、そやつ弟というのは何のことです？」

「皆さんも御存知ですよ。おそらく私より詳しく知っておられる筈だ。十年前、梓魏惣領家の姫君を暗殺する計画が実行されましたが、その折に姫君に近付き毒を盛つたのは彼の弟なのですよ」

「おお、知っている。確か、姫に懸想し、拳句の果てに殺すこともかなわず、我らを裏切つた若者がいたな」

「あやつか。暗殺者が聞いて呆れる。色狂いした愚か者だ」

「まさに北限の民の恥晒しですな」

「弟は、死にました」

公達の声を断ち切るように、清夜が強い口調で言った。

「私がこの手で殺しました」

冷やかな響きに、しんと場が静まる。清夜は由洛公を見やった。

「ですが、十年前の暗殺が未遂に終わったからこそ、今我らには新たな未来を築く展望が開けたのです」

「ああ、その通りだとも」

清夜は嫌悪とともに目の前の男を見据えた。深く息を吸い、己の感情を深く沈める。

「私に緩衝地帯へ赴けと仰せなのですか？」

「ああ」

「お引き受け致しましょう。どのような事態になっているのですか」

由洛公はにやりと口元を歪めると、杯を掲げた。

「聞きましたか？ 皆さん。やはり彼は誇り高き我が民の一員だ。

彼の忠義に乾杯を」

声には愉悦が滲んでいた。己の意のままにならぬ相手を屈服させた、その快感なのか。 。 どうでもよい、と清夜は思う。 男が己をどのように思おうと、そのようなことはどうでもよい。

部屋に澱む熱気に包まれながら、彼は轟く風雪の音だけを遠く聞いていた。

屋敷を出た清夜は、門の外で待っていた馬車へと歩む。

「どちらへ向かいますか？」

御者が問うた。長年彼の下で働く者である。表情に出したつもりはなかったが、彼が内心に隠したものに気付いたのかもしれない。 氣遣う響きがあった。

「私の住処へ。準備を整えすぐに梓魏を出す」

「……承知致しました」

「いや、梓魏を出す前に寄る場所がある」

それだけを言うと、清夜は馬車に乗り込んだ。

轍の音を聞き、清夜は漸く体から力を抜いた。梓魏を出す前に、一度万に会わねばならないだろう。首尾を確認し、警告を与える。

彼が緩衝地帯に向かえば、傍近くで見守ることは出来ぬ。不測の事態が起こったとしても、万自身の力だけで切り抜けるしかないのだ。

(尤も、見守ってほしいなど思うわけもなかるうが……)

そう思い、清夜は瞳を閉じた。眠りは、訪れなかった。

酒場は喧噪に満ちていた。広い店の中には酔客が犇めき熱気が籠っている。燻された肉の匂いと一日の疲れを酒で洗い流す男達の体臭、紅辛酒の独特の芳香、雑多なそれらが混ざり合う。灯された炎は陽気に揺れ、人々の笑顔を照らし出していた。

「おおい！ こっちに紅辛酒を四つ頼む！」

喧噪に負けじと叫んだ傍らの若者に、万よろずは言った。

「おおい、それくらいにしておけよ。これ以上飲んだら明日の訓練に響く」

「いいんだよ。明日訓練なんかあるもんか。どうせ雪かきで一日が終わりだ。飲まんでどうする！」

そう言うのと、手元の杯の残りを一気にあげた。

「二日酔いは辛いぞ。あまり無理するなよ」

「がき扱いしやがって、俺はまだまだ飲める！」

むきになって言うものの、卓を囲む四人の中で最も若い。酒もさほど飲み慣れていないのか、三杯目をあけて既に顔は真赤になっていた。

「そうだよなあ。俺達雪かきするために梓魏軍しに入ったんじゃないのによお……」

「今年はやけに降るよな」

呼応して他の者達もこぼす。それに万は苦笑した。彼らの気持ちはわからないでもない。一昨日から降り続く雪はやむ気配がない。

結局ここ二日ばかりは広い訓練場から大量の雪を掻き出す作業に兵士達は追われることとなった。だがそれも雪が降りやまねばいつ終わるかわからぬ。

窓の外はなおも降り続く雪の影が忙しない。折角雪かきをしても、明日の朝になれば訓練場は一面白く染められているだろう。それを通して、憂鬱を飲むことで紛らわしたくもなる。珍しくも夜の街に



繰り返すことを許されたのも、兵卒達の鬱憤に対する上層部の配慮だろう。

「とにかく、今夜は飲む！」

「おう！」

万は苦笑を深め、三人にあわせて杯をあけた。

「それにしても、この前の試合はすごかったよな。どこであんな剣術を身につけたんだ？」

突然話をふられ、万は頭をかいた。少し前に開かれた腕試しのこつとを言っているらしい。

「別にすごくはないさ。勝ったのはたまたまだ。一位にもなれなかつただろう」

「でも初戦で一番の優勝候補を倒しただろう。それに三位つてのもすごいじゃないか。そんなこと言っていたら初戦敗退の奴らに恨まれるぞ」

「まぐれだよ、まぐれ。それに単なる腕試しじゃないか。勝ったところで出世するわけじゃなし」

「それがそうでもないんだよなあ。軍処方に務める兄貴から聞いたんだが、今軍では腕の立つ奴の選別を進めているらしい。腕試しで上位に入った者は特別に取り立てられることもあるとか」

四人の中でも二番目に年若い男が得意そうに言った。

「本当か？」

「ああ。場合によっちゃ近衛に入隊することもあり得るらしい」

近衛 惣領家を直接護衛する選りすぐりの兵士の集まりである。

それに、若い兵卒である彼らは色めきたった。

「そいつはすごいな」

「大出世じゃないか」

「何故、今そんなことをしているんだ？」

杯を傾けながら万はのんびりと問う。

「そりゃ当然惣領家の守りを固めるためだ。今は物騒だからな」

なおも得意気に言った若者は声を潜めた。さほど機密性の高い情

報でもないが、最下級の兵卒が知っていることでもない。自然と皆真剣な表情で耳を傾ける。

「一年前に惣領がお亡くなりになってから惣領家は次の主が決まっていけない。誰が次の惣領になれるか、今中央はそれでもめている。それで不穏な事態とならないように、警備を増強するらしい」

「誰がなるかは決まっているだろう？ 何と言ったか……あれだ、惣領家傍流の方がなるんだろ？ 確か上総家の勢輝様だ」

「それがどうやら違うらしい。最近では椎良様が次期惣領にされるんじゃないかと考えられているのさ」

「だが椎良様は目がお見えにならないんじゃないのか？」

「思わず方は口を出していた。惣領の座を巡る争いを彼は詳細に知っている。だが、まさかここでこのような話を聞くとは思わなかった。虚実入り交じっているとはいえ、もう噂として出回っているのか、と意外の念を抱いていた。いい加減酔いがまわっている相手は口が軽い。思わせぶりに指を振ると言った。

「ああ。だから継ぐことはないと思われていたんだが、玄士の正章様が椎良様を強力に推しているらしいんだよな。正章様は前々から上総家とは折り合いが悪い。上総家から惣領を出そうものなら、自分が追い落とされることがわかっていいるから、是が非でも椎良様を惣領に、ということらしい。ここから面白いんだが、噂じゃあ正章様は椎良様に自分の息子を婿として差し出すつもりらしいぜ」

「万は杯を卓に置いた。一瞬間が強張ったのが自分でもわかった。幸い、彼の表情に気付いた者は一人もいなかった。

「それがどう面白いんだ？」

「わからないのかよ。椎良様が惣領になられて、玄士の息子が婿になってみるよ。玄士様の力はこの上なく高まる。影響力は今まで以上、誰も手出しが出来なくなる。上総家も目じゃないってことさ」

「なるほどなあ……」

「ま、どうなるにせよ、雲の上の話だな。俺達にや関係ねえ」

「しかし何で近衛の増強なんてするんだ。要は玄士様と上総家の争

いだろ？ 不穏な事態なんて別に起こらないんじゃないか？」

「そりゃあ、十年前の事件があるからだろ。ほら、椎良様の暗殺未遂事件……」

調子っぱずれの歌声が突然あがり、それに若者の声が掻き消された。隣りの卓で、酔いのまわった男達が興に乗ったのか、大声で歌い出していた。息を詰めるようにして話していた座が白ける。

「暗殺未遂事件があったというのも噂に過ぎないだろう」

万の言葉に、隣りの騒ぎを呆気に取られて眺めていた若者が振り返った。

「あ？ ああ……何だっけ？」

「だから、十年前の」

「そうそう、噂なんだが、実際あったらしいぜ。しかも上総家が仕組んだことだという話があるんだよ。惣領の座欲しさにな。で、折角勢輝様が惣領になるのが確実だったつてのに、今頃になって椎良様にそれを横から奪い返されるんだから、次は何をするかわからんつてね……」

「おい、見るよあれ、馬鹿だよなあ」

歌い出した男達とは別の卓の一団が立ち上がり、歌にあわせてどたどたと騒々しく足を踏みならしている。

「もつとうまく踊れー！！」

歓声とも野次ともつかぬ掛け声がかかる。つられたように方々で男達が立ち上がり足を踏みならず。手拍子、足拍子が入り乱れて店中が一つのうねりに呑み込まれるように沸き立っていた。

「俺達も行こうぜ！」

万の正面の兵卒が叫ぶと踊りの輪の中に飛び込んでいった。もう一人がその後続く。

「おい！ 悪いが俺は帰る！」

万は今しも飛び出そうとした残りの一人の腕を掴むと大声で叫んだ。そうせねば聞こえぬ程の騒々しさである。相手の返事は聞こえなかったが、頷いた動作から伝わったのだろうと判断し、万は揺れ

動く男達をかき分けて出口へと向かった。

店の外に出ると途端に突き刺すように冷たい夜の大きに押し包まれた。外套を羽織り、店から離れる。陽気な喧噪が遠ざかった。酒の酔いはとうに消えていた。どさくさに紛れて店から出ることが出来たのはむしろ良かった。出た、というよりも実際には逃げ出したようなものだったが、と万は苦く思った。先程聞いた話に、自分でも驚くほど動揺していた。

体の芯から凍えるような寒さが今はありがたい。肉体的な感覚が、思考の渦から己を遠ざけてくれる。

街の外に向かつていた万はふと足を止めた。酒場の界限からは離れ、既に眠りに落ちる街並みが続く。ひっきりなしに舞い落ちる雪の帷の向こう、光という存在から見放されたかのような街角にひそりと立つ人影があった。暫しその姿を見つめ、万は大きく嘆息した。足早に近付き路地に踏み込むと、背後に影が続く。真新しい雪を踏みしめる足音が二つ、夜の街に微かに響いた。

誰にも見られぬだろう一角まで辿り着き、漸く万は後ろからついて来た人物を振り返った。

「こんなところで何をしている」

問われた相手は涼しい顔で答えた。

「首尾を確認しに来た」

「あのな、俺はうまくやってる。のこのこ会いに来るなんてどうしたんだよ。らしくないな。誰かに見られたらどうする」

「弟を心配してはいかんか？」

さらりと言った相手を万は睨みつけた。対する兄、清夜すがやは憎らしいほどの無表情である。

「先程ともに酒場に入った他の三人は、梓魏軍の者か？」

「そうだよ、同じ隊の……あのなあ、一体何時から見てたんだ？」

「うまく連中の中にとけこんだようだな。だが、あまり慣れ合うな。それでなくともお前は情が移りやすい」

「……いいのかよ、こんなところで油を売っていて。俺が椎良様の

護衛の任につくという段取りはどうなっている」

「上総家に縁のある官吏が既に手をまわしている。お前は近衛に召し上げられる筈だ」

「何時だ」

「近々だ」

「上総家が椎良様に刺客を放つのではないかと噂が出ているぞ。どうやら惣領家のお家騒動はこれからが佳境のようだな」

清夜の顔が僅かに強張る。

「その噂、どこで聞いた」

「さつき一緒に飲んでいた連中からだ。中の一人に、兄が軍処方で働いている、という奴がいてな。あんたが言う慣れ合いの成果だよ」  
皮肉に笑んだ万だったが、ふと真面目な表情になる。

「なあ、上総家は本当に北限の民にとって信頼出来る相手なのか？」

「あの家は我らの主の家系だ」

「だがなあ、それだって時代が変わりや意識も変わる。上総家のお歴々が、一度でも北限の民が生きる土地に来たことがあったか？  
いまだに自分達を北限の民の一員だと思っているかねえ」

万の言葉を、清夜は否定も肯定もしなかった。答えぬのではなく  
答えられぬ、ということかもしれぬ、と万は思う。

「賭けてもいいが、そんなこと欠片も思っちゃいないだろうよ。今じゃあ上総家は梓魏惣領家に取り込まれちまったのさ。ただ、北限の民に由来するために惣領になれず、さぞや悔しい思いをしているだろうよ。そんな中で甘い一言で喜んで尻尾を振る便利な奴らがあるらわれた……これ幸いと利用するって腹だ。俺にはそう考える方がしっくりくるんだがね。惣領の座を得たいがために、兄貴達は利用されているんじゃないか？」

あるいは、そも上総家と北限の民を結ぶものは、歴史に埋もれた古びた信義などではなく、互いの利害の一致なのかもしれない。万からすれば、その方が余程相手を信頼できるというものだ。

上総家 梓魏惣領家の傍流の血筋と言われる彼らは、梓魏惣領

家が北限の民の長であつた一族と姻戚関係を築いた結果つくられた家系だつた。

白沙那帝国はくさなにより北限の民は嘗て支配していた土地を追われた。だがそれは容易くなされたわけではない。新たにその地を治めることとなつた梓魏惣領家は北限の民の苛烈な抵抗に手を焼き、長の一族と姻戚関係を築くことで事態の収束を図つた。梓魏の支配者たる地位を北限の民に約し、ともに所領を支配するのだという、それが梓魏惣領家の言葉だつたという。

過酷な気候で生きること強いられ、長きにわたる戦いに疲弊していた北限の民は、惣領家の言葉を受け入れ抵抗をやめた。梓魏惣領家と並び立つ存在 嘗ての支配者としての矜持を辛うじて満たすことがなつたが故である。例え見せかけであろうとも、誇り高い彼らにはそれが必要だつた。

だが、実質は違うことに、多くの者は気付いていた。北限の民は単に己の主を人質に取られたに過ぎない。時代が移ろう中で、北限の民は梓魏の真の支配者であるという、その矜持を頑なに守り続けた。今でも北限の民の中では公を中心として根強く復権を図る動きがある。北限の民の本来の主である上総家から梓魏惣領を出そうというのも、その一つである。他ならぬ万自身がその動きに巻き込まれているのだ。

全ては十年前に遡る。十年前に惣領家の主筋の姫、たつた一人の後継ぎである椎良の命を奪うことで宿願を果たそうとした彼らだったが、暗殺は失敗する。それが今に至る混乱の始まりだつた。

現在でも椎良を亡き者とすべきだという強硬な意見を持つ者は多い。だが、それに異を唱える者も少なからずいる。十年前とは状況が変わつたのだ。その一つの理由が、はからずも先程兵卒の一人が口にした言葉の中にあるのだと万は知っている。

暗殺未遂の事実は表向きには秘されたが、隠そうとして隠し通せる出来事ではなかつた。黒幕は上総家なのではないか そのような噂が広まるまでさほどの時間はかからなかつた。しかし上総家は

仮にも惣領家の傍流である。最も動機があるとはいえ、疑わしいだけで弾劾することは不可能だった。結果として梓魏領民の敵意の矛先は北限の民へと向けられたのだ。

真実が奈辺にあるかもわからぬ中で、北限の民に対して迫害が行われたわけではなかった。だが、一連の世の流れは、歴史に埋もれたかのように見える北限の民との戦の記憶が、梓魏領民の意識に深く刻まれていることの証左でもあった。強硬にことを運ばやがていらぬ火種を抱えることになりかねぬという、北限の民が教訓を学ぶには十分だった。

「だいたい上総家は本当に強硬派とは関係がないのか？ 実は姫暗殺の主導者は上総家の勢輝様なんじゃないのか？」

「勢輝様はそれ程に愚かな方ではないと聞いている。強硬派の動きに良い顔はされていないようだな」

「それで、強硬派は大人しくしているのか？ まさかもう刺客を放ったなんてことはないだろうな」

「私が知る限りそこまで動いてはいない。だが、時間の問題だな」

「今からでも北限の民が一枚岩になって、姫暗殺なんて物騒なことをやめてくれないもんかね」

「血を流し築いたものはいずれ瓦解する。北限の民と惣領家の約定のようにな。そして我らが主を奪われた怒りをいまだに抱いていることから学びもせず、相手の主を奪おうというのだから愚かしい限りだ。だが、それをわからず己の妄執にとりつかれた者達もいる、ということだ。あの連中はそれこそが真実の忠節と信じている」

「傍迷惑なもんだ。だいたいそんな奴らは自分の指から血が流れただけで大騒ぎするってえのに、人が流す血は紅辛酒だとも思ってるんじゃないか？ いかれた奴らだ」

ぼやく万の口調に、くすりと清夜は笑った。可笑しげなそれに万は目を瞬く。だが、兄の柔らかな表情はすぐに消える。

「私は暫く梓魏を離れる。今日来たのはそれを伝えるためでもある。これから何かあっても一人で何とかしろ」

「どこに行くんだ？」

「緩衝地帯だ」

「緩衝地帯って……なんで」

「少し厄介なことになっていているらしい。事態を收拾してこいとの由洛公らくこうからの命令だ」

「なんで兄貴が行くんだよ。緩衝地帯での計画を進めていたのは由洛公じゃねえか。兄貴は計画には反対だと言っていたんだらう？」

「何故兄貴が尻拭いをするんだ」

「仕方がないさ。由洛公には恩義がある。それに計画自体はさほど悪いものではなかった。ただ、方法が悪かった、ということだ」

「そこまで義理立てする必要はないだらう。恩義があるのは父親の方であつて道楽息子じゃないだろ。それに、恩義と言つても俺達を暗殺者に仕立て上げたのは先代由洛公だ。俺としちゃあ、到底感謝する気持ちにはなれねえな」

「万、私はあの方に仕えているんだ」

「淡々と清夜は言う。それに万は言い様のない苛立ちを感じた。昔から、兄のこのような顔を見るたびに感じていたそれである。」

「だいたいあの道楽息子が真剣に北限の民の未来を考えていると兄貴は思っているのか？ 公達が唱える北限の民の復権なんて、そんなものはまやかした。綺麗事ばかり並べ立てても、あいつらは所詮己の財のみに固執する屑どもじゃないか。そんな奴らのために、なんで兄貴がそこまでやるんだ」

「私には果たしたい目的がある。そのためならば屑どもに対してであるうとも喜んで膝を屈するさ」

「その目的ってのは何だよ。北限の民が嘗ての権力を取り戻せるわけがない。北限の民にはもうどこにも行き場はないんだよ。あの地で生き抜くしかないんだ」

「あの地で生きることが捨てたお前に、そのようなことが言えるのか？」

はつと万は口を噤む。責める響きはなかった。ただ事実を指摘し



ただけ、ということか。静かな兄の面から万は目を逸らしていた。  
「私が何を思うかなど、お前には関係のないことだ。もとより私とお前とでは目的が違う」

聞きわけの悪い子供に対するかのような兄の言葉である。万は苦々しく溜息をついた。考えてみればこの兄が本心を彼に明かしたことなど今まで一度もなかった。

「俺も緩衝地帯に行く」

「何を馬鹿なことを……そのようなことは無理だ」

「何とでもなるさ。遠縁の親戚が死んで葬儀に出るとでも言えば、理由はつく。由洛公の浅知恵のせいで兄貴一人を危険な場所に行かせられるか」

「だめだ。お前は椎良様をお救いすることだけを考えている。いつ強硬派が刺客を放つかわからん」

万は返す言葉に窮する。予想以上に惣領家を巡る動きは激しく、予断を許さぬ。それを思えば、清夜の言は尤もなものである。そしてもう一つ　万は低く問うていた。

「さっき聞いたが、玄土の一人が椎良様と自分の息子を結婚させようとしているらしいな」

「ああ、正章のことか。……やはり、気になるか？」  
「……」

「正章は権力欲が強いうえに、生粋の北限の民嫌いだからな。上総家から惣領を出すのを何としても阻もうとするだろうな。最近では益々力をつけて強引になってきている。そのせいで北限の民の強硬派が事を急ぐ可能性がある。博山公はくさんこうの性格はお前も覚えているだろう。正章がこれ以上力をつける前にと、姫の命を奪おうとする動きがはやまるかもしれん」

「博山公か……くそっ！」

「とにかく、私のことは余計な心配などせずともよい。お前こそ迂闊だからな、用心しろよ。お前自身が死んだことになっていることも忘れるな」

最後の言葉に、万は顔を顰めた。面と向かって言われると、やはり良い気分ではない。

己が故郷では死んだことになっている、その事実を知ったのは梓魏を去った後のことだった。清夜の所業であることはすぐにわかった。飛雪という名を捨てた彼に対する、それが兄の意思表示なのかと思いついた時期もあった。今となつてはそれが、全ての咎と汚名を被せられた彼を救うための唯一の方法であつたのだと、万にもわかる。

「わかつてるさ。それに別に兄貴を心配しちやいない。いつも俺よりも腕は上だった」

清夜は薄く笑んだ。ふと視線を上に向ける。それにつられて万もまた上空を仰いだ。降り注ぐ雪がさらさらと頬に触れる。夜の天空、その滑らかな漆黒から湧き出し、やがて僅かに銀灰の翳りを帯びて最後にはあえかな純白へと移ろう。

そういえば、と囁くように言った清夜の声は穏やかだった。

「昔お前はよく一人で雪の中に飛び出して行ったな」

「……そうだったか？」

「ああ。父上と母上が死んだ後には二人を捜しに行くのだと言って、一人雪原に入り込んだ」

何故父と母がいないのか 幼い弟のその問いに、清夜が二人は雪原の向こうに行ったのだと答えた、それ故だった。子供にとつて雪原はどこまでも続く果てしない世界だった。その向こうにまだ見ぬ現があるなどと、あの頃は知らなかった。

「私が捜しに行くとお前は雪原に倒れていた。あの時は肝が冷えた。死んでいるのかと思つたが……」

清夜は言葉を切ると、万を見やって笑う。

「あの頃からしぶといな、お前は」

「言つてるよ」

ふと、万は目を細めた。記憶の底から、不意に湧きあがったものがあった。視界を埋め尽くす白、飢えと疲れ、倒れ込んだ雪原は不

思議と柔らかく温かった。そのまま意識を失い、気付いた時には見慣れた炉辺で、温めるためか兄に抱きしめられていた。叱られるかと思つて見やった兄は、ただ深く静かな眼差しでこちらを見つめていた。それに、何故か泣きたくなくなったことを覚えている。己の小ささを痛感した瞬間でもあった。

「なあ、あの時何か言っていなかったか？」

「どの時だ」

「俺が雪原に迷い込んだ後、兄貴が俺を連れ帰ってくれただろう。その時だ。何か言っていただろう」

「……さあな。覚えていない。お前の気のせいじゃないのか？」

「そうか？」

万は首を傾げる。確かに気のせいなのかもしれない。あの時彼は兄の腕の中で気を失っていたのだから。だが、まるで水底から小さな泡が浮き上がるように、遠く何かを囁く兄の声が聞こえるような気がした。

「とにかく、お前は自分の仕事にだけ集中している。わかったな」

「ああ」

「じゃあな、と言って遠ざかる清夜の背に、万は思わず声をかける。『気をつけるよ』」

清夜は頷くと、ひっそりと姿を消した。万は兄が消えた闇を見つめる。何故か、やるせない思いが胸中に凝っていた。それさえも埋め尽くすように、雪は静かに降り積もっていった。

## 71 (後書き)

今回で第二章は終わります。次からは第三章「螺状の絆」がはじまります。第二章の最後あたり、主人公が全く出てこない、という。この先もしばらく出ません。物語はさらにややこしくなっていきませんが、読んでいただければ幸いです。

では、今後ともよろしくお願いいたします！

### 第三章 螺状の絆

市場は活況を呈していた。人波は絶えることがなく、熱気と埃が乾いた空気に立ち込める。威勢良く商品を売り込む店主の声が、ざわめく通りのあちこちで響いていた。

雑踏の中で一人の男が地面に商品を並べていた。だが、売る気が全くないのか、地面に胡坐をかいて煙管を吹かし、掛け声をあげるでもない。それにも関わらず、商品の前で足を止める人が絶えない。人々が足を止めるのは商品のせいではなかった。軒を連ねる派手な露店と比べれば店としての体裁さえ整っていないうえに、取り立てて変わった品を置いているわけでもない。ありきたりの地味なものばかりだった。人々が足を止めるのは、どうやらその男の風体故らしかつた。一度見ると何故か目を放せなくなるような、不思議な空気を男は纏っていた。だが、眼力の鋭い者ならば、それが安らげる部類のものではないとわかっただろう。むしろ警戒を煽り、危うさを感じさせるものである。それにも関わらず、命を焼き尽くす炎に虫が引かれるように、人々は男に引き付けられていた。

「これはどこの品物？」

若い娘が櫛を手に取っておずおずと尋ねると、男は煙管を軽く振って答えた。

「さてね、俺も知りはないが、おそらく東だろうよ」

「あの………いただいてもいいかしら」

「はいよ」

差し出された硬貨を受け取った男は笑顔の一つ見せるわけでもなく、無造作に小さな櫛を娘に差し出した。押し抱くようにしてそれを受け取り、娘は名残惜しげに男を何度も振り返りながらその場を後にした。万事がそのような調子である。

男は周囲への関心すらないかのようになり、俯きがちに煙管を吹かす。男が人目を引くのはその奇態な格好のせいもあつたかもしれぬ。ぞ

ろりと長い黒の衣を羽織り、帯は鮮やかな朱色である。漆黒の長い髪は好き放題にはね、まるで鬘のような有様である。そして頭から顔の左半分にかけて、紅白の格子縞と群青の二枚の布が絡み合うようにして覆っていた。隻眼なのか、あらわな右目は物憂げに伏せられ、人波を見るでもなかった。

雑踏の喧噪にも、道行く人々の視線にも無頓着だった男がふと顔をあげた。その先に、一人の旅人の姿があった。移り気に店から店へと流れ歩く人々の中で、その旅人の足運びには迷いがなかった。さして速くもない歩みではあったが、目指すところを知っている者のそれである。

「お客さん」

男が声を放った。不思議と通る低いそれに、旅人がゆるりと首を巡らした。旅人は既に五十はこえているだろう男だった。風雨に晒され続けたことを窺わせる肌は浅黒く、額に大きな一条の傷が走っていた。かなり昔に負った傷なのか、白味を帯び、無数に刻まれた深い皺に紛れるような具合だった。

旅人と男の視線が交錯する。

「少し見て行かないかい？」

「生憎と、必要な物はない」

旅人は答えたが、ふと興味を引かれたように男の前にしゃがみ込んだ。並べられている商品を眺め、鼻を鳴らした。

「ろくな物がないな」

「そうでもないさ。ここに置いていない物もある。欲しい物があれば言ってみな」

「言ったらろう、別段必要な物はない」

「そうかい。ところでお客さん、異国の者だね。思うに東の方だ。それも草原地帯よりもさらに向こうの者じゃないのかい？」

旅人は眉を上げる。肩を竦めた。

「よくわかったな」

「ちよつとばかり耳がいいもんでね」

旅人は意外の念を持つて目の前の男を眺めた。彼の言葉には確かに異国の訛りがある。だが、この異郷の地を流離つて既に長い時が経つ。彼が東の者であることに、人々が気付くことはない。僅かな会話だけで男はそれを見抜いたというのか。

旅人の思いに頓着せぬ様子で男は煙管をくわえると、懐を探つて小さな紙包みを取り出した。

「こいつなんかおすすめだ。そこらじゃあ手に入らない、優れ物の薬だ。どうだい？」

「効能は何だ」

「苦しませることなく相手の命を奪うことが出来る」

「……何故、そのような物を私に見せる」

「お客さんには要り様な気がしたんだよ」

旅人の顔が強張つた。気味の悪いものを見るような目つきで男を眺める。改めて見れば、男は美しかった。一見すると女性的な程に端麗な顔立ちだったが、頬が削げた鋭い輪郭に甘さはなかった。整っているだけに、硬質な凄味を感じさせる。晒された右目は深い青に灰色が混じっているのか、それとも氷のような冷めた浅葱に黒が混じっているのか、掴みどころのない色彩である。

顔の左半分を布に覆われているせいか、男は年齢が掴み難い。二十代にも四十代にも見えた。だが少なくとも旅人より年上であることだけはないだらう。旅人は苦く言つた。

「若いのに、私にはそのような薬は必要ない」

「無論、相手を殺すばかりじゃあないさ。生きるのに厭いたらこいつを呑めばいい」

「それこそ必要ない。苦痛のない死など私には許されぬ」

「そうかい」

言つと男はあっさりと紙包みを懐にしまった。なおもまじまじと男を見つめながら、旅人は小さく苦笑した。

「何故、私が人を殺しに行くことがわかつた？」

「勘というやつでね、何故と言われてもわからない。強いて言えば

歩き方、かね」

「ふん、大したやつだな。それとも見透かされた私<sup>が</sup>その程度ということか……」

自嘲を含ませて旅人は言う。

「ただの物売りにも見えんが、何を好き好んで路傍に蹲っている」  
男はにやりと笑った。それだけで人を惹き付ける。

「蹲っているとは人聞きの悪い。俺は見守っているのさ。これからこの街で起こることをな」

「何が起こるといふのだ。平和な街だ」

「表向きにはな。お客さんももう少しここにどまったらどうだ。

面白いものを見ることが出来るやもしれん」

「先を急いでいる」

「獲物が逃げるのが怖いのかい？」

「いいや、逃げることはない。あやつは必ず私を待っている。私自身も、あやつ<sup>の</sup>血を浴びるために、何十年も旅をしてきたのだからな。それもあと少しで終わる」

旅人の声音は優しくすらあった。それに、男はさして興味を引かれた様子でもなかった。のんびりと言う。

「まるで想い人をずっと追いつけているような言いようだな」

「変わった男だな……。しかし……想い人と言えばそうかももしれん。私と彼女の縁は深い」

「ああ、やはり女か。出会えるといいな」

「ああ……」

旅人は背囊を担ぎ直すと踵を返した。

「どこにいるかはわかってるのかい？」

男は言うつと、煙管の灰を地面に落とした。すでに立ち去りかけていた旅人は僅かに男を振り返った。

「<sup>たから</sup>多加羅だ」

ぼつりと言葉を残して、旅人は再び雑踏へと紛れた。その姿を見届け、男は物憂げに腕を組んだ。再び霞がかったように、その表情



から周囲への関心が失せる。まるでまどろむような眼差しで人々の群れを眺めた。

どれ程そうしていたのか、男の背後にひそりと立つ気配があった。人影は周囲の街衆と大差ない地味な衣を纏っている。さりげなく男に近付くと、傍らにしゃがみ込んで商品を覗き込んだ。そのまま視線を上げることなく囁いた。

「蛇が動きました」

「漸くか」

煙管をくわえたまま、男がやれやれと言った風情で答えた。

「それから……多加羅の若衆ですが、こちらは動きが掴めません。

もしかすると、多加羅へ戻ったのかも知れません」

「確かか？」

「ここまで動きがないとそれしか考えられません。手に負えぬとわかったのでしょうか」

男はゆるりと煙管を唇から離す。うつすらとそこに笑みが浮かんでいた。その笑みに気付いたのか、街衆の風体の男が尋ねる。

「何故、多加羅若衆の動きまで見張る必要があるのでしょうか。蛇を泳がせることも合点がいきません。早々に捕えればよろしいものを」

「これから面白いというのに、それをしてしまつては台無しだ」

「面白い……ですか？」

理解に苦しむ、という相手の声音に男は笑みを深めただけだった。相手はその様子に僅かに呆れたように溜息をつき、苦笑した。

「まあ、いいでしょう。我らは貴方についていくだけだ。また新たな動きがあればお知らせします」

「ああ。ところでどうだい？ 何か一つ買つていかないかい？」

「いいませんよ。ろくな物がありません。だいたい売れないのに、一日中往來に座っているなんて酔狂に過ぎますよ。蛇に見つかる危険もあるというのに」

「その時はお前達が守ってくれるのだろうか？」

「御冗談を。蛇如きにどうにかなるお方なら、我々はついていこうなどとは思いません」

言つと、来た時と同様にさりげなく離れて行った。

「そんなにろくでもない物ばかりかね。それなりに売れるんだがね」  
男は呟くと、のんびりと煙管を吹かした。まるで見えぬ先に目を凝らすように上空を眺める。すでに彼の頭には、これから女を殺しに行くであろう旅人のことも、忠実に命令をこなす部下である男の存在も遠く霞んでいた。

「さて、どう動くかね？ 先見占いでもこればかりは読めない」  
流れ行く雲は、勿論未来の行先を示しはしなかった。

白沙那帝国の都は正式な名称を白西露峰はくせいろうほうと言う。名の由来は都を半ばぐるりと取り囲む険しい山脈をあらわしたものだとも、その街の外観故であるとも言われているが、いずれにせよ的を射たものと言える。

白西露峰は百万の人が住むとも言われる帝国随一の都市であるとともに、他では見られぬ巨大な建造物群で知られる。遠くから見れば、あたかも切り立った鋭い岩山が連なっているようにも見えよう。だが最も圧巻であるのは皇帝が坐す宮殿だった。天を突く建造物よりもさらに高く、広大な宮殿は峻険な山脈の懷に抱かれ、その岩肌の一部となつたかのような外観である。十重二十重に高い壁を巡らし、渦を巻くようにして上へ上へと伸びるその様は、下から見上げればまさに一つの山である。

都を初めて見た者は、その規模と迫力、そして美しさに圧倒されるに違いない。青灰色の山々を背後に、白壁の家々が連なり建つ様は、決して溶けぬ氷雪に象られた姿にも映る。晴天であれば眩しい程に白く、空が暮れゆく色彩に染まる頃合いであれば、紫に、紅に、琥珀に、空から注ぐ光の奔流にのみ込まれる。

悠緋ゆうひが露台から街を見下ろした時、街は燃えるような深紅に染ま

つていた。夕刻である。触れれば火傷を負いそうな色彩とは裏腹に、吹く風は透徹として冷たい。手摺に添えた指先が、何時しか凍えていた。悠緋はかじかんだ指先に息を吹きかける。息は、白い霞となつて大気に溶けた。体の芯に沁み込むような寒さも無理はなかつた。悠緋が立つのは市街をはるかに見下ろす場所である。

宮殿と一口に言つても、様々な区域がある。皇帝が住まう真之宮、皇妃や寵妃が住まう廉之宮、皇族のための波之宮を頂点に、八大楼はちだいろう宗家の屋敷や軍隊の本部、神殿、そして都の貴族が住まう屋敷が連なっている。地方から都に出てきた惣領家の者や貴族のための居住区もあり、さらには宮殿や貴族の屋敷などに仕える人々の家々までもが連なっているため、市街とは隔てられた宮殿の内部そのものが、一つの街の様相を呈していた。条斎士じょうさいしの修練の場である聖蓮院しょうれんいんもまた宮殿の一角を占める。

その聖蓮院の露台から街を眺めながら、悠緋は多加羅から都に来た時のことを思い出していた。三年前のことである。初めて見た都の姿に彼女が感じたのは、感動ではなかつた。むしろ恐怖と言う方が相応しい。街は硬質な端正さで外部の者を拒み、宮殿は傍若無人なまでの壮麗さで彼女を圧しようとしているかのように思えた。だが、それもすでに遠い。まるで昔の出来事のように思えた。多加羅を出た時に十五だつた彼女は今では十八になっていた。

「悠緋様」

かけられた声に悠緋は振り返つた。背後に何時の間にか青年が立っていた。吹き過ぎる風に、背で一つに纏めた青年の髪が揺れる。

「このようなおところにいられたのですか。お寒くはありませんか？」

「ええ。でもここからの眺めを見たかつたのです」

答えれば相手もまた遠くに視線を投げた。深紅は益々深く、すでに暗色に沈みつつある。

「聡達様そつたつはもう講義を終えられましたの？」

「いえ、まだです。皆に少し課題を出しましたので、その間抜け出して来た次第です。講堂に籠りきりではどうにも息苦しい。もう少

ししたら戻らねばなりません」

言いながら青年、聡達は悠緋に微笑みかけた。凜々しい顔立ちが、笑うと思いがけず柔らかいものとなる。

聡達は悠緋が白西露峰に出て来たその同じ頃に聖蓮院に入っている。その当時から優れた条斎士であった彼は、今では聖蓮院の中でも選り抜きの術者を指導する立場となっていた。

沙羅久惣領家の二男である彼に、悠緋は少なからず警戒心を抱いていたが、それは多分に噂で聞いていた聡達自身の所業のせいもあつた。聡達はそんな彼女の気持ちを知ってか知らずか、会えば気さくに話しかけてくる。何時しか穏やかな彼の笑顔に、二惣領家に古くからある諍いも遠く思われるようになっていた。

「悠緋様はもう全ての講義を終えられたのですか？」

「ええ。宝珠がこれ以上染まらないので、実技の講義は一月程前に全てやめましたの。ですから、今は講義自体それ程数がないんです」  
僅かに目を伏せた悠緋に、聡達は言った。

「学理もまた条斎士にとつては大切な分野です。悠緋様は非常に優秀な成績を修めておられる。新たな言霊の法理を発見するためにも、悠緋様のように優秀な条斎士は是非とも必要です」

「……でも聡達様のようにお若くして講義を持っていらつしやる方もおられるのに、私のように才の無い者がここにいてもよいのかと…… 思わずにはおれません」

「あなたらしくもない。何かあつたのですか？」

気遣う声音に、悠緋は微笑んだ。何かを吹っ切るように一つ頭を振ると言う。

「少し感傷的になつて居るのかもしれませんが。都に出てきたのが丁度これくらいの季節だったかと思うと、何だか複雑な思いがいたします」

「三年前ですね」

「ええ」

「多加羅にお帰りになりたいのですか？」

「帰りたくも思いません。この三年、一度も父上にも兄上にも、会っておりませんもの」

「だが、あなたがお帰りになられては、私が寂しくなる」

悠緋は思わず傍らの青年の顔を見上げた。思いがけない近さで漆黒の瞳が見つめていた。視線が絡め取られる。聡達が手を伸ばす。その温もりを頬に感じて、悠緋は息を呑んだ。

「聡達様」

立ち竦んでいた悠緋は突然かけられた声にはっと我に返ると、後ずさった。温もりが離れる。聡達は手を下ろすと、声の方を振り返った。

「すでに皆課題を終えました。お戻りください」

回廊の暗がりにも、まだ年若い娘が立っていた。聖蓮院の学生が身に着ける白と青を基調とした衣を身に纏い、条斎士としての階層を示す帯は深紫、優れた術者であることを示していた。聡達が受け持つ講義の生徒であるらしい。そうであれば聖蓮院の中でも一際優れた条斎士であることは間違いなかった。

娘の顔は影になって見えず、しかし悠緋は我知らず顔を伏せていた。

「ああ、すぐに行く」

答えた聡達は悠緋を振り返ると、にこりと笑った。

「では、私は戻ります。また、時を改めてお会いしましょう」

一礼して去る聡達の姿を見送り、悠緋は詰めていた息を漸く大きく吐いた。どくどくと脈打つ鼓動が、まるで自分のものではないように感じる。思わず頬に触れていた。聡達の指先が掠めたそこだけが、奇妙に熱い。

（驚いたわ……）

心中に呟きながらも、悠緋はとうに気付いていた。聡達が己に向ける好意が、単なる友情や条斎士としての仲間意識ではないことである。だが、それが果たして恋情と呼べるか否か、ということになると、悠緋には聡達の気持ちかわからなかった。常に変わらぬ穏

やかな彼の態度からは、真実何を思うかまで読み取ることができない。

（恋だなんて、愚かなことを……）

苦く思う。惣領家に生まれた者が、色恋に現を抜かすなど許されることではなかった。それに加えて、長い確執を抱く二惣領家とあっては、益々論外である。聡達にそれがわからぬ筈もなく、尚更に彼女には聡達という人物がわからない。そして貴族然とした彼の態度に時折掠めるようにして過るもの、それに彼女は気付いていた。例えれば、それまで確かに見えていた筈の物が、気まぐれな炎の揺らぎに、ほんの束の間、まるで見たことのない形を露わにするような。それは悠緋を何故か怯えさせた。

悠緋は頬に触れていた手を、力無くおろす。

（父上、兄上……）

呼びかけた相手は自分のことを少しでも思い出してくれているだろうか。二人と文の遣り取りはしていても、それはどこか他人行儀で尚更に故郷から遠く隔てられた己の立場を感じさせた。時折、たまらなく会いたく思う。だがそれが容易くはかなわぬだろうことを、既に彼女は察していた。

三年という歳月は、彼女を内省的にした。聖蓮院で己の条斎士としての才の貧しさに気付いたせいもあつたらう。条斎士の力の強さは宝珠の色でわかる。修行の中で宝珠に力を込めれば、才ある程にその色彩は変化する。白椽から花葉、そして朱色から紅へと移ろい、力があればやがて深い青へと染まる。最も力ある者の宝珠は黒味を帯びた緑だという。悠緋の宝珠は紅に染まっただけから、その色をかえようとはしなかった。

都の聖蓮院には白沙那帝国全土から特に才ある条斎士ばかりが集められる。悠緋は己の才能が、到底都に留まるだけの域に至らぬことを自覚していた。そして、才能のない自分が都に呼ばれたという、それが表向きの理由とはかけ離れた目的のためであるうことにも気付いている。だが、それがどのような目的であるかは悠緋にもわか

らなかった。

お帰りになりたいのですか？

帰りたい、と思う。だが、帰ることはおそらく許されまい。ふと遠い面影を思い出していた。ほんの一時、数える程しか顔を合わさなかった相手である。言葉を交わしたのはさらに少ない。今ならば、あの時相手に抱いたのが仄かな恋情であつたとわかる。狂おしく、一途に、だがそれはあまりに一方的で、幼く拙いものだった。

三年　あの少年は今十七になるだろうか。すでに霞む面影に、三年の歳月を経た顔を想像することすらできなかった。

（思つても詮方ないこと。きっと私のことなど忘れているわ）  
そのまま目を転じれば、空を彩る朱緋はすでに藍の深さに沈み、さらにそれすら呑み込むように、夜の漆黒が覆い被さっていた。

「御執心ですね。好いておられますの？」

背後から掛けられた声に聡達は振り返らぬまま、足早に回廊を進んだ。言葉すら返そうとしない彼の態度に、娘はなおも言い募る。

「お似合ひではございませんわ。あのお方、惣領家の出自であられるから、お慈悲で聖蓮院にいらっしやるようなものでございませう？　聡達様が聖遣使しゅうけんしであられることも御存知ないなんて」

長い回廊は暗く、夜が迫る頃合ひであれば尚更にその奥行が掴めない。

「聡達様にはもつと相應しい者がいます。あのように糸齋士としてもろくな才覚の無い者をお構いになるなんて……」

「相應しい者とは誰だ。よもや自分のことを言っているのではあるまいな」

漸く答えた聡達の声は、しかし突き放すように冷たかった。娘はひるんだ様子もなく、傲然と顎をあげると言い放った。

「ええ。そうです。私の優秀さは御存知の筈です。来年には聖遣使

を拝命することもかなうだろうと、他の師にも言われましたもの  
「だが愚かだ」

素気なく聡達は言った。蔑みに満ちたそれが、娘はまるで心地良  
いかのように低く笑った。

「相変わらず、冷たいお方ですこと。先程の姫君にそのような態度  
を取ったことなどおありかしら？」

「どうだろうな、と聡達の返事は気のない響きだった。

「先の質問、好いているかと問うたな。私は彼女を好いている。何  
より彼女は愚かではない。己の力を知る者が私は好きだ」

「あら、それだけかしら？」

聡達は娘の言葉には答えず、僅かに口元を笑みに歪めた。夕暮れ  
の泡沫に染まる悠緋の姿を思い出していた。気丈な横顔に浮かんで  
いたのは、おそらく郷愁とでも言うものなのだろう。

悠緋に近付き、なるべく多加羅の情報を引き出せ

そのように命を受けて三年、既に聡達は、多加羅が秘める真実に  
ついて彼女が何も知らぬだろうことをわかっていた。それでもいま  
だに彼女に関わるのは、単純に面白いと思うからだ。逆境にあつて  
も真直ぐに前を見つめる強さを秘めながら、呆れるほどに純粹な悠  
緋という存在は、彼にとつては物珍しくさえもあつた。時にひどく  
傷つけたくも思う。そうせぬのは、惣領家に連なる者としての自覚  
などといったものや、相手への遠慮からではない。

敢えて言うなれば、無防備に咲く花を、己の力で何時でも手折れ  
るとわかりながら敢えて風に揺れるに任せている、というところか。  
悠緋は例えるなら紅の大輪だ。鮮やかでありながら、清らかさを失  
わない。だが、傷一つないその花びらを傷つければ、どれほどの芳  
香が零れ落ちるだろうか。

「何を考えておられますの？」

問う娘に、聡達は薄い笑みを向けた。心底楽しげなそれに、娘は  
目を細める。

「あら、何だか不埒……」



囁く声音には微かに淫靡な響きがある。

「聡達様、先程のお方に沙羅久に暫く戻られることはお伝えになりましたの？ 近々、沙羅久に向かわれるのでしょうか？ 聡達様に会えなくなれば、あの方、恋しくお思いになるのかしら」

聡達は足を止め振り返った。娘に向けられたその顔は暗がり沈み、問う声音に表情はなかった。

「何故、お前がそれを知っている」

「私にも後ろ盾も伝手もございますわ。聡達様がお思いになる以上に貴方のことを知っております。貴方が皇女様の御寵愛を受けておられることも……」

娘の言葉の最後は悲鳴に紛れた。唐突に動いた聡達が娘の胸倉を捕え、壁に押し付けたのだ。聡達の手が娘の細い首を包むように当てられた。

聡達が囁くように言葉をついだ。喉元が押しつぶされるような圧迫がかかる。娘の顔が強張った。彼女の視界には、聡達の掌が纏う力の、その不可視の光が映っていた。撓められた力が、まるで幾重にも巻きつく縄のように首の周りを押し包む。次第に圧力を増すそれに、喘いだ。声を出すどころか呼吸することさえままならない。

「……聡達様！ おやめください！」

必死の思いで声を絞り出すと、息がかかるほど間近に聡達が顔を近づけて来た。暗闇から浮かび上がった聡達の顔は常と変わらなかった。何の感情も窺わせぬ漆黒の瞳が、鏡のように、恐怖に歪む娘の顔を映す。その奥に、ゆらりと炎のように揺れるものを娘は見たように思った。憐みも躊躇いもなく、あるのは無機質なまでに透徹とした殺意、ただそれだけである。

娘は慄然とした。殺される。体の奥底で本能が叫ぶ。伸ばした手が哀願すら込めて聡達の腕に触れる。だが、聡達は絶るようにして伸ばされたそれを冷淡に見やると、囁いた。

「だからお前は愚かだと言うのだ」

さらに強まる言霊の圧力に、娘は空気を求めて大きく口を開いた。

と、唐突に聡達が手を引いた。娘が石床にくずおれる。蹲る姿を睥睨し、聡達は言った。

「この先いらぬ詮索をしようものなら、これぐらいでは済まぬ。命はないと思え」

喘鳴をもらしながら、娘は必死に頷く。体が小波立つように震えていた。それは傍若無人に命を侵食する死への怯えだった。目の前に立つ存在への凍えるような恐怖だった。

「どうか……お許しください。どうか……」

囁くように声を絞り出す。しかし、応えはなかった。涙を浮かべて娘は漸く顔を上げた。その瞳に映ったのは、最早振り返り返ることもなく遠ざかる聡達の姿だった。

第三章 螺状の絆（後書き）

男は杯に手を伸ばした。軽いその感触に、傍らに置いた酒瓶を掴む。だがそれも既に中身はなかった。俄かに酒瓶を振りかぶると壁に投げつけた。鋭い音が響き、瓶は粉々に割れた。その破片を睨みつけ、男は頭を抱えた。込み上げる苛立ちには際限がない。何もかもが、男の思うままにならぬ。酔いさえも、彼の鬱憤を晴らしはしなかった。

男がいるのは安宿の一室である。狭い部屋には装飾と呼べる物はない。ただ寝るためだけの部屋だ。男が座る寝台を見れば、宿主が客に快適さを供することなどおおよそ考えてなどおらぬだろうことがわかる。硬いばかりの寝台は何ともわからぬ汚れが目立ち、長年陽に晒されていらないらしい掛け布の黴臭さが鼻についた。

男は齡四十半ばといったところか、のっぺりとした顔立ちの中で、細い目ばかりが酷薄な光を帯びていた。

頭を抱えたまま、男は眼球だけを上げる。腕に彫り込んだ蛇の尾が眼前にある。蛇、と男が呼ばれる所以であるそれを、血走った目で見ながら彼は低く唸った。

こんな筈ではなかった

幾度となく繰り返した言葉をまたも心中に呟く。

何故、このような事態に陥っているのか、思う程に怒りが募る。はじめは何もかもが上首尾だったのだ。けちのつき始めは、笠盛いせいもりで動いていた手下達おっかないが媮率おっかないいる卸屋連中おろしやに捕えられたことだった。それとて、当初はさほど気に病む程ではなかった。捕えられた者達は皆、今回の依頼の詳細を知らぬ。ただ命じられて動いただけ。万全を期して、蛇自身が直に接触することもなかったため、誰が上にいるかも彼らは知らぬ。報酬さえ受け取ることがかなえば、誰の元で動こうとも気にせぬ輩ばかりを集めたのだ。

彼らを殺しに孤児院に忍び込んだところまではうまくいっていた

のだ。もとより、蛇は捕えられた者達を生かすつもりはなかった。失態を犯した者達に怒りを抱きこそすれ、無意味な慈悲をかけるつもりなどない。彼らがいなくなれば蛇の報酬の取り分が増えるのだから、むしろ都合が良いとさえ思える。

請け負った依頼自体は概ね果たしたと蛇は考えている。緩衝地帯の各地で狼藉を働き、時間をかけて多加羅若衆の悪評を広めた。評議会では、間違いなく緩衝地帯の権利を沙羅久しやくに委ねる決定が出されるだろう。媪が何を言おうとも、評議会の決定を覆すことはできない。阻むためには多加羅若衆の狼藉ではないという確かな証が必要だが、唯一の手掛かりだった捕えた男達も、既に命はない。全てが思惑通りに運んだ筈だった。

誤算は紺こん、あの少女である。孤児院の庭で少女と出くわした時、蛇は心底驚いたものだった。紺は、蛇が商売の道具として己の手元に置いていた少年少女のうちの一入だった。借金の形に紺が蛇の元に来たのは、まだ彼女が五つかそこの頃である。その紺の裏切りを、蛇は決して許すつもりはなかった。來螺を逃げ出した彼女が、まさか笠盛の卸屋達の中に潜んでいたとは。だが、思わぬ遭遇がもたらした愉悦は一時のことだった。

(またも俺から逃げやがった……)

紺は蛇の正体を知っている。彼女が卸屋のもとへ戻れば、孤児院に忍び込んだのが蛇であることがばれるだろう。緩衝地帯での一連の出来事が蛇の仕業であると知られればどうなるか。そうなる前に、何としても紺を捜し出し、その口を封じねばならなかった。依頼主に不首尾が知られる前に、迅速になさねばならぬ。だが、いまだに紺の行方はわからぬ。

その時、扉が叩かれた。最初は一回、その後に素早く三回、そして暫く間を置いてゆっくりと二回。それを確認し、蛇はうつそりと立ち上がると扉へと歩み寄り鍵を開けた。扉を開けて入って来た手下の男に蛇は不機嫌に問うた。

「何か掴めたか？」

だが男は答えなかった。その顔が僅かに引き攣っている。どうしたのだ、と問おうとして、蛇ははっとする。動こうとした蛇の機先を制して、低い声が響いた。

「動くな。ここで騒動を起こすつもりはない」

死角となっていた扉の影からである。手下の体を押しやり、一人の男が部屋に無造作に踏み入ると、背後で扉を閉めた。一連の動作はまるで流れるようにさりげなく、隙がない。手下はいまだに体を強張らせている。見れば、その背に鋭い短剣があてがわれていた。正確に急所の一点を狙っている。

蛇は目を眇めて相手を見やった。男は頭から足首まで、全身を覆う黒い外套を纏っていた。顔の下半分も布で隠し、唯一覗いている目元も影となつてしかとは掴めぬ。わかることといえば長身であることと、声の調子からおそらく三十は越しているであろう、ということだけである。

「何者だ、てめえ」

蛇はじりじりとさがりながら問うた。得物の極細の剣は身につけていない。己の迂闊さが腹立たしい。

蛇の予想に反して、対する相手は小さく笑つたようだった。

「さて、敵か味方が、それを決めるのは私ではない。お前達だ」

擲諭するように言うと、捕えていた手下の背を軽く押した。それだけの動きで、手下は部屋の片隅に不様によるける。黒衣の男は短剣を素早く仕舞った。その動きを目で追いながら、蛇は油断なく問う。

「どういうことだ」

「そう警戒するな……とは言っても無理な話だろうが、私は依頼主から新たに遣わされた者だ」

「ああ？」

「どうやらお前達は相当な不首尾をしでかしたようだな。私はいわばその尻拭いに雇われた。始末屋、と言えばわかるか」

「ふざけんなよ。そんなことが信じられるか」

「信じる、信じないは勝手だが……お前達がへまをしたのは事実だ。依頼主はいたく不快に感じている」

蛇は内心の驚きをつとめて出さぬようにしながら、目まぐるしく考える。まさか一連の手落ちを依頼主に気付かれていたのか

「お前が依頼主から遣わされたと信じる根拠がどこにある」

「何度も言わせるな。信じるかどうかはお前の勝手だ。だが、これは知っておいた方がいい。依頼主はお前達を生かしておくべきかどうか迷っている。なればこそ私をこちらに送ったのだ。これまでの失態を償うだけの働きをすれば、無事報酬を手にすることが出来る。だが、もしもこれ以上の失態を重ねれば、命はない。私がお前達を殺す。失敗した者には死を……確かこれはお前達の信条でもあったな」

相手の涼しい声音に蛇は低く唸った。殺意すら帯びた怒りを抑え込む。どうやら、依頼主は想像以上にぬかりのない相手だったらしい。どこからか蛇の動きを監視していたということか。

「依頼は失敗していない。全て果たした」

「では、この笠盛の在り様は何だ。そこら中に卸屋どもの目が光っているぞ。どうやら奴らには緩衝地帯で起こった一連の出来事が多加羅若衆の仕業ではないとばれたようだな」

「だからどうした。それとて確かな証拠はないさ」

言い募った蛇だったが、始末屋から返ってきたのは冷たい嘲笑だった。

「笠盛で動いていた男達が卸屋に捕まったらしいな。それが失態でないとしても言うつもりか」

「あいつらはこの依頼の狙いも、雇い主のことも知らねえ。無論、俺のこともな。捕えたところで何もわかりやしねえよ。それに、片はつけた。もう生きてもいねえ」

「孤児院から少女を連れ出したのは愚かだった」

これには蛇も言葉に詰まる。苛立たしく相手を睨みつけた。何故そのことまでも知られているのか、と内心で毒づいた。全身に影を

纏つかのような相手に丸腰で顔を晒している自分が、ひどく間が抜けて思えた。そのように感じさせる相手に対して、尚更に怒りが募る。

「そいつは……今捜しているところだ。卸屋どものところに戻る前に口を封じるさ」

「信じられんな」

始末屋は蛇の言い分を切って捨てた。

「それだけの失態を演じながら依頼を無事こなしたとは、どうやら依頼主の懸念も尤もだったようだな」

「……俺達を始末するか？」

「いいや、己の失態は己で取り返せばいい。挽回する機会をやるつ。これから先は、お前達は私の手足となつて動け」

蛇はぎりぎり奥歯を噛み締めた。漸く絞り出した声は苦々しかった。

「わかった」

「いいだろう。今はどのように動いている」

「紺と、あいつを連れて逃げた野郎を捜している。紺は俺達が誰かを知っているからな」

「その少女のことは放っておけ。時間の無駄だ」

「卸屋どもに接触されたら、今回の騒ぎが俺達の仕業であることがばれるだろうが」

「ふん、頭が足りないのかと思っていたが、やはりそのようだ。少しはまともな思考をしろ」

あからさまな愚弄に、蛇の顔が引きつった。

「媼は油断がならぬ。仮にも卸屋の頂点に立つ者を見縊るものではないぞ。今回の一件が耶來やらいの仕業であることに気付かぬと思うか？

既に気付いているだろうよ」

「だが……そうだとしても、証拠はねえ！」

「ああ、だが媼とて黙って見過ごしにはしてくれんだろうよ。緩衝地帯全体の命運の分け目ともならば、手段を選ばぬだろう。評議會



までまだ間がある。どのような手を打ってくるか知れたものではない。ここらで守るばかりではなく攻めに転じてみるべきだろうな」「どういうことだ?」

「媪のもとに一人の若者が捕われていることを知っているか?」

予想外の言葉に蛇は黙り込む。そういえば、と思い出していた。捕われた手下達を始末しに孤児院に忍び込んだ時、対した若者がいた。

「ああ……そういえば、一人閉じ込められている奴がいたな。それがどうした」

「今若者は媪の屋敷の地下に捕われている。そいつを卸屋どもから奪え」

「はあ? 何だってそんなことを」

「わからんか? 今回の騒ぎ、手下どもを始末したことで片がついたと考えているようだが、そう甘くはない」

「何故だ。あいつらが卸屋にとつちや唯一の手掛かりだった。そいつがなくなつて、何を言い張ったところで、せいぜいてめえで作り上げたでつちあげだと思われただけだ。卸屋は己の利のためならば、どんなことでもやるからな」

「まあ、聞け。その若者はお前達の手下が捕えられた騒動に巻き込まれ、卸屋に捕われた。つまりは一連の騒動を知る生き証人ということだ。それも、卸屋でも耶來でもない、唯一の外部の目撃者だ。」

お前の手下が緩衝地帯で動き、卸屋に捕われたこと、そしてお前達が手下を始末したこと、その全てを知っている。幸い、卸屋どもは彼の貴重さにはいまだ気付いていないようだがな」

蛇は顔を顰めた。始末屋が意図しているのか否かはわからぬが、話の核心がなかなか見えない。苛立ちに、声音は険しくなるばかりである。

「だから、それが何だって言うんだよ。たかが若造の目撃者が一人いて、そいつの証言など誰が信じる。それこそ卸屋どもがその若造に金を掴ませたんだろうつておちになるだけさ」

「それが単なる若造ではなく、多加羅若衆の副頭ならばどうだ」

始末屋の言葉を内心でなぞり、蛇は驚きに目を見開いた。

「あいつが……多加羅若衆の副頭だと……？ 何故そんな奴が……」

「おそらく、多加羅若衆でも今回の騒ぎの背景を探っていたのだろう。だが、卸屋どもはまだそのことには気付いていない。どうやらお前達と敵対する勢力か何かだと考えているようだ。だが、我らには好機だ。多加羅若衆であると気付かれる前に若者を奴らから奪う」  
「奪ってどうするってんだ」

「殺すのさ」

簡潔に始末屋は言った。あつさりとした響きに迷いはなかった。

人の命を奪うことについぞ躊躇いを感じたことのない蛇でさえ、それにどこか薄ら寒い思いを抱く。無論、若者に同情したわけではない。始末屋が蛇達を文字通り始末すると決めた場合にも、同じように淡々と、冷徹に決断を下すだろつことを察したからである。

「何故だ」

「媼は評議会の動きを何としても止めようとするだろう。今のところ多加羅若衆の狼藉という噂が真実ではないという決め手を掴んではいないようだが、邪魔をされる前に、こちらが先に媼を潰す」

始末屋は淀みなく続けた。

「多加羅若衆では、行方のわからぬ仲間を今捜している。つまりは、媼に捕われた若者だ。そいつが殺されて発見されればどうなる。しかも、媼の一味によって殺されたのだという確かな証拠までもがあったとすれば」

漸く蛇にも男の思惑がおぼろげながらわかった。

「つまり奴らは貴重な生き証人をなくすだけじゃなく、若衆殺しの罪までもを負うってわけか」

「ああ、そうだ。我らには一石二鳥、というわけさ。多加羅が緩衝地帯に手出し出来ぬとはいっても、若衆が理不尽に殺されたとあらば黙ってはおらぬ。媼の地位も失墜するだろう。評議会も彼女の意見には耳を貸さなくなる」

「なるほど……だが、媼の屋敷は守りが固い。簡単にはいかねえぞ」  
「何とかするんだな」

素気なく始末屋は言った。

「すぐに動け。また、首尾を聞きにくる」

「おい、待てよ。お前は何もしねえのか」

「言つたらう、私はお前達の敵にも味方にもなり得る。お前が無事依頼を果たすことがかなうか、それを見極めるためにいるのだ。お前は自分のやるべきことを果たせ」

言い置いて、入って来た時と同様に男は静かに扉の外へと姿を消した。

部屋に取り残されて、蛇は暫し立ち尽くしていた。

「なあ、どうするんだ……？」

おずおずと掛けられた声に視線を振り向けると、手下が蛇を窺っていた。部屋にもう一人いたことを失念していた蛇だったが、男のどこか間の抜けた顔に不意に怒りがわく。

「この馬鹿野郎が！ てめえがさっきの野郎にこの場所を教えたんだらうが！」

「教えたわけじゃねえよ。部屋の前でいきなり短剣を突きつけやがったんだ」

「くそつ！ 何が始末屋だ！」

苛々と、蛇は歩きまわった。その様子を手下は不安そうに見やる。「何見てやがる！ てめえも聞いていただらうが、媼の屋敷に忍び込む算段をするから手下ども集めて来い！」

「わかった。ああ、そうだ。俺も知らせたいことがあったんだよ。」

さっき情報通の卸屋に接触したんだが」

「笠盛の卸屋どもと関わりのない奴に接触したんだらうな」

「ああ、それは大丈夫だ。それで、紺の情報を聞いたんだ」

「紺の行方を掴んだのか！？」

蛇は足を止め問い質す。始末屋には追うなと言われたが、蛇は紺をこのまま見過ごしにする気はさらさらなかった。彼の元から逃げ

た存在を、生かしておくつもりはない。もとより紺に対する制裁はこの依頼とは関係がない、彼自身の問題だ。始末屋の言に従ういわれなどない。

手下はおどおどとした様子で言葉を継いだ。

「あ……いや、紺の情報はなかった。だが、別の情報があった。どうやら、鬼逆が俺達の動きに気付いたらしい。それで、手下どもを笠盛に送り込んでいるとか」

蛇は一拍黙り込み、痛烈な舌打ちをした。

重い沈黙が落ちた。耶來は外部から持ち込まれた様々な依頼を請け負う。だが、帝国内で動くのだけは御法度だった。白沙那帝国は国境地帯への勢力拡大を虎視眈々と狙っている。耶來が帝国内で暴虐を働いたことが明らかとなれば、それを口実に武力による制圧に乗り出さぬとも限らぬ。それを恐れてのことだった。もつとも、その禁を破り帝国内で動いた者は少なからずいるが、明らかとなれば耶來の内部で手酷い制裁を受けることになりかねない。なればこそ、蛇達も極秘で動いていたのだ。

現在耶來を実質的に動かしているのは鬼逆である。その彼が蛇の動きに気付けば、見過ごしにすることはないだろう。

「……鬼逆の野郎が笠盛に来てるってのか」

「それはわからない。ただ……少し奇妙な話を聞いた」

「何だ」

催促するも、男は僅かに言い淀むようだった。

「……とにかく、奇妙な話さ。今この笠盛に鬼逆の弟という人物がいるらしい」

蛇の顔が驚きに染まった。

「あの野郎に弟がいたのか？ 聞いたこともねえぞ」

「ああ、だから奇妙だと言っている。何でも母親は違うが、父親は同じらしい」

「がせじゃないのか？」

「何度も卸屋に問い質したが、本当だと言いつつ……畜生、特別

な情報だとかで散々情報料をせしめやがった。独自に調べて掴んだ情報だとかぬかしやがって」

「本当なら、何故今まで噂の一つも上がらなかつたんだ？」

「知らねえよ。ただその弟ってのは來螺に住んでいるわけじゃないみたいだな。帝国内のどこか、鬼逆とは離れて暮らしているらしい。今回鬼逆が俺達を追うために緩衝地帯に詳しい弟の力を借りようとしているんじゃないかって話だ」

蛇は男の言葉が意味することを考える。

耶來で近年頭角をあらわしてきた鬼逆は、蛇にとっては気に食わない、殆ど憎悪していると言つてもいい程の相手である。蛇よりも若年でありながら多くの者を従え、今では彼を齒牙にもかけぬ。裏側でそれなりの勢力を誇つていた蛇の力が翳り出したのも、鬼逆という存在のせいだと彼は考えていた。

今回、緩衝地帯での依頼を受けたのも、鬼逆の力に対抗する地盤を作るために資金を得たいと考えたが故だった。危険の多い依頼ではあるが、その報酬はかなりのものである。金さえあれば、と蛇は思う。そもそも鬼逆が耶來でのし上がったのはその資金力故だ、というのが蛇の見方である。姑息に金を稼ぎ、気付けば盤石な体制を整え誰も逆らえぬ有様だ。蛇にとっては我慢がならぬ。

その鬼逆に弟とは 数年前までは鬼逆の育ての親という人物がいたが、その男も既に死んでいる。肉親と呼べる者がいたとは、全くの初耳だった。

(だが、こいつはおもしれえ)

蛇の顔が、笑みに歪んだ。

「弟、か。そいつが笠盛にいらんだな？」

「そうらしいな」

「そいつを捜せ」

「何だつて？」

訝しげに問い返した男に、蛇は益々唇を吊り上げた。

「聞こえねえのか。そいつを捜すんだよ。こりゃあ依頼の報酬どこ

るじゃねえ。耶來の玉座を鬼逆から奪う好機かもしれねえぞ」

蛇の笑いにつられたように、男もまた笑みを浮かべた。

「なるほどな。で、そいつを見つげ出してどうするつもりだ。殺すのか？」

「お前は馬鹿か。そんなことをしたら意味がねえだろ。生かして利用するのさ。そいつは鬼逆の弱みだ。これ以上鬼逆に大きな顔はさせねえ。媪の屋敷から若衆を奪うのとは別に、そつちにも人を回せ」

「ああ、わかった」

「ところでその弟ってのはどんな奴だ。名前はわかっているのか」「いいや、わからねえ。それ以上のことは卸屋が頑として言わなかった。もつと知りたければさらに金を出せとさ」

「俺がその卸屋に会いに行く。金などいくらでも出してやるさ。鬼逆の弟とやらを捜そうにも手掛かりがなきゃ話にならねえ」

「相手が言っている額はでかい。はした金じゃねえんだぞ」

「見つけ出すことがかなえば、そいつの命を盾に鬼逆から金をせしめることが出来るかもしれん。それこそ、鬼逆を追い落として來螺の裏側を俺達が仕切ることになるかもしれん。そうなれば、卸屋にくれてやる金などはした金程度に思えるようになるさ」

「そうか、それもそうだな」

齒をむき出して男は頷いた。

蛇は再び部屋を歩き回りながら、狡猾に思いを巡らせる。先程までの鬱屈と怒りが嘘のように、蛇は自然と込み上げる愉悦にくつくと笑い声をあげた。

始末屋の存在は気に食わぬ。全くもって気に食わぬ。だが、打つ手なく思われた状況も、うまくすれば切り抜けることが出来そうだし、そして何よりも思わぬ情報。鬼逆の弟、というそれである。存在すら秘されていたということは、それだけ鬼逆が弟を大事に思っているからではないのか。鬼逆の弱点を突こうとする者達から守るためだったのではないか、蛇はそう思う。それが今同じ街にいるのだという。思わぬ大きな獲物が、突然目の前に放り出されたような

ものだった。

「どうやらつきがまわってきたようだ。蛇はそう信じて疑わなかった。」

二つの人影が、道を急いでいた。宇麗つれいと黄おうである。夜も更ける頃合いに、手元を照らす硝子筒が一つきり、見通しのきかぬ路地にはひたひたと足音ばかりが響いていた。

二人は夜を徹して笠盛と街道筋を見張る部下達を見回り、媪の屋敷へと戻る途中である。孤兒院に何者かが侵入してから既に数日、片時も監視を緩めてはいなかったが、襲撃者の行方はいまだに掴めていなかった。

一日がまたも不首尾に終わり、宇麗も黄も口数が少ない。そもそも襲撃者の容貌とて定かではなく、見つけ出そうということ自体に無理があることは彼女達とてわかっている。唯一辿る伝手といえ、襲撃者が紺を連れ去ったのではないか、ということだけだった。紺を連れ去った者がいないか目を光らせる、宇麗も散々部下達には言っている。無論、それとて紺がまだに殺されずにいれば、ということではあった。そして紺が生きていることが望み薄であることもまた、否定しがたい現実である。

宇麗にとって状況はあまりに厳しく、先行きはこの夜の道さながらに暗澹としていた。

「宇麗、待て」

宇麗は背後からかけられた黄の声に振り返った。

「どうした」

問いかけに黄は答えなかった。振り返った宇麗の背後を凝視しながら僅かに身構える。宇麗も黄が見やる先に目をやった。注意深く目を凝らすと、前方の闇に紛れるようにして、黒く縁取られた気配があった。手元の硝子筒の明かりのせいで、前方の暗がりには粘度さえ感じさせて尚更に深い。そのため佇む姿に気付かなかつたらしい。

その人影は、まるで二人を待ち構えていたかのようだった。  
「誰だ」

問い質し、黄が宇麗をその背に庇うように進み出た。宇麗もまた硝子筒を道に置くと、腰の剣に手をやる。

足音すらたてずに、その人影は二人に向かって進み出た。だが、硝子筒が作る円形の光の淵までは来ず、やはり姿は輪郭までしかわからぬ。

「伝えておくことがある」

ひそりと人影が言った。低い、くぐもった男の声だった。警戒もあらわな二人に対して、淡々と言葉を継いだ。

「緩衝地帯での一連の出来事を起こしたのは、蛇、と呼ばれる男だ。左腕に蛇のような刺青がある」

宇麗は目を見開いた。黄もまた驚いたのか、その背が強張っている。

「奴が主導して緩衝地帯の各地で狼藉を起こし、それと同時に街で多加羅若衆の噂をまいた」

「目的は何だ」

ひそりと宇麗は問う。

「既にわかっているだろう」

宇麗は黄の前に出ると、眼差しをひたりと前方の闇に据えた。

「蛇は耶來の者か？」

「そうだ。お前達が捕えた男達を殺したのも奴だ。その際、一人の少女を連れ去っただろう」

宇麗は息を呑んだ。鼓動が跳ねる。

「紺は蛇に連れ去られたのか。まだ生きているんだろうな？」

「そのようだ」

内心の思いを些かも悟られることのないよう、宇麗はつとめて平静な声を出した。

「では、蛇に一連の陰謀を実行させた者は誰だ」

「それについては答えぬ」



宇麗は忌々しく相手を睨みつけた。その様子に頓着するでもなく、闇に沈む男は言った。

「それからもう一つ、お前達が捕えている若者、彼が何者かわかっているのか？」

咄嗟に答えられぬ宇麗に、相手は知らぬようだな、と呟くように言った。

「彼は名前を須樹すきという。多加羅若衆の副頭だ」

今度こそ、宇麗は驚きに言葉を失った。黙り込んだ宇麗にかわり、黄が鋭く問うた。

「何故、我々にそのようなことを伝える。お前は何者だ」

「蛇の所業を好ましく思わぬ者は何もお前達だけではない、ということだ。だが、このままでは蛇の思惑通りにことが進みかねん」

「あたし達に蛇とやらの動きを阻め、と言うのかい？ 自分自身でやらぬのは、出来ぬ理由があるのか？」

「そうとってもらって構わぬ。情報は渡した。あとは自分達で何とかしろ」

ずっと男の気配が薄らいだ。咄嗟に宇麗は駆け寄ると手を伸ばした。だが、その指先は宙を掠めただけだった。足音の一つすら残さずに、忽然と相手の姿は消えていた。消える筈がない 混乱しながらも宇麗は思う。おそらく手近な路地にでも身を潜めたのだろう。だが、追うことは無意味だろう。宇麗にせよ黄にせよ、体術には少なからずの自信がある。その二人に、あれだけ間近にいながら相手は付け入る隙を見せなかつたのだ。侮れぬ相手である。

「おい、宇麗どういふことだ」

「わからん」

男が消えた闇を睨みつけながら宇麗は答えた。一体何者なのか  
そして、知らされたことは真実なのか。

だが、と宇麗は得心する思いもあつた。駁はくと宇麗が呼ぶ青年

聞いたことが真実ならば須樹という名だという、彼である。名前すら明かさず、笠盛で何をしていたかも言おうとせぬ、その態度はあ

まりに不審である。しかし宇麗には彼が一本筋の通った誠実な人柄なのではないかと思えていた。だからこそ、陰惨で不穏な一連の出来事に青年がどのように関わっているのか、宇麗には不可解だったのだ。

青年が多加羅若衆であれば、物事は全く違う様相を呈する。何故、彼が何も言おうとせぬのか、それとて明白ではないか。

宇麗は黄を振り返った。

「とにかく急ぎ戻ろう。今の情報が本当かどうか、確かめる必要がある」

黄は頷いた。

笠盛の夜の底、混迷を深める事象の、それはほんの始まりに過ぎなかった。

設啓せつけいが若衆を一堂に集めたのは、緩衝地帯に入ってから既に十日程が経った日だった。ねぐらにしている小さな家の居間に顔を揃えた若衆は、皆一様に疲れた表情をしていた。毎日足を棒のようにして歩きまわり情報を集めているが、今のところ若衆を貶めようとする者の気配とて掴めてはいなかった。全く意味の無い事をしているのではないか、そう思い始めている者がいることに設啓は気付いている。

設啓はおもむろに言った。

「今日まで御苦労だった。毎日よく調べてくれた。もう暫く俺と灰様で笠盛を調べてみるが、皆には明日、多加羅たからに戻ってもらおうと思っている」

驚きの表情を浮かべた若衆の面々を設啓は見回した。

「皆とともに俺も一度多加羅に報告のために戻る。出発は明日の早朝だ。すぐに出られるよう、準備しておいてくれ」

ほっと安堵するかのような雰囲気が若者達の間には漂った。だが、中には不服の表情を浮かべた者もいる。そのうちの一人が問うた。

「何故ですか？ まだ何も掴めていません」

「これ以上調べても何もわからぬだろうと判断したためだ」

「灰様は……この場にはおられません、灰様もそのようにお考えなのですか？」

「二人で話し合った結果だ。皆には大事な鍛練がある。何時までも時間を浪費してはもらえぬ」

「それは副頭とて同じではありませんか。灰様とお二人残られるならば、俺も残ってもう少し調べてみます。灰様がこの場におられないということは、今も動いておられるからではないのですか？」

勢い込んで言い募る言葉に、頷く数人の姿があった。それに設啓は意外の念を覚えた。皆が緩衝地帯での調査に辟易としているので

はないかと彼は考えていたのだ。

「いい加減にしろよ。副頭が判断したんだから、多加羅に戻るべきだ。だいたい、多加羅若衆を貶めようとする者などいなかっただよ」

押し殺した声は別の若者だった。疲労感すら滲ませてのそれに、同調する声がちらほらとあがる。それまで不平の一つも洩らさずに動いていた若者達だったが、その実何ら成果の出ない調査に、内心では苛立ちが募っていたのだろう。副頭の耳目のないところではひとしきり愚痴の言い合いでもしていたのかもしれない。

「灰様だつて自分の考えが間違つていたから気詰まりでこの場にいらないだけじゃないのか？ だいたいあの少女は何なんだよ。あの紺とかいう。何時の間にか連れ込んで」

「おい、その言い方はないだろう。灰様は放つておけなかつただけだ」

「どうだかな。渡りの商人とはぐれた身寄りのない娘などと、お前は本当に信じてんのかよ。灰様はもともと何を考えているかわからん。だいたい灰様は來螺らいらの生まれだぞ。俺達とは違うんだ。俺達に無駄に調べさせて、自分では何をしていたんだか……」

「何だと！」

怒鳴つて詰め寄ろうとした若者を、設啓は押しとどめた。

「いい加減にしろ」

静かな声音だったが、抑え込まれた怒りの響きに若者達はぴたりと押し黙る。

「とにかく、お前達の任務は終わったんだ。異論は許さん。無駄に言い争う暇があるなら、明日帰る準備をしておくんだな」

「俺は納得がいきません」

「お前はもともと灰様鼻屑はなぢだからな。灰様の意見が間違つていると認めたくないだけだろ。これだけ調べて何も出ないんだから、俺達は全く無意味なことをしてたつてことだろうが」

「そうだよなあ。俺達は灰様の戯言につきあわされただけだつてこ

とだ」

灰に対する批判の声が上がる。それを設啓は無表情に見やった。若者達の言葉は彼にも予想通りのものだった。若者達に多加羅へと戻るよう告げると決めた時、他ならぬ設啓が灰に指摘したことだった。当然出るだろう批判をどうするのか、と。灰は表情一つ変えずに答えた。そのようなこと構わない、それよりも若衆を早く緩衝地帯から遠ざけるべきだ、と。

「笠盛じゅんせきに入ってからお前達は何をしたってんだ！」

声を張り上げたのは、設啓に押さえられた若者だった。

「ただ漫然と過ごしてただけだろう。それも安全な場所ばかりうるついで、本当に危険な場所に行きもせず、ただ無為に歩きまわっていただけだ。それが調べたと言えるのかよ！」

「分担の区域をちゃんと調べたさ。区域外まで行けとは言われていない」

「何故危険な区域が担当の中になかったかわからないのか？ そういう場所は全て灰様が深夜に回られていたんだよ！ お前が寝こけている間にな！ お前らみんな、そんなことにも気付かなかったのかよ！ いい気になって批判出来る立場か？」

若者達がしんと押し黙った。指摘されたことに気付いていた者達もいたのか、気まずげに数人が俯いた。

「とにかく俺は灰様自身の口から話を聞くまで、多加羅に帰る気にはなれません。副頭、灰様と話をさせてください」

迫られた設啓は淡々と答えた。

「灰様は今はおられない。それに先程言っただろう。これは俺達で話し合った結果だ」

「副頭、俺は灰様がどのようなお方か、少しはわかっているつもりです。あの方は普段滅多に御自分の思いを口にされることはないが、何か事が起これば誰よりも真先に動かれる。それも自分の身を危険に晒して、周りを守るお方だ」

設啓はまじまじと若者を見やった。灰と若者達の間には常に一線

がある。それは須樹すきや仁識にしき、冶都やとといった、灰とごく親しい者達との間にも時折感じられるものだった。設啓から見れば、灰は若衆の中に溶け込むことはなく、若者達もどこかを敬遠していた。設啓としてそれは同様である。彼が灰の人となりを多少なりとも知ったのは、ここ数日間近に接したが故である。

だが、目の前で必死の形相を浮かべる青年の言葉には、真実灰への信頼と気遣いが籠っていた。

「本当に灰様は緩衝地帯を調べるのは無意味だと思われたのですか？ 本当は何かを……それも尋常ではないことを掴まれたんじゃないんですか？ そして我らの身を案じて、危険から遠ざけるために多加羅へと帰れと言っているのではないですか？」

「副頭、俺も残ります。少なくとも、何をもってこれ以上の調査には意味がないと判断されたのか、それを灰様の口から聞かなければ納得がいきません」

それまで押し黙っていた一人が言った。同様の言葉が二つ、三つと上がり、それ以外の者は気まずそうに俯き、あるいは理解できぬとでも言いたげに顔を顰めている。対照的なその有様を、設啓は興味深く見やった。これは彼にとって予想外の展開である。おそらく灰にとつてもだろう。彼が若者達の反応にどのような顔をするか、とふと思った。

設啓は一つ頷いた。

「わかった。納得出来ない者は残るといい。それ以外の者は明日多加羅へと戻ることとする。気詰まりに思う必要はない。これは副頭からの命令だからな」

設啓は若者達を階下に残し、二階へ向かった。部屋に入ろうとして、背後の物音に振り返る。思わず出かけた溜息を呑み込んだのは、相手を気遣ったわけではなかった。己の感情をあらわにすることに對する抵抗故である。

案の定、斜め向かいの扉が細く開き、その隙間から少女が彼を見つめていた。

「何だ」

「お話し合いは終わった？」

「ああ。用がない時は部屋から出て来るなど言っただろう」

「用があるんだもの」

拗ねたような口調で言った相手は、設啓の懨然とした表情を気にした様子もなく廊下へと踏み出してきた。

設啓は紺と名乗るこの少女がどこことなく苦手だった。若者達が胡散臭く思つのも無理はないと思う。それなりに様々な人間を見て来たという自負がある設啓だったが、少女は掴み難く、対すれば落ち着かない気分させられる。異性に対する気兼ねというものはまた別である。少女は明るく無邪気に見える。だが、時折掠めるようにして垣間見えるもの。それは見る者に不安を引き起こす虚ろな翳りだった。

「ねえ、灰はまだ帰って来ないの？」

「ああ」

「いつ帰って来るの？」

「知らん」

少女は幼く頬を膨らませた。愛想なし、と呟くと小さく溜息をつく。気落ちした様子で俯くのに、これでは自分が苛めたようではないか、と設啓は益々居心地が悪い。そもそも、灰がどのような経緯で紺と出会い連れ帰って来たのか、紺という少女が何者なのか、それさえ設啓は詳しくは知らされていない。紺自身も詳細を語ることはしなかった。

極秘の行動をとる若衆の中に、どのような事情があるにせよ部外者を連れ込むなど言語道断と言えたが、紺は彼らに必要以上に干渉しようとはせず、彼らが何者かも気にしていない様子だった。ただ一人灰に対してだけ、紺は全幅の信頼を寄せ、それ以外の者に対しては関心すら抱いていないように見える。

そして肝心の灰はと言えば、少女を連れ帰った次の日から、何かとあけることが多く、今も一人別行動をとっている。少女のために部屋を譲り、今は設啓と同じ部屋で寝起きしているが、そこにも殆ど戻らない。一度ならず何をしているのか聞いたものの、いまだに明確な答えはなかった。それどころか、設啓に頼んでいた宇麗<sup>うれい</sup>への伝手さえも、もう必要ない、という一言で白紙にしていた。先程若者が灰の真意を問うたが、最も知りたいと思っっているのは設啓である。

「まあ、いいや。灰が帰って来たら知らせてね」

「何で俺が……」

「じゃあ、別の人をお願いするから。それでもいいの？」

つけつけと言った紺を設啓は睨みつけた。

「わかった、知らせる。だから必要以上に部屋から外へは出るな」

「わかってるわよ」

つんと顎をあげた紺はそう言うと、部屋の中へと姿を消した。

設啓は一つ肩を竦めると己の部屋へと入った。つまるところ、考えてわからぬことを悩むことほど無意味なことはない。紺のことは連れて来た本人である灰が責任を負えばよい、そういうことだ。

(だが、そろそろ本心を聞きたいところだな)

苛立ち紛れに思う。灰は何時戻るのかも定かではない。いい加減、何も知らされずにいるのはうんざりしていた。振り回されていると思う。気付けば何時の間にか灰が意図する流れに　それがどのような流れなのかわからぬから、尚更に腹立たしいのだが　巻き込まれている。設啓にとってはこの上なく不本意なことだった。

紺は小さな部屋の寝台に膝を抱え込んで座った。

殺風景な何もない部屋だった。一人閉じ籠っているといらぬことばかり考えて憂鬱になる。この街にはまだあの男がいるに違いない。蛇に掴まれた、その腕の感触が生々しく蘇る。思わずぎゅっと目を



瞑り、紺はゆつくりと息を吐き出した。

大丈夫、この場所のことはばれてない……大丈夫

言い聞かせる程に、粟立つような恐怖が遠ざかっていった。それでも身内に湧き起こった不安は容易に消えてはくれない。

(灰がここに来てくれればいいのに……)

心細くそう思う。灰の静かな声を聞けば、少しは安心出来るのではないかと思う。

灰に連れられてこの家に来てから既に数日が経っていた。若者達が十人も一つ家に寝泊まりして何をしているのか、はじめこそ疑問に思ったが、紺は何も問おうとはしなかった。紺自身が己のことを知られたくなかったせいもあるが、彼らが総じて危険な部類の者達ではないとわかったからである。それに加えて、どうやら自分を匿うことで、灰の立場を 彼が若者達の中でどのような立場なのか、それは定かではないが 悪くしているらしいと悟ったが故だった。例え彼らが何者であろうとも、灰さえいれば大丈夫なのだと思はれる。何故、灰という人物をこれ程まで信頼しているのか、紺自身にもわからなかったが。

不思議な人だ、と紺は灰のことを思う。紺が嘗て來螺の裏側にいたことを知った者が、彼女にどのように対するかは概ね決まっていた。ある者は露骨に嫌悪を、ある者は同情を示す。怯えて近付こうとせぬ者も少なくない。あるいはわかつた顔で慰めの言葉をかける者もいたが、紺にとってそれは遠まわしな拒絶でしかなかった。宇麗でさえ、はじめは紺を腫れ物に触るようにして扱ったのだ。

だが、灰の態度はそのどれとも違った。拍子抜けするほどあっさりとして紺の過去を認め、怯えるでも嫌悪するでもなかった。耶來に追われていることを知りながらも恐怖の一つも見せぬのは、単に耶來の恐ろしさを知らぬのか、それとも肝が座っているのか、紺にも測りかねる。

紺は掛け布のうねりを何度も手で撫でながら、ぼんやりと視線を彷徨させた。今頃、孤児院では夕飯の準備が行われているだろう。

食事が始まれば、小さな子供達のお喋りで、食堂は蜂の巣をつついたような賑やかさに包まれる。ほんの数日前までの紺の日常だが、それはいまや遠い夢の光景に思えた。あの温かい空間に己の居場所など所詮無かったのだ。もう二度と、戻ることなど出来はしない。

あんなことをしてまで來螺から逃げ出したってえのに、哀れな奴だよなあ

蛇の言葉を思い出す。蛇の言う通りだ、と紺は思う。

蛇のもとで過ごした歲月　周りには紺のような境遇の少年少女が多くいた。何れも蛇の商売の道具として使われ、この年になるまで生き延びた者は半数にも満たない。十年近い時を、恐怖と忍従と、身を切るような苦しみの中で耐え、逃げ出したのは十四の時だった。無我夢中で逃げて、気付けば笠盛に辿り着いていた。倒れているところを宇麗に拾われ、孤児院に迎え入れられて新たな人生を掴んだのだと思っていた。

だが、それは間違いだったのだ。

例え今灰が匿ってくれていても、何時まで続くかはわからぬ。結局、己は來螺を逃げ出した時から何も変わってはいないのだ。逃げて、逃げて、逃げ続けて　そして、例え蛇に見つかることはなくとも、一生恐怖と絶望を引きずっていくのだ。それは左腕に刻まれた印と同じで、決して消えはしない。

紺はふと顔を上げた。微かな眩しさが、過ったような気がした。だが、光など見えよう筈もない。壁には横に細長い窓が設えられているが、小さな家々が犇めく界限である。素気ない家壁が連なっていた。まるで逃げ場のない己の境遇そのものだ、と紺は考える。息詰まるその圧迫に、じわじわと侵食されるような気持ちに捕われる。ふと、紺は目を細めた。一点にまるで吸い寄せられるように目が惹きつけられる。じっと見つめると、褪せた壁の色彩の中で、そこだけが鮮やかに澄んだ青だった。それが空の色であることに、紺は暫くして気付いた。靠れ合うようにして並び建つ家々の真中に、ま

るで奇跡のように空へと一つの空間が開けていた。

遙かな紺碧

「綺麗……」

ぼつりと呟く。胸が締め付けられるような感覚がわき起こる。つん、と鼻の奥が痛くなつた。紺は慌てて目を瞬いた。

「変なの……なんで泣きたくなるんだろ……」

息詰まる程の憧憬　神の御業などというものがこの世に本当に在るならば、これこそがそうかも知れぬ。神の御手でなければ、奇跡のように、空の欠片をこの場所まで届けることなど出来ぬに違いない。見つめ続けていなければ、空へと続くその細い道が閉ざされるのではないかと、紺は半ば恐れを抱きながら目を凝らした。

空は、手が届きそうな程近くにも見えた。だが、手を伸ばしたところ、その沁みるような青に指先が届くことはないのだと、紺にはわかっていた。あの淨い色に触れることなどかなわぬ。だからこそ、記憶に刻みつけよう。せめて、自分にも空の光が届いた瞬間が僅かでもあつたのだと。紺は遠く果てしない一点を、いつまでも見つめていた。

緩衝地帯で密かに調べていた若衆が多加羅へと戻ったということ  
を、仁識はその日の午後にした。他ならぬ、設啓自身が鍛練所へ  
と姿をあらわして伝えたのだ。

「若様はいまだ緩衝地帯におられるのか」

仁識は一通り設啓の報告を聞いた後にそう問うた。それに設啓は  
頷く。

「ああ、そうだ。念のため、もう暫く調べるとのことだ。それか  
ら調査打ち切りに納得がいかがぬと言いつ張った若衆も五人、残してき  
た。俺もすぐに緩衝地帯へ戻る」

副頭に与えられた部屋で向き合いながらの会話である。仁識は腕  
を組むと、考え込む。若衆が調査のために緩衝地帯に入ってから既  
に十日以上が過ぎ、その間何の報告もなかった。それが突然調査は  
打ち切るといふ決定を下し、多加羅へと戻って来たという。何がし  
かの成果があるかと思えば、それも皆無である。何よりも奇妙なの  
は、調査を打ち切るといふ決定をした灰自身が多加羅へは戻らず、  
いまだに緩衝地帯で動いていることだろう。

「気に食わぬ」

仁識は呟いた。

「一体何を考えている」

「言っておくが、この決定は俺の考えではないぞ」

「無論、そうだろうな。若様は一体何を考えている。何か言ってい  
たか？」

「いいや、何も。何を考えているか、俺とて聞きたいところだ。だ  
が惣領家の御方に強硬に言われては、従うしかなかるう」

真顔で答えた設啓に、仁識は顔を顰めた。

「殊勝なことを言う」

苦々しい響きだった。設啓はちらりと仁識を見やった。

「苛ついているな。察するに須樹すきの件は、お前も知っていた、ということがあるか」

「何だと？」

「灰様から聞いた。須樹が緩衝地帯で姿を消したそうじゃないか。灰様が若衆の調査を唱えたのも、実際は須樹の行方を探るためだとか」

「若様が、お前に言ったのか？」

「ああ、そうだ」

「気に食わぬ」

再度の言葉ははつきりと設啓に向けられていた。そこに込められた意味を、設啓は取り違えはしなかった。もとより、誤魔化しのお相手ではないと思っっている。見込み通り、というところだ。会議の場であらかじめ決められた結論を導くための意見を設啓が述べたこと、それに仁識は気付いている。それならば、設啓の立場もまた察しているだろう。何も言わぬことも出来たが、設啓は敢えて言葉を放つ。

「透軌様透軌から呼び出しは受けたか」

仁識の表情が険を帯びた。苛烈な眼差しが向けられる。そこに驚きが浮かんでいたとするならば、それはおそらく設啓が自ら己の立場を明らかとするような言葉を発したことに對するものだろう。仁識の声音は益々冷たく、鋭い。

「まさか若衆頭自らが若衆の中に犬を放っていたとはな。若衆内部にまで腐った権力闘争の手を伸ばすとは呆れ果てる。透軌様に一体何を吹き込んだ」

「灰様は警戒するに及ばず。上に立つ者として人望を集める程の器ではないが、その周りは侮れぬ。須樹と仁識、特に仁識は味方につけるに如くはない。そんなところだ」

「お前に若様の人となりを調べるよう命じたのは透軌様ではなからう。誰だ」

「それを明かすと思うか？」

「見返りにお前は何を得る？」

「問うてばかりだな。己で考えることが出来ぬわけもあるまい。それとも、俺の見込み違いか？」

素気なく設啓が言え、仁識もまた辛辣に返す。

「聞かずともわかるうものだがな。卸屋おろしやは己が利のためならば、どのような浅ましい所業でも喜び果たすと言うが、どうやら真実のようだ」

だが、と仁識は皮肉に笑って言葉を続けた。

「お前がそのように報告したのが何時のことかは知らぬが、今でも同じように考えているか？ そうならば、お前は課された役割すらるくに果たせぬ、ということだ」

ふん、と設啓は鼻を鳴らす。

「確かに俺は灰様を見縊っていたようだ。今回は思わぬ一面を見ることが出来た。今も一体何を企んでいるのか……」

「それも透軌様に……いや、透軌様の背後にいる人物に伝えるか？」「報告するのはそちらの役割だ。何を伝えるか……あるいは何を伝えぬのか、好きなようにすればいい」

「……なるほど」

仁識は呟くと、戸外に顔を向けた。苦々しい思いが込み上げていた。

「私を……試すわけか」

「さて、何のことか俺にはわからんが」

「よく言う。私が透軌様にすすんで尻尾を振るかどうか、それを確かめたいのだろう。一つ言っておくが、若様の影響力が今以上に高まることを警戒して私を若様から遠ざけたというなら、効果は知れている。あまり若様を甘く見ぬことだ」

「……覚えておこう」

設啓は表情一つ変えずに答えた。

仁識は鍛練が終わるとすぐに鍛練所を後にした。残って自身の鍛練をする気にはなれなかった。鍛練所の門を出て、暫し立ち尽くす。坂の上に浮かび上がる惣領家の屋敷を見やった。昼に設啓から聞いたことを、透軌に知らせねばならぬ。そう思いながらも、仁識は陰鬱な思いに捕われる。先日、透軌に呼び出されてから絶えず感じているそれだった。

どの道、突然に面会を求めたところで会うことはかなわぬだろう。まずは透軌付きの家司に話を通し、日を改めて訪れることになる。報告するのは仁識の役目と言いつつ切った設啓は、明日には再び笠盛に向けて発つという。彼が透軌に何も伝えずに多加羅を出るのか、それはわからなかった。だが、何れであろうとも、己が透軌に何を伝えるかで忠節の度合いを測られるのは確実だった。

何時かはこのような時が来るのではないかと、仁識は考えていた。望むと望まざるとに関わらず、大家の後継ぎとして多加羅中枢の動きに巻き込まれることになることは、十分にわかっていたことだ。だが、それがよもや灰と築いた信賴関係を秤にかけるような部類のものになるうとは、仁識は思っていなかった。いや、わかっていながら、気付くまいと目を逸らしていただけか……仁識は自嘲の笑みを浮かべた。

三年前にあらわれた灰という存在が多加羅の人々に与えた影響は大きかったのではないか、と仁識は思う。それは気付かぬうちに広がる静かな波紋のようなものだ。灰に向けられるのが反感や嫌悪であるうとも、彼だからこそ人に与えるものであり、それだけ彼の存在感が大きいということの証左でもあった。灰は対する者に必ず何かしらの印象を与える。まるで磁力のような、惹き付ける力があるのだ。

そして少なからずの人々が、灰という存在に魅了されていることを仁識は知っている。

おそらく、ごく早い時期から灰が持つ影響力に気付いていた人物がいるのだろう。無論、その人物が灰に抱いたのは好感などという

ものではあるまい。その逆であろう。

(おそらくは絡玄様あたりか……)

絡玄は多加羅における商いで大きな権限を握っている。市場の認可をはじめ、流通に関する事柄も絡玄の管轄だった。卸屋にとつても無視出来ぬ存在であろう。そして透軌が最も信を置く家臣が絡玄であることは多くの者が知っていた。それが、絡玄の勢力を益々強める結果となっている。

その絡玄ならば、灰を警戒する理由がある。次の惣領が透軌であると、多くの者が疑いなく考えている。だが、もう一人の惣領家の血筋である灰という存在が、この先透軌の障害になる可能性は皆無ではない。そして灰という人物を少なからず知る仁識にとつては、人々が灰の姿をより知ることとなれば、新たな惣領に灰を望む者が出ることは何の不思議もないことだった。

また、多加羅の貴族同士の尽きることのない権力闘争を考えれば、力を伸ばしつつある絡玄一派に対抗するために、灰を利用しようとする者が何時あらわれてもおかしくはない。無論、灰が自らすすんでそのような地位を望むことなど考えられぬことではあったが、権力を巡る争いは時に個人の思惑などはるかに凌駕するものだった。

峰瀬が如何なる思惑で灰を多加羅へ招じたか、それは知らぬ。だが、敢えて灰を人目に晒そうとしなかった惣領の思惑すらも越えて密やかに動き出したうねりを、仁識は感じずにはいられなかった。人の欲望と執着に彩られたそれである。

「おおい、仁識！」

突然呼ばれ、物思いにふけりながら歩いていた仁識は振り返った。息を弾ませて坂道を駆けて来る治都の大柄な姿があった。今日は治都の範は休みの日に当たっていた筈である。

「良かった。今からお前の屋敷に行こうと思っていたところだ」  
「どうした」

問いながらも既に仁識は察していた。どこかで設啓達が多加羅に戻ったということを知ったに違いない。思った通り、治都は急いた



様子で仁識に尋ねた。

「緩衝地帯に行っていた連中が帰って来たんだって？」

「ああ。よく知っているな」

「さつき鍛練所の前を通った時に、丁度帰るところだった若衆から聞いたんだ。で、どんな報告があったんだ？ 須樹は見つかったのか？」

「ここはまずい。少し歩こう」

仁識は言つと坂道を逆に歩き出した。貴族の屋敷が建ち並ぶ界隈で立ち話は相応しくない。何より、静かな街路で話す事柄ではなかった。治都も意図を察したのか、仁識の歩みに合わせた。

「どうせなら、防壁の外の広場に行こうぜ。あそこならば話を聞かれる心配はないからな」

屈託のない治都の言葉に、仁識は頷いた。

広場は庶民の家々が建ち並ぶ界隈にひっそりとあった。夕暮れの頃合いで、人の姿はない。その一角に置かれた石造りの椅子に座り、仁識は設啓から聞いた話を大まかに話した。

「結局、須樹は見つかっていないんだ……。若衆達を引き揚げさせるなんて酷いじゃないか。灰は須樹のことを諦めちまったのか？」

気落ちした様子で治都が言った。

「私はその逆だと思っがな」

「どういうことだよ」

「考えてもみる。本当に諦めたのならば、若様も多加羅へと戻る筈だ。だがそれをせずいまだに笠盛にいます」

「設啓はそこらのことは何も言っていないかつたんだらう？」

「ああ。だが、設啓の話では若衆を多加羅へ帰すという決定をしたのは若様らしい。若様としては若衆がいては都合が悪かった、ということだらう」

「つまり……？」

「つまり、若様は何か重大なことを掴んだということだ。おそらくは須樹に繋がる何かだろうな。そうなれば、建前としての若衆の調査などもう必要ない。掴んだことが危険を帯びることであれば、むしろ若衆を緩衝地帯から遠ざけて独自で動いた方がいいと考えたの  
だろうな」

「……そいつはつまり灰にとっても危険だということじゃないか」  
「そうかもしれない」

「それも一人で何もかもやるうってのか？ 相変わらず自分のことには無頓着な奴だな。おまけに自分を案じる存在がいるってことをいまだにわからんらしい」

仁識は治都をまじまじと見やった。その視線に、何だ、と治都が問う。

「お前が若様のことをそんな風に思っていたとはな」

「何だそれは」

「いや、少し意外に思っただけだ」

「灰の心配をしているのは何もお前や須樹ばかりじゃない」

「私はさほど心配していないがな。若様ならば一人でも何とかする  
筈だ」

「本気でそう思っているのか。そうならば、お前も大概鈍い。何時までそんなことを言っているつもりなんだよ。実際はお前だって緩衝地帯にすぐさま向かいただろうが」

いつになく真剣な治都の口調だった。まるで問い詰めるようなそれ  
れに、仁識は素気なく返す。

「私には鍛練の指導がある。向かおうにも向かえぬ」

「あのなあ、鍛練がなんだよ。そんなもん錬徒に任せればいい。お前が緩衝地帯に行かないのはそんな理由じゃないだろう」

「随分と言ってくれるな。お前に私の何がわかるというのだ」

仁識の声音がはつきりと険を帯びた。だが、治都はそれに怯んだ様子もなく言い募る。

「この際だから言わせてもらおう。確かにお前はすごいよ。博露院を

飛び出すなんて並みじゃない。だが若衆に入ってから今までお前自身で決断して動いたことが一回でもあったか？ 口では偉そうなことを言いながら、お前は結局与えられた枠から出れないんだよ。お前自身がどうにかしたいっていう思いは無いのかよ」

言い返そうとして仁識は言葉を呑み込んだ。一つには、治都が浮かべる表情　もどかしさと腹立たしさが相混じったようなそのせいであり、もう一つには心中に生じた戸惑いのせいだった。普段ならば反感と怒りしか抱かぬであろう治都の言葉に、仁識が覚えたのは胸の奥にすんと落ちるような感覚である。それへの戸惑いだった。

（何時かはこのような時が来るとわかっていた……）

不意に、思ったのはそれだった。治都の言葉は、もどかしく心中に凝る惑い、自分でも掴み難かったものを、思いがけず明瞭な輪郭で浮かび上がらせたのだ。

若衆という枠の中で過ごす、その安穩とした日々が永劫に続くものではないと仁識は知っていた。だが、本当にそうだったのか。例えば、惣領家の一員であることに葛藤しながらもそこから逃げようとせず足掻く灰のように、職人である父親の家業を継がずより多くの人々の中で生きる道を選んだ須樹のように、そして迷わず南軍の軍士となることを目指す治都のように　若衆でありながらも、彼らはその一時に甘んじることなく、己が進む先を見据えている。

引き比べて己はどうなのだ、と仁識は思う。博露院を厭うてやめた後は若衆が彼の逃げ場となった。大家の矜持に捕われた父親と対峙することを避け、心を痛める母親に背を向け、そしてただ一人進む先もわからず立ち尽くしている。何時までも若衆でいることがかなうわけもないものを、その中にいれば己の立ち位置があるのだと、それが永遠に続くのだと錯覚してはいなかったか？

「仁識、すまん。言い過ぎたか？」

黙り込んだ仁識に、治都がおろおろと言った。それに、仁識は微笑かに笑んだ。時に嫌になるほど鋭いくせに、それが無意識ともなれ

ば腹立たしく感じることもさえ馬鹿馬鹿しくなる。

「謝るな。お前の言うことも尤もだと考えていただけだ。確かに、私は口先ばかりだな。お前達のように己の行先一つとて決めることが出来ぬ」

「あ……いや、仁識、本当に俺はお前を責めようと思ったわけじゃないんだ。何と言うか、だな……俺自身も須樹のことが心配で、緩衝地帯に行きたいのに行けんせいで苛々して、だな……」

「お前に悪気がないのはわかってる。問題は私自身にある」

ほろ苦い、仁識の言葉である。治都は気まずそうに頭をかき、言葉を探すように視線を彷徨させたが、結局何も言わなかった。

暫くの沈黙の後、仁識は言った。

「明日、私は透軌様に先程の話を御報告申し上げます」

普段と変わらぬ仁識の声音に、治都はほっとしたようだった。

「灰が調査を独断で打ち切ったつてことは、問題になるのかな」

「さあ、どうだろうな。だが、そもそも今回の調査の立案者は若様であつて透軌様ではない。何も仰られないだろう」

「そうか」

安堵したような治都の言葉を聞き、仁識は立ち上がった。それに、治都が慌てたような素振りを見せた。

「もう帰るのか？」

「ああ」

「もう少し話さんか？ まだ帰らんでもいいだろう」

「何を話すことがある。もう話すべきことは話しただろう」

「いいじゃないか。例えば……そうだ！ 剣舞けんぶのこととか、だな」

仁識は治都の必死な形相を見下ろし、眉根を寄せた。

「そういえば、設啓達が戻ったのを知ったから鍛練所に来た、というわけではなかったな。もともと私に用事でもあったのか？」

「ああ、そうだというか、違うというか……何と言うか、お前と話したい気分だったんだよ」

「何を企んでいる」

「……何も企んじやいない。もう少しここにいてくれればそれでいい。たまにはゆっくり話したいこともあるだろう」

「気色悪い。生憎、私は無駄話は好かん」

「さっきのしおらしいお前はどこにいったんだよ！」

「やかましい！ 何を考えているかは知らぬが私は帰るぞ」

歩きかけた仁識に対し、治都はがばりと頭を下げた。

「すまん！ 本当のことを言うから帰るな！ お前に会わせたい人がいるんだよ。もう少ししたらこの広場に来る筈だ」

立ち止まり、仁識は振り返った。

「ここに来たのは、はじめからそのつもりだったのか。会わせたい人物というのは誰だ」

治都は仁識の顔を窺うように見上げながら、おずおずと言った。

「ほら、この前に言っただろう。第六公家に奉公する親戚がいると今日暇がもらえたというから、どうせならお前に第六公家の許嫁がどのような人が話してもらおうと思っただんだよ」

「ほお、と仁識は言う。その声音は、お世辞にも温かいものとは言えなかった。

「私はお前に言った筈だがな。私の許嫁のことに口を出すな、と。それを忘れたわけではあるまいな」

「忘れはせん。忘れはせんが、何と言うか助けになりたいんだよ。お前が結婚するならば、幸せになってほしいと、そう思うからだ」

仁識は天を仰いで溜息をつく。

「全く、懲りない奴だな」

言いながらも、そこにあるのは柔らかな響きだった。仁識は相変わらずの治都のお節介にうんざりしながらも、怒りを抱くことはなかった。そのような己に内心に驚きを感じる。どうやら、これもまた己が目逸らし逃げ続けていたことの一つ、ということか。そう思う。

「わかった。話を聞けばそれでよいのだな」

「会ってくれるか！ ありがたい！」

途端に笑顔になった治都である。その顔が、仁識の背後に向けられた。

「ああ、良かった。丁度来たところだ。仁識、彼女が第六公家に奉公している俺の従妹だ」

仁識は己の影の横に伸びたもう一つの影に気付く。振り返ると、逆光の中に人影があった。仁識は目を細めた。

「こいつが話していた仁識だ」

屈託なく治都が言った。

「どうしたんだよ。こっちに来いよ。貴族とは言ってもこいつはなかなかいい奴だからな。気遅れする必要はない」

言われて、人影は二人へと近付いて来た。滲むように光の残滓が移ろい、あらわになる相手の顔を、仁識は見た。

「仁識、俺の従妹の羽那だ」

治都の声を聞きながら、仁識は呆然と目の前の姿を見つめた。相手もまた、僅かに青褪めて仁識を見つめていた。

このような場所で会う筈がない。公歴書館の片隅、書物と柔らかな光に囲まれたあの静寂の中で出会う筈の相手だった。まるで約束事のように　そう、約束事だったのだ。仁識と娘の、それは口に出さぬ取り決めだった。周囲から切り離された異空間であればこそ、二人は向き合うことが出来た。それ以外の場所でまみえれば、築いた仄かな絆など瞬く間に崩れ落ちるのだと、互いにわかっていたのだ。

とうとう、知ることがなかったのだと、その時仁識は考えていた。だが、それはまるで自分の思考ではないかのように遠い。何度もあいまみえながら、それでも問うことがかなわなかったたった一つの言葉、その答えである。

名を、教えてはくれまいか？

問えば相手は答えただろうか。それすらももう知ることがかなわぬ。

互いに名も、年も知らぬ。偶然の出会い　だからこそ守られる

儂い静寂だった。それが破れたことを仁識は知った。そして己を見つめる娘の瞳の中に、同じ思いがあることに気付いていた。

(今頃知ったところで……)

あまりに皮肉な このような思いは知るべきではなかった。互いの想いなど、知るべきではなかったのだ。

出会うべきではなかった。

仁識は虚空に視線を投げた。広場の冬枯れした木立の向こうには、遙かに遠く宵に移ろう空があった。それは無慈悲なまでに透徹として、心を映すにはあまりに深く、美しかった。

多加羅へと報告のために戻った翌日、設啓は早朝に緩衝地帯へと発った。笠盛に着いたのは昼になる頃合いである。常と変らぬ活気を見せる市場を通り抜け、ねぐらへと向かった設啓は、戸惑いもあらわな若衆五人に迎えられた。

「副頭、これを見てください」

家の中に入った彼に、挨拶もそこそこに一人が差し出したのは折りたたまれた一枚の紙である。

「何だ、これは？」

「今朝方、扉の下から差し込まれていたんです。文のようなのですが……内容が不可解で」

設啓は何の変哲もない白い紙を開いた。そこには確かに文字が連ねられている。短い文だった。ぞんざいな筆致で書かれた内容にざっと目を通し、設啓は眉を顰めた。そのまま考えにふけるように黙り込んだ彼に、五人が詰め寄る。

「どういうことでしょう。そこに書いてある内容は……」

「まさか本当なのですか？」

その問いには答えず、設啓は低く問うた。

「灰様は戻っているか？」

「いえ、まだ戻っておられません」

言った若者は、はつと顔を強張らせた。

「まさか、そこに書かれているのは灰様のことですか？」

「いや、違う」

即座に設啓は否定した。己を見つめる若者達を見回し、再び文に眼を落とす。ゆっくりと読み上げた。

「多加羅若衆の副頭を、媼が不当に拘束せしめるものなり」  
文はただその一文のみだった。

「この副頭とは、おそらく須樹のことだ」



若者達が黙り込む。次第にその表情にあらわれ起こるのは驚き、懸念、そして不安である。

「……どういうことです」

「須樹が暫く前から行方がわからなくなっていることを知っているな？」

「ええ、確か頭との会議あたりからでしたね」

落ち着いた声音で言ったのは錬徒を担う若衆だった。

「俺も詳しく事情を知っているわけではないが、須樹は緩衝地帯で行方を絶つたのではないかと考えられている」

言いながらも、設啓は混乱を抑えることが出来ない。誰がこの文を届けたのか。たった一文　驚くべきその内容である。

「一体この文は誰が……？」

「媪とは卸屋おろしやの元締めですよ。何故、そこに須樹さんが？」

副頭、と問う若者達の声に設啓とて答えられよう筈もなかった。

見えぬところで一体何が起こっているのか、文の内容が真実であれ虚偽であれ、あまりに不可解である。

「とにかく無闇に動かさず今は灰様の帰りを待とう」

答えながら設啓は思う。灰ならば何か掴んでいるのではないか。

灰が何をしているのか、設啓は知らぬ。もしか、という思いの底には、不思議な程に納得する思いがあった。灰ならば、この不可解な状況を明らかとすることがかなうのではないか。しかしそれは、彼にしては常にはない思考であり、到底是認し難いものだった。

何を期待するというのが。他を安易に恃むとは……

腹立たしく設啓は己を戒めた。

その夜、笠盛の一角で騒動が起こった。媪の屋敷に何者かが侵入したのである。夜陰に紛れて屋敷に押し入った者達だったが、常になく厳しい警備の目を掻い潜ることは出来なかった。屋敷内部に蠢

く不穏な影に気付いた者が直ちに仲間に加え、密な連携のもとに侵入者を追い詰めた。だがほうほうの体で逃げた者達を捕えることはかなわなかった。

宇麗<sup>うれい</sup>が侵入者の知らせを受けたのは、媪と執務室で向かい合っている時のことである。急ぎ現場に向かった彼女だったが、既に侵入した者達は逃げおおせた後だった。

「どんな者達だったんだい？」

「それは暗がりでもどうにもわかりませんでした……やけに動きに無駄のない奴らでした」

「これだけの警備の目をくぐり抜けるとはな」

宇麗の声は半ば呆れたような響きだった。まさに屋敷全体をすっぽりと網で包み込んだかのような警備態勢である。そのような中、屋敷の内まで侵入を果たしたというのだから、相当な者達である。

「でも、逃げた奴らの様と言ったら、連携も何もない。まさに脱兎の如く、というやつでしたよ」

「そうだとしても、逃げた者勝ちだ」

暗闇から声が響く。黄<sup>おう</sup>である。屋敷の周りをひとしきり見回ってきたのか、手に松明を掲げて近付いて来る。

「それにしても、一体何が狙いだっただらうな」

黄のその問いに宇麗は答えず、敷地内に生い茂る木々の影を見つめた。張りつめた静けさに沈む無風の夜である。木々の輪郭は奥行のない影絵を思わせた。

「そいつらがどこに忍び込もうとしていたかわかるか？」

「はじめに気付いた奴が言うには、どうやら地下に入りこもっていたみたいですね」

「地下だと？ 確かか？」

頷く男を見やり、宇麗と黄は素早く視線を交わした。

「どう思う？」

「おそらくお前と同じ考えだ」

答えた黄に、宇麗はすっと目を細めた。夜陰に鮮やかな、それは

獲物に狙いを定めた猫の瞳に似ていた。

「あいつに会いに行くか」

更に周囲を見回るように部下達に命じ、宇麗と黄は屋敷の中へと向かった。

侵入者に対して迅速に対処が出来たのには実は理由がある。常日頃から媪の屋敷は厳重に警備が行われている。だが今この時ばかりは普段よりもさらに念入りに見回りが行われていた。孤児院で起こった惨劇故でもあるが、それに加え数日来不審な人影が屋敷の周囲をうろついているのを見張りが気付いたせいだった。

その情報は直ちに媪へと伝えられ、結果として宇麗が中心となり普段よりさらに厳しい警備態勢を敷くこととなったのである。屋敷の中まで侵入されたものの、宇麗達が築いた万全の備えが、起こり得たかもしれない惨劇を未然に防いだのだ。

だが、逃がしたのはやはり痛手だ　宇麗は歩きながら考える。

侵入者が何者かはわからねど、孤児院への襲撃者か、それと関わりのある者だった可能性は高い。つまりは緩衝地帯で起こる一連の出来事の黒幕に繋がる輩だということだ。捕えることがなかったならば、今度こそ謀略の首謀者に近付けたかもしれない。

ただ一つ、収穫があったとすれば、侵入者がどうやら地下を目指していたらしいということだ。それが意味することは、如何に不透明な状況とはいえ一つしか考えられなかった。もっとも、侵入者が例え地下に忍び込むことがかなおうとも、目的　如何なる目的かはわからねども　を達することは出来ずに終わっただろう。奴らが狙っているだろう存在は、既に地下にはない。

二人が向かった先は屋敷の三階、奥に設えられた部屋だった。身を隠す場所とてない真直ぐな廊下を歩むと、突き当たりの扉の前には不寝番の見張りが剣を携えて椅子に座っている。見張りは二人の姿に気付くと素早く立ち上がった。緊張の面持ちで宇麗に問うた。

「先程の騒ぎは何だったのですか？」

「この屋敷に忍び込もうとした者達がいたようだ」

「何ですって？」

孤児院での惨劇を思い起こしたのか、声が張り詰める。それに、宇麗は安心させるように一つ大きく頷くと、落ち着いた声音で言った。

「大丈夫だ。すぐに逃げたらしい。傷ついた者は誰もいない。中の様子はどうだ」

ほっと安堵の息をつき、見張りは答える。

「特には何も。眠ってはいないようですが」

「そうか。少し話したい。開けてくれ」

見張りは頷くと、門を外し扉を開いた。宇麗、そして黄の順番で中に入る。そこは小さな部屋だった。寝台と机のみが置いてあり、窓はない。宇麗は後ろ手に扉を閉める。

仄暗い中で、青年は片膝を抱え込むようにして寝台に座っていた。宇麗と黄の突然の訪れにも、青年が驚いた様子はなかった。宇麗は腰に手を当てると、青年を見下ろした。己の視線を臆することなく受け止める相手に問う。

「そろそろ答える気になったか？ 須樹」

青年は答えなかった。無論、答えなど期待していなかった宇麗だが、青年と対するたびに感じるもどかしさが胸中に渦巻く。

多加羅若衆の副頭というのは本当か？

そう問うた夜でさえ、彼は僅かに驚きを示しただけだった。その落ち着きが宇麗には意外だった。問うても答えぬ相手に、もたらされた情報が真実か否かを判断することが出来ぬ。だが、彼が多加羅若衆の副頭であれば、地下の一室に罪人さながらに押し込めているのは如何にもまずかった。無論、今でも拘束していることに違いないが、扱いは格段に違う。有体に言えば、人間扱いをしている、ということだ。

この部屋に彼を移し、既に数日が経つ。地下に捕えていた時には如何にも囚人然としていた青年だったが、湯浴みで汚れを落とし真新しい衣を纏っている。食事も日に三度と規則正しいものとなって

いた。突然の待遇の改善にも、青年は何も問おうとはしなかった。淡々とそれらを受け入れ、そして今、この時に至るまで一貫して口を閉ざし続けている。決して真実を明かそうとせぬその態度が、ただの強情ではないように宇麗には思えた。

では一体何が彼の口を閉ざすのか。仮に彼が若衆であるとして、それが明らかとなつてなお、何が彼を支えているのだろうか。

「先程騒動があつた。この屋敷に忍び込もうとした輩がいた。事無きを得たが、連中はどうやら地下を狙つていたらしい」

黙つて聞き入る相手に、宇麗もまた淡々と告げる。

「お前を狙つてのことではないかと、あたしは思っている。だが、何故だ？ それがわからないのさ」

「心当たりがあるならば言つてくれないか。俺達もこの前のような惨事は御免だ。お前に狙われる理由があるならば、また今夜のようなことが起きるかもしれぬ。それがわかれば備えも出来よう」

「あたし達の仲間がお前のせいで犠牲になるようなことは避けたいからね」

交互に言つた宇麗と黄を、青年は見やる。その表情に、僅かではあるが葛藤の影が過つたのを宇麗は見逃さなかつた。どうやら彼もまた孤児院での惨劇を思い出したらしい。己のせいでさらなる犠牲が、と言われれば表情を消すことが出来なかつたのだろう。それがこの青年の性質であり弱みなのだと宇麗は思う。悪人ではない。これは宇麗と黄が二人ともに青年に抱く印象だつた。

「狙われる心当たりは？」

青年は小さく溜息をついた。

「何もない」

漸く答えるとそれきり口を閉ざした。その言葉に嘘はないだろう、と宇麗は判断する。そして思うままに問うていた。

「お前がそこまで口を閉ざす理由はなんだろうな。あたしにはよくわからない。確かに緩衝地帯に多加羅と沙羅久は手出し出来ない。下手なことをすれば大事だ。お前が口を閉ざすのは多加羅若衆を守

ろうとしてのことなんだろうが、それを支えるのは何だ？ 多加羅若衆としての矜持か？」

答えは期待していなかった。案の定何も言わぬ相手に宇麗は肩を竦め、踵を返した。

「まあ、いいさ。言う気になるまで気長に待とう。行くぞ」

腕を組んで遣り取りを聞いていた黄もまた宇麗に続く。部屋の外へ出かけた二人の背に、その時声がかげられた。

「俺を支えるものが何か、それは信じる思いだ」

ぼつりと、まるで己に言い聞かせているかのように響く。宇麗は振り返った。

「信じる……？ 何をだ」

青年が真直ぐに顔を向けた。迷いの無い視線である。

「人だ」

それだけを言っつて、青年は現から己の思考へと沈み込むかのように、視線を逸らせた。その姿を見やり、宇麗は部屋を出ると静かに扉を閉ざした。

廊下を歩むと、背後から狼狽したような黄の声が聞こえた。

「しかし益々こんぐらがつてきたな。あいつが多加羅若衆だとして、何故狙われる？ それも媪の屋敷にまで忍びこむとは相当なことだ」

続く黄の言葉は張り詰めた響きである。

「厄介なのはそれだけではないぞ。あいつが狙いなら、媪の屋敷に捕われていることを奴らは知っていた、ということだ。極秘事項だぞ」

「ああ、わかっている」

「内部から情報が漏れた可能性は考えられるか？」

黄の問いに、宇麗はすぐには答えなかった。廊下に設えられた窓の前で足を止める。庭を見下ろせば、松明を掲げて辺りを見張る男達の姿が浮かび上がっていた。

「わからん。だが、奴らも追い詰められているのではないかと、あたしは思っている。今回のやり方はあまりに強引だ。これだけの警

備を見れば、余程でなければ忍び込もうなどという気は起こさぬだろう」

「確かにな……」

「だが一つわかったことはあるぞ」

その声音と、振り返った宇麗の眼差しに黄は口を噤んだ。

「やはり、須樹はただの通りすがりではない、ということだ。こうなると、笠盛で何をしていたのか、何としても吐かせねばならん」

決然としたその声音に、黄がふと困惑を浮かべた。次いでがしがしと頭をかくと溜息をつく。その様子を宇麗は訝しく見つめた。

「参ったなあ……」

「何がだ」

「お前の言うことはわかるんだが、俺はな、どうにもあいつを……須樹を憎めない心地になってきているんだ」

「……」

「あいつに何か薄汚い裏があるとはどうしても思えんのか。それはお前も同じだろう？」

心底困ったような黄の口調に、宇麗は眉を顰めた。それ以上の言を咎めるその表情に気付いているだろう黄は、気負う様子もなく言い募った。

「やはりお前は人を見る目があるな。最初からあいつのことを買っていただろう」

「……そのように見えたか？」

「自覚がないようだが、思い切りそんな風に見えていたぞ。間違つて拷問などせずにいて良かったな」

「多加羅若衆を拷問したなどとなると、後々禍根を残すことになるからな。この先も口を割らせる方法には気を付ける必要があるだろうな」

「俺はそういつつもりで言ったんじゃないんだがなあ」

ではどういつつもりだ、と宇麗は胡乱に男を見やった。それに黄はにやりと笑んで肩を竦めてみせた。お前もわかっているだろう、

としたり顔に言った。

「あいつも言ったように、要は人だ。人と人を繋ぐ信頼、というやつさ。利害よりも何よりもそいつが重要だと、俺は思うわけだ」

「ふん、卸屋らしからぬ甘いことを言う」

宇麗は言い放つと黄に背を向けた。だが、宇麗の言葉もまた迷いを孕み、力がなかった。それに己で気付き宇麗は渋面になるのを抑えられぬ。振り返ってその顔を見せるのも腹立たしく、足を速めて廊下を進んだ。

（あいつが緩衝地帯にとって害ある存在ならば、甘いことなど言うてはおられぬ）

そう考えながらも、宇麗は先程青年が向けた眼差しを忘れることが出来なかった。仮に青年の存在が害になるとして、己は彼をどうするだろうか。例えば、その命を奪うことが出来るだろうか。

そうして築かれた緩衝地帯の安寧に、そも如何程の価値があるのだ

宇麗は思考を振り払うように強く頭を振った。

「何を馬鹿な。たった一人と緩衝地帯を秤にかけるなど愚かなことだ」

背後を歩く黄は宇麗の唐突な言葉に何を問うでもなかった。思考が読めるわけでなし、しかし黄にも宇麗が何を考えていたかわかっているのだろうか。宇麗の迷いを、理解しているだろうか。

媪ならばどうするだろうか　宇麗はふとそう思った。

設啓はがばりと身を起こした。

眠気は目を開けたその時に霧消し、些か唐突な覚醒に認識が追いつくまで暫くかかった。再び、彼の眠りを破った音が聞こえる。それが悲鳴であると理解するのにさらに数瞬を要した。

「一体何事だ」



呟くと素早く部屋を出た。するとそこには既に階下から集って来た若者達五人の姿がある。紺の部屋の前で戸惑った様子で立ち竦んでいた。そのうちの一人が設啓を振り返り、あからさまにほっとした表情を浮かべる。

「副頭……」

「どいてくれ」

設啓は若者達を押しやると、扉の前に立った。扉を叩くも答えはなく、尚も高く細い悲鳴が切れ切れに続いている。

「開けるぞ」

言ってから扉を開け放つ。途端に明瞭に耳を貫く悲鳴。その甲高い響きに設啓の背後で若者達が怯むのがわかった。設啓もまた暗がり沈む部屋に立ち入るのを躊躇う。

悲鳴は若者達にわけのわからぬ恐れを呼び起こした。悲鳴など珍しくもなかるう、そう思いながらも臆する。人がこのように痛々しく叫ぶことがあるのか。まるで追い詰められて逃げ場をなくした手負いの獣のように……。言うなればそれは安寧に包まれた日常を打ち破る赤裸々な不条理だった。

悲鳴が不意に途切れる。

「一体どうしたというのだ」

部屋に踏み込もうとした設啓だったが、少女の高い声音がそれを阻んだ。

「来ないで!!」

設啓は目を凝らした。少女の姿は寝台にはなかった。部屋の片隅に、まるで己の身を必死で守ろうとでもしているかのように蹲っている。その体が震えているのが、暗闇の中でもわかった。

「来ないで……」

哀願だろうか、それとも恐怖だろうか。弱々しいその声音は悲鳴と同様、若者達の動きを縛った。

その時ゆっくりと階段を昇って来る足音があった。

「灰様……!!」

若衆の一人が言う。それに設啓は思わず振り返っていた。見れば暗がりの中を近付いて来る灰の姿があった。外套を羽織り、髪を隠していた布だるうか、それを手に持って若者達の様子を不思議そうに見つめている。

「どうしたんですか？」

「どうしたもこうしたも……紺がいきなり悲鳴をあげ出したんだよ」  
設啓の声音は幾分不機嫌なものだった。狼狽しうろたえた、その己に対する腹立たしさ故である。

「紺が……？」

灰は呟くと若者達の間を抜けて設啓の傍らに立った。僅かに目を細めたのは暗闇を見通すためか、壁際に蹲ったきり身動きしない少女の姿を見つめる。一体どうするつもりか、と設啓は思わず灰の横顔をまじまじと見た。

灰の声はごく静かだった。

「紺」

その呼びかけに、紺がぴくりと身を震わせた。

「……灰……？」

「ああ。中に入ってもいいか？」

少女はなかなか答えなかった。答えを急かすこともせず、灰は少女を見つめている。周りの若者達の方がその沈黙に耐えられず、それぞれと落ち着かなかった。漸く答えた少女の声は、ともすれば聞き逃しそうなほどに小さかった。

「いいよ……」

灰は部屋の中へ踏み込もうとして、思い出したように設啓を振り返る。

「皆を下へ、お願いします」

「あ……ああ」

頷いた設啓を見やり、灰は部屋に入ると扉を静かに閉ざした。若者達は互いに顔を見合わせる。

「下へ行こう」

設啓の言葉に、皆一様に頷くと階段へと向かった。その後には続きながら、設啓は束の間扉を振り返る。そこにあるのは夜のしじまばかりだった。

灰はゆっくりと紺に近付くと、少し距離を置いてしゃがみ込んだ。膝を抱え込んで壁際に座り込む紺は、まるで己の姿を見られることを恐れるかのように益々身を縮める。膝を見つめる瞳は虚ろに、しかし大きく見開かれていた。

「紺、何があつた？」

静かに問えば焦点を結ばぬ紺の瞳が灰へと向けられた。何も映していなかったかのような。あるいは誰にも見えぬものを見ていたかのようなそれが、徐々に現に染まる。

「あ……」

口元がわなわなと震えて、弱々しい声が漏れた。途端に紺の顔がくしゃりと歪む。溢れ出した涙を隠すように紺は顔を俯けると両手で頭を抱え込んだ。全身を震わせながらも、紺は嗚咽を漏らしはしなかった。身を守ろうとするかのように晒された腕が、凍りつく夜気の中、あまりに細く頼りない。

灰は紺をじつと見つめ、外套を脱いだ。それを少女の寒々とした肩にかける。灰の動きに、びくりと紺が身を震わせた。その耳元に灰は囁きかける。

「傷つけるようなことは何もしない」

外套を纏わせて再び距離を取ろうとした灰だったが、その動きを止める。衣の胸元を紺が掴んでいた。縋りつくように小さな拳で握り締め、呟いた。

「離れないで……お願い……傍にいて」

「大丈夫だ。どこにも行きはしない」

灰は頷くと、その場に膝をつく。なおも俯いたまま、紺は言った。「ご……ご免なさい。迷惑……かける、つもりなんて……なかった

の。わ……私……夢を、見たの……。お、恐ろしくて……」

「迷惑なんかじゃない。誰も紺を責めてはいない」

穏やかな灰の声音に、紺の肩が小さく震える。必死に、それは何かを押し止めようとしているかのように見えた。

ぼたりと、微かな音が聞こえた。見開いた瞳ははまだ虚ろなまま、涙ばかりが少女の感情をあらわすすがのように、止めどなく床へと落ちる。

「……い……家が……」

絞り出すような、紺の声音だった。

「……家が、炎に包まれて……崩れ落ちていくの……わ、私、それを遠くから見てた……。怖くて、怖くて……家の、な、中には……まだ幼い子もいたの……。みんな寝てた……。に、逃げ遅れた子も……いたかもしれない」

途切れ途切れのそれは、夢にしてはあまりに詳細な描写だったが、灰は問い返すことはしなかった。衣を掴む紺の手が白い。

「わ、私が……火を点けたの！」

叫ぶように、紺が言った。

「私が……！ 死んでも構わない……い、生きていたくないって！ 幸せな子なんて一人もいなかった。悪いことだと思ったけど、どうせならみんな死のうと……お……思って……」

不意に、抑えることが出来なくなったのか、嗚咽が響いた。救いを求めるように腕を伸ばしながら、しかし紺は全てを拒むかのように身を縮めている。灰にはかける言葉が見つからない。何を言ったところで、その言葉は空虚に響くように思えた。ただ、あまりに小さなその姿が壊れそうに脆く見えて悲しい。

灰は少女を柔らかく抱き締めていた。一瞬紺の体が強張り、それまで辛うじて支えていたものが一気に崩れたように、力が抜けた。紺は灰の胸にぶつかるように縋りついた。堰を切ったように、まるで幼子のように紺は声をあげて泣いた。しゃくりあげ、それでも紺は言葉を続ける。まるで己の中の全てを吐き出すようなそれを、

灰は受け止めることしか出来なかった。

「逃げるつもりなんて……なかったの！ 火がどんどん広がって……動く気なんてなかった。で、でもその時……扉が開いてるの……気付いたの。普段は鍵のかかっている扉が……それを見たら私、ひ……必死で外に向かって走ってた。は……裸足で、走って、走って……気付いたら來螺の街を出てたの。……遠くから振り返ったら……燃える建物が見えたわ……！」

「うん」

「夜なのに、空が……真赤だった……。家が……紙の箱みたいに……崩れて行くの。わ……私……なんで……あんなこと……！！……みんな中にいたのに、独り……逃げるなんて……！」

それは己への弾劾だった。少女が抱く恐怖の、その根源にあるのは蛇への恐れだけではなかった。自らへの断罪、その食い込むような痛みである。

「他の子を見捨てて……蛇から逃げて……私……！！」  
それきり口を噤んだ紺は、確かな拠り所を求めるように灰にしがみつく。灰は何も言わず、紺を包み込んだ。他にどうすればよいのか、彼にもわからなかった。ただ、今この時だけでも少女が己を支えるための、そのよすがとなるならば、それでよかった。

紺の体を縁取る命の光は、彼女の内心をあらわすのか、荒れ狂い目まぐるしく揺れ動く。痛々しく、引き裂かれるような情動に惑う様は、しかし火花にも似て美しかった。それが次第に緩やかになり、柔らかく少女の核を包み込む繭のように風ぐのを、灰は見るともなしに見つめていた。

嗚咽が弱まり泣き腫らした紺の瞳が緩やかに閉ざされるまで、灰はじつと動かずにいた。きつく衣を握り締めていた紺の手がゆつくりと解ける。ぱたりと、下に落ちたそれを見やり、灰は少女の体を抱き上げた。寝台まで運び、そこに寝かせる。掛け布団を被せると、紺が小さく身じろいだ。うっすらと目を開くと、灰を見上げて言った。

「……ご免なさい……」

「何故、謝る？」

「わかんない……わかんないけど……」

呟き、紺は瞳を閉じた。続く声は、眠りと現の狭間で柔らかかった。

「……蛇は……来るかな……？」

まどろみに揺れるそれに灰は微かに笑んだ。

「蛇は来ない。紺に決して手出しの出来ぬ場所に行く」

「不思議……灰が言うとは本当に聞こえる……」

語尾はかすれて消えた。穏やかな寝息を確認し、灰は寝台から離れる。

「嘘はつかぬ」

暗がり一言残し、灰は部屋を出た。

灰が階下へ向かうと、そこには設啓をはじめ若衆達が集っていた。泣きつかれて紺が眠るまで短い時間ではなかった筈だが、ずっと灰を待っていたらしい。その顔ぶれに灰は言った。

「夢見が悪かったようです。先程眠りました」

「彼女は一体何者だ」

間髪を入れずに問うたのは設啓だった。他の面々も灰の答えを待ち構えているようである。それに灰は気付く。どうやら、無為に彼を待っていたわけではないらしい。灰から真実を聞き出す、そう申し合わせてでもいたのか、設啓の言葉は言い逃れを許さぬ強さだった。

「どのような事情があるかはわからぬが、今回のような騒ぎは困る。人目を引くわけにはいかぬことをわかっているだろう。彼女のために若衆を危険に晒すことになりかねん。我らが緩衝地帯に入ったのは極秘なのだからな」

「紺は今回の俺達の任務と無関係ではありません」

灰の言葉に、設啓は束の間返す言葉を失った。

「どういうことだ？」

「話す前に、俺からも聞きたい。何故、いまだ皆が残っているのですか？」

責めるでもなく単純に不思議に思っているような灰の声音だったが、問われた若者達は気まずく顔を見合わせた。中の一人が意を決したように言った。

「俺達は調査打ち切りに納得がいかず残りました。打ち切りという判断をされた理由と、それにも関わらず副頭のみがまだ動いているのは何故か、それをお聞きするまで多加羅へ戻る気はありません」  
設啓は注意深く灰の様子を窺う。怒るか、うるたえるか、そう思っ  
て見やった相手は困ったような表情を浮かべただけだった。

設啓は一つ唸ると、床に胡坐をかいて座り込んだ。そして目の前の床に一枚の紙を置く。それに若者達の視線が集まった。設啓は睨みつけるように灰を見上げた。

「これを見てくれ」

真剣な声音に、灰も表情を改めると設啓の向かいに胡坐をかいだ。戸惑いを浮かべた若者達が、設啓の視線に促されるように二人を囲んで床に座った。

灰は紙を広げると、硝子筒の仄かな明かりのもとで、短い文を読んだ。

「多加羅若衆の副頭を、媼おつなが不当に拘束せしめるものなり」

設啓が灰の思考をなぞるように、文面の言葉を言う。

「今朝方、扉の下から入れられているのを見つけたらしい。誰が書いて寄こしたかわからぬ。これが、何を意味するかわかるか？」

「須樹すきさんが媼のもとにいる、ということですね」

迷いのない言葉に、若者達の間から驚きの声が漏れた。設啓は無表情に腕を組むと言った。

「そろそろ、皆にも本当のことを言ったらどうだ？ 何故、緩衝地帯に調査に来たのか、何を考えて調査を打ち切り、今はどのようになっているのか。そして、あの少女が何者なのか」

短い文面を凝視していた灰は一つ小さく息をつく、紙を床に置いた。半ば伏せていた顔をあげると言った。

「わかりました」

ただし、と灰は周囲の面々を見回す。

「俺がしていることは、既に若衆の枠をこえています。この先何か不測の事態が起こった場合、俺が知っていることを知っていたら、皆の若衆としての立場も危うくなりかねません」

意想外の灰の言葉に、若者達は戸惑いを浮かべる。咄嗟に言葉を放とうとした設啓だったが、灰の視線にそれを呑み込んだ。初めて見る、強い視線が向けられていた。

「そんなの……構いません！ 須樹さんのことといい、真実が知り



たいんです」

「俺達で出来ることがあれば、何でもやります！」

不意に若者達が声をあげた。口々に同様の言葉が続く。設啓は熱意すら浮かべる面々を見回した。何を馬鹿な、と思う。よく聞きもせぬうちにこのように突拍子もない、まるで若衆としての立場を危険に晒すようなことを若者達が口走るなど、彼には信じられなかった。そもそも、若者達には灰とのやり取りに口を出さぬよう言い含めてあった。灰の真意を明らかとする、そのためにはそれが一番良いのだと、皆が頷いた筈だった。それにも関わらずこれはどういうことか。

止める間もない　そう思い、不意に気付いていた。止めることは出来た筈だ。それを突き崩したのは何か。

(俺の言葉が封じられたが故……)

設啓は愕然とした。場の主導権は設啓が握っていた筈だった。灰は視線の一つで彼の言葉を封じ込めただけでなく、その場の流れさえも一気に己に向けたのだ。設啓はまじまじと灰を見つめた。火影に、灰の表情は常と変わらない。

「まず、はじめに知っていただきたい。俺は、何としても須樹さんを無事、多加羅に取り戻したいと考えています」

静けさに刻むように、灰が言った。

「そしてもう一つ、紺を守りたい。彼女は耶來やらいに追われています」

一拍、落ちたのは静寂だった。皆の思考が言葉の意味に追いつくまでの、それはばかりと空虚な洞を孕んでいた。次いで認識　問う声音に懸念と恐れが滲む。

「……何故、耶來が……？」

「全て、はじめから話します。今回の一件、俺達が調べていた緩衝地帯で起こった出来事の背後には、耶來が関わっています」

灰の声は密やかに、そして語られる言葉の不穏さにそぐわぬ穏やかさで響いた。

そもそもその始まりは須樹が緩衝地帯で行方を絶ったことだった。灰はそう語った。

「須樹さんの行方が分からなくなる前、緩衝地帯での一連の出来事がもしかすると意図的に多加羅若衆を貶めるために謀られたことであるかもしれないと、俺は須樹さんと話していました。無論、ほんの思いつき程度のことです。確かな証があつたわけではありません」  
設啓はそれが須樹とともに緩衝地帯の街や村で多加羅若衆を巡る噂を集めた直後のことだろう、と察する。まだ冬浅い時期だった。それ程前のことでもない筈だが、まるで昔のことのように思える。

「俺もその時点では、若衆として緩衝地帯の調査をすべきだとは考えていませんでした。ですが、若衆頭も交えての会議の前日、須樹さんが笠盛かさむぎに向かつたまま帰って来なかつた。何かあつたのではないかと、そう考えるのは拙速にも思いましたが、須樹さんが大事な会議を無断で欠席することがあるのか、と」

「それはなさそうですね……」

灰の言葉を遮るようにぼそりと言つた若者に、周囲が咎めるような視線を向ける。だが灰は僅かにおかしそうに笑つた。

「俺もそう思いました。帰って来なかつた、ということとは間違いない何かが起こつたのだと。須樹さん程の人がそう容易く厄介事に巻き込まれるとは考えられません。ですが、それが常ならぬことならばどうか……例えば、多加羅若衆を貶めようと画策する者達が本当にいて、その動きに気付いたならばどうだろうか、と。そして調べようとして逆に奴らに勘付かれ、捕われるような事態になつていたら……」

なるほど、と設啓は灰の言葉を聞きながら思う。既に灰の思惑を知っていた設啓だったが、灰が何故そのように考えたかまでは知らぬ。会議の日に須樹の不在を知り、会議が始まるまでの僅かな時間にそこまでのことを考えていたのか、と半ば呆れながら灰を見やつ

た。

「だから会議の場で、敢えて一連の出来事の情報を集めるべきだと意見を出したんだな」

半分は周囲の若者に聞かせるために、設啓は問う。灰は頷いた。

「はい。今回の一件は若衆の手には負えぬことでした。沙羅久しやらくとの争いを極力避けたい惣領家も若衆は動かぬのが最善だと判断するのではないかと……仮に須樹さんが謀略に巻き込まれたとしても、救うために動くことはないだろうと思いました。ですが、俺一人で緩衝地帯で須樹さんの行方を追うことは不可能でした。それならば、若衆として調査に赴くという名目があればいいと思っただけです」

緩衝地帯で起こる一連の出来事が多加羅若衆を貶める目的のもとに何者かが謀った可能性があること、そしてそれを密かに調べるべきだという意見を会議の場で述べた。その目的が実は須樹の行方を捜すためだったのだと、そう聞いた若者達は一様に複雑な表情を浮かべた。

「つまり、調査というのは本当の目的ではなかったんですね」

「無論、調べることは必要でした。何者かが緩衝地帯で謀略を仕掛けているとして、それを調べなければ須樹さんの行方も追えませんが。ただ……確かに、俺の中ではまず第一に須樹さんを捜すという目的があった。皆には悪いと思っています。結果として、俺は皆を利用したのですから」

だが、実際に笠盛で調べてみれば、謀略の影すら掴めなかった。

真実、須樹が謀略を企む者達に捕われたならば、その者達がなりを潜めるのはむしろ当然のことである。そうであれば、須樹の行方を追うのは益々難しい。灰自身打つ手なく感じるようになった時期に出会ったのが紺だった。

そこまで語られた内容を聞き、設啓は灰をまじまじと見つめた。

偽りを言っているわけではない。だが、明らかに、全てを語っていない。情報を得るために宇麗うれいへの接触を図ったこと、そして耶來を牛耳る鬼逆きさかからの不可解な伝言。何れも若衆に知らせるにはあ

まりに不穏なことではある。

「それで、紺は一体何者なんだ」

「彼女は媪が開く孤児院に入っていたようです」

「媪の……!？」

灰は頷くと、紺を不審な男達から救った経緯を語った。孤児院での不審火、そして紺を捕えた男達との遭遇

「会話から男達は來螺（きり）の者のようでした。それもおそらくは裏側の一員だと思います」

「裏側と言つと……耶來か」

「はい。彼らは何か事を……それも多分に不穏な事を起こして逃げているようでした」

一体どれほどの血が流されたのか、男達の体から漂ってきた吐き気を催すような濃厚な血臭を、灰は思い出していた。

「紺が男達と遭遇したのは孤児院の庭だったようです。孤児院で起こった火事が恐ろしくて庭に出たところを男達に出くわし、無理矢理連れ去られたと言っていました。おそらく、火事は男達が起こしたのだと思います。そしてその隙について孤児院で何事かを成した……」

束の間灰は黙り込んだ。再び語り始めた声は、僅かに低かった。

「俺は、謀略を働く者達の動きが掴めぬのは、奴らが須樹さんを迎えた後、なりを潜めたせいだと、そう考えていました。ですが、それは間違っていたのかもしれない。笠盛は緩衝地帯を裏から支配する媪の本拠地でもあります。よく考えれば、不審な動きをする者達を媪が見過ごしにする筈がない。謀の黒幕の動きが全く無いのは、既に媪に捕われていたからではないのか。そうであれば、いくら調べたところで、何も掴めぬ筈です。そしてもしも、謀略を働いていた者達が耶來であれば、捕われた仲間の口を封じるために強硬手段を取ることも辞さないのではないかと。おそらく孤児院には媪に捕われた者達がいたのでしょう。耶來の男達はそこに忍び込み、捕われた者達を殺したのかもしれない」

「殺す……？ 逃がすためじゃなく、殺すためにわざわざ忍び込んだってのか？」

「はい。口封じのためではなくとも、耶來では失敗した者の命を奪うことはさほど珍しいことではないと、聞いたことがあります。それに、捕われた者達は既に媪の側に顔が割れている。逃がせばかえって足手纏いになりかねません」

しん、と沈黙が落ちた。

「恐ろしいな……」

ぼつりと一人が吹き、その響きがぎこちない余韻を残した。それに灰は静かな眼差しを向け、ふと顔を俯けた。

恐ろしい。非道な存在に向けての言葉は、同時に灰に向けられたものでもあった。それに灰は気付く。耶來の男達の思考を、その残酷な行為を、淡々と推測してみせた灰自身への言葉でもあった。

「何故、紺は男達に連れ去られたんだ。逃げるところを見たならばその場で殺されるんじゃないのか？」

設啓の言葉が響いた。事務的にも聞こえる乾いた口調は、気まづさに包まれた雰囲気をも呆気なく破った。それに灰は答える。

「紺は以前、來螺の裏側で蛇と呼ばれる男のもとにいたようです。そこから逃げて媪の孤兒院に身を寄せていた。そしてあの夜孤兒院を襲った男達の中の一人が、蛇だったようです」

設啓は目を瞪る。

蛇、と灰は確かに言った。鬼逆の伝言にあった名が、まさかここである。設啓の思いを知ってか知らずか、灰の言葉は明瞭である。

「耶來は逃げた者をどこまでも追って制裁を下すといいますが。蛇が紺を連れ去ったのはそのためでしょう」

「その場で殺すなどということを経ず、より酷い制裁を下すために連れ去った、ということか」

灰の言葉の先を奪うように、設啓が言った。続く言葉は幾分苦々しい。

「そして、連れ去られそうになっている場に行きあたり、蛇から紺を奪ったわけか」

あつさりと灰は頷く。そのような反応がかえってくるだろうと設啓は既にわかっていたものの、やはりこの相手はどこかずれていると思わずにはいられない。蛇が紺を奪った相手をただで済ます筈がない。それを、灰は迷うこともなく紺を助けたのだ。神経が太いのか、それとも単に先のことを見通す力がないのか　少し前の設啓ならば後者と考えるところだ。

「……あの少女のことはわかった。だが、肝心なことをまだ聞いていないな。須樹のことはどう考えているんだ」

「須樹さんは、耶來と媪の争いに巻き込まれた可能性が高い。今は媪に捕われているのだと思います。耶來の者達に捕われた後に媪の手に落ちたのか、それはわかりません。おそらく須樹さんは、多加羅若衆に咎を被せぬために若衆であることを決して明かさない筈です。そうであるならば、須樹さんは耶來の者ではなくともそれに敵対する者が……何れにせよ一連の出来事に関係がある存在と考えられているのだと思います」

「何時からそのように考えていた？」

「紺を連れ帰った夜です。ただ、確証を得ることはまだ出来ていません」

「このところ単独で動いていたのは媪のもとに須樹がいるか確かめようとしていたのか？」

「問い詰めるような設啓の言葉だった。」

「はい」

「調査を打ち切ったのは何故だ」

「須樹さんが媪のもとにいることはほぼ確実だと思っただからです。笠盛では卸屋達の警戒が益々高まっています。このまま留まり続ければ、若衆の動きが掴まれる可能性があります」

「尤もらしいな。だが納得は出来ん。調査を切り上げる決定をして若衆を笠盛から遠ざけ、一人残って何をするつもりだった？」

二人の応酬に、周囲の若者達が気押されたように聞き入る。

「一つには、紺をこのまま放っておくことが出来ませんでした。蛇はおそらく彼女を捜している筈です。紺は蛇達が笠盛で動いていることを知っている。蛇にすれば彼女が媼のもとに戻る前に何としても見つけ出し口を封じたいと考えている筈です」

「なるほど……。だが、須樹のことはどうするつもりだ？ 諦めたわけではあるまい。何を考えている？」

「正直に言えば、俺にもどうすればよいかわかりませんでした」

拍子抜けするほどに、あっさりと灰が言った。だが次の瞬間、その口元に笑みが浮かぶ。暗がりには浮かび上がるそれは、凄艶な翳りを帯びていた。

「今、この時までには」

張りつめた静寂が落ちる。

「多加羅若衆の副頭を、媼が不当に拘束せしめるものなり」

低く呟き、灰は床の紙に手を触れる。まるで、そこに宿る意図を読み取るうとでもするかのように、僅かに目を伏せて言葉を継いだ。

「この文が意味することは何だと思えますか？」

唐突に尋ねられ、設啓は眉根を寄せた。

「……それがわかれば苦労はせん」

「俺は、この文の狙いは、若衆の間に混乱を引き起こし、そして媼に対する不信の念を植え付けることだと思います」

設啓は灰の言葉を反芻する。不穩に投げ込まれた短くぞんざいな一文。実際、若者達は不安を煽られている。そして文の内容が真実であれば、その不安は容易に媼への怒りと敵愾心に形を変えるだろう。灰の指先で、文は滲むように白い。

「仮に多加羅惣領家がこの文のことを知れば、媼に対して並々ならぬ警戒を抱くでしょう。それが狙いだとすれば、この文を寄越したのは十中八九媼の陣営の者ではない。おそらくは媼と敵対し、その足元を掬おうとする者なのだと思います」

「……耶來の者、ということか……」

「それはまだわかりませんが、可能性は高いと思います。ただ、耶來が須樹さんのことや、若衆の動きを把握したのはごく最近、おそらくは数日の内のことだと思います。もし以前から俺達の動きに気付いていれば、紺がここにいることも見逃されなかつたでしょう。そうであれば、確実に蛇の襲撃を受けた筈です」

恐ろしいことを平然と言う。呑まれたように、誰も一声も発さなかつた。設啓はなおも内心を窺わせぬ相手を前に、おもむろに切り出した。

「須樹のことはどうするつもりだ。考えがあると言ったが、聞く限り打つ手は皆無に思えるぞ」

「この文の狙いが媼への不信を煽り、多加羅と緩衝地帯の不和を誘発させるのが目的であるとするならば、その逆を突けばよい、ということです。この文に踊らされて媼を敵に回せば、例えば多加羅惣領家といえども分が悪い。それならばいつそ媼を味方につければいい」

「敵の敵は味方、ということか？」

「そこまでは言いませんが、少なくとも正体不明の文の送り主よりも、媼の方が余程信じるに値するのではないかと思えます」

「味方につけるなどということが出来ると思っているのか？ どうするつもりだ」

「正攻法が一番いいでしょうね。正面から媼のもとに出向き、何者かが媼と多加羅との間に不信の種を蒔こうとしていることを伝え、須樹さんの解放を求める」

「……無茶な……だいたい惣領がそのようなことに頷く筈がないぞ」

呆れて言った設啓に、灰が返した。

「惣領には知らせません。媼のもとには俺が出向きます」

「な……」

設啓は続く言葉を失う。

「え……灰様が出向くって……そんな無茶な！」

「そうですね。媼っていやあ、緩衝地帯で絶大な力を持つ相手ですよ。そのようなところはこのこ出向いたりしたら、それこそ無事



「じゃすみません！」

口々に言う若者達の中で、設啓は唾然としていた。驚きを繕うことさえ出来なかった。その時設啓が灰に対して感じたのは、自身でも意外なことに些か力抜けするような思いだった。失望、とまでは言わぬ。だが、少なくとも灰の考えに期待を抱いていたのだと自覚するには十分なそれである。設啓には灰の言葉があまりに愚かしく聞こえた。それまでの彼の明晰さからすれば、まるで子供騙しのよくな案である。

「冗談だろう」

思わず問えば、返された視線ははっとするほど真摯なものだった。それに、設啓は表情を改める。

「いえ、冗談ではありません」

「そのような方法で須樹が救えると思っているのか？」

「では、どのような方法ならば救えると考えているのですか？」

逆に問われ、設啓は言葉に詰まった。

「勿論、突拍子もないことだとわかってはいます。ですが、多加羅若衆を巡り起こっている出来事の根底にあるのは、不信と疑念です。狼藉や噂は単なるきっかけに過ぎません。事がここまで悪くなったのは、人が疑心暗鬼に捕われて、物事を見通すことが出来なくなっているせいではないかと、そう思います。それを、俺は打ち破りたい」

強い響きには迷いの欠片もなかった。

「それに耶來の者達を媪が捕えていたならば、媪は今回の一件が多加羅若衆の仕業ではないと既に知っている筈です。須樹さんには何の咎もない。それを示せるのは多加羅若衆だけです」

「だが、須樹が若衆であると向こうが知れば、それを逆手に取られるかもしれないぞ。緩衝地帯に本来多加羅は手を出せんだからな」  
「媪はそのようなことはしないとします。何よりも、逆手に取ったところで益がない」

「ですが、このことが沙羅久に漏れたら……」

言ったのは、それまで黙っていた若衆だった。それにも、灰は淡々と返す。

「媼がこちらの言うことを信じるならば、決して事を公にはしなうと思えます。もしも沙羅久に伝われば、この機会を逃さずに緩衝地帯での影響力をさらに強めようとするでしょう。辛うじて均衡を保っていた二惣領家の力関係が崩れれば、緩衝地帯の自治がこの先続くかどうか微妙になります。どちらの所領にも属さずに自治を貫くことを誇りとしている緩衝地帯自らが、そのような危険を冒すことはないと思います」

「だが……媼が俺達の言い分を信じると思っか？」

「疑念に抗し得るものがあるとすれば、それは信念しかない。多加羅若衆自らが、媼のもとを訪れることに意味があるのです。こちらが言うことを信じるか否か、媼はそれを試されることになる。信じぬならば、まさに耶來の手管に吞まれることになるのだと……この文は若衆にとつては切り札になる。そこに、勝機があります。それに……俺は、須樹さんを信じています」

柔らかに灰が笑んだ。その言葉に彼が何を込めたのか、おぼろげながら若者達は悟る。須樹の人となりを知る彼らであればこそ、わかることだった。

不意に設啓が盛大な溜息をついた。それは滅多に感情を出さぬ彼にしては非常に珍しい。設啓は苦々しく言った。

「話はわかった。だが、媼のもとに一人で行くなどと、そのようなことは是認出来ん」

「ですが……」

「媼のもとには俺が行こう」

灰はその言葉に虚を突かれたように黙った。

「確かに、須樹を救うには小手先の方法では無理だろう。正面から、というのが案外一番いいかもしれん。だが、いかにそうであるうとも、惣領家の者が媼のもとを訪れるのはまずいだらう」

「そうですね。灰様は行くべきではありません。緩衝地帯に惣領家

の御方が来られていることを知られるだけでも大事です。ここは俺達に任せてください。若衆の信を示してやりますよ！」

一人が設啓の後に続くと、周囲の面々も次々に頷いた。それをぐるりと見やった灰に、設啓が重々しく言った。

「決まりだな。媼のもとには俺達六人が行く」

何事かを言いかけた灰を設啓が睨む。

「反論はさせん。多加羅若衆が媼のもとを訪れることに意味があるならば、これが一番いい方法だ。それがわからんわけではないだろう」

それに灰は黙り込んだ。確かに設啓が言うことには一理ある。己が多加羅若衆である前に惣領家の一員なのだと、それは紛れもない事実だった。そしてそのことが万が一明らかとなればどうなるかわかりました。頼みます」

漸く答えた灰に、設啓は頷いた。二人を囲む若者達はどこか晴々とした表情を浮かべている。それを設啓は苦々しく見やった。彼が媼のもとに行くと言ったのは、何も灰の言を全て鵜呑みにしたからではない。無謀だと囁く声が内心にはある。だが、設啓が声を上げねばどうなっていたか。この場合は既に灰が意図する流れに呑み込まれている。

疑念には信念をぶつける、灰の思惑は真実その言葉の通りなのか。否、と思う。灰が空手で媼の懐に飛び込む、そのような人物には到底思えなかった。確かな勝算があるからこそ、選んだ方法なのではないか。無論、それはこの一件を通じて灰と接したからこそ思うことだった。

さらに言えば、若衆自身が媼のもとをおとなうと自ら表明するのさえ計算の内ではなかったのか、と設啓は思う。何時の間にか己の望む方向に周囲を巻き込む。それは会議の時と同じ光景だった。設啓が言い出さなければ、逸る若衆達が結局は同じ結論を出していた筈だ。設啓が自ら赴くと言ったのは、若者達の手綱を締めるためでもあった。

だが、全てが灰の意図したとおりであるならば、一体何時からその流れに己は巻き込まれていたのか、設啓はそう思う。この場の主導権を握られた時か、調査を打ち切ると決した時か。それとも、更に以前からか。設啓にはわからなかった。

数日の内に媪のもとをおとなうことを決し、若者達は散会した。

## 77 (後書き)

我ながらよくもまあややこしい(と言うほどでもないですが)仕掛けを込めたものと、読み返しながら思います。読んでいただいている皆様はどう感じておられるでしょうか。先の読めない展開を意図して書いていたのですが、客観的にどうか、となると少しわかりません。

何はともあれ、少しでも楽しんでいただければ幸せです！

灰は背後から聞こえた物音に振り返った。暗闇に、設啓が扉に凭れるようにして立っていた。設啓だとわかったのは、階段を下りてくる足音が聞こえていたせいだった。

「どついつもりだ？」

何かを押さえつけているかのような設啓の声音だった。それに、灰はすぐには答えることはしなかった。答えることが出来なかったとも言える。まるで逃げ道を塞ぐように戸口に佇む人影から目を逸らす。灰がいるのは家の裏手にある厨房である。小さな四角い空間は微かに水の匂いがしていた。すぐに眠る気にはなれず、そして一人になりたくてこの暗闇に潜んだ。一体どれ程の時間が経っていたのか、耳を澄ませば彼らの他に人が動く気配はない。他の若衆は皆眠ったのだろう。

「はじめから、俺達に媼のもとへ行かせるつもりだったんだろう」  
設啓の声は、幾分面倒臭そうな響きだった。それは彼が殊更に己の心を秘する時に出る癖なのだと、ここ数日の内に灰は気付いている。答えぬ灰に、なおも設啓は言葉を続けた。

「調査を打ち切り、なおそれでもこの地に留まる者がいれば、お前には好都合だった。保身や目先の感情に捕われぬ者ばかりだからな。信念を語るに値する。そして仲間のためとあらば、後先考えずに媼のもとに出向くと言い出すような連中ばかりだ」

「考え過ぎです」

答えた灰に対して、設啓は鼻を鳴らす。

「生憎とその言葉を信じる程俺はおめでたくはない」

皮肉な口調で続けた。

「では質問を変えようか。お前はそうやって若衆を利用することに躊躇いはないのか？ 媼のもとを訪れるなど、惣領が知ればどうなる。罪にさえ問われるかもしれないぞ」

「惣領は皆を罪に問うことはしません」

「それを信じると言うのか？」

「……信じる信じないの問題ではありません。これは単なる事実です」

小さく、灰は息をついた。それはまるで溜息のように響いた。続く灰の声音に、設啓は耳を傾ける。

「須樹<sup>すき</sup>さんを媪のもとから助け出すだけならば、他にも方法はありません。ですが、闇雲に助けるだけでは何もならない」

「その方法とは何だ。媪のもとに忍び込んで救い出すということか？」

肯定も否定も伝えぬ夜の静けさに、設啓は己の言葉が的を射ていることを確信する。沈黙は雄弁だった。

「では何故、敢えて今回のような方法を選んだ？」

「須樹さんはこの先の多加羅に必要な人です」

それが全ての答えだとも言うような、灰の言葉だった。

「……もしも失敗したらどうするつもりだ？ 俺達とて無事では済まぬ」

「失敗はしません。媪は必ず、多加羅若衆を信じる筈です」

何を根拠に　そう問おうとして、設啓はその言葉を呑み込んだ。

「……どういうことだ？」

いや違う、と設啓は思う。問うべきはこのような言葉ではない。相応しい問いは

「ここ数日、本当は何をしていた？」

問いながら設啓は、闇に佇む輪郭を見つめていた。目の前のその姿が一体どのような形を纏っているのか、確固として在りながら、奇妙に掴み難かった。

その時不意に灰が動いた。素早く顔を巡らせると、厨房の奥に設えられた小さな戸口へと歩み寄った。扉の傍近くに立った灰に、設啓もまた近付いた。暗がりに慣れた目に、灰の顔が僅かに張りつめているのがわかった。無言のまま目線で問えば、灰はひそりと言っ

た。

「誰かが外にいます」

言われて設啓は扉の外の気配を探った。だが、彼には人の気配は微塵も感じられぬ。怪訝に灰を見やれば、相手は設啓の様子に頓着する様子もなかった。

「表から回ってみます。設啓さんはここに居てください」

止める間もあらばこそ、灰はあつと言う間に暗闇に姿を消した。まるで夜行性の獣のように、隙のない動きだった。設啓は半信半疑のまま戸外に意識を凝らした。

灰は家の玄関口にまわると外へ出た。表に面したそちらに人の気配はない。家の横手の細い路地を通り抜けると、すぐに裏手である壁に身を寄せ、灰は注意深く感覚の網を広げて路地を探った。そこには、微動だにせず一つの人影が立っていた。

無意識に広げていた怪魅けみの力でなければ感じ取れなかった。その気配は、あまりに密やかである。尋常の相手ではない。一体何者か警戒と緊張が身内を浸す。

「灰」

唐突に響いた声に、灰は目を見開いた。紛れもなく、その人影が声を発したのだとわかる。低くよく通るその声に、灰は聞き覚えがあった。忘れようもないその響きだった。

灰は半ば呆然としたまま、家の裏手に踏み出した。対する相手は、灯りがなくともその奇態な姿がわかる。夜よりもなお暗い長衣は、男自身の影から立ち上る漆黒の煙霧にも見えた。朱の帯がそれを分断する様は一条の傷にも似て禍々しい。片方だけ晒された眼は稚気さえ感じさせる煌めきと、冷やりと背筋が凍るような凄味とを感じさせた。

「何故……?」

「お前ならば、俺に気付くだろうと思ったのさ」



相手の答えは些かずれたものだった。

「何故ここに来たんですか？」

改めて問えば、相手は僅かに笑んだ。常に危険と隣り合わせに生きる男の、その笑みは物騒である。僅かに身構える灰の気配を敏感に察したらしい相手が、益々笑みを深めた。

「一言、伝えたくてな」

訝しく眉を潜めた灰に、するりと男が近付く。ひそりと耳元で囁かれた言葉は尚更不可解だった。

「お前の策謀に、俺も乗らせてもらおう」

咄嗟に相手の表情を窺おうとした灰だったが、それよりも素早く男は身を引くと曖昧に滲む夜の中へと半身を浸した。裂けるように口元が笑いを象り

「また、会おう」

一言残して男は去った。

暫しその場に立ち尽くしていた灰は、背後で扉の開く音にも振り返らなかつた。

「おい、今の奴は何だ」

対した人物に気を取られていたせいで気付かなかつたが、どうやら設啓は扉を僅かに開いて一部始終を見ていたらしい。問う声音に緊張が滲んでいた。それは半ば答えを確信した響きである。なおも男が去つた先を見つめる灰に、設啓が問うた。

「まさか……今のが鬼逆きさかか？」

灰は無言で頷く。

「鬼逆とどういふ関係なんだ」

思わずといった様子で問うた設啓に漸く灰は振り返った。さて、どうしたものか、と思案する。己と鬼逆の間に、そも何の関係も無いのだと、そう言つたところで設啓が信じるとは思えなかつた。

「兄弟、と言つたら信じますか？」

戯れに言えば、設啓が目を見開いた。まるで信じられぬものを見るかのようなその視線に苦笑し、灰は設啓とすれ違い家の中に入っ

た。

階段を昇りながら、灰は鬼逆が残した言葉を考える。一体何を伝えようとしたのか、男の真意は全く読めない。だが、男の意図が何であるにせよ間違いない物騒なことに違いないだろう。

小さな部屋の中、床にのべられた布団に灰はもぐり込む。訝えた思考に、静寂のどよめきが虚ろに響いていた。やがて軽い足音が聞こえ、設啓が部屋の中へと入って来る。寝台に横たわる音が背後に聞こえた。

眠りの淵は遠く、設啓は何も問おうとはしなかった。

風がしきりに吹いていた。一際高く、まるで獣の甲高い叫びのよな音をたてて強風が吹き過ぎた時、その相手は姿をあらわした。

蛇は噛んでいた香草 既に味も香りもなくなっていたそれを道端に吐き捨てる。はじめて対した時と同様に黒一色を纏う相手、始末屋は苛立ちを隠そうともせぬ蛇の様子を見やると言った。

「聞くまでもなさそうだ。どうやら不首尾に終わったようだな」

「てめえの言う通りにこっちはやったんだ！ 媼の屋敷にも言われた通りの経路で忍び込んだ。だが、あれ程の警備態勢だとは聞いていなかったぞ！ 無事逃げられただけでも褒めてほしいってもんだ！」

押し殺した蛇の声音である。朝早い時分、人が通らぬ街路を対面の場所を選んだとはいえ、今の笠盛はどこに卸屋の目が光っているかわからぬ。自然と、声を潜めての遣り取りとなった。

「容易いことではないと、はじめから言っておいた筈だ」

「……どうしろってんだ！ こっちは命張ってんだ！」

「言われた通り、と言うが、まさか若衆達のところを文を送ったのではあるまいな」

蛇は訝しく相手を見やった。始末屋に、媼のもとに捕われた若衆を奪うよう指示された。そして笠盛に來ているという若衆の目を媼

に向けさせるため、副頭が媪のもとにすることを知らせる文を送れと言ったのは他ならぬ始末屋である。

「ああ。若衆がいるとかいう家に届けた。てめえがそうしろと言っただろうが」

問い返した蛇に、始末屋は呆れ果てたように言い放った。

「これほど愚かとは思わなかったぞ。文を送るのは若衆副頭を奪うのに成功した後だ。失敗したにも関わらず文を送ってどうする」

「な……そんなことは一言も言わなかったじゃねえか！」

「ああ、それぐらいのことは言わずともわかつていると思っただからな」

「ふざけんなよ！ 何もかもこちらに押し付けて、てめえは高みの見物か！？ 始末屋だか何だか知らねえが、俺達が成功しなきゃ、てめえの立場だって悪くなるんじゃないかよ！」

思わず蛇は鋭く声を張り上げた。

「確かに、お前達がこれほどに無能だとわかつていなかった、私の手落ちでもあるな」

感情が欠けているのではないかと訝りたくなる程の冷静さで始末屋が言った。蛇はぎりぎり奥歯を噛みしめながら相手を睨みつける。

昨夜から蛇は一睡もしていなかった。媪の屋敷から何とか逃げのびた後は、手下達と隠れ家に籠り、まんじりともせず朝を迎えた。蛇が抱く危機感は、依頼に関するものだけではない。ここまで蛇の言葉に従順に従っていた手下達が、最近になってあからさまに反発するような態度を示していた。

相次ぐ不首尾に、手下達の間で漂う不穏な気配に蛇は気付いている。鬱積した怒りが、いつ己に向けられるかと思うと、おちおち目も瞑れぬ。だが、彼らがまだ蛇に従うのは、報酬を受け取るためには蛇の伝手が必要だからだ。それさえも危ぶまれるとなると、何時造反が起きてもおかしくはなかった。このような状況でなければ、始末屋に従うなど業腹である。だが、目の前の相手がどれ程気に食

わなくとも、莫大な報酬を得るためにはその意向を無視出来ぬ。

「俺達は出来るだけのことをやっているんだ。依頼主に言ってくれ。評議会で沙羅久（しゃらく）に権利を渡すという結論が出されるのは確実だ。結果を待つまでもねえだろ。西の元締めは俺達に逆らうことなど出来はしない。十分に仕事を果たしたんだから、もう報酬を受け取ってもいい筈だ」

絞り出すようにして言った蛇の言葉には、僅かに懇願の響きさえあった。

「お前の意見は聞かぬ」

始末屋の言葉は静かに、しかし敵として突き放す。蛇の言葉が、如何程の重みも持たぬのだと、それは告げている。蛇は目を細めた。「俺達を始末しようつてのか……？」

問いには答えず、始末屋は低く言った。

「耶来（やらい）からお前達を追って来ている者達がいるようだな」  
言葉を返しかねてばかりと口を開けた蛇に、始末屋は淡々と言った。

「何故知っているのか、という顔だな。私にもお前と同様に手勢がいる。少し調べればわかることだ。どうやら相当に厄介な連中のようだ。鬼逆、といったか。こちらの障害となるのはどうやら媪だけではないらしい」

「……大丈夫だ。鬼逆の手下どもはまだ俺達の動きは掴んではいない」

「そう思うか？」

「思うも何も事実あいつらは俺達を捜し出せていない。そうでなければとうに邪魔が入っている筈だからな」

「どうだかな。私が聞く限り、鬼逆という人物はそれほど迂闊とも思えん。お前達を始末するかどうか、その答えを知りたいならば、まだ猶予はあるとだけ言っておこう。だが、あと一つでも失態を重ねれば後はないと思え」

「もう失敗はしねえ！」

「それを信じたいものだ。まずは媪だ。何としても媪に捕われている若衆副頭はこちらの手に入れる。若衆のもとに文が行っているなら、益々先手を打たねば厄介だ。鬼逆も目障りだな。こちらも手を打った方がいい」

「媪の屋敷から若衆を奪うのは無理だ。鬼逆にしても手強い。簡単にはどうこう出来ん」

「打つ手はある。一拳に片を付ける方法がな」

揺るぎない始末屋の言葉に、蛇は戸惑う。一体どのような方法があるのか、彼には想像もつかなかった。あくまでも事務的な口調で始末屋は言った。

「指示は追って出す。私が用意した隠れ家には移ったか？」

「ああ。手下どももそこにいる」

「ではそこで次の指示を待て。決して勝手に動くなよ」

「わかった。だが、それが全て終われば報酬を受け取らせてもらう。評議会の前だろうとな」

「それは直接依頼主に言うことだな」

蛇は苛立ちを込めて始末屋をねめつけ、背を向けた。遠ざかる蛇の姿を、始末屋は冷めた眼で見つめていた。

やがて蛇が角を曲がり見えなくなると、始末屋はふと視線を転じた。空は厚い雲に覆われていた。

「雪が降るな」

ひそりと呟いた声音は、静けさに吞まれた。

蛇は始末屋と別れ、街路を足早に進んだ。入り組んだ路地に入れば風は吹きこまぬ。上空に吹き荒れる風音がどこか現実離れして聞こえた。

彼が向かった先はさほど離れてはいない場所だった。大通りの傍近くの路地である。そのせいか先程始末屋と落ち合った場所とは違い、人通りも多い。外套に包まり道を歩く人々の中で、一人の男が

壁に凭れて手元の紙を覗き込んでいる。その横に、さりげなく蛇は立った。見ると、男の手にあるのはどこぞの旅芸人の演劇を宣伝したもののらしい。安物の絵具がけばけばしく、大袈裟なうたい文句が躍っている。

「遅いじゃないか。もう情報はいらぬのかと思ったよ」

男が間延びした口調で言った。まだ年若い。情報を扱う卸屋の中では凄腕だと聞いたが、蛇にはどうにも軽薄な若造としか思えなかった。蛇は忌々しく相手を睨みつけた。

「おっと、そんな風に睨むのはやめてくれ。俺はこう見えて気が小さいんだ。それに、いいのかい？ とっておきの情報が入ったつてえのに」

「どんな情報だ」

男は気を持たすように首を振ってみせるが、険悪な蛇の形相に慌てて言った。

「わかったわかった。だからそう睨むなって。まずは情報料だ」

「この前払っただろうが！」

「あれは前払いだ。それに、この情報はでかい。何と言っても、鬼逆の弟の居場所だからな」

男は抜け目なくにやりと笑った。

「知りたいだろう？ この前の額に百上乗せだ。出さないんなら、まあ、諦めな。俺としちゃあ、別の奴にこの情報を買ったつていいんだ」

蛇は舌打ちをすると、懐から紙幣を取り出し必要分を男の手に素早く握らせた。何度か卸屋に接触し、その度に割高な情報料を取られている。鬼逆の弟の情報でなければ、到底出す気にはならぬところだ。今回のこれで殆ど手持ちの金はなくなる。だが、男が握る情報を思えば迷うことはなかった。

「早く言え」

次いで、卸屋が声を潜めて言った場所に、蛇は目を睜った。鬼逆の弟がいるという、その場所を蛇は知っていた。それどころか、蛇

はその場所を昨日訪れたばかりである。そしてそこに現在いる者達が何者か

「まさか……鬼逆の弟は多加羅若衆なのか？」

思わず問うた蛇に、卸屋が驚きを浮かべた。

「何だ、知ってるのか。こりゃあ参った。その分の情報料は取れねえな」

まだ取る気だったのか、と蛇は憮然とした。卸屋は悪びれた様子もなく肩を竦める。

「こちとらこれで飯食ってんだから、悪く取らんでくれよな。まあ、仰る通りで。鬼逆の弟は多加羅若衆だ」

「あの野郎……前々から胡散臭いとは思ってたんだ。まさか多加羅と繋がりがあったとはな……」

不穏な蛇の呟きに、卸屋はさして興味を抱いた様子もなく手の中の紙を弄んでいる。蛇は不意に卸屋に顔を振り向けると言った。

「どこからそんな情報を仕入れたんだ」

「お客さん、そいつはいくらなんでも言えねえな。情報源は絶対の秘密だ」

卸屋は言つと、ふらりと蛇から離れると雑踏へと紛れた。それを目で追いながら、蛇は次第に興奮に浸される。とうとう鬼逆の弟の居場所がわかったのだ。それまでに得た情報で、鬼逆の弟の名前が灰ということ、そして銀髪に藍の瞳という帝国民とは異質な姿であることは掴んでいる。多加羅若衆だというのはさすがに意外だったが、そうであればこそ、これまでその存在が秘されていたのか、と蛇は得心する。

昨日多加羅若衆に文を届けるために赴いた小さな民家、その中に目指す人物がいたのかと思うと、蛇は何とも奇妙な心地に陥る。だが、その偶然の接近が、彼には殊の外幸先良くも思われた。まさに獲物は彼の眼の前にいるのだ。それもほぼ手中におさめたに等しい。蛇は低く笑うと、手下が待つ街の外れへと向かった。

紺は目を覚ました。しみの浮いた天井をぼんやりと見つめ、寝返りを打った。敷布の温もりに頬を擦りつける。眠気はさほど残っていなかったが動くのが億劫だった。何故、こんなにも瞼が重いのか、と思う。

指先で瞼に触れるうちに、昨夜の出来事が脳裏に蘇ってきた。

夢を見た。恐ろしい夢。目が覚めて、その後のことは記憶が曖昧だった。灰が肩に着せかけた外套の温もりと、柔らかく包みこんできた彼の体温だけが鮮明だった。必死に縋りついて。何時の間にか眠ってしまっただけらしい。

(私……何を言ったんだっけ……)

記憶の断片を繋ぎ合わせるほどに、後悔の念が渦巻き紺は体を縮める。決して誰にも言ってはならぬ、彼女の胸にだけ秘めた過去だった。何故、灰に吐露してしまったのか、己でもわからぬ。例え誰に言ったとしても何もなりはしない。全て己が負うべきものだった。その罪だった。一時示された優しさに、甘えてよい筈がない。

だがわき起こる悔いとは裏腹に、昨日まで感じていた逃げ場のない圧迫が減じている。まるで涙とともに洗い流されたように、胸の奥に巢食う凝りが軽くなっていた。それは体そのものがふわふわと浮きあがるような奇妙な浮遊感すら伴い、紺は戸惑う。灰は紺がしたこと聞いても、責める言葉一つ言わなかった。思い出すほどに包み込むように温かいそれが、寄る辺ない浮遊感も相まって紺を不安にした。

相手が軽蔑を、弾劾を向けて来たならば紺はそれを受け入れることが出来る。それだけのことをした。死を願いながら最後の瞬間に全てを振り棄てて逃げた。皆を見捨てたその罪を自覚しているのだから。責められて当然なのだ。その罪業に捕われて生きるのが己に相応しい。そうでなければ、どうやって生きていけばいいという



のだ。

蛇に飼われていた時は、來螺らいすいの裏側が全てだった。來螺の外に何があるか考えないわけではなかったが、彼女は夢見ることすら知らなかった。ましてや幸せを望むなど、苦しみを耐えるだけの生活の中で出来よう筈もない。希望を抱くことは、紺にとつて徒勞だった。ただ漠然と、外には苦しみも悲しみもないのだろうと、羨望すら覚えずにそう考えていた。

あの夜逃げて、はじめて彼女は知ったのだ。裸足で駆けながら、大地の固さと冷たさを。小石で切った足裏から血が流れて、それを手で押さえながら、紺は外にあるのが幸せでも温かさでもないとかかった。ただ一人、夜の底に行くあてもなく、小さな自分の体があるだけだった。捕われていた壁の外は茫漠として寄る辺なく、漸く得た自由はあまりに空虚だった。

紺は掛け布を握り締める。

時を戻せたら……開け放たれた扉を前にしたあの時に。そうすれば炎の向こうに取り残された子供達のもとに向かうのに。そこまで考えて紺はぎくりとした。内心で、小さく囁く声をした。

本当にそうか？ お前は、本当に引き返すのか？ あの中へ、死んででも逃れたいと思ったあの場所へ、皆を助けるために戻ることが出来るというのか……

「嫌だ……戻りたくない……」

知らず知らずのうちに呟き、呆然とした。その言葉が、紛れもなく己の本心だとわかったからだだった。それはまるで昨夜流した涙のように、止める術もなく零れ落ちた。蛇は恐ろしい。來螺にも戻りたくはない。だが、炎の中に皆を取り残してきたことは、悔いでいる筈だった。

（悔いている。私は……何度も戻るべきだったと、そう思った……）

だが、そうすれば蛇から逃げるのがかなわなかったのだから？ ……蛇から逃れる唯一の機会を捨てる事が出来るというのか？

出来はしまい。お前の罪の意識など、所詮その程度のものなのだ。他の者を犠牲にしても生きたいと願う、その汚い本性から目を逸らすための手段でしかない。己を己で籠絡する浅薄な手管というわけだ。

冷やかな内心の反駁に、何故か灰の眼差しが浮かんだ。

責められれば 己で己を責めていれば余計なことを考えずに済む。流されるように笠盛かたびらに辿り着き、皆を置き去りにした罪悪感を抱きながら、罪悪感そのものを何時の間にか言い訳にして、与えられた場所で無為に時を過ごした。己には希望を抱くことも、幸福を求めることも出来ぬのだと それは絶望だろうか。それとも歪な安寧だったろうか。少なくとも過去の罪に捕われていれば、己の汚さに気付かずに済んだ。

灰は責めなかった 紺は思う。灰は紺を拒みも責めもせず、決して断じようとはしなかった。そこにあるのは呵責無く紺の本心を暴く静けさだった。ありのままの姿を見通す容赦のない寛容さだった。

つまるところ、紺は灰から厭われることを望んでいたのかもしれない。そうすれば、露わになりかけていた本心を、再び罪の意識という紗で包むことが出来たのだ。しかし灰は全てを受け止めただけだった。それは、残酷な優しさであるかもしれない。紺の抱える恐怖だけでなく、罪悪感をよすがに敢えて目を逸らしていた我執さえも、あるがままに包み込む。だがそうであるからこそ、はじめ紺は偽りなく心の底から泣くことが出来たのかもしれない。

(でも、それじゃだめだ)

見捨てた仲間への罪悪感を本心から目を逸らす手段としたように、自分を支えるよすがとして灰に何時の間にか重荷を負わせてしまう。何の関わりも無い相手だというのに、ただあるがままに受け止めてくれるというそれだけで、際限なく灰に甘えることになるのではないか。そのようなことは許されまい。

(それに、私がいたら迷惑をかけてしまう……)

灰以外の若者が己に向ける眼差しはどれも好意的ではない。これ以上灰の立場が悪くなる前に、そして蛇が紺を見つけ出す前にここを出て行かなければ、と思う。

紺は掛け布から手を離れた。残された依怙地な皺を指先で撫でる。今何時かと思やっただ窓の向こうは仄暗い。階下の物音に耳を澄ませると、丁度階段を昇って来るらしい足音が聞こえた。じっと動かずにいると、足音は扉の前で止まった。扉を叩く音に続いて、声が聞こえた。

「起きているか？」

灰の声ではない。落胆とも安堵ともつかぬ思いが込み上げる。

「はい」

「食事を持って来た。扉の前の机に置いておく」

紺は慌てて寝台から抜け出すと、扉を開いた。既に階段に向かっていたらしい若者が驚いた顔で紺を振り返った。

「あの……灰はいますか？」

「いや、もう出かけられたが……」

中途半端に言葉を切った若者が視線を彷徨させた。

「昨日はご免なさい。私、灰にも謝りたくて。それと……あの……灰を責めないでください。私が無理矢理ついて来たの。迷惑かけないようになるべく早くここを出て行くから」

早口に紺は言った。そのまま扉を閉めようとしたが、若者が不意にその扉を押さえる。驚いて顔を上げた紺を見やり、つかえながらも言った。

「その……君はここにいればいいんだ。出て行く必要などない」

「……そんなこと、私が誰だかわからないから言えるんだわ」

「君は灰様が連れて来た人だ。あの人が君のことを守ると……守りたいんだと昨日言っていた。俺にはそれで十分だ。俺達で君のことは必ず守るから、安心してくれ。今まで邪険にして悪かった」

それだけを言うと、紺の手に食事が乗った盆を押しつけるように

して、去って行った。

紺は扉を閉じると盆を抱えて寝台に座る。落ち着かない心地で、汁物と飯だけが乗った盆を見つめた。いかにも料理には不慣れな若者が作ったものらしく、汁物の芋は不器用に形が不揃いで、一口飲めば塩味が濃かった。

「しょっぱい……」

紺はぽつりと呟く。無性におかしくなって紺はくすくすと笑った。おかしくて、悲しい。どんな状態でも腹は減る。それが生きるということなのだ。ここを出ると心に決めながら、青年が紡いだ言葉にまたも気持ち揺れている。守りたいと灰が言ったという、それに従うように、ここにまだいいのだと安堵している。守ってほしいと渴望している。

笑いながら込み上げるものを抑えかねて握った拳で口元を押さえる。ひく、と喉が鳴った。だめだ、と思った時には遅かった。止めようもなく涙がぼろぼろと零れ落ちる。しゃくり上げ、盆の上に屈みこむと、甘い飯の匂いと湯気が額のあたりにふわりと広がった。

泣く資格など自分にはないのだと、悲しみや、ましてや辛さなど置き去りにしてきた子供達のことを思えば、感じることさえ罪なのだと思っていた。それが、まるで体の内で何かが壊れたように、涙が止まらなかった。

生きたいのだ。

どれ程罪悪感を抱こうと、ただ生きていきたいのだ。

「……絶対に、戻りたくない。絶対、戻らない」

今一度あの炎の中に立ったとしてもか？ 皆を見捨てるか？ ……そのことでずっと苦しむことになるかわかってなお、そう思うのか？

「そうよ」

紺は呟く。苦しみは消えない。それでも己はあの扉に向かって走るだろう。

何度でも、走るだろう。

それが、紺にはもうわかっていた。

空は一面薄墨に染まっていた。濃淡は滑らかに、時に不穩に暗く、そして高かった。確かな質量を感じさせながら、掴みどころなく軽くも見える。雪雲である。

まるで雲そのものが綻び地に落ちるように、柔らかく冷たい切片が降り出したのは、宇麗うれいが笠盛の北に向かう途中であった。頬に触れた感触に思わず上空を見上げれば、ふわりふわりと花びらのように舞う雪が視界を斑に染めた。寒さに身を竦め道行く人々も、同様に顔を上げ、外套を掻き合わせて足を速めた。

この地方では雪はさほど降らない。だが、寒さが体の芯に沁み入るように厳しい日に、時折激しく降ることがある。降れば街が一面白く染まる。そのような日には外を漫る歩くよりも、家の中で温かな炉辺にいる方がよい。降り出した雪に、露店の店主も諦め顔で、まだ昼の時分だというのに店を閉める者も多かった。客足の遠のく一日である。

次第に閑散とする街を、宇麗は足早に通り抜けた。

その日、宇麗は朝から街の各所をまわっていた。向かったのは蛇の搜索に当たる部下達のもとである。街の至る所に見張りを配置しているが、如何に巧妙に隠れたものか、腕に入れ墨のある耶來の男は杳として行方が知れなかった。既に何日も監視を続ける部下達の疲労もある。直接に赴いて鼓舞するのが目的だった。

もっとも、部下達を慮った以上に、彼女自身が体を動かしていた気分でもあったのだ。ここ数日の煩悶が、益々憂鬱に感じられる天候である。蛇の存在もさることながら、蛇に連れ去られた紺のことが常に心にかかっていた。日が経つほどに、紺が無事生きている可能性は低く思われる。口に出さずとも、多くの者が既に紺の命はないだろうと考えているだろうことを宇麗は知っている。

そして媪の屋敷に捕える一人の青年の存在である。彼が果たして

多加羅若衆なのか、そして緩衝地帯においてその存在がどのような意味を持つのか、それを見極めねばならぬ。緩衝地帯の命運を決する評議会の開催は刻々と近付きつつある。課された責任の重さと、それを果たすことが出来ず立ち尽くす己への不甲斐無さばかりが募っていた。

宇麗は外套の頭巾を目深く被ると、足を速めた。

街の北は笠盛の中でも寂れた一角である。神殿が建ち比較的大きな家々が連なっているそこは、嘗ては裕福な人々が住み華やかさを誇った時もあった。だが、市場の立つ中心部に活気を奪われ、今では閑散とした雰囲気漂う。神殿があるために、その限界での商いのものが憚られ、発展から取り残されることとなったのである。今では空家も多く、日中でも人通りは少ない。

これから向かう先に蛇が潜む可能性は低いと宇麗は考えていた。寂れた限界で見知らぬ者が入りすれば目につく。蛇がそのような場所を隠れ家を選ぶとは思えなかった。念のため見張りを置いてはいるが、蛇が潜んでいれば既に報告が来てもおかしくはなからうと思う。

次を最後に一旦媪の屋敷に戻ろう、宇麗がそう考えた時だった。

視界の端を何かが掠めた。宇麗の反応が遅れたのは気が散じていたせいではなかった。己の考えに集中していたが故である。それでも振り返った宇麗が、暗色の影が人気のない一角に踏み入るのを捉えるには十分だった。

宇麗は目を細めると素早く人影が消えた区画へと歩み寄る。もとは瀟洒だったであろう屋敷。長年打ち捨てられ、雑然と荒れ果てたその横に、薄暗い道が続いていた。その先に一瞬見えた人影は、さらに角を曲がって姿を消す。咄嗟に宇麗は走り出していた。

何が、と思う前に突き動かされる。垣間見えたその姿が、妙に目に焼き付いていた。息を殺すようなその気配故であったかもしれぬ。あるいは、舞い落ちる雪のせい、己の吐く息のせいか白々と霧に沈む心地の視界に、その暗い色彩が奇妙に浮いて見えたせいかもしれぬ。

れなかった。一人で追う危険は承知していたが、不審な人影をこ  
で見逃すわけにはいかなかった。

角を曲がった宇麗は舌打ちをする。伸びる先に、目指す人物の姿  
はなかった。さほど狭い道ではなかったが歩く人の姿もなく、奇妙  
に暗い。その先が滲むように掴み難いのは、不意に雪が強まったせ  
いだった。

宇麗は素早く振り返った。家壁に隠されるかのように、階段が横  
合いに伸びていた。腰の剣をいつでも抜けるように身構えながら、  
宇麗は視線を上げた。段の最上に、一人の男が立っていた。頭から  
被る形の外套は黒く、顔はその影になつて見えぬ。

「何者だ」

宇麗の問いは些か唐突であり、脈絡がなかった。もっともこの状  
況で、目の前の男がわざと宇麗に後をつけさせたのだろうと考える  
のが自然ではあったが 果たして、男は低く笑い声を上げた。地  
を這うようにそれが響いた。

「さて、何者か……俺とてわからん。俺がお前達の味方となるか、  
それとも敵となるかはお前次第だ」

くぐもった声から、おそらく顔の下半分も用心深く隠しているだ  
ろうことが察せられた。宇麗は無言で相手を睨みつける。剣呑なそ  
れが、次の瞬間には驚きに見開かれた。男が不意に左腕を掲げると、  
その外套を捲り上げたのだ。晒された腕 そこに狂おしくのたう  
つ炎が絡みついていていた。炎でありながら、青味を帯びて冷たく暗い  
いや、炎ではない

「……蛇……」

禍々しささえ感じさせて、幾筋もからみあう蛇の姿がそこにあっ  
た。まるで生きてうねっているかのようである。

「俺を知っているのか」

椰揄の声音、それに宇麗は油断なく身構えた。

「お前が耶來いらいの蛇か。それならば味方などよく言えたもんだね。  
お前はあたし達の敵だ。どういふつもりかは知らないが、追いつめ

られて漸く尻尾を出した、というわけか」

言い放った宇麗に、蛇が返したのは不可解な冷笑だった。

「どうやら俺のことを端から敵と決めつけているようだが、それはどこから仕入れた情報だ？ お前達と敵対しているのは俺ではない」

「何だと？」

「今緩衝地帯で起こっていることは、俺達が起こしたことはない。鬼逆きさかという男を知っているか？ 緩衝地帯での一連の騒ぎの背後には奴がいる」

宇麗は答えなかった。実際は答えることが出来なかったのだ。辛うじて、内心の驚愕が表情に出ぬように抑え込む。それでも沈黙に宇麗の思いを読み取ったのか、相手が笑みを深めたらしい。

「俺達は鬼逆を追って来た」

「証があるか？」

宇麗が言ったのは、真に問うためではなかった。相手の言葉の不可解さに巻き込まれる心地の危うさ、己の思考が流されぬよう手繰り寄せるためだった。

「一つ教えてやろう。お前達が先だって捕えた男達は鬼逆の手先だ」  
「……」

「漸く奴らの居場所を掴んだと思ったら、お前達に目の前でかすめ取られたわけだ」

しんと足元から這い上がる冷気に、宇麗は絡み取られたように動けない。男の声の低さに、雪の吸いつくような静けさが際立つ。

「何故、鬼逆を追っている？ 同じ耶來だろう」

「奴は帝国内で動かぬという耶來の掟を破った。制裁が必要だ」

「生憎と信じることは出来ないね。それに、どの道我らは耶來の者がこの街で勝手をするなど許さぬ。それは鬼逆であろうと、お前達であろうと同じことだ」

宇麗の言葉にも、相手はいつかな怯んだ気配を見せなかった。脅しを気にかける様子もなく言った。

「俺とてこの地でお前達卸屋連中と対立はしたくない。好き好んで



姿をあらわしたわけではない。俺はお前達と取引がしたいだけだ」

「取引だと？」

「ああ、そうだ。俺達の仲間を返してもらいたい」

「ふざけたことを言う。お前達の仲間だと？」

「お前達のところにいる筈だ。年の頃十九程の若者……彼は鬼逆の動向を追っていた俺達の仲間だ。鬼逆の手下どもの動きを探らせている矢先、お前達に捕えられた」

「……何を……」

宇麗の声が掠れた。剣の柄を握り締める手が、強張っていた。

須樹……内心に眩き、目の前の男の言葉を反芻する。あの青年が、蛇の仲間 耶來の一員だと言うのか。だが、緩衝地帯で不穏な騒動を起こしていたのは蛇ではないのか。

（戯言だ！ 首謀者は蛇の筈だ。それに……あいつが耶來であるわけがない）

内心の思いは、すぐに戸惑いに吞まれた。では、一連の出来事が蛇の仕業だと、あの青年が多加羅若衆だと知らせたのは何者だったのか 夜陰に紛れて宇麗達にそう知らせたのは、得体の知れぬ影である。正体がわからぬ分、蛇よりも怪しいと言える。

宇麗の驚きと迷いを見透かしたように、蛇が低く笑った。宇麗は相手をねめつけると言った。

「取引、と言うからにはお前は我らに何を渡すつもりだ」

「紺という少女だ」

宇麗は息を呑む。

「何故、紺が……！ お前達のところにいるということか！ 孤児院を襲ったのはやはり貴様か！」

「おっと、落ち着いてくれよ。あの少女をお前達のところから攫ったのは俺達ではない。さつきも言ったろう。ことを起こしたのは鬼逆だ。数日前、孤児院に忍び込み捕われた者を殺したのは鬼逆の手下達だ。そいつらが紺を連れ去った」

「では何故」

「あの夜、孤児院から逃げる鬼逆の手下どもは俺達が捕えた。その際に少女を無事保護した、というわけさ。無論、すぐに解放することも出来たが……仲間がお前達のところへ捕えられているからな、交換といこうじゃないか。悪い話ではない筈だぞ」

宇麗は油断なく男の姿を見つめながら、必死に考えを巡らせる。内心を見透かされぬよう、咄嗟に繕った表情は冷笑だった。

「あまりに突拍子がなくて到底信じる事が出来ん。紺が無事お前達のところにいるという証拠はどこにある。それに、あの若者がお前達の仲間だと？ 本人は多加羅若衆の副頭だと言っているぞ」

男を試すための言葉だったが、相手は動揺した様子も見せなかつた。含み笑いすら感じさせる余裕の口調である。

「そいつは機転だな。多加羅若衆だということにしておけば、お前達の動きを縛ることが出来るからな。どれ程にあやしい人物であろうとも、多加羅若衆であるという疑いがあれば、お前達は迂闊に手が出せんだろう」

機転　そう言われれば、宇麗にも蛇の言い分は尤もに思えた。

では、あの影は何故青年が若衆などと告げたのか　宇麗の思考をなぞるように、男が言った。

「しかし、あいつが自らそのようなことを言うとは考えられん。もしや鬼逆にいつぱい食わされたんじゃないのか？ あいつを多加羅若衆だとも吹き込んでおけば、媼おつなといえども万事に用心深くなるだろう。そうすればお前達に邪魔をされたくない鬼逆にとっちゃ、動きやすいつてわけだ。何より、あいつは全ての所業が鬼逆の仕業と知っている。拷問でもされてあいつが真実を口にするのを誰よりも恐れているのは鬼逆自身だからな。それを防ぐためかもしれない」

笑い含みに言った男が腕を下ろす。外套の内に消えるその一瞬、まるで蛇の尾がぬらりと揺れたように、宇麗には見えた。

「証がほしい。本当に鬼逆が一連の出来事的首謀者ならば、お前達が捕えた者どもをこちらに引き渡してもらいたい。話が本当ならば、そいつらは孤児院に忍び込んだということだろう。媼の縄張りだ勝

手はさせせん。騒動を起こした者はこちらで処分を行う」

「そいつは無理な相談だ。それはあんたらの掟であつて俺達の掟ではないからな。鬼逆は耶來が裁く。その手下もだ。引き渡すことは出来ん」

「だが、お前の言葉が真実かどうかの証はどうなる？ そんな話を容易く信じるでも思っているのか？」

「信じる信じないは自由だが、取引に応じる方が賢明だと言つておこつ。取引の刻限は明日の十七の刻、場所は街の北東の外れにある廃屋だ。来る人数は三人まで、それ以上で来たり武器を持っている者を見た時には少女を殺す」

「……紺に手を出してごらん。お前の仲間とて無事には済まない」

「それはお前達次第だ」

低く言つと、男は素早く身を翻した。滲む白に溶けるようにして消える。宇麗は咄嗟に階段を駆け上がり、男が消えた先を見た。しかしそこにはただしんと降る雪の影があるだけだった。

宇麗は立ち尽くす。剣の柄を握り締めたままの手が、凍えるように冷たい。関節が強張る程に強く握りしめたまま、宇麗はそこから手を離すことが出来なかつた。思考が渦巻き、空転する。しかし、一つだけ確かなことがあつた。この取引は公平ではない。蛇の言葉が真実であるのか、それとも影の言葉が真実であるのか、それを判断するものが宇麗には何もないのだ。

（いや、それは違うな）

苦々しく考えた。あの青年だ。彼だけが、全てを明らかにすることが出来る筈だ。多加羅若衆なのか、それとも蛇の仲間、耶來の一員なのか。

（あいつが耶來……？）

信じられぬ。これまで見て来た青年の様子から、耶來の一員などという発想は全くわかなかつた。口を閉ざすのは多加羅若衆であるが故だと、宇麗は殆ど確信していたのだ。だが、彼が耶來であればそれとて口を閉ざすのは尤もではないか。

男の腕に蠢く蛇の、その残像が瞼の裏に揺れる。それに、まるで思考までもが縛られたかのような感覚に陥る。おぞましさは、容易には消えなかった。

人だ

ふと浮かんだのはその言葉だった。あの青年がぽつりと零した。

一体何が彼を支えているのか、そう問うた宇麗に対する答えだった。人を信じる思いのだと、彼は確かにそう言っていたのだ。

宇麗は漸く柄から手を離すと、足早にその場を去った。

## 79 (後書き)

今更ながら、物語の展開にほころびを見つけることがあり、そのたびにひやりとします。書いている時は気付かないものですね。修正するとなるとかなりさかのぼる必要もあり、とりあえずそのままにしていますが……。でもまあ、書いた時点での力量、ということなのでしょう。今なら違う展開にする、と思う反面、この展開は過去の自分しか書けなかつたんやな、とも思うわけで。

ではでは、次も迅速に更新！ を目指します！

媪おぢいの執務室には三人が集っていた。部屋の主である媪、宇麗うれい、そして黄おうである。

宇麗は傍らに座る黄と、正面の媪に向かって言った。

「以上が、蛇との会話です」

蛇との思わぬ遭遇について語った宇麗は二人の反応を見やる。既に詳細を聞かせていた黄は、改めて聞かされた内容に表情が険しい。対象的に媪は眠るように瞳を閉じている。穏やかにも見える表情だったが、特に集中して考えを巡らせる時に媪が見せるそれだった。宇麗と黄は媪の言葉を待つ。

宇麗が蛇と会話を交わして既に一日が経っている。そして昨日から所用で笠盛を離れていた媪が戻ったのが一刻程前である。

媪が瞳を開ける。ゆっくりと言った。

「面白いこと」

ふふ、と笑う。書物をくるように柔らかく手指を動かして、とんと卓に人差し指を置いた。

「ここに私達おろしや卸屋」

とん、と左にずらして指さす。

「ここに蛇」

さらに三角を描くように指を動かす。

「そしてここに鬼逆きさか」

まるで戯れのように囁きながらも、媪の瞳は硬質に煌く。

「渦の中心はどこかしら。まるで謎解きのようね」

「はい。改めて須樹すけを問い詰めましたが、何も言おうとはしません。宇麗は苦々しく言った。昨日屋敷に戻り、ことの顛末を黄に話した後、すぐに青年のもとへと向かった。

蛇を知っているか？

そう問うた宇麗に対して、青年は肯定も否定もしなかった。蛇の

仲間なのかといくら問い詰めても何一つとして答えようとせぬ。

「そう。困ったものね。貴女自身はどう考えているの？」

「多加羅若衆だとすれば反論すらせぬのが不可解です。耶來やらいの一員などと言われて、黙っているとも思えません。それに先日屋敷に忍び込もうとした者達の狙いが彼だとすれば、それが何を意味するのか。あいつが耶來ならば、大方の説明がつくのです。蛇が忍び込んだのであれば、仲間を救うため、あるいは殺すためでしょう。鬼逆が忍び込んだのだとすれば、緩衝地帯での所業が己の仕業であると知るあいつの口を封じるため」

「そうね。つまり、彼が多加羅若衆だと伝えてきた者ではなく、蛇の言い分を信じる、ということかしら」

宇麗は顔を顰める。迷う素振りを見せながらも、意を決したように言った。

「……あたしは思っています。今回緩衝地帯で起こったことを、蛇の言葉が影の言葉か、そのどちらを信じるか、という問題に帰して良いのか、と。信じるか否か、それはもっと別のところにある。たった一つ確かに目の前に存在するもので判じるべきではないでしょうか」

「確かに存在するもの……？ 何だ、それは？」

黄が問う。

「須樹です」

宇麗は答え、媼を見つめた。一晩悩み抜いて出した結論だった。

「媼、以前彼が何者かわかるような気がする、と仰っていましたね」

「ええ」

「彼をどのように思いましたか？」

「それは貴女が見極めるよう、言った筈よ」

「ですが、もう時間がない。蛇との取引は十七の刻、あと数刻しかありません」

「宇麗」

媼の声音は静けさに満ちていた。

「私は今回の一件、貴女の判断に委ねたいと思っているのよ」

「そんな……あたしなど、まだ若輩です！　このような大事に、そんな判断は出来ません！」

「貴女に重荷を背負わせていること、それは私もわかっていませう。でも、貴女が言うように私達が判断するよすがは彼しかいないわ。彼を最もよく知っているのは宇麗、貴女なのではないかしら」

それに宇麗ははつとする。媼が言う通りだった。

「貴女は彼をどう思っているの？　彼を耶來の一員だと思っているのかしら？」

静かに問われ、宇麗は眼差しを落した。握りしめた己の拳を見つめ、言った。

「いえ、あたしには、あいつが耶來だとはどうしても思えません。己の欲得のためだけに人の命すらも奪う、そのような連中と同じだとは到底思えないんです」

そう、と媼は呟く。

ふと静寂が落ちたその時、慌ただしく扉が叩かれた。媼の答えも待たず、扉が開かれる。ただならぬ形相で入って来たのは屋敷の周困で警備に当たっている若者の一人だった。

「どうした」

宇麗の問いに、若者は肩で大きく息をつくと言った。

「あの……媼にお会いしたいという者が来たんです。通すべきかどうかお聞きしたくて……」

「媼は事前の約束がなければお会いにはならない。そんなことも忘れたのかい？」

宇麗の厳しい声に、若者は大きく首を振った。

「それが、多加羅若衆を名乗っているんですよ！　この屋敷に自分達の仲間が捕われているから返してほしい、と」

「何だと！」

黄の大音声が響く。宇麗は驚きに息を呑み、咄嗟に媼を振り返っていた。媼は一瞬目を睜り、そしてゆるゆると、まるで花が綻ぶよ



うに微笑む。艶やかな笑みに乗せて、歌うように言った。

「どうやら、全ての役者が揃ったようね」

戸惑いもあらわに立ち尽くす若者に媼は言った。

「すぐにお通ししなさい」

「あ、はい！」

弾かれたように駆け出して行った若者の足音が遠ざかる。媼は宇麗と黄を見やる。

「貴方達も同席してちょうだい。何が真実か、見極める正念場かもしれないわね」

宇麗と黄は頷くと、開け放たれた扉へと視線を向けた。

執務室へと招じられたのは六名の若者達だった。中でも一際落ちて見えて見える青年が先頭に立ち、部屋の中へと臆することもなく踏み入って来る。それを、媼達三人は立って迎えた。

媼の背後、黄と左右を守るように立った宇麗は、目の前の一団を見やった。若者達は何れも簡素な平民服を纏い、剣を身に帯びるわけでもなく一見すると街衆と差異はない。だが、注意深く見やると、幾つかの特徴がわかった。身ごなしには無駄がなく、六人ともに背筋の伸びた立ち姿である。立ち位置も明確に序列があるように思えた。申し合わせてそうしたのでなければ、常日頃から身についた習慣によるものだろう。

「私は多加羅若衆副頭の設啓せつけいと申します。突然に無理を申し上げたこと、お詫び申し上げます」

中心の青年が言った。

「私が媼です。多加羅若衆の方々がこのような場所に来られるなんて、どのような御用件かしら」

媼の声音はまるで孫に対するように柔らかである。若者達は驚いたようだった。緩衝地帯を裏から牛耳る媼が、如何にも優しげな初老の女性だとは思わなかったのだらう。だが、中心に立つ青年、設

啓は表情一つ変えるわけでもなく、淡々と答えた。

「単刀直入に申し上げれば、こちらに捕われている我らの仲間を返して頂きたいのです。名は須樹、多加羅若衆において副頭を務める男です」

「まあ、面妖だこと。ここに貴方達のお仲間がいるなどと、何を根拠にそのようなことを。貴方達が緩衝地帯でこのようなことをするとは、己が立場を何と考えておられるのかしら」

おっとりと言った媼の言葉には、先程の温かみは欠片もなかった。途端に張り詰めた空気が部屋に満ちる。

「媼、私達は腹の探り合いをするためにここに来たわけではありません。まずは、私達の話聞いて頂きたい」

その言葉を測るような間合いの後、媼は頷くと言った。

「いいでしょう。まずは貴方達の話聞かせてちょうだい」

すすめられるままに若者達は卓を挟んで媼達と向かい合う形で座る。設啓は早速に話を切り出した。

「実は私達は数日前から笠盛に留まり、あることを調べていました」  
その第一声に、宇麗は厳しく問うた。

「多加羅若衆が密かに緩衝地帯で動いていた、ということか」

「はい。本来ならば不干涉という原則を破る許されぬことです。ですが、私達にはやむにやまれぬ事情がありました。まずは何故、私達が緩衝地帯に赴いたか、そこからお話し致しましょう」

宇麗は媼の隣りで、一言も聞きもらすまいと耳を澄ました。虚偽の欠片を見逃すことがないよう、若者達の所作を見つめる。だが、目の前に座る六人の表情はどれも迷いが無い。並々ならぬ決意があらわれているようだった。

「全てはこの冬緩衝地帯で起こっている不可解な出来事に端を発しています。無論、貴方達の方がより詳しく知っておられるとは思いますが、冬の始め頃から、緩衝地帯の各地で何者かによる狼藉が起こり、何時しかそれが多加羅若衆の仕業であると考えられるようになっていました。そのことを我らが知ったのは一月程前のことです」

設啓の言葉は簡潔だった。

「無論、我らは潔白です。しかし多加羅若衆の名誉に関わることであるため、まずは私を含め若衆副頭の四名がこの一件について話し合い、私と須樹が直接に緩衝地帯に赴いてどのような事態になっているのかを調べました。幾つかの村や街を回り狼藉の実態や噂を調べ、結果的には容易に対処出来ることではないと判断し、多加羅若衆としてどのように動くべきか会議を開くこととなったのです」

誰も言葉を差し挟まぬ中、設啓は明瞭に語る。

「ですがその時副頭の一人が、緩衝地帯で起こる一連の出来事が、多加羅若衆を意図的に貶めるために謀られたことではないか、とどのように考えたのです。彼はその考えを須樹に話しました。その数日後、若衆頭も交えての会議の前日に、須樹は笠盛に赴いたきり消息を絶つたのです。丁度、冬季修報会が開かれるあたりのことでした」

冬季修報会　その言葉に、媼はあら、と呟いた。修報会とは季節ごとに卸屋が開く集会だった。卸屋の多くは属す縄張りを持っており、季節の始め、その集団ごとに開かれるのが常だった。中には全くの個人で動く者もいるが、集団に属する方がより多くの情報を得ることが出来、有利だと考えられている。

「卸屋の習慣にお詳しくいらっしゃるのね」

「私の家系は多加羅惣領家のお膝元で代々卸屋をしております故」

「まあ、そうなのね。どうりで交渉が上手でいらっしゃるわ」

「いえ、お恥ずかしい限りです」

束の間にこやかに会話を交わす二人の横で、宇麗ははつとする。

冬季修報会　あの青年を捕えたのも丁度その時期だった。設啓は再び話を続けた。

「須樹は会議の当日姿をあらわしませんでした。私達は誰もが訝しく思いました。何故なら、須樹がそのような大事な場を無断で欠席するなど、およそ考えることが出来なかったからです」

「真面目なお人柄なのね、その方は」

「そうです。須樹は責任感が強く、自分のことよりもまず他人を気遣うような奴です。だからこそ私達は不安を覚えました。特に、緩衝地帯での一件が何者かに企まれたことではないかと須樹に伝えた副頭は、己の言葉のせいで須樹が笠盛で何か厄介なことに巻き込まれたのではないかと、とそう考えたのです。例えば、実際に怪しい動きをしている何者かに気付き、相手を探ろうとして逆に捕えられたのではないかと」と

須樹不在のまま若衆の会議は開かれた、と設啓は語る。

「その場では多加羅若衆として動くべきか、それとも静観すべきか、それで議論は割れました。その中で須樹に何か起こったのではないかと、そう考えた副頭が、緩衝地帯で起こっていることは何者かの謀略かもしれぬこと、そして動くか動かぬ以前にまずはそれについて調べるべきだと意見を出したのです。そうすれば、謀の首謀者を捜す過程で、須樹の行方を捜すこともかなう、という考えからでした。最終的には、若衆頭もその意見を認め、若衆として密かに緩衝地帯で調査を行うことを決めたのです」

「惣領は貴方達の決定をお認めになったのね」

媼はさらりと問う。

「はい」

肯定だけをして設啓は続けた。

その後緩衝地帯に赴いたのは調査の案を出した副頭を含め十人、緩衝地帯で何が起こっているのかを調べ、そして忽然と姿を消した須樹の行方を追った。だが、目ぼしい情報は何も無かった、と設啓は言った。

「では、何故ここにその須樹という方がいるとお考えになったの？」  
媼の問いに、設啓は懐から一枚の紙を取り出した。それを広げて媼の前に置く。白い紙の真中に書かれた一文　それに張り詰めた静寂が落ちた。

「多加羅若衆の副頭を、媼が不当に拘束せしめるものなり」

設啓の声が静寂を破る。

「これは、一昨日の朝私達が寝泊まりしている家の扉の下から入れられていた物です。誰が送ったかはわかりません」

「でも貴方達はここへ来た。つまり何者からかもわからないこの文を信じた、ということね？」

否、と設啓は首を振る。

「この文を信じたわけではありません。須樹がこちらにいるのではないかと、この文が届けられる前に既にそう考えている者が我らの内にいました」

設啓は束の間言葉を切り、おもむろに言った。

「この文の内容が真実であるのか、真実であるならば、何故届けられたのか。おそらく、この文の狙いは我ら多加羅若衆に媼に対する疑念を植え付け、ひいては多加羅惣領家と媼との間に軋轢を生じさせることではないかと……そう考えたのです」

「何だと」

それまで黙っていた黄が、思わずと言った体で言った。宇麗もまた呆然と、設啓の言葉を反芻する。

「文の狙いの通りに媼へと疑念を抱き、敵に回せばどうなるでしょう。仮にこちらに須樹がいれば、益々彼を救うことはかなわなくなります。須樹を多加羅に取り戻すためには、文に踊らされるべきではありません。私達がここに来たのはそのためです」

「私達を敵に回すのではなく、味方につける、ということね」

「はい。私達は、正体もわからぬ文の送り主よりも貴方達を信じたい」

強い口調で言った設啓に問うたのは宇麗だった。

「聞こえは良いが、向こう見ずに過ぎはしないか？　そもそもこの文とて不信を煽るためと言うが、真実何を目的とするかはわからぬ多加羅惣領も無謀なことをお許しになるものだな」

「無茶は百も承知です。それに、惣領は私達の行動を御存知ありません。これは私達の一存、須樹がこちらに捕われているのであれば我らのもとに返していただきたい、その一念で参ったまでです」

決然と、それは強く響いた。宇麗は益々啞然とする。では、彼の行動は多加羅惣領家も了承せぬ独断で行われた、ということか。若衆ならば、緩衝地帯における多加羅と沙羅久の微妙な力関係を知らぬ筈がない。如何に仲間のためとはいえ、あまりに無謀に思われた。

「先程、文が届く前に私達のところに須樹という若者がいるとわかっていて、と言ったわね。それは何故かしら」

設啓は媪に向き直ると言った。

「今回緩衝地帯で起こっていることの背景には耶來がいるのではないかと私達は考えています。中心となるのは蛇と呼ばれる男、おそらくこの文は蛇が私達に送ったのでしょ」

蛇

宇麗は目を瞠った。黄が鋭く息を呑む。その気配が伝わったのか、設啓の眼差しが鋭さを帯びた。

「実はこれらのことは、ある一人の少女との出会いでわかったことなのです。名前は紺こん、媪が開いておられる孤児院にいた少女です」

灰は窓辺に立つと家の前の路地を見下ろした。細い家壁の隙間から陽光が注ぎ、刷毛で真直ぐに刷いたように道を白々と照らし出している。昨夜積もった雪は既に大方が溶け、影に僅かに残るだけだった。

設啓と五人の若衆が媼の屋敷に赴いて既に一刻程が過ぎていた。一人家に留まるべき立場であることはわかっていても、落ち着かぬ心地は消えなかった。全てがうまく運ぶのか、それを見届けることが出来ぬのが心許ない。彼らを信用せぬわけではなかったが、不安はつきなかつた。

その時、灰の物思いは軽い音に遮られた。扉を叩く音である。次いで、細く扉が開かれ、隙間から紺が顔をのぞかせた。

「お話したいんだけど、いい？」

「ああ」

灰は微笑むと紺を招じ入れた。

「この部屋も暗いのね。あっちの部屋も全然陽の光が射さないのよ」  
紺は快活に言うつとぐるりと部屋を見回し、寝台に腰をおろした。  
そのまま何かを考えるように俯く。

「今日は、他のみんなはいないのね」

「用事があつて……」

ふと灰は言葉を切ると、紺に向き直った。

「媼のところに行っているんだ」

「え？」

僅かに紺の声が上擦る。

「まさか私のことか？」

「それもあるけど、それだけじゃない」

「私……孤児院には帰らないって言ったのに……」

「ここから追い出そうとしているわけじゃない。でも、孤児院の皆

は紺がいなくなつてきつと心配している。知らせておいた方がいい」  
続く灰の声音は穏やかだった。

「本当に二度と孤児院に戻りたくないのか？ 誰にも一言も告げずに別れてしまつていいのか？」

「……そんなことはないけど……」

ぼつりと紺は呟いた。寝台の上に足をあげると膝を抱え込む。背中を丸めるその姿を、灰は見つめた。

「私、この前の夜話したよね。どうやって蛇のところを逃げて来たか。あの後ね、考えたの。私、きつと何度あの時に戻つても、きつと何度でも逃げるんだつて。どれだけ後悔しても、残される子達のことなんか見捨てて、一人だけ逃げるんだよ」

ゆらゆらと、紺は体を前後に揺する。汚い、とぼつりと呟いた。

「私、自分が汚いと思うの。でもいくらそう思つても、同じ結論に辿り着く。……灰ならどうする？ あの時の私と同じになったら、どうする？」

問うて、紺は灰を見つめた。そこには己の過去を吐露した時に浮かんでいた虚ろさはなかった。

どうするだろう、と灰は思う。出た答えはごく正直なものだった。

「わからないな」

「嘘」

即座に紺が言う。

「嘘よ。灰ならきつと逃げないよ。自分のことなんか考えないで、みんなを助けるために火の中にだつて飛び込むんだよ。そうでなかったら、きつと私のことを助けたりしない」

その響きに、灰は苦笑した。

「どうしたんだ？ 怒っているように聞こえる」

「怒つてなんかないわ。ご免なさい、怒つてなんかいないの。ただ、どうしたらそんな風になれるんだろううつて……そう思っていたの。そんな風に強くいられるんだろううつて……」

灰は壁に凭れると、窓へと視線をやった。部屋の中まで陽光は届



かずとも、仄かな明るさが薄い硝子を縁取る。それを見るときもなしに見やりながら、ぼつりと言った。

「俺は強いわけじゃない。誰かを助けるとしたら、それは多分自分のためだ」

「自分のため？　じゃあ、どうして私を助けたの？　自分のためなら何の得にもならないじゃない」

「あそこで紺を見捨てたら、俺はずっと後悔する。それが嫌だった。紺がどうなるかよりも、自分の気持ちのために助けただけだ」

「変なの。それでも助けてくれたわけじゃない。そんな風に自分がどう感じるか、いつもいつも先のことを考えて行動するの？」

「多分ね」

「ふうん。何だか、自分の感情を恐れてるみたいだに聞こえる」

灰は答えなかった。その沈黙に、紺は灰を見やる。壁に凭れ僅かに首を傾げるようにして、灰は窓の方を見つめていた。長めの前髪が仄かな光を弾き、頤から頬にかけて、淡い影が不思議と澄んでいった。そのせいか、伏し目がちの横顔があまりに無防備に見え、紺は言葉を呑み込んだ。目が離せないまま、何故か見てはいけないものを見てしまったような、そんな気持ちに陥る。

ふと灰が視線を振り向ける。藍の瞳に見据えられて、わけもなく紺は慌てた。

「ご免なさい。私、何だか余計なこと言っちゃって……」

灰は無言で紺に近寄ると口を閉ざすように動作で示した。目線が鋭い。それに紺は口を嚙む。灰は何かを聞き取るうとでもするかのように微動だにしない。身を強張らせていた紺は、次の瞬間灰の顔に過った表情にびくりとする。鋭く、凄味さえ感じさせるそれは一瞬だった。

「紺、決してこの部屋から出ないでくれ」

「え……？」

「絶対だ」

間近に覗きこまれて紺はつりこまれたように頷いた。それを見届

け、灰は素早く部屋から出て行った。

扉を閉ざし、灰は廊下に佇む。不快な棘のように意識を刺激する存在、その気配をなおも追いながら、唇を噛みしめた。この気配には覚えがある。危うく気付かぬところだった。気付いたのは紺のお陰だったかもしれぬ。言われた言葉を受け止めかねて、逃げるように意識を外に逸らした、その時にこの家へと迫る複数の気配を掴んだのだ。気が散っていた。この段になって意識を緩めたていた己に、灰は気付く。わき起こる自身への怒りを灰は抑え込んだ。

（後だ。今は、考えるな）

まだ少し間がある。灰は扉を振り返ると手を翳した。注意深く周囲の空気に意識を伸ばし、部屋全体をすっぽりと包み込むように守りの網を練り上げる。特に念を入れて、扉と窓の部分には網そのものに侵入者を拒む弾力を与える。万全と思えるまで意識を凝らし、手を下ろす。既に複数の気配は玄関と裏の扉に迫っていた。

灰が階下へと向き直った時、鋭い音をたてて扉が破られた。階段は扉の正面にある。必然的に、家へと踏み込んできた者達の目には階段の上に立つ灰の姿が真先に捕えられていた。男が五人はいるだろうか。裏の人数も合わせればおそらく十人を超えるだろう、と灰は思う。何れも顔を目深に隠すように布を頭に巻き、しかと表情が掴めぬ。それでも先頭に立つ男が浮かべた笑みが、灰には見えた。

「銀の髪、藍の瞳……」

男が低く言った。声はまるでぞわぞわと広がるように、響いた。唇が吊り上がる。

「あいつだ！ 捕える！」

男が叫んだ。男の手下が階段に殺到する。それに、灰は正面から向き合う。

最上段に達した先頭の一人が灰に掴みかかる。それを、灰は軽かわした。二人目はまだ階段の途中である。駆けおけると、正面か

ら向かつて来る灰に虚を突かれたのか、相手の反応は僅かに遅れた。灰は勢いのまま姿勢を低めると男の腹に拳を叩きこむ。ぐえ、と奇妙な悲鳴が響いて男は下へと転がり落ちた。巻き込まれて一人が男の下敷きとなる。辛うじてそれを避けた一人が振り返った時には、灰は手摺を乗り越えて一階へと飛び降りていた。

危うげなく着地して振り返った灰に、男がにやりと笑った。

「さすが鬼逆きさかの弟だ。一筋縄じゃいかねえなあ。おとなしく捕まってくれりゃあ痛い目を見ないってえのによ」

「鬼逆の弟などと、何のことだ」

内心の驚きを押し隠して灰は鋭く問うた。その間にも、間合いを詰められぬよう部屋をじりじりと移動する。

「しらばっくれるんじゃねえよ。こっちは確かな情報を掴んでんだからなあ」

「ふざけたことを。どこから仕入れたか知らぬが、出鱈目だ」

「お前を捕えりゃ出鱈目かどうかはつきりするさ。かわいそうになあ。助けてくれる若衆のお仲間はいない。さあ、どうする？」

言った男がどこに潜ませていたのか、両手に極細の短剣を握る。

一瞬捲れあがった袖から、のたうつ刺青が見えた。灰はぽつりと呟く。

「蛇……」

「おっと、俺を知っているのかい？ そいつは光栄だ」

油断なく相手を睨みつけながら、灰は扉へと向かう方法を探す。

小さな部屋で押し包まれればろくな抵抗も出来ないだろう。

最初は紺がここににいることに気付かれたのかと思っただ灰だったが、どうやらそれは違うらしい。灰自身が狙いなのだ。紺のことは気付かれていないのかと僅かに安堵しながらも、何としてもこの家から男達を引き離さなければならぬと灰は思う。万が一紺の存在に気付かれたらどうなるか 怪魅けみの力による守りも長くもつわけではない。

腹に拳を食らった一人がいまだ倒れているのを視界の端に捉え、

灰は動いた。それに一人が向かって来る。繰り出された拳は僅かに上体を逸らせることで避け、隙の多い相手の腹を膝で蹴り上げる。男がもんどりうって倒れた。

それが合図だったように、一斉に男達が灰に向かって来た。

一人の腕を掻い潜り、振り返る余裕もなく勘だけで背後に肘を振り上げた。鈍い感触はどうやら相手の頬に当たったらしい。別の一人に背後から掴みかかれ、咄嗟に胸倉を掴むと勢いそのまま背負い投げて床に叩き付ける。だん、と重い音が響き衝撃に床が揺れる。

扉の前に残るのは二人、それに向き合った時、裏手からばらばらと足音が響いて来た。裏の扉も破られたのだと察して、灰は即座に動いた。蛇の前にいた一人が懐から短剣を取り出す。

「殺すなよ！」

蛇の声に、男は無言で鞘をはらった。滑るように走ったその軌跡を見据え、突き出された腕に沿うようにして体を翻した。相手には、突然目の前から姿が消えたように思えただろう。瞬時に死角に移動した灰は、短剣を握る相手の手首を掴んで背後に回り込んだ。腕を背中で捻りあげられて男が苦痛の悲鳴をあげた。緩んだ手から短剣を奪い、その柄で相手の後頭部を殴る。

倒れ込んだ相手を見ることもせず、灰は蛇に向き直ると短剣を放った。正確に胸元を狙ったそれに、蛇が大きく横に跳ぶ。その隙に灰は扉へと一気に走り寄った。

「くそ！ 逃がすか！」

今しも戸外に出ようとしていた灰は咄嗟に半身を大きく後ろにひいた。上腕に痛みが奔る。蛇が一気に間合いを詰めて、極細の短剣を繰り出していた。体勢を崩したところにさらに蛇が迫り来る。変幻自在の鋭い突き、それを避けるほどに再び家の中へと押し戻されそうになる。背後に倒れていた者達が起き上がる気配に、灰は唇をかんだ。

蛇の向こうに扉、右手と背後には十人に近い男達の姿がある。まるで絡みつくような蛇の動きに、体の自由が奪われていく。せめて

間合いがあれば

灰は大きく斜めに切り裂く蛇の腕と擦れ違うように左へと踏み出した。脇腹を熱い感触が過る。僅かに蛇との距離が広がり、灰は一瞬後ろに重心を移した。それを弾みに、一気に地面を蹴る。正面から低い体勢で短剣を繰り出してきた蛇の、その腕を飛び越え、ぎよつと動きを止めた相手の肩を背後に蹴りつけた。勢いのまま着地したその時、脇腹に鋭い痛みが響いた。

よろめきかけながらも、灰は開け放たれた扉の外へと飛び出す。顔をあげると、眩暈を覚える程光が眩しかった。強く頭を振ると、灰は走り出した。

「追え！ 追えってんだ！ 逃がすんじゃねえぞ！」

蛇の声が背後に響いた。

紺は部屋の隅に蹲っていた。怒号が響くたびに、全身が震えた。一際鋭く聞こえる声は忘れようもない。姿が見えずともわかる。蛇だ。

階下での騒ぎは、実際にはごく短い間の出来事だったが、紺には果てしなく長い時間に思えた。

物音が聞こえなくなっても、紺は動くことが出来なかった。ぎよつと閉じていた瞳を恐る恐る開くと、部屋の中は薄暗く、静かだった。紺は深く息を吸う。口元で握りしめた両の掌がじつとりと汗で濡れている。指先が白く、冷たかった。

蛇が来たのだ。でも、何故？

(私を捜しに……?)

違う、と混乱しながらも紺は思った。漏れ聞こえた言葉は不明瞭だった。だが、蛇の狙いが紺ではなく灰であることはわかった。最後に聞こえた蛇の叫び。逃げた灰を追う男達の荒々しい足音が、まだ耳の底に響いている。

蛇は灰を追って行った。そうとわかっていても、少しでも体を動

かせばそれを聞きつけた蛇が扉を開けに戻るのではないかという恐怖に紺は囚われる。

(灰……どうして? どうして灰が……)

まさか、と紺は思う。

(まさか私を助けたせい? 私を助けたから灰が蛇に狙われたの?)

嘘、と紺は呟いていた。嘘だ。自分のせいで灰が狙われるなんて。

嘘、嘘、嘘

何度も呟きながら、紺は顔を伏せる。どうすればいいのかまるでわからなかった。

無論、動かなければいいのだ。灰は絶対にこの部屋から出るなど言った。それに従っていればいいのだ。そのうち他の若者達が戻る。(多分、灰も戻って来る)

戻って来なかったら?

ひそりと、内心の音が聞こえた。相手は蛇だ。その恐ろしさを紺はよく知っている。蛇以外にも多くの気配があった。灰が無事逃げのびることが出来るとは、どうしても思えなかった。

(それでもいいじゃない。灰がどうなるかと、ここにいれば安全なんだから)

小刻みに震える体の奥底から何かがせりあがってくる。どくどくと、己の鼓動が響き、瞼の裏で炎の紅が揺れた。この命は自分で選び取ったものだ。紺は益々小さく体を丸め、唇を噛みしめた。あの夜のように、振り返らなければいい。そうすれば、誰の命が危険に晒されようと自分は生き延びることが出来る。

そして際限もなく逃げ続けるのだ。

「本当に、それでいいの?」

言葉が零れた。自分自身のそれが、まるで見知らぬ他人の声のように響いた。

目を逸らし蹲って、生き続けるのか。まるで骸のように

紺は目を見開く。顔を上げた。

次の瞬間、紺は立ち上がり扉に向かっていった。勢いよく扉を開け

ると、ふわりと風のような気配が揺れ、破れた。それに気付くこともなく紺は一散に階段を駆け降りると家の外へと走り出していった。

路地を走りながら、紺は浮かんで来た涙を乱暴に拭う。涙は邪魔だった。

もつと速く走らなければ、と思う。今この瞬間にも、灰の命は蛇に奪われようとしているかもしれない。自分のせいで、また誰かが死ぬことになるかもしれない。

必死の形相で走る彼女に、道行く人々が怪訝な表情を向けている。そんなことは構わなかった。どう見られてもよかった。ただひたすらに媪の屋敷を目指しながら、紺は蛇に見つけられるかもしれないという恐怖さえ忘れていた。

俺は強いわけじゃない。誰かを助けるとしたら、それは多分自分のためだ

灰の声が響く。仄かな光に向けられた横顔に目を奪われた。それがあまりにも、澄んで美しく見えたから。

あそこで紺を見捨てたら、俺はずっと後悔する。それが嫌だった。紺がどうなるかよりも、自分の気持ちのために助けただけだ

(違うよ、灰)

それは強さだ。己を見据える厳しさ、決して逃げることを許さないそれが、弱さである筈がない。

(私、わかった。動かなきゃだめなんだ。蹲ってちゃ何も変わらない)

幾つもの差し出される手に縋りついてきた。行くあてもなく彷徨う彼女を孤児院へと連れ帰った宇麗、温かな孤児院の仲間達。蛇から助けてくれた灰。彼らがいなければ、今頃紺は生きてさえないだろう。本当の意味で、紺は生きてなどいなかった。己で選んだと思っていた生でさえ、所詮は与えられ許されたものでしかなかった。大通りの人混みを走り抜けて、角を曲がる。何かに足を取られてつんのめった。強かに膝を地面に打ち付けて、それでも紺は前を睨

みつけると立ち上がる。足を止めはしなかった。駆ける足音が、遠く、近く、聞こえた。

これは自分の足音だ。あの夜、來螺の街を駆け抜けた時と同じ、その音だった。蛇に捕われたままならば、こんな思いは知らなかった。こんなにも辛くやるせない腹立たしさは知らなかった。己の不甲斐無さに泣くこともなかった。

そして己は何度でも、あの扉へと向かうだろう。その先に待つ新たな苦しみが命の代償ならば、それを背負って生きるしかないのだと、紺は走りながら考えていた。

通り過ぎる風は、身を切るように冷たかった。紺の長い髪が、踊るように流れた。



「副頭」

背後からの声に、設啓は振り返らなかつた。彼が立つ窓辺からは、媼おうなの屋敷を包む木々がまるで森のように見える。その木々の間を、幾人も警備の者達が歩いていった。屋敷を訪れてはじめて気付いたのが、そのただならぬ警戒の仕方である。

「副頭、媼は俺達の話信じたのでしょうか」

答えぬ彼に、堪えかねたように別の一人が言った。漸く設啓は振り返る。五人の若衆はいずれも不安の面持ちである。

「何時まで待たせるんでしょうか」

設啓が全てを話し終えた後、彼らは媼と対面したのとは別の一室に連れて来られていた。ここで待て、という簡潔な言葉だけを残し、媼の側近らしい女性は去つた。壮麗な客間といった趣の一室だったが、扉には鍵がかけられ、おそらく外には見張りが置かれているだろう。若者達にしてみれば、落ち着かぬことこの上ない。

設啓は腕を組み言った。

「どうだろうな。だが、少なくとも信じるに値する部分はあると思つたんじゃないか？」

そうでなければ別室で待たせるようなことはせぬだろう。

設啓自身は、相手の様子から感触は悪くないと考えていた。媼の表情は到底内心を読み取れるものではなかつた。だが他の二人の反応から、紺という少女との出会い、その顛末を語つた設啓の言葉が、彼らに与えた驚きが大きかつたであろうことが窺えた。

設啓は再び窓の外を見やった。それにしても、と内心に呟く。この展開は意外である。相手が彼らの話など歯牙にもかけぬ可能性の方が高いと彼は考えていたのである。下手をすれば対面すら許されぬのではないか。だが、媼達が若衆に向けたのは、不可解なまでの真剣さであり、まるでこちらを測るかのような鋭さだつた。

怪しい文が一つ、紺という少女との遭遇から得た情報も不確かで、ただ若衆としての信だけを武器にしての対面だった。少なくとも設啓は当初そう考えていた。

(どうやら違ったようだな)

何かがあるのだ。少なくとも媼達にとっては、若衆の訪問は大きな意味を持つものだったに違いない。それが何故なのか、彼には窺い知れぬことだった。

(やはり全て計算のうちか……?)

懐疑とともに思い浮かべた相手は灰である。彼はこの展開すらも見越していたのだろうか。

媼の屋敷を訪れて、一刻程になろうかという頃合いだった。

若者達を別室へと案内した宇麗つれいが執務室に戻ると、端然と座る媼と、落ち着きなく歩き回る黄おうの姿があった。宇麗の顔を見るなり、黄が唸るように言った。

「一体どういうことなんだ。紺こんがあいつらのところにいるなら、昨日の蛇の言葉は一体何だったんだ？ 紺と蛇の手下を交換するといふのは。話が通らんぞ」

「いいから、落ち着け」

素気なく言うと、宇麗は媼の正面に腰を下ろした。黄もそれに倣い座ったものの、なおもどういふことだ、と呟いている。宇麗自身も設啓の話に衝撃を受けていた。蛇に連れ去られそうになった紺が、彼らの仲間に救われ匿われているという、それが一体何を意味しているのか。

「媼」

呼びかけに、媼はつと顔を上げた。宇麗は言った。

「真実がどこにあるかあたしにはわかったような気がします」

「ええ!？」

素っ頓狂な声を黄があげる。それを尻目に宇麗は言い募った。

「もしも若衆のもとに紺が保護されているならば、蛇は全くの虚偽をあたしに伝えたということです。仮に蛇の言を信じて取引の場所に行けばどうなっていたか……」

「蛇の狙いはあの須樹すくという青年を手に入れること。おそらく蛇は取引の場所に赴いた卸屋おろしやを殺し、須樹だけを奪ったでしょうね」

宇麗の後を媪の声が引き継いだ。それに宇麗は頷く。確信を込めて言った。

「はい。我らを謀って若衆副頭を手に入れ、蛇が何をしようとしていたか、考えられることは一つです」

「何だ、それは」

黄の問いに宇麗はすぐには答えなかった。卓の上には設啓が広げた文が置いたままになっている。それを掴み宇麗は握り潰した。かすかな音が無機質に響く。

「……汚い手です！ このような文を若衆に送り付け、媪への疑惑を植え付け、一方で偽りの取引をもちかけて我らのもとから若衆副頭を奪い取る。おそらく、蛇は須樹を殺すつもりだったんです。あたかも媪の仕業のように見せかけて……それを若衆が発見すればどうなるでしょう」

黄は漸く宇麗が言わんとすることを察したのか、強張った表情を向けた。

「つまり、行方がわからなくなっている若衆副頭を殺し、その罪を媪になすりつけようとしていた、ということか!？」

「ああ、それしか考えられん。今回緩衝地帯でことを起こしている奴らの狙いは、評議会で緩衝地帯の権利を沙羅久さしひさに渡すという決定を出させることに違いありません。もしも首謀者が蛇ならば、それを阻もうとしている媪は邪魔な存在でしょう」

その媪が多加羅若衆を殺したとなればどうなる。結果は火を見るよりも明らかだ。

「若衆殺害などという嫌疑がかけられれば、媪の力は失墜します。そうなれば評議会を阻む者もない」

強い口調の宇麗に、黄は問う。

「じゃあ、鬼逆きさかの仕業だというのも全くの出鱈目なのか？」

「おそろくな。何よりも、紺は蛇に孤児院の庭で遭遇し連れ去られそうになつたんだから、間違ひなく孤児院を襲撃したのは蛇だ。この屋敷を襲つたのも蛇に違ひないさ。侵入に失敗して、何とか須樹を奪おうとこのような取引を尤もらしく持ちかけたんだらう」

黄に答えながら宇麗は我知らず拳を握り締めていた。爪が掌に食い込み、痛みが奔つた。孤児院の地下で殺された者達の痛みはこれよりもはるかに凄まじいものだっただろ。いまだ鮮明に浮かぶ惨殺の図だった。

「だが、あいつらが若衆だという証もないぞ。それこそ若衆を名乗つて須樹を手に入れようとしているのかもしれない。全てが蛇の手管かもしれないぞ」

「いえ、それはないわね」

黄の疑問に答えたのは媪だった。

「彼は代々多加羅惣領家の街で卸屋をしている家系の者だと言つていたわね。そうであれば、彼は多加羅でも最も力ある卸屋の一族の出だということよ。彼らが若衆を騙つていたとしたら、この場でそのようなことは言わないのではないかしら」

「確かに、そうですね。媪の前で卸屋を騙るような馬鹿はおらんか……そのような嘘はすぐにばれるわな」

黄は納得の声音である。

「それに宇麗、あなたはあの青年が耶來やらいには思えない、と言つていたわね」

「はい。これで全てに納得がいきます。あたし達が見張つていた男達のもとに須樹があらわれたのは、若衆の噂をまいていた男の後をつけてきたのでしょうか。もとより何者かの謀略だという考えがあれば、男を見過ごしに出来なかつたのに違ひありません。その後口を閉ざしていたのは、多加羅若衆の副頭が緩衝地帯で密かに動いたことが明らかとなれば、多加羅と沙羅久の間に軋轢を生じさせること

になりかねないと考えたせいでしょう」

それに、と続く言葉は少なからず自嘲の響きがあった。

「あたし達のことも信じる事が出来なかったんでしょうね」

「無理もないわね」

「媼」

宇麗は媼を見つめた。

「須樹をあいつらのもにかえしてやりましょう。そして、多加羅若衆が今回緩衝地帯で密かに動いたこと、これは決して明らかにすべきではないと思います」

「二所領の不干渉、その原則に目を瞑るべき、ということかしら」

「はい。今の状況で沙羅久がこのことを知れば、強引に緩衝地帯に手を伸ばして来る可能性があります。評議会や西の元締め動きを考えれば、尚更公にすべきではありません」

そう言いながらも、宇麗は己の考えの根底にあるのが、そのような理由だけではないと気付いていた。

あの若者達は無謀だ。だが媼に正面から向かって来た彼らの表情には、例え咎を負おうとも仲間を救わんとする固い決心が浮かんでいた。文よりも媼を信じると言った彼らの言葉が、強く耳に残っていた。

「何を信じるか、私達も選ぶべき時のようね」

まるで宇麗の思考を読み取ったかのように媼が言う。

「須樹を彼らのもにかえしましょう。でも、彼には手伝ってもらわねばならないことがあるわね」

一瞬目を睜り、宇麗は頷いた。

「取引は十七の刻だったわね。蛇の動きは何かあるのかしら？」

「取引場所の廃屋には昨夜から見張りを付けていますが、まだ蛇があらわれたという報告は入っていません」

「まさか、この後に及んで蛇の取引に應じるってのか？」

「蛇はまだあたし達が紺の行方を掴んだことを知らない。取引に應じるふりをして油断させ、一気に奴らを抑える」

宇麗の言葉に、なるほど、と黄が呟く。だが、それには須樹を取引の場に伴わねばならぬ。蛇が如何にして須樹が若衆であることを知ったかはわからぬが、蛇に警戒させぬためにも須樹の存在が必要だった。

「彼は、引き受けてくれるかしら？」

「信には信を返しましょう。そのうえで、彼らを説得します。おそらく、これは蛇を捕える最後の機会となります」

「貴女に任せるわ。まずは、彼を若衆に引き合わせてあげましょうにこりと笑って媼は言った。それに大きく頷くと宇麗と黄は足早に部屋を出て行く。その背中を見送り、媼は小さく笑った。

「面白いこと。多加羅若衆が本当にこちらを味方につけるなんて…

…」

笑みを唇に乗せたまま、媼は視線を窓外に転じた。硝子にちらちらと舞う陽光の向こうに、澄んだ冬の大気が渦巻いている。

「でも、まだ見えないわね……」

媼の咳きは密やかだった。まだ、見えぬ。静かに座したまま媼は思う。全ての渦の中心はまだ明らかにはなっていない。解かれぬ謎の形を見極めるように、媼の瞳は硬質な輝きを帯びていた。

一足ごとに、上腕と脇腹の傷が痛んだ。既に衣は血で真赤に濡れている。痛みの脈拍が、鼓動と被る。どちらも命に関わる程の傷ではなかった。だが、手当をせずに放っておいてよい部類のものでもない。

灰は後ろを振り返ることはしなかった。そのようなことをせずとも、蛇達が執拗に彼を追って来ていることはわかっていた。蛇が何時から灰に目をつけていたのかはわからないが、おそらく若衆の動向を監視していたのだろう、と灰は考える。若衆達が媼の屋敷に向かったその隙をつかれた、ということだ。

「逃げきれるとでも思っているのか!」

いたぶるような蛇の声を背に聞き、灰は交差した街路を走り抜ける。

逃げ切れるとは思っていない。このままではいずれ捕まる。傷のせいで走る速度が落ちているのが自分でもわかっていた。だが、逃げきる方法がないわけではない。

灰が目指しているのは街の中でも最も大きな市場が立つ通りだった。それが前方に見えていた。露店を飾る異国の織物が鮮やかに、ざわめきは地を這うように感じられた。

大通りは何時にも増して人通りが多かった。昨日の雪に外出を控えた人々が、まるでその分を取り戻そうとでもするように漫ろ歩いている。その人混みに灰は走り込んだ。周囲で驚きの声上がる。次いで背後で響いた物音に、灰は眼差しを険しくした。怒号に入り交じって甲高い悲鳴が響く。何かひっくりかえるような、派手な音がそれに続いた。

人波の中にまで蛇達は追って来ているのだ。人の多い場所に逃げ込めば追って来ぬのではないか、そう思っていた灰は目論見が外れたことを知る。卸屋の厳しい監視のもとにある笠盛じゅっせいの街でこのような騒動を起こせばどうなるか、それが蛇にわからぬ筈がない。それでも灰を捕えようとしているということか。

そうとわかれば迷うことはなかった。灰は突然の騒動に立ち竦む人々の間を駆け抜け、路地に飛び込んだ。振り返ると、蛇達を避けるためか通りの真中に道が開いていた。迫り来る相手、そのさらに向こうにある一つの姿に灰は息を呑む。人混みの中、まるで浮き上がるようにして見えるその顔が、灰の驚きを受け止めて笑みを象った。視線の交錯は一瞬のことだった。

灰は前方に視線を戻すと、人気のない路地の奥へと速度を上げた。同じく路地へと踏み込んで来る蛇達の足音を聞きながら、笠盛の地図を脳裏に思い浮かべる。蛇達がどこまでも追って来るならば、万が一にも他の人に被害が出ぬよう、なるべく人気の無い道を選ぶ。おそらく既に卸屋達はこの騒ぎに気付いている筈だ。そうであれば、

これは灰と蛇達だけの問題ではない。風体から耶來の者とわかれば、卸屋は蛇達を捕えようと迅速に動く筈だ。

灰が目指したのは街の北だった。次第に蛇に間を詰められながら、それでも辛うじてまだ追いつかれていないのは灰の方に土地勘があるからだ。敢えて見通しのきかぬ路地を選び、分岐した細い道を駆け抜けて行く。

再び大きな通りに踏み出した灰の目の前に、一際大きな建物が聳えていた。神殿である。多加羅のものほど壮麗ではなかったが、信仰の威を纏って冬日に厳めしい。広い道に人通りはなかった。

閑散とした道を駆け抜け、灰は荒れ果てた屋敷の傍らで足を止めた。既に街の外れに近い。道の先に、冬枯れして琥珀に染まる草地が見えていた。風が吹き渡っている。周辺は空家ばかりなのか、寂々とした静けさがあった。肩で息をつきながら灰は振り返る。陽光を背に近付きつつある蛇の姿は、陰鬱な影を纏っているように見えた。

「……手こずらせやがって……」

息を切らしながらの蛇の言葉には苦々しい響きがある。

「だが、ここまでだな」

蛇が不気味な笑みを浮かべる。背後に続く男達の獰猛な視線に晒されながら、灰は真直ぐに蛇に向き合った。

「どこから俺が鬼逆の弟だという情報を仕入れた」

恐れ欠片も見せぬ相手に、蛇の笑みが消える。忌々しげに目を細めて吐き捨てた。

「質問出来る立場じゃねんだよ」

蛇の言葉が終わらぬうちに、蛇の背後から走り出た一人の男が灰に掴みかかる。灰は痛みを堪えて最小限の動きで拳を避ける。勢いのままつんのめる相手の膝裏を蹴りつけると、相手は顔から地面に倒れ込んだ。それを見た蛇が呆れたように言った。

「まだそんな力があるのか。つくづく見かけによらねえなあ。だが、ここまでだぜ」



背後で濁った怒声が響いた。はつと振り向いた時には遅かった。倒れていた筈の男が、何時の間にか迫っていた。手には鞘から抜かぬままの短剣が握られている。こめかみに衝撃が弾け、灰は地面に倒れ込んだ。間髪入れず腹に痛烈な蹴りが入れられる。執拗に二度、三度と蹴りつける相手を、蛇の声音が止めた。

「それぐらいにしておけ」

不承不承といった体で男が灰から離れる。灰は薄目を開けた。血の生温かい感触が頬を伝っていく。

立たせると言った蛇の音が不鮮明に歪む。無理矢理に両脇から腕を取られて引きずり起こされる。乱暴に髪を掴まれて顔を上げさせられた灰は、間近から覗き込む蛇を見やった。殴られた衝撃で、いまだに視界が揺れていた。

「こいつがいりゃあ、鬼逆は俺達の思うままだ」

周囲で響く笑い声に、それは違う、と灰はぼんやり考える。群衆の中に佇む鬼逆の顔、一瞬交錯した相手の眼差しを思い出していた。その顔を彩った笑みは、何を告げていたのか

お前の策謀に、俺も乗らせてもらう

そう言った時も男は笑っていた。

「隠れ家に連れて行け」

蛇の声が遠く響いた。

須樹はぼんやりと寝台に座り込んでいた。目の前には殆ど手をつけぬままの昼飯が置かれている。既に冷え切ったそれを見つめ、須樹は溜息をついた。ここに捕われてから己の感情を抑えることには大分慣れたつもりだったが、気付けば不安に捕われていた。

動揺している、と思う。原因はわかっていた。昨日聞いた宇麗の言葉のせいだった。

蛇を知っているか？

聞いたこともない名前だった。耶來の一員であるその男が、須樹のことを己の仲間だと宇麗に伝えたと言う。咄嗟には信じかねる内容である。反論することも出来たが、須樹は敢えて口を閉ざした。

左腕に蛇の刺青を彫り込んだ男　おそらく蛇というのは真実の名ではないのだろう。何が起こっているのかまるでわからぬ。それが須樹にはもどかしかった。灰の言葉を信じればこそ耐えることも出来たが、今はそれも揺らいでいる。不甲斐無さと怒りを抑えかねて須樹は俯いた。

その時扉が唐突に開かれた。見ると、張り詰めた表情の宇麗が立っていた。また蛇とやらのことについて問い質しに来たのか。思わず須樹は身構える。宇麗は言った。

「お前を解放する」

須樹の言葉を封じるように、宇麗は言い募った。

「さほど時間はない。余計なことを言わずに黙ってついて来い」  
有無を言わさぬ口調である。半信半疑のまま須樹は宇麗の後に続いて部屋を出た。見張りの男もまた驚愕の表情を浮かべ、二人の姿を目で追っている。

足早に歩く宇麗は、須樹を振り返ろうとはしなかった。経験上、このような態度の宇麗に何を問うたところで答えはないと知っている須樹は、無言でその後を追う。宇麗が立ち止まったのは、一つの

部屋の前だった。以前、媪おんなと対面させられたのと同じ部屋であることに須樹は気付いた。

扉を開いた宇麗は、須樹を振り返った。

「入れ」

言われるままに部屋に踏み込み、そこで須樹は立ち竦んだ。

驚きは麻痺に似ていた。部屋の中には複数の人影があつた。振り返った若者達の顔が喜びに染まる。それを、凍りついたように動きを止めたまま須樹は見ていた。何故、ここに彼らがいるのだ。夢ではないのかと思う。何故、若衆が媪の屋敷にいるのか。

「副頭！」

「須樹さん！」

口々に叫びながら若者達が走り寄って来る。存在を確かめるように少々手荒に触れて来る彼らを、須樹は呆然と見回した。

「……何故……」

「良かった！ 無事だったんですね！」

「……何故ここにいるんだ」

「そりゃあ、須樹さんを取り戻すためですよ。本当に良かった」

良かった良かった、と口々に言う若衆を見回し、須樹は途方にくれる。視線を泳がせると、少し離れた場所に設啓せつけいが立っていた。腕を組み、何とも言い難い表情で須樹を見つめている。設啓の顔に浮かぶのは興奮であり、驚きのようだった。

「設啓、これは……どういうことだ」

「それには私がお答え致しましょう」

割って入った柔らかな声に、須樹は部屋にいるのが若衆だけではないことに気付いた。媪が微笑みを浮かべている。大柄な黄おうの姿もあつた。

「彼ら若衆が、私のところを訪れたのです。そして貴方はただ巻き込まれただけで何も咎はない。若衆にかえしてほしいと、そのように言ったのですよ」

「そしてあたし達はその言葉を信じた、ということさ」

扉を閉めた宇麗が近付いて来る。

「その様子では若衆だということに間違いはないようだな」

なおも驚きに捕われたまま須樹は周囲の面々を改めて見回した。喜びを満面に浮かべながら、一人などは涙を浮かべている。次第に須樹の体から力が抜ける。喜びよりも先に、戸惑いがあった。

「……何故、俺がここにいとわかつたんだ？」

「そりゃあ」

「まあ、色々あつてな」

一人の若衆の言葉を遮って設啓が須樹に近付いて来た。

「無事で安心したぞ」

「……すまん」

「それは俺じゃなく、ここに来れなかった他の奴に言ってやるんだな」

設啓は言つと、媪を振り返つた。

「媪、我らの言葉を信じていただきありがとうございます」

「いいえ、いいのよ。貴方達の言葉が信じるに値するものだった、それだけのことよ」

でも、と媪は何気なく続けた。

「ご免なさいね、須樹さんにはもう少しここに留まっていたただきたいの」

なおも喜びをあらわにしていた若衆の動きが止まる。須樹と設啓は思わず顔を見合わせた。

「それはどういふことでしょうか」

「そいつはあたしが説明するよ」

そう言つた宇麗が須樹に向き直つた。

「須樹、あたし達に力を貸してほしい」

執務室には重い沈黙が落ちていた。

「須樹を囮にして蛇を捕える……つまり、そういうことですか？」

言ったのは設啓だった。その言葉に、若衆の前に立った宇麗が頷く。

「ああ、そうだ。蛇はこの笠盛の街で巧妙に隠れてきた。奴を捕えるのは容易じゃない。この機会を逃したらおそらく次の機会はないだろう」

「だからと言って、須樹さんを餌にするようなことを……」

憤然と言った若衆を宇麗が見やった。

「万が一にも危険に晒されぬよう、我らが須樹を守ることを約束する」

「でも取引が耶來やらいの策謀ならば、どのような罠が待っているかわかりません。蛇に気付かれぬようにするならば少人数で行くのでしょう？ 守れると言いきれますか？」

「確かに、耶來は油断のならぬ相手だ。だがここは我らの縄張りだ。奴らの思うようにはさせません。表向きは少人数で行くが、既に十分な体勢を整えている」

不安の声に答えながらも、宇麗とて若衆の言わんとすることはわかっていた。何よりも漸く無事を確認した仲間をむざむざ危険に晒すようなことは承服しがたいのだろう。窓辺に立つ媪は口を挟む気配はなかった。何かを言いたそうな黄を横目で睨みつけ、宇麗は言った。

「取引は十七の刻、おそらくはそれで緩衝地帯の命運が決まる。蛇を捕えることがかなえば、一連の出来事が多加羅若衆ではなく奴の仕業であることも明らかにすることが出来るかもしれん。どうか、力を貸してくれ」

でも、と言いかけた若者が口を嚙む。須樹が進み出ている。宇麗を正面から見やる。

「わかった。引き受ける」

迷いなく力強い声だった。副頭、と呼びかける若衆を振り返り、須樹は言う。

「皆には迷惑をかけて悪い。この後に及んで勝手を言うことはわか

っている。だが俺も蛇を捕えたいんだ。奴が何を企んでいるにせよ、これ以上好きにさせてはいけない。何よりも、この人達は若衆を信じてくれた。俺はそれに応えたいんだ」

低く言った須樹に若衆達が押し黙った。

「お前がそこまで言うならしょうがないな」

あつさりと言った設啓が宇麗に顔を振り向けた。

「ただし、現場には私達若衆も連れて行っていただきたい」

「ああ、わかった。……須樹、ありがとう」

宇麗の声は僅かに低かった。宇麗の顔に浮かぶ微笑みに須樹は目を瞬く。初めて見る柔らかな表情だった。だが、それもすぐに緊張に吞まれた。

「そうと決まれば、段取りを決めておきたい」

宇麗が言ったその時だった。突然廊下の向こうから複数の足音が近付いて来た。慌ただしいその響きに、何事かと一同が振り返る中、勢いよく扉が開かれた。取っ手にしがみつくようにして立つ少女の姿に、誰もが言葉を失った。紺である。その背後では、追いかけて来たのか、驚きを浮かべた警備の者達がいた。

紺、と宇麗が呟いた。それに肩で息をついていた紺が顔を上げる。顔を縁取る髪が乱れ、ほつれていた。

「お願い！ 灰を助けて！ 灰が……！」

聞き慣れぬ名に訝し気な表情を浮かべた宇麗とは裏腹に、若衆達の顔が強張る。少女に詰め寄るようにして扉へと向かって行った。

「灰様がどうしたんだ」

「蛇が……！」

言って紺は顔を歪める。若者達をかきわけて須樹は少女に近づく。彼には、少女が宇麗に捕われたばかりの頃対面した相手であることがわかった。様子が尋常ではない。

「一体何があつたんだ」

設啓が問うた。紺は苦しい息の合間に言葉を押し出す。

「蛇が家に突然来たの。何人も男を連れて……それで、灰が絶対に

部屋から出るなって言って……」

「それでどうしたんだ？」

「一人で部屋を出ていったの。私……蛇が何を言っているのかよく聞こえなかった。でも蛇は灰を狙ってるみたいで……灰は何とか家からは逃げ出せたみたいだった。蛇が後を追って行ったわ」

そんな、と誰かが呟く。須樹は己の問う声を、奇妙に遠く聞いていた。

「灰はその後どうなったんだ」

「わからないの！ 私が家を出た時にはもう……。お願い！ 灰を助けて！ 灰が殺されちゃう！」

紺が叫んだ。

まるで凍える石床に沈み込むように、須樹は己の体温が冷えるのを感じていた。

「紺、その灰というのは誰だ。一体……」

「俺達の仲間だ」

宇麗の言葉を須樹は遮ると、振り返った。

「馬を借りることは出来るか？」

僅かに気押されたように、宇麗が頷いた。

「あ、ああ」

「灰を捜す」

言って廊下へと駆け出した須樹に若衆達が続いた。

「待て！ 捜すと言っても、どこに逃げたかもわからんだろう！」

宇麗の声を背後に聞きながらも、須樹は足を止めなかった。

「おい、どうするつもりだ」

何時の間にか傍らを走っていた設啓が問う。そちらを見ることもなく須樹は答えた。

「手分けして街を片端から捜す。灰が簡単にやられるわけがない。必ず逃げのびている筈だ」

だが、相手は耶來だ。

内心の不安を須樹は抑え込む。何が起こっているのかわからぬ。だが、灰の命が危険に晒されている、それだけは確実なのだ。

「そこを左に曲がれ！ 正面扉に続いている！」

背後から宇麗の声が響いた。どうやら若衆を追って来ているらしい。言葉の通りに曲がれば、正面玄関らしい扉が前方にあつた。そちらに向かつていた須樹達は立ち止る。突然扉が開かれたのである。息せききつて駆け込んだきたのは一人の男だつた。男は宇麗の姿を認めると大音声に叫んだ。

「御報告します！ 街で騒動が起こり、耶來らしき者達の姿が確認されました！」

「どこだ」

間髪入れずに宇麗が鋭く問うた。

「中央市場で、何者かはわかりませんが一人の男を追っていたとのことですよ！ その後は姿を見失いました」

「どちらに向かったのかもわからんのか!？」

「はい。路地に入つて行つたのを見た者はいませんが、その後は行方がわかりません」

くそ、と宇麗が毒づく。

「追われている男というのはどんな姿だつたかわかるか？」

須樹は問うた。男は不審そうに須樹を見やりながらも答える。

「まだ年若い青年で、何やら異国の者のようだつたと……」

「灰様……」

青褪めた若者の一人が呟く。須樹は扉の外へと駆け出した。その横を宇麗が追い越し、先導するように前を走って行く。その後には続きながら、須樹は絞り出すように言った。

「すまん、宇麗。蛇との取引の件、力を貸せない。俺は灰を捜す」

「気にするな。蛇がこれ程強引に動いたということは何かがあつたのかもしれない。それに街で騒動を起こした者を放つてはおけないからね、ともに捜す」



既舎の前には、既に馬が引き出されていた。宇麗と黄が跨り、いかにも手練らしく見える数人の男が続いた。

「いいかい！ 街で騒動を起こしているのは蛇だ！ 何としても捜し出し捕えるんだ！」

おう、と応える声が響く。宇麗は須樹に言った。

「あたし達は手分けして街を捜すが、その灰という奴の顔は知らない。お前達が別れてついて来てくれ」

「ああ」

頷いた須樹は若衆に別れて卸屋達とともに灰を捜すよう指示を出すすと、手近な馬に跨った。

「お前はあたしと一緒に来な！」

言うなり拍車をかけて遠ざかる宇麗の後を、須樹は追った。

蛇達の隠れ家は、灰が捕われた場所からさほど離れてはいない街の外れにあった。乱暴に引きずられるようにして連れて来られたのは半ば崩れかけ、寒風が吹きこむ廃屋である。もとは白かっただろう壁は風雨に痛めつけられてくすんだ黄土色に染まり、天井から壁にかけて大きな蜘蛛の巣がわびしく揺れていた。

灰は廃屋の中央にある柱に後ろ手に縛られていた。こめかみを殴られた衝撃で、いまだ頭は重かったが、意識は清明になっていた。

蛇は短剣を弄びながら廃屋の外を窺っている。手下の男達は総勢十一名、荒んだ雰囲気纏い、口数が少なかった。時間を持て余していたらしい一人が、ふらりと灰に近付くと顔を覗き込んできた。

「おい、手を出すんじゃないねえ」

蛇が低く言う。

「手は出さねえよ。どうもこいつの顔に見覚えがあるような気がするんだよな」

「鬼逆の弟だつてんならあいつに似てんだろっが」

「いや……そういうんじゃないねえ」

なおも覗き込んで来る男の脂臭い息から灰は顔を背けた。その拍子に揺れた髪に、男が目を細める。

「ああ！ 思い出したぜ！ 歌姫だ！ いただろっ、銀の髪の」  
「何だと」

蛇が灰に近づく。灰は間近に覗き込んできた蛇を睨みつけた。まじまじと灰の顔を見やった蛇が言った。

「確かに似てやがる。名はなんといったか……そうだ、紫弥むらだったな。なるほどなあ。何故多加羅若衆が鬼逆きさかの弟なのかと思っていたが、お前はもともと來螺の一員だったってことだな」

「……何のことだ」

「お前の母親だよ。來螺の歌手手だっただろっ」

低く言った蛇から灰は視線を逸らせた。それを阻むように、蛇が灰の顔を掴んで顔を己の方に向けさせる。灰の眼差しに、蛇はにやにやと笑いながら続けた。

「母親が紫弥だったのは間違いなさそうだな。こいつはおもしれえ。紫弥の息子が裏側に帰ってくるわけだ」

「何をわけのわからぬことを……」

「お前は知らねえのか。紫弥ははじめ裏側にいたんだよ。気の狂った母親と一緒に。本当ならお前の母親はあのまま耶來に飼われる筈だった」

灰は胡乱に蛇を見やった。彼の母親は來螺の表、自警団に属していた筈である。灰の戸惑いに気付いたのか、蛇は下卑た声で続ける。「それを、紫弥が十歳かそこらの時、美しさと歌の才能に目を付けた自警団が金を出して、裏側から買い取ったのさ。自警団には価値のある取引だったろうさ。何せ、後々は天上の歌姫と呼ばれて自警団に大金を落としたからな」

灰は我知らず目を瞠った。

「俺もまだ若かったが勿体ないことだと思っただぜ？ お前の母親はそりゃあ美しかったからな。裏側に留まってりゃいい商品になっただろっよ」

なぶるような蛇の言葉を聞きながら、灰は一つの光景を思い出していた。

まだ彼が幼い時のことだった。小さな部屋の片隅、窓辺に立つ母親が空を見つめていた。波打ち流れる銀の髪が柔らかな光を纏い、時折窓からの風に揺れていた。伸ばされた背中が細く、晒された白い腕が力無く垂れていた。幼い彼の目には、母親がまるで泣いているように感じられた。慌てて下から見つめると、紫弥は泣いてはいなかった。瞳はただ空虚に乾いていた。

(自警団に金で買われた……)

蛇の言葉を反芻する。じわじわと、這いあがるように胸の内に込み上げるものがあつた。それにまかせて灰は低く呟く。

「はなせ……」

「ああ？」

「その手をはなせと言っている」

灰の鋭い眼差しに、蛇が笑みを消した。頤を掴んでいた手を俄かに振り上げると、平手で灰の頬を張り飛ばした。

「くそ生意気ながきだ。強がっていられるのも今のうちだ」

苛立たしげに吐き捨てると蛇は灰から離れて行った。その背を睨みつけ、灰は顔を伏せる。

運命に従容と従つても、昂然と抗うも己次第

そう言った母親が、真実何を思っていたのか、今でも灰にはわからない。來螺で芸能家として生きていた母親の姿は華やかだったが、時折見せる表情の虚ろさを灰は知っていた。天上の歌声と評されながら、母親が普段は滅多に歌わぬことにも気付いていた。何時だったか、歌うことが辛いのか　そう問うた少年に、母親は哀しく笑っただけだった。

灰は歯を食いしばった。じくじくと傷が痛んでいた。その痛みに集中することで、胸の奥に生じたもの　吐き気すら伴ううねりから意識を逸らす。

と、その時、意識の網に馴染み深い気配がかかった。灰は視線を

上げる。その気配、影として己に仕える男が纏う空気に、灰はふと眉を顰めた。冷たく、危うささえ孕んで、それは容赦のない殺意となつて蛇に向けられている。

（駄目だ、手を出すな）

内心に思う。決してここで手を出してはならない。灰の思惑を知っている弦げんであれば、何も言わずともここで手を出すことの愚を知っている筈だ。やがて、弦の気配は吹きすさぶ風に紛れるようにして消えた。

いまだ胸中に渦巻く激しい感情を、灰は抑え込む。周囲の男達は、最早抵抗することもかなわぬ灰の存在に、注意を向けてはいなかった。灰は強く瞳を閉じた。ここで失敗するわけにはいかない。時間はさほど残っていない。それが灰にはわかつていた。

その時、唐突に廃屋の扉が開いた。灰は顔を上げる。男が一人立っていた。

「その若者は何だ」

黒一色を纏う男の第一声がそれだった。蛇は弄んでいた短剣を素早く仕舞うとぼそりと言った。

「始末屋、てめえには関係ねえ」

「何を馬鹿な。勝手なことはするなとあれ程に言っておいただろう！」

「依頼に関してはてめえに従うが、それ以外は御免だ！ こいつは俺達の獲物だ。口を出される筋合いはねえ！」

言い張った蛇に、相手の男 始末屋が向けたのは軽蔑と怒りが入り交じったような声音だった。

「口を出すなどはよく言ったものだ。その青年が依頼と無関係だと言うならば、この状況はどういうことだ！ 笠盛の卸屋どもが大挙してこの廃屋を目指しているぞ！」

「何だと！」

蛇が壁へと駆け寄る。一部大きく崩れた個所から外を覗いた。

「俺達の動きはあいつらには知られてねえ筈だ！」

「馬鹿なことを。あれだけの騒ぎを起こして本気でそう思っているのか！ もう間もなく連中はここに到着するぞ」

「何故卸屋どもにこの隠れ家がばれるんだ！」

始末屋は何かを堪えるように僅かに黙り込んだ。不意に冷たさを増した相手の気配に、蛇が引き攣った表情を浮かべる。

「隣りの倉庫に念のため馬車と馬を準備している。まずはそれで笠盛を離れる」

「お……おう。てめえはどうするんだよ」

「私は後からお前達を追う。捕まるなよ」

始末屋の言葉に蛇が頷く。浮足立ち固唾を呑んで二人の遣り取りを聞いていた男達は、僅かに落ち着きを取り戻し、ばらばらと廃屋の外へと向かった。蛇は数人の男達とともに灰に近付くと柱に縛りつけていた縄を短剣で切る。

「おい、抵抗するんじゃないやねえぞ。逃げようとすれば容赦しねえ」

灰は扉へと引き立てられる。乱暴に小突かれよるめいた彼を、思わずといった体で始末屋が支えた。片腕一本で己を支えた相手を灰は見つめる。視線の交錯　まるで掠めるようにして向けられた灰の視線に、始末屋は微動だにしなかった。

廃屋の外に出ると、倉庫から飾り気のない馬車が引き出されていた。

「おい、逃げるったって、どこに行くんだ」

灰の腕を背後から掴んだ男が、馬の轡を握る蛇に問う。蛇は廃屋の戸口に佇む始末屋をちらりと見やると、低い声で言った。

「依頼主のもとだ。報酬を受け取ってこの依頼ともおさらばだ」

「こんな様で報酬を受け取ることが出来るのかよ」

「始末屋が追い付く前に依頼主と接触出来れば大丈夫だ」

「ああ、そうだろうよ」

吐き捨てるように言った手下を蛇は睨みつけた。

須樹は焦燥に捕われていた。宇麗とその部下数名とともに馬を駆り、騒動が起きたという大通りから次第に範圍を広げて灰の姿を捜している。しかし灰はおるか男達の姿さえ見当たらなかった。

「くそ！ 影も形もないとはどういうことだ」

「路地に潜んでいるのかもしれない。それなら厄介だぞ」

横で交わされる会話を聞きながら、須樹は道を行き交う人々を見渡した。ただならぬ彼らの様子に、周囲は胡乱な視線を向ける。市場の賑わいが、騒々しい雑音となって彼らを押し包む。明るくいばかりの売り手の掛け声が現実と遊離して感じられた。須樹には灰が耶來の男に命を狙われているという事実自体がまるで悪い夢のように思える。宇麗は須樹の顔を見やると言った。

「灰というのはお前の仲間だと言っていたな。若衆なのか？」

「ああ」

「何故、蛇に狙われたのか心当たりはあるか」

「須樹はちらりと宇麗を振り返った。

「わからん」

苦々しいその声音に宇麗はそうか、と返す。須樹は道すがら大まかにことの顛末を聞いていた。若衆が蛇と呼ばれる男から紺を救ったこと、そして彼女を匿っていたこと。では、何故蛇は灰を狙ったのか。紺を助けたのが若衆だという、それを蛇が知ったのか。だがそうであれば、紺が無事だったことは解せぬ。宇麗もまたそれを疑問に思っているのだろう。

（灰、どこにいる。まさか蛇に……）

如何に灰が手練であろうとも複数の耶來の男を相手にして無事に済む筈がない。

不吉な思いを須樹は振り払う。

「あいつがどこにいるか教えてやろうか」

不意に響いた低い声に、須樹は振り返った。見ると、何時の間にか一人の男が佇んでいた。漫ろ歩く人々の中で、その姿はまるで浮き上がるかのようなだった。須樹は目を瞠る。彼は、相手が誰か知っていた。一年半程前に対面したことがある。不穏な気配は以前見た時と変わらず、だが張り詰めた暗さは凄味を増していた。

「鬼逆……」

須樹は男の名を呟く。

「鬼逆だと!？」

宇麗の声には驚きがあった。警戒もあらわに己を見つめる相手に前に、鬼逆の目が細められる。

「確か、お前は須樹だったな。灰の居場所を知りたいか？」

「どういうことだ。灰がどこにいるのか知っているのか!？」

「あいつは蛇に捕われて笠盛かさもりの北の外れにある廃屋にいる」

何故、相手がそのようなことを知っているのか、須樹は疑問に思う前に問うていた。

「殺されてはいないんだな？」

「ああ。蛇はあいつを殺しはしない。奴が灰を狙ったのは、俺の弟だと思っただからさ。大方灰を楯に、俺に脅しをかけようって腹だるう」

「何故そのような……」

言いかけて須樹はぎり、と奥歯を噛みしめた。

「知っていたのか？ 蛇が灰を狙っていることをわかっていて、蛇の好きにさせたのか。灰が危険だということを知っていて、何故放っておいた!？」

「早く行った方がよくはないか？ 今頃蛇は笠盛から逃げ出す算段をしているかもしれんぞ」

須樹はわき起こる怒りを抑え鬼逆から顔を背ける。宇麗を振り返った。

「街の北に廃屋はあるのか？」

「おそらく蛇が取引に指定した場所と同じだ。だが、おかしいな……」

：見張りをつけていたから妙な動きがあればすぐに知らせが来た筈だ」

最後は呟くように言つと、宇麗は周囲の男達を見回した。

「こいつを連れて行つてやりな。あたしもすぐに向かう。蛇がいても先走つて手を出すんじゃないよ。一人は他の者達に今の情報を伝える」

宇麗の言葉に部下達が頷く。一散に駆けて行く彼らの姿を見送り、宇麗は再び男を見やった。漆黒の衣、射干玉の髪、まるで全身に闇を纏うようでありながら、男は目を惹き付ける。危うい魅力だ。宇麗とて鬼逆の名は知っている。耶來の主　鬼逆がそのように言われるようになったのは、ここ一年程、ごく最近のことだ。噂以上に底の知れない危険な相手に思えた。

「お前が鬼逆か。何故、この笠盛にいる」

「何やら面白そうなことが起こっているから見物に来た」

「ふざけるんじゃないよ。何が目的だ。蛇を追つて来たのかい？」

「確かに奴には制裁が必要だ。だが俺は卸屋の縄張りを荒らす程身の程知らずでもない」

鬼逆は薄い笑いを張り付けたまま答えた。食べぬ返答である。それに宇麗は苛立ちを感じた。蛇は狼藉を働き、人の心に疑念をまき、仲間を殺した。口振りから鬼逆は蛇の所業を掴んでいたことが窺える。

(やはり、こいつがあ夜の影か……)

宇麗は内心に呟いた。蛇の存在や須樹が若衆であることを伝えた存在、それが鬼逆だったのではないか。一部の隙もなかったあの影が、この男であれば納得がいく。

「あたし達に蛇の存在や須樹のことを伝えたのはお前か」

だが問われた方は意想外の反応を返した。僅かに目を瞠ると、へえ、と呟く。まるで面白がるように言った。

「そいつは何とも興味深い話だな。生憎とそれは俺ではないぞ。俺はただこの街で起こることを見ていただけさ」



「な……お前以外に誰がいるというのだ！」

「さて、考えることだな」

一言残し、男は踵を返した。遠ざかるその背を咄嗟に追いそうになり、宇麗は舌打ちをする。今は鬼逆よりも蛇が先だ。北の廃屋、そこに真実蛇がいるのか、まずは確かめねばならぬ。今まで巧妙に姿を隠していた相手にしては、己が指定した取引場所に潜むのはあまりに無防備にも思えたが、そもそも十七の刻の取引を前に街で騒動を起こすこと自体が不自然だった。

（一体何が起こっているんだ）

媪の屋敷から強引に須樹を奪おうとしたことといい、相手も追い詰められているのかもしれない。だが、当初はむしろ宇麗達の方が蛇の後手に回っているのだ。一体蛇は何に追い詰められているというのか。

宇麗は須樹達の後を追って街の北を目指した。

須樹達が街の外れにある廃屋に辿り着いた時、そこには人影一つとてなかった。打ち捨てられた建物には、だが確かに人がいた痕跡があった。そして柱には新しい血痕が僅かに残っていた。

須樹達から遅れて現場に到着した宇麗は部下から報告を受ける。離れた家屋から廃屋を見張っていた宇麗の部下は、皆身動き出来ぬよう縛られ、猿ぐつわをかまされた状態で発見された。縄を解かれた彼らの言葉によれば、廃屋を見張っていた昨夜、突然に何者かの襲撃を受けたという。あて身をくらわされ、気付けば縛られていた。

報告がないのも尤もだったのだ。それを知り、宇麗は臍をかんだ。決して油断があったわけではない。だが掴んだと思つた蛇の影を、またもむざむざと逃してしまったのだ。相手の方が上手だったということか。だが、宇麗がその時感じたのはちりちりと神経を焙られるような、違和感だった。何かがおかしい。これは全て蛇がなした

ことなのか。狡猾に須樹と紺の交換を申し出た相手と、街中で騒動を起こす迂闊さとが結び付かぬ。そして見張りの存在に気付き拘束したのは誰か。蛇だとは思えなかった。これまでの蛇の所業を思えば、見張り達は命を奪われていてもおかしくはない。

そしてもう一つ気になるのが鬼逆の言葉だ。あの夜、宇麗と黄おうに情報を渡したのは一体何者だったのか。耶来ではなく、無論卸屋でもない、いわば新たな存在である。

部下達に指示を出し、宇麗は廃屋を見やった。その前に立ち尽くす須樹の背中があった。近付き隣りに立つ。青褪めた須樹の顔は何を思うのか、彼の内心をあらわすように強く握りしめられた拳が僅かに震えていた。

宇麗は須樹の視線を追う。廃屋の前は土が晒されていた。昨日の雪が溶けてぬかるんでいるそこに、数頭分の馬の蹄と馬車の車輪らしき跡が残っている。宇麗ははつとする。まだ新しい。それは茫漠と風が吹き渡る草原の中へと消えていた。

「灰は蛇に連れて行かれた」

宇麗を見ることもなくぼつりと須樹は言った。

「俺は灰を追う」

「何を言っている。どちらの方角に行ったかもわからないだろう。」

ここらは草地が多い。蹄の跡を追うのも容易くはないよ」

「何もしないでいるよりはました」

須樹の強い口調に、宇麗は東の間黙りこんだ。それでも無謀だと反論しかけて宇麗は言葉を呑み込んだ。目の前に広がる草原の、その只中に一人の男が立っていた。背が高い。暗色の外套を纏い、まるで風と同化したかのような密やかさでこちらを見ていた。奇妙なまでに気配を感じさせぬその存在に、宇麗は目を眇めた。

須樹もまた驚きとともに男を見つめる。考えるより先に男に向かって踏み出していた。背後で何事か言った宇麗の言葉も耳に入っていない。男は須樹が歩み寄るのを待ち構えるかのように微動だにしない。近づく程にあらわとなる相貌　弦げんである。

須樹の混乱を男はわかっているだろう。問われる前に、弦が言った。

「須樹殿、私はこれから灰様を追います」

抑揚の欠けた低い男の声に、須樹は目を瞠る。

「灰が……どうなったか知っているんですか？ あいつが何処にいるかも……」

「はい。行先は明らかです。蛇の後を追えば、灰様のもとに辿り着きます」

須樹は思わず弦に詰め寄った。

「つまり、蛇の動きを掴んでいた、ということですか？」

「はい」

「それなら何故……！ 貴方なら灰を救うことも出来たでしょう。何故、むざむざ連れ去られるようなことに……！」

須樹の叫びにも、弦の表情は変わらなかった。

「灰様がそのように望まれたからです」

須樹は束の間返す言葉を失った。

「どういう……ことです。灰が望んだなどと……」

「須樹殿、私とともに灰様を追うならば、全てをお話し致しますよ」

揺るぎなく立つ弦の姿を、須樹は睨みつける。全てを 灰が何をしていたのか、それを男は話すと言う。そもそも、須樹は何故己が解放されたのか、それすらもいまだ理解出来ない。捕われていた間でさえ灰を信じて待て、という男の言葉に従っていたに過ぎない。つまりとるころ己は何もしてはいないのだ、と須樹は思う。では、彼を自由にしたのは誰なのか。それが灰に違いないだろうことを須樹は確信していた。

もとより、須樹に迷いは欠片もなかった。

「わかりました。俺もともに連れて行ってください」

須樹は馬に跨り、弦の後に続く。振り返れば既に廃屋は小さく、そこにいるであろう宇麗の姿は見えなかった。

男とともに灰を追う。若衆の皆には必ず戻るとだけ伝えてくれ。

そう告げた須樹に宇麗は胡乱な眼差しを向けた。無理もない、と思う。宇麗は弦の素性を知らぬ。見知らぬ男が突然にあらわれ、その者が蛇の行先を知っているとわれれば、不思議に思う以上に不審に思うだろう。

半ば強引に宇麗を押し切り、須樹は彼女に背を向けた。

目の前に行く弦は急ぐ様子でもなかった。弦ははじめから須樹の分の馬を用意していたらしい。男が一体何を思うのか須樹にはわからない。弦は終始無言のままである。笠盛の街が遠ざかり見えなくなった頃、漸く弦が須樹を振り返った。それに須樹は問う。

「どちらの方角に蛇が向かったかわかっているのですか？」

「いえ、私は知りません」

弦の答えに須樹は啞然とした。あれ程揺るぎなく行先がわかっていると云った相手の言葉とは思えぬ。

「灰様のもとへと案内するのは私ではありません」

その言葉が終わるか終らぬか、というその時、大気がどう、と鳴った。颯風にも似た耳を聳するその音に須樹は思わず周囲を見回す。だが、枯草一本揺れるわけでもない。無風である。

訝しく再び弦を見やった須樹は目を見開いた。

弦の横に陽炎のように揺らめくものがあつた。まるでそこだけ空気がひずんでいるかのように、渦巻きざわめいている。それが唐突に一つの像を結んだ。音も無く、獣がそこに姿をあらわした。牛程もあるうかという大きさの引き締まった漆黒の体軀、尖った耳、炯と光る切れ長の眼、そして酷薄ささえ感じさせる鋭く長い牙。獣はゆるりと視線を巡らせると須樹を見た。銀灰のそれに射竦められて、須樹の体が強張る。

言葉もなく獣に見入る須樹に、弦が告げた。

「この獣が灰様への道標となります」

獣はふいと須樹から顔を背けると、まるでにおいを嗅ぐように鼻面を上空に向けた。不意にぱたりと尾を一振りすると北西の方角に頭を向けた。

「須樹殿、どうなさる」

いまだ衝撃に捕われたまま獣を凝視していた須樹は、その言葉に我に返った。男はただ静かに須樹を見ていた。どうするのか、このまま灰を追うのか。それとも引き返すのか。これを見たうえで、ままたもに来るか、まるで試すかのような弦の言葉である。

真実、試しているのだ。須樹は悟る。問う声音は、内心とは裏腹にひどく落ち着いて響いた。

「この獣は、一体何ですか？」

「灰様と深い絆で結ばれた存在とでも申し上げましょうか。灰様はこの獣と長い年月を過ごして来られた」

深い絆　須樹は再び獣を見やる。

いまだに見たものが信じられぬ。全てがあり得ぬ光景だった。何もない空間から、何故あのような獣があらわれたのか。獣はおそらく牙蒙、<sup>ガモウ</sup> 獯猛さと狡猾さで知られる猛獣である。しかし不思議なことに、獣を前にしても馬達が驚き怯える様子はなかった。目でしきりに獣の姿を追っていることから、見えていないわけでもなからう。そのこと自体が、獣が尋常でない存在であることの証のようにも思える。すっきりと草原に立つ獣の姿は、優美とも言える曲線を描いてどこか神秘的ですらあった。

獣が唸るような声を発した。僅かに弦を見て前足で地面を引つ掻いている。その姿にまるで急かされているような心地を須樹は覚えた。突然に宙からわき出たところを見ていなければ、それが不可思議な存在だとは到底思えぬ程に自然な仕草である。

須樹は弦に言った。

「行きます」

その言葉が合図だったように、獣が駆け出した。しなやかに躍動

するその姿を弦が追う。その後には続きながら須樹は前方に目を凝らした。

あの獣が灰の居場所を知っているという。それならばただ信じて走るだけだ。だが、己が一体どこに向かっているのか、その先に広がる光景がどのようなものであるのか、須樹には見当もつかなかった。驚きはいまだ消えず、衝撃は奇妙な程に落ち着いた覚悟に変わっていた。

例えどのような光景が待ち受けていようとも、そこから決して目を背けぬと須樹は心に決める。それがどのようなものであるうとも、宇麗に捕われて数日が経った時に暗闇の中で明瞭に感じた灰の気配を、今再び須樹は思い出していた。気のせいだとばかり思っていたが、本当にそうだったのか。灰には測り知れぬところがある。灰の見える世界が己の見えるものとは全く違うのではないかと、そう思ったことも一度ならずあった。

（灰……）

呼びかけた相手は今何を思っているだろうか。馬の蹄が大地を揺るがし、疾駆する獣の姿は一陣の風に似ていた。

蛇を逃したという宇麗うれいの報告に、媪おつなは多くを問いはしなかった。取り乱したのは若衆である。彼らの仲間の一人が蛇に連れ去られ、それを須樹すきが追って行ったのだから無理もないだろう。

「少しいいか？」

屋敷へと戻った若衆を集めた一室、その戸口で宇麗せつけいは設啓へと声をかけた。設啓はいまだ落ち着かぬ様子の若衆をちらりと見やると、宇麗の後に続いた。向かったのは廊下の先にある小さな部屋である。扉を閉ざすと、宇麗は設啓に向き直った。

「他の連中には聞かせない方が良さそうだからな」

宇麗の前置きは不穩に響いた。

「お前は卸屋おろしやの家系なんだろう？ ならば鬼逆きさかという名を知っているか？」

「……知っています」

「お前達の仲間の一人が蛇に狙われたのは、どうやら鬼逆の弟だかららしい」

設啓の表情が険しくなる。

「須樹とともに街を捜している時に鬼逆の方からあたし達に接触して来て、蛇の隠れ家を知らせてきた。お前達の仲間の灰とやらが捕われていることもな。蛇が鬼逆を脅すことを目的に灰を捕えたと言っていた。須樹は、どうやら鬼逆と面識があつたようだが……そのことを知っていたか？」

灰が鬼逆の弟だということか、それとも須樹が鬼逆を知っていたことか どちらとも取れる宇麗の問いだった。秘する程のことを設啓とて知っているわけではなかったが、下手なことを言うことも出来ぬ。自然と設啓の口調は用心深いものとなる。

「灰と鬼逆との間に何がしかの関係があるらしいことは知っていました。須樹は灰と親しいので、鬼逆とも会ったことがあるのかもし

れません。ですが、弟というのは……」

言いよどみ、設啓は顔を顰めた。

兄弟、と言えば信じますか？

まるで戯れるような、灰の声音を思い出していた。冗談であれば些かたちが悪い。真実であれば尚更に、冗談でも口にするのは憚られる内容だ。惣領家の一員という灰の立場を思えば、耶來やらいの主と血が繋がっているなどということは決して明らかにしてはならないだろう。

「あたしはどうにも腑に落ちないのさ。取引の前に蛇があのような騒動を起こすのはやはりおかしい。いくら鬼逆の弱みを握ろうとしたとは言っても、それまでの奴の行動からすれば軽率に過ぎる。だが、それにも関わらず逃げ方が鮮やか過ぎる。何もかもがちくはくだ」

まるで何かに化かされてでもいるようだ、と宇麗は呟き、設啓を見やった。

「灰、というのは若衆だと聞いたが、何故ともにこの屋敷に來なかつたのだ？」

「紺こんを一人にすることが出来なかつたからです。万が一を考えて誰かが残るべきだつた」

「なるほど。だが、お前の仲間達の様子から灰というのがどうも単なる若衆とは思えん。隠しだてはあまりためにならないよ。あたし達は若衆を信賴したが、鬼逆が関わって來るとなれば別だ」

設啓は宇麗の眼差しに、諦めたように肩を竦めた。ここでいらぬ疑惑を抱かれるのは彼にしても望むところではない。

「若衆としてもあまり声を大にしては言えぬことですが、灰は我らの中でも少し異色なんです。彼は來螺らいどで生まれ育ち八歳までをそこで過ごしています。尤も、自警団に属していたようですがね。紺を救つたのも彼でした。耶來の実態を少なからず知っているだけに、放つてはおけなかつたようです」

なおも設啓を鋭く見やりながらも、宇麗はそれ以上の追及を諦め



たようだった。

「それにしても、蛇は一体どこで鬼逆の弟のことを知ったんだろうな……」

独り言のように呟かれたその言葉に、設啓はふと眉を顰める。何かが引つ掛かった。

「蛇がどうやって知ったか……ですか」

「ああ、そうだ。灰が鬼逆の弟だということは少なくとも公には知られていなかったことなのだろう？ 以前から知られていれば、これまで狙われなかった方が不思議かもしれんぞ。相手は耶來だからな。灰とやらが鬼逆の弱みになり得るとわかれば、手段を選ばんだろっ」

何故、蛇が知っているのか その当たり前とも思える疑問を心中に繰り返し、設啓が感じたのは曖昧にもどかしい既視感だった。

（鬼逆の弱み……）

宇麗の言葉をなぞり、設啓ははっとする。確か、己は同じ言葉を以前使ったことがありはしなかったか？ 鬼逆の弱みを握ったつもりか、と、そう問うた相手がいしなかったか。

「どうした？」

設啓の表情の変化に目聡く気付いたらしい宇麗が問う。設啓は腕を組み床を睨みつけた。鬼逆と灰の關係に気付き、なおかつ蛇が緩衝地帯にいることをも知っている人物 そのような者は多くはあるまい。設啓自身がその数少ないうちの一人、ということになる。

そして、もう一人 設啓は顔を上げた。

（くそ……迂闊だった……）

内心に毒づく。何故、蛇が灰のことを知ったのか。蛇にその情報を伝え得る人物がたった一人脳裏に浮かんでいた。確信とともにわき起こったのは苦々しい思いである。己の本分は卸屋だと考えていた。それが、何時の間にか鈍っていたのかもしれない。このようなことを見落とすとは

設啓は宇麗に言った。

「これから向かいたいところがあります。ついて来ていただけますか？」

設啓と宇麗が連れ立って向かったのは、卸屋達が集う宿屋である。路地を通り抜けて向かった先に、宇麗は僅かに驚きを示したが無言のまま設啓の後に続いた。足早に道を進みながらも、設啓は状況の奇妙さに気付かずにはいられなかった。少し前にこの道を通った時には、灰に頼まれて宇麗への伝手を求めるために宿屋へと向かつていたのだ。あの時と比べれば、まるで視点を無理矢理逆さまに転じたような、見慣れた街路までもが新たな光景に見える不思議である。宿屋の扉を開くと、以前と全く同じ姿勢で初老の男が帳簿の上に屈みこんでいる。じろりと眼球を上げた男は、しかしそこで動きを止めた。宇麗を見上げ、その顔がみるみるうちに驚きに染まる。もごもごと何事かを口の中で呟きながら、必死に考えを巡らしている様である。

宇麗は男を見下ろした。相手の言葉を封じる眼差しだった。

「すまんが、邪魔をする」

素気なく宇麗は言うつと、奥へと歩み入った。宇麗の態度には躊躇いは欠片もなく、人を寄せ付けぬ威圧さえあった。その後には続きながら、女豹という彼女の呼び名を設啓は思い出す。なるほど、と奇妙に納得しながら廊下の先に開けた空間へと視線を走らせた。

部屋に歩み入った二人に、その場に集っていた卸屋達もまた一様に驚きを浮かべた。無理もなかるう、と設啓は思う。宿屋は外部から街を訪れた卸屋のためにある。媼の傘下には入っていない者の溜まり場であり、街の中にあつて唯一媼の力が及ばぬ領域と考えられているのだ。そこに媼の側近として知られている宇麗が姿をあらわすなど、普段ならば考えられぬことである。

設啓は視線を部屋の片隅に止めた。そこに目指す姿を見つける。一人遅い昼食をとっていたらしい相手は、口をぽかりと開けてこちら

らを見つめていた。ただ驚きのみをあらわしていたその顔が、みるみるうちに変化する。最初に疑問、次に懸念が浮かび、最後にあらわれたのは不安と焦燥だった。男は不意に表情を強張らせると椅子を蹴立って立ち上がった。慌てふためいて部屋の奥へと走り出す。設啓と宇麗が動いたのは同時だった。卓の間を走り抜けると男の前と後に回り込む。

二人の間に挟み込まれる形となった男は、往生際悪くあたふたと周囲を見回し、逃げ場がないと見るや一転してふてぶてしい表情を浮かべた。正面に立つ設啓を見やって皮肉っぽく言う。

「何だよ、穏やかじゃねえなあ。情報が欲しいなら他を当たってくれよ」

「そつもいかん。お前に聞くことがある」

「何が聞きたいんだが知らねえが、こういう遣り方は気に食わねえなあ」

設啓は無然と口を曲げた。目の前の男 設啓に鬼逆からの伝言を伝えた相手に、苦々しい思いが込み上げる。男はしきりに灰のことを気にしていた。だが、耶来にはもう関わらぬと言った男の言葉を設啓は易々と信じてしまったのだ。

「当たりのようだな」

宇麗の言葉が冷たく響いた。

男が借りている二階の一室に入り、設啓と宇麗は男に向き合う。

狭い部屋は暗く、じめついた空気が籠っていた。寝台に腰を下ろした男に設啓はぼそりと問うた。

「お前が灰のことを蛇に売ったんだな」

「……何のことだよ」

「灰が鬼逆の弟だと、どうやって知った？ 何時から蛇と接触していたんだ」

「だから、何のことだかわからんって……」

男の言葉が途切れる。宇麗が近付くと荒々しく男の胸倉を掴んだのだ。間近に男を覗き込む宇麗の表情が険しい。

「この後に及んで嘘を言うんじゃないよ。本当のことを言いな」  
「……凄んだって無駄だ。この宿屋は媪の縄張りじゃねえ。こんなことしてただで済むと思うなよ。下の連中も黙ってはいないぞ」

「ほお……そいつは面白い。試してみるか？ 後ろ盾もなく耶來とつるむようなくだらん卸屋一人のために、何人が媪を敵に回すか」  
男の顔が僅かに引き攣る。虚勢が剥がれ、落ち着きなく眼球を泳がせた。

「笠盛でお前達が商売を出来るのは誰のお陰だと思っっているのさ。  
この場所にお前らみたいな単独の卸屋が集まれるのは誰のお陰だ？ 思い上がるんじゃないよ。確かにあたし達はお前らの領域を尊重する。だが、そいつが騒動を持ち込んだとあらば話は別だ。他人の縄張りで騒動を起こした卸屋がどうなるか知らんわけじゃないだろう」

凄味のある響きに、男の口元がひくりと震える。宇麗から目を逸らすと設啓を睨みつけた。

「てめえ、多加羅の卸屋のくせに何で媪一派とつるんでるんだよ。俺のことを話しやがったな！」

「そう言うつてことは、やはり灰のことを蛇に伝えたのはお前だな」  
迂闊な相手の言葉に、設啓の声音には呆れた響きさえあった。

「……ああ、そうだよ！ 悪いかよ！ 大金になる情報があるつてのにそれを見過ごしにしたら単なる馬鹿だ！ お前も卸屋ならわかるだろうが！」

「ああ。だがお前は俺達の間を原則を破った。同業者とその周囲には手を出さない。それを破ればどのような制裁を受けても文句は言えない。まさか、忘れたわけじゃないよな。それとも耶來などに関わってそれすら忘れたか？」

「原則が何だよ！ 鬼逆の弟なんだぞ！ こんな極上のねた見過ごしに出来るかよ！」

男の言葉に設啓は溜息をつく、宇麗を振り返った。

「こいつの処分はそちらにお任せします」

「いいのか？」

「ここは緩衝地帯ですから、多加羅の卸屋が出しゃばるわけにはいきません。ですが、殺す前にどこから情報を仕入れたか、それを何としても吐かせてください」

「おい！ ちよっと待てよ、設啓。お前本気か？ 俺を媪に引き渡そうってのか？」

脅しの効果は靦面だった。途端に哀れっぽく男が叫ぶ。尤も、それは女豹の異名をとる宇麗の存在あってこそその効果ではあるのだろう。やめてくれ、と懇願する男に設啓は冷たい視線を向ける。

「灰のことを調べたならば、あいつが若衆であることもわかっていただろう。お前は俺の仲間を蛇に売ったってことだ。それ相応の報いは受けてもらう」

「頼むよ、俺とお前の仲だろう。今までの俺達の信頼関係はどうなるんだよ！？」

「お前が灰を売った時点で、もともと信頼関係などなかった、ということだな」

にべもない言葉に、男は呻く。不意に顔を歪めると叫んだ。

「俺のせいじゃねえよ！ 情報だって俺が調べたんじゃねえ！ 灰って奴のことも実際はほとんど知らねえんだ。鬼逆の手下の方から俺に接触してきたんだよ。そいつが灰が鬼逆の弟だって知らせてきて、金になる情報だから蛇にでも売ってやれって！」

宇麗と設啓は素早く視線を交わした。

「本当か？ 何故鬼逆の手下が、奴の弟の情報をお前に伝える。己の弱みとなるような情報を何故、わざと蛇に伝えさせるようなことをするんだ」

「知らねえよ！ 鬼逆に聞いてくれよ。手下が伝えたってことは、鬼逆がそう指示したんだろ。俺はあいつに利用されたんだ！ 俺だって被害者なんだよお」

最後は泣きつ面になりながら男は言い募った。俄かには信じ難い男の言葉に、設啓は戸惑う。

「話は媪の屋敷でゆっくりと聞かせてもらおう」

宇麗は言つと、男の胸倉を突き離す。部屋全体を見回し、小さな窓からは到底逃げる事が出来ないことを確認すると、設啓とともに部屋の外へと出た。扉の前で向い合い、二人は互いの厳しい顔を見合わせた。

「どうやら、ことはさほど単純ではなさそうだな」

「はい」

「こうなつては鬼逆も胡散臭い。本当にお前は何も知らないのか？ 蛇が緩衝地帯で狼藉を働いていた以外に、鬼逆が何か画策していたんじゃないのかい？」

「それは……私にもわかりませんが……」

宇麗は小さく息をついた。

「とにかく、あいつは媪の屋敷に連れて行く。話を聞けば何かわかるかもしれない」

扉へと手を伸ばした宇麗に、設啓は言った。

「どうしようもない奴ですが、あいつを殺さないでやってください」

宇麗は目を瞪る。僅かに呆れたように言った。

「何だい、あたしらを猛獣か何かだと思ってるのかい？ 心配せずとも殺すなんてことはしないよ。耶來なぞに近付くとは迂闊で浅薄な男だが、情報を扱う手腕は大したもんだ。この際、媪のもとに預けてみて面白いかもしれない。今あたしらのところには情報に精通した卸屋が欠けているから丁度いい」

それに、と続く宇麗の声は僅かに笑いを含んでいた。

「灰つてのは若衆のお仲間であつて、あたしらの仲間じゃあない。

……若衆にしては、どうやらいわくのありそうな人物だがね」

再び部屋の中へと入って行く宇麗の姿を見ながら、設啓は思わず苦笑していた。役に立つならば生かして利用するという、いかにも卸屋らしい宇麗の物言いである。単独で動くことを好む男にしてみ

れば、媪の傘下に組み込まれることこそが最も苦痛な制裁であるか  
もしれなかった。設啓は宇麗の後を追って部屋へと入った。

灰はどうなっているのか、鬼逆が弟である灰を蛇に売り渡したのは  
真実なのか　真実だとすればその真意はどこにあるのか。そして  
灰を追ったという須樹は今頃どうしているのか　設啓に出来る  
ことは、必ず帰るといふ須樹の言葉を信じて待つことだけだった。

風が吹き過ぎた。

老婆は石の長椅子に腰かけながら上空を見上げた。気紛れな風がなければ、春が来たかと思わせる麗らかな日差しだった。慈恵院の小さな庭園には常緑の木々が生茂り甘い土の匂いがする。その香りに包まれて、老婆は己の骨ばった手に視線を落とした。力無く、最早美しくもなく、ただ生きて来た歲月のみを感じさせる。

「気分はどうだね？」

老婆は背後からかけられた声に振り返った。老師がゆったりとした足取りでこちらに向かつて来ていた。着古した白い衣が、眩しい光のもとでは灰色に見えた。

「おかげさまで頗る気分はいいよ。関節の痛みが辛いところだがね、これはいつものことだ」

「そうか」

老いた医師者は長く息を吐くと老婆の隣りに座った。

「こんな日は春が近付いて来たと思えるねえ」

おっとりと言った老婆に、老師はふうむ、と唸る。

「おや、疲れでおいでかい？ 最近一段と忙しいようだね」

「冬から春への変わり目は病人には辛い季節だからな」

厳しさの滲む声音だった。豊饒とした姿は常と変わらず、だが垣間見える疲労の色に老婆は気付く。命が一齐に芽吹く春という季節は、はるかに膨大な撓められた力 苛烈な生と死の鬨ぎ合いの果てに築かれる。冬が深まり、やがて春へと向かう今は、老師にとつては心休まることの無い時なのだろう。

「年老いた者にとつても辛い季節だよ。そろそろ隠居して安穩と暮らしたいとは思わないのかい？」

「そもいかんさ。儂も漸く弟子をとつたところだからな。あいつを育てにゃならん」



「ああ、あの泉せんという子だね。賢い子だ」

「ああ」

泉自身には決して見せぬだろう柔らかな表情が老師の顔に浮かんだ。それを見つめ、老婆はふと首を傾げた。

「お前さん、あの灰かひという青年を何故弟子にとらなかつたんだね？

なかなかに見所のある若者じゃないか」

何気ない言葉に、老師は途端に渋面になる。答えぬ老師に、老婆はちらりと笑みを浮かべた。

「弟子にはとれんか。あれは根つからの風の民だろうからねえ」

「あの青年は儂などとは全く違う癒し手だ。惜しいこととも思うが、今更教えることに意味などなかるう。それに、彼は何時までもこの地に留まることはない、儂にはそう思えてならんのだ。いずれ去る者を弟子には出来ん」

「風はもとより縛られることを嫌う。一つ所に引き留められるものではないよ」

「儂自身もあやつはこの地に留まるべきとも思えんからな。惣領が何故あの者呼び寄せたかは知らぬが、ここは彼にとっては決して良き場所ではなかるう。無論、灰個人がどう思おうと、容易くこの地を去ることは出来まいが……」

低くくぐもった呟きに、老婆は相手が密かに青年を氣遣うらしい気配を感じ取る。口でどう言おうとも、この老人は件の青年を心の奥底では認め、そしておそらくは彼の未来を案じてさえいるのだらう。

「あの青年はやがてこの地を去ることになる。遠く、まだ見ぬ地に旅立ち、二度と戻っては来ない」

「まるで灰の行く末を知っているような言い方だな」

唐突な言葉に思わず老師は苦笑した。老婆の顔が、老師に振り向けられた。老師は笑みを呑み込む。己を見つめる瞳の奥に、まるで決して溶けぬ氷雪のように固く凝るものがあつた。それは暗く、老師を射ぬくような鋭さである。

「ああ、知っているんだよ」

真剣な声音だった。我知らず老師は目を瞠る。

「……これはしたり。お前さんは先見の術者かい？」

あれまあ、と老婆は笑った。

「私にそんな能力があるように見えるかい？ 何ともおかしいねえ」

「いやいや、からかわれては困るぞ。未来が見える神秘の力でもあるのかと思っただわい」

「からかっているわけじゃないよ。事実はずっと単純さ。私があの青年の行く末を知っているのは、実際にこの目で見たからだよ。遠い東の地でね」

老師は返す言葉も思いつかぬまま、目の前の女をまじまじと見つけた。互いに長い年月を生きて来た者同士、抱くものの形は違えども多くを語らずとも共感を得ることのかなう相手だと思っていた。だが、今対する老婆はまるで遠い異国の言葉を話しているかのよう<sup>に</sup>に掴み所がない。だが、耄碌した老人の戯言とも思えぬその様子だった。

戸惑いもあらわな老師の様子にもかまわず老婆は訥々と続けた。

「お前さんは仙寿<sup>せんじゆ</sup>という存在を知っているかい？」

「ああ、古くから伝わる御伽噺に出てくる者達だろう？ 確か死して後も魂が滅びず何度も転生を繰り返す人々のことだ。東の果ての何とかという国に住むという……」

「シエンジエン国だよ。仙寿は実在するのさ。私はね、仙寿なんだよ」

さらりと老婆が言った。今度こそ老師は言葉を失う。それは驚きのため、というよりも多分に突拍子もない言葉への呆れのためであった。無論、彼とて人の言を己の狭量な見解だけで判断することの愚は知っていたが、それにしてもあまりにも荒唐無稽である。そもそも、老師は仙寿の存在そのものを信じてはいない。老師にとつて死はもつと厳然としたものだった。彼の長い人生はそれとの戦いだつたとも言える。死して後蘇るなど、彼から見れば御伽噺の域を出

ぬ戯言でしかない。

それでも、老婆の様子には即座に否定することを躊躇わせるものがあつた。それは張り詰めた静けさにも似て、激しい何かを抑えつける葛藤のようでもあつた。徒に偽りを述べる者のそれとは思えぬ。「ふむ……仙寿……というなら、何故未来を知っているということになるのだ？ 転生をしたのならば過去は知っけていても未来は知らんだろう」

まるで無理矢理口から異物を押し出すかのように、仙寿、と言つた老師の声音に女は可笑しそうに瞬いた。

「そうさね。そう思うだろう？ 転生と聞けば、人は魂が過去から未来へと続くと考える。だが、実際には違うんだよ。仙寿の転生はそんなもんじゃないんだ。過去から未来へ蘇るわけじゃないのさ」

老師は語る老女の横顔を見つめる。細められた瞳に映り込む木々の緑が深い いや、違う、と老師は思った。陽光にあらわとなつた老婆の瞳そのものが、まるで底知れぬ沼を思わせる翡翠を帯びているのだ。異国の瞳だ。何故、今までその色彩に気付かなかつたのか、老師は不思議に思った。常に彼女が佇むに影を選び、顔を伏せていたせいだろうか。

「死した仙寿は確かに生まれ変わる。だが、生まれ変わるのとはそれより千年先の未来かもしれない、千年前の過去かもしれない。生まれる場所とて同じことさ。仙寿はシエンジエン国に生まれると考えられているが、実際はどの地で生まれるかなぞ誰にもわからぬ」

まるで謎かけのような老婆の言葉である。

「東の地で灰を見た、というのは……」

「ああ。私は幾つか前の前世で彼を実際に見たのさ。時代で言うならば今からさほど先の未来ではないよ。あの青年もまだ二十歳そこそこに見えたからね。この地で会うとは不思議な巡り合わせだよ。あの青年と東で出会った時、私はまだまだ幼い少年だった……つまり今生の命ももう残り僅か、というわけさ。私がシエンジエン国以外の地で死を迎えるのは、長い記憶の中でも初めてのことだねえ」

独白のように老婆は言った。馬鹿げたことと思いながらも、老師は語られる言葉に引き込まれる。

「お前さんの話が真実だとして、何故シエンジエン国に仙寿は集うのだ？ 仙寿はシエンジエン国に生まれるわけではないのだろうか？」

「ああ、そうだよ。仙寿はね、生まれる時も場所も己では何一つ選ばやしないのさ。膨大な前世の記憶を抱えて、幾度も蘇っては滅する。まるで時の浪間に、気紛れにあらわれては消える玉響の泡のような存在なのさ」

考えてもみてごらん、と老婆の声は低い。

「まるで投げ出されるようにして幾度も幾度も生まれ変わるとどうなるか……。それまでの記憶を有していれば尚更に、生まれ落ちた瞬間からは仙寿は孤独なんだよ。己という器が空っぽであれば、新たな世界で満たすことが出来る。だが、仙寿の器は生まれ変わることに既に満たされている。新たな親も、新たな街も、生まれ変わって得る全ても、やがて時の彼方に永遠に喪失するものだと思えば、やがて耐えられずにシエンジエンを目指すのさ。そうしなければ生きていけないと皆がわかっているんだよ」

「シエンジエン国に救いがあるのかね？」

「ああ。シエンジエン国には仙寿の主である礎の子いしの子がいるからね」「礎の子？」

「転生に翻弄される仙寿の中で唯一人、過去から未来へと魂が生まれ変わる存在がいるのさ。死して後、はるかに隔てられた時の彼方に流されず、まさに時を刻むように未来へと生まれ変わる存在……それが礎の子と呼ばれている。仙寿にとっては、例え何時の時代に生まれようとも存在する唯一の者が礎の子なのさ。時から切り離された彼らにとっては礎の子はいわば時と己を繋ぐ唯一の楔とも言えようかね。礎の子が死ねば、その魂を抱く新たな転生者を仙寿達は捜し出し、そしてシエンジエン国に連れて行くのさ。自らの主としてね」

「……どうにも、信じ難い話だな……」

「ああ、そうだろうね。所詮、御伽噺さ。仙寿なんてのはね……知らぬならば知らぬ方がいいんだよ」

言いながら老婆は小さく笑った。笑みを掠めるようにして浮かんだ諦めと悲嘆は一瞬で消えたが、老師の目に焼き付いた。

「ついでにもう一つ、御伽噺をしようかね……」

ぼつりと老婆は呟いた。最早男を見ることもせず、己の拳　まるで雛鳥のように小さく、握りしめたそれへと視線を落とす。

「悲しい二人の仙寿がいた。二人は幾度も生まれ変わり、幾つもの時代で何度もすれ違い、出会いを繰り返していた。ある時、何度目の出会いを果たした時、一人は男で一人は女だった。二人は愛し合った。まるで互いの他には何もいらぬのだと、そう思う程に心の底からね。だが、二人は互いに秘密を抱えていた」

なおも老婆は己の手を見つめたまま語り続ける。

「女と出会うより二百年後の時代に、男は愛する女の魂を抱く相手を、己の手で殺していた。それが男の前世の記憶だった。そして女は何時しか男が抱えるその秘密に気付くこととなる。女もまた苦しんだ。何時か自分が二百年後の世界に生まれた時、男に殺されると知ったからだ。……そのことが次の生である現世にまで及んで男を苦しめていることを知ったからだ。そして彼女もまた密かに決心をする。やがて再び生まれ変わり、二百年後の世界に命を得た時には、男の手にかかるのではなく自ら命を絶とうと……そうすれば、今生に転生する男の苦しみを幾ばくかでも和らげることがかなうのではないかと、そう考えた」

老婆の言葉は乾いた地面にゆっくりと落ちた。風が通る。それは渦巻くように激しく、螺旋を描いて二人の間を吹き過ぎた。

「何故、男は女を殺めたのだ？」

「女は裏切り者だったのさ。仙寿にとって、決して許されぬ裏切りを女はした」

「……二百年の後の時代に生まれ変わり、その女はどうしたのだ？」  
密やかな問いかけに、老婆は顔を上げる。僅かに呆けたような瞳

を老師に向けると、さあ、と呟いた。知らぬ、と

「御伽噺の最後はいつでも謎に満ちているものさ」

そして深く笑んで問うた。

「お前さんならどんな結末を望むかね？」

「僕は医者だ。他者を殺めることも、自身を殺めることも是認することが出来ん。だが、女が自殺したところで、男が救われるとは思えぬ。女とて、酷い未来を知ったならば変えればよからう」

「……変えられるものならね」

「時を渡って転生するならば未来を変えることとてかなおう。無論、それは罪なのかもしれぬが……何故、それをせぬのだ？」

「そうさねえ。確かに仙寿の中には前世で知った未来を変えようと試みる者もいる。だが、多くはただ静かに礎の子のもと、シエンジエン国で朽ちる人生を望むようになるのさ。未来を変えることは恐ろしいことだよ。悲しいことだ。未来を変えればどうなる。未来を生きた己の記憶が、嘗て確かに生きた時そのものが、消えてなくなるかもしれないぬ。過ぎた前世を己の手で消すことなど、仙寿には出来やしないのさ」

無論、シエンジエンに集うことを厭う仙寿もいるがね、と老婆は言う。抱く記憶に捕われることもなく、与えられたその時々を生を享樂的に、あるいは淡々と生きる者も確かにいる。だが、それは仙寿の中の異端だった。仙寿もただの人の子　奇跡と呼ばれるものの底にあるのは、不条理な生の繰り返しに縛られた魂、ただそれだけだ。

不意に吹いた冷たい風に、老婆は羽織る毛織の布を引き寄せた。ふと夢から醒めたように顔を巡らせると、からりと口調を変えて言った。

「さあさ、益体もない話はお終いだ。休憩はこれくらいにして、そろそろ診察に行った方がいいんじゃないかい？」

「あ……ああ」

老師は我に返ると立ち上がった。確かにまだ診察を終えていない

患者が多くいる。歩きかけながらも現実離れた物語の余韻が生々しく、老師は老婆を振り返った。莞爾として己を見つめる相手に何か言葉をかけようと思ひ、出たのは結局己でも呆れるほどに事務的なことだった。

「後で泉に関節の痛みに効く薬湯を持つて来させよう」

「ああ、ありがとよ。灰が調合したものだろう？ あれはよく効くね」

「あまり体を冷やさぬよう、気を付けるんだぞ」

「はいよ」

柔らかな返答を背に聞き、老師は建物の中へと向かった。回廊から何となしに再び振り返ると、老婆は降り注ぐ陽光に染まっていた。

老師が去つてなお、老婆は庭園から動くことが出来なかった。まるで石と同化したかのように、動くのが億劫だった。老師が浮かべた表情を思い出し、小さく笑う。あの老人には突拍子もない話に聞こえただろう。耄碌した老女の戯言と笑うだろうか。誰かに託すことなど到底出来ぬものではあつたが、あの老人ならば語つてもよいと思つた。ただ一度生まれて消える、そのような人の生き様に真摯に向き合つてきたあの老人であればこそ 何度も生まれ変わり、どれ程に多くの記憶を抱いていようと、ただ一度の生を鮮やかに生きる者達の激しさに焦がれたのだと、臆面もなく言える気がしたのだ。結局言えはしなかつたが、と老婆は自嘲する。

（稟は、もう来ているかね……）

思い浮かべたのは一人の少女だった。毎日のように友の見舞いに訪れる少女は、その後には必ず老婆のところにも顔を出していた。他愛の無い会話に明るい笑顔、気付けば毎日少女を心待ちにしている。このような温かい日であれば、二人で小さな庭を散策出来るだろう。我知らず微笑みを浮かべ、老婆は振り返った。

その視線の先に、男が一人立っていた。

振り返ったのは、彼女自身にもわからぬ無意識の動作だった。何かを感じたわけでもなく、だが必然的に、振り返った先に立つ男の姿を既に老婆は知っていた。昔は何度も夢に見た。恐怖に怯え、己が迎える最期の時を反芻した。それがこのように美しい日であるとは知らなかったが

己を見つめる男を前に、老婆の顔からゆっくりと笑みが抜け落ちる。残ったのは張り詰めた覚悟と諦めだった。男は回廊から踏み出すと、一歩一歩老婆へと近付く。その手に、鋭い剣が握られていた。男の顔は青褪め強張っていた。

(わかつていた、ということかね)

ぼんやりと思う。不思議なものである。老師に語ったのは、己の死が間近であるとわかつていたからだろうか。

「……捜したぞ」

低く男が言った。冬の最中、まるで春を思わせる美しい日差しにも目をやらず、男は老婆と対峙する。無論、何度まみえようと男は変わらぬ。不器用に、愚直なまでに己の信念を貫く、そういう男なのだ。

「えらく長くかかったもんだね。待ち草臥れたよ」

言いながら、己は二百年前に生を受けた時から、幾度ももの転生を繰り返し今この時を待ち続けていたのだと、老婆は悟った。無論、男に老婆の言葉の意味などわかりはしまい。やがて死した後、新たな生で出会う女のことを、まだ男は知らぬのだから。

「何故、我らを……あのお方を裏切った」

「今更、理由を知ってどうなると言うのだ」

老婆の囁きに男の顔が歪む。その額に刻まれた白い傷跡に、老婆は気付いた。何十年も、おそらくは彼女を殺すことだけを考えて異郷の地を旅し続けたのだらう。その苦難を思う。

「……お前を殺す」

「ああ、知っているよ」

「お前が我らを裏切らなければ、礎の子が失われることはなかった



！  
不意に激情に駆られたように男が叫んだ。剣を握る手が震えていた。それを老婆は見つめる。断罪はただ悲哀を感じさせただけだった。

「何故だ。何故、白沙那皇帝はくさなにあのお方のことを……我ら仙寿の存在を告げたのだ！ お前の裏切りさえなければ、東方遠征は起こらなかった！ あのような酷い戦は起こりはしなかったのだぞ」

東の地を蹂躪し、多くの命を奪った悲惨な戦いの記憶を、男は生々しく抱いているのだろう。言葉には血を吐くような痛みが籠っていた。

東方遠征の真の目的は領土拡張ではない。己の死に怯えた皇帝が、何度も生まれ変わりこの世に生きるといふ仙寿の、その奇跡を己がものとせんと派兵を決したのだという、それが真実だった。遠い東の果て、御伽噺の中にしか存在しないとされていた仙寿が、確かに生きていたのだと皇帝に告げたのは何処からか都にあらわれた一人の女占い師だったという。

永遠に存在したいなら、仙寿から奇跡をお奪いなさい。時を紡ぐのは仙寿の主、礎の子と呼ばれる存在です。その者の魂を我がものとすれば、幾度死のうとも、必ずやこの世に生まれいでることができないでしょう

朽ちゆく己の命への妄執に捕われていた皇帝にとって、占い師の囁きはあまりに甘美だった。現実離れた戦の動機に無論声高に反対を唱えた者もいたが、嘗てより苛烈で知られ、晩年にあつて最早慈悲の欠片もなくしていた皇帝の、容赦のない血の肅清の前に誰も口を閉ざした。時の権力を望む者達の画策も絡みあい、かくして国境を侵す狼藉者の成敗、はては領土拡張という尤もらしい号令のもと、狂奔のうちに戦端は開かれる。

「何故……！」

まだ青年だった男が戦の粉塵の中皇帝の傍らに立つ彼女を見た時に浮かべた表情を、老婆はまざまざと思い出すことが出来る。愕然

と見開かれた瞳にあるのが、裏切り者への憎悪だけであれば己もまたこれ程に苦しみはしなかっただろうと老婆は思う。あの時、立ち尽くす青年の顔にあるのが悲しみでさえなければ

「あの戦いの折に、同胞を守るため礎の子は己が身を晒し、その魂は千々に砕かれたのだ。最早我らは生きるよすがを失った。その絶望が如何程のものか……！」

そしてただ裏切り者を殺すためだけに生きてきたのか。悲しみを殺意に変え、苦しみを憎悪に変えて。老婆は哀しく目の前の男を見つめた。

「ああ、私は知っているよ。お前の絶望も、仙寿達の苦しみも。だが、礎の子と同じではないのかい？ あのお方は常に縛られておられた。我らの苦しみに、悲しみに、全てを奪われておられた。あのお方は心の底から解放されることを望まれていた。私はそれをかなえてさしあげたかった……」

老婆の言葉に、剣を握る男の腕から力が抜けた。

「礎の子が、解放を望んでいた……？」

「我らが時の渡り人であるならば、あのお方は時に捧げられた生贄だった。未来も過去もなく泡沫の生を渡り歩く我らがあのお方を求めたのは、ただ己が救われたかったが故だ。仙寿は礎の子を己が命のよすがとするために、最も尊いお方を己が奴隷にまで貶めたのだ。礎の子はそれに気付いておられた。長い間、解放を願い、絶望の中に何度も生を繰り返しておられた。……お前は知るまい……」

知るまい、と繰り返した低い声音に、男は凝然と立ち尽くす。力無く下ろされた腕の先で、剣が薄ら氷の鋭さで瞬いた。

「だが……多くを死なせてまで時の呪縛を解かんとした私とて、悔いなかったわけではない……己が成した罪を、迷いがなかったと言えば嘘になる」

「今更、そのような言葉……」

絞り出すような男の声に、老婆は虚ろに笑んだ。

「ああ、その通りだ。罪人の戯言さね」

女が自殺したとて、男が救われるとは思えぬ

老師の言葉が響く。そうかもしれぬ。つまるところ、女はただ己を救いたかったのかもしれぬ。自ら命を絶ったところで、許されることではあるまいに……

それはゆっくりとした動作だった。力無い老女の動きを、男はただ見つめていた。警戒を抱かなかつたのは、老婆の瞳がまるで凧いだ水面を思わせる程に澄んでいたからだだった。懐に伸ばされた老婆の手に、小さな短剣が握られているのを見て、はじめて男の目が大きく見開かれた。咄嗟に剣を掲げ持った男の前で、老婆は短剣の鞘を抜き払うと、まるで屈みこむようにして己の胸にそれを突き立てた。鈍く肉の裂かれる音が響いた。

「やめる……!!」

男は倒れ込んだ小さな体を受け止める。遅しい男の腕に、老婆の体は軽かった。老婆の胸に深々と刺さった短剣を見て、男の顔が悲痛に歪められた。老いた体のどこにそれ程の力があつたのか、柄まですり込んだ短剣の根元がじわじわと鮮やかな紅に染まる。

「何故、何故このようなことを！」

男の叫びに老婆はうつすらと目を開いた。ひゅう、と細い息が漏れ、ごぼりと口から血が溢れ出た。老婆の目には、光を負う男の姿が大きな影となって映った。暗がり沈むその顔。怒り、憎しみ、それだけではなかった。まるで泣きそうに歪められたそれに、老婆は弱々しく喘いだ。笑おうとして、それはうまくはいかなかった。

ああ、本当に救うことなど出来やしないね……苦しみだけでなく、さらに悲しみを負わせるだけだなんて

やがて男は来世で、老婆の遠い前世の時と交錯するだろう。男が新たに負う悲しみは彼をどこに導くだろうか。老婆にはわからぬ。過ぎた時には戻れぬ。それは記憶の喪失であり、己の喪失だった。(それでも私は変えたかったのだよ……)

老婆は震える手を男に向かって伸ばした。血濡れた己の手は弱々

しく震え、途中で地面に落ちた。それでも衝動のままに老婆は絞り出すように言った。

「……私は……今生で、礎の子に会ったよ……」

男の影が揺らぐ。視界は深い闇に閉ざされつつあった。言葉とともに命が流れ出すように、全身から力が抜けていく。

「……あのお方の魂は……碎けてはいない……転生を果たしておられる……」

「それはまことか!? あのお方は、生きておられるのか!」

男の声はまるで遠雷のように、高く遠く聞こえた。急速に冷える体がまるで奈落到ち込むように感じられる。なおも問う男の声音に、老婆は答えることはしなかった。答えることなど最早出来はしなかった。

男がそつと老婆の体を地面に横たえる。死にゆく姿を見つめ、握り締める己の剣に目を落とした。

と、その時背後で響いた足音に、男は振り返る。その視線の先、一人の少年が見慣れぬ男の姿を凝視していた。男の足元に横たわる小さな姿に、少年の顔が驚きに染まった。男は身を翻し庭園を駆け抜けると、石壁の上へと一動作で体を持ち上げる。そのまま、男の姿は壁の向こうに消えた。

泉は呆然と立ち尽くし、はつと我にかえった。

倒れ伏した人物に駆け寄る。その胸に突き立った短剣と、大きく広がる血の色に、少年は息を呑む。

「ばあちゃん! ばあちゃん、しっかりしろよ!」

叫び、傍らに座り込む。老師に頼まれて庭園にいるという老婆のもとに薬湯を持って来た。その小さな壺を、あたふたと地面に置く。医術者見習いとしてまださほど修練を積んでいない泉にさえ、その傷が最早手の施しようもないものであるとわかった。老婆の薄い唇が細く開いた。そこからひゅうひゅうと音が漏れる。泉は咄嗟に口

元に耳を近付けた。

「……………伝えて……………おくれ……………」

喘鳴に紛れ、か細く紡がれる末期の言葉に泉は耳を澄ました。不明瞭な言葉に、泉は顔を歪めながら頷く。

「ばあちゃん、誰に伝えればいいんだよ。ばあちゃん！」

さらに老婆の口元に耳を寄せて、泉はその最期の言葉を聞いた。視界の端で一瞬大きく老婆が目を見開いた。そして、抜け落ちるように、光が消えた。泉はのろのろと身を起こす。衝撃に弛緩したまま、大地に横たわる骸を見つめた。上半身を紅に染めて、だが老婆の顔は穏やかに、最早何も映さぬ瞳は静かに深い洞を思わせた。

泉の知らせで老婆の遺骸と対面した老師は、一つ大きく息を吐いた。何故、死んだ 声にならない呟きは、老師の胸の内に落ちた。老婆の語った物語が、果たして真実であるか否か彼にはわからなかったが、やがて何時の時代にか、何処かで彼女が再び生まれ変わることがあるならば、せめて小さな幸せを得ることのかなう人生であるように、と願わずにはいられなかった。

この日多加羅で一人の仙寿が命を絶つたという、それは彼女が残した言葉とともに密やかに東の地へと伝えられた。だが、それを知る者は多加羅にはいなかった。

そしてその同じ日、一人の青年が多加羅の北西、沙羅久しゃらくの地を踏んだ。三年の時を隔てて故郷へと戻った聡達そうたつである。青年は己が生まれ育った街を見下ろし小さく笑んだ。箱を連ねたような沙羅久の街は、まどろむかのようなのである。その上を悠々と雲が渡る。嘗ては退屈と倦怠しか感じなかったそこを目指し、青年は進んだ。

冬はいまだ深く、だが新たな季節の兆しを感じさせる風が、青年の髪を緩やかに揺らしていた。

## 86 (後書き)

今回で第三章は終わり、次から第四章「冴さえ疾はやしる剣」がはじまります。今回、よほど消そうかと思つたエピソードですが、結局そのまま更新しました。第二部の本筋とは全く関係のない話で、多分第四部が第五部に関わってくる内容なので。とはいえ、まだ第三部さえ書けていないという体たらく。「仙寿」は第一部からちよこちよこ言葉だけなら出てきていますが。

因みに第三章の一話目、鬼逆(その時点では名前は出ていませんが)と話していた「女を殺しに行く男」が今回老婆と話していた男です。まあ、第三章の一話目を変えなかった時点で、この展開も変えようがなかったのですが。ついでに言うと、第三章の「螺状の絆」は、鬼逆と灰、そして老婆と男の関係をイメージしてつけた標題です。

第四章ではこれまでの展開の裏側を全て明らかにしていきます。書き手ですらもどかしい展開、読んでいただいている皆様には本当に感謝しています。これからもどうかよろしく願っています！

## 第四章 冴え疾剣

梓魏<sup>しき</sup>では一時、間断なく雪が降り続き、その後は寒波に見舞われた。ぱたりと降雪は止まったが、厳しい寒さに何日も前に積もった雪が溶けることなく凍りついている。春の兆しを感じるにはまだ遠く、それでもやがて来る季節を人々は無言で待ち望んでいた。

梓魏軍の鍛練は、深まる冬の最中にも淡々と続けられた。万が突<sup>たつ</sup>然軍処方から呼び出しを受けたのは、軍に入隊してから一月程が過ぎた頃だった。

万は食堂の中に視線を転じた。今は昼時を少し過ぎているせいか、兵士の姿は少ない。むっと立ち込める熱気もいくらか減っていた。聞こえるのは厨房で大量の食器を洗う物音ばかりである。彼自身はと言えば、姿勢を正して座り緊張に身を強張らせている兵士と見えるだろう。いい加減待ち時間にうんざりし、新参で真面目な兵士にあるまじく、香草など噛みながら昼寝の一つでもきめこみたかったが、それを堪える。

梓魏軍隊に入隊してから今まで、周囲が彼に不審の目を向けることはなかった。梓魏領民ではあるが若い頃から各地を転々とし漸く故郷に腰を落ち着ける気になった男、その設定自体は彼自身の来し方とさほど違いはないのだが、そこに忠誠心だとか実直さだとかの単語が加わるあたりが違う点だろうか。

剣術や武術については問題ない。むしろ中の上といった腕前に思わせるのが面倒だった。腕試しで三位に入ったせいで、何かと敵視してくる輩までもがいる。まだ肩書きを持たぬ兵卒の中で一番の猛者を自称する男達 不思議なことにそういう者が何人もいるのだが、自称するのは自由だからな、と万はのんびりと思う には、恐れ入った風に負けてみせたりもする。兵士として見込みがあり性格も好ましい男、今のところそう思わせることには成功しているだろう。

漸く食堂の入口にあらわれた人影に、万は立ち上がると背筋を伸ばした。相手は食堂を見渡すと万の姿を認め、忙しい歩調で卓の間を通り抜けて来た。その間も手に持つ書類の束に幾度も視線を落としている。この時と場所を指定したのは相手の方だが、どうやら多忙の合間を縫って万の元に来たらしい。

近眼なのか眼鏡をかけ、撫でつけた髪のあちこちに直しきれなかつたらしい寝癖がはねている。三十半ばというところか、美男と言つても差支えない顔立ちにも関わらず、常に目まぐるしい思考に捕われているかのような表情が、男を落ち着きなく見せていた。その実、軍処方ぐんじょかたの中でも一、二を争う秀才だと言われている。もっとも争う相手の方がはるかに出世していることや、この男に数多くつけられた身も蓋もない奇妙なあだ名にもそれなりの理由はあるのだから。

喋繰り独楽鼠、というあだ名もあつたな、と万はまじまじと相手を見ながら思う。どういう意味だろうか。無論、読んで字の如く、なのだろう。

「君が万だね」

「はい。書記官殿」

「ああ、敬礼はいい。私はそれが苦手だね。どうも立木を相手にしているような気持ちになる。人間相手に奇妙なものだよ、全く。私のことは帆群ほむぐむと呼んでくれ。つまるところ、それが私の名前だ。肩書きとやらは立木に掲げる札と同じようなもので、敬礼同様に私は好かないのだよ」

早口で言つた相手は、万の返事も待たず卓に一枚の書紙を置いた。「これは君への命令状だ。早速に要点を言えば、万君、君には椎良しいら様の護衛の任に就いてもらう。近衛兵だね、端的に言えば」

「は……」

万は是認とも驚きとも取れる声を出す。表情は後者に近く見えるだろう。無論意図的にそう見せているのだが、相手はさして気にする風でもなかった。それどころか、ろくに万の顔も見えていない。ば



さばさと派手な音をたてながら、しきりに書類を捲っている。

「入隊してまだ時間は経っていないが、異例の抜擢だ。新参の君が突然に大任を任されるには理由がある。知りたいかね？ 簡単に言えば君が各地の事情に明るいと考えたからだ。それが何故理由になるか、疑問に思っただろうね？ 無論、その通りだろう。無理もない。わかりやすく言えば、近々椎良様は中央に赴く可能性があるからだ。我ら梓魏領民は所領を出ることが少ない。元来、出歩くことを好まない民なのだよ。そのため外の情報が嘆かわしく少ない。だが、中央に赴くとあらば旅慣れて、多くの土地の事情を知る者が必要だ。そこで君だ。わかったかね？ 質問はないようだね。よろしい」

一方的にまくしたててから、漸く書記官は万の顔を正面から見た。優秀にも関わらずこの男が何故下位の書記官の地位に留まっているのか、万にはその理由がわかったような気がした。質問も何も、言葉を挟む余地が全くなかった。この調子で上官にも接しているのだろうか。

(接しているんだろうな……)

半ば感心しながら万は思う。あまり意味がないようにも思われたが、一応は不安そうな表情を作っておく。

「ですが書記官殿」

「帆群だ。先程も言ったが、それが私の名前だ」

「失礼致しました。帆群殿、椎良様が中央に赴かれるというのは何時のことなのでしょう。初めて聞きました」

「まだわからないのだよ。私も確信のないことを口にするのは甚だ不本意ではあるが、もしかすると、ということだ。明らかに確信が持てれば、また改めて知らせる。その時に備えて君には今から近衛隊に入ってもらいたい。いざという時、君の経験や知識を活かすためにも他の近衛兵との信頼関係、これは大事だ。非常にね。だから今からなのだ。わかったかね？ 幸い、君の剣術や武術の腕前はなかなかのものと報告されている。非常に真面目に軍務に取り組んでいるのもよろしい。近衛兵は精鋭だ。今よりもさらに力ある者達の

中に入れば、君自身も上達できるだろう」

「光荣です」

万は敬礼しかけてやめる。これは演技ではない。

「ふむ。学ぶのが早い。私はそのような者は好きだよ。近衛隊にはすでに話を通してある。明日から君は近衛兵だ。まずは明朝八の刻に身の回りの物を持って近衛隊統括本部に赴きたまえ。本日の軍務は免除されているな？ よろしい。荷物をまとめておくといい。近衛兵舎に移ることになるからな。質問は？ ないか。私は近衛隊の担当だからこの先も何かと顔を合わせるだろう。わからないことは遠慮せずに聞いてくれ。では、頑張りたまえ」

「承知致しました」

帆群はうむ、と頷くと踵を返した。来た時と同様、せかせかと遠ざかる。面白い男だ。しみじみそう思いながら帆群の背中を見送り、万は腰をおろした。目の前に残された一枚の紙を手取る。ざつと目を通すと再び卓に置いた。

お前はただ待てばいい、そう言った兄の言葉を思い出していた。なるほど、うまいことしたものだ。帆群が言ったように梓魏領民が所領を出ることは少ない。他所領との商いが盛んではないため、人の行き来自体があまりないのだ。惣領家もまた所領を出ることは皆無に近い。惣領家の者が中央に赴くとなれば重大事だろう。

万の経歴から、さももつともな理由で彼を近衛隊に引きあげたのは誰か。清夜は上総家の息がかかった者と言っていたが、その何者かは軍の上層部に属しているのだろう。

(誰かはわからぬ方がいい)

惣領家姫君が中央に赴くというのは清夜がすでに予測していたことである。この機会に乗じて万を椎良の身近に配し、その命を狙う輩から守る。全て清夜の思惑通りである。だが、清夜が由洛公の命令により梓魏を離れてから如何なる情報も入らず、万にとつてはあまりにもどかしい日々だった。まずは第一歩といったところだ。

その清夜に、万はふと思いを馳せた。今清夜は沙羅久と多加羅の

狭間、緩衝地帯にいる。緩衝地帯で由洛公が企てた謀略を万も大まかに聞いていた。呆れたことに、その計画のために耶來やらいの男達を雇ったという。万からすれば、大事な計画に耶來を雇うなど正気の沙汰とは思えなかった。いつ裏切るかもわからぬ無法者である。計画が何事もなく成功すれば良いが、下手をすれば寝首をかかれるだろう。彼の地で清夜に課せられた任務がどのようなものであるかは知らぬ。だが、彼が緩衝地帯に送られたということは、何か厄介なことでも起こったのだろう。

（まあ、兄貴ならうまく片を付けるだろう）

兄の身を案じぬわけではなかったが、彼がへまをするとは思えなかった。暗殺技術は勿論、知力や思考力でも万が清夜に敵ったことはなかった。常に清夜は万のはるか高みにいる。十年を経て再会した清夜は、より揺るぎなく、透徹として隙がない。清夜と相対して打ち負かすことが出来る者などそうはいないだろう。そこまで考え、万はふと一人の男を思い出していた。

脈絡なく浮かんだ姿は、この冬のはじめ、嵐の中でまみえた相手だった。決して口外せぬと誓った一夜の不思議な邂逅は既に遠く、もとより掴みどころがなかった男の容貌とて曖昧である。だが、不気味な程の静けさと、研ぎ澄ました刃のような、男が纏う危うい気配を忘れることは出来なかった。恐ろしい程の手練　おそらくは万や清夜と同じく、影に身を置く者だ。全く知らぬ相手にも関わらず、不思議に記憶の中の男は清夜に似ていると思う。兄のひたむきな生き様と、異国の相貌を持つ青年を守る男の姿とが重なる。二人に通じるものは揺るぎの無い強さだった。単に武術や剣術に長けているだけでは得られぬ、それはおそらく己を捧げてでも守るべきものを持つ者の強さだ。

（守るべきもの……か）

反芻して万は苦笑した。強さの根源がそれであるならば、己には決定的に欠けているのもそれだった。逃げるようにして梓魏を去った自分が、再び舞い戻って椎良の命を守ろうとしている。それが

嘗て恋うた相手への執着故か、欺いた相手への罪滅ぼしのためか、それすらわからなかった。

「十年か……」

密やかに呟く。惣領家直系の姫にとっては近衛兵が一人増えることなど瑣末なことだろう。身を飾る宝石一粒の方が余程価値がある。是非ともそうであつてほしいところだ。

万は立ち上がると食堂を後にした。

一度大きく揺れて馬車は止まった。

外から幌が開かれる。途端に湿った冷たい空気が馬車の荷台へと吹き込んだ。灰は伏せていた顔を上げる。馬車の外は深い闇だった。ひたすらに揺られて進んだ時間を考えれば、おそらく深夜に近い時刻なのだろう。寒さと疲労で体が芯から強張っていた。

「おりろ」

暗がりの向こうから響いた蛇の声音に、周囲の男達が無言で立ち上がる。中の一人が後ろ手に縛られた灰を引き起こそうとする。

「おい！ そいつに触るんじゃねえ！」

蛇の鋭い声音に、男は肩を竦めると荷台の外へと姿を消した。それを見届けると、蛇が荷台へとのぼってきた。一人取り残された灰の腕を掴むと無言で荷台から引きずり出す。降り立ったそこは夜陰に沈み見通しがきかぬ。それでも目の前に蹲る建物の輪郭を捕えることは出来た。周囲は広い。おそらく緩衝地帯でよく見られる牧場地の家なのだろう。

灰を引き連れて蛇は目の前の建物へと向かった。周囲に立つ男達の姿は影に沈み、しかしまるでひたひたと押し迫る波のように、歩む二人に意識を向けている。油膜のように纏わりつくそれは、無論快いものではなかった。端的に言えば、険悪である。その大部分がどうやら蛇に向けられたものであるらしいことに、既に灰は気付いていた。

蛇の手下である男達は移動の際にも概して無口だった。だが、彼らが指示を出す立場にある蛇に対して不信と怒りを抱いているらしいことは態度の端々に見て取れた。おそらく蛇もそれに気付いている。手下達が必要以上に灰に近付くのを厭うのもそのせいだろう。己の獲物だと、まるで誇示するような態度は、男達へのあからさまな牽制であり、己の優位を再認識させるための意図的なものでもあつた。灰には感じられた。

蛇以外の男達にとつて、この場所は初めてらしかった。誰もが次の行動を判じかねるよう立ち尽くしている。蛇は正面の建物の前で彼らを振り返ると言った。

「今夜は隣りの倉庫で眠れ。当分の食糧も寝具もあるから適当に食つて休んでいろ」

濁つた返答が夜の底に響き、ぞろぞろと男達が遠ざかる。蛇はそれを見届けて短く鼻を鳴らすと、灰を振り返つた。暗闇に蛇の白目ばかりが目立つた。

「おとなしくなつたな。抵抗しなけりや痛めつけるようなことはしねえ」

優しげな声音は、しかし奥底に揺れる酷薄さをかえつて浮き立たせるものだった。無表情に視線を逸らせた灰に蛇は鋭く舌打ちをすると、正面扉の呼び紐を引いた。暫く待つと、扉の上部にある覗き穴が素早く開かれる。淡い光が漏れる。次いで扉が細く開かれた。灰からは死角となる位置で、低い声が言った。

「何故この場へ来た。まだ時期ではないぞ」

「依頼を果たしたからに決まつているだろう。報酬を受け取りに来たんだよ」

「話が違つぞ。契約では報酬を渡すのは評議会が開かれた後だ」

「こつちにはこつちの都合があるんだ。とにかくここで話しをする気はねえんだ。つべこべ言わねえで早く中へ入れろ」

相手が思案しているのか、暫しの沈黙が落ちた。次いで不承不承といった雰囲気ですべて扉が大きく開かれる。蛇は灰の腕を強く引くと建

物の内部へと踏み込んだ。そこで初めて灰は蛇と言葉を交わしていた人物と向き合った。硝子筒を掲げ持つ相手は四十がらみの頭髪が薄い男だった。簡素で厚手の衣を纏うがっしりとした体軀は、一見したところ牧場主といった風体である。男は蛇に連れられて入って来た青年に、驚きの目を向けた。

「おい！ こいつは何だ！」

「こいつは依頼とは関係ねえ」

説明する気もない蛇の言葉である。男は後ろ手に縛られた青年の、血に染まった衣に顔を顰めた。蛇へと向ける眼差しが険を帯びる。

「どういうことだ」

「だから、てめえらには関係ねえんだよ。こいつを逃がさねえよう閉じ込めてもらえりゃこっちはそれでいいんだ。余計なことを聞くんじゃねえ。報酬を受けとりゃこいつを連れてさっさと出て行つてやるよ」

言い放つと何事かを言いかけた男を無視して、仄暗い廊下を進んだ。灰は素早くあたりへと視線を投げる。漆喰の壁はところどころ罅割れ、水の湿気たような臭いが立ち込めていた。外観は暗闇のため掴めなかったが、どうやら長年放置されていた建物のようなだった。意識の端にちりちりと数人の気配が掠める。建物内部には少なくとも四人程の人間がいる。

蛇は廊下の突き当たりの扉を開けた。ぎい、と鈍い音が響き、地下へと続く細い階段が姿をあらわした。そこは闇ではなかった。橙を帯びた光が階段の先に続く通路を照らし出している。蛇は背後からついて来た男を振り返る。

「こいつも地下に入れておいてくれ」

男は無然とした表情で、しかし蛇の言葉には逆らわず先に立つて階段を降りた。とりあえずこの場は蛇の言に従うこととしたのだろう。決定権のない立場なのか、端から判断するだけの器量がないのか、そのどちらとも言えそうだった。

男は地下に一つきりある部屋の前で、懐から鍵の束を取り出した。

壁にかけられた硝子筒のもと、目を眇めて中の一つを選び出し、鍵穴へと差し込む。がちりと重い音が響く。低い軋みをあげて開かれた扉へと蛇は近付くと、短剣を取り出し灰の縛めを解いた。

「入れ」

命じられて、灰は部屋の中へと踏み込んだ。暗闇を覚悟していたが、そこもまた光が灯されていた。扉の横に設えられた硝子筒に、細い炎が揺れ、すえた臭いの籠る地下の部屋を半ばまで照らし出していた。背後で扉が閉ざされ、鍵の閉められる音が無機質に響いた。灰は縄に擦れた手首を無意識に握りながら、部屋の中を一頻り眺めた。窓のない部屋は倉庫として使われていたものか、底冷えする寒さは全体が石造りのせいだろう。ゆっくりと視線を巡らせていた灰は、その動きを止める。部屋の奥　小さな寝台の上に蹲る人影があつた。膝を抱え込むようにして座っているらしい。暗がりには定かではなく、しかし相手の吐く息が白く滲んでいた。

灰は目を細めた。空気を伝わるのは敵意と警戒、そして恐怖である。

「……誰だ……」

相手の声は僅かに震えていた。光の傍らに立つ灰からは、奥の人物の姿は闇に紛れ捉え難い。ひきかえ相手からは灰の姿がよく見えるのだろう、注がれる視線が強い。互いに身構えるように、張り詰めた静寂が落ちる。暫くして、なおも警戒を解かぬまま幾分しっかりとした声が言った。

「怪我をしているのか……？」

とうに血は止まっていたが、手当の一つをするでもなく馬車に揺られ、客観的に見れば惨憺たる姿だろう、と灰は気付く。ちらりと己の体を見下ろせば、腕と脇腹の傷のせいで、衣の右半身が案の定黒ずんだ血糊に染まっていた。実際以上に酷く見えるだろうそれである。

「大したことはない」

「とてもそうは見えないぞ」

目が暗がり慣れる程にあらわとなる相手の容貌を見れば、灰と年の頃は変わらぬだろう青年だった。寒さから身を庇うためか厚手の毛布を纏い、乱れた髪が顔を半ば覆っていた。

「あいつに捕えられたのか？」

ひそりと問われて灰は思わずまじまじと相手を見つめた。

「さっきの男だ。あいつに捕えられたんじゃないのか？」

蛇か、と内心に思い、灰はただ首肯した。その動作に、相手の緊張が僅かに綻ぶ。年の近い相手に気が緩んだか、あるいは、少なくとも己に危害を加える相手ではないと思っただせいだろう。ほっと息をつく気配が密やかに響いた。

「お前もか……。俺もあいつに捕えられてここに入れられたんだ」  
青年がぼつりと言った。それに灰は目を瞠る。

「いつからだ？」

「ここに入れられてからどれくらい経ったかはよくわからないんだ。でも、多分一月程前からだと思う」

一月　　呟いた灰の声は寄る辺なく響いた。それは決して短い時間ではない。見れば、青年が纏う衣は汚れ、顔も垢じみている。

「見ろよ、これ」

言いながら青年が毛布の下から左腕を掲げてみせた。その手首に鉄の枷が嵌められていた。じやらりと響いた錆ついた音はそこから伸びた鎖がたてたものだった。鎖はのたうつように寝台から床へ、そして部屋の奥へと続いている。

灰は壁に掛けられた硝子筒を掴むと、青年へと近付いた。柔らかな光に、青年が眩しげに目を細めた。床に硝子筒を置き、灰は寝台に腰をおろした。間近に枷を見ると、人の力では到底壊すことはかなわない頑丈な物だとわかった。太い釘で固定され、工具を使わなければ外すことは出来ないだろう。鎖に触れば、ざらついた冷たい感触が残った。

「見せてくれ」

灰の動きを目で追っていた青年は、突然の言葉に戸惑ったようだ



った。それでも意図を察したのか枷を嵌められた腕を差し出す。衣はところどころ破れていた。露出した肌は鉄の枷に触れ続けたせいで赤く腫れあがり、裂けるような傷から血が流れている。

「酷いな」

ぼつりと灰は呟いた。ふわりと白い息が広がる。しんしんと凍えるような寒さに、言葉がひそりと落ちた。

「何故、このような物を……」

「半月くらい前かな、逃げようとしたんだ。もう少しで建物の外に出られるところだったが、だめだった。連れ戻されて、こいつを嵌められた」

青年の言葉を聞きながら、灰は血濡れていない方の袖の端を噛み切る。そのまま勢いをつけて一気に布を裂いた。鋭い音が響く。細長く切り取った布を灰は丹念に伸ばす。

「おい、何してる」

「肌が鉄に触れないようにしておいた方がいい。本当は清潔な布の方がいいんだが……」

言いながら灰は布を枷と腕の間に通し、素早く巻き付けた。常に身につけていた薬草や包帯は、蛇に捕われた時に奪われていた。器用な手の動きに青年は暫し呆気を取られたように見入り、そしてふと灰の左腕に目を止める。切り取られた布の分だけ晒された腕に、白い布が見えた。手首からきっちり巻かれたそれは、まるで包帯のように見える。

「その腕はどうしたんだ？」

灰は己の腕を見ることもなく答える。

「昔負った傷の痕があるんだ」

「隠しているのか？」

「ああ。見て気持ちの良いものではないからな」

言いながら灰は布の端を結び合わせた。

「これで少しはましになる筈だ」

慣れた鮮やかな手つきを半ば感心したように見つめていた相手は

苦笑する。

「変な奴だな。そっちの方が余程傷だらけだ。こめかみからも血が出ているじゃないか」

「何故ここに捕えられたんだ？」

青年は東の間黙り込んだ。表情に厳しい色が浮かぶ。

「わからない。だが、察しはついている」

感情を必死に押し殺すかのような声音である。青年は俯きがちに唇を噛みしめていた。くつきりとした目鼻立ちは幼くも見えるものだったが、鋭い輪郭が目についた。頬の深い影はおそらく捕われてから刻まれたものだろう。

「あいつらは多分、俺の命を楯に祖父に脅しをかけているんだ。俺の祖父は力があるからな。目的は金か、それとも別の何かか……」  
声音に悔しさが滲む。青年は小さく息をついた。

「お前は何故捕えられたんだ？」  
「俺も似たようなものだ。俺の命を楯にある人に脅しをかけようとしている」

答えながら灰は片膝を抱え込んだ。凍えるように冷たい手に、己の息ばかりが仄かな温もりだった。

「……同じ立場、ということか。お前、名前は？」

「灰だ」

「俺は蔡李だ」

床を見つめたまま灰は問うた。

「このような目に遭うとは、蔡李の祖父殿は何をしているんだ？」

僅かに迷うような沈黙の後、青年は答えた。

「俺の祖父は緩衝地帯の中でも力ある卸屋おろしやなんだ。西の元締めと呼ばれているのが俺の祖父だ。聞いたことがあるか？」

「ああ。確か緩衝地帯西部の街や村を裏から動かしている人物だろう？ 誰が脅しをかけようとしているんだ？」

「わからない……」

不意に蔡李の声が熱を帯びた。吐き捨てるように続ける。

「祖父が俺のせいで何か無理なことを要求されているかと思うと、我慢がならない。何とかして逃げ出したいのにこの鎖のせいでそれも出来ない」

「でも目的が達せられたら、そのうち解放されるんじゃないか？」  
「どうだろうな。おそらく俺を捕えた男は裏稼業を生業にしている奴だ。目的を達したら多分俺は殺される」

それが、この閉ざされた場所で考え尽して得た結論なのだろう。突然に捕われ一月も閉じ込められていれば、どれ程の不安と孤独を感じていたか。それでも青年は気丈である。冷静な言葉の裏には、既に覚悟を決めた者の静けさがあった。

「だから祖父には出来れば要求など呑まないでほしいんだ。こんなことを言ったら頭からどやされるだろうけど……でも俺のためには人はどのようなことでも受け入れるんじゃないかと思うと、やりきれない」

「大事にされているんだな」

「……前は俺なんかより商売の方が余程大事なのだろうと思っていてたが、こんなところに閉じ込められてはじめてわかった。どれほど大事にされていたかがな。情けない話だ。ろくに感謝すらしたことがなかったのに」

自嘲するように呟いて、蔡李は気まずそうに笑った。喋り過ぎたな、と独りごちる。

「まともに会話するなんて久しぶりだから……悪いな。変な愚痴を聞かせた」

「いや、と答えて淡く笑んだ灰に、蔡李は問うた。

「お前はどうかんだ？」

何が、と問い返すことはせず、灰は僅かに視線を伏せた。仄かな笑みはそのままに、ひそりと答える。

「俺の場合は、脅したところで無意味だろうな。あいつは見込み違いをしたんだ。俺の命を楯に取ったところで、相手が要求に応える筈がない」

「……そうなのか？」

ああ、と灰は短く答えた。静かな声音に何を思ったのか、青年はそれ以上問おうとはしなかった。灰は寝台の横に置かれた小さな卓に視線をやった。水差しと皿が置かれている。食事はまともに与えられていたのだろう。水差しに水が残っているならば、傷口を洗い流せるかもしれない。そう考えながらも動くのが億劫だった。痛みはさほど酷くはない。しかし、不快な鈍麻に足先から浸されるようなけだるさがあった。灰の横顔に蔡李は瞬くと、己が被っていた毛布を灰の背に被せた。

「少し休めよ。ああ、毛布は気にすんな。こんな所に閉じ込めやがって、あいつら毛布だけはしこたま置いていったからな」

言った通り、他にも数枚の毛布が寝台の上には積まれていた。凍える程に寒い地下室に火さえ焚かず、決して良い待遇とも思えなかったが、少しは体を温めることが出来る。温もりに包まれて灰は抱え込んだ膝に額をつけるようにして俯いた。灰の無言を疲労故と考えたのか、蔡李は気を遣うように黙り込む。

ちらちらと揺れる淡い光のもと、半ば伏せた灰の眼差しが次第に影を帯びる。やがてうつらうつらと眠りに落ちたらしい蔡李の息遣いを聞きながら、灰は戸外の気配を探る。冴えた星月の光は、階調を移ろう淡い粒子だった。冬の長い夜も更けつつある。奇妙な場所であいまみえた二人の青年の存在など知らぬ気に、地面を這う鼠の、微細な髭の揺れがさやさやと響いた。

僅かでも眠った方がいいのはわかっていた。鋭さを帯びる思考とは裏腹に、体は眠りを欲している。灰は目を閉じた。ふと浮かんだのは、泣きそうな顔で己を見つめる稟<sup>りん</sup>だった。被<sup>ひ</sup>さるようにして責める眼差しの須<sup>す</sup>樹<sup>じゆ</sup>がいた。案じているだろう、と思う。全てがうまくいっていれば、須樹は既に解放されているだろう。若衆がねぐらに戻り、紺<sup>こん</sup>から事の顛末を聞けば灰が蛇に追われたことも知る筈だ。睡魔に意識を吞まれながら、卒然と脳裏に多加羅の街が浮かんだ。遠くに在りながら、街衆のざわめき、鍛練所に響く掛け声までが、

不思議に鮮明である。仁識にしきの遠慮のない物言いと、冶都やとの快活な笑い声が懐かしかった。秋連しゅうれんと娃娃えなは緩衝地帯へと向かう灰に何も問わず、それでも案じる視線を向けて来た。静星せいせいの青白い顔が浮かび、なるべく早く多加羅に戻れと慄然として言った泉せんの言葉を思い出す。連鎖的に浮かぶそれらは、灰が背後に残してきたものたちだった。

一体いつからこれほどに　ぼんやりとした思考を最後に、止めどない残像は曖昧に滲んで消えた。自分がどのような言葉を紡ごうとしたのかもわからぬまま、灰は泡沫の眠りに落ちる。その寸前、灰は、遠く確かに獣の鳴き声を聞いたように思った。

#### 第四章 冴え疾剣（後書き）

第四章「冴え疾剣」（「さえはやつるぎ」と読みます。）開始です。今まで影の薄かった主人公がようやくやく前面に出てきます。因みに「疾剣」は造語です。意味はそのうちに出てきます。ではでは、今後ともよろしくお願いいたします！

蛇は落ち着きなく小さな部屋を歩き来していた。案内されたのは、どう見ても雇われ人にあてがわれるような粗末な部屋だった。無論、蛇は雇われ人には違いないが、見るからに三下が相手では面白くない。

家にいたのは依頼主の部下三人だけだった。地下室に捕えた若者を見張る任務を負っている彼らは、単なる下っ端である。報酬を受け取りたいという蛇の言葉にも相手は頷かず、明日か明後日になれば上の者が来る、と言うのみである。報酬を受け取り、すぐにでもこの場を去りたい蛇にとっては、見込みが外れた形となっていた。だが、蛇は言われたとおりにこの場所で待つしかなかった。

契約相手の正体を蛇は知らぬ。別段珍しいことではない。耶來ヤライに依頼を持ち込むような相手が、素性を秘するのは当然とも思えた。しかも依頼内容は二惣領家の力関係を根底から揺るがすようなものである。むしろ相手の素性など知らぬ方が身のためというものだろう。そして、蛇が長年の経験から感じたのは、依頼主がこの手の荒事には不慣れであるらしいということだ。

だが、それもどうやら違ったらしい、と蛇は考える。当初依頼主に抱いていた印象が変わっていた。その原因が始末屋である。あの男は侮れぬ。これまでならば相手を出し抜くことは蛇にとってさほど難しいことではなかった。だが、始末屋には初めて対面した時から、それが通用しなかった。そしてどこで間違ったのか、気付けば転がるように状況が悪くなっている。

苛々と歩きまわり、蛇は窓外を眺めやる。暗闇に沈む草原は凪いだ海を思わせた。始末屋は既に笠盛かさもりを出ただろうか。始末屋が雇い主に笠盛での出来事を報告すれば、報酬どころの話ではない。こちらの命が危ぶまれる。

(ちよっと待てよ……)

蛇は歩みを止める。

(状況が悪くなったのはむしろ始末屋が来てからじゃねえか?)

一体いつから全てが悪循環に陥ったのか 紺を逃した時か?

否、と思う。あの時点ではことはさほど悪くはなっていないかった。

例え幾つかの問題があるうとも依頼はうまく運んだ筈だ、と蛇は思考を凝らす。各地で狼藉を起こし、多加羅若衆の仕業と人々に思わせる、それは自身でも感心する程にうまくいった。評議会で緩衝地帯の権利を行く行くは沙羅久に渡すという意見をまとめさせる

最終的なその目的のために蔡李を捕えたのが一月前である。西の元締めはたった一人の孫のため緩衝地帯の誇りである自治でさえ捨て去るだろう。そして、媪がどう足掻こうと評議会の意見は覆らぬ。蛇の功績を、依頼主とて無碍には出来まい。

始末屋の存在さえなければ。蛇は口元を歪めた。考えようによつては、これは好機かもしれぬ。始末屋が来てからむしろ状況が悪くなったのであれば、全てを始末屋の不首尾だと依頼主に思わせればいいのだ。それでも報酬が受け取れないならば蔡李を奪って逃げるのも手だと蛇は考える。

(最悪、あのがきさえいれば……)

契約相手が己の敵となるならば、それ相応の対抗手段を取るべきだろう。依頼主にとって蔡李は己の目的を果たす切り札である。青年の身柄をこちらが押さえれば、金を要求することも出来よう。金が手に入るならば、それが報酬という形であるうとなかろうと、蛇にとつて大した違いはなかった。

そこまで考え、蛇は寝台に腰をおろした。不穏な気配を隠そうともしない手下達からも離れ、漸く僅かながらも寛いだ心持になっていた。不本意な状況は、己の望むものに変えてしまえばいい。何よりも、と蛇は愉悦に顔を歪めた。この依頼の一件が終われば、あの灰という若者を楯に鬼逆を追い落とすことも出来よう。

結局全ては己の望むとおりに運んでいるのだと、蛇は独り笑んだ。



翌日、蛇は早朝に目を覚ました。

家は静けさに包まれ、窓から見える光景は鈍色の空の下、茫漠と広い。明るい中見渡せば、草地に岩が目立つ。もとより草が繁茂するには適さぬ石地であったのだらう。打ち捨てられて数年を経た家もまた、人の営みから外れ自然の循環に組み込まれたように朽ちる様である。

蛇がこの場所を訪れたのは、以前依頼主の使いの者と契約内容を確認するために対面した、その時だけである。依頼主が何者かは勿論、使いの者がどのような階層に属するのかすら悟らせぬ用心深さだった。

昨日と同様、依頼主の部下達は変わらぬ渋面で蛇に対したが、蛇は目聡く一人の姿が見えぬことに気付いた。夜のうちに何処かへ向かったらしい。おそらく上の者へ蛇の訪れを伝えるためであろう、と彼は考える。

果たして、昼過ぎには蛇の考えが正しかったことが証明された。

北西の方角からあらわれた人影を、蛇は二階の部屋から捉えた。馬に跨る男達は全てで十人程か、人数が多い。統制のとれた整然とした動きは、どこか軍隊を思わせる。長身の一人が真先に馬からおりると玄関へと向かった。階下に扉が開かれる音を聞きながら蛇は笑む。どうやら始末屋よりも先に決定権を持つ人物と接触が出来るらしい。

暫く待つとぞんざいに扉が叩かれ、例の四十がらみの男が顔を出した。

「ついて来い」

「上のお方の到着か。早かったじゃねえか」

蛇の物言いに、相手はあからさまに不機嫌な様を見せたが、何も言い返そうとはしなかった。早く厄介者を責任ある立場の者に押し付けたいという、その意図が透けて見える。

向かった先は三階の奥にある一室だった。荒れた家の中で、唯一

部屋としての体裁を整えているそこは、質素な書齋といった趣である。蛇は集う面々に素早く視線を走らせた。部屋にいたのは五人である。二人は契約時に対した相手だった。見知らぬ三人のうち二人が扉の前に陣取る。残る一人が最も上の立場の者なのか、正面から蛇を迎えた。その姿に蛇は目を細める。

男はまだ三十半ばという若さに見えた。端正な容貌は一見優しげである。何よりも目を引いたのは男が持つ色彩だった。肌の色が抜けるように白く、瞳と髪は柔らかな薄茶である。様々な人が集う国境地帯の來螺オビでもさほど多くは見られぬ、それは帝国内で北限の民と呼ばれる人々の特徴だった。

「お前が蛇か」

問われて蛇はふてぶてしく笑んだ。

「ああ、そうだ。俺の用件はもう伝わっているだろう。報酬を受け取りたい」

「評議会が終わった後という取り決めだった筈だ」

「何度も言わせるんじゃないよ。それはあんたらの事情だろう。どの道評議会まで待つ必要もねえ。依頼は果たした」

「その割には不手際が多いようだ。笠盛では何やら騒動を起こしたというではないか」

やはり伝わっていたか、と蛇は苦々しく思う。無論、表情には出さず笑んでみせた。

「こちらの動きは掴まれちゃいねえ。西の元締めの子孫がいりゃ、媼がどう動こうと評議会の意見が覆ることはねえからな。騒動などと言ってもよくある喧嘩の類と似たようなものだ。誰も不審に思っちゃいねえよ」

「己の不手際の言い訳にしては下手な言い分だな」

冷たい声音に蛇は笑みを消す。やはり単なる優男ではないらしい。険を帯びる眼差しが鋭い。男の背後を固める二人が視線を交わすのを、蛇はひやりとして見つめた。扉の前に立つ二人が不意に気になる。まるで逃げ道を塞いでいるようではないか。

「俺は言われた通りに依頼を果たしたんだ。それに騒動が起こったのは始末屋のせいで、俺のせいじゃねえ。あいつが来てから変なことになっちまったんだからな」

冷たいまでに整った塑像のような男の無表情が、はじめて動いた。僅かに眉を顰め、蛇を凝視する。

「一体何を言っている」

「だから、始末屋だよ。参ったぜ、したり顔に指図しやがって、一人高みの見物だ。送りこむならもつと使える奴を送ってくれよ」

「騒動の原因は始末屋だと言うのか？」

「ああ、そうだ。あいつさえ来なけりやもつとうまくいっていたんだ」

なおも言い募ろうとした蛇は、背後で響いた音に身を強張らせた。剣を鞘から引き抜くそれである。咄嗟に振り返ろうとした蛇だったが、身構える隙もなく腕を背後に捻りあげられる。強い力で押さえつけられて蛇は床に膝をついた。愕然として顔を上げると、扉を固めていた二人のうちの一人が、無表情に蛇を見下ろしていた。もう一人が抜き身の剣を蛇の首筋にあてがった。

蛇は目の前に立つ男を睨み上げる。

「おい！ こいつはどういうことだ！」

叫ぶ蛇を、男は睥睨する。

「それはこちらが問いたい。始末屋のせいなどと、どういうことだ」  
「言った通りの意味だよ。俺は言われたとおりに依頼を果たした。全てうまくいっていたんだ。それを始末屋がいらぬ口出しをしたせいで厄介なことになっちまった。騒動が起こったのは始末屋のせいだ！ もとはと言えばお前らが送り込んで来た奴だろう！」

男がゆっくりと蛇に近づく。無駄のない動きに威圧はない。だが蛇は不意に脅威を感じた。気圧されたように己を見つめる蛇に、男は静かに言った。

「何を言っている。こちらはお前のもとに始末屋など送り込んではいない」

蛇はばかりと口を開けた。意味を捉えかねる。

始末屋など送り込んではいない？ ゆっくりと反芻して漸く言葉が意識にしみ込んだ。

「何言つてやがる！！ 始末屋だよ。お前らが送り込んでずっと俺を見張らせていたんだろうが！」

蛇は叫びながら周囲の男達を見回した。

「だから……だから俺は言われた通りにしたんだ！ 媼から若衆を奪えと言うから屋敷にも忍び込んだ。媼を潰すために多加羅との間に軋轢を起こさせると言うから、言われた通りに文を送った。知らねえとは言わせねえぞ！」

蛇を押さえつけていた一人が、正面の男にひそりと問うた。

「これは……一体どういうことでしょう」

男は眼差しだけでそれに答えると、再び蛇と向き合った。

「その始末屋とやらは、どのような者だ？ 何時頃、どのようにしてお前に近付いたのだ」

「どんなって……男だ。声の調子から言えば、年齢はおそらく三十は超えていると思う。七日程前に俺達がねぐらにしていた場所にいるなり来やがつて、依頼主が俺達の仕事に不満を抱いているから、始末をつけにきた、と……報酬を受け取りたければ言う通りに動くと命じられたんだ」

「何故その男をこちらが送り込んだ人間だと考えたのだ」

「そりゃあ……あいつが依頼の最終目的が評議会だということを知っていたからだ。それに、俺達の動きを掴んでやがった……」

語尾は力なく消える。問われて初めて、違和感を覚えていた。蛇は始末屋の顔すら知らない。始末屋は蛇と対する時常に用心深く顔を隠していた。蛇が知っているのは彼が依頼主から蛇の行動を監視するめに雇われた、ということだけだ。

だが、その証はあったか？

蛇の思考に答えるように、男が言った。

「つまり、お前の動きを監視していた何者かが、依頼の目的までも

を見通しお前に近付いた、ということか。そしてお前は確かな証もなくその始末屋を名乗る男を信じた」

蛇は大きく喘ぐ。何かを言い返そうと思いい、何も言葉は出なかった。始末屋は、依頼主から送られた者ではなかったと言うのか。では、あの男は何者だ。

少し前まで確かと思えた始末屋の存在が、今ではまるでまやかしのように入る。依頼主に雇われたという根拠を出せ、と蛇とてそう問うた。始末屋は何と答えていたか、蛇は必死に記憶を探る。信じるかどうかはお前の勝手だと、そう言っていた筈だ。

敵か味方か、それを決めるのは私ではない。お前達だ

「そんな……まさか……」

呆然と蛇は呟いた。あの言葉の意味はこういうことか。単なる比喩だと思っていた言葉の真の意味に漸く蛇は気付いた。味方、と言うには程遠いが、蛇はあの男を依頼主が送り込んだ始末屋だと信じ、その言葉に従った。得体の知れぬ相手を、己の傍に引き入れたのは紛れもなく蛇自身だったのだ。

「いかがいたしますか？」

蛇の首に剣をあてがった一人が男に問う。蛇はいまだ信じられぬ思いのまま男を見上げた。涼しげな面持ちで、男は冷徹に蛇を見下していた。

「捕えておけ。詳しく話を聞く必要がある。処分はその後だ」

処分 淡々と紡がれた言葉に蛇の顔が歪んだ。無論、彼とて人が人に対してその言葉を使う時、どのような意味を込めるか知っている。この場合、込められた意味は一つしか考えられなかった。

「待てよ！ 始末屋が本物じゃないなんてわかるわけがねえ！ そうだろう？ てめえだって俺の立場なら信じた筈だ！」

「連れて行け」

短く答える声が背後に響き、蛇は二人の男に体を引き上げられる。手慣れた動きに、蛇は抵抗を封じられる。それでも闇雲に逃れようと暴れる蛇を、男達はまるで物のように押さえつけた。

「おい、報酬はどうなる！ 報酬を渡してくれよ。俺の仲間だって黙っちゃいねえぞ！」

「お前の手下は既に拘束した。知っていることは全て話せ」

「な……ちよつと待てよ！ おい！ 離せ！！」

がっちり拘束されて蛇は引きずられるようにして部屋の外へと連れ出される。必死に首を巡らせて蛇はなおも言い募った。

「依頼は果たしたんだ！ 俺は言われた通りに役目を果たした！」

おい！ 聞けよ！ 俺がいなきやうまくいかなかったんだ！！ 聞いてくれ！！ あいつが……始末屋が偽物だとは知らなかったんだ！！！！」

蛇の眼前で、無情に扉は閉ざされた。

部屋の中に残された三人の男はなおも叫び続ける蛇の声が聞こえなくなるまで微動だにしなかった。漸く静けさが落ちると、一人が溜息をつく。中心に立つ男を振り返った顔には抑えきれぬ動揺が浮かんでいた。清夜様、と男を呼ぶ声は低い。

「これは一体どういうことでしょう。始末屋などと、あの男の言葉は本当なのでしょうか」

その問いに男 清夜もすぐには答えることが出来なかった。もう一人もまた懸念と疑惑を浮かべていた。清夜のもとで長年仕えてきた信頼の篤い部下二人である。その戸惑いが手に取るようにわかる。清夜とて、予想だにしていなかった蛇の言葉である。

「わからぬ。あの男から全てを聞き出すしかあるまい」

「もしも真実ならば由々しき事態です。我らの計画を何者かが掴み蛇に近付いていたということではありませんか。しかも、蛇を意のままに操り、いらぬ騒動を起こして計画を破綻させようとしていたのかも知れません」

清夜はその言葉に頷いた。無論、彼らとて蛇の動きには目を光らせていた。その蛇の行動が不審である、ということは既に知っている

た。計画にはない動きを蛇が取っている。それも媪の本拠地である笠盛で騒動を起こしたらしい、という報告を受けたのはごく最近のことである。まさに始末屋とやらが蛇に接触したというあたりのことだ、と清夜は思う。

清夜は由洛公ゆらくこうに命じられて緩衝地帯での計画の仕上げを取り仕切っていた。極秘の任務に手こずり、実際に緩衝地帯に入るまで思いの外時間がかかった。昨夜、突然に部下が彼の元を訪れ、蛇が報酬を求めて姿をあらわしたという。かねてからの報告もあり蛇に不審を抱いていた彼にしても、予想だにしていなかった展開である。

清夜様、と傍らの一人が遠慮がちに声をかけてきた。それに顔を振り向けると気まずげに言った。

「何も清夜様が蛇に対する必要などなかったのではありませんか？  
我らだけで対した方が良かったのではないでしょうか」

男が口には出さぬ意図を清夜は察する。遠まわしな言葉に込められたのは、北限の民の特徴を持つ清夜の外見を蛇に晒したことへの気兼ねだった。二人の部下はともに帝国民と言っても違和感のない外見である。そのため、今回の任務に選ばれた。北限の民の中で特に髪と瞳の色が濃い者は、彼らのように外部で行動するために選ばれ鍛えられることが多い。

「問題はなかるう。あやつにも己が誰に殺されるか知る権利もある  
う」

清夜の答えに、二人は尚更に気まずげな表情を浮かべた。

「由洛公の御命令は……依頼を果たしたことを確認して蛇とその手下を残らず殺せという御命令はどういたしますか？」

「こうなってはすぐに命を奪うわけにもいかぬ。何としても始末屋とやらの正体を掴まねばなるまい」

「……それにしても、嫌な任務ですね。例え依頼を成功させたとしても、問答無用で命を奪えなどと」

「我らの計画を、何人にも知られてはならぬ、ということだ」

静かに清夜は言った。だが、二人は承服しかねるようだった。そ

の心情を清夜とてわからぬわけではない。緩衝地帯の計画を知る者は全て殺せという、由洛公から清夜に下された命令を二人の部下も知っている。計画を知る、それも耶來やらいの男とはいえ、まるで騙し打ちのように命を奪うことは気分の良いものではない。つまるところ、清夜は最も汚い仕事を押しつけられたのだ。それが意図的であることは明らかだったが、不満を言ったところで仕方あるまい、と彼は思う。

「由洛公のなさりようはあまりに酷い」

清夜と由洛公の不仲を知っている部下の、思わずといった呟きだった。

「滅多なことを言うな。計画には必要なことだ」

「は……申し訳ございません」

「とにかく、どのような手段を使っても蛇に洗いざらい吐かせる。殺すのはその後だ。それから蛇が捕えて来たという青年がいたな。何者だ？」

「どうやら耶來に関わりのある者のようですが蛇も確たることは言っていないようです」

「あの青年は、いかがいたしましたしょう」

問いかけに清夜は暫し黙り込んだ。その青年が何者であろうとも、この場所に連れて来られた時点で生かしておくことは出来ぬ。それは蔡李という青年とて同じことだった。もとより選択肢などない。だが、それを言うことは出来なかった。

「何者かを知るのが先だ。場合によっては生かしてはおけまい。その時は私が片を付ける。お前達は蛇の尋問に当たってくれ」

応えて部屋を出て行く部下を見送り、清夜は小さく息をついた。厄介なことになった、と思う。だが、どのような問題が起ころうとも後に引くことは最早出来なかった。例え何人の命を奪おうとも

そこまで考え、清夜は眼差しを伏せた。弟が今の己を見たならば、決して是認することはあるまい。そう思い小さく苦笑する。

(あいつは、あれでいい)



飛雪は変わったのだ。名を変え、全てを捨てて、そうして彼は漸く自由になれたのかもしれない。少なくとも、自ら選択して再び故郷の地を踏む、その強さを得る程に。一所に捕われ、そこでしか生きる事が出来ぬ己とは違うのだ。

全ては目指すもののため　それは少年の時分から変わらず、世界を塗りこめる吹雪の前に己の無力さを痛感したあの時から、清夜が目指すものは常にその色彩の向こうにある。それは容赦のない白だった。眼前に立ちただかるそれを何時か変えてみせると、必ず切り裂いてみせると誓ったその思いに今も変わりはない。そのために痛みを伴うならば、せめて身に刻むようにして己が負うのだと、清夜は思った。

「おい、大丈夫か？」

遠く声が聞こえる。灰は己の意識がふわりと浮上するのを感じた。目を開くと、蔡李さいりが覗きこんでいた。

「やっと目を覚ましたか。呼んでも揺すっても起きないから死んだかと思つた」

「大袈裟だな。少し寝ていただけだ」

苦笑しながら灰は身を起こした。途端に眉間の奥に鈍い痛みを覚え、額に手をやった。軽く髪を掻きあげて痛みをやり過ごし蔡李を見やつた。

「昼寝にしては長過ぎるだろう。本当に死んでるみたいだつたぞ。息もしているんだかわからなかつた」

漸く蔡李は安堵したらしい。笑みを浮かべて言った。曖昧に相槌を打ちながら、灰は壁に凭れる。

眠っていた、ということに嘘はない。より正確に言えば、意識の半分を体に残し、残りを遠く彼方に投げていたというところか。確かに蔡李が言つた通り、短い時間ではなかつたのだろう。外は既に夕暮を過ぎている。さやさやと囁くような清宵である。その静けさが不意に破れた。くぐもつた叫びにも似たそれは、容赦なく与えられる苦痛に引き攣る命の波だつた。引つ掻くような不快な余韻を残すそれに、灰は顔を顰めた。僅かに顔を伏せることで表情を隠し、硝子筒の炎を調節するように、意識を広げる範囲を狭めた。

階上で行われている一連の出来事を、灰の意識は克明に捉えていた。新たに十人程の男達がこの家に辿り着いたのが昼頃である。そして、昼過ぎから行われている蛇への容赦のない尋問は、次第に計算され尽くした冷徹な拷問へと姿を変えていた。それは、灰にとつてまるで意識そのものを打ちすえるような衝撃として感じられた。叫び以上に雄弁な、命そのものがたてる苦痛の波である。

実際に発される言葉を聞かずとも、やがて起こるだろう出来事を予測することは難しくはなかった。極限にまで蛇を追い詰め全てを聞き出した後、男達は容赦なく彼の命を奪うだろう。その時は遠くない。それは同時に灰が殺されることをも意味していた。灰が多加羅若衆であることを蛇の言葉から知れば尚更に、男達は灰を生かしてはおかぬだろう。

「おい、本当に大丈夫か？ 傷が痛むのか？」

蔡李に問いかけられ、灰は緩く頭を振った。

「何でもない。それより悪いな。昨日から寝台を半分とってしまっている」

「いいよ、別に。それにこの先どっちにしても二人で使うしかないだろう。互いに何時までここにいるかはわからんがな」

何時まで生きているかは 言葉にはせぬ真意を灰は読み取る。

ふと落ちた沈黙の中で、灰は冷たい壁に耳をつけた。家と言うよりも、まるで大地の一部となったかのような石は、静寂に満ちていた。その中に意識の半ばを浸したまま、灰は言った。

「蔡李、俺はここに閉じ込められているつもりはない」

僅かに息を呑む気配の後に、無理矢理絞り出したような明るい声が響いた。

「逃げるのか？ お前は鎖には繋がれてはいないから、隙をつけばうまくいくかもな。俺も協力するぜ」

「蔡李もだ。二人ともに、ここを出る」

灰は蔡李を振り返った。蔡李は目を睜り、そして腹立たしげに言った。

「俺は逃げられない。この枷は外せない。俺に気を使っているつもりならやめろ。無理なものは無理だ」

「無理じゃない。方法はある。蔡李は祖父殿のもとへ帰るんだ」

蔡李は黙り込んだ。短くはない沈黙の後響いた声音に表情はなかった。

「今更希望を与えるな。覚悟は出来ているんだ。それとも、お前は

俺を逃がすために来たとしても言うのか？ 違うだろう。灰は自分が無事帰ることをだけを考えていたらいいんだ」

「そつか……」

「そつだよ。俺のことなんか気にするな」

言ったとき顔を背けた蔡李に、灰は出かけた言葉を呑み込む。確かに安易な言葉を言うべきではないだろう。例え真意を言ったところで信じられる筈もなからう。誰よりも信じる事が出来ぬのは己自身なのだから。彼にしても、先を見通すことは最早出来ない。

帰る。

何気なく言ったその言葉が重い。

帰る 何処へ？ その答えを灰は知らなかった。何処に帰る場所があると言うのか。昨夜あれ程鮮明に浮かんだ多加羅の街が、今は遠く、滲むような残像は奇妙に歪だった。嘗ては、確かに帰りたいたと思っていた場所があった。故郷というものがあるならば、その場所こそがそうなのだ。夕暮れに目覚める街の陰影、たちこめる脂粉の匂いと艶やかな嬌声に潜む密やかな痛み。灰がその場所に抱く印象は決して明るくはないが、それでも彼の幼い時に刻まれた淡い記憶には微かな温もりがあった。だが、その幻影もまるで砂礫の楼閣のように崩れていた。

ざらついた感触を残し、蛇の叫びが遠く響く。灰は顔を伏せた。

黙り込んだ灰を蔡李はちらりと見やる。きつく言い過ぎたせいか、思ったがどうやら相手は物思いに沈んでいるようだった。

帰る？ 内心に反芻する。そのようなことが可能なのか……可能かわげがない。灰の言葉は蔡李にとって気休めにもならない。だが、根拠もない希望を口慰みに言う程浅薄な相手にも思えず、灰の言葉はこびりつくように耳の底に残った。

突然この場所に連れて来られた相手は捉え所がない。多くを語りぬ性質なのか、それとも捕われた境遇で語る気になれぬのか、蔡李

は相手の名前以外何も知らなかった。思わず必要以上に語った自分とは対照的である。異国の風貌も珍しく、大人びて見えるが、おそらく年の頃は自分と変わらぬ筈だ。落ち着いて取り乱さぬ態度は肝が据わっているのかとも思うが、豪胆と言う表現は当てはまらない。纏う雰囲気は静謐と言う方が相応しいように思う。

蔡李にとつて人は幾つかの類型に明確に分類出来るものだった。それは幼い頃から祖父に厳しく教え込まれた教訓でもある。常に客観的に人を観察し、まるで型に嵌め込むように相手が纏う人格を見極める。それは傲慢な独善ではなく、職業的なまでに昇華された一つの生きる術だった。だが、灰はそれまで蔡李が出会ったどのような人物とも異なっていた。それまで全く対したことのない新たな類型、ということか。いずれにせよ興味深い。

尤も遠からず殺されるだろう己の立場を思えば、相手を知る必要などないのかもしれない。

卸屋おろしやであれば人に食われるな。己が相手を食うつもりで対するんだ

ふと、祖父の言葉を思い出す。口癖のように祖父が言うのを、何時しか彼は反感とともに聞くようになった。早くに両親を亡くし、たった一人の後継ぎとして厳しく接する祖父に疎ましさを覚えてもいた。この場所に捕われるまでは、厳格な態度に隠された祖父の愛情にさえ気付かなかった。

(今頃気付いたところで遅い……)

希望は、まるで朝露が草葉から零れ落ちる程の容易さで生まれては消えた。一つ一つ望みが潰えていくのを、蔡李は見つめていた。もしや自分が捕われている場所を掴んだ祖父が、助けを寄越すのではないか。扉を開いて迎えに来るのではないか。扉の鍵が開けられるたびに心の片隅で期待する自分自身を、蔡李は何時しか麻痺したような心持で冷笑していた。

覚悟は出来ている、と蔡李は内心に呟く。扉が開かれる時、その向こうにあるのは救いではない。やがて訪れるのは己の最期、容赦

のない死という現実なのだ。

無論、蔡李は知らなかった。扉を開いてあらわれたものは絶望でも希望でもなく、彼が予想だにせぬ姿を纏っていた。

蔡李は目を開いた。深い眠りの底から、まるで冷水を浴びせられたかのような唐突な目覚めである。一月近くも閉じ込められていれば、陽の光を見ずともだいたいの時間の流れが分かる。まだ深夜だろうと思いい、何気なく辺りを見回す。その視線の先に、端然と寝台に腰をおろす灰の姿があつた。硝子筒の淡い光に浮かび上がる横顔が、ふと蔡李に振り向けられる。

「起きたか」

粘度さえ感じさせる静寂に、声が落ちた。もぞもぞと蔡李は身を起こす。再び床に視線を落とす相手は、それ以上何を言う気もないようだった。

「お前は寝ないのか？」

「ああ」

「昼間にあれだけ寝ればそりゃあ眠くはないだろうな」

そうだな、と答える声音は柔らかい。蔡李は会話の継穂を失う。

奇妙に目が冴えて眠る気にもなれず、ぼんやりと灰の横顔を眺めた。その時、灰が顔を上げた。真直ぐに扉へと視線を投げ立ち上がる。つられるようにして扉を見やった蔡李は、その音を聞いた。がちり、とまるで石と石を打ち合わせるような硬質なそれは、鍵が開かれる音である。思わず蔡李は身を強張らせた。

扉の軋みが、蔡李には常よりも重々しく聞こえた。ゆっくりと開かれる隙間から洩れる光は黒緋を帯び、その中に浮かび上がった姿はまるで大きな影のように見えた。真実影であるかと思う程に、相手は音もなくするりと地下の部屋に滑り込む。外套に包まれた長身の、その手に握られているのが紛れもなく剣であることに蔡李は気付いた。研ぎ澄まされた銀の鋭さは、火影に艶めかしく揺れた。

蔡李は身を竦ませた。とうとうその時が来たのか。いずれ殺されると覚悟はしていても、恐怖に体が縛られる。大きく息を吸い、灰と呼びかける。立ち尽くすその姿があまりに無防備に見えた。部屋の半ばまで歩み入って来た相手と灰の距離は近い。なおも呼びかけようとして、蔡李は息を呑んだ。

男が身を屈めると床に跪く。灰に向かって深々と頭を下げた。呆気にとられて蔡李はその光景を見つめる。まるで君主に傳く家臣のように 光も射さぬ地下で豪華な錦も宝石もなく、影ばかりが寄り添う二人の姿は一幅の絵に似ていた。言葉を出すことすら躊躇う侵し難い静寂を破つたのは男だった。

「お考えに変わりはございませんか？」

「はい。全ては計画の通りに」

灰の声が響く。男は更に深く頭を下げると、立ち上がった。頭巾と下布に大方隠された顔が、蔡李に振り向けられる。

「その者が蔡李ですね」

蔡李は突然に名を呼ばれ目を瞠った。灰が無言で頷くのを、信じられぬ思いで見つめていた。

灰は立ち上がった弦げんを見やった。背後から注がれる蔡李の鋭い視線には気付いていたが、今は時間が惜しい。殊更感情を抑えて問うた。

「首尾はどうなっていますか？」

「睡覺煙すいかくえんを使いました。ですが量が十分ではありません。長くは保たぬでしょう」

「隣りの倉庫に蛇の手下がいます。彼らは？」

「既にそちらは準備が出来ています。残るは蛇だけです」

灰は頷くと言った。

「蛇は二階の一室に捕われています」

灰、と背後から蔡李の声が聞こえる。振り向けば、相手は彼を凝

視していた。

「……その男は誰だ」

「灰様、時間はさほど残されてはいません。お早く」

灰は頷き、蔡李へと近付いた。

「蔡李、彼は敵じゃない。俺達とともにここから逃げるんだ」

「待てよ……その男は何故俺の名前を……お前は一体何者だ」

「後で話す。今はここから逃げるのが先だ」

疑惑の籠る相手の眼差しにはかまわず、灰は蔡李の腕に嵌められた枷へと手を伸ばした。その手を蔡李に払いのけられる。鋭く響いた音に、蔡李自身はつとしたような表情になる。だが生じた猜疑はなおも頑なな怒りとなって灰へと向けられていた。

「ふざけるなよ！俺をどうするつもりなんだよ！お前、一体どこの手の者だ！」

灰の傍らをすり抜けた弦が無造作に蔡李に近付く。咄嗟に後ずさった蔡李に抵抗する間も与えず、首筋に当身を入れる。崩れ落ちた体を支えると、弦は咎める視線の灰を振り返った。

「説得は後でもいいでしょう。時間ありません」

灰は出かけた反論を呑み込む。確かに時間は限られているのだ。

蔡李の腕に嵌められた枷を示し、弦に問うた。

「外せますか？」

「専用の工具がないと無理です」

半ば予測していた答えに灰は頷くと、鎖の上に手を掲げた。意識を凝らし、脳裏に像を結ぶ。衣の下、紐に連ねた黒玉の、その膨大な力を自ら築いた虚像に収束させる。空間が軋む。不快な歪みは一瞬のことだった。渦巻くように灰の掌に集った漆黒の波が、長く鋭い形を纏った。黒く滑らかに、光すらも吸い取るように深く、それは矛のように見えた。

灰は束の間具現したそれを握り締めると、一気に鎖に振りおろす。力が貪欲に鎖に食い込み破壊するのを灰は感じた。まるで紙を貫くような呆気なさで、音もなく鎖が断ち切れる。条理から外れた力で



練り上げられた矛が、煙のように揺らめき消えた。その力が拡散し再び小さな玉に収斂するのを確認して灰は小さく息をついた。

振り返ろうとして灰は動きを止める。肩に恭しく掛けられた感触があった。手で触れると厚手の外套なのか、足首までを覆い、寒さに凍えた体を包み込む。言葉はごく静かなものだった。

「どうか、御身をこれ以上お晒しにはならませぬよう、お願い申し上げます」

灰は咄嗟に答えることが出来なかった。色の無い言葉に込められたものを捉えかねる。勝手をやる灰への咎めなのか、単に主を気遣うものであるのか。あるいは、何の意味もないのかもしれないが、何故か灰はいたたまれない心地になる。

弦が蔡季の体を担ぎあげ、扉へ向かった。灰は益体のない思いを振り払うと、外套の前を閉じ合わせ、頭巾を目深に被る。弦に続き地下から抜け出すと、そこは不自然なまでの静けさに浸されていた。階段の手前に一人。例の四十がらみの男が眠りこんでいた。

僅かに空気中に残る睡覺煙の匂いを嗅ぎ、灰は言った。

「やはり十分には効果は出ていない。急いだ方が良さそうですね」

足早に階上へと向かう。燃して生じた煙によって人を眠らせる睡覺煙の効果は強く、ごく僅かな煙でも人を眠りに引き入れることが出来る。だが実際に効果があらわれるのは火に投じて数分の間に生じた煙だけであり、狭い空間で使うのが常である。このように建物一つに使ったのでは、全体に行き渡ったとしても効果はさほど強くは出ないだろう。半刻保つかもあやしいところだった。

灰が目指したのは建物の二階部分の一室である。蛇が捕われている部屋は、既に地下にいた時に把握していた。目指す扉の前には眠り込んだ男が二人倒れていた。三階を見上げれば、そこにも一人倒れている姿がある。

迷うことなく扉を開けて部屋に踏み入った灰は思わず立ち止まった。凄惨な蛇の姿が、部屋の真中にあつた。椅子に縛りつけられ、全身に無数の傷が刻まれている。流れ出た血が椅子を伝い床に溜ま

ついていた。弦もまた背後で立ち止まる。だが、彼が示した驚きは蛇の惨たらしい姿に対してではないのだろう。低く呟く。

「まさか、薬が効いていないのですか？」

弦の言葉の通り、蛇の目は見開かれていた。死んでいるのではないことは、上下する肩の動きでわかる。自失したように床を見つめていた蛇がゆるゆると顔を上げ、怯えの混じった眼差しで入口に立つ二人の姿を見つめた。

「もしかすると部屋の中までは届かなかったのかもしれませんが」

ひそりと告げた灰の言葉に弦の眼差しが険しくなる。つまり、廊下にいた者にしか効果は出なかった、ということなのか。青年を肩に担ぎながら、弦はまるでそれを感じさせぬ滑らかな動きで剣を抜き放った。体を強張らせる蛇に近付き、その体を戒める縄を剣で切る。

「立て。お前をここから連れ出す」

呆然とした表情のまま、ぎくしゃくと蛇が立ち上がった。訝しげに細められた眼が、次の瞬間には大きく見開かれた。揺るぎなく立つ弦の姿を凝視し、喘ぐように言った。

「てめえ……始末屋……!？」

弦はそれ以上の言葉を封じるように剣の切先を蛇の首筋に突き付ける。

「ここで死にたくなければ黙って歩け」

顔を歪めた蛇が、ふらつきながらも弦の命令に従う。

傷のためよろめく蛇を引き連れて階段へと向かう。階下へ降りようとして、弦は鋭く上を見やった。階上に男がいた。倒れ伏した仲間の体を揺すり呼びかけている。その視線が振り向けられる。見合ったのは一瞬、動いたのは同時だった。

弦が蛇の腕を掴むと、問答無用で階段を駆け降りた。それに続きながら、灰は男の足音と叫びを背後に聞いた。

「侵入者だ！ 誰か！」

その声に被って蛇が喚いた。

「こいつだ！ こいつが始末屋だ！ こいつなんだよ！！」

幾つかの叫びが階上で上がる。叫びは連鎖し、灰達が家の扉に辿り着く頃には階下を目指す足音が間近に迫っていた。

家の外へと走り出た灰は、暗がりには嘶く馬の気配を捕えた。迷わずそちらへ走ると、数頭の馬の姿と、ずんぐりとした馬車の輪郭が浮かび上がった。

「灰様は馬に！」

弦は鋭く叫ぶと、馬車へと駆け寄った。荷台には縛められた耶來やらいの男達の姿がある。弦は肩の青年を荷台におろし、次いで引きずっていた蛇の腹に容赦なく肘を叩きこむと、ぐったりとしたその体を投げ入れるようにして荷台に放り込んだ。手近な一頭に跨った灰は、家の方向から上がった複数の声音に振り返る。戸口から洩れる光に縁取られ、数人の男の影が見えた。

「馬だ！ 追え！」

馬首を巡らして拍車をかけると、同時に馬車も動き出した。並走するように横につけた灰は、御者台に座る人影に息を呑んだ。弦がいるとばかり思っていたそこに、予想だにせぬ姿があった。

「須樹すきさん……」

轟く馬蹄と車輪の音に弦きは紛れたが、須樹はその声が聞こえたかのように灰を見た。互いに笑みの欠片もなく、だが須樹の顔に浮かんだのは紛れもなく安堵だった。その向こうに馬を駆る弦の姿が現れる。灰は出かけた言葉を無理矢理呑み込んだ。

振り返ると、家の輪郭が次第に遠ざかる。弦の先導で、一行は南西へとひた走った。だが、十人以上の人間を満載した馬車では、単騎の速さに敵うわけがない。やがて追い来る者達の存在を灰の意識は捉えた。夜の向こう、その暗がりから抜け出すようにして近付きつつあるその気配である。追いつかれるまでさほど時間はかからな  
いだろう。

灰は一気に馬を速めて馬車の前を駆け抜け、弦の横に並べた。

「追手を食い止めます！ 先に行ってください！」

反論だろうか、口を開きかけた弦を見やり、灰は方向を転じた。

又ま驅、来い。

想念に应えて夜の大気に溶け込んでいた存在が体の回りを包み込む。耳元で轟々と大気が鳴る。その向こうに須樹の声を聞いた気がしたが、灰は振り返ることはしなかった。

背後に迫る人馬の姿は数にして四、互いの輪郭を捉えることの出来る距離にまで戻り、灰は馬を止めた。こちらの姿を認めた相手が、何かを叫ぶ。瞬時に集中を高め、灰は右手を前に翳した。灰が編み上げた力に乗って、背後から又駆が駆ける。大地の奥から引き出された力の塊がうねるようにして地表に溢れ出した。強力な又駆の力と同化し、まるで天へと落ちる滝のように追手の行く手に噴出する。それは淡い光りを帯びた壁となり、灰と男達の間を切り裂き、左右へと奔った。

突然出現し行く手を阻んだ光の奔流に、男達が一斉に馬の手綱を引いた。膨大な力の波が地表を奔り、男達の周囲を包み込む。咄嗟に馬首を返した者の行く手をも阻み道を閉ざす。それは、人の背丈の三倍はあろうかという光の檻である。驚愕の眼が己の姿を捉えているのを見やり、灰は手をおろした。

揺らめき立つ壁の向こう、狼狽した追手の中で一人の男が馬をおり、壁に近づく。背後で止める者達の声にも構わず、壁に手を伸ばした。力の渦に、男の手が激しく弾かれた。傷つけるわけではない。近づくもの全てを弾く、そのように造られているのだと、男は瞬時に理解したらしい。

「異端の者か」

壁の向こうから聞こえた声は静かだった。問いかけか、それとも怪異を受け入れるための呟きか、灰は掴みかねる。灰へと向けられた男の眼差しは驚愕に染まっていたが恐怖はない。それを灰は意外に思った。

「我々をどうするつもりだ」

「殺しはしない。一人、その内から出す。話がしたい」

灰の言葉に、男は僅かに目を瞠った。男の名だろう、清夜様、と背後の一人が呼びかけるのに小さく頷くと灰に言った。

「私が行こう」

灰の意思のままに、光の壁に一人だけが通り抜けることの叶う細い道が開いた。躊躇うこともなくそこを通り抜けた男の背後で、再び壁は閉ざされた。目深に被った頭巾のせいで灰の容貌が見えぬのだろう、男が目を細めた。揺らめき立つ光を背後に男の姿が浮かび上がる。淡い色彩の髪が、力の余波を受けてゆるやかに揺れていた。北限の民　灰は内心に呟く。それがまるで聞こえたかのように、不意に男が動いた。

鞭のように撓った腕から、鋭い軌跡を描いて短剣が放たれる。次の瞬間、嘶いて大きく馬が跳ねた。灰の体が投げ出され地面に打ち付けられる。その痛みよりも、唐突に生を破壊された命の叫び、物理的な圧迫にまで感じられるそれに意識を貫かれ、視界が一瞬紅に染まった。額深くに剣を打ちこまれたような苦痛に呻く。

痛みが遠ざかって漸く灰は目を見開いた。地面に倒れた己の上に、押し掛かるようにして男の姿があった。首元に突き付けられた剣を見やり、灰は左手に視線を流した。倒れた馬の体が、末期の痙攣を繰り返していた。首に深く刺さった短剣の、その根元から流れ出す血が大地にしみ込むのを灰はただ見つめていた。ゆっくりと体を縁取る光が弱まり、消える。馬の骸からは、命の名残である光の粒子が、はらはらと崩れ落ちるように大地と大気との境目を曖昧にし、溶けるように同化していった。

「……蛇が連れて来た若者か……」

灰は視線を戻した。見下ろす相手の面に驚きが浮かんでいた。

「多加羅若衆だと聞いていたが……一体何者だ」

「北限の民が緩衝地帯で何を企んでいる」

逆に問いかけた灰に、男の眼差しが鋭さを帯びる。首筋に当てられた剣の、その柄を握る男の手に力が込められるのがわかった。

「北限の民は梓魏オシで疎まれていようだな。いまだ過去の栄光にしがみつки、ことあることに惣領家を脅かし、あげく己が民の命も顧みぬと聞く」

「黙れ……」

「沙羅久に緩衝地帯を渡し、一体何を得るつもりだ」

「黙れと言っている」

男の殺気が膨れ上がる。白熱するようなそれが己に向かって収束するのを捉え、灰は又駆へと呼びかけた。応えて、空気が軋んだ。灰にのみ意識を集中していた男の反応は僅かに遅れた。横合いから疾風の速さで飛びかかった獣をかわすことが出来ず、強靱な前足に弾き飛ばされる。背中から地面に倒れ込んだ男の上に、又駆が押し掛かった。剣を掴む腕を、又駆ががちりと地面に踏みつける。

灰は身を起こすとゆっくりと男へと近付いた。男を四肢の下に捕えた又駆が、灰を振り返り低く唸る。蒼白な男の顔が、又駆を、次いで灰を捉えた。まるで人ならぬ者を見るような視線を、灰は受け止めた。

「私を殺すか？ 異端の者よ」

ひそりと問われる。それに灰は緩く首を振り、右手を虚空に伸ばした。

「言った筈だ。殺すつもりはない。話がしたいだけだ」

目蓋に描いた像のままに、黒い矛が現れる。それを掴み、一気に振り下ろすと男の剣を根元から砕いた。腕を払うようにして矛を消し、灰はゆっくりと背後にさがった。十分に距離をとり又駆、と呼びかける。しなやかに身を翻して男の上から退いた又駆が、灰の傍らに寄り添った。

驚愕さめやらぬ表情のまま立ち上がった男を見やる。

「この壁はいずれ消える。貴方達には俺を追わずこの地を去っていただきたい。北限の民が緩衝地帯で何を企もうと、そのことは誰も知らぬ。貴方達がこのまま去れば、後には何も残らない」

男の目が僅かに細められた。内心を見透かそうとでもするように灰を見つめ、言った。

「つまり、お前達を追わねば我らのことを他言せぬと、そういうことか？」

灰は一つ頷いた。ただし、と続ける声音は殊更に静かだった。

「この先、もしも蔡李さいりに貴方達が害なすことがあれば、俺は貴方達を生かしてはおかない」

灰の傍らで、又駆が威嚇するように牙を剥き出す。低い唸りを宥めるように、灰は又駆の首筋に手を置いた。沈黙はそれ程長くはなかつたが、灰には時が止まったように感じられた。遙か遠くで風が渡る。問う声音は、その風に紛れるようにして灰に届いた。

「その言葉を信じるよすががどこにある。異端の者よ、お前が我らの存在を秘するという証などどこにもなかるう。どの道、我らを脅したところで意味はない。この身など目指す未来の前には塵も同然、捨てるに惜しくはない」

灰は答えぬまま男に背を向けた。一瞬、馬の骸に視線を向け、すぐに逸らす。

「敵にするも味方にするも己次第……始末屋とやらは蛇にそう言ったようだが、お前が始末屋を蛇のもとに送り込んだのか？ 大したものだ。まんまと蛇を意のままに操り、我らの計画を阻んだ」

擲掬するような声音に灰の足が止まる。

「それ程の力がありながら、何故蛇に捕われた。それともまさかそれとお前の意思か？ …… 敢えて捕われたのか？ 我らの正体を暴くために……いや、それともあの蔡李という青年を救うためか？」

「どう考えようとそれは貴方の自由だが、俺は貴方達の正体になど興味はない」

「では、何のためにこのようなことを」

何のために　その問いを振り切るようにして、灰は又駆に行こう、と語りかける。その意図を察して身を屈めた又駆の背に跨った。力強く大地を蹴って又駆が駆ける。背後で男の声が響いたが、意味なすものとして灰の耳に届くことはなかった。最早振り返ることをせず、疾駆する又駆の背で灰は顔を伏せる。走る喜びに満ちた又駆の気配に包まれて、灰は何時しか瞳を閉じていた。



灰の戻りを待っていたらしい弦げんと須樹すぎの姿を捉えたのは暫く走った後だった。距離としてはさほど離れてはいない。又駟の背から降りた灰は背後を振り返った。遠く揺れる光の襞が見えた。何が起きているかまではわからなかった。だが敢えて進まずにこの場で待つていた二人の意図を灰は察する。怪異はこの場でさえ明らかだった。

「先を急ぎましょう。このまま進めば、身を隠すに適した森があります。森の道を辿って笠盛かさもりへと向かえば、明朝には辿り着くことが出来ます」

何も問わず、背後で弦が言う。又駟がゆるりと大気に溶けた。

「灰、行こう」

須樹の声音は穏やかなものだった。振り返り、灰は須樹と向き合った。言葉は何一つ浮かばず、ただ頷くことしか出来なかった。須樹と並んで御者台に座り、動き出した景色をぼんやりと灰は見つめた。揺れに、じわりと疲労がわき起こる。何故ここにいるのかと、問う言葉は胸につかえたように出てこなかった。

沈黙の重さに、夜の冷気が混じる。やがて、柔らかに須樹が言った。

「灰、弦殿から話は聞いた。お前が何をしていたのか……」

荷台の者達に聞かせぬためか、声は密やかに低い。答えぬ灰に、真直ぐに前を見詰めたまま須樹はそれまでの出来事を語った。

灰の後を追った須樹と弦は、その夜を草原で過ごした。早く、と気の急ぐ須樹に対し、弦は慌てるでもなく野営の支度を整え、それ以上先に進もうとはしなかった。進もうにも進めなかった、というのが実際のところかも知れぬ。先導していた獣は、夜になると足を止め、前触れもなく姿を消してしまっただ。

「灰様が、これ以上近付くな、とそう伝えたのでしよう」

当たり前のことのように弦が言った。既に灰が怪魅師であることは弦から聞いていた。俄かには信じ難いことではあったが、空気に溶ける獣を見れば、偽りない真実なのだと思うに十分だった。

須樹が弦に問うたのは焚き火を挟み向き合った夜半のことである。渦巻くような疑問と混乱の中から、真実問いたいことを見つけ出すのはさほど困難ではなかった。

「まず、教えてください。俺が媼おんなの元から解放されたのは、灰の力によるものなのですね？」

「表向きにはそうではありません。ですが、灰様の意図の通りにことが運んだという意味では、そう言えましょう」

「一体灰は何を？」

「灰様は緩衝地帯での一連の出来事を起こしたのが耶來やらいの者であることをお知りになり、耶來の背後にいる者達の真の狙いを掴むために媼を見張るようお命じになりました」

「媼を？」

「はい。媼の手の者が蛇の手下を見張り捕えたならば、今回の一件を媼も少なからず掴んでいるのではないか、それもおそらくは陰謀を巡らせる者達と対立する立場にあるのではないかと。媼を見張ることが、何が起こっているかを知る最も確実で簡単な方法でした。須樹殿もその対立に巻き込まれた可能性があると仰せでした。実際に捕われていると確認が取れるまで多少時間がかかりましたが」

弦は西の方角にある森から集めた木の枝を折ると火に投じた。ぱつと光が散り、爆ぜる音が小気味良く響く。

「その後、媼の動きを見張っていたところ、彼女は西の元締めに接触しました」

西の元締め、と須樹は反芻する。それが媼と並び立つ程に力を有する卸屋おろしやの元締めであることは彼も知っている。弦の話は淡々と続いた。灰はさらに、弦に対して西の元締めの身辺を探るように命じた、という。西の元締めが次の評議会での一つの意見を纏めるよう村や街の代表者に働きかけていることを掴むのはさほど難しいことで

はなかつた。そして後継者と目されている孫の姿が見られなくなつた、ということ。それらを繋ぎあわせれば、西の元締めが孫を人質に取られ、謀の首謀者の言いなりになっているるだろつことは容易に想像がついた。

その後、灰は弦に媪とは関わりのない卸屋の中で、特に情報の扱いに長けた者を探すように命じた。蛇が、逃した紺を探し出すために必ずや接触するだろつと見込んでのことである。灰の思惑通り、蛇の手下は弦が目星をつけた卸屋に接触し、その男から蛇の在所をつきとめたという。

「そして灰様は蛇の元に始末屋を装い近付くように指示を出されました。私はそれに従い、蛇のもとへ赴き、奴を動かしました。若衆が媪の屋敷に捕われていることを告げ、それを奪うよう命じ、そして若衆には媪のもとに須樹殿が捕われていることを知らせる文を送らせました」

それで全てだとも言うように弦は口を嚙む。話を飾るということとをせぬ弦の言葉はあまりに簡潔に過ぎる。それまで黙って聞いていた須樹は思わず問う。

「何故、そのようなことを？」

「おそらく須樹殿のためでございましょう」

「俺のため……？」

「はい。私には灰様が真実どのようなにお考えであったかはわかりません。また、主の思惑を探るような立場でもございません。ですが、全ては須樹殿のため、そうではないかと思えます」

須樹は辛抱強く弦の言葉を待つ。

「須樹殿を助け出すだけならば、私にお命じになればよかつた。ですが、ただ助けただけでは媪と多加羅との間に軋轢が生じましょう。須樹殿の正体が多加羅若衆であると、何らかの拍子に媪の側に知られれば、須樹殿のお立場とてこれまでのようにはいきましますまい。何より惣領が須樹殿に対しどのような処分をなさるか、それを灰様は危惧されたのでしょう」

それは尤もなことだった。仮に逃げていけば、須樹の存在は更なる疑念を宇麗達に残しただろう。ことの重大さを思えば、多加羅若衆をこの先名乗ることはおろか、社会的な立場が奪われる危険すらあったのだと、須樹は気付く。

「確実に須樹殿の身を守るため……多加羅若衆である須樹殿の立場を守り、なおかつこの先咎められることなく多加羅にお戻りいただくためには、媼を多加羅の側に引き入れる必要がある、と灰様はお考えになった。それも、媼自らが多加羅若衆を信じるという選択をすることに意味があるのだと、そう仰せでした」

「灰が俺に多加羅若衆であることを明かすと言ったのは媼自身に選択をさせるため、ですか？」

「はい」

そのために蛇を動かさず敢えて媼との対立を煽り、そして一方で若衆には多加羅と媼の対立を蛇が深めようとしているのだと思わせる。その先は聞かずとも須樹にもわかった。設啓達が媼のもとを訪れ蛇から届けられた文を渡す。結果として、媼は蛇に対抗するため若衆を信じ須樹を解放した。まるで螺旋を描くように混迷を深める事象は、実際にはただ一つの帰結へと導くためのものであり、その中央に灰がいたのだと須樹は知った。

仲間を救うため　だが、と須樹は考える。その思いを口に出した。

「……俺のためだけにこれ程のことをするでしょうか。それよりも灰は謀を阻もうとしているのではないのですか？　多加羅をも守ろうとしているのでは？」

「確かに灰様は謀を阻むおつもりでありますが……それはどうでしょう。あのお方は場所というものに執着をお持ちにはならない。むしろ灰様を繋ぎとめ、動かすものがあるとするならば、それは人との絆です。守りたいもの、守るべきものが眼前に在れば、見過ごしには出来なかったということなのでしょう。今回の一件は、あの紺という少女を守るためでもあったのかもしれませんが、何れにせ

よ、緩衝地帯で起こっている謀の全貌を掴むことも、それを阻むことも灰様にとつては単なる手段でしかないように、私には思えます」人としての気配すら希薄な、ともすれば精緻な武器を思わせる男の、その言葉は深い余韻を須樹に残した。そして何故かそれ以上聞くことを躊躇う。無色の平原に思いがけず見出した鮮やかな色彩を、己の不用意な動作で壊すことを恐れるように、須樹は口を噤んだ。

束の間の静寂の後、再び須樹は問う。

「蛇が紺と俺の交換を持ち出した、というあれも灰が考えたことですか？」

その問いに、弦はすぐには答えなかった。内心を読むことの出来ぬ男の顔を須樹は注意深く見つめる。

「此度の一件は緩衝地帯の権利を沙羅久に渡すという、その意見を評議会に出させることを目的としています。それを阻むためには、西の元締めの子孫を見つけ出す必要があります。その場所を知る者は蛇のみ……だが、蛇は評議会の後に報酬を受け取ると言っていました。おそらく評議会で思惑通りの意見が纏められるのを見届けるまで、首謀者の元には向かわぬ取り決めだったのでしょう。それまで待っているのは手遅れになる。不審を抱かせることなく、その場に蛇を向かわせる必要があります。蛇を追い詰めるための布石として、敢えて偽の取引を媪の側に持ちかけることにしました」

媪達が若衆の話聞き、蛇の持ちかけた取引が偽のものであると気付けば、蛇を捕えるために動くだろう。始末屋の存在に報酬を受け取ることがかなうのか不安を募らせていた蛇の、その心理さえ計算に入れての計画だった、と弦は語る。

「私の役目は追い詰められた蛇が、媪の手から逃れ必ず依頼主の元へと向かうよう仕向けることでした」

須樹は宇麗の言葉を思い出した。蛇との取引の場を見張らせていた者達が何者かの襲撃を受け縛められていた、というそれである。最早問う必要すらなく、それを成したのが弦であることがわかった。

「私は蛇とその手下を街外れの廃屋に集め、偽の取引に気付いた媪の手の者が姿をあらわした時には、確実に逃げられるよう手配を整えました。計画では、蛇の後を灰様と私で追う筈だったのです」

灰ならばそれが可能なのだと、須樹は既に知っていた。蛇に気付かせることなくその後を追う、それが灰になれば出来る。

「ですが誤算が生じました。蛇が灰様を鬼逆きさかの弟であると信じ込み、灰様を捕えようと姿をあらわしたのです。笠盛で蛇が騒動を起こせば、媪の手の者に奴が捕えられる危険が高まる。蛇が容易には諦めぬと思われたのでしょうか。騒動を大きくせぬために、灰様は蛇達の隠れ家に近い場所まで逃げ、敢えて捕えられたのです」

「わざと……？」

「はい。灰様が怪魅師けみしであることは既にお話し申し上げた通りです。もとより、力を晒すことを極度に嫌っておいでだが、真に逃げようとお考えになれば、あのお方にはさほど難しいことはありません。何かを思い出しているのか、僅かに弦の眼差しが硬質なものとなった。それは怒りのように見えた。だが、それも一瞬の内に無の下に消える。

「灰様を捕えた蛇は廃屋へと戻りましたが、最早猶予はありませんでした。灰様が人目につかぬ場所を選んだとはいえ、蛇の姿を目撃した街衆は多い。いずれ居場所を掴まれば、蛇を逃がすことは困難となります。私は始末屋として蛇達に媪の手の者が迫っていると伝え、すぐに笠盛を離れるよう命じました」

そうすることが灰の意に添うものであるから、と男の言葉に迷いはない。

始末屋として立つ弦とすれ違った一瞬、灰が囁いたと言う。

又駆を追え

たったその一言をよすがに、弦は灰が蛇に連れ去られるままにしたのか。廃屋に残る血痕が灰のものであれば、彼は無傷ではなからう。一瞬過った弦の怒りはおそらく主を傷つけた者に対するものだったのか、口に出さぬ男の葛藤を須樹は垣間見たのだと気付く。

「あの獣の名が又駆、ですか？ あれは一体何なのですか」

「私は知りません。それは直接に灰様にお聞きください」

言われて須樹は戸惑う。話の中のどこにも、灰が須樹にも後を追うよう望んだという言葉が出ていない。まるで須樹の思考を読んだように、弦が言った。

「須樹殿をともお連れしたのは全て私の独断です」

「何故？ 貴方は灰に仕えているのでしょうか。灰は俺が追うことを望みはしないでしょう。ましてや怪魅師であることを知られることも」

弦がふと遠くに視線を投げた。その横顔に過ったものが何か、須樹にはわからなかった。

「私が何時まで灰様にお仕えし、お守り出来るかわかりませぬ故」  
それはあまりにも静かに響いた。

「怪魅師であることも含め、お前の真の姿を知る者がこの先必要である……お前の傍近くにあつて支える存在が必ず必要になる筈だと、彼は最後にそう言った」

黙って須樹の話聞いていた灰は、そこではじめて顔を上げた。

その視線に、須樹は振り返り苦笑した。

「それがどうやら俺らしい。彼の基準が何かはわからんが、これは喜ぶべきことかな」

灰の顔が僅かに歪む。そこに浮かぶのが戸惑いと、おそらくはそれだけではない、痛みにも似たものであることが須樹にはわかった。「後はお前も知る通りだ。昼頃に再びあの獣が姿を現し、あの家へと導いてくれた。少し離れた森の中に身を潜め、夜になって救出作戦を実行した。倉庫を見張っていた男は弦殿が一撃で倒した。俺も前あの人に押さえ込まれたが、凄まじい使い手だな。その後弦殿がお前を助け出す間に、蛇の手下達を馬車に乗せて待っていた、というわけだ」

その蛇と手下達は、今は縛られた状態で荷馬車に乗せられている。蔡李は当分目覚めそうにはなかった。

睡覺煙の効果が十分ではなかったことを思えば、薄氷を踏むような計画だった。出来るならば怪魅の力を使うようなことはしたくなかった、と灰は苦く思う。その物思いを、須樹の声が破った。

「なあ、灰、お前が俺や仁識、冶都には秘することがあるだろうことはわかっていた。……何となくだがな。それが何であるか、正直に言っと知りたくなかったわけじゃない。おそらく弦殿が語ったことが全てではないんだろう。それを俺に話すかどうかはお前の自由だと思っ」

慣れた手つきで手綱を操りながら須樹は言う。

「ただこれは知っておいてほしい。お前を思う者は確実にいるんだ。お前にとっては疎ましいかもしれない。言ったところで、俺達には到底理解出来ないかもしれない。だが、俺はお前の真実が知りたいと思っ」

灰は僅かに俯く。

「時間をください。せめて、今回の一件が終わるまで……」

「今回の一件？」

灰は頷く。

「この一件はまだ終わってはいません。須樹さんには最後まで見届けてほしい。俺の行動の是非を問いたいわけではありません。ですが、全てを見届けてなお、俺の話を聞いてもらえるなら……」

その時は話します、と灰の言葉は囁きに近かった。

「ああ、わかった」

それきり須樹は口を閉ざした。何故、蔡李だけでなく蛇とその手下をも連れて来たのか、それをまだ須樹は知らない。聡い彼が疑問に思わぬ筈もなく、敢えて問わぬのだと灰には察することが出来た。まだ終わってはいない。

晴れ渡った夜空の裾野に広がる星々の光を灰は目で追う。光は淡く優しくかった。まるで呼びかけるように瞬く。その微かな揺らめき



が、言葉を出せばたちどころに消えてしまつのではないかと灰には  
そう思えた。無論、それが沈黙に対する言い訳であることは、彼自  
身がよくわかつていた。

## 90 (後書き)

書いていて「結構灰は怖い人かもしれん」と思っていました。どうでしょう。灰の行動は書き手的には色々矛盾が感じられます。いや、敢えてそういう風にしたんですが。

灰は決して清いだけの人間じゃない。これが第二部の途中から書き手が認識したことです。その点に関しては若干迷いもありました。でも、全てにおいてクリーンな人間よりも複雑な内面を抱える人間の方が書きごたえもあるかと思ひ、物語を作っていた感じ。清濁あわせもつ人間として、彼の心理をうまく書ければいいのですが、これがなかなか難しい。

ではでは、今後ともよろしくお願いいたします！

目指す森の影が仄かな月明かりのもとに浮かび上がったのは、一刻程進んだ後のことだった。折り重なる木々が一つの大きな輪郭を作り出し、横たわる静寂の確かな具現と見えた。だが踏み込めばそこは密やかな気配に満ちている。突然の侵入者に束の間息を潜め、相入れることもなく彼らを包み込んだ。

冬枯れした木立をすかして星月の光は届くが、見通しのきかぬ視界は方向感覚を失わせる。弦は携帯していた硝子筒に、火打ち石で手際よく火を灯した。炎の明るさに、周囲の暗がり俄かに凝る。頑なに身構える野生の獣を思わせて、影は深く見えた。

「明かりなど灯して大丈夫ですか？」

「もう誰も我々を追っては来ぬでしょう」

確信した響きに、須樹は続く問いを呑み込んだ。ちらりと傍らを見ると、灰は森の奥を透かし見るように目を細めている。何かに耳を澄ましているようにも見えた。

「この先に幾分開けた場所があります。少し休憩致しましょう」

弦の言葉の通り、暫く進むとばかりと開けた空間が見えた。木々や茂みに囲まれ、真中には人が火を焚いた後が残っていた。旅人が一夜のよすがとする場所なのだろう。馬を木立に繋いだ弦が手早く火を焚く。近くにあるという水場から水を汲んで来た様子から、以前にもこの場所を訪れたことがあるのだろう。木立に繋いだ一頭と馬車を引いていた二頭にも水を飲ませて、三人は焚き火の周りに腰を下ろした。弦が水を入れた鉄製の器を傍らに置いた。何を、と見つめる須樹の疑問はすぐに解けた。灰様、と弦が懐から取り出したのは干した植物の葉である。水に投じた後言った。

「音切草です。まずは傷の手当てをなさってください。化膿しているのではないですか」

灰は答えなかった。それに須樹は意外の念を抱く。普段は年上の

者に対して常に礼儀を忘れぬ灰が、己に仕える者とはいえ返事すらないのは珍しい。だが、薬師くすしの技術を有する彼が反論せぬということは、弦の言葉が当たっている、ということなのだろう。

「わかるのですか？」

思わず弦に尋ねれば答えは簡潔だった。

「出血の仕方では治療を要する傷であることはわかります。それに傷を庇う動きをされておられます故」

へえ、と感心して呟きながら、須樹は苦笑をかみ殺した。傍らの灰の顔が僅かに苦々しい。常に穏やかな表情を浮かべている灰にしては珍しく、有体に言えば、ひどく人間臭い表情である。この主従は面白い。まるで牽制し合うように一定の距離を保ちながら、言葉に出さずとも互いのことをわかっているふしがある。そしてそのことを当人達はあまり自覚していないらしい、というのが須樹の印象である。

暫く薬草を漬け置いた器を、弦は火の上にかけた。次第に温められる水の中で、薬草がゆらゆらと揺れた。

「須樹さん、皆の様子はどうでしたか？」

不意に問われ、須樹はああ、と呟いた。後に残してきた若衆のこゝとを思い出す。

「それが宇麗うれいに託けただけで弦殿と笠盛せいきを出たからどんな様子だったかはわからないんだ。お前が蛇に追われたとあの紺こんという少女が知らせにきた時は、さすがに皆青褪めていたな」

「紺が知らせに？」

驚きの籠った灰の声音に遮られる。

「ああ、そつだ。お前が助けた……紺、というのだろう？ 必死に駆けて来たのだろうな、お前を助けてくれと言っていた」

紺が、と灰は呟いた。炎に照らし出された横顔にゆっくりと、柔らかな笑みが浮かぶ。それに須樹は目を瞬いた。

「どうかしたのか？」

いえ、と灰は小さくかぶりを振って話の続きを促した。

「その後は皆別々にお前を捜すことになったからなあ。宇麗から話を聞いて驚いているだろうな」

設啓にどやされそうだと須樹はぼやく。その顔が不意に真剣なものとなる。

「灰、一つ不可解なことがあった。宇麗とともに街を捜していた時に、鬼逆が接触してきたんだ。鬼逆は何故蛇がお前を狙ったか知っていたぞ。おまけにお前が街外れの廃屋にいることまで知らせて来た。どう思う？」

問われて灰は考え込むように眼差しを伏せた。煎じる薬草の微かな匂いが広がる頃、漸く灰は口を開いた。なるほど、と小さく呟かれた声音には、僅かに呆れたような響きがあった。

「何だ？ 何か思い当たることがあるのか？」

「ええ、まあ。……あの人らしい……」

言いながら灰は様子を見るためか、器を覗き込んだ。葉から溶けだした色彩が、炎の散る様を映しだしてとろりと艶めかしい。準備の良い弦が木の篋を灰に渡した。ゆっくりと掻き混ぜる動作を見ながら須樹は言う。

「鬼逆らしいってことはつまり……相当に物騒なことなんだろうなあ。あいつは何を企んでいるんだ」

「すぐにわかります」

謎めいた答えだったが須樹はそれ以上問うのをやめる。灰が言うからには、真実その通りなのだろう。良くも悪くも、灰は率直である。率直であるが故に度し難い。秘めることが何かあるのだと思いつながら問うことが出来なかったのは、その率直さを 明らかにせぬと灰が決めたならば、偽りを述べることすらせずにただ沈黙を守るだけだと知っていたからだ、今更ながらに気付く。それは柔らかくも厳とした拒絶である。仁識などはとうに理解していたことだろう、と須樹は思った。

薬草を煎じた液を十分に冷ました後、灰は薬液に浸した布を傷口に当てた。脇腹と右腕、膿んだ傷口に須樹は思わず顔を顰める。命

に関わらぬとはいえ、刀傷が油断のならぬものであることくらいは知っている。彼自身が腕に負った傷もいまだ完全には癒えていなかった。布の上からきつちりと包帯を巻き付けたのを見届け、弦は煎じた薬草を捨てるために場を外した。その背を見送り、須樹は灰に言う。

「休憩を取ったのは結局お前の治療のためだったんだな」

「そう……でしょうか」

「そうだろう。お前の身を心から案じている様子だったからな。蛇に対して相当に腹を立てていたように見えたぞ」

その言葉に、灰は何とも言い難い表情になる。これもまた彼にしては珍しいものだった。呆れて須樹は笑った。

「気付いていないようだが、お前と弦殿は見事な連携だぞ。他人行儀なのに、まるで言葉などなくとも互いがわかっているようだ。傍から見ていてどうにもおかしい」

「彼は……惣領の命令で俺に仕えているだけです」

「そうなのか？　俺は彼自身が望んでお前に仕えているのかと思っていた」

灰はまじまじと須樹を見つめる。惣領家の影である弦が、自らの望みで灰に仕えるなど到底信じられぬことである。

「それ程に意外なことかな。いずれにせよ、お前のことを彼はよく知っているようだな」

灰の口元を笑みが掠める。僅かに皮肉を帯びたそれである。

「知ってはいるでしょうね。俺が多加羅に来る以前、森林地帯にいた頃から彼は俺のことを知っています。もしかするとそれよりも前から知っていたかもしれない」

「どうということだ？」

「惣領は彼に俺を監視するよう命じておられたそうです」

監視　冷たい響きに、須樹は返す言葉を失った。その時、木々の間から姿をあらわした弦に、話はそれきりとなる。だが、重い心持で須樹は目の前の二人を見やった。弦が須樹に語らなかつたこと

あるいは灰が何れ彼に語るかもしれぬことの、その片鱗を垣間見た思いだった。

それまでの会話など欠片も感じさせず、灰が弦に言った。

「おそらくもう少しで蔡李さいりが目を覚ますと思います。彼を西の元締めの方に送り届けてください。蛇のことは俺が何とかします」

「それはなりません。はじめの計画では、まずは笠盛近くまで戻り、蛇を引き渡す筈だったではありませんか。蛇のことは私にお命じください。あの青年はその後に送り届けましょう」

「いえ、出来れば蔡李にはこれ以上のことを知らせたくはありません。彼が知る必要のないことです」

「ですが……」

「頼みます。それに、蛇のことはどの道俺が話をした方がいいでしょう」

弦の反論を封じた灰に、須樹は問うた。

「蛇をどうするつもりだ？ 媪おんに引き渡すのか？」

「いえ、蛇は鬼逆さんに引き渡します」

淡々としたその答えに、須樹は目を瞠った。振り返った灰の静かな面、そこにある研ぎ澄まされた意思を見て、出かけた言葉を呑み込む。問いはおろか単純な驚きをあらわすことさえ躊躇う、透徹とした気配があった。

「灰様、どのように蛇を鬼逆に引き渡すおつもりですか？」

「彼をこの場に呼び出します」

硬質な声音には、それ以上の問いを阻む強さがあつた。灰は外套の頭巾を目深に被り、馬車へと近付いた。同様に顔を隠して須樹は灰の後に続く。ばさりと、灰が大きく幌を開いた。低く地を這うような男達の囁きの名残と、不自然に落ちた沈黙が漏れ出る。身動きかなわぬように縛められた男達が、暗がりから灰を注視する。蔡李を、と低く命じられて弦が縛られた男達の手前に横たえられていた青年を運び出す。顔を歪めて弦をねめつける蛇を一顧だにせぬ。

灰は敵か味方が判じかねるように己を見つめる男達を見渡した。

尤も、縛られている状態で味方とも思えぬに違いないが、僅かながらも期待を覗かせる男達の表情である。

「この中に鬼逆と通じる者がいる筈だ」

その声音は感情を削いで冷徹を感じさせる静けさだった。須樹は呆然と灰の背を見やる。戸惑い、次いで驚きの囁きを漏らす男達の中で、蛇が叫んだ。

「何言つてやがる。ふざけたことを抜かしてねえでこの縄を解きやがれ。こいつらは俺に従っている。鬼逆など関係ねえ！ 始末屋！

聞こえてんだろうが！ よくも騙しやがったな！」

何の応えもないとわかるや、蛇の血走った眼が灰に向けられた。

己が二日前に捕えた相手とわからぬのか、森閑とした闇を背負う姿を気味悪げに見やり、吐き捨てる。

「鬼逆云々などとくだらねえこと言つてねえで、俺と取引しようぜ。あいつらの元から救い出したつてことは、俺に用があるんだろうが。何が望みだ？」

灰の沈黙に蛇がさらにまくしたてる。

「それともあの蔡季とかいう若造が狙いか？ 奴が誰か知らねえだろ。そいつを教えてやる。あいつは金になるぜ。見返りに俺達を自由にしてくれ。ただし、もう一人の若造は俺の獲物だ。一緒に連れて来たんだろうな？」

「お前と話をする気はない。俺が話したいのは、鬼逆の配下の者だ」  
言いながら灰は頭巾を取り払う。意図していたのか、それとも蛇の態度に埒があかぬと思つたのか、そのどちらかであるか須樹は判じかねる。あらわになつた容貌に男達が示した表情はなかなかの見もどつた。蛇が啞然と口を開ける。そして荒事ばかりに身を浸し明敏さを欠く男達の虚ろな表情の中で、ただ一人がはつと息を呑むような気配を見せた。状況の不可解さへの驚きだけではない、それは背後で見ていた須樹にも明瞭に捉えられた。

なるほど、意図的に容貌を晒したのか、と須樹は思う。灰はその一人の男へと眼差しを向けた。蛇の手下の中でも影が薄い、瘦身の



男だった。

「鬼逆に情報を渡していたのはお前か」

驚き、疑念、逡巡　そして男は鋭く抜け目のない視線を灰に据えた。

「……ああ、そうだ。何故鬼逆に通じている者がいるとわかった？」

「明かす必要もないことだ。お前が要求に応えるならば自由にしよう」

「要求だと？」

「俺は鬼逆と取引がしたい。その伝手をするならば、今すぐに縄を解こう。ただし、明日の正午までに鬼逆をこの場所に連れて来てもらいたい」

「取引などとどういうつもりだ。お前はあの方の弟なのだろう」

灰がうつすらと笑んだ。

「是か非か、どちらだ」

「否と言えはどうなる」

「どうもならない。お前は蛇の仲間として裁きを受ける。それだけのことだ」

男は灰を凝視する。やがて諦めたように溜息をつくと言った。

「わかった。我らの頭をこの場所にお連れしよう。縄を解いてくれ」  
頷き、灰は男の縄を解いた。立ち上がった男の背に、蛇の音が響く。

「待て！　てめえ、何時から鬼逆の野郎に寝返った！？」

「寝返ったわけではないさ。俺ははじめからあの方の命に従ってお前の下にいただけだ。お前の動きなど、頭ははじめから全て知っていた」

「そんな……そんなわけがあるか！　知っていたなら邪魔をしようとした筈だ！」

「俺には頭が何を考えているかなどわからん。恐ろしい人だ。もとよりお前が張り合えるような人物ではないのさ」

男の口調には蛇への哀れみが籠っていた。呆然と座り込む蛇を僅

かに見下ろし、荷台を降りる。弦が馬を引いて男の前に立つと、その手に手綱を預けた。素早く馬に跨り、男は複雑な眼差しを弦に向けた。

「始末屋が偽だったとはな。この俺もまんまと騙された。はじめからこういつつもりだったのか？」

無言の弦に肩を竦め、お前もだ、と眼差しは灰へと流れた。

「頭に弟とは半信半疑だったが、測り知れぬという意味ではお前はあの方によく似ている。真実弟であるならば、確かに弱みともなるうが……秘していたのはそのためだったのかわからぬものだな……」

「何が言いたい」

「我らは耶來だ。時に肉親と言えども敵となる。それも張り合うに足る力を有する存在ならばむしろ邪魔なだけだ」

「どちらであるうと、さほど違いはない。もしも俺が真実鬼逆の弟だとしても、あの人は俺が殺されようと何かを手放すことはしない筈だ。そして仮に、俺の存在が邪魔であるならば、俺はとうに鬼逆自身の手で殺されている」

どちらにせよ命はない　淡々と紡がれた言葉に男は束の間灰を凝視し、そうかもしれないな、と呟いた。

「明日の正午までに必ず頭を連れて来よう」

一声残し、男の姿は木々の間に蹲る闇の中へと消えた。

男が消えた方角を見やり、灰は荷馬車の幌をおろす。蛇の呪詛の声が、濁って夜気を震わせた。

「なるほどな、内通者がいれば鬼逆にも蛇の居場所は筒抜けだったわけだ。蛇達を鬼逆に渡しどうするつもりだ？」

須樹の問いに灰は答えなかった。何かを見極めるように俯く。

「……それも、すぐにわかる、か」

須樹は小さく呟いた。

「俺は、見届ければいいんだな？」

ふと灰の視線が須樹に注がれる。まるで夢から醒めたばかりのように、空虚なまでに清廉な眼差しである。首肯し、灰は傍らに控え

る弦に言った。

「俺は蔡李がこの場を離れるまで森にいます。彼を頼みます。無理矢理連れて来るような形になってしまったので、なかなかこちらを信じてはもらえないと思えますが……出来ればこちらが敵ではないことを伝えてほしい」

「森につて……なんで……」

「蔡李には俺の姿を見せぬ方がいい」

背後で蔡李が微かに呻く。それに意識を取られた須樹は、お願いします、と呟く灰の声を聞いた。振り返り息を呑む。木立を抜けて森の中へと踏み込む灰の姿があった。その向こう、木々を透かして巨大な獣の輪郭が暗闇よりなお黒い。星のように、冷え冷えとした鋭い眼が光っている。獣に向かって歩み去る灰の背もまた、滲むような森の暗さに溶けていった。やがて灰の輪郭が獣の内に吞まれるようにして消える。瞬いた時には、既に獣の気配も、灰の姿もここにもなかった。

「須樹殿、灰様の仰る通りになさってください」

「でも……追わずともいいのですか？ このような森で、一人で過ごすなど」

「灰様には獣がついております。それに、これ以上灰様の身を緩衝地帯の者達の目に晒すわけには参りません。あの方のお立場をお考えください」

須樹は反論を呑み込み、弦の言葉を反芻する。もとより多加羅惣領家に連なる者が緩衝地帯で動くこと自体知られてはならぬことである。惣領家に仕える男の言葉は尤もなものなのだ。

「須樹殿、鬼逆が灰様に害なさぬよう用心なさってください」

咄嗟に答えることが出来ず須樹は男を見やった。言葉に出さずとも、弦自身が鬼逆との対面の場において灰を守りたいと考えている筈だ。

「灰は何故蛇を鬼逆に渡すのですか？」

「私にはわかりかねます」

「やはり……弦殿が立ち会った方がいいのではないですか？ 鬼逆は危険な男です」

「主の命令には逆らえません。私はあの青年を西の元締めの人に送り届けます」

弦はあつさりと答え、蔡李の元へと踵を返した。須樹はその背を見やる。出かけた言葉は、苦い思いとともに胸中に沈んだ。灰が弦へと向ける頑なな態度を思い出す。灰が惣領家の一員であることを是としていないことは知っている。弦という存在は、彼にとっては逃れようにも逃れられぬ、惣領家という存在を象徴するものなのかもしれない、と今更ながらに気付いていた。

身じろぐ蔡李の姿を見やり、須樹は重く息をついた。灰にしる弦にしる、どうも自分を過大に評価しているのではないかと思う。己が何を見届けようとしているのか、見通すことなど到底出来そうにはなかった。

全てを見届けてなお、俺の話を聞いてもらえるなら、その時は話します

灰が振り返ることもせず去った木立の奥を見つめる。昼間ならば何の変哲もない木々の群れが、今は底知れぬ暗がりは何を秘めるのか、未知の存在になったようだった。それまで確かに見えていると思っていたものが、まるで異なる形を纏って現れ出でる不思議である。無論、同じものなのだ、と須樹は己に言い聞かせる。森は幾つもの姿を象り、時に安らぎを、時に恐怖を抱かせるものなのだ。だが、それはどのような姿であろうともたった一つの存在でしかない。

見届ける 須樹は己に刻み付けるように思う。せめてそれくらいならば己にも出来よう。

その夜、灰が森の奥から戻ることはなかった。

空と地平の境目に、一線の紅がくつきりと刻まれた。夜の裂け目

であるそこから、曙光が漏れ出でる。陽が昇る程に、朝靄は幾重にも異なる白色の帯となって地表を覆い、その下に在る草地を思わせなかつた。彼方へと去る弦と蔡李の姿は幻想的な光の渦に溶け込み、幼い頃に聞いた異国の物語を思わせる。

純白の海原を渡る双頭の竜だ。

遠い思考が意識の中枢にゆっくりと沈む。覚醒と眠りの狭間、上空の遙か高みから見下ろす二人の姿が夢でないことはわかつていた。浮き上がり拡散していた意識が一点を指して収束する。目覚めはさながら落下である。遠い記憶のように、現に接する感覚が熱を持つて蘇る。柔らかな下草の感触と叉駆の温もり、そして大地に確かな重みをあずける己の体だ。瞳を開ける。瞬く。見上げれば巨木の枝を透かして、絹のような朝の光が差し込んでいる。凜冽と澄んだ大気の中に、潤いざわめく命の喧噪がある。

灰は己の呼吸を追うように手を伸ばした。それが漆黒の毛並みに触れた。狼よりも鋭く優美な、叉駆さくの顔が間近に在った。眠っていた灰に叉駆が添うように寝そべり、その柔らかな気配が体を包み込んでいた。まるで卵を温める親鳥のようである。寒さを感じなかったのはどうやら叉駆のお陰らしい。眠るつもりはなかったが、ここ数日睡眠らしい睡眠を取っていなかったためか、やはり疲れていたのだらうと灰は他人事のように思った。

身を起こし叉駆の耳の付け根を掻くようにして撫でる。目を細めた叉駆を見やり、灰は立ち上がる。途端に体のそこかしこが軋むように痛んだ。叉駆が灰の腕の下に頭を潜り込ませるようにして鼻を鳴らした。行こう、と言っているように聞こえた。山の奥深くに踏み込む時以外で、灰が叉駆の背に乗ることは滅多にない。だが、灰の疲労をわかっているのか叉駆は自ら身を屈めた。ゆっくりと灰はその背に跨る。叉駆は静かに森の中を駆けた。

広場に辿り着くと、須樹が丁度大きく伸びをしたところだった。獣の背に乗って姿をあらわした灰に、須樹は一瞬目を瞠った。

「古いお伽噺のように、森の神の使いが姿をあらわしたのかと思っ

たぞ」

言いながら苦笑する。灰が背から降りると、又駆はゆったりと地面に蹲った。

「蔡李は発ちましたか？」

灰は問う。二人が去る姿を見たことを言う気にはなれなかった。

言いようがない、というのが正直なところである。無自覚に意識を体から飛ばしているなど言えば、心配させてしまっただけのようにも思えた。

「ああ、ついさっきだ。蔡李がなかなか納得してくれなくて参った。それに相当に体力が落ちていたから、少し休ませた方がいいと弦殿が出発を遅らせたんだ。捕われていたという点では俺も同じだが、あの扱いはひどいな」

須樹は憤然と言う。一月も陽の光とて射さぬ地下で鎖に繋がれていたという、それは最早人として扱ってすらいない。

「朝飯の残りがあある。食べるよ」

差し出された椀を受け取る。弦が用意していたものなのだろう、雑穀を炊いたごく簡単なものだったが、温かく体に沁み渡った。食べ終わった灰の前に須樹が胡坐をかいた。

「蔡李がお前のことを案じていた」

「俺を？ 何故？」

灰の反応に須樹は思わず溜息をついた。

「無理もないと思うぞ。お前のことを言わぬためでもあるんだろうが、弦殿は言葉が少ない。蔡李がお前の姿がないが無事か、と頻りに聞いてきた」

「……怒っていると思っていました」

「まあ、怒ってもいたな。いきなり当身をくらわされて気を失わされたら、誰しも嫌なものだろう。まあ、最後には何とか納得してもらえたようだが……」

実際には少し違う。

緩衝地帯で狼藉を働く者を追っている中で蛇に辿り着き、蛇が笠

盛から逃げ出した後をつけて襲撃をかけた、というのが、弦が蔡李に告げた内容である。その言葉自体に偽りはないが、蔡李の疑念を払拭することは出来なかった。須樹は思う。何のためにそのようなことをしたのか弦自身が語らぬせいもあり、納得したというよりもこれ以上聞いたところで意味がないのだと諦めたというのに近い。

「とにかく、西の元締めのところを送り届ければ、この一件も無事終わるな。多加羅へ帰れる」

須樹の言葉に灰は答えなかった。見やると、灰は胸元を押さえながら俯いている。灰、と呼びかける。はつと顔を上げて、灰は胸を押さえていた手を握り締めた。まるでその拳をどうすべきか迷うように彷徨わせ、地面に落とす。一瞬、灰の顔を過った表情　翳りを帯びて鋭いそれを、須樹は見逃さなかった。

「……大丈夫か？」

「はい。ですが鬼逆さんと話をしないと……あの人は油断がならない」

今後の首尾を聞いたつもりではなかった須樹だが、敢えてそれ以上問うことはしなかった。問うても灰が答えるようには思えず、例え答えがあつたとしても今の自分はそれを受け止めかねる、という予感があつた。鈍い後味を残して胸中に沈んだ思いから目を逸らすように、須樹は殊更朗らかに言った。

「無事終わることを祈っているよ。俺が出来ることといえば、お前の後ろに突っ立っていることくらいだからな。まあ、鬼逆といえども、あの獣がいればお前に手出しすることは出来ないだろう」

又駆がぱたりと長い尾を振った。それに須樹が呆れたように言った。

「なんだ、お前、言葉がわかるのか？」

「須樹さんなら触らせてくれるかもしれませんよ」

「本当か？ お前、咬まないだろうな。そんな牙に咬まれたら腕なんかあつという間にもげちまう」

おっかなびつくり須樹は又駆に近付いた。恐る恐る手を伸ばし又駆の頭に触れる。実物の獣と寸分違わぬ感触に須樹が驚きの声をあげた。頭から首筋へと、優しく撫でられて又駆が目を細めた。まんざらでもないらしい。その光景に、灰は柔らかく笑む。笑みながらも握り締めた拳を解くことはしなかった。どくどくと、体を巡る血の音が耳元に響く。

鎮まれ 刻みつけるように囁く。

灰の想念に抗い、胸にかけた黒玉が鳴動する。満ち溢れる命の気配に、ぞろりと揺れて触手を伸ばそうと足掻く。固く冷たい黒玉の中に蠢く膨大な力を抑え込み、灰は小さく息をつく。ゆるりと頭を振り、何やら又駆に話しかける須樹を見やった。

ちらちらと舞う光が眩しかった。



陽が移ろうのを須樹すくは感じた。誘われるように顔を上げる。木々を透かして空を見上げれば、太陽は中天に近い。吹きすぎる風に髪が揺れた。不思議なことだ、と思う。静けさの中に座していると、まるで身にしみこむように刻々変化する時の流れを感じる事が出来る。まるで柔らかな森の気配に同化し、すっぽりと包みこまれていくかのようだった。無音の太陽の動きさえ感じるほどに　　ここまで考え、須樹は苦笑する。いつの間にか木に凭れた体の右半分が光に照らされていた。何のことはない、顔に落ちていた枝の影が、空を渡る太陽の軌道に従い動いただけのことだった。眩しさに気付かず、呑気に物思いをしている自分は、むしろ余程鈍い部類だろう。碧空には雲一つなかった。須樹は麗かな陽射しに照らし出された空間を見つめる。木々に囲まれた広場は、冬の最中とは思えぬ、眠気を誘うような暖かさである。須樹は同じく木に凭れて座る灰かいを見た。深く顔を伏せた姿は、まるで眠っているように見えた。傍らには寄り添うように又ま驅くが蹲すっている。視線を転じて馬車を見る。中にいる男達は静かだった。時折、蛇の足掻くような叫びが聞こえたが、灰はそれにも顔を上げようとはしなかった。

実際にはのほほんと考えに耽やつていられるような状況ではないのだ。正午まであと一刻程、耶や來らいの男はまだ姿を見せない。須樹は灰が何を考えているのか測りかねていた。鬼逆きさかはただでさえ物騒な相手である。これまでの経緯を考えれば、蛇達の身柄は媪おんなに引き渡すのが最もふさわしいのではないか　　だが、須樹はその思いを口に出すことはなかった。そのようなことを灰が考えぬ筈はずがないと思っただが故である。

須樹は再び上空を見やった。何とは知れぬ鳥が緩やかに弧を描いて飛んでいた。その滑らかな動きが不意に乱れる。大きく翼を打ちふるい、さらに天高く吸い込まれるようにして青へと溶けた。

「来た」

須樹は囁くような声に眼差しを転じた。灰が顔を上げていた。その傍らで、又駆が立ち上がり、灰の体を包み込むようにして消える。何度見ても驚きを禁じえない。有から無へ、柔らかに揺れた灰の髪の毛きだけが、その名残だった。

「鬼逆か？」

灰は小さく頷くと、眼差しを真直ぐに木立の奥へと据えた。須樹はその視線の先を追う。次第に近づく複数の気配は、まずざわめきとして捉えられた。下草を踏みしめる蹄の音、馬が嘶く気配。そして陽炎が伸びあがるように、不意に人影が視界に映った。

木立の合間から姿をあらわした鬼逆は、数日前に笠盛かさもりで対した時のような奇態な姿ではなかった。飾り気のない暗色の外套に、左目を覆うのは黒い眼帯である。その背後に控えるのは十人程。何れも鬼逆の信を得る者達なのか、凄味と落ち着きを感じさせる男達だった。

鬼逆は身軽に馬の背からおり、広場へと踏み出した。耶來の男達は馬をおりる気配もなく、木々に紛れるようにして広場を取り囲んでいる。沈黙は、威嚇だ。

灰は目を凝らし、鬼逆を取り巻く渦を見詰めた。何度見てもひきつけられる。生きるものが発する命の光は淡く、柔らかな繭のように映る。だが、鬼逆のそれは違う。うねり、時に絡み合い、それ自体が意思あるもののように蠢いている。凍るような男の瞳とは対照をなす。鬼逆という存在自体が、炎に抱かれながら決して溶けぬ氷を思わせた。

灰の視線に何を思ったのか、鬼逆が悠然と笑みを浮かべた。鬼逆自身がそう意図したように、体を縁取る炎が大きく膨らんだ。

「灰、案じていたぞ。無事で良かった」

あまりに白々しい言葉に、須樹が身じろぐ気配がする。蛇のもと

に配下の者を潜り込ませていたのだから、鬼逆は蛇が灰を狙っていることを知っていた筈だ。それにも関わらず、蛇を止めようとはしなかった。無論、それは緩衝地帯で起こった一連の騒動についても同じである。

灰は鬼逆の視線を真向から受け止めた。そうすべきなのだと、考える前にわかっていた。

「貴方と取引をしたい」

感情を削いだ素っ気ない物言いに、鬼逆が大仰に腕を広げた。それは些か芝居じみて見えた。

「感動の再会だというのに味気ないな。蛇に捕われたと知ってどれ程心配したか」

「今は無事だとわかったのだからそのようなことはもういいでしょう」

「つまらん奴だな。前から思っていたが、お前少し真面目過ぎるんじゃないか？」

「貴方には言われたくありません。貴方は戯言が過ぎる」

言って、灰が小さく溜息をついた。沈黙が落ちる。会話が噛み合っていない。そう思ったのは彼だけではないらしい。鬼逆の背後で一人の男が呆れ声で言った。

「確かに戯言が過ぎますな」

五十は過ぎているだろう、頬のこけた顔立ちは内面を透かしたように険しく鋭い。射抜くような眼光を灰に向けた。

「お前達、我らの頭と取引などと一体どういうつもりだ。場合によつては容赦せぬぞ」

「どいつもこいつも余裕のない……つまらんなあ」

溜息混じりに鬼逆は呟き、不意ににやりと笑った。

「だが確かに俺もこの茶番には少々厭いだ。ここらで幕引きもいいだろう」

「こちらの要求に応えるならば、そちらが望むものを渡します」

「俺が望むものだと？」

灰は小さく頷く。鬼逆が笑みを深めた。

「お前の要求とは何だ」

「評議会で、一連の出来事が蛇の仕業であること、そして多加羅若衆たからわかが潔白しゅうであることを証言していただきたい」

ほう、と鬼逆が呷く。息をのむ気配は誰のものだったか、灰は周囲の視線が自分に向けられるのを痛い程に感じていた。もちろん、耶來の男達からのそれは好意的とは言い難い。張り詰めた須樹の気配は単純な驚きをあらわしているようだった。

「多加羅若衆のために、この俺に評議会で頭を下げるとぬかすか」  
「蛇を捕えただけでは今回の一件は片が付きません。多加羅若衆の嫌疑が晴れなければ、依然として多加羅そのものへの疑念は残る。

それを払拭しなければ、評議会が緩衝地帯の権利をいずれ沙羅久しゃらくに渡すという結論を出すのを防ぐことが出来ません」

「緩衝地帯を動かすのは卸屋おろしやだと俺は思うがな。本当にことを終息させたいなら訴える先が違う。媪と若衆はどうやら手を結んだようじゃないか。お前が蛇を媪に渡せばすむ話だろう」

ぼやくような鬼逆の声音だった。

「確かに評議会は単なる飾りですが、緩衝地帯の体面を担うだけに御し難い。おそらく西の元締めは孫を人質に取られ正体もわからぬ者達の言いなりだったなどと、そのようなことを明らかにしなないでしょう。緩衝地帯の権利を沙羅久に渡すのが最善の道だと、評議会の代表者達には信じさせている筈です」

「評議会の連中は、どいつも善意の愚者というわけか」

辛辣な鬼逆の皮肉を聞き流し、灰は言葉が続けた。

「ことがここまで進んでしまっただけは、西の元締めであっても評議会の意向を止めるのは容易ではない。今更意見を覆そうとしても、かえって信頼を失うだけです。それに、例え媪が蛇を黒幕として評議会に突き出したところで、蛇が素直に罪を認めるとは思えません。あるいは媪のでっちあげだと思われる危険すらある」

「そうかもしれない。だが、俺が証言すれば奴らは多加羅若衆の無実

を信じるか？ 評議会の連中が耶來のごろつきの言葉に耳を貸すと本気で思っているのか？」

「単なるごろつきではない。貴方は名実ともに耶來の主だ」

称賛とも取れる言葉だったが、それは吹き過ぎる風と同じくらいさりげなく響いた。実際、灰にとっては単なる事実の指摘だった。鬼逆の表情は変わらなかつたが、僅かに面白がるような気配が掠める。

「評議會を動かす根拠は不確かな事実と疑念……媪が何をしようとも、利害が絡む者の意見は更なる迷いと懷疑を生み出してしまふ。ですが、多加羅若衆が潔白であると信じるに足るものが出てくれば、事情は変わる。貴方の証言で耶來の一部による狼藉だとわかれば、緩衝地帯が自治を捨てるなどあつてはならないと、評議會はそう結論付けるでしょう」

鬼逆が鼻を鳴らす。

「つまりお前は俺に道化を演じる、というわけだな」

「道筋をつけてほしいだけです。明白な道理が示されて評議會が公式に多加羅若衆の潔白を認めれば、それでいい」

「要は愚かな爺どもが納得するような聞こえの良い話をでっち上げるといふことだろう。確かに奴らが納得出来る材料さえ揃えば、あとは卸屋どもが都合良く幕を引くだろうな」

それこそ何事もなかつたかのように

「俺が引き受けると思ふのか？」

せせら笑う口調だった。

「蛇のことも謀略とやらも、俺にとってはどうでもいいことだ。ましてや多加羅若衆の行く末など、知ったことではない」

まるで灰の瞳に映りこむ己の姿を見るように、鬼逆は視線を逸らさない。灰は僅かに息苦しさを覚えた。

「まあいい。最後まで聞こう。お前は俺に望むものを渡すと言つたな。それは何だ」

灰は束の間黙り込んだ。陽光は、己を象る粒子さえ解けそうに柔

らかい。森は生と死を内包している。朽ちればやがて全てが一つに混じり合う。佇む男達の鼓動さえ、大地の鳴動と呼応している。空虚な思考はいまだに形を纏わない。不意に、背を向けて立ち去りたくなる。全てに目を閉ざして。だが、そうするかわりに灰は思考の底から言葉を拾い出していた。

「俺は何故、貴方が俺に蛇のことを伝えたのか、わかりませんでした。その意図はどこにあるのか……。だが、貴方が何を望むかを考えれば、少しは推測もつく」

「興味深いな。是非ともそいつを聞かせてくれ」

「蛇のことがどうでもいいというのは嘘だ。耶來はこれまで主を持たなかった。一人が耶來を支配すれば、それに対抗しようとする者は必ず出てくる。蛇を見逃せば、そのような者達を増長させることになりかねない。貴方がそれを見過ごしにする筈がない。貴方は蛇の勝手を許すつもりも、謀略を成功させるつもりもなかった。だが、蛇の動きを掴みながら、敢えて放っておいた。貴方にとっては蛇の謀略はむしろ都合の良いものだったから……。そうなのではないですか？」

鬼逆は答えなかった。無言で先を促す様子である。

「謀略の目的は緩衝地帯の権利を沙羅久に引き渡すことだった。多加羅の力が弱まっているこの時期であれば、蛇の計画は上手くいってもおかしくはなかった。緩衝地帯の人々にとっては自治を失う恐れがあることを知らしめる一事でもあったでしょう」

「ああ、そうだろうな。卸屋どもは今まで自治に安穩としすぎた。ここにきてはじめて己に与えられたものが絶対でも永劫続くものでもないと気付いただろうさ。だが、お前が謀略とやらを阻んだところで、緩衝地帯が今まで通り安泰とは思えん。特に多加羅がここまで弱体化したとあっては、この先の自治を過信するのは愚かなことだ」

「蛇の謀略がなくとも、いずれ緩衝地帯の権利は沙羅久に渡るでしょう。まだ先のことですが、今回の一件で卸屋はそれをいやでも考

えざるをえなくなつた。この地が財をなしたのは独自の販路と市場を形成しているからだ、その力も所詮惣領家からあずけられたものでしかありません。正式に何れかの所領に組み込まれてしまえば、全て惣領家の支配下に置かれる。そうなれば、既に惣領家の庇護を受けている卸屋に伍していくのは難しいでしょう。その時に備えるためにも、更なる力を卸屋は求める筈です。自治を守るにせよ、何れかの所領の支配下に入るにせよ、今まで以上の結束と力が必要となります。しかも残された時はさほど多くはない」

「確かにそうだろうな。だが、そいつが俺とどう関わりがある」

「緩衝地帯がより大きな力を早急に持つには、現実的な問題がいくつかあります。帝国内で更なる市場の開拓をしようにも限りがある。惣領家の規制もある。それをかいくぐれば、かえって自分の首を絞めることになりかねない。そうであれば、目を外に向けざるを得ない。国境地帯との交易の拡大なくして新たな力を蓄えることは難しいでしょう。そして、国境地帯で最大の販路と市場を有するのは耶來です」

來螺の言は帝国内の所領にも匹敵すると言われている。それが、來螺らいろうの表の顔である歡樂と興行だけで築かれたのではないことは明らかだ。來螺の裏側こそが潤沢な富の源であり、国境地帯の交易を裏から支配しているのが耶來であることは暗黙の了解だった。だが、主を戴かず明確な法すらない無法者との取引を忌避する者もまた多い。少なくともこれまででは、耶來との取引は常に危険と隣り合わせだと考えられていた。禁じ手である所以だ。

「緩衝地帯は国境に程近く流通の要衝であるうえに、所領のような規制もない。結果、帝国内で唯一、人と物が自由に出入り出来る場所となつています。耶來にとつても、大きな魅力があるのではないですか？」

「否定はせん。だが、緩衝地帯の卸屋どもにとって耶來は無法者の巢窟でしかない。お前が言うように新たな力を得るにも、俺達を相手に選ぶことはないだろうよ」

「確かに嘗ての耶來ならばそうでしょう。だが、耶來が単なる無法者の巢窟ではなく、統率のとれた集団であると示すことが出来れば事情も変わる。耶來の主が取引に見合うだけの信の置ける人物であれば……あるいは信じるに値する明確な利害の一致があれば、緩衝地帯の卸屋が躊躇うことはない」

おそろくは、と心の中で付け加える。

「蛇は緩衝地帯に混乱を引き起こし、結果、今までにはなかった綻びが出来た。緩衝地帯に近付きたい者にとっては絶好の機会です。蛇を泳がせていたのも、緩衝地帯の動揺が、貴方にとって利のあるものだったからではないのですか？」

灰は鬼逆の表情を見つめる。そこに肯定も否定も見出すことは出来なかったが、沈黙は灰の言葉を阻むものではない。

「貴方にとって蛇の謀略は望ましいものだった。無論、謀略が成功して緩衝地帯の権利が沙羅久（しやろく）に渡ってしまったのは元も子もない。最後まで蛇を放っておいて謀略を成功させるようなことはしなかったでしょう」

部下を蛇の下に潜り込ませることで、鬼逆は蛇の動きを逐一把握していた。蛇の行動を阻むことは、鬼逆にはしごく簡単なことだったのだ。

「途中までは確かに貴方の思惑通りにことは進んだ。だが、蛇は迂闊過ぎた。媼に勘付かれ、綻びは出来ても耶來への警戒は益々高まつてしまった。これは貴方にとつても誤算だったのではないですか？ 緩衝地帯は、依然として耶來には決して開けることの出来ない扉に守られています。貴方は蛇を、扉を破る槌としたかったのに、扉は益々頑なになり、槌は壊れてしまった」

「面白い比喻だが、正確に言った方がいい。槌は壊れたんじゃない。お前が壊したんだ」

「貴方には槌ではなく、鍵が必要だ」

鬼逆の口元がおかしげに歪む。灰の胸の内を見透かすように、それは冷やかな揶揄を宿していた。



「評議会で証言をしていただけなら、俺は貴方を媪と引き合わせます」

「お前にそれが出来るのか？ 耶來と聞いただけで奴らは俺を門前払いするだろうよ」

「そうさせないためにも、蛇とその手下を貴方に引き渡します。媪は俺が蛇に捕われたことを知っています」

鬼逆は器用に眉をあげてみせた。灰が意図するところを正確に察したらしい。

「豪気だな。媪を謀るつもりか」

「媪に評議会で証言を申し出てください。耶來の主として蛇の罪を明らかにし、若衆の潔白を皆に知らせると。謀略を阻みたい媪にとっても悪い話ではない」

不意に鬼逆が笑い声をあげた。それは広場に響き静寂を突き破る。「そして俺が得るのは媪への貸し一つ、というわけか！ お堅い淑女を落とすには持って回ったやり方だが、悪くはない。だがいいのか？ 惣領家は緩衝地帯が耶來とつるむのは望まないだろう。それに、蛇を追い詰め捕えたのはお前だ」

「俺は評議会が多加羅若衆の潔白を認めればそれでいい」

素気ない物言いだった。鬼逆は笑みの名残を口元に残したまま、束の間灰を見詰める。面白がっているようにも見える。だが、真実鬼逆が何を思うのか灰には読み取ることが出来ない。一年半前に相対した時もそれは同じだった。無論、読み取りたいとも思わない。鬼逆は、縁取る命の力そのままに、鮮やかで危険な相手だ。

「わかった。お前の言うとおりにしよう」

背後から頭、と呼びかける声に、鬼逆は片手を上げることだけで応えた。

「蛇はあの中か」

灰は小さく頷いた。鬼逆は周囲に視線を投げる。それだけで主の意図を察したらしい男達が荷台に近付く。それを目で追いながら、灰は問うていた。

「蛇にあのような出鱈目を吹きこんだのは貴方ですか？」

「何のことだ」

「俺が貴方の弟だと蛇は考えていた。誰かが意図的にそう思い込ませたとしか思えません」

「誤解があるようだな。蛇に伝えたのは俺ではない」

「貴方ではなく、他にいると？」

「ああ。俺の部下の一人だ。蛇に伝わるよう情報屋に流していた。お前と俺が兄弟だと思ひ込んだらしい。俺の足元を掬おうとしている奴は何も蛇だけではなかった、ということだ」

あつさりと、悪びれもせずと言う。やはり、と灰は内心に思う。

「その部下をどうしたんですか？」

「聞きたいか？」

鬼逆が裏切り者にどのように対するか 考えるまでもない。知る必要もないだろう。だが、灰の顔を過つたものを、鬼逆は見逃さなかった。

「お前はこう考えているんだろう。お前が俺の弟だと、敢えてそう思わせて俺が部下を試したのだ、と」

知らず、灰は顔を背ける。これ以上聞きたくはなかった。

「その通りだ。お前が言ったように、蛇の行動は俺に反感を持つ者達を焚きつける。今まで主がいなかった耶來を俺が牛耳るのを、誰もが歓迎するわけじゃないからな。この機会に二心ある者を見極めようとお前を餌にした。呆気なく引つかかって少々拍子抜けではあった。俺を裏切るにしても、もう少しうまくやるだけの脳みそのある男だと思っていたからな」

灰は黙り込む。鬼逆の漆黒の髪が揺れる。

疑念はあった。何故、鬼逆が蛇のことを知らせたのか。何故、灰の元にまで出向いて直接言葉を交わそうと思つたのか。おそらくそれらは全て灰の存在を周囲に知らしめるためだったのだろう。特定の個人を気にかけるような態度は、鬼逆を知る者ならば意外に感じるに違いない。そして一年半前の出来事を少しでも知っている者が

いれば、灰が鬼逆の弟だという考えが出てもおかしくはない。全ては意図的なものだったのだ。

喉元までこみあげる言葉は　あるいは怒りは、曖昧に揺れるだけで形にはならなかった。奇妙に遠い思考を灰は閉ざす。

「許せないと感じるか？　俺がどんな人間かお前も知っていると思っ  
っていたが……潔癖なところは相変わらずだな」

荷台の中を確認した男が鬼逆に頷きかけると幌を閉ざした。

「聞きたくもないってか？　知りたがったのははお前だぜ？」

「聞くべきじゃなかった。俺には関係のないことです」

「そうやって知りたくないことから目を逸らし続けて、これからずっと生きていけると思っているのか？」

灰は鬼逆を睨みつけた。鬼逆はいまだ荷台に顔を向けたまま、眼だけで灰を捉える。笑みが斜めに傾ぐ。

「灰、俺とともに来る気はないか？」

地面に落ちるように響く。灰は目を見開いた。意味を捉えかねて、問い返すことも出来ない。戸惑いを隠すことも

「俺はお前が気に入っている。言葉を交わすだけの価値があると思える相手にはそう出会えるものじゃない。俺にとってそのような相手がどれ程貴重か、お前にはわからないだろうな」

「貴方と行くことなど出来ない」

「出来る出来ないの話ならば、そいつは違う。可能だ。お前は蛇に捕われたからな。耶來に連れ去られた者が無事に戻る方が珍しいのはよくわかってるだろう。今ならば、何の後腐れもなく姿を消すことが出来る。多加羅を去ることが出来る」

多加羅を去ることが出来る。多加羅を、捨てる。反芻する。それは、冷たい感触を伴う。

「今まで一度も考えなかったか？　多加羅がお前の居場所だと、心の底から思えたことがあったか？　多加羅を出れば、憎しみを秘めて生きるより、もっと自由になれる」

「憎んでなどいない」

咄嗟に灰は答える。強い口調だった。灰は鋭く息を吸って自制した。静かに続ける。

「憎んでなどはない。俺は、多加羅でやらなければならぬことがある」

「そうやって己で己に枷を付けるのをそろそろやめたらどうだ。お前が望めば誰よりも多くを得ることが出来る。誰よりも自由になることも出来る」

「貴方と行けば、それがかなうのですか？」  
皮肉に笑んで問う。

「それはお前次第だな。俺が出来るのはより広い世界を見せることだ。お前はもつと多くを知るべきだ」

意識して息をしなければ、呼吸さえ忘れそうだった。鬼逆の声は容赦なく届く。

「多加羅だけじゃない。お前は力をも憎んでいる。何故、憎んでいるか自覚しているか？ 力が、お前にとっては容易く手に入れることが出来るものだからだ。お前自身が、力だからだ。それさえ認めれば楽になれる。自分自身への憎しみから解放される。一つ所で蹲って目を閉ざしているよりもましだとは思わないか？」

「善意で俺を導くつもりですか？ 似合わないことをする」

「では言い方を変えよう。お前を得る者は力を得る。俺は富と力には貪欲だからな」

「俺は貴方の力などにはならない。意のままにならない相手は嫌いでしょう」

「それでもないさ。それもまた面白い」

「俺が姿を消すとすると、媼への伝手はなくなる。それでもいいと？」

「それぐらい自分で何とかしてみるさ。多少時間はかかったとしてもな」

灰は顔を背け、相手の言葉を断ち切った。

「話は終わりです。すぐに媼の元に向かいたい。馬を貸してください」

い

鬼逆の顔を、透明な笑みが掠めた。一瞬で消える。

「いいだろう」

鬼逆の指示に男達は無言で従った。灰と須樹にも視線を向けない引き出されて来た馬の手綱を受け取り、灰は無意識のうちにその首筋をなでた。馬の瞳が、灰と、周囲を取り巻く空気を捉える。低い嘶きは穏やかだった。波立つ気持ちだけが僅かに静まったが、鬼逆の言葉を聞き続けずにすんだことへの苦い安堵は、消えずにこびりついていた。

「淑女を籠絡しにいかがか」

言うと、鬼逆は身軽に馬の背に跨った。それに続こうとして灰は動きを止めた。背後から須樹が歩み寄り、灰の隣りに立った。

「待つてください。媼には、俺が引き合わせます」

答えも待たず、須樹は灰に顔を向けた。

「灰は先に多加羅へ戻っていてくれ」

「須樹さん？」

「媼と引き合わせるだけならば俺でも出来る。お前は媼とは面識もなかっただろう。その点、俺の方が話が通りやすい」

「ですが……」

「お前が何を考えているかはわかった。俺に任せてほしい」

灰は口を噤んだ。

「灰、お前は笠盛には行かない方がいい。宇麗うわいは勘付かんづいている。お前と顔を合わせれば、何かを察するかもしれない」

囁くような声だった。灰の鼓動が揺れる。全てを話していな

い。須樹はそれを知っている。

「俺が信じられないか？」

信じていないわけではない。そう言おうして言葉が喉につかえた。その沈黙が、須樹を傷つけたのがわかった。

信じていないわけではない。恐れているだけだ。失うことを

「わかりました」

思いを押し込めることは簡単だった。己の内を埋める。深く、光さえ通さぬ漆黒の水底に沈めればいい。慣れた手順だ。

「聞いた通りです。俺が貴方を媪のもとに案内します」

「俺は誰が鍵だろうがいいぜ。扉さえ開けばな」

鬼逆は肩を竦める。

「俺は多加羅へ戻ります。あとは、お願いします」

灰は言った。

須樹を出迎えた宇麗は、不審の念を隠そうともしなかった。須樹からその背後に立つ鬼逆にゆっくりと視線を移し、腕を組んだ。媼の屋敷、その門扉の内に踏み込ませようとしない。それがそのまま彼女の内心をあらわしていた。夕暮れの色彩が宇麗の切れ長の瞳に映りこんでいた。風が冷たい。

「突然飛び出し二昼夜、何の連絡も寄こさずに、戻って来ればここに災いを呼び込むか」

「災いとは聞き捨てならないな、お嬢さん」

「黙れ。須樹、何故この男とともにいる」

須樹は一步踏み出した。宇麗が眉を顰める。怒りの表情だ。だが、それだけではない。

「媼に、鬼逆殿と会っていただききたい」

「ふざけるんじゃないよ。耶來の男を媼に会わせることなど出来ぬ！ 多加羅若衆が何時から耶來の手先に成り下がったのだ！」

「鬼逆は蛇を捕え、俺の仲間を救い出してくれた。媼も、この経緯をお知りになりたい筈だ」

宇麗が目を細めた。

「その仲間は何処だ」

「怪我を負っているので先に多加羅に帰した」

「報告だけならお前だけで十分だ。その男がいる必要はない」

「緩衝地帯の未来に関わる大事な話があるんだよ。お嬢さんの手に負えることじゃあない。早く通してもらいたいんだがね。ここは冷えてかなわん」

苛烈な眼差しを受け流し、飄々と鬼逆が言った。須樹は思わず天を仰ぎたくなる。この男は、意図しているのかいないのか。おそらく意図しているのだろうが。人を挑発するのが上手い。多加羅若衆の伝手がなければ媼に会うことなど到底かなわぬだろう、その

己の立場をわかっていながらの態度である。

「宇麗」

背後から声がかかる。黄<sup>おう</sup>だった。戸惑いと懸念を滲ませた眼差しを対峙する者達に向けた。

「媼がその男に会うと言っておられる」

宇麗が大きく息を吸った。

媼が鬼逆と須樹を通したのは執務室ではなかった。長方形の長机と、それを取り囲むように椅子が置かれた部屋である。きれいに掃き清められ一見すると食堂のようだが、普段から使用されているような形跡はなかった。窓から差し込む夕刻の光ばかりが鮮やかに、空気は冷え切って部屋の広さを尚更に感じさせた。

媼は扉の正面に立ち、二人を迎えた。引き結ばれた唇が容貌に硬質な趣を添えている。衣を纏うように雰囲気を変える、それを武器とする女性なのだと、幾度かの対面で須樹は知っていた。鼓動が跳ねる。それが聞き取られるのではないかと、愚にもつかぬ思いがわいた。

ちらりと脳裏を灰の表情が掠めた。信じられぬのかと問うた彼に灰は答えなかった。落胆を感じなかった、と言えば嘘になる。そして、思い出すのは須樹の落胆に気付いた灰が見せた、己を責める表情だった。あのような顔をさせるつもりはなかった。この先も、させたくはない。多加羅若衆を信じた媼を謀る。そのことに抵抗を感じないわけではない。だが、灰が何を考えていたのか。いまだ自分に明かされていないことも含め。それを知って選んだのは彼自身だ。後には引けぬ。須樹は媼を正面から見つめた。

宇麗と黄が閉ざされた扉の前に立つ。媼が言った。

「御無事で良かったわ」

「御迷惑をおかけしました」

「若衆の皆様には当方の屋敷にお留まりいただいています。とても



心配しておられました。無事、お仲間を取り戻すことが出来たのですか？」

「はい」

横目で見れば、鬼逆は飄然とした態度を崩していない。

「鬼逆殿が蛇の居場所を掴み、灰を救い出してくれました」

媼の視線が鬼逆に移る。

「この屋敷に耶來の方を入れることになるとは思いませんでした。

この年まで生きると色々なことがあるものね」

「だから人生は面白い」

応じた鬼逆の声は深い。

「お話というのは何かしら」

「蛇は捕えた。西の元締めの子は救い出し、祖父殿のところへ送り届けた。既に感動の再会を果たしているだろう」

媼がどれ程驚きを感じているにせよ、それは欠片もあらわれなかった。西の元締めの子が蛇に捕われていたことを媼が知っていたのか、それは須樹にもわからなかった。だが、それは重大なことではないのだ。今、この時にあっては

「蛇は何処です。身柄をこちらに引き渡していただきたいわね」

「それは出来ない。奴は耶來の者だ。我らの法で俺が罰する。既に蛇達の身柄は來螺くわいに送った」

「この地で貴方にそのようなことを決める権利はない筈よ。蛇は緩衝地帯を揺るがした。それは許し難いこと。私は全てを明らかにしなければならぬ。大きなうねりを止めるためにも、真実を皆に知らせなければならぬ」

「先に言っておくが、蛇を動かしていた奴は知らない」

「蛇を捕えていながら、謀の首謀者を知らないと言うの？ おかしな話ね」

「蛇の望みは金、そして俺の力を削ぐことだ。俺の弟と信じて灰を狙ったのもそのせいさ。蛇自身、誰からの依頼か知らず、動いていた。緩衝地帯の命運がどうなるうが、奴にはさして重大ではなかつ

たろうな。奴はそういう男だ」

壁を彩る夕暮れが、淡い夜の気配に呑みこまれていく。霞むように、部屋を闇が侵食する。須樹は息を詰める。鬼逆の言葉は偽りを感じさせない。毒を秘めた嘲弄の色を纏うかと思えば、無彩色の壁画を思わせる静けさに沈み込む。この男も、巧妙に空気を操る。

譲らぬ無言の対峙から、先に退いたのは媼だった。

「このような場所まで来た、貴方の望みは何かしら」

「ちよつとした申し出のためだ。緩衝地帯で起こった一連の出来事、その幕を引く手伝いをしたい」

「貴方が？」

「ああ。蛇を渡すことは出来ないが、評議会で蛇の罪を明らかにし、多加羅若衆の潔白を証言しよう。そうすればうねりは止まり、全ては凪いで静まる」

「何故、と問うてもいいかしら。貴方が緩衝地帯のためにそこまでする理由を知りたいわ」

「全くの善意、と言いたいところだが、貴女も俺も、より信じるに値するものを知っている」

言葉は多くを語り、多くを秘する。そのあわいに時が滑り落ちる。ふと、媼が小さく息をついた。笑ったようにも溜息をついたようにも聞こえた。

「耶來を一人の主が治めるなど、到底無理なことと思っていたけれど、どうやら私の間違いだったようね。もう一つ教えてほしいわ。貴方を突き動かすものは何かしら。耶來を変え、その手中におさめながら、なおも求めるのは何故？ 人の欲が尽きることはないと言っけれど、私は欲以外に尊いものを知っています。信じるに値するものは一つではないのよ」

鬼逆は右手を前に突き出した。何かを見極めるように目を細める。「今生でどれ程のものをこの手で掴み取ることが出来るか、試してみたくなった……ただそれだけだ」

消えかけた光を閉じ込めるように、鬼逆は手を握りしめた。拳の

向こうの媼を見る。

「俺は誰よりも強欲だ、ということさ。生憎、俺は欲以外のものを持ち合わせていないのでね。答えになっっているかな？」

囁きは微笑みとともに落ちた。

「本当に、人生は面白いものね。何が起こるかわからない」  
夜が媼の姿を包み込んだ。

媼と鬼逆の合意は速やかに取りつけられた。鬼逆が評議会で証言を行う、その具体的な日取りが決められる。須樹はそれを見届け、退室することとなった。宇麗が扉を開け、須樹の後に黄が続く。どうやら、この二人もまた場を外すらしいと須樹は察した。

これは媼と鬼逆、二人の取引の場だ。緩衝地帯と耶來が接触を持つ、その場面なのだと、須樹は悟る。大方が闇に沈んだ部屋の内を振り返ると、二人の姿は影を纏い定かではない。明かりを灯さぬのは、その方が双方にとって都合が良いからだろうか。例えば、己の表情を読まれないように。そこまで考え、須樹は苦笑した。鬼逆と媼が、みすみす相手に己を読み取らせるようなことをする筈がない。

「鬼逆、聞きたいことがある」

廊下へと踏み出した須樹の背後で、宇麗が低く言った。思わず須樹は足を止める。

「蛇の刺青は、左右どちらの腕にある」

問われた男は僅かに首を傾げたようだった。

「さて、どうだったかな。奴の性格からすれば両腕だろう。誇示するのが好きな男だ」

「そうか……」

躊躇うような宇麗の声音だった。さらに何かを問いかけ、しかし宇麗は口を噤んだ。そのまま廊下へと踵を返した宇麗に、鬼逆がぞんざいに声を投げた。

「あいつの蛇は赤い」

宇麗の足が止まった。薄暗がりには、彼女が大きく目を見開いたのを、須樹は見た。暫し凝然と立ち尽くした宇麗は、鬼逆を振り返らず扉を閉ざした。

「おい、蛇の刺青がどうしたんだ」

黄の問う声には答えず、宇麗は須樹を見詰める。須樹は正面からその視線を受け止めた。廊下の空気の冷たさを、不意に感じていた。吸えば、体の中までもを冷やす。やがて宇麗は硬い表情のまま視線を逸らせると、無言で須樹を促した。先に立って歩くその背を、須樹は追う。訝しげな表情の黄も、宇麗の様子に問いかねるらしい。廊下に、三人分の密やかな足音が響いた。

硝子筒の光を通り抜けて階段を昇り、客間らしい部屋の前で宇麗は須樹を振り返った。

「ここに若衆がいる。お前も、今晚はここで眠れ。後で食事を持って来させる」

事務的な声音だった。

「ありがとう」

「礼はいらない。どうやら、こちらがお前に礼を言わねばならないようだからね。まさかあの男がこの一件に片をつけるとは思ってもしなかつたが……お前はあの男をよく知っているのか」

白々とした硝子筒の灯に、宇麗の顔が浮かび上がる。

「よくは知らない。数回会ったことがある程度だ」

「噂では鬼逆は血も涙もない男だと言われている。お前の仲間を助けるような奴とは思えないな」

鬼逆の部下が、鬼逆の足元を掬うために蛇へと灰の情報を渡していたという、その説明を宇麗は信じかねているらしい。その根底にあるのが鬼逆その人に対する不信の念であることは明らかだった。

「俺にもよくわからない。ただ……鬼逆は灰に借りがあるようなことを言っていた。放つてはおけなかつたんだろう」

「あるいは、お前の仲間を助けたのも全て他の目的のためなのかも

しれんぞ。この機会を利用して媪と関係を結ぶことを狙っていたのかもな」

その通りだ　だが、須樹は僅かに顔を顰めるだけに留めた。不愉快そうに見えただろう。実際彼自身が、鬼逆には嫌悪の思いすら抱いている。灰を利用した手口といい、内心では鬼逆を許す思いにはなれない。全てが鬼逆の思惑通りだということが、今になれば須樹にもよくわかっていた。そして、灰もそれをわかったうえで、敢えて鬼逆を利用したのだという、目を逸らしようのない事実がもう一つある。

媪は鬼逆を受け入れた。どれほど疑念を持つと、宇麗とて媪の決定には従わざるを得ない。全体的に見れば、むしろ緩衝地帯にとつては良い方向にことは進んでいるのだ。

数度呼吸を繰り返し、漸く宇麗は言った。

「蛇はあたしに直接、取引を持ちかけて来た。多加羅若衆がこの屋敷を訪れる一日前のことだ。その時奴は左腕を掲げてあたしに蛇の刺青を見せた」

どくりと、須樹の耳奥で鼓動が鳴った。

「奴の刺青は赤くはなかった」

須臾の沈黙は、幾重にも広がる波紋に似ていた。それまで確かに見えていると思っていたものの形を崩し、欺き、やがて何事もなかったかのように現の影を映し出す。

「あの日はひどく雪が降っていた。まるで一面、白い薄絹に覆われているようだった。目の錯覚かもしれない。刺青は赤かったのかも。しれない。だけど、何か……あたしには何か腑に落ちない。全ては、たった一つの違和感でしかないものだ。あたしが、あの時対したのは本当に蛇だったのか」

独白のような言葉だった。宇麗はどこか沈んだ面持ちで須樹を見詰めた。

「そしてお前とともに蛇を追って行ったあの男、あれは本当に鬼逆の部下だったのか？」

「ああ、そつだ。鬼逆は灰の身を案じていた。俺とも少しではあるが面識があつたから気にかけてくれたんだろつ」

須樹は自分の声が平靜に聞こえるように祈る。

笠盛を去つた時、須樹とともにいた男　弦げんである。彼が鬼逆の手下であり、ともに蛇を追うために須樹のもとに遣わされたのだとそれが、灰と鬼逆が申し合わせた内容だつた。

「ああ、お前が言うならばそつなんだろつ。鬼逆など到底信じることは出来んが、お前が偽りを言い張るような奴じゃないとあたしは思っている。だが、あたしはこつも思つ。あの男……廃屋でお前を待ち構えていたあの男に、あたしは会つたことがある、とね」

須樹は今度こそ表情を消すことが出来なかつた。宇麗は彼の驚きを見詰め、ふと口元を緩めた。

「……あたしの勘違いかもしれないね」

宇麗はさつと身を翻すと足早に須樹から離れて行つた。振り返らずにひらりと手を振る。

「ゆつくり休みな」

黄が慌てて宇麗の後を追う。二人の姿が廊下の角を曲がつて見えなくなるまで、須樹は立ち尽くしていた。ひたひたと押し寄せる夜の気配を感じていた。それだけではない、静けさの底に、何かが近づいてくるような不思議な感触がある。

灰ならばこの感覚の理由がわかるだろつか。

思考は、不穩に揺れる己の心音を誤魔化すかのようにとりとめがなかつた。須樹は何時の間にか両手を握りしめていた。意識して手を開く。指先が冷たい。

須樹は顔を上げると、若衆が待つ部屋へと、扉を開いた。

灰が多加羅の街が見える丘へと辿り着いたのは、宵の空に一つ星明りが点る頃だつた。街の外延部の灯りが温かく、そして儂く見え

た。馬からおり、灰は振り返る。背後には馬に跨った男が一人いた。手綱を預けると、男は一言もなく背を向けた。鬼逆の部下である。別段話すと命じられているわけではなさそうだったが、道中一度として口を開かなかつた。

振り返りもせず去る男を暫し見詰め、灰は街へと向かつて歩き出した。

漸く壁の内に入った時には、どの家からも灯が漏れ出で、道に古代の文字を思わせる連続的な模様を描き出していた。人通りは少ない。通り過ぎた家の中から、弾けるような笑い声が響いて来た。

足早に大通りを進んでいた灰は立ち止った。何故、立ち止ったのかもわからぬまま、通り過ぎる人々を見詰めていた。誰もが家路を急いでいるのか、俯きがちだった。目の前に淡い白が広がる。呼吸をするたびに、それは幾度も繰り返された。不意に、灰は息苦しさを覚えた。大きく息を吸って、空を見上げる。寂々と、星が在った。そして、あまりに広く、他には何もなかった。

虚脱したように立ち尽くしたまま、灰は途方にくれる。世界の奥底に取り残されたような、奇妙な感覚があつた。どこに進むつもりだったのかわからなくなる。

「帰る……か」

ぼつりと呟き、灰は眉を顰めた。道の先を見詰める。何かに呼ばれたような気がした。考える前に歩き出す。街並みは焦れる程にゆつくりと流れる。それにふと疎ましさを覚え、灰は足を速めた。

暗闇にその建物の輪郭が浮かび上がるまで、灰は自分がどこに向かつているのか殆ど自覚していなかった。門を通り過ぎ、壁を伝う冬蔦の葉が夜風に揺れる音で、漸く灰は慈恵院じけいいんの前に立っていることに気付いた。扉は既に閉ざされている。だが、普段通り、何時でも患者を受け入れられるように鍵はかけられていない。

扉を開くと、錆びついた音が響いた。遠くの風のように、数多の命の気配が感じられた。既に食事の時間も過ぎているのだらう、建物の内は静かだった。見慣れた柱の形を目でなぞりながら、灰は目

指す場所へと真直ぐに進んだ。厚手の外套に冷気が纏いつく。

辿り着いた小さな部屋には、明かりすら灯っていないかった。細長い窓からは、半月がくつきりと見えていた。灰は寝台に近づく。そこに横たわる人影が、浮かび上がる。その姿は、緩衝地帯に向かう前に見た時よりも、一回り小さくなったようだった。物音をたてたつもりはなかったが、枕辺に膝をついた灰に、少女は瞳を開けた。

「灰様」

囁くような声が夜気に落ちた。

「静星……」

名を呼ぶ。何故か、それ以上言葉を続けることが出来なかった。

「帰って来たんだね。灰様」

「遅くなった。すまない」

「いいの。帰って来てくれたから、それでもういいの」

それだけで嬉しい、と静星が呟いた。

静星は触れれば壊れそうに、青白く、華奢に見えた。まるで雪の結晶のようだ、と灰は思う。何か言わねば、と思いつながらも、言葉はつかえたように出て来ない。部屋の静けさに浸されていると、緩衝地帯での出来事が全て遠い夢の中の出来事に思える。まるで、緩衝地帯に赴いたことなど嘘のように　まるで多加羅を出ることもなく、ずっとこの場にいたかのように

灰は緩く頭を振った。子供が無造作に折り畳んだ紙のように、記憶が奇妙に抜ける。思いがけぬ断片が脈絡なく浮かんでは消えた。小さな混乱が渦巻く。周囲の静けさがそれに拍車をかけた。

灰は目の前の少女を見詰めた。静か過ぎる。何か、おかしい。それは小さな違和感だった。現実にくっきりと牙を立てるように、確かにそれは在った。体内に緊張が広がる。反射的に意識の網を広げて、灰は体を強張らせた。

何かに取り巻かれている。揺れ動く大気の波さえなく、まるで氷の中に閉じ込められたかのように全てが止まっていた。思わず灰は己の手に目を落とした。そこに在る。だが、まるで作り物のように



現実味がなかった。己の体さえ、魂をどこかに置き忘れた空虚な器に感じる。

顔をあげた灰は、こちらに伸びる二つの掌を見た。まるで闇に浮かび上がる白い蝶のように、少女の手が視界を埋め尽くす。触れられた頬から、凍るような冷たさと、燃えるような熱さが広がる。間近に静星の顔が在った。灰は細く息を吐いた。闇に、小さく白い渦を巻く。息吹の証。それを、鈍い衝撃とともに灰は見詰めていた。少女の瞳を覗き込む。先刻見上げた夜空のように、底がなかった。

「……すまない……静星」

囁くような声に、静星はゆっくりと首を振った。

「灰様、謝らないで。こうしてもう一度灰様に会えたんだから、私は不幸じゃない」

触れそうに近く、口元が言葉を象る。そう見えているだけかもしれない。空気は震えない。静星が微笑んだ。まるで花が綻ぶように、柔らかく、それはあどけなく見えた。

それが、最後だった。

少女を象るものが淡く光を帯び、解けるように虚空へと溶けた。僅かな煌めきは、瞬く間に消えた。それを追うように虚空に伸ばしかけた指先が、力なく落ちる。静星が、その存在を象るものが、もうどこにもないことを、灰は知っていた。周囲を満たしていた凍るような気配もまた、消えていた。

少女に触れられた箇所だけが、脈打つようだった。だが、それはおそらく肉体の感覚ではない。魂に触れることが出来るのは、魂だけだ。瞳を閉ざす。瞼の裏が熱かった。体の奥から込み上げるものが、胸に留まって息を詰まらせた。

灰は敷布をなでた。まるで存在を確かめるように。その手を追うようにして眼差しを上げた。

空の寝台には、ただ月の光ばかりが降り注いでいた。

どれ程その場に座り込んでいたのか、灰にはわからなかった。漸

く顔を上げたのは、月の移ろいのせいではなかった。背後の物音のせいである。軽い足音、それが部屋の前で止まる。声をかけられるより先に、その視線が誰のものであるかわかっていた。

「帰って来たんだね」

泉せんの声。灰は立ち上がると振り返った。

「静星は死んだよ。二日前だった。明け方、誰にも気付かれずに、眠るようにして死んでいったんだ」

言いながら泉は硝子筒を傍らの机に置く。ことりと、無機質な音が響いた。揺らめく炎は、闇を切り開くように眩しい。暫く見ぬうちに泉は身長が伸びたようだった。濃い影の落ちる顔は、大人びている。そこにあるのが紛れもない悲しみであることに、灰は気付いた。そして、悲しみだけではない。灰へと振り向けられた眼差しは強かった。

「……もう少し早く戻って来てくれてたら……」

喘ぐように言葉を切る。

「そしたら静星は灰様に会うことが出来たのに……最後まで、静星は待ってたんだ！」

「知っている」

灰は呟いた。思い、思い続け、思いそのものが形を纏う程に。だが、静星はもうここにはいない。

「……知ってるって……何だよ、それ！ だったら何で早く戻って来なかったんだよ！ 静星がもう助からないって、灰様だってわかってたんだろ！？」

答えぬ灰に、泉の顔が歪む。泣く寸前のように。灰は泉に近付くと、床に膝をついた。頑なに視線を逸らす少年の顔を覗き込む。引き結ばれた口元が、泉の思いをあらわしているようだった。

「何でもっと早く帰って来なかったんだよ。待ってる人がいるのに……」

「泉、すまない」

「俺に謝るなよ。静星に謝れよ」

「ああ。わかつている」

「わかつてないよ。灰様は何もわかつてない。自分がどれだけ大切に思われてるか、全然気付いてない。静星、俺には一度も笑わなかった。笑っても、無理してるみたいで、目はずっと悲しそうだった。俺は何も出来なかった」

泉はぽつりと呟いた。

「静星の命だつて……灰様なら、何とか出来たかもしれない。俺、知ってるんだ。灰様には不思議な力があるって。誰にも出来ないことが出来るって」

否定すべきだとわかつていた。だが、灰にはそれが出来なかった。沈黙を破ったのは、泉でも灰でもなかった。泉、と静かな声が響いた。視線を転じて、灰は歩み寄ってくる老師を見詰めた。

「まだ全ての患者の見回りは終わっていない。行きなさい」

「……はい」

泉は硝子筒を掴み灰に背を向けた。廊下を歩きかけて立ち止る。

「俺、わかつてるんだ。灰様が、静星の死を悲しんでいるのは……。でも、今日はだめだ。なんか嫌なことばかり言ってしまう。折角灰様が帰って来たのに……本当は話したいことが一杯あった筈なんだ」

「わかつている」

「静星が死んだんだ……」

「ああ」

「死んじやったんだ……」

呟くと泉は乱暴に目元を拭った。振り向かず立ち去る泉の背を、灰はやるせなく見詰めていた。

「何時戻って来たのだ？」

はつとして灰は老師を振り返った。硝子筒の明かりに、老師の厳しい顔が浮かび上がっている。

「つい先程です。静星は……」

「埋葬は昨日行われた。最期まで、よく耐えていた」

胸の奥の塊が広がる。灰は気付かれないように唇を噛みしめた。

「俺は……何も出来ませんでした」

出来たかもしれないのに　その思いが滲むのを止めることが出来なかった。老師の眼差しは厳しく、そして僅かに温かかった。

「以前にも言ったが、お前に出来ることは何もなかった。静星が死ぬのは、最早避けられぬことだったのだからな」

灰は言葉に詰まる。

「大切な者の死の瞬間に立ち会う時、人に出来るのはその者の生きた証を心に刻むことだけだ。それとも、何か出来ることがあると、そう思っているのかね？」

「俺には……わかりません。ただ、何もせず見ていることは、辛すぎる」

それが単なる我儘だとしても　決して許されないことだとしても　。その言葉が聞こえたかのように、老師が言った。そこには微かに疲れたような響きがあった。

「僕は、お前が静星の最期に居合わせなかったのはむしろ幸いであつたかもしれぬと思つている。僕自身、安堵すら感じている」

灰は目を伏せた。全てが現実味を欠いている。緩衝地帯での出来事でさえ、既に記憶という形を纏い、緩やかに呼吸を繰り返すたびに曖昧に剥落していく。灰が感じたのは、どうしようもない虚しさだつた。

「老師、俺は……導きがほしい」

「あまり老いた身を試してくれるなよ、灰。お前に何が出来るか、僕にはわからぬ。それを知ったところで最早僕の心は石となり果ている。縛めが欲しければ言葉を与えよう。だが、お前はそれを望むまい。答えは自分で見つけなさい」

内心を見透かすような眼差しで灰を見詰め、老師は静かに去つて行った。灰は一人闇の中に残される。立ち尽くす。老師が言う通りだつた。静星に一体何がしてやれたというのだろう。己に何が出来るのか知りもせず、何をしようというのか。

お前自身が、力だからだ。

鬼逆の言葉が、まるで耳元で囁かれたかのように響いた。力。所詮壊すだけの力だ。命を前にして何か出来ることがあると考えること自体、傲慢な思い上がり、自己満足、それだけのこともかもしれぬ。答えは己で見つけるしかない。だが、そもそも答えなどあるのだろうか。

灰は慈恵院を後にした。

星見の塔がある方角を見上げる。道を進めば、足跡を追うようにゆっくりと地場が崩れていくような心許なさがあった。止まれば、落ちる。馬鹿げた妄想だ。

(今まで通りにすればいいだけだ。何も、変わりはない)

思いながら、灰は決定的に変わってしまったものがあるのだと、気付いていた。緩衝地帯に赴く前からおそらくどこかで既にわかっていたことだろう。鬼逆の言葉がなければ気付かぬふりを続けることさえ出来たかもしれない。

鬼逆には灰の迷いも、混乱もわかっていたのだろう。灰自身、自覚すらしていなかった奥深くまで。今は灰にもわかる。

それでも、ここに留まるしかないのだ。それは、奇妙なことに執着にも似た思いだった。灰は自嘲の笑みを浮かべた。滑稽な道化だ。不安定な小枝の上に止まる小鳥のように、必死に均衡を保っている。留まり続けるためには不様にあがくしかない。飛び立てば、向かう先がわからない。

それ以前に、飛び方を知らない。

星見の塔の前で灰は東の間佇む。呼び紐を引けば、足音が近付いてくるまで暫く時間がかかる。軽い足音は、駆けているらしい。勢いよく扉が開いた。柔らかな光が最初に視界を埋め尽くした。

「兄様！」

飛びついて来た稟を、灰は受け止めた。稟は灰の外套にしつかりとしがみつく。まるで灰の存在を確かめるように。そして漸く顔を上げた。言葉はいらなかった。その笑顔だけで、灰は強張っていた

体から あるいは心から 力が抜けるのを感じた。

「帰って来たね」

穏やかな声音に顔を上げる。秋連しゅうれんが立っていた。その後ろで娃娃えな菜がにこにここと笑みを浮かべている。

「お帰りなさい」

温かい声に包まれる。稟の手に引かれて建物の中に入る。扉が閉ざされると、夜の匂いが遠ざかった。

「ただいま」

灰は、漸く言った。

多加羅若衆が媼おつなの屋敷を辞したのは、須樹すきが戻った翌日のことだった。若衆が緩衝地帯に留まる理由は既がない。

宇麗うれいが媼の部屋を訪れたのは、その日の夜だった。媼は穏やかな表情で彼女を迎えた。宇麗が媼のもとをおとなうと、既にわかっていたかのようなそれである。向かい合って座り、宇麗は卓に出された香茶を手に取る。媼が自ら淹れた茶は温かく、その名のままに香ばしい。

ことりと茶器を卓に置く。宇麗は媼を見た。

「多加羅若衆が去ると、何だか静かに感じるわね。以前に戻っただけなのに、おかしいわね」

「騒々しい連中ですから」

「あら、とても行儀の良い子供だったけど」

「媼、あいつらはもう子供ではありません」

宇麗は僅かに苦笑する。無論、媼から見れば多加羅若衆も単なる子供に見えるのだろう。

「須樹さんとは最後にお話ししたの？」

「はい」

何を話したのか、媼は問わなかった。宇麗にしても言うべきことは何もない。ありきたりの挨拶しか交わさなかった。これまでの経緯を考えれば、呆気ない程に平凡な別れである。互いに言葉にせぬ思いがあるのはわかっている。言葉にすればたちどころに色を失い、陳腐にしかならない部類のものだ。だからこそその沈黙、そう思っておこう。宇麗は須樹の面影を振り払う。

「今回の一件は全て片がついた……そう思っべきなんでしょうね」

「そうね。鬼逆きさかが評議会で証言をすれば、全て終わるわ」

「媼、あたしはどうしても腑に落ちないことがあります。気になっていることを放置するのはどうも性にありません」

「それは悪いことではないわね。むしろ望ましいことよ。何が気になっっているのかしら」

「鬼逆の話で、全てはつきりしました。蛇を動かしていた者が誰か、ということ以外は。でも、あたしにはどうしても違和感があるんです」

言葉を切り、宇麗は思いをまとめる。媼も急かしはしなかった。

「蛇は汚い愚かな男です。鬼逆の話でそれがわかりました。金のためならばどのようなことでもやるかと思えば、己の立場も自覚せず軽薄な行動に出る。孤児院の襲撃や紺こんの件もそうです。そして若衆の一人を鬼逆の弟と信じ狙ったということも。ですが、あたしは蛇がそのように迂闊な相手だとはどうしても思えませんでした」

「取引を持ちかけてきた一件を言っているのね？」

「はい。思えばあの取引は何もかもがおかしい。取引場所に指定されていた廃屋を見張っていた者達を拘束したのが誰なのか、蛇ならば殺していた筈です。それに、いくら蛇でも、取引の前に街であるような騒動を起こすでしょうか」

何よりも、と宇麗は言葉を続ける。

「あたしは直接蛇と対しました。あの時のあいつは……蛇の印象とはあわない。もっと狡猾で、隙のない奴でした。それに蛇の刺青は赤いと鬼逆は言っていました。あたしにはそうは見えませんでした」

「でも、貴女はその刺青を見たから、相手を蛇と信じたのね」

「はい」

「蛇でありながら蛇ではない。あの取引に関しては、蛇ではなく別の誰かが背後にいたかのよう、そう言いたいのかしら」

宇麗は目を見張る。媼の言葉を内心に繰り返し、その意味を捉える。それまで不明瞭だった己の中の燻りが、不意に明確な形を纏ったかのような感覚だった。宇麗は大きく頷いた。

「そう、そうですね」

「あの一件で、ことは大きく変わったわね。貴女は須樹さんを信じ



るといふ決断を下した。結果的にそれが最も大きかったのかもしれないわ。無論、文に惑わされなかった多加羅若衆のおかげでもあるけれど。他に、何か気になることはある？」

宇麗はまるで課題を出されているかのような心地に陥る。媼の眼差しが、宇麗が何を考えているのか知っているのだと告げていた。

「もう一つ、あります。何時だったか、あたしと黄おうに、蛇の存在と須樹が若衆だと告げて来た男、あの男が何者なのかいまだにわかっていません。鬼逆かとも思いましたが、あいつははっきりと否定しました」

「嘘を言ったのかもしれないわね」

「そうかもしれませんが。ですが、あたしは男ともう一度会っているように思っています」

宇麗は僅かに躊躇った。確証のないことだ。

「鬼逆の部下だという、廃屋で須樹に蛇の行先を告げた男です。あたしは、もしかするとあの二人は同一人物ではないかと、思います」

「何を根拠にそう思うの？」

「勘です。顔すらはつきりとは見ていません。夜道で対した時には姿すら見えませんでした。でも、あの雰囲気……闇に溶け込むような、周囲に同化するような奇妙な感じが似ているんです。あの男が同一人物で、蛇や須樹のことを告げてはいないという鬼逆の言葉が正しければ、鬼逆の部下である筈がありません」

「根拠は何もない、ということね」

媼が結論付ける。それに宇麗も頷かざるを得なかった。責める口調ではなかったが、宇麗は思わず顔を伏せた。

「宇麗、今回の一件は片がついたのよ」

「わかっています」

「でも、一つだけ欠けているものがあるわ」

え、と宇麗は顔を上げた。媼が一口茶を飲む。手元でゆっくりと茶器を回しながら、視線を落としている。液体が作り出す波紋を見ているようだった。

「鬼逆、蛇、多加羅若衆、そして私達卸屋……渦の中心は何処かしら」

「中心……ですか？」

「そう、中心よ。欠けているのは全ての中心。私達が対していない人物が一人だけいるわね」

媪は顔を上げると、茶器を卓に置いた。

「灰、という人物、貴女はどう思うかしら」

「多加羅若衆の……ですか？　どうと言われても、知らない相手です」

「本当にそうかしら。設啓せつけいさんの話では、今回の出来事が何者かの謀略ではないかとはじめから考え、そして須樹さんを探すために緩衝地帯での調査を提唱した若衆も、彼らとともに来ているということだったわ。あの時の話しぶりと他の皆さんの様子を考え合わせれば、おそらくそれが灰なのでしよう。灰は蛇に連れ去られそうになった紺を助け、匿かくった。設啓さんははつきりとは言わなかったけれど、蛇の文ではなく私達の方を信じ、須樹さんの解放を求めるべきだという意見を出したのも、おそらく灰という人物なのではないかしら。蛇が灰を狙ったのは鬼逆の弟だと思込んだ、ということだけど、つまり彼は鬼逆とも繋がりがあったということだわ。それも顔を知っているという程度ではなさそうね」

たたみかけるように言う。個別の事象、その全てに灰という人物が関わっている。だが、それが何を意味するのか、宇麗にはわからない。

「そして、鬼逆がこの屋敷に入ることが出来たのは、須樹さんがともにいたから……多加羅若衆を助けたという名目があったからよ。

結果として、今回の一件が無事解決するのも、灰という人が蛇に捕われてくれたおかげ、ということになるのかしら」

「媪は渦の中心にいたのが、その灰だと考えているのですか？」

「少なくとも、彼が全ての契機になっているわね」

「でも、決断し選んだのは媪であり、鬼逆です」

「全ての決断、全ての変化が、導かれたものではないと言い切れるかしら」

宇麗は絶句する。

「灰という人物の望みはおそらく須樹さんを無事多加羅に取り戻すことだった。そのためには卸屋との軋轢は避けなければならぬ。間違っても禍根を残せば、須樹さんは帰る場所さえなくしていたかもしれない。それを防ぐためには、何としても卸屋と多加羅若衆の間に信頼を結ぶ必要があった」

「それは、そうかもしれませんが……」

「文が届けられ、若衆は私達に須樹さんの解放を求めることを決した。そして私達は蛇との取引に応じるか否か、須樹さんを信じるべきかどうか決断を迫られていた。貴女ははじめから須樹さんを信じると決めていたけれど、あの時、若衆が私達のもとを訪れたのは、偶然と考えるにはあまりに出来過ぎているわね」

媪が首を傾げた。呟くように続けた。

「例えば、こう考えてみてはどうかしら。蛇は真実二人いたのだ、と」

「どういうことですか？」

「灰という人物の腕には、もしかすると赤くはない蛇が描かれているのかもしれないわね」

宇麗は息を呑む。喘ぐように言った。

「灰とやらが蛇のふりをしていた、ということですか？」

「そういう可能性もある、ということよ」

歌うように、媪が言った。

「これはとても単純なことよ、宇麗。貴女は蛇に違和感があると言った。まるで蛇ではないかのようだったと。それが真実だしたら、どうなるかしら。そして、私達はただ一人、まだ対してはいない人物がいる。それも、おそらくは全てを把握し、明確な目的を持つ相手だわ。この二人が同じではない、と貴女には言い切れる？」

「……言い切れません。ですが、媪が仰られていることには根拠が

ありません」

「そうね。だから私はこの話をこの場以外でするつもりはありません。灰という人物を探し出すつもりもありません」

驚きに浸されながらも、宇麗は冷静に媼の言葉を反芻した。考えでもみなかつたことである。だが、鬼逆や蛇、そして卸屋以外の何者かが動いている、という思いは常に付き纏っていた。それが件の灰という人物ではない、と言い切ることは出来ない。全てが緩衝地帯にとって、そして多加羅若衆にとって望ましい方向に進んだ今となつては尚更である。

「媼、あたしはその灰という奴に会つてみたいと思います」

「その必要はありません。この一件はもう全て終わったのよ」

「ですが、媼が仰られる通りだとしたら、裏でその灰とやらが動いていたということではないですか。奴が知っていて、あたし達が知らないことがあるかもしれません」

「ええ、そうね。彼が真実裏で動いていたとしたら、おそらく私達が考えている以上のことをしていた可能性があるわね。でもそれは知る必要のないことです」

きつぱりとした口調に、宇麗は反論を封じられる。だが承服しがたい思いを読み取つたのか、媼は静かに言った。

「堪えなさい。今は動くべき時ではありません。それに、遠からず私達は灰という人物に会うことが出来るかもしれませんですよ」

最後は笑みを含んだ声音だった。訝しく見やった宇麗に、媼は秘密を明かすように言った。

「ねえ宇麗、三年前、多加羅惣領が親戚の少年を引き取つたことを覚えている？」

「そういえば……そんなこともありましたね」

「ああ、あの時は黄に調べてもらったのだったわね。貴女はあまり知らないわね。引き取られたのは現惣領の異母兄妹に当たる方の御子息だということだったわ。家督を継ぐのは現惣領の長男ということだけれども、当時は新たに後を継ぐ可能性がある人物の出現とし

て卸屋の間でも話題になったものよ。すぐにそのような関心もなくなってしまうたけれど」

宇麗は話しの先を読めず、思わず顔を顰める。

「媪、何が言いたいんですか」

「その引き取られた人物の名前が灰、というのよ。私も今回のことがあるまではすっかり忘れていたわ。その人物が、この先緩衝地帯に如何なる形でも関わることはないと思っていたせいね」

媪は宇麗の反応を面白そうに見やった。

「まさか……」

「当初のような関心がなくなつたのも無理はなかつたのよ。惣領はその少年を家臣の一人にあずけ、かえりみようともしなさらなかつたと言うから。その少年が多加羅若衆に入つたことも一因ね。将来惣領家を継ぐ可能性のある人物が、市井の者達に混ざつて若衆に入るなんて、考えられないことだつたわ。今では彼の名前を覚えている人がどれ程いるかしらね」

「でも、灰などどこにもある名です。同名の者だという可能性もあります」

「無論そうね。でも引き取られた少年は、生まれが來螺らいだつたそうよ。母親は來螺で歌い手として名を馳せていたようね。設啓さんは、灰が來螺の生まれだと、そう言っていたのでしよう？」

宇麗は驚きとともに、疼くような興奮を感じていた。媪の瞳にも同じものがある。より抑制されたものではあつたが、考えていることは同じだとわかつた。

「それならば、探す必要もありませんね。何時か会うことになるでしょう」

「ええ。蛇のように狡猾で、もしかすると鬼逆のように残酷で、若衆のように潔く、そして心に傷を負つた少女を癒し強さを与える、そんな若者よ。会つのが楽しみね」

宇麗は口を噤んだ。媪は気付いていたのだ。

紺が嘗て來螺の裏側でどのような目に遭つていたのか、そしてど

のようにしてそこから逃げ出してきたのか、宇麗は知らない。それは容易くは触れることの出来ぬ、少女を内側から蝕む深い傷だった。それから逃げ、目を逸らして震えているような少女だった。だが、屋敷に戻って来た紺は変わっていた。張り詰めた糸のような危うさが消え、どこか落ち着いた雰囲気を纏っていた。今の紺は己の傷と真直ぐに向き合っているのだと、そう思わせるものがあつた。決して消えぬ刻印として、紺は傷を抱きながら生きていく。生きていくだろう、と宇麗は思う。

「宇麗、緩衝地帯は転換点を迎えているわ。私達が変わっていくことになる。そして、所領もまた、大きく変わる節目に来ているのかもしれないわね」

静かに媪が言った。

「そのような時に人は何を信じるべきなのかしら」

「その答えならば、もう知っています。須樹が教えてくれました」

「そうね。最も愚かしくて、最も崇高な答えだったわね」

「はい。信じるべきは人であり、その心です」

媪は微笑んだ。

「でも人の心は弱いものでもある。容易く流されるのもまた人の心よ。私達卸屋は、誰よりもそれを肝に銘じていなければならぬ」

言葉以上の意味が秘められているのを宇麗は感じた。

「沙羅久も、多加羅も、遠からず代替わりするでしょうね。多加羅がかろうじて沙羅久に伍しているのは今の惣領の手腕によるもの、後継ぎの透軌様は遠くお父上には及ばないと聞いているわ。次の代となればおそらく沙羅久の力は増し、多加羅の力は弱まる。そうなれば、緩衝地帯の自治は長くは続かない」

「媪？」

「そう、誰もが考えていたわね。でも状況は変わるかもしれない。あるいは、変えることが出来るかもしれない」

姿勢を崩さずに座る媪の背後で、硝子筒の明かりがゆらゆらと揺れた。壁に、複雑な影が踊る。

「まだうねりは終わっていない。いえ、むしろこれからさらに大きな波に緩衝地帯は呑みこまれることになる。ただ呑みこまれるか、それともその波を乗りこなすか、私達にもその選択が出来る」

媪の面差に張り詰めた激しさがあった。それに、宇麗は知らず背筋を伸ばす。宇麗に向けられた眼差しもまた厳しい。媪の後を継ぐ存在として己が認められているのだと、自覚せずにはいられないそれである。

「……何をなさるおつもりですか？」

「出来るだけのことを。どのような形にせよ、灰という名前を人々は知ることになるわ」

軋むような静寂に、決然と媪の声が響いた。

弦楽の音色が響く。確かな技巧を思わせる弾き方でありながら、気だるく、睦言を繰るような甘く秘めやかな調べは、余韻に凋落を感じさせる。

「お前が弾くと、名器も形無しだな」

辛辣な批評に、聡達そうたつは顔を上げた。張り出し窓に斜めに座ったまま、戸口に立つ兄を見やる。うんざりする程己と似通った顔は、今は不機嫌をあらわにしていた。尤も、この兄が彼に対する時は大抵機嫌が悪い。

「音色は人の性を映し出すと言うらしい。大方、兄貴が弾けば司祭の聖句なみに黴臭いんだろうよ」

若国わかくには弟の物言いにも眉一つ動かさず、腕を組んだ。

「お前、まだ母上に挨拶を申し上げていないだろう。都から沙羅久に戻って既に三日以上経っているのだぞ。早く顔を出して差し上げる」

聡達は引つ掻くように弦をかき鳴らした。不協和音　耳障りなそれに目を細めると、小さく笑んだ。

「あの女が俺に会いたがつているのか？」

「父上の病状が思わしくないせいで、最近では母上も気弱になっておられる。一声かけて差し上げれば少しは気が紛れるだろう」

都から戻って数日、聡達は殆どの時を自室で過ごしていた。帰郷の目的は既に果たしている。中央から惣領家へと下された命令、それを伝える特使としての役目である。尤もその内容を伝えた相手は父親ではなく若国である。若国は病床にある父親にかわり事実上惣領家を動かしていた。

「気弱どころかむしろ喜んでるんじゃないのか？ あの女は兄貴が後を継ぐのを何よりも望んでいただろう」

「口を慎め」

「事実だろうが。それより兄貴は伝えたのか？ 皇帝の命で中央に赴くつてことを」

「いや、まだだ。それ以前に私が赴くと決まっただけではない。命令は惣領に出されたもので、私にはまだその権利はないからな」

「よく言うぜ。親父はもう兄貴に家督を譲った気であるぜ。あの体ではどちらにせよ代行が必要だ。旅の途中で死なれちゃ堪らんからな」

親子としての情愛を微塵も感じさせぬ物言いに、若国は僅かに顔を顰めた。聡達は父親に対しては帰郷の挨拶をしたが、それさえも父親の病状を見極めるためではなかったかと勘繰りたくなる。父親は単純に喜んでいたようだったが、息子である若国から見ても、父親は茫洋として人が良い。ひきかえ、母親と聡達の不仲は誰もが知っていることだった。

無駄と思いつつも若国は言い募った。

「とにかく、一度は母上に会っておくことだな」

「何のために。互いに不愉快になるだけだ」

「礼儀を失するなど言っているのだ。息子としての義務を果たすことくらいは出来るだろう」

「そいつは兄貴の専売特許だ。どうせ俺はすぐに中央に戻る。今会



えば、また別れの挨拶をせねばならんだろう。「面倒だ」

若国は暫し弟の様子を見守っていたが、小さく溜息をつくと言を返した。その背に、まるで今しがた思い出したかのように、聡達が無造作に言葉を投げた。

「そういえば、緩衝地帯はどうなっている？」

「まだ知らせは来ぬ。どうやら、順調ではなさそうだな」

「上手くいくと思っていたのか？」

「もとより期待もしていないさ。北限の民が成功しようが失敗しようが、私にはさして違いはない」

「奴らの計画が成功したとして、兄貴は要求に応えるつもりなのか？」

「愚問だな。私が緩衝地帯欲しさにあの者達の申し出を受けたと思っっているのか？ むしろ緩衝地帯は付随的なものでしかない。あの地は何れ沙羅久のものとなる。北限の民の力を借りずともな」

聡達は小さく鼻を鳴らす。

「つまりはじめから梓魏（せい）の美姫に目をつけていたというわけか。

北限の民も可哀想に。苦勞のし損だな」

「全て無駄だったわけではない。少なくとも、北限の民との繋がりは無益ではない。今後の沙羅久にとってはない」

「他ならぬ北限の民が梓魏の姫君の命を奪うかもしれないだろう」

「彼らもそこまで愚かではないさ。既に手を打っている筈だ」

「どうだかな」

懐疑すら込めぬ、放り出すような声音だった。実際どうでもよいと思っっているのかもしれない。聡達の横顔を、若国は見詰めた。

「お前はどのようなのだ。多加羅の姫君にいらぬちよっかいを出してはいないだろうな。問題になるようなことをするなよ」

「そうしたくとも暇がない。俺の働きは兄貴にとっても無駄じゃないだろう。感謝してくれよ」

「お前が真実沙羅久のために動いているというなら感謝もしよう。だが、そうではなからう」

素気なく言つと若国は薄く笑つた。

「聖遣使しやうけんしという立場はどうやらお前にとって程良い枷となっているようだ。だが、所詮は神殿に飼われている身分だ。調子に乗つて王宮の奥深くにまで首を突つ込むなよ。食い干切られるぞ」

聡達は嫌そうな顔を若国に向けた。都での彼の所業が、逐一兄に報告されていることを聡達も知っている。尤も、知つたところで行状を改める聡達ではない。若国は、口調を変えることなく続けた。

「とにかく、もう一度くらいは父上に顔を見せて差し上げる。中央に赴けば、この先は会うことも出来ぬやもしれぬからな」

「仰せの通りに」

聡達は言つと、皮肉に笑みながら恭しく頭を下げてみせた。

兄が去るのを見届け、聡達は楽器を傍らに置いた。既に弾く気は失せていた。聡達にとつては兄の動向も、北限の民の策謀も、さして興味を引くことではなかった。若国が梓魏に対して秘める思惑も察しがついていたが、だからと言つて感興は覚えぬ。

壁に凭れたまま窓外へと視線を移す。沙羅久の街並みは岩の連なりを思わせた。部屋からの眺めは三年前に都へと発つた時から全く変わっていないように見える。停滞 全てはその中で朽ちている。さらにその先は、遙か梓魏の所領にまで続いている。聡達はまだ見ぬ地を思うことはせず、窓から離れた。

梓魏しせいの地 万まんにとつて、日々の流れは単調に、忍耐を要するものとなりつつあった。近衛隊への道が開かれたことは確実な一歩とは言えたが、状況が即座に変わるとは思えなかった。それは緩衝地帯へと発った清夜すがやから、依然として何の音沙汰もないせいもあった。状況が不透明であることは、彼を苛立たせる。殊更に感情を殺すことで、万はそれに耐えた。

近衛隊への異動を命じられた翌日、万は指定の時間よりも僅かに早く近衛隊統括本部へと赴いた。その建物は壮麗な惣領家の屋敷の傍らに、まるで無骨な番犬さながらに蹲っている。黒味を帯びた石造りの壁が、まだ薄い朝の光のもと張り詰めた硬質さを醸し出していた。

手続きはごく簡単なものだった。万に関する詳細な情報は事前に届けられているのだろう。建物に入ってすぐの所にある詰所で名前を告げると、何やら分厚い書物を渡され、一人の案内役をあてがわれた。書物は近衛兵の心得を記したものらしかった。まだ年若い案内役について歩き、装束のための採寸や建物の内にある部署の説明など、大方の雑事を済ませる。一つの部屋で書類に半ば埋もれるようにして筆を走らせている帆群ほむぐらの姿もあつたが、万に気付いた気配はなかった。

近衛の練兵場は建物の裏手にあるらしく、交替で惣領家の護衛につく以外はそこで鍛練を行う。そう説明した案内役は、声を潜めて続けた。

「近衛は名誉の職で憧れる者も多いんですが、精神的にも体力的にも厳しい任務なんですよ。昼夜を問わず長時間の単調な警護に当たって、尚且つ武術の腕も鍛えなければならぬ。戦争があるわけじゃないし、それ程人数を揃えてはいませんか。入隊してもついでいくことが出来ず脱落する者も少なからずいます。名前につられて

入ったはいいが、普通の兵卒の方が結局は良かった、なんて言い出す者もいますからね」

適当に相槌を打って万は苦笑をかみ殺す。案内役の言は尤もなことではあるが、新たに近衛に加わる者に言うことでもあるまい。あるいは自分と同じ世代の相手に気が緩んだのかもしれない。

「椎良様しゅうりょうを御覧になったことはありますか？」

万の問いに相手は僅かに得意そうな顔を見せた。

「ええ。実はこの建物は三階の端の窓から惣領家の庭園が見えるんですよ。運が良ければ散策をされている椎良様を見ることが出来るんです。私も何度かお見かけしましたが、美しいお方です」

「それは是非お会いしたいものです」

「貴方は護衛の任で傍近く仕えることになるんですから、すぐにかないますよ。私なんか事務方なので間近に拝見することは出来ませんからねえ」

「それもそうですね」

他愛無く言葉を交わし、最後に案内役は練兵場の端に建てられた兵舎へと万を連れて行った。

「じゃあ、私はこれで。ああ、そうだ。装束が出来るまでは仮のものを兵舎の倉庫役から借りて使ってください。武器やら防具やらはそのまま使うことになるので、なるべく質のいいのを確保した方がいいですよ。今日の午後から貴方は正式に近衛隊の一員として任務を負うことになりますからそれまでに準備をしておいてください」

「わかりました」

案内役を見送り、万はあてがわれた一部屋へと向かった。四人共有の相部屋であるそこはさほど広くなかったが、それまでいた訓練場の部屋よりははるかに居心地が良かった。近衛兵の心得をばらばらと捲り、使われている気配のない寝台に軽い荷物を放った。そのうちに何となしに辟易として書物も寝台に放り投げ、万は倉庫役のもとへと向かった。

倉庫役から受け取った近衛の装束は赤を基調とされていた。鎧一式

は古びていたが丈夫である。それらを身につけ、黒い外套を纏う。念のため支給された剣の点検を行い、十分に砥がれていることを確認しているうちに時間は過ぎて行った。

「よお、お前が新入りか？」

背後から声がかけられたのは、万が剣の柄の握り具合を確かめている時だった。振り返ると、遅しい体つきの男が戸口に寄りかかるようにして立っている。万よりは年嵩に見えたが、それでもまだ三十の前半と言ったところだろう。赤と黒の鮮烈な色彩の対比に一瞬目を奪われ、己も同様の姿をしているのだと気付いて内心に苦笑した。

「はい。万といます」

「おいおい、敬語はよしてくれ。むず痒くなっちまう。俺は同室の柳だ」

差し出された手を万は握る。力強く腕を振って男は快活に続けた。「他の二人も紹介したいところだが、今日は屋敷詰めだから戻らん二人ともお前が来るのを楽しみにしていたぜ。この時期に新入りとは珍しいからな」

「そうか」

「今日の午後からだろう？ とりあえず飯でも食いに行こうぜ。夜の警備と昼の警備があるからな、空き時間に食べられるよう食堂は何時行っても大概開いている。ここの食堂は、味はいまいちだが量は多い。腹は十分に膨れるぜ」

頷いて万は柳の後に続いた。柳は多分に面倒見の良い性格であるらしい。身ごなしはさすがに鍛えられた者のそれだったが威圧感を与えなくてもなく、まるで周囲を巻き込むかのような明るい男の気質に万は好感を持った。

「近衛なんてのはな、要は番犬と一緒にだ。いりゃあそれだけで周囲への牽制になる。無論、腕がたたなければ番犬にもならんがな」

柳の言は屈託がない。話を聞けば、柳が近衛隊に入ったのは一年程前、近衛隊の中では新参である。だが、食堂で方々から声をかけ

られる様を見れば、それを感じさせはしなかった。

とかく閉鎖的で威圧的な印象を人に与える近衛隊ではあるが、食堂のあちこちで寛く男達の姿を見れば、普通の兵士と何ら変わらなかつた。万はおかしく思う。十年以上前に先代由洛公ゆらくこうに付き従い初めてこの街を訪れた時、惣領家の屋敷を守る近衛兵の姿はまだ少年だった彼に重苦しい威圧を感じさせるものだった。彼にとっては、惣領家そのものよりも、近衛兵の揺るぎない立ち姿そのものが、梓魏の権威の象徴として映つたのだ。

窓際の空いた席に座り、柳の言葉通り味はともかく、山盛りの食事の口に運びながら万は問う。

「新しい入隊者が惣領家の警備につくのは何時頃からなんだ？」

「そうさなあ。普通は近衛隊に入ってから暫く経ってからだが、どうだろうな。最近は警備の数が増えているからもつと早くなるかもしれないな。なんせ玄土の馬鹿息子がやたらと姫を連れ出すからな。母君も神経質になっていて、もつと警備の人数を増やせとうるさい。ふむ、と唸つた方に柳はにやりと笑つた。

「玄土の息子は椎良様の婿の座を狙っているのさ。だがしょうもない男でな、自分を世界の中心と思つている部類の若造さ。姫に相手にもされていないというのに、しつこく付き纏っている」

「椎良様はどのような方だ？」

柳はにやにやと笑つた。

「何だ？ 興味があるのか？ 雲の上のお方だぞ」

「そういうわけじゃないさ。ただ自分が護衛する相手がどのような人物か知りたいだけだ」

「ふうん。まあ、いい心がけだな。おそらく非常に芯の強い方だと思つぞ。目がお見えにならないが、誰にでもお優しい。母君がどうにも過保護であり人の前には姿をお見せにならないが、皆に慕われている」

「立派なお方だな」

言いながら万は口一杯に飯を頬張つた。

「ああ。十年前の暗殺未遂以来どうなることかと思つたが、椎良様が次の惣領におなりになれば梓魏の未来も明るいだらうよ」

柳は満面の笑みで言つと、飯をもう一杯などと呟いて碗を片手に厨房へと向かつて行つた。その背を見るともなしに見ながら、万は飯を無理矢理飲み下した。何となしにそれ以上食べる気にもなれず、熱気に曇る窓硝子を見やつた。その向こうに広がる光景は不透明に霞んでいる。窓を拭おうとして伸ばしかけた手を、万は引つ込めた。結露は柔らかい絹を思わせる。万は、柳が戻るまでそれを見つめ続けていた。

柳の言葉通り、万が屋敷の警護についたのはさほど日数も経たぬ頃だつた。椎良の母親が極度に過保護で神経質なのは事実のようで、屋敷の内にもまで近衛兵が配され、監視の目が届かぬ場所などないのではないかと思わせる有様である。

万がまず配されたのは、庭園の一角だつた。外部からの侵入者を見張るためか、到底人が通らぬと思われる木立の中である。

目論見通り近衛隊に入つたとはいえ、これでは椎良の傍近くで目を光らせることは出来ない。清夜の話では、はじめに働きぶりを見て、問題がなければより身近な警護に移されることになるだろうという見込みだつた。それが何時になるのか。

焦りは禁物だ　己に言い聞かせ、万は日々の任務をこなした。

その後続いた近衛隊の日常は概ね単調なものだつた。見た目の華やかさとは裏腹に、内実は実直さと忍耐が求められる。警護の合間をぬつての鍛練は厳しいものだったが、男達は黙々と己の技を磨いていた。男達が抱くのが精鋭として認められたことに対する自負だけではなく、無私にまで高められた梓魏への忠誠心であることに、万はやがて気付いた。

「私はこの命を出来るならば梓魏のために捧げたい」  
言つたのは万と同室の一人、名のある貴族の三男だという優理ゆりで

ある。年の頃は万と同じくらいか、おそらくは下だろう。

「大袈裟だな。お前、まさか警護している間中そんなことを考えているのではないだろうな」

何につけ真面目な優理に対して呆れたように言ったのは万の正面に座った柳である。傍らではもう一人、普段から物静かな矢束が苦笑している。四人の中では最年長だろう。剣を持たなければ学士で通りそうな知的な男だった。珍しくも同室の四人が食堂に集つての他愛のない会話である。

「知っているか？ 春先に椎良様が中央に赴くという話があるらしい」

矢束の落ち着いた声音が響いた。万はちらりと物静かな男の顔を見やった。柳がへえ、と驚いたような声を上げる。

「それはまた大事だな。何故だ」

「まだ確たることは言えないらしいが、中央は今不穏な情勢のようだな。皇帝のお体が以前からすぐれぬという噂はあつたが、どうやら次の帝位を狙つての権力争いが本格化してきているらしい」

「おいおい、そんな話聞いたこともないぞ」

「そういうことは極力伏せられるからな。だが、最近では病に伏せる皇帝に憚りもなくあからさまな争いに発展しているというから、皇帝の命はもうながくはないと考えられているのだろう」

「何故、それで椎良様が中央に赴くということになるんだ」

「帝位継承の際は往々にして全土を巻き込んでの権力争いに発展する。惣領家が中央に召集されるのもそれと関係がある」

「そういえば父上が言っていました。皇位継承の際には、覇を争う手段として所領の扱いを巡る策謀が行われることが多い、と。惣領を一堂に集めて、彼らが皇位を争うどの陣営に属するかでそれぞれの優位を示そうとすることもあるとか。それに伴い所領の線引きが大きく変えられることもあって、惣領家にとつても力を伸ばすまたとない機会だそうですね」

優理が言えば、柳が洪面で首を振った。



「何だそれは。死にかけている皇帝の横でそんなことをするのか」

「まさに腐肉を漁る獣の如し、見るに堪えぬ有様と言っからな。実際、所領の図が大きく変わるのには皇位継承の時が多い」

万はまじまじと矢束を見る。

「詳しいんだな」

「書を覗けばすぐにわかることだ。隣りの沙羅久しらくが力を伸ばしたのも、今の皇帝の代になる時に中央でうまく立ち回ったせいだと言われている」

空き時間があれば書物を読みふけている男である。歴史にも造詣が深いのだろう。

「それにしても、今の東の所領はどこも不安定ですね。後継ぎの椎良様がおられるとはいえ梓魏はここ一年惣領の座が空いていますし、沙羅久も多加羅たからも代がかわればどうなることか。中央に各惣領家が集えば、また一波瀾あるかもしれませんよ」

「そうなのか？」

思わず問うた方に、優理が苦笑した。

「なんだ、知らないんですか？ 旅をしてきたのなら各所領の事情にも明るいんじゃないですか？」

「まあな。だが東の地を踏んだのは暫くぶりだからなあ」

万は肩を竦めた。実際には少し違う。沙羅久の惣領が心臓を病み、長男に近々位を譲るだろうということは知っていた。己でも意外な程に知らなかったのが多加羅についてである。嘗てより何かと争いの絶えない沙羅久と多加羅 次第に弱体化する多加羅の現在の惣領が傑物であることは知っているが、代がかわるとは初耳だった。

清夜ならば無論、詳しく周囲の所領の事情は知っているのだろう。彼が多加羅について特に何も言わなかったこともまた、さほど興味を抱かなかつた一因かもしれない。かつた。

「今の多加羅惣領がかわつたら、俄然沙羅久に力が傾くだろうという話ですよ」

「多加羅の後継ぎはそれ程に頼りないのか？」

柳が問う。

「さあ……どういふ方かはよく知られてないですよ。沙羅久次期惣領と考えられている若国わかくにはなかなかの人物だと評判ですがね」

柳が片眉を上げる。

「なるほどな。知られる程の人物ではない、という時点で、多加羅よりも沙羅久に分があるようだな」

柳はあっさりと結論付けると、美味そうに肉団子を頬張った。目の前の皿に山と積まれたそれは、彼が厨房から持ち出してきたものである。もっぱら一人で食べ続けて、既に半分以上がなくなっていた。

「梓魏からは椎良様が行かれるとして、沙羅久と多加羅からも惣領家後継ぎが都に向かうかもれませんね。もしそうなれば、まさに未来の力関係を測ることが出来ます」

優理が興奮した口調になる。どうやら見かけによらず物見高い性格らしい。

「そんなことは俺達にや関係ない。椎良様を無事お守り出来たらそれでいいんだ」

「そりゃあそうですね……」

「お前も、そんな下世話なことを言うていくくらいなら団子でも食べ」

「下世話……！ 失礼なことを言わないでください！ こういふことに興味を抱くのも貴族として最低限必要な資質なんです！」

「ああ、悪いねえ。俺はしががない農民の息子だからそんなことはわからない。ほれ、美味しいぞ、この団子」

「あなたは、食い気しいかないんですか!？」

「お、今更気付いたか？ 何せ近衛に入ったのはこの食堂の飯が多いからだからな」

何やら子供のような言い争いになる柳と優理の遣り取りに、万は矢束と顔を見合せて苦笑した。笑みを浮かべながらも万は考える。

椎良が中央に赴くことの意味は大きい。そして、その時が彼女の暗

殺を狙う者にとつても好機である。異常なまでに厳しい惣領家の守りを見れば、暗殺が容易くないことは誰の目にも明らか、そうであれば椎良に暗殺者が差し向けられるのは中央に向かうその道中、あるいは都に着いた後だろう。守りが薄くなる、その時を狙って

「おい、何を考えている？」

はつと方は我に返った。柳がこちらを見つめていた。片頬が団子で膨らんでいるのが愛嬌だが、眼差しは存外に真剣なものだった。何も、と方は笑んで答えた。どこか憮然とした表情で柳が返す。

「嘘つけ。俺の目は節穴じゃねえぜ。お前、顔で笑って腹ん中じゃ何を考えているかわからん部類の人間だな」

ひやりと、万の背筋を冷たいものが這う。鼓動が一つ大きく鳴った。呪縛にも似たその一瞬は、しかし横合いからの優理の言葉に破られた。

「あなたは腹と言えば食欲しかないでしょうね。人間はね、食べるだけじゃなく考える必要もあるんですよ。万殿はあなたとは違うんです」

柳の視線が万から逸れる。何を、と優理に食ってかかるのを万は見つめた。

「そろそろ鍛練に向かった方がいいぞ」

呆れたように言った矢束が立ち上がる。それに続いて席を立った方に、矢束はひそりと言った。

「まあ、柳くらい裏表のない人間も珍しいだろうな。腹に何かしらため込むのが人間って奴だ。あまり気にするな」

「気にしているように見えるか？」

思わず方は問い返す。矢束は肩を竦めると、さてなあ、と呟く。そのまま踵を返しかけて、ふと思いついたように万に問うた。

「私にはわからんが……今、何を考えている？」

咄嗟に答えかねた方に、矢束は先に行くぞと告げるとひらりと手を振って遠ざかる。

(何を考えている……か)

万は周囲には聞こえぬよう小さく溜息をついた。柳は快活で大らかだが、時に鋭い一面を垣間見せる。驚く程正確に人の心情を読んでみせることがあるのだ。柳の言葉を聞いたあの瞬間、考えたのはたった一つ　不審の目を向ける者は消す、ただそのことだけだった。脳裏に浮かんでいたのは、幾通りもの柳の息の根を止める方法である。

万は立ち尽くす。一呼吸にも満たぬ間に、万は柳を幾度となく殺したのだ。無論、想像上のことであれ、それは生々しい感覚となつて血が巡るようにゆっくりと万の全身を浸していた。

(……勘が戻ってきたようだな)

皮肉な内心の呟きは、ざらついた感触を残した。

万が椎良の姿を目にしたのはその翌日だった。空は厚い雲に覆われ、ところどころから薄刃を思わせる光が降り注ぐ。足元から凍りつくように、寒さの厳しい日だった。

屋敷から温かな外套に包まり十数人の人影が歩み出して来たのは、万が敷地内の警護について二刻程が経った昼の頃合いである。散策でもしようと言うのか、大勢が漫ろ歩く気配を、万はまず音として捉えた。次いで女性ばかりゆっくりと歩いて来るのが見えた。

「まあ、寒い日ですこと」

「椎良様、こんな日に外に出るものではございませんわ。お戻りになつてください」

甲高い声に続いて言ったのは初老の侍女だった。その言葉に、万は思わず一行を見つめた。かましい侍女たちに囲まれるようにして、ほっそりとした人影が見えた。まだ少女のような年頃の侍女に手を引かれて歩くその姿に、万の目が惹きつけられる。柔らかな毛皮の外套を纏い、頭から被る純白の薄紗のせいで顔は見えなかった。それでも、万にはそれが椎良であることがわかった。

しきりに寒い寒いと騒ぐ侍女達に、椎良は何かを言ったらしい。

その声は万のもとまで届かなかった。再びゆつくりと、まるでふわふわと漂うように一団が進み出す。屋敷の角を曲がりその姿が見えなくなるまで、万は微動だにしなかった。

彼は自分でも意外な程に、落ち着いた心持で華やかな一団が通り過ぎるのを見つめていた。それは浮世離れた光景のせいであつたかもしれぬ、あるいは己と相手との間の厳然たる距離、あまりに明確に隔てられた空間のせいだつたかもしれぬ。

万は椎良がどこに向かつたかもわかつていた。屋敷の裏手には先代惣領が椎良のために造らせた庭園がある。冬でも葉を落とさぬ木々が生茂り、凜とした大輪の花々が咲き乱れる。そこへ椎良は向かつているのだろう。嘗ては空さえも借景にまるで小さな楽園のようだつたそこは、十年前より高い石壁に囲まれていると聞く。椎良はそれを知っているだろうか。彼女は美しく設えられた庭園の様よりも、そこから見える、遙か彼方まで広がる空の有様を最も愛していたのだ。

ここに来れば自由になれる気がする。そう言つた少女は、惣領家の将来を担う者として皆に傳かれ、期待を一身に背負つていた。たつた一人、負つにはあまりに過酷な重圧だつただろう。

万は木々の間から見える屋敷を眺める。それは記憶にあるよりも古びて見えた。

先代惣領は温厚な人柄と広い視野に基づく公平な施策で知られていた。だが、その眼差しを北東の地に生きる北限の民へと向けることはなかつた。代々の惣領がそうであつたように、彼が北限の民の困窮に救いの手を差し伸べることはなかつたのだ。貧しい土壌に作物は育たず、冷夏ともなれば来る冬は餓死者が後を絶たない。北限の民の惨状を顧みぬ、それが果たして迫害とどう違ふのか、と万は思う。

歴史に封じられた惣領家と北限の民の確執は、いまだ両者を見えぬ鎖で縛めるようである。北限の民はいわば意図的に忘れ去られた一族だつた。惣領家は決して北限の民を救わず、北限の民は決して

惣領家を許さない。

思えば、己もはじめは惣領家への憎しみばかりを胸に抱いてこの地を踏んだのだと、万は思った。まだ彼が十七になつたばかりの頃、季節は眩しいばかりの夏だった。

まだ幼く、しかし暗殺者として育てられた、その意味を理解しているつもりではあつた。だが、既に由洛公の絶対的な信頼を勝ち得ていた清夜は弟に暗殺者としての任を負わすことを嫌つた。その兄に時に反発を感じ、いつか北限の民のために何事かをなすのだと、そのように漠然と考えていた。

守られていたのだ。万は苦く考える。どれ程兄に守られていたか、万がそれを知つたのは故郷を捨てた後だった。

あの日も、兄へ抗いたいがために言いつけに背いて上総家の敷地じょうそうけから出た。風に誘われるようにして木立の中を歩き、気付けば見知らぬ庭園に迷い込んでいた。惣領がたつた一人の娘のために築いた庭であると知つたのは後のことである。すぐに引き返していれば、あるいは人生は全く違うものになっていたのかもしれない。

誰か、いるの？

あの時彼を呼び止めた声は、十年以上を経た今でもなお鮮やかであり、そしてあまりに遠かった。

若衆の副頭ふくがしら四人が鍛練所で顔を合わせたのは、須樹すき達が多加羅に戻った翌日、早朝のことだった。若衆達が来るまではまだ間がある。広い会議室にまず須樹が、次いで設啓せつけい、仁識にしきの順に集い、最後に灰かいが姿をあらわした。

事前に仲間が多加羅に戻った知らせを受けていた仁識だったが、須樹と灰に最後に会ってからはかなりの日数が経っていた。

「それで、結局はどういうことだったんだ？」

第一声に問うたのは仁識だった。椅子に座ることもせず腕を組んでいる。声は静かだったが、内心の何かを抑えつけているのがありありとわかる。須樹が無事戻ったとはいえ、仁識はまだに何も知らされていない。

「俺は知らぬ。その二人に聞いてくれ」

答えた設啓は素気ない。名指しされた二人、須樹と灰は僅かに目を見合わせた。多加羅へと戻ってからはじめて顔を合わせる二人である。

「結論を言えば、全ては耶來やらい内部の抗争に端を発していたようです。耶來で力を持ちだした鬼逆きさかに対抗するため、蛇と呼ばれる男が金目当てに緩衝地帯で騒動を起こしていました」

灰の答えはごくあっさりとしたものだった。その内容は須樹が多加羅へ戻る道すがら設啓に語った内容と違わない。仁識の眉が寄る。表情が欠片も納得していないことをあらわしていた。

「金目当てとは、つまり蛇とやらが依頼を受けていた、ということですか。何者がそのようなことを蛇にさせたのかはわかったのですか？」

「いえ、それはわかりませんでした。ただ、目的は評議会で緩衝地帯の権利を沙羅久さらかへと渡すよう、意見をまとめさせることのようにでした」

「須樹は、その蛇とやらに捕われていた、ということですか？」

仁識は他の者には視線を向けようともしない。敢えて灰にだけ問うているのだろう。かやの外に置かれ、須樹は設啓をちらりと見やうた。無表情だったが、二人の遣り取りに意識を集中していることは見て取れた。

「須樹さんを捕えていたのは媼おなでした。媼の手の者も蛇達を監視していたようです」

灰の説明は簡潔だった。そして巧妙である。それに、須樹は気付かずにはいらなかった。

大筋はこうである。緩衝地帯で騒動を起こした蛇は、目的を阻もうとする媼の力を削ぐために、若衆、ひいては多加羅と媼の対立を引き起こそうとした。多加羅若衆が媼の元を訪れたことでそれは阻止され、追い詰められた蛇は笠盛かぶせから逃亡する。

「そして、逃げた蛇を鬼逆が捕えた、と？ 何故それまで蛇を放っておいたんですか」

「鬼逆も媼の縄張りでは手を出すことが出来なかったんでしょう」  
そういう理由もあったか、と思わず須樹は納得する。鬼逆は媼の不興を買うようなことを決してせぬだろう。それが、今や須樹にもわかっていた。

鬼逆が緩衝地帯との取引を目的としていたことは言わぬ。それは灰との間で暗黙の了解となっていた。緩衝地帯と耶來の交易が実現するとしても、それは公にされることはない。惣領家にとっては緩衝地帯が己の及ばぬ力を有する一事である。緩衝地帯としては公にしてはならぬ、というのが真実だろう。故に評議会での鬼逆の証言も秘される。

その証言まさに今日、緊急に開かれる評議会で行われる筈だ。既に終わっているかもしれぬ、と須樹はちらりと思った。鬼逆がどのような顔で評議会の面々に対するのか想像もつかなかったが、あの男ならばしくじりはしないだろう。

うねりは静まり、全てが終わる。しかし不審の念をあらわにする



仁識と、どこか難しい表情の設啓を見れば、二人が何か勘付いているのではないかと須樹は思わずにはいられない。片や涼しい顔の灰は淡々と言葉を紡いだ。

「最終的には媪も若衆の潔白を信じたようです。評議会で蛇の思惑通りの意見がまとめられることはないでしょう」

「黒幕は不明、肝心の蛇は耶來に捕えられ、緩衝地帯に変化は起こらない……つまり、何も起こらなかったのと同じ、とそういうわけですか」

仁識の声音はどこか皮肉気だった。言葉をそのまま信じてはいないだろう。だが、納得出来るだけの話だとは認めたのかもしれない。「はい。惣領と透軌様とつぎには俺から報告をしておきます」

「いえ、報告は私がします」  
え、と思わず須樹は声を出す。それに目をやることもせず、仁識は言った。

「透軌様は今後、全ての報告と連絡を私がするよう仰せです」  
ふと落ちた沈黙は軽くもあり、重くもあつた。戸惑い、須樹は灰を見やる。これまで若衆頭への報告は全て灰が行っていた筈である。灰の表情から内心の思いは読めない。答えもまた同様だった。

「わかりました」  
仁識は何事かを問いたそうな気配を見せたが、それを振り切るように、さて、と言った。そろそろ若衆達が鍛練所に集まり出す刻限である。

「皆にも副頭の無事の帰還を告げねばなりません。若衆にはどう伝えたらいいですか」

灰は僅かに首を傾げた。この問いは意外だったらしい。その視線が窓へと流れ、無人の広場を見詰める。懐かしむような色がその表情を掠める。あたかも戻ることの出来ぬ過去を見るような、一瞬のそれに須樹は気付く。仁識も気付いたのか、訝しげな顔を灰に向けていた。

「もう何も案ずることはない、と」

静かに灰が言った。

鍛練はいつにも増して熱心に行われた。久々に四人の副頭が集ったことが、若衆達に活気を与えていた。

「一人で皆を纏めるのは大変だっただろう」

須樹は若衆達の鍛練を見守る仁識の横に立つと言った。仁識はちらりと須樹を見やり、小さく肩を竦めた。

「副頭が戻って来た時に、副頭の恥となるような姿を見せぬよう鍛練に集中しろと言っただけだ。つまりは、お前達の人徳によるものだな」

須樹は苦笑する。如何にも仁識らしい物言いだった。実際にはそう容易いことではあるまい。三範を与る副頭と若者達の繋がりも強く、それだけ副頭が欠ける影響は大きい。若衆が混乱を来すことなく、まとまりを失わなかったのは偏に仁識の手腕によるものだった。二人は広場へと目をやる。錬徒れんとと何やら話をする灰の姿が見えた。しきりに話しかける錬徒に、灰が幾度か頷くのが見えた。合間に仄かな笑みも見える。仁識は小さく溜息をついた。珍しい。須樹は思わず仁識を見た。

「相変わらず食えないな」

何を指しているのか　おそらくは何もかも、だろう。この状況と、それを作り出した人物に対して。

「心配をかけてすまなかった」

漸く須樹は言った。本来ならば一番はじめに言うべきことだった。例え表情には出さずとも、仁識は須樹の身を案じていただろう。仁識の答えは素気ない程の響きだった。無論、それに欺かれはしない程度に須樹は仁識を知っている。

「無事ならそれでいい。これで治ちや都も少しはおとなしくなるだろう。お前がいなくてはあいつがうるさくてかなわぬ」

「ああ。あいつにも心配をかけてしまった」

治都とは多加羅へと戻った昨日のうちに再会を果たしていた。どうやら治都は、須樹の両親のもとに毎日通っていたらしい。両親の不安を少しでも和らげたかったのだろう、彼の気遣いに、須樹は言いたくない感謝を覚えていた。涙と開けっ広げな笑顔、如何にも治都らしい再会を思い出し、須樹は小さく笑んだ。

だが、その笑みもすぐに曇る。仁識の横顔に視線を据えて問うた。「仁識、俺達がいけない間に何があった？」

「何、とは？」

「さつき透軌様への報告は全て仁識が行うと言っていただろう。灰が不在の間はいいとして、何故、これまでのように灰が報告をしない。仮にも灰は惣領家の一員だ。灰を差し置いて仁識が報告をするのは不自然だろう。まるで透軌様が灰を遠ざけようとしているような印象を周囲に与えることになるぞ」

「やはりお前は馬鹿ではないな」

返って来たのはどこか皮肉な笑みであり、苦い声だった。

「私こそ問いたい。緩衝地帯では真実何があった」

「灰の言葉を信じていないのか？」

「確かに辻褄が合う、よく出来た話だ。だが、私が容易く言葉のままに信じると思っのか？ お前は何を知っている。まだ言っていないことがあるんじゃないのか？」

「それは俺も是非知りたい」

横合いから割り込んできた声に、二人は振り返った。設啓が何気ない様子で近付いて来る。一体何時から聞いていたのだろう、と須樹は思った。仁識はあからさまに顔を顰めると、設啓を睨みつけた。

「盗み聞きとは恐れ入る。最早本性を隠す気もないようだな」

須樹は訝しく二人を見やった。仁識が何を言わんとしているのかわからない。だが薄く笑んだ設啓は、正確に込められた意味を察しているらしい。仁識には答えず、須樹に視線を向けた。

「須樹、緩衝地帯で起こったことは先程の灰の話で全てではないだろう」

「何を言っている。あれで全てだ」

「信じると思うか？ 俺が笠盛で見ていた限りでは、真実はあんなに単純ではなさそうだったんだがな。しかも灰の言葉には、多くの場合裏があるようだ。お前を捜すために、緩衝地帯での調査を言い出したのだからそうだろう」

事実であるだけに、須樹は咄嗟に答えかねる。その様子に設啓は目を細めた。

「例え知っていたとしても、お前は言わないだろうな」

揶揄する響きだった。設啓が仁識をちらりと見る。

「俺の忠告通り、透軌様には真実を御報告申し上げたのか？」

「お知らせすべきと思っただことは全て報告した。私が何を言っただか気になるならば、直接透軌様にお聞きすることだな。それとも絡玄様にお聞きするか？」

須樹は知らず息を詰めた。剣の立ち合いにも似た、張り詰めた遣り取りだった。設啓が小さく鼻を鳴らした。

「それにしても、何故先程、透軌様への報告の件を灰に伝えた？」

あのように言えば、灰が真実を話す筈がないとわかっていただろう。あるいはそれが狙いか？」

「いつになく饒舌なことだな。どうとつてもらっても構わぬが。それ程に気になるならば若様に直接聞けばいいだろう」

「俺に真実を話すとは思えんのでね。どうやら俺は灰に信頼されていないらしい」

設啓が放り出すように言った。自嘲と皮肉が入り混じった笑みを浮かべ、踵を返す。その背に、仁識が言った。

「私も忠告した筈だ。若様を甘く見るな、とな。傍近くで若様を見ていながら真実がどこにあるかわからぬならば、それはお前自身の問題でもある」

設啓が険しい視線を仁識に向けた。一体何が二人の間にあるのか。須樹にはわからない。決して打ち解けた間柄ではなかったが、このように険のある遣り取りをする仲でもなかった筈だ。

設啓は束の間あらわとなつた感情を隠すように、広場に目をやった。

「確かに俺は見誤っていたようだな。だが、俺からも一つ言っておく。灰を信じすぎない方がいい。信を置くには危険な相手だ」

「設啓、いい加減にしろ」

思わず須樹は言う。設啓はなおも広場を見やつたままだ。視線の先には灰の姿があつた。

錬徒に頼まれたのか、木剣での立ち合いが始まっていた。矢継ぎ早に打ちこまれる木剣をかわし、灰が滑らかに動く。錬徒の動きは鍛えられたものだったが、灰に比べれば重く、鈍ささえ感じさせた。勝負は一瞬でついた。木剣を一閃した灰が、相手の得物を弾き飛ばす。鋭い音が響き、周囲で見守っていた若衆から歓声が上がった。

「まさに疾剣はやしけんだな」

設啓が呟いた。感情を込めぬ声音にも関わらず　あるいはそうであるが故に、言葉は硬質な余韻を残した。

「それは違う」

須樹は答え、うろたえた。一拍の遅れ、意図せずに生じたその間隙が、己の答えが心からのものではないことを、彼自身に知らせた。設啓も気付いたか、ちらりと須樹を見た。

「お前もわかつているだろう。切れすぎる剣は時に害にしかならぬ」

「切れもしない剣を飾り立てて己の威とする方がいいというわけか」  
仁識の言葉は冷笑を含んでいた。

「少なくとも己のみならず周囲にまで禍をもたらす疾剣よりはましだ。威を以て他を制するのはむしろ無用の争いをなくすうえでも望ましい」

「実利を漁る卸屋に相応しい考え方だが、今の多加羅には玉で飾り立てただけの剣など、さして役にも立たぬぞ。卸屋ならばそこらを見極めるべきだな」

設啓が目を細めた。

「それが、答えか。お前こそ時宜を見極める目があるかと思っただが、買い被っていたようだ。だが、何時までそのような態度を取ることができるだろうな」

「私は若衆として必要だと思ったことをしているだけだ。第一義に卸屋であるお前とは違う」

設啓は表情も変えず、正面から仁識に対した。

「ああ、そうだろう。だが、お前は何時までも若衆でいられるわけではない。せいぜい透軌様の御不興を買わぬよう、気をつけることだな」

言つと踵を返す。遠ざかる設啓を見やり、二人は暫し無言だった。

「設啓と何があつた？」

「お前が気にすることではない」

仁識の声音から、須樹はそれ以上問うても無駄だとわかった。

以前とは何かが少しずつ違う。その些細な一つ一つが繋がりが合い、重なり合つて、違和感が次第に大きくなっていく。一時的なものではあるまい。何かが、決定的に変わったのだ。

(だが、それは何だ……?)

例えば、仁識の立ち位置　ほんの一月程前、相對した時に感じた距離はこのようなものだっただろうか。そして、灰を疾剣と評する設啓の言葉だ。以前の彼ならば決してそのようなことは言わなかつただろう。何よりも、その言葉を即座に否定出来ぬ己自身もまた以前とは違う。

疾剣　別名を無頼剣とも言う。並外れた使い手をあらわすその言葉は、必ずしも肯定的な意味ばかりを含んでいるわけではない。凶に属する使い手をも指すのだ。転じて若衆の劍舞（カウボウ）では、和を乱し、時にその鋭さにおいて自他を危険に晒す舞い手を意味する。どれ程に華麗であろうとも、劍舞においては禁忌とされる存在だった。

灰が疾剣だと言うのか

再び灰を見やる。次の若衆と立ち合いをしている姿は、まるで磁力があるかのように人目を引きつける。

「疾剣……か」

呟くと、仁識がちらりと須樹を見たようだった。

剣舞の群舞の中では灰は他よりも抜きん出ているようには見えな  
い。あくまでも基本に忠実に動く。灰が真に人の目を引きつけるの  
は、むしろ立ち合いや試合の時だった。独特の華があるのだ。時に  
相手が怖気づく程のその雰囲気が、果たして武の気迫によるものだ  
けなのか。否、と須樹は即座に思う。剣を手に、灰と相對したこと  
が何度もある須樹にはわかっている。

灰が醸し出す華やかさは烈しさでもある。鍛練では得ることの出  
来ぬ何か。天与のものなのか、誰もが持ち得るものではないだろ  
うことは容易に察しがついた。極力無駄を排した灰の動きは、あま  
りに静かであるが故に、常には感じさせぬ何ものかを時にあらわに  
する。言うなれば、自律と抑制の底にある峻烈。普段自己の主張  
を殆どせぬ灰だからこそ、尚更に人に与える印象が強い。副頭とし  
て一目置かれる理由は、そこにもあるのだろう。

あるいは、剣にあらわれる烈しさは、灰の人となりそのものに端  
を発するものであるのか。おそらくはそうなのだろう、と須樹は考  
える。どれ程灰が己を抑え込もうと、人は無意識であれそれに気付  
く。決して目に捉えることの出来ない空気として。灰を包み込む  
牙蒙がもっの咆哮として。それが灰を周囲から浮き立たせ、溶け込むこと  
をさせない。

疾剣 「異」、という存在をそう言うならば、灰は紛うことな  
き疾剣だ。

「設啓が言ったことは気にするな。私達は若様を設啓よりは知って  
いる筈だろう」

須樹の考えを読んだように、仁識が言った。だが、知らないこと  
もまた多いのだ、と須樹は思う。同じ思いを、仁識の眼差しにも見  
る。

「むしろ真に疾剣ならば、若様ももう少し楽かもしれないな」

ぼつりと仁識が呟いた。その意味を須樹は何故か問うことが出来

なかった。

灰がまたも一人の木剣を弾き飛ばす。歓声に、須樹の物思いは呑み込まれた。

灰が須樹を呼びとめたのは、彼が鍛練所の門を出た時だった。待っていたのだらう、軽く壁に凭れた姿勢から須樹に向き直る。連動して外套の裾が揺れた。少し日が長くなったとはいえ、いまだ冬である。鍛練は他の季節よりも短い。若衆は既に大方帰路についている。仁識も報告のため既に惣領家の屋敷に向かっていた。

「話を、聞いていただけですか？」

「ああ」

殆ど反射的に須樹は答えていた。そして思わず苦笑する。灰がそれに瞬く。灰らしく直截、と言えいいのか、話すと決めたからには躊躇いは微塵も感じさせない。

「約束だったな。全てが終わった時に話しをする、と」

「はい。それ程時間はかかりませんが……ついて来てください」

歩き出した灰の後に須樹は続いた。この場では話せぬ、ということなのだらう。須樹が滅多に行くことのない、貴族の屋敷が建ち並び、境界を通り抜け、さらに向かった先は山へと続いていた。道幅が次第に狭まり、木々の覆いの下に入り込んだ時には大人二人が辛うじて並び歩くことが出来る細さにまでなっていた。

そのまま星見の塔に向かうのかと思っていた須樹だったが、灰が不意に道を折れた。茂みに隠れて見えなかったが、山肌を這う曲がりくねった道がある。獣道だらうか。灰は通い慣れているようだった。巨木の傍らを通り過ぎる際、節にそっと手を触れた様子は半ば習慣化した動きに見えた。木々の間を漂う空気は清澄でありながら、水の中を思わせて見通しが効かない。視野を覆い、体に纏わりつく。斜面を四半刻程進んだ時だった。須樹は灰の後に続いて茂みを押し分け、息を呑んだ。唐突に視界が開け、空が見えた。青い、と思



った。山肌の一隅、小さく開けた場所に須樹は立っていた。視線を下に転ずると、多加羅の街が広がっていた。左手の斜め下には星見の塔の屋根が木々の合間から見えた。須樹は立ち尽くし、眼前に広がる空間を眺めた。

「いい眺めだな」

凡庸な言葉だった。だが、他に言い様が見つからない。多加羅の街をこれ程の高さから見たことは嘗てなかった。街の全てが一望出来る。己が生まれ育った街でありながら、見たこともない場所に感じられた。

「よくここには来るのか？」

灰は頷いた。

「一人で考えたい時に」

抑揚もなく刻むような言葉が、歌を口ずさむように響いた。

それならばここは灰の領域だ、と須樹は思う。敢えてこの場所を選んだ、そこに幾許かの意味を見出すのは考え過ぎだろうか。長くはかからないと言った灰だったが、何を話すか考えあぐねているようだった。小さく息をつくと言った。

「俺は、多加羅を出ようと思っています」

須樹の反応は一拍遅れた。灰が須樹を振り返った。

「今すぐ、というわけではありません。ですがなるべく早く、やるべきことをやってから」

まるで己に言い聞かせるように、言葉の重みを己の心に刻みつけるように、繰り返す。

「多加羅を出ます」

「……何故？」

乾いた声音であることが己でもわかった。灰の背後、遠く西南の空に透き通るような雲が在った。淵が暗い。淡い緑と紫の中間、その色彩が目についた。曖昧なそれに比べ、灰の瞳は深い藍だ。天に近い。あるいは遠さを感じさせる。

「はじめから、話します。俺が多加羅に来た理由から」

灰は言った。

「高占たかうらの神を知っていますか？」

灰かいが問うた。些か唐突なその問いに、須樹すぎは頷く。

「ああ。古に信じられていた自然神だろう？」

「高占の神は実在したそうです。おそらく、長い年月の間に自然の内に籠った膨大な力の塊だったのでしょ？」

言いながら灰は薙ぐように山へと手を伸べた。

「この山に嘗て宿った存在です。実際に不可思議な現象を引き起こす程に強力な力だったのだと思います。又ま駆さくのように、意思すら感じさせる存在だったのかもしれない」

高占の神は今では御伽噺の部類である。それも人の口にのぼることは滅多にない。白沙はく那な帝国の歴史において、自然神の崇拜は異端の証であり、忌まれるべき暗愚の象徴とされた。

「高占の神とされた力は、今はもう在りません。正確に言えば、神として存在はしていません。嘗て消えつつあった神の力を人が留めんと、数多の命を生贄として捧げた、その結果、最早神とは呼べぬ存在として、この山に力は眠っています」

「今も、その力がここに存在しているのか？」

話の先が見えないまま、須樹は問う。声に懷疑が籠るのをさすがに止めることが出来ない。異端の神の実在　それが事実であれば、帝国の支配の礎である信仰と権威を失墜させるに十分な一事である。「はい。あまりに多くの命を食らった力は、やがてそれ自体が命を欲する禍々しい存在へと変貌していきました。今から二百年程前の時代には、最早神ですらなく、命を貪り食う闇の塊として人々に恐れられるようになっていたようです。その闇を抑え、言霊の封印おんたまのふういんによって支配下に置いたのが、今の多加羅惣領家の始祖、一人の条斎ちようさい士しだったと言います」

灰が山を見上げた。緩やかな風に髪が煽られる。柔らかに揺れ、

遠くを見るらしい眼差しを遮った。声は淡々と続いた。

「白沙那帝国は異端の神の存在を許しはしません、この地に眠る力は帝国にとつても脅威であり、禁忌だったのでしよう。唯一闇を抑える術を知る一族を潰すことが出来ず、惣領家として残したのだそうです。帝国中枢部にとつては決して明らかに出来ぬことでしょうね。多加羅惣領家は代々惣領だけに闇を抑える言霊を引き継ぎ、今に至るまで闇を封じ続けてきました」

須樹は瞠目する。多加羅で生まれ育ち当たり前のように築いて来た日々、その傍らに唐突に底知れぬ亀裂が口を開けたかのようである。音もなく日常を侵食する、その予感がある。須樹は山の輪郭を目でなぞった。闇が眠ると言われる山はまどろむような静寂に沈んでいる。俄かには信じ難い話である。しかし即座に偽りだと思えないのは、それを語るのが灰だからか。怪魅師けみしである彼には、須樹には感じることもさえ出来ない何かが見えているのかもしれない。今でさえ。

「……封印されていると言うならば、問題はないのだろうか？」

問いながらも須樹は答えが肯定ではないだろうことを察していた。まるで御伽噺のような。だが、これが灰にとつての現実、おそらくは彼が多加羅へと来ることになった理由に関わることだ。果たして、灰はゆるりと首を振った。僅かに眼差しを伏せる。

「言霊の封印は絶対ではありません。惣領は魂に言霊を刻んでいるのだと聞きましたが、常ならぬ力を有する者でなければ言霊を使いこなすことは容易ではありません。長年の間に言霊の力は弱まり、封印の網の隙間から闇が零れ落ちることもあります。一度目覚めれば、闇は貪欲に命を食らい、取り込もうとします」

実際、と灰の声音は暗かった。

「俺が多加羅に来た三年前にも、一度封印は破れかけました。その時零れ落ちた闇に、数人の街衆が命を奪われています。それに、言霊を魂に抱くことはあまりに負担が大きい。闇が言霊の封印を破るのは時間の問題でしょう」

「……お前が多加羅に来た理由は、その闇と関係があるのか？」

「はい。俺が多加羅へと来たのは怪魅の力で闇を滅するためです」

灰が須樹を見る。だが、その瞳は水のように、捉えどころがなかった。

「惣領が闇の一部を解放し、怪魅の力で滅する。それを繰り返せば、言霊の封印で抑え込める程に闇の力を削ぐことが出来ます。ですが、封印を再度施すのは大変なことです。惣領が体調を崩しておられるのは無理を繰り返したせいです」

つまり、幾度か実際に闇を滅したことがある、ということだ。須樹はまじまじと灰を見詰めた。毎日のように鍛練所で顔を合わせていながら、灰がしていることに気付きすらしなかった。

「だが、怪魅師は帝国では異端だ。怪魅の力を使うのは危険じゃないのか？」

「明らかとなればただでは済まないでしょうね。ですが、このまま放っておけば、闇そのものの危険はもちろんです。惣領家の存続も危うくなります。帝国中枢部にとって多加羅は滅ぼしたくとも出来ぬ厄介な存在です。もしも闇を封じる力がなくなってきたらわかれば、多加羅の存在意義はなくなります。そうなれば、中央がどのような強硬な手段に出るか分かりません。多加羅そのものが潰されてしまいかもしれません」

だが、異端である怪魅師が闇を滅するという、それが、明らかとなれば死罪は確実であろう。例え闇を抑えるために必要なのだとしても、即座に納得出来るものではなかった。

「その……闇を滅するのは難しいことなのか？」

「方法さえ分かれば滅することは左程難しくはありません。人が多い場所へ逃げ込まれるのは厄介ですが」

「弦殿げんもこのことを？」

「知っています。彼は、俺が闇を滅する補佐をしていています」

おそらくは監視も兼ねているのだらう。言葉にされぬそれを、須樹は察した。

「言霊の封印が弱まるにつれ、代々の多加羅惣領は様々な方法を闇を封じようと試みてきたようです。時には新たな生贄を与え、時には邪法に手を染める者もいたようです。先代の惣領は、惣領家に怪魅の力を有する者を誕生させようとさえしました。俺の祖母は東方の怪魅師だったと聞いています。……母は、怪魅師ではありませんでしたが……」

言葉が途切れる。僅かであるが故になお重さを感じさせる沈黙だった。

「闇は膨大です。全てを滅することは到底不可能ですが、それでもこの先十分に言霊で抑えることがかなう程に減らすことは出来ず。そうなれば、俺の役目も終わります」

「役目が終われば、多加羅を出る、か？」

低く須樹は問うた。灰はすぐには答えなかった。言葉を探すように俯く。あるいは逆か。突拍子もない話を淡々と続けた表情とは違う。己のことになると、灰はあまりに言葉少なになる。自身のことには触れられたくないのだ。それが見えぬ壁となり、灰と周囲を隔てる。だが、須樹は引き下がることが出来なかった。

「多加羅に留まっていたのはつまり、闇を滅するという役目のためだけだったのか？ それがなくなれば、灰にとって多加羅という場所は何の意味もなくなってしまう、その程度のものなのか？」

「そうではありません」

「じゃあ何故多加羅を出る？ 多加羅を出て、一体何処に行こうと言うんだ」

「多加羅でなければ何処でも……今はそれしか考えられません」

「何故だ」

躊躇いを押し殺して、須樹は続けた。

「多加羅を憎んでいるのか？ だから……去ろうとしているのか？」

素早く灰が眼差しを上げた。正面から向き合う。目の高さは同じだった。三年前、灰と初めて会った時には頭一つ分は小さかった、と脈絡もなく須樹は思った。

「三年前、火つけの事件があった時、地下道に迷い込んだことがあっただろう？ その時灰が丈隼たかはやに話していたことを、俺も聞いていたんだ。お前の祖母が、東方から無理矢理捕われて来たことも、先代惣領の死後に毒薬を飲まされて幼い娘とともに多加羅を追放されたことも……」

波一つたため水面のような、底の見えない灰の瞳を須樹は見詰める。多加羅惣領家は、灰にとって祖母や母親の仇のような存在ではないのか。それは、三年前、地下道の闇の中でも思ったことだった。その思いはあの時から小さな蟠りとなって、胸の奥に落ちている。何故、多加羅を厭わずにいられるのか。あるいは心の底では憎んでいるのだろうか。

灰が眼差しを落とした。

「祖母は多加羅惣領家のせいでは不幸だった。もしかすると母もそうだったのかもしれませんが。惣領家を許せない気持ちがあります。ですが……それに支配されてはいけません……ずっと思っていました。惣領家を憎んでも、過去を変えられるわけではありません。むしろ、自分自身がその感情に縛られるだけだと……」

言葉もない須樹に、不意に灰が笑んだ。突然張り詰めていたものが切れたような、その笑みに須樹が感じたのは遠さばかりだった。

「俺は多加羅惣領家を憎んでいるとは思っていません……思いがたくなかった。でも違ったのだと、鬼逆きさかさんに指摘されてはじめてわかりました。俺はやはりどこかで多加羅を憎んでいて、復讐さえ望んでいるのかもしれない……」

「お前は復讐が出来るような奴じゃない」

咄嗟に須樹は言った。

「事実、三年前の火つけの時も、今回の件でも多加羅を守ったじゃないか。復讐するような奴にそんなことが出来るわけがない。三年間多加羅について、お前が得たのは憎しみだけじゃないだろう？」

灰の眼差しがはじめて揺れた。

「闇を滅していることだってそうだ。それこそ、身を呈して多加羅

を守るうとしている」

「確かに、多加羅は俺にとって大切な場所になっています。ですが、俺は、ただ多加羅が潰されるのを阻止するただけならば、闇を滅することに怪魅の力を使おうとは思いませんでした」

撥ねつける声音だった。灰の手が胸元に伸びる。まるで何かを掴むように、握り締められた。

「俺は、単に見せつけたかったのかもしれませんが。代々の惣領が命を削りながらも抑えることが出来ない闇を、俺ならば滅することが出来る……支配することが出来る、と……。今回の一件にしても、緩衝地帯の権利が沙羅久（しらく）に渡ったところで、俺は気にもならない。むしろ、多加羅の力が削がれることを望む自分さえいるんです。大切だと思う反面で、多加羅がこのまま何事もなく続いていくことに対する怒りを感じる」

自身の内を抉り出そうとするかのような言葉だった。遠く、ざわざわと木々の揺れる音がする。踏み締める地面までもが不安定に揺れるような心地がする。引きずられているのは、心だ。

「俺には力があるんです」

ぼつりと灰が言った。

「この力は容易く俺の感情に引きずられる。ただ思うだけで、人を殺すことも出来る。そういう力なんです」

咄嗟に須樹は答えることが出来なかった。なおも遠さを感じさせる声音で灰が続けた。

「こんな気持ちを抱えたままで多加羅にいれば、何時か、俺は多加羅に災いをもたらして、無関係の人まで傷つけてしまつかもしれない」

「馬鹿なことを言うな。お前はそんなことが出来る人間じゃないだろう」

答えはない。須樹はもどかしさを感じた。須樹が灰を遠く感じるように、灰もまた須樹を遠く感じているのだろうか。須樹は語調を強めた。



「力があつたとしても、使うのはお前自身だろう。お前は、闇雲に力をふるって人を傷つけるようなことが出来る奴じゃない」

「そんなこと……何故言い切れるんですか。俺は、幾度か感情のまを力をふるったことがある。怒りにかられて、ただ、壊し、傷つけるためだけに。この先、同じことをしないと云えない。……信じることなど出来ない」

不意に須樹は灰に近付くと、左腕を掴んだ。唐突なそれに、灰が目を見張る。反射的に腕を振り払おうとする動きは、明らかに拒絶をあらわしていた。踏み込むことへの拒絶、言葉を尽くして理解しよとすることへの拒絶。須樹はそれを感じ取りながらも、なおも掴む手に力を込めた。

「理由ならここにある」

「何を……」

「鬼逆が言っていた。蛇の刺青は赤い、と。蛇は宇麗うれいに直接、取引を持ちかけたそうだが、その時宇麗が見た蛇の刺青は赤くはなかったらしい」

間近に言つと、灰の顔が強張った。

「この腕、傷がまだ残っているんじゃないのか？ 三年前の火つけの騒ぎの折に、沙羅久の聡達そうたつにつけられた傷だ」

衣の下、左の腕の肘から手首まで巻かれた白い布のことを、須樹は知っていた。時に激しい組み手を行う鍛練において、腕や手を庇うために布で覆うことは左程珍しくはない。だが、灰の場合は違うのではないか。常に腕をさらさぬ理由、それを須樹は薄々察していた。何より、須樹は三年前、灰が仁識にしきを庇って傷を負った、その現場にいたのだ。

「腕を見せてくれ」

漸く腕をはなした須樹の前に、灰は暫し無言だった。やがて、小さく溜息をつくと慣れた手つきで左腕に巻かれた布を解く。腕があらわになるにつれ、須樹は思わず眉を顰めていた。手首から肘にかけて、青黒い筋が幾重にも絡み合っている。のたうつ炎の影をその

まま腕に刻み込んだかのようなだった。遠目から見れば、絡み合う蛇を模した刺青と見えるのも無理はない。

「蛇を装って宇麗に取引を申し出たのは、灰、お前なんだろう？」  
諦めたように灰が頷いた。

「何故、蛇のふりをしてまで宇麗に取引を持ちかける必要があった？」

「あの場で失敗は出来なかった、それだけのことです。蛇に託すには時間も、余裕もなかった」

「宇麗達に蛇の言葉を信じるか、若衆を信じるか選ばせるため、だったな。そのために、蛇を畏に嵌め、宇麗達を欺き、設啓達若衆を利用した。自分自身がやったことの是非を問いたいわけではないとそう言っていたが、お前自身はどう思っているんだ？」

灰は答えなかった。だが、言葉にせぬ思いは容易に察しがついた。灰は決して己の行為を是認していない。周囲を欺き、仲間さえも騙した、その事実が厳然としてあるのだ。媼おつなと若衆の間に築かれた信頼さえ、偽りの上に在る。

「汚い遣り方だった。だが、全て俺を救い出すためには必要だった。そうなんだろう？ はじまりがどのようなものであるうとも、俺達と媼や宇麗の間に築かれた信頼はまやかしではなかった」

須樹は静かに言った。灰の反応を見る。晒された腕の傷跡は、暗く禍々しい。その傷を負わせた男を彷彿とさせた。

「人を助けるために、敢えて汚い役割を負う……それが平気なわけがない。辛く感じないわけがないだろう。そうして、自分を犠牲にしてまで他人を救おうとする人間が、感情のままに人を傷つけることなど出来はしない」

灰が瞬いた。驚きと戸惑いを束の間無防備に晒し、そして僅かに俯いた。小さく笑む。苦く、そして途方に暮れたような寄る辺なさがあった。

「俺はそこまで自分を信じることは出来ません」

「誰もが自分自身を信じているわけじゃないさ。ただ、お前のよう

に突き詰めて考えないだけだ。灰、あまり自分を追い詰めるな」

灰は頷かなかった。須樹はもどかしさを感じる。須樹の言葉は水面を吹き過ぎる風に過ぎない。小波を起こし、波紋を広げはしても、その底に届くことはない。不意に鬼逆の言葉を思い出していた。鬼逆は、灰が力を、そして自分自身を憎んでいるのだと言っていた。

灰が抱く葛藤は、おそらく須樹にははかることが出来ぬほどに根が深いのだろう。それが何故なのか、須樹にはわからなかった。わからないままに、言葉が零れ出ていた。突き動かされるように、問う。

「お前は、俺を信じる事が出来るか？」

虚を突かれたように、灰が須樹を見詰めた。

「答えてくれ、灰」

幾度か瞬き、答えを返すのを恐れるかのように灰が眼差しを伏せた。睫が繊細な影を作り出す。

「自分自身が信じられないなら、お前を信じている俺を信じればいい」

灰の髪が緩やかに揺れた。頷いたのではない。吹き過ぎた風の気紛れ 風を追うように、灰の視線が流れる。

「お前は、ここにいてもいいんだ」

灰は答えなかった。ただ、街を見詰めていた。そのようにして、何度もこの場所から街を見ていたのかもしれない。遠く、掴めない何かを探すような眼差しで その先に何を求めているのか、須樹にはとうとうわからなかった。

はじめての非番の日、万は街へと繰り出した。近衛隊は集団として内部で自足しているため、生活のために街に出る必要はないが、たまの休みの日、家族や恋人に会う者は多い。むしろそれが一般的な休みの過ごし方と言える。柳や矢束のように、生まれが遠方である場合はまた別だったが、そのような者達には別の楽しみも街にはある。

近衛の装束を解き、外套を纏う。旅からの旅への日々の中で古び、草臥れていたが、着馴れた感触は心地良い。万は近衛隊統括本部を出ると、ぶらぶらと街の中心部に向かった。平民が集住する区域に近づくにつれ人が増える。昼下がりの活気の中に一日も半ばを過ぎた倦怠、露店からは油の匂いが漂う。

万は魚を香ばしく揚げたものを露店で買った。火傷しそうに熱いそれを食べながら、なおも人波を縫って歩き続けた。小さな広場を見つけ、設えられた石の椅子に腰を下ろす。魚の最後の欠片を口に放り込み咀嚼すると、前屈みに頬杖をついた。ぼんやりと通りを眺める。

左程待たずして、一人の男が万の方へと近付いて来た。初老の男である。無精髭が顔の下半分を覆い、衣も草臥れている。万の隣り、彼とは逆向きに座り、疲れた様子で溜息をつく。万は頬杖をやめて背筋を伸ばした。まさかはじめての非番で接触が出来るとは思っていなかった。そしてこの相手が来るのも予想外である。

「調子はどうだ」

密やかに男が言った。外見に比べて声は若い。

「順調だ。その変装はあんたには似合わないな、兄貴」

万は口をなるべく動かさぬように注意しながら返した。清夜は弟の軽口を無視すると言った。

「状況を報告しろ」

「半月程前に近衛隊に入隊した。今は惣領家の警護に当たっている。今のところ、何も無い。あの警備を見れば、暗殺を謀るなど自殺行為だがな。椎良様に近付けるのが何時になるかはわからない」

「他には」

「玄土正章様の息子が椎良様に言い寄っている。椎良様は相手にしていないが、お母上は相手をいたくお気に入りだ。椎良様が中央に赴くことが近衛隊の中でも広まり出している。ついでに中央では皇帝が死にかけているともつぱらの噂だ」

万は言葉を切り、伸びをした。空の青さが目にしみた。

「そつちはどうだ。沙羅久への貢は順調か？」

「失敗した」

「何だつて!？」

思わず声に鋭さが籠る。万は周囲を注意深く見渡した。彼の言葉に気付いた者はいないようだった。ゆつたりと、人が川のように流れる。数度呼吸を繰り返し、問う。

「失敗したとはどういうことだ。評議会で意見がまとまらなかったのか？」

「それ以前の問題だ。邪魔が入り、計画は全て崩れた」

万はまたも驚きのままに声を出しそうになり、寸でのところで堪えた。

「邪魔をしたのは誰だ。由洛公ゆらくこうに敵対する陣営か？」

「違う。計画の本拠としていた場所が襲撃を受け、西の元締めの子孫と蛇達を奪われた。おそらく今日か明日、緊急の評議会が開かれる筈だ。そこで耶來やらいの鬼逆自らが証言を行うらしいことがわかっていゝる。一連の出来事が蛇の仕業であることと若衆の潔白を証言するらしい」

まさに耶來の主気取りだな、と一言、そして続ける。

「公にはされぬだろうが、結果として、評議会は緩衝地帯の権利を沙羅久に渡すという意見を出さぬことになるだろう」

万は呻く。完全な失敗。それも最悪の形である。

「北限の民が蛇の背後にいることも明らかになった、ということか。僅かに清夜は沈黙した。

「いや……おそらくは明らかとなっていないだろう」

「おそらく？ 確証がないのか」

「ああ」

不確かなことこの上ない。それを口にすることも、清夜らしくなかった。

「襲撃つてのはどういうことだ。鬼逆が蛇を奪いに来たということか？」

「鬼逆ではないが……私にもよくはわからぬのだ」

清夜の声が低く濁った。そこに疲労の色を感じ取り、万は言葉を呑み込んだ。

「蛇と西の元締めの子孫を奪ったのはごく少数だ。確認出来ているのは男が二人、一人はまだ若者だ」

「……どこの奴らかわからないのか？」

「おそらく多加羅」

「まさか……多加羅が北限の民の計画に気付いたってのか？」

「万、今は詳しく説明している時間はない。計画が失敗したとはいえ、これで全て終わったわけではない」

「沙羅久は……若国わかくにには失敗を伝えるのか？」

「ああ。隠してもどうしようもないことだからな。既に昨日、部下を若国のもとに向かわせた」

「……振り出しに戻る、か。沙羅久にとっては幸か不幸かわからぬな」

「全て白紙に戻ったということではない。だが、あの若国という人物は食えぬ。我らの思惑に乗ったのも、もとより何か自身で思うところがあつたのかもしれない」

「切れ者と聞くからな」

「ぼやく万に、清夜はひそりと問うた。

「お前は……どうなのだ？ 内心では安堵しているのではないか？ 若国が我々の要求に応えていれば、椎良様はお前にとっては到底手の届かぬ場所へと去ってしまわれるかもしれないのだからな」

万は思わず眉を顰める。瞬間的に胸中に生じたのは怒りであり戸惑いだった。前者は問われた内容に、後者はそれを問う兄に対して「今更だぜ、兄貴。俺はもう十代の若造ではない。もとより俺の手が届くお方ではない」

「……」

「それに……北限の民の策謀のせいであつたとしても、椎良様にとつて梓魏しきではなく沙羅久で生きること……幸せなことかもしれない

しな」

「そうか。……悪いな。いらぬことを聞いた」

怒りは瞬く間に萎み、消えた。戸惑いだけが残される。

「おい、大丈夫か？ 謝るとは兄貴らしくないじゃねえか」

問うて歯噛みする。大丈夫であるわけがなからう。

緩衝地帯の権利を沙羅久のものとする。その見返りに北限の民が沙羅久に求めたのは、梓魏惣領家後継ぎ、椎良に対し婚儀の申し入れを行うことだった。結婚の相手は沙羅久の後継ぎ、若国である。

惣領家同士の婚姻は歴史上でも例の少ないことではあったが、皆無ではない。無論、惣領家が勝手に出来ることではない。皇帝の了承があつてはじめて可能となる。所領の力が増すのを嫌う帝国中枢が、惣領家同士の婚姻を認める場合は限られている。その数少ない機会が、皇位継承、帝国全土をも巻き込んだの権謀術数が弄される時である。新たな皇帝を生み出すための胎動、それに所領もまた翻弄される。それに喰われ潰れるか、あるいはさらに力を蓄え栄えるかは惣領の手腕に負うところが大きい。

万は憂鬱に考え続ける。計画の失敗は、そのまま清夜への責めとなる。普段から折り合いの悪い由洛公は、これ幸いと清夜を攻撃するだろう。何よりも重大なのは、全ての目論見が土台から崩れかねないことだ。否、既に崩れている。

だが、計画を阻んだのが多加羅とは。

「多加羅も捨てたものではない、ということか。今の惣領は傑物だということかな」

何気ない一言だったが、清夜が微かに身じろいだ。

「多加羅惣領が背後にいるかどうかはわからぬ」

「どうということだ？ 蛇達を奪ったのは多加羅なんだろう？」

「蛇達を奪って逃げた若者は異端の力を有していた。おそらくは怪魅師だ。多加羅若衆だと蛇は言っていたが……あのような力を持つ者が多加羅で生きることなどかなうのか」

最後は自分自身に問う調子だった。

「異端だと？ 本当にそいつは多加羅の者なのか？」

「わからぬ。そう思わせていただけかもしれない。そう考えた方がむしろ自然だ。調査しようにも、この状況では下手な動きをすればかえって深みにはまりかねん。人手も足りぬ。何より早急に計画を練り直す必要があるから、あまりそちらに時間を裂くことも出来ぬ」

とにかく、と清夜は僅かに語気を強めた。

「お前はこれまで通り椎良様をお守りしている。また新たな動きがあれば知らせる。次の非番は何時だ」

「十日後だ」

「気をつけるよ」

一つ、言葉を残して清夜はさり気なく立ち上がると去って行った。足取りは草臥れた姿に似つかわしく重い。それとも演技ではないのか、万は克己の人である兄の、疲れた声音を思う。

やがて万は立ち上がり、再び人々の中へと紛れた。



## 97 (後書き)

明けましておめでとございます！今年が皆様にとって良い年でありますように。そして、拙い物語ではありますが、これからも読んでいただければ幸せです！よろしくお願いいたします！

星見の塔に帰り、灰は真直ぐに部屋へ向かった。倒れ込むようにして寝台に横になる。天井を見上げると、息詰まるような感覚があった。左腕を掲げ、傷跡を見る。条斎士の法術に刻まれた傷は、今もなお言霊の残滓を纏っている。冷たく、暗い。それを見るたびに聡達の姿を思い出す。向けられたのは、内部までもを見通そうとするような眼差しだった。

灰は腕で目を覆う。無性に眠りたかった。だが、思考は止めようもなく、先程の須樹との遣り取りに引き戻される。

多加羅を出る　そう伝えた時の表情、そこにあっただのは驚きだけではなかった。おそらくは灰が抱く迷いさえも気付いていたのかもしれない。多加羅を出ると心を決めながら、今もなお凝る思いである。多加羅を出て生きることを望む一方で、それを阻むものがある。この地に留まるのだと、どのような感情を抱こうとも、この地で生きていくのだという、それは己でも掴むことの出来ない不可解な執着だった。

憎しみを抱くことなら容易い。復讐を誓えば、如何様にもそれを果たすこととて出来よう。その暗い衝動を忌避したのは、己の感情すらも惣領家に縛られることを厭うたが故だった。人の生さえも歪める存在への、それが灰の抵抗であり矜持だった。

だが、結局は同じことだ。灰は皮肉に思う。どう足掻こうと、灰は惣領家に縛られている。憎むことを止めようとする己の意志さえ、結局は惣領家に与えられたものでしかない。多加羅への執着さえも滑稽な逆転。

敢えて多加羅を出ると須樹に伝えた、それは思い惑う自身に一つの決着をつけるためでもあった。異端の力のこと、多加羅へと来た理由も、須樹ならば受け止めてくれるだろうことは知っていた。決して拒絶せず全てを受け止める、その須樹に己の決意を伝えるこ

とで、先に進むことが出来るのではないかと　　だが、実際には悔いと惑いばかりが残っていた。

引き止められるとは思っていなかった。

(それとも、引き止められることを期待していたのか　　?)

苦く思う。それを、望んでいたのだろうか。

俺を信じればいい

決然と、響いた言葉を思い出す。戸惑い、躊躇う。それは微かに恐怖に似ていた。受け止めきれない言葉ばかりが積もり積もっていく。まるで雪のように掴みどころもなく、だが、いざ動こうとすれば桎梏となり己を繋ぎ止める。

思いは靄のように胸中に広がる。広がりながら、静かな想念の中に溶ける。その感覚を上手く言い表すことが出来れば、と思いつながら、一方でそのまま自身の内にとどめておきたいとも思う。

灰は瞳を閉じた。答えは出ない。何もかもが、見通せぬ闇に沈んでいた。

暫く眠っていたらしい。灰は目を覚ました。夢も見ない眠りだったのか、眠ったという自覚さえ湧かなかった。部屋に落ちる薄闇が、時間の経過だけを伝えている。灰は身を起こした。眠りを破ったのは密やかな人の気配である。それが、部屋の前で止まり、次いで扉を叩く音が響いた。

「灰様、よろしいでしょうか」

灰は素早く立ち上がると、扉へと近付いた。開けるのを僅かに躊躇う。声の主が、このような訪ね方をしたのは初めてである。扉を開けると、弦げんの姿が浮かび上がった。廊下には既に硝子筒の明かりが灯されている。

「どうしたんですか？」

「御報告申し上げたいことがあります」

頷くと灰は弦を招じ入れた。常に人目につかぬ影で対峙していた

相手である。この様子では玄関から訪ねて来たのかもしれないが、あまりにも弦にはそぐわない行為に思えた。そう感じることも自體異常なことだが、そもそもこの相手は尋常ではない。

緩衝地帯で別れてから相對したのは今がはじめてだった。

「まずは惣領のお言葉です。緩衝地帯での一件、若衆の尽力に感謝する、と」

仁識にしきの若衆頭への報告が、早速惣領にも伝えられたらしい。峰瀬みなせの言葉からは、眞実彼が何を思うかは読み取れなかった。

「他には、何か言っておられましたか？」

「いえ、特に何も聞いておりません。もう一点、お伝えすることがございます。私はこの度、灰様直屬の部下としての任を解かれました」

灰は目を見張る。息を吸う音がやけに鋭く響いた。裏腹に、問う声音は遠い。まるで己の声ではないかのようだった。

「何故ですか？」

「惣領の御命令です」

それで全ての説明がつくと言わんばかりの返答だった。灰は続く問いを呑み込んだ。問うてどうする。弦が灰に仕えたことと同様、あるのは峰瀬の意思、ただそれだけだ。この三年間灰と弦の間にあったものと何一つとして変わらない。

「わかりました」

ふと弦が黙り込んだ。沈黙に気付く程の長さ、それに灰は眼差しを上げる。正面から己を見詰める弦の姿があつた。

「灰様、どうか、慈悲に捕われ過ぎませぬよう、時には冷徹であることが必要なこともございます」

灰は訝しく弦を見やった。

「その胸に下げておられる黒玉は、いずれ灰様を呑み込むことになるかもしれません。闇は既に死した者達の墓場に過ぎません。例え、灰様のお力をもってしても決して救うことがかなうものではありません。それをお忘れなきよう」

鼓動が一つ大きく鳴った。

「……何故、知っているのですか」

弦は小さく息をついた。

「それでは、やはり闇を身に帯びておられるのですね」

灰は言葉を呑み込み、弦を睨みつけた。どうやらかまをかけられ  
たらしい。衣の上から黒玉に触る。まどろむ力は、微かに揺れただ  
けだった。

「はじめは灰様が闇を完全に滅しているのだと思っておりましたが、  
あまりに迷いなく闇に対しておられるお姿に、何時からか違和感を  
覚えました。貴方様は躊躇い無く漂う魂を滅することが出来るお方  
であるのか、と。あとは常にお傍に仕えさせていただいたが故、  
とだけ申し上げましょう」

全て見通されていた、ということか。

闇を滅することを命じられながら、灰は闇の内に捕われた魂を消  
すことが出来なかった。闇を怪魅の力で包み込み実体化させた黒玉  
は、数多の魂を内に抱いている。今も指先に感じるのは、黒玉の中  
に秘められた魂が放つ波である。紐に連ねた黒玉は全てで六つ。闇  
と対峙する度に、首にかける重みは増した。極力人目につかぬよう  
気をつけていたが、どうやら弦には通用しなかったらしい。だが、  
峰瀬は灰が闇を真実滅していると信じている筈だ。その思いを読ん  
だように弦が言った。

「惣領にこのことはお伝えしておりません」

「何故ですか」

警戒もあらわな灰の問いに、弦は答えた。

「惣領にお伝えするようお命じいただきませんでしたので。私の独  
断でそのような大事をお伝えするわけには参りません」

飄然とした響きに、灰は咄嗟に言葉が思い浮かばなかった。啞然  
として弦を見る。闇を滅さないというのは、峰瀬の命に背く行為で  
ある。その重大さを弦がわからぬ筈がない。灰が命じなかったと言  
うが、そもそも灰は弦が黒玉の存在に気付いていることすら知らな

かったのだ。漸く灰は言った。

「ですが……惣領から俺を監視するよう命令を受けていたいのではないのですか？」

「確かに灰様が森林地帯におられた折にはそのような御命令を受けていました。ですが三年前よりお仕えいたしましたのは、私が希望した故でございます。惣領からは灰様の命に従うよう言われましたが、別段監視せよと仰せではございませんでした」

何一つとして形を成さぬまま、幾つもの言葉が渦巻き、ぶつかり合う。立ち尽くす灰に弦が言った。

「どうか闇に捕われることのないよう、くれぐれもお気をつけください」

普段と変わらぬ無表情でありながら、弦が真実灰を案じているらしいことに気付く。その意外さに、灰は瞬く。小さく頷き、呟くように言っていた。

「わかりました」

弦の眼差しが和らぐ。そのまま踵を返しかけて、弦は動きを止めた。

「灰様、とうとう最後までおなおしただけませんでしたね」

穏やかな響きに、灰は顔を上げた。そこに、柔らかな笑みを見る。「私に敬語などお使いくださいませよう、はじめにお願い申し上げますが、とうとうおなおしただけなかった」

まるで独白のような呟きだった。その僅かな余韻の間、弦は灰を見やり、そして次の瞬間には全てを消した。硬質な表情で膝をつくと深く頭を下げる。決然と、何ものにも動じない岩を思わせる背中が、扉の向こうに消えた。

灰はゆっくりと寝台に近付き、浅く腰かける。何も感情が湧かなかった。意味を成さない単語ばかりが頭の中で渦巻き。胸の奥に食い込むような痛みは、物理的な圧迫だった。

何故、痛みを感じる。感じる必要などない。灰は眼差しを落とす。力なくたれた指先が、押し迫る夜に浸食されていた。

灰は、ただの一度も弦の名を呼んだことが無いのに気付いた。

灰の部屋を後にして、弦は階段を下りる。厨房と食堂を兼ねた部屋からは、黄色を帯びた明るい光が漏れていた。少女と女性の笑い声が柔らかく響く。それに暫し足を止め、弦はさらに廊下を進んだ。突き当りの部屋の扉を叩く。穏やかな応えがあり、弦は扉を開けた。硝子筒の光の元、分厚い書を読んでいたらしい秋連しゅうれんが顔を上げる。弦の姿を認め、笑みを浮かべた。

「灰との話は終わったのですか？」

弦は頷いた。

秋連は弦を迎え入れると身振りで椅子をすすめた。弦は床の上にも積まれた書簡の山を避け、木造りの椅子に腰かけた。古い椅子がぎしぎしと軋む。秋連もまた椅子をがたことと言わせながら弦に向き合った。

「それで、私に話があるというのはどういうことですか？ 惣領から何か御伝言でもあるんでしょうか」

「いえ、秋連様には少し私の話にお付き合いただきたい」

「それはまた……どういう話でしょう」

秋連は言いながら、目の前の男を興味深く見やった。弦と言葉を交わすのは、三年前、森林地帯に住んでいた灰へと峰瀬の言葉を伝えに行つた折以来のことである。突然に星見の塔を訪れた男が、灰と秋連に話があるのだと言つた時、峰瀬の言葉を伝えに来たのだらうと思つたのだが、違つたらしい。

「おそらく秋連様は惣領の思惑を少なからず御存じでしょう。灰様が多加羅へと来られたのは、ただ単に惣領家の一員であるが故ではありません」

「ああ、そのようですね。だが、私は詳しいことを知っているわけではありません」

「私はこの度、灰様の直属の部下としての任を解かれました。今後、

灰様をお守りすることは出来ません。ですから、秋連様にお願い申し上げたことがございます」

秋連は僅かに目を見張った。

「私に出来ることでしょうか」

「秋連様にしか出来ぬことと思います」

秋連は無言で話の続きを促した。弦は言葉を選ぶように、ゆっくりと続ける。

「この先、多加羅は大きく動くこととなります。これまでと違い、灰様が惣領家の者として表に出るよう求められることも生じましよう。時には果敢であることを求められ、人を切り捨てなければならぬこともあるでしょう」

「……まさか惣領家の代替わりのことを言っているのですか？」

「一般的な情勢のことを申し上げているだけです」

「深読みをしたくなる言い方をなさる」

秋連の呟きに、弦は詫びるように浅く頭を下げた。

「私の立場では、これだけしか申し上げられぬことをお察しく下さい」

「ええ、わかっています。どうぞ、先を続けてください。私に頼みたいことは何でしょうか」

「どのような事態が生じようと、この場所を、守っていただきたいのです。私のような立場の者が差し出がましいことを申し上げますが、灰様には帰る場所が必要なのです」

「それが、ここだと？」

「はい。あの方を繋ぎ止め、支えとなる場所です」

唐突に弦は黙した。なおも言葉を待っていた秋連だったが、一つ溜息をつく。どうやら、言いたいことは言った、ということらしい。確かに影である男の常からすれば饒舌であり、思いがけない言葉の連続ではあったが、それにしても簡潔に過ぎる。

「弦殿、何故私にそのようなことを仰られるのですか。私は何の力も持たぬ星見役です。この先多加羅の情勢が不安定となれば、この



地位とて何時まで保証されるかわかりません」

「地位の問題ではございません。この三年、灰様を導いて来られた秋連様であるからこそ、申し上げているのです。秋連様は常に灰様をより良き方向に誘おうとなされていました。今日の灰様があるのも、秋連様のお力によるところが大きいのでしょう」

「買い被りが過ぎるようですね。彼は既に柳角様りゅうかくのもとで育むべき多くのものを得ていた。私がしたことは農夫が水を撒くのと同じことです。もとより豊かな土壌があり、種が播かれていれば、植物は育ちます」

「ただ水を撒いただけでは植物も野放図に育つだけでしょう。どれ程に優れた資質があろうと、それは導く者の存在で大きく形を変えます。灰様が己の資質を育て、己が力とする術を教えたのは秋連様です」

秋連はまじまじと弦を見る。まるで父親が息子を、兄が弟を見守るような、弦の言葉である。思うままに、秋連は問うていた。

「何故、弦殿はそれほどまでに灰のことを気にかけるのですか？

惣領家の血筋であるという、それだけではないように見受けますが」

弦の視線が落ちた。部屋は次第に暗さを増す。それにつれて、硝子筒の明かりに浮かび上がる弦の顔は、影をますます深めていた。

踏み込み過ぎた問いだったか、と秋連が思ったその時、弦が言った。

「少し、昔語りを聞いていただけますでしょうか」

それは、静けさに滲む声音だった。炎が柔らかく揺れた。

「惣領家に仕える影としての役目は、代々親から子へ引き継がれるものです。私の父は若くして影の筆頭の役目を負っていました。ですが私には父の記憶は殆どありません。私がまだ幼い頃に死んだからです」

弦は言いながら床を見詰めた。父親が死んだのは弦が三歳かそこらの時分である。かろうじて記憶にあるのは、見上げる程に大きい男の、曖昧な輪郭だった。

「三十五年前の東方遠征の際、父は惣領につき従い東の地へと赴きました。激しい戦闘で影として生きる者達も多く命を落としたと言われていますが、父は戦場に出ることはありませんでした。父に与えられた任務はただ一つ、東の地で力ある怪魅師けみしを見つけ出し、捕えることだったからです」

秋連あきつれんが息をのむ心配がする。弦は顔を上げなかった。低く続ける。「誰を捕え、多加羅たからへと連れ帰るか……リーシエン様の名は既に候補としてあがっていました。父はリーシエン様を探し出すため、風の民が住む草原地帯へ赴いたと聞いています。そこで父は風の民の戦士に西の民であることを見破られ、捕われました。そのままならば殺されていたでしょう。ですが、父の命を救ったのが、他ならぬリーシエン様だったそうです。リーシエン様は風の民の中でも特別に崇められる立場の方だったのです」

まだ十代の娘は、捕われた西の男の命を奪わぬよう仲間を説得し、解放した。無論、男の目的など知る筈もない。リーシエンが多加羅の手の者に捕えられたのは、その後のことである。

「まさか父君が捕えたのですか？」

思わず、といった風に口を挟んだ秋連に、弦は小さくかぶりを振った。

「いえ、父はリーシエン様を捕える任から外されたようでした。風

の民に捕えられた際深手を負っていましたので。リーシエン様を捕えたのは別の影です」

僅かに躊躇い、弦は言った。

「リーシエン様は父の命の恩人、その手を捕えることを父がどう考えたのかはわかりません。ですが、父はその後、多加羅に戻ってからも常にリーシエン様のことを気にかけていたと、そう聞いています。リーシエン様も、父にだけは自ら話しかけることがあったとか……」

弦が生まれたのは父親が多加羅へ戻ってから三年後のことである。その時リーシエンは一児の母となっていた。娘の紫弥しやは母親と同じ銀の髪に紫の瞳、だが惣領が望む怪魅師ではなかった。母娘は屋敷の奥深くで密やかに暮らしていた。

「先代惣領が亡くなり、奥方様はリーシエン様に耶頭やすずの毒を飲ませ、多加羅から追放しました。父はそのことを後になって知ったようです。事前に知っていたら、何とか阻止しようとしたでしょう」

秋連が瞬いた。それに、弦は苦笑を返す。

「そのようなことは、影には許されぬことです。おそらく、父にとってリーシエン様はかけがえのない存在となっていたのでしょう」「愛していた、と?」

「わかりません。そうなのかもしれません。あるいは、何か別の理由があるのか……何れにせよ、それは影にとって致命的なことですよ。主以上の存在を作ってしまうなど、許されることはありません」

実際、影にとって求められるのはただ主の命に従うことだけなのだ。男女の契りさえ、影の任務を引き継ぐ子を成すためだけにある。弦は母親が誰かは知っているが、言葉を交わしたことさえない。父や弦と同じく影として生きる一人である。

リーシエンと紫弥が多加羅を追放された後起こったことは、弦も詳しく知っているわけではない。人伝に聞いた話の断片を繋ぎ合せて、過去の出来事を弦は語る。

「奥方様はリーシエン様に毒を飲ませ追放しただけでは気がお済み

にならなかつたのです。來螺<sup>らいら</sup>にお二人が流れ着いたと知ると、その命を奪うよう父にお命じになられました。父は命令に従うことが出来ませんでした。奥方様に、リーシエン様のお命をお見逃しいただくよう、お願い申し上げたそうです」

無論、相手は激昂した。影など便利な道具としか思っていないかつた先代惣領の妻は、命令に従わぬ男に迫った。

それ程にあの女が大切ならば、お前がかわりに命を差し出すか

「まさか父君はリーシエン様を助けるために……？」

問いが夜気を震わせる。

「はい。父は奥方様の言葉に頷き、自ら死を選びました。奥方様は、おそらく本気で命を差し出せと仰られたではありませんまい。ですが、さすがに父の行動を無碍にしてまでリーシエン様の命を奪うことは出来なかつたでしょう。その後、リーシエン様のお命を奪うよう、影にお命じになることはありませんでした」

秋連の息遣いが聞こえる。漸く、弦は顔を上げた。

「これは全て、父の死後私が預けられた影の男に聞いた話です。私は父のようにはなるまいと、幼い頃から考えていました。影達にとつて、父の行動は嘲笑と軽蔑の対象でしかありませんでした。父は影に徹することが出来ず、己の感情に捕われて愚行に走つたのだと……私にもそのようにしか思えませんでした」

影に心はいらぬ。感情も、思考すらもいらぬのだと　そう信じただだひたすらに技を磨いた。弦にとつては、そうするしか自分を守る術はなかつた。父の息子であるという、それだけで影達は彼にも嘲りを向けた。やがて弦の実力を周囲が認めるようになっても、父親の存在は彼について回った。所詮あの男の息子だと

「私が初めて影として命を受けたのは、十五年前、今の灰様と同じ十七の年でした。來螺に住む紫弥様の御様子を調べ、惣領に知らせるのが任務の内容でした」

命じられた時の感覚を、弦は覚えている。リーシエンとその娘、

紫弥の存在は否応もなく父親の愚行を思い出させる。何故、よりにもよつて峰瀬が己に命じたのか、弦にはわからなかった。

「峰瀬様は紫弥様のことをお知りになってから、常に気にかけておられたようです。一度などは自ら來螺に赴きさえしたのだと、そう仰せでした。その折には秋連様も御一緒だったようですが」

「ああ、半ば無理矢理に連れて行かれたが、てつきり遠乗りだとばかり思っていた」

その折に、実際に紫弥の姿を二人は目にしていた。峰瀬にしてみれば、思わぬ偶然であり、幸運だったに違いない。まるで天から地へ舞い降りた天女のような　目を奪う程に美しい娘の姿を、彼はどのような思いで見たのだろうか。

「私が來螺に赴いた時、灰様は二歳におなりでした。私はお二人の姿をはじめて目にした時のことを、今でも忘れることが出来ません」  
言いながら、弦は僅かに目を細めた。

「街の外れ、人気の無い寂しい場所にお二人はおられました。木陰で紫弥様は膝に灰様を乗せ、子守唄なのでしょうが……私にはわかりませんが、小さな声で歌っておられ、そして灰様は光と戯れておられました」

緑陰に、木漏れ日が柔らかく降り注いでいた。その気紛れな揺らめきの中に、光が舞っていた。生まれては消え、消えてはまた散りしづく花びらのように　あるいは雪のように、二人の姿を包み込んでいた。幼子の無邪気な笑い声に、母親へと伸ばした指先に、煌めきが灯った。

「それは紛うことなく、怪魅けみの力でした。その時既に、灰様は怪魅の力を自在に操っておられたのです」

弦は立ち尽くし、ただその光景を見詰めていた。

「私は多加羅へと戻り、惣領には紫弥様がお元気でいらっしゃることに、そしてお子様がおられることだけをお伝えしました」

秋連が瞳目した。

「灰が怪魅師であることは言わなかったのですか？」

問われて弦は低く続ける。

「何故、惣領に全てをお伝えすることが出来なかったのか……。影としてはあるまじきこと、許されぬことです。私は混乱し、己自身に絶望さえしました。これではまるで父と同じではないか、と。それでも私は、どうしても真実を口に出ることが出来なかった。その当時の私は、灰様が怪魅師であることを告げることが出来ぬ己を認められず、あの光景は目の錯覚に違いないのだと、そう考えさえしていました」

「今は、惣領に伝えなかった理由がわかっているのですか？」

弦は浅く頷いた。

「私はお二人の姿を見た時、美しいと、感じたのです」

風に惑う緑陰も、空気を震わせる柔らかな歌声も、まるで命を宿したかのような光の乱舞も　そして光に抱かれた二人の姿も全てが圧倒的に美しかった。

「影として生きる者に心など邪魔なだけだと、私はひたすらに考えて生きていました。心は感情を生み出し、人を狂わせる。私はそれまで喜びを感じたり、何かを美しいと感じることなど一度としてなかったのです。十五年前、私はお二人の姿に魅了されながら、同時に打ちのめされてもいたのでしょうか。あの時、初めて自分の内部に生まれたもの……。私の中にも何かを感じる部分があるのだと、気付かされたのですから」

そしてそれは彼だけのものだった。誰にも侵すことの出来ない、誰にも奪うことの出来ないもの　あの光景そのものが、弦の心が生まれた場所、心の在り処だった。誰にも触れられず汚されることのない領域、例え相手が惣領であろうとも、弦はその領域を明け渡すことが出来なかった。

美しいと感じたその一瞬が、弦の全てを変えたのだ。世界は色の無い事象の連続ではなくなった。何も感じずにいることは最早不可能だった。だが、それは言葉に出来るものではなかった。弦は言葉を探すことすらせず、秋連の眼差しを受け止める。秋連もまた、そ

れ以上問おうとはしなかった。

「惣領はその後私に紫弥様と灰様の御様子を随時報告するようお求めになりました。紫弥様が亡くなられ、灰様が森林地帯の柳角様のもとに引き取られてからも、それは変わりませんでした」

弦は秋連を見詰める。静かな琥珀の瞳が、ひたりと向けられている。そこにはどのような己の姿が映されているのだろうか。弦にはわからない。

「つまり、弦殿はこの十五年間、灰をずっと見守り続けてきた、ということですね」

「そうなります」

「例え惣領からの御命令がなくとも、それは今後も変わらぬでしょう。何故、今私に話をなさったのですか？ 貴方にとっては、何にもかえ難い記憶を、何故私に？」

「秋連様、私はこれから遠く隔たれた場所へ参ります」

答えにならぬ答え。だが、弦にはそう言うことしか出来なかった。秋連が訝しげな表情になる。

「多加羅の外へ赴く、ということですか？」

「はい」

「灰はそのことを知っているのですか？」

「いえ。灰様がお知りになる必要はありません」

「何故です。この三年、灰の最も傍近くにいたのは貴方でしょう。

せめて何処に向かうのか伝えた方がよいのではないですか？ 何より、灰が弦殿を案じずにはいられないでしょう。灰はおそらく弦殿のことを心の底では信頼し、大切な存在として認めている筈です」

「秋連様、私は今ならば父の気持がわかります。しかし、父のように影であることを捨てることは出来ません。灰様も、私のことなど気にかけるべきではありません」

「それでよいのですか？」

短い問いに、それ以上の意味が込められている。秋連の瞳に凝る懷疑と懸念に、弦は小さく笑んだ。

「はい。私は惣領家の影、それ以上でもそれ以下でもないのですから」

まだ何か言いたそうな様子の秋連だったが、諦めたように溜息をつくと、頷いた。

「わかりました。これ以上問うて貴方を煩わせることはやめましょう。この先多加羅で何が起こるにせよ、私が出来る限り灰を見守ると約束します」

弦は思いのたけを込めて頭を下げた。短く、強く目を閉ざす。瞼で、濃密な闇が爆ぜる。

父親が死んだのは、三十二の時だった。弦も今、三十二である。その因縁の不思議を思う。全ては定められていたかのように、弦は戻ることの出来ない道を進んでいる。

迷いはなかった。



## 99 (後書き)

今回の内容、98話に入れようかとも思いましたが、弦を主体に書くのは滅多にないので、敢えてわけてみました。そのせいで少し短めです。

第二部はもう少し続きますが、どうかお付き合いください。  
では今後ともよろしくお願いいたします！

梓魏惣領家の庭園は精妙であり美麗である。屋敷をゆつたりと取り巻き、木々の一本一本、小さな丘のなだらかな傾斜、楕円を描く小さな人口の湖など、どの角度から見ても絵画を思わせる景色となるよう配置されている。全てが計算し尽くされた自然の造形である。幾代か前の惣領が、余人にはうかがい知れぬ哲学的な発想から築いたとも言われているが、万よろずからすれば惣領家代々に引き継がれた道楽の結晶だった。

精緻に保たれた庭園の様は素人目にも美しくはあるが、警護する身になれば些か厄介である。自然の森のように配された木々は、人が隠れるのに適している。丘のなめらかな輪郭も視界を遮り、庭園全体を把握するのを妨げていた。森の中に配された湖に至っては無用の長物としか思えぬ。森を通り過ぎるには湖を迂回するしかなく、端的に邪魔なのだ。

万の護衛の場所は相変わらず庭園の外延部が中心だった。日によって場所は変わるが、何時になれば屋敷に近付くことがかなうのかも定かではない。尤も益がなかったわけではない。屋敷の周囲の状況には詳しくなった。守りが薄く侵入に適しているのは何処か、十年前ならば北限の民にとって有益な情報となっただろう。

椎良しいらは時折庭を漫ろ歩く。侍女に囲まれていることもあれば、椎良とその手を引く侍女、そして二十歳程の青年　おそらくあれが玄士の息子だろう、と万は思う　の三人だけのこともある。何れの時も椎良の顔は薄紗で隠されていた。玄士の息子は毎日のように椎良の元を訪れているようだった。庭を歩く二人の姿を見れば、青年が一方的に話し、椎良は時折相槌を打っただけだった。各所に配されて常に目を光らせている近衛兵の存在を青年が疎ましく思っているのは明らかだったが、無論追い払うことなど出来はしない。

焦れるように単調な日々が続いた。左程日数は経っていなかった

が、まるで引き延ばされたかのように時間を長く感じるせい、近衛隊に入ってから期間が実際の二倍以上に思えた。清夜すがやならば己の感情に負けているだけだと言うだろう。

このような日々が変わらずと続くのかと思わずにはいられない。無論、そのようなことはあり得ない。問題はこの先、椎良が中央に赴く時だ。おそらく、万の経験が求められ、椎良の傍に仕えるようになった時、それこそが真の任務のはじまりだろう。今は無為な時間も悪くはない、と万は思う。状況の難しさはあれど、与えられた役割を果たす自信はあった。十代の頃のように己の感情に喰われることはないだろう。しかし、万には椎良と対面した時に己が何を感じるか、それだけが分からなかった。

薄紗に隠された椎良の顔を見たいという思いは、不思議とわかなかった。幼い思慕に浸り込む程記憶に捕われていないのだと安堵する反面、あるいは記憶に捕われすぎるが故に、実在する今から逃避しているだけか、とも万は考える。あるいは自分で思う程に執着はなくなっているのか。その何れであろうとも、惣領家に忠実な近衛兵には必要のない考えであり、感情だった。当然のことだが、一介の近衛兵と惣領家の間には越え難い一線がある。その線を踏み越えず此方側にいる限り、万は均衡を保つことが出来た。過去と現在の、あるいは未来の　時には感情と思考の。

だが、均衡は唐突に破られた。

その日は珍しく温もりを感じる陽気だった。万が配されたのは丘の斜面が森の端に交わる位置、既に何度か警護した場所である。樹陰に紛れるようにして立っていても、柔らかな陽光の暖かさを感じる。

数人の人影が視界の端に現れたのは、昼を過ぎた頃合いだった。遠目からでも、それが椎良とお付きの侍女、そして玄士の息子であることがわかった。椎良は普通の厚手の外套ではなく肩掛けを軽く

羽織っている。歩きたびに、それが柔らかくたなびいた。いつものように屋敷の周囲を歩くのだろうと、三人の姿を見詰めていた万はふと目を眇めた。

青年が椎良の手を引く侍女に何かを言っている。まだ幼い侍女はどこか怯えた表情で椎良を見上げた。椎良が小さく頷く。少女は優雅に一礼すると二人に背を向けて駆けて行った。残され、佇む二人の姿を万は見詰める。青年が一方的に話しかけるのに、幾度か椎良は首を振った。業を煮やしたように青年が椎良の手を掴む。思わず身を竦めた椎良には構わずに、青年は屋敷に背を向けると歩き出した。

反射的に足を踏み出しかけた万は、寸でのところで思い留まった。青年の態度は明らかに強引だったが、一介の近衛兵が飛び出す場面ではない。それでも動かずにいるには、少なからぬ自制が必要だった。

椎良はなおも拒む様子を見せていたが、青年の力には抗しようもない。青年は華奢な体を半ば引きずるようにして森へと向かっていた。万が立つ方向である。茂みに隠れて彼の姿は見えないだろう。ひきかえ、万からは二人の姿がよく見えた。愚かな若者が何を考えているのか、万には手に取るようにわかる。体よく侍女を追い払い、この機会につれない姫を口説き落とすため人目につかぬ場所に行こうとしているのだろう。

これ以上近付いてほしくはないという、万の半ば祈るような思いとは裏腹に、二人の姿は次第に大きくなってくる。武骨な手に掴まれた椎良の手首は細く、滑らかに白い。青年の声が無遠慮な響きで耳に届いた。

「侍女を待つ必要はありません。私が良い場所にお連れしますよ」  
「私の姿を見失って叱責されるのはあの子です。外套など取りに戻る必要はなかったのです」

「姫君がそのようにお考えになるうとも、お風邪を召されては結局あの侍女が責めを負いますよ。なに、待たせておけばよいのです。」

気の利かぬ侍女には程良い罰になりますからね」

「罰を与える必要はありません。外套を着ないと決めたのは私なのですから」

「ならば言い直しましょう。あれは、私からの罰ですよ。あの侍女は常に私と貴女の邪魔をしています」

「勝手なことを言わないでいただきたいわ。私は戻ります」

椎良の強い声音に、青年は足を止めた。明瞭な怒りと拒絶だった。青年が顔を歪め、椎良の手首をはなした。

「ではお戻りになったらよろしいでしょう」

青年の声は傲岸に響いた。青年から遠ざかるように後ろへ足を踏み出した。み出しかけた椎良の動きが止まる。どちらへ向かえばいいか分からないのだと、万は察した。椎良は散策の際は必ず決まった道を辿る。その軌跡がそのまま万にとっては踏み込めぬ境界を示しているように感じられた。あるいはその内に踏み込まずにいれば、過去からも今からも離れていることが出来ると。

しかし境界は破れた。傍若無人な若者の手によって、椎良自身もそこから引きずり出され、立ち尽くしている。万の眼には、椎良の姿が等身大の人形になったかのように映った。無音のうちに、椎良の全身から感情が削がれていく。その沈黙に、青年が笑みを浮かべた。己の優位を確信した者の笑みである。

「さ、姫君、お手を」

僅かに鼻にかかったような気取った声に、椎良が顔を上げた。薄紗に顔の輪郭が滲む。毅然と背筋を伸ばしたまま、椎良は右手を差し出した。ゆつくりと、まるで供物の屍肉を捧げるように、あるいは咎人に慈悲をたれる聖人のように。恭しくその手を取り、青年は屋敷へは引き返さずに木立の中へと歩み入る。下草を踏み締める音に、椎良も己が向かう先を察しただろう。だが、最早一言も発しようとはしなかった。今や椎良を守るのは彼女自身の矜持、それだけだった。

万は木々の向こうに二人の背が消えるまで見詰めていた。己の鼓

動を震わせるのが何かわからぬまま、視線を外すことが出来ない。既に二人の姿はないというのに。足音すら聞こえない。残された静寂は虚ろだった。

理性と感情、何れかはわからぬが、あるいは両方が、二人を追うべきだと告げていた。森の中は危険だ。おそらく二人が森へと向かったのを知っているのは万だけである。無論、森の中に誰も潜んでいないことを確認してはいたが、森そのものが、盲目の者が歩くに適した場所ではない。目を離すべきではないのだ。例え先導者がいても

万の中で何かが軋んだ。

万は大股に森の中へと歩み入った。これは任務のためだ、と理性が囁きかける奥底で、ふつふつと沸き起こる抑え難い情動があった。怒りである。あの青年は、椎良を虚仮にしたのだ。慕うように見せながら、その実彼女を嘲った。己がいなければ何も出来ぬ状況に椎良を陥れ、彼女の誇りを万の眼前で踏み躪ったのだ。

二人の気配を追うのは容易かった。青年の声を追い、木立の合間からその姿を捉える。ゆっくりと二人が進む先には、鏡のような湖があった。空と木々の姿を湖面に映し出し、鮮やかに無限の対比を成している。時折水面が揺れると、それは不安を誘う歪みとなった。青年は椎良の手を引きながら、湖の淵に沿って歩く。大仰な身振りで話している様子を、万はひやりとしながら見やった。湖岸はぬかるんでいる。長く凝っていた雪が溶け、地面は水を含み足場が悪い。

あまりに湖に近過ぎる、万が思ったその時だった。椎良を振り返り話していた青年が大きく体の均衡を崩した。左足が半ば水の中へと崩れた地面に取られる。大きく腕を振り回し、青年の体が傾いた。水の中へと落ちながら、あるうことが青年は両手で椎良の腕にしがみついた。

「馬鹿が！」

毒づき、万は走り出していた。椎良に青年の体を支える力がある

筈もない。背中から水中へと落ちた青年に引きずられるようにして、椎良が湖に落ちた。激しい水音が二つ、水面が大きく揺らぐ。二人が沈んだ湖面を視野におさめたまま、万は駆けた。小枝が掠めたのか、頬に鋭い痛みがはしった。

湖岸に辿りついたその時、まるで水面から生えるようにして青年の頭が突き出した。大きく喘ぎながら忙しなく腕を動かし、ようようの体で岸へと泳ぎつく。地面にしがみついた相手に万は問うた。

「椎良様は!?!」

青年がのろのろと顔を上げる。焦点を結ばぬ眼が万を捉えた。

「椎良様はどうなされたのだ!?!」

青年は自失したように答えない。がちがちと歯の鳴る音が聞こえた。万は舌打ちをすると外套を脱いだ。もどかしい。手が震えぬのだけが救いだった。体と心を切り離す。自我の根底にまで染みついた、暗殺者としての訓練の賜物だ。鎧を外し、籠手と具足も放り出して、万は勢いをつけて湖に飛び込んだ。

水に包まれた瞬間、凍るような冷たさに全ての感覚が呑みこまれる。当然だ。冬の湖である。目を凝らし、大きく水をかく。鏡のような水面の下は、不透明に濁っていた。視界を白い影がなく。咄嗟に掴む。薄紗だ。さらに深く万は潜った。

不意に漆黒が視界に広がる。柔らかく、まるで誘うように揺れる。その黒髪に包まれて、椎良の顔が見えた。腕を伸ばす。その先で、椎良が瞳を開いた。青味を帯びた灰色が、万の姿を捉えたように見えた。

万は椎良の背に腕をまわし引き寄せる。椎良の手が万の頬に触れた。ごぼりと、椎良の口から空気の泡が漏れる。万は片腕で椎良の体を引き寄せ、水面を目指して水を蹴った。

水面に顔を出し、万は椎良の体を引き上げる。間近に顔を覗き込むと、瞼は閉ざされていた。意識がない。いまや水の冷たさは突き刺すような痛みとなって感じられる。まるで手足が石になったように、動きがままならなかった。漸く足が着く場所にまで辿りつくくと、

万は椎良の体を抱き上げる。がくりとのけぞつた喉が白い。解けた髪は腰を覆う長さだった。濡れた衣が、柔らかな体の線をあらわにしている。

青年は岸边にへたり込んでいた。全身が瘡の様に震えている。濡れそぼつた椎良の体よりも、己の体の方を重く万は感じた。茫然と見詰める青年の横を通り過ぎ、己が脱ぎ捨てた外套の上に椎良を横たえる。殆ど水を飲んでいないのはわかつていた。微かな呼吸を確認し、万は思わず頭を下げた。安堵、感謝　そのような言葉では言い表せない、慟哭のように胸中を満たすものがあつた。

外套で椎良の体を包み込み、万はいまだにへたり込んでいる青年を振り返つた。

「わ……私は……」

震えた声で青年が言う。万の表情に目をやり言葉を呑み込んだ。怯えている。無理もないだろう、とどこかで冷静に万は思つた。青年を殺してやりたいと思つている、それを万は隠すことすらしていない。拳を握り締める。殴り飛ばし、水に沈める。抵抗する体を押さえつける、その生々しい感触を現実のように感じる事が出来る。一呼吸、その間だけ己の激情に身をゆだね、万は拳をゆつくりと開いた。青年の顔から視線を逸らし、万は外套に包み込んだ椎良を抱き上げた。このままでは寒さに命を奪われかねない。

歩きかけた万の背に、青年が言った。

「ま……待て、近衛兵」

万は足を止める。相手の声は怯えと傲慢さが入り混じつている。万が立ち止つたことに意を得たのか、続く声音には高圧的な響きさえあつた。

「椎良様は、わ……私がお連れする。お前のような者が手を触れてよい方ではない」

ゆつくりと振り返る。視線は合わせなかつた。それが恭順と映つたのか、青年は立ち上がり万を睨みつけた。精一杯の虚勢だろう。

どうとでも出来た。そのまま背を向けて去ることは容易い。だが、



渦巻く感情の奥底で、碇のように動かぬものがある。万の中で小さく声がした。

目的を忘れるな。

彼が梓魏に戻った理由　この先降りかかるであろう災厄から椎良を守る。ここで玄土の息子の不興を買うのは得策ではない。

（忘れるな。お前は単なる近衛兵だ）

束の間、万は椎良の顔を見詰めた。青白い小さな顔は、あどけなくさえ見えた。繊細に整った顔立ち、長い睫の一本一本まで脳裏に刻みつけて、万は椎良の体を再び地面に横たえた。ゆっくりと後ろに下がる。万が十分に離れたのを見てとり、青年が椎良に近付いた。僅かにぐらつきながらも青年は椎良を抱き上げる。外套で包んでおいて良かった、と万は思う。若者の衣の胸を汚す泥は、彼女につくことはないだろう。

青年はなおも躊躇うように万を見やる。敢えて正面から見詰め返すと、まるで逃げるように視線が逸らされた。

「椎良様が誤って水に落ちたなどと知られれば、皆にいらぬ不安を与える。このことは他言無用だ」

万は場違いにも笑い出しそうになった。傲慢さの影に見え隠れする卑屈さ。それがこの青年の本質なのだろう。どれ程装おうと、相手が抱く不安が万には透けて見えた。全て見たと　青年が椎良を巻き添えにし、なおかつ自分だけが岸に向かい彼女を助けようともしなかった、その一部始終を見ていたのだと言え、青年の顔はどのように歪むだろうか。

だがそうしたところで何の意味もないだろう。

「承知致しました」

万は感情を削いだ声で答えた。

「お前も装束を改めて護衛の任に戻れ」

早口に言つと、万の答えも待たずに青年は木立の向こうへと歩み去った。

万はゆっくりと鎧一式を拾い上げる。食い込む寒さと冷たさはあ

なりに現実的で、体の内側が虚ろな穴になったような気分だった。無性に笑いたくもあつたが、息を吸えばまるで胸に石が詰まったように苦しさを感じただけだった。

近衛兵舎まで誰にも会わなかったのは幸運だった。濡れそぼった姿では、必ず理由を問い質されただろう。任務を離れるため最も近くを警護していた近衛兵にだけは事の顛末を伝えたが、それが同室の矢束やつかだったのも幸いした。彼ならば軽はずみに他言はしないだろう。

自室で体を拭き清め、適当な理由をこじつけて倉庫役から借りた装束と鎧一式を身につける。熱気の籠る厨房で芯まで冷え切った体を温める。冬には多くの近衛兵がしていることだ。その後、万は再び惣領家の屋敷へと向かった。同じ場所で警護につくまでさして時間は要さなかった。

見上げる屋敷は何も変わらない。だが、そこに、その中に椎良がいるのだと、万が強く意識したのはこの時が初めてだった。唐突に視界が晴れたような、静かだが鮮烈な感覚だった。

現実には容赦がなかった。過去への追憶は、今となつては感傷的で安っぽいものに感じられた。それまでの己の覚悟さえ、嘲笑いたくなる。何もわかっていなかった。椎良が生きているということ。守ると決めながら、あまりに遠いその存在。

椎良の命が喪われたかもしれない、その、恐怖。

その日のうちに、玄士の息子が椎良の危難を救ったというまことしやかな噂が広まっても、万はさして意外には思わなかった。あの時の青年の様子からそうなるのではないかと半ば予想していたことである。万がどれ程のことを知っているのか、やはり不安だったのだろう。あの青年は自ら吹聴することで、己の身を守ったのだ。ここで万が真実を言ったところで、玄士の息子相手では結果は見えている。

約束通り沈黙を守った矢束だけが、何か言いたそうな表情を向けて来たが、それに対して万は肩を竦めただけだった。何を言う必要

がある？ 椎良を救ったのが誰か、そのようなことは重要ではない。本来ならば上官に報告すべきことだったが、ここでいらぬ注目を集めることこそ避けねばならなかった。

ありがたいことに、玄士の息子自らが吹聴したおかげで、皆が必要なことを知ることが出来た。正しい内容でないとはいえ、近衛兵が知っておくべきことはそれだけで十分だった。森は危険であり、姫君を近づけてはならない。玄士の息子が姫の散策に同行する時は特に目を配ること。青年の浅知恵は近衛隊には通じない。彼が椎良の命を救ったのだとしても、彼女を危険に巻き込んだ元凶であることは明らかだった。

任務を終え、装束を解く。適当に食事を済ませ、万は常よりも早く寝台に入った。疲れたのだという万の言葉を信じたのか、矢束は何も問おうとはしなかった。

眠りはなかなか訪れなかった。暗闇の中目を閉じれば、間近に見た椎良の容貌が鮮やかによみがえる。何度消そうとしても、水底から浮かび上がるように、万の思考を奪った。とうとう寝る努力を放棄して万は手を顔の前に持ち上げた。

そこにはいまだに仄かな感触が残っていた。

椎良が知ることはない。誰も、知ることはない。真実は湖面の下にある。現実を映す虚像の下に封じ込める。全てがそこに沈む。それだけでいい。

万は手を握り締め、おろした。

風が染まる。

雑踏を歩きながら、灰は思った。柔らかなざわめき。空気が渦を巻く。人と人の間には風がある。今、そこに忍び込むのはまだ見えぬ春の兆しか、無関心に行き交う人々の表情もどこか柔らかい。新たな季節の香りに足を緩めた灰だったが、その気配は掴みどころもなく周囲の喧騒に溶けた。

大通りには人が溢れている。その中を、灰は俯きがちに歩く。

緩衝地帯から多加羅へと戻ったのはつい数日前、あまりに多くのことがありながら、まるでそれが嘘のように穏やかな毎日が続いていた。ただ一つ、弦の存在が灰の日常から消えたことだけが変化と言えた。考えねば気になる程でもない、だが灰の中で、まるで染みついたように消えぬ一つの影となっていた。

それまで弦の存在を疎ましいと思いきすれ、主従としての信頼も親密さもなかった相手に、灰はただ己の思いが不可解だった。まるでその存在の欠落が、空気に穴が空いたかのような虚ろさで感じられる。今もまた、気付けば弦の言葉を思い返している。灰は小さく頭を振ると、腕に抱えた荷物へと意識を集中した。分厚い書物が数冊、星見の塔を出た時には左程重いとも思わなかったが、街を歩くうちに、確かな重量を感じていた。

人通りの多い市場を通り抜け、目指す建物が見えたところで灰は足を速めた。重厚な博露院を背後に、古びた四角い建物が目指す場所、公歴書館である。慣れた経路を辿り、薄暗い建物の内に入る。静けさに足音が響く。それはどこか秘密めいて聞こえた。

灰は書庫の手前にある小さな部屋へと向かった。開け放された扉から中を覗くと、所狭しと書物が積まれた中で小さな机に向かっていた初老の男が顔を上げた。分厚い眼鏡の向こうから細い眼で灰を見詰める。

「持つて来たかね」

灰は頷くと、抱えていた荷物を机の上に置く。包んでいた布を解くと、男は早速書物を検分するように手に取った。隅々まで鋭く見やり、丁寧<sup>ていねい</sup>に紙を捲る。まるで生まれたばかりの鳥の雛を扱<sup>あつか</sup>うような、繊細な指の動きだった。

星見役の役目の一つに、古い書物の修繕と保存がある。今灰が持つて来た書物もまた、もとは半ば崩れかけ判読も難しい代物だった。その内容を正確に読み取り、写本して新たな書物として作り上げたのは秋連<sup>あきつたん</sup>である。男もその出来栄<sup>できざめ</sup>に満足したようだった。

「ふむ、相変わらず良い仕事だ。秋連に礼を言っておいてくれ」  
頷き踵を返しかけた灰を、男は呼びとめる。

「また書庫に寄って行くんだらう。閉館まであと一刻もない。読みたい物があるなら持つて帰れ。お前ならば手続きはせんでいい」  
「ありがとうございます」

男はさっさと行けと言わんばかりに手を振ると、再び書物に向かつて屈み込んだ。灰は小さく苦笑すると、書庫へと足を向けた。秋連の使いで公歴書館の男の元に書物を届けるのは灰の役目となっていた。灰が惣領家の者であることを男が知っているかどうかは定かではないが、およそ書物にしか興味を抱かぬような相手である。知っていたとしても、何が変わるわけでもなからう。

書庫の中はひんやりと冷たい空気に浸されていた。密集した棚の間を歩くと、まるで出口のない迷路に迷い込んだような錯覚に陥る。あるいは水底か、前も後ろも仄暗く霞んでいる。静寂さえ遠い。

暫くゆっくりと歩きまわり、灰は漸く一冊を選び出した。以前読んだことがある。だが、不意にまた読みたくなった。出口へ向かいかけた灰に、その時横合いから人影がぶつかって来た。互いに余所を見ていたせいで避けようもなく、よろめいた相手の腕を咄嗟に灰は掴む。軽い音をたてて書物が床に落ちた。

「ごめんなさい」

細い声に、灰は相手がまだ年若い娘であることに気付いた。おそ

らく灰と年の頃は変わらぬだろう。

「こちらこそすみません」

灰は娘の腕を離すと、書物を拾い上げた。それに、娘の目が止まる。あ、と小さく声を上げた。

「その書物……」言いかけて言葉を切る。灰は思わず書物を差し出した。

「読みますか？」

「いえ……お借りになるのでしょう？」

「俺は前に一度読んだことがありますから、どうぞ」

娘はなおも躊躇うようだったが、おずおずと書物を受け取った。表紙を撫でながら俯く。

「……ある人から良い書物だと聞いていたんです。でも、なかなか見つけれなくて……」

どこか沈んだ様子で娘は小さく微笑んだ。その淡い憂いに束の間目を奪われた灰に、娘は丁寧にに頭を下げた。きっちりと結わえた黒髪が、さらりと揺れた。

「ありがとうございます」

言って顔を上げた娘が、目を見開いた。細い肩が強張る。その視線の先を追った灰は、背後に立つ人影に気付いた。仁識にしきである。仁識もまた驚いたように目を見張り、娘を、次いで灰を見やった。沈黙が落ちた。仁識と娘は言葉を交わすわけではなかったが、灰には二人が知り合いらしいことがわかった。そして、二人の間に漂う憚るような気まずさに気付く。

沈黙を破ったのは仁識だった。

「何故、ここに？」

娘に問うたのかと思っただ灰だったが、どうやら彼に言っただけらしい。「秋連師匠の使いで書物を届けに……」

言葉が途切れる。小さく頭を下げた娘が、小走りに二人の横を駆け抜けて行った。一度も振り返らずに去った娘を視線で追い、灰は問うていた。

「いいんですか？」

「何がですか」

「知り合いなんでしょう？」

「たまにここで顔を合わせたことがあつた程度です」

仁識の声音は頑なに、不機嫌さを滲ませていた。珍しい、と思う。仁識は感情の振幅は激しいが、それを露わにすることは滅多にない。例え気分を害した時でも、冷静な態度を崩さぬのが常だった。

「それにしても惣領家の若君がお使いとは、星見役殿も思い切つたことをなさる」

気を取り直すように言つた仁識の言葉は、しかし僅かに擦れるような歪さを孕んでいた。何時もならならば皮肉な笑みすら滲ませて言葉を紡ぐ彼らしくない、どこか逼迫したような苛立ちが感じられた。当の本人がそれに気付いたのか、口を嚙む。ぎこちない沈黙に、遠く澄んだ鐘の音が響いた。公歴書館の閉館を告げるそれである。

何となしに顔を見合わせると、二人は無言のまま書庫の外へと向かった。

仁識は苛立ちを抑えかねていた。それは体の奥底からふつつつと湧き出し、吐く息にさえ滲むのではないかと思える程、濃密に胸中を満たしていた。

何に對しての苛立ちか　情動の激しさの自覚はあるが、それを抑える術は知っていた。だが、今は普段のような自制がきかなかつた。原因はわかっている。

羽那はな　娘の名を内心に呟く。思いがけず治都やいに引き合わされてから、一度も顔を合わせてはいなかつた。仁識の許婚である第六公家の娘に仕える侍女なのだと知つたあの日、仁識は羽那と何を話したのか殆ど覚えていない。おそらく左程話はしなかつたのだらう。終始治都が賑やかに喋っていたように思う。以来、公歴書館には足を向けていなかつた。緩衝地帯の騒動に気を取られ、若衆にかかり

きりになっていたせいもあったが、やはり心の何処かでは万が一にも娘と会うことを避けたい思いがあったのだろう。

娘の顔に浮かんだ驚きと戸惑いが、克明に蘇った。己も同じような顔をしていたのだろうか。何を惑っていたにせよ、今後は関わることもあるまい。そう思っていた筈なのに、この気持の揺れようは何なのだと、仁識は腹立たしく息を吐いた。

苛立ちの原因はそれだけではない。再び仁識は傍らの灰を見た。緩衝地帯から戻った灰と、仁識はいまだまともに言葉を交わしていなかった。緩衝地帯で何があったのか、灰の言葉が全てではないだろうと仁識は踏んでいる。以前の仁識ならば何としても真実を聞き出そうとしただろう。だが、今はただ鬱屈した沈黙ばかりが二人の間にはある。常と変わらぬ穏やかな灰の表情には何の感情を窺えない。その静かな面を見るうちに、更に苛立ちが募っていた。それは、怒りの色をも帯びる。

仁識は言葉を何とか押し出す。灰が沈黙を気にしているとも思えなかったが、今は彼がそれに耐えられなかった。

「今まで一度も顔を合わせませんでした、公歴書館にはよく来るとですか？」

「二月に一度程です。大概が秋連師匠の使いですが。若衆が休みの日に来るので会わなかったんですね」

確かに、今日は灰が若衆の休息日に当たっている。仁識自身は鍛練の後にふらりと寄ったのだが、普段はやはり休みの日に訪れる。交替で休みを取る副頭が、顔を合わせるものがなかったのも道理である。だが、今の仁識にとっては、灰の冷静な言葉もただ胸中に凝るものを焦がすだけだった。

「先程の娘、書物を渡していたようだが、今まで会ったことが？」  
「いえ、さつきがはじめてです。太星白記は人にすすめられて以前から読みたいと思っていたそうです」

書物の名に、仁識の鼓動が跳ねた。一年程前だろうか、彼自身が娘にすすめたものだった。意図せずして歩調が僅かに乱れた。敏感



にそれを察したらしい灰の視線を感じる。しかし何も問おうとはしない。

無言のまま、公歴書館を出て道へと踏み出す。学徒が集う界隈に、今は人影もまばらだった。夕刻の淡い光が空の端に射している。仁識は足を止める。灰の眼差しを感じる。静かに注がれるそれに、仁識の中の何かが揺れた。ごく小さく、しかし出口を求めて蠢く感情が溢れ出すには、それで十分だった。

「何故、何も聞かぬのですか」

低く問う。それに、僅かに灰が目を瞬いた。かまわず、仁識は続ける。

「多加羅に戻り、気付いたでしょう。若衆は以前とは違う」

言いながら仁識は知る。この苛立ちは、何も今に始まったことではないのだ。おそらくは灰が緩衝地帯に赴いた時から。或いはずっと以前から、己でも気付かぬうちに巢食っていたに違いない。灰に真に問いたいのはこのようなことではない。だが、仁識は言葉を止めることが出来なかった。

「私が若衆頭への連絡の任を負ったことといい、何故何も聞こうとなさらない」

「聞く必要がないからです」

淡々と灰が答えた。

「聞く必要がない……？」

「透軌とつぎ様が仁識さんを今後の若衆との仲立ちに指名したということ、は、次代の若衆頭の座を仁識さんに譲ろうとお考えになったからでしょう」

仁識は息を呑んだ。

「……気付いておられたんですか」

「考えればわかることです」

「成程、若様には全てお見通しと言うわけだ。だが、これは御存じか？ 透軌様が私を次の若衆頭にと考えておられるのは何も私の力量を認めておられるからではない。若様の力と、若衆への影響力を

懸念するが故……若様を敢えて自分から遠ざけ、惣領家の者としての立場の違いを周囲に知らしめようとしているからです」

「透軌様にどのような思惑があるうとも、次の若衆頭には仁識さんが最も相応しいと、俺は思っています」

「光栄な言葉ですね。尤も、若様にとつては透軌様から遠ざけられる方がむしろ気が楽なのでしょうが」

己でもわかる程に冷たい声音だった。はじめて灰の表情が変わった。僅かに強張った面差の中で、瞳の色が暗く染まったように見えた。

「……何が言いたいんですか？」

「此度の緩衝地帯の一件にしても、何も語らずにおられるのは周囲を巻き込まぬためだともお考えか？　だが、若様がされていることは、周りを守ることなどではなく、ただ単に己を守るための独りよがりではない」

「独りよがり……？」

ぼつりと灰が呟いた。

「若様は常にあらゆるものと正面から対峙することを避けておられる。何も語らずただ黙していれば、己に煩わしい関心が向くこともない。透軌様の思惑にしても、見えぬ振りをし、目を逸らしてれば楽でしょう」

もつやめろ、と内心に囁く声がある。言葉は苦い余韻を口中に残す。自分がひどく歪んだ笑みを浮かべていることに仁識は気付いていた。

「だが、今後はこれまでのようにはいかぬ。今の惣領家の状況を若様とてよく御存じの筈です。どれ程に若様が目を逸らそうと、何も気付かぬ振りをしようと、迫る現実から逃げることなど出来はしない」

斜めに伸びた二人の影が長い。立ち尽くす灰の姿は揺らがない。だが、それはあまりに無防備に見えた。守りも何もない。鍛練ならば一撃で倒せるだろうと仁識は思った。途端に、痛烈な後悔に襲わ

れた。

(一体何を言っているのだ、私は……)

透軌の思惑も、緩衝地帯の一件も、このように腹立ち紛れに言葉にすべきことではない。仁識はただ単に己の鬱憤を灰に投げつけただけだ。だが、一度零れ落ちた言葉は消えない。その残滓が空中に漂い、仁識は自身の言葉に溺れているような心地に陥る。

「逃げている、か」

ぼつりと灰が呟いた。低く、抑えつけた響きだった。

「……否定なさるか？」

「いえ」

仁識の内に、その短い応えが落ちた。東の間視線が交錯し、後悔の渦の中にまた一つ、拍動にも似た震えが走った。言葉にせずとも、眼差しに読み取る。

気付いていたのか。

気付かぬ筈がない。惣領家の周囲で起こりつつあるもの。個々の思惑など関係なく、それは否応もなく人を巻き込む。暴力的なうねりとなる予兆を孕んでいる。仁識自身がそこに足を捕われ、身動き出来ずにいることもまた 灰が俯いた。

何も言わず、灰が仁識の横を通り過ぎる。背後に足音が遠ざかっても、仁識は振り返ることも出来ずただ立ち尽くしていた。遠く、淡い金に沈んでいく空が、眩しかった。

屋敷内は静まりかえっていた。仁識にしきは顔も上げず、階段へと向かう。意匠を凝らした華やかな内装も、息を潜めるかのような仄暗さの中では陰気に見えた。それとも常にこの屋敷を覆う陰鬱が、そう見せているのかもしれない。

屋敷に戻る度に感じる憂鬱は、しかし今の仁識には遠かった。それよりも更に重くのしかかるものがある。灰かいに投げつけた言葉への後悔は、今や自身への嫌悪になりつつあった。何故、あのようなことを言ってしまったのか。何も明かそうとしない灰に対して苛立ちを感じてはいても、無理からぬことと割り切ってもいたのだ。それが、まるで歯止めが効かなかった。

発端は、やはりあの時だろうか。灰と娘が交錯した光景が浮かんだ。よるめく娘を素早く支えた灰の姿、柔らかく、しかししっかりと娘の腕を掴んだその動きを、立ち竦んで仁識は見詰めていた。否、目を奪われていた。

(馬鹿馬鹿しい)

苦く思う。あの瞬間に、頭に血が上った。互いに見知らぬ者同士ぶつかり合っただけ、それがわかっていながら胸を焦がしたのは妬みというものなのだろうか。

宵へと向かう光の中で立ち尽くしていた灰の姿を思い出す。常に穏やかな静けさを感じさせながらも、灰は決して繊弱には見えない。引き締まり、無駄のない動きはしなやかに、どこか野生の獣を思わせた。

おそらくは纏う形が違うのだと、何時だったかそう言ったのは須樹である。体だけではない。心も含め、まるで骨格そのものが違うかのように。もしかするとそれは遠い東の地に生きる風の民特有のものなのかもしれない。戦いに秀で、権力に阿ることをせずに生きる自由の民。灰自身が、静けさの底に強靭さを秘めて、既存の

粹になど捕われぬ存在だ。例え何年多加羅で過ごそうと、あるいは若衆という集団に属そうと、灰はその中に溶け込むことをしない。それを設啓は疾剣せつけいと評したが、そもそも生まれ持ったの形が違うのならば的外れも甚だしい。相容れぬ存在を「異」と言うならば、灰にとつては己を取り巻くもの全てが「異」そのものだろう。

彼ならば、軽々と壁を越えて行くのだろうか、と仁識はふと思つた。あらゆる壁　己の偏狭な観念、家柄や身分でしか人を測ることの出来ぬ頑なな自我。そこから一歩たりとも動くことが出来ずに立ち竦む己とは、あまりに違う。

思考に捕われながら歩いてきた仁識は、階段の前に立つ人物に気付かなかつた。

「仁識」

呼ばれてはじめて顔を上げると、父親の姿があつた。後ろ手に手を組み、仁識を睥睨している。仁識は半ば警戒し、半ばうんざりとしながら立ち止つた。その思いが顔に出たのだろう、父親が険しく眼を細めた。ここ数日は顔を合わせることをさえていなかった父親は、明らかに仁識を待ち構えていたようだった。平静とは程遠い心持の仁識にとつては、対したい相手ではない。

「お久し振りです。父上」

わざとらしい皮肉に、父親の形相は益々険悪になる。顔を合わせるだけで不愉快になる相手ならば、わざわざ待ち構えておらずともよいものを、と内心で仁識は毒づいた。

「お前に確かめたいことがある。公歴書館で平民の娘と落ちあつているというのは本当か」

仁識の動きが止まる。瞬間、呼吸さえも忘れていた。その様子に、父親の形相が変わる。

「どうやら思い当たることがあるようだな。お前は我が家名に泥を塗るつもりか！　この恥晒しが！！」

怒気の籠る声は次第に大きく、高い天井へと罅割れて響いた。仁識はそれを遠く聞いていた。眩暈のような感覚に、足元が揺れたよ

うに思った。不意に笑い出したいような自棄に捕われる。もう二度と会うまいと思っていた相手とあいまみえた偶然も、灰にぶつけた己の感情も、そしてよりにもよってこのような時に己を待ちつけ、はかったかのような言葉を投げつけて来る父親の存在も、何もかもが腹立たしく疎ましかった。狂った歯車に噛み砕かれるかのように、自制が崩れていく。

「そのような出鱈目、どこから吹きこまれたのですか」

「出鱈目だと？ 出鱈目だと抜かすか！ 今日、第八公家の当主が直に伝えてきおったわ！ 確かに平民の娘と二人でいるところを奴の息子が見たとな！」

「成程、人を貶めようとする者の目には何もかもが歪んで映るらしい。ただ言葉を交わしている姿を見ただけでそのような邪推、むしろ恥じるべきはくだらぬ戯言を考えつく輩の方だ。虚言に惑わされるとは、父上こそどうかしている」

「何だと!!」

父親の顔が次第に赤く染まる。あくまでも無表情を保ちながら、仁識は父親の姿を冷たく見やった。

ことの裏側は至極単純だ。おそらくは博露院に通う第八公家の嫡男が、たまたま仁識と羽那が二人でいるのを見たのだろう。冬のはじめの頃だ。既に名すら覚えていないが、仁識が博露院に通っていた時分には、対抗心も露わに何かと難癖をつけてきた相手である。仁識が博露院をやめて何年も経っているというのに、いまだに彼に対する悪意を抱いているのに違いない。

馬鹿馬鹿しい。何もかもが、くだらない。

疚しいことなど何もない。浅薄な中傷だ。それに容易く踊らされる父親に、仁識が抱いたのは嫌悪に近い怒りだった。羽那への惑いも、公歴書館でのささやかな静寂の時も、それは仁識だけの領域だった。誰にも、踏み込ませるつもりはなかった。

「だが平民の娘と言葉を交わしたのは事実なのだろう。お前にはつくづく失望した。第六公家との婚約の披露目を目前に、例え真実で

なくともこのような噂一つがどれ程に命取りとなるか、それすらもわからぬか。己で己の未来を閉ざすようなものだぞ！」

「失望も何も、貴方にとつては私が博露院をやめた時点で、役に立たぬ存在だったのでしよう。したり顔でそのようなことを言っていたらだきたくはない」

「それが父親に対する物言いか!!」

大音声に響いたそれに、仁識は冷笑を浮かべた。

「今更父親面をなさるか。私が博露院をやめた折、もう父子の間柄ではないと仰られたのは私の記憶違いか」

怒りのためか、父親が大きく息を吸った。二度、それが響く。

「お前という奴は……そうまで私に楯つくか。若衆などという遊びに現を抜かすのを大目に見てやっていたが、それも誤りだったようだな！ くだらん連中の中になれば、自然と人間も腐るといふものだ！」

仁識の顔からゆっくりと笑みが抜け落ちた。

「貴方に若衆の何がわかる。腐っているのは貴方の方だ！」

鋭い声音に、父親の顔が強張った。

「もう一度言ってみろ」

「何度でも申し上げる。腐っているのは貴方の方だ。私のことは如何様に言っていたとしても結構。だが、思いのままにならぬからと言つて、全てを周りに転嫁し誹謗するのは単なる愚か者だ！」

仁識は拳を握り締める。言葉はそのまま己にかえってくる。

「愚かだと!? お前のために言っているのがわからぬのか!」

「いいや、違う。父上は、己が父親にも多加羅中枢にも認められなかった、その負い目と鬱憤を私にぶつけているに過ぎない！」

赤味を帯びていた父親の顔から、さつと血の気が引いた。強張った肩が震えている。どくどくと鳴る鼓動を聞きながら、仁識もまた微動だにしなかった。動けば、端から地面が崩れるような心地がしていた。

重い沈黙を破ったのは父親の方だった。

「そこまで父親を愚弄するか。お前のような息子など、おらぬ方が  
ました」

「祖父殿が、貴方ではなく私を認められたその時から、貴方が私に  
向ける眼差しは、息子に対するものではなかった」

愕然と目を見開いて父親が仁識を見る。

「……知っていたのか」

ぼつりと呟く声が虚ろに響いた。何を、だろうか。玄土であった  
祖父が、息子ではなく孫を自身の後継と認めていたことか、それと  
も、それを知ってから父親が仁識に向けるようになったものか。

仁識は答えなかった。

父親が踵を返す。最早一言もなく、仁識を振り返ることもなく、  
廊下を遠ざかって行った。

仁識は自室に入ると背後に扉を閉めて寄りかかった。そのまま床  
に座り込む。俯けば、母親譲りの僅かに赤味を帯びた髪が視界を覆  
い隠した。

もとより修復の仕様もない親子の関係だったが、己の言葉が決定  
的に壊したのだとわかっていた。抉られるような痛みを感じる。お  
そらくは父親も感じているだろう。それが、己が矜持を傷つけられ  
たことによるものであれば尚更に、父親は決して仁識を許しはしな  
いだろう。

(また母上が悲しむな……)

仁識は思い、自嘲した。父親を責めたところで己も同罪だ。結局  
仁識の存在そのものが、家族の絆を壊したのだ。知っていたのかと  
問うた、父親の打ちのめされた表情を思う。

座り込んだまま、仁識は記憶を手繰り寄せる。痛みを伴うからこ  
そ、仁識は敢えて過去へと思いを馳せた。

それは彼が十一の歳、今と同じ冬の季節だった。

祖父の部屋の前を通りがかったのは偶然だったようにも思うが、



もしかすると祖父と話しをするために部屋に行つたのかもしれなかつた。扉の内から漏れ聞こえた祖父と父親の声はさして大きくはなかつたが、彼が入るのを躊躇わせる響きがあつた。隙間から覗くと窓を背にして立つ祖父の姿は常にも増して大きく感じられた。その前に立つ父親の顔は見えなかつた。

何故、私が玄士を継ぐことに反対なさる。第四公家の実績を考えると、当然次代の玄士は息子である私になるべきだ。父上が一言仰られれば、周囲も納得する筈です。

如何に訴えようと、お前には玄士の座は譲らぬ。次の玄士は公平に、力ある者の中から選ばれよう。

仁識はその話題が祖父と父親の間で幾度も繰り返されていたことも、それが原因で二人の仲が険悪なものとなつていたことも知つていた。そつとその場を離れようとした仁識はぎくりと動きを止めた。

仁識ならば見込みもあるうというものだが、お前には玄士となるだけの器も能力もない。

厳しい祖父の声音だつた。突然出た己の名に、仁識は動きを縛られる。沈黙が落ちた。無意識のうちに息を殺し、仁識は耳をすませた。

私よりも、仁識を認めておられるのか？

ひそりと、父親が問うた。

お前には辛かろうが、偽りを申したところで意味もない。仁識は聡い。将来第四公家を担い、多加羅の権力中枢でも力を得るに十分な素質がある。だが、お前には無理だ。この先多加羅は益々困難な状況となる。そのような時に能力が十分でない者が玄士になれば、自滅し力を奪われるだけだ。お前が玄士となれば、我が一族を敵視する者達に抗することは出来ぬ。そうなれば第四公家の弱体化は必至、仁識の将来をも奪いかねん。

次に落ちた沈黙は先程のものよりも長く、更に重かつた。

私が玄士として果たせなかつたことは、仁識に託す。お前は第四公家を保つことに専念し、仁識を、多加羅を支えるに足る男に

育てよ。それがお前の最善の道、ひいては第四公家にとって最も望ましい道だ。

父親に対して、そして仁識に対しての宣告だった。それが父親にとつてはどれ程に辛い言葉であるか、仁識にはわかった。仁識は父親の答えを待たず、その場を離れた。聞くことが居た堪れなかったのだ。

だが、仁識は真に父親の心情をわかつていたわけではなかった。それを次に父親と対した時知ることとなる。仁識に向けた父親の眼差しには、最早温かさは欠片もなかった。そこにあるのは、己が決して得ることの出来ぬものを持つ者への妬みであり、憎しみだった。己から奪う者に向ける冷たい怒りだった。最早、父が子に向けるものではなかった。

仁識は懸命にそれに気付かぬ振りをした。父親の気持ちを考えれば無理もないと己を納得させ、やがて時が解決するのだと考えていた。だが、親子の間の亀裂は次第に深くなり、誰の目にも明らかとなった。月日が流れ、仁識に対する父親の蟠りが消えるのではないかという淡い期待はゆっくりと潰えていった。博露院に入った翌年、祖父が死に、その一年後、仁識は博露院をやめて若衆に入った。

今となつては、と仁識は思う。今となつては父親ばかりを責めることも出来ぬ。互いに歩み寄る努力をしていれば、関係を修復する機会はいくらでもあったのかもしれない。だが、父親の矜持が、仁識の意地がそれをさせなかった。そして仁識は祖父の期待に応えることも出来ず、父親の心情を解きほぐすことも出来ず、若衆に逃げたのだ。

「若様のことを責めることなど出来はしない」

呟きは虚ろに床に落ちた。若衆に入ったことを後悔はしていない。博露院では到底得ることがかなわなかった。ただろう多くのものを、若衆では得ることが出来た。だがその一方で、現実は容赦なく迫っていた。今まで対峙することを避け、目を逸らし続けていたもの。それに仁識は呑み込まれるだろう。

「どれ程に目を逸らそうと、何も気付かぬ振りをしようとして、迫る現実から逃げることなど出来はしない……か」

灰に言った言葉を、今一度呟いてみる。むしろ己にこそ相応しい言葉だ。若衆でいられる時も最早長くはない。

次第に部屋は薄墨に染まる。仁識は正面の窓を見上げた。残照は、既になかった。

灰は膝を抱えて星見の塔の前広場に座っていた。既に街は夜の底に沈んでいる。風は冷たかった。日中に感じた春の気配は欠片もない。

背後に扉の開く音が聞こえる。振り返ると、稟りんと秋連しゅうれんが近付いて来るところだった。

「兄様、風邪をひいちゃうよ」

稟は灰の肩に外套を被せると、横にちよこんと腰を下ろした。秋連が少し離れた場所に座る。寒そうに身を縮めているあたり、自分から出て来たのではなさそうだった。稟に引つ張られて出て来たのだらう。

「今、秋連様に星の巡りについて教えてもらっているの。あれが冬告げの雪竜せつりゅうでしょ？」

稟が遠い空を指差す。そしてつい、と大きく腕を横に動かした。

「もうすぐしたらあっちに春告げの鳳が見えるようになるんだって。鳳が一声鳴けば、草木が一齐に芽吹いて春になるって友達が言ってたけど、それって本当？」

無邪気に問われて、灰は言葉に詰まる。ちらりと横を見ると、素知らぬ顔で夜空を見上げる師の口元には笑みが浮かんでいた。些か人が悪い。灰がどう答えるか耳をすませている様子である。灰は苦笑しながら稟に向き直った。

「俺には鳳の声が聞こえないからわからないな。でも秋連師匠は物知りだから知っているかもしれない」

「こら、灰」

横合いからの声に今度は灰が素知らぬ顔をする。早速答えをせがむ稟に、秋連は困り顔である。

「稟さん、だめですよ。そんなところにいたら」

戸口からの娃娃えなの声に、秋連はほっとした顔で稟の背中を優しく押した。

「ほら、もう中にお入り。そろそろ寝る支度をしないと」

「秋連様と灰様も、そのようなところにはいけません。夜風は体に悪いのですからね」

叱るような口調で言われ、灰と秋連は顔を見合わせる。娃娃にかると、彼らも途端に手のかかる子供のようになってしまう。

「兄様、明日も晴れるといいね」

稟は言つと、身軽に屋敷へと駆けて行った。ほわりとした温もりは、稟が着せかけてくれた外套のせいばかりではない。

「本当に、優しい子だ」

秋連もまた同じことを思うのか、穏やかに呟いた。

「あまりあの子に心配をかけてはいけません。自分のことのように相手を思いやる子だ」

「はい。昔からそうです」

「君は、何か考え込んでいるようだね」

さり気ない問いかけだった。しんと冷える心地は変わらず、だが今は稟が残した温もりがある。灰は自然に答えていた。

「今日、ある人に耳に痛いことを言われました」

「耳に痛いこと？」

「はい。否定出来ないことばかりで、返す言葉もなかった」

仁識の言葉を思い出す。普段は感情を露わにすることのない相手の、焼けつくような言葉だった。

「だが、君はそれだけを気にしているようではないね」

静かに問われ、灰は腕に顎を埋める。仁識の言葉の鋭さよりも、相手が見せた表情を灰は思い返さずにはいられない。苛立ちを露わ

にしながらも、仁識の眼差しは真摯だった。ただ闇雲に言葉を投げつけたのではない。おそらく、そこにあつたのは灰を案じる思いだろう。

案じられていたのだ。その単純な事実気付いていなかった。今回の一件にしても、一人多加羅に残り、仁識がどのような思いでいたか。そしてそれ以前からも、灰の立場や課せられたものを仁識は察していた。幾度か問われもしたが、灰は決して答えなかった。その時は、それが最善だと思っていたのだ。だが、本当にそうだったのだろうか。

あまりに、気付かぬことが多過ぎる。ふと、灰は思った。何もかも、過ぎてから気付く。言葉にされぬその裏で、人が何を思うのか。須樹にしてもそれは同じだ。そしてあと一人

弦。

ちくりと、胸の内のどこかが痛んだ。

どうか闇に捕われることのないよう、くれぐれもお気をつけください

遠く、弦の音が響いた。自ら希望して灰の配下についたという、それが何故なのかわからぬ。反発ばかりを感じ、まともに目を合わせようとせせず、今更わかる筈もない。とうに、闇に捕われていたのかもしれない。ただ己のことばかりに感けて、弦の思いになど気付こうとすらしなかった。

「灰、君は抵抗を感じるかもしれないが、若い頃の惣領は君ととてもよく似ていた」

唐突な言葉に、灰は顔を上げた。秋連の横顔は穏やかだった。

「峰瀬様はもつと開けっ広げだったがね。だが、本質はよく似ているのだと思うよ。彼もまた、人と対する時、嘘というものを差し挟むことが出来なかった。無論、多加羅の惣領ともなればそのようなことも言っておれぬ。若い頃を知っている私からすれば、惣領の座を継いだ当初はかなり無理をしているように見えたものだ」

秋連は懐かしむように目を細め、そして灰を振り返った。

「惣領は生半可な能力で務まるものではない。所領とはいわば巨大なからくりのようなものだ。惣領は全体に目を配り不具合は正さねばならない。動きの妨げとなる部分は迅速に取り除き、あるいは一部に過大な負荷をかけることも辞さず、そうやって全体を動かす。峰瀬様は己の役割をよく理解しておられた。所領を治めるためには、時に人を切り捨て痛みを強いる必要があることもわかっておられた。それに苦しんだこともあつたらうと思う」

だが、と秋連は苦い笑みを浮かべた。

「彼は変わった。変わらざるを得なかった。それまでの己を深く内に沈め、果断であり、時に冷酷な惣領という枠に自らを当て嵌めねば、到底乗り切ることが出来なかったのだらうな。私は傍近くで見ているから、それに気付くことが出来なかった」

灰は言葉もない。灰自身は峰瀬を左程知つているとは言えない。そして、灰と対する時の峰瀬はあくまでも多加羅惣領でしかない。

峰瀬個人がどのような人物であるのか、それまで灰は考えようともしなかった。

「私と惣領は長く友人とも言える関係だったが、今ではそれも昔のことだ。もう嘗てのような間柄には戻れぬ。私自身、彼がどのような状況にあるか知ろうとせず、知りたいと思つた時には彼はあまりに遠い存在となつていた。人と人の関係は、ただ漫然と時を過ごすだけでは築かれぬ。言葉がなくとも心が通じ合う、そのような稀有な出会いもあるかもしれぬが、ごく僅かだらうな。多くの場合、葛藤を経て、言葉を尽くさねば、真にわかりあうことは難しい。そうして得た絆こそが友情であり、信頼なのだ、私自身気付くのが遅過ぎた」

後悔の念が滲む秋連の言葉だった。

「灰、君にはまだ遅過ぎるということはないのではないか？ 君自身、これまで自分の言葉で語つたことがない。伝えようと足掻いたことがないだらう。君の言葉を待っている人は、おそらく君が思う以上に多くいるだらうと私は思っているよ」

灰は俯く。責めるわけでもない秋連の言葉の一つ一つが、重く響いた。

言葉にせず黙していれば煩わしい関心を集めることもない、と仁識は言った。その通りだった。誰かと関わることは灰にとって得手ではない。信頼を向けられれば向けられるほどに、逃げ腰になる。そんな己をただ黙って見守る仲間達の優しさに、何時しか甘えていた。

さて、と一声あげ、秋連は立ち上がった。

「いやに説教臭くなってしまったが、私も偉そうに言えた立場ではないね」

秋連の視線が惣領家の屋敷の方角へと向けられる。真剣な光を湛えた瞳を伏せ、秋連は軽く灰の肩を叩いた。

「君も早く屋敷の内に入った方がいい。野菜始に叱られてしまうよ」  
柔らかに言うと、秋連は屋敷へと向かった。

灰は眼差しを街へと戻す。星明かりの下、灯火が滲むようだ。鳳の一声を待っているのは草木だけではない。そこに数多集う人もまた、春を待ちわびている。

「何事も遅過ぎることはない……今からでも……」  
今からでも　その先は続かなかつた。

仁識に、須樹に、伝えるべきことがある。彼らから向けられるものに、応えなければならぬと思う。否、応えたいのだ。そして今一度弦に対したならば、何を言うだろうか。

灰はふと、窓辺に佇む峰瀬の姿を思い出していた。彼が切り捨て、あるいは封じ込めてきたものはどれ程に多いだろうか。痛みすら読み取らせぬ深いその眼差しの奥に、何を秘めているのだろうか。

この時、はじめて灰は峰瀬の心を知りたいと思った。そして、それが遅過ぎる願いなのだと、既に知っていた。

公歴書館で仁識にじきと会った翌日、灰かいは鍛練たいれんの後に治都やとから声をかけられた。美味い屋台を見つけたからとも行こうと言う。断る間もなく、引きずられるようにして鍛練所を出た灰は、門に寄りかかって立つ須樹すきと仁識の姿に気付いた。

「待たせたな」

治都の言葉に、須樹は笑みを、仁識は訝しげな表情を浮かべる。

「お前を待っていたつもりはないが」

仁識が呟く。治都は満面の笑みで三人の顔を見回した。

「これで全員が揃った。行くぞ」

一人大きく頷くと、治都が先に立つて歩き出す。向かう先は惣領家の屋敷とは逆、市街地である。流されるように歩き出しながらも、仁識は不満顔で須樹に問うた。

「須樹、わざと私を呼びとめたのか？ あいつの気紛れに付き合っているのはごめんだぞ」

「不意打ちでもしないとお前はすぐに逃げるからな。須樹に足止めしとくよう頼んだんだよ。今日は俺がいいところに連れて行っている」

朗らかな治都の言葉である。仁識がその背中を、次いで須樹を睨みつけた。

「良いところなどと一体何処だ。くだらぬ場所に行く気はないぞ」

「美味い屋台を見つけたと、さっき聞きました」

「何だ、それは。私は帰る」

今にも来た道に戻りそうな仁識に、須樹が笑みを向けた。

「まあいいじゃないか。灰も仁識も、時間はあるんだろう？ こんな風に四人で街に出るのも随分久しぶりだ」

確かにその通りだった。これには仁識も不承不承ながらも口を噤む様子である。その横顔を、灰は見やる。昨日の今日で、互いの気



まずさは消えていない。

「しょうがない」

溜息混じりに呟き、仁識が灰を振り返った。淡い笑みが口元にあつた。

「行きますか」

「この先の屋台が美味いんだよ」

治都の声は人混みの中でもよく通った。娘達がすれ違いざまくすくすと軽やかな笑い声をあげるのもいつかな気にせず、三人を手招いた。

「何故往来で食べようなどと思うか、私にはいまいちわからぬ」  
仁識がぼやいた。

「往来で食うから美味いんじゃないか。どうせお前のことだ。家来に傳かれてのお上品な食事しか知らんのだろう。何とも不幸な奴だ」  
「余計なお世話だ、と何度言ってもわからぬらしいな」

「治都は舌が肥えているから、確かに美味いんだろうよ」

「さすがに須樹だ。どこぞのわからず屋とは違うな」

「ほお、それはもしかして私のことか」

「お前以外にはおらんが、他に思い当たる奴でもいるのか？」

三人に歩調を合わせ、灰は思わず苦笑した。この取りとめのない会話も久方ぶりである。

「お前も灰も、こうでもせんと街にも出ぬだろう。たまには俺に付き合え」

「まるで私と若様のためと言わんばかりだな」

「ああ、実際その通りだからな。お前ら最近少しかしいぞ。顔を合わせても仏頂面、言いたいことがあるらしい顔をしながら何も言おうとせん」

仁識が目を見張る。須樹と灰もまた、思わず治都の顔を見やった。治都はなおも笑みを浮かべたまま続ける。

「何があつたか知らんが、仲間が漸く揃つたというのにどうにも息が詰まる。こういう時は美味しい物でも食べて、嫌なことなんか忘れちまえ」

「それで食い気に繋がるあたりが、お前だな」

呆れたように仁識が言った。

「おうよ。それから街中では若様ではなく、灰だ。何のための変装かわからんだろ。なあ、灰」

突然に声をかけられて、灰は目を瞬いた。髪を隠していることを指しているらしい。須樹がぼそりと言う。

「あのな、治都、灰のこれは変装ではないと思うぞ」

「何でもいい。とにかく仲間同士、陰気なのは嫌なんだよ。わかつたらとつと俺について来いよ」

「ずんずんと先に進む治都を見やり、三人は何となしに顔を見合わせた。」

「あいつにはかなわんな」

「治都さんらしい、と言うか」

「悩むのが馬鹿らしくなってくる」

仁識は気の抜けたような声で言うと、灰を振り返った。

「昨日は、言い過ぎました。だが、嘘は言っていないので」

目を丸めた灰に、仁識は人の悪い笑みを浮かべた。謝られたのだと気付くまで暫くかかった。どうにもそうとは思えぬ口調であり表情である。

「わかつています」

灰の答えは笑みを含んでいた。須樹が戸惑つたように二人を見比べた。

「何だ、何かあつたのか？」

「とにかく緩衝地帯で何があつたか、真実を話していただきますよ。わかつていながら黙しているのはどうも性に合わない」

「おい、仁識……」

「案ずるな。真実を聞いたとて透軌様トウキには伝えぬ。若衆としての報

告は既に済ませた。これ以上は私事だ。お知らせする必要もない」

須樹の思考を読んだのか、仁識はその言葉を封じる。だが、そのようなことをすれば、仁識の立場は更に難しいものとなるのではないかと、灰は戸惑う。昨日の仁識の話では、透軌は灰の存在を警戒しているが故に仁識を取り立てた。もしかすると、第四公家という大家の後継ぎである仁識が灰と親しくしている、そのことへの牽制、という側面もあるかもしれぬのだ。

「言いたくないと言うならば、力尽くでも聞かせていただく」

思考の膜を、仁識の声が破った。沈黙を拒絶と取ったのか、表情は硬い。灰は我知らず小さく苦笑していた。

「……お手柔らかに、お願いします」

仁識がまたも拍子抜けしたような顔になる。

「灰……何も本当に手合わせするわけじゃないんだからな」

笑いを堪えた須樹の声音だった。三者三様に顔を見合わせる。陽の眩しさの向こうで、治都が手を振った。目指す屋台に着いたのか、小さな店の主にしきりに話しかけている。

「須樹も、私には聞きたいことがありそうだな」

須樹は小さく息をついた。  
「まあ、な。だが言わぬと決めたお前に問うても無駄だと思っ  
ていた」

「ふん、それもそうだ。だが、こちらが問うからには、私も問われ  
たことには答える。このように互いの信を失うのは惜しい」

須樹が頷く。仁識の視線が灰に向く。沈思するような深い眼差し  
だった。

「若様も、それでいいでしょう」

灰は小さく頷いた。

「俺達がぎくしゃくしては、治都が黙ってはおらん。あいつは  
諦めることを知らぬからなあ」

「治都に気遣われるようでは私もまだまだな」

「そうでもないさ。治都は人を見る目がある。あいつが気遣うのは、

こうと見込んだ相手だけだ。氣遣われるのは、むしろ誇っても良いことかもしれない」

「その考え方は……何やら腹立たしい」

慥然と言いながらも、仁識の表情は柔らかい。

「おい、何の話だ」

治都が両手に湯気を上げる串焼きを持って三人の元に来る。鶏肉を香草と一緒に焼いたものなのだろう、美味そうな匂いが広がる。

「俺の奢りだ。食え」

何やら得意そうな顔で治都が言った。

「だから、何故往来で食べねばならぬ」

言いながらも仁識は諦め顔、須樹は二人の遣り取りに淡い笑みを浮かべている。

三人に近付こうとして、ふと灰は足を止めた。何故、止めたのかわからぬまま、背後を振り返る。何かに呼ばれたような気がした。

(似ている……)

ぼんやりと思う。多加羅へと戻った時に感じたもの、それに、似ている。ぞわぞわと、まるで足元から絡み取られるように誘われるのは不安。灰の顔が強張った。これは、この感覚には覚えがある。あの時は静星<sup>せいせい</sup>だった。そしてこれは

瞬間、総毛立つような感覚に、灰は身を強張らせた。劈く悲鳴のように、全身を貫いたものがあつた。貪欲に、歪に、生あるものを求めて揺らめいている。その、気配。

(これは……闇)

信じられぬ思いで意識を凝らす。封印に抑え込まれている筈の闇の気配が、何故このような街中で感じられるのか。瞬時に広げた意識の波が、人々の間を縫い街の中心へと奔っていく。

「おい、どうした。灰」

背後に治都の声が響く。

不意に視界がぶれたように思った。蠢く、禍々しい気配を、意識の網が捉えた。膨大なその存在、位置は惣領家の屋敷のあたりか。

「どうしたんだ？」

誰かの手が肩にかかる。咄嗟に振り返ると、須樹の顔があった。それを束の間見詰める。須樹が眉を顰める。己がどのような顔をしているか、灰にはわからない。

「大丈夫か？」

問う声が歪む。飢えた獣のような、闇のどよめきが大地を揺るがして響いた。灰は答えぬまま走り出していた。背後で呼びかける声は一つではない。だが、振り返る間でさえ惜しかった。

これ程の闇　今なお意識を切り裂くように在るそれは、いまだかつて感じたことが無い程大きなものだった。否、一度対したことがある。多加羅に来て間もない時期、夜の山から噴き出した闇　まるで山そのものが突然異形に変じたかのような、それに似ている。(まさか惣領の身に何か……)

全力で走りながら灰は思う。これ程の闇が一気に噴出するのは尋常ではない。封印の言霊を魂に抱く峰瀬みなせに、何かが起こったとしか思えなかった。街並みが流れる。灰の耳には、己の呼吸と鼓動の音だけが響いていた。

「おい、何だ。どうしたんだ。灰の奴一体……」

串焼きを手にしたまま呆気にとられたように治都が言う。既に灰の姿はない。須樹もまた茫然としたまま人混みを見詰めていた。振り向いた時の灰の表情、血の気が失せたそこにあるのは紛うことなき恐怖だった。

「追うぞ」

一声発し、横を走り抜けたのは仁識だった。問い返す間もなく、須樹はその背を追う。

「おい！ 何処行くんだよ！ 串焼きどうするんだよ！」

「お前が全部食べる！」

にべもなく仁識が返した。足を緩める気配もない。須樹もまた遅

れを取らぬよう足を速めた。治都が何やら叫ぶも、それは流れる喧噪の中に紛れて遠ざかる。若衆でも俊足を誇る灰である。その姿は既に見えない。

漸く灰の姿を捉えたのは人通りの多い界限を抜けた時だった。遠く、走る背は真直ぐに街の中心を直指していた。そのさらに先には貴族の屋敷が、そして惣領家の黒々とした薨が見えた。

灰は惣領家の屋敷の前で足を止め、膝に手をついた。息が荒い。門の傍らに立つ兵士が驚いた顔で見詰めている。だが灰が門内に踏み入っても声をかけようとはしなかった。

扉へと向かいながら灰は目を細めた。闇の波動は屋敷よりも更に下を感じる。

(地下　?)

惣領家の屋敷に地階があったのだろうか。突然流出した闇は、戸惑っているかのような緩慢な動きである。だが、確かに在る。濃密な気配に気を取られていた灰を、不意に慣れ親しんだ存在が包み込んだ。又駆だ。又駆もまた闇に反応している。揺れる粒子の中に、爆ぜるような緊張があった。

扉に手をかけようとしたその時、扉が内側へと開いた。手を上げかけた姿勢のまま、灰は屋敷の内に立つ男を見る。白玄だった。老いた顔は青ざめていた。

「屋敷内からお姿が見えました故……ここに来られたということは、やはりお気づきになられたのですな」

「白玄様、惣領の身に何かあったのですか」

急いで問うた灰に、白玄はゆるゆると頭を振った。声を潜めて言う。

「まずは中にお入りを。このような場所では……」

「灰！」

背後に響いた声に、灰は振り向いた。道の向こうから走り来る須

樹と仁識の姿を認める。

「お前達、止まらぬか！」

兵士の鋭い声音に、二人が門の向こうで立ち止った。

「一体どうしたんだ！」

「何があつたんですか」

ああ、まただ、と灰は思う。また案じさせている。その惑いもすぐに消えた。ずん、と微かに地面が揺れた。怪魅師けみしでなくとも感じただろう。白玄の色の無い顔がさらに強張った。迷っている時間はなかった。

「彼らを通してください」

有無を言わせぬ口調に、兵士が黙って従った。須樹と仁識が戸惑いながらも近付いて来る。灰は改めて白玄に向き直った。

「何があつたのか話してください」

「ですが彼らは」

「今は時間が惜しい」

白玄の顔に驚きと迷いが過る。やがて一つ頷くと、三人の若者を屋敷の内に招じ入れた。屋敷の内には人気がなかった。普段から左程人が多いとも言えぬが、気配さえないのは不自然だった。訝しく周囲を見やった灰の思いを察したのか白玄が言った。

「今日はこの屋敷内に僅かの者しかおりません。透軌様も博露院の視察へ行っておられます。万が一にも被害が出てはならぬと、惣領が配慮なさいました」

「惣領はどちらです。何が起こっているのですか」

背後に立つ須樹と仁識の視線を感じる。白玄の躊躇いを、灰はもどかしく感じた。闇はなおも足下に在る。その蠢きが次第に荒々しいものになっている。闇が目覚めつつある。封印はどうなっているのだろうか。

「白玄様、彼らは俺の怪魅の力を知っています」

白玄の驚きに先んじて、灰は言葉を続けた。

「封印が破れ、闇が溢れば、多くの人が喰われます。惣領が御無

事ならば、一体何が起こっているのですか」

老いた眼差しを灰に据えて、白玄は重く言った。

「惣領のもとに御案内いたしましょう。闇のもとに、惣領はおられます」

頷き、灰は須樹と仁識を振り返った。

「今更来るなどは言わせませんよ」

緊張の中にも決意を滲ませて、仁識が言った。

白玄に導かれて向かったのは小さな部屋である。物置として使われているのだろう、整然と並べられた棚の間を抜けると、奥にまるで隠されているかのように小さな扉があった。白玄は懐から古びた鍵を取り出すと、扉の鍵穴に差し込んだ。がちりと錆びた音が響く。細い階段が扉の向こうにあった。

「この先は多加羅の街下に築かれた地下道へと続いています。足元にお気をつけください」

扉の横にかけられた硝子筒に火を灯し、白玄は先に階段をおりていった。湿った空気に足音が重なる。両壁の凹凸が、影から影へと流れた。階段はゆるゆると螺旋を描く。

「白玄様、本当のことを仰ってください。このような気配は尋常ではない」

「灰様、惣領のお体は周囲が思う以上に状態が悪くなっております。おそらくは言霊の負担に体が耐えられなくなってきたのででしょう。先代惣領がお亡くなりになられる前も、同じように次第に力を奪われておられました。体が弱まる程に封印も弱まります」

「だから闇が溢れ出したのですか」

「いえ、闇は溢れてはおりません。古くより築かれた強力な結界の内に、敢えて解き放たれているのです」

灰は驚きに息を呑んだ。そのような結界が存在するなど初耳である。



「ですが、そのためには一度封印を解かねばならぬ筈。今の惣領のお体では再び封じ込めることは出来ないのではないのですか」

「再び封じる必要はございません。この儀式が終われば自然と闇は封じられ、封印そのものもさらに強いものとなります」

「……儀式？」

「生きた人の魂に言霊を刻み込み、結界の内に解き放った闇に喰わせるのです。そうすれば、闇そのものの中に、強力な言霊の封じを打ち込むことができません。人柱、と呼ばれております」

人柱 反芻し、灰は愕然とする。

「……そんな……」

声が震える。

「何故、そのようなことを！ そのようなことをせずとも、俺が闇を滅していれば……！」

「最早惣領のお力では再び封印を施すことは無理なのです。しかし闇は益々力を強めるばかり……惣領にとっても苦渋の選択だったのです」

「命を犠牲にするような方法など……もつと別の道がある筈です！」

「灰様、惣領とて別の方法があればそれを選んでおられます。多くの命を救うためには、時に辛い選択も必要となるものなのです」

「一体誰を……」

囁くような問いかけに、白玄は黙した。硝子筒が、かちやりと音をたてた。老いた背に影が揺れる。

「人柱は、弦げんにございます」

灰は立ち竦んだ。

「……弦殿が……」

囁くように言ったのは須樹だった。灰はそれを遠く聞いた。白玄が立ち止る。振り返った顔に浮かんたものが何であるか灰にはわからなかった。疲れのようでもあり、諦めのようでもあり、己の無力を知る者の痛みであったかもしれない。それがどのようなものであれ、灰は何の感慨も呼び起こされなかった。

弦。

次の瞬間、灰は走り出していった。暗闇の底へと落ち込むかのような階段、その先に弦がいる。闇に捧げられる人柱として

(そのようなことはさせぬ!!)

荒れ狂う感情の周りに厚い膜がある。今灰を突き動かしているのは、奇妙に冷たく、透徹とした意思だけだった。

暗闇は苦ではない。意識の触手に、目に見えずとも周囲の形状はわかっていった。階段の終わりは唐突だった。大きく蛇行した先に、四角く淡い光があった。そこに走り込み、灰は蹈鞴を踏んだ。木の手摺にぶつかりそうになったのだ。寸でのところで立ち止り、灰は辺りを見回した。

そこは広い円形の空間だった。まるで大地の真中を球状にくり抜いたかのように、滑らかな壁が周囲を取り囲んでいた。四方にかけられた硝子筒が、辺りを柔らかく照らしている。円形の中程にぐるりと通路が築かれ、そこに設えられた手摺に灰は寄りかかっていた。通路から下を見れば、かなり高い位置にいるのだとわかる。空間の底は平らにならされていた。その中央に横たわる人の姿に、灰は息を呑んだ。弛緩し、ゆったりと横たわる様は、まるで眠っているようだ。

「弦!!」

呼びかける。

「意識がないから声は届かぬ。せめて苦痛を感じぬ方がよからう」

静かな声に灰は顔を上げた。灰と対する位置、真向かいの通路の上に立つ峰瀬の姿があった。灰の視線に、するりと腕を組む。顔は青ざめているが、姿は揺るぎない。

「お前がここに来た、ということとは白玄が言ったのか」

「すぐに儀式を中止してください」

「それは出来ぬ。お前ならばわかるだろう。既に闇は目覚めている」  
灰は峰瀬を睨みつけた。

「何故、このようなことをなさる! 何故……彼を人柱などに!」

「この儀式では無理矢理に人の魂に言霊を刻み込む。その負荷は生半可な者には耐え難い。心身ともに、耐え得る者を選べば、それが弦だった。弦自身も、了解したうえでの決定だ」

空間がびりびりと震えた。はっと、灰は下を見る。穏やかに目を閉ざした弦の周囲が揺らめいた。と、弦の体を取り囲むように幾筋もの黒い靄が地中から噴出した。

「何だこれは！」

誰かが背後で叫んだ。須樹だ。黒い筋は狂おしく惑い、絡み合う。炎のように、あるいは水のように、無音の舞である。灰は目を細めた。うつすらと、空間に張られたものが見えた。光を帯び、それはまるで籠目のように空間の真中を覆っている。幾分小さな球体が地面に埋め込まれているかのようなのだ。

(これが結界)

よくよく目を凝らせば、言霊により編まれたものであることがわかる。光を帯びる細かな粒子の一つ一つに、紡がれた力が籠っている。このように強力な結界を築くのに、どれ程の歳月と能力を要するのか見当もつかなかった。

己の自由を唐突に悟ったかのように、闇が弾けた。しかし漆黒の奔流は、結界に弾かれ撓む。幾度も衝突を繰り返し、荒れ狂う獣さながらに闇がのたうった。その奔流の向こうに、弦の姿が消える。

(どうすればいい。どうすれば……)

灰は焦りのままに通路を見回した。下へおりるための階段は峰瀬が立つ傍近く、距離は遠い。

不意に闇が動きを止めた。獲物の存在に気付いたのだと、灰は悟る。

「灰、わからぬのか！ 最早弦を救うことは出来ぬ。せめて最後を見守ってやれ。それが、惣領家の者として出来る唯一のことだ」

峰瀬の言葉が、打ちこまれる杭のごとく響いた。灰は大きく頭を振る。

闇がすすると地中に沈む。

次の瞬間、弦の体が大きくのけぞった。弦の胸を貫き、闇が高く立ち上がった。その先端、まるで蛇のようにくねる闇に捕えられて、淡く光るものがあつた。

灰は手摺を乗り越え、弧を描く壁面へと体を投げていた。高所から、不安定な体勢での着地に体が傾ぐ。それを何とか耐え、灰は右手を掲げる。漆黒の剣を象る、そのほんの数瞬の間さえももどかしかつた。捕われた仄かな光が闇に覆われる。

「させぬ!!!」

灰は叫んだ。今や闇は巨大な一つのうねりとなっていた。それに、意識の波をぶつける。弦の体をも喰らい尽くさんとしていた闇が揺れ、獯猛な波が灰へと向けられた。それは蛇が鎌首を持ち上げる様に似ていた。

灰は結界の淡い光の内、闇へと向かつて行つた。

「灰、戻れ！　喰われるぞ！」

峰瀬の叫び、それに幾つもの声が重なり、背後で途絶えた。

結界の内は轟々たる有様だった。

光の網を避けるように中心部に集まった闇は、漆黒の嵐だ。そこから幾つもの黒い奔流が牙を剥いて灰に押し寄せる。迫り来るその一つを、灰は剣の一薙ぎで打ち払った。剣に触れた箇所から闇が破裂し、光の粒子に変わる。片足を軸に回転し、背後から襲いかかる闇に剣を突き刺すと、一気に怪魅の力を注ぎ込んだ。大蛇のような闇のうねり、その先端から本体である巨大な塊に向けて力が奔る。音もなく、闇が内側から破碎した。

灰の抵抗に、闇の触手が一齐に中心の塊に吸い込まれ、漆黒の球体となる。思わぬ手強い敵の出現に相手の出方を測るような、それは闇そのものに意思が宿ったかのような動きだった。球体は灰が胸にかけた黒玉と奇妙な程似ていた。息詰まる程の闇の波動は、だがほんの一部でしかない。地中にはさらに巨大なうねりが、出口を求めて蠢いている。

地中に意識を向けた、その一瞬を狙い澄ましたかのように、闇が鞭のようになつて横合いから灰へと迫った。咄嗟に身を屈めてそれを避けた灰だったが、焼けつくような痛みにも右足を取られる。足首に細い触手が絡みついていて、引きずられそうになり、左膝をつく。

来る。

灰は剣の切先を地面に触れる程に下げた。

正面から灰を呑み込まんと闇が迫る。灰は剣で空間を斜めに切り上げた。その軌道に乗せて、怪魅の力を叩きつける。視界を覆う程に近付いていた闇の触手が切り裂かれ霧散した。風の刃となつた力は、さらにその背後、球状の闇をも貫き砕く。だが、穿たれた穴はすぐにどろりと塞がれる。

と、傍らで叉駆の咆哮が響いた。獣の巨軀が具象化し、灰の右足

首を捕える触手に飛びかかる。その牙に切り裂かれ、闇がするすると逃げた。

牙を剥き出して唸りながら、又駆が灰に寄り添う。

再び闇が空間を奔る。今度は多方向から、避けようもない速度で触手が迫った。又駆が飛びかかるうと身を低く撓める。

「又駆、動くな」

言つや、灰は剣を地面に突き立てた。その一点を中心に、四方へと力を迸らせると、迫り来る闇が解けるように光に呑まれた。

苛立ちをあらわすかのように、闇の表面が小波立つ。灰はゆつくりと立ち上がり、鋭く目を細めた。仄かな光の気配　弦の魂はまだ取り込まれてはいない。だが、このままでは助け出すことは出来ない。怪魅の力で滅したところで、地中から闇は溢れ続け、いずれ灰の力の方が尽きるだろう。そうなる前に闇を封じなければならぬ。灰は焦りを抑えつける。

（考える。何か方法がある筈だ）

深く息を吸う。方法は一つ、ある。迷っている時間はなかった。

剣を離す。地面に落ちる前に、剣は形を崩し、消えた。灰はゆつくりと闇へと近付いた。

闇がじわりと形を崩し、左右へと広がった。飛び立つ前の鳥のようなそれを、灰は奇妙に静かな心持で見詰めていた。翼の内に包み込むようにして、闇が灰を取り巻いた。視界が閉ざされる前の一瞬、こちらを凝視している峰瀬の姿が見えた。須樹と、それに重なり仁識の声が聞こえたように思ったが、漆黒のうねりの向こうに全てが消え、灰は闇に包まれた。

闇に取り巻かれながらも、灰は呑み込まれたわけではなかった。寄り添う又駆の力と、自身の怪魅の力に守られ、灰は辺りを見回した。闇が灰を捕えようとするも、張り巡らされた力に弾かれ、その度に衝突の余波で風が生まれた。衣の裾がゆらゆらと揺らめく。

灰は呼ばれるようにして歩を進める。歩く程に、体から意識が乖

離するような感覚に支配される。

(近い)

魂と魂には引きあう性質がある。静星せいせいの魂に触れられた時の感覚を灰は思い出す。常であれば肉体という殻に阻まれて感じることはないが、一度それから解き放たれば、魂は互いに呼び合い結びつこうとする。

もしかすると、と灰は思う。闇の本質もまた同じなのかもしれない。貪欲に命を求めるのは、闇の内に捕われた魂の群れがそうさせているのか。まるで孤独に耐えかねるように　　そうであれば、闇のどよめきは魂の叫びそのものなのだ。だが、最早救うことは出来ぬ。

そして今、救うことがかなうのはただ一つの命だけだ。

灰は張り巡らしていた怪魅の力を解く。阻むものがなくなったのを察したのか、闇が灰を取り巻いた。全身を闇に浸されながら、灰は両手を虚空に伸ばす。その先に、求める光が在る。

幾筋もの闇が体を貫くを感じた。おぞましい　　そして、哀しい。視界がぶれる。指先から、光が漏れる。闇に絡み取られ、体から奪われようとしている。それが己の魂を形作るものなのだと、灰はひどく冷静に認識していた。体の感覚が遠い。

来い。

呼びかける。囁くようなそれに、闇の内を漂っていた光が、揺れた。微かに惑いながら、もう一つの魂の存在に引かれて光はゆつくりと灰の指先に落ちた。触れた一点から、熱さが迸る。慄く程のそれに、灰は半ば手放しかけていた肉体の感覚を思い出す。歯を食いしばり、両手に光を包み込むと、灰は己を絡み取るうとする闇を弾き飛ばした。白熱したように視界が染まる。切り裂かれる闇のどよめきが、意識を貫く。それに、灰は思わず瞳を閉じていた。

実際に光を具現させていたのかもしれない。瞼の裏を光の残滓が揺れる。ゆつくりと目を開いてまず視界に映ったのは、地面だった。灰は蹲るようにして膝をついていた。又駆が体を包み込んでいるのを感じる。両手の内の魂は、光の渦だった。見詰める程に引きこま

れそうになる。両手で包み込める程でありながら、どこまでも深い空に似て、底がない。

灰は光の渦の表面に薄らと凝るものに気付く。命の揺らぎとはあまりに異質な、それこそが言霊だった。

魂を奪われて、闇が一層猛った。間断なく浴びせられる執拗な攻撃を弾きながら、灰は言霊に意識を集中した。時間をかけることは出来ない。ここで怪魅の力が尽きれば、弦の魂のみならず、灰も闇に吞まれるだろう。

言霊は音である。だが、音として条斎土じょうさいつちに唱えられる前は、あくまでも人が作り出した象形でしかない。言霊の本質は形なのだ。今、灰にはそれがはつきりとわかった。魂に食い込むようにして刻まれた言霊は、うつすらと、文字を象っていた。

その言霊は鎖を思わせた。四つの異なる文字が複雑に絡み合っている。それこそが多加羅惣領家が代々守り継いできた秘術、白沙那はくさな帝国中枢部の叡智を以てしても解明出来ないのも無理はなからう。書物で言霊の知識を少なからず有する灰にしても初めて目にするものだった。

言霊を壊さぬよう、灰は怪魅の力を伸ばす。自身の意識の波が、まるで繊細な触手のように言霊に絡みつくのがわかる。灰の力に捉えられて、りん、と澄んだ鈴の音に似て、言霊が震えた。こめかみを汗が流れる。極度の集中に、額の奥に鈍い熱さが広がっていく。ゆっくりと、光から言霊が浮き上がる。言霊は、春先の蝶にも似て、掌にも包みこめそうな程に小さく、儚く見えた。だが、その内に闇を封じ込める力を秘めている。人が扱うにはあまりに大きく、危険だ。

幾重にも怪魅の力で包み、灰は言霊を一気に地中へと放った。解放を求めて蠢く闇の中へ、言霊は一条の光となって打ち込まれた。光に惹かれるように、闇が殺到する。怪魅の力を喰い破り、闇が言霊に触れた。その瞬間、言霊に込められた力が弾けた。

闇が吠えるのを、灰は聞いたように思った。まるで悲鳴のように、



それはびりびりと空間を震わせる。網のように広がった言霊の力が闇を絡め取っていくのがわかる。それは地中に留まらず、地表にも溢れ出す。灰と叉駈を取り巻いていた闇が言霊から逃げようとするかのように拡散し、そして崩れ落ちるようにして地中へと引きずり込まれた。

轟音の後に、静寂が落ちた。

一瞬で、全ての闇が消えていた。

灰は顔を上げた。ちらちらと揺れる結界の向こうに、大地の色が見えた。

再び手の中を見る。揺らめく光が、あまりに眩しく見えた。その先に、弦の姿がある。漆黒に視界を覆われていた時にはわからなかったが、弦の体は灰のすぐ傍にあったのだ。灰はほっとする。立ち上がれそうにない。

右手を伸ばし、弦に触れる。鼓動が弱い。魂が抜け落ち、闇に捕われ、体は時を止めつつあった。魂より先に、器である肉体が壊れようとしている。手の中の光が、帰る場所を見失ったかのように、寄る辺なく揺らめいている。

「死ぬな」

呟く。

闇は既に死した者達の墓場に過ぎません。例え、灰様のお力をもつてしても決して救うことがかなうものではありません。それをお忘れなきよう……

諭すような弦の声が聞こえる。

わかっている。この力ではただ滅するか、支配するしか出来ぬ。

「だが俺は、癒し守るために使いたい」

囁きとともに、灰の体からゆっくりと光の粒子が抜け落ちていった。灰の魂から零れ落ちた命の欠片が、惑うように揺れ、弦の体を包み込む。それはまるで水が染み込むように、弦の体の中へと溶け

た。弱々しく消えつつあった命の波が、僅かに強まったように見えた。

ゆっくりと、体から力が抜けていく。疲労とは明らかに違う。指先から、凍えるような冷たさが広がる。それが胸に達し、体の奥が引き絞られるように痛んだ。鼓動が不穏に揺れた。腕をあげていることも出来ず、手が地面に落ちた。その拍子に零れ落ちた光の渦が、引き寄せられるように弦の体の中へと消えるのを灰は見た。

灰は目を閉じる。凍えるような寒さは、全身に及んでいた。体の感覚がない。だが一点、額だけが温かかった。そこに確かに脈打つ鼓動を、灰は最後に感じていた。

ゆっくりと倒れ込む灰の姿を見て、須樹は手摺を飛び越えていた。焦りに足元が縛れた。無理に逆らわずそのまま一回転して着地する。傾斜する壁面を駆けおり、中央に倒れる二人のもとへと駆け寄った。「灰！」

呼びかけても応えはない。弦の胸元に額をつけるようにして、灰は目を閉ざしていた。その顔色が白い。まるで血の気がなかった。

「息をしているか？」

同様に手摺を乗り越えて来たらしい仁識が背後から問う。須樹は灰の口元に手を翳し、ほっと息をついた。須樹の隣りに屈み込んだ仁識が灰の腕に触れて眉を顰めた。

「まずそうだな」

須樹も灰の腕に触れ、息を呑む。体温が異様に低く感じられた。

「弦殿は無事のようなだな。一体何があつたんだ」

思わず呟いた須樹に、深い声が答えた。

「おそらくは灰が弦の魂から言霊を分離し、闇を封じたのだろう」

思いの外近いその声の響きに、須樹は振り向いた。峰瀬が階段をおり、近付いて来る。峰瀬は須樹と仁識の間に膝をついた。思わず身を引きそうになり、須樹はそれを堪えた。須樹の表情をちらりと

見やり、峰瀬が言った。

「二人ともに、すぐにも医術者にみせた方が良い。尤も、医術者では真に癒すことは出来ぬだろうが、何もせぬよりはましだろう」

「どういうことですか」

仁識の声音は鋭い。不敬と言われてもおかしくはないものだったが、峰瀬は気にした風でもなかった。

「弦は魂も体も闇に捕われていた筈だ。闇を封じたとして無事では済まぬところだが、おそらく灰が弦を救ったのだろう。白玄」

「いまだ通路に立ち尽くしていた老人は主の声音に掠れた声をあげた。」

「呆けている場合ではないぞ。医術者の手配をせよ。ああ、それから部屋の準備もだ。屋敷内に少しくらいは動ける者もおろう」

「承知致しました」

峰瀬は須樹と仁識を見やる。真剣な眼差しに二人は黙り込んだ。

「何か言いたそうな顔をしているが、私とて君達には大いに聞いたことがある。君達はどこまでを知っている」

「君達は若衆か」

そう言つと、峰瀬は振り返つた。その姿を光が取り巻く。窓から差し込むそれは、淡く、柔らかく、熱度のない白さだった。須樹は息を吸うと唾を呑み込んだ。口が渴いていた。

「どこまでを知っている」

地下で問われたのと同じその言葉である。だが、須樹にはまるで初めて問われたかのように、響いた。地下から惣領の私室らしい部屋まで連れて来られた。その距離は短くはなかった。考える時間はあつた筈だが、意味のある言葉は何も浮かばなかった。

「何故、君達はあの場に来た」

再度問つた峰瀬に答えたのは仁識だった。

「灰様の様子を不審に思い、後を追つて来ました」

「白玄の話では、灰は君達が怪魅の力を知っていると云っていたよ

うだが、灰が話したのか」

空気が張り詰めた。仁識が答えかねるように黙した。だが、二人の若者を見やる峰瀬の眼差しは、沈黙を許すものではなかった。

「三年前、火つけの騒ぎの折に、地下道で灰様が闇を滅するのを見ました」

仁識が低く言った。須樹の驚きに気付いただろう仁識は、あくまでも色を感じさせぬ声音で続ける。

「今日見たあの闇と同じものです。ですが、その後私がどれ程に問おうと、灰様は知る必要のないことだと仰られるだけで、真実をお答えになることはありませんでした」

「君はどうなのだ。何故、灰が怪魅師であることを知っている」

唐突に向けられた問いに、須樹は息を詰めた。灰に全て聞いたのだと、答えるべきなのだろうか。灰が何を思い須樹に話したのか

それはわからぬ。だが、峰瀬に真実を言うのは、灰への裏切りのように須樹には思えた。と、仁識の声が響いた。

「三年前に地下道で見たことを、私が須樹に伝えました」

仁識は一瞬、須樹に眼差しを投げると、挑むように惣領を見据えた。須樹は感情を抑えて顔を正面に向けた。

「あの時は私も相当に混乱していましたので……須樹ならば誰にも口外することはないだろうと考え、彼にだけは打ち明けました」

小さく峰瀬が俯いた。ゆっくりと下ろした指先が、机の淵に触れる。その、何気ない小さな動きに、須樹の胸の内不安が沸き起こった。ふと、峰瀬は全てを知っているのではないか、という思いに捕われる。須樹や仁識の思い、そして灰の思いも全て知ったうえで問うているのではないか。馬鹿げた考えだと打ち消すには、目の前の男の姿はあまりに静かに、大きく感じられた。

「君達の言葉が真実か否か、私には左程重要なことではない。仮にここで君達が偽りを述べているのだとしても、私が君達を罰することはないし、例えば君達が真実を述べているとしても、灰への咎がなくなるわけではない」

「何故、灰様をお咎めになるのですか。無理矢理にあの場について行ったのは私達です。灰様に非はありません」

黙した須樹とは対照的に、仁識が喰い下がった。

「灰は私の命に背いた。君達のことは関わりない」

峰瀬は仁識をちらりと見やり、素気なく言った。

「私が君達に望むのは、口を閉ざし、ここで見聞きした全てを忘れることだ」

それは命令だった。穏やかな口調でありながら、問うことすら許さぬ響きがあった。凍るように冷たく、どこまでも静かである。佇む峰瀬の姿が、一振りの剣を思わせた。

「灰に……灰様に何をさせておられるのですか」

須樹は言った。衝動を自覚するよりも前に言葉が零れ落ちていた。「灰様が命に背いたというのは、弦殿を助けたことを言っておられるのですか？ 目の前で人が死ぬのをただ見ていると、それに従わぬから咎めると言うのですか」

須樹、と横から呼びかける仁識の声が聞こえた。だが、須樹は己を止めることが出来なかった。峰瀬の表情は動かない。言葉は岩肌を撫でる微風のようなものだ。いや、風ならば膨大な時間の果てに岩を削ることもある。言葉はただ無為に、空気に消えるだけだ。だが、言葉にしなければ、それもまたただの無であり、盲従なのだと須樹は思う。

「どうか、灰様をお咎めにならないでください」

「私に何度も同じことを言わせるな。君達は何も問わず、ただ目を閉ざせばよい。そうすれば何事もなく、これまでと同じような生活を続けることがかなおう。君は私の言葉が理解出来ぬ程に愚かではない筈だ」

いまだ体の芯に残る地下の冷たさと、周囲に澱む薄暗さに、須樹は息苦しさを覚える。それだけではない。惣領家の深奥に巢食う闇の、それを峰瀬の背後に見たように思った。何もかもを呑み込み破壊する、その前で人はあまりに小さい。否、それは闇ですらない。

そして、それこそがおそらくは灰が対してきたものなのだと、須樹は気付く。

「ここで見たことは決して誰にも言いません。ですが、見たことから目を逸らし、忘れることなど出来ません」

「ではどうすると言うのだ」

須樹は言葉に詰まった。喉元まで出かかった答えが、あまりに空しいものだとなっていた。彼の思考を読んだように、峰瀬が熱の籠らぬ口調で続けた。

「よもや灰の力になるつもりなどと考えているのではあるまいな。何人も灰の助けとなることは出来ぬ。灰が負っているものは、多加羅惣領家に生きる者の運めだ。我が血族は、この運命からは逃れることは出来ぬ」

須樹は惣領を見やった。はじめて、言葉に感情の響きが籠っているように感じたのだ。だが、そこにあるのが悲哀なのか、確固たる信念なのか、それはわからなかった。

「君達に出来ることは何もない。己の無力を知ることだ」

須樹は俯いた。惣領の言うことは尤もなことだ、と心の奥底で囁く声が出た。これ以上踏み込めば、見たくないことを見るだろう。聞きたくないことを知ってしまうだろう、と。ただ若衆として、仲間としての灰を知っていればいい。それもまた灰自身ではないか。何よりも、灰が知られることを厭っている。

だが、何か、烈しく己の内を蠢いているのを須樹は感じた。

「出来ることはありません」

須樹は顔を上げた。真正面から峰瀬を見詰めた。

「灰様の傍に居ることは出来ます。この三年間、俺達は仲間としてともに力を合わせてきました。例えあの闇に抗する力はなくとも、必ず別の方法で、助けることが出来る筈です」

言いながら須樹は不意に弦の言葉を思い出していた。緩衝地帯で蛇達を追っていた時、何故灰が秘めていることを明かすのかと、そう問った彼に弦は答えた。己がいつまで灰を守ることが出来るかわ

からぬからだ、と。弦は知っていたのだ。己が人柱として闇に捧げられることを。己の死の後に、灰の真実を知り、それでもなお傍近くに在って支えてほしいという、それが死を前にした男の思いだったのだ。

須樹は峰瀬の視線を痛いほどに感じていた。まるで心の内までも見通そうとするかのような、峰瀬の眼差しである。果てしなくも思える時が過ぎ、小さく峰瀬が息をついた。まるで溜息のように響いたそれに、須樹は目を瞬いた。

「成程、君達は確かに弦が言う通りの者達のようにだ。灰は良い仲間を持ったものだ」

独り言のような呟きは柔らかかった。凍りつくような空気が緩み、峰瀬の口元に苦笑が浮かぶ。それまでの厳しい言葉の数々にはあまりにそぐわぬ。唐突な変化に若者達は呆気に取られた。

「君達を試させてもらった。返事如何によつては、この屋敷から出すわけにはいかぬと思っていたが、どうやら杞憂だったようだ」

「私達を試す……とは、どういうことですか？」

「言葉どおりだ。君達が灰にとってどのような存在となり得るのか。危険な存在となるか、それとも逆か、私はそれが知りたかった」

「つまり、灰様を異端として弾劾する者になるかどうか、ということですか？」

潔癖な怒りを滲ませた仁識の言葉に、須樹もまた峰瀬の言わんとすることを悟る。

「俺達はそのようなことはしません！」

僅かに背をただし、峰瀬が真直ぐに二人に向き直る。ただそれだけの動きで威風が漂った。既に笑みはない。

「君達の言葉を信じよう。そのうえで君達に私から頼みたい。灰を支えてやってほしい」

峰瀬は己の言葉が確かに二人に届いたかを見極めるように暫し沈黙を選び、続けた。

「あの闇は、古くから多加羅に巢食う存在だ。我らの使命はあの闇

を封じ、この地に生きる人々を守ることだ。灰をこの地に呼び寄せたのも、闇を抑えるために怪魅師としての力を借りるためだ」

「……ただ、力を借りるためだけに、ですか？」

「そうだ。灰はこの地では異端だ。このようなことがなければ、彼を呼び寄せるようなことは決してしなかった。異端がこの地で生きることが難しい。そして、灰は惣領家にとっても危険な存在だからだ」

断固とした口調である。

「怪魅師としての灰の力は強い。灰自身がおそらくは己の力がどれ程のものかわかってはいないだろう。力は大きければ大きい程に危険を伴う。君達のように異端の力を知つてなお、灰を受け入れる者ばかりではあるまい。忌避し、あるいは咎人として捕えるべきだと考える者もいるだろう。そして、君達が思う以上に、そのような者は多い筈だ」

須樹の脳裏に浮かんだのは一人の青年の姿だった。聡達そつたつ 沙羅久惣領家の二男にして、異端を狩る者。皮肉な笑みの下に垣間見た獰猛な残酷さを、須樹は忘れてはいない。

「君達には灰の力が周囲に知られぬよう、灰の傍近くで支え守つてやってほしい」

否、という答えは出なかった。



## 104 (後書き)

久しぶりの更新です。何か納得できなくて、でも何が納得できないのかわからず、ずるずると更新を引き延ばしてしまいました。加筆・修正をこの先も若干するかもしれません。

ではでは、今後ともよろしくお願いいたします！

屋敷を出た須樹すきと仁識にしきは、鍛練所に程近い一角にある展望台へと向かった。もとは戦時の監視の場として設えられたそこからは、街の全貌と、さらに街を囲む壁の向こうまでを眺めることが出来た。街の周囲は、茜を帯びた大地がうねるように続いていった。遠からず金笹の種が蒔かれ、やがて一面鮮やかな緑に染まるだろう。

外套が大きく風を孕んで翻った。山の冷涼とした気配が近い。

「それにしても、三年前から灰かいの怪魅けみの力を知っていたとはな……」  
「ぼやくような須樹の言葉に、仁識は小さく笑う。屋敷を出てから、既に互いに知っている限りのことは明かしていた。緩衝地帯で実際に何があったのか、そして多加羅に巢食う闇の歴史と灰に課された役割。一方、仁識からは、三年前の出来事、設啓せつけいが透軌とつきと絡玄らくげんの意を受けて灰の動向を探っているらしいこと、そして透軌から灰と親しくすることへの牽制とも取れる接触があったこと。これには、苦くざらついた感覚を須樹は覚えた。

須樹は、仁識と設啓の間で交わされていた険悪な遣り取りを思い出し、そういうことだったのか、と今更ながらに得心していた。無論、設啓の行為を是とは考えられないが、緩衝地帯で卸屋と間近に接した須樹には、卸屋として生きる者の迷いない強靱さを感じずにはいられない。それと同時に、灰を疾剣はやしるせと評した設啓の真意を思い、不安を覚えていた。

「須樹こそ、緩衝地帯でのことなど端から言う気がなかっただろう。お互い様だ」

須樹は苦笑で返して、視線を遠くへ投げた。

「雨だな」

ぼつりと須樹は呟いた。遙かな地平が薄墨に染まっている。雨雲と靄のように煙る雨は、空と大地の境を曖昧に溶かしていた。

「来るか」

「風次第だな」

「鳳が鳴いたか」

須樹は仁識をちらりと見やる。「冗談を言ったのかと思ったが、横顔は存外に真剣なものだった。冬から春へ、季節の移り変わりは雨とともに来る。天空からの春告げの一声は、既に大地に齎されているのかもしれない。」

「お前は若衆を辞めた後はどうするつもりだ？」

須樹は唐突な仁識の言葉に顔を振り向けた。

「外延部の剣術道場から誘いを受けているから、当分はそこで師範方でもしようかと思っっている」

「南軍には入隊しないのか」

「軍隊はどうも性に合わない。それならば、まだ子供達を教えている方がよい。師範方など給金は僅かだが、それでもいつか一人立ちする元手にはなるだろう」

「家を出るのか？」

「さすがにいつまでも親に負担をかけることは出来ない。それに、親父の店を継ぐのは俺ではないからな」

「そういえばお父上は弟子をとっていたのだったな」

「ああ。二年……いや、三年になるか。もう一角の職人になりつつある。出来が良いと親父も喜んでいる。俺がいつまでも家にはいてはやりにくかるう」

「それで剣術道場の師範方か」

「まあ、軍隊に向かぬなど言いながら、南軍に入ることを望む者達を育てるというのも妙な話だがな」

外延部にある剣術道場は貧しい者達のために開かれている。貧しい界限では、子供達が家族を助けるために幼いうちから働きに出るのはごく一般的なことであり、若衆に入るような余裕はない。だが、彼らの多くがやがては南軍に入ることを望んでいる。出口がない貧困の、そこから抜け出す僅かな可能性が軍隊にはある。尤も栄達の道を歩む者はごく少数、それ以前に南軍への入隊には試技がある。

ある程度の剣術の技量が入隊に際して必要とされるのだ。剣術道場は若衆に入ることの出来ない貧しい少年達が、南軍への入隊を目指して通う場所なのだ。

「本当は緩衝地帯にある伯父の店を手伝わぬかという話もあったのだが……親父などは剣術道場の師範方などよりその方が良いと思っ  
ている」

須樹は仁識に苦笑を向けた。

「給金も剣術道場などより余程良いのに、と呆れられた」

仁識が僅かに首を傾げて瞬くのを須樹はおかしく見やった。給金などという言葉は仁識にとって身近なものではないのだろう。若衆では、実績に応じて僅かながらも給金を支給される。街の治安に寄与していることへの対価であるが、貴族の子弟は慣例として給金を受け取ることはない。労力に対する対価、という考え方が貴族の矜持には馴染まないのだ。仁識などは給金の有無など、そもそも気にも留めていないだろう。

「何故、伯父君の店を手伝わぬ。悪い話でないならば受けければいいだろう」

「……今、多加羅を離れる気にはなれない」

ぼつりと須樹は言った。緩衝地帯から多加羅に戻り、ずっと考えていたことだった。峰瀬みなせの言葉がなくとも、もとより須樹の心は決まっていた。仁識はそうか、とだけ言った。峰瀬との遣り取りについて、まだ仁識とは話していない。互いに注意深く避けているのだ。ほんの一刻程前の峰瀬との対峙は、須樹自身の胸の内に冷たく薄暗い感触を残している。仁識もまた同じなのだろう、と思う。

「仁識はどうするつもりなんだ？」

仁識はすぐには答えなかった。須樹は風に靡く仁識の長い髪を目で追った。貴族の証である。若衆でなければこのように並び立つことなどなかっただろう相手なのだと、今更ながらに思う。三年前までは、同じ若衆であってもまともに言葉を交わすこともなかった。己とは相容れぬ立場の人間なのだと、漠然と見做していたのだ。

「父親がおそらくいずれかの官職を用意する筈だ。その椅子に座る」  
素気なく仁識が言った。乾いた口調だった。

「それを望んでいるのか？」  
以前ならば決して問わぬだろう言葉を、須樹は投げかける。遠くの雨雲は刻々と形を変える。

「望んでいるのかもしれない。考えずに他人の思惑通りに動くのは楽だ」

「仁識が考えるのをやめるなど、鳥に飛ぶなと言うようなものではないのか」

「どうだろうな」

皮肉な呟きには苦笑が混じる。

「ただ、今後の多加羅を見届けるために、官職に就くのもまた一つ的手段ではないか、とそう思うようになってきた。息は詰まるが、手の届かぬところでもどかしい思いをするくらいならば、渦中にあつて自ら動ける方がいい。今回のことで心底そう思った」

「……緩衝地帯のことか」

「それもあるが、それだけではないな。この多加羅に秘められているという、あの闇だ。何も知らず、これ程に多くの人々が暮らしている。己の足元に何が蠢いているか知りもせず、当たり前のようにこの先も今の生活が続くと信じているのだ」

言いながら仁識の顔が歪む。吐き捨てるように続けた。

「何も知らずに安穩と生きてきた。これからも、何も知らずにいたかもしれない。そのようなこと、我慢がならぬ」

須樹には仁識の気持ちがわかった。闇から逃げ目を逸らすのではなくあくまでも正面から立ち向かおうとする、如何にも仁識らしい物言いである。

到底抗し得ない、あまりに大きな恐怖　それが闇だ。目の前に広がる穏やかな街の風景は、闇の存在を知った今となつてはあまりに脆く見える。人柱として横たわっていた弦の姿が、いまだ生々しく脳裏にこびりついていた。その姿は、穏やかな街の姿であり、無

力を知る己の姿でもあった。闇の前では、己とてただ喰われるだけの生贄だろう。

「正直に言っと、惣領にはあのように偉そうなことを言ったが、俺自身に出来ることなど何も無いのではないかと……思わずにはいられない。闇に対しているのは灰であって、やはり俺には何も出来ない。灰を支えるなど、無理ではないか。灰を守るなどと言ってもどうすればよいのか」

自嘲気味に須樹は言った。衝動のままに峰瀬に言い放った言葉に嘘はなかったが、冷静になるほどに、己の無力を痛感する。峰瀬の求めに迷いなく応えはしたが、具体的にどうすればよいかと考えると、何もわからない。

「確かに闇そのものには太刀打ち出来ぬ。だが、問題は闇だけではない」

仁識が目を細めた。

「闇は確かに恐ろしいが、その他にも危うい現実があるだろう。お前が聞いた若様の話では、帝国中枢部にとって多加羅は異端の象徴だ。言ってみれば、帝国にとって多加羅という存在そのものが、何としても滅したい闇そのものだ。いや、正確に言えば違うか。おそらく帝国が消したいのは異端を封じる力を有する多加羅惣領家そのものだ。この先、峰瀬様がお亡くなりになれば、多加羅は必ず弱体化する。透軌様に今の多加羅を支えるだけの力量はない」

穏やかならぬ言葉に、須樹は己の顔が強張るのを感じた。

「条斎士じょうさいしである峰瀬様でさえあれ程に体を病んでおられる。条斎士ですらない透軌様に闇が抑えられると思うか？ この先闇を封じることが真実かなうのかどうかは、おそらくは若様の存在にかかっている。だが……」

珍しく、仁識が言い淀んだ。まるで苦さを舌先に感じたかのように、仁識の口元が歪む。

「透軌様は若様に対して、複雑な思いを持っておられるようだ」

「複雑な思い？」

「自分が心底欲しいと思いつながら決して得ることのかなわぬ力を、まるで当たり前のように、しかもその価値もわからぬ様子で有している者が目の前にいたとしたら、お前はどう感じる？」

些か掴みづらい仁識の言葉を、須樹は反芻した。

「どう感じるも何も、それは仕方がないことだろう。人それぞれ有しているものは違う。己にも、その相手にはない何かしらの価値があるかもしれないし、それを見つければべきだろうな」

仁識は苦笑した。

「須樹ならばそうだろう。だが、そのように考える人間の方がおそらくは少ない。ましてや、他の者が享受している力が、己が生きていく上では欠くことの出来ぬものであれば、何も感じずにいることなど不可能だ」

仁識が須樹を振り返った。鋭さを秘める眼差である。須樹は仁識が何を言いたいかを察して、思わず眉を顰める。

「つまり……透軌様が、灰の力を妬んでいる、ということか？」

「力と言っても怪魅師の力ではない。おそらく透軌様は闇の存在も、若様が怪魅師であることも知らされてはおられないだろう」

仁識は己の思考を吟味するように僅かに首を傾げた。

「求心力、とでも言おうか、透軌様には若様のように人を惹き付け、率いるだけの力がない。知力であれ武術であれ、人より秀でたところがない凡庸さを、御自身でよくわかっておられるだろう。そのうえで、己が如何に生きていくべきかを見据えておられる。若様よりも勝っておられる点と言えば、その冷静さと自覚だろうな。そうであるからこそ、尚更に己よりも優れた者に対しては敏感にならざるを得ない」

須樹にとっては意外な透軌の人物評である。多加羅の後継としてしか認識していなかった透軌という存在を、仁識の言葉は血肉の通った一人の人間として浮かび上がらせるものだった。多分に厳しい仁識の言葉ではあったが、不思議と辛辣さは感じられなかった。

そして、また一つ、須樹は己と仁識の違いを見た思いだった。鬼

逆は灰を『力』と形容していた。仁識もまた灰を何がしかの力の象徴として見ている。それが例えば怪魅師としての力であり、あるいは並外れた思考力や洞察力であり、人を惹きつけずにはおかない求心力なのだと、須樹も理解は出来た。だが、須樹自身が灰について考える時、まず浮かぶのは柔らかな印象であり、危うさを孕んだ静けさだった。それは三年前の初夏に見も知らぬ相手の傷をその場で治療する少年の面影であり、驚く程の鋭さの合間に見せる無防備さであり、遠くを見詰めるらしい横顔の寄る辺の無さだった。

須樹の物思いを、仁識の言葉が破る。

「この先透軌様が多加羅惣領となられた時に、果たして若様にどのような対されるか。厄介なのは帝国中枢部どころか、多加羅内部にこそあるかもしれぬ」

「……………」

「今回の緩衝地帯での一件も、結果的には若様の判断のもと全て解決した、という印象を人々に与えている。この先多加羅中枢部の権力亡者達が若様を放っておく筈もない。透軌様の覚えめでたい絡玄様一派に対抗したい勢力には、若様は格好の素材だ」

「透軌様がどのように思っておられようと、闇の存在を知れば灰に對しておかしなことはしないだろう」

「さて、それはわからぬ。いずれにせよ、若様にとっては厳しい状況になるだろう」

須樹は力なく呟いた。

「そのようなことは、俺にはまるで雲の上の話だ。惣領は灰の傍近くで守り支えよ、と仰られるが、俺になど何が出来る。それこそ何も出来はしない」

「そうでもないだろう。協力者がいれば、若様も少しは動きやすくなる筈だ。若様の性格を考えれば、この先も怪魅師であることが知られぬという保証はない。若様が存外に短気で向う見ずなのはわかっているだろう。その点、須樹のように慎重な者が傍にいれば、少しは危険も減る筈だ」



「そうかな」

「お前は今まで通り、若様の傍らにいればいい。私は立場上、それは難しい。若衆でいる間がいいが、若衆を抜けたら今までのようにはいかぬだろう。だが、官位に就けば多加羅中枢の動きも少しは知ることがかなう。透軌様の出方を探ってみることも出来るだろう」

須樹はまじまじと仁識を見た。思わず笑むと、仁識が怪訝な表情を浮かべた。

「何が可笑しい」

「いや、可笑しいわけではない。感心していたんだ。やはり仁識は人より随分先を見通しているな。俺はどうしたらいいかわからずおろおろしているというのに」

「幸か不幸か、私には三年前に闇を見てから十分に考える時間があったからな。いい加減、若様の首を絞めてでも本当のことを言わせるつもりだったが、手間が省けた」

最後はぼやくように言う。須樹は思わず笑った。正面から吹きつけた風に、僅かに雨の匂いが混じっている。やがて来る春の息吹が、そこにある。

「だが、問題が一つある。支えようにも、当の本人が嫌がるのが目に見えているのだがな」

「まったくだ」

「それにもう一つ、厄介な奴が残っている」

不審気な仁識に、須樹はにやりと笑った。

「治都だ。あいつ今頃ぶんむくれてるだろうな。覚悟しておいた方がいい。当分今日のことを根に持つだろうよ」

心底嫌そうに溜息をついた仁識だったが、笑いを抑えかねるよう顔を歪めた。だがそれも束の間、真剣な顔を須樹に向けた。

「わかつているとは思うが、治都には何も言うなよ」

「……ああ、わかつている」

須樹はぼつりと答えた。

峰瀬は手元の巻き書から顔を上げ、立ち上がった。長時間座り続けていたせい、背中に重みを感じる。それとも歳のせい、と自嘲気味に思いながら窓辺へと寄った。既に日は暮れていた。夕刻から降り出した雨が、今も硝子を濡らしていた。

扉が叩かれる。短く答えれば、入って来たのは白玄だった。

「惣領、もうお休みになられてはいかがですか」

「お前こそ、そろそろ屋敷に引き上げてはどうだ。老体をいじめるものではないぞ」

峰瀬が振り返ると、思った通りの渋面があった。

「御冗談を仰られては困りますぞ。なるべく御無理はなさらぬようにと、何度も申し上げているというのに」

「灰は目覚めたか」

白玄の言葉を遮り、峰瀬は問うた。一瞬何かを言いかけ、白玄は諦めたように溜息をついた。

「まだです。深く眠っておられるようです」

「弦はどうだ」

「弦も目覚めてはいません。体が相当に弱っているため、目覚めねばこのまま体力が尽きて快復せぬかもしれぬと、医術者は見立てております」

峰瀬は再び窓外へと視線を投げた。

「……惣領、闇は無事封じられたのですな」

「ああ。実際にその目で見ただろう」

「私の目には、ただ光のようなものが見えただけです」

「あの時、灰は弦の魂から言霊を分離し、直接に闇を封じた。人柱を媒介にして封じるよりも余程強力な方法だ。当分、闇が溢れることはあるまい」

「そのようなことが可能とは……怪魅師とは測り知れぬ存在ですな」  
「使いようによっては最強の武器となる。だが、誤れば自らを滅ぼす。両刃の剣だ」

「あの若者達は信用がなりましようか」

「人の良いお前でも、懐疑的にならざるを得んか？」

くつくつと峰瀬は笑った。

「笑いごとではありませんぞ。あの闇を前にして冷静でいられる人間はそうはおりませぬ。あの二人の落ち着きようは腑に落ちませぬよもや灰様が真実を明かしておられたのでは……」

「そうかもしれぬ。そうであれば灰があの人を信じている、ということだ。お前は灰が信じた人間を信じることが出来ぬのか？」

「そういう問題ではありませんぞ。もし真実を明かしておられたのなら、あまりに軽はずみであらせられる」

「良いではないか。灰には新たに支えとなる存在が必要だ。だが、灰は容易く人を信じはせぬ。彼らならば、灰も受け入れるだろう」

言いながら、峰瀬は別のことを思う。三年を多加羅で過ごしながら、灰はどこまでも孤独であろうとした。それは本能的に自由を求める彼の性ゆえであると、峰瀬は気付いていた。灰が多加羅に留まるのは、心の内に根深く巢食う罪業の念と、本人もおそらくは明確に自覚していないだろう多加羅への屈折した執着ゆえだ。だが、やがて世界の広さに気付いた時、灰は躊躇いもなく多加羅を去るだろう。

峰瀬は二人の若者を思い出す。灰を思う気持ちに嘘はなからう、と思う。恐れを知らぬ純粹さは若さゆえだろうか。それとも屈すること知らぬ傲慢さゆえだろうか。灰にとって彼らは支えになるだろう。そして同時に、その存在が灰を多加羅に繋ぎ止める鎖にもなる。

「白玄、人柱は何も弦でなくとも良かったのだ」

言つと、峰瀬は振り返った。

「……ですが、言霊を魂に刻むには、それ相応の者でなければならぬと……」

「父上は非力な孤児や病の乞食を人柱にした。言霊の欠片を刻むだけならば誰でもよいのだ」

「では、何故」

「私は知りたかったのだ。灰の力が如何程のものなのか」

本人すらも自覚せぬ怪魅師としての力が、どれ程のものであるのかを

凝然と己を見詰める白玄に峰瀬は笑む。

「結果は、私の想像を超えていた」

水底から浮かび上がるように、ゆっくりと意識が覚醒した。微かな雨の匂い。灰は瞳を開けた。波紋のように広がる静寂の向こうで、木々の葉が揺れる衣擦れのような音が響いている。

灰は肘をつき、ゆっくりと上体を起こした。それだけの動きがひどく辛かった。見回すと、そこは簡素な部屋だった。頼りなく視界が揺れ、脇机に一つ置かれた水差しだけが奇妙に現実的に感じられた。高い天井は仄暗く、刻を測ることは出来ない。

どれ程眠っていたのか、灰にはわからなかった。眠る、という表現が正しいかもわからない。まるで水底から水面を通して世界を見ていたかのような、あるいは遙かな高みから地上を俯瞰していたかのような、現と隔てられながらも切り離されていたわけではない。その間も常に己を包み込んでいた存在に、灰は無言で呼びかけた。又駆は僅かな空気の揺れで応えた。

灰は寝台からおりると、そろりと足を踏み出した。歩くことは出来る。それに安堵しながら、扉へ向かった。ひやりと冷たい石の床と、体に纏わりつく白い衣の感触が生々しい。体は心許ない軽さだった。指先に力を込めることも出来ない。疲労だけではない。体の核となる部分で、何か欠けてしまったかのような喪失感があった。廊下は無人大った。屋敷の奥、滅多に使われぬ一角である。意識で探るまでもなく、灰は向かう先を知っていた。廊下の突き当たり、灰がいた部屋と斜めに向かい合う形で、その扉はある。灰は壁に手をついてゆっくりとそちらへと向かった。扉を開ける前に僅かに躊躇う。深く息を吸い、扉を押した。

その部屋もまた素気ないまでに簡素だった。窓は一つ、全てが薄暗く曖昧に、床と壁の境までもが掴みがたかった。灰は寝台に近付いた。まるで雲を踏んでいるかのように、足元が揺れる。寝台に横たわる男　弦の姿に、灰は一瞬目を閉ざした。麻痺したように動

かない感情とは裏腹に、己の鼓動が忙しない。

弦の、青白くやつれた顔は穏やかだった。ただ姿だけを見れば眠っているようだが、灰の目には弦の体と意識が深く閉ざされているのがわかった。まるで己以外の全てを拒むかのように、命の気配までもが深く沈んでいる。弦という存在自体が、ただそこに在るだけの物体になったかのようにだった。体の奥に巢食う喪失感に、鋭い痛みが加わった。灰は俯く。閉ざされた弦の意識に灰は触れることが出来ない。命の揺らめきはいまだあっても、目覚めねばいずれ体の力も尽きるだろう。

これが己の成したことの結果か

指先に触れた、弦の魂の熱さを覚えている。現世に引き留めようと、己の命の欠片を弦に注いだ。人の身にはあまりに危険な所業なのだとわかりながら、ただ無我夢中だった。だが、結局は救うことなど無理だったのか。静かに、頑なに、弦は死に向かいつつある。

どれ程そうしていたのか、雨の気配が強まったように感じて、灰は眼差しを上げた。部屋の仄暗さはさらに濃度を増している。天候のせいか、それとも時の流れのせいなのか、それすらわからなかった。背後で扉が微かな軋みをあげた。振り返ると、峰瀬みなせと一人の娘が立っていた。娘の切れ長の瞳が灰を捕え、素早く伏せられる。

「もつさがってよい」

峰瀬が言くと、娘は一礼し足音も立てずに去った。その背を灰は目で追う。娘の姿に覚えはなかったが、その気配は眠りの中で感じ取り、知っていた。おそらくは、目覚めぬ灰の世話を命じられていたのだろう。

「やはりここにいたか」

灰は答えず、眼差しを逸らした。言葉を出すことすらひどく億劫だった。

「随分長く眠り続けていたが、体は大丈夫なのか？」

灰はただ頷くとどめた。実際には、体は万全とは言い難い。立

っているのがやつとの有様だ。己の命を削り他者に分け与えるという行為がどれ程に危険なことか、灰は身を以て感じていた。眠っていた間又駆が灰を包み込み、力を注いでくれた。それがなければ、目覚めることすら出来なかったかもしれない。

「……俺はどれくらい眠っていましたか？」

「四日間だ」

四日。そんなにも時間が経っていたのか。稟が案じているだろう、と灰はぼんやり考えた。これまで星見の塔を長期間あけることはあったが、何も告げず離れることはなかったのだ。

「仁識と須樹といったか、若衆の二人には咎め立てをしていない。些か事情を聞かせてもらったが、信用に足る者達のようにだ」

灰の沈黙をどうとったのか、峰瀬はそれ以上二人の若衆については触れず、問うた。

「弦が目覚めるかどうかわかるか？」

灰はゆるゆると首を振った。そうか、と呟いた峰瀬の声は低い。このまま目覚めねば、弦の体は保たない。そのことに、峰瀬も気付いているのだ。

「もう少し休んだ方がよい。部屋に戻りなさい。弦のことは案じずともよい」

灰は咄嗟に峰瀬を凝視していた。泰然と峰瀬は佇んでいる。

何故、と問いたかった。何故弦を人柱にしたのか。何故弦でなければならなかったのか。問い詰めて思うまま詰りたかった。だが、それがどれ程に無意味なことかもわかっていた。例え問うたところで、峰瀬が真意を灰に明かすことはないだろう。灰が首にかける黒玉と同じことだ。闇を封じるためならば手段を選ばぬ峰瀬と、闇を滅することも命を救うことも出来ず、それでも足掻く己と、決して相容れることなど出来ぬ。相手を認めれば、それはすなわち自身を否定することに繋がる。

人柱が弦でなければ、己はどうしていただろう。ふと灰は思った。何もせずに人柱が闇に喰われるのを見ていたのだろうか。弦だから

こそ、彼が闇に喰われるのを阻もうとしたのだろうか。力をふるうたび迷いに捕われる。何が正しいのか、そもそも正しいことなどあるのか、思い惑う。今回のことだけではない。これまでの選択と決断、その一つ一つが押し掛かるように重く感じられた。

氣付けば、口は勝手に言葉を紡いでいた。

「俺はもう大丈夫です。星見の塔に帰ります」

言いながら、灰は意識だけで又駆に呼びかける。祈るように、弦を助けてくれ、と。又駆ならば自然の内にたゆたう力を弦に分け与えることが出来るだろう。灰に対してそうしたように。もう手遅れかもしれぬ。だが一縷の望みがあるならば、それに賭けてみたかった。

頼む。

灰の思いに、ふわりと空気が揺れた。温かな又駆の気配が離れ、弦を包み込むのが見えた。灰は目を閉ざした。彼に出来ることは、何もなかった。

梓魏しきの地にもまた、長い冬の終わりが来ようとしていた。

万まふよが再び兄と接触したのは、前回言葉を交わした時から一月以上が過ぎた頃だった。

公休日、いつものように決まった経路を辿り街へとおりた弦は、人混みの中、密かに己の後をつける存在に気付いた。わざと足を緩めると、一人の女が追い越さず彼の懐に小さな紙片を滑り込ませていった。さり気なく脇道へと入り込み、万は紙片を広げた。兄の筆跡で書かれていたのは、深夜の刻限と場末の酒場の名だった。

酒場は寂れた裏通りにひっそりと在った。椅子と卓が乱雑に並べられた薄汚れた店内に客の姿はない。店の主人らしい男がちらりと万を見やり、無言のまま顎で店の奥にある階段を示した。万もまた何も言わず階段へと向かう。兄の部下か、梓魏の街に潜伏する北限の民だろうが、互いに何者であるか知らぬ方が身のためというもの



だろう。

階段は薄暗かった。長く掃除すらしていないのか、隅にたまる埃が分厚い。昇りきると、細い廊下の両側に幾つか扉がある。そのうちの一つが待ち構えていたかのように開かれ、清夜の姿があった。

「刻限どおりだな」

言いながら清夜は万を中に招じ入れた。答えようとして、万は言葉を呑み込んだ。薄暗い部屋の中に、もう一人いたのだ。女だ。きつちりと黒髪を結わえ、鋭い眼差しを万に注いでいる。背筋の伸びた立ち姿に、街で紙片を渡して来た相手だろうと察しがついた。

「……女を使うとは、あんたも変わったな」

呟いた万の言葉を聞いているのかいないのか、清夜は事務的な口調で言った。

「彼女は私の部下だ。名を更紗さらという。更紗、この男が万だ」

女は万を一瞥する。その表情には苦さがある。どうやら信頼されていないらしい、と万は内心に溜息をついた。

「愛想のないことだな」

ぼやく万に向けた女の眼差しは冷たさを通り越して険しくさえあった。

「何か進展はあったか」

どうやら兄は軽口にさえ乗る気がないらしい。万は肩を竦めると言った。

「別に取り立てて変わったことはないが、都行きみやぎの準備で近衛はてんでこ舞いだ。各所領の惣領が都に召集されるらしいな。玄土せんどの正章しょう様は椎良しいら様が都に赴くべきだと声高に唱えているが、誰も異議を唱えそうにない」

各所領の惣領が帝国の都、白西露峰はくせいろうほうへと召集された。その噂は既に公然のものとなっていた。惣領がいまだたっていない梓魏しうゑからは惣領代理として椎良が赴くこともまた、皆の知るところとなっている。それはつまり、梓魏の次期惣領が椎良であると、公に知らしめることだった。椎良が惣領となることに反対する意見がないわけで

はなかつたが、いまや絶対的な権力を有する玄土正章の前では力無い囁きにしかならなかった。

万はにやりと笑んだ。

「狙い通り、都までの道中について、俺の経験を参考にしたいとお偉方が言ってきた」

「当然だろうな」

「清夜様、この男本当に信用がなるのですか」

突然割って入った声に、万は女を見た。年の頃は彼よりも上だろう。鋭い眼差しが全体に硬質な印象を与えるが、顔立ちは柔らかく美しいと言えるだろう。万は鼻を鳴らすと、意図的に顔を歪めた。

「その台詞そのまま返してやりたいんだがな。あんたこそ信用なるのかね。だいたいあんた人をつけるのが下手過ぎるぜ。素人じゃあるまいし、もう少し上手くやってくれよ」

「何だと！」

「いい加減にしろ、万。更紗も、気持ちわかるが抑えてくれ。こういう男なんだ」

「言ってくれるじゃねえか」

無然と呟く万に、清夜は溜息をついた。

「お前の物言いは、まるで人を馬鹿にしているように聞こえる」

「そいつは悪かったな。だが、俺はその女を知らん。あんたは信用しているが、下手に素人を関わらせるのは考えものだぜ？」

「彼女の仕事は主に連絡折衝だ。お前のように専門の訓練を受けたわけではない」

「まあいいさ。で、わざわざこのような場所に呼び出して、何か言いたいこともあるんじゃないのか？」

「その通りだ。この先はお前との連絡役は彼女に任すつもりだ。それを伝えたかった」

「どういうことだ。あんたはどうするつもりだ」

「私は別行動で都に入る」

「都に？ 何をするってんだ」

「お前が気にすることではない」

万はもどかしさと腹立たしさを抑え込んで清夜を睨みつけた。何故わざわざ他人を介するような方法をとるのか、更紗がいなければ問い詰めているところだ。清夜は万が彼の弟、飛雪であることを秘している。更紗もまた万の真の名を知らぬ可能性が高い。知っていればもう少し違う態度を示すだろう。清夜の殊更に素気ない物言いが、そのまま警告だった。ここで下手なことを言うわけにはいかない。

「わかったよ。ところで、緩衝地帯の一件はどうなった。邪魔をした奴について調べると言っていたな。何かわかったか？」

「調査は打ち切りになった。今回の一件、おそらく耶來内部での権力抗争が絡んでいる。これ以上深追いせぬ方がよいとの由洛公の御判断だ」

「だが……蛇達を奪ったのは多加羅の者かもしれぬと言っていただろう」

「多加羅の者であれば、蛇を多加羅かあるいは媪に引き渡した筈だが、蛇は鬼逆が來螺へと連れ去った。蛇を奪った者達は、おそらく鬼逆の手下だったのだろう。あの姿や力も、国境地帯の者であれば納得出来る」

「何だ、そんな変わった見た目なのか？ そいつは」

「暗かったせいで定かにはわからぬが、東方の民のようだった。異端の力といい、帝国民ではなからう」

「異邦者が」

何気なく呟き、万は顔を顰めた。既視感 何時だったか、誰かに対してこの言葉を使ったことがなかったか？ そう遠い記憶ではない。あれは確か冬の初めの頃だった。万は曖昧な思考を振り払う。今はそのようなことを考えている時ではない。

「そもそも依頼する先を間違ったってことだな」

「我らにとつては幸いなことに、耶來側も今回の一件が明るみになるのは避けたいところだろう」

「計画が失敗して、沙羅久惣領家との取引はどうなった」

「そちらは既に新たな動きがある」

清夜の表情からそれ以上のことを言う気がないのは明らかだった。

「とにかくお前は」

「何も考えず椎良様のお命を守っている、だろ？ わかっているさ。仕事はきっちり果たす」

兄の声を万は遮る。

「わかっていればよい。今後はどれ程椎良様の傍近くに仕えることが出来るかが鍵となる。慎重にやってくれ」

「ああ」

万は浅く頷いた。清夜の言葉の裏に込められた意味に、万は気付いていた。彼が飛雪であることを、椎良に悟られてはならない。

（大丈夫だ）

内心の思いを、万は眼差しだけで兄に告げた。己はただ椎良の命を守るためだけにいる。いわば剣であり楯だ。武器に人格は必要ない。それ以前に言葉も交わすことすらないだろう相手が、彼の存在に気付く筈もない。

万はそう信じていた。

椎良が突然に近衛兵との接見を望んだのは、万が清夜と対した三日後のことだった。

「日頃から警備に尽力している者達一人一人に言葉をかけたいと、姫君たつてのお望みだ。決して無礼のないよう心せよ」

軍処方を通じて知らされたそれに、誰もが驚きを露わにした。惣領家の者が兵士との対面を望むなど、これまで例がない。それも位に関わらず、一人一人に対したいという。日頃から惣領家に忠義を尽くしている近衛兵にとっては、この上ない榮譽である。

表面的には他の者達と同じ喜びの表情を作りながらも、万の心中は穏やかではなかった。榮譽どころの話ではない。椎良の支持基盤を固めようとする玄士の思惑かとも考えたが、むしろそうであっ

てほしいと願いすらしたが、考える程に一つの推論に辿りつく。図らずも、同じ考えに達した者がいた。矢束やつかである。

「何故、椎良様は近衛兵との面会をお望みになったんだろうな」

部屋で矢束が問うてきた時、万は寝台に横になりさして興味もない兵法書に目を通していた。扉へ視線を投げたのに気付いたのか、矢束は言った。

「大丈夫だ。柳りゅうと優理ゆうりは警備に当たっている。当分は戻らぬ」

鋭い男だ。万は苦々しく相手を見やった。

「我らを鼓舞し労うためだろう。御立派なお方だ」

「それもあるだろうな。だが、それだけではなかるう」

言つと矢束は寝台に腰をおろした。万と向かい合う形である。万は書を傍らに置いて身を起こした。どうにも誤魔化しのきかぬ相手である。

「今日椎良様とお会いした者の話では、お言葉をくだされ、御手に触れることを許されたという」

「ああ、それは俺も聞いた」

接見は数日間に分けて行われる。既に接見を終えた者も、これから接見を受ける者も、近衛兵の間ではもっぱらその話題ばかりである。万は接見の最終日に椎良のもとへ赴くことになっていた。柳や矢束も同じ日である。よりにもよって、という思いが万にはある。

矢束は万の目を覗き込むようにして言った。

「庭園の湖で椎良様をお救いしたのは玄土の息子殿ということになっている。だが、私が思うに、椎良様は真実がそうではないとお気付きなのではないか？ 玄土の息子殿ではなく、近衛兵の誰かがお命をお助けしたのだと。だが、表立ってそれを言うことは出来ぬ。出来ぬが故に今回のように近衛兵一人一人に会いたいと、そう仰せになったのではないか。そうであれば、姫君が真実お会いになりたいのはただ一人、万、お前だということになる。私にはそう思えてならぬ」

「考え過ぎだ。姫君の真意など俺にはわからぬ」

万は素気なく答えた。庭園での一件は矢束に知られている。仕方のなかったこととはいえ、聡い相手だけにやりにくいことこの上ない。今もまた矢束は探るような視線を向けてくる。何か疑念を持たれるような態度をとっていただろうか。万は注意深く最近の行動を思い返した。

「お前は不思議な男だな」

ぽつりと矢束は言った。

「何だ、突然に」

「いや、私が万ほどの年齢で同じ立場ならば、もつと喜んでいただろう、と思つてな。状況を考えれば椎良様をお助けしたと名乗り出ることは出来ぬが、椎良様が真実に気付いておられたならば、これ程に誇らしく喜ばしいことはないだろう。だが、万はあまり嬉しくはなさそうだな」

「誰がお助けしたかなど瑣末なことだ。肝心なことは椎良様が御無事であること、そして二度とあのようなことが起こらぬようにすること、それだけだ。不思議なことなど何もないだろう」

万の言葉を聞いているのかいないのか、矢束ひとしきり考え込む様子だった。やがて得心したように頷くと、ぽつりと呟いた。

「そうか、わかった。お前には色がないのだ」

「何だつて？ 何がないつて？」

「各地を彷徨い人よりも多くを見てきただろうに、色というものが感じられぬ。欲ともいうかもしれん。人は己の核の周りに様々な欲を纏うものだ。欲の上にこそ、生きる目的も夢も生まれる。だが、万を見ているとその欲がない。それとも全てを削ぎ落した末にしか得られぬものを望んでいるのか。そうであれば、むしろ誰よりも強欲かもしれぬな」

「おいおい、俺を相手によくわからん人生哲学を論じるのはやめてくれ。常々思っていたが、近衛兵などより学士の方が余程向いているのではないか？」

「そうかもしれぬ。興味深い対象を見つけるとつい観察したくなる。

悪い癖だ。忘れてくれ」

「俺には矢束の方が余程興味深い人間に思えるよ」

そうか、と矢束は笑った。それに応えて笑いながら、万は思考が凍るのを感じていた。渦を巻くように不安が生じる。虚像を演じる万を評した矢束の慧眼に対してだけではない。椎良の真意である。

万自身も、もしかすると、と考えていた。湖中で椎良へと手を伸ばしたあの時、椎良の意識はまだあつたのではないか。目が見えずとも、助け上げた者が玄士の息子でないことに気付いている可能性はある。そうであれば、椎良がこのような手段で己を助けた者に感謝を伝えようとするのも頷ける。

例えそうでも、名乗り出なければよいだけのことだ。不安を抑え込むように、万は己に言い聞かせた。

全てを削ぎ落した末にしか得られぬものを望んでいるのか。

万は苦笑った。椎良の楯となり剣となつて、彼女の命を守る。

それ以外に何を望むにしても、己が得られるものなど何もないだろう。

接見の最終日は薄曇りだった。椎良しいらと対する近衛兵は十五名、隊列を組み一系乱れぬ動きで屋敷へと向かった。万よろずは列の中程、柳しゅうと矢束やつかに挟まれる位置にいた。吐く息はいまだ白く、澄んだ空気に硬質な足音が高く響いた。

万が惣領家の屋敷の内に入るのは、初めてのことだった。外観に違わず壮麗な中にも、粹魏独特の優美な素朴さがある。接見が行われるのは嘗て議事が執り行われた一室である。政が一人の専横に堕してからは使われてはいないそこに、椎良の姿があつた。椅子に座る姿はたおやかに、だが、どこか決然とした雰囲気纏っていた。その背後には女官達が、そして傍らには玄土正章の姿がある。その苦虫を噛み潰したような顔に、やはりこの男の案ではなかつたか、と万は改めて思った。

平伏した彼らに、椎良は言った。

「頭を上げてください」

柔らかな声に、男達は顔を上げた。椎良は音もなく立ち上がると、真直ぐに歩み出した。誰も手を貸さぬのは、椎良がそう命じたからだろう。椎良は歩みを止め、見えぬ眼差しを近衛兵に向けた。

「日々私達の命を守る貴方達に、私から感謝を。私には貴方達の姿が見えません。どうかこの手をとり、名と、声を聞かせてください」  
一人目の兵が歩み出し、椎良の前に跪いた。白い手を戴き、頭を垂れる。

「辰志と申します。粹魏惣領家に永遠の忠誠をお誓い申し上げます」  
「辰志、この先も我らとともに」

それはまさに儀式だった。誓いの言葉に応える椎良の声は、優しくも凜とした強さを秘めていた。そして、万の知らない椎良の姿がそこにはあつた。傳かれ守られるばかりの姫ではない。自らの力で立ち、己の言葉を持つ者のそれだ。玄土正章の洪面の理由を万は察



した。玄土にとつては、単なる操り人形としか思っていなかった椎良の、思わぬ一面だろう。

己の順番を待ちながら、万は心を無に保とうと努めた。最後に言葉を交わしたのは十年前、声だけで気付かれる筈がない、と自身に言い聞かせる。

「柳と申します。我らは命を賭して椎良様をお守りします」

「柳、貴方の尽力に感謝します」

柳が列に戻り平伏するのを見届け、万は立ち上がった。僅かな距離を進む。跪き椎良の手を戴くと、その指先はひやりと冷たかった。

「万と申します。忠誠をお誓い申し上げます」

万は頭を垂れると言った。微かに椎良の手が震えたように感じた。それとも震えているのは己の方だろうか。

「万、貴方の忠誠は私の宝です」

万はさらに深く頭を下げ、椎良の手を離れた。立ち上がり背後に下がろうとしたその時、椎良がまるで咳くように言った。

「万、教えてください。春の花は、もう咲いたのでしょうか」

万は動きを止めた。椎良の眼差しは中空を彷徨っている。何かを追うように　追憶に浸るように　？

「お許してください。私は剣を振るう者です。花のことはわかりません」

低く答えると、万は列まで下がり平伏した。前へと歩み出す矢束の気配を感じながら、ただ床を見詰めていた。

「矢束と申します。姫君の常に心安らかならんことを」

「矢束、貴方にも幸あらんことを」

惑うように、椎良が再び問うた。

「貴方には花が咲いたかわかるかしら」

「いまだ蕾は固く、しかし春は遠からず参りましょう」

澁みなく答え、矢束が退いた。

その後が続いた者達の言葉を、万は半ば上の空で聞いていた。椎良の声だけがくつきりと、空間に余韻を残していた。接見は速やか

に半刻程で終わった。外に出ると、気温は屋敷の内と左程変わらな  
いように感じた。整然と並び歩く彼らも、近衛隊本部の門をくぐっ  
た途端に抑えていた興奮を露わにした。

「私は一生今日のことを忘れぬ。名を呼び、お言葉をかけてくださ  
った」

「ああ、俺も忘れぬぞ。椎良様は素晴らしいお方だ」

口々に語らいながら、誰もが少年のように顔を輝かせていた。近  
衛兵の中でも位が低く、常ならば惣領家の者と目を合わせることも  
許されぬ立場である。彼らにとっては、記憶に刻まれる一時だった。

「おい、お前焦っていただろう」

肩を強い力で叩かれて、万は無理矢理笑顔を作り振り返った。柳  
が相好を崩している。

「春の花などと問われても、風流ごととは縁が無いからな」

「風流ごとかね。単に時節の事柄をお聞きになっただけだろう」

冷静な言葉は矢束である。

「そう言う割に、お前はなかなか洒落たことを言っていたな。さ  
すがに俺達のような武骨者とは違う」

「確かに。だが、柳と同じにされたくはないな」

万は何とか言葉を押し出した。

「さて、私は万の答えもなかなか洒落たものだと思ったがな。風  
流を解さぬ不調法者、故に問うてくれるな、と返す。ならば、とさ  
らに問いたくなるのが人というものだ。お陰で私まで問われること  
となった」

「矢束は相変わらずややこしいことを言う。要はあれだ、春が近い  
ってことだな」

「何故その結論になるのか、私にはわからん」

「お前には俺の風流心がわからんか。残念だ」

「むしろわからんでよかったよ」

前を歩く二人の遣り取りを聞きながら、万は笑みが滲み出ていくの  
を感じていた。

空を仰ぐ。花が咲くには、大気はまだ冷たい。やがて春が来て蕾が開いた時、花は哀れだと椎良は言うだろうか。言いはしないだろう、と万は己の考えを打ち消した。椎良は記憶の中の少女と同じではない。己が十年前とは違っているように。嘗て咲いた花はとうに死んでいる。その姿を覚えている者は誰もいない。

白沙那帝国の都

白西露峰

峻嶮な山肌を這い上がるように、

王城は在る。天に向かって螺旋を描くようにして屹立するその光景は、古来より数多の詩人に礼賛されてきた。だが、一点の曇りもない姿の裏には、人の目には見えず、語られることもない深い暗がりがある。

王城の下には、大地深く広大な地下が在った。華麗な表の姿が繁栄と権力の象徴であるならば、地下は白沙那帝国が長い歴史の中で秘めてきた陰謀と闘争、殺戮の象徴である。何時の時代に築かれたものかも定かではない。時とともに拡張され枝分かれして、巨大になればなるほどに、秘める闇もまた深まっていった。

今、一人の青年がその地下を歩いていった。聡達である。螺旋を描く黴臭い階段を降り、さらにいつ果てるともわからぬ長い通路を進む。その歩みに迷いはない。聖蓮院しょうれんいんの装束の上にゆったりとした外套を羽織り、明かりといえは手に掲げる硝子筒が一つ、無造作に背で括った漆黒の髪が周囲の暗がりくらがりに溶け込むような案配で揺れている。

幾つもの分岐点を曲がり四半刻程、聡達は目的の場所に辿り着いた。闇一色の通路の奥に松明の揺らめき、浮かび上がるのは行く手を阻む鉄格子である。鉄格子の前には一人の兵士が直立している。兵士は鋭い一瞥を聡達に投げ、無言で鉄格子の鍵を開けた。聡達が入るのを見届け再び鍵をかける。背後に響くその音を聞きながら、聡達は歩調を変えることなくさらに奥へと進んだ。

そこはごく僅かな者だけが踏み入ることの出来る領域だった。等間隔に灯された松明の明るさが、かえって暗闇を深く凝らせていた。足音ばかりが反響する湿った静寂に、不意にくぐもった音が響いた。獣の咆哮のような、苦悶故の叫びである。陰々と尾を引くそれにも聡達は表情を変えることなく、一つの扉を開けた。

薄暗い通路とは対照的に、その部屋はそこかしこに硝子筒が灯され、明るかった。四方の壁には天井まである棚が設えられ、乱雑に書が積まれている。部屋の中央には大きな卓が置かれ、その上にも雑然と紙が散乱していた。その紙の束に屈みこんでいた人影が、頭を上げた。小柄な男である。年中地下にいるせい、痩せた顔は青白い。聡達の姿を認めるなり、声高に言った。

「ああ、聡達様、あれをどうにかしてくださいよ」  
「雅浪様か」

言いながら聡達は外套を脱いだ。切れ切れの悲鳴は、いまだこびりつくように響いている。気の無い様子で卓に近付いた聡達に、男はなおも言い募った。

「まだ試験段階の法術だから試す程度でいいと何度も申し上げているのに、相手が衰弱するまで使っんですよ。あれじゃあ実験になりませんよ。殺しちゃおう。ただでさえ異端は不足してらつてのに」  
「誰に言霊を試しているんだ？」

「一月程前に捕えた農夫ですよ。水脈を読むんだか何だか、まあ大した力を持つてるわけじゃありませんけど。井戸を掘るにはいいんでしょうけど。聡達様が実験をなさつたらいいんですよ。雅浪様より余程言霊の扱いが上手い。この前なんか雅浪様が炎使いの男を殺しちゃまって、あれには参りましたよ。あの怪魅師けみしは気に入ってたつてのに」

「炎使い？」

「ほら、聡達様が三年前に多加羅から連れて来た男ですよ。いつまでたっても幼児みたいな奴でしたけど、従順で怪魅の力も強いし、実験では重宝してたんですよ。それが、この前雅浪様がまだ法式が

完成していない言霊を使ったせいで死んじまった」

ふてくされたように男は言う。それを聞き流しながら、聡達は卓の上の紙を取り上げた。幾つもの文字が書き連ねられている。そのどれもが言霊として音に乗せれば強い力を発する特殊なものばかりである。多くの条斎士はこのような言霊が存在することすら知らないだろう。知っているのは条斎士の中でもごく一部、聖遣使だけである。

「悲鳴が止まったな」

聡達は呟いた。程なくして二人の人物が足音高く部屋に入ってきた。一見して貴族とわかる大柄な体躯にきらびやかな衣を纏った男、雅浪である。雅浪の背後には如何にも従者然とした男がつき従っている。雅浪は聡達の姿を見るや顔を顰めた。

「何をしに来た」

「言霊がどれ程完成したか見に来ただけですよ」

「実験は私に任されている。好き勝手に出入りしてもらいたくないな」

「実験？」

聡達は口角を上げた。

「拷問をしたければ他でおやりになればいい。ここでの目的は異端を殺すことではなく、支配し傀儡と成すことにあります。雅浪様のようなやり方では、言霊が完成する前に捕えた異端が全て死んでしまつてしまう」

「私に意見するつもりか」

「滅相もない。八大楼宗家はちだいらつそうけの血を引くお方に意見など、私はそのように豪胆ではありませんよ。同じ聖遣使として御助言申し上げているだけです」

言っている内容とは裏腹に、聡達の声は冷たい嘲りに満ちていた。雅浪の顔が益々歪む。

「ふん、ならば私も聖遣使として貴様に忠告しておいてやる。貴様がそのような態度をとっていられるのもあと僅かだ。新皇帝がおた

ちになれば、貴様の聖遣使の身分などすぐに剥奪されるだろう。せいぜい後の身の振り方でも考えておくんだな」

「新皇帝とは、雅浪様には既にこの帝国の行く末がわかっておいでのようだ」

「貴様と私では立場が違うということだ」

聡達の揶揄に気付かぬ様子で、男は優越感を滲ませて言った。

「いくら皇女様に媚を売ったところで無駄だ。皇女様が帝位を継がれるわけがない。いまだ人形遊びに興じておられる様など、見ていて虫唾が走る。近付こうと思う者の気が知れぬわ。私なぞ頼まれても近寄りたくはない」

「御安心なされよ。白華様は美しき者を愛でることがお好きなだけ。雅浪様のような方がお傍に寄られることは白華様の方がお望みにはならぬ」

雅気さえ含む聡達の笑みを、雅浪は怒りもあらわに睨みつけた。険悪な空気に不穏な気配が混じる。今しも攻撃の言霊を放とうともするかのように、雅浪の敵意が膨れ上がる。圧力となって向かってくるそれに、聡達は顔色一つ変えるでもなかった。

聖遣使には身分というものは関わりがない。どのような出自であろうと、銀の腕輪を皇帝から下された時に、神と帝国に仕え異端を狩る者として同等の立場となる。だが、雅浪のように貴賤の別に拘る者もまた多い。尤も、身分による隔たりがなくとも、条斎士として並外れた力を有し己に絶対の自信を持つ者達の間には、友好の情が生まれることなど滅多にない。

「そのような態度をとっていられるのも今のうちだけだ」

やがて雅浪は吐き捨てるように言つと、部屋を出て行った。荒々しい足音が遠ざかるのを聞き、聡達の傍らで小柄な男が安堵の溜息をついた。

「まったく、雅浪様を挑発などせんでください。ここで法術を使われでもしたら、貴重な資料に傷がついてしまいますよ」

地下に籠り言霊の開発だけに心血を注ぐ男の慨嘆に、聡達は皮肉

な笑みを返した。

「案ずる必要はない。あの雅浪様に俺を攻撃するだけの度胸なぞありはしない。せいぜいが抵抗も出来ぬ相手を痛めつけるしか能の無い男だ」

「お願いですから、雅浪様本人にそんなこと言わないでくださいよ」  
うんざりとした様子で男は言った。再び紙の山に向かう男に、聡達は言った。

「この前の言霊は完成したのか」

「ああ、あれは打ち止めです」

「未完成でもいい。渡してくれ」

「おすすめはしませんよ。加減が難し過ぎるってことで。下手すると相手の精神を壊しちまう」

「構わぬ。その程度で壊れるような異端ならば、そもそも必要はなからう」

「しょうがないなあ。ですが、未完成だってことを忘れないくださいよ。不都合が生じても私は知りませんからね」

ぶつぶつと言いながら男はひとしきり卓の上を探り、一枚の紙を差し出した。実験段階で中止になったというとおり、ぞんざいな扱いである。聡達は紙を懐に入れると外套を羽織った。

「邪魔したな」

再び通路に踏み出しかけて、聡達はふと振り返った。

「お前もたまには地上に出たらどうだ」

「ここにいる方が余程退屈しませんよ」

「それはどうか。近々、面白いことが起きるやもしれんぞ」

「面白いこと？」

くぐもった声で問う男に笑みを残し、聡達は扉を閉ざした。

悠緋は歩みを止め、回廊の窓から見える広い景色を見やった。白い矩形の中に、空は鮮やかである。乾いた風に、ふと多加羅を思っ

た。今の季節、多加羅では雨が多い。初めは冷たく、次第に温かく、雨は大地を潤す。やがて気紛れな雨雲は去り、大地は緑に覆われる。金笹が濃く染まる夏、やがて風に涼が混じれば祭礼の時、秋である。悠緋は小さく溜息をついた。既に夕刻、聖蓮院にも人影は少ない。門には彼女を迎えに侍女が来ているだろう。

「また、お会いしましたね」

正面からかった声に、悠緋ははっとする。聡達がゆったりとした足取りで近付いて来ていた。聖蓮院の条斎士が身につける装束の上に、濃緑の外套を肩口から斜めにかけている。

「悠緋様は余程ここからの眺めがお好きなようだ」

「少し物思いを……」

言いかけて悠緋は俯いた。溜息を聞かれただろうか、と思う。

「もうすぐお父上に会えますね」

悠緋は顔をあげた。

「各所領の惣領が、初春に都に召集されたと聞きました。私の父は長く患っていますので、沙羅久惣領家からは兄が来るでしょう。若<sup>わか</sup>くに国とありますが、これがなかなか口煩い。今から顔を合わせるのが憂鬱です」

冗談とも本気ともつかぬ聡達の言葉に、思わず悠緋は笑った。

「漸くお笑いだだけた。悠緋様には憂鬱な表情よりも笑顔がよく似合っ」

聡達の眼差しが近い。悠緋は鼓動が跳ねるのを感じた。慌てて目を逸らす。

「多加羅からは父ではなく兄の透軌<sup>透軌</sup>が参ります。昨日知らせの文が届きました」

「兄君が？ それは楽しみです。私は兄君にはお会いしたことがありませんので」

「あら、聡達様は父とお会いになったことがありますの？」

「ええ、以前に一度。御立派なお方です」

にこりと聡達が笑んだ。



「兄君が都に來られた時には、私を御紹介ください。未來の多加羅を担うお方のお話を是非お伺いしたい」

「兄もきつと喜びますわ」

「それでは、私は所用がありますので。お氣をつけてお帰りください」

言つと聡達は悠緋の傍らを歩み去つた。聡達の長い髪が肩口を掠める。悠緋は聡達の姿が見えなくなると、溜息をついた。先程とは違つ、熱を帯びた響きにどきりとし、悠緋は足早にその場をあとにした。

憂鬱な氣持ちの上にまた一つ、惑いが生まれていた。苦い喜び、そして恐れ すれ違つようにして顔を合わせただけの相手に、何故これ程鼓動が揺れるのか、悠緋は戸惑う。

恋などではない。悠緋は思う。間違つても恋うてはならぬ相手だ。ともに惣領家に生まれ、遠く故郷を離れている。その境遇の相似が、このように曖昧な氣持ちを相手に抱かせるだけなのだ。（どうして兄上が來られるのかしら。召集されたのは惣領である父上の筈だわ）

出口のない物思いを振り払うように、悠緋はかねてよりの氣掛かりに思いを移した。昨日多加羅の父から届いた文には、兄が都へ赴く理由は書いていなかった。

（父上が來られたら、多加羅に戻りたいとお願い申し上げるつもりだったのに……）

条齋士としての先も見えず、都での生活は寂しさばかりが募つていた。父が都に來るならば、多加羅に戻る許可を得てもらつよう頼むことが出來ると、悠緋はそう考えていたのである。だが、惣領代理である兄の透軌ではそれは不可能だろう。記憶にある透軌の面影は、まだ少年の纖弱さを残している。もとより左程言葉を交わすこともなかった兄妹である。己の我儘を言つのは憚られた。

本当に多加羅へ戻りたいの？

ひそりと、心の中で囁く声がする。浮かんだのは聡達の面差だつ

た。都を去れば、もう二度と会うことはあるまい。

(ええ、そうよ。多加羅へ、戻らなければ。このような気持ち……)  
悠緋は唇をかみしめる。このような気持ちは抱くべきではないのだ。今ならば、ただ一時の気の迷いですますことが出来る。三年前とは違う。己が恋を出来る立場でないことはわかっていた。恋うても密やかに秘めていなければならぬ。それが辛いから

(違う。誰かに恋をするのはいい。でも、あの人はだめだわ。あの  
人に恋をしてはいけない。でも、何故　?)

何時の間にか悠緋は立ち止っていた。不安には励ましを、孤独には優しさを、聡達はまるで悠緋の思いを全て見通すかのように、彼女が望むものを示してきた。穏やかに笑みながら。だが、その瞳は、陽の光さえ差し込まぬ森の深奥、そこに垂れ込める滴るような緑にも似て、暗く掴み難い。

(私、あの方が怖いのだわ)

悠緋は足元の影を見詰める。己の小さな影が頼りなく、寄る辺なく体が揺れる心地がした。怖いのだ、と言いつつも聞かせながらも、見極めようとする程に聡達に惹かれて己がいる。絡めとられたように身動きすら出来ず、聡達の瞳の奥に潜む思いを知りたいと願っている。回廊の鋭角的な象形の中で一人、戸惑いは波のように掴みどころもなくすり抜けていく。

無性に、多加羅の空が見たかった。

早雲が空に斑を描き、時折思い出したように降る雨が街を濡らしていた。

体調不良という理由で若衆に顔を出していなかった灰<sup>かい</sup>が、漸く鍛錬所を訪れたのは闇との対峙から十日が経った後だった。久々の鍛錬の後、灰は須樹<sup>すき</sup>と仁識<sup>にしき</sup>に声をかけた。話をしたい、と告げれば、二人ともに驚いた表情を見せた。人氣が絶えた頃合いに、灰は副頭に与えられた会議室で二人と対した。

「体は大丈夫なのか？」

言外に今は無理をしなくてもいいと告げる須樹に、灰は頷いた。

建前上の理由であれ、体調不良というのはあながち嘘ではない。

惣領家で目覚めるまで四日、そして支障なく動けるようになるまで要したのが五日である。体の核から何か欠けたかのような喪失感を感じなくなっていたが、それが、回復によるものなのか、それとも単にその感覚に慣れたからなのかは、灰自身にもわからなかった。

「弦殿の様子は、どうだ？」

「まだ目覚めず、眠り続けています」

そうか、と答える須樹の声は低い。

「十日前、惣領は何を仰られたんですか？」

前置きもなしに問えば、須樹と仁識が顔を見合わせた。

「いやに単刀直入ですね。どういう心境の変化ですか」

「答えてください」

闇のためとあらば、己の配下の者をも生贄として捧げる、それが多加羅惣領家の在り方だ。闇を目撃した須樹と仁識を、峰瀬は何事もなく屋敷から出した。惣領家にとって危険と判断すれば、峰瀬は躊躇せず二人の命を奪うだろう。そうしなかったのは須樹と仁識の人となりを信頼したから。それだけなのだろうか。灰が知る峰瀬は、情だけで動く人間ではない。

「仁識、言ってしまうおう」

須樹が諦めたように言った。それに、仁識がしょうがない、と咳く。

「闇について決して口外せぬこと。それから、灰が怪魅師けみしであることを周囲に悟られぬよう、傍で支え助けとなるように頼む、と。それが、惣領が俺たちに仰られたことだ」

「惣領がそのようなことを……」

知らず、灰は洪面になる。あの場に居合わせた二人に、今更灰が怪魅師であることや、闇の存在を秘するのは無意味だ。だが、多加羅惣領家の根幹に関わる闇の存在から遠ざけるならいざ知らず、峰瀬の言葉は敢えて二人を今後も関わらせようと仕向けているように思われた。峰瀬の真意が見えない。

「灰、俺達に力にならせてくれ。闇を滅するのに、協力したい」

物思いに沈んでいた灰は、須樹の言葉に目を見開いた。答えは硬い響きを宿していた。

「俺は、これ以上誰も巻き込むつもりはありません。いくら惣領の命でも……」

「命令されたからじゃない。惣領の言葉がなくとも、俺達は灰の力になりたいんだ」

「どうであろうと俺には同じことです」

「私達は巻き込まれたつもりはありませんよ。それに、若様に指図されるいわれもありません」

灰は仁識を睨みつけた。ゆらりと胸の内に湧き起つたのは怒りと焦燥だった。峰瀬の思惑が何であれ、これ以上二人を巻き込むなど論外だ。闇は人外、対すれば必ず命を危険に晒す。灰自身も、この先闇と対峙して無事でいられる保証はないのだ。

「とにかく、お二人にはこれ以上関わっていただきたくはない」

「ならば、仲間がたった一人その闇と対していると知りながら、見ぬ振りをしろと言うのか？ 灰にだってそんなことは出来ないだろう」

須樹に問われ、灰は言葉に詰まった。

「それは……」

「灰、俺だって自分の無力ぐらいわかっている。灰のように闇に對する力なんて持っていない。だが、傍で支えたいと、少しでも力になりたいと、そう思うのも駄目なのか？」

しんと沈黙が落ちた。灰の脳裏に浮かんだのは弦の姿だった。弦は眠り続けたまま、いまだ目覚めていない。その命が尽きないのは、叉さく駆が力を注いでいるからだ。灰には何も出来ない。目の前で誰かが闇に吞まれ、命を喰われる。身を噛む無力感と恐怖は、消えず刻みつけられている。もう二度とあのような思いをしなくなかった。弦だけではない。引きずられるように、灰の思考は更に過去へと向かう。目の前で奪われていく命、そして自らが奪った命。決して消えない殺戮の記憶は、紅く、脳裏を染め上げる。

「正直に言えば、灰の力になりたいという思いだけではないんだ」

灰の凍えるような思考を破ったのは、須樹の幾分低い声だった。「多加羅は俺にとっては生まれ育った大切な場所だ。闇は何も惣領家だけの問題じゃない。灰だけの問題でもない。この地に生きる全ての者達の問題なんだ。そうだろう？　俺にも、多加羅を守らせてほしい」

何も言えず、灰はかぶりを振った。感じる恐怖も焦りも、言葉にすることなど出来ない。灰自身にも、しかとはつかめぬものだった。灰の頑なな沈黙に、仁識が一つ溜息を落とした。

「平行線ですね」

仁識は束の間目を眇め、口角を上げた。油断のならぬ笑みに、灰は知らず身構える。

「ならば、わかりやすい方法で決着をつけましょうか。剣で勝負して、若様が勝てば私達は諦めます。もし私が勝てば、私達は若様に協力をさせていただく」

「そんな方法で決めるなど……」

「若様に引く気はない。同様に私達も、若様がどう言おうと引くつ

もりはない。言葉で言い合っても解決はしません。ならば、すすきりと勝負をつけてどちらかが折れればいいだけの話です。若様が勝てば、私達は若様が怪魅師であることも、闇のことも今後一切口にはしません。二度と関わらぬと誓いましょう。ですが、私が勝てば、私達の申し出を受け入れていただく。後腐れもない。方法としては悪くないでしょう」

それとも勝つ自信がありませんか、と仁識は涼しい声音で問う。灰は唇を噛み締め、仁識を睨みつけた。確かに、己は二人の言葉を聞き入れるつもりはない。だが、二人とて諦める気がなければ、どれ程に灰が遠ざけようとしても無意味だろう。仁識が言つとおり、ここできつぱりと白黒をつけなければ、かえって二人を危険に晒しかねない。

迷いの末、灰は頷いた。

「わかりました。俺が勝てば、この話はこの場限りで終わりです」

「いいでしょう。手加減はしませんので、そのつもりで」

仁識が笑んだ。

激しい打合いの合間に、灰はやけに遠く己の呼気を聞いた。道場へと場所を移し、木剣を手に仁識と対したのは既に半刻程前か、須樹の声を合図にはじまった勝負は、いまだ決着がつかない。西向き窓から差し込む光が淡く伸び、茜が滲んでいる。

鍛練から遠ざかっていたことに多少の不安を覚えていたが、体は存外すぐに戦いに反応した。僅かに息を乱した仁識が間合いを取る。その迷いのない眼差しを見据え、ふと灰は居た堪れない思いを抱いた。何故、と心中で囁く声がある。

何故、そこまでする。仲間だから助けたい、と言う。大事な場所だから守りたい、と言う。そしてそれが嘘偽りのない彼らの本心であると、灰にはわかっていった。だが、何故そこまで迷いなく在れるのか、灰にはわからない。半ば反射的に相手の攻撃をかわし、考え

るより先に剣を繰りだす。だが、体の動きとは裏腹に、思考は次第に重く冷えていく。

（わからないのは俺が迷っているせいか……）

例えば迷いなく闇を滅すると心を決すれば、逡巡することなどないのだろうか。だが、灰には闇を絶対の悪として見ることが出来ない。闇は悪神、多加羅の人々を守るために闇を滅することが必要だと峰瀬は説く。しかし、それはあくまでも表向きの大義ではない。多加羅は白沙那帝国はくさなにとっては異端の象徴だが、闇を秘めるからこそ存在を許されている。そうであるならば、多加羅惣領家にとって、闇はむしろ必要な存在なのだ。

大義に隠された真実、それに三年前から灰は気付いていた。峰瀬は真実闇を滅するつもりはない。闇の消滅は多加羅惣領家の廃絶を意味するからだ。そして、膨張し続ける闇を抑制し、完全に御するため、ひいては多加羅惣領家の未来を確固たるものとするために灰を呼び寄せたに過ぎない。闇の存在も、そして灰自身も、峰瀬にとっては多加羅惣領家の行く末を盤石にするための手段。多加羅という巨大なからくりを動かすための歯車ではないのだ。

闇のために、そして多加羅惣領家のために、どれ程の人が犠牲になつてきたのだろうか。人柱として闇に喰われた名も知らぬ人々、東の地から囚われてきたという祖母、疎まれ蔑まれた母親。誰も、その生を闇に。多加羅惣領家に歪められ、奪われる謂れなどなかった。灰にとつては、むしろ多加羅惣領家という存在そのものが闇に他ならない。そして、どれ程に厭わしく思おうと、灰自身もその一部なのだ。

多加羅がお前の居場所だと、心の底から思えたことがあったか？

不意に、記憶の底から鬼逆きさかの声が囁く。灰が秘める多加羅への憎悪を、いとも簡単に暴いてみせた男が嗤う。何もかも捨ててしまえ、と。

多加羅を出れば、憎しみを秘めて生きるより、もっと自由に

なれる。

(自由になど……)

自嘲に口元が歪みそうになり、灰はそれを噛み殺した。仁識の動きに意識を集中する。

憎しみに染まるのは容易い。憎しみが正義を纏えば、それは大義となり、殺戮をも正当化する。己が一度そこに墮ちたことを、そして今もまだ囚われていることを灰は知っていた。畢竟、多加羅を去ったとしても、己に巢食う憎しみと怒りが消えない限り、真の意味で自由になどなれはしないのだ。

短い気合いとともに、仁識が踏み込む。その攻撃を弾き、逆に灰は相手との間合いを詰めた。と、仁識の体勢が崩れた。常の仁識ならば見せぬだろうその動きに、灰は目を眇めた。剣の技では仁識が上だが、勝負強さと体力では灰が勝っている。時間が長引く程に、仁識に分が悪くなることは互いにわかっていた。

次第に、仁識は防戦一方になる。疲労のためだろう、明らかに動きが鈍くなった仁識を灰は追い詰める。

あと数合で終わる。勝負に勝てば、仁識と須樹は二度と闇に関わることはない。多加羅惣領家と、そして怒りと憎しみを抱えた怪魅師である己とも　そうすれば、これまでと変わらず多加羅若衆の仲間として、対することが出来る。そこまで考え、灰は愕然とした。今、何を考えた。靄のように生じた小さな安堵、その正体　それが己の本心か。ただ彼らの身を危険に晒したくないという、それだけではない。過去のことと言いながら、多加羅惣領家を憎み心縛られる己の醜さを知られたくない、卑小なそれが己の願望か。灰の剣先がぶれる。どう動けば仁識を打ち倒せるかわかっているながら、意思の揺らぎに体が引きずられる。

三年間多加羅において、お前が得たのは憎しみだけじゃないだろう？

ここにいていいのだと、一人ではないのだと告げる須樹の声。それは憎しみに墮つるのを許さぬ強さで灰に届く。灰に向けられる信



頼には、一片の迷いもない。須樹の、そして仁識の信頼に応えたい。だが応えようとするとするたびに、躊躇う。彼らの強い気持ちに応える術が灰にはわからない。

(動揺するな。勝たなければならぬんだ)

あと一合で勝負は決まるのだ。どうあれ、これ以上二人を関わらせるわけにはいかない。己を叱咤して、灰は剣を振るった。これで終わる。終わらせる。

だが、齒を食い縛って放った一撃は、仁識に届かなかった。

「甘い」

囁くような仁識の声が耳朶を打った。次いで硬く響いた音、それが己の木剣が弾かれたものだと思認識する前に、灰の体は床に打ち倒された。

昼間の熱気が消え、がらんとした空虚な広さを感じさせる道場に、絶え間なく木剣のぶつかり合う音が響く。須樹は扉を背に、灰と仁識の姿を見詰めていた。

灰と仁識の勝負は既に半刻程も続いていた。常ならば、若衆で一、二を争う剣の使い手である二人の戦いを楽しめただろう。だが、今の時ばかりは見事な剣さばきに見惚れる余裕などない。攻防は一進一退、勝負の行方はまだ見えない。幼い頃から一流の剣術を叩きこまれている仁識と、天賦の才で勝負にこそ強さを見せる灰 型は違えども二人の力はほぼ互角である。

仁識は後腐れなく白黒をつけるために勝負を唱えたが、それは須樹には些か意外なことだった。仁識とて灰に勝つのが容易くないことは知っているだろう。常に先を読んで動く仁識らしからぬ申し出である。だが、これが結局は最も良い方法なのかもしれない。灰の性格を考えれば、如何に言葉を尽くそうと説得は難しい。一回の勝負で決着をつけるのは危うい賭けではあるが、ここで仁識が勝てば、灰は決して約束を破らないだろう。

仁識の剣が灰の衣を掠め、空を切る。灰の一振りもまた、際どいところで仁識に避けられる。鋭い呼気が響く。互いに一步も引かぬ戦いも、遠からず決着がつくだらう。長引く勝負に、二人の体力は確実に削られている。須樹は仁識を案じる。剣術で互角な二人だが、体力で言えば仁識よりも灰に軍配が上がるだらう。

須樹の懸念が的中したように、仁識の動きが俄かに鈍くなった。灰の攻撃に、体勢を大きく崩される。返す攻撃も仁識本来のものからは程遠い。灰も仁識の変調に気付いたのだらう。大きく踏み込んで仁識を追い詰めていく。

隙が大きくなった仁識に、灰が迫る。須樹は息を呑んだ。次で決まる。灰が僅かに剣先を揺らした。躊躇うかのようなその一瞬の後、灰が鋭く剣をふるった。須樹は知らず拳を握る。と、それまでの動きが嘘のように、仁識が鮮やかに灰の攻撃をかわした。驚きに目を見開いた灰は、僅かに動きが遅れる。仁識が繰り出した容赦のない一撃が灰の胸を捉え、その体を打ち倒した。

時が凍りついたように止まる。須樹は呆然と二人の姿を見詰めていた。静寂に、移ろう陽が影を刻む。

膝をついて顔を上げた灰に、仁識が木剣を付きつけた。

「私の勝ちです」

仁識が静かに宣告する。須樹は我に返り、二人に駆け寄った。

「大丈夫か？」

木剣の勝負とはいえ、下手をすれば骨折もありうる。仁識の攻撃には一片の迷いもなかった。灰の額を濡らす汗は疲労のせいばかりではないだらう。案じて問うた須樹に、灰は小さく頷いた。

「何故、手加減なさった」

え、と須樹は仁識を見やった。いまだ脇腹を押さえたままの灰に、仁識は感情の読めない眼差しを注いでいる。

「私の動きが鈍くなってから、若様の攻撃は明らかに甘くなった。あの時手を抜かなければ、若様が勝っていた筈です。勝負の最中に、一体何を考えておられたのです」

灰が俯いた。どこか辛そうに顔を歪めるのを、須樹は言葉もなく見詰める。言われてみれば、仁識の動きが悪くなった時、追い詰める灰の剣もまた、本来の鋭さを欠いていた。灰自身にも自覚はなかったのかもしれない。だが、灰は確かに躊躇した。その一瞬が、勝負の結果を変えたのだ。

「若様は甘い。何としても勝たなければならない時に、躊躇うなど愚かなことです」

「仁識、もういいだろう」

思わず口を挟んだ須樹に、仁識がちらりと眼差しを注ぐ。それに須樹は言葉を呑んだ。だから、と続けた仁識の声は、眼差し同様に柔らかかった。

「だから、私のような者が若様を補佐するくらいが丁度良い」

顔を上げた灰の途方にくれたような表情に、須樹は覚えがあった。己を信じてほしいと、信じる事が出来るかと、そう問うた時と同じだ。時に驚くほど狡猾になるかと思うえば、取り繕うこともせず不器用さを示す。それは、三年前から変わらない姿だった。そして、三年前にはなかったものも、またある。複雑な翳りを帯びる惑い、時折垣間見せる深い怒り。あるいは哀しみ。

（俺自身も、変わったんだろうな）

灰と出会う前は、惣領家や貴族という存在は、須樹にとって何らの関わりもない存在だった。惣領家の一員や貴族の正式な跡取りと親しく言葉を交わすことになるなど、想像すら出来ないことだったのだ。須樹は小さく笑んだ。

「何が可笑しいんだ？」

仁識が訝し気に問うのに須樹は笑みを深め、灰を見詰めた。

「三年前、初めて会った時のことを考えていた。もしもあの時、灰が俺の傷を治していなかったら、このようなことは起こらなかったかもしれないな、と。そう思うと、不思議なものだ」

例えば三年前、灰が見も知らぬ人間の傷を治そうとしなければ、そして須樹が、はじめから灰を惣領家の人間としか見なければ、今

この時は存在しなかったのかもしれない。偶然が、現を経て過去の必然へと流れていく。揺るぎなく思える今この時は、しかし数多の迷いと逡巡、岐路の末に在るのだ。

「灰、今すぐ何が正しいのか、決める必要はないんじゃないか？」

須樹は言いながら、多加羅惣領を思い出す。迷いを切り捨てた者は、きつとああいう顔をしている。強靱で揺るぎなく、そしてどこか冷たく虚ろだ。己の部下をも犠牲にする、それが例え仕様の無いことなのであっても、迷いなき人間が得る強さは、時に情理を超えて歪な残酷さを帯びる。

そして、と須樹は思う。迷いを捨てられない人間が、弱いわけではない。惑いを、悔いを内に秘め、それでもなお前を向く人間もまた強さを秘めている。それは、須樹自身が灰や仁識の姿を通して知ったことだ。

「誰かを信じることも、誰かの手を取ることも、はじめから答えがあるわけじゃない。それが正しいかもわからない。その先は、これから俺達自身で選んで、築いていくものだ」

須樹は灰に手を差し伸べた。

「灰、俺達は迷いながら進めばいいんだ」

まっすぐに向けられる灰の双眸、その硬質な色彩を見詰める。多加羅が憎いのだと、それ故多加羅を去ると言った灰は、今もなお迷いの最中に在るだろう。稀有な力を有しながらもそのように迷う灰だからこそ、須樹は信じる事が出来る。

差し出された手に、灰の表情が引き締まる。須樹と仁識を見詰め、そして自身に問うように、不可視の未来を見透かそうとでもするように俯いた。再び灰が顔を上げた時、そこにあるのは澄んだ決意だった。一つ頷き、灰が須樹の手を握った。勢い良く引き上げると、灰が揺るぎなく立つ。

「ありがとうございます」

灰が言った。西日に滲む茜は何時しか濃き紅に移ろい、三人が刻む影の輪郭を淡く包んでいた。

今回、終章にするつもりでしたが、「何も解決していない！（主に主人公の心理面で）」ということで、引き延ばしました。主人公、迷いに迷っていて、いまだ何も解決していませんが、前には進めそうかな、と思っています。

それにしても苦労しました。全体的にテンションが低い文章でどうしたのか……と。文章自体まともに書くのが久しぶりで、如何ともしがたく、思い切って更新しました。主人公が全く説得されてくれないさそうで、書き手が困るという体たらく。仁識が頑張つて、須樹がいいところを引っさらった感じですが、とにもかくにもあと2話くらいで第2部は終わるかな、と思います。次は終章の予定。あくまで予定なので、わかりませんが……。何せ、あれやこれや書けていないことがかなりあります。

こんなにも歩みの遅い物語ですが、少しでも楽しんでいただければ幸いです。今後ともよろしくお願いいたします！

## 第二部 終章

峰瀬は意外な客を前に笑みを浮かべた。半ばは意図的に、半ばはただ純粹に内心の感興が表に出たといったところか。対する相手は一輪の花を思わせる慎ましやかな立ち姿である。だが、その実、緩衝地帯を裏から動かすだけの力を有する実力者であり、本来ならば直接相対することはない筈の相手だ。

「お初にお目にかかる。何故、貴女が多加羅に？」

「先程取次をお願いした方に申し上げたとおりです。私は評議会の議決結果を御報告するために遣わされました」

「媼と呼ばれる貴女が、か」

言外に含ませた意味がわからぬ筈もないだろう媼が、まるで他意はないとばかりに微笑む。緩衝地帯の評議会は、定例会議の結果を多加羅と沙羅久、両惣領家に報告するよう義務づけられている。それ自体に何ら不自然なことはないが、使者が媼となれば別問題である。緩衝地帯を動かしているのが元締めと呼ばれる数人の卸屋であることは周知のことであつたが、本来彼らは表に姿を出さぬものなのである。

「貴女が評議会の使者であると言うならば、何故このような対面を望まれる」

二人が対しているのは、峰瀬の執務室である。本来定例報告は謁見の間で公式に行われる。しかし媼は公式での対面の前に、峰瀬個人との面談をまず申し入れたのである。媼に同行していた者達は、今は別室で待機している。

「惣領にお聞きしたいことがあつたからですわ。この春、中央に全惣領家の代表が招集されるとか。それは真実なのでしょうが」

峰瀬は驚きを露わにはしなかった。無論、驚きとは相手が中央への招請を知っていることに対してではない。それを面と向かつて口に出した、ということに対してである。わざわざ真偽を問わずとも、

媪ならば正確な情報を掴んでいるだろう。

「聞いて何とする」

「それが真実であるならば、惣領にお願い申し上げたいことがあるのです」

「中央への招請が、緩衝地帯に関わりのあることとは思えぬが」

峰瀬の素気ない言葉に、媪がまるで面白い冗談を聞いたとでも言いたげに目を細めた。気の無い返事に隠した峰瀬の本心など、媪も先刻承知なのだろう。峰瀬は早々に腹の探り合いを放棄する。もとより、謀る必要性もなければ利点もない。もしかすると、先日改めて中央から届けられた命令についても知られているのかもしれない。

「確かに招請は受けている。だが、私は赴かぬ。中央へは透軌（たうき）を向かわせる」

「まあ、そうでしたか。沙羅久も現惣領ではなくご嫡男（わかくに）の若国様が赴かれるとか」

峰瀬の口元が笑みの形に歪む。若国が中央に赴くのは意外ではなくむしろ予想通りのことだったが、それが決定事項なのは初耳である。

「貴女の願いとやらをお聞かせいただけようか」

「私の、ではございません。評議会からの請願ですわ。そこをお間違えになりませんように」

媪が笑んだ。

扉の外から名を呼ばれ、灰は顔をあげた。必要な物を詰め終えた袋を掴み、扉へと向かう。廊下で待っていた（えな）娃娃菜は、灰の姿に済まなそうな表情を浮かべた。

「これからお出掛けなんですね」

「はい。慈恵院（じけいいん）へ。どうかしたんですか？」

娃娃菜は逡巡を滲ませながらも頷いた。

「稟（りん）さんのことなんですけれど……この頃少し様子がおかしいよう

に思っんです」

「稟が……？」

「はい。夜もよく眠れていないみたいで、塞ぎ込むことも多くて。灰様は何かご存知じゃないですか？」

問われ、灰は戸惑う。稟の様子におかしいところがあるとは思えなかった。

「すみません。俺には何も……」

灰の言葉に、娃娃は溜息とともにそうですか、と呟く。

「灰様には心配をかけないようにしているのかもしれないですね。でも、やっぱり私には少しいつもと様子が違うように思えるんです」

「俺も、気をつけておきます」

「ええ、頼みますね。灰様になら原因がわかるかもしれませんもの」  
信頼を込めて見詰められ、灰は気まずさを押し隠した。

娃娃に見送られ星見の塔を出てからも、灰の気持ちは沈んでいた。稟の様子がおかしいという、それに欠片も気付くことが出来なかった己に、不甲斐なさを感じる。他に気を取られるあまり、最近では左程会話を交わしていなかったようにも思う。今夜にでも稟と話そうと心に決め、灰は足を速めた。

慈恵院の門をくぐり、灰は物思いを封じた。緩衝地帯より戻ってから、慈恵院を訪れたのは二度目である。一度目は多加羅に戻ったその日、静星の死を知った。それから若衆の活動に忙殺され、伏せていた期間もあわせれば、随分長い間慈恵院を訪れていなかったことになる。慣れ親しんでいた筈の慈恵院の空気が、妙に遠く感じられた。まるで見知らぬ場所のような。あるいは灰自身が空気に溶け込むことの出来ぬ異物になってしまったかのようなだった。

尼僧に現況を確認し、馴染みの患者達と接するうちに、灰の心情も幾分落ち付いていった。そして冷静に思う。感じる違和感は、ただ単に慈恵院を長く訪れていなかったせいだけではないのだろう。

灰は治療に一区切りつけ、回廊から小さな庭園を見詰めた。冬のはじめにも同じ場所に立った。その時己が何を思っていたのか、灰



には思い出すことが出来ない。忘れる程の小さな物思いだっただかと、不意に一つの情景が脳裏に浮かんだ。

陽射しの中で微笑む静星、その傍らで稟が歌っていた。その旋律が記憶の底で揺れる。泡沫の時をいずれ失うのだと、灰は確かに感じていた。そして今、灰は気付く。失うのではない。それは、何時か懐かしく焦がれるとわかりながら、否応もなく自ら手放し背後に置き去りにするものたちだった。この先灰がどのような道を選ぶにせよ、それは最早優しい時の中に留まることが許される道ではない。「灰様」

呼ばれ、灰は振り返った。泉が息を切らして立っていた。

「こんなところにいたんだな。今日来てるって聞いて探してたんだ」「どうかしたのか」

もしや患者に何かあったのか、そう思い問うた灰に、泉は気まずそうに視線を泳がせた。

「そうじゃなくてさ……前、俺言いたいこと言ってそれきりだったから」

何故もう少しはやく多加羅に戻って来なかったのかと詰られた。それを灰は思い出す。

「あの時はごめん。灰様だって静星が死んで辛いんだってわかってただけだよ」

「気にしなくていい」

「灰様ならそう言うだろうと思ってたけど、俺が嫌なんだよ。なんか、自分勝手なこと言ってる」

「静星の最期を看取ってくれてありがとう」  
泉が無言で灰を見上げる。灰はゆっくりと言葉を紡ぐ。

「静星は俺が慈恵院ではじめて見た患者だった。永くないことはわかっていたんだ。それでも何とかしたいと思っていた」

「……灰様なら、何とか出来たんだろ？」

「俺自身も自分の力で何とか出来る筈だと、思っていた。あの時は……」

宿る響きに、泉は言葉を呑み込んだようだった。灰は視線を庭園に流した。己ならば救える筈だと、命に対する力の行使が如何に危険なものであるか、知らぬままにどこかで過信していた。そして今もなお、捨てきれぬ思いが灰にはあった。身に宿る力が、壊すばかりではなく守り救うために使えるのではないかと。その証を求める衝動がまだ燻っている。

傲慢　それ以外の何者でもない。灰は苦く思う。

「……あのさ……もう一つ灰様に言わなきゃならないことがあるんだ」ぽつりと呟かれた泉の言葉に、灰は我に返った。泉もまた庭園を見詰めていた。

「ここで少し前に、患者のお婆さんが一人死んだんだ。俺は殺された、と思うんだけどさ、老師は自殺だって言ってた」

「はつきりしないのか？」

「胸に短剣が刺さってて、それに俺、逃げていく変な男を見たんだ。でも老師はお婆さんが自分で胸を刺したんだらうって」

僅かに揺れる声音に少年の恐れと動揺を知り、灰は穏やかに問うた。

「誰が亡くなっただんだ？」

「名前はわからないんだ。誰にも名乗らなかつたから。でも、灰様は知っている筈だよ。最期、息を引き取る寸前に灰様に伝えてほしいことがあるって言ってたから。灰様の患者の一人だったんじゃないかな」

「俺に？」意外な言葉に灰は驚く。

「うん。それもやく伝えないと、と思っただけさ」

戸惑い、灰は患者の顔を思い浮かべる。静星以外に、灰が直接受け持っている患者の中でこの冬に死んだ者はいない。それも名乗ることすらしない老婆など、思い当たらない。そこで、掠めるようにして浮かんだ姿があった。一度、声をかけてきた不思議な老婆がいた。

お若いの、これは現かい？

信じられぬものを見たかのように己を凝視する鋭い眼差しが、不意に思い出された。

「その人が、何と？」

ひそりと頭を擡げる得体の知れぬ緊張とともに、灰は尋ねた。

「よく聞き取れなかつたから自信がないんだけど……」

泉はゆっくりと、なぞるように言葉を紡ぐ。

「どうかいしずえのこを守ってほしい……て」

確かそんな感じだった、と些か自信がない様子で泉が付け足す。

確かに意味を捉えぬまま紡がれた言葉に、灰は眉を寄せた。いしず

えのこ 反芻し、呟く。

「礎の子」

ざわざわと、背筋を這い上がる理由もわからぬ不安が不快だった。

礎の子 声に出すのを躊躇う程の強い力を感じる。まるで言霊のように。そして、灰は確かにその言葉を知っていた。星見の塔の書庫の片隅、今では存在さえ忘れられているだろう古書に、それはあった。朧な記憶を辿ろうとして灰は思わず顔を顰める。それに、泉が不安気な声をあげた。

「灰様、どうかしたのか？」

灰は眼差しを緩める。

「いや、何でもない」

「礎の子って何なのかな」

いっそ無邪気な程の泉の問いに、灰は答えられなかった。あの老婆が、何故一度会っただけの相手に不可解な言葉を遺したのかわからない。それ故の不安なのだと、灰は思おうとして失敗する。

引きずり込まれる。

何故？

否応もなく。

何に？

何もわからぬままに、直感よりもさらに深い部分で、灰は胸詰まるような鋭い予感を知る。新たな季節を兆す風に、灰は苦しい呼吸

を逃がした。一人の老婆が命を絶ったという小さな庭は、静寂の内にある。

「老師はどこにいる？」

「さつき西棟で見たよ」

「そうか」頷き、灰は歩き出した。

「なあ、何かまずかったか？ 俺、老師にはお婆さんの言葉のこと伝えてないんだ。遺言みたいだったから他の人には言ったらだめなんじゃないかと思って……」

慌てて後をついてくる泉の頭に、安心させるように掌を置く。

「大丈夫だ。泉は間違っではない。老師が自殺だと言っていたのなら、何か知っているかもしれないから、話を聞きたいだけだ」

「そっか」安堵を浮かべた泉に、灰は視線を向けた。

「ただ、他の誰にもさっきの言葉は言わないでほしい」

泉は灰の顔を暫し見詰め、そこに何を読み取ったのか唇を噛み締めると一つ頷いた。

「わかった」

「よし」もう一つ、柔らかく泉の頭を撫でると、子供扱いするな、と慥然とした顔で泉が呟く。それに小さく苦笑を零して、灰は足を速めた。

灰が慈恵院を後にしたのは午後半ばを過ぎた頃だった。常よりも早く切り上げたのは、他に思考を取られ、どうしても意識が散漫になってしまったが故である。

泉から伝えられた老婆の言葉、その意味を知ろうと老師に話を聞いたが、尚更困惑が深まっただけだった。老婆が遺した言葉の意味が掴めない。

老師の話では死んだ老婆は自らを仙寿せんじゆであると言ったらしい。そのうえ、灰の未来をも知っているのだと。

遠くない未来、多加羅を永久に去り、東の地へ去る。そのよ

うに言っていた。

老師は老婆の言葉を信じられぬ様子だった。しかし、そのすべてが虚偽だと思っっているようでもなかった。この世の事象全てを知ることなど、人にはかなわない。故に己には到底信じられぬことであっても、即ち偽りであると断じることなど出来ぬ。そう前置いて、老師は老婆が彼に語ったという内容だけを灰に伝えた。

「灰様！」

唐突に名を呼ばれ、灰ははつと顔を上げた。とりとめのない思考が破られる。ちらほらと人々が行き交う道の向こうに、見知った若衆の姿がある。若衆は灰に駆け寄ると、安堵を滲ませた声で言った。「星見の塔に行ったら慈恵院だと言われたもので、今から向かおうと思っっていたんです。休みの日に申し訳ありませんが、急ぎ鍛練所に来てください」

「何かあつたんですか？」

「惣領からの使者が来て、副頭四人に正装で惣領家の屋敷まで来るようにとの命令があつたんです」

「要件は？」

嘗てないことに思わず問えば、若衆も戸惑いを浮かべわからないと答える。

「使者は何も言っていないませんでした。十三の刻までには屋敷に来るように、とだけ」

「わかりました」灰は頷くと、道を駆けた。十三の刻まで一刻程しかない。

鍛練所では既に須樹すきと仁識にしき、設啓せつけいが準備を終えて待っていた。灰は急ぎ準備を整えると、広場で待つ三人の元へと向かった。

若衆の正式な装束は、白の簡素な武闘着の上に、濃紫から群青へと色を移す長衣を羽織り、漆黒の帯できつちりと締める。銀糸で細かな刺繍が施された長い裾と手首までを覆うゆったりとした袖は、剛健でありながら華麗である

正装した四人が集えば、何事かと遠巻きに様子を窺っていた若衆

達から小さな感嘆な声が漏れた。祭礼での剣舞以外で、若衆が正装することは滅多にない。

剣舞は多加羅若衆の誇りであるため、副頭は武術だけでなく、舞い手としての技量も求められ、剣の軌跡と衣の波のような動きが美しく調和する程に見事とされる。現副頭の四人は歴代の舞い手の中でも優れていると評判だった。自然と若衆達の視線には羨望と誇らしさが込められていた。

四人連れだつて鍛練所の門を潜り道へと踏み出す。足早に進めば、道行く人々もまた珍しい若衆の正装に眼差しを注いでいた。

「一体何事だろうな。灰は何か知っているか？」

歩きながら、漸く須樹が口を開いた。他の二人の張り詰めた表情から、彼らもまた突然の呼び出しに驚いているのがわかる。若衆頭である透軌からの命令ならばまだしも、多加羅惣領が直接若衆を呼び出すなど嘗てなかったことだ。

「いえ、何も知りません」硬い声になることを繕うことが出来ず、灰は言葉を切った。幾分語調を弱めて続ける。

「おそらく、公式の場で若衆として立て、ということなのでしょう」「何か心当たりでもあるんですか？」

仁識が灰の横に並び立ち問うた。灰は頷く。鍛練所へと向かう道すがら、そして今に至るまで、灰が考えついたのはただ一つだった。「もしかすると緩衝地帯が関係しているかもしれません」

「緩衝地帯!？」須樹の声が僅かに跳ね上がる。何故、と呟くのに、灰は答えた。

「緩衝地帯で評議会が開催された後には、多加羅と沙羅久の両惣領家への報告が義務付けられています。この前評議会が開かれたので、おそらく丁度今頃報告がされる筈です」

「評議会ですか。あり得ますね」

「問題は、何故俺達が呼び出されるか、だな」至極冷静な設啓の言葉である。

「まさか、この前の一件か？」

「それは……ないとは思いますが……」

緩衝地帯での一件は、既に何事もなかったこととして片が付いている。そして弦からの報告でことの顛末を把握しているであろう峰瀬も、敢えて触れることはしない筈だ。尤も、灰には峰瀬の思考がすべて読めるわけもなく、考えも及ばぬ思惑があるのかもしれないなかつた。

「……急ぎましょう」

足を速め灰は先頭に立つ。命じられた十三の刻が迫っていた。

惣領家の屋敷に辿り着いた四人は、待ち構えていた侍従に連れられて屋敷の奥へと案内された。無言で先を歩く侍従に問おうにも、それが許される空気ではない。廊下を歩きながら、灰はどこに向かっているのかを察する。

「謁見の間に連れて行かれるようですね」副頭だけに聞こえるように呟く。

「謁見の間……」

須樹の声に狼狽が混じるのは致し方ないことだった。謁見の間は多加羅惣領と公式に向き合う場である。当然、対するのは中央や他所領からの使者、多加羅の中でも貴族など相応の地位を有する者達ばかりである。庶民や一介の若衆が立つことを許される場ではない。謁見の間の扉は閉ざされていた。侍従の姿を認めた衛兵が扉に手をかけ、大きく開ける。

「若衆副頭が参りました」侍従の声が重々しく響く。

謁見の間には少なくともいない人影があつた。中央に峰瀬が座り、その傍らには透軌が立っている。さらに三人の玄士が控え、主だった貴族も揃っているようだった。素早く左右に視線を走らせた灰は、謁見の間の奥、惣領と程遠くは無い場所に立つ者達の姿を捉え、僅かに目を見開く。遅れ、背後で須樹と設啓が驚く気配がした。

灰は正面を見据えると真直ぐに歩を進めた。注がれる視線は痛いほどだ。背後に三人の気配が続いた。須樹が背筋を伸ばした。仁識はまるで挑むように前を見据え、設啓が拳を握り締める。謁見の間

の中程に達すると、峰瀬が徐に口を開いた。

「これで揃ったな」

膝をつこうとする若者達の動きを身振りだけで止めて、峰瀬は立ち上がった。

「皆に集まってもらったのは他でもない、今春の中央への招請について伝えることがあるからだ。知つてのとおり、都へは我が息子透軌を向かわせる」

若衆副頭にとってはまるで初耳のことではあったが、他の者達は既に知っていたのか驚く気配はない。だが、続く言葉にざわめきが波紋のように広がった。

「そして、この程、緩衝地帯の評議会から同行の申し出があった」  
言いながら、峰瀬が自然な動作で一隅に立つ者達を示した。

「評議会からの使者、媪殿だ」

初老の優しげな女性が美しく一礼した。驚きの囁きが空気を揺らす。しかるに、集められた者達は彼らが何者か知らなかったのだろう。媪の背後には明るい色の髪を短く刈り、簡素な衣に身を包んだ長身の女が立っていた。女と灰の視線が一瞬交錯する。鋭い視線の主から、灰はさりげなく顔を背けた。

「お許しになられるのですか」

絡玄の問いが響く。非難の響きは、誰の耳にも明らかだった。

「無論だ。今中央の政情は非常に不安定になっていると聞く。彼らは中央の動向に明るい。我らの助けとなってくれるだろう」

「緩衝地帯の者が同行するなど、前例がありません」注意深く選ばれた言葉だったが、込められた意味は明白である。両惣領家と緩衝地帯は互いに不可侵、緩衝地帯はどちらの惣領家にも傾いてはならない。その暗黙の掟を壊すことにはならないのか。答えたのは峰瀬ではなく媪だった。

「緩衝地帯は多加羅惣領だけではなく、沙羅久惣領にも同様の申し出を行っております。無論、お許しいただくか否かは、惣領のご判断次第ですけれども」



どちらの惣領家に傾くわけでもない。選ぶのはあくまでも多加羅であり沙羅久だと　脅しともとれる内容に、絡玄の顔が更に険しくなる。だが、最早反論の余地がないことは明らかだった。峰瀬の判断に誤りはない。緩衝地帯から両惣領家に差し出された供物は同等、拒めば、微妙な力関係が沙羅久に傾く危険もある。

「惣領、何故若衆副頭までこの場にお呼びになったのですか」  
重い沈黙を破ったのは透軌だった。尤もな疑問である。

「中央への招請が若衆にも関わりのあることだからだ。先日、中央から使者が来た。此度の招請に際し、名高い多加羅若衆の剣舞を都の神殿で奉納するようにと、皇女白華様がお望みとのことだ」

「何と……！」

「皇女様が!？」

皆の動揺を見詰める峰瀬の表情はどこか可笑し気ですらあった。焦点を結ばず巧妙に隠されたもの、それに気付いた者は多くはないだろう。

「中央の神殿に奉納とは、何とも名誉なことですか！」背後に響いた誇らしげな声すら遠く、灰は峰瀬を見詰めた。胃の底に石が落ち込んだかのような感覚があった。

「よつて、中央へは若衆も赴くこととなる。人選は若衆に任せる」  
峰瀬が灰を見据えた。

「灰、今この時より若衆はお前が率いよ」

唐突な宣告に、謁見の間が静まりかえった。灰は茫然と峰瀬を見る。

「惣領、お待ちください！」

「何だ、絡玄」

「中央の神殿への奉納という大事、しかもお命じになったのが皇位継承権を有しておられる皇女様なのですぞ。まさに、惣領家の威信がかかっております。若衆頭は透軌様であるべきです」

中央の神殿は白沙那帝国の信仰の拠点である。そこで奉納を行うことがどれ程に重い意味を有するか　絡玄の言葉に、浮ついてい

た空気が俄かに冷める。決して失敗は許されぬ。

「なればこそ、灰に若衆頭として剣舞を奉じよと言っている」

「おそれながら、それこそ惣領家の名を落としかねませぬ。惣領家の者が舞うなど……」

「絡玄、違えるな。試されているのは我らの威信ではない。我らの忠心だ。剣舞を多加羅惣領家の者が舞うことに意味がある」

そしておそらくそれこそが狙い　灰は声に出されぬその言葉を聞いたように思った。

「透軌、異論はあるか？」

「いえ、ございません。惣領の仰せのままに」

色の無い声音で透軌が答えた。俯きがちなその表情から、灰は何らの感情も読むことが出来なかった。

「灰、若衆頭として、立派に神殿への奉納を果たして参れ」

命じる声は冷厳と響いた。

灰が託されたもの、それは惣領家の一員として白沙那帝国への忠心を示すことだけではない。何よりも帝国が秘する異端の象徴として、一つ神に対する絶対的な服従を示せと　灰は拳を握り締めた。膝を屈し頭を垂れる、ただそれだけのことだ。だが、軋むように心が否、と唱えていた。不意に鋭い怒りが沸き起こる。隠しきれぬそれが、峰瀬に気付かれても構わなかった。だが、拒むことが許される筈もない。

「承知いたしました」

灰は答えた。その言葉が、重く己自身を縛る鎖となるだろうことは、わかっていた。

## 第二部 終章（後書き）

終章に入りました。あと一話続いて、第二部は終わります。（や  
つとー！！）

うう、長かった。内容的にも、期間的にも。もう少しどうにかな  
らんものかと思いますが、なかなか。第三部も構想自体は結構固ま  
っているのですが、やはり亀の歩みになりそうな予感です。そもそ  
も書けるんだらうか……。

ではでは、今後ともよろしくお願いいたします！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2019n/>

---

最果てに天深く

2011年11月4日03時32分発行